亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』がいかにひどいか

木下和郎

「連絡船」 http://d.hatena.ne.jp/kinoshitakazuo/
http://www.kinoshitakazuo.com/
ki-ta@b-star.jp

目次

翻訳の問題――新訳『赤と黒』、『カラマーゾフの兄弟』 …… 1
「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、
少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」
その一 …… 6
その二 …… 20
その三 …… 45
これから初めて『カラマーゾフの兄弟』を読むひとのために
――亀山郁夫による新訳がいかにひどいか …… 70
「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、
少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」
その四 …… 79
その五 …… 85
その六 …… 87
その七 …… 100
その八 …… 105
その九 …… 106
その一〇 …… 151
村上春樹さま …… 192
「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、
少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」
その一一 …… 199
その一二 …… 200
その一三 …… 201
その一四 …… 267
その一五 …… 269
亀山郁夫氏に呼びかける …… 270
村上春樹と『カラマーゾフの兄弟』 …… 271
「連絡船」の一読者へのメール …… 271
「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、
少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」
その一六 …… 273
「自尊心の病に憑かれた」読者にアリョーシャは見えない …… 360
「とつぜん甲高い銃声が聞こえてきた」 …… 392
「マイ古典をつくろう!」――齋藤孝『古典力』 …… 393
この三年半ほどの間に書いた文章の公開を始めます …… 398
「勇気や信念」としか、いまのところいいえないもの …… 400
最先端＝亀山郁夫の『これからどうする』 …… 412
卑怯者＝沼野充義の『これからどうする』 …… 423

最先端＝亀山郁夫の「使命」とやら　……　432
「名訳」だそうです。松岡正剛の読解力では。……　440
卑怯者＝野崎歓の醜悪　……　445
さあ、東大・沼野教授と新しい「読み」の冒険に出かけよう！　……　451
なぜあるひとたちの目には最先端＝亀山郁夫批判が醜悪に見えるのか？
――再び「連絡船」の一読者へのメール　……　467
【悲報！】亀山郁夫の小説『新カラマーゾフの兄弟』　……　482
「自尊心の病に憑かれた」辻原登にアリョーシャは見えない　……　483

翻訳の問題――新訳『赤と黒』、『カラマーゾフの兄弟』

六月八日の産経新聞によるネット配信記事を読みました。

「スタンダール『赤と黒』新訳めぐり対立「誤訳博覧会」「瑣末な論争」」（http://sankeijp.msn.com/culture/academic/080608/acd0806080918004-n1.htm）です。

光文社の古典新訳文庫中の『赤と黒』（野崎歓＝東京大学大学院准教授訳）について、立命館大学教授の下川茂が、日本スタンダール研究会の会報に「『赤と黒』新訳について」という文章を載せ、野崎訳を「前代未聞の欠陥翻訳」と評しました。この文章もネット上で（http://www.geocities.jp/info_sjes/newpage3.html）公開されています。

> 光文社古典新訳文庫から野崎歓訳で『赤と黒』の新訳が出た（上巻二〇〇七年九月、下巻同年十二月刊）。結論を先に述べると、前代未聞の欠陥翻訳で、日本におけるスタンダール受容史・研究史に載せることも憚られる駄本である。仏文学関係の出版物でこれほど誤訳の多い翻訳を見たことがない。訳し忘れ、改行の無視、原文にない改行、簡単な名詞の誤りといった、不注意による単純ミスから、単語・成句の意味の誤解、時制の理解不足によるものまで誤訳の種類も多種多様であり、まるで誤訳博覧会である。それだけではない。訳文の日本語も、漢字の間違い、成句的表現の誤り、慣用から外れた不自然な語法等様々な誤りが無数にある。フランス語学習者には仏文和訳の、日本語学習者には日本語作文の間違い集として使えよう。しかし、不思議なことに野崎訳を批判する声がどこからも聞こえてこない。駄本の批判もスタンダール研究者の責務の一つと考えここで俎上に載せる次第である。
>
> （下川茂「『赤と黒』新訳について」「会報」第十八号）

このつづきで、数百箇所の誤訳のうちの、それでも多数の例が列挙されています。私はフランス語が読めませんし、翻訳でも『赤と黒』を読んだことがありません。しかし、この文章を読んでいて、たしかに野崎訳の誤訳の質と量が大きい問題だということはわかります。新訳自体を読んでもいない者が何をいうのか、という問いを、ここで私は受けつけません。それは意味のない問いだと、私はここで断言しておきます。下川茂の主張は説得力のあるものだと私は認めますし、また、私には経験的にこのことがわかりもします。

下川茂は最後にこう書いています。

> 野崎は直ちに現在書店に出回っている本を回収して絶版にし、全面的な改訳に取り組むべきである。一日も早く野崎訳が書店から姿を消すことを私は願っている。便々と前代未聞の欠陥訳を売り続けるとしたら、野崎には翻訳者・学者としての能力がないだけでなく、読者に対する良心もないとみなすことにする。
>
> （同）

さらに「追補」として、二〇〇八年三月十五日付けでの『赤と黒』第三刷における（全数百箇所中の）十九箇所の訂正に触れ、こう書きます。

> 野崎は人から指摘されるたびに一部ずつ手直ししていくつもりなのか（しかも改版とせず、初版第三刷として訂正したことを隠蔽している）。読者は新刷が出るたびにそれを買い続けなければならないのか。
>
> （同）

さて、産経新聞（桑原聡記者）によれば、こうです。

> 産経新聞の取材に下川氏は「野崎氏に会報と絶版を勧告する文書を郵送しました。学者としての良心がおありなら、いったん絶版にしたうえ

で全面的に改訳すべきだと思います」と語った。

一方、光文社文芸編集部の駒井稔編集長は「『赤と黒』につきましては、読者からの反応はほとんどすべてが好意的ですし、読みやすく瑞々しい新訳でスタンダールの魅力がわかったという喜びの声だけが届いております。当編集部としましては些末な誤訳論争に与する気はまったくありません。もし野崎先生の訳に異論がおありなら、ご自分で新訳をなさったらいかがかというのが、正直な気持ちです」と文書でコメントした。

（産経新聞　二〇〇八年六月八日）

事実この通りだとすれば――私にはコメント文書の全体がどうなっているかを知ることもできないわけですが――、光文社文芸編集部の駒井稔編集長は恥知らずの大馬鹿者です。これが大西巨人の文庫『神聖喜劇』、『三位一体の神話』、『迷宮』、『深淵』を出している出版社の編集長なんでしょうか。

下川茂はなにも光文社に喧嘩を売っている・いいがかりをつけているわけではないでしょうに。駒井稔は、しかし、それをあたかも喧嘩を売られた・いいがかりをつけられたかのように回答することで問題をすり替えています。

「読者からの反応はほとんどすべてが好意的ですし、読みやすく瑞々しい新訳でスタンダールの魅力がわかったという喜びの声だけが届いております。」ということが、誤訳があってかまわないということにはならないし、むしろかえって、悪いこと、とんでもなく悪いことだというふうに考えなくてはなりません。駒井稔は青くなって新訳を点検すべきなんです。これが「些末な誤訳論争」のわけがありません。

それとも、彼はこう考えているんでしょうか？

読者なんてどうせ馬鹿だから、誤訳だらけの新訳であろうが、彼らが喜んでいるんなら、それでいいんだよ。そもそも、彼らが喜んでいるというのが、彼らの馬鹿さ加減を大いに明かしているじゃないか。だから、こんなときに大真面目に正しさを振りかざして抗議してくる輩こそ、野暮なんだよ。もともと商売にもならない「古典」なんかにいまこれだけ光が当たってきているのは、誤訳だらけとはいえ、うち（＝光文社）の商売のおかげじゃないか。正しさなんかにこだわっていた日には、いつまでたっても「古典」なんかに陽は当たらないんだよ。これまでの正しい訳が望んでも得られなかったヒットがこうして実現しているじゃないか。肝心なのは、「新しさ」ということ、その売り込みのしかたなんだよ。これまでの翻訳は、正しさに拘泥していたからこそ、（誤解にすぎないにせよ）古くさくて読みにくいということで、読者に敬遠されていたんだよ。新訳は、実際には読みにくさが倍増しているかもしれないけれど、新しくて読みやすいという評判が立ちさえすれば、どうせきちんと本なんか読めない馬鹿な読者連中は、その評判だけで「なるほど読みやすい」と信じ込んでしまうんだよ。まったく、評判だけで十分なんだよ、あいつらに喜んでもらうためには。実質なんかどうでもいいんだよ。ああ、もちろん、正しい訳の方が実は読みやすいはずだし、翻訳の質も高いだろうけれど、商売にはならないんだね。商売になるっていうのは、馬鹿を喜ばす・馬鹿に自分が喜んでいるって思わせることなんだよ。つまり、これが読者に合わせた翻訳っていうことさ。

これは、あまりにひどい想像でしょうか？

「あなたが世間の人のことをそれほどまで悪く、醜く考えておられるとは、驚きますね」スタヴローギンはいくらか憎々しげに言った。

「信じていただけるかな、私は世間の人というより、むしろ自分に照らして判断したのですが！」チホンが叫んだ。

（ドストエフスキー『悪霊』　江川卓訳　新潮文庫）

私はまたしても「作品に「よい・悪い」はある、それを自分の「好き・嫌い」とごっちゃにしてはいけない。」ということを全然理解しえない圧倒的多数のひとたちのことを考えています。そうして、その事情を自分では理解しつつ、それを悪用して、圧倒的多数を見下しながら、彼らをその位置に押し込めたままにしていいと考えているひと、彼らに合わせた商売をするひとのいることを考

えてもいます。その心理が私には理解できます。理解できますが、それはやってはならないことなんだと考えているんです。

また、べつの引用。

お前は彼らに天上のパンを約束した。だが、もう一度くりかえしておくが、かよわい、永遠に汚れた、永遠に卑しい人間種族の目から見て、天上のパンを地上のパンと比較できるだろうか？　かりに天上のパンのために何千、何万の人間がお前のあとに従うとしても、天上のパンのために地上のパンを黙殺することのできない何百万、何百億という人間たちは、いったいどうなる？　それとも、お前にとって大切なのは、わずか何万人の偉大な力強い人間たちで、残りのかよわい、しかしお前を愛している何百万の、いや、海岸の砂粒のように数知れない人間たちは、偉大な力強い人たちの材料として役立てば、それでいいと言うのか？　いや、われわれにとっては、かよわい人間も大切なのだ。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

私は以前「航行記　第一期（四）」で、ある翻訳もののゲラを読んで、出版社に意見をメールで送ったことをいいました。

原作がどうであろうと、こちらに日本語で提出された作品として、この『＊＊＊＊＊』は非常に拙劣なものだと思いました。この日本語訳で読む限りは、です。

まず、私の考えかたを先に示しておきたいのですが、小説作品において重要なのは、「なにが描かれているか」ではなくて「どのように描かれているか」なのだと思っています。この「どのように」をクリアしていない作品は結局「なに」がいくらすばらしくても作品として失格なのです。「どのように」が「なに」を生かしも殺しもします。

翻訳者は、原作者が「なに」を語っているかだけをみていればいいというのではありません。原作者が「どのように」語っているのか、なぜそのように語っているのか、まずはそれをきちんとみきわめていなくてはなりません。これは翻訳者が原作をどのように読みとったのかが問われるということです。しかも、翻訳者は原作の一読者ではありますが、彼の手になる翻訳作品の作者の役割をも担わなくてはならないはずなのです。この点で、『＊＊＊＊＊』は翻訳者が単に原作の一読者で終わってしまっていると思います。おそらくこの翻訳者は原作を読んで感動したのかもしれませんが、それを日本の読者に伝えるためには、自分が原作を再創造しなくてはならないということがまったくわかっていないのだと思います。彼は自分が原作の「なに」に感動したかということだけを夢中になって追っているので、それが「どのように」描かれていたからこそ感動に結んだのだということを忘れてしまっている、あるいは、最初からそういうことには思い及んでいなかったのです。翻訳者は原作という楽譜を置いて、聴衆の前で演奏しなくてはならないのです。どういう音符が楽譜に並んでいるかを説明するのではありません。

この翻訳者は文章の書けないひと、ことばというものに無頓着なひとだと思います。読んでいる間ずっと「まあざっとこんな意味よ」という通訳を受けているような気がしました。彼の語彙は貧困で幼稚なものばかりだと思います。一般の読者にむけてかたい表現を避けようとしたのだという意図があるのかもしれませんが、もしそうならば、その場合にこそより豊かな語彙と表現力が必要とされるのです。全体がなにかのっぺりして立体感のない、幼稚な話しことば風の文で埋められています。しかもこれは、文章全体の構成も考えずに、生徒が宿題のために一文単位で辞書を引いたまま訳を出したようで、とても他人に読ませるための訳ではないと思われるのです。

その後で、私はこうつづけました。

――一部だけを書き写してみました。このつづきで、私は翻訳全体を最初からやりなおすだけではたぶん駄目で、翻訳者（私はゲラを読んだ時点で、翻訳者が誰なのかを知りませんでした）を替えなくては無理だと書き、さらにこんな翻訳を通してしまう編集者はいったいどうなっているのか、と噛みつきもしました。実際にそう書いて、出版社に送りました。で、それからどうなったかというと、この作品は結局そのまま出版され、けっこう売れもしましたし、おまけに「課題図書」にも選定されたんですよね（あの「課題図書」っていうのは、いったいどういうひとが選定しているんでしょうか?）。この作品に感動したなどと書いて、表彰されたひともいるはずなんです。

また、私は、これも以前に、「翻訳の問題」――航行記　第一期（二三）、（二四）――として、池澤夏樹訳の『母なる夜』（カート・ヴォネガット）について触れ、さらに木村榮一訳の『黄色い雨』（フリオ・リャマサーレス）について触れました。後者では、私の指摘を受けて翻訳者が原作者に当該部分を照会するということすら起こったのでした。

翻訳には誤訳がつきものだとしても、とにかく、誤訳を見つけた者はそれを指摘すべきです。そうでなければ、次の読者が不幸だからです。そうして、原作者も不幸だからです。原作も不幸だからです。

さて、出版社が誤りを認めて手直ししたものをどういう形で出すかというと、下川茂の要求するように「改版」という表示をしません。今回の『赤と黒』同様に「刷」の数を増やすだけです。前記『母なる夜』も『黄色い雨』もそうです。そうして、おそらく、作品中の表現の改められる以前の本の所有者が、自分の本の不備を理由に最新の「刷」との交換を求めたとして、それが受け入れられるものかどうか疑問です。それに、増刷ということができない限り、手直しのしようもないわけです。何らかの不備がありながら、それが一定以上売れることがないと、増刷（手直し）もできないわけです。

もうひとついいますが、専門の「校正係」を抱えている出版社というのは、非常に少ないでしょう。たいていの出版社では、担当編集者が校正をすることになります。これは、出版社の財政上の問題でもあります。

それはそれとして、新訳『赤と黒』に抗議した下川茂の心中を私はよく理解していると思います。新訳『赤と黒』は、原作を愛する彼にとって、あまりにも我慢のならない代物だったのでしょう。新訳『赤と黒』が好評になることによって、真の『赤と黒』が恐ろしく傷つけられるはずだと彼は思ったに違いありません。そして、彼は抗議せざるをえなくなったんですよ。自分がいわなくて、他の誰がいうのか、ということです。彼はけして鬼の首を取ったような気持ちで抗議したのじゃありません。自分を売り込むために抗議したのじゃありません。彼はただただ『赤と黒』という作品に奉仕したんです。そうせざるをえなかったんです。

そうであるのに、これを「子どもの喧嘩」とか「どっちもどっち」などというふうにしか受け取らないひと、「そんなのどっちでもいいじゃないか」というひとのいることを私は認識しています。これは、「作品に「よい・悪い」はある、それを自分の「好き・嫌い」とごっちゃにしてはいけない。」に対する多くのひとの反応、例の「ひとそれぞれ」という理屈、「趣味・嗜好」という理屈に結んでもいるでしょう。

そうして、光文社編集長駒井稔は――先のコメントをそのまま受け取るとするなら――こういうひとたちを味方につけることを狙っているんです。

しかし、悪いのは一方的に光文社と訳者野崎歓です。

さて、翻訳者野崎歓。彼は、たとえ光文社編集長が先に私の想像したような、読者を馬鹿にしながらの販売戦略を考えていたとしても、きちんとした正しい翻訳をすればよかったんです。しかし、彼はそうしなかった。安易な心づもりでしかこの仕事をしなかった。下川茂の「便々と前代未聞の欠陥訳を売り続け

るとしたら、野崎には翻訳者・学者としての能力がないだけでなく、読者に対する良心もないとみなすことにする。」という発言に、いったい、彼はどう答えるんでしょうか。

それにしても、私が危惧するのは、もしかすると、いまの出版業界を商売として支えているのが、おおかた光文社編集長駒井稔の考えかたなのではないか、ということです。この業界で仕事をするおおかたのひとが、駒井稔と同じことを考え、実行しているのではないか。この業界に駒井稔が無数にいるのではないか。少なくとも、それが主流なのではないか。駒井的発想でしか、この業界は現状維持もできないのではないか、ということです。とすれば、早晩この業界は、読者ともども衰退するより他ないのではないか、ということです。

またも私自身の文章（航行記　第一期（六））から引用しますが、

「みんながみんな一斉に同じ本を読む」――「ヨーイ、ドン」――ことなしにこの業界が現状を維持できないだろう・「みんながみんな一斉に同じ本を読む」ことでこの業界が現状に至っているだろう、とも思います。しかし、現状維持のままでは結局衰退に向かうだけじゃないでしょうか？

私は暗澹とします。

そうして、すでにもう何度も引用している文章ですが、

……わたしは一度「しばらく真面目になってみてはいかがでしょう」と提案した、真理は、苦い真理ですら、間接的にではあるが長い間には、真理の犠牲において共同体に奉仕しようとする思想よりも、共同体にとって役立つのであって、真理を否定する思想は実際には真の共同体の根柢を内側からこの上なく無気味に崩壊させるのだから、共同体の危機を深く憂慮する思想家は、共同体ではなく、真理を目標とした方がよいのではなかろうかということを、しばらく真面目に考えてみようと言ったのである。しかし、わたしは生涯においてこれほど完全になんの反響もなく黙殺された言葉を言ったことがない。

（トーマス・マン『ファウストゥス博士』　円子修平訳　新潮社）

さらに、同じ光文社古典新訳文庫の『カラマーゾフの兄弟』（亀山郁夫訳）に『赤と黒』同様の誤訳の指摘（http://www.ne.jp/asahi/dost/jds/dost125.htm）があることをも、私を深く滅入らせます。こちらもやはり、指摘は正しいだろうと思われます。亀山訳を私は読んでいません（私が繰り返し読んできたのは原卓也訳＝新潮文庫です。他には小沼文彦訳＝筑摩書房）・（亀山訳の数箇所を私は自分の勤める書店の店頭で読んでいますが、それらが私にはどうもしっくりこなかった。それで、全部を通して読むつもりもなくなっていたんです）。それでも、亀山訳の問題を指摘する文章が正しいだろうと、これも経験的に私は判断します。

野崎歓訳『赤と黒』以上に売れている亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』にいっそうの罪深さを感じます。後者がこれほど売れていなければ、前者がこのように問題になることもなかったでしょう。そうして、ともに発行は光文社です。もう一度いいましょうか。これが大西巨人の文庫『神聖喜劇』、『三位一体の神話』、『迷宮』、『深淵』を出している出版社のすることですか？

（二〇〇八年六月十九日）

「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」その一

木下豊房による「亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』を検証する　―新訳はスタンダードたりうるか―」(http://www.ne.jp/asahi/dost/jds/dos117.htm)を読むことは非常に有益です。ここでは、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』ロシア語原文と当該箇所の亀山郁夫訳を並べ、この訳についての検証コメントを入れ、さらに既訳(米川正夫、原卓也、江川卓の三者による)を引いています。この周到なやりかたは、おそらく批判者の弱点をも公開することにもなるはず――手の内を全部明かしているわけです。ということは、反論を受け入れ、議論する場を用意しているということでもあります――で、それゆえ公正であるということができると思います。そのサイトで主に検証コメントを書いているのが木下豊房自身ではなく、NNという人物です。つまり、このサイトは木下豊房の責任によって、主としてNNの見解が示されるという形になっています。もうひとり、こちらは先のふたりとは違って、ロシア語を解さない一読者である森井友人という人物が日本語の訳文だけを読んで多数の疑問を提出していて(つまり、亀山訳は日本語としてもおかしいという視点の採用です)、これにもNNがコメントをつけています。

さて、NNの数多いコメント中にこういうものがあります。亀山訳の「さらに付けくわえておくと、フョードルはたんに彼の正直さを信じきっていたばかりか、なぜか彼を愛してもいたのだった。そのくせ相手は、まだひよっ子ながら、他人同様に彼を横目でにらみ、ずっと黙りこくっていた。」についてのものです。

> 新訳ではスメルジャコフはフョードルを含めた他人を「横目でにらんでいた」ことになっているが、原義は「うさんくさそうに見ていた」であり、読者に与える印象はかなり違うはずだ。些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。
>
> (「亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』を検証する」)

「横目でにらんでいた」であろうが、「うさんくさそうに見ていた」であろうが、どちらも変わらないのじゃないか、と思われたりしないですよね。ロシア語の「原義」はともあれ(これは私にはわかりません)、日本語として、両者は全然違います。

このコメントにつづいて引用されている当該箇所の他の訳者による既訳は、「断っておかねばならぬのは、フョードルは単に彼の正直なことを信じていたのみならず、なぜかこの青年が好きなのであった。そのくせ、若い料理人は彼にたいしても他の者と同様に、不気味な横目づかいばかりして、しじゅうむっつりしていた。」(米川正夫訳)、「〈…〉フョードルは彼の正直さを信じていただけではなく、なぜか目をかけてさえいたのだけれど、そのくせ青年のほうでは、ほかの者に対するのと同じように冷やかに相手を眺め、いつも黙りこくっていた。」(原卓也訳)、「〈…〉つけ加えておかなければならないが、フョードルは彼の正直さを信じていただけでなく、この青年が自分のことも、他の人たちに対するのと同様、白い目で見ていて、いつも黙りこくっていたにもかかわらず〈…〉」(江川卓訳)です。

スメルジャコフと「フョードルを含めた他人」との位置関係――彼が「フョードルを含めた他人」をどんなふうに評価していたか――が「横目でにらんでいた」と「うさんくさそうに見ていた」とでは、明らかに違います。ここは本来、彼が「フョードルを含めた他人」をどんなふうに軽んじていたかということを伝える訳文が求められるはずの箇所なんです。「求められるはず」と私がいうのは、この箇所だけでなく、この作品全体におけるスメルジャコフの位置づけを知っていていうんです。私がちょうど二十歳になるぎりぎりのところでこの作品を読んだこと、以来何度も読み返していること、新潮文庫の帯(「世界最高の小説」という文言を含んで、上・中・下、三巻それぞれ)も書いたことのあることは、すでに「航行記　第一期」(二六)で書きました。

前置きが長くなってしまいましたが、さて、本題に入ります。私は、ＮＮによるコメントの最後にある「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」ということばから自分が考えたことを少ししゃべってみたいんです。……

……

……

――と、ここまで書き、さらにある程度先までを書いていたんですが、その最中に、私は自分の勤める書店で、亀山訳『カラマーゾフの兄弟』のいくつかの箇所をあらためて読んでみてしまったんですね。思わず、「ええっ」と声をあげてしまうことまであって、私はここで急遽、舵を思いきり切ることにします。しかたなく、亀山訳の第四巻、第五巻を購入しましたよ。

私は、自分が「航行記　第一期」（二六）において、「その『カラマーゾフの兄弟』で、私がいちばん好きな箇所、そうして、最初の読書からのこの四半世紀ずっと私が考えざるをえなくなってしまった箇所のひとつ」といった箇所、「第十一編　兄イワン」の「五　違う、あなたじゃない！」の亀山訳を読んでみたわけです。

（第四巻　二〇〇八年五月十五日　第十四刷発行）

「じゃあ、おまえはいったいだれが殺したっていうんだね？」明らかに、どこか冷やかな口ぶりで彼はたずねた。その問いの調子には、何となく傲慢なひびきが聞きとれるようだった。

「兄さんは、ご自分でだれか知ってるでしょう」低いしみじみとした声でアリョーシャは言った。

「だれなんだ？　例のくだらん作り話のことを言ってるのか、気がへんになったあの癲癇やみのばかの仕業だとかいう？　スメルジャコフ犯人説のことだが？」

アリョーシャはふと、全身にふるえが来ているのを感じた。

「兄さんは、ご自分でだれか、知ってるでしょう」力なく、言葉が口をついて出た。息が切れていた。

「いったい、だれなんだ、だれなんだ？」ほとんど凶暴な調子で、イワンは叫んでいた。それまでの沈着さが、一瞬にして消し飛んでいた。

「ぼくが知っているのはひとつ」と、アリョーシャは、あいかわらずほとんどささやくような声で言った。「父を殺したのは、あなたじゃないってことだけです」

「『あなたじゃない』だと！　あなたじゃないとは、どういうことだ？」イワンは、呆然としてたずねた。

「父を殺したのは、あなたじゃない、あなたじゃない！」アリョーシャはきっぱりした口調で繰り返した。三十秒ほど沈黙がつづいた。

「おれじゃないことぐらい、自分でもわかってるさ、何を寝ぼけたこと言ってる？」青ざめた顔にゆがんだ笑みを浮かべて、イワンは言った。彼は食い入るようにアリョーシャの顔を見つめた。二人は、ふたたび街灯の下に立っていた。

「いいえ、イワン、あなたはなんどか、自分が犯人だと言い聞かせてきたはずです」

「いつ、おれがそんなことを言った？……おれはモスクワにいたんだぞ……いつ、言ったんだ？」イワンは、すっかり途方にくれて口ごもった。

「恐ろしかったこの二ヶ月間、あなたは一人になると、自分になんどもそう言い聞かせてきました」あいかわらず低い声で、一語一語区切りながら、アリョーシャはつづけた。とはいえその口ぶりには、もうわれを忘れ、自分の意思というより、何か逆らうに逆らえない命令にしたがっているかのような趣きが感じられた。

「あなたは、自分を責め、自分でも認めていました。犯人は自分以外のだれでもない、ってね。でも殺したのはあなたじゃない。あなたはまちがっている、犯人はあなたじゃない、いいですね、あなたじゃないんです！

ぼくが神さまに遣わされたのは、それをあなたに告げるためなんです」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』亀山郁夫訳　光文社文庫）

同じ箇所の原卓也訳はこうです。

「じゃ、だれが犯人だ、お前の考えだと」なにか明らかに冷たく彼はたずねた。その質問の口調にはどこか傲慢なひびきさえあった。

「犯人がだれか、兄さんは自分で知ってるでしょう」心にしみるような低い声で、アリョーシャは言い放った。

「だれだ？　例の気のふれた白痴の癲癇病みとやらいう、たわごとか？　スメルジャコフ説かい？」

アリョーシャはふいに、全身がふるえているのを感じた。

「犯人がだれか、兄さんだって知っているでしょうに」力なくこの言葉が口をついて出た。彼は息を切らしていた。

「じゃ、だれだ、だれなんだ？」もはやほとんど凶暴にイワンが叫んだ。それまでの自制がすべて、一挙に消え去った。

「僕が知っているのは一つだけです」なおもほとんどささやくように、アリョーシャは言った。

「お父さんを殺したのは、あなたじゃありません」

「《あなたじゃない》！　あなたじゃないとは、どういうことだ？」イワンは愕然とした。

「あなたがお父さんを殺したんじゃない、あなたじゃありません！」アリョーシャがしっかりした口調でくりかえした。

三十秒ほど沈黙がつづいた。

「俺じゃないことくらい、自分でも知っているさ、うわごとでも言ってるのか？」青ざめた、ゆがんだ笑いをうかべて、イワンが言い放った。アリョーシャに視線が釘づけになったかのようだった。二人ともまた街燈のそばに立っていた。

「いいえ、兄さん、あなたは何度か自分自身に、犯人は俺だと言ったはずです」

「いつ俺が言った？　……俺はモスクワに行ってたんだぞ……いつ俺がそんなことを言った？」すっかり度を失って、イワンがつぶやいた。

「この恐ろしい二カ月の間、一人きりになると、兄さんは何度も自分自身にそう言ったはずです」相変らず低い、はっきりした口調で、アリョーシャはつづけた。だが彼はもはや、さながら自分の意志ではなく、何かさからうことのできぬ命令に従うかのように、われを忘れて話していた。「兄さんは自分自身を責めて、犯人は自分以外のだれでもないと心の中で認めてきたんです。でも、殺したのは兄さんじゃない。兄さんは思い違いをしています。犯人はあなたじゃない。いいですね、あなたじゃありません！　僕は兄さんにこのことを言うために、神さまに遣わされてきたんです」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

さあ、どちらが読みやすいでしょうか？

繰り返しますが、私はこの場面を――原卓也訳によって――これまでどれだけ読み返してきたかわかりません。そこで、ちょうどそのことが、私がこれから亀山訳を批判するときに、こういう反論を呼び込むかもしれません。おまえは、原卓也訳に浸かりすぎたために、もはや、他の訳を受け入れることができなくなっているんだよ。他のどんな訳にも違和感を感じることになるはずさ。そうかもしれません。この理屈を私は自分でよく知っています。たとえば、かつて中学生私が初めて聴いたマーラーの交響曲第二番はバーンスタインの指揮によるニューヨーク・フィルの録音でしたが、あまりにこれに浸かりすぎたために、同じ曲の他の演奏――同じバーンスタインのものであっても、むろん他の指揮者のものであっても――がへんてこに思えた期間がずいぶん長くありましたからね。それはもちろんよくわかっています。そういうことはずい

ぶんたくさん経験してきました。その経験に立って、わかったうえで、なお私は亀山訳を批判するんです。

原卓也訳と亀山郁夫訳とがどう違うのか。まず私が感じたのは、亀山訳のこの場面における切迫感のなさでした。つまり、原訳には切迫感があるということです。たとえば、

「じゃあ、おまえはいったいだれが殺したっていうんだね？」明らかに、どこか冷やかな口ぶりで彼はたずねた。その問いの調子には、何となく傲慢なひびきが聞きとれるようだった。

（亀山郁夫訳）

「じゃ、だれが犯人だ、お前の考えだと」なにか明らかに冷たく彼はたずねた。その質問の口調にはどこか傲慢なひびきさえあった。

（原卓也訳）

（傍線は私・木下による。以下同様）

亀山訳はどうしてこんなにのんびりしているんだろう、と感じたんです。原典を知らない私が単純に疑問に思うのは、傍線部の「聞きとれるようだった」というなにか悠長な表現です。この悠長さが「じゃあ、おまえはいったいだれが殺したっていうんだね？」にもあらわれています。「……っていうんだね？」とわざわざ訳すのはどうしてなのか？（くどいようですが、私はロシア語原典を知らずにこういっています。）

さらに、同様のことが次の箇所でも感じられました。

とはいえその口ぶりには、もうわれを忘れ、自分の意思というより、何か逆らうに逆らえない命令にしたがっているかのような趣きが感じられた。

（亀山郁夫訳）

だが彼はもはや、さながら自分の意志ではなく、何かさからうことのできぬ命令に従うかのように、われを忘れて話していた。

（原卓也訳）

この「趣きが感じられた」というのは、なんでしょうか？　つまり、「……かのように」という表現を、原卓也が「さながら自分の意志ではなく、何かさからうことのできぬ命令に従うかのように」のなかに収めてしまい、「話していた」とすっきり締めくくっているのに対して、亀山郁夫は「その口ぶりには」とはじめに訳してしまったために、「……かのように」を、この文の最後まで引きずらなければならなくなってしまっているんですね。ロシア語原典がどうなのかわかりませんが、「彼は話していた、……かのように」ということなのじゃないでしょうか。もしそうであるなら、亀山訳では、この場面の切迫さがどんどん失われていくと思いました。もっというなら、亀山訳の「スメルジャコフ犯人説のことだが？」という、なんだか不恰好な、注釈めいた、まわりくどい表現もよくないでしょう。原訳の「スメルジャコフ説かい？」で十分でしょう。

『あなたじゃない』だと！　あなたじゃないとは、どういうことだ？」イワンは、呆然としてたずねた。

（亀山郁夫訳）

「《あなたじゃない》！　あなたじゃないとは、どういうことだ？」イワンは愕然とした。

（原卓也訳）

「呆然とした」も同様です。それで、私は亀山郁夫の日本語感覚がおかしいの

じゃないかと思ったんですね。亀山郁夫は「呆然」の意味を知らないのではないか、と真面目に思いましたよ。これでは、まるで、アリョーシャの口にした「あなたじゃない」がイワンにまったく図星じゃないみたいじゃないか、と思ったんです。

「いつ、おれがそんなことを言った？……おれはモスクワにいたんだぞ……いつ、言ったんだ？」イワンは、すっかり途方にくれて口ごもった。

（亀山郁夫訳）

「いつ俺が言った？　……俺はモスクワに行ってたんだぞ……いつ俺がそんなことを言った？」すっかり度を失って、イワンがつぶやいた。

（原卓也訳）

同じです。私は亀山郁夫が「途方にくれる」という日本語をわかっていないのではないか、このひとの「途方にくれる」はどうなっているのか、と思いました。これでは、まるで、アリョーシャの口にした「いいえ、兄さん、あなたは何度か自分自身に、犯人は俺だと言ったはずです」が、イワンにはまったく身に覚えのないことだったみたいじゃないですか。そう思ったんです。

どういうことなんだろう、これは？

しかし、――

アリョーシャはふと、全身にふるえが来ているのを感じた。

（亀山郁夫訳）

――「全身にふるえがきている」のを感じるのに「ふと」というのはどういうことなんでしょうか。百歩譲って、そういうことがありうるとしても、この場面でこれはないでしょう。こういう日本語感覚のひとだから、「呆然」も「途方にくれる」もしかたがないのか。原訳では「ふいに」です。これなら、わかります。

そうして、これです。

「ぼくが知っているのはひとつ」と、アリョーシャは、あいかわらずほとんどささやくような声で言った。「父を殺したのは、あなたじゃないってことだけです」

（亀山郁夫訳）

「僕が知っているのは一つだけです」なおもほとんどささやくように、アリョーシャは言った。

「お父さんを殺したのは、あなたじゃありません」

（原卓也訳）

もう一度訊きますが、どちらが読みやすいですか？

亀山訳の「父」ってなんですか？　この訳でも、同じ会話のなかで、アリョーシャは直前まで「父さん」といっていたんですよ。それを、いきなり「父」にしてしまった。なぜかはわかります。亀山郁夫が、この箇所に秘められた高次のテーマである「父殺し」についてのアピールをしたかったからです。原語であれば、「父さん」も「父」も同じ単語であるんでしょうが、日本語ではそうでない。「父さん」にすると、高次のテーマ「父殺し」の「父」の意味が失われてしまう、そう思ったからですよ。彼は、この「父さん」から「父」への切り替えを自分の英断だと考えているに違いありません。兄弟の会話として、読者に不自然な印象を与えること・作品の流れを犠牲にすることを承知で、訳者がしゃしゃり出てきたということです。これは、すんなりわかりましたよ。それは、

私がこれまで『カラマーゾフの兄弟』を何度も読んでいるからこそわかったんです。わかりましたけれど、でも、駄目でしょう。――ということで、なるほど亀山郁夫のやりかたがだんだんに透けてきました。

それにしても、なぜ「僕が知っているのはひとつ」で切ってしまったんでしょうか。どうして「あなたじゃないってことだけです」にしたのか？　これでは、アリョーシャのいう「あなたじゃない」という主張の強さが半減してしまう結果になります。原訳の方が、すっきりと、強い主張に感じられます。

――と、そんなふうに考えているうちに、私は亀山訳の第五巻――この巻のほとんどが亀山郁夫による解説で埋められていることは承知していました――をぱらぱらめくっていたんですね。そうしたら、わかりました。

また、文体上の複雑なしかけが、人間の精神の奥深くまで照らしだす例もある。次に引用するのは、『カラマーゾフの兄弟』全体の中心に位置し、物語の流れに決定的な転換をみちびき出す言葉である。

「父殺し」の犯人を挙げろ、と問いつめるイワンに対して、アリョーシャは次のように応える。

「ぼくが知っているのはひとつ（…）父を殺したのは、あなたじゃないってことだけです」（第11編258ページ）

'I only know one thing…Whoever murdered father, it was not you'

……（中略　ここでロシア語原文の引用も示されています）……

この語順のもつ異様さはさまざまな研究者の関心をひいているが、意味だけをくんで単純に言い換えるならば、「あなたは父を殺しませんでした」となるだろう。ロシア語は、語順は基本的に自由なので、あとはニュアンスの違いによってどう変わるかということになる。

語順の異様さとは、父親を殺したという厳然たる事実が最初に提示されているにもかかわらず、その主語（つまり犯人の名前）が、最後まで留保されている感じに現れている。

兄弟同士の信頼関係のなかで、あたりまえの「事実」をめぐってのどこか思わせぶりな言い方は、かなり違和感を与え、端的にいって、居心地がわるい。ここには、父を殺したのは「あなたかもしれない」「あなたである」と言っているのと同じぐらいの意味が、その曖昧さのなかに隠されているということだ。

……（中略）……

アリョーシャの言わんとしたのは、やはり「あなたが殺した」ということだった。しかし同時に、殺したのはあなたの一部分である悪魔だとも言おうとしていた。要するに、アリョーシャは、結果として悪魔とイワンは一体ではないと語る（予言する）ことで、悪魔から離れなさいと、暗黙裡に警告したことになる。

だが、アリョーシャのこの暗示に満ちた言葉を聞いたイワンは、逆に悪魔と自分が一体かもしれないという自覚にはまり込むことになった。その意味で、きわめてドラマティックな転換点といえる。すでに悪魔と一体でありたくないという願望が、彼のなかに兆していることを暗示しているともいえる。

アリョーシャのこのひとことは絶大な意味を持つにいたった。このの ち、イワンにとっては、悪魔との戦いが最大の課題としてのしかかり、彼の存在を根源から揺るがすような発見へと、彼自身を導いていくからである。

また、イワンはこの瞬間、自分が犯人かもしれないとの根源的な認識の入り口に立つとともに、じつは「幻覚症」の入り口に立ったといっても過言ではないのである。彼が思わず、自分を犯人とみなしているアリョーシャを「絶交」という言葉で突き放したのは、きわめて当然のふるまいだった。

いずれにせよ、この奇妙なセリフは、アリョーシャがゾシマの死後はやくも「予言者」としてのある透徹した能力を確実にさずかったことを裏づける。このわずかなやりとりから、それまでのアリョーシャとは根

本的にちがう何かが、彼のなかで作動しはじめていることを暗示している。

（亀山郁夫「解題」『カラマーゾフの兄弟』光文社文庫）

亀山郁夫の解釈では、アリョーシャの「あなたじゃない」を受けて、はじめて「イワンはこの瞬間、自分が犯人かもしれないとの根源的な認識の入り口に立つ」わけですね。そうして、それとともに「じつは「幻覚症」の入り口に立ったといっても過言ではないのである」わけですね。なるほど。だから、そういわれるまで、イワンは余裕をもっていたんですよ。

「じゃあ、おまえはいったいだれが殺したっていうんだね？」明らかに、どこか冷やかな口ぶりで彼はたずねた。その問いの調子には、何となく傲慢なひびきが聞きとれるようだった。

「『あなたじゃない』だと！　あなたじゃないとは、どういうことだ？」イワンは、呆然としてたずねた。

「いつ、おれがそんなことを言った？……おれはモスクワにいたんだぞ……いつ、言ったんだ？」イワンは、すっかり途方にくれて口ごもった。

（亀山郁夫訳）

つまり、イワンには、アリョーシャのいっていることがなんのことだかわからなかったんですよ。

全然違います。いいですか、全然違います。亀山郁夫は間違っています。

さて、『カラマーゾフの兄弟』をまだ読まれていない方のために、ここでいくらか整理しておきます。

フョードル・カラマーゾフの息子たちは、長男ドミートリイ（ミーチャ）、次男イワン、三男アレクセイ（アリョーシャ）です。そしてフョードルが何者かに殺害されるんですが、犯人として逮捕されたのが長男ミーチャだったんですね。しかし、彼が殺したのじゃありません。犯人はべつにいます。そうして、次男イワンは自分が直接に手を下したのではないものの、自分が殺したも同じだと考え、苦しみます。というのも、彼は以前からある思想を抱いており、その思想からは、理論上、この殺人の肯定も可能――「すべては許される」――いや、実は彼にもそこまでは不明だっただろうと思いますが――なんです（アリョーシャはこのことを知っています）。しかも、イワンは実際、この思想を犯人に植えつけもしているんですね。犯人はこの思想を中途半端にしか理解できませんでしたし、イワンもそれを承知していますが、まさにそのことが殺人の決行に直結します。だから、イワンは「自分自身を責めて、犯人は自分以外のだれでもないと心の中で認めてきた」んです。それで、彼は逮捕されているミーチャの脱走計画を進めてもいます。やましいからですよ。しかも、彼は病気でもありました。

もっとも彼は、すでに述べたようにカテリーナがとっぴな考えに従ってモスクワから招いた医者に、一度診てもらっていた。医者は容態をきいて診察した結果、脳の変調とも言うべきものであると診断し、彼がそれでも嫌悪をおぼえながら行なったある種の告白に、少しもおどろきの色を見せなかった。「このご容態では、幻覚も大いにありうることです」医者は結論を下した。「もっとも、確かめてみなければなりませんが……概して、一刻もむだにせず、真剣に治療をはじめる必要がありますな、でないととんだことになりますよ」

（原卓也訳）

「彼がそれでも嫌悪をおぼえながら行なったある種の告白」というのは、悪魔の幻覚を見るということだったんですね。彼は何度か――何度だか私は知りません。イワンは後にその回数に言及していますが、「あなたじゃない」の会話での

いいかたと、後の彼の申告した回数とは矛盾するようにも思えます。また、後に作中で描かれる悪魔が、最初の頃には、まだそのような姿になっていなかった、とか、会話の質もそのようなものにまではなっていなかった、とか、そういうことはあるかもしれませんが――自分の部屋を訪れる悪魔と会話しているんです。悪魔はイワンに、犯人は君だよ、と嘲笑的に指摘していたことでしょう。

先の「僕は兄さんにこのことを言うために、神さまに遣わされてきたんです」という引用のつづきはこうです。

どちらも沈黙した。この沈黙はまる一分もの長い間つづいた。二人とも立ちどまり、終始相手の目を見つめていた。どちらも蒼白だった。突然イワンが全身をふるわせ、アリョーシャの肩をぎゅっとつかんだ。

「お前は俺のところに来ていたんだな！」歯がみするようなささやき声で、彼は口走った。「夜中に、あいつが来ていたとき、お前もいたんだな……白状しろ……あいつを見たんだろ、見たな？」

「だれのことを言ってるんです……ミーチャのことですか？」けげんな表情でアリョーシャがたずねた。

「そうじゃない、あんな無頼漢なんぞくそくらえだ！」イワンは狂ったようにわめきたてた。「あいつが俺のところへよく来るのを、お前知っているんだな？　どうして感づいた、言ってみろ！」

「あいつって、だれですか？　だれのことを言ってるのか、わかりませんよ」アリョーシャはもはや怯えてつぶやいた。

「いや、お前は知ってるんだ……でなけりゃどうして……お前が知らないなんて、そんなはずはない……」

だが、ふいに彼は自分を抑えたかのようだった。たたずんだまま、何か思案しているみたいだった。異様な嘲笑がその唇をゆがめた。

「兄さん」アリョーシャがふるえる声でまた言いだした。「僕があんなことをいったのは、兄さんが僕の言葉をきっと信じてくれるからです。僕にはそれがわかるんです。あなたじゃない、という今の言葉を、僕は一生をかけて言ったんですよ。いいですか、一生をかけて。兄さんにああ言えと、神さまが僕の心に課したんです。たとえ今の瞬間から、兄さんが永久に僕を憎むようになったとしても……」

しかし、どうやらイワンはもうすっかり自制する余裕を得たようだった。

「アレクセイ・フョードロウィチ」冷笑をうかべて彼は言った。「俺は予言者だの、癲癇病みだのは堪えられんのだ。特に神のお使いなんてやつはな。君だってそれくらいわかりすぎるくらい、よくわかっているはずだ。今この瞬間から俺は君と絶交する。それも、おそらく永遠にな」

（同）

そういうことです。

さて、私はこの『カラマーゾフの兄弟』におけるアリョーシャの「あなたじゃない」が、同じ作者の『罪と罰』におけるポルフィーリイの「あなたですよ」の発展形だ（そうなってしまった）ということを以前に書きました（「航行記　第一期」（二六）。

ラスコーリニコフは、まるで何かに刺しつらぬかれたように、全身をふるわせはじめた。

「じゃ……だれが……殺したんです？……」彼はいたたまれなくなって、あえぐような声でたずねた。ポルフィーリイは、思いもかけない質問に驚いたように、椅子の背に思わず体をのけぞらせた。

「だれが殺したですって？……」自分の耳が信じられぬとでもいうように、彼は相手の言葉をおうむ返しにした。「そりゃ、あなたが殺したんですよ、ロジオン・ロマーヌイチ！　殺したのはあなたなんですよ……」彼はほとんどささやくような声で、だがその声に確信をこめて言いたした。

ラスコーリニコフはソファからとびあがり、数秒間じっと立っていたが、また腰をおろした。その間、一言も彼は口にしなかった。こまかい痙攣がふいに彼の顔全体を走った。

「唇がまた、あのときみたいにふるえてますよ」ポルフィーリイは同情の色さえ浮かべてつぶやいた。「あなたは私の言葉を誤解なさったらしい、ロジオン・ロマーヌイチ」しばらく黙ってから、彼はつけ加えた。「それでそんなに驚かれたんですよ。私がうかがったのは、もう何もかも言ってしまって、問題を大っぴらにしようと思ってだったんです」

「あれは、ぼくが殺したんじゃない」ラスコーリニコフは、犯行の現場を押えられてふるえあがった幼児のように、こうささやいた。

「いや、あれはあなたですよ、ロジオン・ロマーヌイチ。あなたなんですね。ほかのだれにもできやしません」ポルフィーリイはきびしい、確信にあふれた声でささやいた。

（ドストエフスキー『罪と罰』　江川卓訳　岩波文庫）

このふたつ、「あなたじゃない」と「あなたですよ」ということばが相手に対して有効であるのは、まさに相手が殺人者の自覚を持っている場合です。『罪と罰』のラスコーリニコフについては、実際に自分で殺人を行なっていますから、「あなたですよ」に逆らうことができないわけです。ところが、イワンの場合は事情が複雑です。彼は実際に自分で手を下したわけじゃありません。殺人の起こる可能性を排除しなかっただけで、殺人を犯人に命じたわけでもありません。しかし、結局、罪の意識から逃れられなくなってしまっているんです。

「いいえ、兄さん、あなたは何度か自分自身に、犯人は俺だと言ったはずです」

「いつ俺が言った？　……俺はモスクワに行ってたんだぞ……いつ俺がそんなことを言った？」すっかり度を失って、イワンがつぶやいた。

「この恐ろしい二カ月の間、一人きりになると、兄さんは何度も自分自身にそう言ったはずです」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

イワンは自分で自分が犯人でないということができなくなってしまっている。苦しい深刻な自意識の堂々巡り――自分自身への際限のない問いかけと否定――を彼はどうすることもできません（これが、症状としては、幻覚の悪魔との対話という形にまでなるわけですね）。この堂々巡りのからくりは、むろん、彼自身がよくわかっています。わかっていても、自力では脱出できません。これを、アリョーシャは――幻覚症状までは知りませんが――理解していました。

ここで、もう一度、「あなたじゃない」における、イワンとアリョーシャの会話を追ってみます。私の読み取りは次の通りです。

父フョードルを殺した犯人が誰か、イワンは「この恐ろしい二カ月の間」ずっと考えてきました。考えつくしていたでしょう。これについて自分ほど考えている者はいないとも思っていたでしょう。だから、――

「じゃ、だれが犯人だ、お前の考えだと」なにか明らかに冷たく彼はたずねた。その質問の口調にはどこか傲慢なひびきさえあった。

（原卓也訳）

――ということになります。そのイワンにアリョーシャが「犯人がだれか、兄さんだって知っているでしょうに」と――「心にしみるような低い声で」（亀山訳では「低いしみじみとした声で」）――いう（それ以前にアリョーシャが具体的に誰を犯人だと考えていて、それをイワンに告げていたかは、しばらく後の文章で明らかにされますが、ここでアリョーシャはそんなことを問題にしているのではありません）。まさかそんなことをいわれるとは思ってもいなかったイワンが動揺し、――

「じゃ、だれだ、だれなんだ?」もはやほとんど凶暴にイワンが叫んだ。それまでの自制がすべて、一挙に消え去った。

（同）

それに追い討ちをかけるようにアリョーシャが「あなたじゃない」という。イワンは即座に理解したはずです。つまり、アリョーシャがイワンの苦悩の核心を見通していることを、です。もちろん、アリョーシャになら、それができることをイワンは以前から了解しているし、これは、この作品をここまで読んできた読者にもわかることです。アリョーシャはべつに「予言」なんかしているわけじゃありません。

「《あなたじゃない》！　あなたじゃないとは、どういうことだ?」イワンは愕然とした。

「あなたがお父さんを殺したんじゃない、あなたじゃありません！」アリョーシャがしっかりした口調でくりかえした。

三十秒ほど沈黙がつづいた。

「俺じゃないことくらい、自分でも知っているさ、うわごとでも言ってるのか?」青ざめた、ゆがんだ笑いをうかべて、イワンが言い放った。アリョーシャに視線が釘づけになったかのようだった。二人ともまた街燈のそばに立っていた。

（同）

イワンが「俺じゃないことくらい、自分でも知っているさ、うわごとでも言ってるのか?」といったのは、ただの虚勢です。もちろん、彼はたしかに「俺じゃないことくらい、自分でも知っている」んですが、それは彼の意識の表層でのみいえることで、深層はそうではありません。深層で動揺しつつ、それでも表層で答えたというのが、彼のことばです。

「いいえ、兄さん、あなたは何度か自分自身に、犯人は俺だと言ったはずです」

「いつ俺が言った？　……俺はモスクワに行ってたんだぞ……いつ俺がそんなことを言った?」すっかり度を失って、イワンがつぶやいた。

（同）

「いつ俺が言った？　……俺はモスクワに行ってたんだぞ……いつ俺がそんなことを言った?」という彼のことばは、彼が実際にそういっていたからこそです。いっていなければ、「いつ俺が言った?」といういいかたにはなりません。また、表層・深層ということばを使いますが、表層的にイワンが必死に突き止めようとしているのは、「俺がそう言ったのを、アリョーシャはいつ聞いたんだ?誰かがアリョーシャに告げ口したのだとしたら、誰だ?」というほどのことです。核心を突かれた彼はとにかく言い逃れをしようとしています。彼は完全に、大きく動揺しています。深層的には、「いつ俺が言った?」ということばは、「なぜおまえは知っているんだ?」にでもなるでしょうか。さらにいえば、イワンには、アリョーシャが「それを知っている」――アリョーシャは誰に教えられたのでもありません。彼には「わかる」んです――ことがわかってもいます。読者にもわかっています。

だから、イワンにはアリョーシャの次のことばを完全に理解することができます。

「この恐ろしい二カ月の間、一人きりになると、兄さんは何度も自分自身にそう言ったはずです」相変らず低い、はっきりした口調で、アリョーシャはつづけた。だが彼はもはや、さながら自分の意志ではなく、何かさからうことのできぬ命令に従うかのように、われを忘れて話していた。「兄さんは自分自身を責めて、犯人は自分以外のだれでもないと心の中で認めてきたんです。でも、殺したのは兄さんじゃない。兄さんは思

い違いをしています。犯人はあなたじゃない。いいですね、あなたじゃありません！僕は兄さんにこのことを言うために、神さまに遣わされてきたんです」

（同）

しかし、この後、イワンの思考は突然、べつの方向へ飛んでしまいます。ここではもう、自分が「何度か自分自身に、犯人は俺だと言った」ことは肯定されています。それよりも、イワンは束の間、ある錯覚に陥ってしまうんです。

どちらも沈黙した。この沈黙はまる一分もの長い間つづいた。二人とも立ちどまり、終始相手の目を見つめていた。どちらも蒼白だった。突然イワンが全身をふるわせ、アリョーシャの肩をぎゅっとつかんだ。

「お前は俺のところに来ていたんだな！」歯がみするようなささやき声で、彼は口走った。「夜中に、あいつが来ていたとき、お前もいたんだな……白状しろ……あいつを見たんだろ、見たな？」

（同）

つまり、これまで何度か自分の前に現れ、自分と会話していた悪魔が、やはり幻覚ではなく、実在しているという錯覚です。

「だれのことを言ってるんです……ミーチャのことですか？」けげんな表情でアリョーシャがたずねた。

「そうじゃない、あんな無頼漢なんぞくそくらえだ！」イワンは狂ったようにわめきたてた。「あいつが俺のところへよく来るのを、お前知っているんだな？　どうして感づいた、言ってみろ！」

「あいつって、だれですか？　だれのことを言ってるのか、わかりませんよ」アリョーシャはもはや怯えてつぶやいた。

「いや、お前は知ってるんだ……でなけりゃどうして……お前が知らないなんて、そんなはずはない……」

だが、ふいに彼は自分を抑えたかのようだった。たたずんだまま、何か思案しているみたいだった。異様な嘲笑がその唇をゆがめた。

（同）

一瞬、イワンはアリョーシャの「神がかり」的な性質に期待をかけました。アリョーシャになら、悪魔も見えるかもしれない、というわけです。そうして、もし、アリョーシャに見えるのだとしたら＝悪魔が実在するのだとしたら、イワンは狂ってなどいなくて、正気だということになります。この短い時間、彼の意識の焦点が、「犯人は誰か」＝「犯人は自分である」ということから、「自分が狂っているか、いないか」にずれました。しかし、彼はここでようやくわれに返りました。

そうして、こうなります。

「兄さん」アリョーシャがふるえる声でまた言いだした。「僕があんなことをいったのは、兄さんが僕の言葉をきっと信じてくれるからです。僕にはそれがわかるんです。あなたじゃない、という今の言葉を、僕は一生をかけて言ったんですよ。いいですか、一生をかけて。兄さんにああ言えと、神さまが僕の心に課したんです。たとえ今の瞬間から、兄さんが永久に僕を憎むようになったとしても……」

しかし、どうやらイワンはもうすっかり自制する余裕を得たようだった。

「アレクセイ・フョードロウィチ」冷笑をうかべて彼は言った。「俺は予言者だの、癲癇病みだのは堪えられんのだ。特に神のお使いなんてやつはな。君だってそれくらいわかりすぎるくらい、よくわかっているはずだ。今この瞬間から俺は君と絶交する。それも、おそらく永遠にな」

（同）

こうして、イワンは再び強引に自らの「カラマーゾフ的な力」に頼むわけです。しかし、彼にはわかっています。アリョーシャにはなにもかもわかっている、ということが。だから、もし自分をいまの状況から救い出してくれる存在があるとすれば、それはアリョーシャだけだ、ということがわかっています。これをさらにいえば、ある意味では、こうなります。もし、自分がここで素直にアリョーシャに助けを求めることができたら、どんなにいいだろう。自分をさらけ出して、身を投げ出すことができたらどんなにいいだろう。しかし、彼は傲然とその望みを断ち切ります。誰にも頭を下げず、自分の力だけでなんとかやってやる、ということです。だから、彼はアリョーシャに「絶交」をいい渡しました。しかし、いいですか、それは、彼イワンが、アリョーシャを完全に信頼しているからこその「絶交」なんですよ。アリョーシャにすがってしまえば、自分が救われてしまうことを知っているからこそ、彼は「絶交」を選択するんです。

そうして、イワンが「絶交」とまでいいだした事情まで、アリョーシャにはすっかりわかっているんです。そうやって、イワンの窮状をすっかり理解して、なお、彼に「赦し」の希望をもたらすことのできる唯一の存在がアリョーシャです。他の誰にも、それはできません。イワンには、それがわかっています。

さらにいえば、このアリョーシャの背後には、以前にイワン自身が口にしたことのある、「ただ一人の罪なき人」がいるんですね。

以前に私はこういいました。次に引用する文章に描かれたような人物が『カラマーゾフの兄弟』に見出せるでしょう、と。

悩んでいる者には、自分はこういうふうに救ってもらいたいといういろいろの仕方というものがある。もしも彼がそういう仕方で救われるのであれば、無論彼は喜んで救ってもらいたいのである。けれども救済の必要が更に深い意味において真剣に問題になる場合、特により高いものないしは最高のものによる救済が必要とせられるという場合、どのような仕方の救済も絶対に受け入れなければならないとしたら、これは屈辱である。あらゆることを可能ならしめる「救済者」の手のなかでは自己はほとんど無に等しきものとならなければならない、或いはまた単に他の人間の前に自分の身を屈しなければならないというだけのことにしても、とにかく彼は救助を求める限り彼自身であることを放棄しなければならない。このような屈辱に比すれば、よし彼がいま抱いている苦悩が疑いもなくどのように数多く、そして深刻であり、またいつ果てるとも知れないほどのものであるにしても、それはまだしも彼にとっては耐えられるのであり、したがって自己はもしこのまま彼自身として存在することさえ許されるならばむしろこの苦悩の方を選ぶのである。

さて絶望して彼自身であろうと欲するところのかかる苦悩者のうちに、意識がより多く存在すればする程、それだけまた絶望の度も強くなってそれはついに悪魔的なるものにまで至る。悪魔的なるものの根源は普通次のようなものである。絶望して自己自身であろうと欲するところの自己は、いかにしても自分の具体的自己から除き去ることも切り離すこともできない何等かの苦悩のために呻吟する。さて当人はまさにこの苦悩に向って彼の全情熱を注ぎかけるので、それがついには悪魔的な凶暴となるのである。そのときになってよし天に坐す神とすべての天使達とが彼に救いの手を差し延べて彼をそこから救い出そうとしても、彼はもはやそれを断じて受け入れようとはしない、いまとなってはもう遅すぎるのである。以前だったら彼はこの苦悩を脱れるためにはどんなものでも喜んで捧げたであろう、だのにその頃彼は待たされていた、――いまとなってはもう遅いのだ、いまは、いまは、彼はむしろあらゆるものに向って凶暴になりたいのである、彼は全世界から不当な取扱いを受けている人間のままでいたいのだ。だからしていまはかえって彼が自分の苦悩を手もとにもっていて誰もそれを彼から奪い去らないということこそが彼には大切なのである、――それでないと彼が正しいということの

証拠もないし、またそのことを自分に納得させることもできない。このことが最後には非常に深く彼の脳裏に刻み込まれるので、彼は全く独自の理由からして永遠の前に不安を抱くことになる、――永遠は彼が他人に対して持っている悪魔的な意味でのかかる無限の優位を彼から切り離し、彼が現にあるがままの彼であって構わないという悪魔的な権利を彼から奪い去るかもしれないのである。彼は彼自身であろうと欲する。

（キェルケゴール『死に至る病』　斎藤信治訳　岩波文庫）

くどいようですけれど、もう一度いいます。イワンは自分で自分が犯人でないということができなくなってしまっている。苦しい深刻な自意識の堂々巡り――自分自身への際限のない問いかけと否定――を彼はどうすることもできません。この堂々巡りのからくりは、むろん、彼自身がよくわかっています。わかっていても、自力では脱出できません。そこで、彼が脱出するためには、そういう彼の事情をすっかり承知したうえで、彼の堂々巡りを断ち切り、彼のすべてを引き受けてくれる、そういう貴重な他者が必要なんです。それがアリョーシャなんですよ。「あなたじゃない」とは、そういうことです。しかし、アリョーシャはこの自分の申し出の意味を、イワンが完全に理解しつつ、拒絶することをも予感しています。だから、彼は「たとえ今の瞬間から、兄さんが永久に僕を憎むようになったとしても……」といわなくてはならなかったんです。アリョーシャが「あなたじゃない」というのには、相当の勇気と覚悟が必要でした。そうして、イワンがこれを拒絶せずにそのまま受け入れるのにも、相当の勇気と覚悟が必要なんです。イワンにはこの勇気と覚悟が持てなかった。

――と、こうして私の読み取りを（ということは、手の内を、です）明かしたところで、先の亀山郁夫の文章に戻ります。

亀山郁夫の「アリョーシャのこの暗示に満ちた言葉を聞いたイワンは、逆に悪魔と自分が一体かもしれないという自覚にはまり込むことになった。その意味で、きわめてドラマティックな転換点といえる。すでに悪魔と一体でありたくないという願望が、彼のなかに兆していることを暗示しているともいえる。」は、でたらめです。さらに「イワンはこの瞬間、自分が犯人かもしれないとの根源的な認識の入り口に立つとともに、じつは「幻覚症」の入り口に立ったといっても過言ではないのである。」もでたらめです。アリョーシャのことばを聞かなくとも、とっくに幻覚症に苦しんでいたイワンは、悪魔が幻覚であり、自分自身の投影でしかないと知っていました。先にもいいましたが、アリョーシャとの会話のなかでは、一瞬、悪魔が実在していて、実際に自分を訪れてきていたのかもしれないと錯覚してしまったんです。その錯覚に気づいたために、自分を嫌悪するから、「異様な嘲笑」が彼の「唇をゆがめた」わけです。また、イワンはもうとっくに「自分が犯人かもしれないとの根源的な認識」の奥深くにいたんです。イワンにはもちろん、とっくにその自覚がありました。

アリョーシャの「あなたじゃない」ということばは、とっくに自分を犯人だと認めていた、その自覚のあったイワンに突き刺さるというのでなくてはなりません。この点にこそ、当の亀山郁夫が「語順の異様さ」といったことのものすごさがあるんです。もう一度、先に私が引いた『罪と罰』でのポルフィーリイの台詞を思い出してください。アリョーシャは、「そりゃ、あなたが殺したんですよ、殺したのはあなたなんですよ……」、「いや、あれはあなたですよ。あなたなんですね。ほかのだれにもできやしません」と、ほとんどささやくような声でいったのではなくて、ほとんどささやくように「お父さんを殺したのは、あなたじゃありません」といったんです。もしもここでアリョーシャが「あなたです」といったのだとしたら、この場面も、この作品の全体も相当の奥行きが失われますね。逆にいえば、「あなたじゃない」は一挙に、この作品の実にたくさんの要素を――いや、それどころかこの作品の全体を隅々まで――、閃光のように照らし出すことばです。これはまた、殺人事件からしばらくの間、読者の前から遠ざかっていたイワンの消息を一挙に伝えることばでもあります。

それなのに、亀山郁夫が、「兄弟同士の信頼関係のなかで、あたりまえの「事実」をめぐってのどこか思わせぶりな言い方は、かなり違和感を与え、端的に

いって、居心地がわるい。ここには、父を殺したのは「あなたかもしれない」「あなたである」と言っているのと同じぐらいの意味が、その曖昧さのなかに隠されているということだ。」となどというのは、私にいわせれば、鈍感です。

さて、亀山郁夫のこの文章のつくりには、そもそも問題があると私は思っています。

> アリョーシャの言わんとしたのは、やはり「あなたが殺した」ということだった。しかし同時に、殺したのはあなたの一部分である悪魔だとも言おうとしていた。要するに、アリョーシャは、結果として悪魔とイワンは一体ではないと語る（予言する）ことで、悪魔から離れなさいと、暗黙裡に警告したことになる。
>
> （亀山郁夫「解題」『カラマーゾフの兄弟』光文社文庫）

この文章で、なぜ「悪魔」を持ち込むんでしょうか？　私はここに意図的なものを感じます。同じことじゃないか、などと考えてはいけません。

「アリョーシャの言わんとしたのは、やはり「あなたが殺した」ということだった」というのは大間違いだと私はいいましょう。「アリョーシャの言わんとした」のは、「あなたは自分が殺したと思っているけれども、そうではない」ということですよ。読者は、絶対にこれを混同しちゃいけません。この違いを必ず明確に区別できなくちゃいけません。これは、私でなくとも、当のアリョーシャがそういうでしょう。

「しかし同時に、殺したのはあなたの一部分である悪魔だとも言おうとしていた。」というのは、本来は、「あなたは、あなたの思想から導き出せる可能性のなかから、すべては許される、したがって、父を殺すことがあってもいい、それは許される、と考えていたけれども、しかし、それを本当に信じていたのではなかったし、事実、それを実行してもいない」というべき内容なんですが、亀山郁夫はどうやら、悪魔を実在のものとさせたくてたまらない・読者にとっての既成事実にしたい、という気配があるんですね。

いや、私がここでまずいおうとしたのは、単純に、アリョーシャはイワンの悪魔のことなんか知らないということです。イワンにとってだけ、悪魔は存在していたんです。その悪魔はイワンの罪悪感の幻覚化したものです。彼に深刻な打撃を与えはするけれども、幻覚なんです。悪魔はいません。亀山郁夫は「結果として」などといいはしていますけれど、これはきちんと押えておかなくてはならない部分ですよ。ここをなんとなく譲ってしまうと、この後で、あなたは亀山郁夫のいいように連れ去られることになるんじゃないでしょうか？「（予言する）」にも警戒しておかなきゃいけませんよ。これは、あなたの意識へのさりげない刷り込みです。騙されちゃいけません。

どうですか？「いずれにせよ、この奇妙なセリフは、アリョーシャがゾシマの死後はやくも「予言者」としてのある透徹した能力を確実にさずかったことを裏づける。」なんて書かれると、これでは、アリョーシャがなんだかある種の超能力者みたいじゃないですか。

私はいいますが、こういう超能力的見地（ある種の単純化・矮小化）を持ち込んできてはいけません。『カラマーゾフの兄弟』の作品の登場人物たちはただの人間です。そうして、ただの人間だという視点から彼らを見たときにこそ、彼らのものすごいスケールの大きさが理解されるんです。アリョーシャは「予言者」としてのある透徹した能力を確実にさずかった」のではなく、人間的に成長したんですよ。

ここまで私のいってきたことの全体を通して、私は、亀山郁夫がイワンやアリョーシャ――ひいては『カラマーゾフの兄弟』という作品の全体――を実は過小評価している、見くびっているのじゃないかと思っているんです。そうして、私は、彼がこれまで一度も「あなたじゃない」に感動したことがないのじゃないか、と疑っています。彼は単に「端的にいって、居心地がわるい」という受け取りしかできないままでいるひとなんじゃないか？　そんな読みかた

しかできないひとなんじゃないか？　そうすると、ですよ、これはそんなひとの訳した『カラマーゾフの兄弟』だということになります。

もうひとつだけいいますが、原訳での「あなたじゃない、という今の言葉を、僕は一生をかけて言ったんですよ。いいですか、一生をかけて。兄さんにああ言えと、神さまが僕の心に課したんです。」の「一生をかけて」を、亀山郁夫は「あなたが死ぬまで」と訳していて、これについて木下豊房が痛烈に批判している――「原訳の「一生をかけて」は……（中略）……「永久に」という意味で、自分の発言への確信と責任を表明したものです。「自分が死ぬまで信じています」ならともかく、「あなたが死ぬまで信じています」とは、ありえない訳です」（http://www.ne.jp/asahi/dost/jds/dost123.htm）――のは、まったくその通りだろうと、私は思っています。

というわけで、アリョーシャの「あなたじゃない」に、この二十五年間ずっと引っかかり、こだわりつづけ、なにかしらの光明を見出そうとしてきた私には、亀山郁夫の解釈と訳とを承服することができないんです。これについては、このへんで終わりにします。

まったく、やれやれ、なんですが、私はまだ、この亀山郁夫の文章「解題」を読んで、自分が「ええっ」と声をあげてしまった箇所のことに触れていないんですよ。笑ってしまうとともに、非常な疲れを感じるんですが、まだつづけます。

（二〇〇八年七月十三日）

（二〇〇八年七月十五日　一部加筆修正）

「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」その二

1

あらためてお断りしておきますが、私は亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』の全体を読んでいません。それどころか、私はただこの翻訳におけるアリョーシャとイワンの会話「あなたじゃない」という第四巻中の箇所を読んでみたにすぎません。それ以前にも自分の勤める書店の店頭で、数箇所を立ち読み（斜め読み）したことはあった――そして気に入らなかった――んですが、きちんとじっくり読んでみたのはここだけです。それで、まず、疑問に感じたことがありました。それから、ちょうどこの箇所について亀山郁夫自身が第五巻の「解題」――私はこちらも通読していません――で触れているのを、たまたま見つけてしまったんです。これに気づかなければ、前回のああも長い文章を書かずにすんだはずなんですね。

すこしおさらいをしますが、亀山郁夫の訳と「解題」の文章を読むかぎり、どうやら、イワンはアリョーシャの「あなたじゃない」を即座に理解できなかった・「あなたじゃない」がイワンには図星ではなかったようなんですね。だから、この部分の会話が最初しばらく、とんちんかんなやりとりになってしまうんです。神がかり的な妄言をアリョーシャが一方的にイワンにもちかけ、イワンがわけもわからず困惑する、という図です。そうして、亀山郁夫の読み取りでは、それを「あなたが殺した」と受け取ったイワンがアリョーシャに絶交をいい渡す、というふうになります。ところが、私は二十五年前の初読時――以後、何度もこの作品の全体を通読しましたし、特にこの場面は数え切れないくらい読み返してきました――から、イワンには「あなたじゃない」の意味が即座にわかった・「あなたじゃない」がイワンには図星だった、と解釈していたんです。その解釈ゆ

えに、この場面に私は大きく感動したんですし、以後、ずっとこのアリョーシャのことばについて考えつづけてきたんでした。しかし、どうも亀山郁夫はかつて一度もここに心を動かされることがなかったらしい。「殺したのは、あなたじゃありません」についても、語順が奇妙だという認識――それも、この点に言及する数多い他の研究者たちを横目にして――にとどまり、「端的にいって、居心地がわるい」としか感じなかったようなんです。それで、亀山郁夫は鈍感だ、と私はいいました。

ここで、こういう仮定をしてみます。いや、亀山郁夫は、イワンには「あなたじゃない」の意味が即座にわかった・「あなたじゃない」がイワンには図星だったと、もちろんそう解釈していたんだ、と。しかし、それであの訳にはならないし、そうであれば、「解題」の文章があのようになるわけもありません、と私はいうでしょう。いや、それでもあの訳になり、あの「解題」の文章になったんだよ、と、もし真顔でいわれたとすると――いや、そんなことはありえませんね。

あるいは、前回の私の文章を読んでも、原卓也訳と亀山郁夫訳の違いがわからなかった、ピンとこなかった、というひとがあるかもしれません。もし、あなたがそうなら、私は提案しますが、ひとつ、あなたが『カラマーゾフの兄弟』の芝居を演出するとして、イワン役とアリョーシャ役のふたりの俳優に演技指導してみることを想像してほしいんです。頭のなかで、原訳と亀山訳とのふたつの台本を俳優たちにそれぞれ演じさせてみてほしいんですね。そうすると、まったく別の芝居が出来上がるはずだと私は考えているんです。ふたつの台本の違いが、ちょっとしたト書きの違いではないことが納得されるはずだ、と思うんです。思い出してください――

> 些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。
>
> （「亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』を検証する」
> http://www.ne.jp/asahi/dost/jds/dos117.htm）

――というか、それが本来小説を読むということなんですけれども。これに関しては、ついでに、こういう文章も引用しておきます。

> 会話の魅力もさることながら、ト書きの部分、つまり会話にはさまれたちいさな説明文も、たいせつに読んでいただきたい。きわめて単純化した形でしか訳しようのないト書き文も、原文ではしばしば、それぞれに豊かなニュアンスをはらんだ語が使用されており、登場人物の心理状態がきわめて精密に書き込まれているのである。
>
> （亀山郁夫「解題」）

しかし、どうでしょうか。先にもいったように、亀山郁夫の「解題」を読まなければ、つまり、「あなたじゃない」の訳文を読んだだけでは、私はこれほど確信を持って以上のことを指摘できなかったのじゃないでしょうか？　そうかもしれません。違和感をおぼえつつも、素通りしてしまったかもしれません。そもそも、イワンには「あなたじゃない」の意味が即座にわかった・「あなたじゃない」がイワンには図星だった、と解釈して四半世紀の私は、その解釈のまま亀山訳を読み、ちらっと不審を抱いただけで終わりにしていたのじゃないでしょうか。その意味では、「解題」を書くことで亀山郁夫は墓穴を掘っていたわけです。ということは、亀山郁夫の訳文自体にさほど問題はないのじゃないか、という声も聞こえてきそうです。そのまま同意してしまうひとも多いかもしれません。いや、多いだろうと思います。

でも、それは間違いです。

私は、翻訳者がどのように原作を読み取っていたか――どのように作中人物たちを読み取り、彼らの関係を読み取り、その関係の推移を読み取っていたか（それらの読み取りは別々のものでなく、切り離すことのできないものなんですが）――ということが、必ず彼の翻訳に反映されると考えているんです。私はこう

いうことをいいたいんですよ。原作の一部だけを無作為に取り出して、それを和訳するということがあったとしますね。たとえば、「何時ですか？」、「三時五分前です」というやりとりがあったとします。一部だけ取り出して訳せば、いま掲げた訳でいいとしても、原作の文脈のなかでは、このやりとりをする人物たちがどういう関係にあるのかによって、訳しかたが変わらざるをえないわけです。彼らは「何時？」、「三時五分前」というやりとりをする間柄なのかもしれないわけですよね。「何時かね？」、「三時五分前でございます」という間柄かもしれません。「何時だい？」、「三時五分前っ」という間柄だってありうるでしょう。こういう差異は、翻訳者が原作をどのように読み取っていたかによって生じます。そのうえ、当の場面がどういうものであったかにもよって、この会話は変化しなくてはなりません。原作では三時きっかりに登場人物たちの目の前にある爆弾が爆発することになっているのかもしれません。それで、このとき、「三時五分前」と答えた人物だけが爆弾の存在を、爆発時間を知っているのかもしれません。逆かもしれません。それとも、彼らの間では、常に二時間分を足して時刻を告げる習慣があったのかもしれません。実際は一時五分前なのを、三時五分前というのかもしれません。または、そういう習慣があったにもかかわらず、このときだけたまたま、答える方の人物が自分の腕時計の針の指している時刻をそのまま読みあげてしまった可能性だってありますよね。そんなふうで、登場人物たちがどういう関係で、彼らの置かれているのがどのような状況であるか、ということの読み取りによって、翻訳者は訳文を変えていかなくてはならないんです。それは作品の個々の箇所ばかりか、全体にわたってそうでなくてはなりません。

だから、亀山郁夫がアリョーシャの「あなたじゃない」をイワンに図星であったか、なかったかを読み違えた場合に、それは必ず訳文に現われてしまうだろうというんです。そういう読み違えがあるからには、もしかすると、この場面のみならず、亀山郁夫がアリョーシャとイワンとの関係を読み違えている可能性だってあるわけです。アリョーシャがどういう人間で、イワンがどういう人間かということの彼の誤読が、作品全体に行きわたる可能性だってあるわけなんですよ。私はロシア語を知りませんから、それが実際にどんなふうに現われているか、わかりませんけれども。

いや、私はいいますが、亀山郁夫の「解題」を読むかぎり、私は彼の『カラマーゾフの兄弟』がとんでもない誤読の累積に違いないと考えているんです。「解題」における彼の読み取りがあまりにもひどいので、そういうんです。前回に私の口にした「鈍感」どころじゃないだろうと、いまは思います。

私は、前回の文章を書いた後、そのままつづきに取りかかっていたんですが、その最中、また何度も「解題」をぱらぱらとめくるうちに、次々驚くような文章を見つけてしまうことになりました。そうして、それも、これも、あれも問題にしなくちゃならないと考えて途方に暮れることになりました。ちらっと見ただけで、こちらが呆れてしまうような文章がたくさんあるんですよ。それで、私の方が迷走して、あれこれずいぶん長い文章を書きはしたものの、収拾がつかなくなってしまい、しばらく、どうしゃべっていいものかわからなくなってしまいました。

それでも私は、やっとこういう立ち位置を自分で確保しました。つまり、私は、亀山訳『カラマーゾフの兄弟』を読み終えた――しかも「解題」に大きい影響を受けもした・「解題」の通りに作品を読んでしまった――若い初読者を聞き手に想定しながらしゃべればいいんです。この、非常に数多いはずの初読者たちが、この後、亀山郁夫以外の翻訳者による『カラマーゾフの兄弟』を読むことになるかというと、考えにくいでしょう。彼らのほとんどは、今後ずっと、ある大切な芽を摘まれたままの読書を引きずって生きていくことになるでしょう。私は、彼らがそうならないように、とにかく、たとえば私の読んだ原卓也の訳を読んでもらえるように、彼らにある種の「解毒」ができるようにしゃべりましょう。そういうわけで、これから私がしゃべることは、『カラマーゾフの兄弟』を読んでいないひとにはもう通じないだろう――前回の文章ですらすで

にそうだったでしょう――と思います。ただ、そういうひとにも、私の読書のしかたとか態度とか、あるいは、私の読書の限界とか、そういったことを想像してもらうことはできるかもしれません。

しかし、その前にまだいっておかなくてはならないことがあるようです。こういう疑問の聞こえてきそうな気配を私が感じるからですね。

つまり、おまえは、イワンには「あなたじゃない」の意味が即座にわかった・「あなたじゃない」がイワンには図星だった、という解釈だけが正解のようにいうけれど、それが間違っているという可能性を考えてみないのかい？　それは、ここでの論議に必ずなくてはならない論点じゃないか？　あるいは、原卓也はああ訳しているけれども、しかし、彼ももし「解題」を書いていたら、やはり亀山郁夫と同じことを書いていたのじゃないのかい？

愚問だと思いますが、一応返答します。

私は、イワンには「あなたじゃない」の意味が即座にわかった・「あなたじゃない」がイワンには図星だった、という解釈の論拠を前回かなり詳細に説明しました。つけ加えておきますが、私は、『罪と罰』におけるポルフィーリイの「あなたですよ」なしでも、イワンには「あなたじゃない」の意味が即座にわかった・「あなたじゃない」がイワンには図星だったと考えていました。「あなたですよ」の再読で、あらためて、自分の解釈の強化がなされたということです。もうひとついっておきますが、キルケゴールの『死に至る病』を私が読んだのは、『カラマーゾフの兄弟』初読の一年ほど前でした。これは、ある意味で、イワンの苦しい深刻な自意識の堂々巡り――自分自身への際限のない問いかけと否定――のからくりについて、私がその読書とともに、自分自身の個人的な経験を通じて、『カラマーゾフの兄弟』を読む以前から知っていたということでもあります。

また、私はこうもいっておきたいんですが、『カラマーゾフの兄弟』は、無意味に――いいですか、無意味にですよ――「会話が最初しばらく、とんちんかんなやりとりになってしまう」ことのありえないつくりになっています。この小説にそんな無意味はないし、そんな無意味を取り込んだつくりの小説はありえます――ならば、必ず他にもこういう無意味が数多く含まれるはずです。『カラマーゾフの兄弟』のつくりのなかで、ドストエフスキーがせっかくの「あなたじゃない」を強烈な即効性なしに使用することがあるとは思えません。

また、私はいいますが、原卓也が「解題」に、イワンはアリョーシャの「あなたじゃない」を即座に理解できなかった・「あなたじゃない」がイワンには図星ではなかった、と書くことはありえません。そうでなければ、あのような訳になるはずもないんです。

話が逸れますが、『カラマーゾフの兄弟』における「あなたじゃない」の――そっくり同じというのでは全然ありませんが、それでも――遠い反響のように、ある非常に感動的な場面を描いた作品として、私はピーター・ウィアー監督による映画『フィアレス』（「Fearless」原作の翻訳も出ていますが、そちらではありません。これは読む必要がありません）をたくさんのひとに観てもらいたいと思います。これは、必ず「あなたじゃない」を読む助けになる作品です。ひとが「あなたじゃない」と誰かにいうことがどれほど困難であるか、それをいうためにどれほどの献身をしなければならないか、ということがわかるでしょう。

2

さて、私はまず、前回の補強といったことから始めます。先にちらと触れたこの作品のつくりとも結ぶことです。

私は前回にこういいました。アリョーシャの「あなたじゃない」は「殺人事件からしばらくの間、読者の前から遠ざかっていたイワンの消息を一挙に伝える」ことばでもある、と。「しばらくの間」といいましたが、イワンは「第五編　プ

ロとコントラ」を最後に、小説が「第六編　ロシアの修道僧」、「第七編　アリョーシャ」、「第八編　ミーチャ」、「第九編　予審」、「第十編　少年たち」と進むなかで、ずっと直接に姿を見せることがありません。しかし、読者は「大審問官」を含むイワンとアリョーシャの会話を強烈におぼえているでしょうし、読み進みながら、ゾシマ長老の話のなかにイワンの影を見出しもしていたのじゃないでしょうか。

ミーチャが連行されてから、小説は「第十編　少年たち」に移ります。自分がこっけいに見えないだろうか、と尋ねるコーリャ少年に向かってアリョーシャがこんなことをいいます。

「人間なんて、いったい何度こっけいになったり、こっけいに見えたりするか、わからないんですよ。それなのに、この節では才能をそなえたほとんどすべての人が、こっけいな存在になるのをひどく恐れて、そのために不幸でいるんです。」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

つづく「第十一編」が「兄イワン」です。いよいよ明日がミーチャの裁判という一日が語られます。イワン本人が姿を現わす前に、アリョーシャがいろいろなひとたちと会うなかで、伝聞の形で、イワンに関する情報を得ていくという導入がなされます。

アリョーシャが最初に訪ねるのはグルーシェニカです。

「いいえ、これはラキートカじゃないわ。弟のイワン・フョードロウィチがあの人の心を掻き乱すのよ、よくあそこに来ているから、そうだわ……」グルーシェニカは口走り、突然はっと口をつぐんだ。アリョーシャはびっくりしたように彼女を見つめた。

「よく来てる？　ほんとに来たことがあるんですか？　ミーチャ自身は僕に、イワンは一度も来たことがないって言ってたけど」

（同）

そうして、アリョーシャは、イワンがミーチャの脱走を計画していることを知ります。アリョーシャはこういいます。

「イワン兄さんは、ミーチャの事件に関して僕とは話をしないんですよ」彼はゆっくりと言った。「それに概してこのふた月というもの、僕とはほとんど口をきかないし。僕が訪ねて行くと、いつも、僕が行ったのが気に入らぬ様子をするもんだから、もう三週間ほども訪ねていないんです」

（同）

次はホフラコワ夫人。

「あら、あのね、アレクセイ・フョードロウィチ、ひょっとすると、ここがいちばん肝心の点かもしれませんわ」ホフラコワ夫人がふいに泣きだして、叫んだ。「神にかけて申しますけれど、あたくしリーズは本心からあなたにお任せしていますのよ。ですから、あの子が母親に内緒であなたをおよびしたからといって、そんなこと何でもございません。でも、あなたのお兄さまのイワン・フョードロウィチには、失礼ですけど、そう気軽に娘を任せるわけにはまいりませんのよ、そりゃ今でもあの方をこの上なく騎士的な青年と見なしておりますけれどね。だって考えてもごらんなさいませな、お兄さまはだしぬけにリーズのところにいらしたんですのよ、あたくしそんなこと少しも存じませんでしたのに」

「え？　何ですって？　いつです？」アリョーシャはひどくおどろいた。

（同）

アリョーシャはその「リーズ」＝リーザの部屋に行きます。彼はそこで、彼

女の夢の話を聞き、「僕もそれとまったく同じ夢を見ますよ」といいます。

「アリョーシャ、時々あたしのところに来てね、もっとひんぱんに来て」突然、祈るような声で彼女は言った。

「僕はいつになっても、一生あなたのところへ来ますよ」アリョーシャがしっかりした口調で答えた。

「だってあたしが言えるのは、あなただけですもの」リーザはまた話しはじめた。「自分自身とあなただけ。世界じゅうであなた一人よ、それに、自分自身に言うより、あなたに言うほうが、すすんで話せるわ。あなたなら、全然恥ずかしくないし。アリョーシャ、なぜあなただと全然恥ずかしくならないのかしら、全然?」

（同）

それから、リーザはイワンに絡めて「パイナップルの砂糖漬」の話をするんですね。アリョーシャはいいます。

「そうじゃありませんよ、だってその人自身、パイナップルの砂糖漬を信じてるかもしれないんですからね。その人も今、病気が重いんですよ、リーザ」

「そうね、あの人も信じているんだわ!」リーザが目をきらりとさせた。「その人はだれのことも軽蔑しません」アリョーシャはつづけた。「ただ、だれのことも信じないだけです。しかし、信じないとすると、もちろん、軽蔑しているわけですね」

（同）

ここでは、アリョーシャはもちろん、読者も、イワンがリーザにどんなことをいい、どういう態度でいたかということがわかっています。これは、例のイワンの嘲弄的な思想——すべては許される——にまっすぐ結ぶものだ、イワンはまだこの思想のなかにいる、ということがわかります。

そうして、アリョーシャはミーチャを訪れます。

「イワンには神がない。あいつには思想があるからな。それも俺なんかとは規模が違うやつがさ。それでも黙っているんだ。あいつはフリーメイソンだと思うよ。きいてみたんだけど、何も言いやしない。あいつの知恵の泉の水を飲んでみたかったんだが、何も言わないんだ。たった一度、一言だけ言ってたがね」

「何て言いました?」アリョーシャは急いで水を向けた。

「俺がこう言ってやったのさ。つまり、そうなると、すべてが許されるってわけかって。あいつは眉をひそめて、『うちの親父はだらしない子豚同然だったけど、考え方は正しかったよ』と、こうだぜ。言ったのはそれだけだよ。これはもうラキーチンより純粋だな」

「ええ」アリョーシャは沈痛に相槌を打った。「いつここへ来たんですか?」

（同）

その後で、ミーチャは、イワンから持ち込まれている脱走の計画について、アリョーシャに話すんですが、

「俺たちの秘密をすっかり打ち明けるよ!」ミーチャは急いでささやきはじめた。「あとでうち明けるつもりだったんだ。だって、お前に相談せずに何が決められると思う? 俺にとってはお前がすべてだからな。俺はよく、イワンは俺たちより偉いなんて言うけれど、お前は俺の守護天使だよ。お前の決定だけがすべてを決めるんだ。もしかすると、いちばん偉いのはイワンじゃなく、お前かもしれないな。実はね、これは良心の問題なんだよ、最高の良心の問題なんだ。あまり重大な秘密なんで、

俺は自分ひとりで解決できずに、お前に話すまで一寸延ばしに延ばしてきたほどなんだよ」

（同）

イワンがこの計画を誰にも漏らさないこと、特にアリョーシャには絶対にいってはならないと、ミーチャに口止めしていることを、アリョーシャは知ります。

ともあれ、この面会の最後はこうです。

「俺の前に立ってくれ、こうやって」

そして彼はまたアリョーシャの肩を両手でしっかりつかんだ。その顔が突然まったく蒼白になったため、ほとんど闇にひとしい中でも不気味なくらい目についた。唇がゆがみ、眼差しがアリョーシャにひたと注がれた。

「アリョーシャ、神さまの前に立ったつもりで、掛値なしに本当のことを言ってくれ。お前は俺が殺したと信じているのか、それとも信じていないのか？　お前は、お前自身は、そう信じているのか、どうなんだ？　本当のことを言ってくれ、嘘をつかずに！」彼は狂おしく叫んだ。

アリョーシャは全身を揺すぶられたような気がした。心の中を何か鋭いものが通りすぎたみたいで、彼にはその気配さえきこえた。

「いい加減にしてくださいよ、何を言うんです……」途方にくれたように彼はつぶやきかけた。

「本当のことを言ってくれ、隠さずにな。嘘をつくなよ！」ミーチャがくりかえした。

「兄さんが人殺しだなんて、ただの一瞬も信じたことはありません」突然アリョーシャの胸からふるえ声がほとばしりでて、彼はさながら自分のことばの証人に神を招くかのように、右手をあげた。とたんにミーチャの顔全体を幸福の色にかがやかした。

「ありがとう！」気絶のあと息を吹き返すときのように、彼は長く語尾をひいて言った。「お前は今、俺を生き返らせてくれたよ……本当の話、今までお前にきくのがこわかったんだ。なにしろ相手がお前だからな！　さ、もう行くがいい、行きなさい！　お前は俺に明日のための力をつけてくれたよ、お前に神の祝福があるように祈ってるぜ！　それじゃ、行きなさい、イワンを愛してやってくれ！」最後の言葉はミーチャの口からほとばしりでた。

（同）

「あなたじゃない」の前にこの場面のあったことはおぼえておいてほしいですね。

いまのミーチャの最後のことば「イワンを愛してやってくれ！」を亀山郁夫は「イワンを好きになってくれ！」と訳しているんですが、感心しませんでしたね。ミーチャがアリョーシャにいったのは、イワンに対するある種の行為・行動の呼びかけ――たとえば、いたわってやってくれ、とか、助けてやってくれ、とか、守ってやってくれ、とか、そういうことですね――と取ったほうがいいんじゃないでしょうか。そうすると、「愛してやってくれ！」の方が妥当じゃないでしょうか。

（そして、いま亀山郁夫の「好きになってくれ！」を確認するために、亀山訳での、このふたりの会話をざっと見てみたんですけれど、原訳での「アリョーシャは全身を揺すぶられたような気がした。心の中を何か鋭いものが通りすぎたみたいで、彼にはその気配さえきこえた。」に当たる亀山訳は、「アリョーシャは体全体を揺さぶられたような気がし、心臓を、何かするどいもので刺しつらぬかれたような気がした。」です。この違いはどうなっているんでしょうか？）

この後で、アリョーシャはイワンに会うんです。ようやくイワン本人が、読者の前に再登場することになるわけです。

この「第十一編　兄イワン」の導入部において、小説の語り手は、なかなかイワン本人を出してきません。グルーシェニカ、ホフラコワ夫人、リーズ、それからミーチャなどからの伝聞でのみ、彼の消息を伝えてきました。そこで、いくつかの手がかりが読者の前に提示されてきました。しかも、すべてアリョーシャ――イワンを「もう三週間ほども訪ねていない」――がそれらを聞き取るという形ですね。

語り手は、イワン再登場にあたって、慎重に、周到に舞台を用意します。それと同時に、先の四人――特に最後のふたり――が、どれほど自分の心情の吐露の聞き手としてアリョーシャを信頼しているかを描きもします。アリョーシャになら、どんなことも話せるんですよ。どうですか、語り手は、イワンを語りながら、アリョーシャをもさらに描いているんです。こういうことのすべてが、語り手にとって、この後すぐにも語ろうとしている「あなたじゃない」への地ならしになるでしょう。

ところで、アリョーシャについて、亀山郁夫はこんなふうに――ここも偶然見かけた箇所で、この前後を私はちゃんと読んでいません――「解題」に書いていました。

> アリョーシャの優しさ、清廉さなどの魅力には、じつはいくつか不透明な部分が出てくる。読者もおそらく、無意識のうちにそれを感じとってきたのではないか。とくに、アリョーシャがスネギリョフ二等大尉にお金を渡しそこねるいきさつなどは、注意を要するだろう。そもそも、他人にお金を渡し、慈善をほどこす行為には後ろめたさがつきまとうのが当然だし、その点については、「婚約者」のリーザも十分に気にかけている。極度に自尊心の強いスネギリョフが相手だけに、ここは細心の配慮がなされるべきところだが、大尉に対するアリョーシャの態度には、どこか見通しの甘さがつきまとう。また、施しに失敗した彼が、大尉の胸のうちをしたり顔で分析するあたりは、とても来るべき聖人のようには見えない。
>
> （亀山郁夫「解題」）

私は以前にちょうどこのアリョーシャのいいぶんを引用しながらしゃべったことがあります（「航行記　第一期」（二六）。

「だってね、リーズ、もしあの人がお金を踏みにじらずに受けとっていたりしたら、家に帰って、一時間かそこら後には、自分の屈辱を泣いたでしょうからね、きっとそういう結果になったにちがいないんです。泣きだして、おそらく明日、夜が明けるか明けないうちに僕のところへ乗りこんできて、たぶん先ほどと同じように札を僕にたたきつけて、踏みにじることになるでしょう。ところが今あの人は《自滅行為をした》と承知してはいても、ひどく誇りにみちて、意気揚々と帰っていったんですよ。とすれば、遅くも明日あの人にこの二百ルーブルを受けとらせるくらい、やさしいことはないわけです、なぜってあの人は自分の潔癖さを立派に示したんですからね、お金をたたきつけて踏みにじったんですもの。踏みにじっているときには、僕が明日また届けにいくなんてことは、わかるはずありませんしね。ところが一方では、このお金は咽喉から手の出るほど必要なんです。たとえ今誇りにみちていたにせよ、やはり今日にもあの人は、なんという援助をふいにしてしまったんだと、考えるようになるでしょうよ。夜になればもっと強くそう思い、夢にまで見て、明日の朝にはおそらく、僕のところへ駆けつけて赦しを乞いかねぬ心境になるでしょう。そこへ僕が現われるという寸法です。『あなたは誇りにみちた方です、あなたは立派にそれを証明なすったのですから、今度は気持よく受けとって、わたしたちを赦してください』こう言えばあの人はきっと受けとりますとも！」

アリョーシャは何か陶然とした口調で、「こう言えばあの人はきっと受

けとりますとも」と言った。リーズは手をたたいた。

「ああ、そのとおりね、あたし急におそろしいほどよくわかったわ！　ああ、アリョーシャ、どうしてあなたはそんなに何もかもわかってらっしゃるの？　そんなに若いのに、もう人の心の動きがわかるなんて……あたしだったら、決して考えつかないでしょうに……」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

私はいまの引用部分について、アリョーシャが「大尉の胸のうちをしたり顔で分析する」というのとは、まるっきり反対の見かたをしているんです。私はアリョーシャに感心したんですね。「そもそも、他人にお金を渡し、慈善をほどこす行為には後ろめたさがつきまとうのが当然」だとは、私も思いますよ。しかし、アリョーシャにはそれを乗り越えることができます。彼はスネギリョフの心中を正確に見通します。正確に見通して、なおかつ金を彼に渡すために必要なのが、以前に私のいった「謙遜な勇気」（キルケゴール）なんですよ。目の前にいる相手に対する自分の面子とか、恥ずかしさとか怯みとかを捨てて、へりくだり、なおかつ自分の信じていることを相手に施すために必要なものなんです。また、「謙遜な勇気」なしに、誰彼の心中を正確に見通すことはできません。金を渡そうとするアリョーシャはスネギリョフを馬鹿にしたり、見下しているわけじゃありません。ここでアリョーシャが恥ずかしがったり、変なためらいを見せてしまえば、スネギリョフを恥入らせ、受け取りは拒否されるでしょう。しかし、アリョーシャはまっすぐに、怯まず、「謙遜な勇気」を持って再び彼のもとへ行こうとします。ふつうにできることじゃありません。しかし、アリョーシャになら、できるんですよ。そうして、スネギリョフはアリョーシャから金を受け取ったでしょう。

断わっておかねばならないが、このところずっと、金には不自由しなかったのである。カテリーナからのあのときの二百ルーブルを、彼はずばりアリョーシャの予言どおり、受け取った。

（同）

それと同じことが、イワンへの「あなたじゃない」にも現われていると私は思います。イワンの心中を正確に見通していたアリョーシャは、「謙遜な勇気」を持って、イワンのために、献身的にことばを発したんですよ。アリョーシャの勇気はそういう性質のものです。そうして、これはゾシマ長老にもいえることで、このふたりは、他人の心理を洞察することに長けているんです。犯罪者の心理にまで、その洞察の範囲は及んでいるでしょう。アリョーシャがリーザにいった「僕もそれとまったく同じ夢を見ますよ」もおぼえておいてほしいですね（それを受けてリーザが、彼には何でも話せる、というんでした）。こういうアリョーシャだから、イワンに「あなたじゃない」といってやることができるんです。もしかすると、これを悪用することができるのじゃないか、という疑いも生じるかもしれませんが、おそらく、彼らの洞察力の基盤は「信仰」――あるいは、「善意」でしょうか。あるいは、人間を尊重する心でしょうか――にあります。「信仰」なしに、この洞察力がどこまで力を発揮するのか、疑問ですね。しかし、亀山郁夫には彼らのすごさがこうした洞察力にあるということがわかっていません。だから、「聖性」だの「聖人」だの「予言」だのということを大げさなやりかたで持ち出さなくてはならなくなるんです。「来るべき聖人」なんてどうでもいいし、そもそもゾシマ長老だってそういう「聖人」なんかじゃありません。

さて、アリョーシャはカテリーナのところでイワンに出会います。ようやく、本人の姿が現われました。

「あの人について行ってください！　追いかけてちょうだい！　片時もあの人を一人きりにしてはいけませんわ」彼女は早口にささやいた。「あの人、気が変になってるんです。気が変になってることを、ご存じないんですの？　あの人、熱病なんです。神経性の熱病ですわ！　お医者さまがあたくしにそうおっしゃいましたもの、さ、早くいらして、あとを

追ってください……」

アリョーシャは跳ね起きて、イワンのあとを追った。兄はまだ五十歩と離れ去っていなかった。

「何の用だ？」アリョーシャが追いかけてくるのに気づいて、彼はだしぬけにふりかえった。「俺は気違いだから、あとを追うようにって、彼女に言われたな。きかなくともわかるさ」苛立たしげに彼は付け加えた。

「もちろんあの人は誤解してますけど、兄さんが病気だってことは、あの人の言うとおりですよ」アリョーシャは言った。「僕は今あそこで兄さんの顔を見ていたんです。ひどく病人らしい顔をしてますよ、ひどく、兄さん！」

イワンは立ちどまらずに歩きつづけた。アリョーシャはあとにつづいた。

「おい、アレクセイ、人間がどんなふうに発狂してゆくか、知ってるか？」まったく突然にイワンが、もはやすっかり苛立たしさの消えた低い声でたずねた。その声には思いがけなく、きわめて素朴な好奇心がひびいていた。

「いいえ、知りません。狂気にもいろいろな種類がたくさんあると思うけど」

「じゃ、自分が発狂してゆくのを、観察できると思うか？」

（同）

どうですか？「じゃ、自分が発狂してゆくのを、観察できると思うか？」です。そうして――

「じゃ、だれが犯人だ、お前の考えだと」なにか明らかに冷たく彼はたずねた。その質問の口調にはどこか傲慢なひびきさえあった。

「犯人がだれか、兄さんは自分で知ってるでしょう」心にしみるような低い声で、アリョーシャは言い放った。

「だれだ？　例の気のふれた白痴の癲癇病みとやらいう、たわごとか？　スメルジャコフ説かい？」

アリョーシャはふいに、全身がふるえているのを感じた。

「犯人がだれか、兄さんだって知っているでしょうに」力なくこの言葉が口をついて出た。彼は息を切らしていた。

「じゃ、だれだ、だれなんだ？」もはやほとんど凶暴にイワンが叫んだ。それまでの自制がすべて、一挙に消え去った。

「僕が知っているのは一つだけです」なおもほとんどささやくように、アリョーシャは言った。

「お父さんを殺したのは、あなたじゃありません」

「《あなたじゃない》！　あなたじゃないとは、どういうことだ？」イワンは愕然とした。

「あなたがお父さんを殺したんじゃない、あなたじゃありません！」アリョーシャがしっかりした口調でくりかえした。

三十秒ほど沈黙がつづいた。

「俺じゃないことくらい、自分でも知っているさ、うわごとでも言ってるのか？」青ざめた、ゆがんだ笑いをうかべて、イワンが言い放った。アリョーシャに視線が釘づけになったかのようだった。二人ともまた街燈のそばに立っていた。

「いいえ、兄さん、あなたは何度か自分自身に、犯人は俺だと言ったはずです」

「いつ俺が言った？　……俺はモスクワに行ってたんだぞ……いつ俺がそんなことを言った？」すっかり度を失って、イワンがつぶやいた。

「この恐ろしい二カ月の間、一人きりになると、兄さんは何度も自分自身にそう言ったはずです」相変らず低い、はっきりした口調で、アリョーシャはつづけた。だが彼はもはや、さながら自分の意志ではなく、何かさからうことのできぬ命令に従うかのように、われを忘れて話していた。「兄さんは自分自身を責めて、犯人は自分以外のだれでもないと心の

中で認めてきたんです。でも、殺したのは兄さんじゃない。兄さんは思い違いをしています。犯人はあなたじゃない。いいですね、あなたじゃありません！　僕は兄さんにこのことを言うために、神さまに遣わされてきたんです」

（同）

3

さて、ここまでのところで私が何をいおうとしているかというと、私は、イワンに対する「あなたじゃない」が全然脈絡のないものでない、唐突でわけのわからぬものではない、ということをいいたいわけです。「あなたじゃない」は、語り手によって周到に準備されて出てきたことばです。そうして、読者もイワンも、そのことばの意味がわかります。「あなたじゃない」によって、読者はイワンがどういうことになっているのかを決定的に知るんです。しかも、「あなたじゃない」という表現のしかたに感動もするんです。「あなたじゃない」というのは、単なる情報「あなたは犯人ではありません」ではなくて、それをはっきりイワンに告げること、また、告げる人間がいる、しかも、このようなことばで、ということのすさまじさを含み込んで読者に衝撃をもたらすんですね。なのに、亀山郁夫にはこれがわかりませんでした。彼は全然反応できず、まごまごしているので、アリョーシャが「予言」を始めたんだ、ということにしてしまいます。「あなたじゃない」の意味を「あなたが殺した」にしてしまう。「あなたが殺した」と受け取ったイワンがアリョーシャに絶交をいいわたす。亀山郁夫は、わからないから、とにかくなんとか理屈をでっちあげなくてはならなくなったわけです。こうして『カラマーゾフの兄弟』が、なにかできそこないの超能力ファンタジーみたいな作品として無理やり説明されていくんですね。

アリョーシャの言わんとしたのは、やはり「あなたが殺した」ということだった。しかし同時に、殺したのはあなたの一部分である悪魔だとも言おうとしていた。要するに、アリョーシャは、結果として悪魔とイワンは一体ではないと語る（予言する）ことで、悪魔から離れなさいと、暗黙裡に警告したことになる。

（亀山郁夫「解題」）

さらに、

だが、アリョーシャのこの暗示に満ちた言葉を聞いたイワンは、逆に悪魔と自分が一体かもしれないという自覚にはまり込むことになった。その意味で、きわめてドラマティックな転換点といえる。すでに悪魔と一体でありたくないという願望が、彼のなかに兆していることを暗示しているともいえる。

アリョーシャのこのひとことは絶大な意味を持つにいたった。こののち、イワンにとっては、悪魔との戦いが最大の課題としてのしかかり、彼の存在を根源から揺るがすような発見へと、彼自身を導いていくからである。

また、イワンはこの瞬間、自分が犯人かもしれないとの根源的な認識の入り口に立つとともに、じつは「幻覚症」の入り口に立ったといっても過言ではないのである。彼が思わず、自分を犯人とみなしているアリョーシャを「絶交」という言葉で突き放したのは、きわめて当然のふるまいだった。

いずれにせよ、この奇妙なセリフは、アリョーシャがゾシマの死後はやくも「予言者」としてのある透徹した能力を確実にさずかったことを裏づける。このわずかなやりとりから、それまでのアリョーシャとは根本的にちがう何かが、彼のなかで作動しはじめていることを暗示している。

（同）

しかし、『カラマーゾフの兄弟』に戻りましょう。

しばらく前から私は、この小説の「語り手」を担ぎ出して、彼がどういうふうにイワン再登場をお膳立てしてきたかをしゃべってきましたけれど、私は彼の企てのいちいちが成功しているだろうと思っています。という意味は、彼の企図通りに読者がこの小説を読み込むだろう――亀山郁夫は例外でしたけれど――と信じているということです。私はさらにこの「語り手」の企てについてしゃべります。

「あなたじゃない」の会話の後、イワンはスメルジャコフを訪ねます。殺人事件の後にイワンがスメルジャコフと話すのはこれが三回めになります。

モスクワから帰って以来、イワンがスメルジャコフと話しに行くのは、これがもう三回めだった。あの惨劇のあと、帰郷したすぐその日に会って話したのが最初であり、そのあと二週間後にもう一度訪れた。だが、この二度目のあと彼はスメルジャコフとの対面を打ち切っていたため、もうひと月以上会っていなかったし、噂もほとんど何一つ耳にしなかった。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

そこから、語り手は時間を遡って、殺人事件後のイワンの消息を語り始めます。そうして、スメルジャコフとの過去二回の対面の様子を含めた諸事情を語ることになります。つまり、これまでのところ、アリョーシャが見聞きしたことを通してだけ読者に伝えてきたイワンの消息を、またべつの角度から語り直すというやりかたです。語り手はそこで、イワンのある部分にはできるだけ踏み込まないような語りかたをします。そう私がいうのは、語り手が、まさにアリョーシャのいう通りの意味での「この二か月の間ずっと、犯人は自分以外の誰でもないとイワンが思いつめていた」を直接に語らない、ということです。一度、イワンが自分を犯人だと口にするのは「もしスメルジャコフがやったのなら」という条件つきでです。アリョーシャが指摘したのは、そういうレヴェルのことではありません。そんな条件なしで、ずばりイワンの良心の問題としてアリョーシャは指摘しているんです。語り手は、ある意味でとぼけたようにアリョーシャの「あなたじゃない」の意味していることに直接踏み込まないんです。その周辺をぐるぐる回る語りかたをします。これは意図的なものです。つまり、語り手は、すでにアリョーシャに「あなたじゃない」といわせてしまっているから、もうそれ以上自分が踏み込む必要がないんですね。しかし、わざとのように（いや、わざとなんですが）踏み込まないここでの語りが全体としてどう読めるかというと、やはり「この二か月の間ずっと、犯人は自分以外の誰でもないとイワンが思いつめていた」ということになるんです。私のいっているのが、まどろっこしくてわかりませんか？

べつの観点からいってみましょうか。

語り手は、時間を遡ってイワンのこの二か月を語り直していきますね。どういう経緯でアリョーシャがイワンとここしばらく会っていなかったのか、アリョーシャが誰を真犯人だと考えているか、その他、ミーチャの脱走計画などのことを具体的に語ります。それと同時に、イワンとスメルジャコフとの過去二回の対面がどのようなものであったかを語ります。そうして、この語り直しがそのまま三回めの対面にまでつづくんですが、そこでようやく語り手は、先に自分が語っていた小説内時間――イワンが帰ってきてから二か月後、アリョーシャが「あなたじゃない」をイワンに告げた時間――に追いつく・戻ってくることになるんですね。そこで、考えてみてほしいんです。もし語り手が、この二か月の出来事を時系列そのままにいっぺんにいろいろ語っていたら、どうなっていたか？あれこれの情報を絡めながらスメルジャコフとの二回の対面を語り、アリョーシャの一日を語り、それから「あなたじゃない」を持ってくるとしたら、どうか？そのとき「あなたじゃない」はどうなるか？　どうでしょう？「あなたじゃない」の衝撃は失われます。

「あなたじゃない」はあの位置で語られなくてはならなかったんです。あの位置が最も有効に「あなたじゃない」を響かせることのできる位置なんです。イワン再登場にあたって、語り手はまず「あなたじゃない」をあの位置に持ってくることを最優先にしただろうと私は考えます。その後に語り手のする二か月間の語り直しは、彼が読者に向けて鳴らした「あなたじゃない」の残響のもとで読まれるべきものだろうと思います。この語り直しにおいて、さらに語り手が企図していたのは、「あなたじゃない」に直接触れないでいたのと同様に、もうひとつ触れないでいたものを語るための準備です。つまり、イワンのあの思想――すべては許される――はどうなったか（これは必ず決着をつけなくてはならない問題でした）、現実にフョードルが殺された後にもイワンが以前のままでいられるのか、ということを語るための準備です。私は先回りしていいますが、語り直しで二回、それからついに最後の三回めの描かれるイワンとスメルジャコフとの対面は、その後に来る悪魔とイワンとの会話のための地ならしです。――そんなふうに、私は語り手が非常に意識的にこれらのことを行なったと考えているんです。

「あなたじゃない」は、それほどまでに重要なのだ、ということを私は強調します。「あなたじゃない」をきちんと読み取れるかどうかというのは、非常に大事なことです。これがわからないでいるのは『カラマーゾフの兄弟』を読むうえで致命的だ――亀山郁夫は致命的に読めていない――とも、私はいいましょう。

4

さて、前回の文章を書いた後で、私は亀山郁夫の「解題」をまたぱらぱらとめくっていて、こういう記述――これのせいで、今回の文章がこうまで長くなってしまったんですね――を見つけたんでした。イワンとスメルジャコフとの対面についてです。

> 三度目の、最後の対面――。これは『カラマーゾフの兄弟』全体のなかでも、存在論的な観点に照らした最高のクライマックスである。その対面の前に、ひそかにドミートリーを脱走させる計画が進んでいると書かれている。その目的でイワンは三万ルーブルものお金を出すというのだが、ここでは彼の複雑な心情が説明される。
>
> 「彼はふと、自分が逃亡を助けたいと思っているのは、たんにこの三万ルーブルの金を犠牲にして傷を癒すばかりでなく、なぜかほかにも理由があるような気がしてきたのだった。《心のなかでは、おれも同じような人殺しだからじゃないのか？》」
>
> まさしくフロイト的である。
>
> ……（中略）……
>
> 二度目の面談のあとでも曖昧な形でしか意識されなかった「父殺し」が、いったい何を意味し、どのような経緯によって生じたか、イワンはこの時点で気づいている。「父殺し」とは、物理的に父親を殺すことではなく、何かより根源的に人間の心に宿る、他者への死の願望であり、それは兄ドミートリーにも自分にも宿っている、そういう発見がイワンのなかにあったことになる。
>
> ……（中略）……
>
> スメルジャコフの「殺したのはあなたですよ」は、アリョーシャが以前にはなった暗示的な言葉、「殺したのはあなたじゃない」と、化学反応にも似た強烈な相乗作用をひき起こしながら、イワンを狂気へと駆り立てはじめた。その狂気は、イワンがいま、他者の死を願うという欲求の根源性に気づき、現実にそれに加担していたという意識が生成したことに由来する。それ以上に、おそらくは遺産、金への執着が、その「父殺し」の欲望を現実化していたことに気づいたからにほかならない。
>
> ……（中略）……

三度目の面談で、彼はついに事件の「本質」の認知へといたる。つまり、主犯はイワン、実行犯がスメルジャコフ、という本質的な構図である。絶対的な安全を確保しようとするイワンの地位は、すでに完全に揺らぎかけていた。

イワンは、確実に父親の死に対する願望があったことを、今はっきりと覚った。翌朝のモスクワ行きを決意した夜、得体の知れぬすさまじい好奇心にかられた彼が、階下にいる父親の一挙一動に耳を傾け、その様子を盗み聞きしたその行為の「卑劣さ」の意味を、イワンは完全に理解したのである。

イワンに狂気が訪れてくる。まず、その最初の兆しが正確に書きとめられている。

「じつはだな、おまえが夢なんじゃないかと、気がかりでな。そこにいるおまえが、幻じゃないかって?」

（亀山郁夫「解題」）

では、またこれまでと同じように、小説の辿り直しをしてみましょうか。

イワンは父の死の五日後に帰ってきました。

この町では最初にアリョーシャに会ったが、話してみて、相手がミーチャを疑おうとさえ思わず、犯人としてずばりスメルジャコフを名ざし、それがこの町のほかの人たちの意見に真向から反するものだったことにひどくおどろいた。そのあと郡署長や検事に会って、容疑や逮捕の詳細を知るにおよんで、彼はいっそうアリョーシャに対するおどろきを深めたが……

（同）

イワンは、ミーチャにも会い、それからスメルジャコフのところに向かいます。

すでにモスクワからとんでくる車中で、彼はスメルジャコフのことや、出発の前夜、彼と交わした会話のことを、ずっと考えていた。多くのことが心をかき乱し、多くの点が疑わしく思われた。しかし、予審調査に証言する際、イワンはその会話のことはしばらく黙っていることにした。スメルジャコフに会うまで、すべてを延ばしたのである。

（同）

イワンはモスクワで、父の死ばかりでなく、兄の逮捕のことをも知らされていたでしょう。ここで、考えてみてほしいんですが、もしミーチャが逮捕されていなかったら、ミーチャに嫌疑すらかかっていなかったら、あるいは、イワンが父の死だけを知らされて、ミーチャに限らず他の誰の逮捕をも知らされていなかったら、どうでしょうか？「多くのことが心をかき乱し、多くの点が疑わしく思われた」どころじゃなかったんじゃありませんか？　しかし、ともあれ、イワンはミーチャが逮捕されていることを知っていましたし、この表面的事実に頼ることができたんです。そうして、「その会話のことはしばらく黙っていることにした」イワンは、スメルジャコフとこんなやりとりをします。

「こんな結果になる、だと？　ごまかすんじゃない！　現にお前は穴蔵へ行けばとたんに癲癇が起きると、予告したじゃないか？　ずばり穴蔵と、場所まで言ったんだぞ」

「そのことを、尋問の際にもう証言なさったんですか?」スメルジャコフが落ちつきはらって探りを入れた。

イワンはふいにかっとなった。

「いや、まだ証言していないが、必ず証言するさ。お前は今すぐにいろいろのことを釈明せにゃならんぞ。俺に対してふざけた真似は許さんから、承知しておくんだな！」

「ふざけた真似なぞ、なんでするはずがありますか。もっぱら神さまに

対するように、あなたに期待をかけているというのに！」

（同）

そうして、この最初の対面の終わりはこうです。

「俺はお前を全然疑ってなぞいないし、お前の罪と認めるのをこっけいとさえ思っている……むしろ反対に、俺の気持を落ちつかせてくれたことを、感謝しているんだ。今はこれで帰るが、また寄ってみるよ。じゃまた、早く癒れよ。何か必要なものはないのか？」

「何から何までありがとうございます。マルファ・イグナーチエヴナがわたしを忘れずにいてくれて、何か必要なものがあると、今までどおり親切にいろいろ助けてくれますので。親切なひとたちが毎日、見舞いに来てくださるんですよ」

「じゃ、またな。もっとも、仮病が得意だってことは、言わずにおくよ……お前も供述しないほうがいいだろう」突然、イワンはなぜかこう口走った。

「よくわかっております。あなたがそれを証言なさらないのでしたら、わたしもあのとき門のわきでした話を、全部はいわずにおきましょう……」

イワンはここでふいに部屋を出た形になったが、もう廊下を十歩ほど行きすぎたころになってやっと、スメルジャコフの最後の一句に何か無礼な意味が含まれていたことを、突然感じた。引き返す気になりかけたが、ちらとそう思っただけで、『ばかばかしい！』と言いすてるなり、いっそう足早に病院を出た。何より、彼は本当に気持ちが落ちついたのを、それも本来なら反対の結果になるのが当然という気がしそうなものなのに、犯人がスメルジャコフでなく、兄のミーチャであるという事態によって安心したのを、感じていた。なぜそうなったのかを、そのときの彼は分析しようと思わなかったし、自分の感じ方を掘りさげることに嫌悪さえおぼえていた。できるだけ早く、どうにかして何かを忘れたい気持だった。

（同）

イワンはそうして、

その後数日の間に、ミーチャを苦しくしたすべての証拠をさらにくわしく、徹底的に知りつくすに及んで、彼はもはや兄の有罪をすっかり信じた。

（同）

しかし、

が、それでも一つだけふしぎなことがあった。ほかでもない、アリョーシャが頑なに、殺したのはドミートリイではなく、《十中八、九》スメルジャコフだと、主張しつづけていることだった。イワンはかねがね、アリョーシャの意見が自分にとって大切なものであることを感じていたので、今度は非常に不審でならなかった。また、アリョーシャが彼とはミーチャの話をしようとせず、自分からは決して切りださずに、イワンの質問に答えるだけなのも、ふしぎだった。そのこともイワンは強く気にかかった。

（同）

さらに、

一口で言うなら、彼は一時スメルジャコフのことをほとんど忘れていた。しかし、最初の訪問から二週間ほどすると、またしても以前と同じ奇妙な考えが彼をさいなみはじめた。つまり、何のために俺はあのとき、

出発前の最後の夜、フョードルの家で、泥棒のようにこっそり階段に出て行って、階下で父が何をしているか、きき耳をたてたのだろう、なぜそれをあとで思いだしたとき、嫌悪にかられたのだろう、なぜ翌朝、道中であんなに突然、気が滅入り、モスクワに列車が入る頃になって、「俺は卑劣な人間だ！」と自分自身に言ったのだろう、などとたえず自分に問いかけるようになった、とだけ言えば十分だろう。

（同）

そのイワンは道でアリョーシャに出会うと、

「おぼえているだろう、いつか食後ドミートリイが家にあばれこんできて、親父をたたきのめしたとき、そのあと庭で俺が《期待の権利》は留保しておくとお前に言ったっけな。あのときお前は、俺が親父の死を望んでいると思ったかい、どうだ？」

「思いました」低い声でアリョーシャが答えた。

「もっとも、実際そのとおりだったんだから、べつに勘ぐることは何もないわけだ、しかし、あのときお前は、《二匹の毒蛇が互いに食い合いをする》ことを、つまり、まさしくドミートリイが親父を、それもなるべく早く殺してくれることを、この俺が望んでいるとは思わなかったかい……しかも俺自身、それに協力することさえいとわない、と？」

アリョーシャは心もち青ざめ、無言のまま兄の目を見つめていた。

「さ、言ってくれ！」イワンは叫んだ。「あのときお前が何を考えたか、俺は心底から知りたいんだ。俺は知らなきゃならない。さあ、本当のことを、ありのまま言ってくれ！」

「赦してください、僕はあのときそれも考えました」アリョーシャはささやき、《事態を和らげる》言葉一つ付け加えずに黙った。

「ありがとう！」イワンは語気鋭く言うと、アリョーシャを置き去りにして、ひとり足早に歩み去った。このとき以来アリョーシャは、兄のイワンがなにか露骨に自分を避けるようになり、きらうようにさえなったらしいのに気づいたので、やがて彼の方も兄を訪ねるのをやめた。ところが、そのとき、アリョーシャと会った直後に、イワンは自宅にも寄らないで、だしぬけにまたスメルジャコフのところに足を向けたのだった。

（同）

ここでも、イワンは三度めのときと同じように、アリョーシャと話した直後にスメルジャコフを訪問するわけです。アリョーシャは、いわばイワンの良心――の番人、いや、証人なんですね。彼はイワンの良心の存在をいつでも証言する用意があります。イワンには「自分のために祈ってくれる」人間がいるんです――なんですね。ここで読者はゾシマ長老の「神秘な客」（亀山訳では「謎の訪問客」）を思い出してもいいでしょう。イワンは心の底では、最初から真実を知っていましたが、先にもいいましたように、ミーチャが犯人だという表面的事実に頼ることで、自分を正視していなかった・しないでいられたんですよ。しかし、遅かれ早かれ、彼は真実に突き当たったはずです。ともあれ、彼にはまだスメルジャコフという表面的事実があるので、そこに当たってみるんです。

というところで、ちょっと横道に逸れます。いま、「神秘な客」について触れたので、それに絡めて話します。

前回、私は亀山郁夫の「解題」におけるいくつかの主張をでたらめだといいましたが、それは、たとえば、他にこんなところ――この箇所も私はたまたまちらっと見かけただけです――にも見出すことができます。亀山郁夫はこう書いています。

その彼が、「謎の訪問客」との出会いによって修道院への道を志すとき、

……

（亀山郁夫「解題」）

「その彼」というのはゾシマなんですが、彼が修道院への道を踏み出したのは、「謎の訪問客」に出会う以前なんですよ。「謎の訪問客」は、決闘を放棄して、軍籍を離れ、修道僧になろうとしている奇妙な人物ゾシマの評判を聞きつけてやって来たひとたちのひとりなんです。それなのに、なぜ亀山郁夫は「その彼が、「謎の訪問客」との出会いによって修道院への道を志す」なんて書くんでしょうか？ もうこれが理解できない。めちゃくちゃです。あまりに杜撰です。雑に過ぎる。わざとやっているのか？ それとも、彼は本当にこの小説を訳したのか？ でなければ、「解題」を誰かべつの無能な人物に代筆させているのか？ 最悪なのが、小説を訳した人物と「解題」を書いた人物とが同一である場合です。最悪なのか？ 最悪なんだろうなあ。——とまあ、こういうことです。

ともあれ、ついでに、また、私はこういう文章を引用しておきます。これも、以前に私が引用した際に、こういう人物が『カラマーゾフの兄弟』にいないでしょうか、といった文章です。

ところで最後に、自分のなかに閉じ籠もっている人間——彼は閉鎖性のなかで足踏みしている——の内部をもう一度少しばかりのぞいてみることにしよう。この閉鎖性が絶対に保たれている場合には、あらゆる点において絶対的に完全に omnibus numeris absluta 保たれている場合には、彼に最も近く迫っている危険は自殺である。自己自身に閉じ籠っている人の内面に何が秘められてありうるかということについて、大抵の人達は無論何の予感も持っていない、——もしも彼らがそれを知ることがあったら、きっと驚愕するであろう。それに反しもしそういう状態にある人が誰かに、たった一人の人にでも、ことをうちあけるとしたら、彼はきっとそのために緊張がぐっと弛むかぐったりと深く気落ちするかしてもはや自殺というような行為を遂行する力がなくなるであろう。絶対の秘密に比較すれば、一人でもそれを一緒に知ってくれる人のある秘密というものは一音階だけ調子が柔らかくなっている。そこでおそらく彼は自殺をまぬかれることでもあろう。けれどもその場合絶望者は自分がほかの人に秘密をうちあけたというちょうどそのことに絶望することがありうるのである。もしも彼がずっと沈黙を守りつづけていたとしたら、きっとその方が、いま一人のそれを与り知っている人をえたよりも遥かに限りなく良かったのではないか？ 自分のなかに閉じ籠っていた人が、自分の秘密を与り知っている人をえたというそのことのために絶望がもたらされたといういくつかの実例がある。そこでまた結局帰するところ自殺ということになる。詩人はこのような破局（詩の主人公はたとえば国王とか皇帝である）を、主人公が自分の秘密を与り知った人を殺させるといったふうに描きだすこともできよう。このようにして我々はいま自分の秘密を誰かにうちあけたいという衝動を感じている悪魔的な暴君を想い浮かべることができる、彼は次から次と一群の人間を殺すことになる、——というのは彼の秘密を知るに至る者は必らず死ななければならないのである、——暴君が誰かに自分の秘密をうちあけるやいなやすぐにその人間は殺されてしまうのである。このような結末に終る悪魔的な人間の苦悩に充ちた自己矛盾——自分の秘密を知っている人を持たないでいることも持っていることもどちらも耐えられないというような——を描写することはけだし詩人に課せられた一つの仕事であろう。

（キェルケゴール『死に至る病』斎藤信治訳　岩波文庫）

というところで、では、話を戻します。

スメルジャコフとの二度めの対面では、

「それじゃ、お前はあのとき、俺がドミートリイと同様に親父を殺したがっていると思ったんだな、卑劣漢め？」

「あのときのあなたの考えがわからなかったんです」スメルジャコフが

恨めしげに言った。「だから、そこのところを探ってみるために、あのとき、あなたが門に入ろうとするところをよびとめたんです」

「何を探るんだと？　何をだ？」

「つまり、その辺の事情をですよ。お父さまが少しでも早く殺されることを、あなたが望んでらっしゃるか、どうかをです」

何よりもイワンを腹立たしくさせたのは、スメルジャコフが頑なにやめようとしない、このねちっこい、不遜な口調だった。

「お前が親父を殺したんだな！」だしぬけに彼が叫んだ。

スメルジャコフはばかにしたようにせせら笑った。

「殺したのがわたしでないことくらい、あなただってちゃんとご存じでしょうに。わたしはまた、賢い人間ならこんな話はもう二度とするにあたらない、と思ってましたのに」

（同）

さらに、

「おい、俺は我慢してきいてやっているんだぞ！　いいか、悪党、かりに俺があのときだれかを当てにしていたとすれば、もちろんそれはドミートリイじゃなく、お前だよ。誓ってもいいが、お前が何か汚い真似をしそうな予感さえしたんだ……あのとき……俺はその印象をおぼえている！」

「わたしもあのとき、ほんの一瞬間、あなたがわたしのことも当てにしてらっしゃる、と思いましたよ」スメルジャコフが嘲るように笑った。「ですから、そのおかげであなたはあのとき、わたしに対していっそうはっきり本心を暴露なさったんです。だって、わたしに対して何か予感なさりながら、同時にお発ちになったとすれば、つまりそれによってわたしに、親父を殺してもいいぞ、俺は邪魔だてせんからと、おっしゃったも同然ですからね」

「卑劣漢め！　そんなふうにとったのか！」

（同）

「いいか、悪党」イワンは目をぎらぎらさせ、全身をふるわせた。「俺はお前の言いがかりなんぞこわくない。俺に関して何とでも証言するがいいさ。俺が今お前を殴り殺さずにおいたのは、今度の犯罪でお前をクロとにらんで、法廷に引きずりだすためにほかならないんだ。この先お前の罪をあばきだしてみせるからな！」

「でも、わたしの考えでは、黙ってらっしゃるほうがようございますよ。だって、まったく無実のわたしを、どうして犯人よばわりできますか、それにだれがあなたの言葉を信用してくれます？　あなたがはじめたら最後、わたしもすべて話しますからね。なぜって、わたしだってわが身を守らにゃなりませんでしょうが？」

「俺がいまさらお前をこわがる、とでも思ってるのか？」

「今あなたに申しあげたわたしの言葉が、すべて法廷で信用されなくたってかまやしません、その代り世間では信じてくれますから。そうすれば、あなたもいい恥をかくことでしょうよ」

「それもやはり、『賢い人とはちょっと話してもおもしろい』という意味なのか、え？」イワンは歯ぎしりした。

「まさにそのとおりですとも。賢くなってくださいまし」

（同）

そうして、

イワンは怒りに全身をふるわせながら、立ちあがり、外套を着ると、それ以上スメルジャコフに返事をせず、見ようともしないで、足早に小屋を出た。すがすがしい夜気が気分をさわやかにしてくれた。空に月が明るくかがやいていた。さまざまな思いと感覚の恐ろしい悪夢が、心の

中でたぎり返っていた。『今すぐスメルジャコフを訴えに行こうか？　しかし、何と言って訴えよう。あいつはとにかく無実なんだからな。あべこべに、あいつが俺を訴えることになるだろう。実際、何のためにあのときチェルマーシニャへ行ったりなんかしたんだ？　なぜ、何のために？』イワンは自分に問いかけた。『そう、もちろん、俺は何事か期待していたんだ。あいつの言うとおりだ……』と、これでもう百遍目にもなるのだが、またしても、あの最後の夜、階段の上から父の様子にきき耳をたてたことが思い起された。だが今はそれを思いだすなり、ひどい苦痛をおぼえたため、突き刺されたようにその場に立ちすくんだほどだった。『そうだ、俺はあのときあの事態を期待していたんだ、たしかにそうだ！　俺は望んでいた、殺人を望んでいたんだ！　俺が殺人を望んでいたって？　ほんとに望んでいたのだろうか？　……スメルジャコフのやつを殺さなけりゃいけない！　もし今スメルジャコフを殺す勇気もないんなら、これから生きゆく値打ちもないんだ！』イワンはそのとき、自分の家へ寄らずに、まっすぐカテリーナのところへ行き、その姿で彼女をびっくりさせた。まるで狂人のようだったのである。彼はスメルジャコフとの話を、細かい点にいたるまで残らず伝えた。どんなに彼女が説得しても、イワンは気を鎮めることができず、のべつ部屋の中を歩きまわって、きれぎれに異様なことを口走っていた。やっと腰をおろしたものの、テーブルに肘をつき、両手で頭を支えて、奇妙な警句めいた言葉をつぶやいた。

「殺したのがドミートリイではなく、スメルジャコフだとすると、もちろんそのときは僕も共犯だ。なぜって僕はたきつけたんだからね。僕がたきつけたのかどうか、まだわからんな。しかし、殺したのがドミートリイでなく、あいつだとしたら、もちろん僕も人殺しなんだ」

（同）

いいですか、「あいつはとにかく無実なんだからな」なんていうのはイワンのごまかしですよ。そうして、先にもいいましたが、「殺したのがドミートリイではなく、スメルジャコフだとすると」という条件づけは、まだイワンが自分を正視していないということを示します。しかし、それよりも、彼がそう考えながらも、「狂人のよう」になってしまったことの方に注目してください。この動揺がイワンです。イワン・カラマーゾフなんです。

カテリーナはミーチャの手紙をイワンに見せました。

イワンはこの《文書》を読み終ると、確信にみちて立ちあがった。つまり、殺したのはスメルジャコフではなく、兄なのだ。スメルジャコフでないからには、つまり、彼イワンでもない。この手紙が突然、彼の目に数学のようにはっきりした意味を持ってきた。もはや彼にとってはこれ以上、ミーチャの有罪に対していかなる疑念もありえなかった。

……（中略）……

イワンはすっかり安心した。翌朝、スメルジャコフや、その嘲笑を思いだしても、軽蔑をおぼえただけだった。数日後には、どうしてあんな男の疑いにあれほど苦悩して腹を立てたのか、ふしぎな気さえした。彼はあの男を軽蔑し去って忘れようと決心した。こうして、ひと月過ぎた。かれはもはやスメルジャコフのことなぞ、だれにもたずねなかったが、二度ほど、あの男が重い病気で、頭がおかしくなっていることを、ちらと耳にした。「結局、発狂するでしょうよ」――一度、若い医師のワルヴィンスキーがこう言ったことがあり、イワンはそれを記憶にとどめた。その月の最後の週に入ると、彼自身もひどく身体具合が悪いのを感ずるようになってきた。裁判の直前に、カテリーナから招かれてモスクワから来た医者にも、もう診てもらっていた。

（同）

最後の「モスクワから来た医者」に、イワンは（悪魔の）幻覚のことを話して

いるんですね。どうですか、これをどう読み取りますか？　イワンは「すっかり安心した」のだから、そこからひと月以上も彼は平気なままでいられたんだ、そこでなぜか突然、身体に変調が起こったのだ、と読むんですか？　そうして、アリョーシャの「あなたじゃない」を受けるまで、イワンが「自分が犯人かもしれないとの根源的な認識の入り口に立つ」ことがなかったと読むんですか？　そうじゃないでしょう？　イワンはまたしても、ただ表面的事実に頼っただけですよ。またしても自分を正視するのを避けた・ごまかしたんです。しかし、彼の内心はこの間もずっと自分が人殺しだと知っていたんですよ。だから、ついにそれが身体の変調として現われてきたんです。とはいえ、語り手はここでイワンが表面的事実に頼っていることそのままに自身も表面的事実を語りつづけるんです。

それにしても、やれやれ、なんだって私はこんなにも長々とたくさんの引用をしてこなければならないんですかね？　しかし、もうひと息です。

ここで、ある箇所――語り手が表面的事実を中心に語りながらも、さりげなくそこに忍び込ませたような箇所――について、久々に亀山郁夫訳を引用してみます。

もうひとつ特筆すべきことは、ミーチャに対する憎しみが日に日に募っていくのを感じながら、同時に彼は、自分がミーチャを憎んでいるのは、カーチャの気持ちの「再燃」のせいではなく、ほかでもない、ミーチャが父親を殺したせいだということがわかっていた。彼は自分でもそのことを感じ、自覚していた。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　亀山郁夫訳　光文社文庫）

同じ箇所の原卓也訳はどうか？

さらにもう一つ注目すべきことは、彼がミーチャへの憎悪が日ましに強まるのを感じながら、同時に一方では、自分が兄を憎んでいるのは、カテリーナの愛の《再発》のためではなく、まさに兄が父を殺したためであることを理解していた点であった。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

亀山郁夫の訳文に傍点はありません。ちなみに、彼は「あなたじゃない」にも傍点をふっていませんでした。原文ではおそらく斜体の活字が当てられていたと思われる部分なんですが、亀山訳はそれを反映しない方針なんでしょう。しかし、傍点を施さないで、この部分を読者にわからせる・引っかけることがどこまでできるんでしょうか？　そう思います。

それにしても、この「まさに兄が父を殺したためである」（亀山訳では「ほかでもない、ミーチャが父親を殺したせいだ」）は、どんなふうに読めばいいんでしょうか？

私はこう読みました。

「まさに兄が父を殺したためである」というのは、「まさに、自分イワンではなく、兄ミーチャが父を殺したためである」ということです。つまり、イワンは、一方で父を殺したのが自分でなくミーチャであることに「安心」していながら、他方では「父を殺したのが、自分であればよかったのに」と考えているんです。兄に手柄を横取りされたとでもいい換えましょうか。なぜ、そんなことを彼が考えるでしょうか？　私は次の文章を前回に引用しました。

絶望して自己自身であろうと欲するところの自己は、いかにしても自分の具体的自己から除き去ることも切り離すこともできない何等かの苦悩のために呻吟する。さて当人はまさにこの苦悩に向って彼の全情熱を注ぎかけるので、それがついには悪魔的な凶暴となるのである。そのときになってよし天に坐す神とすべての天使達とが彼に救いの手を差し延

べて彼をそこから救い出そうとしても、彼はもはやそれを断じて受け入れようとはしない、いまとなってはもう遅すぎるのである。以前だったら彼はこの苦悩を脱れるためにはどんなものでも喜んで捧げたであろう、だのにその頃彼は待たされていた、――いまとなってはもう遅いのだ、いまは、いまは、彼はむしろあらゆるものに向って凶暴になりたいのである、彼は全世界から不当な取扱いを受けている人間のままでいたいのだ。だからしていまはかえって彼が自分の苦悩を手もとにもっていて誰もそれを彼から奪い去らないということこそが彼には大切なのである、――それでないと彼が正しいということの証拠もないし、またそのことを自分に納得させることもできない。このことが最後には非常に深く彼の脳裏に刻み込まれるので、彼は全く独自の理由からして永遠の前に不安を抱くことになる、――永遠は彼が他人に対して持っている悪魔的な意味でのかかる無限の優位を彼から切り離し、彼が現にあるがままの彼であって構わないという悪魔的な権利を彼から奪い去るかもしれないのである。彼は彼自身であろうと欲する。

（キェルケゴール『死に至る病』　斎藤信治訳　岩波文庫）

イワンについては、しばらく後でこういう記述があります。

何よりも、このひと月の間、彼のプライドはひどく苦しみつづけていた、だがその話はあとにしよう……

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

「このひと月の間」に何があったんでしょうか？　悪魔ですよ。悪魔の幻覚です。イワンは、最初から、心の奥底では「犯人は自分だ」と知っていました。しかし、現実には――表面的事実としては――ミーチャが逮捕されました。それでも、イワンは犯人がスメルジャコフではなかろうか、と考えつづけています。ですが、彼はとにかく表面的事実に頼ります。ところが、やっぱり、彼は真実を知っているんですよ。そして、その真実が何に由来するかを承知していたんです。何に由来するか？　彼の思想――すべては許される――ですよ。もし犯人がミーチャだとしたら、彼の思想は形無しじゃありませんか。その思想を抱いていた彼自身もみっともないことになるじゃありませんか。もちろん、私だって、イワンが本当に自分の思想から導き出せる結論として「すべては許される」、したがって、父親を殺すことがあっていい、などと信じていなかったと考えてはいます。でも、イワンはこれに足を取られてしまうんですね。イワンはこういう人間なんですよ。悪魔はイワンのこの点を刺激しつづけてきたわけです。事情は複雑ですが、それが「プライド」の問題です。彼は誰にも頭を下げたくはありません。彼には「謙遜な勇気」がありません。ただただ、自分の「プライド」にしがみつくんです。自分には「カラマーゾフ的な力」があるじゃないか、と彼は思いますが、限界はもうすぐそこです。先の『死に至る病』の文章を使っていえば、こういうことです。犯人がイワンでなく、ミーチャであるということは、イワンが「他人に対して持っている悪魔的な意味でのかかる無限の優位を彼から切り離し、彼が現にあるがままの彼であって構わないという悪魔的な権利を彼から奪い去るかもしれないのである。彼は彼自身であろうと欲する。」こうして、イワンのこの二か月間の語り直しによって、語り手はイワンの思想の決着を語るべく進んでいるのだと私は考えます。

さて、

それにもかかわらず、彼は公判の十日ほど前にミーチャを訪ね、脱走の計画を、それも明らかにだいぶ前から考えぬいた計画を提案したのだった。この場合、彼にこのような行動をとらせた主要な原因のほかに、兄を有罪にするほうが得だ、そうなれば父の遺産の額が彼とアリョーシャにとって、四万から六万にはねあがるからだ、と言ったスメルジャコフのあの一言によって、心に癒えることなく残された爪痕も、責任があった。彼はミーチャの脱走をお膳立てするため、自分が三万ルーブル提

供しようと決心した。が、その日、兄のところから帰る途中、彼はひどく心が滅入り、乱れていた。突然、自分が脱走させようと望んでいるのは、それに三万ルーブル出して爪痕を癒やすためばかりでなく、ほかにも何か理由があるような感じがしはじめたからだった。『心の中では、俺も同じような人殺しだからではないだろうか?』彼は自分にたずねてみた。何か間接的ではあるが、焼きつくようなものが心を刺した。

（同）

どうですか？「それも、明らかにだいぶ前から考えぬいた計画」です。

5

さて、やっと、亀山郁夫の「解題」に戻ることができます。さっきも私は「なんだって私はこんなにも長々とたくさんの引用をしてこなければならないんですかね」とぼやきましたが、それは、亀山郁夫がこの「解題」において、イワンとスメルジャコフの対面の一回めと二回めとを軽く流してしまっているからなんですね。それはないだろう、と私は思ったわけです。というわけで、ここまで長々と引用してきました。というわけで、私はお断わりしておきますが、三回めの対面についての引用はごくわずかにします。

イワンとスメルジャコフの最初の対面で、スメルジャコフは彼に「私は殺してない」と語った。しかし、二回目では、同じく殺害の事実を認めないながら、スメルジャコフは「チェルマーシニャーに行ってください」とイワンに言った自分の言葉を、イワンがどういう意味で受け取ったか知ろうとして躍起になる。イワンの理解力、意思を探ろうとして、彼は「殺したのはぼくじゃありません。それは、あなたがちゃんとご存じのはずです」と主張するのである。

実行犯であるはずのスメルジャコフが、なぜここまで自信をもって、殺害の事実を否定できるのか。正確には、主犯でないとの認識を盾にとれるのか、なかなか理解できない部分である。そのセリフは、スメルジャコフよりもむしろ作者が言わせている言葉といっていいほど、バイアスがかかっていそうである。

（亀山郁夫「解題」）

なんですか、これは？「実行犯であるはずのスメルジャコフが、なぜここまで自信をもって、殺害の事実を否定できるのか。正確には、主犯でないとの認識を盾にとれるのか、なかなか理解できない部分である」って、亀山郁夫は本当に理解できないんですか？

スメルジャコフはフョードル殺害を、イワンから直接指示されたわけじゃありませんでした。彼はイワンとの会話を「賢い人」との会話だとみなすことによって、イワンからの許可を得たつもりでいたわけです。そうして、いざ殺害を実行した後で、彼がまず確かめようとするのは、イワンが「賢い人」として自分に接してくるかどうかじゃないですか。一回めの対面でも彼はイワンに「もっぱら神さまに対するように、あなたに期待をかけている」とはっきりいっているじゃないですか。二回めでは、もうどうやらイワンが「賢い人」として自分に接することのないようなのを看取しつつも、まだいくらかの希望をかけて、「賢くなってくださいまし」というじゃないですか。イワンが最初から「賢い人」としてスメルジャコフに接していれば、彼だって殺害の事実を認めますよ。そうじゃなかったから——主犯であるイワンがとぼけはじめた・裏切りはじめた、と彼には思えたわけです——否認するんじゃないですか。スメルジャコフはイワンに合わせているんですよ。そうして彼の態度は、つまり、イワン自身が真実にどれだけ向き合うことができているかの度合いを、鏡のように正確に映し出しているんじゃないでしょうか？　イワンが真実に近づくほど・自分自身を正視しようとすればするほど、スメルジャコフも真実を口にしていくこと

になるわけです。

こういうことがわかっていないから、亀山郁夫はまたしても無理やり珍妙な理屈をひねり出さなくてはならなくなるんです。

そのセリフは、スメルジャコフよりもむしろ作者が言わせている言葉といっていいほど、バイアスがかかっていそうである。

（同）

つまり、亀山郁夫はこういっているんです。ポリフォニーの小説である『カラマーゾフの兄弟』では、登場人物たちが作者の都合によって、本来彼らがいうはずのないことをいわされることはない・登場人物は本来彼らのいいそうなことしかいわない――それだけ彼らは個性的であり、独立した声を持って相互に掛け合いを行なう――のだが、なかには例外もあって、このスメルジャコフの「セリフ」は、彼自身は殺害の事実を述べるはずのところが、なぜか作者ドストエフスキーのよくわからない創作上の都合で、否認することになったのだ、私・亀山にはそうとしか理解できない。

はっきりいいますが、「実行犯であるはずのスメルジャコフが、なぜここまで自信をもって、殺害の事実を否定できるのか。正確には、主犯でないとの認識を盾にとれるのか、なかなか理解できない部分である。そのセリフは、スメルジャコフよりもむしろ作者が言わせている言葉といっていいほど、バイアスがかかっていそうである。」というのは、でたらめです。亀山郁夫に読解力がないだけのことです。

次です。三度めの対面の前についての記述――

「彼はふと、自分が逃亡を助けたいと思っているのは、たんにこの三万ルーブルの金を犠牲にして傷を癒すばかりでなく、なぜかほかにも理由があるような気がしてきたのだった。《心のなかでは、おれも同じような人殺しだからじゃないのか？》」

まさしくフロイト的である。

（同）

はいはい、「まさしくフロイト的である」ですか。ここでやっと亀山郁夫はイワンの心の内側が理解できかけたらしいです。遅すぎます。事件を知らされた直後から、これまでさんざんイワンの心理が描かれてきたのを、いったい、どう読んできたんですか？

そして、次。

二度目の面談のあとでも曖昧な形でしか意識されなかった「父殺し」が、いったい何を意味し、どのような経緯によって生じたか、イワンはこの時点で気づいている。「父殺し」とは、物理的に父親を殺すことではなく、何かより根源的に人間の心に宿る、他者への死の願望であり、それは兄ドミートリーにも自分にも宿っている、そういう発見がイワンのなかにあったことになる。

（同）

「二度目の面談のあとでも曖昧な形でしか意識されなかった「父殺し」」って、それ、本当にそう思っているんですか？　本当にそう思っているんだろうなあ。でなければ、「「父殺し」とは、物理的に父親を殺すことではなく、何かより根源的に人間の心に宿る、他者への死の願望であり、それは兄ドミートリーにも自分にも宿っている、そういう発見がイワンのなかにあったことになる。」なんて書かないものなあ。それ、『カラマーゾフの兄弟』ではなくて、もしかすると単純にフロイトなんじゃないですか？　イワンはそんなことを考えていたんじゃありません。イワンはそんな悠長な、抽象的な、他人事のような理解なんかしている場合じゃなかったと思いますよ。彼は自分の全存在の存亡のかかった、

ぎりぎりの、ひどく具体的・即物的な危機にあったでしょう。

次。

スメルジャコフの「殺したのはあなたですよ」は、アリョーシャが以前にはなった暗示的な言葉、「殺したのはあなたじゃない」と、化学反応にも似た強烈な相乗作用をひき起こしながら、イワンを狂気へと駆り立てはじめた。その狂気は、イワンがいま、他者の死を願うという欲求の根源性に気づき、現実にそれに加担していたという意識が生成したことに由来する。それ以上に、おそらくは遺産、金への執着が、その「父殺し」の欲望を現実化していたことに気づいたからにほかならない。

（同）

どうやら亀山郁夫は、スメルジャコフの「殺したのはあなたですよ」を読んで、やっとアリョーシャの「あなたじゃない」に反応できたらしいんですね。

「あなたは何も心配なさることはないと、そう申しあげているんですよ。わたしは何一つあなたに不利な証言はしませんし、証拠もありませんからね。おや、手がふるえていますね。どうして指をそんなにひきつらせているんです？　家へお帰りなさいまし。殺したのはあなたじゃないんですから」

イワンはびくりとふるえた。アリョーシャの言葉が思い出された。

「俺じゃないことくらい、わかってる……」彼はまわらぬ舌で言いかけた。

「わかっているんですか？」すかさずまたスメルジャコフが言った。

イワンは跳ね起き、相手の肩をつかんだ。

「すっかり言ってみろ、毒虫め！　すっかり言え！」

スメルジャコフは少しも怯えなかった。狂気のような憎しみをこめた目を、相手に釘付けにしただけだった。

「でしたら言いますが、殺したのはあなたですよ」怒りをこめて、彼はささやいた。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

「ああ、なるほど、このスメルジャコフのことばに対応しているのか、アリョーシャの台詞は！　いや、ここまでわからなかったよ」と亀山郁夫は思ったに違いありません。ここを見つけたときに彼がどれほど安心したか、目に浮かぶようです。しかし、逆ですよ。スメルジャコフのことばがアリョーシャのことばに対応しているのであって、アリョーシャが先で、アリョーシャの方が強烈な意味を込めていたし、私がいったように、彼の「あなたじゃない」の方が、それを相手に告げるということに恐ろしく勇気を必要とすることばでした。作品中の位置づけということからしても、アリョーシャの「あなたじゃない」の方に、はっきり重量が置かれてもいるんです。

次はどうですか？

三度目の面談で、彼はついに事件の「本質」の認知へといたる。つまり、主犯はイワン、実行犯がスメルジャコフ、という本質的な構図である。絶対的な安全を確保しようとするイワンの地位は、すでに完全に揺らぎかけていた。

イワンは、確実に父親の死に対する願望があったことを、今はっきりと覚った。翌朝のモスクワ行きを決意した夜、得体の知れぬすさまじい好奇心にかられた彼が、階下にいる父親の一挙一動に耳を傾け、その様子を盗み聞きしたその行為の「卑劣さ」の意味を、イワンは完全に理解したのである。

イワンに狂気が訪れてくる。まず、その最初の兆しが正確に書きとめられている。

「じつはだな、おまえが夢なんじゃないかと、気がかりでな。そこにい

るおまえが、幻じゃないかって？」

（同）

遅すぎます。しかも、読みが浅すぎる。浅いどころか、全然読めていない。誤読の累積です。

「あなたじゃない」に反応できなかった――致命的です――亀山郁夫には、もうこの小説について行くことができませんでした。彼はイワンとスメルジャコフとの最初の二回の対面を軽く素通りしようとしました。彼は、イワンの表面上の安心だけを読み取り、ぎりぎりまでイワンの本当の苦悩を理解することができません。というか、彼の文章からは、イワンの本当の苦悩ではない、空疎なことしか、私には読み取れません。スメルジャコフがどういう人間であるかも彼にはわかっていません。それで、三回めの対面でのスメルジャコフとアリョーシャのことばの対応に――しかも、それぞれのことばの重量を逆に解釈して――やっと気づいた亀山郁夫は、とにかく苦しまぎれのどうでもいい説明を書き散らしました。

それがこの「解題」におけるこの一連の文章になります。繰り返しますが、そうでなければ、あの訳にはならないし、また、「解題」の文章がこのようになるわけもありません。

笑いごとじゃありません。

めちゃくちゃです。こんなひとが『カラマーゾフの兄弟』を訳したんですよ。個々の誤訳がどうとかいう以前の問題でしょう。そもそも、亀山郁夫には『カラマーゾフの兄弟』が全然読めていません。いや、『カラマーゾフの兄弟』に限らず、彼にはどんな文学作品をも読み解く力がないと私は思いますね。彼には、それぞれの登場人物も理解できていませんから、当然、彼らの関係もわかっていません。彼らが何をやりとりしているのかもわかっていません。そんなひとが訳したら、どういうことになるでしょうか？

些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。

（「亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』を検証する」）

いや、読者は、最後には、恐ろしく遠くまで原典から遠ざけられてしまったはずです。あまりのことに、私はそれこそ呆然とします。

（二〇〇八年八月五日）

「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」その三

1

ここまで、亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』について――基本的にはアリョーシャの「あなたじゃない」を巡って、その周辺だけを、ですが――もうだいぶしゃべってきたわけです。私がこの翻訳の「あなたじゃない」の部分と、「解題」のある箇所を読んで「ええっ」と声を出してしまった――この箇所については、まだしゃべっていないんです――のが七月六日でしたから、もうひと月以上が過ぎているんですね（前回（＝「その二」）の文章を公開してから、私はようやく「解題」の全文と「訳者あとがき」とを読みました）。その間に、私のなかでの亀山郁夫への評価は下がる一方で、ドミートリイ・カラマーゾフの台詞をもじっていえば、「こんな男がなぜ訳してるんだ！」という具合にまでなってしまいました。もう彼の文章を読みたくないんですよ。あまりにひどすぎて、批評にも値しないように思われるんです。前回私は「『カラマーゾフの兄弟』に限らず、彼にはどんな文学作品をも読み解く力がない」といいましたが、彼の文章がまた読むに耐えないレヴェルなので、実は、それを根拠に批判することそれ自体がばかばかしいんです。それにもかかわらず、なぜ私がここで批判をつづけるかというと、これが『カラマーゾフの兄弟』に関わるからです。私は『カラマーゾフの兄弟』が亀山訳および彼の「解題」によって大きく損なわれて多数の読者（現時点で、この文庫は全五巻累計で九〇万部を刷っています）に受容されていることが許せないんですね。とんでもないことをしてくれた、と思います。「解題」についていえば、こんなものでも、ありがたがって読む読者が大勢いるんですよ。私が見つけたあるネット上の文章では、アリョーシャの「あなたじゃない」の意味が「解題」を読んでよくわかった、などというものさえあるんですね。恐ろしいことだ、と思います。

それにしても、こうまで原作を読み取れていない人間による翻訳が成立してしまっていることが、私をある種の感心に導くのでもあるんです。できるものなんだなあ、と思うんです。誤読の累積がありながらも、原作の一文一文を辛抱強く訳していけば、終わりまで行き着くものなんだなあ、と。このことから、亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』にさして問題はないのだ、と主張するひとのあることも想像できます。しかし、それは誤りです。そんなことを主張するひとには「文学」がまったくわかっていません。

「文学」がまったくわかっていない、そういうひとたちの恐ろしい数を私は承知しているつもりです。自ら「多読家」を称しながら、「文学」の「ぶ」すらわからず、そうして、自らそれでいいと考えているひとたちの割合も相当なものになるでしょう。それも私は承知しているつもりです。そうして、私は、自らそれでいいと考えないひとたちのことを頼みにするんです。つまり、「背伸びする」つもりのあるひとたちですね。私はこのことを考えるときに何度か「大審問官」を引用してきましたっけ。私には、「大審問官」が何を考えているかがよくわかります。

以前に私は大江健三郎がノーベル文学賞を受賞したときのことをしゃべりました。「大江健三郎の作品であればなんでもいい」という客が私の勤める書店に押し寄せたんですね。それで、店にある大江作品がすべて売り切れるということがあったわけです。そのときに、私は、そうやって「大江作品であればなんでもいい」といって買っていった客のほとんどが、いざ読みはじめて「なんだこりゃあ？」といって本を投げ出すことになるだろう、とあるひとにいいました。つまり、彼らに大江作品を読み解く力のあるはずがないからだ、と。すると、相手は私にこう問いました。「で、お前にはその大江作品を読み解く力があるってわけだ？」。そのときに私はこう答えたんですね。「その通りです」。この「その通りです」を、私はそれから何度口にして徒労感に襲われてきたでしょうか。

また、ここ最近でも、私は自分の勤める書店で、かなり売れている小説のいくつかを立ち読みしながら、あらためてくらくらしたのでもありました。あらためて、というのはこういうことです。以前にも引用しましたが、

……小説作品というのは「なにが描かれているか」より「どのように描かれているか」が大事だということです。これを説明するのは厄介で、これが厄介だということがそもそも問題なんですが、最大の障害は――私はだいぶ手加減していいますけれど――「どのように描かれているか」を通して「なにが描かれているか」を読まなくてはならないのに、「なにが」だけしか読まない・読めないひとの多すぎることです。その「なにが」を支えているのが「どのように」だというのに。そういう読者にだけ照準を合わせて「なにが」だけを提示しているにすぎない自称「作品」がどれだけ売れているかを考えるとくらくらします。私が疑うのは、単に「なにが」だけしか提示していないものを読むときに、多くの読者が勝手に作家の非力を、いかにもありがちなイメージで――すぐにわかる、わかって安心できる、すでに自分のなかにある安手なあれ・それを当てはめながら――補ってやっているのではないか、最近の傾向でいえば、読んで泣こうとして、泣く方向にねじまげて読むから、だめなものでも泣かずにはいないということがあるのではないか、ということですね。しかし、ちゃんとした作品、「どのように」のきちんとできている作品はもっと自立したものであるはずです。泣くことが目的の読者のごまかしに手伝ってもらう必要など全然ありません。

しっかりした「どのように」がともなってはじめて可能になる「なにが」の表現ということを考えてほしいんです。つまり、読者がいまだ知らないなにか、名前をつけようと考えたこともないなにか、自分のすでにもっている（そしてすぐに取り出せる）どの観念にも落とし込むことのできないなにか、それが、作品の「どのように」に支えられてのみ、その作品一回きりの「なにが」として立ち上がってくるということがあるはずなんです。そういうことの実現こそがほんものの作家の仕事じゃないでしょうか？　そして、そういう作品を読むことこそがほんとうの読書なのでは？

（「わからないときにすぐにわかろうとしないで、わからないという場所に……」（〈『カンバセイション・ピース』（保坂和志　新潮文庫）〉解説）

そうして、亀山訳『カラマーゾフの兄弟』にしても、その大方の読者が「「どのように描かれているか」を通して「なにが描かれているか」を読まなくてはならないのに、「なにが」だけしか読まない・読めないひと」でもあるだろうと私は思っているんです。また、亀山訳がそういう読者に「照準を合わせ」た翻訳でもあるだろうと思うだけでなく、そもそも亀山郁夫自身が「「どのように描かれているか」を通して「なにが描かれているか」を読まなくてはならないのに、「なにが」だけしか読まない・読めないひと」であるだろうと思うんです。

既存の、たとえば原卓也訳を読もうとして挫折を経験したひとが、亀山訳をこなれていて読みやすいなどといって、とにかく最後まで読み切る、しかも、感動までするという例も、ネット上ではたくさん読むことができます。しかし、原卓也訳はけして古くさくなっていないし、優れた訳だと私は思います。これは、原訳を読みこなせないひとの方がおかしいのじゃないかと思います。

ここで、いささか乱暴なことをいいますけれど、つい最近に、あるひとが「翻訳作品というのは、どうして売れない・読まれないんだろう?」といい、「あの翻訳調というのが理由だろうか？　それはたしかに自分にも苦手であるのだが」といったのに対して、私はこう答えたんですね。なぜ、翻訳作品が売れない・読まれないかというと、それは日本人作家による日本語作品よりも、翻訳作品の日本語の方がしっかりしているからだ。日本人作家による作品の売れているものの多くが、実はしっかりしていない日本語で書かれている。そうして、しっかりした日本語を読み取る力のない読者が多すぎるために、しっかりしていない日本語の作品がどんどん読まれる。そこで、亀山訳『カラマーゾフの兄弟』を読みやすいなどといってしまう読者は、亀山郁夫のしっかりしていない日本語に惹かれるわけだ、と。乱暴ですけれど、的外れではないと私は思います。

いや、実際にどうなんでしょうか？　亀山訳で初めて『カラマーゾフの兄弟』を読んだひとにも、アリョーシャの「あなたじゃない」がイワンに図星だったというふうに受け取られるものなんでしょうか？　気にかかるところです。そんなことをいっても、お前自身が亀山訳全編を読んでいないじゃないか、という声が聞こえてきそうですが、私は絶対にそれをしません。

2

さて、いらだちと嫌悪感に包まれたこのひと月あまりですが、この一連の文章を書いてきて、ひとつよかったと思うことがあります。『カラマーゾフの兄弟』のほんの一部分についてとはいえ、私がかなりしゃべることのできたことですね。こんな機会でもなければ・こんな馬鹿な読みかたの見本さえなければ、私がこの作品についてここまであれこれしゃべることはなかっただろうと思うんです。もっとも、これは未読のひとを対象にしての「読書案内」にはなっていませんけれど。しかし、既読のひとに再度『カラマーゾフの兄弟』について考えてもらうきっかけにはなりうるのじゃないかと思うんですね。再読の薦めにはなっているのじゃないか、と。

ともあれ、私はまだしばらく『カラマーゾフの兄弟』を自分がどんなふうに読んできたかということをしゃべりつづけます。そうすると、お前の読み取りだって、亀山郁夫と同じように誤読の累積じゃないか、呆れてしまうよ、という声の出てくることももちろん予想できます。しかし、だからこそ、私はとにかく自分の読み取りを話さなくてはならないんです。単に亀山郁夫を批判するだけでなく、私の手の内をすっかり明かしておかなくてはならない、私の読書の限界を示しておかなくてはならない——そうでないと、亀山批判にもならない——んです。また、それでこそ「読書案内」あるいは「再読の薦め」になるはずだと私は信じます。

それとともに、私はこの機会に『カラマーゾフの兄弟』以外の作品の「案内」までしてもいいんじゃないか、と思います。なにしろ時間はたっぷりあります。そんなふうで、私はここでまた脱線して、いくらか余計なことをしゃべります。「大審問官」へとつながる話のなかで、イワンがこんなふうにいうんでした。

「俺は、やがて鹿がライオンのわきに寝そべるようになる日や、斬り殺された人間が起き上がって、自分を殺したやつと抱擁するところを、この目で見たいんだよ。何のためにすべてがこんなふうになっていたかを、突然みんながさとるとき、俺はその場に居合わせたい。地上のあらゆる宗教はこの願望の上に創造されているんだし、俺もそれを信じている。しかし、それにしても子供たちはどうなるんだ。そのときになって俺はあの子供たちをどうしてやればいいんだ？　これは俺には解決できない問題だよ。百遍だって俺はくりかえして言うけれど、問題はたくさんあるのに、子供だけを例にとったのは、俺の言わねばならぬことが、そこに反駁できぬほど明白に示されているからなんだ。そうじゃないか、たとえ苦しみによって永遠の調和を買うために、すべてのひとが苦しまなければならぬとしても、その場合、子供にいったい何の関係があるんだい、ぜひ教えてもらいたいね。何のために子供たちまで苦しまなけりゃならないのか、何のために子供たちが苦しみによって調和を買う必要があるのか、まるきりわからんよ。いったい何のために子供たちまで材料にされて、だれかの未来の調和のためにわが身を肥料にしたんだろう？　人間同士の罪の連帯性ってことは、俺にもわかるし、報復の連帯性もわかる。しかし、罪の連帯性なんぞ、子供にあるものか」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

そこで、私はこの部分の影響を直接に大きく受けたべつの作家のある作品を引用します。

ある幼い子どもが病気によってひどく苦しんで死ぬんですね。しかも、その苦しみは長くつづきました。なぜかというと、この少年はこの病気に対抗するワクチンを注射されていたからです。ワクチンがある一定の効力を発揮してしまったために、本来もっと早く死ぬはずだった彼の存命時間が引き延ばされたんです。ということは、それに伴う苦しみもまた引き延ばされたんですね。しかも、結果として、このワクチンは彼を助けませんでした。この少年を助けようとしていたひとたちは、自分たちがよかれと思ってやったことが、彼の苦しみを引き延ばすことにしかならなかったことに絶望します。

ずっと漆喰の壁に沿って、光線は薔薇色から黄色に変っていった。窓ガラスの向うには、炎熱の朝がはためきはじめていた。グランが、また来てみるといいながら帰っていったのも、誰も聞いたか聞かないくらいであった。みんなじっと待っていた。少年は相変らず目を閉じたまま、少し静まった様子であった。まるで鳥の爪のようになった手は、静かに寝台の両側をかき撫でていた。その手がもとへもどり、膝のあたりの毛布をかきむしったと思うと、突然、少年は足を折曲げ、両腿を腹のそばまで引きつけ、そして動かなくなってしまった。彼はそこではじめて目を開き、目の前にいたリウーの姿を見つめた。今はもう灰色の粘土に凝固してしまったその顔のくぼみのなかで、口が開いたかと思うと、ほとんど直ちに、単一の持続的な悲鳴――ほとんど呼吸による抑揚さえ伴わず、突如、単調な不協和な抗議で部屋じゅうを満たし、そしてまるで、ありとあらゆる人間から同時に発せられたかと思われるほど非人間的な悲鳴――が、その口からほとばしり出た。リウーは歯を食いしばり、タルーは顔をそむけた。ランベールはカステルのそば近く寝台に進み寄り、カステルは膝に広げたままだった本を閉じた。パヌルーは、病に汚染され、このあらゆる年齢に満たされた、あどけない口を見つめた。そして、彼がぱったりひざまずいたかと思うと、やや圧し殺したような声、しかし絶えようともせぬ無名の悲鳴の陰にはっきり聞きとれる声で、こう唱えるのを一同自然なこととして聞いた――「神よ、この子を救いたまえ」

しかし少年は叫びつづけ、そしてその周囲では、患者たちが興奮しはじめた。さっきから部屋の向う端で叫びをやめないでいた患者は、そのうめきのリズムを早め、ついにはこれまたまったくの悲鳴を発するに至り、その間、ほかのものはますます激しくうめきはじめた。潮のようなすすり泣きが室内に打寄せつつ、パヌルーの祈り声をおおい、そしてリウーは、寝台の横木にすがりついたまま、疲労と嫌悪に酔ったようになって目を閉じた。

ふたたび目をあけると、タルーがいた。

「とてもこれ以上、僕はいられない」と、リウーはいった。「もう聞いてられないんだ」

ところが、突然、ほかの患者たちが沈黙した。リウーはそのとき、少年の悲鳴が弱まっていたこと、それがさらに弱まり、そして今途絶えたことに気づいたのであった。彼の周囲では、うめき声がまた始まった――しかし忍びやかにあたかも今しも終りを告げたその戦いのはるかな反響のように。なぜなら、戦いは終りを告げたのである。カステルは寝台の向う側にまわり、そしてもう終ったといった。口をあけたまま、しかも声はなく、少年は、乱れた布団のくぼみに急にちっちゃくなり、涙の名残りをとどめて横たわっていた。

……（中略）……

しかしリウーはすでに部屋を去りかけ、しかも恐ろしく急ぎ足で、ひどく気色ばんでいたので、彼がパヌルーを追い越していこうとしていたとき、パヌルーは腕を伸ばして引きとめようとしたほどだった。

「まあ、ちょっと、リウーさん」と、彼はいった。

同じ激した身ぶりで、リウーは振向くと、激しくたたきつけるようにいった――

「まったく、あの子だけは、少なくとも罪のない者でした。あなたもそれはご存じのはずです！」

それからまた顔をそむけると、彼はパヌルーより先に部屋の出口を通り抜けて、校庭の奥のほうへ行った。彼は埃だらけの小さな木立の間にある一つのベンチに腰を下ろし、すでに目に流れそうになっている汗をふいた。彼は心臓もはりさけんばかりにしめつける激しいしこりを、今こそ解きほぐすために、まだもっとわめきたい気がした。暑さが、無花果の枝々の間に、徐々に降り注いできた。朝の青空はすぐにもう白っぽいくもりにおおわれてきて、それが大気を一層息苦しくした。リウーはベンチの上でぐったり身を休めた。じっと木の枝や空をながめながら、徐々に呼吸を取りもどし、少しずつ疲労をほぐしていった。

「どうして私にあんな怒ったようないい方をなすったのです」と、うしろで声がした。「私だって、あの光景は見るに忍びなかったのですよ」

リウーはパヌルーのほうを振向いた。

「ほんとにそうでした」と彼はいった。「悪く思わないでください。なにしろ、疲れたときは気違い同然になってますからね。それに、この町では、僕はもう憤りの気持しか感じられなくなるときがよくあるんです」

「それはわかります」パヌルーはつぶやいた。「まったく憤りたくなるようなことです。しかし、それはつまり、それがわれわれの尺度を越えたことだからです。しかし、おそらくわれわれは、自分たちに理解できないことを愛さねばならないのです」

リウーはいきなり上体をぐっと伸ばした。彼はそのとき身のうちに感じえたかぎりの力と情熱をこめて、じっとパヌルーの顔を見つめ、そして頭を振った。

「そんなことはありません」と、彼はいった。「僕は愛というものをもっと違ったふうに考えています。そうして、子供たちが責めさいなまれるように作られたこんな世界を愛することなどは、死んでも肯んじません」

（カミュ『ペスト』　宮崎嶺雄訳　新潮文庫）

リウーは医師です。そうして、パヌルーは神父。そうして、この後――べつの場面、教会での説教において――でパヌルーはこういうことをいうんですね。

たしかに、善と悪というものはあり、また一般に、両者を区別するところのものは容易に説明される。しかし、悪なるものの内部の世界で、困難が始まるのである。たとえば、一見必要な悪と、一見無用な悪とがある。地獄に落とされたドン・ジュアンと、子供の死とがある。なぜなら、遊蕩児が雷電の一撃を受けることは正当であるとしても、子供が苦しむということは納得できないのである。そして、じつに、この地上における何ものも、子供の苦しみと、この苦しみにまつわるむごたらしさ、またこれに見出すべき理由というものほど、重要なものはないのである。

（同）

私はまた後で、こうした幼い子どもの苦しみについて触れた、これまたべつの作家の作品を引用することになりますが、いまはこれくらいにしておきます。

それから、私はまたこういう文章も紹介しておきましょう。

さて、今こそ私の信条を告白して、はっきり確認しておくべきときであるが、この疑いもなくニーチェの「生」のロマン主義を源泉とする唯美主義は、私がものを書き始めた頃大流行であったが、私は、これとほんの僅かでも関わりを持ったことは、ただの一度もない。

……（中略）……

確かに、普通なら軽蔑するにはあまり向かない年頃に、私は、自分の周囲をとりまいていたルネサンス＝ニーチェ主義を軽蔑していた。それは、ニーチェを子供っぽく誤解して模倣しているように私には思えたのである。彼らはニーチェの言葉だけを捉え、それを字句どおりに受け取っていた。彼らが体験したのは、ニーチェその人ではなく、ニーチェ的自己否定のあらまほしき姿であり、この姿を、彼らは機械的に作り上げ

たのである。彼らは、ニーチェが自ら称した「悖徳者」という名前を単純に信じこんだ。このプロテスタント牧師の息子がかつてないほどに鋭敏な倫理家であったこと、倫理に憑かれた人、パスカルの兄弟であったことに気がつかなかったのである。だが、彼らはそもそも何に気がついたというのだろう！　彼らは、ニーチェの本質が誤解の機会を与えるところは何ひとつ逃さず、すべて誤解した。ニーチェのエロスのなかにあったロマン主義的イロニーの要素、――これを感受する器官などは、彼らにはそのかけらもなかった。そして、彼らがニーチェの哲学的思考に感激して生み出したものといえば、全く興ざめな美の饗宴であり、高校生的な色情幻想に満ちた小説であり、何ひとつ欠落のない悪徳のカタログであった。

（トーマス・マン『非政治的人間の考察』　青木順三訳　新潮社）

3

さて、私が亀山郁夫の「解題」をぱらぱらと読んでいて、「ええっ」と声をあげてしまった――やっとこれについてしゃべることになります――のは、「大審問官」についてのこういう文章でした。

問題は、その「キス」の意味するところとは何か、その「キス」をどのような意味として大審問官は受けとめたのか、という点である。「彼」はその「キス」で、キリストみずからの絶大な力を、表明しようとしていたのか。大審問官の驕りにはいずれ裁きが下る、歴史がいずれ審判を下すという、ある余裕に満ちた預言の代替行為だったのだろうか。それとも、歴史は動かせない、だからあなたの好きなようになさるがよいという、承認と、ことによると「祝福」のキスだったのか。

（亀山郁夫「解題」）

大審問官の「受けとめた」ものを、こんなふうに受けとめるひとがいるなどとは、これまで想像したこともありませんでした。なんですか、この選択肢は？　しかも、これだけなんですか？　それで「ええっ」と声が出てしまったんですね。いや、本当にびっくりしました。

亀山郁夫はこうつづけます。

何よりも、この物語詩がイワンによる創作であるとの前提をふまえなくてはならない。言い換えるなら、これは無神論者イワンがみずからの世界観を補強する物語詩なのである。そうならば、イエスのキスの意味するところは、おのずから明らかだろう。それこそが、まさにポリフォニー的な読みということになる。

（同）

そして、アリョーシャのキスについては、こうです。

このキスは、たんなる「盗作」と軽々しく扱うわけにはいかない。なぜなら、キスの理解は、イワンとアリョーシャとでは百パーセント異なっていたはずだからである。イワンは、おそらく自分自身が「大審問官」のラストに託した意味を、そのキスに重ねようとしていた。つまり、キリストに擬せられたアリョーシャが自分の世界観を承認した、ととらえたにちがいない。しかしアリョーシャは、おそらくそれとは逆の意味を施していたにちがいない。

……（中略）……

かりにアリョーシャのキスが「承認」を意味し、イワンがそれを感じたとするなら、「大審問官」の最終的な結論はどのようなものになるのか。

「彼」すなわちイエス・キリストは、大審問官が行ってきた事業を承認する、という意味に変わる。つまりイエス・キリストは無力だという、イワンの認識そのものである。

（同）

私の反応はどうだったか？　私は、開いた口がふさがらない、といった状態になりましたよ。なんだこれは？　そう思いました。いやはや、まさかこんなふうに考えているひとがいるとは信じられませんでした。（数日後に、ようやく気がつきました。イワンのこの「物語詩」（原卓也訳では「叙事詩」）を最後までおとなしく黙って聞き、その後に「そのキスは、大審問官の事業を承認する、という意味なんですね？」と真面目に質問するかもしれない人物を私はひとりだけ知っていました――スメルジャコフ！）

――というわけで、私はなんと「大審問官」についてしゃべらなくてはならなくなったわけです。笑ってしまいますが、しかたがありません。なんでこんなことをいわなくてはならないのか、と真面目に思いますよ。しかし、誰もいわないのだから、しかたがありません。とはいえ、かつて『カラマーゾフの兄弟』に深く感動したことのあるひとなら、私が前々回（＝「その一」）で、実はしきりにこの「大審問官」とその周辺のイワンの思想について触れていたのがわかっていただろうとも思います。

彼は以前からある思想を抱いており、その思想からは、理論上、この殺人の肯定も可能――「すべては許される」――いや、実は彼にもそこまでは不明だっただろうと思いますが――なんです。

同じことですが、これをアリョーシャの立場からいい換えてもみました。

「あなたは、あなたの思想から導き出せる可能性のなかから、すべては許される、したがって、父を殺すことがあってもいい、それは許される、と考えていたけれども、しかし、それを本当に信じていたのではなかったし、事実、それを実行してもいない」

それぞれに私はある留保をつけました。傍線部「いや、実は彼にもそこまでは不明だっただろうと思いますが」と「しかし、それを本当に信じていたのではなかった」です。さらに、こんなふうにもいいました。

こうして、イワンは再び強引に自らの「カラマーゾフ的な力」に頼むわけです。しかし、彼にはわかっています。アリョーシャにはなにもかもわかっている、ということが。だから、もし自分をいまの状況から救い出してくれる存在があるとすれば、それはアリョーシャだけだ、ということがわかっています。これをさらにいえば、ある意味では、こうなります。もし、自分がここで素直にアリョーシャに助けを求めることができたら、どんなにいいだろう。自分をさらけ出して、身を投げ出すことができたらどんなにいいだろう。しかし、彼は傲然とその望みを断ち切ります。誰にも頭を下げず、自分の力だけでなんとかやってやる、ということです。だから、彼はアリョーシャに「絶交」をいい渡しました。しかし、いいですか、それは、彼イワンが、アリョーシャを完全に信頼しているからこその「絶交」なんですよ。アリョーシャにすがってしまえば、自分が救われてしまうことを知っているからこそ、彼は「絶交」を選択するんです。

こちらでも傍線部に注目してください。私は、これがイワン・カラマーゾフという青年（数えで二十三歳）だと思っているんです。

もしかすると、がっかりされた方があるかもしれません。それは、イワンを過小評価しているよ、それだと、『カラマーゾフの兄弟』の全体まで小さく思われてくるよ、という方があるでしょう。イワンがもっと悪魔的な異形の人物であった方がよかったと考えている読者ですね。そういう読みかたをするひとの

あるのを、私は承知しています。しかし、私はそういう読みかたから、イワンをもっとこちら側へと引き戻したいんですね。イワンをもっとふつうの人間として考えたいんです。

私はこう考えているんです。作家は、自分の書いている作品で、登場人物にある思想を語らせることがあるでしょうが（私はここで「登場人物」と「思想」のことだけをいいます）、彼のすべきことは、まずその登場人物を読者の前に存在させることです。作家がどうにかこうにか、その登場人物を描き、読者の前に存在させることに成功したとします。ところが、出来上がったその登場人物では、当初作家の考えていた思想を語るには十分でない、とてもその登場人物がその思想を語るとは思えない、というふうになってしまったとき、作家は、その登場人物にその思想を語らせてはいけません。まず、登場人物です。思想はその次になります。つまり、登場人物は思想の発現する「場」なんですね。その「場」なしには、思想もなにも生じることがありません。作家はなによりもまず「場」を存在させなくてはならないんですよ。そういうことです。むろん、作家は、その思想に合わせた造形をその登場人物に与えようとはするんでしょうけれど……。

何がいいたいのかというと、こうです。イワンの思想は、必ずイワン自身の生身の身体のうえに成り立っていなくてはなりません。いいですか、イワンが（存在して）いて、そのうえで彼の思想が描かれるというのでなければなりません。イワンが先です。彼の思想――ということは「大審問官」も含まれます――はその次です。

私は、アリョーシャのこのことばをそのまま受け取っていいだろうと思っているんです。

「つまり、兄さんもやっぱり、世間の二十三歳の青年とそっくり同じような青年だっていうことですよ。やっぱり若くて、ういういしくて、溌剌とした愛すべき坊やなんだ、おまけに嘴の黄色い雛っ子でね！」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

「大審問官」の直前における、アリョーシャを前にしてのイワンの上機嫌が、実はイワン本人を、他のどの場面よりよく表現しているだろうと思うんです。

私はイワンの「無神論」が、彼の生身の身体のうえに、どのように成立していたかを問題にするんです。

結論からいえば、こうなります。イワンは神を信じているんですよ。彼の「無神論」の基盤は、彼の信仰にあります。彼は神を信じていて、「神の創ったこの世界、神の世界なるもの」に大きい信頼と期待を寄せているんです。ところが、現実には、「神の創ったこの世界、神の世界なるもの」には、イワンが絶対に同意できないような矛盾点があります。だから、彼は神をなじることになるんですよ。彼は裏切られたというふうに感じるんです。神が……してくれない、……もしてくれない、……もしてくれない、そんなことってあるか、と彼は主張してやまないわけです。これが彼の生身の身体のうえに成立していた「無神論」なんだ、と私は考えているんです。

「じゃ、何からはじめるか、言ってくれよ。お前が注文するんだ。神の話からか？　神は存在するか、というところからかい？」

「何でも好きなものから、はじめてください。《反対側》からでもかまいませんよ。だって、兄さんは昨日お父さんのところで、神はいないと断言したんですから」アリョーシャは探るように兄を眺めた。

「俺は昨日、親父のところで食事をしながら、そう言ってお前をわざとからかったんだけど、お前の目がきらきら燃えたのがわかったよ。でも今はお前と話す気は十分あるんだし、とてもまじめに言ってるんだ。俺はお前と親しくなりたいんだよ、アリョーシャ。俺には友達がいないから、試してみたいのさ。だって考えてもみろよ、ひょっとすると俺だって神を認めているかもしれないんだぜ」イワンは笑いだした。「お前にとっちゃ、思いもかけぬ話だろう、え？」

（同）

これがイワンの本音ですよ。この本音が、アリョーシャ以外の誰の前にも出てくることはありません。これは、アリョーシャがそういう本音を引き出すことのできる人間であるということでもあります。イワンにとってのアリョーシャは特別です。だから、後に同じふたりの会話のなかに「あなたじゃない」が出てきてもおかしくないわけです。

「ところが、どうだい、結局のところ、俺はこの神の世界を認めないんだ。それが存在することは知っているものの、まったく許せないんだ。俺が認めないのは神じゃないんだよ、そこのところを理解してくれ。俺は神の創った世界、神の世界なるものを認めないのだし、認めることに同意できないのだ。断わっておくけれど、俺は赤児のように信じきっているんだよ――苦しみなんてものは、そのうち癒えて薄れてゆくだろうし、人間の矛盾の腹立たしい喜劇だっていずれは、みじめな幻影として、あるいはまた、原子みたいにちっぽけで無力な人間のユークリッド的頭脳のでっちあげた醜悪な産物として、消えてゆくことだろう。そして、結局、永遠の調和の瞬間には、何かこの上なく貴重なことが生じ、現われるにちがいない。しかもそれは、あらゆる人の心に十分行きわたり、あらゆる怒りを鎮め、人間のすべての悪業や、人間によって流されたいっさいの血を償うに足りるくらい、つまり、人間界に起ったすべてのことを赦しうるばかりか、正当化さえなしうるに足りるくらい、貴重なことであるはずだ。しかし、たとえそれらすべてが訪れ、実現するとしても、やはり俺はそんなものを認めないし、認めたくもないね！　たとえ二本の平行線がやがて交わり、俺自身がそれを見たとしても、俺がこの目でたしかに見て、交わったよと言うとしても、やはり俺は認めないよ。これが俺の本質なんだ、アリョーシャ、俺のテーゼだよ。俺はまじめに話したんだぜ。俺は、これ以上愚劣な切りだし方はないといった感じで、お前との話をはじめたけれど、結局は俺の告白になっちまったな。それというのも、お前に必要なのはそれだけだからさ。お前に必要なのは神についての話じゃなく、お前の愛する兄が何によって生きているかを知ることだけなんだよ。だから俺は話したのさ」

（同）

イワンは、実はとても「神の創ったこの世界、神の世界なるもの」を認めたいんですよ。でも（だからこそ）、どうしてもそれを「認めないのだし、認めることに同意できない」んです。

「兄さんはなぜ《この世界を認めないか》を、僕に説明してくれる？」

アリョーシャはつぶやいた。

「もちろん、説明するとも。秘密じゃないし、そのために話をしてきたんだから。俺の望みはべつにお前を堕落させることじゃないし、お前を基盤から引きずりおろすことでもない。ことによると、お前の力をかりて俺自身を治療したいと思ってるかもしれないんだしな」ふいにイワンは、まるきり幼いおとなしい少年のように、にっこりした。アリョーシャはこれまで一度として、兄のそんな笑顔を見たことがなかった。

（同）

これがイワンですよ。しかし、多くのひとが――一時期の私も例外ではありません――この場面以外の、特にもっと後のイワンの印象に圧倒されるために、このことをすっかり忘れてしまうことになるんです。でも、おぼえておいてください。イワンは「まるきり幼いおとなしい少年のように、にっこり」することのできる若者なんです。

そもそも彼は小説のはじめにこんなふうに紹介されていました。

もっとも、ごく最近になって、彼はずっと広範囲な読者層から、ふいに一種特別な関心をよせられる機会にたまたま恵まれたため、このときにきわめて多くの人たちが一度に彼に目をとめ、おぼえたのである。それはかなり興味のある出来事だった。すでに大学を卒業したあと、例の自分の二千ルーブルで外国に行ってくる準備をすすめるかたわら、彼は、専門家でない人たちの注意まで集めた、そして何よりも、彼は理科を出たのだから明らかにまったく門外漢と思われる問題に関する、風変わりなある論文を大新聞の一つに発表したのである。論文は当時いたるところで持ちあがっていた教会裁判をめぐる問題について書かれたものだった。この問題に関してすでに出されているいくつかの見解を分析しながら、彼は自分の個人的見解をも表明してみせた。肝心なのはその論調と、目をみはるばかりの結論の意外性だった。一方では、教会派の大多数がこの論文の筆者をはっきり味方とみなした。ところが、彼らとならんで今度はだしぬけに、市民権派ばかりでなく、無神論者そのものまで、それぞれの立場から拍手を送りはじめたのである。結局、ごく一部の明敏な人たちが、この論文全体が不遜な悪ふざけと嘲笑にすぎぬと結論を下したのだった。わたしがこの出来事に言及するのは、教会裁判をめぐって持ちあがった問題に概して関心をよせていた、この町の郊外にある有名な修道院にも、この論文がさっそく広まり、すっかり面くらった思いをひき起こしたからである。筆者の名前がわかると、それがこの町の出身者で、《ほかならぬあのフョードル》の息子であるということにも、興味がよせられた。まさにその矢先に、当の筆者がわれわれの前にふいに姿をあらわしたのである。

（同）

（傍線は私・木下による）

どうですか？　それで、ゾシマ長老のところで、これに関する話題が出てきます。その後でミウーソフが最近のイワンの発言についてしゃべり、長老がイワンにたずねます。

「ほんとうにあなたは、不死という信仰が人間から枯渇した場合の結果について、そういう信念を持っておられるのですか？」ふいに長老がイワンにたずねた。

「ええ、僕はそう主張してきました。不死がなければ、善もないのです」

「もしそう信じておられるのなら、あなたはこの上なく幸せか、さもなければ非常に不幸なお人ですの！」

「なぜ不幸なのですか？」イワンが微笑した。

「なぜなら、あなたは十中八、九まで、ご自分の不死も、さらには教会や教会の問題についてご自分の書かれたものさえも、信じておられぬらしいからです」

「ことによると、あなたのおっしゃるとおりかもしれません！　しかし、それでも僕はまるきり冗談を言ったわけでもないのです……」突然イワンは異様な告白をしたが、みるみる赤くなった。

「まるきり冗談を言われたわけでもない、それは本当です。この思想はまだあなたの心の中で解決されておらないので、心を苦しめるのです。しかし、受難者も絶望に苦しむかに見えながら、ときにはその絶望によって憂さを晴らすのを好むものですからの。今のところあなたも、自分の弁証法を自分で信じられず、心に痛みをいだいてひそかにそれを嘲笑しながら、絶望のあまり、雑誌の論文や俗世の議論などで憂さを晴らしておられるのだ……この問題があなたの内部でまだ解決されていないため、そこにあなたの悲しみもあるわけです。なぜなら、それはしつこく解決を要求しますからの……」

「ですが、この問題が僕の内部で解決することがありうるでしょうか？　肯定的なほうに解決されることが？」なおも説明しがたい微笑をうかべて長老を見つめながら、イワンは異様な質問をつづけた。

「肯定的なほうに解決されぬとしたら、否定的なほうにも決して解決さ

れませぬ。あなたの心のこういう特質はご自分でも承知しておられるはずです。そして、そこにこそあなたの心の苦しみのすべてがあるのです。ですが、こういう悩みを苦しむことのできる崇高な心を授けたもうた造物主に感謝なさりませ。『高きを思い、高きを求めよ、われらの住み家は天上にあればこそ』です。ねがわくば、あなたがまだこの地上にいる間に、心の解決を得られますように。そして神があなたの道を祝福なさいますよう！」

長老は片手をあげ、自席からイワンに十字を切ろうとしかけた。だが、相手はふいに椅子から立って、長老に歩みより、祝福を受けると、その手に接吻して、無言のまま自席に戻った。顔つきはまじめな、毅然としたものだった。

（同）

（傍線は私・木下による）

これがイワンです。彼はふざけていたわけじゃありません。この若者は、ごく少数の、彼以上に考え、彼の考えていることを理解することができ、彼の抱えている問題に精通している相手であって、しかも、彼の問題を「肯定的なほうに」解決する立場の相手には、正直で誠実な敬意を表わすことができます。そうでない大多数の相手に向かっては、彼は自分の思想の、自他に対する嘲弄的な部分を取り出して、偽悪的・断定的にしゃべります。ここで、では、アリョーシャがどういう位置にいるかといえば、おそらく、彼はイワンにとって、単に「彼以上に考えている相手・彼の考えていることを理解することのできる相手・彼の抱えている問題に精通している相手」としてのゾシマ長老につづくはずの人間であって、イワンの理論のいちいちを長老ほどに理解できるのではなくても、しかし、現実に彼の問題を「肯定的なほうに」解決する形での生をすでに実践している――それも、何も考えていないから・愚かだからというのとは正反対の意味での実践なんですよ。アリョーシャは非常に賢くて、もしかすると、イワンとまったく同じ苦悩を抱えていたかもしれないにもかかわらず、たまたまそうならずにすんでいる・すれすれのところにいるんです――人間なんですね。だから、アリョーシャはイワンにとっての希望です。アリョーシャゆえに、イワンも自分の問題を「肯定的なほうに」解決することができるかもしれないんです。

「ことによると、お前の力をかりて俺自身を治療したいと思ってるかもしれないんだしな」ふいにイワンは、まるきり幼いおとなしい少年のように、にっこりした。

（同）

それで、この「肯定的なほうに」ということをもっとよく考えるために、「否定的なほうに」ということを想像してみてほしいんです。こういう存在を仮定してみてほしいんです。つまり、問題を「否定的なほうに」解決したゾシマ長老――という存在です。

ここで、私はまたトーマス・マンを引用してみます。

「ぼくは発見した」と彼は言った、「あれは在ってはならないのだ」

「何が、アードリアーン、何が在ってはならないのだ？」

「善であり高貴であるものだ」と彼は答えた、「人が人間的なるものと呼ぶものは、善であり高貴であるにもかかわらず、在ってはならないのだ。そのために人類が戦い、そのために圧政の城を襲撃し、そして遂に戦いに勝ったものたちが歓声を挙げながら告知したもの、それはあってはならないのだ。それは撤回されるだろう。ぼくがそれを撤回しよう」

「ぼくには、アードリアーン、君の言うことがよくわからない。君は何を撤回しようというのだ？」

「第九交響曲」と彼は答えた。

（トーマス・マン『ファウストゥス博士』円子修平訳　新潮社）

この『ファウストゥス博士』を私はこれまでたびたび引用してきましたが、この部分は初めてです。説明が必要だと思いますが、簡単にします。これは副題が「一友人によって物語られた　ドイツの作曲家アードリアーン・レーヴァーキューンの生涯」となっています。主人公の作曲家は、悪魔と契約して創作のインスピレーションを得ることになる――彼はイワン同様に悪魔と会話することになります。むろん、これはゲーテの『ファウスト』のみならず、『カラマーゾフの兄弟』を踏まえているわけです――んですが、その契約には、こういう条項がありました。彼は「愛してはならない」んです。そうして、彼が愛を注ぐ相手は次々に死んでいくんですが、最後に彼が愛したのは幼い子どもだったんですね。恐ろしく苦しんで、この子どもは死にます。

次に引用する場面で、この子どもの名まえが「ネポムク」＝「エヒョー」であることだけをいっておきます。

それでも彼は、診断の確定のために必要であったし、それが患者の苦痛をやわらげる唯一の手段でもあったので、脊髄穿刺は自分でやることを引き受けた。シュヴァイゲシュティル夫人は蒼ざめてはいたが、気丈に、そしていつものとおり人間的なものに忠実に、すすり泣いている子供の身体を、ベッドの中で、顎と膝とがほとんど触れ合うように折り曲げて押えた、キュルビスが間隔のあいた脊髄骨の間から脊髄管に針を刺した、そして脊髄管から液体が滴り出てきた。ほとんど即座に無慙な頭痛がやわらいだ。今度頭痛が現われたら、と医師は言った――そして彼は数時間後には頭痛が再発することを知っていた、脳室液の抽出による圧迫の除去はそれぐらいしかもたないからである――、不可欠な氷嚢の他にクロラール剤を与えてください、彼はその処方を書き、それは郡役所のある市から取り寄せられた。

穿刺のあとぐったりして昏々と眠り続けていたネポムクが、再び嘔吐、その小さな身体の全身痙攣、頭蓋の割れるような頭痛によって目覚めると、またしても悲痛きわまる哀泣と劈くような悲鳴が始まった、――それは典型的な『脳水腫の悲鳴』であった、この悲鳴はかろうじて医師だけが、これを典型的なものとして受け取るために耐えうるのである。典型的なものは人を冷静にする、個人的なものとして理解されるものだけが度を失わせるのである。これが科学の冷静である。科学はその片田舎の弟子が、最初に処方した臭素剤とクロラール剤に代えて、たちまちモルヒネを使うのを妨げなかったが、モルヒネは多少は効果をあげたのである。彼は搾木にかけられている子供を不憫に思ったためばかりではなく、一家の人々のためをも考えて――わたしは特にその中の一人を念頭において言っている――モルヒネを使う決心をしたのであろう。脊髄液の抽出は二十四時間ごとでなければ行なってはならなかった、そして苦痛が軽減されるのはそのうちの二時間にすぎなかった。一人の子供の、震える手を合わせて吃りながら「エヒョーはかわいらしくするよ、エヒョーはかわいらしくするよ！」と叫ぶこの子供の悲鳴をあげて抵抗する拷問の二十四時間。つけ加えて言うが、ネポムクを見ていた人々にとっては付随兆候がおそらく最も恐ろしいものであった。顎部硬直とともに現われる眼筋麻痺によって説明されるものであるが、天上の光をたたえていた彼の眼が次第に斜視になって光を失って来たのである。そのためにあの甘美な顔が思いもうけぬぞっとするほど醜悪な顔に変り、間もなく始まった歯ぎしりと相俟って、悪魔にとり憑かれたような印象を与えた。

（同）

その後で、主人公が先ほど引用した「ぼくがそれを撤回しよう」をいうんですね。「第九交響曲」はもちろんベートーヴェンのそれです。そうして、彼は「ファウスト・カンタータ」という、最後の作品を作曲します。

終楽章は純粋に管弦楽的である、これは交響的アダージョ楽章で、地

獄のガロップのあとで力強く始まる歓きの合唱が次第にこれに移行する、――これはいわば裏返しにされた『歓びに寄せる歌』、交響曲のヴォーカルの歓呼へのあの移行の等質的陰画である、これは撤回である……

わたしのかわいそうな偉大な友よ！　彼の遺作、他の多くの破滅を予言的に先取りしている彼の破滅の作品を読みながら、幾度わたしは、彼が子供の死に際して言ったあの痛ましい言葉、それは在ってはならない、善、歓び、希望、それは在ってはならない、それは撤回されるだろう、ぼくがそれを撤回しよう！　という言葉を思い出したことであろう。この「ああ、それは在ってはならない」は、ほとんど音楽的な指示や記号のように、『ファウストゥス博士の嘆き』の合唱楽章、器楽楽章を支配している、それはこの『悲しみに寄せる歌』のあらゆる拍節と抑揚の中に含まれている！　これは疑いもなくベートーヴェンの『第九』を念頭において、言葉の最も暗鬱な意味において、その対蹠物として書かれたのである。

（同）

どうでしょう？「問題を「否定的なほうに」解決したゾシマ長老」から、いまの引用へと私が連想したのがおわかりいただけましたか？「等質的陰画」、「撤回」、「それは在ってはならない」、「言葉の最も暗鬱な意味において、その対蹠物として」ということばをよく噛みしめてほしいんです。

さらにまた私は大江健三郎を引用しましょう。

――いや、これを話さなければ、なにも話さないことだから、とギー兄さんは固執した。自分の見た夢は、Paradiso そのものの夢じゃなくてね、テン窪の人造湖の夢なんだよ。水がいっぱいにたまっていて、そこに小さな舟を浮かべてね。ボートならこの前から、実際に準備してあるんだ……　夢で小舟に乗っていて、その自分の合図で、堰堤が爆破される。川下の反対派が惧れたとおりにね。そこで真黒い水ともども、自分が鉄砲水になって突き出す。その黒ぐろとしてまっすぐな線が、つまり自分の生涯の実体でね、世界じゅうのあらゆる人びとへの批評なんだよ。愛とはまさに逆の……

（大江健三郎『懐かしい年への手紙』講談社文芸文庫）

いかがでしょう？　トーマス・マンの文章と合わせて、何度も何度も、この逆転・反転・裏返しのイメージがわかるまで読み返してみてほしいんです。

私は大審問官そのひとを「問題を「否定的なほうに」解決したゾシマ長老」のように考えているんです。これは、将来的に自分がそうなるかもしれない、と考えているイワン・カラマーゾフですね。だから、私は亀山郁夫の「イワンは、おそらく自分自身が「大審問官」のラストに託した意味を、そのキスに重ねようとしていた。」には同意します。でも、まったく逆の意味でなんですけれど。

4

「あのね、アリョーシャ、笑わないでくれよ、俺はいつだったか、そう一年くらい前に、叙事詩を一つ作ったんだよ。もし、あと十分くらい付き合ってくれるんなら、そいつを話したいんだけどな」

「兄さんが叙事詩を書いたんですか？」

「いや、書いたわけじゃないよ」イワンは笑いだした。「それに俺は生まれてこの方、一度だって二行の詩さえ作ったことはないからな。でも、この叙事詩は頭の中で考えついて、おぼえてしまったんだ。熱心に考えたもんさ。お前が最初の読者、つまり聞き手になるわけだ。実際、作者としてはたとえたった一人の聞き手でも、失う法はないものな」イワン

は苦笑した。「話そうか、どうしようか？」

「大いに聞きたいですね」アリョーシャが言った。

「俺の叙事詩は『大審問官』という表題でね、下らぬ作品だけど、お前にはぜひきかせたいんだよ」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

こうしてイワンは話しだします。彼が話すのは、相手がアリョーシャだからですよ。イワンが話したいくせに、自作を「下らぬ」といったり、「話そうか、どうしようか？」などというのを、読者はほほえましく感じるべきなんです。イワンが話すのは、アリョーシャに希望を見出そうとしているからですし、信頼も寄せているからです。そうして、これは当の大審問官が相手に寄せているのと同じなんですよ。また、私はこうもいいましょう。大審問官は、先に私がイワンについていったように、「ごく少数の、彼以上に考え、彼の考えていることを理解することができ、彼の抱えている問題に精通している相手であって、しかも、彼の問題を「肯定的なほうに」解決する立場の相手には、正直で誠実な敬意を表わすことができます。そうでない大多数の相手に向かっては、彼は自分の思想の、自他に対する嘲弄的な部分を取り出して、偽悪的・断定的に」接する・扱うことになるでしょう。

早々に私の読み取り・結論をいいますよ。大審問官は作者イワン・カラマーゾフ自身の投影でありますが、彼は神を信じています。それで、「神の創ったこの世界、神の世界なるもの」を認めたいんですよ。でも（だからこそ）、どうしてもそれを「認めないのだし、認めることに同意できない」んです。それでも、自分の問題を「肯定的なほうに」解決したいと思っているんです。彼は相手を前に告白します。その後での、彼に寄せた相手のキスは何を意味するか？　私はこう考えています。それは、彼の「苦しみ」に対するキスなんですよ。私はこれを二十五年前の初読時からそう読み取っていましたし、いま、いっそう深くそう信じています。これが私の手の内です。どうですか？　がっかりされましたか？

「ですが、この問題が僕の内部で解決することがありうるでしょうか？　肯定的なほうに解決されることが？」なおも説明しがたい微笑をうかべて長老を見つめながら、イワンは異様な質問をつづけた。

「肯定的なほうに解決されぬとしたら、否定的なほうにも決して解決されませぬ。あなたの心のこういう特質はご自分でも承知しておられるはずです。そして、そこにこそあなたの心の苦しみのすべてがあるのです。」

（同）

（傍線は私・木下による）

これを、大審問官とキリストとの問答――問答になっていませんが――にも当てはめてよいだろう、私は考えているんです。

で、亀山郁夫はどうか？

問題は、その「キス」の意味するところとは何か、その「キス」をどのような意味として大審問官は受けとめたのか、という点である。「彼」はその「キス」で、キリストみずからの絶大な力を、表明しようとしていたのか。大審問官の驕りにはいずれ裁きが下る、歴史がいずれ審判を下すという、ある余裕に満ちた預言の代替行為だったのだろうか。それとも、歴史は動かせない、だからあなたの好きなようになさるがよいという、承認と、ことによると「祝福」のキスだったのか。

（亀山郁夫「解題」）

「なんですか、この選択肢は？　しかも、これだけなんですか？」と、先に私はいいましたが、そのときにはまだ、亀山郁夫がわざとこんなことをいってい

るのか？　と思いもしていたんですよ。でも、わざとじゃないだろうといまは思うんです。本当にこのひとはこれしか考えていなかっただろうといまは思うんですね。

何よりも、この物語詩がイワンによる創作であるとの前提をふまえなくてはならない。言い換えるなら、これは無神論者イワンがみずからの世界観を補強する物語詩なのである。そうならば、イエスのキスの意味するところは、おのずから明らかだろう。それこそが、まさにポリフォニー的な読みということになる。

（同）

「それこそが、まさにポリフォニー的な読みということになる。」つまり、亀山郁夫は、「大審問官」における「イエスのキスの意味するところは」「承認と、ことによると「祝福」」だったといいたいんですよ。亀山郁夫の、いわば亀山式「ポリフォニー的な読み」によれば、です。亀山式――それが問題なんです。

方法論的な側面から見て、ドストエフスキーの小説の最大の特色と魅力は、その「ポリフォニー（多声）性」にある。

しかし、おなじ「ポリフォニー性」とはいっても、じつはいろいろな視点、いろいろな様態がある。登場人物のそれぞれが作者一人の思想を代弁することなく、一人ひとりが自在にいわば勝手に動き、発言し、作品のなかで自立した「多くの声」を形づくる――。

（同）

しかし、亀山郁夫はそのようにポリフォニーを説きながら、アリョーシャの「あなたじゃない」についてこういいもしていたんですね。

では、あえてこの歴然たる事実について、奇妙な文体で答えたアリョーシャの真意とは、どのようなものであったのだろうか。ここにふたたび露出するのが、心理的なドラマの層を超越する「自伝層」ないしは「象徴層」である。このセリフは、ドストエフスキーがわざわざアリョーシャに語らせている層ともいうべき部分であり、その意味では、根本のところで、登場人物の独立を保証すべきポリフォニーの原理にさからうセリフ、といえるかもしれない。

（同）

スメルジャコフについては、こうでした。

実行犯であるはずのスメルジャコフが、なぜここまで自信をもって、殺害の事実を否定できるのか。正確には、主犯でないとの認識を盾にとれるのか、なかなか理解できない部分である。そのセリフは、スメルジャコフよりもむしろ作者が言わせている言葉といっていいほど、バイアスがかかっていそうである。

（同）

アリョーシャの「あなたじゃない」も、スメルジャコフの否定も、私が前々回（＝「その一」）と前回（＝「その二」）で問題にした箇所じゃないですか。それぞれに私はドストエフスキーによるポリフォニーの原理は十全に生かされているという立場から、亀山郁夫の読解力を疑ったんでした。彼にはアリョーシャとスメルジャコフがどういう人物であるかということが全然読み取れていないので、「このセリフは、ドストエフスキーがわざわざアリョーシャに語らせている層ともいうべき部分」であり、「そのセリフは、スメルジャコフよりもむしろ作者が言わせている言葉といっていい」などと、とんちんかんなことをいうことになるんです。

つまり、亀山郁夫は「ポリフォニー云々といっておきながら、いざ自分に読み取れない部分に行き当たると、とたんに、ここではポリフォニーが作動して

いないといい出して、それを作者ドストエフスキーのせいにしてしまう・自分の読解力を棚に上げてしまうんですね。彼にはポリフォニーが何かということがわかっていません。もうこれがひどいと私は思いますが、もうひとつ引用しましょう。

> 繰り返すと、ここで「物語層」と呼ぶ最下層が、小説全体を駆動させていく物語レベル（筋書き、心理的なメロドラマ）の層であるなら、最上層の「象徴層」は、ある意味で、少しむずかしくなるが、形而上的な、「ドラマ化された世界観」とでも呼ぶべき層である。そしていま、訳者が「自伝層」と呼ぶところの中間部とは、象徴層とも物語層とも異なる次元のドラマを形づくる部分、作者＝ドストエフスキーが、みずからの個人的な体験をひそかに露出させる部分と考えていただけると幸いである。もっともこれは、ドストエフスキーの伝記について何ひとつ知識をもたない読者にとって、およそ無縁の層と言うこともできるのだが……。
>
> しかし逆に、読者は、一読して、変だ、おかしい、なぜなのか、といったディテールに遭遇したさい、いちおうこの「自伝層」を疑ってみるのもよい。たんにプロット面での物語でなく、作家の内面に横たわる体験に、またそれとのかかわりのなかで浮上するこの中間層に注意することで、『カラマーゾフの兄弟』は、第三の驚くべき側面、新たな深みを獲得すると訳者は考える。
>
> （同）

これはドストエフスキーを馬鹿にしていると私は思いますよ。そうして、作品の自立性をも馬鹿にしている。自分に読解力がないことを作者と作品のせいにしてしまっている。何が「自伝層」だ、と思います。亀山郁夫のいうこの「自伝層」は、彼が自分の無能を隠すためにちゃっかり用意している逃げ道にすぎません。こんなことをまともに受け入れていたら、作品の自立性などないことになってしまいます。しかも、亀山郁夫は、これを『カラマーゾフの兄弟』についていっているんですよ。あんまりです。私は亀山郁夫にこういってみたいんです――訳者は、一読して、変だ、おかしい、なぜなのか、といったディテールに遭遇したさい、必ず「自分の読解力」を疑ってみなくてはならない。

（とはいえ、自分の作品――本当は作品などとはとても呼べないんですが――に自立性がないために、「自伝層」的読書を読者に要求するような、そんなへぼ作家はたくさんいます。しかし、ドストエフスキーは違います。）

というわけで、亀山郁夫が「無神論者イワンがみずからの世界観を補強する」というとき、彼は、イワンの生身の身体をまったく考慮に入れて（読み取れて）いません。無神論を展開するイワンそのひとがどういう人間であるか、ということを考えて（読み取れて）いない。どういう人間が展開する無神論であるのか、ということがわかって（読み取れて）いない。いや、イワンと彼の無神論とは不可分なんですよ。ドストエフスキーは、無神論を唱えたくてそれを無理やりイワンに背負わせたんじゃありません。これは――ひどく馬鹿ないいかたをしますが――、「無神論を唱える人物を描こうとしていたら、イワンという人物になってしまった」ということと「イワンを描いていたら、無神論を唱える人物になってしまった」ということとの奇跡的な混合なんですよ。どうですか、馬鹿ないいかたでも、理解の助けにはなったでしょうか？　そこにはただイワン・カラマーゾフがいるだけなんですよ。思想のパンフレットがあるわけじゃないんです。そこにあるのは、イワンという人間なんです。そうして、イワンの生身の身体まで含みこんでこその「ポリフォニー的な読み」なんです。亀山郁夫は「ポリフォニー」を全然理解していません。彼はただ上っ面でのイワンの「思想」をおもちゃにしているだけです。

> イワンは、おそらく自分自身が「大審問官」のラストに託した意味を、そのキスに重ねようとしていた。つまり、キリストに擬せられたアリョーシャが自分の世界観を承認した、ととらえたにちがいない。しかしア

リョーシャは、おそらくそれとは逆の意味を施していたにちがいない。

……（中略）……

かりにアリョーシャのキスが「承認」を意味し、イワンがそれを感じたとするなら、「大審問官」の最終的な結論はどのようなものになるのか。「彼」すなわちイエス・キリストは、大審問官が行ってきた事業を承認する、という意味に変わる。つまりイエス・キリストは無力だという、イワンの認識そのものである。

（同）

私は口をあんぐりと開けます。だいぶ以前にも引用しましたが、またこれを思い出しましたよ。

シュテール夫人は亡きヨーアヒムの遺骸を見て、感激して泣いた。「英雄ですわ！　英雄でしたわ！」と彼女はいくどもさけび、埋葬式にはベートーヴェンの「エロティカ」を演奏しなくてはならないと要求した。「あなたは黙ってらっしゃい！」とセテムブリーニが横から叱りつけた。

（トーマス・マン『魔の山』　関泰祐・望月市恵訳　岩波文庫）

私は――前回同様――はっきりいいますが、亀山郁夫には――『カラマーゾフの兄弟』はもちろん、そもそも一般的な意味で――小説を読み解く力がありません。

またべつの記述ですが、

この問いに答えるまえに、イワン＝ドストエフスキーがとる一つの奇妙な手法について、ふれなくてはならない。つまり、「大審問官」では、いちどとしてイエス・キリストの固有名詞が用いられていないということだ。もちろん、「彼」がイエスであるとすることは可能でも、そう訳すと、じつはミスを犯すことになる。なぜなら、これはあくまでイワンによって作られた物語詩であって、イワンがあえて「彼」をイエスとして同定しなかったことこそが重要なのである。キリストと書けばキリストに限定されるが、「彼」と呼ぶことにより、ある別人格的なものを付与することができる。いや、その「彼」はキリストのいわゆる僭称者ですらあるかもしれない。

（亀山郁夫「解題」）

では、その亀山郁夫が、これにつづく「大審問官」を論じる文章で、イエス・キリストの名まえを出すのはどういうことなんでしょうか？

「彼」すなわちイエス・キリストは、大審問官が行ってきた事業を承認する、という意味に変わる。つまりイエス・キリストは無力だという、イワンの認識そのものである。

（同）

何が「「彼」すなわちイエス・キリスト」だ、と私は思いますよ。

偽者のキリストが大審問官の事業を承認することに何の意味があるんですか？　大審問官が騙されたってことにしていいんですか？　そうすると、作者イワンは大審問官が騙されているってことを承知しているわけですよね、作者なんですから。それで、その後アリョーシャのキスを受けたイワンが「おそらく自分自身が「大審問官」のラストに託した意味を、そのキスに重ねようとしていた。」と書く亀山郁夫は、イワンが偽者のキスを受けて喜んだっていうんですか？　そういうことですよね。笑っちゃって力が抜けてきますよ。もうこんなひとを相手にしていたくない。私は自分が馬鹿に思えてきます。

さあ、それで、その場合、どうしたらイエス・キリストが無力だっていうことになるんですか？

「イワンがあえて「彼」をイエスとして同定しなかったことこそが重要なのである」って、ねえ、いいですか、「大審問官」を披露する直前に、アリョーシャとイワンはこんなふうに話していたんです。そもそも彼らがイエス・キリストの名まえを出してなんかいなかったんですよ。

「いいえ、認めることはできません。兄さん」ふいに目をかがやかせて、アリョーシャが言った。「兄さんは今、この世界じゅうに赦すことのできるような、赦す権利を持っているような存在がはたしてあるだろうかと、言ったでしょう？　でも、そういう存在はあるんですよ、その人ならすべてを赦すことができます。すべてのことに対してありとあらゆるものを赦すことができるんです。なぜなら、その人自身、あらゆる人、あらゆるものたちのために、罪なき自己の血を捧げたんですからね。兄さんはその人のことを忘れたんだ、その人を土台にして建物は作られるんだし、『主よ、あなたは正しい。なぜなら、あなたの道は開けたからだ』と叫ぶのは、その人に対してなんです」

「ああ、それは《ただ一人の罪なき人》と、その人の流した血のことだな！　いや、俺は忘れてやしない。むしろ反対に、お前がいつまでもその人を引っ張りだしてこないんで、ずっとふしぎに思っていたくらいさ」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

それに、イワンは「大審問官」を語りながら、アリョーシャとこんなやりとりをします。

「あまりよくわからないけど、それはいったい何のことです、兄さん？」

それまでずっと黙ってきいていたアリョーシャが微笑して言った。「ただの雄大な幻想ですか、それとも老人の何かの誤解か、およそありえないような qui pro quo（人違い）ですか？」

「なんなら後者と受けとってもいいんだぜ」イワンが笑った。「もしお前が現代のリアリズムにすっかり甘やかされた結果、何一つ幻想的なものは受けつけず、あくまでも qui pro quo であってほしいというんなら、それでもかまわんさ。たしかにそのとおりだよ」彼はまた大笑いした。「なにしろ老人は九十なんだから、とうの昔に自己の思想で気がふれかねなかったんだしな。それに囚人がその外貌で彼をびっくりさせたのかもしらんしさ。結局のところ、こんなのは、死を目前に控え、しかも百人もの異端を焼き殺した昨日の火刑でまだ興奮のさめやらぬ、九十歳の老人のうわごとか幻覚にすぎないかもしれないんだよ。しかし、俺たちにとっては、qui pro quo だろうと、雄大な幻想だろうと、どうせ同じことじゃないかね？　要するに問題は、老人が自分の考えを存分に述べる必要があるという点なんだし、そしてついに九十年の分をひと思いに述べ、九十年も黙っていたことを声に出して話しているという点だけにあるんだからな」

（同）

（傍線は私・木下による）

そうして、当の大審問官はこういっていました。

「『お前はキリストなのか？　キリストだろう？』だが、返事が得られぬため、急いで付け加える。『答えなくてもよい、黙っておれ。』」

（同）

つまり、ここでは、相手が誰であろうが、とにかく大審問官はイエス・キリストに向かって話すわけです。大審問官は、キリストを相手にしているつもりです。それだけでいいし、それだけが重要なんです。そうして、これは――

問題は、その「キス」の意味するところとは何か、その「キス」をどのような意味として大審問官は受けとめたのか、という点である。「彼」

はその「キス」で、キリストみずからの絶大な力を、表明しようとしていたのか。大審問官の驕りにはいずれ裁きが下る、歴史がいずれ審判を下すという、ある余裕に満ちた預言の代替行為だったのだろうか。それとも、歴史は動かせない、だからあなたの好きなようになさるがよいという、承認と、ことによると「祝福」のキスだったのか。

（亀山郁夫「解題」）

――と主張する亀山郁夫にとっても、そうであるはずです。しかし、その亀山郁夫が、「いや、その「彼」はキリストのいわゆる僭称者ですらあるかもしれない。」などといってしまって、どうするんですか？　大審問官にとっての「彼」が問題であるところへ、「彼」の側から何かを考えてもしかたがないのじゃないでしょうか？　それはキスにしてもそうなんですよ。大審問官にとっての「彼」からのキスということだけが大事なんですよ。「彼」の側からあれこれいう必要なんかないんです。大審問官にしても、イワンにしても、キリスト本人に話したい・キリスト本人に聞いてもらいたいし、キリスト本人の返事を――それを得られぬことは最初からわかっていますが、それでも――聞きたいんですよ。イワンも大審問官も、人違いであろうが、とにかくキリスト本人を相手にしたいんです。こういう文脈のなかで、この叙事詩の作者イワンが、「彼」を「キリストの僭称者」などにすることはありえません。亀山郁夫は「キリストの僭称者」＝「悪魔」だといいたいんでしょうが、「大審問官」はそんなつくりになっていません。そうして、大審問官の受けたキスの意味もひとつです。

さて、その「キス」について、私はこうもいっておかなくてはなりません。キリストが大審問官の話を黙って最後まで聞いているところまでは、たしかに「大審問官＝イワン」と考えてもよかったんですが、その後での「キス」になると、それを受けるのは大審問官だけになるんですね。イワンは脱落します。なぜなら、この叙事詩の作者がイワンだからです。ここまで作者イワンは自分＝大審問官がキリストを相手に思いを語ることだけ（自分＝大審問官の側からだけ）を考えていればよかったんですが、ここからはそうはいかないんです。キリストが自ら動きだすからです（おそらくこの事情から、亀山郁夫は「僭称者」云々をいい出してくるんだと思うんですが、いいですか、大審問官の相手はずっとキリストなんですよ）。大審問官はキリストからキスを受けますが、イワンはこのキスを受けることができません。作者だからです。そのキスは、イワンから大審問官への、いわば贈り物なんですね。この点だけを採り上げれば、イワンよりも大審問官の方が、なんというか、幸せなんですよ。大審問官は思いもかけないキスに感動したに違いありません。その感動を想像してみてほしいんですね。その感動を、この時点で、イワンはただ見守るだけしかできません。このキスは、大審問官に託してキリストに向けたイワンの願いでした。

ところが、作者イワン自身もまた、語り終えてから、思いもかけないキスを受けることになるんです。イワンがどれほど感動したか、想像してみてほしいんです。

そんなイワンの思いなど全然想像できない亀山郁夫には、キリストの大きさ・深さがまったく理解できません。「キリストは無力だという、イワンの認識」などという論点を持ち出すからには、本来、亀山郁夫自身にとっても、イワンのなかでのキリストの存在は、大きければ大きいほどいいはずなんですよ。そんな大きなものを克服したイワンの認識ということで、思い切り扱えるわけですから。ところが、どうもそうではないんですね。亀山郁夫にとって、イワンのなかでのキリストは非常につまらない、ちっぽけな存在にすぎません。

つまり、亀山郁夫にとっては、キリストすらも、キスによって「みずからの絶大な力を、表明しよう」なんていう存在なわけです。「大審問官の驕りにはいずれ裁きが下る、歴史がいずれ審判を下すという、ある余裕に満ちた預言」なんてことをしようとするちっぽけな存在なんです。いいんですか、これで？　イワンのいう《ただ一人の罪なき人》がそんな存在なんですかね？

「俺だって赦したい、抱擁したい、ただ俺はあらかじめ断わっておくけ

ど、どんな真理だってそんなべらぼうな値段はしないよ。結局のところ俺は、母親が犬どもにわが子を食い殺させた迫害者と抱擁し合うなんてことが、まっぴらごめんなんだよ！　いくら母親でも、その男を赦すなんて真似はできるもんか！　赦したけりゃ、自分の分だけ赦すがいい。母親としての測り知れぬ苦しみの分だけ、迫害者を赦してやるがいいんだ。しかし、食い殺された子供の苦しみを赦してやる権利なぞありゃしないし、たとえ当の子供がそれを赦してやったにせよ、母親が迫害者を赦すなんて真似はできやしないんだよ！　もしそうなら、もしその人たちが赦したりできないとしたら、いったいどこに調和があるというんだ？　この世界じゅうに、赦すことのできるような、赦す権利を持っているような存在がはたしてあるだろうか？　俺は調和なんぞほしくない。人類への愛情から言っても、まっぴらだね。それより、報復できぬ苦しみと、癒やされぬ憤りとをいだきつづけているほうがいい。たとえ俺が間違っているとしても、報復できぬ苦しみと、癒やされぬ憤りとをいただきつづけているほうが、よっぽどましだよ。それに、あまりにも高い値段を調和につけてしまったから、こんなべらぼうな入場料を払うのはとてもわれわれの懐ろではむりさ。だから俺は自分の入場券は急いで返すことにするよ。正直な人間であるからには、できるだけ早く切符を返さなけりゃいけないものな。俺はそうしているんだ。俺は神を認めないわけじゃないんだ、アリョーシャ、ただ謹んで切符をお返しするだけなんだよ」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

このように話すイワンにアリョーシャがいうんでした。先ほどと同じ引用をしますが、

「兄さんは今、この世界じゅうに赦すことのできるような、赦す権利を持っているような存在がはたしてあるだろうかと、言ったでしょう？　でも、そういう存在はあるんですよ、その人ならすべてを赦すことができます。すべてのことに対してありとあらゆるものを赦すことができるんです。なぜなら、その人自身、あらゆる人、あらゆるものたちのために、罪なき自己の血を捧げたんですからね。兄さんはその人のことを忘れたんだ、その人を土台にして建物は作られるんだし、『主よ、あなたは正しい。なぜなら、あなたの道は開けたからだ』と叫ぶのは、その人に対してなんです」

「ああ、それは《ただ一人の罪なき人》と、その人の流した血のことだな！　いや、俺は忘れてやしない。むしろ反対に、お前がいつまでもその人を引っ張りだしてこないんで、ずっとふしぎに思っていたくらいさ」

（同）

イワンはそう答えて、「大審問官」を語り始めることになるわけです。彼はそもそも「この世界じゅうに、赦すことのできるような、赦す権利を持っているような存在がはたしてあるだろうか？」という問いを設けたとき、すでに「そういう存在はある、それはあの《ただ一人の罪なき人》だ」と自答していたはずです。だから、彼はアリョーシャが「その人をいつまでも引っ張りだしてこないんで、ずっとふしぎに思っていた」わけです。早く「その人」を引っ張り出して来いよ、と思っていたんです。というのも、イワンはその《ただ一人の罪なき人》に対して、特別な思いがあるんです。そこから「大審問官」が生まれてくるわけです。大審問官＝イワンにとって、キリストはそういう存在なんですよ。

そういう存在を――繰り返しますが――、キスによって「みずからの絶大な力を、表明しよう」だとか、「大審問官の驕りにはいずれ裁きが下る、歴史がいずれ審判を下すという、ある余裕に満ちた預言」なんてことをしようとする存在だなんていっていいんですか？　もうこんな貧しい選択肢しか出せなかった時点で、亀山郁夫はすでに読者として失格です。もし彼が私のいま想像する通りにしかキリストを理解していないのであれば、なおいっそう、彼の訳による『カラマーゾフの兄弟』は最悪の翻訳だということになります。これは、亀山郁夫がイワンを理解していないとともに、イワンにとってのキリストをも

理解していないということですね。イワンにとってのキリストを理解できないでイワンを理解することはできないんですから、彼は、なおのことイワンを理解していないということになる、と私はいいましょう。

「英雄ですわ！　英雄でしたわ！」と彼女はいくどもさけび、埋葬式にはベートーヴェンの「エロティカ」を演奏しなくてはならないと要求した。
（トーマス・マン『魔の山』　関泰祐・望月市恵訳　岩波文庫）

「僭称者」云々の話に戻りますが、おそらくこれは、「「大審問官」では、いちどとしてイエス・キリストの固有名詞が用いられていない」（＝これまでの翻訳では、それにもかかわらず、キリストの名まえで訳されてきていた。自分・亀山はそれをついに改めた）ということを亀山郁夫が得意顔で報告したくてたまらなくなったということなんでしょう。既訳が「キリスト」とわざわざ訳さなくてはならなかった理由は、単純に、キリスト教をよく知らない日本人――原文通りに訳してしまうと、日本の一般の読者には理解できないだろうと翻訳者に思われた――に向けての翻訳として翻訳者が判断したことだと思いますけれどね。

というわけで、

　これはあくまでイワンによって作られた物語詩であって、イワンがあえて「彼」をイエスとして同定しなかったことこそが重要なのである。キリストと書けばキリストに限定されるが、「彼」と呼ぶことにより、ある別人格的なものを付与することができる。キリストと書けばキリストに限定されるが、「彼」と呼ぶことにより、ある別人格的なものを付与することができる。いや、その「彼」はキリストのいわゆる僭称者ですらあるかもしれない。

（亀山郁夫「解題」）

――はでたらめです。イワンはわざわざ「彼」をキリストだと断わる必要なんかありませんでした。アリョーシャは「彼」をキリストだと思って聞いていました。大審問官自身もキリストだと思って話していました。亀山郁夫の読み取りは、未熟な読者のしがちな、余計な・無駄な・害悪でさえある読み取りの典型にすぎません。

なおかつ、

　このキスは、たんなる「盗作」と軽々しく扱うわけにはいかない。なぜなら、キスの理解は、イワンとアリョーシャとでは百パーセント異なっていたはずだからである。イワンは、おそらく自分自身が「大審問官」のラストに託した意味を、そのキスに重ねようとしていた。つまり、キリストに擬せられたアリョーシャが自分の世界観を承認した、ととらえたにちがいない。しかしアリョーシャは、おそらくそれとは逆の意味を施していたにちがいない。

……（中略）……

　かりにアリョーシャのキスが「承認」を意味し、イワンがそれを感じたとするなら、「大審問官」の最終的な結論はどのようなものになるのか。「彼」すなわちイエス・キリストは、大審問官が行ってきた事業を承認する、という意味に変わる。つまりイエス・キリストは無力だという、イワンの認識そのものである。

（同）

――もでたらめです。

私はいいますが、「キスの理解は、イワンとアリョーシャとでは百パーセント異なっていたはず」なんていうのは大間違いです。イワンもアリョーシャも同

じ理解をしていました。先にもいいましたが、

何よりも、この物語詩がイワンによる創作であるとの前提をふまえなくてはならない。言い換えるなら、これは無神論者イワンがみずからの世界観を補強する物語詩なのである。そうならば、イエスのキスの意味するところは、おのずから明らかだろう。それこそが、まさにポリフォニー的な読みということになる。

（同）

――が、そもそもでたらめです。「何よりも、この物語詩がイワンによる創作であるとの前提をふまえなくてはならない」といわれなければならないのは、読者ではなく、亀山郁夫自身です。キリストをもイワンをも安っぽくしか読み取れなかった亀山郁夫、ポリフォニーについても理解できなかった亀山郁夫がこういっているわけです。話になりません。

5

イワン・カラマーゾフは「世間の二十三歳の青年とそっくり同じような青年」であって、「やっぱり若くて、ういういしくて、溌剌とした愛すべき坊や」、「おまけに嘴の黄色い雛っ子」です。先にいいましたように、彼は神を信じていて、「神の創ったこの世界、神の世界なるもの」に大きい信頼と期待を寄せているんです。ところが、現実には、「神の創ったこの世界、神の世界なるもの」には、イワンが絶対に同意できないような矛盾点――たとえば幼い子どもの虐待――があります。だから、彼は神をなじることになるんですよ。彼は裏切られたというふうに感じるんです。神が……してくれない、……もしてくれない、……もしてくれない、そんなことってあるか、と彼は主張してやまないわけです。

そこで、彼は「神の創ったこの世界、神の世界なるもの」を離れて、自分の思想を頼りに生きようとしました。

彼は、ごく少数の、彼以上に考え、彼の考えていることを理解することができ、彼の抱えている問題に精通している相手であって、しかも、彼の問題を「肯定的なほうに」解決する立場の相手には、正直で誠実な敬意を表わすことができます。そうでない大多数の相手に向かっては、彼は自分の思想の、自他に対する嘲弄的な部分を取り出して、偽悪的・断定的にしゃべります。

「概してこの話題は打ち切るよう、あらためておねがいしておきますがね」ミウーソフがくりかえした。「その代り、ほかならぬイワン君に関するきわめて興味深い、この上なく特徴的な話を、みなさんにご披露しましょう。つい四、五日前のことですが、この町の主として上流婦人を中心とする集まりで、この人は議論の中で得々としてこんなことを明言したんですよ。つまり、この地上には人間にその同類への愛を強いるようなものなど何一つないし、人間が人類を愛さねばならぬという自然の法則などまったく存在しない。かりに地上に愛があり、現在まで存在したとしても、それは自然の法則によるものではなく、もっぱら人間が自分の不死を信じていたからにすぎないのだ。その際イワン君が括弧つきで言い添えたことですが、これこそ自然の法則のすべてなのだから、人類のいだいている不死への信仰を根絶してしまえば、とたんに愛だけでなく、現世の生活をつづけようという生命力さえ枯れつきてしまうのだそうです。それどころか、そうなればもう不道徳なことなど何一つなくなって、すべてが、人肉食いさえもが許されるのです。しかも、これでもまだ足りずに、この人は結論として力説したのですが、たとえば現在のわれわれのように、神も不死も信じない個々の人間にとって、自然の道徳律はただちに従来の宗教的なものと正反対に変るべきであり、悪行にもひとしいエゴイズムでさえ人間に許されるべきであるばかりか、むしろそういう立場としては、もっとも合理的な、そしてもっとも高尚とさえ言え

る必然的な帰結として認められるべきなんだそうです。みなさん、わが親愛なる奇人の逆説家イワン君が提唱している、そしておそらくこの先まだ提唱するつもりでおられる、他のすべてのことに関しては、今のパラドクス一つで、十分ご推量いただけると思いますが」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

――そんなふうにしゃべるんですね。それで、「しかも、これでもまだ足りずに、この人は結論として力説したのですが」以下の部分は、後に悪魔によってこのように語られます。

「ところで問題は、やがてそういう時期の訪れることがありうるか、どうかだと、わが若き思想家は考えた。もし訪れるなら、すべては解決され、人類は最終的に安定するだろう。しかし、人類の根強い愚かさからみても、おそらくまだ今後千年は安定しないだろうから、現在でもすでにこの真理を認識している人間はだれでも、まったく自分の好きなように、この新しい原理にもとづいて安定することが許される。この意味で彼にとっては《すべては許される》のだ。それだけでなく、かりにそういう時期が永久に訪れぬとしても、やはり神や不死は存在しないのだから、新しい人間は、たとえ世界じゅうでたった一人にせよ、人神になることが許されるし、その新しい地位につけば、もちろん、かつての奴隷人間のあらゆる旧来の道徳的障害を、必要とあらば、心も軽くとび越えることが許されるのだ。神にとって、法律は存在しない！　神の立つところが、すなわち神の席なのである！　俺の立つところが、ただちに第一等の席になるのだ……《すべては許される》、それだけの話だ！　何から何まで結構な話ですな。ただ、ペテンにかける気を起こしたのに、なぜそのうえ、真実の裁可なんぞが必要なんだろう、という気はするけどね？」

（同）

最後の「ただ、ペテンにかける気を起こしたのに、なぜそのうえ、真実の裁可なんぞが必要なんだろう、という気はするけどね？」というのをよくおぼえていてほしいんですね。イワンは「真実の裁可」を必要とする人間です。まだ自分ひとりでは踏み切れないんです。なぜかというと、イワンの思想がそもそも「信仰」や「旧来の道徳」を土台にしているからですよ。「信仰」や「旧来の道徳」が「右」といってくれるから、彼は「左」を向こうとすることができるので、自分だけではどちらを向いていいのかもわからないんです。もし、彼に「信仰」や「旧来の道徳」なしに自由に動くことができるなら、わざわざ「すべては許される」なんて断わる必要なんかないんです。

それに、こうしてイワンひとりだけが「すべては許される」といってしまった場合に、あの「子供たちの苦しみ」はいったいどうなるんでしょうか？　イワンは、頑強に「子供たちの苦しみ」の責任を「神の創ったこの世界、神の世界なるもの」に押しつけます。「神の創ったこの世界、神の世界なるもの」こそが、「子供たちの苦しみ」を何とかしてやらなきゃならないんです。「子供たちの苦しみ」はこれからもなくならないし、けして償われることがないとイワンは考え、これを盾に取るわけです。それで彼ひとり「反逆」するんですね。しかし、そのときにも相変らず「神の創ったこの世界、神の世界なるもの」は存在しつづけなくてはならないんですよ。「神の創ったこの世界、神の世界なるもの」は、どうにかして「子供たちの苦しみ」を何とかしなくてはならない。何とかしろ、とイワンが要求するからです。そこには必ず「真実の裁可」が必要です。それとともに、イワン自身の「反逆」の根拠とするために、です。「反逆」せざるをえなかったイワンの「苦しみ」も「真実の裁可」を必要とするんです。

イワンはこの「すべては許される」を本気で考えていたでしょう。しかし、それは彼が「神の創ったこの世界、神の世界なるもの」に大きい信頼と期待を寄せていたからです。彼が大きい期待と信頼を寄せれば寄せるほど、彼は「神の創ったこの世界、神の世界なるもの」から裏切られることになり、ひどく傷ついた彼は、もうそんなものに頼まずに、「世界じゅうでたった一人にせよ」、「す

べては許される」と主張するんです。これは、「神の創ったこの世界、神の世界なるもの」を信じればこその、そこからの反逆・離反です。そこまではよかった。しかし、彼はこの思想を自ら選び、これについて誇りも持っていたでしょうが、確信はとうとう持つことができませんでした。

「俺は望んでいた、殺人を望んでいたんだ！　俺が殺人を望んでいたって？　ほんとに望んでいたのだろうか？」

（同）

あるいは、

「なぜって僕はたきつけたんだからね。僕がたきつけたのかどうか、まだわからんな」

（同）

これがイワンです。だから、悪魔にこう笑われるんです。

「ただ、ペテンにかける気を起こしたのに、なぜそのうえ、真実の裁可なんぞが必要なんだろう、という気はするけどね？」

（同）

スメルジャコフにはこういわれましたっけ。

「あのころはいつも大胆で、『すべては許される』なんて言ってらしたのに、今になってそんなに怯えるなんて！」

（同）

確信を持てないでいたイワンに、そのことをはっきり指摘したのがアリョーシャの「あなたじゃない」なんですよ。「あなたは、あなたの思想から導き出せる可能性のなかから、すべては許される、したがって、父を殺すことがあってもいい、それは許される、と考えていたけれども、しかし、それを本当に信じていたのではなかったし、事実、それを実行してもいない」ということです。イワンには良心があり、いかなる思想を抱こうとも、それは壊されはしませんでした。アリョーシャはその良心の証人になろうというんです。

しかし、イワンはあまりにもこの「すべては許される」に誇りを抱いていたために、「犯人は自分ではない」と自分でいうことができなくなってしまっているんです。

しかも、その誇りゆえに、イワンは、自分の思想が正しいのならば、父フョードルを殺すことがあってもかまわない、いや、父フョードルが殺されるのならば、それはこの自分イワンの手によってでなければならないはずだ、なぜなら、自分イワンだけが「すべては許される」を手にしている、世界じゅうでたったひとりの人間だからだ、とさえ考えていたでしょう。そうして、その思想の全体が自分の存在理由であるとすら、イワンは考えてもいました。そこで、実際にフョードルが殺されてみると、彼はもうただ自分のその思想にしがみつくことしかできなくなってしまったんですね。

絶望して自己自身であろうと欲するところの自己は、いかにしても自分の具体的自己から除き去ることも切り離すこともできない何等かの苦悩のために呻吟する。さて当人はまさにこの苦悩に向って彼の全情熱を注ぎかけるので、それがついには悪魔的な凶暴となるのである。そのときになってよし天に坐す神とすべての天使達とが彼に救いの手を差し延べて彼をそこから救い出そうとしても、彼はもはやそれを断じて受け入れようとはしない、いまとなってはもう遅すぎるのである。以前だったら彼はこの苦悩を脱れるためにはどんなものでも喜んで捧げたであろう、だのにその頃彼は待たされていた、――いまとなってはもう遅いのだ、いまは、いまは、彼はむしろあらゆるものに向って凶暴になりたい

のである、彼は全世界から不当な取扱いを受けている人間のままでいたいのだ。だからしていまはかえって彼が自分の苦悩を手もとにもっていて誰もそれを彼から奪い去らないということこそが彼には大切なのである、――それでないと彼が正しいということの証拠もないし、またそのことを自分に納得させることもできない。このことが最後には非常に深く彼の脳裏に刻み込まれるので、彼は全く独自の理由からして永遠の前に不安を抱くことになる、――永遠は彼が他人に対して持っている悪魔的な意味でのかかる無限の優位を彼から切り離し、彼が現にあるがままの彼であって構わないという悪魔的な権利を彼から奪い去るかもしれないのである。彼は彼自身であろうと欲する。

（キェルケゴール『死に至る病』斎藤信治訳　岩波文庫）

ゾシマ長老は以前、イワンにこういったんでした。

「肯定的なほうに解決されぬとしたら、否定的なほうにも決して解決されませぬ。あなたの心のこういう特質はご自分でも承知しておられるはずです。そして、そこにこそあなたの心の苦しみのすべてがあるのです。」

（同）

しかし、スメルジャコフが行動してしまったために、イワンは自分の思想を保留の状態にしておけなくなってしまったんです。そうして、イワンは、自分の思想の帰結がこんなにも醜い、いやらしい、卑しいものでしかなかったこと、自分自身への嘲弄でしかなかったことに耐えられなくなってしまったんですね。

これが、私のイワン・カラマーゾフについての理解です。

「大審問官」はイワンの信仰告白です。彼はキリストに向かって、自分が「神の創ったこの世界、神の世界なるもの」を認めない理由を述べたて、「このままだったら、俺は自己流でやるよ」と宣言するんです。そのイワンは、なんとしてもキリストに答えてほしいんです。キリストはことばを発しませんが、しかし、キスをしました。それは、大審問官＝イワンの「苦しみ」に向けたキスでした。大審問官＝イワンはキリストのキスがもちろんその意味であると認識します。認識しつつ、それでも自己流で行くというのが大審問官＝イワンの悲劇です。イワンはこれが悲劇だということを承知していますし、それをアリョーシャに理解してほしいんです。アリョーシャにだけは、イワンはこういう信仰告白ができるんです。かりに、イワンがラキーチンに語ることがあったとしても（ありえませんが）、最後のキスのくだりだけは、絶対にいいませんね（ラキーチンなら、このキリストが実は「僭称者」かもしれないなどといいだすかもしれません）。

というわけで、イワンの「無神論」は彼の信仰ゆえのものだと私はいいます。

加えて、私はこれこそが「まさにポリフォニー的な読みということになる」と自分でいいましょう。

（二〇〇八年八月二十五日）
（二〇〇八年八月二十九日　加筆修正）

これから初めて『カラマーゾフの兄弟』を読むひとのために
――亀山郁夫による新訳がいかにひどいか

1

ここしばらく私は、光文社古典新訳文庫の亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』がいかにひどいかということを書きつづけています。もしあなたがこれから初めて『カラマーゾフの兄弟』を読んでみようと考えているなら、この訳でなく、新潮文庫の原卓也訳になさい、と私はいいます。

私の主張はとても簡単です。訳者である亀山郁夫にそもそも『カラマーゾフの兄弟』が全然理解できて・読み取れていないので、彼の翻訳が正しいものであるはずがない、ということです。読解力のない亀山郁夫は、登場人物のひとりひとりを理解することができず、彼らの関係が理解できず、彼らが何をやりとりしているかも理解できないまま、この仕事をしました。

私は「ロシア文学の専門家・研究者」（でないとわからない）レヴェルでの亀山郁夫の『カラマーゾフの兄弟』解釈を問題にしているわけじゃありません。私が問題にしているのは、そんな専門家・研究者レヴェルではなく、ごくふつうの、一般の読者としての読み取りのレヴェルなんです。単純に、ごくふつうの、一般の読者として亀山郁夫には『カラマーゾフの兄弟』が読めていません。つまり、「ロシア文学の専門家・研究者」でもないあなたが読んでも容易にわかる・読み取れるはずのことが、訳者亀山郁夫にはわかって・読み取れていない、と私はいっているわけです。亀山郁夫の読解力はあなたよりずっと下なんです。

光文社光文社古典新訳文庫の『カラマーゾフの兄弟』はそんなひとによる翻訳です。

東京外国語大学の学長であり、「ロシア文学、とくにドストエフスキーの権威」という扱いでテレビや雑誌や新聞などにも頻繁に顔を出すこの人物がそのような仕事をするはずがないと思われるでしょう。逆にいえば、そういう仕事をする人物が東京外国語大学の学長であり、「ロシア文学、とくにドストエフスキーの権威」という扱いでテレビや雑誌や新聞などにも頻繁に顔を出しているわけがないと思われるでしょう。

残念ながら、亀山郁夫はそのような仕事をしましたし、しかも、東京外国語大学の学長であり、「ロシア文学、とくにドストエフスキーの権威」という扱いでテレビや雑誌や新聞などにも頻繁に顔を出しているわけです。

2

そのように主張する私が、実は亀山訳をほんのごく一部分しか読んでいないことをいっておきます。私は亀山訳のある箇所――『カラマーゾフの兄弟』全体のなかでも非常に重要な箇所――を読んで違和感をおぼえ、その箇所に関する亀山郁夫自身の記述が最終巻の「解題」にあるのを見つけたんです。それを読んで、仰天しながら私が思ったのはこういうことです。ああ、亀山郁夫はこの部分をこんなふうにしか読めていないのか、だから、こんな訳文になってしまっているんだ。

私は二十五年前、二十歳になる直前に原卓也訳での『カラマーゾフの兄弟』（新潮文庫）を読みました。以来、何度も通読し、とくにいま私が問題にした箇所はそれこそ数え切れないくらい読み返してきたんですね。私は初読以来、『カラマーゾフの兄弟』を世界最高の小説と考えてきていて、短い期間にせよ、一時期は新潮文庫三巻それぞれの帯は私の手書き（をそのまま印刷したもの）――上巻

に巻かれたものは「世界最高の小説。これを超える小説は今世紀も出ませんよ。断言。きっぱり」の文言を含みます――でした。

さて、いま私が問題にした箇所――『カラマーゾフの兄弟』全体のなかでも非常に重要な箇所――ですが、おおざっぱにいえば、こういうことです。

登場人物AとBがしゃべっていて、BがAに（Aのためを思って、献身的に、勇気をふりしぼって）あることをいいます。Aはびっくりします。Bのいったことが図星だったからです。Aはこのところずっとそのことで身体にも変調をきたすほど苦しんできたんです。AにはBが自分を正確に見通していることがわかります。しかし、AはBのいうことを否定します。

これが、亀山郁夫の読み取りにかかると、どうなるか？

AはBが何をいっているのか、最初のうち、わかりません。身に覚えのないことだからです（当然、BがAためを思って、献身的に、勇気をふりしぼっていっているということもわかりません）。そうして、AはBのいっていることを正反対の意味に受け取った（！）あげく、それを突然本気にしてしまいます。とにかくAはBのいうことを否定しますが、この後いきなり身体に変調をきたすほど苦しみはじめることになります。

なぜこんなことになるのか？

亀山郁夫自身にBのいっていることがわからなかったんですよ。もうこれが致命的です。そうなると、Bのことばを Aもわからなかったということにせざるをえないんです。それでもAとBのやりとりは続いていき、AがBのいうことを否定するわけで、亀山郁夫はおそらくそこから、はじめのBのことばを正反対の意味に解釈することになるんですね。

なぜこんなことになるのか？

亀山郁夫にはこの場面に直接に関わる前後がまったく読めていないからです。さらに、そもそも小説の最初からAとBとがどういう人物で、どういう信頼関係にあるかということが読めていないからです。そうして、作品のつくりもわかっていないからなんです。

繰り返しますが、これ、あなたがふつうに読んでわかるレヴェルでこうなんです。

同様の問題が、いまいった箇所だけでなく、他にもたくさんあるんですよ。

まさか、いくらなんでも、と思いながら、私は彼の「解題」の全体を読んで、私の疑念の的中を確信するとともに、他のいろんな箇所についても、次から次へと仰天するような読み取りの記述を見つけることになりました。というわけで、私が亀山郁夫を批判する根拠は主としてこの「解題」にあります。これを読んでいくと、彼がどんなに『カラマーゾフの兄弟』を読み取れていないかということがどんどん露呈してきます。

はっきりいって、めちゃくちゃなんですよ。開いた口がふさがりません。

そんなひとが訳したら、『カラマーゾフの兄弟』はどんなことになるでしょうか？　もちろん、亀山郁夫の前に原作のロシア語テキストはあるわけですよね。訳者のどんな読み取りがあろうとも、原作の一文一文をそのまま訳していけば、それで全体の翻訳が成立するはずだ、と思われますか？　この登場人物はこういう人間で、べつのこれこれの人物とはこういう関係にある、という読み取りができていないひとでも、原典の一文一文を訳していけば、問題はない、と思われますか？

そんなことはありません。

3

（産経新聞　二〇〇八年六月八日）

私がこの問題に首を突っ込むことになったきっかけは、今年六月八日付けでの産経新聞によるネット配信記事「スタンダール『赤と黒』新訳めぐり対立」（http://sankeijp.msn.com/culture/academic/080608/acd0806080918004-n1.htm）を読んだことでした。亀山訳『カラマーゾフの兄弟』と同じ光文社古典新訳文庫での『赤と黒』（野崎歓＝東京大学大学院准教授訳）について、立命館大学教授の下川茂が、日本スタンダール研究会の会報に「『赤と黒』新訳について」という文章を載せ、野崎訳を「前代未聞の欠陥翻訳」と評し、数百箇所の誤訳のうち、かなりの分量を具体的に示して、こう書きました。

> 野崎は直ちに現在書店に出回っている本を回収して絶版にし、全面的な改訳に取り組むべきである。一日も早く野崎訳が書店から姿を消すことを私は願っている。便々と前代未聞の欠陥訳を売り続けるとしたら、野崎には翻訳者・学者としての能力がないだけでなく、読者に対する良心もないとみなすことにする。
>
> （下川茂「『赤と黒』新訳について」「会報」第十八号）
>
> （http://www.geocities.jp/info_sjes/newpage3.html）

そうして、この産経新聞記事のどこに私がいちばん反応したかといえば、この部分です。

> 一方、光文社文芸編集部の駒井稔編集長は「『赤と黒』につきましては、読者からの反応はほとんどすべてが好意的ですし、読みやすく瑞々しい新訳でスタンダールの魅力がわかったという喜びの声だけが届いております。当編集部としましては些末な誤訳論争に与する気はまったくありません。もし野崎先生の訳に異論がおありなら、ご自分で新訳をなさったらいかがかというのが、正直な気持ちです」と文書でコメントした。

私はこれを採りあげて、六月十九日付け「翻訳の問題――新訳『赤と黒』、『カラマーゾフの兄弟』」でこう書きました。

> 事実この通りだとすれば――私にはコメント文書の全体がどうなっているかを知ることもできないわけですが――、光文社文芸編集部の駒井稔編集長は恥知らずの大馬鹿者です。これが大西巨人の文庫『神聖喜劇』、『三位一体の神話』、『迷宮』、『深淵』を出している出版社の編集長なんでしょうか。
>
> 下川茂はなにも光文社に喧嘩を売っている・いいがかりをつけているわけではないでしょうに。駒井稔は、しかし、それをあたかも喧嘩を売られた・いいがかりをつけられたかのように回答することで問題をすり替えています。
>
> 「読者からの反応はほとんどすべてが好意的ですし、読みやすく瑞々しい新訳でスタンダールの魅力がわかったという喜びの声だけが届いております。」ということが、誤訳があってかまわないということにはならないし、むしろかえって、悪いこと、とんでもなく悪いことだというふうに考えなくてはなりません。駒井稔は青くなって新訳を点検すべきなんです。これが「些末な誤訳論争」のわけがありません。

すでに亀山訳『カラマーゾフの兄弟』にも同様の指摘があったことを知っていた私は、今度は自分で、この作品においてそれこそ数え切れないほど読み返してきた箇所を、亀山訳で当たってみたわけです。そこで違和感をおぼえ、さらに「解題」を読んで仰天したというわけです。

「すでに亀山訳『カラマーゾフの兄弟』にも同様の指摘があった」というのは、木下豊房（国際ドストエフスキー学会副会長・千葉大学名誉教授）によるこの

サイトです（http://www.nejp/asahi/dost/jds/dost125.htm）。

ここでの「検証」は、まずロシア語の専門家として木下豊房とＮＮという人物によって、亀山訳の誤訳が指摘され、その理由が説明され、なおかつ既訳として米川正夫、原卓也、江川卓の三者による当該箇所の翻訳が提示されています。このやりかたは非常に公正で、誤訳を指摘する側の手の内がすべて明かされ、反論を待つ形になっています。反論があれば、それに答える用意が彼らにはあるわけです。

さらに、ロシア語を解さない森井友人という人物による、亀山訳の日本語としてのおかしさが指摘され、これにも当該箇所を参照しながら、木下・ＮＮのふたりがコメントを付けています。

整理しましょうか？　まず亀山郁夫に恐ろしく大量の誤訳があるという指摘がロシア語の専門家からなされ、次に、ロシア語を解さない人物から亀山郁夫の訳は日本語としておかしいという指摘がなされ、それが先のロシア語の専門家からも裏打ちされているわけです。

そこへ同じくロシア語を解さない私が加えた視点は、亀山郁夫にはそもそもこの原作が読み取れていない、そんな人物による翻訳がどんなに信頼を置けないものであるか、というものです。

そうして、先のサイトから私のこの「連絡船」へのリンクが貼られることにもなり、木下豊房によって私の文章が引用されるようにもなりました。

この一連の文章「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」というのは、ＮＮによる「検証」中のひとことで、亀山訳の本質を突いたことばだと思った私が表題に借りたわけなんです。

4

あなたの周りに亀山訳『カラマーゾフの兄弟』を読んだというひとがいたとしますね。そのひとが読んだものは、実は『カラマーゾフの兄弟』ではないのだと私はいいます。

そのひとが、原卓也訳では読むのを挫折した経験があって、それに比べて亀山訳が読みやすかったなどといっているとしたら、そのひとの日本語力を疑ってかまいません。

そのひとが亀山訳しか読んでおらず、しかも彼の「解題」にも助けられたというのなら、あなたは、もうただそのひとの不幸を憐れんでください。

そのひとが原卓也訳を読んでいて、しかも亀山郁夫による「解題」を読んで、理解が深まったなどといっているようなら、もうあなたはそのひとを見捨ててください。原卓也訳をふつうに読んで感動したひとであるなら、亀山郁夫の「解題」に必ず仰天するはずです。

5

これから初めて『カラマーゾフの兄弟』を読むというあなたに、ここまで私のいってきたことが切実に感じられもしないだろう、と思います。あなたにもまた、これが「瑣末な誤訳論争」としか思われないのかもしれません。

それどころか、あなたはこう考えているかもしれません。そもそも翻訳作品なんかに何を目くじら立てているんだ？　翻訳作品に誤訳はつきものじゃないか？　誤訳のない翻訳なんかあるのか？　そこから、こうなります。ロシア語のわからないお前が、なぜ原卓也訳を正しいかのようにしゃべるんだい？　どうして原卓也訳に問題がないなんていえるんだい？

私は翻訳作品を日本人作家による日本語作品と同じように、日本語作品として読みます。ただ、翻訳作品の場合は、同じ原作に対していくつもの訳（日本語作品）がありうるのを承知していることだけが違います。

非常に単純化して――これにも問題があるでしょうが――いうと、ベートーヴェンの第九交響曲（の譜面）に対して、様々な指揮者とオーケストラによる様々な演奏があるのと同じことですね。この場合も、私はまったく譜面を解しませんから、個々の演奏――そのすべてが譜面通りであるかどうかも私にはわかりません――を聴かされて、「これが第九交響曲です」といわれれば、そうですか、と答える他ありません。そうして、録音だけでもこの曲の演奏はものすごい数があるわけです。どれひとつ、そっくり同じ演奏というのはありません。これ、クラシックを聴かないひとにはわからないかもしれませんが、もう全然違うんですよ。同じ曲を演奏していることはわかります。しかし、演奏は千差万別です。

この曲については、私もずいぶんたくさんの録音を聴いてきましたが、特に繰り返し聴く録音があるんですね。そうして私は、それがこの曲の最上の演奏ではないかと思いもしているわけです。そう思う私――譜面の読めない私――に、おそらく基本として、一定の第九交響曲像があるはずなんですね。そうして、ベートーヴェンのこの曲について「よい・悪い」の評価が私にあるでしょう。それがあって、そこからどの演奏が優れているかを聴き分けるということを、私はやっているはずなんです。

また、べつの作曲家の作品ですが、いくつもの録音を聴いてきて、どうも自分にはなじめないと感じてきた曲があったんですが、それがあるとき、ある演奏を聴いたときに初めて「ああ、これはこういう曲だったんだ」と得心する、という経験をしたこともありました。そうして、そこから、これまで聴いてきた録音に戻ると、あの「なじめない」という感じが消えていたんですね。そういうこともあります。

演奏の数が多いことは歓迎します。よりよい演奏、より高いレヴェルの演奏を私は期待します。

しかし、ベートーヴェンをはじめ教科書に載るような作曲家たちは例外として、同じクラシックの分野においても、作曲されたからといって、どの曲もれなくすべてが演奏されるということもないし、録音があるにしても一曲について一演奏しかないということの方が多いでしょう。そういうものも、私は聴きます。そうして、ひとつの演奏しか知らなくて、その曲について「よい」とか「悪い」といった評価をすることになるでしょう。ここでも、譜面の読めない私のなかに、おそらく基本として、その曲についての一定の像ができているはずなんですね。この場合、演奏があまりにもひどいせいで、本当は素晴らしいその曲が不幸にも私の評価を得られないということも起こりうるでしょう。

とはいえ、お断わりしたように、やはりこの単純化での説明には限界があって、音楽の場合は指定された楽器で譜面の音をそのまま鳴らす――いろんな鳴らしかたがあるとはいえ――んですね。世界じゅうのどの国のひとも、その音をそのまま聴くことになるわけです。ところが、言語の翻訳ではそうはいきません。なんだか私は余計なことをしゃべっているのかもしれません。これでは、あなたをいたずらに混乱させるだけなのかもしれません。

それでも、翻訳作品を読むことによって、原作の「よい・悪い」がわかるはずだし、翻訳そのものの質をも見極めることができると私は考えているんです。そのとき、その翻訳作品が作品として自立しているかどうか、どのように自立しているか、ということを、おそらく私は測っているんです。

ここまでのところを踏まえつついいますが、私は原卓也訳の『カラマーゾフの兄弟』を日本語作品として読んで、しかも、それでこの原作についての一定の像を自分のなかに抱き、そのうえで、原卓也訳を「よい」と思うと同時にドストエフスキーの原作をも「よい」と思っているのだ――ということです。

原卓也訳に表現されているものが、ドストエフスキーが原作で表現したものを誠実につかんで、格闘しながら日本語に置き換えられたものであることが、読んでわかる、と私はいっています。それで、日本語作品としての『カラマーゾ

フの兄弟』を「よい」というばかりでなく、ドストエフスキーの原作をも「よい」というんです。ドストエフスキーの原作をあるレヴェル以上に理解したうえでなければ、このように日本語訳を仕上げることができない、ということが原卓也訳を読んでわかります。原卓也にも、それは、たしかに誤訳はあるでしょう。しかし、それをも含んでなお、彼がこの原作のつくりから、登場人物の把握から、彼らの位置関係や、その推移などをしっかり理解していることがわかります。これはそういう翻訳作品です。それが私にはわかります。

どんなふうにわかるのか？　私は作品をどんなふうに読んでいるのか？

ここで私のしゃべることは、この「連絡船」――まだ始めたばかりで、進路も定かならぬ――の全体で私自身がおいおい明らかにしていこう、ゆっくりことばにしていこう（ということは、いまだに自分でもよくわかっていない）と思っていたことなので、いまはとりあえず、このようにいっておきます。

どんな作品を読むとき――すべて日本語です――にも、私の評価の基準は、その作品の自立性です。何をもって自立性を問うかといえば、作者が自分の描く「なにを」と「どのように」とをどんなふうに拮抗させたか、ということで問います。どこまでそれが実現されているか、ということですね。これが――現時点で私が自覚し、ことばにしうる範囲での――私の作品観になります。

もう何度も引用している文章をさらに長く提示しますが、

> ……小説作品というのは「なにが描かれているか」より「どのように描かれているか」が大事だということです。これを説明するのは厄介で、これが厄介だということがそもそも問題なんですが、最大の障害は――私はだいぶ手加減していいますけれど――「どのように描かれているか」を通して「なにが描かれているか」を読まなくてはならないのに、「なにが」だけしか読まない・読めないひとの多すぎることです。その「なにが」を支えているのが「どのように」だというのに。そういう読者にだけ照準を合わせて「なにが」だけを提示しているにすぎない自称「作品」がどれだけ売れているかを考えるとくらくらします。私が疑うのは、単に「なにが」だけしか提示していないものを読むときに、多くの読者が勝手に作家の非力を、いかにもありがちなイメージで――すぐにわかる、わかって安心できる、すでに自分のなかにある安手なあれ・それを当てはめながら――補ってやっているのではないか、最近の傾向でいえば、読んで泣こうとして、泣く方向にねじまげて読むから、だめなものでも泣かずにはいないということがあるのではないか、ということですね。しかし、ちゃんとした作品、「どのように」のきちんとできている作品はもっと自立したものであるはずです。泣くことが目的の読者のごまかしに手伝ってもらう必要など全然ありません。
>
> しっかりした「どのように」がともなってはじめて可能になる「なにが」の表現ということを考えてほしいんです。つまり、読者がいまだ知らないなにか、名前をつけようと考えたこともないなにか、自分のすでにもっている（そしてすぐに取り出せる）どの観念にも落とし込むことのできないなにか、それが、作品の「どのように」に支えられてのみ、その作品一回きりの「なにが」として立ち上がってくるということがあるはずなんです。そういうことの実現こそがほんものの作家の仕事じゃないでしょうか？　そして、そういう作品を読むことこそがほんとうの読書なのでは？
>
> ……（中略）……
>
> ……「なにが」と「どのように」を、もう一度作家の側に返して「なにを描くか」と「どのように描くか」にいいかえますが、ほんものの作家のなかで、このふたつは切り離すことができません。作家が「なにを」を想定しようとするとき、すでに彼のなかでは、それについての「どのように」がついてまわっています。「どのように」を考えると、「なにを」も決まっている。つまり、「なにを」は自分の生かす「どのように」を求め、「どのように」は自分の生かしてやれる「なにを」を求めるということです。両

者は強力に拘束しあいます。この関係の破綻したものを作品などといってはいけません。ということは、作家が書きはじめたとき、彼は自分が「なにを描か（け）ないか」「どのように描か（け）ないか」を知っているということでもあります。最初から大きい断念が生じるはずなんです。作家は全然自由ではなく、非常に不利なところからはじめます。しかし、書き進めながら彼はこの拘束のなかですんなり小さくまとめればいいというのでもない。彼は自分の書いていくなにかしらを、この拘束を脅かすほどに内部から大きく発展させていきます。敢然として拘束に拮抗させていく。そのせめぎ合い・たたかいの軌跡こそが作品なんです。作品というのは、最初からきれいにまとまった完成形に向かって書き進められていくのではないし、当初の設計図も当てになりません。もつれ込んだ末に作品は、ついに作家の思ってもみなかった形でできあがってしまうでしょう。ふつう考えられている作家と作品の関係は実はちがっていて、作品が主であり、作家が従なんです。作品は作家からも自立しようとし、作家はひたすらそのために奉仕してたたかうわけです。『カンバセイション・ピース』でもちらりと触れられている『魔の山』の作家、トーマス・マンを引用すると、《芸術家は、その作品がそもそもどんなものになっていこうとしているのか、それがまさに彼の作品としてどうなるべきものなのか、ということを全く知らず、やがて彼はその仕事を前にして「このような物を私は望んでいなかった。だが、今やそれをせねばならぬ。神よ、助けたまえ！」と感じることがしばしばなのであります。》（『リヒァルト・ヴァーグナーと『ニーベルングの指輪』』青木順三訳　岩波文庫『リヒァルト・ヴァーグナーの苦悩と偉大』所収）

（「わからないときにすぐにわかろうとしないで、わからないという場所に……」）

（〈『カンバセイション・ピース』（保坂和志　新潮文庫）〉解説）

そんなふうに私はあらゆる作品を――原作が何語であろうが――日本語作品として読みます。「なにを」と「どのように」のせめぎ合い・たたかいの軌跡としての作品を読むわけです、日本語で。そうして――先にいいましたように――、実はそれによって、翻訳作品の場合、原作をも評価できると考えているわけです。

繰り返しますが、もちろん翻訳作品には、そこに誤訳の可能性を承知はしています。しかし、もし多数の誤訳があろうとも、原卓也訳に原作の「なにを」と「どのように」のせめぎ合い・たたかいの軌跡が十分に表現されていると私は思っているんです。それでいいんです。原卓也がそもそも原作をしっかり読み込んで、誠実にこの仕事に取り組んだ、しかも、よい結果を残したことを、私は理解します。原卓也が原作に奉仕したことが私にはわかります。だから、私は彼の訳した『カラマーゾフの兄弟』を「世界最高の小説」だと「断言」しました。しかし、原卓也訳よりもよい訳の可能性は当然あります。さらによい訳が出てくればいいな、とは、もちろん思いますよ。それを読みたい。

というわけで、日本語作品として、私はトーマス・マンの『魔の山』、『ファウストゥス博士』を、フォークナーの『八月の光』を、カミュの『ペスト』を、トルストイの『アンナ・カレーニナ』、『戦争と平和』を、ヴォネガットの『タイタンの妖女』、『母なる夜』、『スローターハウス5』を、ガルシア＝マルケスの『百年の孤独』、『予告された殺人の記録』を、アンドレイ・マキーヌの『フランスの遺言書』等々を――きりがないのでこのへんにしておきますが――を読んできたんです。そうして、それらは――日本語作品として――きちんと自立しています。つまり、それらは、翻訳者がそもそも原作をしっかり読み込んで、誠実にこの仕事に取り組んだ、しかも、よい結果を残したものだということです。それは、読めばわかります（そうして、それぞれの原作の素晴らしさも理解できます）。それらの翻訳に、原作の「なにを」と「どのように」のせめぎ合い・たたかいの軌跡が十分に表現されているのがわかります。部分的に、もうちょっと何とかならなかったのか、と思うものがないとはいいません。しかし、それを考慮に入れたうえで、私はそれらの翻訳をよしとし、あるレヴェル以上のものとみなしてきたわけです。

6

それで、いま私のしゃべった読みかたなんですが、これはよい作品を採りあげて「よい」というときには、これだけじゃ足りないんですね。そこから先は口ごもらざるをえないんです。というのも、私はある一定のレヴェルを示しているだけで、それより上のレヴェルの作品となると、また個別にあれこれいわなくてはならないんです。つまり、その一定のレヴェルというのは前提でしかないからです。

しかし、これ、そのレヴェル以下のものを扱うとなると、俄然威力を発揮することになるんですね。というのは、私の評価の最低基準すら満たしていないものということで、容易に切り捨てができるからです。

亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』は、そんなふうに切り捨てることができます。

なぜか？　彼には原作がしっかり読めていないからです。彼には作品の「なにを」も「どのように」も全然わかっていないからです。彼は、ただ原作の全文に対応する日本語を最後までやっつけで並べてみたにすぎません。彼の「解題」がはっきり示しています。そこで披露されている彼の読み取りはでたらめばかりで、開いた口がふさがらないほどのものなんです。こんな読みのひとに『カラマーゾフの兄弟』を訳せるはずがありません。「断言」します。こんな歪んだ、稚拙な、でたらめな、とんちんかんな読み取りのひとにかかると、訳される細部は、個々の語や文の力点が見当違いの場所に置かれているはずです。それがどんどん蓄積されていくんです。「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」というのは、そういうことです。

私が最初にあげた登場人物Aはある思想の持ち主なんですが、亀山郁夫には、その思想がAという生身の人間のなかでなぜ生まれ、それがAのなかでどういう意味を持っていて、どこを向いているのか、それがA自身にどれだけ負担になっているのか（どれだけAを傷つけているのか）、等々が全く理解できません。亀山郁夫はAの思想を固定された、ただの思想としてしか理解できません。その思想がAのある側面でしかないということがわかりません。そういう思想を抱いてしまったAという人物の動いている生を理解せず、その思想＝Aとしか読んでいないんです。だから、登場人物Bのことばと、それを聞いたAの衝撃とが亀山郁夫にはわかりません。そうして、Bという人物の読み取りもまた同様にひどいんです。

繰り返しますが、これはただの一場面だけではすまない問題なんですよ。そもそも小説の最初から登場人物AとBとを読み誤っていたからこそ、こうなったわけです。亀山郁夫には、ドストエフスキーが非常に動的に描いた作品を、そのまま動的にとらえることができていないんです。なんだか平べったい止まったものとしてしか読めていないんです。

こうして、ドストエフスキーの原作が持っていた作品の自立性は亀山訳では失われます。亀山訳には日本語作品としての自立性もありません。

語学的にああだこうだという以前の問題です。亀山郁夫には日本語であれ、ロシア語であれ、そもそも一般的な意味で作品を読む力がないんです（もちろん、あなたよりも。あなたの方がずっと読めます、間違いありません）。こんなひとがいくら自分で奮闘したって――さらにそれを自分で吹聴したって――無駄です。害悪ですらある。

まったく、こんなひとが『カラマーゾフの兄弟』についての新しい「発見」云々を、「解題」以外にも、いろんなところで書いたり、話したりして、「ロシア文学、とくにドストエフスキーの権威」を「僭称」しているわけです。笑ってしまうとともに、恐ろしくもあります。

そうして、亀山郁夫のこの実質を知ってか知らでか、大手の出版社も放送局も

新聞社も彼を持ち上げているんですね。ひどい話です。

いいですか、亀山郁夫なんかを信じちゃ駄目ですよ。自分でしっかり考えて読書してください。わからないことを他人――たとえば「亀山郁夫先生」――に丸投げするような読書は駄目です。亀山訳しか読んでいないひとは『カラマーゾフの兄弟』ってすごいと聞いていたけれど、全然大したことないな、と思って当然なんです。その読者には、かわいそうなことですけれど。

これから初めて『カラマーゾフの兄弟』を読もうとしているあなたに、あまりに刺激の強すぎることをいっているかもしれませんが、そうなんです。私にはどうしようもありません。私がどういおうが、事実は事実です。

亀山郁夫は『カラマーゾフの兄弟』を甚だしく汚しました。彼はこの仕事をするうえで、ドストエフスキーの原作に全然奉仕しませんでした。自分自身の虚栄心の満足しか考えずにこの仕事をしたんです。

7

六月からここまでの三か月間（ネット上での公開は二か月間ですが）、私はずっと亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』がいかにひどいか、ということを――「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」という表題のもとに（一）、（二）、（三）と――書きつづけてきました（まだこの先も書いていきます）。

それは『カラマーゾフの兄弟』をすでに亀山郁夫訳以外の翻訳――たとえば原卓也訳――で読んだことのあるひとを対象にしていました。既読のひとに向けて、亀山訳のひどさについて具体的に――作品に踏み込んで――詳述してきたわけです。

しかし、ここで一度、これから初めて『カラマーゾフの兄弟』を読むというひとに向けての文章を書いておかなくてはならないと考えました。

数日後の増刷によって、光文社古典新訳文庫・亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』は全五巻の累計刷部数が一〇〇万部を超えます。内訳は、第一巻が三〇、五〇〇〇部、第二巻が二一一、〇〇〇部、第三巻が一七七、〇〇〇部、第四巻が一六二、〇〇〇部、第五巻が一五五、〇〇〇部です。さらには、このタイミングで同文庫シリーズ最新刊として、亀山郁夫訳『罪と罰』の刊行が始まります。大宣伝がかかります。新聞の全面広告というものさえ予定されています。加えて、ＮＨＫラジオでも間もなく亀山郁夫による『カラマーゾフの兄弟』講義が連続放送されます。

シリーズは違え、同じ光文社の文庫で『神聖喜劇』（あなたは一生のうちに、亀山訳以外の『カラマーゾフの兄弟』を読むとともに、この日本の大傑作をも読むべきです）、『深淵』などが出版されている大西巨人のことばを引用して、この一連の事実を表現すると、「俗情との結託」ということになる、と私は考えます。こんなことを許してはなりません。

（二〇〇八年九月二十五日）

「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」その四

1

前回（＝「その三」）で、『カラマーゾフの兄弟』について私は「こんな機会でもなければ・こんな馬鹿な読みかたの見本さえなければ、私がこの作品についてここまであれこれしゃべることはなかっただろうと思うんです」といいましたけれど、「あなたじゃない」や「大審問官」についてあれこれ話すうちに、これまで明確には意識していなかった自分の読み取りをあらためて点検・整理することにもなり、それは有益だったと思っているんです。

「大審問官」については、前回の記述以降もいろいろ考えました。

どうやら私は、「大審問官」でキリストが相手をしていたのは、大審問官というひとりの苦悩する人間であって、彼の語る内容ではないのだと――二十五年前の初読以来――読み取ってきていたんですね。他の可能性を考えてみることがなかった。そのことを今回初めて自覚しました。その読み取りからすると、キリストが大審問官の話を全然聞いていなかったということにしてもいいわけです。たとえば、大審問官の話しているのがスペイン語だったとして、キリストにはまるっきりスペイン語がわからなかったということにしてもいい、ということになります。キリストにとっては、大審問官というひとりの苦悩する人間が自分の目の前にいるという、そのことだけでよかっただろう。キリストにとっては、自分に向かってなにごとか懸命に訴えてくるひとりの苦悩する人間がいただけだろう、その人間がただそこにいるということだけが重要で、話の内容はどうでもよかったのではないか、ということです。

そんなふうに、苦悩する人間ひとりひとりの前にいる、というのがキリストだろう――私はそう考えているんですね。で、それは、こういうことにもなります。キリストは「人類全体」の前にいるのじゃありません。「キリスト対人類」という図はありえません。キリストは「人類全体」ではなくて、それを構成するひとりひとりの人間それぞれの前にいるんです。この違いがわかりますか？それを構成するひとりひとりの人間の総和が「人類全体」だから、キリストは結局「人類全体」を相手にしているんだよ、などといってはいけません。それは、私の考えていることの対極の考えになるんですよ。

「それとそっくり同じことを、と言ってももうだいぶ前の話ですが、ある医者がわたしに語ってくれたものです」長老が言った。「もう年配の、文句なしに頭のいい人でしたがの。あなたと同じくらい率直に話してくれましたよ。もっとも、冗談めかしてはいたものの、悲しい冗談でしたな。その人はこう言うんです。自分は人類を愛してはいるけど、われながら自分に呆れている。それというのも、人類全体を愛するようになればなるほど、個々の人間、つまりひとりひとりの個人に対する愛情が薄れてゆくからだ。空想の中ではよく人類への奉仕という情熱的な計画までたてるようになり、もし突然そういうことが要求されるなら、おそらく本当に人々のために十字架にかけられるにちがいないのだけれど、それにもかかわらず、相手がだれであれ一つ部屋に二日と暮すことができないし、それは経験でよくわかっている。だれかが近くにきただけで、その人の個性がわたしの自尊心を圧迫し、わたしの自由を束縛してしまうのだ。わたしはわずか一昼夜のうちに立派な人を憎むようにさえなりかねない。ある人は食卓でいつまでも食べているからという理由で、別の人は風邪をひいていて、のべつ洟をかむという理由だけで、わたしは憎みかねないのだ。わたしは人がほんのちょっとでも接触するだけで、その人たちの敵になってしまうだろう。その代りいつも、個々の人を憎めば憎むほど、人類全体の対するわたしの愛はますます熱烈になってゆくのだ。と、その人は言うんですな」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

もうひとつ、イワンとアリョーシャの会話から。

「人を愛するためには、相手が姿を隠してくれなきゃだめだ、相手が顔を見せたとたん、愛は消えてしまうのだよ」

「そのことはゾシマ長老も一度ならず話しておられました」アリョーシャが口をはさんだ。「長老もやはり、人間の顔はまだ愛の経験の少ない多くの人々にとって、しばしば愛の妨げになる、と言っておられたものです。でも、やはり人類には多くの愛が、それもキリストの愛にほとんど近いような愛がありますよ。そのことは僕自身よく知っています、兄さん……」

「ところが今のところ俺はまだそんなことは知らないし、理解もできないね。それに数知れぬほど多くの人たちだって俺と同じことさ。ところで問題は、人間の悪い性質からそういうことが起るのか、それとも人間の本性がそういうものだから起るのか、という点なんだ。俺に言わせると、人間に対するキリストの愛は、見方によれば、この地上では不可能な奇蹟だよ。なるほど、キリストは神だった。ところが、われわれは神じゃないんだからな。早い話、たとえば俺が深刻に苦悩することがあったとしよう、しかし俺がどの程度に苦しんでいるか、他人には決してわからないのだ。なぜならその人は他人であって、俺じゃないんだし、そのうえ、人間というやつはめったに他人を苦悩者と見なしたがらないからな（まるでそれが偉い地位ででもあるみたいにさ）。なぜ見なしたがらないのだろう、お前はどう思うね？　その理由は、たとえば、俺の身体が臭いとか、ばか面をしているとか、あるいは以前にそいつの足を踏んづけたことがあるとかいうことなんだ。」

（同）

キリストは個々の「人間の顔」を愛するのだ、と私は考えているんです。キリストは、ひとが「食卓でいつまでも食べている」とか「風邪をひいていて、のべつ洟をかむ」とか、「身体が臭い」とか「ばか面をしている」とか、そういうことを全然苦にしないんですね。それどころか、それらのことゆえにさらに愛するかもしれません。

キリストは「人類全体」に語りかけたりしません。生身のひとりひとりの人間、それぞれに語りかけるでしょう。

そうしてこれが、ゾシマ長老の、アリョーシャの愛にもつながっているだろうと思うんです。それは論理的・抽象的な愛でなく、実践的な愛です。

もうひとつ、アリョーシャとイワンの会話から。

「わかりすぎるほどですよ、兄さん。本心から、腹の底から愛したいなんて、実にすばらしい言葉じゃありませんか。兄さんがそれほど生きていたいと思うなんて、僕はとても嬉しいな」アリョーシャは叫んだ。「この世のだれもが、何よりもまず人生を愛すべきだと、僕は思いますよ」

「人生の意味より、人生そのものを愛せ、というわけか？」

「絶対そうですよ。兄さんのいうとおり、論理より先に愛することです。絶対に論理より先でなけりゃ。そうしてこそはじめて、僕は意味も理解できるでしょうね」

（同）

ところが、イワンの大審問官は個々の「人間の顔」を愛することができません。彼が愛するのは「人類全体」なんですね。「人類全体」ということばは「論理」のことば――「意味」を欲し、理由を求めることば――です。彼には個々の「人間の顔」が耐えがたいでしょう。しかし、彼は「人類全体」ならいくらでも愛することができるんですね。彼の理論はこういう愛の上に打ち建てられています。

そのくせ、大審問官はキリストに向かっては、自分の「人間の顔」を認めてもらいたいんです。ここでまた、「大審問官＝イワン」ということを私は繰り返

します。

「大審問官＝イワン」はキリストの愛がどういうものであるか、はっきり承知していました。キリストの愛は「この地上では不可能な奇蹟」であり、「人間の顔」を持ったひとりひとりの人間それぞれに自由をもたらそうとしても無理だと考えているわけです。そこで、そんな愛から離れて、「人類全体」をうまく生かしてやることのできるシステムを彼は考えたんですね。

2

それで思い出したのが、木下豊房のページ（http://www.ne.jp/asahi/dost/jds/dost120e.htm）で森井友人の指摘した「エピローグ」中の箇所なんです。

その見過ごすことの出来ない事例の一つが、森井氏の発見による、エピローグの一場面、すなわち、アリョーシャがコーリャのせりふを受けて、自分の言葉でその意味を言い換える個所である。（この指摘はインターネット・サイト「ドストエフ好きーのページ」の一月八日付けの掲示板（総合ボード）において、議論の流れの中で森井氏によってはじめてなされたものであり、第一分冊の範囲に限定した氏の「点検」には含まれていない）

コーリャのせりふ：「人類全体のために死ねたらな、って願ってますけどね（« Я хе пал бы умереть за всё человечество »）」（亀山訳第五分冊四二頁）に対して、アリョーシャがそれを受けて言うのは、「コーリャ君は先ほどこう叫びましたね、『すべての人達のために苦しみたいって』…（« Вот как правеча Коля воскликну л : « Хочу пострадать за всех людей »）」（拙訳）。この部分について亀山氏はこう訳している。「コーリャ君は『人類全体のために死ねたら』と叫びましたが…」―（同上五八頁）

この亀山訳下線部に相当するテクスト（『人類全体のために死ねたら』）は上記の底本のどこにも見出すことはできない。なぜこういう明白な改ざんがなされたのであろうか？　憶測に過ぎないとはいえ、亀山氏が別著「続編を空想する」（光文社新書）でコーリャを皇帝暗殺者に、またアリョーシャをその使嗾者に仕立てるための伏線として、意図的におこなったのではなかろうか？　この疑いは森井氏の提起によるが、私も否定しがたいと思う。

（木下豊房「亀山郁夫氏の「踏み越え」（« преступление »）」）

それは、こういうことです。

「殺したのは召使で、兄は無実ですよ」アリョーシャは答えた。

「ほら、僕の言ったとおりだ！」とスムーロフ少年が叫んだ。

「それじゃお兄さんは、真実のために無実の犠牲になって滅びるんですね！」コーリャが叫んだ。「たとえ滅びても、お兄さんは幸せだな！　僕は羨みたいような気持です！」

「何を言うんです？　よくそんなことが、いったいなぜです」アリョーシャがびっくりして叫んだ。

「ああ、僕もいつの日か、真実のためにこの身を犠牲にできたらな」コーリャが熱狂的に言い放った。

「でも、こんな事件でじゃなくたって、こんな恥辱や恐怖なぞなくたっていいでしょう！」アリョーシャは言った。

「もちろんですよ……全人類のために死ねればと思いますけど、恥辱なんてことはどうだっていいんです。僕らの名前なんか、滅びるにきまってるんですから！　僕はお兄さんを尊敬しますよ！」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

その後で、アリョーシャがこう話すんですね。

「もしかすると、僕たちはわるい人間になるかもしれませんし、わるい行いの前で踏みとどまることができないかもしれません。人間の涙を嘲笑うかもしれないし、ことによると、さっきコーリャが叫んだみたいに『僕はすべての人々のために苦しみたい』と言う人たちを、意地わるく嘲笑うようになるかもしれない」

（同）

つまり、アリョーシャはコーリャの「全人類のために死ねれば」を自分のことばのなかで「僕はすべての人々のために苦しみたい」といい換えているんです。

それを亀山郁夫がどう訳したか？

「もちろん……人類全体のために死ねたらな、って願ってますけどね」

「さっき、コーリャ君は、『人類全体のために死ねたら』と叫びましたが、……」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　亀山郁夫訳　光文社文庫）

亀山郁夫は、アリョーシャがせっかくいい換えたコーリャの台詞を元に戻して――コーリャのことば通りにして――しまいます。ということは、ドストエフスキーの書いた通りに訳さなかったんです。

この箇所について、森井友人が「死ぬ」と「苦しむ」との違いを問題にして、先の掲示板で書き込みを（「死ぬ」か「苦しむ」か、それが問題だ」の表題で、ハンドルネーム「ソースケ」として）行なったんです――「アリョーシャがコーリャの台詞を言い換えて引用しているのなら、そこには、それなりの意味があるはずです（アリョーシャにとっても、また、作者にとっても）」。

――と、以上のことを思い出して、私が気づいたのは、これは「死ぬ」と「苦しむ」との違いの問題であるとともに、実は「全人類のために」と「すべての人々のために」との違いの問題なのじゃないか、ということでした。

アリョーシャはここでもゾシマ長老の教えを想起していたんじゃないでしょうか？「愛の経験の少ない」コーリャ少年の「全人類のために死ねればと思います」という発言のはらむ危うさは、アリョーシャにとってなじみのものでした。だから、彼はコーリャの発言をいい換えたんじゃないですか？　コーリャ、そんなふうに考えてはいけない、論理より先に愛することだよ、「全人類」なんかじゃなく、個々の「人間の顔」を愛することだよ、とアリョーシャはいいたかったのじゃないですか？「全人類のために死ぬ」ことなんか実は簡単なんだよ、「すべての人々のために苦しむ」ことの方がはるかに難しいんだよ、コーリャ、生きて、「人間の顔」を持った「すべての人々のために苦しみ」なさい……

それで、私はここまでで引用したいくつかの箇所について、ロシア文学に詳しい友人に『カラマーゾフの兄弟』ロシア語原典における「人類」・「人類全体」・「全人類」と「人間」・「多くの人たち」・「すべての人々」とに当たる語を調べてもらったんですが、どうやら両者はきちんと書き分けられ、原卓也訳ではその通りに訳されているようです。

そうすると、生身のひとりひとりの人間それぞれに向けられるキリスト（――ゾシマ長老――アリョーシャ）の実践的な愛が、『カラマーゾフの兄弟』全体に隈なく行き渡っているのだ、ということができるのじゃないでしょうか？　そうして、それの対極にイワン＝大審問官の愛が配置されているわけです。この

作品において、キリストの愛がどういうものとして・どんなふうに描かれているかが、私のなかでこれまで以上にぐんと重みを増してきました。私は次に『カラマーゾフの兄弟』を読み返すときには、この照明のもとで読んでみるでしょう。

3

そんなわけで、これほどまでに重要な意味のこめられた、アリョーシャによるコーリャの台詞のいい換えをそのまま訳さなかった亀山郁夫のでたらめ・不誠実・無理解・無能がさらに鮮明に浮き上がってきました。

亀山郁夫にはアリョーシャのいい換えの意味がまるっきりわかっていなかったということです。それは彼がアリョーシャを理解していないだけでなく、ゾシマ長老をも理解していないこと、さらには、この作品におけるキリストの意味をもまったく理解していないということを示します。

そんなひとが「大審問官」におけるキリストを理解できていたわけもありません。

今回の文章を書きながら、あらためて亀山郁夫の例の文章を思い起こすと、これまで以上に怒りが噴き上がってきましたね。

問題は、その「キス」の意味するところとは何か、その「キス」をどのような意味として大審問官は受けとめたのか、という点である。「彼」はその「キス」で、キリストみずからの絶大な力を、表明しようとしていたのか。大審問官の驕りにはいずれ裁きが下る、歴史がいずれ審判を下すという、ある余裕に満ちた預言の代替行為だったのだろうか。それとも、歴史は動かせない、だからあなたの好きなようになさるがよいという、承認と、ことによると「祝福」のキスだったのか。

（亀山郁夫「解題」）

このキスは、たんなる「盗作」と軽々しく扱うわけにはいかない。なぜなら、キスの理解は、イワンとアリョーシャとでは百パーセント異なっていたはずだからである。イワンは、おそらく自分自身が「大審問官」のラストに託した意味を、そのキスに重ねようとしていた。つまり、キリストに擬せられたアリョーシャが自分の世界観を承認した、ととらえたにちがいない。しかしアリョーシャは、おそらくそれとは逆の意味を施していたにちがいない。

……（中略）……

かりにアリョーシャのキスが「承認」を意味し、イワンがそれを感じたとするなら、「大審問官」の最終的な結論はどのようなものになるのか。「彼」すなわちイエス・キリストは、大審問官が行ってきた事業を承認する、という意味に変わる。つまりイエス・キリストは無力だという、イワンの認識そのものである。

（同）

この問いに答えるまえに、イワン＝ドストエフスキーがとる一つの奇妙な手法について、ふれなくてはならない。つまり、「大審問官」では、いちどとしてイエス・キリストの固有名詞が用いられていないということだ。もちろん、「彼」がイエスであるとすることは可能でも、そう訳すと、じつはミスを犯すことになる。なぜなら、これはあくまでイワンによって作られた物語詩であって、イワンがあえて「彼」をイエスとして同定しなかったことこそが重要なのである。キリストと書けばキリストに限定されるが、「彼」と呼ぶことにより、ある別人格的なものを付与するこ

とができる。いや、その「彼」はキリストのいわゆる僭称者ですらあるかもしれない。

（同）

ひどすぎる。

4

ひどすぎるけれども、しかし、こんな馬鹿な読み取りによる訳がなかったなら、森井友人が「死ぬ」と「苦しむ」との違いを問題にすることもなかったし、その森井友人の指摘を思い出した私が「全人類」と「すべての人々」との違いに気づくこともなかったわけです。その意味では、亀山郁夫訳は森井友人と私の『カラマーゾフの兄弟』読解にとって非常に貴重な機会をもたらしてくれた素晴らしい仕事だったんですね。私たちは亀山郁夫に感謝しなくてはならないのかもしれません。

それで、この一連の文章をお読みいただいている方がたに提案したいんですが、私たちはそれぞれに、てんでんばらばらに、亀山批判をしたらいいと思うんです。亀山批判をすることによって新しく見えてくる『カラマーゾフの兄弟』があるはずです。ただし、誰にもわかるような文章を書かなくてはなりません。自分の手の内を明かさなくてはなりません。自分の考えを自信をもって示さなくてはなりません。間違ったら、それをただ認めさえすればいい。卑下したり、自分を信じなかったりしたら駄目です。どっちつかずでなく、懐疑的にならずに、堂々としゃべることです。自立してしゃべるんです。せっかくネットというものがあるんですから。

もし、それが四方八方から実現したなら、私たちの『カラマーゾフの兄弟』読解に大きい深化が得られるのじゃないか、と私は夢想するんです。光文社文庫の一作品から引用しますが、

――イプセン作戯曲『民衆の敵』最終第五幕の幕切れで、主人公の医師ストックマンは、「独り立つ者、最も強し。」と断言する。レーニンは、その『民衆の敵』あるいはイプセン作劇詩『ブラント』の「一切か無か。」というような考え方に、語の悪しき意味における『ニイチェ主義』を看取し、そういうイプセンを否定的に批判した。レーニンなりブレヒトなりの尊重・主唱したのが「〈連帯〉の重要性」であることは、疑いない。

伊藤弁辯士も、「〈連帯〉の重要性」を十二分に認識・尊重する。ただ、彼の確信において、〈連帯〉とは、断じて〈特衆（衆を恃むこと）または特勢（勢を恃むこと）〉ではない。彼の確信において、「正しくても、一人では行かない（行き得ない）」者たちが手を握り合うのは、真の〈連帯〉ではないところの「衆ないし勢を恃むこと」でしかなく、真の〈連帯〉とは、「正しいなら、一人でも行く」者たちが手を握り合うことであり、それこそが、人間の（長い目で見た）当為にほかならず、「〈連帯〉とは、ただちに〈特衆〉または〈特勢〉を指示する」とする近視眼的な行き方は、すなわちスターリン主義ないし似非マルクス（共産）主義であり、とど本源的・典型的な絶対主義ないしファシズムと択ぶ所がない。

（大西巨人『深淵』光文社文庫）

「正しいなら、一人でも行く」という者たちが手を握り合う――それを私は夢想します。

（二〇〇八年十月二日）

「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」その五

今回はちょっと寄り道をします。とりあえず、ひとこといっておきたいんです。これについてはまた今後いろいろしゃべっていくつもりです。

ＮＨＫテキスト（カルチャーアワー　文学の世界）「新訳『カラマーゾフの兄弟』を読む」が発売になりました。番組は、ＮＨＫラジオ第二放送で十月から十二月までの三か月間の放送予定。講師はもちろん亀山郁夫です。

「『カラマーゾフの兄弟』を読む」ではなくて、「新訳」の冠つきなんですね。呆れました。

さて、亀山郁夫は『カラマーゾフの兄弟』第五巻の「解題」でこう書いていました。

> ゾシマ長老が残した「説教」のテーマは、ひとこと「傲慢を捨てよ」に尽きる。ゾシマは、傲慢が生みだす悲劇を身をもって体験した。決闘のエピソードが示すように、彼自身ジラールの「三角形的欲望」のとりこだったことは疑いようがない。「三角形的欲望」の源にあるものこそ、傲慢である。その彼が、「謎の訪問客」との出会いによって修道院への道を志すとき、もちろんそれは、みずからの「傲慢」を最終的に克服するための第一歩にすぎなかった。ともあれ、この小説での「傲慢」の罪のもっとも恐ろしい体現者とは、ほかでもない、「謎の訪問客」である。
>
> （亀山郁夫「解題」）
>
> （傍線は私・木下による）

傍線部を採りあげて私が書いたのはこうでした（二〇〇八年八月七日付け）。ここを木下豊房も彼のページで引用しています（http://www.ne.jp/asahi/dost/jds/dost128.htm　八月二十一日）。

> 「その彼」というのはゾシマなんですが、彼が修道院への道を踏み出したのは、「謎の訪問客」に出会う以前なんですよ。「謎の訪問客」は、決闘を放棄して、軍籍を離れ、修道僧になろうとしている奇妙な人物ゾシマの評判を聞きつけてやって来たひとたちのひとりなんです。それなのに、なぜ亀山郁夫は「その彼が、「謎の訪問客」との出会いによって修道院への道を志す」なんて書くんでしょうか？　もうこれが理解できない。めちゃくちゃです。あまりに杜撰です。雑に過ぎる。わざとやっているのか？　それとも、彼は本当にこの小説を訳したのか？　でなければ、「解題」を誰かべつの無能な人物に代筆させているのか？　最悪なのが、小説を訳した人物と「解題」を書いた人物とが同一である場合です。最悪なのか？　最悪なんだろうなあ。――とまあ、こういうことです。

そうして、出たばかりのＮＨＫテキスト「新訳『カラマーゾフの兄弟』を読む」がどうなっているか？

> 「ああ、これがはたして嘘だというのだろうか？　泣きながらわたしは思った。もしかすると、このわたしこそ、すべての人々に対してほかのだれよりも罪深く、地上のだれにもまして悪い人間なのではないか？」
>
> 決闘場に立った彼は、相手に向かって銃を放つことを拒否します。それこそは、ゾシマが修道院にはいる最初のきっかけとなった経験でした。
>
> 第六編「ロシアの修道僧」には、この回心のエピソードにつづいて、もう一つの魅力的なエピソード「謎の訪問客」が記されています。長編小説のなかにエピソードが入れ子細工のように挟まれる構造は、ドストエフスキー文学の魅力のひとつですが、この「謎の訪問客」はたんなる余興としての面白さを超えて、『カラマーゾフの兄弟』全体のテーマに迫る強烈な問題性をはらんでいるように私には思えます。

（亀山郁夫「新訳『カラマーゾフの兄弟』を読む」）
（傍線は私・木下による）

なんですか、この「最初のきっかけとなった経験」というのは？　そういうからには、次の「きっかけとなった経験」があるんですよね？　ところが、このNHKテキストでは「謎の訪問客」のエピソードが語られるものの、それが――「解題」にあるように――ゾシマの修道院入りのきっかけだとは断わっていません。では、どこに次の「きっかけとなった経験」が書いてあるかというと、書いてないんですね。その他には、この文章になりますか。

そしてここで私は、ひとつの思いを記しておきたい誘惑にかられます。それは、この訪問者こそ、ゾシマ長老の分身ではなかったのか、という思いです。

ゾシマ長老があれほど傲慢の罪の意味するところにこだわったのは、アリョーシャが残した「伝記」にはついに書き加えられることのなかった罪が、彼を長く苦しめつづけていたからではないのか、とさえ思うのです。

（同）

いい加減にしてくれ、と私は思いますが、これは「解題」のこの部分に対応します。

では、この長老に果たして「偉大な罪人」と呼べるだけの試練はあったのだろうか。長老の残した「談話」は、むしろ長老の経験の欠落を示していないか。彼はどのような「穢れ」をまとうことにより、今の聖性の高みに到達することができたのか。

兄マルケルから受けた印象、従卒アファーナシーへの殴打、決闘事件……しかし、ほかのだれにもましてゾシマ長老に近い存在とは、あの「謎の訪問者」ではなかったろうか。ゾシマは彼の苦悩を、さながら自分のことのように引き受けようとしていた。

（亀山郁夫「解題」）

ここで、いっておきたいんですが、私は八月七日付けの記述の時点で、右の「解題」中の文章を読んでいませんでした（私が「解題」の全体を読んだのは八月七日付けの文章を書きあげてから、八月二十四日付けの文章を書くまでの間でした。そのことはそれぞれの文章に書いています）。しかし、もし八月七日付けの文章を書く前にここを読んでいたら、もっとひどく亀山批判をしていたでしょう。それというのも、右の引用が何を前提にしているかというと、これなんですから。

人間は大きな罪を経て、はじめてある世界に到達できるというゾシマ長老の考え方は、現代社会ではとうてい受け入れがたい、ほとんど不可能に近い信念ではないだろうか。とりわけ競争のはげしい現代社会では、人は、少しでも罪を犯したら終わりであり、命とりとなり、脱落を迫られる。

（同）

あのねえ、と思います。ゾシマ長老の「信念」が「人間は大きな罪を経て、はじめてある世界に到達できる」だなんて、どこからそんなことを引き出してこれたんですか、このひとは？

いやいや、話が逸れました。私が疑っているのは、「それこそは、ゾシマが修道院にはいる最初のきっかけとなった経験でした」という一文が、私の文章およびそれを引用した木下豊房の文章を受けてのものじゃないか、ということです。

これがもし、「そうして、ゾシマは修道院にはいる決心をします」という表現であれば、私も疑いませんでしたが、「最初のきっかけとなった経験でした」と

いうのは怪しいのじゃないでしょうか？

因みに、七月は十七、十八、二十八日、八月は十四、十八、二十七日、九月は二、三、八、九、十、十六、十八、二十二、二十四日と、この「連絡船」へのnhk.or.jpからのアクセスが記録されています。この間に、ＮＨＫテキストの編集者と亀山郁夫とがどういうやりとりをしたのか、知りたいものです。そこで編集者がどう考えたかを知りたい。彼の内心の揺れがどのようなものであったかを知りたいんです。私はそこに希望を見出したく思います。つまり、彼が亀山郁夫に呆れたのであればいいと思うわけです。もうこんなひとに仕事を頼まない、と考えたのであればいいなと思うんです。

他の箇所も指摘しましょうか？

私はいいたいんですが、もし私の想像が正しいなら、こんな鬼ごっこみたいなことをしたってしかたがないんですよ。そもそも『カラマーゾフの兄弟』を訳していた時点での亀山郁夫の読み取りが問題なんですから。根本が駄目だから、枝葉のつじつま合わせをしても駄目なんです。だから、仮に亀山郁夫が今度は本家の「解題」にまで修正を加えはじめることがあったとしても、駄目なんですよ。

さらにまた、こうもいいましょう。もし亀山郁夫がもう一度最初から『カラマーゾフの兄弟』を訳し直すということをしたとしても、駄目です。彼には無理だから。私は彼の個々の誤訳が正されればいいと考えているのじゃありません。彼の訳がなくなればいいと考えているんです。これは構造的な問題なのであって、表層の問題じゃないんです。

（二〇〇八年十月六日）

「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」その六

1

前回（＝その四 —— 余計な「その五」が割り込んでしまいましたが、本来はこちらが「その五」になるはずでした）、キリストは個々の「人間の顔」を愛するのだ、彼の愛は「人類全体」に向けられるものではなく、生身のひとりひとりの人間それぞれに向けられるものであって ——『カラマーゾフの兄弟』においては、「人類全体」を愛するのと、生身のひとりひとりの人間それぞれを愛するのとは全く違うことです ——、「大審問官＝イワン」もそのことを承知していた、と私はいいました。今回もそのつづきです。

私は「第五編　プロとコントラ」におけるイワンとアリョーシャの会話がどのように「大審問官」へとつながっていったのかを追ってみます。なぜそうするかといえば、いままで私が「大審問官」とそれまでの会話とのつながりを明確に理解していなかったからなんですね（ここでも私は亀山訳に感謝します。こんなでたらめな訳がなければ、私がこのことをこうまで考えることもなかったわけです）。「大審問官」も、それまでの会話も、惹きつけられて読んだくせに、両者がいったいどのようにつながっているのか、私には長いことわかっていませんでした。つまり、両者を別個のものとして読むことしかできなかったんです。しかし、両者のつながりを理解することができれば、なぜイワンが叙事詩「大審問官」を創作したのか（叙事詩「大審問官」は何のためにあるのか）、さらには、『カラマーゾフの兄弟』におけるキリストの位置や意味までが明らかになる、と私はいまからいっておきます。それが明らかになれば、亀山郁夫の「大審問官」解釈がどれほど荒唐無稽なものであるかがはっきりするでしょう。

さて、イワンとアリョーシャの会話で、イワンはこんなふうにいって、「大審

問官」へとつながっていく話を始めたんでした。

「じゃ、何からはじめるか、言ってくれよ。お前が注文するんだ。神の話からか？　神は存在するか、というところからかい？」

「何でも好きなものから、はじめてください。《反対側》からでもかまいませんよ。だって、兄さんは昨日お父さんのところで、神はいないと断言したんですから」アリョーシャは探るように兄を眺めた。

「俺は昨日、親父のところで食事をしながら、そう言ってお前をわざとからかったんだけど、お前の目がきらきら燃えたのがわかったよ。でも今はお前と話す気は十分あるんだし、とてもまじめに言ってるんだ。俺はお前と親しくなりたいんだよ、アリョーシャ。俺には友達がいないから、試してみたいのさ。だって考えてもみろよ、ひょっとすると俺だって神を認めているかもしれないんだぜ」イワンは笑いだした。「お前にとっちゃ、思いもかけぬ話だろう、え？」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

まず、イワンはこういいました。

「ところが、どうだい、結局のところ、俺はこの神の世界を認めないんだ。それが存在することは知っているものの、まったく許せないんだ。俺が認めないのは神じゃないんだよ、そこのところを理解してくれ。俺は神の創った世界、神の世界なるものを認めないのだし、認めることに同意できないのだ」

（同）

それで、イワンは「なぜ《この世界を認めないか》」の説明にかかりますが、このような断わりを入れるんですね。

「お前に一つ告白しなけりゃならないことがあるんだ」イワンが話しはじめた。「俺はね、どうすれば身近な者を愛することができるのか、どうしても理解できなかったんだよ。俺の考えだと、まさに身近な者こそ愛することは不可能なので、愛しうるのは遠い者だけだ。いつか、どこかで《情け深いヨアン》という、さる聖人の話を読んだことがあるんだが、飢えて凍えきった一人の旅人がやってきて暖めてくれと頼んだとき、聖者はその旅人と一つ寝床に寝て抱きしめ、何やら恐ろしい病気に膿みただれて悪臭を放つその口へ息を吹きかけはじめたというんだ。しかし、その聖者は発作的な偽善の感情にかられてそんなことをやったのだ、義務感に命じられた愛情から、みずからに課した宗教的懲罰から、そんなことをやったんだと、俺は確信してるよ。人を愛するためには、相手が姿を隠してくれなきゃだめだ、相手が顔を見せたとたん、愛は消えてしまうのだよ」

「そのことはゾシマ長老も一度ならず話しておられました」アリョーシャが口をはさんだ。「長老もやはり、人間の顔はまだ愛の経験の少ない多くの人々にとって、しばしば愛の妨げになる、と言っておられたものです。でも、やはり人類には多くの愛が、それもキリストの愛にほとんど近いような愛がありますよ。そのことは僕自身よく知っています、兄さん……」

「ところが今のところ俺はまだそんなことは知らないし、理解もできないね。それに数知れぬほど多くの人たちだって俺と同じことさ。ところで問題は、人間の悪い性質からそういうことが起るのか、それとも人間の本性がそういうものだから起るのか、という点なんだ。俺に言わせると、人間に対するキリストの愛は、見方によれば、この地上では不可能な奇蹟だよ。なるほど、キリストは神だった。ところが、われわれは神じゃないんだからな」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

（傍線は私・木下による）

傍線部のイワンのことばをアリョーシャも理解しています。しかし、アリョーシャは「でも、やはり人類には多くの愛が、それもキリストの愛にほとんど近いような愛がありますよ」というんです。イワンは即座にそれを否定します。それでもイワンは、自分や「数知れぬほど多くの人たち」には持ちえない愛をキリストが持っていたことは認めているんですね。つまり、イワンによれば、キリストになら「相手が姿を隠してくれ」なくても、「相手が顔を見せ」ても「人を愛する」ことができるわけです。そして、こういいます。「俺に言わせると、人間に対するキリストの愛は、見方によれば、この地上では不可能な奇蹟だよ。なるほど、キリストは神だった。ところが、われわれは神じゃないんだからな」。（会話のこの部分における、キリストはロシア語原典でも「キリスト」と書かれているようです。ここで、「なんだよ、イワンとアリョーシャとの会話のなかには、ちゃんとキリストの名まえが出てくるじゃないか」と、以前の私の主張の不備を指摘する方があるかもしれません。）

イワンは話を先へ進めます。

「俺は一般的に人類の苦悩について話すつもりだったんだが、むしろ子供たちの苦悩にだけ話をしぼるほうがいいだろう。俺の論証の規模は十分の一に縮められてしまうけど、それだけでも子供だけに話をしぼったほうがよさそうだ。もちろん、俺にとってはそれだけ有利じゃなくなるがね。しかし、第一、相手が子供なら、身近な場合でさえ愛することができるし、汚ならしい子でも、顔の醜い子でも愛することができる（もっとも俺には、子供というのは決して顔が醜いなんてことはないように思えるがね）。第二に、俺がまだ大人について語ろうとしないのは、大人はいやらしくて愛に値しないという以外に、大人には神罰もあるからなんだ。彼らは知恵の実を食べてしまったために、善悪を知り、《神のごとく》になった。今でも食べつづけているよ。ところが子供たちは何も食べなかったから、今のところはまだ何の罪もないのだ」

（同）

イワンは「相手が子供なら、身近な場合でさえ愛することができるし、汚ならしい子でも、顔の醜い子でも愛することができる」ので、ここからは専ら「子供」に限定して話すことになるわけです。

「お前にはこれがわかるかい。一方じゃ、自分がどんな目に会わされているのか、まだ意味さえ理解できぬ小さな子供が、真っ暗な寒い便所の中で、悲しみに張り裂けそうな胸をちっぽけな拳でたたき、血をしぼるような涙を恨みもなしにおとなしく流しながら、《神さま》に守ってくださいと泣いて頼んでいるというのにさ。お前にはこんなばかな話がわかるかい。お前は俺の親しい友だし、弟だ。お前は神に仕える柔和な見習い僧だけれど、いったい何のためにこんなばかな話が必要なのか、何のためにこんなことが創りだされるのか、お前にはわかるかい！　これがなければ人間はこの地上に生きてゆくことができない、なぜなら善悪を認識できなくなるだろうから、なんていう連中もいるがね。いったい何のために、これほどの値を払ってまで、そんな下らない善悪を知らにゃならないんだ。だいたい、認識の世界の全部をひっくるめたって、《神さま》に流したこの子供の涙ほどの値打ちなんぞありゃしないんだからな。俺は大人の苦しみに関しては言わんよ。大人は知恵の実を食べてしまったんだから、大人なんぞ知っちゃいない。みんな悪魔にでもさらわれりゃいいさ、しかし、この子供たちはどうなんだ！　俺はお前を苦しめているかな、アリョーシャ、なんだか気分がわるいみたいだな。なんなら、やめようか」

「かまいません、僕も苦しみたいんですから」アリョーシャはつぶやいた。

（同）

そうしてイワンは、裸にされ、犬に噛み殺された少年の話をするんでした。

「霧のたちこめる、陰鬱な、寒い、猟にはもってこいの秋の日でな。少年を裸にしろという将軍の命令で、男の子は素裸にされてしまう。恐ろしさのあまり、歯の根が合わず、うつけたようになってしまって、泣き叫ぶ勇気もない始末だ……『そいつを追え！』将軍が命令する。『走れ、走れ！』犬番たちがわめくので、少年は走りだす……『襲え！』将軍は絶叫するなり、ボルゾイの群れを一度に放してやる。母親の前で犬に噛み殺させたんだよ。犬どもは少年をずたずたに引きちぎってしまった！……将軍は後見処分にされたらしいがね。さて……こんな男をどうすればいい？　銃殺か？　道義心を満足させるために、銃殺にすべきだろうか？　言ってみろよ、アリョーシャ！」

「銃殺です！」ゆがんだ蒼白な微笑とともに眼差しを兄にあげて、アリョーシャが低い声で口走った。

「でかしたぞ！」イワンは感激したように叫んだ。「お前がそう言うからには、つまり……いや、たいしたスヒマ僧だよ！　つまり、お前の心の中にも小さな悪魔がひそんでいるってわけだ、アリョーシャ・カラマーゾフ君！」

「ばかなことを言ってしまいましたけど、でも……」

「ほら、そのでもってのが問題なんだよ……」イワンが叫んだ。「いいかい、見習い僧君、この地上にはばかなことが、あまりにも必要なんだよ。ばかなことの上にこの世界は成り立っているんだし、ばかなことがなかったら、ひょっとすると、この世界ではまるきり何事も起らなかったかもしれないんだぜ」

（同）

こうして、アリョーシャの反応から、イワンは自分の論証の正しさを確信します。「この地上にはばかなことが、あまりにも必要なんだよ。ばかなことの上にこの世界は成り立っているんだし、ばかなことがなかったら、ひょっとすると、この世界ではまるきり何事も起らなかったかもしれない」ということが、最初の「俺は神の創った世界、神の世界なるものを認めないのだし、認めることに同意できないのだ」に結ぶことになります。

「ああ、アリョーシャ、俺は神を冒瀆してるわけじゃないんだよ！　やがて天上のもの、地下のものすべてが一つの賞讃の声に融け合い、生あるもの、かつて生をうけたものすべてが『主よ、あなたは正しい。なぜなら、あなたの道は開けたからだ！』と叫ぶとき、この宇宙の感動がどんなものになるはずか、俺にはよくわかる。母親が犬どもにわが子を食い殺させた迫害者と抱き合って、三人が涙とともに声を揃えて『主よ、あなたは正しい』と讃えるとき、もちろん認識の栄光が訪れて、すべてが解明されることだろう。しかし、ここでまたコンマが入るんだ。そんなことを俺は認めるわけにはいかないんだよ。だから、この地上にいる間に、俺は自分なりの手を打とうと思っているんだ。わかるかい、アリョーシャ、そりゃことによると、俺自身がその瞬間まで生き永らえるなり、その瞬間を見るためによみがえるなりしたとき、わが子の迫害者と抱擁し合っている母親を眺めながら、この俺自身までみんなといっしょに『主よ、あなたは正しい！』と叫ぶようなことが本当に起るかもしれない。でも俺はそのとき叫びたくないんだよ。まだ時間のあるうちに、俺は急いで自己を防衛しておいて、そんな最高の調和なんぞ全面的に否定するんだ。そんな調和は、小さな拳で自分の胸をたたきながら、臭い便所の中で償われぬ涙を流して《神さま》に祈った、あの痛めつけられた子供一人の涙にさえ値しないよ！」

（同）

さらに、

「俺だって赦したい、抱擁したい、ただ俺はあらかじめ断わっておくけど、どんな真理だってそんなべらぼうな値段はしないよ。結局のところ俺は、母親が犬どもにわが子を食い殺させた迫害者と抱擁し合うなんてことが、まっぴらごめんなんだよ！　いくら母親でも、その男を赦すなんて真似はできるもんか！　赦したけりゃ、自分の分だけ赦すがいい。母親としての測り知れぬ苦しみの分だけ、迫害者を赦してやるがいいんだ。しかし、食い殺された子供の苦しみを赦してやる権利なぞありゃしないし、たとえ当の子供がそれを赦してやったにせよ、母親が迫害者を赦すなんて真似はできやしないんだよ！　もしそうなら、もしその人たちが赦したりできないとしたら、いったいどこに調和があるというんだ？　この世界じゅうに、赦すことのできるような、赦す権利を持っているような存在がはたしてあるだろうか？　俺は調和なんぞほしくない。人類への愛情から言っても、まっぴらだね。それより、報復できぬ苦しみと、癒やされぬ憤りとをいだきつづけているほうがいい。たとえ俺が間違っているとしても、報復できぬ苦しみと、癒やされぬ憤りとをいただきつづけているほうが、よっぽどましだよ。それに、あまりにも高い値段を調和につけてしまったから、こんなべらぼうな入場料を払うのはとてもわれわれの懐ろではむりさ。だから俺は自分の入場券は急いで返すことにするよ。正直な人間であるからには、できるだけ早く切符を返さなけりゃいけないものな。俺はそうしているんだ。俺は神を認めないわけじゃないんだ、アリョーシャ、ただ謹んで切符をお返しするだけなんだよ」

（同）

（傍線は私・木下による）

ここまでのところを整理しますよ。

「神の創った世界、神の世界なるものを認めないのだし、認めることに同意できない」というイワンがその理由を説明するにあたっての前提は、「まさに身近な者こそ愛することは不可能なので、愛しうるのは遠い者だけ」ということでした。その際、「人間の顔」が愛の妨げとならないのはキリストだけだということを認めています。イワンは、しかし、「相手が子供なら、身近な場合でさえ愛することができるし、汚ならしい子でも、顔の醜い子でも愛することができる」ので、「子供たちの苦悩」に論点を絞ります。どんなことがあっても、「子供たちの苦悩」は償いえない、「この地上にはばかなことが、あまりにも必要」だし、「ばかなことの上にこの世界は成り立っている」んです。「この世界」とは、もちろん「神の創った世界、神の世界なるもの」のことです。「神の創った世界、神の世界なるもの」を認めないので、イワンは「神を認めないわけじゃない」けれど、「ただ謹んで切符をお返しする」というんです。

さて、ここで、イワンの論証の破れ目があるんです。彼の論証にはまだ一点、欠けている部分があります。

傍線部「この世界じゅうに、赦すことのできるような、赦す権利を持っているような存在がはたしてあるだろうか？」に、その破れ目・欠如が存在します。イワンはむろん、わざとこの破れ目・欠如をアリョーシャの前に提出したんです。

先の「ただ謹んで切符をお返しするだけなんだよ」のつづきはこうでした。

「それは反逆ですよ」アリョーシャは目を伏せて、小さな声で言った。

「反逆？　お前からそんな言葉を聞きたくなかったな」イワンがしみじみした口調で言った。「反逆などで生きていかれるかい、俺は生きていたいんだぜ。ひとつお前自身、率直に言ってみてくれ、お前を名ざしてきくんだから、ちゃんと答えてくれよ。かりにお前自身、究極においては人々を幸福にし、最後には人々に平和と安らぎを与える目的で、人類の運命という建物を作ると仮定してごらん、ただそのためにはどうしても必然的に、せいぜいたった一人かそこらのちっぽけな存在を、たとえば例の小さな拳で胸をたたいて泣いた子供を苦しめなければならない、そしてその子の償われぬ涙の上に建物の土台を据えねばならないとしたら、お

前はそういう条件で建築家になることを承諾するだろうか、答えてくれ、嘘をつかずに！」

「いいえ、承諾しないでしょうね」アリョーシャが低い声で言った。

「それじゃ、お前に建物を作ってもらう人たちが、幼い受難者のいわれなき血の上に築かれた自分たちの幸福を受け入れ、それを受け入れたあと、永久に幸福でありつづけるなんて考えを、お前は認めることができるかい？」

「いいえ、認めることはできません。兄さん」ふいに目をかがやかせて、アリョーシャが言った。「兄さんは今、この世界じゅうに赦すことのできるような、赦す権利を持っているような存在がはたしてあるだろうかと、言ったでしょう？　でも、そういう存在はあるんですよ、その人ならすべてを赦すことができます。すべてのことに対してありとあらゆるものを赦すことができるんです。なぜなら、その人自身、あらゆる人、あらゆるものたちのために、罪なき自己の血を捧げたんですからね。兄さんはその人のことを忘れたんだ、その人を土台にして建物は作られるんだし、『主よ、あなたは正しい。なぜなら、あなたの道は開けたからだ』と叫ぶのは、その人に対してなんです」

「ああ、それは《ただ一人の罪なき人》と、その人の流した血のことだな！　いや、俺は忘れてやしない。むしろ反対に、お前がいつまでもその人を引っ張りだしてこないんで、ずっとふしぎに思っていたくらいさ」

（同）

それまでのイワンの論証の破れ目・欠如――「この世界じゅうに、赦すことのできるような、赦す権利を持っているような存在がはたしてあるだろうか？」にある――というのは何でしょうか？　考えてみてほしいんですが、イワンのその問い――「赦す権利を持っているような存在がはたしてあるだろうか？」――に対して「そういう存在はない」という答えが返ってくるなら、イワンの論証は完結するんです。ところが、そうではありません。「そういう存在はある、それはあの《ただ一人の罪なき人》だ」という答えが返ってくるんです。

先に「銃殺です！」といい、「ばかなことを言ってしまいましたけど、でも……」といい、いまも「いいえ、承諾しないでしょうね」、「いいえ、認めることはできません」といったアリョーシャにもなしえないことを、かつてなしえたひとがただひとりだけいたんです。

「ああ、それは《ただ一人の罪なき人》と、その人の流した血のことだな！　いや、俺は忘れてやしない。むしろ反対に、お前がいつまでもその人を引っ張りだしてこないんで、ずっとふしぎに思っていたくらいさ」

（同）

ここで、キリストは、このイワンとアリョーシャの会話の最初にあったように――「人間に対するキリストの愛は、見方によれば、この地上では不可能な奇蹟だよ。なるほど、キリストは神だった。ところが、われわれは神じゃないんだからな」――単純に「神」として片付けられたりはしていません。ここでのキリストは「人間」です。それも、「知恵の実を食べてしまった」人間の大人としての存在でもありません。《ただ一人の罪なき人》なんです。しかも、彼は人間として血を流したのでもありました。

つまり、イワンはここまでの論証がアリョーシャを含めた「人間」には通用する――彼らを論破できる――ことを承知はしていても、ただひとりキリストにだけは通じないことを知っているんです。「《ただ一人の罪なき人》と、その人の流した血」にだけは、彼の理屈は通じません。イワンはこのひとにだけは頭が上がらないんです。このひとにだけには単純に「謹んで切符をお返しする」というわけにはいきません。キリストは、イワンのなかでそれほどまでに大きい存在なんです。イワンはキリストを信じています。キリストこそ、「神の創った世界、神の世界なるものを認めないのだし、認めることに同意できない」というイワンの前に立ちはだかる唯一の大きな存在なんですよ。

だから、イワンは今度は、さらにキリストに・キリストだけに向けて、自分なりの回答をしなくてはなりませんでした。それが叙事詩「大審問官」です。「大審問官」はこのためにあります。

それゆえ、「大審問官」においても、そのキリストの位置や意味は不動です。これは、動かしたら、イワンの回答が無効になってしまいます。イワンは必ず「《ただ一人の罪なき人》と、その人の流した血」に向けて回答しなくてはなりません。「その人自身、あらゆる人、あらゆるものたちのために、罪なき自己の血を捧げた」がゆえに「すべてのことに対してありとあらゆるものを赦すことができる」存在のままのキリスト、「人類全体」ではなく、「人間の顔」を持った生身のひとりひとりの人間それぞれを愛することのできるキリストという存在に回答しなくてはならないんです。これは絶対に動かすことができません。大審問官＝イワンは、その不動のキリストに向かって、ただ自分の考えを述べることしかできません。これはもう最初から作者イワンの承知していることでした。

そういうわけで、私はいいますが、

> この問いに答えるまえに、イワン＝ドストエフスキーがとる一つの奇妙な手法について、ふれなくてはならない。つまり、「大審問官」では、いちどとしてイエス・キリストの固有名詞が用いられていないということだ。もちろん、「彼」がイエスであるとすることは可能でも、そう訳すと、じつはミスを犯すことになる。なぜなら、これはあくまでイワンによって作られた物語詩であって、イワンがあえて「彼」をイエスとして同定しなかったことこそが重要なのである。キリストと書けばキリストに限定されるが、「彼」と呼ぶことにより、ある別人格的なものを付与することができる。いや、その「彼」はキリストのいわゆる僭称者ですらあるかもしれない。
>
> （同）

――ありえません。

イワンは、ただ自分の考えを述べることしかできません。

イワンの論証はここまでキリスト以外の人間を「論破」することができたわけですけれど、もうここからは「論破」云々ということのできないレヴェルに移行することになります。ここからは、叙事詩「大審問官」の読者――キリスト以外の人間――の共感を得られるかどうかということにはなるでしょうけれど、大審問官＝イワンがキリストそのひとに対して「論破」云々などというレヴェルで向き合うことなど絶対にできないんです。なぜかといえば、「あらゆる人、あらゆるものたちのために、罪なき自己の血を捧げた」がゆえに「すべてのことに対してありとあらゆるものを赦すことができる」存在のままのキリスト、「人類全体」ではなく、「人間の顔」を持った生身のひとりひとりの人間それぞれを愛することのできるキリストに、イワンが何をいおうが、その愛を変更させることなどできないからです。「論破」云々の土俵にキリストを引き入れることなんかできません。それでも「論破」云々にこだわって、その視点――もはや愚劣・低劣な視点としかいいようがありませんが――から無理やりいうなら、イワンにキリストを「論破」することはできません。イワンが何をいおうが、キリストには「すべてのことに対してありとあらゆるものを赦すことができる」んですし、「人類全体」ではなく、「人間の顔」を持った生身のひとりひとりの人間それぞれを愛することができるんですよ。最初からイワンの負けは決まっています。

これまた、そういうわけで、私はいいますが、

> 問題は、その「キス」の意味するところとは何か、その「キス」をどのような意味として大審問官は受けとめたのか、という点である。「彼」はその「キス」で、キリストみずからの絶大な力を、表明しようとして

いたのか。大審問官の驕りにはいずれ裁きが下る、歴史がいずれ審判を下すという、ある余裕に満ちた預言の代替行為だったのだろうか。それとも、歴史は動かせない、だからあなたの好きなようになさるがよいという、承認と、ことによると「祝福」のキスだったのか。

（同）

――亀山郁夫のこの問いは、もはや愚劣・低劣な視点としかいいようがありません。繰り返しますが、大審問官＝イワンはキリストを自分の土俵に引き入れることすらできないんです。「すべてのことに対してありとあらゆるものを赦すこと」ができ、「人間の顔」を持った生身のひとりひとりの人間それぞれを愛する《ただ一人の罪なき人》が、いったいどうして顔の見えない「人類全体」をしか愛せないひとりの人間の思想・行為を承認・祝福なんかするんですか？亀山郁夫がそれを可能だと思った時点で、彼が「《ただ一人の罪なき人》と、その人の流した血」をまったく理解できなかったことが露呈します。亀山郁夫は『カラマーゾフの兄弟』の読者として失格です。

さて、キリストに向けて、イワンが叙事詩「大審問官」において、どのような論点――といっても、キリストはそんなことには答えませんよ――を持ち出したかというと、こうです。「あらゆる人、あらゆるものたちのために、罪なき自己の血を捧げた」がゆえに「すべてのことに対してありとあらゆるものを赦すことができる」存在のままのキリスト、「人類全体」ではなく、「人間の顔」を持った生身のひとりひとりの人間それぞれを愛することのできるキリストの、その愛は人間にとってあまりにも大きすぎ、高すぎたというんです。

「だが、ここでもお前は人間をあまりにも高く評価しすぎたのだ。なにしろ彼らは、反逆者として創られたとはいえ、もちろん囚人だからだ。あたりを見まわして、判断するがいい。すでに十五世紀が過ぎ去ったけれど、お前が自分のところまで引きあげてやったのがどんな連中だったか、見てみるがいい。誓ってもいい。人間というのは、お前が考えているより、ずっと弱く卑しく創られているのだぞ！　その人間にお前と同じことがやりとげられるだろうか？　お前は人間を尊ぶあまり、まるで同情することをやめてしまったかのように振舞った。それというのも、人間にあまり多くのものを要求しすぎたからなのだ。しかも、それが誰かと言えば、自分を愛する以上に人間を愛したお前なのだからな！　人間への尊敬がもっと少なければ、人間に対する要求ももっと少なかったにちがいない。それなら、もっと愛に近かったことだろう。なぜって、人間の負担ももっと軽くなっただろうからな。人間は弱くて卑しいものだ」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

「われわれはお前の偉業を修正し、奇蹟と神秘と権威の上にそれを築き直した。人々もまた、ふたたび自分たちが羊の群れのように導かれることになり、あれほどの苦しみをもたらした恐ろしい贈り物がやっと心から取り除かれたのを喜んだのだ。われわれがこんなふうに教え、実行してきたのは正しかったかどうか、言ってみるがいい。われわれがかくも謙虚に人類の無力を認め、愛情をもってその重荷を軽くしてやり、われわれの許しさえあれば、人類の意気地ない本性に対して、たとえ罪深いことをやったからといって、はたしてそれが人類を愛さなかったことになるだろうか？　それに、どうして黙りこくって、そんなに柔和な目でしみじみわしを眺めている？　怒るがいい。わし自身お前を愛していないのだから、お前の愛などほしくない」

（同）

そうして大審問官は、自身としてははっきりキリストの愛を理解しているけれど、「弱く卑しい」人類のために「欺瞞を受け入れ」て、「人々を今度はもはや意識的に死と破滅へ導かねばならない。しかもその際、これらの哀れな盲どもが

せめて道中だけでも自己を幸福と見なしていられるようにするため、どこへ連れてゆくかをなんとか気づかせぬよう、途中ずっと彼らを欺きつづけねばならない」というんです。大審問官には「人間の顔」を持った生身のひとりひとりの人間それぞれを愛するなんてことはできませんから、「人類」を軽蔑しつつ愛することになるわけです。

大審問官の語る――キリストを前にしての――思想・行為の是非は当の大審問官自身がなにもかも承知しているわけです。是非はどうかといえば、非です。大審問官は、その非を承知で、敢えて自分の思想・行為を選択し、それをやりつづけてきたわけです。大審問官は、とにかくキリストに話したいから話すだけです。彼もキリストに自分の思想・行為の是非を問いません。キリストはただ、ひとりの苦悩する人間を前にしているだけだし、大審問官もひとりの苦悩する人間としてキリストの前にいるだけなんです。

つまり、「大審問官」とは、「謹んで切符をお返しする」というイワンの主張のキリスト向けヴァージョンだということになります。

くどすぎるのを承知でいいますが、大審問官にキスするキリストは、「あらゆる人、あらゆるものたちのために、罪なき自己の血を捧げた」がゆえに「すべてのことに対してありとあらゆるものを赦すことができる」存在のままのキリスト、「人類全体」ではなく、「人間の顔」を持った生身のひとりひとりの人間それぞれを愛することのできるキリストそのままでなければなりません。そのキスは彼の思想・行為に向けられたものでなく、ただ彼というひとりの苦悩する人間に向けられたものにすぎません。前回（＝その四）で私がいったように、キリストが大審問官の話を全然聞いていなかったということにしてもいいわけです。たとえば、大審問官の話しているのがスペイン語だったとして、キリストにはまるっきりスペイン語がわからなかったということにしてもいい、ということになります。イワンがそのつもりで「大審問官」を創作しただろうと私は考えます。

2

あなたが『カラマーゾフの兄弟』の「第五編　プロとコントラ」中のイワンとアリョーシャの会話から読み取らなくてはならないのは、何よりもまずこの作品における《ただ一人の罪なき人》イエス・キリストなんだと私はいいます。あなたがキリスト教について何も知らなかったとしても、イワンとアリョーシャの会話から逆に読み取っていってほしいんですね。これはまた、「自由」ということの大きさ・恐ろしさを、あなたが「大審問官」を読むことであらためて（あるいは初めて）認識するのと同じように、そうしてほしいんです。というのも、大審問官はキリストが人間に与えようとした「自由」がどれほど大きく・恐ろしいものであるかを問題にして、人間にはそんなものを受け入れる力がないと主張するからです。大審問官の思想・行為を理解するためには、絶対にキリストの愛がどのようなものであるかを知らなくてはなりません。

キリストの愛を受け入れることがどれほど困難であるか（キリストがどんなに「人間の顔」を持った生身のひとりひとりの人間それぞれに向けて手をさしのべつづけているか――を含んで）、人間にはどれほどこれが理解不能で、「恐ろしい贈り物」だと思われるか、ということがわからないと、「大審問官」を読むことはできません。

ここで私は再びキルケゴールの『死に至る病』から長い引用します。私がこれまで何度かアリョーシャに関して口にした「謙遜な勇気」ということばが出てきます。

いまここに一人の貧しい日傭取りと史上に類のない程の強大な権力を

もった帝王とがいるとする。この無上の権力をもった帝王が突如として使者をこの日傭取りの許に遣わすことを思いついたとしよう。帝王が自分の存在を知っているなどという考えはこの日傭取りの心には夢にも浮かんだことはなかったし、それは「その心未だ思わざりし所」であった。もしも帝王をただの一度でも仰ぎ見ることが許されることでもあればこの男は自分を無上に幸福な人間と感じて、それを彼の生涯の最大の事件として子々孫々に語り伝えることでもあろう。さてこの日傭取りのもとに帝王が使者を遣わして、帝王が彼を養子に欲しいと考えているということを彼に知らせるとする、――一体どういうことになるであろうか？日傭取りは、彼がそれを人間として人間的に受取るものとすれば、きっとすこしばかり戸惑いして（おそらく非常に戸惑いするかもしれぬ）何だか差ずかしいような困ったような気がすることだろう。彼にはそれが人間的には何かしら非常に奇妙なこと馬鹿げたことに思われる（これが人間的なことである）ので、こんなことは決してほかの人に話してはならないと考える。というのは知人や隣人がそれを聞いたら誰にもすぐ思いつくであろうところの解釈が既に彼の心の底にも頭を擡げてきているのである、――帝王は自分を馬鹿にしようとしておられるのだ、それで自分は街全体の笑いものになり、自分の漫画が新聞に載せられ、帝王の皇女との結婚話が大市で売られることになるのだ、と。いったい帝王の養子になるということのことは、むろんすぐにでも外的な現実となりうることなのであり、したがってまたこの日傭取りは、帝王がどの程度までそのことを真剣に考えているのかどうか、それとも帝王は貧乏人をただ馬鹿にしようとしているのか、その結果彼の全生涯を不幸なものにし、結局彼が気狂病院ででも終るようにしむけるつもりなのかどうか（というのは、いまの場合のように度のすぎたことをいうものは、容易にその反対に転化しうるものだから）、を自分の五官でたしかめうるはずもないのである。ところが小さな好意を示されたのであればこの日傭取りにも理解することができるであろうし、小都会に住んでいる人達もそれを理解することができよう、大いに尊敬せられるべき教養ある公衆も、すべての聡明な御婦人達も、要するにかの小都会の五十万の住民の一人一人（一体人口の点でもこの小都会も或いは相当の大都会であるのかもしれぬが、並はずれたものに対する感覚と理解の点ではまことにちっぽけな小都会なのである）がそれを理解しうるであろうが、日傭取りが帝王の養子になるなどということは、これはあまりといえばあまりのことである。ところがいま外面的な事実は全然問題にならないで、ただ内面的な事実だけが問題であるとする、したがって日傭取りを確信に導きうるようないかなる事実も存在せず、信仰のみが唯一の事実であるとする、そこで一切が信仰に委ねられているとする、――その場合でも彼の男にはあえてそれを信ずるだけの十分に謙遜な勇気があるであろうか？　というのは厚顔な勇気は信仰にまで導くことはできない。その場合一体それだけの勇気をもっている日傭取りが幾人いるであろうか？　そういう勇気をもたぬ者は、躓くであろう、並はずれたことが彼には彼に対する嘲笑のように響くことであろう。おそらくその場合彼は明らさまにまじめにこう告白するであろう、――「そういうことは私にはあまりに高すぎる。私はそれを理解することができない、（腹蔵なくいえば）それは馬鹿げたことのように思われる。」

さてキリスト教は如何！　キリスト教は、この個体的な人間が（したがってすべての個体的な人間、彼が日常どんな人間であろうと問題ではない、――男・女・下女・大臣・商人・床屋・学生等々）、この個性的な人間が神の前に現存していることを教える。彼がその生涯にたった一度でも帝王と話したことでもあるとすればおそらくそれを誇りとするであろうところのこの個体的な人間、もしも彼が少しばかり高貴な地位にある誰彼と親しい関係にあるとすればそれを少なからずも得意とするであろうところのこの人間、――この人間が神の前に現存していて、彼の欲するいかなる瞬間にも神と語ることができ、そして確実に神から聞かれることができるのである、要するにこの人間に神と最も親しい関係に生

きるように申し出られているのである！　そればかりではない、この人間のために、ほかならぬこの人間のために神は世に来り、人の子として生れ、苦しみを受け、そして死んだのである、――この受難の神がこの人間に向って、彼に申し出られている救助を受け入れてくれるようにと乞うている、いなほとんど嘆願しているのである！　実に、もし世に気が変になるほどの何物かがあるとすれば、これこそまさにそれである！　それを信ずることをあえてする程の謙遜な勇気をもっていない者は誰もそれに躓く。なぜであるか？　彼はそれを受け入れるだけの開かれた気持になることができないから。その故に彼はそれを取り除き、破壊して、それを気狂いじみた無意味なものであるということにしてしまわなければならない。それはあたかも彼を窒息せしめるものであるかのように思われるのである。

一体躓きとは何であるか？　躓きとは不幸なる驚嘆である。それ故にそれは嫉視に似ている。けれどもそれは嫉視している者それ自身に向けられたる嫉視である、――そこでひとは（もっと厳密にいうならば）自己自身に対して最も悪意を抱いているのである。自然人は神が彼に与えようとした並はずれたものを自己の狭量の故に受け入れることができない、そこで彼は躓くのである。

（キェルケゴール『死に至る病』　斎藤信治訳　岩波文庫）

いまの引用の後半「さてキリスト教は如何！」から最後までをもう一度読み返してみてください。ある意味で、これが『カラマーゾフの兄弟』の全体です。この小説に「躓き」を抱えていない人物がいますか？　自分を「嫉視」していない人物がいますか？「自己自身に対して最も悪意を抱いている」のでない人物がいますか？　全登場人物がそれぞれに「躓き」を抱えています。そうして、この小説の全体に、彼らへさしのべられた《ただ一人の罪なき人》の手が描かれていないでしょうか？　さしのべられたその手にそれぞれの登場人物がどのように反応するか、その応答が『カラマーゾフの兄弟』ではないですか？　そういう「応答の小説」として『カラマーゾフの兄弟』を読むことを私はあなたに薦めます。

アリョーシャの「あなたじゃない」も、そのようにさしのべられた手のひとつです。「あなたじゃない」は、イワンの自分自身への「嫉視」・「悪意」の否定です。さらにいえば、実は、イワンだけでなく、この「あなたじゃない」を必要としていない登場人物が『カラマーゾフの兄弟』にいるでしょうか？

どうでしょう？　これでもまだあなたには、キリストのキスが大審問官の思想・行為を承認・祝福するものだなんて考えられますか？

3

というわけで、ここまでのところを理解していただいた方に私がプレゼントするのは、ものすごく読解力のない呆れた二人組による力みかえった傑作対談（私はこの対談の全部を読んでいません）からの引用です。

亀山　とすると、つまり、フロマートカ的に解釈すると、キリストは、大審問官の前で自己批判するために降り立ったという理屈になりますね。ドストエフスキーの思想上の真意は、イワンにあった、ということになる。ある意味で、革命肯定の思想です。

佐藤　その通りです。フロマートカは、基本的に革命を肯定的にとらえています。

亀山　そういう文脈で、「大審問官」を読み替えることもできるわけか。たとえば、イワンは、最後にわざわざキリストが大審問官にキスする場面を描いている。前日に、「大審問官」は、百人の異端派を火あぶりにし

ているわけですよ。その「大審問官」にキリストがキスをするというのは、どういう意味でしょうか。ギリシャ語（コイネー）で言われる「祝福」、あれは、神への賛美や信仰の共有をひとつの絶対的な前提、他人、他者に対して神の恵みをとりなすことを意味するわけですよね。大審問官よ、やめなさい、いずれ神の罰が下ります、という警告でないことは確かです。勝手にどうぞ、私は知りませんよ、ともとれないでしょう。むろん、キリストが自分の無力さの自覚を大審問官に告白しているわけでもない。無神論者のイワンからとらえると、その行為はどうなるのか。ほかでもない、現実に対する肯定であり、許しを意味せざるをえなくなるわけです。許す、ということは、仕方ないという認識につながっています。「仕方がない」は、消極的な肯定をおのずから意味することになる。興味深いのは、「大審問官」の物語詩を語り終えたイワンに、アリョーシャが何も言わずにキスすることです。イワンが「いまのキス、さっきの盗作じゃないか！」と叫ぶように、明らかにアリョーシャのキスは、キリストの大審問官へのキスを反復しています。「大審問官」の作者は、イワンです。ですから、キリストのキスは、イワンの世界観の反映としてあるはずです。逆にアリョーシャのイワンへのキスの場面は、おそらくドストエフスキーの……

　このキスについて、以前から自分なりの解釈をもっていて、ドストエフスキーが果たせなかった『カラマーゾフの兄弟』続編でも、このモチーフは何らかの形で反復されただろうと想像しています。つまり、アリョーシャは、皇帝暗殺をほのめかすコーリャ・クラソートキンに対して、同じキスを反復するのではないかと空想しているんですよ。

佐藤　ここでの「キス」は、理論から実践への質的な転換を表すのではないでしょうか。「おしゃべりはいらない」と口を封じ、あとは行動のみあるという。受肉を象徴的に示しているのだと思います。

亀山　つまり、励ましのキスということですよね。「大審問官」に即していうと、現世の民のパンのためであれば、つまり、パンを分配するシステムを守るためであれば、「火あぶり」を続けるのも仕方ない、という。イワンは、ひょっとするとそう考えていたかもしれませんね。「神がなければ、すべては許される」と考えるぐらいの人ですから。そもそも、イワンは、このキリストのことを、一度としてキリスト呼ばわりしていないんですよ。彼、としか呼んでいない。ということは、非常に怪しい存在であるわけです。でもですよ、「続編」のアリョーシャについては、とうていそこまでは言えません。もっとあいまいなものだと思います。そのあいまいさにすべての文学的真実が含まれているわけですからね。

（亀山郁夫＋佐藤優『ロシア　闇と魂の国家』　文春新書）

はいはい、「文学的真実」ね。

佐藤　大審問官の物語においては、「臭い」が舞台装置として有効に使われていると思います。結局、キスによって、これまでの大審問官の行ないは何も変らないけれど、「励み」になっている。

亀山　繰り返すようですが、大審問官を「励ました」のがキリストであり、そうするようにキリストをそそのかしているのが、物語詩「大審問官」の作者であるイワンであり、イワンをそそのかしたのが、『カラマーゾフの兄弟』の作者ドストエフスキーという構造になる。言い換えると、大審問官をそそのかすのは、キリストであり、ドストエフスキーでもあるという、これも一種のポリフォニー（多声形式）ですかね。

佐藤　そう思います。そこからイワンの「すべてが許される」という発言が、彼の単独の思想ではなく、重層的なイデオロギーとして浮かび上がってくるのだと思います。

亀山　そうなんです。そのひと言が、父フョードル殺害を下男スメルジャコフにそそのかす。そういう意味では、父親殺しの犯人はスメルジャコフでもあり、イワンでもあり、イワンにキスするアリョーシャでもある。原罪のレベルでいけば、結局アリョーシャにまで辿りつくわけです。

アリョーシャはじっさいに、子どもを猟犬に噛み殺させた元将軍の地主を、「銃殺にすべきだ」と言っているくらいですから。彼は、どんなことがあっても、原罪をまぬがれてはいない。アリョーシャのキスはまさに犯罪です。

（同）

はいはい、そうですか、「アリョーシャのキスはまさに犯罪」なんですね？

亀山　それって、ある意味でものすごく内向的な論理ですよね。たいがいは、現実の悪を是認するところで終わってしまう。現世とはそのようなものでしょう。ただ、「大審問官」に立ち返っていうと、大審問官の前に現われたのは本当にキリストだったのか、という問題があるわけです。さっき、佐藤さんは、ドストエフスキーの真意は「大審問官」の側にある、というフロマートカの意見を参照なさってましたが、それとも関連して、僭称者という問題がここでも出てきているような気がしているんです。最近、斎藤美奈子さんが、今回の『カラマーゾフの兄弟』の翻訳の成功は、ここの部分を、キリストと明示しなかったことだ、というようなことをおっしゃってくださっているんですが、さっきも少し言いましたように、実際にイワンはいちども彼を、キリストとは呼んでいないのです。ぼくの訳以外はすべて「キリスト」と名指している。じつは、これは変なんです。ぼくのなかには、これは、もしかすると、キリストの名を騙る悪魔ではないのか、という予感めいたものがあるからです。第一、イワンとアリョーシャの関係というのが、悪魔とキリストの関係であるわけですよね。

（同）

斎藤美奈子が実際に何といったか知りませんが、亀山郁夫はそれを褒めことばだと思っていていいんでしょうか？

佐藤　ただ、いくら「大審問官」が多義的に読める文章になっているにしても、「彼」を「偽キリスト」で読むと、物語の枠が狭くなりすぎませんか。ニセモノを排して、ホンモノを探せという結論が容易に導き出されます。これでは底が浅すぎると思います。

亀山　そうですね。底が見えてしまう。ですから、さっきも言いましたが、キリストか、悪魔か、わからないあいまいさに文学的真実があるということです。

（同）

ありません。

（二〇〇八年十月十九日）

「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」その七

1

今月発売の文春新書『なにもかも小林秀雄に教わった』（木田元）を私が購入したわけは、著者がキルケゴールとドストエフスキーについて書いているからなんですね。実はここしばらく、私はネット上で「木田元」・「キルケゴール」・「ドストエフスキー」の組み合わせで検索をしていたんです。数年前、あるいは十数年前に、岩波文庫の小冊子だったのじゃないかと思いますが――私はそれを持っていません――木田元がキルケゴールをドストエフスキーの「注解書」として読んだという内容の文章があったのを覚えていたからです。私は亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』批判のこの一連の文章で、何度もキルケゴールの『死に至る病』を引用することで論を進めてきました。これは、以前にもいいましたが、そもそも私が『死に至る病』を――金をもらって友人（ミッション系大学学生）のレポートを代筆するために――読んで大きい衝撃を受けた後にドストエフスキーの最後の長編小説群を読んだせいで、両者が分かちがたくなっているからなんです。ドストエフスキーを読んだとき、私は「あ、これはキルケゴールだ」と思ったんですね。だから、いまはうろ覚えの木田元の文章を読んだときには、彼が何をいっているのかすぐにわかりました。また、木下豊房は私の文章について「キルケゴールの「死に至る病」を引用して、イワンの「不幸な意識」の構造を説明しているのは、正しいし、国際的なドストエフスキー研究者の場で発表しても評価に耐えうる視点である」といってくれてもいます。

しかし、私はキルケゴールとドストエフスキーがいったいどういうつながりでこんなことになっているのか、わからずにいました。

この新刊で木田元はこう書いています。

接点がないドストエフスキーとキルケゴール

さきほどもちょっとふれたように、そのうち私はキルケゴールの『死に至る病』をドストエフスキーの作品の注釈として読むという妙なことをはじめた。

妙なことといったのは一八一三年にコペンハーゲンに生まれ、五五年にその地で歿したデンマークの思想家キルケゴールと、一八二一年に生まれ八一年に歿したロシアの作家ドストエフスキーのあいだには、十九世紀の同時代に共にヨーロッパの辺境で生きたという以外に、どちらかがどちらのものを読んだというような関係はまったくないからだ。キルケゴールが著作活動をおこなったのは一八四三年から五〇年代前半にかけてであり、それはデンマーク語でおこなわれたため、二十世紀の初頭に独訳が出されるまでデンマーク以外ではほとんど知られることがなかったし、一方ドストエフスキーが精力的に著作活動をおこなうのは一八六〇年代、七〇年代である。影響関係などなくて当然であろう。

だが、二人とも一時期中央ヨーロッパに出かけ、信仰が世俗生活に完全に溶けこんでしまっているプロテスタント文化に絶望して故国に帰り、キルケゴールは原始キリスト教を、ドストエフスキーはロシア正教を拠りどころにしてその批判的克服を念じたという共通点があるせいか、この二人の思想には深く通低するところがある。たとえば、キルケゴールの言う〈死に至る病〉とは〈絶望〉のことであるし、ドストエフスキーの言う〈悪霊〉つまりルカ伝で言われている〈悪鬼に憑かれたり し人〉というのも、絶望した青年たちのことであるにちがいない。だからこそ、『死に至る病』をドストエフスキーの注釈として読み、ドストエフスキーの小説を『死に至る病』で展開されている絶望の類型学・形態学の例証として読むことができるのである。私は、いまだにこの読み比べをかなり有効な思いつきだったと思っている。

（木田元『なにもかも小林秀雄に教わった』　文春新書）

つづく文章のしばらく後に、木田元はこう書きもしています。

こんなふうに多少の牽強付会を恐れずに対比させていくと、まるでキルケゴールがドストエフスキーの作品の登場人物一人ひとりの心理分析をしてくれているように思えてくるし、逆にキルケゴールのかなり抽象的な「哲学的」表現がドストエフスキーの作品によって具象的に図解され、理解しやすくなるように思えてくる。

（同）

私も同じように両者を読んできたと思います。それでも、私にはこの読みかたが特異だとは思われなかったんですね。むしろ、研究者の間でもごくふつうの読みかたなのじゃないかという認識でいたんです。どうもそうではないらしいですね。

しかし、トーマス・マンの『ファウストゥス博士』で、ニーチェをモデルにした主人公が悪魔と対話――もちろん『カラマーゾフの兄弟』を踏まえて、です――する直前まで読んでいたのはキルケゴールの著作でもありました。もっとも、どうやらマンもこの作品の執筆時に初めてキルケゴールを読んだのらしいんですが。

2

さて、私はまだ『なにもかも小林秀雄に教わった』のごく一部しか読んでいませんが、一箇所誤りを見つけました。私の想像では、これは著者木田元の誤りではなく、編集者が誤り、校正者もそれに気づかなかったということでしょう（おそらくこの本は、大きい章立ておよび章題は著者自身、各章内の小見出しは編集者によるものだろうと私はにらんでいます）。私は、自分の勤める書店を担当している文芸春秋の営業に電話をして、これを告げました（十月二十一日）。今後、重版がかかれば訂正されると思います。

木田元による文章はこうです。

……という徹底したエゴイズムに立てこもる「地下室の人間」であろうとするドストエフスキーをトルストイと対比し、善悪の彼岸に身を置こうとするニーチェをそのドストエフスキーの哲学の後継者として捉えてみせるシェストフのこの評論……

（同）

ところが、この文章の小見出しはこうなっています。

ドストエフスキーをニーチェの後継者と捉えたシェストフ

さかさまです。ぎょっとしましたよ。最初は、「またか！」と思ってしまいました。しかし、おそらく木田元は悪くありません。

なぜ私が「またか！」と思ったのかといえば、こうです。話は「集英社新書」に移ります。この件について私は集英社に連絡をしていません。

先日、私はまた怒りを通り越して、やりきれなくなったんですが、それというのも、私は自分の勤める書店で加賀乙彦の『小説家が読むドストエフスキー』（集英社新書）をぱらぱらとめくっていて、こういう文章に行き当たったんですね。

この考え方の一番の中心になっていた哲学者が「神は死んだ」と言ったニーチェです。ニーチェの超人思想は近代的自我が最も肥大した形で出てくるもので、ドストエフスキーもニーチェからの引用というか、ニ

ーチェの影響を大きく受けていて、たとえば『悪霊』の……

（加賀乙彦『小説家が読むドストエフスキー』集英社新書）

この本は、加賀乙彦が朝日カルチャーセンターで行なった講義をもとに作られたらしいんです。悪いのは加賀乙彦なんですが、それより私が怒りを覚えたのは、この本の編集者に対してですよ。こんなひとが集英社で編集をやっているわけです。彼は、ただ「加賀乙彦先生」の原稿をありがたくいただいて、それをそのまま印刷に回しただけです。原稿内容はノーチェックです。加賀乙彦のでたらめは野放し状態です。ちょっと調べればわかることなんですよ。というか、そもそも、こんなこともわからない人間がこの本の編集者だというのがおかしい。いや、ドストエフスキーをまったく読んでいないひとがこの本の編集に携わるということもあるでしょう。しかし、それならそれで少しは勉強しないんですか？　あるいは、著者と突っ込んだ対話をしないんですか？　編集者本人もちんぷんかんぷんなまま仕事をするんですか？　何も知らない読者は、へえ、ドストエフスキーはニーチェの影響を受けているのか、と信じてしまいます。そういうことへの想像力も、注意力もない。彼はただ加賀乙彦に「原稿ありがとうございます」といっただけです。

ドストエフスキー（一八二一―一八八一）の『罪と罰』（一八六六）、『悪霊』（一八七一）、『カラマーゾフの兄弟』（一八八〇）という年代的事実に対し、ニーチェ（一八四四―一九〇〇）のいわゆる「超人思想」がどのあたりからのものかというと、一八八〇年以降なんですよ。ニーチェはドストエフスキーを知っていましたが、逆はありません。

3

いったい、編集者の仕事というのは何なんでしょうか？

約一年半に及んだこの翻訳が完成にいたるまで、わたしは多くの方々のお世話になっている。ロシア語のわからない部分を教えてくださったエレオノーラ・サブリナ先生、ガリーナ瀧川先生をはじめ、読書ガイドや解題の執筆のための資料集めをしてくださった方々にお礼を言わなくてはならない。東京大学大学院でロシア教育史を研究され、現在、北海道大学スラブ研究センターで研究員をつとめる青島陽子さんにはとくにお礼を述べたい。映画字幕のいまや押しもおされぬ大御所・太田直子さんにもこの場を借りてひとことお礼を述べておこう。「餓鬼（がきんこ）」の訳語の発案者は彼女である。さらにドストエフスキーの熱烈な愛読者である若い友人の近澤雅也君には、二十代の目から私の訳がどう見えるか、語彙の選択の点でさまざまなアドバイスと工夫を仰ぐことになった。

マーゾフの　また、このあとがきの場を借りて、「古典新訳文庫」全体の責任者であり、翻訳の貴重なチャンスを下さった駒井稔編集長にも重ねがさねお礼を述べたい。同氏の驚くべき博識と熱意に、この途方もない翻訳に向かうわたしの意志は固まった。また、わたしの住む町まで朝早くから原稿をとりに足を運んでくださった名編集者、今野哲男さんにも感謝を述べたい。お名前はあげないが、献身的な努力を惜しまなかった校閲の現場の方々にも、印刷所の方々にも、ひとことお礼申し上げたい。

そしてわたしがいま、だれにもまして感謝の気持ちを伝えなくてはならないのが、本書の編集担当者である川端博さんである。この一年半、真夏日のロードレースにも似たつらい作業のなかで、文字通り、喜怒哀楽をともにしてくださった川端さんのあたたかい伴走がなければ、こうして制限時間内に無事ゴールにたどり着けたかどうか、はなただ心もとない。翻訳が、いかに社会的責任を伴うものだとはいえ、この仕事だけは恐ろしい苦しみとストレスを伴った。正直のところ、自分の能力の限界との戦いだったのである。苦あれば楽ありのたとえではないが、それでもやはりかけがえのない一年半だった。原稿の受け渡しのたびに交わ

しあう『カラマーゾフの兄弟』論は、それだけでも優に新書二冊分ぐらいの中身の濃いものだったはずである。こうして川端さんとの楽しい語らいをとおして、わたしはいつしかこんな夢を見るようになった。

日本のどこかで、だれかが、どの時間帯にあっても、つねに切れ目なく、お茶を飲みながら、あるいはワインを傾けながら、それこそ夢中になって『カラマーゾフの兄弟』を話し合うような時代が訪れてほしい、と。

（亀山郁夫「訳者あとがき」）

ここに名前の挙がっているひとたち――駒井稔と川端博を除いて――は、これでいいんですか？　自分の協力した仕事がこんなものだったことに驚愕・仰天しないんですか？　亀山郁夫に抗議するなり、自分の名前の削除を要求したりしないんですか？

また、「恥知らずの大馬鹿者」駒井稔はともかく、直接の編集担当者川端博は『カラマーゾフの兄弟』について「優に新書二冊分ぐらいの中身の濃い」話をしたって、いったいどんな話をしたんですか？　大審問官の話を聞いていたのは、やっぱりキリストの僭称者に違いありませんよねえ、なんてうなずいていたんですか？　アリョーシャのキスは犯罪ですよねえ、なんて目から鱗が落ちる思いだったんですか？　おかしいと思わなかったんですか？　訳者を誤ったという認識はなかったんですか？　おかしいおかしいと思いながらも、駒井稔に「いいからやれ」といわれつづけていたんですか？

そして亀山郁夫。「翻訳が、いかに社会的責任を伴うものだとはいえ」って、誰がそんなことを考えているんですか？　あなたじゃありません。考えていたら、訳を引っ込めるしかないでしょう。まして『罪と罰』に手をつけたりなんかできません。

さらに十月十九日付け朝日新聞に掲載された光文社による全面広告――亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』と『罪と罰』！

ドストエフスキー甦る

彼が恐れていたのは、神なき世界の訪れであり、

「神がなければすべては許される」のひとことは、その不安の証だった。

――なんですか、これは？

そこに文章を寄せている佐野洋子、関川夏央、高橋源一郎、辻原登、沼野充義の五名にはまったく失望しました。なかでただひとり、高橋源一郎だけが直接に亀山訳に触れていないんですが、もし彼が亀山訳にこだわらずにただ「ドストエフスキーの読者」が増えさえすれば何でもいいと考えていたのであれば、五名中最も罪深いですね。

私は以前（初稿は二〇〇六年三月）にこう書きましたっけ。

このごろは書店員を「本読みのプロ」なんてふれこみで宣伝に使う出版社も少なくありませんが、書店員が「本読みのプロ」のわけがないでしょう。いや、そもそも「本読みのプロ」っていったいなんなんですか？　こういう安易な形で書店員を称揚するメディアを信じてはいけません。

結局のところ、本を読むことのできるひとと、できないひとがいるというだけじゃないでしょうか？　書店員のなかにも本を読むことのできるひとと、できないひとがいる、というだけのことです。これは、本の宣伝（帯や広告などで）に協力している、名の知られた作家や文芸評論家にも当然にいえることで、このひとたちのなかには、おそらく、ゲラを読むことを承諾した時点ですでに、その作品が駄目な場合でも仕事を断わらない（断わるなど思いもしない）、つまり、自分は「この作品を褒めてください」といわれたから褒めるのだ、というひとがいますね。

あるいは、そんなのは優しすぎる見かたで、ほんとうは駄目な作品を見抜くことすらできないのかもしれませんが。そういうひとたちの、こちらがあきれ返ってしまうような文章が氾濫しています。

（「航行記（第一期）」（四））

――という具合で、亀山訳『カラマーゾフの兄弟』をめぐっての出版・放送界に潜む問題も、実は確信犯的なものではなくて、単に業界人の低レヴェル化による当然の帰結なのかもしれない、と私は考えざるをえないわけです。

いま私が思い浮かべているのは、次の文章です。

大庭宗昔の約四十年前に発表したエッセイ『批評の射程』中に、左のような一節がある。

［前略］

今日の特徴もしくは問題は、次ぎのような諸事情にある。

その一は、「文芸物をその間にちょいちょい」的作者［下等作者］たち、その近似的作者たち、ひいては「近年の傑作」六十点内外の作者［中等作者］たちが、七十点台ないしそれ以上の小説制作者［上等作者］と彼ら自身を錯覚していかねない――表向きは、いちおうともあれ、内実は、大いに錯覚している――という有様である。

その二は、大膨張した読者群の相当な部分が、そういう作者らの妙な錯覚的自信をそっくりそのまま承認・支持している、というような動向である。

その三は、妙な錯覚的自信の根拠が、主としてその作物の量産、その売れ行きの量的優勢、その映画・テレヴィ・ラジオ化、そこから来る収入の多大にある、という状態である。

その四は、そのような状態の中で、世俗の金持ち崇拝・貧乏人蔑視的な風潮が、文学世界にもようやく行き渡り、作家・作品の価値が、専門家相互の間でさえも、ただに仕事量と収入との多寡によって計られかねない、というような意識的ないし無意識的な傾向である。

その五は、ジャーナリズムないしマス・コミュニケーションが、「巨大」とか「強力」とか「圧倒的」とか「支配的」とかの形容詞を常に「如実に」かぶせられつつ、「その一」から「その四」までの状況の出現・成立・発展に、その主力を傾けている、という実情である。

その六は、特に「その二」、「その四」との関連において、批評家たちのしかじかかくかくの消極的・退嬰的な現状である、と私は、説明するべきであるが、主題の展開上それをしばらく差し置く。

その七は、このような諸条件の下、六十点以上の実作［中等以上の文学］は、払底し、加うるに七十点以上の制作［上等の文学］への志向も機運も潜勢力も、ほとんど見出されない、という満目荒涼である。

［後略］

……（中略）……

……そこでは、「ボーダーレス」は、主として、〝純文芸作物と通俗・大衆・エンターテインメント作物との間に境界・差別はない〟の意味で言われる。元来、それはそうあるべきであり、その命題に、僕は、かねてより僕がそうであったとおなじく、基本的に賛同する。いわゆる「通俗・大衆・エンターテインメント作物」の上部が、いわゆる「純文芸作物」の底辺よりも文芸的に優れている、という近年――「文芸の地盤沈下」が、ますます顕著に取り沙汰をせられた近年――の現実を踏まえて、僕は、なおさら基本的に賛同する。だが、そこに問題が、存在する。……

……もちろん〝純文芸作物と通俗・大衆・エンターテインメント作物との間に境界・差別はない〟ということは、〝文芸作物に、上等下等の区分なり優劣の開きなりはない〟ということではない。ところが、「ボーダーレス」は、「現今人間多数の精神態様・俗情」との関係によって、その「マ

イナスの面」において活動し、「悪平等」ないし「玉石混淆積極的是認」すなわち〝文芸作物に、上等下等の区分なり優劣の開きなりはない〟という命題の横行を指向・発現しつつある。……

……約四十年前・君や僕やが生まれた時分に、大庭さんは、『批評の射程』を書いて発表した。そのエッセイを、――なかんずく当時の文芸ジャーナリズム世界の実相が箇条書きに整理せられた「その一」～「その七」を、僕は、今日の状況に照らして、予言的と考える。

……（中略）……

……全国紙の全面広告・全五段広告・半五段広告などで、「二十世紀掉尾を燦然と飾る（日本文学の）傑作」などと鉄面皮なオダを上げて提灯持ちをしているチンケな「書評家」、そういう無責任な超誇大広告と結託する多数「俗情」が結果する「せいぜい中くらいな作物の何十万部突破」ベスト・セラー化現象、――文芸分野における「ボーダーレス」のいよいよ決定的な「悪平等」ないし「玉石混淆積極的是認」！……

（大西巨人『深淵』光文社文庫）

（二〇〇八年十月二十一日）

「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」その八

一連の文章のつづきは、もちろんいまも書き進めているんですが、まだ公開まで時間がかかるため、ここで合間に引用を三つ。

一つめ。

若い世代が古典に親しめるような工夫が必要だ。

今年、夏目漱石や森鴎外の小説を収めた文庫本が、現代の人気漫画家らによるカバーに変わったことで若者の目を引いた。

海外の古典では、ドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」の新訳が計一〇〇万部を超えるベストセラーになった。

古典に現代の光を当てることで新たなファンを呼ぶのだろう。

（読売新聞　社説　二〇〇八年十一月二日）

二つめ。

ノーボスチ通信は一日、ロシアのメドベージェフ大統領が、ロシア文化普及の貢献者に贈るプーシキン・メダルを東京外国語大学の亀山郁夫学長（五十九）に贈ることを決めたと伝えた。

（朝日新聞　二〇〇八年十一月二日）

三つめ。

「いいかい、見習い僧君、この地上にはばかなことが、あまりにも必要なんだよ。ばかなことの上にこの世界は成り立っているんだし、ばかなことがなかったら、ひょっとすると、この世界ではまるきり何事も起ら

なかったかもしれないんだぜ」
（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

（二〇〇八年十一月二日）

「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」その九

1

さて、「その四」・「その六」で、私は『カラマーゾフの兄弟』におけるキリストの位置・意味を問題にしました。「その人自身、あらゆる人、あらゆるものたちのために、罪なき自己の血を捧げた」がゆえに「すべてのことに対してありとあらゆるものを赦すことができる」存在、「人類全体」ではなく、「人間の顔」を持った生身のひとりひとりの人間それぞれを愛することのできるキリストという存在ですね。それは、この作品における「愛」にふた通りある――「人類全体」を愛するもの（大審問官に代表される）と、「人間の顔」を持った生身のひとりひとりの人間それぞれを愛するもの（キリスト）――ということから導き出されました。私は、キリストの愛――人間に「自由」を与える――がどれほど大きいものであって、人間にそれを受け入れることがどれほど困難であるかを、キルケゴールの『死に至る病』を引用しながらしゃべりました。そうして、『カラマーゾフの兄弟』におけるキリストの位置・意味をまったく理解できていない亀山郁夫の「キリスト僭称者説」を否定し、キリストのキスが大審問官への「承認・祝福」だという説をも否定しました。

もう一度キルケゴールを引用しておきます。

さてキリスト教は如何！　キリスト教は、この個体的な人間が（したがってすべての個体的な人間、彼が日常どんな人間であろうと問題ではない、――男・女・下女・大臣・商人・床屋・学生等々）、この個性的な人間が神の前に現存していることを教える。彼がその生涯にたった一度でも帝王と話したことでもあるとすればおそらくそれを誇りとするであ

ろうところのこの個体的な人間、もしも彼が少しばかり高貴な地位にある誰彼と親しい関係にあるとすればそれを少なからずも得意とするであろうところのこの人間、――この人間が神の前に現存していて、彼の欲するいかなる瞬間にも神と語ることができ、そして確実に神から聞かれることができるのである、要するにこの人間に神と最も親しい関係に生きるように申し出られているのである！　そればかりではない、この人間のために、ほかならぬこの人間のために神は世に来り、人の子として生れ、苦しみを受け、そして死んだのである、――この受難の神がこの人間に向って、彼に申し出られている救助を受け入れてくれるようにと乞うている、いなほとんど嘆願しているのである！　実に、もし世に気が変になるほどの何物かがあるとすれば、これこそまさにそれである！　それを信ずることをあえてする程の謙遜な勇気をもっていない者は誰もそれに躓く。なぜであるか？　彼はそれを受け入れるだけの開かれた気持になることができないから。その故に彼はそれを取り除き、破壊して、それを気狂いじみた無意味なものであるということにしてしまわなければならない。それはあたかも彼を窒息せしめるものであるかのように思われるのである。

一体躓きとは何であるか？　躓きとは不幸なる驚嘆である。それ故にそれは嫉視に似ている。けれどもそれは嫉視している者それ自身に向けられたる嫉視である、――そこでひとは（もっと厳密にいうならば）自己自身に対して最も悪意を抱いているのである。自然人は神が彼に与えようとした並はずれたものを自己の狭量の故に受け入れることができない、そこで彼は躓くのである。

（キェルケゴール『死に至る病』　斎藤信治訳　岩波文庫）

それで、私は右の引用を受けてこういいました（「その六」）。

ある意味で、これが『カラマーゾフの兄弟』の全体です。この小説に「躓き」を抱えていない人物がいますか？　自分を「嫉視」していない人物がいますか？「自己自身に対して最も悪意を抱いている」のでない人物がいますか？　全登場人物がそれぞれに「躓き」を抱えています。そうして、この小説の全体に、彼らへさしのべられた《ただ一人の罪なき人》の手が描かれていないでしょうか？　さしのべられたその手にそれぞれの登場人物がどのように反応するか、その応答が『カラマーゾフの兄弟』ではないですか？　そういう「応答の小説」として『カラマーゾフの兄弟』を読むことを私はあなたに薦めます。

アリョーシャの「あなたじゃない」も、そのようにさしのべられた手のひとつです。「あなたじゃない」は、イワンの自分自身への「嫉視」・「悪意」の否定です。さらにいえば、実は、イワンだけでなく、この「あなたじゃない」を必要としていない登場人物が『カラマーゾフの兄弟』にいるでしょうか？

あなたは『カラマーゾフの兄弟』を読みながら、登場人物の誰かが――ものすごくおおざっぱにいいますが――、「どうせ自分はこういう人間なんだから」・「どうせあんたたちは私をそんなふうにしか見ていないんだろう？」というふうに考えることによって、自分自身と他人とを傷つける言動をしてしまう、そうしてそれがやがて取り返しのつかないことになっていく、というのをさんざん見てきたのじゃないでしょうか？

「どうせ自分はこういう人間なんだから」・「どうせあんたたちは私をそんなふうにしか見ていないんだろう？」――それが、その人物の自分自身に対する「嫉視」であり、「悪意」なんですよ。その人物が――いろんな事情もあるでしょうが――自分でも醜いと考えているもの（「それこそが私なんだ」）を抱え込んで離さないでいること、ですね。この態度が、せっかくさしのべられた《ただ一人の罪なき人》とそれに準ずるひとの手を拒みます。単純にいえば、「どうせ自分はこういう人間なんだから」・「どうせあんたたちは私をそんなふうにしか

見ていないんだろう?」というふうに考えるひとが、他人の好意を否定し、極端な場合には、それを踏みにじって自分と他人とをひどく傷つけるということです。こういってしまうと、この世のなかのほとんどの小説がそうだよ、といわれてしまいそうでもありますが、しかし、『カラマーゾフの兄弟』は、おそらく執拗に登場人物たちと《ただ一人の罪なき人》との「応答」を描いて、ものすごく動的な作品として成立していると思うんです。

いくつか引用をします。

まずスネギリョフ。

「まあお聞きください、あなた、お聞きくださいまし、もしこれを受けとったら、手前は卑劣漢になりはしないでしょうか? あなたからごらんになって、卑劣漢になりはしないでしょうか、卑劣漢に、アレクセイ・フョードロウィチ? いけませんよ、アレクセイ・フョードロウィチ、まあお聞きください、お聞きくださいまし」のべつ両手でアリョーシャにさわりながら、彼はあせって言った。「あなたさまは、《妹》がよこした金だからと言って、ぜひ受けとるようよう手前を説得なすっておられますが、内心ひそかに軽蔑をお感じになるのじゃござりませんか?」

(ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』 原卓也訳 新潮文庫)

この後で——直後ではありませんが——スネギリョフは自分が「卑劣漢」ではないことを納得して——アリョーシャが彼に「謙遜な勇気」を与えたんですね——金を受け取ることになります。

そうして「神秘な客」。

「それに、そんな必要があるでしょうか?」彼は叫んだ。「必要ですかね? だってだれひとり有罪になったわけじゃなし、わたしの代りに流刑になった者もいないんですよ。召使は病気で死んだのです。流した血に対して、わたしは苦しむことによって罰せられたのです。それに、わたしの話なぞ全然信じてもらえませんよ、わたしのどんな証拠だって信じてくれるものですか。それでも告白する必要があるでしょうか、必要なんですか? 流した血に対してわたしはこれからも一生苦しむ覚悟です、ただ妻や子供たちにショックを与えたくないのですよ。妻を道連れにするのが、はたして正しいことでしょうか? われわれは間違ってやしませんか? それならどこに真理があるのです? それに、世間の人たちにその真理がわかるでしょうか、その真理を正しく評価し、尊敬してくれるでしょうか?」

(同)

この「神秘な客」にはゾシマが、妻子や世間のひとたちの前でなく、神の前に立つことを説きます。これまた直後ではありませんが、「神秘な客」は「謙遜な勇気」を持ってその通りにします。

ここで思い出しておきたいのが、スメルジャコフのこれですね。

「何もかも自白なさったりすれば、あなたはあまりにも恥さらしなことになりますよ。何より、まるきりむだですよ。なぜって、わたしははっきりこう言いますからね。あなたにそんな話をしたおぼえはない、あなたはご病気のせいか(たしかにそうらしいですしね)、でなけりゃお兄さまを気の毒に思って、ご自分を犠牲になさったうえ、わたしにでっち上げの罪を着せたんだ、それというのも今まであなたはずっと、わたしを人間とは見なさず、どうせ蠅くらいにしか見ていないからなんだ、とね。それに、あなたの話をいったいだれが信用しますか、あなたにたとえ一つでも何か証拠がありますか?」

これも引用しておきましょう。

（同）

アリョーシャは枕をかかえて、服を着たまま、ソファに横になった。うとうとしながら、ミーチャとイワンのことを神に祈った。イワンの病気が彼にはわかってきた。『傲慢な決心の苦悩なのだ、深い良心の呵責だ！』兄の信じていなかった神と、真実とが、いまだに服従を望まぬ心を征服しようとしているのだ。『そう』すでに枕に横たえたアリョーシャの頭の中をこんな思いがよぎった。『そう、スメルジャコフが死んでしまった以上、もはやイワンの証言なぞ、誰も信じないだろう。でも兄はきっと行って、証言してくれる！』アリョーシャは静かに微笑した。『神さまはきっと勝つ！』彼は思った。『真実の光の中に立ちあがるか、それとも、自分の信じていないものに仕えた恨みを自分やすべての人に晴らしながら、憎悪の中で滅びるかだ』アリョーシャは悲痛に付け加えると、またイワンのために祈った。

（同）

さて、またべつの例――必ずしも適切ではありませんが、けして無関係ではない例――を挙げておきますが、

「いいえ、お嬢さま、あたし何一つ約束しませんでしたわ」相変らず朗らかな無邪気な表情をうかべたまま、低い声で淀みなく、グルーシェニカがさえぎった。「今こそおわかりになったでしょう、お立派なお嬢さま、あなたにくらべてあたしがどんなにいやらしい、自分勝手な女かってことが。あたし、何かしたくなると、すぐそのとおり実行するんですの。さっきは何かお約束したかもしれませんけど、今こうしてまた考えると、ふいにあの人が好きになるかもしれませんわ、ミーチャが。だって一度はとっても気に入った人ですもの、ほとんどまる一時間も気に入ってましたわ。だから、ことによると、あたし、今すぐ出かけて行ってあの人に、今日からずっとあたしのところにいたらって言うかもしれませんわよ……あたしって、ほんとに気が変りやすくて……」

（同）

それから、これですね。

彼女は席を立とうとしかけたが、突然、甲高い悲鳴をあげて、あとずさった。ごく静かにではあったが、ふいに部屋にグルーシェニカが入ってきたのだ。だれも予期せぬことだった。カーチャはすばやく戸口に向ったが、グルーシェニカとすれ違うときになって、ふいに立ちどまり、白墨のように顔を青ざめさせて、ほとんどささやきにひとしい小声で呻くように言った。

「あたくしを赦して！」

相手はひたと彼女の顔を見つめ、一瞬待ってから、憎悪のこもった毒のある声で答えた。

「憎み合っている仲じゃないの！　どっちも憎しみに燃えてるのよ！　あんたも、あたしも、赦す余裕なんかあって？　彼を救ってくれたら、一生あんたのことを神さまに祈ってあげるわ」

「赦そうと思わないのか！」はげしい非難をこめて、ミーチャがグルーシェニカをどなりつけた。

「安心なさい、あなたのために救ってあげるから！」カーチャは早口にささやくと、部屋を走りでた。

「よく赦さずにいられたもんだな、あの人のほうから『赦して』と言ったのに」ミーチャがまた大声で叫んだ。

「兄さん、その人を責めちゃいけない、そんな権利はないはずです！」アリョーシャがむきになって兄に叫んだ。

（同）

いくつか例を挙げましたが、「謙遜な勇気」を持てずにいる彼らに手をさしのべつづける・手をさしのべるのをやめない人物たちがいるんですね。つまり、誰かが自分でも醜いと考えているもの（「それこそが私なんだ」）を離さないでいるのに向かって、「それはあなたじゃない」といいつづけ、いうのをやめない人物たちです。この人物たちが、そうやっていられるのはどうしてなのか？　どうしてそこまでできるのか？　――と、あなたが感じただろうと私は信じます。

たとえば、他人の自己申告について向けられた「あなたじゃない」。

「信じてくれるか、イワン、このことが俺の気持をかきむしるんだよ。いや、お前は信じてやしない、なぜってお前の目を見りゃわかるよ。お前は世間のやつらの言葉を信じて、俺がただの道化だと思っているんだ。アリョーシカ、俺がただの道化じゃないってことを、お前は信じてくれるかい？」

「ただの道化じゃないと信じています」

「お前がそう信じて、誠実に言ってくれてることは、俺も信ずるよ。目つきも話し方も誠実だからな。ところが、イワンは違う。イワンは傲慢だよ……」

（同）

あるいは、他人と、そして自分自身にまで向けられた「あなたじゃない」。

「この人をもっとよく見てごらん。この人がどんなに僕を憐れんでくれたか、君も見ただろう？　僕はよこしまな魂を見いだそうとしてここへやってきたんだ。僕が卑劣な、よこしまな人間だったから、そういうものに強く惹かれたんだね。ところが僕は誠実な姉を見いだした。宝を、愛にみちた魂を見いだしたんだよ……この人はたった今、僕を憐れんでくれた……僕はあなたのことを言ってるんですよ、グルーシェニカ。あなたは今、僕の魂をよみがえらせてくれたんです」

アリョーシャの唇がふるえ、涙がこみあげてきた。彼は絶句した。

「まるで彼女が君を救ったみたいだな！」ラキーチンが憎々しげに笑いだした。「ところが、彼女は君を一呑みにしちまうつもりだったんだぜ、そのことを知ってるのか？」

「やめてよ、ラキートカ！」ふいにグルーシェニカが跳ね起きた。「二人とも黙ってちょうだい。今こそあたし何もかも言うわ。アリョーシャ、黙って。だって、あなたのそんな言葉をきくと、あたし恥ずかしくなるもの。それというのも、あたしはいい人間じゃなく、よこしまな女だからよ。あたしはそういう人間。ラキートカ、あんたも黙って。なぜって、あんたは嘘を言ってるからよ。そりゃ、この人を一呑みにしちまおうという卑しい考えはあったけれど、今あんたの言ってることは嘘だわ。今は全然違うもの……あんたの声なんぞこれ以上まるきりききたくないわ、ラキートカ」これらすべてをグルーシェニカは、異常なほど興奮して言い放った。

「まったく二人とも気違いだな！」びっくりして二人を見くらべながら、ラキーチンがつぶやいた。「まるで気違いだ。精神病院へ舞いこんだみたいだぜ。二人ともしおらしくなっちまって、今にも泣きだしそうじゃないか！」

「あたし泣きだすわ、本当に泣きだしそう！」グルーシェニカが口走った。「この人はあたしを、姉と呼んでくれたのよ、あたしこのことは一生忘れない！」

（同）

さて、アリョーシャは「第七編　アリョーシャ」中の「ガリラヤのカナ」でこう描かれます。

何のために大地を抱きしめたのか、彼にはわからなかったし、なぜこんなに抑えきれぬほど大地に、大地全体に接吻したくなったのか、自分でも理解できなかったが、彼は泣きながら、嗚咽しながら、涙をふり注ぎながら、大地に接吻し、大地を愛することを、永遠に愛することを狂ったように誓いつづけた。『汝らの喜びの涙を大地にふり注ぎ、汝のその涙を愛せよ……』心の中でこんな言葉がひびいた。何を思って、彼は泣いたのだろう？　そう、彼は歓喜のあまり、無窮の空からかがやくこれらの星を思ってさえ泣いたのであり、《その狂態を恥じなかった》のである。さながら、これらすべての数知れぬ神の世界から投じられた糸が、一度に彼の魂に集まったかのようであり、彼の魂全体が《ほかの世界に接触して》、ふるえていたのだった。彼はすべてに対してあらゆる人を赦したいと思い、みずからも赦しを乞いたかった。ああ、だがそれは自分のためにではなく、あらゆる人、すべてのもの、いっさいのことに対して赦しを乞うたのだ。『僕のためには、ほかの人が赦しを乞うてくれる』ふたたび魂に声がひびいた。しかし、刻一刻と彼は、この空の円天上のように揺るぎなく確固とした何かが自分の魂の中に下りてくるのを、肌で感ずるくらいありありと感じた。何か一つの思想と言うべきものが、頭の中を支配しつつあった。そしてそれはもはや一生涯、永遠につづくものだった。大地にひれ伏した彼はかよわい青年であったが、立ちあがったときには、一生変らぬ堅固な闘士になっていた。そして彼は突然、この歓喜の瞬間に、それを感じ、自覚したのだった。アリョーシャはその後一生を通じてこの一瞬を決して忘れることができなかった。「だれかがあのとき、僕の魂を訪れたのです」後日、彼は自分の言葉への固い信念をこめて、こう語るのだった……

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

（傍線は私・木下による）

私は「その二」で――アリョーシャの「あなたじゃない」をめぐって――こういいました。

彼（アリョーシャ）は、いわばイワンの良心――の番人、いや、証人なんですね。彼はイワンの良心の存在をいつでも証言する用意があります。イワンには「自分のために祈ってくれる」人間がいるんです――なんですね。

そこでの、「自分のために祈ってくれる」を、私は右の「僕のためには、ほかの人が赦しを乞うてくれる」を想起しながらいったんでした。

そして、もうひとつ、もちろんこれをも想起していました。

青年よ、祈りを忘れてはいけない。祈りをあげるたびに、それが誠実なものでさえあれば、新しい感情がひらめき、その感情にはこれまで知らなかった新しい思想が含まれていて、それが新たにまた激励してくれるだろう。そして、祈りが教育にほかならぬことを理解できるのだ。また、このこともおぼえておくがよい。毎日、できるときでよいから、『主よ、今日御前に召されたすべての人を憐れみたまえ』と、たえず心の内でくりかえすのだ。それというのも、毎時毎分、何千という人がこの地上の生を棄て、その魂が主の御前に召されてゆくのだが、そのうちのきわめて多くの人が、だれにも知られず、悲しみと愁いのうちに一人淋しくこの世に別れてゆくのであり、だれも彼らを憐れむ者はなく、そんな人たちがこの世に生きていたかどうか、それさえまったく知らないからなのだ。と、そのとき、地球の反対の端からお前の祈りが、たとえお前がその人をまったく知らず、先方もお前を知らぬにしても、その人の安らぎをねがって主の御許にのぼってゆくにちがいない。恐れおののきながら主の前に立ったその人の魂にとって、その瞬間、自分のためにも祈って

くれる人がいる、地上にもまだ自分を愛してくれる人間が残されていると感ずることが、どんなに感動的であろうか。そして神もまたお前たち二人を、いっそう慈悲深く眺められることだろう。なぜなら、お前でさえそんなに彼を憐れんでやった以上、お前より慈悲深く愛情豊かな神は、なおさらのことだからだ。そしてお前に免じてその者を赦してくださるにちがいない。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』 原卓也訳　新潮文庫）

（傍線は私・木下による）

「その一」では、私はこうもいいました。

そうして、イワンが「絶交」とまでいいだした事情まで、アリョーシャにはすっかりわかっているんです。そうやって、イワンの窮状をすっかり理解して、なお、彼に「赦し」の希望をもたらすことのできる唯一の存在がアリョーシャです。他の誰にも、それはできません。イワンには、それがわかっています。

さらにいえば、このアリョーシャの背後には、以前にイワン自身が口にしたことのある、「ただ一人の罪なき人」がいるんですね。

「背後に」ということばを私が使ったのは、イワンからアリョーシャを見るとそうなるということだったんですが、ここではその視点を切り替えます――アリョーシャが誰かに手をさしのべつづける・手をさしのべるのをやめないでいられるのには、彼の前に・彼と並んで・彼のなかに《ただ一人の罪なき人》＝イエス・キリストがいるからです。アリョーシャ自身にキリストと同じことができるわけじゃありません。「その六」で触れましたが、アリョーシャはイワンとの会話で「銃殺です！」といい、「ばかなことを言ってしまいましたけど、でも……」といい、「いいえ、承諾しないでしょうね」、「いいえ、認めることはできません」というわけです。それはそうなんですが、それでも彼は、自身にはなしえないことでも、かつてなしえたし、いまもなしつつある《ただ一人の罪なき人》を信じているんです。彼の前に・彼と並んで・彼のなかに《ただ一人の罪なき人》はいます。アリョーシャは自身の限界を承知しているでしょうが、それでも《ただ一人の罪なき人》がいる――自分の前に・自分と並んで・自分のなかに――と感じるので、誰かに手をさしのべつづける・手をさしのべるのをやめないでいられるんです。そうして彼には、この世界のどこかに、たとえ彼がその人をまったく知らず、先方も彼を知らぬにしても、彼のために祈ってくれる・彼を愛してくれるひとがいることを信じているんです。彼はそうしたつながりを信じています。だから、彼も誰かに手をさしのべつづける・手をさしのべるのをやめないでいられるんです。どうでしょう？　これはすごいことじゃないでしょうか？　アリョーシャにはそういう「謙遜な勇気」があると私はいいます。

「つながり」ということでいえば、これも引用しておきましょうか。ミーチャのこれです。

「どなたが枕を持ってきてくださったんです？　どなたですか、そんな親切な方は！」まるでたいへんな好意にでも接したかのように、感激にみちた感謝の気持をこめて、彼は泣くような声で叫んだ。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』 原卓也訳　新潮文庫）

イワンはどうかというと、彼には、この世界のどこかに、たとえ彼がその人をまったく知らず、先方も彼を知らぬにしても、彼のために祈ってくれる・彼を愛してくれるひとがいることなど信じられません。彼にあるのは「離反」と「孤独」です。

「俺はね、ここを去るにあたって、世界じゅうでせめてお前くらいは味方かと思っていたんだよ」思いがけぬ感情をこめて、ふいにイワンが言った。「だが、今こうして見ていると、お前の心の中にも俺の入りこむ場

所はなさそうだな、隠遁者の坊や。《すべては許される》という公式を俺は否定しない。だからどうだと言うんだね、そのためにお前は俺を否定するのか、そうなのかい、そうだろう?」

（同）

もちろん、右の引用の直後はこうです。

アリョーシャは立ちあがり、兄に歩みよると、無言のままそっと兄の唇にキスした。

（同）

イワンは「大審問官」で《ただ一人の罪なき人》の愛が人間にはあまりにも大きすぎ、高すぎたと主張したんでした。イワンは《ただ一人の罪なき人》から「離反」し、「孤独」のなかへと進み・沈みます。彼は誰に対しても自身を閉じます。

それを信ずることをあえてする程の謙遜な勇気をもっていない者は誰もそれに躓く。なぜであるか？　彼はそれを受け入れるだけの開かれた気持になることができないから。その故に彼はそれを取り除き、破壊して、それを気狂いじみた無意味なものであるということにしてしまわなければならない。それはあたかも彼を窒息せしめるものであるかのように思われるのである。

（キェルケゴール『死に至る病』　斎藤信治訳　岩波文庫）

私はイワンがキリストを信じているといいました。しかし、それは単に理解しているというだけで、信じているということにならないかもしれません。

「その人はだれのことも軽蔑しません」アリョーシャはつづけた。「ただ、だれのことも信じないだけです。しかし、信じないとすると、もちろん、軽蔑しているわけですね」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

しかし、こういう会話もありましたね。

「ですが、この問題が僕の内部で解決することがありうるでしょうか？　肯定的なほうに解決されることが？」なおも説明しがたい微笑をうかべて長老を見つめながら、イワンは異様な質問をつづけた。

「肯定的なほうに解決されぬとしたら、否定的なほうにも決して解決されませぬ。あなたの心のこういう特質はご自分でも承知しておられるはずです。そして、そこにこそあなたの心の苦しみのすべてがあるのです。ですが、こういう悩みを苦しむことのできる崇高な心を授けたもうた造物主に感謝なさりませ。『高きを思い、高きを求めよ、われらの住み家は天上にあればこそ』です。ねがわくば、あなたがまだこの地上にいる間に、心の解決を得られますように。そして神があなたの道を祝福なさいますよう！」

（同）

そうして、また――

「俺は望んでいた、殺人を望んでいたんだ！　俺が殺人を望んでいたって？　ほんとに望んでいたのだろうか？」

（同）

あるいは、

「なぜって僕はたきつけたんだからね。僕がたきつけたのかどうか、まだわからんな」

（同）

イワンはキリストを信じていた、と私は繰り返しましょう。ただ、彼には「謙遜な勇気」がないんです。彼は躓きます。しかし、「こういう悩みを苦しむことのできる崇高な心」は実は信仰に最も近いところにあるでしょう。もうあと一歩なんです。そういうイワンだからこそ、アリョーシャの「あなたじゃない」に反応できるんです。

「そのあいまいさにすべての文学的真実が含まれている」（亀山郁夫）なんてことをいうのなら、こういうところでいってほしいものです。

（二〇〇八年十一月二十二日）

2

さて、そういうわけで、次に私が問題にするのは、同じ視点から、今度は「愛」でなく、「罪」です。『カラマーゾフの兄弟』における個々の登場人物の「罪」というのが、キリストを前にした「罪」だ、ということでしゃべります。おわかりでしょうが、これは私がこの作品における「愛」を問題にしているうちに、次第に自覚されたことなんですね。私は、この「キリストを前にした」という条件が、これまで私の考え、感じていたこと――『カラマーゾフの兄弟』における「罪」について――をしっかり裏づけ、補強すると思ったわけです。

つまり、この作品における「罪」とは、「謙遜な勇気」を持たないこと・躓くことです。誰かと自分とのつながりを信じないこと、誰をも信じない（「しかし、信じないとすると、もちろん、軽蔑しているわけですね」）ことですね。開かれた気持ちになれないこと、自分で自分を決めつけてしまうこと、自分で自分を閉じてしまうことです。この状態の最も高度なものがイワンの「反逆」であり、「離反」と「孤独」ですね。それは結局自分自身をも信じない――自意識の堂々巡りに陥る――ということです。それが《ただ一人の罪なき人》を前にした「罪」ということになるだろうと私はいうんです。

いや、私はこうして「キリストを前にした」という視点を以前から持っていたわけじゃありませんよ。しかし、自覚はなかったにせよ、気づいていただろうと思うんです。これまでの私の読み取りに「キリストを前にした」という条件をつけるとしっくり来るんです。私は一層強く自分の読みの正しさを確信できたということです。

ここでいっておきたいんですが、ある小説作品について、その読みかたというのは、その作品――作者じゃありません――自体が決定し、読者を導くはずなんです。私はこれまで何度もいっていますが、作品というのは、作者の「何を描くか」と「どのように描くか」とのせめぎ合い・拮抗の軌跡そのものなんです。そのとき、作品が主で、作者は従の位置にあります。作者は作品に奉仕するんです。逆にいえば、作品においての「何が描かれているか」と「どのように描かれているか」とがせめぎ合い、拮抗していればいるほど、読者によるその読みかたはますます作品に導かれます。繰り返しますが、そのとき作者なんかどうでもいいんです。作品の読み取りに作者の「自伝層」なんてものが必要なんだったら、そんな作品は駄目ですよ。作品と呼ぶことさえできません。また、作品と呼ぶことさえできないものは、それにおいての「何が描かれているか」と「どのように描かれているか」との関係が破綻しているわけで、そんな低レヴェルのものに読みかたなんかありません。もはや、それは読みようがないんです。それでも、結果として、そんなものがたくさんの読者に読まれるとすれば――実情はこの世のなか、そんなものこそ読まれるんですが――、それは読者が作品の貧困を自分の勝手な想像で安易に補っているからですね。読者と作者とが低レヴェルの想像力で馴れ合っているんです。そんなものは読書ではありません。まあ、それはいいでしょう。

ところが、ここで問題になっているのは、「何が描かれているか」と「どのように描かれているか」とのせめぎ合い・拮抗のはっきりした軌跡として成立し

ている作品、それも最高レヴェルの作品です。『カラマーゾフの兄弟』をどう読むかということは、それは『カラマーゾフの兄弟』が自然に導いてくれるんです。この二十五年間、私はそれに従って読んできたわけですね。だから、亀山郁夫の読み取りがおかしい・でたらめだとすぐにわかりました。というのも、『カラマーゾフの兄弟』について絶対にできない・『カラマーゾフの兄弟』自体が絶対に導かない読みかたを亀山郁夫はしているんです。

私がここで何がいいたいのかというと、亀山郁夫のでたらめは明白である——それも、たちまちにわかる——にもかかわらず、それを指摘し、論証するのにとんでもなく時間と手間とがかかるということなんです。間もなく書き始めて半年になろうとしている私の一連の文章ですら——もちろん引用過多とはいえ——文庫本の字詰めに換算すると、すでに三〇〇ページを超えています。これは亀山郁夫の「解題」の分量をすでに凌駕しているんですね。しかも、まだ「解題」のごく一部をしか扱っていないんです。木下豊房らの「検証」にしても、あれだけのことをするのに、いったいどれほどの時間と手間とをかけているか。まったく、亀山郁夫は余計なことをしてくれたものです。

いや、私がここで何がいいたいのかというと、この一連の文章を読んでくれているひとたちが、ひょっとすると、「こうまでしないと亀山郁夫のでたらめは証明されないのか」なんていうふうに大げさに受けとってしまうことへの懸念です。亀山郁夫のでたらめは、ふつうに亀山訳以外の『カラマーゾフの兄弟』を読んだことのあるひとにはたちまちにわかるものです。ただ、それを誰にもわかるようにしようとすると、私のやっているようになってしまうのだということです。

『カラマーゾフの兄弟』をどう読むかということは、それは『カラマーゾフの兄弟』が自然に導いてくれる、ということ。『カラマーゾフの兄弟』について絶対にできない・『カラマーゾフの兄弟』自体が絶対に導かない読みかたを亀山郁夫はしている、ということ。それについて、ちょっと引用をしておきます。

ちょっと考えてみればわかるが、だいたいそういう「裏読みキャラ」は、いつも読者の中にいるのではないか。日常的思考様式は、ほめるよりもけなすほうが得意だったりして、矮小化に働きやすく、その意味でも「裏読み」は意外性をもたらさない。

……（中略）……

もうひとつ、先日、ＮＨＫの「日曜美術館」という番組を見ていたら、ある芸大教授が恐るべき裏読み講釈をしていた。

その番組では、マチスとピカソのこんな会話が紹介されていた。マチスがピカソに「私は晩学のため、あなたのような技術がない」と言うと、ピカソは「それは幸せなことだ」と言ったという。ところが、この芸大教授は、ピカソの発言を「これからあなた（マチス）は、いろんな技術を身につけることができて幸せだ」という、いわば逆説的な意味に解釈（矮小化）したのだ。

しかし、裏読みせずに言葉通りに解釈したらどうなるか。「既成の技術を身につけていないマチスよ、あなたは何て幸せ者なのだ」という意味になり、ピカソにとって既成の絵画技法から自由になることこそが関心の中心だったという、もっとずっとダイナミックなピカソ像が生まれてくるし、「それは幸せなことだ」も「技術がない」と言ったマチスをそのまま肯定する、正しく幸せな響きを持った言葉ともなる。

（保坂和志『書きあぐねている人のための小説入門』　中公文庫）

もうひとつ。

読むことも同じで「この小説はどう読めばいいのか？」「この小説はどういう困難を抱えながら書かれたのか？」と考えながら読むことが「小説とは何か？」という問いを追い越してゆく。私の場合には小説を読むということは、それを読みながらそこから刺激されたことをどれだけ多く考えることができるかに賭けられていると言ってもいい。

もともと批判したくなるような小説は取り上げていないわけだが、批判は知的な行為ではない。批判はこちら側が一つか二つだけの限られた読み方の方法論や流儀を持っていれば簡単にできる。本当の知的行為というのは自分がすでに持っている読み方の流儀を捨てていくこと、新しく出合った小説を読むために自分をそっちに投げ出していくこと、だから考えるということというのは批判をすることではなくて信じること。そこに書かれていることを真に受けることだ。

そんなことは誰も言っていないとしてもそうなのだ。非‐当事者的な態度を捨てれば、書かれていることを真に受けるしかない。言葉では「しかない」と、とても限定的な表現になるが、そこにこそ大海が広がっている。教養や知識としての通りいっぺんの小説なんかではない、生命の一環としての思考を拓く小説がそこに姿をあらわす。

（保坂和志『小説、世界の奏でる音楽』新潮社）

私のしていることは「批判」なんですが、それは翻訳者亀山郁夫批判であって、ドストエフスキー批判ではありません。亀山郁夫がとんちんかんな「裏読み」をしていて、『カラマーゾフの兄弟』を「真に受けて」いないことを批判しているんですね。それで、この一連の文章を書く作業の過程で、私は自分がこれまでにもまして『カラマーゾフの兄弟』を「真に受けて」いるだろうと信じます。

引用をさらにもうひとつ。

中村氏は、「ここではただ、僕の想像と氏の想像とが食違っただけであり、」としたり顔でまた断定する。中村氏の「想像」と私の「想像」とがその実ほとんど食い違っていないことは、如上のとおりに明らかである。ただし画然たる食い違いが、一つだけ存在する。すでに早く（つまり「いよいよ事が始ま」ったときから）「気をつけ」をしてきた武官たちがこのたび挙手の礼をするのに改めてもう一度「気をつけ」をして「拍車のつ

いた長靴の踵を鳴ら」す、と中村氏は奇しくも「想像」したのであって、それに反して私は、そんなことは現実的にあり得ない、と正当に「想像」したのであった。

そしてこのような場合においては、こういう現実的にあり得ぬことは、またただちに文学上の「嘘」でしかあり得ぬのであり、しかし別のある場合においては、ある現実的にあり得ぬこと（たとえば一人の男がある朝ベッドの上で一匹の毒虫に変身して目覚めること、またたとえば「白髪三千丈／愁ニ縁ッテ個ノ似ク長シ」ということ）も、かえっておのずから文学上の「真」であり得るのである。このことの十全な辨別なしには、いかなる作家も、到底まともな「仮構の真実」を創造することはできない。

そういう大切な基本的区別を辨え得ざる中村氏が私の批評を「つまらぬあらさがし」としか考え得ないのは、中村氏の是非なき不幸である。中村氏は、その種の文学的辨別を、それとはまったく異なる「事実に依拠することが表現の真実を保証する最上の、あるいは唯一の手段と信じ、その上にあぐらをかいてい」る類の「写実主義」と取り違えて、前者と後者とを完全に同一視している。私の批評にたいしてそういう誤解をする少数の低能があるかもしれぬことをおもんぱかって、前回私は、「観念小説」云云の「蛇足」を附しておいた。その際もちろん決して私は、私の念頭に中村氏を置いてはいなかったのであったが。

（大西巨人「『写実と創造』をめぐって」『大西巨人文選2　途上』みすず書房　所収）

話が逸れました。戻ります。『カラマーゾフの兄弟』における「罪」について。

繰り返しますが、そういう「罪」に対して、手をさしのべつづける・手をさしのべるのをやめない人物たちがいるんです。つまり、誰かが自分でも醜いと考えているもの（「それこそが私なんだ」）を離さないでいるのに向かって、「それはあなたじゃない」といいつづけ、いうのをやめない人物たちです。その人

物たちは「自分のためにも祈ってくれる人がいる」ということを信じています。そういう人物たちから発せられる「あなたじゃない」は、実は『カラマーゾフの兄弟』の全体に遍在しています。どういう形であれ、「あなたじゃない」の変奏――というか、最終的に「あなたじゃない」として完成されることになるものの変奏――を受け取るべきでない登場人物がこの作品にはいないでしょう。私は以前（「その二」）、アリョーシャの「あなたじゃない」が「第十一編　兄イワン」において「全然脈絡のないものでない、唐突でわけのわからぬものではない」といいましたが、実ははるかにその前から「あなたじゃない」はこの作品のそこかしこに響いていた音だったんですよ。それがイワンに向けたアリョーシャのことばによって最も高度な鋭い形で完成されたんです。というわけで私は、なおさら、アリョーシャの「あなたじゃない」が読み取れない――しかも、それがイワンに図星だとわからない――読みかた（亀山郁夫）がいかにとんちんかんであるか、といいます。ふつうに『カラマーゾフの兄弟』を読んできた読者であれば、「あなたじゃない」が何を意味しているかがわかります。

そこで、また長い引用をしますが、これを読んでもらいましょうか。

> 兄弟たちよ、人々の罪を恐れてはならない、罪あるがままの人間を愛するがよい、なぜならそのことはすでに神の愛に近く、地上の愛の極致だからである。神のあらゆる創造物を、全体たるとその一粒一粒たるとを問わず、愛するがよい。木の葉の一枚一枚、神の光の一条（ひとすじ）一条を愛することだ。動物を愛し、植物を愛し、あらゆる物を愛するがよい。あらゆる物を愛すれば、それらの物にひそむ神の秘密を理解できるだろう。ひとたび理解すれば、あとはもはや倦むことなく、日を追うごとに毎日いよいよ深くそれを認識できるようになる。そしてついには、もはや完璧な全世界的な愛情で全世界を愛するにいたるだろう。動物を愛するがよい。神は彼らに思考の初歩と穏やかな喜びとを与えているからである。動物を怒らせ、苦しめ、喜びを奪って、神の御心にそむいてはならない。人間よ、動物に威張りちらしてはいけない。動物は罪を知らぬが、人間は偉大な資質を持ちながら、その出現によって大地を腐敗させ、腐った足跡を残している。悲しいことに、われわれのほとんどすべてがそうなのだ！　特に子供を愛することだ。なぜなら、子供もまた天使のように無垢であり、われわれの感動のために、われわれの心の浄化のために生き、われわれにとってある種の教示にひとしいからである。幼な子を辱める者は嘆かわしい。
>
> ……（中略）……
>
> 毎日、毎時、毎分、おのれを省みて、自分の姿が美しくあるよう注意するがよい。たとえば幼い子供のわきを通るとき、腹立ちまぎれにこわい顔をして、汚ない言葉を吐きすてながら通りすぎたとしよう。お前は子供に気づかなかったかもしれぬが、子供はお前を見たし、お前の罰当りな醜い姿が無防御な幼い心に焼きついたかもしれない。お前は知らなかったかもしれぬが、もはやそのことによって子供の心にわるい種子を投じたのであり、おそらくその種子は育ってゆくことだろう。これもみな、お前が子供の前で慎みを忘れたからであり、もとはと言えば注意深い実践的な愛を心にはぐくんでおかなかったためである。兄弟たちよ、愛は教師である。だが、それを獲得すべを知らなければいけない。なぜなら、愛を獲得するのはむずかしく、永年の努力を重ね、永い期間をへたのち、高い値を払って手に入れるものだからだ。必要なのは、偶然のものだけを瞬間的に愛することではなく、永続的に愛することなのである。偶発的に愛するものならば、だれにでもできる。悪人でも愛するだろう。青年だったわたしの兄は小鳥たちに赦しを乞うたものだ。これは無意味なようでありながら、実は正しい。なぜなら、すべては大洋のようなもので、たえず流れながら触れ合っているのであり、一箇所に触れれば、世界の他の端にまでひびくからである。小鳥に赦しを乞うのが無意味であるにせよ、もし人がたとえほんのわずかでも現在の自分より美しくなれば、小鳥たちも、子供も、周囲のあらゆる生き物も、心が軽や

かになるにちがいない。もう一度言っておくが、すべては大洋にひとしい。それを知ってこそ、小鳥たちに祈るようになるだろうし、歓喜に包まれたかのごとく、完璧な愛に苦悩しながら、小鳥たちが罪を赦してくれるよう、祈ることができるだろう。たとえ世間の人にはどんなに無意味に見えようと、この歓喜を大切にするがよい。

わが友よ、神に楽しさを乞うがよい。幼な子のように、空の小鳥のように、心を明るく持つことだ。そうすれば、仕事にはげむ心を他人の罪が乱すこともあるまい。他人の罪が仕事を邪魔し、その完成を妨げるなどと案ずることはない。「罪の力は強い、不信心は強力だ、猥雑な環境の力は恐ろしい。それなのにわれわれは一人ぼっちで無力なので、猥雑な環境がわれわれの邪魔をし、善行をまっとうさせてくれない」などと言ってはならない。子らよ、こんな憂鬱は避けるがよい！　この場合、救いは一つである。自己を抑えて、人々のいっさいの罪の責任者と見なすことだ。友よ、実際もそのとおりなのであり、誠実にすべての人すべてのものに対する責任者と自己を見なすやいなや、とたんに本当にそのとおりであり、自分がすべての人すべてのものに対して罪ある身であると気づくであろう。ところが、自己の怠惰と無力を他人に転嫁すれば、結局はサタンの傲慢さに加担して、神に不平を言うことになるのだ。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

どうでしょうか？

たとえば幼い子供のわきを通るとき、腹立ちまぎれにこわい顔をして、汚ない言葉を吐きすてながら通りすぎたとしよう。お前は子供に気づかなかったかもしれぬが、子供はお前を見たし、お前の罰当りな醜い姿が無防御な幼い心に焼きついたかもしれない。お前は知らなかったかもしれぬが、もはやそのことによって子供の心にわるい種子を投じたのであり、おそらくその種子は育ってゆくことだろう。

（同）

――もはやこういうことからして「罪」なんです。

ちょっといい換えてみますか？

たとえばスメルジャコフのわきを通るとき、腹立ちまぎれにこわい顔をして、汚ない言葉を吐きすてながら通りすぎたとしよう。もちろんお前はスメルジャコフに気づいていたし、スメルジャコフもお前を見た。お前の罰当りな醜い姿がスメルジャコフの心に焼きついただろう。お前は知らなかったかもしれぬが、もはやそのことによってスメルジャコフの心にわるい種子を投じたのであり、おそらくその種子は育ってゆくことだろう。

どうでしょう？

また、「自己の怠惰と無力を他人に転嫁すれば、結局はサタンの傲慢さに加担して、神に不平を言うことになるのだ」というのは、まさにイワン・カラマーゾフじゃないでしょうか？

そうして、ゾシマ長老は、この「罪」に対して「愛」が何であるかをも述べているわけです。

また、私はこうもいっておきます。「罪あるがままの人間を愛するがよい」とゾシマ長老がいうとき、それは、人間というものがそもそも罪あるものなんだということです。罪のある人間とない人間がいて、その罪ある方の人間を愛せといっているのじゃありません。人間＝罪あるもの、です。罪のない人間なんていません。例外は《ただ一人の罪なき人》だけです。ゾシマ長老がいっている・前提にしているのはそういうことです。ちょうどこの箇所について亀山郁夫はこう書いています。

「兄弟たちよ、人々の罪を恐れてはいけない。罪のある人間を愛しなさい。なぜならそれは神の愛の似姿であり、この地上における愛の究極だからだ」

私はけっしてキリスト教の教えにくわしいわけではありませんが、「罪のある人間を愛しなさい」、それは「神の愛の似姿」だからだ、というところがとても好きです。

（亀山郁夫「新訳『カラマーゾフの兄弟』を読む」　ＮＨＫ出版）

原卓也訳「罪あるがままの人間」と亀山郁夫訳「罪のある人間」との違いが気になるところですが、両者とも「人間＝罪あるもの」ということがわかりにくくはありますね。しかし、亀山郁夫についていえば、ドストエフスキーの原典がどうあろうと、彼の頭にある「罪のある人間」がすべての人間を意味するように見せかけつつ、実は、窃盗や殺人をはたらいた人間などの方を向いているのではないかと私は疑っています。

たとえば、以前に引用したように、亀山郁夫はこんなことをいっています。

アリョーシャはじっさいに、子どもを猟犬に噛み殺させた元将軍の地主を、「銃殺にすべきだ」と言っているくらいですから。彼は、どんなことがあっても、原罪をまぬがれてはいない。アリョーシャのキスはまさに犯罪です。

（亀山郁夫＋佐藤優『ロシア　闇と魂の国家』　文春新書）

アリョーシャが「原罪をまぬがれていない」のはその通り――当然――ですが、ここで亀山郁夫はその「原罪」を理解できていません。「原罪」を本来の意味以上に何か特別な犯罪のようなものとして思い浮かべていますね。そうでなければ、わざわざこんなふうにはいいません。

ここで――しつこいですが――あらためてアリョーシャの「あなたじゃない」について。以前にしゃべったことの繰り返しになりますが、今回は亀山郁夫の「解題」ではなくて、ＮＨＫテキストの文章を問題にしようと思うんです。というのも、こちらの文章では、さらに恥の上塗りのようなことを彼が書いているからですね。

おそらくほとんどの読者が、アリョーシャのこのセリフの奥にある真意の読みとりに苦労するはずです。アリョーシャはイワンに対して、あなたは犯人ではない、と言っています。しかもそれを、イワンのなかば無意識の自責の念を見透かすかのように言うのです。法と、神の掟とのちがい――。

答えは、おそらくひとつだと思います。

イワンは犯人ではない、しかし、有罪である、と。

問題は、「ぼくが神さまに遣わされたのは」という一節です。つまり、「あなたじゃない」という言葉は、アリョーシャの言葉であるというよりも、むしろ「神」の言葉だ、ということです。では、アリョーシャをとおして、イワンにたいして「あなたじゃない」と語りかけている神の意思とは何なのか。

アリョーシャと神はどう関係づけられるのでしょうか。アリョーシャは、果たしてどのような神の担い手なのでしょうか。

アリョーシャの「あなたじゃない」という言葉は、イワンは法的な意味において裁かれることはない、だから、そう苦しまないでほしい、という意味にとらえることができるように思えます。では、翻って、道義的な意味ではどうなのか。なにしろ、神が第一に問題とすべきは、道義的な意味のはずです。とすればアリョーシャは、イワンには道義的に罪がある、ということをむしろ思い知らせる立場にあるはずです。そこで考えられるのは、アリョーシャは、人をそそのかすという行為のもつ犯罪性に気づいていないのではないか、ということです。アリョーシャの

発言は、若い恋人のリーザからさえたしなめられるほどの未熟さを示すこともありますが、反面、恐ろしいほどの人間観察力を示すことが多いのです。

その観点からすると、「ぼくが神さまに遣わされたのは」という言葉を、ないがしろにするわけにはいきません。そこにはかならずや、ゾシマないしはドストエフスキー自身のといってよい宗教観が反映されていると考えれらるからです。

私はこう考えるのです。

「あなたじゃない」という言葉は、「あなたである」という二重性を含みこむ言葉である、と。もしも「あなたじゃない」という言葉をアリョーシャが本気で語るつもりなら、「犯人はスメルジャコフです」と言ってしまえばそれで済むことです。しかしアリョーシャは犯人はスメルジャコフだということをさとらせるために、このような言い方をしたわけではなかったはずです。問題なのは、「あなたじゃない」という言葉には、そのイントネーションのアレンジによって、「あなたである」という意味も込めうるということです。では、「あなたである」と言うのがアリョーシャだとして、なぜそんなまわりくどい言い方をしなければならないのでしょうか。それは、「あなただけれども」神は赦してくださる、という意味を言外に含んでいたからだと考えたいのです。あるいは、イワンが、真犯人は自分かもしれない、という思いに達しつつあることを見越し、その認識に至る苦しみを見越して、赦しと励ましを与えようとしていたのかもしれません。事実、この時点でイワンは恐ろしい不安にかられ、悪魔の来訪すら受けていました。

（亀山郁夫「新訳『カラマーゾフの兄弟』を読む」　NHK出版）

こんな読みかたしかできないから、亀山郁夫は翻訳者以前に読者として失格なんですよ。思わせぶりに「法と、神の掟とのちがい――」なんていいますけれど、亀山郁夫は「神の掟」の意味が自分でわかっていませんね。なぜなら、彼にはこれまでもずっと『カラマーゾフの兄弟』におけるキリストの位置・意味がわかっていないからです。それに、いったい誰が法に抵触するか・法的に罰せられるかどうかなんてことを問題にしているんですか？　アリョーシャはそんなレヴェルのことをいっているんじゃありません。イワンもそんなレヴェルの話としてアリョーシャのことばを聞いていたんじゃありません。

答えは、おそらくひとつだと思います。

イワンは犯人ではない、しかし、有罪である、と。

（同）

全然違います。アリョーシャは「あなたは自分が殺したと思っているけれども、そうではない」といっただけです。

アリョーシャの「あなたじゃない」という言葉は、イワンは法的な意味において裁かれることはない、だから、そう苦しまないでほしい、という意味にとらえることができるように思えます。

（同）

できません。できないという以前に、このひとは何をいっているのか？「法的な意味において裁かれることはない、だから、そう苦しまないでほしい」って何ですか？　どうしてアリョーシャがそんなことをいうんですか？　アリョーシャを馬鹿にしているんですか？　いや、亀山郁夫は明らかにアリョーシャを馬鹿にしています。もちろん、イワンをも。

では、翻って、道義的な意味ではどうなのか。なにしろ、神が第一に問題とすべきは、道義的な意味のはずです。とすればアリョーシャは、イワンには道義的に罪がある、ということをむしろ思い知らせる立場にあるはずです。そこで考えられるのは、アリョーシャは、人をそそのか

すという行為のもつ犯罪性に気づいていないのではないか、ということです。

（同）

何ですか、これは？　亀山郁夫のいうこの「犯罪性」は法的にどうかということですけれど、アリョーシャはこの場面でそんなことを問題にしているんじゃありません。いっておきますが、アリョーシャは、犯人はスメルジャコフだと思っていたし、そのうえ、イワンが彼に何をしていたかを承知していたでしょうから、そのことを「罪」だと思っていましたよ。だから、「兄さんは自分を責めて、犯人は自分以外の誰でもないと心の中で認めてきた」というんです。しかし、アリョーシャはここでそんな話をしているんじゃないんですよ。法的にどうかなんて、ここではどうでもいいんですよ。

ここで余談ですが、私はまた自分の勤める書店で新刊の『直筆で読む「人間失格」』（集英社新書）をぱらぱらとめくっていたんですが、ちょうどこういう文章に行き当たり、なんというか、奇妙な偶然を感じました。

「罪。罪のアントニムは、何だろう。これは、むずかしいぞ」

と何気無さそうな表情を装って、言うのでした。

「法律さ」

堀木が平然とそう答えましたので、自分は堀木の顔を見直しました。近くのビルの明滅するネオンサインの赤い光を受けて、堀木の顔は、鬼刑事のごとく威厳ありげに見えました。自分は、つくづく呆れかえり、

「罪ってのは、君、そんなものじゃないだろう」

罪の対義語が、法律とは！　しかし、世間の人たちは、みんなそれくらいに簡単に答えて、澄まして暮しているのかもしれません。刑事のいないところにこそ罪がうごめいている、と。

（太宰治『人間失格』）

――まさに亀山郁夫じゃないですか。

しかし、ＮＨＫテキストに戻ります。

アリョーシャの発言は、若い恋人のリーザからさえたしなめられるほどの未熟さを示すこともありますが……

（同）

これについては、以前にいいました（「その二」）。何が「未熟さ」なもんですか。

私はこう考えるのです。

「あなたじゃない」という言葉は、「あなたである」という二重性を含みこむ言葉である、と。もしも「あなたじゃない」という言葉をアリョーシャが本気で語るつもりなら、「犯人はスメルジャコフです」と言ってしまえばそれで済むことです。しかしアリョーシャは犯人はスメルジャコフだということをさとらせるために、このような言い方をしたわけではなかったはずです。問題なのは、「あなたじゃない」という言葉には、そのイントネーションのアレンジによって、「あなたである」という意味も込めうるということです。

（同）

そんなことをアリョーシャはここで問題にしているんじゃないんです。ここでアリョーシャはイワンを咎めているんじゃなくて、救おうとしているんです。救おうというのは、もちろん法的な意味でなんかじゃありませんよ。いいですか、アリョーシャは「あなたは自分が殺したと思っているけれども、そうではない」といっただけです。ずばり核心に切り込んで、核心だけを問題にしているんです。なぜこれがわからないのか？

「あなたである」なんてことをアリョーシャがイワンにいう必要なんか全然ないんですよ。当のイワンが「自分である」――法的になんかじゃないですよ――と思っているんですから。イワンが「自分である」と思っているのを知っているから、アリョーシャが「あなたじゃない」というんじゃないですか。そのことが亀山郁夫にはまったくわかっていない。

だいたい、これがアリョーシャとイワンとの会話だということすら、亀山郁夫にはわかっていないんですよ。彼はアリョーシャのことばだけしか問題にできていないんですから。ドストエフスキーがふたりのやりとりをここまで動的に描いてくれているのに、片方の主張だけにしか目が行っていない。中途半端な、平べったい止まったものにしか見えていないんです。

ところが、このＮＨＫテキストではわかっているふりをするんですね。最後の「あるいは、イワンが、真犯人は自分かもしれない、という思いに達しつつあること見越し、その認識に至る苦しみを見越して、赦しと励ましを与えようとしていたのかもしれません。事実、この時点でイワンは恐ろしい不安にかられ、悪魔の来訪すら受けていました」という、とってつけたような部分は何でしょうか？　何が「あるいは」ですか？　何が「事実、この時点でイワンは恐ろしい不安にかられ、悪魔の来訪すら受けていました」ですか？　これがわかっているなら、それまで彼が長々としゃべってきたのは何だったんですか？　おかしいじゃないですか。矛盾してしまいますよ。しかも、これでもまだ亀山郁夫にはこれがイワンとアリョーシャの会話だということがわかっていない。わかっているなら、必ずイワンの反応を問題にするはずです。そうなれば、アリョーシャが「あなたである」なんてことをいう必要のまったくないこと、それどころか、いうはずもないことがわかるはずです。亀山郁夫にそれがわかっているなら、彼の「あるいは」以前の文章は削除されたはずです。でも、彼には削除できないんですよ。なぜかというと、彼は『カラマーゾフの兄弟』の翻訳時にも、その「解題」執筆時にも、また、このＮＨＫ講座の録音時（これはおそらく今年の春に行なったカルチャーセンターでの講座の録音を使っているんですよね）にもまったく考えていなかったことを、このテキストを作成する段階ではじめて「とってつけた」からですよ。いや、私はこのＮＨＫ講座の放送をまったく聴いていないので、実際に彼がどうしゃべっているのか知りません。それでも、このテキストの文章がこんなふうに矛盾・不備を含んでいる以上、そうだとしか考えられないんですよ。彼が実際に「あるいは、イワンが、真犯人は自分かもしれない、という思いに達しつつあること見越し、その認識に至る苦しみを見越して、赦しと励ましを与えようとしていたのかもしれません。事実、この時点でイワンは恐ろしい不安にかられ、悪魔の来訪すら受けていました」と放送でもしゃべっていたとしますね。それならそれで、それまでと同じくらいに長い補足説明（それまでの主張の否定）が必要じゃないんですか？　つまり、アリョーシャの「あなたじゃない」を受けたイワンの反応の読み取りが、彼の『カラマーゾフの兄弟』の翻訳時・その「解題」執筆時では間違っていたということへの言及が必要じゃないんですか？　そのうえで、この場面の解釈が、イワンにはアリョーシャの「あなたじゃない」の意味が即座にわかったということに、聴取者・読者の前で変更されなければならないんじゃないんですか？　私には、亀山郁夫がそれをしないで、ただテキストにいいかげんな挿入をすることで、自分の無能を糊塗しているとしか思えないんです。

犯人はスメルジャコフだと、この会話以前に――作品においては後に提示されますが――アリョーシャはイワンにいっているんですよ。だから、この会話について「もしも「あなたじゃない」という言葉をアリョーシャが本気で語るつもりなら、「犯人はスメルジャコフです」と言ってしまえばそれで済むことです」なんていうのは、相当に低レヴェルの読者にしかなしえない発言ですね。しかも、アリョーシャのスメルジャコフ犯人説――作品においては後に提示されている――のないまま、ドストエフスキーが読者に「あなたじゃない」を提示するのは、このアリョーシャとイワンの会話だけで、読者にはこの場面がしっかり読み取られるはずだという認識があったからですね。そうして、ごくふつうの読者になら、それができるでしょう。

しかし、読解力のない亀山郁夫にはそれができません。彼にはアリョーシャの「あなたじゃない」の意味が自分でわからないから――同時にイワン自身の認識も把握できていないから――、それをイワンにもわからなかったことにしなくてはならなくなったんですよ。

では、アリョーシャの「あなたじゃない」の意味は何か？

アリョーシャは、イワンが自分でも醜いと考えているもの（「それこそが私なんだ」＝「殺したのは私だ」）を離さないでいるのに向かって、「それはあなたじゃない」といいつづけ、いうのをやめないでいるんです。イワンに自分＝アリョーシャとのつながりを信じること、自分＝アリョーシャに対して気持ちを開くことを呼びかけているんです。アリョーシャはイワンの良心の証人になろうというんです。そうしてイワンに「離反」と「孤独」から、こちらに戻って来るように、と訴えているんです。自分自身をも信じないこと――自意識の堂々巡り――から脱却してください、と懇願しているんですよ。「謙遜な勇気」を持ってください、といっているんです。こうして《ただ一人の罪なき人》からアリョーシャを通じてさしのべられている手が、ここで描かれているんです。これが『カラマーゾフの兄弟』で描かれている「罪」と「愛」なんです。

いいですか、そのようにイワンにいいつづける・いうのをやめないでいるアリョーシャの口に上ってきたのが――

「あなたじゃない、という今の言葉を、僕は一生をかけて言ったんですよ。いいですか、一生をかけて。兄さんにああ言えと、神さまが僕の心に課したんです。たとえ今の瞬間から、兄さんが永久に僕を憎むようになったとしても……」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

――なんですよ。

このときアリョーシャはアリョーシャで「僕のためには、ほかの人が赦しを乞うてくれる」と信じていたでしょう。そうして、彼は「謙遜な勇気」を持ちつつ発言できるんです。これがどれほど大変であることか！　このアリョーシャがどれほどイワンのために、献身的に、勇気をふりしぼったか、ということが亀山郁夫には全然わかりません。

だから、亀山郁夫が同じ箇所を訳すると、こんなふうになるんでした。

「〈あなたじゃない〉って言葉、ぼくはあなたが死ぬまで信じつづけます！　いいですか、死ぬまで、ですよ」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　亀山郁夫訳　光文社文庫）

どうしようもない。「あなたが死ぬまで」です。それでは、アリョーシャは、イワンが死んだら、信じるのをやめるんですかね？　違うでしょう。かりにイワンが死んでも、アリョーシャは信じつづけますよ。アリョーシャはそれほどまでに懸命にイワンに呼びかけたんです。「一生をかけて」というのは、もちろん木下豊房のいうように「「永久に」という意味で、自分の発言への確信と責任を表明したもの」なんですよ。この恐ろしく感動的な場面を亀山郁夫はまったく理解していません。ひどすぎる。もうこれだけで彼の無能がわかります。これだけで、彼が『カラマーゾフの兄弟』を翻訳するということがどれほどとんでもないことか、ということがわかります。彼には無理なんですよ。彼自身がこの翻訳の仕事を「正直のところ、自分の能力の限界との戦いだったのである」（「訳者あとがき」）といっていますが、「限界との戦いだったのである」なんて、それじゃ、彼はその「戦い」に勝ったみたいじゃないですか。いや、それ以前に善戦でもしたようじゃないですか。とんでもない。単にこの作品を読むことすら彼の限界をはるかに超えていたんですよ。

さて、それで、

問題は、「ぼくが神さまに遣わされたのは」という一節です。つまり、「あなたじゃない」という言葉は、アリョーシャの言葉であるというよりも、むしろ「神」の言葉だ、ということです。では、アリョーシャをとおして、イワンにたいして「あなたじゃない」と語りかけている神の意思とは何なのか。

アリョーシャと神はどう関係づけられるのでしょうか。アリョーシャは、果たしてどのような神の担い手なのでしょうか。

（亀山郁夫「新訳『カラマーゾフの兄弟』を読む」　ＮＨＫ出版）

アリョーシャのことばですよ。アリョーシャを何だと思っているのか？　アリョーシャが作者ドストエフスキーの思いのままになる道具だとでも思っているのか？「解題」では、「あなたじゃない」が「ドストエフスキーがわざわざアリョーシャに語らせている層とでもいうべき部分であり、その意味では、根本のところで、登場人物の独立を保証すべきポリフォニーの原理にさからうセリフ、といえるかもしれない」なんて書いていましたっけ。それで「自伝層」がどうのこうのというんでした。

作品のなかで、それまでのつくり・流れを無視して、いきなり作者の「自伝層」とやらのせいで登場人物がそれまでの自立性を失って、作者自身の思想なんかをしゃべり始めるようなことがあれば、そんなものはそもそも作品なんかじゃないんですよ。いったん作品が動き始めたら、作者には作品を自分の思い通りに、都合よく動かすことなんかできないんですよ。それができているなんてものは作品じゃありません。作品が主で、作者は従の位置なんですよ。何が「自伝層」ですか？　そんなことをいう亀山郁夫には文学 —— というより芸術全般 —— がまったくわかっていません。

しかも、亀山郁夫は『カラマーゾフの兄弟』における最も重要な場面、最も高度に完成されている場面についてそんなことをいっているんです。

（二〇〇八年十一月二十四日）

3

つづけます。亀山郁夫はＮＨＫテキストでこう書いています。

「親父を殺したのはおまえか！」とのイワンの問いに、スメルジャコフは「殺したのはぼくじゃありません、それは、あなたがちゃんとご存知のはずです」と答えています。つまり、主犯はイワン、あなただと仄めかすのです。父親が殺されるかもしれないとの予感については、「何か卑劣なまねをしでかしそうな予感までしていた」というイワンに対し、スメルジャコフは「嘲るように」笑って、「ぼくに対してそういう予感を持ちながら、そのままご出発なさったとすれば、つまりそれでもってぼくに、親父を殺してもいい、おれは邪魔はしないから、とおっしゃったも同然じゃございませんか」としてイワンに迫ります。このひとことによって、父殺しの下手人が明らかになるとともに、イワンのなかに、この父親殺しの事件の核心がはっきりと浮かびあがってくるのです。つまり、「未必の故意」（自分の行為によって害が発生しても構わないという心理状態）です。

スメルジャコフと二度目の面会から一ヶ月後に、三度目の面談がなされるのですが、この一ヶ月という期間がきわめて重要です。イワンの狂気が徐々に成長していく期間だからです。

「要するにこのまるひと月、彼の誇り高さは恐ろしいほどの苦しみをなめていたのである」

（亀山郁夫「新訳『カラマーゾフの兄弟』を読む」　ＮＨＫ出版）

「このひとことによって、父殺しの下手人が明らかになるとともに、イワンのなかに、この父親殺しの事件の核心がはっきりと浮かびあがってくるのです。」その亀山郁夫が「解題」で何と書いていたか？

イワンとスメルジャコフの最初の対面で、スメルジャコフは彼に「私は殺してない」と語った。しかし、二回目では、同じく殺害の事実を認めないながら、スメルジャコフは「チェルマーシニャーに行ってください」とイワンに言った自分の言葉を、イワンがどういう意味で受け取ったか知ろうとして躍起になる。イワンの理解力、意思を探ろうとして、彼は「殺したのはぼくじゃありません。それは、あなたがちゃんとご存じのはずです」と主張するのである。

実行犯であるはずのスメルジャコフが、なぜここまで自信をもって、殺害の事実を否定できるのか。正確には、主犯でないとの認識を盾にとれるのか、なかなか理解できない部分である。そのセリフは、スメルジャコフよりもむしろ作者が言わせている言葉といっていいほど、バイアスがかかっていそうである。

……（中略）……

三度目の、最後の対面――。これは『カラマーゾフの兄弟』全体のなかでも、存在論的な観点に照らした最高のクライマックスである。その対面の前に、ひそかにドミートリーを脱走させる計画が進んでいると書かれている。その目的でイワンは三万ルーブルものお金を出すというのだが、ここでは彼の複雑な心情が説明される。

「彼はふと、自分が逃亡を助けたいと思っているのは、たんにこの三万ルーブルを犠牲にして傷を癒やすばかりでなく、なぜかほかにも理由があるような気がしてきたのだった。《心のなかでは、おれも同じような人殺しだからじゃないのか？》」

まさしくフロイト的である。

……（中略）……

二度目の面談のあとでも曖昧な形でしか意識されなかった「父殺し」が、いったい何を意味し、どのような経緯によって生じたか、イワンはこの時点で気づいている。「父殺し」とは、物理的に父親を殺すことではなく、何かより根源的に人間の心に宿る、他者への死の願望であり、それは兄ドミートリーにも自分にも宿っている、そういう発見がイワンのなかにあったことになる。

（亀山郁夫「解題」）

スメルジャコフとの「二度目の面会」での「このひとことによって、父殺しの下手人が明らかになるとともに、イワンのなかに、この父親殺しの事件の核心がはっきりと浮かびあがってくるのです」（ＮＨＫテキスト）と、「二度目の面談のあとでも曖昧な形でしか意識されなかった「父殺し」」（「解題」）との関係をどうか説明してください。どうなっているんですか？　スメルジャコフの「ひとこと」によって「イワンのなかに、この父親殺しの事件の核心がはっきりと浮かびあがってくる」のに「一ヶ月」がかかったといっているんでしょうか？

「解題」で、彼はこう書きさえしていました。アリョーシャの「あなたじゃない」の直後、スメルジャコフとの「三度目の面会」についてです。

二行の俗謡にも暗示されていたように、三度目の面談で、彼はついに事件の「本質」の認知へといたる。つまり、主犯はイワン、実行犯がスメルジャコフ、という本質的な構図である。絶対的な安全を確保しようとするイワンの地位は、すでに完全にゆらぎかけていた。

イワンは、確実に父親の死に対する願望があったことを、今はっきりと覚った。翌朝のモスクワ行きを決意した夜、得体の知れぬすさまじい好奇心にかられた彼が、階下にいる父親の一挙一動に耳を傾け、その様子を盗み聞きしたその行為の「卑劣さ」の意味を、イワンは完全に理解

したのである。

イワンに狂気が訪れてくる。まず、その最初の兆しが正確に書きとめられている。「じつはだね、おまえが夢なんじゃないかと、気がかりでな。そこにいるおまえが、幻じゃないかって？」

（同）

どうなっているんですか？　スメルジャコフとの「二度目の面会」での「このひとことによって、父殺しの下手人が明らかになるとともに、イワンのなかに、この父親殺しの事件の核心がはっきりと浮かびあがってくるのです」なんですか？　それとも、「三度目の面談で、彼はついに事件の「本質」の認知へといたる。つまり、主犯はイワン、実行犯がスメルジャコフ、という本質的な構図である」なんですか？　また、「この一ヶ月という期間がきわめて重要です。イワンの狂気が徐々に成長していく期間だからです」なんですか？　それとも、「イワンに狂気が訪れてくる。まず、その最初の兆しが正確に書きとめられている」なんですか？　答えてほしいですね。まあ、それでも亀山郁夫はこう書いてもいましたっけ。

アリョーシャの言わんとしたのは、やはり「あなたが殺した」ということだった。しかし同時に、殺したのはあなたの一部分である悪魔だとも言おうとしていた。要するに、アリョーシャは、結果として悪魔とイワンは一体ではないと語る（予言する）ことで、悪魔から離れなさいと、暗黙裡に警告したことになる。

だが、アリョーシャのこの暗示に満ちた言葉を聞いたイワンは、逆に悪魔と自分が一体かもしれないという自覚にはまり込むことになった。その意味で、きわめてドラマティックな転換点といえる。すでに悪魔と一体でありたくないという願望が、彼のなかに兆していることを暗示しているともいえる。

アリョーシャのこのひとことは絶大な意味を持つにいたった。このの ち、イワンにとっては、悪魔との戦いが最大の課題としてのしかかり、彼の存在を根源から揺るがすような発見へと、彼自身を導いていくからである。

（同）

一応「悪魔」云々に触れてはいましたね。とはいえ、この文章でいきなり「悪魔」を持ち出すことのおかしさについては、「その一」でいいました。しかし、それでも亀山郁夫にとっては、アリョーシャの「あなたじゃない」がイワンに図星ではなかったわけですし、「あなたじゃない」が「あなたである」という意味だなどということになっているわけで、そんなひとに「この一ヶ月という期間がきわめて重要です。イワンの狂気が徐々に成長していく期間」だなんていえるはずがないんですよ。いえますか？　それで「解題」の文章になるんですか？　それで、そもそもの自分の読み取り――それによって『カラマーゾフの兄弟』を訳したんです――を保持したまま、なんとかその誤りを取り繕うことができないだろうかということで、このＮＨＫテキストに「とってつけた」のが「この一ヶ月という期間がきわめて重要です。イワンの狂気が徐々に成長していく期間だからです」なんですよ。そう考えないとおかしいでしょう（ここでまた、実際のＮＨＫ講座で彼がどうしゃべっていたかという話になるわけですが、これについては「2」でいいました）。

いや、しかし、ちょっと私は混乱しています。ここで私は亀山郁夫の「この一ヶ月という期間がきわめて重要です。イワンの狂気が徐々に成長していく期間だからです」だけをＮＨＫテキスト作成時に「とってつけた」ものだとしてしゃべるつもりだったんですよ。つまり、以前（「その五」）に触れた「それこそは、ゾシマが修道院にはいる最初のきっかけとなった経験でした」や、今回指摘した「あるいは、イワンが、真犯人は自分かもしれない、という思いに達しつつあることを見越し、その認識に至る苦しみを見越して、赦しと励ましを与えようとしていたのかもしれません。事実、この時点でイワンは恐ろしい不安にかられ、

悪魔の来訪すら受けていました」と同じように、「この一ヶ月という期間がきわめて重要です。イワンの狂気が徐々に成長していく期間だからです」だけを問題にしようと思っていたんです。ところが、「このひとことによって、父殺しの下手人が明らかになるとともに、イワンのなかに、この父親殺しの事件の核心がはっきりと浮かびあがってくるのです」に絡んで、このＮＨＫテキストと「解題」との「とってつけた」くらいでは収まりきらない大きさの違いを見つけてしまったんです。「このひとことによって、父殺しの下手人が明らかになるとともに、イワンのなかに、この父親殺しの事件の核心がはっきりと浮かびあがってくるのです」云々を実際に亀山郁夫はＮＨＫ講座でしゃべっているのじゃないでしょうか？「未必の故意」云々を彼はしゃべっているのじゃないでしょうか？　いや、このテキストが実際の放送と恐ろしくかけ離れた内容に修正されているのなら、それでいいんですが、しかし、規模が大きすぎるのじゃないかと思うんです。スメルジャコフとの「二度目の面会」での「このひとことによって、父殺しの下手人が明らかになるとともに、イワンのなかに、この父親殺しの事件の核心がはっきりと浮かびあがってくるのです」（ＮＨＫテキスト）なんですか？　それとも、「三度目の面談で、彼はついに事件の「本質」の認知へといたる。つまり、主犯はイワン、実行犯がスメルジャコフ、という本質的な構図である」（「解題」）なんですか？

混乱した私は、自分で腰が抜けそうな――いわば亀山郁夫ばりの――想像をせざるをえないんです。しかし、それをいう前にまだ少しつづけます。

亀山郁夫はＮＨＫテキストでこう書いています。

「あなたじゃない」とは、どういう意味でしょうか。そして最後にアリョーシャは、「あなたじゃない」という言葉は、神さまが自分に、イワンにそう言いなさいと命令した言葉だとまで言い切ります。

そしてこの、アリョーシャのセリフを聞いたイワンは、アリョーシャに絶交を宣言し、自宅に戻りかけたところでふと思い直し、そこからニキロばかり離れたスメルジャコフの家に向かうのです。

「《心のなかでは、おれもまた同じような人殺しだからじゃないのか？》彼はそう自問した。すると、何か遠い、しかし焼けつくような感覚に、ちくりと心を刺されたような気がした」

そして今回の冒頭に引用したテクストの場面となるのです。

（亀山郁夫「新訳『カラマーゾフの兄弟』を読む」　ＮＨＫ出版）

「今回の冒頭に引用したテクストの場面」とは、イワンとスメルジャコフとの「三度目の対面」です。

それで、ついさっきに引用したものをもう一度。

三度目の、最後の対面――。これは『カラマーゾフの兄弟』全体のなかでも、存在論的な観点に照らした最高のクライマックスである。その対面の前に、ひそかにドミートリーを脱走させる計画が進んでいると書かれている。その目的でイワンは三万ルーブルものお金を出すというのだが、ここでは彼の複雑な心情が説明される。

「彼はふと、自分が逃亡を助けたいと思っているのは、たんに三万ルーブルの金を犠牲にして傷を癒やすばかりでなく、なぜかほかにも理由があるような気がしてきたのだった。《心のなかでは、おれもまた同じような人殺しだからじゃないのか？》」

まさしくフロイト的である。

（亀山郁夫「解題」）

亀山郁夫の頭のなかでは、どうやらイワンとスメルジャコフとの「三度目の対面」と「《心のなかでは、おれもまた同じような人殺しだからじゃないのか？》」とがセットになっているようなんですね。これではまるで、アリョーシャの「あなたじゃない」を聞いた後、スメルジャコフの家に向かう間に「《心のなかでは、

おれもまた同じような人殺しだからじゃないのか?》」という自問があったみたいじゃないですか。

私は原卓也訳を引用しますが、

ミーチャに対するカテリーナの愛の、束の間ではあるが、はげしい再発は、もはやイワンを完全な狂乱におとしいれた。奇妙なことに、すでに記した、アリョーシャがミーチャとの面会の帰りに寄ったときに、カテリーナの家で起ったあの最後の一幕まで、イワンは、自分があれほど憎んでいる兄に対して彼女の愛が《再発》したにもかかわらず、まるひと月の間にただの一度として彼女の口から、ミーチャの有罪に対する疑念をきいたことがなかった。さらにもう一つ注目すべきことは、彼がミーチャへの憎悪が日ましに強まるのを感じながら、同時に一方では、自分が兄を憎んでいるのは、カテリーナの愛の《再発》のためではなく、まさに兄が父を殺したためであることを理解していた点であった。彼はそのことを自分でも感じ、十分意識していた。それにもかかわらず、彼は公判の十日ほど前にミーチャを訪ね、脱走の計画を、それも明らかにだいぶ前から考えぬいた計画を提案したのだった。この場合、彼に行動をとらせた主要な原因のほかに、兄を有罪にするほうが得だ、そうなれば父の遺産の額が彼とアリョーシャにとって、四万から六万にはねあがるからだ、と言ったスメルジャコフのあの一言によって、心に癒えることなく残された爪痕も、責任があった。彼はミーチャの脱走をお膳立てするため、自分が三万ルーブル提供しようと決心した。が、その日、兄のところから帰る途中、彼はひどく心が滅入り、乱れていた。突然、自分が脱走させようと望んでいるのは、それに三万ルーブル出して爪痕を癒やすためばかりではなく、ほかにも何か理由があるような感じがしはじめたからだった。『心の中では、俺も同じ人殺しだからではないだろうか?』彼は自分にたずねてみた。何か間接的ではあるが、焼きつくようなものが心を刺した。何よりも、このまるひと月の間、彼のプライドはひどく苦しみつづけていた、だが、その話はあとにしよう……さて、アリョーシャの話のあと、自分の下宿の呼鈴をつかんでから、突然スメルジャコフを訪ねる決心をすると、イワンはふいに心の中に煮え返った一種特別な憤りに屈した。たった今カテリーナが、アリョーシャのいる前で、「あの人(つまり、ミーチャ)が犯人だと、あたしに言い張ったのは、あんたよ、あんただけよ!」と叫んだことをふいに思いだしたからだ。それを思いだして、イワンは呆然とさえなった。犯人はミーチャだなどと、これまで彼はただの一度も彼女に主張したことはなかったし、それどころか、スメルジャコフのところから帰ってきたあのときなぞ、彼女の前で自分自身に嫌疑をかけたほどだった。それなのに突然今になって、「あたしスメルジャコフのところに自分で行ってみたのよ!」などと叫ぶとは! いつ行ったのだろう? イワンはそのことを全然知らなかった。つまり、彼女はミーチャの有罪をすっかり信じているわけではないのだ! それに、スメルジャコフが彼女に何を言うかわかったものではない。いったい何を、何をあの男は彼女に言ったのだろう? 恐ろしい怒りが彼の心に燃えあがった。どうして三十分ほど前に彼女のそんな言葉をきき流し、その場でどなりつけずにいられたのか、わからなかった。彼は呼鈴を放りだすと、スメルジャコフの家に向って走りだした。『今度ばかりは、ことによると、あいつを殺すかもしれない』道々、彼は思った。

(ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳 新潮文庫)

「《心のなかでは、おれもまた同じような人殺しだからじゃないのか?》彼はそう自問した。すると、何か遠い、しかし焼けつくような感覚に、ちくりと心を刺されたような気がした」(亀山郁夫訳)と「『心の中では、俺も同じ人殺しだからではないだろうか?』彼は自分にたずねてみた。何か間接的ではあるが、焼きつくようなものが心を刺した」(原卓也訳)との違いも気になりますが、それはともかく、いったい亀山郁夫には、「三度目の対面」と「《心のなかでは、おれ

もまた同じような人殺しだからじゃないのか？》」との時間差が理解できているんでしょうか？

それとともに、「三度目の対面」への言及のなかでのこの文章。

スメルジャコフの「殺したのはあなたですよ」は、アリョーシャが以前にはなった暗示的な言葉、「殺したのはあなたじゃない」と、化学反応にも似た強烈な相乗作用をひき起こしながら、イワンを狂気へと駆り立てはじめた。

（亀山郁夫「解題」）

「アリョーシャが以前にはなった暗示的な言葉」の「以前に」というのは何でしょう？　アリョーシャの「あなたじゃない」は作品内時間では「ついさっき」の言葉なんですよ。亀山郁夫自身、先に引用したようにＮＨＫテキストでこう書いていました。

「あなたじゃない」とは、どういう意味でしょうか。そして最後にアリョーシャは、「あなたじゃない」という言葉は、神さまが自分に、イワンにそう言いなさいと命令した言葉だとまで言い切ります。

そしてこの、アリョーシャのセリフを聞いたイワンは、アリョーシャに絶交を宣言し、自宅に戻りかけたところでふと思い直し、そこから二キロばかり離れたスメルジャコフの家に向かうのです。

（亀山郁夫「新訳『カラマーゾフの兄弟』を読む」　ＮＨＫ出版）

「解題」でのこの「以前に」については、私は最初から――つまり、この七月から――気にはなっていたんですが、『カラマーゾフの兄弟』において「あなたじゃない」の記述と「三度目の対面」との記述との間に比較的長い文章が入るために、読者――おそらくは初読の――に配慮した亀山郁夫がそうしたのだと考えていたんです。しかし、ですね、いま、私はこれが実はやはり亀山郁夫自身の認識だったのじゃないかと考え始めているんです。

私は何をいおうとしているでしょうか？　先に私のいった「自分で腰が抜けそうな想像」とはどういうものでしょうか？

いいましょう。

亀山郁夫には、そもそも「解題」執筆時――ということは『カラマーゾフの兄弟』訳出時――で、アリョーシャの「あなたじゃない」がイワンとスメルジャコフとの「三度目の対面」の直前のことだというのがわかっていなかったのじゃないでしょうか？　いや、これがどんなに「自分で腰が抜けそうな想像」かは承知しています。しかし、そうだとしか思えないんです。つまり、「第十一編　兄イワン」における記述に、「あなたじゃない」以降、作品内時間を遡ってイワンとスメルジャコフとの二度の対面があり、さらに「あなたじゃない」を追い抜いて三度目の対面があるということが、亀山郁夫には理解できていなかったのじゃないか、と私はいっているんです。「解題」がめちゃくちゃなのは、そのためじゃないでしょうか？　それで、『カラマーゾフの兄弟』全五巻を出版した後で、いろいろな場所で講演などをするうち――聴衆に向かってあらためて解説をしようとして当該部分を読み返すうち――に、亀山郁夫に「第十一編　兄イワン」の本当の時系列がはじめて明らかになり、「三度目の面談で、彼はついに事件の「本質」の認知へといたる。つまり、主犯はイワン、実行犯がスメルジャコフ、という本質的な構図である」（「解題」）が、スメルジャコフとの「二度目の面会」での「このひとことによって、父殺しの下手人が明らかになるとともに、イワンのなかに、この父親殺しの事件の核心がはっきりと浮かびあがってくるのです」（ＮＨＫテキスト）へと変更されたということなんじゃないでしょうか？

いやはや、私は自分で腰が抜けそうです。

もし私の「自分で腰が抜けそうな想像」が正しいなら、私はなんという低能をここまで相手にしてきたんでしょうか。

（二〇〇八年十一月二十八日）

4

さらにつづけます。

ここで何よりも注目したいのは、イワンとスメルジャコフがめざしたのが完全犯罪であり、イワンに対しては未必の故意の嫌疑がかけられうるという事実です。十九世紀後半のロシアの裁判ないし陪審制という観念のなかで、未必の故意がどこまで法的な裁きの対象として認識されていたかが重要になります。もしも法的概念に当てはまらないのだとすれば、ドストエフスキーはそこにこそ、人間が犯しうる最大の罪を、原罪を見てとったにちがいありません。そしてその「使嗾」（指図してそそのかすこと）にこそ、イワンの説く無神論の最大の論拠があったとみてよいのです。

（亀山郁夫「新訳『カラマーゾフの兄弟』を読む」　NHK出版）

いったいこれは『カラマーゾフの兄弟』についての文章なんでしょうか？「イワンとスメルジャコフがめざしたのが完全犯罪」って何ですか？「完全犯罪」？いつ「めざした」んですか？　亀山郁夫はこのテキストの数ページ前でこう書いていたんですよ。

「それなら、申しますが、殺したのは、ほら、そこにいる、あなたですよ」

つまり、主犯はイワンであり、自分は「あなたの手足」を務めたにすぎない、という答えです。イワンにとっては恐ろしい真実です。「心のうちでは人殺しかもしれない」という認識をもっていたにせよ、それが現実的な意味に波及してくるとは思いもしなかったからです。心のうちであれば、許されるかもしれない、という甘えがあったのです。しかし、ここでにわかに明らかになったのは、これは、「心のうち」の問題では済まない、ということでした。

（同）

この文章自体にも大いに問題はあるんですが、それはさておき、亀山郁夫自身がそんなふうに語るイワンがいつ「完全犯罪」を「めざした」んですかね？

そもそもここで「めざした」だの「完全犯罪」とかいうのがおかしいんじゃないでしょうか。私はこれに非常な違和感を覚えます。「イワンとスメルジャコフ」のことを考えるとき、私には「完全犯罪」などということばを彼らにつなげることがどうしてもできないんですね。『カラマーゾフの兄弟』を読みながら、「完全犯罪」ということばが私に浮かんだことなんかありませんでした。『罪と罰』でも同じです。私にはラスコーリニコフが「完全犯罪」を「めざした」ようには全然思えませんでした。彼がただ殺人の計画を立て、実行し、自分が犯人であることを隠そうとしたというふうにしか読めなかったんですね。いや、それが「完全犯罪」を「めざした」ということなんだよ、――それは本当ですか？　両者は同じものでしょうか？　私は同じでないと思っているんです。登場人物が「完全犯罪」を「めざした」というふうに読者に読まれる小説は、そう読まれるように描かれている・そういうつくりをなしているでしょう（たぶん、この問題にはその作品の倫理性が関係してもいるはずだと私はいっておきましょう）。『カラマーゾフの兄弟』はそういうつくりをなしていないと私は思います。いや、「イワンとスメルジャコフ」が「完全犯罪」を「めざした」というためには、『カラマーゾフの兄弟』という作品の外部――当の作品自体はそんな読み取りを読者に導かない――から余計な何かを持ち込むことが必要なのじゃないか、それは

作品の矮小化だ、と私は疑います。

ともあれ、せせこましい指摘をするなら、こういうことです。いまの場合にでも、亀山郁夫は『カラマーゾフの兄弟』における「罪」が人間社会で制定され、成文化された「犯罪」かどうかという視点しかないんです。

それで、イワンの罪が法的に引っかからないとすれば、ということで亀山郁夫のいいだすのが「ドストエフスキーはそこにこそ、人間が犯しうる最大の罪を、原罪を見てとったにちがいありません」なんですけれど、「人間が犯しうる最大の罪を、原罪を」ってどういうことですか？　亀山郁夫は「原罪」を何だと思っているのか？　いいですか、繰り返しますが、人間＝罪あるものなんですよ。人間であるからには「原罪」を抱えているんです。亀山郁夫には「原罪」の意味がまるきりわかっていません。だから――これも繰り返しですが――、アリョーシャが「どんなことがあっても、原罪をまぬがれてはいない。アリョーシャのキスはまさに犯罪です」（『ロシア　闇と魂の国家』）なんてことをわざわざいったりすることになるんです。彼は「原罪」を、まるでそれを人間が行為として選択できるもののように考えているんですね。

さらに、「そしてその「使嗾」にこそ、イワンの説く無神論の最大の論拠があったとみてよいのです」というのは何でしょうか？　まったく意味不明です。いや、さすがに私にもお手上げです。何ですか、これは？「無神論の最大の論拠」――？　見当もつきません。亀山郁夫にもきっと説明できません。彼が説明したとしても、それがどうして「無神論の最大の論拠」という表現になるのか？　とこちらがいいさえすれば、彼はしどろもどろになってしまうのじゃないでしょうか？

しかし、そのようにまったく意味不明なんですが、これで「なるほど、そうか！　いや（私にはわからないけれども）、亀山先生はさすがだ！」と膝を打つような読者もあることでしょう。そういうひとは確実にいますね。自分で考えることを放棄してしまったひとたち、《だれの前にひれ伏すべきか？》ということしか考えられないひとたち、世のなかにベストセラーを成立させている読者たちですね（こういうひとたちなしに一〇〇万部単位のベストセラーは成立しません）。

その悩みとは、《だれの前にひれ伏すべきか？》ということにほかならない。自由の身でありつづけることになった人間にとって、ひれ伏すべき対象を一刻も早く探しだすことくらい、絶え間ない苦労はないからな。しかも人間は、もはや議論の余地なく無条件に、すべての人間がいっせいにひれ伏すことに同意するような、そんな相手にひれ伏すことを求めている。なぜなら、人間という哀れな生き物の苦労は、わしなり他の誰かなりがひれ伏すべき対象を探しだすことだけでなく、すべての人間が心から信じてひれ伏すことのできるような、それも必ずみんながいっしょにひれ伏せるような対象を探しだすことでもあるからだ。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

いや、そんなことでは駄目なんですよ。『カラマーゾフの兄弟』は、あなたが自分で読んで、自分で考えなくちゃならないんです。それがあなたの読書です。他人の読み取りを自分の読み取りにしてしまっちゃいけません。誰の前にもひれ伏さずに、自分の読み取りをしていかなきゃいけません。たとえ「みんな」がひれ伏そうが、あなたは全然そんなことをしなくていいんです。

亀山郁夫の読書はどうでしょう？　彼は自分の読書をしました。だから、それでいいんじゃないでしょうか？　その通りです、それが彼の私的な読書であれば。しかし、彼の読書はいま公的なものです。「翻訳」が「社会的責任を伴う」と彼自身いっているんです。しかも、その「翻訳」について、いろんなところでしゃべったり、書いたりしているわけです。彼は自分の私的な――低レヴェルの・でたらめな・とんちんかんな――読書を公的なものにしました。

というわけで、亀山郁夫によるＮＨＫラジオの講座をひとことも聞き漏らさずにいようとするお勉強好きな聴取者の方々にいいますが、こんなでたらめな講座を聞いてもしかたがないですよ。というより、あなたにとっては害悪ですらあります。あなたはあなたで『カラマーゾフの兄弟』を自力で読むより他な

いんです。自力で読んでこそ、あなたの読書なんです。「有名無実な先生」の講義なんかに頼っていてはいけません。

話を戻します。

イワン・カラマーゾフに悪魔はこういいました。

「ところで問題は、やがてそういう時期の訪れることがありうるか、どうかだと、わが若き思想家は考えた。もし訪れるなら、すべては解決され、人類は最終的に安定するだろう。しかし、人類の根強い愚かさからみても、おそらくまだ今後千年は安定しないだろうから、現在でもすでにこの真理を認識している人間はだれでも、まったく自分の好きなように、この新しい原理にもとづいて安定することが許される。この意味で彼にとっては《すべては許される》のだ。それだけでなく、かりにそういう時期が永久に訪れぬとしても、やはり神や不死は存在しないのだから、新しい人間は、たとえ世界じゅうでたった一人にせよ、人神になることが許されるし、その新しい地位につけば、もちろん、かつての奴隷人間のあらゆる旧来の道徳的障害を、必要とあらば、心も軽くとび越えることが許されるのだ。神にとって、法律は存在しない！　神の立つところが、すなわち神の席なのである！　俺の立つところが、ただちに第一等の席になるのだ……《すべては許される》、それだけの話だ！　何から何まで結構な話ですな。ただ、ペテンにかける気を起こしたのに、なぜそのうえ、真実の裁可なんぞが必要なんだろう、という気はするけどね？」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

（傍線は私・木下による）

私はイワンのためにいっておきますが、イワンの「無神論」――実は「無神論」なんかじゃないですが――からすれば、「法律は存在しない！」んですよ。亀山郁夫はイワンの思想をものすごく矮小化しています。イワンの《すべては許される》を、法的にどうかなんてこそこそした視点からしか見ることができていないんです。

それから、これもいっておきましょう。

翻って考えるなら、ドストエフスキー、いやイワンに言わせると、この小説の父殺しには、イワンだけでなく、傍聴人も加担していることになるのです。彼は、この原罪の持つ意味を、「幻覚症」の状態においてはじめて口にすることができたのでした。その意味で、このセリフは、イワン自身の秘められた内面の告白であり、自己弁護でもあったのです。

（亀山郁夫「新訳『カラマーゾフの兄弟』を読む」　ＮＨＫ出版）

亀山郁夫がいうのは、この場面のことですね。

「あなたは正気ですか、どうなんです？」思わず裁判長は口走った。

「正気にきまってるじゃありませんか……卑劣にも正気なんです、あんたや、ここにいるあの……豚どもとご同様にね！」突然、彼は傍聴席をふりかえった。「あいつらは親父を殺したくせに、びっくりしたふりをしてやがるんだ」彼は憎さげな軽蔑を示して歯ぎしりした。「お互いにしらを切りやがって。嘘つきめ！　だれだって父親の死を望んでいるんだ。毒蛇が互いに食い合いをしてるだけさ……父親殺しがなかったら、あいつらはみんな腹を立てて、ご機嫌斜めで家へ帰るこったろうよ……とんだ見世物さ！『パンと見世物』か。もっとも、俺だって立派なもんだ！　水はありませんか、飲ませてください、おねがいだから！」

……（中略）……

「証人、あなたの言葉は不可解で、この席では許されぬものです。できるならば気を鎮めて、もし……本当に言うべきことがあるのなら、話し

てください。そういう証言を、いったい何によって裏付けられるのですか……かりに、うわごとを言っているのでないとしたら?」

「証人がいないのが、問題でしてね。あの犬畜生のスメルジャコフだって、まさかあの世から証言を送ってはよこさないだろうし……封筒に入れてね。あなた方はいつも封筒が必要なんだから。一つありゃ十分でしょうに。僕には証人がいないんです……ただ、あいつだけは別だけど」

彼は考えこむように苦笑した。

「だれです、その証人とは?」

「尻尾のあるやつですよ、裁判長閣下、これじゃ型破りでしょうな! 悪魔(ルシファー)は存在しないんだから! 気にしないでください、やくざなチンピラな悪魔なんです」ふいに笑うのをやめ、秘密めかしく、彼は言い添えた。「あいつはきっと、この法廷のどこかにいますよ。ほら、その証拠物件のテーブルの下に。あいつの居場所はその辺にきまってますよ。いいですか、僕の話をきいてください。僕はあいつに、黙っているのはいやだと言ったんです。そしたらあいつは地質の変動のことなんぞ持ちだして……ばかばかしい! さあ、その無頼漢を釈放してやってください……讃歌なんぞうたいはじめて。そうすりゃ気が楽になるからですよ! 酔いどれの悪党が『ワーニカはピーテルに行っちゃった』とわめき立てるのと同じことなんだ。僕は二秒間の喜びのためになら千兆キロの千兆倍だって捧げますよ。あんた方は、僕って人間を知らないんだ! ああ、何もかも実に愚劣だ! さあ、兄の代りに僕を逮捕してください! 僕は何かをしに来たはずだな……どうして、何もかもこんなに愚劣なんだろう……」

(ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』 原卓也訳 新潮文庫)

それで、亀山郁夫は「ドストエフスキー、いやイワン」が、と口をすべらせたふりをしつつ、「この原罪の持つ意味を、「幻覚症」の状態においてはじめて口にすることができたのでした」となんだか力んで・考え深げに・思わせぶりに――お涙頂戴風に、自ら目頭を押さえつつ(かどうか知りませんが)――いって、「その意味で、このセリフは、イワン自身の秘められた内面の告白であり、自己弁護でもあったのです」と見得を切った――「なるほど、そうか! いや、亀山先生はさすがだ!」が聞こえてきそうです――わけですが、いいんですか、それで?

この裁判の前日――「あなたじゃない」の前――にアリョーシャがリーザとこんなふうに話していたんでした。彼女のところにイワンがやって来ているということをアリョーシャはホフラコワ夫人から聞いたばかりでした。

アリョーシャを何よりもおどろかせたのは、彼女の真剣さだった。以前ならばどんな《真剣な》瞬間にも、朗らかな冗談味を失わなかったのに、今の彼女の顔には、おどけた調子や冗談味は影もなかった。

「人間には犯罪を好む瞬間がありますからね」アリョーシャが考えこむように言った。

「そう、そうよ! あたしの考えをぴたりと言ってくださったわ。人間は犯罪が好きなのよ。だれだって好きなんだわ。そういう《瞬間》があるどころか、いつだって好きなのよ。ねえ、ことによると、まるでその昔みんなで嘘をつこうと申し合せて、それ以来ずっと嘘をついているみたいね。悪事を好むなんてだれもが言うけれど、内心ではだれだって好きなんだわ」

「相変らずよくない本を読んでいるんですね?」

「読んでいるわ。ママが読んで、枕の下に隠しておくから、失敬してくるの」

「自分を台なしにするようなことをして、よく気が咎めませんね?」

「あたし、自分を台なしにしたいの。この町にいる男の子で、列車が通りすぎる間、レールの間に伏せていた子がいるんですってね。幸せな子だわ! だってね、今あなたのお兄さまは父親殺しの罪で裁かれようと

しているでしょう、ところがみんなは、父親殺しという点が気に入っているのよ」

「父親殺しという点が気に入ってる、ですって？」

「そうよ、みんなが気に入っているわ！　恐ろしいことだなんて、だれもが言ってるけど、内心ではひどく気に入ってるのよ。あたしなんか真っ先に気に入ったわ」

「世間の人たちに関するあなたの言葉には、いくぶんかの真実がありますね」アリョーシャが低い声で言った。

（同）

これは、リーザの自前の考えですか？　アリョーシャがこのとき誰のことを考えていましたか？　たとえば「よくない本」といいながら、その実、誰を想像していたんですか？　この会話はこの後、どうつづきますか？　そもそもアリョーシャはなぜここでリーザと話していたんでしたか？

いや、法廷でのイワンのことばがどのように読者に導かれるかというと、いわば空中分解してしまった彼の思想の残骸が散乱しているだけなんじゃないでしょうか？　しかも、「だれだって父親の死を望んでいるんだ。毒蛇が互いに食い合いをしてるだけさ」から「僕は二秒間の喜びのためになら千兆キロの千兆倍だって捧げますよ」までの彼の発言の順番は、彼がこれまでに他人の前で口にしてきたことから、内面にだけ秘めていたものへと次第に移行しているのじゃないでしょうか？

イワンについて、私は「その三」でこういいました。

この若者は、ごく少数の、彼以上に考え、彼の考えていることを理解することができ、彼の抱えている問題に精通している相手であって、しかも、彼の問題を「肯定的なほうに」解決する立場の相手には、正直で誠実な敬意を表わすことができます。そうでない大多数の相手に向かっては、彼は自分の思想の、自他に対する嘲弄的な部分を取り出して、偽悪的・断定的にしゃべります。

そういうわけで、法廷でイワンがしゃべったのは「自分の思想の、自他に対する嘲弄的な部分」から、次第に彼のしがみつこうとしている（「それこそが私なんだ」）部分へと移行していったのじゃないでしょうか？　簡単にいえば、軽いものから重いものへの移行です。だから、「だれだって父親の死を望んでいるんだ。毒蛇が互いに食い合いをしてるだけさ……父親殺しがなかったら、あいつらはみんな腹を立てて、ご機嫌斜めで家へ帰るこったろうよ」という発言に、亀山郁夫の考えているような重量はない、と私はいうわけです。そうして、「父殺し」という『カラマーゾフの兄弟』を読み説くためのひとつのテーマを他のどんなものより優先したい亀山郁夫が、ここで無理やり芝居がかった身振りをしつつ、こじつけをし、聴取者・読者をたぶらかそうとしているのじゃないかと私は疑うんです。

いや、それでも、「みんなは、父親殺しという点が気に入っているのよ」というリーザのことばがイワンの発言の請売りだなんてどこにも書かれていないじゃないか、だから、いまのは彼女の自前の考えなんだ、イワンは関係ない、といいますか？　そうだとして――そうじゃないですが――亀山郁夫は、登場人物がとっくにしゃべっていたのと同じことをイワンが法廷で口にしたのをとらえて、「彼は、この原罪の持つ意味を、「幻覚症」の状態においてはじめて口にすることができたのでした。その意味で、このセリフは、イワン自身の秘められた内面の告白であり、自己弁護でもあったのです」なんていうんですか？「いや、亀山先生はさすがだ！」

ところが、ところが！　亀山郁夫は「解題」にこう書いています。

「あの人がお父さまを殺したことを、みんな喜んでいるの」「口では、恐ろしいとか言いながら、内心ではもう大喜びなの。その一番手が、わたしってわけ」

ご存じのように、このセリフは、第12編「誤審」でじっさいにイワンが法廷で絶叫する言葉を先どりしている。

では、この言葉は、リーザが自分から、自分の観察と直感から生み出したものであったのか。つまり、偶然の一致であったのか、それとも、最初の訪問のさい、イワンが口にした言葉を、彼女はたんに繰り返して言ったにすぎないのか、あるいは二人は、同時に人間の欲望の根源にひそむ「父殺し」の衝動を見抜いていたか、ということである。

（亀山郁夫「解題」）

いったい、このひとは何をやっているんですか？

亀山郁夫はＮＨＫテキストでリーザのことばに全然触れていません。それで、なんだか力んで・考え深げに・思わせぶりに――お涙頂戴風に、自ら目頭を押さえつつ（かどうか知りませんが）――「この原罪の持つ意味を、「幻覚症」の状態においてはじめて口にすることができたのでした」なんていうわけです。しかも、これが「ドストエフスキー、いやイワンに言わせると」なんですよ。イワンが「この原罪の持つ意味を、「幻覚症」の状態においてはじめて口にすることができたのでした」と指摘することで、亀山郁夫は、こういう形――「幻覚症」のイワンに託す形――でようやく作者ドストエフスキーが自身の個人的な思い（「自伝層」）を作品にぎりぎり吐露したのだ、といいたいんですね。そうして、これが『カラマーゾフの兄弟』における重大なテーマ「父殺し」なんだというわけです。

その亀山郁夫が、このイワンの台詞の、とっくにリーザによって口にされていることを承知しているわけです。何が「この原罪の持つ意味を、「幻覚症」の状態においてはじめて口にすることができたのでした」ですか？　何が「このセリフは、イワン自身の秘められた内面の告白であり、自己弁護でもあったのです」ですか？　何が「ドストエフスキー、いやイワンに言わせると」ですか？　これは一種の詐欺じゃないでしょうか？　これはうそ泣きじゃないですか？　こういうのを「二枚舌」というのじゃないですか？

いったい、亀山郁夫は何をやっているんでしょうか？

ＮＨＫの講座のタイトルは「新訳『カラマーゾフの兄弟』を読む」なんですよ。となれば、彼は自分の訳した『カラマーゾフの兄弟』および自分の著した「解題」とを、聴取者が読むという前提で講義しなければならないはずです。それなのに、なぜこうも――この文章の「3」でも指摘したように――講座のテキストと「解題」とが食い違うんですか？

私はいいますが――、

> では、この言葉は、リーザが自分から、自分の観察と直感から生み出したものであったのか。つまり、偶然の一致であったのか、それとも、最初の訪問のさい、イワンが口にした言葉を、彼女はたんに繰り返して言ったにすぎないのか、あるいは二人は、同時に人間の欲望の根源にひそむ「父殺し」の衝動を見抜いていたか、ということである。
>
> （亀山郁夫「解題」）

――いっそのこと、亀山郁夫はこういったらよかったんじゃないですか？　イワンは自分でもまったく考えつかなかった「父殺し」についての見かたを、リーザから教わったのである。リーザこそドストエフスキーの「自伝層」の代弁者であったのだ！　どうですか？　この可能性にどうして亀山郁夫は飛びつかないんですかね？　亀山式読解だったら、そうあるべきですよ。もうこれまでもさんざんそうやって『カラマーゾフの兄弟』を読んできたわけですからね。

「いや、亀山先生はさすがだ！」

それにしても、「あの人がお父さまを殺したことを、みんな喜んでいるの」、「口

では、恐ろしいとか言いながら、内心ではもう大喜びなの」というリーザの認識を亀山郁夫はどうやらすごいものだ――これこそ『カラマーゾフの兄弟』における「父殺し」の核心だ！――と思っているみたいなんですね。でなければ、彼女とイワンとを並べて「二人は、同時に人間の欲望の根源にひそむ「父殺し」の衝動を見抜いていた」なんてことをいうはずがありません。しかし、これがそんなに重要な認識なんですか？

もう一度、イワン。

「あなたは正気ですか、どうなんです？」思わず裁判長は口走った。
「正気にきまってるじゃありませんか……卑劣にも正気なんです、あんたや、ここにいるあの……豚どもとご同様にね！」突然、彼は傍聴席をふりかえった。「あいつらは親父を殺したくせに、びっくりしたふりをしてやがるんだ」彼は憎さげな軽蔑を示して歯ぎしりした。「お互いにしらを切りやがって。嘘つきめ！　だれだって父親の死を望んでいるんだ。毒蛇が互いに食い合いをしてるだけさ……父親殺しがなかったら、あいつらはみんな腹を立てて、ご機嫌斜めで家へ帰るこったろうよ……とんだ見世物さ！『パンと見世物』か。もっとも、俺だって立派なもんだ！」
（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

もう一度、リーザ。

「あたし、自分を台なしにしたいの。この町にいる男の子で、列車が通りすぎる間、レールの間に伏せていた子がいるんですってね。幸せな子だわ！　だってね、今あなたのお兄さまは父親殺しの罪で裁かれようとしているでしょう、ところがみんなは、父親殺しという点が気に入っているのよ」
「父親殺しという点が気に入ってる、ですって？」
「そうよ、みんなが気に入っているわ！　恐ろしいことだなんて、だれもが言ってるけど、内心ではひどく気に入ってるのよ。あたしなんか真っ先に気に入ったわ」
「世間の人たちに関するあなたの言葉には、いくぶんかの真実がありますね」アリョーシャが低い声で言った。
（同）

イワンもリーザも「父殺し」についてしゃべっていて、亀山郁夫がそれに飛びつくのはわかりますが、私にはふたりのことばが「父殺し」を扱いつつも、それがたまたま「父殺し」が話題になっているからそうしゃべったのであって、むしろこちらの方――イワン、リーザ独自の認識というより、『カラマーゾフの兄弟』全体に染み込んでいる認識――に近いと思えるんです。

一週間後に彼は死んだ。町じゅうの人が彼の柩を墓地まで送った。司祭長がまごころのこもった弔辞を述べた。だれもが彼の人生を断ち切った恐ろしい病気を嘆き悲しんだ。だが、葬儀が終ると、町じゅうが私を白い目で見るようになり、自分の家に招ずることさえやめた。もっとも、最初はごくわずかだったが、彼の自白の真実性を信ずる者もいて、その数はしだいに増えてゆき、わたしを訪ねてきては、たいそうな好奇心と嬉しさを示しながら、あれこれと質問するようになった。それというのも、人間は正しい人の堕落と恥辱を好むからである。
（同）

また、

ところが午後に入るとすぐ、ある事態が生じはじめた。出入りする人々は最初のうちもっぱら無言で心ひそかにこれを受けとめ、だれもが心に生れかけた考えを人に告げることを明らかに恐れてさえいる様子だった

が、午後三時ころまでには事態はもはや否定しえぬほど明白なものとなったため、この知らせはたちまち僧庵全体や、僧庵を訪れたすべての信者たちの間に広まり、時を移さず修道院にも伝わって、修道院の人々みんなを仰天させ、ついには、ごく短い時間のうちに町にまで達して、信者たると不信者たるとを問わず、町じゅうの人間を興奮させるにいたった。不信者は大喜びしたが、信者たちはどうかと言うと、彼らのうちにも不信者以上に喜んだ連中もいた。それというのも、物故した当の長老がかつてある説教で述べたとおり、『人々は心正しき者の堕落と恥辱を好む』からにほかならない。

（同）

アリョーシャがリーザとの会話でこういいもするんでした。

「そうだな。何か立派なものを踏みにじりたい、でなければあなたの言ったように、火をつけてみたいという欲求でしょうね。これも往々にしてあるもんですよ」

（同）

あるいは、

「人間には犯罪を好む瞬間がありますからね」

（同）

それを受けて、リーザはこういうんでした。

「そう、そうよ！　あたしの考えをぴたりと言ってくださったわ。人間は犯罪が好きなのよ。だれだって好きなんだわ。そういう《瞬間》があるどころか、いつだって好きなのよ。ねえ、ことによると、まるでその昔みんなで嘘をつこうと申し合せて、それ以来ずっと嘘をついているみたいね。悪事を好むなんてだれもが言うけれど、内心ではだれだって好きなんだわ」

（同）

（傍線は私・木下による）

さて、この二か月前にイワンとアリョーシャはこういう会話をしていました。

「人を愛するためには、相手が姿を隠してくれなきゃだめだ、相手が顔を見せたとたん、愛は消えてしまうのだよ」

「そのことはゾシマ長老も一度ならず話しておられました」アリョーシャが口をはさんだ。「長老もやはり、人間の顔はまだ愛の経験の少ない多くの人々にとって、しばしば愛の妨げになる、と言っておられたものです。でも、やはり人類には多くの愛が、それもキリストの愛にほとんど近いような愛がありますよ。そのことは僕自身よく知っています、兄さん……」

「ところが今のところ俺はまだそんなことは知らないし、理解もできないね。それに数知れぬほど多くの人たちだって俺と同じことさ。ところで問題は、人間の悪い性質からそういうことが起るのか、それとも人間の本性がそういうものだから起るのか、という点なんだ」

（同）

（傍線は私・木下による）

いいですか、リーザもイワンも話す相手はともにアリョーシャです。

ここで「犯罪を好む」（リーザ）と「相手が顔を見せたとたん、愛は消えてしまう」（イワン）の違いを問わずに、あるネガティヴなことについての「人間」がどういうものかという点で考えることにして、ふたりのことばを混ぜ合わせてこういい換えることができないでしょうか？

ところで問題は、人間の悪い性質からそういうことが起こる（＝人間にはそういうことの起こる「瞬間」がある）のか、それとも人間の本性がそういうものだから起こる（＝そういうことの起こる「瞬間」があるどころか、人間にはそれが「いつだって」起こっている）のか、という点なんだ。

そうして、リーザもイワンもアリョーシャに対して、そういうネガティヴなことが人間の本性だから起こる（＝「いつだって」起こっている）というんです。リーザは確かにイワンから人間の「本性」についての嘲弄的なことばを聞かされていたでしょう。しかも、フョードル殺害についての言及のなかで。それで、聞いて魅力的だと感じこそすれ、いままでリーザ自身にも曖昧なままだったイワンのことばがアリョーシャとの会話によってはっきりした手応え・確信に導かれたでしょう。だから、「そう、そうよ！　あたしの考えをぴたりと言ってくださったわ」というのは「イワンのいっていたのはそういうことだったんだ！　今こそ私には理解できた！」という意味でもあるでしょう。

そういうわけで、イワンはなにも法廷で初めて――しかも「幻覚症」によって――「お互いにしらを切りやがって。嘘つきめ！　だれだって父親の死を望んでいるんだ。毒蛇が互いに食い合いをしてるだけさ……父親殺しがなかったら、あいつらはみんな腹を立てて、ご機嫌斜めで家へ帰るこったろうよ……とんだ見世物さ！『パンと見世物』か。もっとも、俺だって立派なもんだ！」といったのではありません。亀山郁夫の、ドストエフスキーが自身の個人的な思い（「自伝層」）のぎりぎりの吐露を法廷でのイワンに託した「この原罪の持つ意味を、「幻覚症」の状態においてはじめて口にすることができたのでした」などという主張はでたらめです。

さて、人間の「何か立派なものを踏みにじりたい」（アリョーシャ）という欲求がどこから生じるかというと、これは以前に私がいった「どうせ自分はこういう人間なんだから」・「どうせあんたたちは私をそんなふうにしか見ていないんだろう？」という自分自身に対する「嫉視」・「悪意」からですね。そういう自分自身に対する「嫉視」・「悪意」は、他人が「立派」でなければないほど楽になるんですね。他人を引き下ろせば下ろすほど楽になるんです。「どうせあんたたちだって裏じゃこんなふうなんだろう？」、「どうせあんたたちだって叩けば埃の出る身体なんだろう？」、「あんたたちも私も同じ穴のむじなじゃないか」ということですね。そうやって他人の位置を引き下ろすことで、自分を正当化できるわけです。足の引っ張り合いです。それは、自分が「立派」でありたいけれど、そうできない、ということを正当化します。自分自身に対する「嫉視」・「悪意」です。

『カラマーゾフの兄弟』は、そういう自分自身に対する「嫉視」・「悪意」と、それを否定するものとの「応答」の小説です。この「応答」が作品内の絶え間ない運動として機能しています。各登場人物が自分でも醜いと考えているもの（「それこそが私なんだ」）を抱え込んで離さないでいること（「罪」）に対して――《ただ一人の罪なき人》に遡及することのできる――「あなたじゃない」が応えるんですね。

イワン・カラマーゾフはこういっていました。

「早い話、たとえば俺が深刻に苦悩することがあったとしよう、しかし俺がどの程度に苦しんでいるか、他人には決してわからないのだ。なぜならその人は他人であって俺じゃないんだし、そのうえ、人間というやつはめったに他人を苦悩者と見なしたがらないからな（まるでそれが偉い地位でもあるみたいにさ）。なぜ見なしたがらないのだろう、お前はどう思うね？　その理由は、たとえば、俺の身体が臭いとか、ばか面をしているとか、あるいは以前にそいつの足を踏んづけたことがあるとかいうことなんだ。おまけに、苦悩にもいろいろあるから、俺の値打ちを下げるような屈辱的な苦悩、たとえば飢えなんかだったら、俺に恩を施す人もまだ認めてくれるだろうが、それより少しでも高級な苦悩、たと

えば思想のための苦悩なぞになると、もうだめさ。そんなものは、ごくまれな場合を除いて認めちゃくれないんだ。それというのも、たとえば相手が俺を見て、こういう思想のために苦悩している人間は当然こういう顔をしているはずだと想像していたのとは、まるきり違う顔を俺がしていることに、ふいに気づくからなんだよ」

（同）

人間をこのように軽蔑するイワンに、法廷での傍聴人たちがどのように見えたでしょうか？

「ところで問題は、やがてそういう時期の訪れることがありうるか、どうかだと、わが若き思想家は考えた。もし訪れるなら、すべては解決され、人類は最終的に安定するだろう。しかし、人類の根強い愚かさからみても、おそらくまだ今後千年は安定しないだろうから、現在でもすでにこの真理を認識している人間はだれでも、まったく自分の好きなように、この新しい原理にもとづいて安定することが許される。この意味で彼にとっては《すべては許される》のだ。それだけでなく、かりにそういう時期が永久に訪れぬとしても、やはり神や不死は存在しないのだから、新しい人間は、たとえ世界じゅうでたった一人にせよ、人神になることが許されるし、その新しい地位につけば、もちろん、かつての奴隷人間のあらゆる旧来の道徳的障害を、必要とあらば、心も軽くとび越えることが許されるのだ。神にとって、法律は存在しない！　神の立つところが、すなわち神の席なのである！　俺の立つところが、ただちに第一等の席になるのだ……《すべては許される》、それだけの話だ！　何から何まで結構な話ですな。ただ、ペテンにかける気を起こしたのに、なぜそのうえ、真実の裁可なんぞが必要なんだろう、という気はするけどね？」

（同）

イワンには自分だけの知っている――愚かな人間たちの知らない――「真理」＝《すべては許される》があったわけです。それがこの法廷でどんな目で見られているか、どんな扱いを受けているかというと、『パンと見世物』――もちろん「大審問官」が想起されなくてはなりません――にされてしまっているんですね。「とんだ見世物さ！『パンと見世物』か。もっとも、俺だって立派なもんだ！」。イワンにとって、これは恐ろしい屈辱ですよ。なにしろイワンは「真実の裁可」を必要とする人間なんですから。彼は自分が大事にしてきた思想がこうも愚劣な、ちっぽけな、まるで尊敬を受けないものになるだろうとは考えられなかったんですね。傍聴人たちの「本性」を刺激し、満足させるためだけの――欲情の――対象にされてしまったんです。これはイワンにとってたまらないことです。前夜、彼は悪魔としゃべった後、アリョーシャにこういっていました。

「いや、あいつは自分が何を言ってるか、承知しているんだ。だってこう言うんだぜ、君が行くのはプライドからさ、君は立ってこう言うだろうよ。『殺したのは僕だ、どうしてあなた方は恐怖に縮みあがっているんです。あなた方は嘘をついてる！　僕はあなた方の意見を軽蔑する、あなた方の恐怖を軽蔑します』俺のことをこう言うかと思うと、今度はいきなり、『あのね、君はみんなにほめてもらいたいのさ。あいつは犯人で、人殺しだけど、なんて高潔な感情の持主だろう、兄を救おうとして自白したんだ、って！』なんて言いやがる。そんなの嘘だよ、アリョーシャ！」突然イワンが目をぎらぎらさせて、叫んだ。「あんな百姓どもにほめてなんぞもらいたくないよ！　あいつは嘘をついたんだ、アリョーシャ、嘘をついたのさ、誓ってもいい！　だから俺はあいつにコップをぶつけてやったよ、あいつの面に当って粉々に砕けたっけ」

（同）

法廷でのイワンの発言にはそういう意味しかないだろうと私は思います。そこにはイワン自身の抱えている苦悩のあらわれ――彼の軽蔑する他人・社会を

前にした――があるだけで、苦悩そのものはありません。

つまり、私がいいたいのは、亀山郁夫の主張するイワンとリーザの認識は『カラマーゾフの兄弟』における「父殺し」についてのただの・ほとんど表層の一側面にすぎない、ということです。これをこの作品における「父殺し」の正面に据えるのには無理がある――亀山郁夫はこれを針小棒大に扱っている――ということです。

またも引用しますが、

二度目の面談のあとでも曖昧な形でしか意識されなかった「父殺し」が、いったい何を意味し、どのような経緯によって生じたか、イワンはこの時点で気づいている。「父殺し」とは、物理的に父親を殺すことではなく、何かより根源的に人間の心に宿る、他者への死の願望であり、それは兄ドミートリーにも自分にも宿っている、そういう発見がイワンのなかにあったことになる。

（亀山郁夫「解題」）

この文章について、私は以前「その二」でこういいました。

「二度目の面談のあとでも曖昧な形でしか意識されなかった「父殺し」」って、それ、本当にそう思っているんですか？　本当にそう思っているんだろうなあ。でなければ、「「父殺し」とは、物理的に父親を殺すことではなく、何かより根源的に人間の心に宿る、他者への死の願望であり、それは兄ドミートリーにも自分にも宿っている、そういう発見がイワンのなかにあったことになる。」なんて書かないものなあ。それ、『カラマーゾフの兄弟』ではなくて、もしかすると単純にフロイトなんじゃないですか？　イワンはそんなことを考えていたんじゃありません。イワンはそんな悠長な、抽象的な、他人事のような理解なんかしている場合じゃなかったと思いますよ。彼は自分の全存在の存亡のかかった、ぎりぎりの、ひどく具体的・即物的な危機にあったでしょう。

私は亀山郁夫が『カラマーゾフの兄弟』におけるイワンにとっての「父殺し」を「物理的に父親を殺すことではなく、何かより根源的に人間の心に宿る、他者への死の願望」――「原罪」を絡めて――などというところに落ち着けてしまうことに呆れています。ここまでイワンの叙事詩「大審問官」でのキリストが偽者であるとか、キリストのキスが大審問官の思想・行為への承認・祝福であるとか大風呂敷――穴だらけの、ですが――を広げていたひとが、結局この叙事詩作者イワンの末路をこんな薄っぺらな・どうでもいいところへ落ち着けてしまうんですか？　そもそもイワンという人間をまったく読み取れていないひとだから無理もないですが、笑っちゃいますよ。まったく不愉快な大笑いで、やりきれなくなります。

亀山郁夫は『カラマーゾフの兄弟』における「父殺し」を過大に扱いがたいために、また、それを作者ドストエフスキーの個人的体験と結びつけたいがために、さらに、それを自分の「発見」――これは、「発見」といえばいうほど彼自身の馬鹿さ加減がどんどん露呈するんですけれど、本人には全然わかっていません――だと主張したいがために、実はこの問題を矮小化しているんですよ。

亀山郁夫のいう「物理的に父親を殺すことではなく、何かより根源的に人間の心に宿る、他者への死の願望」なんてことはイワン・カラマーゾフの内心じゃありません。なぜ彼はイワンをイワンとして読まないのか？　亀山式読解にしたがえば、ここでイワンはべつにイワンでなくてもよくなってしまいます。イワンという人間が突然、普遍化・一般化された「人間」に還元されてしまいます。イワンが「人間」の典型的な一例に落とし込められてしまうんです。もしここで普遍化・一般化を行なうならば、それは普遍化・一般化された「人間」がイワンの位置にまで上がっていかなくてはならないんです。

これはイワンについてのことばではありませんが、

なぜなら、奇人とは『必ずしも』個々の特殊な現象とは限らぬばかりか、むしろ反対に、奇人が時として全体の核心を内にいだいており、同時代のほかの人たちはみな、突風か何かで、なぜか一時その奇人から引き離された、という場合がままあるからだ……

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

――と『カラマーゾフの兄弟』の語り手がいうとき、語られる奇人の行動はやはり読者にとっても奇行であるはずなんですよ。読者には、この奇人がなぜそのような行動に及ぶのか理解しがたいはずなんです。ところが、よくよく考えてみると、その奇行に「全体の核心」（「普遍的な意味」）が読み取られるんですね。しかし、当の奇人本人にとってみれば、彼はなにも読者の読み取る「全体の核心」（「普遍的な意味」）のために行動しているわけじゃないんですよ。彼には彼の苦悩があり、喜びがあるんです。読者はまず、描かれているそれをそのまま読まなくてはなりません。そのまま読んでこそ、読者はそこから「全体の核心」（「普遍的な意味」）を読み取ることになるでしょう。

亀山郁夫はこの奇人本人に読者の読み取る「全体の核心」（「普遍的な意味」）を押しつけています。

読者はイワン・カラマーゾフだけに目を向けなくてはいけません。イワンもミーチャ同様にフョードルについて「こんな男がなぜ生きているんだ！」と思っていたでしょう。フョードルが殺されてもかまわないと思っていたでしょう。そのフョードルは彼の父親でもありました。フョードルが自分の父親だからこそ、余計にその思いが募りもしたでしょう。しかし、これはいま私のいった順番で考えられるべきことなんですよ。そうして、『カラマーゾフの兄弟』の読者は、まず何よりもフョードルとイワンとの個別の・独自の関係だけを読まなくてはなりません。

『カラマーゾフの兄弟』で描かれているのは、教訓的な意味での普遍化・一般化された父と息子の関係ではありません。小説作品を読むとは、そういうことです。それを後で普遍化・一般化してフロイト――「まさしくフロイト的である」――のようなことを考えるのは自由です。しかし、まず『カラマーゾフの兄弟』に書かれていることだけを読まなくてはいけないんです。読者はイワンの内心だけを読み取らなくてはいけません。イワンの認識が「「父殺し」とは、物理的に父親を殺すことではなく、何かより根源的に人間の心に宿る、他者への死の願望であり、それは兄ドミートリーにも自分にも宿っている」ですって？まったく、亀山郁夫はどれだけ自分の読解力のなさを披露してくれたら気がすむんですか？　イワンという人物が平板に、ちっぽけに、書割のように存在感のないふうに描かれている駄目な作品になら、そういう読み取りでもかまいませんよ。そうじゃないでしょう？　イワンの苦悩はイワンの苦悩として読まなくちゃいけません。

私はいいますが、『カラマーゾフの兄弟』は「人間の欲望の根源にひそむ「父殺し」の衝動」のことを描いた小説ではありません。

（二〇〇八年十二月十七日）

5

この文章「その九」も「4」までを書いてきて、これが「5」になるわけですが、正直、私は亀山郁夫のあまりにも馬鹿な読み取りに辟易し、それらをひとつひとつ採りあげてつぶしていくのにうんざりしつつあります。というのも、実は問題は、個々の場面やら人物やらの解釈じゃなくて、それらすべての根っこ――亀山郁夫の恐ろしく低レヴェルの読解力――にあるんです。以前にもいいましたが、これは構造的な問題なのであって、表層の問題じゃないんです。ところが、

それを誰にもわかるように論証しようとすると、結局こちらとしては、彼のでたらめをひとつひとつ地道に採りあげざるをえないわけです。手間と時間のかかる作業です。もっとも、時間のかかっていることにはよい面もあるかもしれません。つまり、亀山郁夫批判がそれだけの時間継続しているということですから。この継続の先に、「日本のどこかで、だれかが、どの時間帯にあっても、つねに切れ目なく、お茶を飲みながら、あるいはワインを傾けながら、それこそ夢中になって」亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』のひどさを、もう金輪際このような翻訳の出てはならないことを「話し合うような時代が訪れてほしい」と思います。

いや、あるいは、この「連絡船」にとっても、これはまたとない機会なのかもしれません。なぜなら、これほど馬鹿な、どれほど罵倒しても足りないような、しかも、はっきり口にしてよいどころか、口にすべき、いや、口にしなくてはならない具体例が他にあるでしょうか？　私はだいぶ前（二〇〇六年春）にこういいました。

ある作品を「よい」と評価するひとは、必ずそうでない作品を知っています。そのひとは作品を評価するなにがしかの基準をもっています。それで、その基準が埒外にはじき出すものが必ずあります。ここでの「そうでない作品」というのがまだ十分に譲歩した表現だということも断わっておいた方がいいでしょう。なぜなら、それらのほとんどは「作品」にすらなっていないからです。そうして、世のなかには「作品にすらなっていない」ものがゴマンと流通しています。

そこでまたいいますが、書店員が「手書きＰＯＰ」で店頭に並ぶもののなかでのどれかを推すという行為は、べつのどれかを「そうでない」作品であると認識したうえでいっているわけです。そういう認識――あれとこれとは確実に違うという認識――なしに「手書きＰＯＰ」を書いているような無邪気な書店員がもしいるとすれば、そのひとの書くものはまったく信用に値しません。

そこでの「そうでない作品」について、私はこれまでひとつも具体的な作品名を挙げてきませんでした。作品名を伏せてなら、いくらかはしゃべりましたけれど、しかし、それらのどこがどうおかしいのかということを当の作品内の文章まで採りあげてする、というふうにはしてきませんでした。私は自分で「よい」と評価する作品だけを扱っていけばいいと考えていましたし、「そうでない作品」にはあれこれいう価値もないとも考えていました。しかし、私は自分の「作品を評価するなにがしかの基準」が「埒外にはじき出す」ものが実際にどういうものであるか、いつかは具体的に示すべきだったのじゃないでしょうか。そうしてこそ、私の「基準」が――その弱点まで含めて――はっきりと試されることになり、鍛えられもすることになるのじゃないでしょうか。またそれは、「読書案内」をしようとしている私が、いったいどんな読みかたを駄目だと思っているかを具体的に示す機会でもあります。それは私がはっきりと示しておいた方が「連絡船」の読者――どれだけ望めるのかわかりませんが――にも助けになるはずじゃないでしょうか。あるいは、そのひとたちにこの「連絡船」に読む価値があるかどうか決めてもらう、よい機会です。

ところが、ここで奇妙な事態が持ち上がったんですね。私が「よい」と評価するどころか「世界最高の小説」とまで評価している作品が「新訳」によって「そうでない作品」に貶められてしまったわけです。

そうです。これはまったく「連絡船」にとってまたとない機会なんです。

私は先に引用した文章のつづきでこうもいっていました。

作品の「よい・悪い」と自分の「好き・嫌い」とをごっちゃにして、「いや、そんなのはひとそれぞれだよ」というひとが（ものすごくたくさん）います。はっきりいいますが、この点に関してその常套句「ひとそれぞれ」を用いることは罪悪ですらあるだろうと私は考えています。それは「す

り替え」です。いいですか、作品はあなたのためにあるのじゃありません。作品はあなたに合わせません。あなたが作品に合わせるんです。それでこそ「感動」が生じるはずなんです。作品があなたのところに降りてきてしまったら、「感動」は生じないでしょう。作品があなたのところに降りてきてしまっているにもかかわらず、あなたが「感動」したなどと思うなら、あなたは「すり替え」を行なってしまっているんです。あなたが作品のところにまで上がっていってこそ「感動」することができるんです。つまり、ここでは、あなたが変化するということが大事なんです。

私はいいますが、亀山郁夫は『カラマーゾフの兄弟』という作品に自分を合わせませんでした。彼は逆に『カラマーゾフの兄弟』という作品を自分に合わせました。彼は『カラマーゾフの兄弟』を自分のところ――最低の読解力！――にまで引き降ろしました。いま私は「なぜこんな男が訳してるんだ！」といっているんですし、「いや、教えてください、この上まだこんな男に『カラマーゾフの兄弟』を汚させておいていいもんでしょうか？」と叫んでいるわけです。

そうして、これもおさらいですが、

作家が「なにを」を想定しようとするとき、すでに彼のなかでは、それについての「どのように」がついてまわっています。「どのように」を考えると、「なにを」も決まっている。つまり、「なにを」は自分の生かす「どのように」を求め、「どのように」は自分の生かしてやれる「なにを」を求めるということです。両者は強力に拘束しあいます。この関係の破綻したものを作品などといってはいけません。ということは、作家が書きはじめたとき、彼は自分が「なにを描か（け）ないか」「どのように描か（け）ないか」を知っているということでもあります。最初から大きい断念が生じるはずなんです。作家は全然自由ではなく、非常に不利なところからはじめます。しかし、書き進めながら彼はこの拘束のなかですんなり小さくまとめればいいというのでもない。彼は自分の書いていくなにかしらを、この拘束を脅かすほどに内部から大きく発展させていきます。敢然として拘束に拮抗させていく。そのせめぎ合い・たたかいの軌跡こそが作品なんです。

（「わからないときにすぐにわかろうとしないで、わからないという場所に……」〈『カンバセイション・ピース』（保坂和志　新潮文庫）〉解説）

もうひとつ、

ここでいっておきたいんですが、ある小説作品について、その読みかたというのは、その作品――作者じゃありません――自体が決定し、読者を導くはずなんです。私はこれまで何度もいっていますが、作品というのは、作者の「何を描くか」と「どのように描くか」とのせめぎ合い・拮抗の軌跡そのものなんです。そのとき、作品が主で、作者は従の位置にあります。作者は作品に奉仕するんです。逆にいえば、作品においての「何が描かれているか」と「どのように描かれているか」とがせめぎ合い、拮抗していればいるほど、読者によるその読みかたはますます作品に導かれます。

――と、ここまでいってきたところで、私はこういいます。亀山郁夫のやっていることは読書ですらありません。亀山郁夫には日本語であれ、ロシア語であれ、そもそも一般的な意味で作品を読む力がないんです。亀山郁夫には、どんな小説を読んで論じる資格もありません。

というわけで、先へ進みます。

しかし、犬いじめの一件は、思いもかけずイリューシャの心の「傷」となり、コーリャとのあいだに決定的な亀裂を生んだ。コーリャは結核

で死にゆこうとするイリューシャの「傷」の原因を推しはかり、ジューチカ（？）を探してきて徹底的に仕込むのだが、非情なしごきに似たその訓練ぶりは、彼の冷徹な意志を思わせる。

こうして、片目がつぶれ、耳に裂け目のはいったペレズヴォン（改名されたジューチカ）は、コーリャに完璧に奉仕する存在となった。文字通り「ございます犬」の誕生である。コーリャをめぐる、このあたりの微妙な設定の持つ重要性を理解するには、くどいようだが、「第二の小説」の知られざる構想にまで想像の翼を広げて考えないことにはおぼつかない。犬のジューチカとペレズヴォンが同一かどうかという問題は、複雑きわまりない連想の糸をたぐり寄せてしまう。もし同一の犬でないとしたら、だれが片目をつぶし、だれが耳に裂け目を入れたのか。

（亀山郁夫「解題」）

さて、コーリャ・クラソートキンは、かつての子分であるイリューシャを元気づけるため、どこから連れてきたのか、ペレズヴォンという名前の大型犬を自宅でひそかに飼育しています。外見はジューチカとそっくりですが、それが果たして同一の犬かどうか、作者は最後まであいまいにしたままです。ジューチカは何者かによって片目をつぶされ、耳にははさみで刻んだようなあとがありますが、ペレズヴォンにも、それと同じ特徴があります。

「ごらんよ、じいさん、わかるかな、片目が潰れてて左耳が裂けている、きみがぼくに話してくれたのと、特徴がまるで同じだ。ぼくはね、このふたつの特徴を手がかりにこいつを探しだしたんだ！」

では、ジューチカとペレズヴォンは同一の犬だと考えてよいのでしょうか。じつはここに、第十一編を考えるうえで、決定的ともいうべき問題がひそんでいるのです。

そこでにわかに気になってくるのが、ペレズヴォンの存在です。ペレズヴォンの正体はほんとうにジューチカなのでしょうか。ジューチカであれば、なぜ、あそこまで厳しい訓練をほどこす必要があったのでしょう。私はいま少し意地の悪い想像を働かせます。そこで浮かびあがる問題はひとつ――つまり、ペレズヴォンの耳に刻み目を入れ、左目をつぶしたのはだれか、ということなのです。いやがおうにも不吉な連想が働いてしまいます。コーリャの「社会主義者」としての資質を貶めるために言うのではありません。かつてコーリャとイリューシャのあいだにあった上下・支配関係を思い出してほしいのです。この第十編では、そのような関係が、じつはコーリャとペレズヴォンのあいだにも生じている、ということです。

（亀山郁夫「新訳『カラマーゾフの兄弟』を読む」　ＮＨＫ出版）

――最低です。

いいですか。あるひとつの作品について、よく「読者の数だけその作品の読み取りがある」だとか「読者の数だけ誤読がある」だとかいいますが、亀山郁夫はその「読者」に含むことすらできません。

いいですか。あらゆる読者には「想像力」というものがあって、ある作品を読むときにその「想像力」は「自由」に駆使されるべきであって、読者は「ひとそれぞれ」にどんなふうにも作品を読むことができる――だから、「あなたも自由に想像の翼をはばたかせてごらんなさい」――というようなことをいうひとがいますよね。それはそれで正しいと私は認めます。私もそれを奨励します。ただし、私はいいますが、その場合でも、読者に――亀山郁夫が行使しようとしているような――無際限な「自由」なんかありはしません。

なぜか？

作者の――互いに拘束しあう――「何を描くか」と「どのように描くか」とのせめぎ合い・拮抗の軌跡としての「作品」が、そこに読者を巻き込むからです。先に引用した私自身の文章を敷衍しますが、読者もその作者の「何を描くか」と「どのように描くか」とのせめぎ合い・拮抗の軌跡に「拘束」されます。作品にお

いての「何が描かれているか」と「どのように描かれているか」とがせめぎ合い、拮抗していればいるほど、読者によるその読みかたはますます作品に「拘束」されます。しかし、読み進めながら読者はこの拘束のなかですんなり小さくまとめればいいというのでもない。彼は自分の読んでいくなにかしらを、この拘束を脅かすほどに内部から大きく発展させていきます。敢然として拘束に拮抗させていく。そのせめぎ合い・たたかいの軌跡こそが読書なんです。それこそが、読者がどれだけ作品に書かれていることを「真に受ける」ことができるか、ということでもあります。

亀山郁夫の読書はその「拘束」から遥かに逸脱しています。いい換えれば、でたらめ・屁理屈・わがまま・負け惜しみです。亀山郁夫にしてみれば、自分の「自由」を強調したいところでしょうが、そんな「自由」なんかはありはしないんです。

私はこの「連絡船」の読者――いくらかでも「背伸びをする」つもりのあるひとたち、いまの自分には容易に理解できない作品・手強いと感じる作品に手を伸ばすつもりのあるひとたち、いつかは自分にもその作品を読みこなせるようになるのではないか・その作品と自分とにはきっとなにかしらの大事なつながりがあるのではないか、と思っているひとたち――にこういいましょう。

小説作品を読むときに、あなたはただそこに書いてあることをそのまま読んでください。そこに何か難解なことが書かれているはずだなどと思わないようにしてください。「ああ、何だ、そうか」というほどの単純なことが書かれていると思って読んでください。一見難しそうに見えたが、実はこんな簡単なこと・当たり前・常識的なことが書いてあるだけなのか、というふうに読んでください。また、同じことですが、文中のある一語にむやみやたらと大げさな意味を持たせないようにしてください。その一語およびそれに絡んだ表現が作品の全体に頻出するようなら、もちろんこれは大事なことですが、そういう頻出は意識せずとも、自然にあなたを先へと導いているはずでもあります。一語に引っかかるよりも、前後の文脈の方を大事にしてください。そういう読書において、実は複雑で実り豊かなのは、「ああ、何だ、そうか」の組み合わせ、絡まり具合、その緊張なんです。逆に、そういうふうに読めば、あなたが引っかかったその一語の意味が明瞭になるでしょう。アフォリズムなどというものに期待するのはやめましょう。ある一文だけを警句的な意味で採りあげ、それだけで完結させてしまうことですね。一文一文に何かが表現されていると考えるより、そういう文章の連なり・塊の方に表現されているものを読んでください。作品というのは静止したものではなくて、常に動いているんです。動きを読んでください。

ざっと、そんなふうに読むことが小説を読むときの基本だと、おおざっぱながら私はいいましょう。しかし、それらの「ああ、何だ、そうか」というのも、実は危険なことで、それらをあなたは自分のすでに持っている何かの観念に落としこむのでなく、できるだけ作中に書かれているそのままの表現でそのまま保持するのがいいです。作品に書かれていることをあなたはできるだけ「まとめ」ようとしないでください。つまり、あなたがある作品について何かいおうとして、思い浮かべるのが、あなた自身の「まとめ」であるよりは、あなたの読んでいる当の文章そのままであるようにしてください。あなたの頭のなかが作品の引用だらけ――というか作品全文――になるように読んでください。それをそのまま何年も時間をかけて熟成させていってほしいんです。あなたの読んだものが素晴らしい作品であるならば、それはあなたに大きな実りをもたらすでしょう。

また、こういうふうにも思ってください。作者は可能な限り簡単に・明瞭に・わかりやすく書いています。結果として、いかに晦渋な・難解な・とっつきにくい表現になってしまっているとしても、そうなんです。作者は自分の書いたものをそのまま読んでほしいと思っています。作者は、読者が誤解をしないような書きかたを必ずします。誤解されてしまっては困るからです。妙な解釈をされてはかなわないと思っているからです。どうかそんなふうに思ってください。

「わからないときにすぐにわかろうとしないで、わからないという場所

に我慢して踏ん張って考えつづけなければいけないんだな、これが」と私は言った。

「我慢して踏ん張るって、内田さんいまいくつですか？　四十でしたっけ――」

「もうじき四十四」

「げえッ。四十四って、じゃあ内田さんはいったい何年踏ん張ってるんですかぁ。

おれより内田さんの方がアタマいいんだから、おれより若いときから踏ん張ってたりしたら、もう二十年じゃないですか。

おれ二十年も踏ん張っていたくないですよ。内田さんはあと何年踏ん張ってるんですか。そういうのって、やっぱりスタートの考え方が間違ってるって言うんじゃないですか？　スタートに失敗してたら何十年踏ん張ったってダメですよ」

（保坂和志『カンバセイション・ピース』新潮文庫）

読書についていいますが、何十年も「踏ん張って」ください。その「踏ん張る」というのは、あなたがどれだけその作品を「真に受ける」ことができるかどうか、ということです。いいですか、作品はあなたのためにあるのじゃありません。作品はあなたに合わせません。あなたが作品に合わせるんです。作者が奉仕した彼の作品に、読者であるあなたも奉仕しなくてはなりません。『カラマーゾフの兄弟』はあなたが何十年も「踏ん張る」価値のある作品です。私にしたところで、たかだか二十五年「踏ん張って」いる――のんびりだらだらと――にすぎません。

本当の知的行為というのは自分がすでに持っている読み方の流儀を捨てていくこと、新しく出合った小説を読むために自分をそっちに投げ出していくこと、だから考えるということというのは批判をすることではなくて信じること。そこに書かれていることを真に受けることだ。

そんなことは誰も言っていないとしてもそうなのだ。非‐当事者的な態度を捨てれば、書かれていることを真に受けるしかない。言葉では「しかない」と、とても限定的な表現になるが、そこにこそ大海が広がっている。教養や知識としての通りいっぺんの小説なんかではない、生命の一環としての思考を拓く小説がそこに姿をあらわす。

（保坂和志『小説、世界の奏でる音楽』新潮社）

亀山郁夫には全然「踏ん張る」ことができていません。繰り返しますが、彼は『カラマーゾフの兄弟』を自分に合わせました。彼は全然『カラマーゾフの兄弟』に奉仕しませんでした。彼は『カラマーゾフの兄弟』を「真に受け」ませんでした。

――というところで、ジューチカ＝ペレズヴォンの話に戻ります。

それはごくありふれた雑種犬くらいの大きさのむく毛の犬で、何やら灰色がかった薄紫色の毛並みをしていた。右目がつぶれ、左耳はなぜか裂けていた。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

「ジャンプしろ、ペレズヴォン、芸をやれ！　芸をやるんだ！」コーリャが席から跳ね起きて叫ぶと、犬は後足で立ち、イリューシャのベッドの前でちんちんをした。と、だれ一人予期しなかった事態が生じた。イリューシャがびくりとふるえ、突然力いっぱい全身を前にのりだして、ペレズヴォンの方に身をまげると、息もとまるような様子で犬を見つめたのだ。

「これは……ジューチカだ！」ふいに苦痛と幸福とにかすれた声で、彼は叫んだ。

（同）

（傍線は私・木下による）

いいですか、ペレズヴォンはジューチカなんですよ。何が「外見はジューチカとそっくりですが、それが果たして同一の犬かどうか、作者は最後まであいまいにしたままです」なもんですか。この場面を他にどんなふうに読めるというんですか？

「じゃ、君はなんだと思ってたんだい？」よく透る、幸せそうな声で精いっぱい叫ぶと、コーリャは犬の方にかがみこんで、抱きかかえ、イリューシャのところまで抱きあげた。

「見ろよ、爺さん、ほらね、片目がつぶれてて、左耳が裂けてる。君が話してくれた特徴とぴたりじゃないか。僕はこの特徴で見つけたんだよ！あのとき、すぐに探しだしたんだ。こいつは、だれの飼い犬でもなかったんですよ！」急いで二等大尉や、夫人や、アリョーシャをふりかえり、それからふたたびイリューシャに向って、彼は説明した。

「こいつはフェドートフの裏庭にいて、あそこに住みつこうとしかけたんだけど、あの家じゃ食べ物をやらなかったし、こいつは野良犬なんだよ、村から逃げてきたんだ……それを僕が探しだしたってわけさ……あのね、爺さん、こいつはあのとき、君のパンを呑みこまなかったんだよ、呑みこんでたら、もちろん、死んでたろうさ、それなら終りだ！　今ぴんぴんしてるとこを見ると、つまり、すばやく吐きだしたんだよ。ところが君は、吐きだすとこを見なかった。吐きだしはしたものの、やはり舌を刺したんだね、だからあのとききゃんきゃん鳴いたんだよ。逃げながら、きゃんきゃん鳴いたもんで、君はてっきり呑みこんだと思ったのさ。そりゃ悲鳴をあげるのが当然だよ、だって犬は口の中の皮膚がとても柔らかいからね……人間より柔らかいんだ、ずっと柔らかいんだよ！」喜びに顔をかがやかせ、燃えあがらせて、コーリャは興奮しきった口調で叫んだ。

イリューシャは口をきくこともできなかった。布のように青ざめ、口を開けたまま、大きな目をなにか不気味に見はって、コーリャを見つめていた。何の疑念もいだかなかったコーリャも、病気の少年の容態にこんな瞬間がどれほど苦痛な、致命的な影響を与えうるかを知ってさえいたなら、今やってみせたような愚かな真似は絶対にする気にならなかったにちがいない。だが、部屋の中でそれをわかっていたのは、おそらく、アリョーシャだけだったろう。

（同）

（傍線は私・木下による）

いいですか、このときイリューシャの心のなかで何が――どんな恐ろしいことが――起こっていたか、彼がどれほどの深淵をのぞきこんでいたか想像してください。ピンの入ったパンをジューチカに与えてしまったイリューシャ。そのために崇拝するコーリャから軽蔑され、絶交されてしまったイリューシャ。「こうなったら僕はどの犬にも全部ピンを入れたパンをまいてやるから。どの犬にもだぞ！」とどなったイリューシャ。そうして父親の一件。コーリャの腿をナイフで刺してしまったイリューシャ。「病気になったのはね、パパ、あのときジューチカを殺したからなんだ、神さまの罰があたったんだよ」といったイリューシャ。コーリャの名をうわごとでいっていたイリューシャ。そのコーリャが、全然彼を訪ねてこないばかりか、ジューチカを密かに隠していたんですよ。これがどんなに残酷なことなのか、それを知ることがどんなに恐ろしいことなのか、想像してください。しかも、コーリャは犬を部屋に入れる直前まで、ジューチカの名前を出して、彼を苦しめていたんですよ。いいですか、この部屋にいた他のひとたちと同じになっちゃいけません。アリョーシャと同じように理解してください。アリョーシャはイリューシャの気持ちの一端を代弁してもいるでしょう。

「それじゃ、ほんとに君は、犬に芸を仕込むだけのために、今までずっと来なかったんですか！」アリョーシャが不満げな非難をこめて叫んだ。

「まさにそのためです」コーリャはいたって無邪気に叫んだ。「完全に仕上がったところを見せたかったんですよ！」

（同）

右の引用につづくのがこれです。ある意味で、イリューシャはアリョーシャのことばをさえぎってもいるでしょう。

「ペレズヴォン！　ペレズヴォン！」突然イリューシャが細い指を鳴らして、犬を招いた。

（同）

イリューシャはなぜ犬を「ジューチカ」と呼ばずに「ペレズヴォン」と呼んだのでしょうか？　犬が実はやはりジューチカではなくてペレズヴォンというべつの犬だからですか？　違います。犬がいまやペレズヴォンとして仕込まれているから、そう呼ばないと反応しないと考えたからですか？　そうかもしれません。そうかもしれませんが、私はここでべつのことを考えています。私が思い浮かべているのはこれです。

年とった乳母が兄の部屋に入ってきて「ごめんくださいまし、坊ちゃま。こちらのお部屋にも聖像の前にお燈明をともしましょう」と言っても、以前なら許さずに吹き消したほどだったが、それが今では「ああ、ともしておくれ、婆や。前には禁じたりして僕は悪い人間だったね。燈明をともしながら、婆やは神さまにお祈りするのだし、僕はそんな婆やを見て喜びながらお祈りするよ。つまり、僕たちの祈りをあげる神さまは同じってわけさ」と言うのだった。

（同）

もちろん、父親の連れてきた子犬について「繊細なデリケートな心づかいから、この贈り物を喜んでいるような顔をしてみせた」イリューシャではありますが、彼はさらに一歩――とてつもない一歩――を踏み出したんじゃないでしょうか？　つまり、このごく短い時間の間にイリューシャはコーリャを赦したんですよ。彼はコーリャを思いやったんですよ、ジューチカを「ペレズヴォン」と呼ぶことで。そう私は考えます。それができるだけの変化がイリューシャに起こっていたんです。これがどんなに大変なことであるか、想像してみてください。ついさっきまでのイリューシャを思い出してみてください。

「どこかへ逃げてって、そのまま行方知れずさ。あんなご馳走をもらったんだもの、行方不明になるのも当然だよ」コーリャは無慈悲に言い放ったが、その実、当人もなぜか息をはずませはじめたかのようだった。「その代り、僕のペレズヴォンがいるさ……スラブ的な名前だろ……君のところへ連れてきてやったよ……」

「いらないよ！」突然、イリューシャが口走った。

「いや、いや、いるとも。ぜひ見てくれよ……気がまぎれるから。わざわざ連れてきたんだもの……あれと同じように、むく毛でさ……奥さん、ここへ犬を呼んでもかまいませんか？」だしぬけに彼は、何かもうまったく理解できぬ興奮にかられて、スネギリョフ夫人に声をかけた。

「いらない、いらないってば！」悲しみに声をつまらせて、イリューシャが叫んだ。その目に非難が燃えあがった。

（同）

どう思いますか？　ところが、いまやイリューシャはこちらの側にいます。

「やさしい親愛なあなた方に愛してもらえるなんて、そんな値打ちが僕にあるでしょうか。こんな僕のどこがよくて、愛してくださるんですか。それにどうして今まで僕はそれに気づかず、ありがたいと思わなかったんだろう」

（同）

それほどのドラマが展開されているにもかかわらず、これはどうですか？

犬のジューチカとペレズヴォンが同一かどうかという問題は、複雑きわまりない連想の糸をたぐり寄せてしまう。もし同一の犬でないとしたら、だれが片目をつぶし、だれが耳に裂け目を入れたのか。

（亀山郁夫「解題」）

ペレズヴォンの正体はほんとうにジューチカなのでしょうか。ジューチカであれば、なぜ、あそこまで厳しい訓練をほどこす必要があったのでしょう。私はいま少し意地の悪い想像を働かせます。そこで浮かびあがる問題はひとつ――つまり、ペレズヴォンの耳に刻み目を入れ、左目をつぶしたのはだれか、ということなのです。いやがおうにも不吉な連想が働いてしまいます。

（亀山郁夫「新訳『カラマーゾフの兄弟』を読む」　ＮＨＫ出版）

亀山郁夫の愚劣きわまりない「連想」は、イリューシャの苦悩をそのままに読んでいません。亀山郁夫にはイリューシャの苦悩なんかどうだっていいんですよ。彼にはアリョーシャがイワンにいったようにいうことができません。

「俺はお前を苦しめているかな、アリョーシャ、なんだか気分がわるいみたいだな。なんなら、やめようか」

「かまいません、僕も苦しみたいんですから」アリョーシャはつぶやいた。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

いいですか、『カラマーゾフの兄弟』という作品を読む読者は、この作品に対して常に「かまいません、僕も苦しみたいんですから」といいつづけなくてはならないんですよ。『カラマーゾフの兄弟』はそういう作品です。亀山郁夫には「僕も苦しみたい」なんて思いもよりません。そうして、「僕も苦しみたい」といえる人間だけが、誰かに対して「あなたじゃない」をいいうるんです。

まったく愚劣きわまりないことをここでしゃべらなくてはなりませんが、亀山郁夫がジューチカとペレズヴォンがべつの犬だというならば、それはこういうことになります。イリューシャが「これは……ジューチカだ！」といったとき、彼はその時点で「これはジューチカではない」と認識していたということになります。それなのに「ジューチカだ！」というのは、もうそのとき彼がコーリャを思いやってそういったということになります。亀山郁夫なら、それほどまでにイリューシャがコーリャに服従していたのだ、というのかもしれません。いや、彼はそんなことまで考えていませんね。彼はただコーリャのことだけしか頭にありません。それも『カラマーゾフの兄弟』の「続編」の主要人物としてのコーリャです。イリューシャなんかどうだっていいんです。ともあれ、犬がジューチカでないにもかかわらず、「これは……ジューチカだ！」などという余裕がこの時点でのイリューシャにありはしませんよ。それとも、イリューシャでさえもうジューチカを見きわめられないでいたというんでしょうか？

「ああ、こういうわけにはいかないかしらね」ふいにスムーロフが足をとめた。「だってイリューシャの話だと、ジューチカもむく毛で、やっぱりペレズヴォンみたいに灰色で、煙ったような色をしてたそうだもの。これがジューチカだよって言うわけにはいかないかな、ひょっとしたら信ずるんじゃないかしらね？」

（同）

いやいや。信じません。

さらに、いっそう愚劣きわまりないことをいいますが――これは亀山郁夫の

解釈を読んではじめて私が考えざるをえなくなったので、これからいうことなしでも、もちろんジューチカ＝ペレズヴォンですよ。そう読み取れない方がおかしい。仮にジューチカがペレズヴォンでなかった場合、ジューチカの「片目がつぶれてて、左耳が裂けてる」というのをですよ、現実的にこのひと月の間にどうやってべつの犬に再現できるというんですか？　実際に誰かが――いったい何だって亀山郁夫はそれを誰といわないんですかね。こういうものいいが亀山郁夫の文章の特徴で、彼の小さき・せこさ・薄っぺらさをよく示しています。翻訳者、専門家、研究者が一般読者（の啓蒙）に向けてこんな思わせぶりなものいいをしてはいけません――「ペレズヴォンの耳に刻み目を入れ、左目をつぶした」としたって、それはまだ生傷ですよ。そんなことは見ればすぐにわかります。で、ジューチカの同じ特徴がまだ新しかったのかどうか、そんなことは書かれていません。そもそも、「片目がつぶれてて、左耳が裂けてる」というのは、実際にはどういうふうだったんでしょう？　どんなものであれ、それをそのままべつの犬に再現することなど誰にも不可能ですよ。しかも、どこからか連れてきたその犬に傷の再現もし、さらになつかせるわけでしょう、ひと月の間に。まったく何を考えているのか。

繰り返しますが、そんなふうに考えずとも――考えるだけでも愚劣です――、ただ作品をそのまま読みさえすれば、ジューチカ＝ペレズヴォンなんですよ。

たしかに読者は作品のこのあたりを読みながら、「え？　ペレズヴォンはやっぱりジューチカなのか？」と最初はとまどうとは思いますよ。でも、それはそこまでです（これは作品の登場人物たちと同じです）。ふつうに読めば、ジューチカ＝ペレズヴォンということがすぐに読者に納得されます。そのようにドストエフスキーは書いているんです。それがどうして「それが果たして同一の犬かどうか、作者は最後まであいまいにしたままです」なんてことになるんですか？笑ってしまうというより、怒りをおぼえます。この作品はそんな読みかたを読者に導きません。

もしジューチカ＝ペレズヴォンでないなら、ドストエフスキーは必ずそのように書きますよ。だから、亀山郁夫にはこの作品のつくりがまったくわかっていないというんです。

亀山郁夫はイリューシャを愚弄していますよ。これまでにも私は、亀山郁夫がアリョーシャやイワンを馬鹿にしている・過小評価している・見くびっていると再三いってきましたが、ここで、亀山郁夫の読みかたを「亀山郁夫的読書」とこれからは呼ぶことにして、いくらか特徴をまとめてみましょう。

「亀山郁夫的読書」は作品にまともに向き合うことができないことから生じます。

「亀山郁夫的読書」は作品のつくりを理解できないことから生じます。

「亀山郁夫的読書」は作品を「真に受け」られないことから生じます。

「亀山郁夫的読書」は作品に自分を合わせるのでなく、自分に作品を合わせる――自分のところにまで作品を引き降ろす――ことによって生じます。

「亀山郁夫的読書」は作品に読者として奉仕しないことによって生じます。

「亀山郁夫的読書」は作品を正視する勇気のない読書です。

「亀山郁夫的読書」は作中人物たちを見くびり、過小評価し、愚弄します。彼らに自分がついていけないからです。

「亀山郁夫的読書」は自分が作品をまともに読み取れないことへの怨恨であり、負け惜しみです。それははたから見ていて滑稽で不愉快な屁理屈にすぎません。

「亀山郁夫的読書」は作品を自分の貧弱な想像力に見合ったものに変えようとします。それはないものねだりの読書になります。

（二〇〇九年一月十七日）

「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」その一〇

1

――いやあ、ずいぶん怒っているみたいじゃないですか？

もちろん怒っています。あ、私のことですよね、怒っているというのは？　まあ、これを読んでいる亀山郁夫も「怒りにうち震え」ているでしょうね。「私の人格を貶めるような誹謗中傷」とかなんとかいいながら。

――ああ、それは昨二〇〇八年に出た「週刊新潮」五月二十二日号の……

そうです。木下豊房らの批判に対しての彼の反応でした。自分では「批判されてもいい。批判を恐れたら、学問に進歩は生まれないでしょう」（亀山郁夫＋佐藤優『ロシア　闇と魂の国家』　文春新書）などといいながら、そんなことをいっているんですからね。彼お得意の「二枚舌」じゃないですか。批判されたなら、堂々と論争すればいいじゃないですか。まあ、彼には無理なんですけれど。それで「同じ土俵に立ってしまう」からとかいいながら、逃げている。あの批判はしごく公正なものですよ。ちゃんと反論を受け入れる用意があります。それをねえ……。しかもですよ、文部科学省の学術研究推進部会での「人文学及び社会科学の振興に関する委員会（第九回　二〇〇八年二月十五日）」で――その「配布資料」によれば――、彼は文部科学省の役人を前にして自分への批判をごまかそうとしているんですね。あの批判を「アカデミズムの反応→恐るべき閉鎖性」、「読者を持たないアカデミズムの悲惨」なんて呼びながら、「悪意をむきだしにした批判と倫理的視点からの人格攻撃」だの「結局、文学の精神からの批判を提示できない」だのといい、「文学が、人格形成に役立つという希望をくじかれる」とか泣きごとを並べているんです（http://www.next.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/015/siryo/08021902/001.htm）。まるで生徒が先生にいいつけているみたいですよ。それに、「読者を持たないアカデミズムの悲惨」って、彼はでたらめで読者を獲得できるなら、その方がきちんとしたアカデミズムよりましだといっているんですか？　売れさえすれば、どんなでたらめでもいいんですか？　私は本当にこの「売れさえすれば何でもいい」に我慢がならないんですよ。何が「文学が、人格形成に役立つという希望をくじかれる」だ？　でも、どうですか、ここまで私のやってきていることは「文学の精神からの批判」じゃないですかね？

――まあまあ、そう興奮しないで。

いまのは「配布資料」ですが、実際の「議事録」がべつにあるんですよ。これがひどい（http://www.next.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/gijiroku/015/08100707.htm）。

先ほどの「教養知」と最先端的研究という、この一つの実例というのを、自分に照らして提示したいと思うわけです。そこまで君はナルシストかとのそしりを恐れつつも、自分なりにひとつ言いたいことがあるんですね。私がドストエフスキー研究に入り込んだのは、この過去五、六年です。結局、ドストエフスキーの研究は、私の研究は今最先端だと自分なりに自負しているんですね、少なくとも日本においては。問題は、なぜそう自負できるか、という点にあります。私は、ロシア・アヴァンギャルド研究の後に八年間ほどスターリン文化研究に励みましたが、そのスターリン文化研究の構造をそのままドストエフスキー研究に持ち込んでみたわけです。そこでどういう発見があったかというと、例えば一〇代の後半、終わりから、大学時代から営々とドストエフスキー研究を積み重ねた人たちは、五〇代の後半になったら新鮮な想像力も何もすべて失っているんですね。ほとんどドストエフスキーのテクストになまで感動する

ということはない。テクストの細部から何か新しい真実を見出していくということがほとんどできなくなっていて、目新しい視点、発想はほとんどゼロなんです。

（学術研究推進部会「議事録」）

どうですか？「結局、ドストエフスキーの研究は、私の研究は今最先端だと自分なりに自負しているんですね、少なくとも日本においては」って大笑いですよ。ある意味では日本随一ですけどね。私はいいますが、「ドストエフスキーのテクストになまで感動」できないのは亀山郁夫自身ですよ。彼はアリョーシャの「あなたじゃない」に感動したことがまるっきりありません。イリューシャの苦悩をわがことのように感じたこともない。イワンの苦悩の読み取りもでたらめだから、これにも感動できない。「テクストの細部から何か新しい真実を見出していく」って、亀山郁夫は「それが果たして同一の犬かどうか、作者は最後まであいまいにしたままです」なんてことがそうだというんでしょう？　あのね、ペレズヴォンがジューチカとはべつの犬で、イリューシャを納得させるためにジューチカそっくりに右目をつぶされ、左耳にはさみを入れられた犬だなんて読みを提出されたら、こっちは何といえばいいんですか？　もうこれは馬鹿でしょう？　こんなものが「最先端」だそうです。「最先端」って、「大馬鹿」って意味もあるんですか？　いや、亀山先生にはぜひともその「最先端」を日本だけでなく世界じゅうに発信してほしいもんだ。世界じゅう大笑い。

――ことばに気をつけて。駄目ですよ。……ええと、何でしたっけ、「人格攻撃」ですか？

ふう、いったい彼はどんな形での「批判」ならいいんでしょうかね？　笑っちゃいますが、それは「すり替え」ですよ。亀山郁夫は批判が怖くてたまらないんですね。いざ批判されると、とたんに「人格攻撃」ですから。「人格攻撃」といえば、逃げられると思っている。

でも、当人の読みがあまりにも的外れである場合、しかも、その読みが表層的にたまたま的外れになったというのでなく、深層的に・構造的に的外れである場合に、それを批判するってことは、結局、当人の資質を批判することになるんですよ。

こっちはしかたなくて、どんなふうに読書をしたらいいか、どんな読書が駄目なものなのか、そんなところからいわなくちゃならない羽目になっているんですよ。

――いいじゃないですか？　だって、あなた自身がそれを「連絡船」の読者にとってよいことだといってますよ。

そうでした。それはそうなんですけどね。ちょっと、これはあまりに……

――落ち着いて。落ち着いて。

これはね、この亀山郁夫批判というのは、ある意味とてもやりやすいと同時に、非常に困難でもあるんですよ。やりやすいというのは、彼の読み取りがあまりにも稚拙だからですね。ところが、ちょうど同じ理由が批判を非常に困難にします。

――どういうことです？

これは議論にならないってことなんです。亀山郁夫と彼の批判者と、それぞれの主張があるばかりで、両者の間に議論の生まれようがないんです。なぜかというと、亀山郁夫には批判者が――たとえば私が――何をいっているのか理解できないからです。

――何ですって？

いや、こっちだって彼が何をいっているのか、どうしてあんな主張ができるのかとわが目・わが耳を疑いますよ。そういう意味では彼のいうことが理解できない。でもね、彼がどういう思考回路を経てああいうことをいいだすのかの見当はつきます。この意味で「亀山郁夫的読書」がどういうものか、私にはわかります。そういう読者はたくさんいますから。もしかすると、手に取るようにわかるといっていいかもしれません。でもね、まさか『カラマーゾフの兄弟』を翻訳する人間がそういう読者だったとは……。

ちょっと思い出したんで、引用してみましょうか？　つまり、私はなぜ「亀山郁夫的読書」をするひとたちがそこから進歩しないでいられるのか・なぜ彼らが自分の読みに納得してしまうのか・なぜ絶えず自分の読書に疑問を持とうとしないのかは理解できませんが、それでも「亀山郁夫的読書」が確実に存在していることを承知しているし、それがどのような思考回路を経るものなのかがわかるということです。それは理屈――形・型――としては、こんなふうにわかるんですね。

「なぜ悪が醜く、善が美しいのかは、ぼくにもわからないんです。でもぼくは、この差異の感覚がなぜスタヴローギンのような人では摩滅され、失われていくのかはわかるんです」

（ドストエフスキー『悪霊』　江川卓訳　新潮文庫）

もっとも、「亀山郁夫的読書」というものは、何かが「摩滅され、失われ」たのではなくて、はじめから何もないんですけれど。……まあ、これは余談です。

そんなわけで、こちらが相手についてわかっていることが、向こうにはわからないわけです。「亀山郁夫的読書」をする亀山郁夫には、こちらの主張が――こちらの思考回路をも含めて――まるっきり理解できないんです。

あのね、たとえば私の場合、こうやってかなりの量の文章を書いたりしているわけですけれど、自分の考えを書きながら、それに対してどういう反論がありうるかということを常に考えているわけです。というか、それがそもそも考えるってことでもあるんですが。つまり、いつも自分の考えを検証しているわけです。自分の考えをいつも鍛えている。だから、あることを考えるときに、何を押さえておかなくてはならないか、特に強調しなければならない箇所はどこか、気を遣っています。これこれの反論が予想されるから、これは必ず書いておかなくてはならないな、なんていう判断をしているんです。何というか、自分のなかにいろんな視点があって、それぞれが対話しているんですね。

それで、いざ反論が出てきたときには、「ああ、やっぱりそこを突いてきたか」とか「あ、それは盲点だった」とか反応できるわけです。

それが亀山郁夫にはないんです。

――え？

亀山郁夫が自説を展開するとき、彼はそもそも、それに対するどのような反論がありうるかをまったく考えていないんです。彼の主張はまったく無防備なんです。

――え？

彼の内部にはそのたくさんの視点がありません。対話がない。単一の視点、その独白しかないんです。つまり、彼は何も考えていないんです。彼はただ思いつきをしゃべっているだけです。自説の検討すらできません。まったく無防備で、脆弱なままなんです。だから、彼の説を打ち崩すのは造作もないんです。面倒ですけどね。

彼にあるのは、その思いつきを自分で気に入るかどうかってことだけです。で、気に入ったら、もう後はそのまま突っ走るだけです。その思いつきにしたがって作品を読むだけ。作品を自分に合わせるんです。

つまり、亀山郁夫には考えるってことができないんです。彼には内省がない。

とっくに指摘しましたが、「大審問官」について、彼は最初、大審問官と向かい合っているのがキリストだということで論を進めました。キリスト対大審問官＝イワンということでね。それで、キリストが大審問官に与えたキスが大審問官の事業の「承認」・「祝福」だといって、大審問官＝イワンの勝利みたいな説を展開するんです。ところが、そのまま今度は、原作にはキリストがキリストという名まえで書かれているわけではないといって、それは「僭称者」ではないか、といいだすんです。これ、おかしいでしょう？　だったら、さっきまで展開されていた大審問官＝イワンの勝利という説はどうなるんですか？　そのフォローもない。こんな笑っちゃう理屈を平気で提出できるのは、何も考えていないからですよ。しかも、「僭称者」説をそれ以上展開しようともしない。

さっきの犬の件にしてもそうです。ペレズヴォンがジューチカの「僭称者」だというわけです。「それが果たして同一の犬かどうか、作者は最後まであいまいにしたままです」って、キリスト僭称者説とそっくり同じパターンでの思考です。本当に単純・無防備なんです。

そんな「亀山郁夫的読書」をするひとに、いったい、こっちの反論が理解できますか？

――ははあ。

できるわけがない。亀山郁夫には反論できないんですよ。だから、彼には批判が自分に対してのいじめ・人格の否定としてしか受け取りようがないんです。彼に反論ができるくらいなら、最初からあんな説の展開ができません。

亀山郁夫との議論が成立しないと私のいうのはそういうことです。

もしこれを読んでいる亀山郁夫が反論してくるなら、私は受けますよ。やってみたらいい。

――いいんですか、そんなことをいって？

かまわないでしょう。そうでなきゃ、この半年間、私は何をしてきたんです？　また引用しましょうか？

おれたちが二塁のほうに近づいた時、ちょうどショートのダドリー・シフトが遠く右へ走って、地を這うようなゴロを捕球するのが目にはいった。

シフトは捕ったボールを二塁手の〈作品（オーパス）〉ガンダーネックに投げ、ガンダーネックは二塁ベースを走り抜けながらそれを受けとめた。

かと見ると、ガンダーネックはもう一度ボールをシフトに投げ返し、シフトはそれを矢のように一塁手の〈アッチラ〉ハネウェルに送った。

ルーブはＴＫＯ寸前のボクサーのように、両腕を顔の前に上げてくずおれそうになった。

そしてムースの肘をつかんで態勢をささえた。

そしていった。ムース、お願いだから、わしが今たしかにこの目で見たことを、本当は見なかったんだといってくれ。

ムースはいった。そうだな、今あんたが、ショートからセカンドへ、セカンドからまたショートへ、そしてショートからファーストへってダブルプレーをやるのを見たんだったら、あんたは本当にそれを見たんだよ。

ルーブはオーパス・ガンダーネックをそばに呼び寄せた。

そして彼の肩に手をかけた。

そして穏やかな父親みたいな口調で話しかけた。

なあ、おまえ、わしゃ野球に身を入れるようになってから五十年ぐらいにしかならんので、もしかしたら高級なセオリーなんかでまだ知らんことがあるのかもしれん。だからおまえが今あの小さな丸いものをショートに投げ返すかわりに、まっすぐ一塁へ転送しなかったのはなぜか、わしに教えてくれんかな？

ぼかあ、左ぎっちょだからですよ、とオーパス・ガンダーネックはい

った。

こないだ、ぼかあダブルプレーをやろうとして旋回投げをして、鎖骨骨折と三重脱腸をやっちまったんです。

ダドリー・シフトがいった。去年、ここでエギゼビジョン・ゲームのとき、今のプレーをやってもうすこしで成功するところだったんですよ。

（ロス・H・スペンサー『哀愁のストレンジャー・シティ』田中融二訳　早川文庫）

ガンダーネックの「ぼかあ、左ぎっちょだからですよ」は、彼として非常に切実な返答です。彼はあるレヴェルまでは野球のセオリーを心得ているわけです。笑ってしまいますが、あるレヴェルまでの返答にはなっています。ところが、ガンダーネックすら野球において理解しているレヴェルまでの理解が、亀山郁夫には文学において、ない。

だから、私には亀山郁夫自身を論破しようなんてつもりが端からありません。あんなひとはどうだっていいんです。私が危惧するのは、そんな彼をもてはやす新聞社やら出版社やらテレヴィ局などの無節操と、それらにコロリと騙される数多くの読者たちですよ。その読者のなかでも、「亀山郁夫的読書」をするひとたちなんかは、これもどうでもいい。そうでない読者――せっかく「背伸び」をしたのに、ひどい翻訳に当たってしまった読者――がいるはずなんです。そういう数少ないだろう貴重な読者の、今後すくすくと成長していくはずの芽が摘まれることを私は心配しているんです。そういうひとたちが「それが果たして同一の犬かどうか、作者は最後まであいまいにしたままです」をそのまま鵜呑みしてしまうのを懸念しています。亀山郁夫の「解題」やＮＨＫ講座が実に役立ったなどと思ってしまうことを。

――ああ、なるほど、そういうことをあなたは考えているんですね。

つい先日も読売新聞が「魅了する格調・名調子　海外文学　旧訳本相次ぎ刊行」と題する記事（二〇〇九年一月十四日　山内則史）において、書き出しの「『カラマーゾフの兄弟』で火がついた海外文学の新訳ブーム」から亀山郁夫訳をヨイショしているんですね。記者の山内則史は自分の書いていることの意味がわかっているのか？　彼は亀山訳を読んだのか？　また、あの「解題」を読んだのか？　読んだうえで共感しつつ記事を書いたのか？　疑いを抱きつつ、それを脇へ置いて書いたのか？　いずれにせよ、ひどいです。

ついでにいえば、毎日新聞ですね。あの翻訳に対して「毎日出版文化賞特別賞」を授賞したというのは、どういうことなのか？　選考委員は本当に読んだのか？「解題」も読んだのか？

それと朝日新聞。亀山郁夫が「朝日賞」の選考委員ですか？　選考委員を選考したひとはあの翻訳を本当に読んだのか？「解題」も読んだのか？

やれやれ、また引用しますよ。

「いいかい、見習い僧君、この地上にはばかなことが、あまりにも必要なんだよ。ばかなことの上にこの世界は成り立っているんだし、ばかなことがなかったら、ひょっとすると、この世界ではまるきり何事も起らなかったかもしれないんだぜ」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

――しかし、あなたは以前にその三つの新聞から取材を受けていなかったでしょうか？　しかも、記事は三つじゃすまないですよね。そうだ、ＮＨＫの取材はいったい何回受けたんですか？　そのあなたがいま、三紙ともを、またＮＨＫをも悪しざまにいうんですか？

ああ。読売新聞の山内記者とも話したことがあります。だから、何ですか？　ひどいものはひどいんですよ。これはやっぱり、はっきりいわなくてはなりません。やれやれです。もしかすると、亀山郁夫もあの当時（二〇〇一年）の記事――これは朝日新聞ですが――で、私が『カラマーゾフの兄弟』を「世界最高

の小説」といっているのを読んだかもしれませんね。どうですか、いま、ふと思ったんですが、もしかすると、その記事も彼が一連のドストエフスキー関係の仕事を始めるに当たっての一因・後押しのひとつになっていたかもしれない。「私がドストエフスキー研究に入り込んだのは、この過去五、六年です」……いやいや、まさか。それは悪夢ってもんです。

何がいいたいんです？　私が矛盾している？

そりゃ、矛盾だらけですよ。私の勤める書店は亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』をずっと平積みにしていますしね。原卓也訳も平積みにはしていますけれど。このへんの矛盾に関しては、この「連絡船」の「はじめに」でずいぶんしゃべりましたよ。またそれをここでやれ、と？　あそこでもたくさん引用しましたが、いまはふたつだけ。しかも光文社文庫から。

……私が「忘れました」を言いさえすれば、これはまずそれで済むにちがいなかろう。これもまた、ここでの、現にあり、将来にも予想せられる、数数の愚劣、非合理の一つに過ぎない事柄ではないか。これに限ってこだわらねばならぬ、なんの理由が、どんな必要が私にあろうか。一匹の犬、犬になれ、この虚無主義者め。それでここは無事に済む。無事に。……だが、違う、これは無条件に不条理ではないか。……虚無主義者に、犬に、条理と不条理の区別があろうか。バカげた、無意味なもがきを止めて、一声吠えろ。それがいい。――私は、「忘れました」と口に出すのを私自身に許すことができなかった。顔中の皮膚が白壁色に乾上がるような気持ちで、しかし私は相手の目元をまっすぐに見つめ、一語一語を、明瞭に落着いて、発音した。

「東堂は、それを、知らないのであります。東堂たちは、そのことを、まだ教えられていません。」

（――それが当日私が思ったより以上の事故であり、そのような言明は現場の誰しもの想像を超えていたろうことを、のちのち私は知ったのであるが、その朝も）、言い終わった私は、私の躰が俎板に載ったと感じた。四人の偽証者を、私は必ずしも憎みもさげすみもしなかった。午前半ばの光の中で進行しているこの些事が、あるいは私の人生の一つの象徴なのではあるまいか。

（大西巨人『神聖喜劇』光文社文庫）

……こういうことに私が血眼になっても、それにどんな意味があるのか、あり得るのか。相手が「チチョウ」と読め、と命じるのなら、また上官上級者にはいつでも敬称を付けよ、と求めるのなら、そのとおりに私がしたら、よいではないか（……そうすることが私にできさえしたら……）。要するにあれもこれも蝸角の争いではないのか。本来は味方でなければならぬ（？）わが同年兵たちも、私がしつこく粘って事を長びかせるのに、往生して、嫌気が差しているにちがいなかろう。……私はこんな所でこんなことを言ったり行なったりするのにふさわしい人種ではなく、そういう言行を好き好む人間でもない。……「チチョウ」か「シチョウ」か、敬称付きか敬称なしか、それがどっちに転んでも、広大な客観的現実は右にも左にもかたぶきはしないであろうに。また私が向こうに転んでも、誰も私を責めはしないであろうに。……

（同）

いや、もうひとつ。

「人は、『精神の、魂の、連絡船』を（大小何艘か）持つべきであるが、とりわけ数年このかた、自分は、まるでそれを持たない（持つことができない）。」という（桜井自身もが、「われながら、取り留めないような」と断わらざるを得なかったところの）感想を述べたのも、そのおりであった。……どこからどこへの、何から何への、連絡船なのか、それは、彼自身にも、ほとんど五里霧中のような事柄である。ただ、もしも彼がその「精神の、魂の、連絡船」を（何艘か確実に）所有し得たならば、

彼の内面における「落莫の風」は、たぶん吹き止むのではないか（少なくとも風勢がずいぶん落ちるであろう）、という漠然たる予感のようなものが、彼自身になくはない。……

（大西巨人「連絡船」講談社文芸文庫『五里霧』所収）

で、これも以前にいったことですけれどね。この「連絡船」で私が「読書案内」をしようとする。でも、これは本当はもっと適任のひとがいくらでもいるはずなんですよ。ところが、そういう有能なひとたちはこんな面倒くさい仕事はしないんですね。だから、私がやらざるをえない。亀山郁夫批判も同じです。何だってこの私がこうまでこのことに首を突っ込むのか、自分でも呆れますけれど、木下豊房ら数名を除くと、どうでしょう、もっと適任であるべきひとたちは何にもいいやしません。

……一般のまじめな読者からこのような反応が出ている反面、ロシア文学を専門とする研究者の反応はどうだろうか。「検証」をおこなったロシア語を得意とする商社マンのＮＮ氏、商社マンの経歴を持つ翻訳家で著述家の長瀬隆氏を別として、ロシア文学界ではっきりと批判の声を上げているのは、萩原俊治氏と私だけである。実は萩原氏と私は三月十五日付で、日本ロシア文学会の理事、各種委員の役員六〇名に宛てて、今年秋の全国大会で、亀山氏の仕事をめぐる公開討論会を企画するように申しいれた。しかし五月末の理事会で、この要請は却下された。議事録の公開を要求したが、無回答のままである。

（木下豊房「亀山問題の現在」http://www.ne.jp/asahi/dost/jds/dost128.htm）

いったい、「ロシア文学界」は何をしているんですか？　先の「そこでどういう発見があったかというと、例えば一〇代の後半、終わりから、大学時代から営々とドストエフスキー研究を積み重ねた人たちは、五〇代の後半になったら新鮮な想像力も何もすべて失っているんですね。ほとんどドストエフスキーのテクストになまで感動するということはない。テクストの細部から何か新しい真実を見出していくということがほとんどできなくなっていて、目新しい視点、発想はほとんどゼロなんです」なんていう亀山郁夫の発言にどうして怒らないんですか？　こんなことをいわせておいていいんですか？　その「目新しい視点、発想」とやらが……

――ジューチカ僭称者説という具合だ、と？

そうそう。わかってるじゃないですか。

もう一度亀山郁夫の文章を引きますよ。

さて、コーリャ・クラソートキンは、かつての子分であるイリューシャを元気づけるため、どこから連れてきたのか、ペレズヴォンという名前の大型犬を自宅でひそかに飼育しています。外見はジューチカとそっくりですが、それが果たして同一の犬かどうか、作者は最後まであいまいにしたままです。ジューチカは何者かによって片目をつぶされ、耳にははさみで刻んだようなあとがありますが、ペレズヴォンにも、それと同じ特徴があります。

「ごらんよ、じいさん、わかるかな、片目が潰れてて左耳が裂けている、きみがぼくに話してくれたのと、特徴がまるで同じだ。ぼくはね、このふたつの特徴を手がかりにこいつを探しだしたんだ！」

では、ジューチカとペレズヴォンは同一の犬だと考えてよいのでしょうか。じつはここに、第十一編を考えるうえで、決定的ともいうべき問題がひそんでいるのです。

そこでにわかに気になってくるのが、ペレズヴォンの存在です。ペレズヴォンの正体はほんとうにジューチカなのでしょうか。ジューチカであれば、なぜ、あそこまで厳しい訓練をほどこす必要があったのでしょう。私はいま少し意地の悪い想像を働かせます。そこで浮かびあがる問

題はひとつ――つまり、ペレズヴォンの耳に刻み目を入れ、左目をつぶしたのはだれか、ということなのです。いやがおうにも不吉な連想が働いてしまいます。コーリャの「社会主義者」としての資質を貶めるために言うのではありません。かつてコーリャとイリューシャのあいだにあった上下・支配関係を思い出してほしいのです。この第十編では、そのような関係が、じつはコーリャとペレズヴォンのあいだにも生じている、ということです。

（亀山郁夫「新訳『カラマーゾフの兄弟』を読む」　ＮＨＫ出版）

で、ジューチカ＝ペレズヴォンということはもういいました。そのとき、私は亀山郁夫がなぜ「ペレズヴォンの耳に刻み目を入れ、左目をつぶした」のが誰なのかをいわないのかと非難しました。彼の考えているのはコーリャなんでしょうが、こうしたものいいが彼の特徴的な詐術なんですね。彼の方から純真で理解の乏しい読者に向けてわけのわからない問いかけをするんです。「そこでにわかに気になってくるのが」って、気になりませんよ。この問いかけ自体があまりに馬鹿馬鹿しいものなんですが、純真で理解の乏しい読者にはそんなことは思いもよりません。そこにかぶせるようにして「いやがおうにも不吉な連想が働いてしまいます」――働きませんて――なんていうんですね。純真で理解の乏しい読者は怯えます。で、いつの間にか「ペレズヴォンの正体はほんとうにジューチカなのでしょうか」なんて問いがあたかも権威ある問いであるかのように読者の前に居座ることになってしまうんです。

同じことを、亀山郁夫はここでもやっています。

問題は、その「キス」の意味するところとは何か、その「キス」をどのような意味として大審問官は受けとめたのか、という点である。「彼」はその「キス」で、キリストみずからの絶大な力を、表明しようとしていたのか。大審問官の驕りにはいずれ裁きが下る、歴史がいずれ審判を下すという、ある余裕に満ちた預言の代替行為だったのだろうか。それとも、歴史は動かせない、だからあなたの好きなようになさるがよいという、承認と、ことによると「祝福」のキスだったのか。

何よりも、この物語詩がイワンによる創作であるとの前提をふまえなくてはならない。言い換えるなら、これは無神論者イワンがみずからの世界観を補強する物語詩なのである。そうならば、イエスのキスの意味するところは、おのずから明らかだろう。それこそが、まさにポリフォニー的な読みということになる。

（亀山郁夫「解題」）

「そうならば、イエスのキスの意味するところは、おのずから明らかだろう。それこそが、まさにポリフォニー的な読みということになる」って、こう何や ら意味ありげで思わせぶりなサインを送られると、純真で理解の乏しい読者はとたんに自分が試されていると思い、怯えます。ああ、亀山先生、それはどういう意味なんですか？　で、たちまち亀山郁夫の与えてくれる答えをありがたがって受け取ってしまうんですよ。

詐欺的レトリックですね。まあ、騙される方も騙される方なんですけれど。おそらく亀山郁夫はもうずいぶん長い年月そのやりかたで学生たちをへこませていたんじゃないですか？

いやがおうにも不吉な連想が働いてしまいます。まともな読みのできる学生が亀山郁夫の授業を受けてですよ、「あのねえ、君、ドストエフスキーはペレズヴォンがジューチカかどうかをあいまいにしたままなんだよ。これは疑わなくちゃ駄目でしょう。こんな読み取りも君にはできないのかね？　そんなことじゃ、ロシア文学研究の最先端には到底行き着けないよ。もっと勉強しなさい」なんていわれつづけたら、ノイローゼになってしまいますよ。その学生には、まさか自分より遥かに低レヴェルの読みしかできない人物が自分の指導教授だなんて思いもよらないでしょうからね。そうして、亀山郁夫の読みに「その通りですね。やっぱりペレズヴォンはジューチカじゃないんですよね」とか「アリョーシャのキスは犯罪ですよね」なんていうような学生たちが、彼の斡旋によってどん

どん大学に職を得ていき、「ロシア文学界」を形成してしまっているのが実状なんじゃないですか？

ここで、カート・ヴォネガットを引用します。

さて、想像できますか――ある人物が、被害妄想のソビエト連邦のために水素爆弾を開発し、それがちゃんと機能するように念を入れ、そのあとでノーベル平和賞をもらった！　キルゴア・トラウトの小説に出てきてもおかしくないこの実在のキャラクターは、物理学者の故アンドレイ・サハロフである。

彼が一九七五年にノーベル賞をもらったのは、核実験に反対した功績によるものだ。もちろん、彼の核実験はすでに終わっていた。サハロフの妻は小児科医だった！　子供の病気を治す専門家と結婚しながら、水素爆弾を完成させることができるのは、どういう人間なのか？　それほど頭のおかしい夫と連れそっていられるのは、どういう医者なのか？

「ねえ、あなた、きょうはなにかおもしろいことがあった？」

「ああ。わたしの爆弾はうまくいきそうだよ。ところで、きみのほうは？　あの水ぼうそうの子はよくなったかい？」

（カート・ヴォネガット『タイムクエイク』　浅倉久志訳　早川文庫）

もうひとつ、同じ作品から。

チリンガ・リーン！　このくそったれ！

（同）

――でも、「ロシア文学界」がどうあろうと、あなたは「ただ一人でも行く」んでしょう？

それはその通りです。でも、次から次へと亀山称揚の発言が出てくる現状には暗澹としますよ。まったくきりがない。

出たばかりの『勝てる読書』（豊崎由美　河出書房新社）中の「新訳座」という章にも暗澹としましたね。

で、なかでもとりわけおすすめしたいのが、ドストエフスキーの亀山郁夫による『カラマーゾフの兄弟』。

……（中略）……

ただ、惜しいことにこれまでの原卓也訳は堅くて、重厚すぎた。中高生読者を威嚇するかのような強面の訳業だったのです。ところが、今回の亀山訳を読んで驚嘆。易しいんですよ、面白いんですよ。カラマーゾフ家のダメ男どもの言動がおかしくて笑えるんですよ。ドストエフスキーで笑える日がこようとは……。感無量とはこのことです。難しい言葉をできるだけ排した訳文が、フョードルが殺される事件を軸にしたミステリーや、リーガル・サスペンス（法曹界を舞台にしたサスペンス）としての娯楽的な読みごたえも備えたこの作品本来の魅力を取り戻す。これぞ、新訳、新しく訳し直す道理にかなった意義深い仕事というべきです。

（豊崎由美『勝てる読書』　河出書房新社）

豊崎ってひとはもっとまともな読み手であり、伝え手だと思っていたんですがねえ。本当にがっかりしました。

とにかく、私は河出書房新社のサイトにあるこの本の感想投稿欄に書き込みましたよ。

はじめまして。木下和郎と申します。

「新訳座」に異議があります。

亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』はでたらめだらけです。

こんなものを誰かに薦めることなどできません。

豊﨑さんはそれがわかっていますか？

私はもうこの半年間、亀山批判を書きつづけています。

http://www.kinoshitakazuo.com/kameyama.pdf

http://d.hatena.ne.jp/kinoshitakazuo/

かなりの分量に膨れあがっていますが、お読みいただければ幸いです。

――はあ、そんなことまでしたんですか？

したんですねえ。中高生が『カラマーゾフの兄弟』を読もうとして、原卓也訳が強面すぎて跳ね返されるというなら、彼らにはまだ早いんですよ。それでいいじゃないですか？　亀山訳なら読みやすいからお薦めなんてのは言語道断です。だいたい亀山郁夫の訳文は読みやすくなんかないはずです。それに、彼らがジューチカ僭称者説を鵜呑みにしてしまったら、どうするんですか？　だから、異議申し立てをしたんです。どう思います？　彼女から反応がありますかね？

――でも、亀山郁夫の訳文が読みやすいという声は本当に多いですよ。

そこなんですよ。私が不思議でしようがないのが。

木下豊房のサイトで、森井友人は読みにくいといっていますよね。

ところが、読み始めてみると、すいすい読めるという評判に相反して、これが読みにくい。訳文が頭に入ってこない、言い換えれば、文脈が読み取りにくいのです。最初は、こちらの頭の調子が悪いのかと思ったのですが、途中でいくらなんでもこれはおかしいと思い、原訳・江川訳を引っ張り出して確認したところ、やはり誤訳・悪訳です。そう判断したのは、この二つの先行訳だと、その箇所の意味がすっきり通るからです。それまでも引っかかりながら読んでいたので、ここで私は改めて初めから読み直すことにしました。さて、その気になって読んでみると、あちこちに誤訳・悪訳が目に付きます。これまでも誤訳に気づいた訳書はあります。しかし、今回はその数がちょっと多すぎます。正直なところ、唖然としました。

（森井友人「点検者の前書き」http://www.ne.jp/asahi/dost/jds/dost120c.htm）

お断わりしているように、私自身は亀山訳を読んでいません。「あなたじゃない」のあたりは読みましたけれど。他にも部分的に、ね。しかし、それだけでも首をかしげましたがね。

たぶん、こういうことなんですよ。亀山郁夫の訳文を読みづらいというひとは、自身に文章を書く力、文章力があるんですよ。読みやすいなんていうひとには文章力がない。そういうことだろうと思っています。そうして、世のなかの大多数のひとたちには文章力がありません。

――え、え、え？

世のなかの大多数のひとたちには文章を書く力がありません。これは断言します。文章を書く力のあるひとたちは、実は少数派です。でも、私がここで文章力といっているのは、べつに大したレヴェルを考えているわけでもありません。いわゆる美文・名文なんてものを書く力じゃありませんよ。何といえばいいのか、わかりませんが、ことばに使う筋力とでもいえばいいんですかね。その筋力のついているひとには、ある文章を読みながら、なぜこう書かないのか、こう書くべきだろうに、などという判断をすることができるんですね。こういうひとは、いろんな本を読んで誤字を次々に見つけたりもするでしょうね。それは、ふだんから文章を書く、それも「背伸び」して書く――いまよりもっとよい文章を書こうとして書く――習慣があるからだと思います。

うまい説明じゃないですが、亀山訳を読みづらいと感じるかどうかというのは、いまいったことが必ず関係しています。

――亀山訳を読みやすいと感じるひとには文章力がない。

そうです。いってみれば「雰囲気読み」のひとたちですよ。で、このひとたちはいつも「何が書かれているか」しか読もうとしない。それが「どのように」書かれているかなんて思いもよりません。そうして、そのことによって実は「何が書かれているか」も読めない。だから、実はなんにも読めないんです。「どのように書く」を知らないひとには読書ができません。それで、往々にしてこの読書のできないひとが年間三百六十五冊の本を読破したりする……「本屋大賞」に参加したりする。

――それはいいすぎでしょう？

全然。

――そういうあなたには、じゃあ、文章力があるし、読む力もある？

その通りです。何度いわせるんですか？　そりゃ、私だって以前は「その通りです」なんていうことを自分で傲慢だとか、そんなことはいっちゃいけない、いうものじゃない、なんて考えていましたよ。でも、それはもうやめたんです。事実だからしかたがないんです。もし私がここで、自分には文章力もないし、読む力もないなんていいだしたら、この亀山批判も無効じゃないですか。

――ああ、なるほど。

そういう覚悟で私はこれをつづけているんです。

――このことであなたと言い争っても無駄ですね。

無駄です。

――あなたのいうことは絶対正しい？

誰がそんなことをいいましたか？　私はいつも自分の正しさを疑っています。そのうえで、私が正しいと判断したことを口にしているんです。誤りがあれば、それを認めますよ。

――亀山郁夫だって同じことをいうんじゃないですか？

あんな「最先端」なんかと一緒にしないでほしいな。レヴェルが全然違う。あのね、あなたのそのものいいがそもそもおかしいんですよ。あなたはこれを他人事のようにしか考えていないでしょう？　冷やかしでしかないでしょう？　あなた自身の判断はどこにあるんですか？　あなたは『カラマーゾフの兄弟』をちゃんと読んだんですか？　感動したんですか？　原卓也訳を読んだんですか？　読み返したことがありますか？　あなたは亀山訳をどう判断しているんですか？　ジューチカ僭称者説をどう思うんですか？　いえないでしょう？　高みの見物だ。そんなひとに私がいくら話したって無駄なんですけどね。自分のない奴に聞かせることばなんかひとつもありゃしない。

（二〇〇九年一月三十日）

2

どうやら昨年十月のロシア文学会でこういうことがあったらしいです。

今回は、二年前に岩波文庫で『戦争と平和』を訳された藤沼貴先生の

特別講演があった他、「ロシア文学にとって翻訳とは何か」というワークショップ（シンポジウム）があった。この企画は、亀山さんの『カラマーゾフの兄弟』が一〇〇万部突破という不思議な現象と無関係ではあるまい。実際、ワークショップの終わりに、会場から「亀山訳カラマーゾフはでたらめな翻訳だ」という意見が出た。

ゲスト・コメンテーターは柴田元幸さんであった。柴田さんとちゃんとお目にかかるのは、今回が初めてである。全然、初めてという感じはしないのであるが（柴田さんも「初めてでしたっけ？」と言っていた）。で、「亀山訳は…」という会場からの意見に対する柴田さんの答えは、「他人の訳を批判する最良の方法は、自分でもっといい訳を出すことだ」であった。

柴田さんとしては当然のお答えであろう。

亀山訳に対する批判はネット上でも盛んになされているようだ（私は興味がないので、読んでいないが）。最近では、野崎歓訳『赤と黒』もスタンダール学会を主催しているスタンダールの専門家から罵倒されたことが記憶に新しい。こういうのは「気持ちはわかる」が、非生産的だとも思う。

ただ、あえて柴田さんの回答に反論するならば、ドストエフスキーやスタンダールなら自分で訳を出すこともできるが（簡単ではないが）、著作権のあるものは難しい。前にも書いたように、『ゲド戦記』が翻訳出版文化賞か何かを受賞したという知らせを聞いたときには耳を疑った。岩波書店にわずかでも良心というものがあるなら、改訳すべきしろものである。

こういうのは、著作権の関係で、勝手に別の翻訳を出すということはできないのである。

（「鈴木晶の優雅な生活」 http://www.shosbar.com/diary/2008/diary0810.html）

さて、「前にも書いたように、『ゲド戦記』が翻訳出版文化賞か何かを受賞したという知らせを聞いたときには耳を疑った。岩波書店にわずかでも良心というものがあるなら、改訳すべきしろものである」と書くひとが、『カラマーゾフの兄弟』や『赤と黒』の新訳への批判について「こういうのは「気持ちはわかる」が、非生産的だとも思う」というのが私には理解できないんですが、どうでしょう？つまり、このひとは『ゲド戦記』――私はこれを読んだことがありません――に対する自分の意見も「非生産的」だと思っているということなんでしょうか？「著作権」の縛りですか？　駄目なものは駄目なんじゃないですか？　もし野崎先生の訳に異論がおありなら、ご自分で新訳をなさったらいかがかというのが、正直な気持ちです」にも通じてしまいます。ただし、両者は同じものではありませんが。つまり、柴田元幸と駒井稔とが同じことをいっても意味が異なるということです。柴田元幸には新訳『カラマーゾフの兄弟』についての責任がないのに対し、駒井稔は責任があります。

それにしても、柴田元幸は亀山郁夫が実際にどれほどひどい「最先端」を突っ走っているか知らないのじゃないでしょうか？　自分とは畑違いの学会――ロシア語・ロシア文学の専門家たちの集い＝亀山訳を批判するのに新たな翻訳を提出しうるはずのひとたちの集い――でのコメントとしては合格かもしれませんが、感心しません。というのも、鈴木晶も柴田元幸も、読者および原作および原作者のことを考えていないのじゃないでしょうか？　ふたりは自分が携わっている仕事としての翻訳について述べているにすぎないのじゃないですか？いいですか、でたらめな翻訳をそれと知らずに受け入れて、「感動」までしてしまう読者がどれほどたくさんいるか、考えたことがあるんですか？　そういう読者の不幸、そうして、そんな翻訳をなされてしまった原作の不幸、原作者の不幸ということを考えたことがあるんですか？　ふたりが実情を知れば、「ええっ、そんなことを亀山郁夫はやっているの？」と声を上げてしまうほどのことが光文社の『カラマーゾフの兄弟』では行なわれていると私はいっているんです。柴田元幸も、たとえばオースターやミルハウザーの作品翻訳をする他の翻訳者が「亀山郁夫的読書」していた場合に、同じ回答ですますことができないのじゃないでしょうか？

亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』を批判することの難しさがここにもあります。私がこうして半年間書きつづけ、文庫本の字詰めにして四〇〇ページを上回る分量にまで膨れ上がってしまったこの一連の文章も、理解できるのは亀山訳以外――とくに原卓也訳――でこの作品を読んだことのあるひとのうちの、そのなかでもきちんと読みこなせたひと――この作品の読書が生涯の経験のなかでも上位に位置することになってしまったひと――に限られてしまうんです。世界文学史上の有名作品としてだけこの作品を理解しているようなひと、この作品を読んだことがあると話すと「すごいね」と他人にいわれるから読んだというようなひと、一般常識・教養・知識として一応押さえておこうなどということで読んで感動もおぼえなかったようなひとには、私の書きつづけていることの意味を理解することができないんですね。ところが、理解できるひとには私の文章なんか必要ないんじゃないでしょうか？　せいぜいがすでに知っていることの確認にすぎないのじゃないでしょうか？　あるいは、そのひとたちが亀山訳に抱いている不満を私が代弁することに快哉を叫ぶというにすぎないのじゃないでしょうか？　いや、そのひとたちにとってもそれだけではない、また、そのひとたち以外にも、この文章を理解してくれるひとがあるに違いないと、私は自分にいいきかせます。

批判・糾弾という行為が、何か負のイメージをたくさんのひとに与えるということは承知です。批判というだけでこの文章を読まないと決めるひとのいることも承知です。「「気持ちはわかる」が、非生産的」という考えがあるのもよく知っています。しかし、私はこれをやりつづけなくてはならないと思うんです。私は絶対に亀山郁夫のこの仕事を許しません。この「連絡船」は、ただよい作品をよいというだけにしておけばよかっただろうに、という考えのあることもわかっています。しかし、よい作品をよいということは、駄目な作品の存在を視野に入れてのものなんです。よい作品をよいというためには、駄目な作品を駄目といわなくてはならないんです。繰り返しますが、『カラマーゾフの兄弟』は私が「世界最高の小説」といいつづけてきた作品です。それが、亀山郁夫のおよそ理解しがたい「最先端」ぶりによって恐ろしく歪曲されてしまったわけです。それが私には許せない。

ついでにいいますが、私のこの一連の文章を、他人事のように相対化し、冷やかすように読むひとたちのあるはずということをもちろん私は承知しています。自らが『カラマーゾフの兄弟』の読書を生涯の経験の上位に置いているにもかかわらず、私をラキーチンよろしく嘲笑するひとたちですね。そういうひとたちを私は軽蔑します。

いたって落ちつきのない、嫉妬深い心の持主なのだ。すぐれた才能を十分自覚してはいるのだが、持ち前のうぬぼれから神経質なほどそれを誇張してみせるのである。やがて自分が何らかの面で活躍することを、当人はたしかに承知していたのだろうが、彼と非常に親しくしているアリョーシャを悩ませたのは、この親友ラキーチンが不正直なくせに自分ではまるきりそれを意識しておらず、むしろ逆に、自分はテーブルの上の金を盗むような人間ではないと自覚しているため、きわめて正直な人間とすっかり自分できめてかかっている点だった。こうなるともう、アリョーシャのみならず、だれであろうと、手の施しようがないのである。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

そこで、私の書く文章の冒頭には常にミーチャのこのことばを掲げてもいいのかもしれません。

「ラキーチンにはこんなことはわかりゃしないが」

（同）

まあ、そんなひとたちのことはどうでもいい。そんなひとたちのことを考え

るだけでも時間の無駄です。そんなひとたちはこのことばだけでも自分を意識してもらったということで得意になるでしょうが、ついでにいってみました。もっとも、この私の認識は後でラキーチンについて私が語る――ということは、私はこの先まだまだ書きつづけるということです――うえでずいぶん役に立つはずとも思っていますが。

もうひとつ、ついでに。柴田元幸と、先に触れた豊崎由美とは、以前に書いた「翻訳の問題――その二『黄色い雨』」で私とつながっているんですね。柴田元幸は『黄色い雨』の帯の文言を書いていました。また、豊崎由美はこの作品について『ダ・カーポ』誌上の「今年のベスト（いくつか）」――馬鹿な企画――ということで、コメントを書いていました（『勝てる読書』でもこの作品を推しています）。その同じ誌面で、この私も同じ作品を推していたんですね（私はコメントなし。ともあれ、私と彼女だけが推していましたっけ）。

それで、「翻訳の問題――その二『黄色い雨』」において私が問題にしたのが、柴田元幸とあの作品を推した文芸評論家たち（つまり豊崎由美を含んで）が、あの作品初版における誤植および疑問点（私の指摘で、訳者木村榮一が原作者フリオ・リャマサーレスに問い合わせることになった――これはリャマサーレスの回答によって第二版以降もそのままですが）に気づいていたかどうか、また、指摘をしたかどうか、ということでした。

私はこう書きました。

> ここに、ある作品を自分で選んで読むということと、依頼されて（仕事として）読むこととの差を考える余地があるのではないかと私は考えるんですね。
>
> たとえば、ある本の帯に署名入りで推薦の文句を書いているひとたち（作家・文芸評論家・その他有名人）は、それで報酬を受け取っていると思うんです。で、その「作家・文芸評論家・その他有名人」たちは、「この本を読んで、推薦文を書いてください」という依頼を受けるんでしょうか？　私の考えているのは、それで、作品が駄目だった場合、いったい彼らはどうするのか、ということなんです。これをいい換えると、彼らは推薦するために・つもりで・前提で読むのか、ということにもなります。それで、もちろん私は、推薦するために読んではいけない、と考えるわけです。読んだ作品が駄目ならば、仕事を断われ、ということです。それがどこまでできているのだろうか、と思うんですね。かなりの割合でできていないのではないか、と私は疑っているんですけれど。もし、これができているのだとすると、その推薦人の読み取りの力を疑わなくてはならないほどのものが多いと思っているんです（そうでなければ、彼らがいかに読者の読書レヴェルを低いところに考えているか、ということになりますね。馬鹿にするな、といいたい）。
>
> 反対に、その「作家・文芸評論家・その他有名人」たちは、作品が不特定多数に推すべきほどのものだと感じるほどの読書をしたなら、誤植や誤訳なども見つけておいてほしいんですよ。見つけたなら、必ずすべてを編集者に伝えてほしいんです。それでこそ、出版後に読むことになる読者のためになるわけです。

私の考えていたのは、ある作品を誰かに推すことの責任でした。私の疑っていたのは、公的にある作品を誰かに推すひとたちが、当の作品をきちんと読みもしないで推しているのではないか、ということでした。そこに「俗情との結託」があるのではないか、ということです。つまり、本心でないものの売文ということ、仕事上の人脈の軽々しい利用ということがあるのではないか、ということですね。

たとえば、沼野充義のこれはどうでしょう？

> もちろん、これまで何度も日本語に翻訳されてきた。翻訳の巨人、米

川正夫による初めての完訳（現在では岩波文庫に収録）以来、最近の原卓也訳（新潮文庫）、江川卓訳（集英社、現在絶版）にいたるまで、少なくとも歴代八名の名だたるロシア文学者たちが次々に邦訳を手がけてきたのだ。しかし柴田元幸も言うように、「翻訳には賞味期限がある」。時代とともに日本語は変わり、訳文に対する読者の要求も変わってくる。また研究や批評の積み重ねの結果、テキストの読みが深まり、それを反映した新しい解釈が翻訳に求められるという事情もある。今回の亀山氏による新訳はそういった現代的な必要に応える画期的なものだ。訳文は驚くほど読みやすくなり、まるで現代日本の小説を読んでいるようだが、その一方で、作品の構造全体に対する訳者の目配りが随所に生きていて、まるで古ぼけた昔の映画がニュープリントで鮮明に蘇ったような印象を受ける。

ただし、読みやすければいい、というものではない。また従来の訳がそれほど読みにくかったわけでもなく、私は以前の訳を四種類ほど引っ張り出して比べてみたが、先人たちの訳業の立派さに改めて感嘆した。問題は、ドストエフスキーの小説は様々な声が競い合う壮大な悲喜劇であり、妙な口癖が入り乱れた言語のカーニバルのような異様さがはたして翻訳で伝えられるかということだ。少なくともそういった側面は、あまりに滑らかなリズムの新訳からは伝わってこない。ちょうど英語圏でも長年読み継がれてきたガーネット訳（日本の米川訳に相当）に代わって、ペヴィア＝ヴォロホンスキーによる新しい訳が出て話題になっているのだが、英訳では日本の一歩先を行き、原文の特性を活かそうという新たな段階に入っているようだ。

もっとも、私は亀山訳を批判したいのではない。そもそも、読みやすい口語体が平板になりがちなのは、現代の日本語じたいが抱える貧しさの問題でもあるだろう。ともあれ、現代人が楽に読み通せる訳を作り、ドストエフスキーの途方もない世界への導き手になった亀山氏の功績は巨大である。新訳のおかげで、いまやこの十九世紀ロシアの予言者は、九・一一以後の世界の「現代作家」として新たな生を享けつつある。文学作品とは、ある言語の土壌で一度限り起こった事件だ。翻訳とはそれを別の言語の土壌でもう一度甦らせるという、もともと不可能に近い作業にほかならない。しかし、ドストエフスキー本人にも対抗できるような個性を持った稀有のカリスマ的ロシア文学者、亀山郁夫はその離れ業を可能にしてしまった。これは確かに信じがたい事件である。

（毎日新聞　二〇〇七年七月二十九日　東京朝刊）

柴田元幸の名まえを出すのは狡猾な手管ですね。「翻訳には賞味期限がある」という柴田元幸（ひいては村上春樹）のことばは『カラマーゾフの兄弟』には当てはまりません。原卓也訳の「賞味期限」はまだまだ切れていません。この意味では亀山訳は不必要な・余計な翻訳です。

「また研究や批評の積み重ねの結果、テキストの読みが深まり、それを反映した新しい解釈が翻訳に求められるという事情もある」というのは、たしかに一般論としてそうでしょう。しかし、つづく「今回の亀山氏による新訳はそういった現代的な必要に応える画期的なものだ」というのは、これを沼野充義は本気でいっているんでしょうか？　本気なら、沼野充義の程度が知れます。しかし、私は本気でないと思っているんです。彼はおそらく嘘をついたんです。「訳文は驚くほど読みやすくなり、まるで現代日本の小説を読んでいるようだが、その一方で、作品の構造全体に対する訳者の目配りが随所に生きていて」というのも嘘です。そうして、彼のなかでの「現代日本の小説」というのは、実は蔑称であるに違いないと私は思います。「ただし、読みやすければいい、というものではない。また従来の訳がそれほど読みにくかったわけでもなく、私は以前の訳を四種類ほど引っ張り出して比べてみたが、先人たちの訳業の立派さに改めて感嘆した」というのは本当でしょう。沼野充義は困りはてていたでしょう。彼は亀山訳を本当はよくないと思っているにもかかわらず、この書評で褒めなくてはならなかったんですよ。「問題は、ドストエフスキーの小説は様々な声が競い合う壮大な悲喜劇であり、妙な口癖が入り乱れた言語のカーニバルのよう

な異様さがはたして翻訳で伝えられるかということだ。少なくともそういった側面は、あまりに滑らかなリズムの新訳からは伝わってこない」というのも彼は本当にそう思っていたでしょう。なぜ彼がわざわざこんなふうにいうかというと、たぶんこういうことです。彼は、「いや、本当は亀山訳はひどいんだけれど、もちろん賢明なあなたがたにはそれがわかっていますよね。だから、どうか私と亀山郁夫を一緒にしないでください。私には亀山なんかと違ってドストエフスキーの本質がわかっています。ただ、ほら、ここはつきあいで何とか亀山訳を褒めなきゃいけないとこなんです。わかるでしょう？　そこんとこを賢明なあなたがたは理解してくださいね」と目配せしたんです。そうして、「もっとも、私は亀山訳を批判したいのではない。そもそも、読みやすい口語体が平板になりがちなのは、現代の日本語じたいが抱える貧しさの問題でもあるだろう」というのも苦しまぎれの屁理屈です。

さらに、「ともあれ、現代人が楽に読み通せる訳を作り、ドストエフスキーの途方もない世界への導き手になった亀山氏の功績は巨大である」の「現代人が楽に読み通せる訳」も沼野充義にとっては本来蔑称であるでしょう。ただ、ここで彼は完全に妥協したんですね。売れさえすればどんな訳でもいいと妥協したわけです。最後の「文学作品とは、ある言語の土壌で一度限り起こった事件だ。翻訳とはそれを別の言語の土壌でもう一度甦らせるという、もともと不可能に近い作業にほかならない」につづく「しかし、ドストエフスキー本人にも対抗できるような個性を持った稀有のカリスマ的ロシア文学者、亀山郁夫はその離れ業を可能にしてしまった。これは確かに信じがたい事件である」というのはもうやけくそです。「信じがたい」というのは本当に信じがたかったろうと思いますよ。

なぜ私に沼野充義の真意が――手に取るように――わかるかといえば、私自身が約二十年前にある出版社でアルバイトをしていて、そこで出しているある低級な小説――にもかかわらずベストセラーになりましたっけ――を宣伝するために署名入りで、「心ならずも」の文章をある雑誌に書かなくてはならなかった――しかも、それはその出版社の社長から「こういう文章が欲しかったんだよ」と褒められもしました――からですね。ところが実は、私の書いたのは、一見褒めているように見えながら、実はそうではないということが賢明な読者にだけはわかるような文章でもあったんでした。まったく、その出版社での一年間は私の一生の恥ですが。

――「俗情との結託」

（二〇〇九年二月二日）

3

――そう怒らないで。もうちょっと「亀山郁夫的読書」についてきかせてほしいんですが。

何だ、まだいたんですか？　冷やかしはもうたくさんなんですよ。

いいですか、もう一度いいますよ。私の直面している問題は、まず、私のこの一連の文章が批判であるために、拒否反応を引き起こしやすい――ただのゴシップとしてしか受け入れられない可能性がある――ということ。次に、亀山郁夫訳の実際を認識しないひとたちには、私がいくらしゃべっても「こういうのは「気持ちはわかる」が、非生産的だ」としか受け取られないかもしれないということ。いまのふたつに絡めて、そもそも世のなかの評判に自分を合わせるばかりで、自分自身でものを判断するということのできないひとが大多数だということがありますね。また、ひとには自分の意見を撤回するのがなかなか難しいということも手伝います。それから、『カラマーゾフの兄弟』を読んだことのあるひとたちのなかでも、ただ読んだというのでなく、あるレヴェル以上で――といっても、それが本当はそれがふつうのレヴェルなんですが――読んだ

というひとにだけしか私のいっていることが通じないということ。ああ、それと、東京外国語大学学長とただの読者とを肩書きでしか判断しないひともあるかもしれません。いくら何でも東京外国語大学学長がそんなでたらめなわけがない――それについて何の肩書きもない一般人がどうしていちゃもんをつけるんだ――という良識が事実を受け入れるのを拒むということですね。後は、翻訳者がどれだけ恐ろしいまでに稚拙な誤読をしていようと、目の前にある原典の一文一文をそのまま訳していって、最後の文にまでたどり着ければ、それで立派な翻訳だと考えているひとが多いのかもしれないということ。これは、作品というものが作者の「何を描くか」と「どのように描くか」とのせめぎあい・たたかいの軌跡だということを理解できないひとたちがどれだけ多いかということでもあります。私は、本来ならそんなひとたちなんかどうでもいいと思っているんですが、それでも「ブルータスよ、お前もか」というような例が散見されるのが意外だったんですよ。まあ、そんなひとたちもそもそも「ブルータス」じゃなかったのかもしれませんけれど。しかし、いや、どうして亀山訳の実際を知らないでいられるんだ？　と思うわけです。知らないだけなんだろう？　読んでいないだけなんだろう？　と。

――でも、豊﨑由美は読んでいますよね。読んで、「読みやすい」とあれほどまでにいうわけですよね？

そうですね。彼女の『勝てる読書』の帯には「セコい大人に勝つために！　理不尽な状況に、くじけそうな自分に…　本の中にこそ勝てる言葉と思考がある」という文言があるんですが、いまのままでは彼女すら私にとっての「理不尽な状況」を助長していますよ。で、まったく現在四十六歳の私こそ、よっぽど「セコい大人に勝つ」ことを念願しているわけです。大人げなくも、ね。

ロシア文学の研究者たちから、マスメディアから、亀山訳の実際を知ろうともせず、拍手を送りつづけている。いや、実際を知って、なお拍手しているでしょう。

――ええと、こういう情報もあります。白水社のホームページから。

【イベント】豊﨑由美さんが翻訳小説リレー対談を始めます！
翻訳小説新刊リレー対談「豊﨑 由美アワー　読んでいいとも！　ガイブンの輪」のご案内

この二月から隔月（偶数月下旬）に、書評家の豊﨑由美さんがゲスト（作家、翻訳家など）を迎え、最近おもしろかった海外小説の新刊について、自由におしゃべりするというもの。またゲストには、某テレビ番組式に次のゲストを紹介していただきます。

第一回目は二月二十六日（木）十九時よりジュンク堂書店新宿店で行われます。
ゲストは野崎歓さんです。

（http://www.hakusuisha.co.jp/news/2009/02/post_128.html）

何ですって？　野崎歓！

――会場のジュンク堂書店新宿店のホームページによれば、

海外旅行も洋画も各国料理も好きなのに、外国文学（ガイブン）はなかなか著者名が覚えられないし、登場する人物名も土地名もなじみがないからついつい敬遠してしまうというアナタ！　読んでみたいと思ってはいるけれど、次々出る新刊を前にどれを選んだらいいか途方にくれてしまうというアナタ！　あるいは、海外小説についてさらにディープに知りたいというアナタ！　とびきりのガイブン目利キストであるふたりが、「これはおもしろい！」「いまが旬！」「読んで損しない！」という新刊をおススメし、魅惑の翻訳小説ワールドへとみなさんをご案内いたし

ます。

（http://www.junkudo.co.jp/newevent/evtalk-shinjyuku.html#20090226shinjuku）

ああ、そうですか。「とびきりのガイブン目利キスト」ねえ。「ゴドキスト」じゃないの？「魅惑の翻訳小説ワールド」って、「最先端の誤訳ワールド」のことですか？　それじゃ、野崎歓は次回ゲストに亀山郁夫を指名するんじゃないですか？　次回＝四月のあたりには亀山訳『罪と罰』も完結か、完結間近とかいうことで。まったくどこまでも宣伝だ。で、野崎も亀山も、自分たちへの批判を冗談めかしてしゃべって会場の笑いを取り、世のなかにはうるさいストーカーみたいなのがいるんですねえ、困りましたよ、なんていいながら「それでも負けない野崎先生はすごい！」、「それでも『罪と罰』に手をつけてしまう亀山先生はすごい！　ぜひ『悪霊』にも手をつけてください」なんてことにして終わりですね。豊﨑由美が「誤訳していいとも！」。それで満場の拍手。目に見えるようだ。

それでもロシア文学の研究者たちは何もいわない。それどころか、一緒になって拍手するわけです。

それじゃ、ちょっと引用しましょうか。

七月、舞鶴に着き、汽車で品川に帰ってきた。一四年ぶりの帰郷。多数の迎えにもかかわらず、日本がこんなに復興している驚きとは別の、大きなショックを受けた。

迎えの人々のなかに、もと一緒に働いた軍医や看護婦もいた。敗戦後すぐ帰国していた、ある軍医はいった。

「湯浅さん、あんたなんで戦犯なんてことに。あの戦争は正しかったなんて、言い張ったんだろう。ごまかしゃいいのに」

「そうじゃないんだ。君とあれやっただろう」

「え、何を？」

彼は戦後一一年にして初めて、湯浅さんに言われて生体解剖を思い出したのだった。過去を見つめてきた湯浅医師と、出迎えた医師との間には大きな隔たりがあった。

これが、北支から帰国した元軍医たちすべての姿勢だった。北支那方面軍三〇万、そこに二〇以上の陸軍病院があった。病院の軍医と野戦の軍医、あわせると数千人の軍医がいたはずだ。さらに衛生兵、看護婦が何千といる。だが、誰も一言も言わなかった。もし誰か一人でも「あんなことをしたのだから、恐ろしいぞ」と言い出す者がいれば、軍医は誰も太原には残らなかったであろう。悪業として認識していない以上、否認する必要もなかった。

（野田正彰『戦争と罪責』岩波書店）

どうです？　この湯浅医師は、戦中に中国で自分の関わった「生体解剖」のためにずっと中国に拘束されて、やっと帰ってきたひとなんですよ。あ、「生体解剖」というのがよくわからないというなら、これを「死体解剖」ということばと対照させてみてください。

べつの作品から引用しましょう。

もちろん青木は、日中戦争を日本の中国に対する帝国主義的侵略によってひきおこされたなどとは夢にも考えていない。いまでも日中戦争は大東亜共栄圏を打ちたてるための聖戦だったと信じているのだ。おのれが命令した捕虜虐殺事件にしても、ちっとも悪いことをしたとは考えていない。これまた戦争につきものの、やむを得ない処置だったと割り切っているのだ。

彼は一流商社に定年まで勤めたということだが、そこでの仕事や研修などを通じて、おのれの旧態依然たる戦争観、中国観に修正を加えざる

を得ないような場面にぶつかるといったことが、全然なかったのだろうか。不思議といえば不思議であった。

しかし、元将校や兵士だった日本人の中には、青木のような男が圧倒的に多いのだ。特に戦友会に結集している連中は、ごく少数の例外を除いてほとんどが日中戦争は侵略戦争だったとは考えてもいないのだ。しかも「反戦平和」や「日中友好」を唱える輩を白い目で眺めているのだ。

（井上俊夫『初めて人を殺す』岩波現代文庫）

この青木というのは、語り手の元上官で、戦中、中国で彼に「刺突」をやらせた人物なんですね。「刺突」というのは、実戦前の新兵に「肝試し」をさせるんです。中国人を縛りつけておいて、新兵たちに銃剣で刺させる。こうすれば、実戦でも肝が据わるだろうというわけです。

さらにべつの本から引用しますが、

奥村　そうして、こんどは私たちに「肝試し」が命じられました。正確にはこれを「刺突訓練」と呼んでいました。銃剣で、後ろ手にしばられて立たされている中国人を突き刺すのです。目隠しもされていない彼らは、目を開いてこちらをにらみつけているので、こわくてこわくてたまらない。しかし、「かかれっ」と上官の声がかかるのです。私は目が開けられず、目をつむったまま、当てずっぽうに刺すものだから、どこを刺しているのかわかりません。そばで見ている古年兵にどやされ、「突け、抜け」「突け、抜け」と掛け声をかけられる。どのくらい蜂の巣のように刺したかわかりません。しまいに、心臓にスパッと入った。そうしたら「よーし」と言われて「合格」になったのです。こうして、私は「人間を一個の物体として処理する」殺人者に仕立て上げられたのでした。

（『私は「蟻の兵隊」だった』奥村和一・酒井誠　岩波ジュニア新書）

そういうことです。で、『初めて人を殺す』に戻りますが、戦後何十年もたって、語り手はいまや老人となった青木と話したんですね。

私は青木とひとしきり思い出話に花を咲かせたあと、わざとさりげないふりをして、私が最も知りたいと思っている話題の中へ彼を引き込んでいった。

「ところで青木さん、私たち初年兵はあんたの命令で、中国兵の捕虜を楠の木に縛りつけて銃剣で突かされたことがありましたね」

と、私にとって一番大事な質問をすると、とたんに青木のふやけた顔には、さっと警戒の色が浮かんだ。なんでお前はそんなヘンなことを聞くんやと、その顔は言いたげだ。私は、しまった！　ここで青木に話をそらされたら、万事休すだと思った。

「いやね、私には忘れられないショッキングな事件だったもんですから、ちょっとおたずねしただけですよ」

私はわざと頭をかいてみせた。すると、青木はニヤリと笑って、急に私にすりよってきたかと思うと、私の肩に手をかけ、媚びるような口調で、「そうやがな。そうやがな。お前たちにやらせたあの五人の中国兵（ツンコピン）は、俺が連隊本部でもろてきたんや。お前ら、順番に銃剣で突いたのやったなあ」

と言った。私が捕虜虐殺の話を持ちだしたとたん、なぜ青木が俄かにかくも卑屈でかくも馴れ馴れしい態度をとったのか、私には見当がつきかねたが、とにかくこれで彼は特別私を警戒しているわけではないことがわかった。

（井上俊夫『初めて人を殺す』岩波現代文庫）

このまま長い引用をつづけます。

ところで、私をふくむ二十三名の初年兵が殺した中国兵捕虜は、青木

の言うように五人ではなく、一名だった。では青木はなぜこんな間違ったことを言ったのか。要するに彼の記憶は曖昧なのだ。彼は何度も同じようなやり方で、何人もの中国兵捕虜を部下に殺させているので、どれがどれだかわからなくなっているのだ。

「青木さん、私たちが殺した中国兵捕虜はあなたが連隊本部からもらってきていたということですが、捕虜はみんな本部に集められていたんですか」

「うん、そうや。連隊本部では作戦の都度つかまえてきた捕虜や密偵を取り調べたり、収容したりするところがあったんや。そやけど、建物が狭もうて収容しきれんようになると、こいつらを各中隊に配給して処分させていたんや」

「配給？　処分？　つまり手分けをしては殺してしまうんですね」

「まあ、そうや。しかし、ただ無闇に殺すんやなくて、将校になる一歩手前の見習士官には軍刀による斬首訓練を、兵士には銃剣による刺殺訓練を施すために、我が軍としては有効適切に殺していたわけや」

「当時は国際的なとりきめで、捕虜をそういう形で殺してはいけないことになっていたのと違いますか」

「そんなに言うたかて君、われわれ皇軍には、国際条約もへちまもあるかいな。捕虜や密偵を大事に扱こてたら、しまいでこっちがやられてしまうがな」

と青木は言って、びっくりするような高笑いをしてみせた。

「で、私たち初年兵に捕虜を銃剣で突き殺させた本当の目的は何だったんですか」

「もちろん、君たちを一人前の兵隊にするためやないか。初年兵教育の総仕上げにこれをやって、それから作戦に連れ出すわけや。この特別訓練をやっとくと、兵隊に度胸がついて、敵と遭遇した時に落ちついた行動がとれるようになるんや。俺が教育した初年兵にはみんなこの訓練をほどこしたはずや」

「では、青木さんご自身の初年兵の時は、どうやったんですか」

「もちろん、俺かて初年兵の時、上官の命令で捕虜を銃剣で殺す訓練を受けてるがな」

「うちの部隊だけでなしに、支那派遣軍のどの部隊でも、こうした訓練を兵隊にほどこしていたのでしょうか」

「うん、どこでもやってた。われわれ将校の立場から言うと、第一、この訓練をやらんことには強い兵隊、安心して前線に連れていける兵隊ができへんもんな」

（同）

それで、語り手は現在の青木を見ながら、先に引用したように、こう思います。

元将校や兵士だった日本人の中には、青木のような男が圧倒的に多いのだ。特に戦友会に結集している連中は、ごく少数の例外を除いてほとんどが日中戦争は侵略戦争だったとは考えてもいないのだ。しかも「反戦平和」や「日中友好」を唱える輩を白い目で眺めているのだ。

（同）

そうして、

そして今や経済大国となった日本では、こういう考え方をしていてもめったに非難されることはないし、むしろ「健全な思想の持主」として、社会や企業からも歓迎されることを従軍体験者たちは敏感に嗅ぎとっているのである。

（同）

どうですか？　こういうことが、ロシア文学研究者たちの間にも起こっています。マスメディアにも起こっている。この「え、何を？」がどれほど恐ろし

いことなのか、また、「え、何を？」ほどでないにしても、ある程度には自身の罪を自覚しているにもかかわらず、周囲を見回して「安全」と判断するや、もう問題をなかったことにしてしまう・しまえるひとたち。群れたがるひとたち、「誰の前にひれ伏すか」しか頭にないひとたち……。それですよ、私が危惧しているのは。そのために私は亀山郁夫とその称揚者たちを絶対に許してはならないと考えているんです。

チリンガ・リーン！　このくそったれ！
（カート・ヴォネガット『タイムクエイク』浅倉久志訳　早川文庫）

――はは あ。何やら話が大きくなってきましたが……。

大きくなんかなっていませんよ、そのまま、そのまんまです。これに関して「話が大きくなってきた」ということ自体が非常に危険なことなんです。あなたはまたしても高みの見物をしているんだ。

……全国紙の全面広告・全五段広告・半五段広告などで、「二十世紀掉尾を燦然と飾る（日本文学の）傑作」などと鉄面皮なオダを上げて提灯持ちをしているチンケな「書評家」、そういう無責任な超誇大広告と結託する多数「俗情」が結果する「せいぜい中くらいな作物の何十万部突破」ベスト・セラー化現象、――文芸分野における「ボーダーレス」のいよいよ決定的な「悪平等」ないし「玉石混淆積極的是認」！……
（大西巨人『深淵』光文社文庫）

――しかしね、あなたはそうも偉そうにいえる人間ですかね？

私自身は「セコい大人」ですよ。恐ろしく弱い人間です。恐ろしく弱いまま四十六年も生きてきました。これでさえ私には長すぎるでしょう。やれやれ、私は去年、この「連絡船」を「今後二十五年間の仕事」ということにしたんですね。二十五年後、「生きていれば七十歳」ということでね。まったく私は俗情にまみれているので、何が「今後二十五年間の仕事」だ？　ともいいうるでしょう。私にも無数の「え、何が？」がある。呆れ返るほどあるでしょう。しかし、私はことこのことに関しては、絶対に譲歩してはならないと自分にいいきかせているんです。これについて譲ってしまったら、もう私は終わりですね。

――またしても平行線ですね。ともあれ、話をつづけましょうか。「亀山郁夫的読書」についてですが、あなたは亀山郁夫ともども世のなかの大半の読者を罵倒しているんじゃないですか？

もちろん、その通りです。私は「世のなかの大半の読者」を、先の「え、何が？」のひとたちと同じに考えていますね。でも、このへんの事情に関してはもうこの「連絡船」でさんざんしゃべってきたことじゃないですか。亀山郁夫の訳文も、彼自身の「解題」での文章も、文章力のない者の文章ですよ。あれらを「読みやすい」などというひとのレヴェルの低さを私は罵倒するんです。

――偉そうにねえ。

だから、いっているでしょう。それを「偉そうに」などという愚劣な輩がはびこりすぎなんですよ。ね、ラキーチン。

――けっ、いいたい放題だ。

いいたい放題ですよ、もちろん。でも、あなたにいいますが、これを「いいたい放題」などというのが、もうそれだけで駄目だっていうんです。私のやっていることと「いいたい放題」との区別のつかないひとにはけっしてアリョー

シャの「あなたじゃない」の意味がわかりません。私はいいますが、アリョーシャになら、私のやっていることと「いいたい放題」との明確な差を理解することができるでしょう。

いいですか、あなたがちゃんとした読書をすることができるなら、私がここでいっていることは全然問題にもなりゃしないんだ。「そうですよねえ、そんな馬鹿な読みをする奴がいるんですよねえ」という共感で、そのまま終わりなんですよ。

――なんて傲慢な奴なんだ！

これはどうですか？

大西――今の問題に必ずしも即してないと思われるかもしれないが、最近は、たとえば「Aがいい」と思っても、それをまっすぐには言わない方がいいという論調があるね。「AでもないBでもない」と言っておく方がいい。本当は、「世の中はAじゃなきゃいかん」という「A」を探り求めていかなければいけない。むろん、なかなか不動のものに到達しないということもあろうが、それを見つけて、言わなきゃいかんわけ。ところが今は、どうもみんな「AでもなければBでもない」というようなことを言う。わかりやすく世の中に当てはめたら、「右翼でなければいかん」という奴がいて、一方に「左翼でなければいかん」という奴がいる。そうではない「右翼でも左翼でもないのがいい」という論調がいっぱい出てきているように思うがね。その右翼でもない、左翼でもない、AでもないBでもないという言い方が、実は戦争やらファシズムやらを呼び招くんだと思うが。でも、一所懸命「不動のA」を追究して、そのことを言う人間がいなきゃいかんな。

（大西巨人『未完結の問い』作品社）

あのね、『カラマーゾフの兄弟』を、亀山郁夫のように稚拙にでたらめに歪曲したものについて、世間の趨勢に合わせて称揚する――「文学」をそのように歪める――なんてことは、実は「人間」に対する大きな冒瀆なんですよ。文学者――たとえばロシア文学研究者――こそ「人間」に奉仕すべきなのに、いまや「人間」を貶めることを仕事にしているんです。文学者が自分の処世のために「人間」を侮辱している。文学者がこんな体たらくでは――私はいいますが――日本は近い将来、本当に戦争を始めることになるでしょうね。亀山郁夫のやっていることは、ある意味、「アウシュヴィッツはなかった」、「南京虐殺はなかった」に等しいと私は断言します。そんなものを絶対に許してはなりません。それは「歴史の偽造」（大西巨人）です。いいですか、これ、真面目にいっているんですよ。「文学」に携わる者が絶対に「人間」を売ってはなりません。

もうひとつ、ＸＴＣのアルバム『Nonsuch』の終曲から引用します。

Books are burning
In the main square, and I saw there
The fire eating the text
Books are burning
In the still air
And you know where they burn books
People are next

（Andy Partridge（XTC）《Books Are Burning》）

この歌詞ですが、ＸＴＣの公式サイト（http://www.xtcidearecords.co.uk/）では、三行めが「The first eating the text」となっているんですね。でも、実際に曲を聴けば、どうしてもこれは「The fire eating the text」です。それで、そのように引用表記しました。

（二〇〇九年二月十二日）

4

――ちょっといいたいんですがね。いましがたあなたが引用したＸＴＣですが、あれにつづくのはこういう歌詞じゃないですか。

I believe the printed word should be forgiven
Does't matter what it said

(Andy Partridge (XTC)《Books Are Burning》)

そうですが。

――「そうですが」じゃないでしょう？　いまの部分をあなたはわざと隠蔽したんじゃありませんか？

どういうことです？　何がいいたいんです？

――何って、「Does't matter what it said」なんでしょうが。たとえ亀山郁夫のものだって「the printed word should be forgiven」じゃないですかね？

ああ、なるほど。そういうことか。またしてもあなたは線引きを間違えていると思いますが、答えましょう。

私は『カラマーゾフの兄弟』が亀山郁夫によって焼かれている、つまり、冒瀆されている、その冒瀆を知っていながら、それを歓迎し、さらに助長するようなことをするひとたち、見て見ぬふりをするひとたち――ということは彼らも『カラマーゾフの兄弟』を焼いているわけです――のいることを考えていたんです。自分たちのしていることの意味がわかっているのか、ということです。そんなことでは、「People are next」だ、と。そのことだけ――というか、「text」-「next」と韻を踏んで、あそこで一区切りですしね――を考えて、私は引用をあそこまでにしました。そこで私は亀山郁夫のものを「books」のうちに数えていませんでした。とはいえ、書物が焼かれるとき、すべての書物が焼かれるわけではありません。焼く側の者たちの書物は無事なんじゃないでしょうか。

しかし、たしかに亀山郁夫のものであろうと、「the printed word should be forgiven」でしょう。あなたは「言論・出版の自由」の話をしたいんですか？

それじゃ、私はこれを引用しましょう。

フォリソンはフランスのリヨン大学の文学部教授でしたが、一九七〇年代の終わりころ、かれは自分で独自に資料を集めて、大学での講義を始め、いたるところで、アウシュヴィッツなどナチスの収容所において六百万人からのユダヤ人が抹殺されたというのは、全部シオニストのでっち上げにすぎないと言ってのけた。フランスでは大騒動になりまして、とうとうリヨン大学は、反ユダヤ主義者のこの教授を懲戒免職処分にした。解雇された本人は、これは不当な言論弾圧であり、表現の自由に対する抑圧であると主張した。五百万人の請願署名運動が支援者の協力を得て開始された。この署名運動の一翼を担ってもらいたいというので、アメリカのチョムスキーのところにも署名依頼がきたのです。

チョムスキーは請願書を一読して短い文章を書き、友人を介してフォリソンのもとに送ったんです。この文章を自由に使ってくれてかまわない、と添え書きして。チョムスキーの文章は、懲戒免職になったまでのいきさつをまとめたフォリソン本人の著書の冒頭に、序文として使われた。言論の自由を守るための運動にでなく、フォリソンの個人的著書の序文として自分の文章が使われることをチョムスキーが知ったときには、もはや本は出来上がっていた。すぐにチョムスキーは序文として使うのをやめてくれるようにフォリソン側に申し入れましたが、あとの祭りでした。本は取次ぎ流通に乗って各地にばらまかれてしまった。

こうして、チョムスキーもまた反ユダヤ主義者というレッテルを貼ら

れました。チョムスキーは自身ユダヤ系であるにもかかわらず、こういうものを書いてフォリソンの反動を支持した、というのでアメリカにおけるユダヤ・ロビーからもイスラエル・ロビーからもふくろだたきに遭いました。

……（中略）……

フォリソンの本に使われることになった短文を、どうしてチョムスキーは書いたのだろう。それを考えてみるためには、そもそもなぜ請願署名をすることにチョムスキーが許諾を与えたかを振り返ってみる必要があります。言論の自由という問題をめぐるチョムスキーの見解を知るに好適なのは、『チョムスキー、世界を語る』（トランスビュー）という本ですけれど、この本は、二名のフランス人ジャーナリストがチョムスキーに話を聞いてまとめた初めてのフランス語版の本なんです。このなかでフォリソン事件に関わることになったチョムスキーについての誤解を、インタヴュアーたちが取り上げている。かれらは次のようなチョムスキーの言い分を引き出しているのです。

――あのフォリソンの請願書では、主張の内容が問題だったのではない。主張を発表する権利が問題だったのだ。これはまったく古典的な問題です。表現の自由を守ろうという場合、自由を奪われた人の意見・信条の中身に踏み込んではならない。表現の自由を守ること、それだけが当面の問題なんです。

チョムスキーはさらにこう言っています。

――要するにわたしは、何人かの人たちが断言するように、フォリソンがたとい実際に反ユダヤ主義であり、ネオ・ナチの一員だとしても、表現の自由の問題はそのことによっていささかの影響を受けることはないと述べたんです。わたしが書いた短い文章は、まさにこの問題だけに関わるものでした。

それからまたこういうこともチョムスキーは言っています。

――わたしは毎日だれかのために請願書に署名しているが、その人たちの意見・活動についてはまるっきりというか、ほとんどなにも知りません。しかし、これは人権を守ろうとする者にとっての日々の糧なのです。

（立野正裕『精神のたたかい』スペース伽耶）

どうですか？　私自身はチョムスキーの本をひとつも読んではいないんですけれどね。しかし、亀山郁夫の主張にも「発表する権利」があることは認めますよ。現実にいくつもの著作が発表されているわけです。でもね、そうやって発表されたものがそのまま何の批判も被らなくていいはずもないんです。批判はどんな場合にも必要なんです。「発表する権利」がある以上、発表されたものは批判されなくてはなりません。いいですか、この場合の批判というのは「駄目だ」というものだけじゃなく、「よい」・「素晴らしい」をも含みます。「発表する権利」というものは、常に鍛えられなくてはなりません。どんな主張も批判を受け、それに答える用意がなければ駄目です。そうやっていつでも論争が繰り広げられるような自由な環境こそが、実はいっそう「発表する権利」を力強く支えるはずなんですよ。そういう盛んな批判のなかへと出してかまわないといいうるものだけが発表されるようになればいいと私は考えます。だから、発表されるものは、常にあるレヴェル以上のものであるべきだと私は考えます。そうして、発表されたものを「よい」・「素晴らしい」と推すひとたちも、必ず批判にさらされなくてはなりません。その覚悟なしに安易に「よい」・「素晴らしい」などと口にすべきではないんです。無邪気でいてはいけません。無邪気なら罪がないだろうなどと考えてはいけません。

亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』はとても発表できるレヴェルに達していません。あまりにも稚拙でいいかげんでたらめな――どこに出しても恥ずかしい――代物です。本来なら、つまり、発表なんかとんでもないというレヴェルですから、批判の対象にもなりえないわけです。ところが、発表されてしまった。発表されてしまった以上、これは――こんなものを発表してしまった出版社の行為を含めて――徹底的に批判されなければなりません。正しい評価を受けなくてはならないんです。金輪際これほどでたらめな翻訳が発表されないために

も、亀山訳は批判を受けねばなりません。以前にもいいましたが、私は亀山郁夫の個々の誤訳が正されればいいと考えているのではありません。彼の訳そのものがなくなればいいと考えています。「最先端」の亀山郁夫なんかに『カラマーゾフの兄弟』を訳すことがそもそも無理だからです。どうして『カラマーゾフの兄弟』をこれほどとんちんかんにしか読み取れないひとに翻訳なんかができるでしょう？　私は光文社と亀山郁夫とが亀山訳を絶版にし、すでに売れたものは回収もすることをも望みますが、それでも「言論・出版の自由」は尊重されねばなりません。それとともに批判も継続されねばなりません。

――ふうん。それじゃ、これはどうです？　あなたはさっき大西巨人を引用しましたよね。

その右翼でもない、左翼でもない、AでもないBでもないという言い方が、実は戦争やらファシズムやらを呼び招くんだと思うが。でも、一所懸命「不動のA」を追究して、そのことを言う人間がいなきゃいかんな。

（大西巨人『未完結の問い』作品社）

ええ。

――で、あなたのこれまたよく引用する保坂和志ですが――あなたは『カンバセイション・ピース』から「わからないときにすぐにわかろうとしないで、わからないという場所に我慢して踏ん張って考えつづけなければいけないんだな、これが」という語り手のことばをいつも引いてますよね――、でも、同じ語り手が妻にこういわれるじゃないですか。

「だいたいそこで鳥の羽を振り回してるオジサンがいけないのよ。優柔不断で何があっても一つに決められなくて、ああでもないこうでもない、ああだとしたらこうでもある、ああでないとしたらこうであるかもしれないけれど、こうであるとしてもああであるとはかぎらない――みたいなことをずうっと言ってるから、ゆかりまでそういうのが感染っちゃったのよ」

（保坂和志『カンバセイション・ピース』新潮文庫）

ええ、それが？

――「AでもないBでもない」＝「ああでもないこうでもない、ああだとしたらこうでもある、ああでないとしたらこうであるかもしれないけれど、こうであるとしてもああであるとはかぎらない」じゃないんですか？「わからないときにすぐにわかろうとしない」＝「AでもないBでもない」じゃないんですか？　ほら、どうです？　ん、何を笑ってるんですか？

いや、ああ、なるほどね、と思ったんですよ。

「わからないときにすぐにわかろうとしないで、わからないという場所に我慢して踏ん張って考えつづけなければいけないんだな、これが」と私は言った。

「我慢して踏ん張るって、内田さんいまいくつですか？　四十でしたっけ――」

「もうじき四十四」

「げえッ。四十四って、じゃあ内田さんはいったい何年踏ん張ってるんですかぁ。

おれより内田さんの方がアタマいいんだから、おれより若いときから踏ん張ってたりしたら、もう二十年じゃないですか。

おれ二十年も踏ん張っていたくないですよ。内田さんはあと何年踏ん張ってるんですか。そういうのって、やっぱりスタートの考え方が間違ってるって言うんじゃないですか？　スタートに失敗してたら何十年踏

ん張ったってダメですよ」

（同）

そこでのね、「スタートの考え方が間違ってる」ということへの恐れの方が実は「AでもないBでもない」を導くんですよ。「スタートの考え方が間違ってる」というふうに考えるひとにはね、考えることができません。このひとは「考える」ということを完全に誤解しています。「考える」ということが、自分の身を投げ出し、汚れまみれ・傷だらけにになることだなんて思っていないんですね。自分があくまできれいなまま・無傷なまま、ある種の中立地帯に立って、スマートに「考える」ことができると思っているんです。「考える」ということがひたすら傍目に「徒労」・「優柔不断」・「不健全」にしか見えないということがわかっていないんです。だから、こういうひとはいつも、自分でもよくわかっていないまま、他人の差し出す安易な・ありがちな結論に飛びつくことになるんですよ。まったくの思考停止です。いいですか、「考える」ってことは賭けなんですよ。これは無傷じゃすみません。「考える」っていうのは「たたかう」ということですよ。たしかに「スタートの考え方が間違ってる」ということへの懸念は「考える」者にもあるでしょう。でも、それは彼にはどうにもならないことなんですよ。それでも彼はそのまま行かざるをえないんです。そのまま行かざるをえない、とにかく始めた以上、とことん進んで行かざるをえない。もう彼にはどうしようもないんですよ。懸念はつきまとうにしても、「スタートの考え方が間違ってる」なんてことは、もう彼にはどうでもいいんです。それが「考える」ってことです。とはいえ、その彼にはまったく当てがないわけじゃない。彼は「Aだ」と思っています。それでもなかなか「不動のA」に行き着くことができない。きっとこのはずだ、こうでないわけがない、いや、それは違う、それも違う、いやいや、それも違う、どうしてそうなんだ？　――この営みが「考える」ということです。

というわけで、私はいいますが、『カンバセイション・ピース』での「ああでもないこうでもない、ああだとしたらこうでもある、ああでないとしたらこうであるかもしれないけれど、こうであるとしてもああであるとはかぎらない」が、一見あっちへふらふらこっちへふらふらというふうに思われるかもしれませんが、それこそが実は「一所懸命「不動のA」を追究」することであるはずです。それが「考える」ということです。

ただね、あなたのためにいいますが、私も大西巨人の「でも、一所懸命「不動のA」を追究して、そのことを言う人間がいなきゃいかんな」を読んだときには、そのあまりの厳しさにうろたえて、何とか逃げ道はないものか、と思いましたっけ。「AでもないBでもない」＝「ああでもないこうでもない、ああだとしたらこうでもある、ああでないとしたらこうであるかもしれないけれど、こうであるとしてもああであるとはかぎらない」というのも、そのときには考えてみましたっけ。

でも、そうじゃありません。

それにね、もう半年以上も亀山郁夫批判をつづけていると、私には大西巨人のいうことが痛切にわかるようにもなってきているんですよ。亀山郁夫のこの迷惑な仕事がなかったら、私がこうまで大西巨人のことばを理解できるということもなかったんじゃないですかね。同時にね、これは私にとっての『カンバセイション・ピース』理解の強化でもあるはずです。逆にいえば、お前はこれまで「ああでもないこうでもない、ああだとしたらこうでもある、ああでないとしたらこうであるかもしれないけれど、こうであるとしてもああであるとはかぎらない」をどう読んできたんだ？　何か自分に都合のよい、卑劣な目的に転用しうるとでも思っていたのじゃないか？　ということにもなりますが。

補足をすれば、私がもう何度も自分には読解力があると繰り返しているのも、「スタートの考え方が間違ってる」とのたたかいであるはずです。自分には読解力がないと私が思ってしまえば、それは「スタートの考え方が間違ってる」へと投降することになるんです。私はどうしてもそれをしたくありません。いや、私にはそれができません。

――亀山郁夫だってそう思っているんじゃないですか？

また、それか。亀山郁夫はね、何にも考えちゃいないんです。くだらない思いつきをばらばらに並べていいかげんな辻褄を合わせているだけです。しかし、あなたがまだそんなことをいうなら、これを引用しておきましょう。

佐藤　「ドストエフスキーはこうも読めればこうも読める」と複数の読み方を提示する人はけっこういますが、「亀山ドストエフスキー論」の面白さは「自分はこの読み方を採用する」という、インテリ（知識人）としての「命がけの飛躍」をしているところ。「決断」と言ってもいい。この「決断」こそが「物語」をつくるという意味で、今の日本の社会と国家にいちばん欠けているところです。

亀山　仮説を極限まで検討していって、最後に「決断」した以上はここに賭けるというのは、勇気がいることですね。ただ、こうも読めるああも読めるという迷いは大事にしたいと思っています。面白いのは、同じ仮説でも、研究面での新しい未来というか新機軸をひらいてくれる仮説もあれば、ほんとうに枝葉末節の部分にこだわって、むだな時間を費やしている仮説も存在するわけです。もし、自分なりの直感で、新しい議論を呼びだせると確信できたときには、果敢に攻めることにしています。批判されてもいい。批判を恐れたら、学問に進歩は生まれないでしょう。

（亀山郁夫＋佐藤優『ロシア　闇と魂の国家』　文春新書）

――何だ！　さっきまであなたのいっていたのと同じじゃないですか！

全然違うんですけどね。

しかし、何の知識もなしに、ただこの部分だけを読まされれば、亀山郁夫のいっていることも立派な主張に思えますよね。これが問題なんです。具体性を欠いた一般論めいたものというのは、いつでも何とでもいえるんですよ。どんなでたらめでも、もっともらしくいいつくろうことができちゃうんです。あらためて暗澹としましたよ。私もいまそんなふうにしゃべっているに違いありません。

あのね、だから、こういった一般論というのには注意した方がいいですよ。一般論というのは本当に曲者です。この形だと、誰でも何についてでももっともらしく主張できてしまうんです。そうして、世のなかのひとたちは、その実質がどうであれ、もっともらしい一般論を好むんですね。いや、世のなかなんてそんなものです。でたらめでいくらでも踊ることができるんですね。まったく、自分で引用しておきながら、何だか自分が馬鹿らしくなってきましたよ。やれやれ、ごまかし・いいつくろい・もっともらしく見せる・体面を保つ・嘘のつき通し――そんなのは、この私からして日常的にやっていることじゃないですか。不誠実――まったく私の日常じゃないですか。ちっぽけで、卑劣で、小ずるい私。仕事もきちんとこなせない私。生活力のない私。そんな私にも偉そうな一般論なんかはいくらでも口に出せるんですね。

――おやおや、急にどうしたんです？

何だか突然自分の「スタートの考え方が間違ってる」ような気がしてきたんですよ。つまり、「資格」ということですね。私というこんなつまらない一個の人間に亀山郁夫を批判する「資格」なんかありゃしないだろう、ってことです。

――あれ、まあ。

「あれ、まあ」か。……「あれ、まあ」ねえ……。

Et nihil humanum a me alienum puto（人間のものは何一つ無縁じゃないんだよ）

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

……いやいや、その「資格」っていう考えかたを私はこれまでずっと拒んできたんでした。「資格」なんていいだしたら、誰にも発言権がないことになってしまいます。この「連絡船」でも私は、書き手・私と書店員・私との葛藤を扱いつづけてもきたんでした。以前にしゃべったことですが、

こんなふうにしゃべる私が、では、誰からも突っこまれない・非の打ちどころのない人物で、書店での仕事も完璧にこなすし、生活ぶりも品行方正かというと、全然違います。たとえば、私は「どんなことにもベストを尽くす」なんていうことを、端から信じていません。なんでどんなことにもベストを尽さなくてはならないのか私にはわかりません。そうして私は、他の誰かにできることなら、自分はできなくていい、と——特にこの二十年ほどは——はっきり意識してふらふらとやってきました。その代わり、自分にできて、他の誰にもできないこと・誰もやろうとしないことをやるというつもりはあります。誰もが同じことをできなくちゃいけない、なんてことはありません。それぞれのひとにいろんなことでの力の差というのは歴然としてある。持ちつ持たれつでいいじゃないか、のんびり行こうよ、と思っているわけです。

私は、私がここで企てていることを、私なんかよりずっと有効な形で実行しうる優秀なひとが世のなかに大勢いることを承知しています。しかし、おそらくそれらの優秀なひとはこんなことを企てないんですよ。そこが問題なんですね。だから、これをこんな愚鈍な形でしかできない私がやる、ということです。

そうだ、思い出しましたが、昔、大学にいた頃の話——二十数年前——ですが、「お前は卒業してどうするの？」とある先輩——盛んに就職活動をしていたひとでした。内定もいったいいくつもらっていたのだったか——に訊かれたんですね。「就職しますよ」って答えたんですが、「お前に何ができるの？」と返されたんですね。そのとき私はたしかに、自分には就職してこの世のなかで役立つようなことが何ひとつできないだろう、と暗い気持ちでそのことばを受け止めていたんです。ところが、次の瞬間、何か憤りにも似た感覚をともなって——いまでも覚えていますが——、私はこう考えていたんでした。私にひと並みのことが何もできないというのはその通りだが、しかし、この世のなかの圧倒的多数のひとたちにできることができない私には、彼らの到底できないあるひとつのことだけはできる——『カラマーゾフの兄弟』を読むということだ。そう、まさにそのとき私の考えていたのが『カラマーゾフの兄弟』だったんですね。

で、私は結局就職できたんですが、二年で辞めてしまいました。「アルジェリアのオランに行きたい」というのが辞職の理由で、オランというのはカミュの『ペスト』の舞台なんですね。だから、そこへ行きたいと思ったわけです。実際に行きましたけれどね。いま思えば、なんと身勝手な理由で辞めたのか、ということでもありますが、とにかくそうしたんです。その旅にも私は『カラマーゾフの兄弟』の文庫三巻（原卓也訳）を持って行きました。『トニオ・クレーガー／ヴェニスに死す』（野島正城訳）とともに。そうして、私はアルジェリア入国の前に、パリではジム・モリソン、プルースト、あるいはサルトルとボーヴォワールなどの墓を訪ね、後ではベートーヴェンやマーラーの墓をも訪ねましたっけ。その翌々年には『悪霊』（江川卓訳）を携えての旅で、トーマス・マンの墓をも。もちろん私はこれのことを考えてもいましたよ。

「俺はヨーロッパに行ってきたいんだ、アリョーシャ。ここから出かけるよ。しょせん行きつく先は墓場だってことはわかっているけど、しかし何よりもいちばん貴重な墓場だからな、そうなんだよ！　そこには貴重な人たちが眠っているし、墓石の一つ一つが、過ぎ去った熱烈な人生だの、自分の偉業や、自己の真理や、自己の闘争や、自己の学問などへの情熱的な信念を伝えてくれるから、俺は、今からわかっているけど、地面に倒れ伏して、その墓石に接吻し、涙を流すことだろう。そのくせ一方では、それらすべてがもはやずっと以前から墓になってしまっていて、それ以上の何物でもないってことを、心から確信しているくせにさ。

俺が泣くのは絶望からじゃなく、自分の流した涙によって幸福になるからにすぎないんだよ。自分の感動に酔うわけだ。春先の粘っこい若葉や、青い空を、俺は愛しているんだよ、そうなんだ！　この場合、知性も論理もありゃしない。本心から、腹の底から愛しちまうんだな、若い自分の最初の自分の力を愛しちまうんだよ……こんな愚にもつかない話でも、何かしらわかるかい、アリョーシャ、わからないか？」ふいにイワンが笑いだした。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

まあ、そんな思い出話はともかく、やっと私は立ち直りましたけれど、私という人間がどんなに卑劣でちっぽけであろうが、私はどうしても亀山郁夫批判をつづけないわけにはいきません。これはしかたがないんです。私は『カラマーゾフの兄弟』のためにこれをつづけないわけにはいきません。亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』が公的な場に持ち込まれたので、その公的な場で私はそれを批判するんです。私の私的な事情は関係ありません。自分で呆れますけれどね。でも、本当にこの亀山批判までを譲ってしまったら、私にはもう何も残らないだろうという気がするんです。

「アリョーシャ、あなたは将来あたしの言いなりになってくださる？　このことも前もって決めておく必要があるの」

「喜んで、リーズ、必ずそうしますよ、ただいちばん大切な問題は別ですけどね。いちばん大切な問題に関しては、もしあなたが同意なさらなくとも、僕は義務の命ずるとおりに行います」

（同）

そうして、またどうやらこの「連絡船」の私の記述には、ようやく賛同してくれるひとたちが現われはじめてもいるんですね。心強いコメントをいくつかいただいています。私がためらったり、迷ったりしている場合ではないんです。

だが、客観的現実の帰趨は当面さもあらばあれ、事柄は私の個、私の主体、その存続か喪失かにかかわっている。……「私が向こうに転んでも、誰も私を責めはしないであろうに。」？　いや、もしも私が向こうに転んだなら、何者かが（私自身が）私を責めるであろう。……しかもあるいは問題は、啻（ただ）に私の個、私の主体、その存続か喪失かにのみあるとも決められないのではないか。ある特殊な意味において、私はあの「戦闘間一般ノ心得」が言う「最後ノ一人」なのかもしれないのである。……いやいや、私は必ずしも「最後ノ一人」でもないらしい。橋本がいる。曾根田、室町がいる。村崎がいる。先刻その態度が私の予想を裏切ったとはいえ、冬木もいる。私がこんなふうにわずらわしくなったりいやになったりするのが、私の（橋本の泥臭い元気とか曾根田の能動的な無頓着（ノンシャラン）とかに遥かに及ばぬ）消極性なのであろう。……広大な客観的現実の様相はさもあらばあれ、「微塵モ積モリテ山ヲ成ス」こともいつの日かたしかにあり得るのではないか、――もしも圧倒的な否定的現実に抗して、あちらこちらのどこかの片隅で、それぞれに、一つの微塵、一つの個、一つの主体が、その自立と存続と（ひいては、あるいは果ては、おそらくそれ以上の何物かと）のための、傍目にもわが目にさえも無意味のような・無価値のような・徒労のような格闘を持続するに耐えつづけるならば。

（大西巨人『神聖喜劇』　光文社文庫）

（もしかするとまったくの勘違いかもしれませんが、まさにこの――「先刻その態度が私の予想を裏切ったとはいえ」の――「冬木」がいるかもしれません。ある文章を読んで私はそう思いましたが）

とはいえ、こういう私の文章には――こうまで延々とつづけていればなおさら――、私がいくら隠そうとしても露わになってしまう私というのが必ずあるんだろうと思うんです。発言する私自身がどういう人間であるかということが

どうしても露呈してしまう。もうこれはしかたがありません。私がどんなふうに見えてしまおうが、とにかく、いうべきことはいわなくてはならないと私は思っているんです。後は、これを読むひとが判断すればいいだけのことです。で、やっぱりこれは「賭け」ですよね。私は無傷というわけにはいきません。

同じことが亀山郁夫にもいえますね。たとえば、ですが、引用します。

人間は大きな罪を経て、はじめてある世界に到達できるというゾシマ長老の考え方は、現代社会ではとうてい受け入れがたい、ほとんど不可能に近い信念ではないだろうか。とりわけ競争のはげしい現代社会では、人は、少しでも罪を犯したら終わりであり、命とりとなり、脱落を迫られる。

（亀山郁夫「解題」）

それから、これも。

アリョーシャの「あなたじゃない」という言葉は、イワンは法的な意味において裁かれることはない、だから、そう苦しまないでほしい、という意味にとらえることができるように思えます。

（亀山郁夫「新訳『カラマーゾフの兄弟』を読む」　ＮＨＫ出版）

右のふたつの引用が同じ人間のことばだということに、私は恐ろしく興味をかきたてられるんですが、どうでしょう？　まさに同一人物の発想です。もうこれが亀山郁夫の小ささ・せこさ・貧しさ・薄っぺらさですよ。両方ともまるっきり見当違いの『カラマーゾフの兄弟』読解ですが、それはともかく、どうやら亀山郁夫は彼のいう「罪」に何かしらの憧れのようなものがあり、できるなら法的な処罰をくらうことなしにその「罪」を犯してみたい・試してみたいのだ、というように私には思われるんですが、どうでしょうか？　そうして、とりわけ注目したいのが、彼が「法」に触れることを何だか人一倍恐れているらしいということですね。これはドストエフスキーの悪用だと私は思うんですが。つまり、亀山郁夫はドストエフスキーの作品を、何か自分に都合のよい、卑劣な目的に転用しうるとでも思っているのじゃないか？　ということです。これが私の考える亀山郁夫像なんですけれど。

「国立大学法人東京外国語大学研究活動に関わる不正行為防止規定」（平成一九年三月二十七日　規則第四一号）（http://www.tufs.ac.jp/research/doc/rulespdf）によれば、

第二条　この規程において「不正行為」とは、次の各号に掲げる行為をいう。

（一）本学の役職員が行った研究活動に関わる申請、実施、報告又は審査（本学に所属していた役職員がその在職中に行ったものを含む。）における故意の捏造（データ、研究結果等を偽造すること、又はこれら偽造したものを記録したり報告又は論文等に利用したりすること。）、改ざん（職務上の資料・機器・過程を変更する操作を行い、データ、職務活動によって得られた結果等を真正でないものに加工すること。）、又は盗用（他の研究者のアイディア、分析・解析方法、データ、研究結果、論文又は用語を、当該研究者の了解もしくは適切な表示なく流用すること。）

ということなんですが、たとえば、森井友人に指摘され、木下豊房が批判した、アリョーシャによるコーリャのことばのいい換え――とても重要な――を原典通りに訳さなかった亀山郁夫はこれに抵触しないんでしょうか？

亀山郁夫の翻訳およびいくつかの著作・発言は「国立大学法人東京外国語大学研究活動に関わる不正行為防止規定」における「不正行為」に該当しないでいられるんですか？

ところが、同規定の第三条・第四条はこうなっています。

第三条　学長は、不正行為防止計画を推進するため、役員会直属の組織として、「研究活動に関わる不正行為防止計画推進本部」（以下「推進本部」という。）を置く。

（本部長）

第四条　推進本部に本部長を置き、学長をもって充てる。

ええと、この大学の学長は誰でしたっけ？

――あはははは。

というか、こんな「最先端」を学長に据えている大学というのはどうなんですか？　そこの学生の方がちゃんと『カラマーゾフの兄弟』を読み取れるでしょうに。

ここで、もう一度亀山郁夫自身のことばを引用しておきましょうよ。爆笑できますから。

先ほどの「教養知」と最先端的研究という、この一つの実例というのを、自分に照らして提示したいと思うわけです。そこまで君はナルシストかとのそしりを恐れつつも、自分なりにひとつ言いたいことがあるんですね。私がドストエフスキー研究に入り込んだのは、この過去五、六年です。結局、ドストエフスキーの研究は、私の研究は今最先端だと自分なりに自負しているんですね、少なくとも日本においては。問題は、なぜそう自負できるか、という点にあります。私は、ロシア・アヴァンギャルド研究の後に八年間ほどスターリン文化研究に励みましたが、そのスターリン文化研究の構造をそのままドストエフスキー研究に持ち込んでみたわけです。そこでどういう発見があったかというと、例えば一〇代の後半、終わりから、大学時代から営々とドストエフスキー研究を積み重ねた人たちは、五〇代の後半になったら新鮮な想像力も何もすべて失っているんですね。ほとんどドストエフスキーのテクストになまで感動するということはない。テクストの細部から何か新しい真実を見出していくということがほとんどできなくなっていて、目新しい視点、発想はほとんどゼロなんです。

（学術研究推進部会「議事録」）

いいですか、「私は、ロシア・アヴァンギャルド研究の後に八年間ほどスターリン文化研究に励みましたが、そのスターリン文化研究の構造をそのままドストエフスキー研究に持ち込んでみたわけです」というその結果が、たとえば、「ペレズヴォンがジューチカとはべつの犬で、イリューシャを納得させるためにジューチカそっくりに右目をつぶされ、左耳にはさみを入れられた犬だ」なんですよ。そうするとですね、逆に亀山郁夫の「八年間ほど励」んだという「スターリン文化研究」というのがもうてんからでたらめだったということになるんじゃありませんか？　私はそこでどんな「最先端」が繰り広げられていたか知りませんけれど、もう全然信用ならないでしょう？　亀山郁夫の「スターリン文化研究」というのは、まさか何とか賞なんて受賞していませんよね？　いまそれを確認するためにウィキペディアの「亀山郁夫」の項をのぞいてみたんですが、よくわかりませんでした。でも、誰か「最先端」のひとがこの項から、以前にはあった「誤訳」云々の記述――「二〇〇七年七月に完結した新訳『カラマーゾフの兄弟』はベストセラーになったが、その後、国際ドストエフスキー学会副会長・木下豊房[1]らより、余りに誤訳が多い等の批判が出され、週刊新潮〇八年五月二十二日号の記事になっている（http://www.ne.jp/asahi/dost/jds /dost125.htm）。」――を削除しているみたいですよ。亀山郁夫本人じゃないですよね？　別人だとしてもそのひとが「最先端」だということは間違いありませんが。

――はは あ、なるほど。

何だかいろんなことが一順したような気がしますね。とうとう私は「戦争」を引き合いに出し、ＸＴＣの歌詞までを引用しましたけれど、まったく、半年前に亀山批判を始めたとき、私は半年後のいまもこれを継続しているだなんて夢にも思っていませんでした。しかも、ここまで来て、私はこの批判がようやく半ばまで来たかどうかだと思っているんです。そうしてまた、私にはいまになってようやくこの「連絡船」がどういうものであるか、わかってきてもいるんですね。亀山郁夫批判は、この「連絡船」にとって、ついでのように現われた事件などではなかったんですね。亀山郁夫批判はこの「連絡船」そのものです。ここには、当初から「連絡船」で私がやろうとしていたことのすべての条件が揃っています。亀山郁夫批判はこの「連絡船」にとっての必然でした。「作品」と、「作品」に奉仕する作者と、「作品」に奉仕する読者と、その三者を橋渡しすること――それがこの「連絡船」の仕事です。それを妨げ、「作品」と、作者と、読者とを冒瀆しているのが亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』なんですね。だから、私は亀山郁夫と、彼の仕事と、彼の仕事に感心したり、推奨したりするひとたちを批判しつづけざるをえないんです。

（二〇〇九年三月六日）

5

朝日新聞の夕刊一面で連載されている「人脈記」における「感染症ウォーズ」の三、「知識ワクチン」を接種せよ」（中村通子）をたまたま読みました。

病原性大腸菌Ｏ157（オー）の嵐が日本を襲ったのは、96年だった。5月末に岡山県の海辺の町で子どもら約４７０人が発病、2人が翌月、死亡した。

……（中略）……

この年の5月の連休明け、大阪大学微生物研究所の教授、本田武（63）の手元に、病死した兵庫県の女の子の腸の一部があった。病院からの死因解明の依頼だった。大腸は赤黒く変色し、傷んでいる。「Ｏ１５７ではないのか」

Ｏ１５７は、83年に米国で確認された新しい菌だった。腸に病気を起こす細菌が専門の本田は、その直後に米の研究者から菌株をもらい、研究していた。

治療に大量の抗菌薬を使ったため、女の子の腸から菌は見つからなかった。だが、菌に対する抗体の数値が異常に高く、Ｏ１５７の感染によって死亡した可能性が強かった。妹も同じ症状で入院しているという。すぐ主治医に連絡した。「Ｏ１５７が疑わしい。保健所に届けた方がいいと思います」

返事はそっけなかった。「菌が出なかったのなら、届け出義務はないでしょう」。そんなものなのか。本田はそれ以上言葉を重ねなかった。

（朝日新聞　二〇〇九年三月九日　夕刊）

これで思い出すのはカミュの『ペスト』――この文庫をもアルジェリアへの旅に携えていたことを前回に書き忘れていました――でのこの場面です。

リシャールは、しかし、事態は結局つぎのように要約されると考えて、こう指摘した――この病いを終息させるためには、もしそれが自然に終息しないとしたら、はっきり法律によって規定された重大な予防措置を適用しなければならぬ。そうするためには、それがペストであることを公に確認する必要がある。ところが、この点に関して確実性は必ずしも十分でないし、したがって慎重考慮を要する、と。

「問題は」と、リウーは主張した。「問題は、法律によって規定される措置が重要かどうかということじゃない。それが、市民の大半が死滅させ

られることを防ぐために必要かどうかということです。あとのことは行政上の問題ですし、しかも、現在の制度では、こういう問題を処理するために、ちゃんと知事というものが置かれているんです」

「それはそうです」と、知事はいった。「しかし、私としては、それがペストという流行病であることを、皆さんが公に認めてくださることが必要です」

「われわれがそれを認めなかったとしても」と、リウーはいった。「それは依然として市民の半数を死滅させる危険をもっています」

リシャールが、幾分神経をいらだたせた調子で、口をはさんだ。

「ありていにいえば、リウー君はペストだと信じているんだ。さっきの症候群の説明ぶりがそれを証明してるよ」

リウーはそれに答えて、自分は症候群などと説明したのではない、自分の見たままを説明したのだ、といった。そして自分の見たものは、リンパ腺腫であり、斑点であり、錯乱性の高熱であり、それが四十八時間以内に死をもたらすのだ。そもそもリシャール氏は、この流行病が厳重な予防措置を用いずして終息するだろうと断言する責任をとってもいいというのか？

リシャールはためらい、じっとリウーの顔を見た――「ほんとうのところ、君の考えをいってくれたまえ。君はこれがペストだと、はっきり確信をもってるんですか」

「そいつは問題の設定が間違ってますよ。これは語彙の問題じゃないです。時間の問題です」

「君の考えは」と知事がいった。「つまり、たといこれがペストでなくても、ペストの際に指定される予防措置をやはり適用すべきだ、というわけですね」

「どうしても私の考えを、とおっしゃるんでしたら、いかにもそれが私の考えです」

医者たちは相談し合い、リシャールが最後にこういった――

「つまりわれわれは、この病いがあたかもペストであるかのごとくふるまうという責任を負わねばならぬわけです」

この言いまわしは熱烈な賛意をもって迎えられた。

「これは君の意見でもあるわけですね、リウー君」と、リシャールは尋ねた。

「言いまわしは、私にはどうでもいいんです」と、リウーはいった。「ただ、これだけはいっておきたいですね――われわれはあたかも市民の半数が死滅させられる危険がないかのごとくふるまうべきではない、と。なぜなら、その場合には市民は実際そうなってしまうでしょうから」

（カミュ『ペスト』宮崎嶺雄訳　新潮文庫）

私はこんなふうにも考えます。ロシア文学の研究者たちや多くの出版社、新聞社、テレヴィ局などが、もしどうしても亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』の非を問題にしなければならなくなる日が来るとして、そのときも彼らはまずこんなふうないい回しを用いるのだろうな、と。「つまりわれわれは、亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』があたかもでたらめであるかのごとくふるまうという責任を負わねばならぬわけです」。

先の「『知識ワクチン』を接種せよ」の後段には、こうも書かれています。

研究者が社会の人々に分かってもらう努力を怠ると、悲劇の種になることを、兵庫の子の死に学んだ。「あの時、もっと強く危険性を主張していれば、広く警告できただろう」。10年以上が過ぎた今も、悔やむ。以来、説明する言葉は一切惜しまない。「分かってもらう『知識ワクチン』が、なにより効くのですから」

（朝日新聞　二〇〇九年三月九日　夕刊）

また、これも最近に読んだ記事です。ＰＨＰ研究所による「文蔵」――私は

以前、この雑誌に短い原稿を書いたことがあります。しかもドストエフスキーの！『罪と罰』の！　ことで――の最新三月号。「特集『人間失格』『蟹工船』から『カラマーゾフの兄弟』まで　リバイバル・ブームを読む！」なんですが、そこに「仕掛け人が明かす「ヒットの理由」」というのがあります。

昨今の「リバイバル・ブーム」の中で、象徴的ともいえる存在が、『カラマーゾフの兄弟』『蟹工船』『人間失格』の三作品であろう。では、これらの本はなぜヒットしたのか。その裏側にはどんな仕掛けがあったのか。そこから見えてくる、リバイバルを成功させる条件とは何かをさらに探るべく、各社の担当編集者に話を伺った。

（取材・文＝杉山直隆・須貝俊　「文蔵」二〇〇九年三月号　ＰＨＰ研究所）

ここで採りあげられた『カラマーゾフの兄弟』は、もちろん亀山郁夫訳の光文社古典新訳文庫。インタヴューに答えるのも、もちろん――、

「〝再読〟したいという団塊の世代から火が付き、流行に敏感な十～二十代の若者が追随。最近では、本の購入に比較的慎重な三十代女性の読者が増えてきました。自信のある本でしたが、ここまで早く百万部に到達するとは予想外でした」と話すのは同社の川端博氏。

ヒットの導火線は、複数のテレビ番組で取り上げられたことだ。古典新訳文庫シリーズを認知してもらうために、同社ではマスコミ各社へのＰＲを大々的におこなっていた。

「最初にフジテレビの夕方のニュースで取り上げていただき、そこから他の番組へも連鎖したようです。それだけ関心をもたれたのは、軽薄なモノが多い風潮を苦々しく思っているテレビ番組制作者の方が多いという表れかもしれません」

ただ、テレビで取り上げられるだけで、百万部も売れるとは思えない。なぜこの本は広く受け入れられたのだろうか。

まず、この「リバイバル・ブームを読む！」という企画が、以前に私が引用したこれと同じ視点からのものですよね。

（同）

若い世代が古典に親しめるような工夫が必要だ。

今年、夏目漱石や森鴎外の小説を収めた文庫本が、現代の人気漫画家らによるカバーに変わったことで若者の目を引いた。

海外の古典では、ドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」の新訳が計一〇〇万部を超えるベストセラーになった。

古典に現代の光を当てることで新たなファンを呼ぶのだろう。

（読売新聞　社説　二〇〇八年十一月二日）

この視点で特におぞましいのは、たとえ全五巻の累計であろうが、「一〇〇万部」を超えるベストセラーを無邪気に「よい」としていることです。一〇〇万人に受け入れられたからには、「よい」ものだ、というわけです。「一〇〇万部」と口にしたくてたまらないんですよ、こんなことをいうひとは。そんなことじゃ駄目です。もっと警戒すべきなんですよ。恐れるべきなんです。いいですか、私はもうこれまでに何度いったかわかりませんが、「一〇〇万部」単位のベストセラーなんかが成立するような世のなかじゃ駄目なんです。もう一度かつての私の文章を引用します。

そもそも私がＰＯＰを書きはじめたのは、ベストセラーを中心とした本の読まれかたへの反感もあってのことだった（にもかかわらず、自分の書いたＰＯＰの関わった本がベストセラー入りしたというのは皮肉なものだが）。いったい、広告も誇らしげな「一〇〇万部突破！」を歓迎できるか？　一〇〇万人がいっせいに同じ本を読むなどというのは異常な・おかしな・ばかげたことではないだろうか。他にもっと読まれていいは

ずの、埋もれている本がたくさんある。また、誰にも自分に――もしかすると自分ひとりだけに――ぴったりくる本があるはずなのだ。「他の誰にもわかってもらえない、それどころか嫌な顔をされたりするような、そういうあなただけの疑問や考えというのは、もちろんあっていい」と私は『〈子ども〉のための哲学』（永井均）のPOPに書いているのだが、「自分だけの本」（それは自分だけの感動であって、周囲とお揃いの都合のいい涙なんかではない）というのがあっていいし、そういう本を持たないひとはいつまでも自分で本を選ぶことができないだろう。

POPは、書店店頭で、いまの主流ではないべつの読書モデルを提出するにすぎない。発行から時間のたってしまった本、読者に背伸びを強いる本（背伸びなしの読書をつづけていても「自分だけの本」に出会うことはない）の負のイメージを軽減し、読書の選択肢を増やす、少なくとも実物を手に取って立ち読みしてもらうために書く。そのページを指定もする。真剣ささえ伝われば、POPの書き手によるコピーの秀逸さなど本当はどうでもいい。いちばん重要なのは、本の重さや厚みごと作品の文章にじかに触れてもらうことだ（そして、多くの書評で私が不思議に思うのは、本文からの引用がほとんどないことだ）。

（「文藝」二〇〇四年秋号　河出書房新社）

私が右の文章を河出書房新社の雑誌に書いたのは、同社刊行の『蹴りたい背中』（綿矢りさ）――いまだに私はこれを読んでいません――が一〇〇万部を超えた後だったと思います。

繰り返します。もうこの「一〇〇万部」ということばの大好きなひとが駄目なんです。「一〇〇万部」が自分の読書を正当化してくれると思っているんです。

しかも人間は、もはや議論の余地なく無条件に、すべての人間がいっせいにひれ伏すことに同意するような、そんな相手にひれ伏すことを求めている。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

しかし、たしかに実際、亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』全五巻が累計一〇〇万部を超えたわけで、そういう現象を単に採りあげただけだ、と先の「視点」の持ち主らはいうかもしれません。それでも、彼らはこの「一〇〇万部」について、なぜこれほどまでに馬鹿な現象が起きているのか、と思わないでいられるんです。しかも、その『カラマーゾフの兄弟』が実は『カラマーゾフの兄弟』を僭称したものにすぎないことをも知りません。「一〇〇万部」万歳！　それだけしか彼らの意識にはありません。

それにしても、川端博の「それだけ関心をもたれたのは、軽薄なモノが多い風潮を苦々しく思っているテレビ番組制作者の方が多いという表れかもしれません」は、よくもまあ、こういうことがいえたな、という発言です。「テレビ番組製作者の方」は、結局ただの「軽薄な」視点からいつもと同じことをしただけですよ。なぜなら、亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』こそ当の「軽薄なモノ」に他なりませんから。まったく、いまだに自分の担当した『カラマーゾフの兄弟』がでたらめであるという認識もなく、こういう発言をするからには、川端博はこの仕事をするまで『カラマーゾフの兄弟』を読んだことがなく、亀山郁夫の訳稿で初めて読んだ・読まされた・読まざるをえなかったのに違いないんですね。もし彼が既訳の――たとえば原卓也訳――をきちんと読んだことがあれば、必ず亀山郁夫のでたらめがわかったはずです。亀山郁夫が「訳者あとがき」で書いたように、自分と川端博との「原稿の受け渡しのたびに交わしあう『カラマーゾフの兄弟』論は、それだけでも優に新書二冊分ぐらいの中身の濃いものだったはずである」も、それを裏付けますね。川端博は、訳稿を渡されるたび、「最先端」を吹き込まれ、ありがたがりながら、丸め込まれてしまったんですよ。そうでなかったら、彼も「最先端」です。まあ、こんなひとのこともどうでもいい。

さて、「一〇〇万部」を無邪気に「よい」とする、その「視点」で取りあげら

れる『カラマーゾフの兄弟』というのが私の気に入りません。「あの『カラマーゾフの兄弟』が一〇〇万部！」ということですよね。「いわゆる世界文学の最高峰にして難解・深遠なあの『カラマーゾフの兄弟』が！」ですよね。「東大教授が学生に読ませたい作品第一位の！『カラマーゾフの兄弟』」ですよね。いい加減にしろ！　と思います。いいですか、そんなレッテルなんかどうだっていいんですよ。そんなレッテルがあるからこそ『カラマーゾフの兄弟』が読まれるということはわかります。しかし、そんなものはどうでもいいんです。

実際はこうです。あなたが『カラマーゾフの兄弟』を――亀山郁夫訳以外で――読むとき、その『カラマーゾフの兄弟』は「あの『カラマーゾフの兄弟』」、「いわゆる世界文学の最高峰にして難解・深遠なあの『カラマーゾフの兄弟』」なんかじゃありません。ただの『カラマーゾフの兄弟』なんです。ただの一作品、ただのひとつの小説にすぎません。それは、あなたが自分ひとりの力で読み解くただの小説なんです。他人（世間）がどんなレッテルを貼っていようが、どうでもいいんです。ここにあるのは、もうただの小説『カラマーゾフの兄弟』対あなたというその関係だけです。そうして、あなたが自力で『カラマーゾフの兄弟』をどう読むか、しかないんです。

しかし、「文蔵」にせよ、読売新聞にせよ、『カラマーゾフの兄弟』を「いわゆる世界文学の最高峰にして難解・深遠なあの『カラマーゾフの兄弟』」というレッテルを貼りつけることで悪用しています。レッテルでものを語ってはいけません。

同様に、レッテルで大方のひとを押さえつけようとするのが、次の文章ですね。

> ドストエフスキー研究の権威、亀山郁夫氏による新訳も、読者層を広げた要因になった、と川端氏はいう。読者の感想は「読みやすくて驚いた」という声がもっとも多いそうだ。
>
> （「文蔵」二〇〇九年三月号　ＰＨＰ研究所）

「権威」なんかどうだっていいんですよ。繰り返しますが、あなたの前にあるのはただのひとつの小説にすぎません。どんな「権威」が訳していようが、結局その作品を読み解くのはあなたなんです。あなたしかいません。あなたの読んだその作品があなたにとってどうだったか――それだけが問題なんです。

しかし、あなたの読んだものが偽物の『カラマーゾフの兄弟』であったら、どうでしょう。亀山郁夫訳は、その偽物です。

いったい、亀山郁夫を「ドストエフスキー研究の権威」なんていいだしたのはどこの誰なんでしょうか？　こんな「最先端」が「ドストエフスキー研究の権威」のわけもありません。

川端博はさらにこう語ります。

> 「亀山先生にお願いしたのが、日本語が本来持っているリズムを重視することと、登場人物の口調を特徴的にし、個性を際だたせること。その難題を見事にクリアしていただきました。しかし、新しく訳し直す行為は、訳者の先生はもちろん、編集者にとっても大変な作業だと改めてわかりました。制作期間は二年以上。他の本の十倍以上は苦労しました」
>
> （同）

「他の本の十倍以上は苦労しました」って、そのあげくがこのでたらめ『カラマーゾフの兄弟』であるからには、まったく「他の本」――『カラマーゾフの兄弟』の十分の一以下の苦労――をどんなにいい加減につくっているんですか？

それで思い出すのが、亀山郁夫のこの発言ですね。もちろん、ここでの「木下さん」は私・木下和郎ではなく、「ドストエーフスキイの会」会長の木下豊房です。

「木下さん主宰の〝会〟のサイトで私の訳本が批判されているのは存じています。初めは怒りにうち震え、ブログに反論を載せましたが、同じ土俵に上がると思ってやめました。私の人格を貶めるような誹謗中傷も散見されたからです」

「ケアレスミスもありましたが、10カ所程度。その他は〝たぶん〟は不適切で〝きっと〟だとか、解釈の違いです。40カ所ほど訂正したのは、自主的な改良作業で、その一部は〝会〟の方々がエキセントリックなので、半ば妥協で訂正したもので、元に戻すかもしれません。勢いと感性で書かれた『カラマーゾフ』は時代背景や宗教、他作品などを総合的に考察し、登場人物に深く入り込まなければ読み取れないニュアンスが多く、自分なりの解釈が必要で、しかし原文と離れてもいけない。そこで最大限に努力した結果があの訳です。こういう大作は何年もかけて訳を直して作っていくものだと思います」

（「週刊新潮」二〇〇八年五月二十二日号）

「こういう大作は何年もかけて訳を直して作っていくものだと思います」というのは何ですか？　たしかにガルシア＝マルケスの『百年の孤独』（鼓直訳）が同一の訳者によって改訳されましたし、クンデラの『存在の耐えられない軽さ』（千野栄一訳）も同様です。そういう例はたくさんあるでしょう。しかし、それらはいったん提出した自分の訳に――それは、むろん誤訳の修正もあるでしょうが――磨きをかけたんですよ。亀山郁夫がそれらと自分の仕事とを同レヴェルに考えていいわけがない。彼は自分の訳に磨きをかけたのではなくて、欠陥を一部修正した――表面的に――にすぎません。だいたいが、たちまち四十箇所も訂正せざるをえないようなものを最初から出版してよかったんですか？　そもそもがいいかげんな仕事だったということじゃないんですか？

何が「〝たぶん〟は不適切で〝きっと〟だとか、解釈の違いです」ですか？　実際を知らない一般読者に自分の訂正が些細なレヴェルのものでしかないと思わせようとする言い訳じゃないですか。

それに、何ですか、「半ば妥協で訂正したもので、元に戻すかもしれません」というのは？　『カラマーゾフの兄弟』を訳すのに、「半ば妥協で」なんて仕事をしていいとでも思っているんですか？

野崎は人から指摘されるたびに一部ずつ手直ししていくつもりなのか（しかも改版とせず、初版第三刷として訂正したことを隠蔽している）。読者は新刷が出るたびにそれを買い続けなければならないのか。

（下川茂「『赤と黒』新訳について」「会報」第十八号）

この「野崎」を「亀山」に換えてみてほしいですね。

さらに、「勢いと感性で書かれた『カラマーゾフ』は時代背景や宗教、他作品などを総合的に考察し、登場人物に深く入り込まなければ読み取れないニュアンスが多く、自分なりの解釈が必要で」って、いったい誰が「登場人物に深く入り込」んだんですか？　これこそ私は怒りとともに強調したいですが、いい加減にしろ！　ってことです。アリョーシャもイワンもイリューシャもゾシマもキリストも泣いていますってば！「勢いと感性で書かれた」なんていわれたら、ドストエフスキーも泣きながら身もだえしていますって！

さて、先に引用した「文藝」への私の原稿ですが、あれが前段（「ＰＯＰと私」というほどの意味の文章）で、その後に、私の推す三つの作品を私のＰＯＰ（画像）とともに紹介する――全四ページ――という形になっていまして、つづく二ページで、私は『フランスの遺言書』（アンドレイ・マキーヌ　星埜守之訳　水声社）と『フォー・レターズ・オブ・ラブ』（ニール・ウィリアムズ　石川園枝訳　アーティストハウス）について書きました。

『フランスの遺言書』

二〇〇〇年からこちら、これ以上の翻訳作品に出会っていない。これまでに私は四回読み、四回めも感嘆して読み終えた。発売以来五年間一度も切らさずに店に平積みし、何度もＰＯＰを書きかえている。いつもうまく書けない。

ロシア革命の混乱期からずっと、二〇世紀のほとんどを、この広大な国に閉じこめられてしまったままのフランス女。彼女が「ぼく」の「祖母」シャルロット。この魅力的な女性を「お婆さん」として思い浮かべることはできない。「ぼく」の語る彼女はいつまでも、たくさんの危機をくぐりぬけてきた、若いときのままのすがすがしさを維持していて、めくってゆくページに彼女が現れるたびに、なにか美しい音楽が聴こえてくるような感じがする。ソヴィエト生まれの「ぼく」に「接ぎ木」されるフランス。彼女のフランス語で考えると自然に思われる同じことがらが、ソヴィエトのロシア語で考えようとすると、異様に響いてくる――そういう発見を「ぼく」は重ねていく。「彼女のフランス」への憧れが言葉・想像力・自由・文学などの問題に結んでいく。といっても、芯の強い、ていねいな美しい文章で。ＰＯＰに指定した立ち読みページは、数年ぶりの夫婦再会の場面。

「けれども彼はずっと遠くのほうにあらわれて、そしてそれが少しずつ夫の顔になっていった。妻はそのあいだ、ひとりの男のシルエットのせいで通りが見知らぬ道に変わってしまうのに目を馴らしてゆきながら、男がぼんやりとした微笑みを浮かべているのにもう気づいていた。ふたりは駆け寄りもしなかったし、言葉も、抱擁も、交わしはしなかった。お互いに向かって永遠に歩きつづけてきたように思えたのだ」。

この読書体験に定価二七三〇円（税込）はけして高くない。

（「文藝」二〇〇四年秋号　河出書房新社）

『フォー・レターズ・オブ・ラブ』

二〇〇一年発行。廉価の「新装版」が出たばかり。旧版の売れ行きの悪さにもかかわらず、出版社が「新装版」に踏み切った根拠のひとつに私の勤める店での数字がある。二年半で約一二〇冊の売上。ずっとＰＯＰをつけて平積みにしつづけた。小さな数字だが、同じ結果を百軒の書店が出せば、何度かの増刷ができたはずだった……。「新装版」の帯には私のＰＯＰからの引用もある。

「ＦＯＵＲ　ＬＥＴＴＥＲＳ　ＯＦ　ＬＯＶＥ」四通の愛の手紙。ＬＯＶＥの四文字。この作品を建造物にたとえると、建材が通常のものとは異なるために工法もまた特殊なものになった、という印象を受けた。つまりは文体が成功しているということだ。そして、この成功は当の作者自身にも今後容易に超えることのできないほどのものではないかと思った。しかもデビュー作。

立ち読み部分――冒頭の三ページ――は「ぼくが十二歳のときに、父さんは初めて神様の声を聞いた」という書き出しと、その父親が寒中水泳をする姿など……。「からの衣装ケースのなかでからみ合った針金のハンガーみたいなあばら骨をした父さんは、凍えるような寒さに爪先を丸め、両腕を体から離して歩いているので、両手に見えない鞄を持っているみたいに見えた」。

この作品をあからさまな愛の讃歌として読み終えるひとの多いことは予想できる。しかし、作者は「神様」とか「愛」などというものをまともに語りだせば笑われてしまうことを十分に承知した上で、周到にこの物語世界を構築している。これはとても大事なことだ。若い主人公たちの「愛」の行方よりも、彼らの生きる「世界」を描ききることの方に作品の成否がかかっている。そしてこの作品の全体はその「世界」へ向けてのラブレターになっていると思う。

（同）

以上につづいて、私はこの作品について書きました。松沢呉一『魔羅の肖像』（新潮ＯＨ！文庫）です。

『魔羅の肖像』

この本も二〇〇〇年の発売時からずっとPOPをつけ、平積みにしてきた。先に触れた「他の誰にもわかってもらえない、それどころか嫌な顔をされたりするような、そういうあなただけの疑問や考えというのは、もちろんあっていい」というPOPを書きながら、私の思い浮かべていた何人かの一人がこの『魔羅の肖像』の松沢さんだ。この本は彼のたたかいの記録である。

「『いいチンポ・悪いチンポ』があるのかないのかを探し求めて幾千里」の松沢さんは他の誰かに気をつかって口をつぐんだりしない。あくまで真実を追求していく。たとえば、挿入された芝居調の部分――ここはそれまで提起された問題点の整理・まとめの役を見事にはたしている――を読んでほしい。「医者：ええい、忌まわしい、そんな愛のない女と付き合うお前が悪い。愛さえあれば、女はそんなものを気にしないのだ。／患者：愛はありました。〝愛しているけど、チンポが小さい〟って言われたんです。／（看護婦鈴木、遠くを見る目をして呟く）／鈴木：愛で乗り越えられるものと、乗り越えられないものがあるのよ。それに、いいチンポだと、愛がなくても楽しめるのよねえ」。

問題を隠すな。目をそらすな。他のものと混同するな。すり替えるな。これが松沢さんの一貫した態度で、「チンポ」の真実を追求することが、それを隠蔽する大きなものとの数知れぬたたかいになる。こちらは爆笑しつつ読みながらも、彼の嗅覚や思考、また方法、あるいは怒りや情熱に感動する。その一方で、発表の場を転々とし、読者のあまりの少なさに、しばしば消沈して嘆く松沢さんの姿もある。小説ではないが、悪漢小説（ピカレスク・ロマン）「魔羅をめぐる松沢呉一の冒険」というふうにも読めるほど、著者自身の声にあふれている。痛快な一冊。

（松沢呉一『魔羅の肖像』　新潮ＯＨ！文庫）

『魔羅の肖像』には、著者松沢呉一がある雑誌の女性編集者へ送った手紙が引用されているんですね。

さて、あなたが書いた「彼とのセックス、結婚したらどうなるの？」という記事ですが、悩み相談の回答はいいとしましょう。でも、「好きなら相性なんてない」なんつうのはウソです。これについては3名の先生方が正しい（この悩み相談は、3人の医者や心理学者が回答していて、彼らは「セックスには相性がある」としているにもかかわらず、編集部は「好きなら相性なんてない」との結論を書いている。なんのための回答者か）。いくら好きだって、よくないものはよくない。そして、よくないことは断固解消すべきです。長い人生ですから。

しかし、ここはたいした問題ではありません。問題はこの次です。こういう企画（「男はこんな女が嫌い」）って大嫌いなんですよ。男性誌でも「女はこんな男を求めている」といったような特集がありますが、こういう発想って人間をつまらなくする。ここに出ている男の意見そのものをすべて否定したいし、こんなものを読んで、納得するような女も否定したい。ここに出ている男の意見は、編集部の「つくりもの」なのかもしれないが、こんなヤツらまとめて全否定してやる。

……（中略）……

とまあ、こういうことです。そして、この特集全体が、男が望むかわいい女という像を自分にあてはめ、そのために自己を喪失しようが、自分のやりたいことを捨てようが、それこそが女の幸せだと主張している。ああ、気持ち悪い。

……（中略）……

20代後半から昨年まで、ほとんどセックスレスで過ごした僕があえてこの時期に無謀とも言えるセックス讃歌を何故打ち出したかといえば、恐らくこの国では、反動的な動きが今後強まるであろうとの予感がしたためです。日本にだって、常に性を規制し、性を悪であるとしたい人々

はたくさんいるんですよ。エイズの問題で彼らが力を得ることは間違いなく、この約20年、30年の間に築いてきたものが一挙に後退するかもしれない。だからその前に、エイズへの対策をしっかり各々がやり、その上であくまでセックスを楽しみ続けようではないかということです。そして、これは個の自由を断固確保し続けるというところにまで至ります。

（同）

思い出しましたが、この「文藝」への原稿依頼があったときに、私は編集者に『魔羅の肖像』について書きたいが、それでもいいか、と訊いたんですね。いま考えると、わざわざそんなことを訊いた私自身が笑えますが（同様に、私自身の文章の当時のレヴェルにも笑えます）。

松沢呉一は世間の「レッテル」好きを徹底的に批判しているんです。彼は「ひれ伏すな」のひとです。彼が一貫して書きつづけているのは「個の自由」の問題です。私は繰り返しますが、「他の誰にもわかってもらえない、それどころか嫌な顔をされたりするような、そういうあなただけの疑問や考えというのは、もちろんあっていい」んです。「あっていい」どころか、「あるべき」、いや、「なければならない」んですよ。

私は『魔羅の肖像』を読んで感動し、著者松沢呉一がネット上で「黒子の部屋」を書きつづけているのを読んでいました。その後、彼は有料のメルマガ「マッツ・ザ・ワールド」――購読希望の方はここ（http://www.pot.co.jp/matsukuro/）をチェックしてください――を発行することになるんですが、私もその購読者のひとりです。毎年購読の更新手続きがあって、振込みしたことを彼にメールで通知するんですが、その際、私はもう半年以上つづけているこの亀山郁夫批判のことを書き、「松沢さんには興味がないかもしれませんが」と断わりつつ、「連絡船」とこの一連の文章をまとめたＰＤＦファイルのアドレスを伝えました。

松沢さんが「マッツ・ザ・ワールド」の「まつわる便り」（読者からのメールを紹介し、松沢さんのコメントを添えたもの）において、私のメールについてどう書いたか？　これは、『カラマーゾフの兄弟』を読んだことのない、しかし、出版業界で仕事をしつつ、この業界の先行きについて非常に悲観的な見かたをしているひとの「一般論」になりますが、

おっしゃる通り、『カラマーゾフの兄弟』には興味がないので、ほんの一部しか読んでおらず、私には知識もないので、木下さんが書いていることが正しいのかどうか判断もできないですが、木下さんの苛立ちは共有できます。その苛立ちがあるから、私も文章を書いているわけで。

ただ、歳をとったせいもあって、所詮この世の中はそんなもん、正しさなんてことは求めていないのだろうという諦めもあって、世の中はどうあれ、自分がわかっていればいいやと思っていたりもします。

ドキュメンタリーは好きなんですけど、テレビでやっているような雑学的なクイズ番組は嫌いです。ここでは一言で言える解答が正しいとされます。でも、実際にはそんなに簡単ではないことが多くて、一言で言おうとするから、間違った話が流布してしまいます。

例えば、今度の単行本に入る「トルコ風呂の元祖は東京温泉ではない」という話も、「では、何か」というと、「わからない」と言うしかない。しかし、これでは解答にならない。

テレビのクイズ番組では、「それを知っていることが偉い」という価値観になっていて、「それを疑うこと」「どうしてそうなのかと考えること」に価値はない。暗記能力が求められているだけ。「トルコ風呂の元祖は？」なんて問題は出ないですけど、他もすべてそういうものでしょう。

「本当は違うけど、お約束としての答えを設定しておいて、それを知っていることが偉い」ということでしかないことを踏まえて楽しめばよく、いちいちそれに噛み付くのは大人気ないのかなと思いつつ、言えばわかる人に向けて書いていけばいいやというところです。

出版社のほとんども、正しいものを売るのでなく、正しくなくとも売れるものを出す。とりわけ昨今はそうでしょう。書評を書く人も同様。何日もかけて、その内容を検証する人はまずいない。そんなことをしていたら商売になりませんので。

たまたまこの間、ワイレアをクビになった福田君とも話していたのですが、この世の中で、「いい書評」と言われるのは、「いい宣伝文」に等しく、著者や出版社が嫌がるような指摘をするような人は歓迎されない。内容と後書きを要領よくまとめたようなものがいい書評とされているとしか思えないです。

所詮テレビはそういうもの、出版はそういうもの、大衆が求めているのはそういうものであることに飽き足らない人たちがわかっていればいい。

と思っていたのですが、ネットの登場によって、少しはこれを変えられるかもしれないし、木下さんがやっていることを面白がって、本にする出版社が出てくるといいんですけどね。こういうものはもうネットからしか出てこないでしょう。

（松沢呉一「マッツ・ザ・ワールド」）

「と思っていたのですが、ネットの登場によって、少しはこれを変えられるかもしれない」に私は希望を見出します。「こういうものはもうネットからしか出てこないでしょう」にも共感します。

まったく、インターネットというものがあってよかった、と私は痛感しています。ここでは誰もが自由に発言できるんです。亀山郁夫について「王様は裸だ」といいうるんです。

少し前にクリント・イーストウッドの『チェンジリング』という映画を観たんですね。一九二八年に実際にアメリカであった話です。ある母子家庭から息子がいなくなり、五か月後に戻って来るのですが、それが実は別人なんですね。偽の息子は本人だといいはります。母親は彼を別人だと訴えるんですが、ロサンジェルス警察は彼女を逆に精神病院に収監してしまいます。当時汚職にまみれていたロス警察の名誉挽回の事件だったために、警察は事実を捻じ曲げます。しかし、母親を支援するひとたちがいました。ある牧師は自分のラジオ番組（あるいは、自分が放送機材を揃えていた――自分の局――のかもしれません）を持っていました。彼はこの事件での警察のでたらめを糾弾しつづけます。やがて市民のデモなども起き、母親は解放されます。そうして市警と対決することになるんですね。

私はこれを観ながら、まるっきり『カラマーゾフの兄弟』じゃないか、と思ったのでした。ある日、偽物の『カラマーゾフ』が本物と自称しながら市場に出回り、それを偽物だと指摘したひとたちが非難される（あるいは相手にされない）という図ですね。しかし、一九二〇年代に先の牧師が持っていたラジオ番組以上の道具――インターネット――がいまの私たちにはあります。

映画は、しかし、あまりにも悲惨な内容ですが、私は勇気づけられました。

さて、ここしばらく『カラマーゾフの兄弟』そのものから離れた記述ばかりがつづいていますが、次回もこの延長です。そこでは、もう一度「些細なことながら、このようなニュアンスの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く」の表題をはずれます。そうして、「これから初めて『カラマーゾフの兄弟』を読むひとのために――亀山郁夫訳による新訳がいかにひどいか」の反復、あるいは、ここまでの批判のまとめのような文章を、私は提出することになると思います。形式としては、あるひとへの公開書簡という形をとるはずです。

（二〇〇九年三月二十二日）

村上春樹さま

村上春樹さま

はじめまして。木下和郎と申します。『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』と『スプートニクの恋人』とのどちらにもに名まえの挙がる町の書店に勤めています。いや、お会いしたことがないとはいえ、「はじめまして」ではないかもしれません。というのも、私は『海辺のカフカ』を（刊行前に）バウンド・プルーフで読んで、新潮社に感想――これは必ずあなたにお読みいただけるということでした――を書き送った書店員のひとりだからです。私はその文章で、ポール・マッカートニーの《Live and let die》を引きながら、あなたの創作の変化に触れました。

When you were young
And your heart was an open book
You used to say"Live and let live"
(You know you did
You know you did
You know you did)
But if this ever-changing world in which we're livin'
makes you give in and cry
Say "Live and let die"

(Paul McCartney《Live and let die》)

――この通りのことが、あなたに起こっているのではないか？　と、そう書きました。

また、カート・ヴォネガットをも引きながら、『カラマーゾフの兄弟』におけるアリョーシャの「あなたじゃない」――ここがこの作品で私が最も繰り返して読む箇所であり、この作品の核にもなっていると考えている箇所です――が『海辺のカフカ』に結んでいるに違いないと書きました。こんなふうに――

たしかに存在する邪悪なもの――それに自分は与しない。自分が無意識にも与しないでいられるように自分を見張る。こういうことにすると、自意識のひどい悪循環のなかに取り込まれてしまうものだと思いますが、ここで、たとえばドストエフスキーでいうと、アリョーシャという人間が出てきます。父親殺しの犯人は自分以外の誰でもないと考えて苦しむ兄イワンにむかって、そのことを指摘もし、しかも「あなたじゃない」と断言してやれるような存在です。「アリョーシャにはいろんなことがわかるんだ」。

もし自分を邪悪なものと区別できなくなってしまうようなら、「live and let die」ということはできなくなってしまいます。いったん邪悪なものの存在を認識した者はそれと自分とをはっきり区別できるような感性を持ち合わせなくてはならないでしょう。そうでないと、「die and let die」になってしまうからです。おそらく田村カフカくんは最後にはその感度の自覚を持ったのだろうと思います。もちろん、油断はできないとしても。

むろん、「アリョーシャにはいろんなことがわかるんだ」は、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』からの引用です。

さらに、私は『海辺のカフカ』での「シューベルトは訓練によって理解できる音楽なんだ」に触れて、こうも書きました。

訓練によってはじめて理解できる類の音楽や文学というものがあると

私も思います。それに触れることが、こちらのなにかを鍛える(傷つける、ということにもなると思いますが)結果になるような、そういう音楽や文学。書店員としては、そういう文学がどんどん店頭から姿を消しつつある現状を嘆かわしく思っています。若い読者がそういう文学に出会う機会はいまやどんどん失われていっていると思っています。まだ店頭で余命を保っているいくつかの作品、たとえばドストエフスキーの、ヴォネガットの、フィッツジェラルドやサリンジャー、カフカやトーマス・マン、などなどの――そういう作品群へと、現に自ら大きい読者の支持を得ていて、彼らを橋渡ししてやることのできる唯一の日本人作家が村上さんだろうと思っています。ですから、村上さんに引っかけてそういう作家たちの本を売ろうとするわけです。この意味では、ご本人の知らないところで、村上さんの責任は大きいんです。『海辺のカフカ』は『カラマーゾフ』やヴォネガットの文庫と一緒に並べるつもりでいます。

私は、新潮社の「アーヴィング・コレクション」刊行時には、そこにヴォネガットの作品とあなたの作品とを一緒に並べて、三者がどういうつながりを持っているかをPOPに書きましたし、あなたの『スメルジャコフVS織田信長家臣団』が出たときには「スメルジャコフって何？　と思ったひとはこちらをどうぞ」というPOPで『カラマーゾフの兄弟』(新潮文庫)を平積みして併売しもしました。『海辺のカフカ』の刊行(文庫化も含めて)に際しては、「『海辺のカフカ』を読む前に、読んだら」というPOPで『カラマーゾフの兄弟』を推しました。また、新潮文庫の『カラマーゾフの兄弟』三巻へは、私の手書きの帯が一時期採用されもしましたが、そのなかで、私は『海辺のカフカ』について触れ、あなたの作品の読者が何とか『カラマーゾフの兄弟』を読んでくれるように導きもしました。私は『海辺のカフカ』を「『カラマーゾフの兄弟』を読んだひとの書いた小説」として紹介しました。

村上春樹さま、私はあなたが『カラマーゾフの兄弟』に特別の思いのあることを承知しています。その点に関しては、あなたも私も同じ気持ちであると考えています。

ところが、いま私は非常に困惑しています。

こんなふうに、私の困惑が始まったとお考えください。

「村上春樹が『カラマーゾフの兄弟』の新訳を褒めてる。読んだ？」

「読んでない。でも、亀山訳を？　まさか？　ありえないよ。村上春樹がそんなことをいうはずがない」

「読みやすい、といっています」

というわけで、もうあなたには私のいいたいことがおわかりいただけたと思いますが、私が困惑したあなたの発言を引用します。

翻訳で一番難しいのは英語のリズムをリアレンジして日本語のリズムに変えないといけないところ。リズムがないと人は読まないんです。英語のリズムのままでは日本語のリズムにならないからそれなりに取り替えなければならない。言葉や句読点の配列から文を繋げたり一つの文章を二つに分けたりというのは、すべてリズムを出すためにやっているんです。一番ダメなのは読んでてたびたび前に戻って確認しなきゃならない訳ですね。文章の命はリズムだから話の筋をトントンと進めて行かないと。ちなみに今は『カラマーゾフの兄弟』の新訳を読んでいるけれど、これ本当に読みやすいですね。

(「英知は復刊にあり」週刊文春　二〇〇九年一月一・八日合併号)

やれやれ――です。

しばらく前に、豊崎由美氏が『勝てる読書』という著作のなかで――

> で、なかでもとりわけおすすめしたいのが、ドストエフスキーの亀山郁夫による『カラマーゾフの兄弟』。
>
> ……（中略）……
>
> ただ、惜しいことにこれまでの原卓也訳は堅くて、重厚すぎた。中高生読者を威嚇するかのような強面の訳業だったのです。ところが、今回の亀山訳を読んで驚嘆。易しいんですよ、面白いんですよ。カラマーゾフ家のダメ男どもの言動がおかしくて笑えるんですよ。ドストエフスキーで笑える日がこようとは……。感無量とはこのことです。難しい言葉をできるだけ排した訳文が、フョードルが殺される事件を軸にしたミステリーや、リーガル・サスペンス（法曹界を舞台にしたサスペンス）としての娯楽的な読みごたえも備えたこの作品本来の魅力を取り戻す。これぞ、新訳、新しく訳し直す道理にかなった意義深い仕事というべきです。
>
> （豊崎由美『勝てる読書』河出書房新社）

――と書いているのに対して、私は河出書房新社のサイトにあるこの本の感想投稿欄に、こう書き込みました。

> はじめまして。木下和郎と申します。
> 「新訳座」に異議があります。
> 亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』はでたらめだらけです。
> こんなものを誰かに薦めることなどできません。
> 豊崎さんはそれがわかっていますか？
> 私はもうこの半年間、亀山批判を書きつづけています。
> http://www.kinoshitakazuo.com/kameyama.pdf
> http://d.hatena.ne.jp/kinoshitakazuo/
> かなりの分量に膨れあがっていますが、お読みいただければ幸いです。

私は豊崎さんが私の文章を読み、しかも共感してくれたのではないか、いや、共感してくれただろうと勝手に想像しているのですが、ここではあなたにも同じことを望みます。

しかし、あなたに関しては、実のところ、私の文章を読むまでもないはずだと思っているんです。豊崎さんの場合は、彼女がいったいどんなふうにこれまで『カラマーゾフの兄弟』を読んできたかということが、私には全然わかりませんでしたから（またその投稿欄の字数制限もわかりませんでしたから）、右のように書きましたが。

つまり、私は村上さんがこの「手紙」を読むまでもなく、亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』がでたらめであることをすでに認識されているはずだと思っているんです。週刊文春での発言の時点で、あなたは亀山訳をほんのわずかしか読んでいなかった。しかも、いささか油断しながら――これは微妙な表現ですが――の読書だった。ところが、その後、これはどうもおかしいな、何だか変じゃないか、と首をかしげだした……。

あなたの小説作品のほとんどを読んできた私には、あなたがこれまでに『カラマーゾフの兄弟』をどう読んできたかがおおよそのところで――どのレヴェル以上で・どのようにか――わかっていると思います。また、この私はそれを通じても『カラマーゾフの兄弟』への理解を深めてきたはずだと思っています。そのあなたに亀山訳のでたらめを見抜けないはずがない、と信じているんです。

とはいえ、こうしてあなたに「手紙」を送る以上、私は自分のこれまで書きつづけ、かなりの量にまで膨れ上がってしまった亀山批判の要約とでもいうべきものを書いておくことにします。

私は亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』の全体を読んでいません――いまだに読みたくもありませんし、今後も読まないでしょう。また、私はロシア語をまったく解しません。私はただ日本語作品として『カラマーゾフの兄弟』（原卓也訳）を何度も読み返してきただけです。その私になぜ亀山批判ができるのかということは、これまでの批判文章で詳しく書いています。

ともあれ、私は昨年七月にたまたま自分の勤める書店で、亀山訳での「あなたじゃない」の箇所を立ち読みしたのでした。そこで私の感じたのはこうでした。いったい、なぜ亀山氏はこの場面をこうものんびりと悠長な調子で訳しているのだろう？　まるきっり切迫感がないじゃないか。

首をかしげた私は、第五巻収録の亀山氏による「解題」を読んで、仰天しました。亀山氏によれば、この場面でイワンはアリョーシャの「あなたじゃない」を即座に理解できなかったのです。イワンはアリョーシャが何をいいだしたのか、まったくわからなかったのです。つまり、それは亀山氏自身にわからなかったということです。亀山氏に読み取れない以上、イワンも「あなたじゃない」の意味がわからなかったことになるのです。そこで、亀山氏＝イワンは、「あなたじゃない」を「あなただ」と受け取ります。そうして、このアリョーシャのことばによって、イワンは突如身体に変調を覚えることになるんです。亀山氏はこの箇所について、ＮＨＫのラジオ講座テキストでこう書きもしています。

アリョーシャの「あなたじゃない」という言葉は、イワンは法的な意味において裁かれることはない、だから、そう苦しまないでほしい、という意味にとらえることができるように思えます。

（亀山郁夫「新訳『カラマーゾフの兄弟』を読む」　ＮＨＫ出版）

開いた口がふさがりません。

もちろん、実際は、「犯人は自分以外の誰でもない」と思いつめて、悪魔の幻覚を見るほど身体に変調をきたすほどになっていたイワンに向けてアリョーシャは「殺したのはあなたじゃない」というわけです。アリョーシャはイワンを救おうとしていました。それで、「あなたじゃない」ということばを自らの「一生をかけて」（原卓也訳）いったのです。そのことが亀山氏にはまったく理解できていません。アリョーシャ自らの「一生をかけて」ということばを亀山氏が訳すと「あなたが死ぬまで」――つまり、イワンが死ぬまで――ということになるんです。彼はこの場面で感動したことが全然ないんです。

このことは、亀山氏がアリョーシャという人物、イワンという人物をまったく誤読したまま作品を読んできたことを明白に示します。

さらに「解題」を読んでいき、私は次々に仰天する記述に出くわすことになりました。

大審問官に対するキリストのキスは大審問官の事業についての「承認と、ことによると「祝福」のキス」だそうです。つまり、亀山氏には、叙事詩「大審問官」を、キリストが大審問官と現世の権力争いをしているという図でしか読み取れていなかったわけです。しかも、ここでのキリストはドストエフスキーの原典では「キリスト」と書かれていないため、これまでの翻訳は間違いであり、大審問官に相対しているのは、実はキリストの僭称者であるかもしれないそうです。ひどすぎます。

私は、イワンがなぜ叙事詩「大審問官」を創作したのか、「大審問官」は何のためにあるのかを明らかにすることが『カラマーゾフの兄弟』におけるキリストの位置や意味を明らかにするということだ、と批判文章で詳述しています。

それについてもう少し書きますが、「大審問官」とは、イワンの「謹んで切符をお返しする」という主張のキリスト向けヴァージョンだということです。その前提になるのが、これです。

「人を愛するためには、相手が姿を隠してくれなきゃだめだ、相手が顔

を見せたとたん、愛は消えてしまうのだよ」

「そのことはゾシマ長老も一度ならず話しておられました」アリョーシャが口をはさんだ。「長老もやはり、人間の顔はまだ愛の経験の少ない多くの人々にとって、しばしば愛の妨げになる、と言っておられたものです」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

アリョーシャのいうゾシマ長老のことばは、こうでした。

「その人はこう言うんです。自分は人類を愛してはいるけど、われながら自分に呆れている。それというのも、人類全体を愛するようになればなるほど、個々の人間、つまりひとりひとりの個人に対する愛情が薄れてゆくからだ。空想の中ではよく人類への奉仕という情熱的な計画までたてるようになり、もし突然そういうことが要求されるなら、おそらく本当に人々のために十字架にかけられるにちがいないのだけれど、それにもかかわらず、相手がだれであれ一つ部屋に二日と暮すことができないし、それは経験でよくわかっている。だれかが近くにきただけで、その人の個性がわたしの自尊心を圧迫し、わたしの自由を束縛してしまうのだ。わたしはわずか一昼夜のうちに立派な人を憎むようにさえなりかねない。ある人は食卓でいつまでも食べているからという理由で、別の人は風邪をひいていて、のべつ洟をかむという理由だけで、わたしは憎みかねないのだ。わたしは人がほんのちょっとでも接触するだけで、その人たちの敵になってしまうだろう。その代りいつも、個々の人を憎めば憎むほど、人類全体の対するわたしの愛はますます熱烈になってゆくのだ。と、その人は言うんですな」

（同）

『カラマーゾフの兄弟』において、ドストエフスキーは「人類」に対する愛と「人間の顔」を持った「個々のひとびと」に対する愛とを明確に区別しています。この区別が、「大審問官」を読むうえで欠かせないものです。この区別を亀山氏はまったく理解していません。「エピローグ」におけるコーリャの台詞の訳にもそれが表われています。まず原卓也訳で示しますが、

「もちろんですよ……全人類のために死ねればと思いますけど、恥辱なんてことはどうだっていいんです。僕らの名前なんか、滅びるにきまってるんですから！　僕はお兄さんを尊敬しますよ！」

（同）

この後で、アリョーシャがこう話します。

「もしかすると、僕たちはわるい人間になるかもしれませんし、わるい行いの前で踏みとどまることができないかもしれません。人間の涙を嘲笑うかもしれないし、ことによると、さっきコーリャが叫んだみたいに『僕はすべての人々のために苦しみたい』と言う人たちを、意地わるく嘲笑うようになるかもしれない」

（同）

アリョーシャはコーリャの「全人類のために死ねれば」を自分のことばのなかで「僕はすべての人々のために苦しみたい」といい換えているんです。

それを亀山氏がどう訳したか？

「もちろん……人類全体のために死ねたらな、って願ってますけどね」

「さっき、コーリャ君は、『人類全体のために死ねたら』と叫びましたが、……」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』亀山郁夫訳　光文社文庫）

亀山氏は、アリョーシャがせっかくいい換えたコーリャの台詞を元に戻して――コーリャのことば通りにして――しまいます。ということは、ドストエフスキーの書いた通りに訳さなかったんです。

この箇所について、私はイワンとアリョーシャとの会話からの引用をまじえて、こう書きました。

アリョーシャはここでもゾシマ長老の教えを想起していたんじゃないでしょうか？「愛の経験の少ない」コーリャ少年の「全人類のために死ねればと思います」という発言のはらむ危うさは、アリョーシャにとってなじみのものでした。だから、彼はコーリャの発言をいい換えたんじゃないですか？　コーリャ、そんなふうに考えてはいけない、論理より先に愛することだよ、「全人類」なんかじゃなく、個々の「人間の顔」を愛することだよ、とアリョーシャはいいたかったのじゃないですか？「全人類のために死ぬ」ことなんか実は簡単なんだよ、「すべての人々のために苦しむ」ことの方がはるかに難しいんだよ、コーリャ、生きて、「人間の顔」を持った「すべての人々のために苦しみ」なさい……

そして、こう書きました。

そんなわけで、これほどまでに重要な意味のこめられた、アリョーシャによるコーリャの台詞のいい換えをそのまま訳さなかった亀山郁夫のでたらめ・不誠実・無理解・無能がさらに鮮明に浮き上がってきました。

亀山郁夫にはアリョーシャのいい換えの意味がまるっきりわかっていなかったということです。それは彼がアリョーシャを理解していないだけでなく、ゾシマ長老をも理解していないこと、さらには、この作品におけるキリストの意味をもまったく理解していないということを示します。

そんなひとが「大審問官」におけるキリストを理解できていたわけもありません。

どうでしょう？　作品をこの程度にしか読み取れていない翻訳者の仕事がどのようなものか、作家でもあり、翻訳者でもある村上さんには、もう十分におわかりいただけたでしょう。翻訳者の作品理解は必ず彼の翻訳に反映されます。つまり、亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』は、実は『カラマーゾフの兄弟』を僭称しているだけ――でたらめだらけ――の偽物だということです。

もうひとつ、あまりにも愚劣な亀山氏の読み取りをご紹介しますが、ペレズヴォンというコーリャの連れてきた犬は、イリューシャのジューチカとはべつの犬だそうです。ジューチカによく似た犬の片目をつぶし、耳にはさみを入れ、厳しい訓練をほどこしたのがコーリャだそうです。

こうした読み取りを亀山氏は日本でのドストエフスキー研究の「最先端」だと称しています。そうして、マスメディアにさかんに露出し、でたらめを振りまきつづけているんです。

私が何を批判しているか、おわかりいただけたと思います。

もちろん、あなたはこの亀山訳を読む以前に、この訳に対する専門家らの批判のあることを承知されていたと思います。しかし、あなたはその批判がご自分の新訳に向けてなされた批判と同レヴェルのものだとしか考えなかったのではないでしょうか？　全然違います。亀山訳はあまりにも稚拙な誤訳の集積なのです。しかも、これは表面的なものではなく、ここまで私が述べてきたように、深層的・構造的な理由によるものなのです。

昨年の十月、ロシア文学会のワークショップにおいて、質疑応答の際に「亀山訳はでたらめだ」という発言を受けて、ゲストの柴田元幸氏――私は、村上さんの翻訳とともに、柴田さんの仕事にも大きい影響を受けていると思います――がこういったそうです。「他人の訳を批判する最良の方法は、自分でもっといい訳を出すことだ」。これは、一見もっともな意見です。つまり、翻訳者が同業者の仕事を批判するという点において通用する意見です。しかし、柴田さんのこの視点に欠けているのは、でたらめな訳を読まされる読者への配慮、でたらめな訳をされる作者と作品への配慮です。

柴田さんは亀山訳の実際を知らないのです。知っていたら、右のような発言のできるわけがありません。柴田さんがオースターやミルハウザーの作品で、亀山訳に当たるようなものが出てきたときに同じ回答をするとは思えません。

それに対して、沼野充義氏は亀山訳の実際を知っていながら、いろんなメディアを通じて亀山氏称揚をつづけています。つまり、嘘をつきつづけています。

私はこういうことが許せません。

村上春樹さま、あなたは、あなたの読者が今後、あなたの影響によって『カラマーゾフの兄弟』を読もうと考えたときに、亀山訳を「読みやすい」といって推奨できますか？

以上のようなことを、私はこの半年以上、ずっと書きつづけてきました。この先もつづけます。おそらく現在のところ、全体の半ばほどにはなったろうかという感じです。お読みいただければ、幸いです。

（http://www.kinoshitakazuo.com/kameyama.pdf）

もし、あなたにお答えいただけるなら、あなたの新作『1Q84』の担当編集者の方にお伝えください（というのも、直接お返事いただいても、私にはそれがあなたからのものであるかどうか、わからないからです）。この方は必ず私に連絡をつける方法をご存じです。

あなたの今後のご活躍をお祈り申し上げます。

木下和郎

（二〇〇九年三月二十五日）

「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」その一一

さて、しばらく前のこと、休みの日――ということは平日です――の午後、私はクリーニング屋に行こうとしていて、ある信号を渡ったんですね、手には汚れ物を入れたクリーニング屋の手提げ袋。渡ったところで、おそらく高校生かそれ以上の、若いやつら数人が何か妙な絡まりかたをしている脇を通り過ぎたんですが、ちょっと嫌な感じがしましたっけ。でも、ただじゃれているだけなのかな、とも思いました。それで、そのままいくらか歩いて、もうじきクリーニング屋だというところで、「あっ」と思ったんですね。しまった、いま行って、数日前に出してある分の引き取りをしようとしている、その引換券というか預り証というか、とにかくそれを持ってくるのを忘れていたんです。そう、自宅のテーブルの上に置いてきてしまった。それで、立ち止まり、ちょっと考えて、引き返したんですね。やれやれ、と思いながら。

で、またさっきの信号の手前に戻ると、ですね。おそらく信号待ちしていた何人ものおばさんたちが――失礼、たぶんみんな私より若いでしょう。彼女たちが信号の方ではなく――こちらを向いて口々に何か叫んでいる。「やめなさい」とか「警察を呼ぶわよ」とかいっているんです。何が起こっていたかというと、私のすぐ目の前で、喧嘩です。さっきの若いやつらです。三対一での喧嘩。といっても、一の方が威勢がいい。三の方も、実はそのうちの一人だけが殴られている。あとの二人はやり合っている二人にぴったりくっつくようにしているだけで、仲間に加勢するでもない。それで、私はしかたなく、殴っているやつの肩を後ろからつかんで、引き離しました。たぶん「何してるんだ、やめろ」とかいったんだと思います。で、何だか揉み合いみたいになった拍子に、私の持っていたクリーニング屋の袋の取っ手がちぎれ、袋がばさっと地面に落ちたんですね。そうすると、三人の方の、この喧嘩を見守っていた二人のどちらかが、「すみません」なんていう。「すみません」じゃなくて、これを止めさせろよ、と私は思いましたが、私の引き離したやつがまた相手を殴り始める。これが、なんだか面白いように相手の右頬にヒットするんですよ。嫌な音がするんです。で、また、私はそいつを取り押さえて、引き離す。今度はいくらかの距離を三人との間に設けたんですね。私は、後ろにそいつ、前に三人という位置に立って、三人に「もういいから行け」といってやりました。すると、三人は何だか素直に歩き出したじゃないですか。意外でしたが、とにかくそうなりました。

で、残った一人なんですが、おばさんたちに何やら文句をいっているんですね。「何だよ、あいつら、行っちゃったじゃないかあ」みたいなことを。おばさんたちもそれに対して何のかんのと――「駄目じゃないの」とか、そんなこと――叫んでいる。で、これで一件落着と思った私がそのまま信号を渡ろうとすると、おばさんたちのひとりが、私に「何？　知り合いじゃないの！」というので、私は手を振り、「違いますよ！」という。そのまま信号を渡るところで、また「あ」と気づきました。で、またUターンしてクリーニング屋に向かいました。

「あのう、引換券を忘れたんですが、木下ですけれど、調べてもらえますか？」

そうやって引き取りはできました。何だ、最初からそれを思いついていれば、喧嘩なんかに巻き込まれることもなかったわけです。

これが、そのまま私の亀山郁夫批判に重なるでしょう。

またべつの――これもちょっと前の――話。

私の勤める書店に客からクレームの電話です。ある出版社の出しているＤＶＤ付の雑誌のパッケージが途中から変わったことに怒り狂っている客から。そんなことを書店にいわれてもどうしようもないんですけれどね。もう電話で怒鳴りまくる、怒鳴りまくる。この翌々日にも同じ電話。

彼によれば、「出版社と書店はグルになって客を馬鹿にしてるんだよ！」

そのことだけを考えれば、亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』を平積みに――いまはしていませんが――にしている書店の従業員には耳の痛い発言です。

でも、「それとこれとは違う」ということです。

私がそれで、どうしたか？　私はこの自分の人生で、誰かに向かってこれほ

ど怒鳴ることがあるか――それも相手は客です――、というほど怒鳴り返しつづけましたよ。そうしたら、相手も何だか怯むんですね。いやはや、この私が誰かに対してこれほど実際に怒鳴るとは！「訴えてやる！」ということばで相手は電話切りました。

これも、そのまま私の亀山郁夫批判に重なるでしょう。

（二〇〇九年三月三十日）

「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」その一二

いま、『死に至る病』の終わりの方をぱらぱらとめくっていて、目についた文章があったので、引用しておきます。

躓きの最低の（人間的にいえば、最も無邪気な）形態は、キリストに関する全問題を未決定なままに残しておいてこう判断するものである、――「私はこの点に関してあえていかなる判断をも下さない、私は信仰もしないが、判断を下すこともしない。」これが躓きの一形態であることを大抵の人は看過している。

（キェルケゴール『死に至る病』斎藤信治訳　岩波文庫）

「私は亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』に関してあえていかなる判断をも下さない、私はそれをいいともいわないが、悪いともいわない」――これが躓きの一形態であることを大抵のひとは看過している。

（二〇〇九年五月十四日）

「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」その一三

もうずいぶん遅かったが、イワンはまだ眠れずに、考えごとをしていた。この夜、彼が床についたのは遅く、二時ごろだった。だが、今は彼の思考の流れをすべて伝えるのはやめておこう。それに、まだ彼の心に立ち入るべきときではない。いずれ彼の心を語る順番がくるのだ。また、かりに何かを伝えようとしたところで、それはいたってむずかしい。なぜなら、彼の心にあるのは、まだまとまった考えではなく、何かきわめて漠然とした、そして何より特に、あまりにも昂ぶりすぎたものだったからだ。彼自身、自分がすっかり常軌を逸しているのを感じていた。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』 原卓也訳　新潮文庫）

フョードル殺害の前夜、モスクワ行きの前夜 —— カテリーナに別れを告げ、アリョーシャに「大審問官」を語った日の夜 —— のイワンについての語り手のことばです。

だが、今は彼の思考の流れをすべて伝えるのはやめておこう。それに、まだ彼の心に立ち入るべきときではない。いずれ彼の心を語る順番がくるのだ。

（同）

その「彼の心を語る順番」が来たとき ——「第十一編　兄イワン」—— の語り手の語りかたについて、私は以前にだいぶ長々としゃべりました。私はこういいました。アリョーシャの「あなたじゃない」を響かせた後の語りかたです。

そこから、語り手は時間を遡って、殺人事件後のイワンの消息を語り始めます。そうして、スメルジャコフとの過去二回の対面の様子を含めた諸事情を語ることになります。つまり、これまでのところ、アリョーシャが見聞きしたことを通してだけ読者に伝えてきたイワンの消息を、またべつの角度から語り直すというやりかたです。語り手はそこで、イワンのある部分にはできるだけ踏み込まないような語りかたをします。そう私がいうのは、語り手が、まさにアリョーシャのいう通りの意味での「この二か月の間ずっと、犯人は自分以外の誰でもないとイワンが思いつめていた」を直接に語らない、ということです。一度、イワンが自分を犯人だと口にするのは「もしスメルジャコフがやったのなら」という条件つきです。アリョーシャが指摘したのは、そういうレヴェルのことではありません。そんな条件なしで、ずばりイワンの良心の問題としてアリョーシャは指摘しているんです。語り手は、ある意味でとぼけたようにアリョーシャの「あなたじゃない」の意味していることに直接踏み込まないんです。その周辺をぐるぐる回る語りかたをします。これは意図的なものです。つまり、語り手は、すでにアリョーシャに「あなたじゃない」といわせてしまっているから、もうそれ以上自分が踏み込む必要がないんですね。しかし、わざとのように（いや、わざとなんですが）踏み込まないここでの語りが全体としてどう読めるかというと、やはり「この二か月の間ずっと、犯人は自分以外の誰でもないとイワンが思いつめていた」ということになるんです。

（傍線は私・木下による）

語り手はけっしてイワンの心理を総括しません。イワンの心理の部分部分をばらばらに提出し、部分部分ばらばらなまま読者に伝えようとします。もちろん、それらは、アリョーシャのあまりにも強烈な「あなたじゃない」の残響のもとに語られるわけです。それでも、語り手はイワンの心理をこれこれだと確定しようとしません。むしろ、そういう確定を拒みます。イワンの心理を部分部分ばらばらなまま、その全体を読者に受け入れてほしいんです。というのも、この「部分部分ばらばら」の全体がイワン・カラマーゾフだからです。イワン・

カラマーゾフは、この「部分部分ばらばら」によってしか、そのありようの表現できない人物なのだ、と私はいいましょう。もしあなたがイワン・カラマーゾフをしっかり読み取ろうと思うなら、アリョーシャの確定的な「あなたじゃない」という視点と、いま私のいった不確定的な「部分部分ばらばら」という視点との差異を踏まえたうえで、そのふたつの視点の並存する状態を想像できなくてはなりません。後でもいいますが、おそらくこのふたつの視点――確定的な視点と不確定的な視点――の接触、応答の全体が、どちらか一方だけの視点をはるかに超える大きさと広がりを作品にもたらしているんですね。いいですか、まず確定的な「あなたじゃない」と、それに対するイワンの反応があって、その後に不確定的な――この二か月間の――「部分部分ばらばら」が語られるんです。この語りの全体は非常に「動的」なものです。この作品は常に動き、脈打ち、姿をどんどん変えていくんです。その「運動」に参加することが、この作品の読書です。読者は作品に巻き込まれ、いつか私のいったように、アリョーシャのことばの通りに「かまいません、僕も苦しみたいんですから」といいつづける読書をすることになります。――と、私はいま先走って、「あなたじゃない」以降の確定的な視点と不確定的な視点の接触、応答についてをしゃべりましたが、むろん、それ以前でも語り手はイワンの「部分部分ばらばら」を提示していたんでした。ということは、以前に提示していたイワンの「部分部分ばらばら」に対して、語り手はアリョーシャの「あなたじゃない」をぶつけたことにもなるわけです。

イワンの「心を語る順番」の来る以前――フョードル殺害以前――今回の冒頭に私の掲げた場面で――のイワンはこんなふうに語られていました。

『どけ、ろくでなしめ、俺はお前なんぞの仲間じゃない、ばか者！』こんな啖呵がほとばしりかけたが、われながらひどくおどろいたことに、口をついて出たのはまったく別の言葉だった。

「どうだ、親父さんは。眠ってるか、それとも目をさましたかい？」自分でも思いがけなく、彼は低い声で神妙にそう言うと、これもまったく思いがけなく、ひょいとベンチに腰をおろした。一瞬、恐怖に近い気持をおぼえたのを、彼は後日思いだした。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

（傍線は私・木下による）

「だったらお前はなぜ」突然スメルジャコフをさえぎって彼は言った。「そんなことを言ったあとで、俺にチェルマーシニャ行きをすすめたりするんだ？　それでいったい何を言いたかったんだ？　俺が行ってしまったあと、ここでそんなたいへんなことが起るんじゃないか」イワンはやっとのことで息を継いだ。

「まさにそのとおりでございます」スメルジャコフは静かに分別くさく言ったが、それでいて食い入るようにイワンを見守っていた。

「まさにそのとおりとは、どういうことだ？」イワンは自分を必死に抑え、恐ろしく目を光らせながら、きき返した。

「あなたをお気の毒と思えばこそ、申しあげたんでございますよ。わたしが若旦那さまの立場に置かれたら、即座に何もかも放りだしてしまいますがね……こんな事件の巻添えをくうよりは……」ぎらぎら光るイワンの目をいたって率直な態度で見つめながら、スメルジャコフが答えた。二人ともちょっと沈黙した。

「貴様はどうやらたいへんなばか者らしいな、それにもちろん……恐るべき卑劣漢だ！」イワンはだしぬけにベンチから立ちあがった。それからすぐに木戸をくぐろうとしかけたが、ふと立ちどまり、スメルジャコフの方に向き直った。何やら異様なことが起った。イワンが痙攣でも起したように突然、唇を噛み、拳を固めたのだ。あと一瞬したら、もちろんスメルジャコフに飛びかかったにちがいない。少なくとも相手はその瞬間それに気づいて、びくりと身をふるわせ、全身をうしろに引いた。だが、スメルジャコフにとってその一瞬は無事に過ぎ、イワンは無言の

まま、しかし何かためらいがちに木戸の方に向き直った。

「知りたきゃ教えてやるが、俺は明日モスクワへ発つよ。明日の朝早くな。言うことはそれだけだ！」ふいに憎しみをこめて、一語一語はっきりと大声でイワンは言ったが、どうしてこのときスメルジャコフにこんなことを言う必要があったのか、後日われながらふしぎに思ったものだった。

（同）

（傍線は私・木下による）

そうして、右の破線部と実線部との対照（とその並存）が、次のように表現されます。

だが、スメルジャコフのおどろいたことに、イワンはだしぬけに声をあげて笑いだし、笑いつづけながら、足早に木戸をくぐった。その顔を見た者があれば、彼が笑いだしたのは、決して愉快だったからではないと、確実に結論を出したにちがいない。それに彼自身も、このときこの瞬間、自分がどうなっているか、絶対に説明できなかったであろう。彼の動作も歩き方も、まるで痙攣を起しているかのようだった。

（同）

（傍線は私・木下による）

どうですか？「彼自身も、このときこの瞬間、自分がどうなっているか、絶対に説明できなかったであろう」です。ところが、そういう心理的な「部分部分ばらばら」が彼の身体にどのように表われていたかといえば、「彼の動作も歩き方も、まるで痙攣を起しているかのようだった」なんです。

これが殺人事件以前のイワンでした。再び殺人事件以後に話を戻すと、

「じゃ、またな。もっとも、仮病が得意だってことは、言わずにおくよ……お前も供述しないほうがいいだろう」突然、イワンはなぜかこう口走った。

「よくわかっております。あなたがそれを証言なさらないのでしたら、わたしもあのとき門のわきでした話を、全部はいわずにおきましょう……」

イワンはここでふいに部屋を出た形になったが、もう廊下を十歩ほど行きすぎたころになってやっと、スメルジャコフの最後の一句に何か無礼な意味が含まれていたことを、突然感じた。引き返す気になりかけたが、ちらとそう思っただけで、『ばかばかしい！』と言いすてるなり、いっそう足早に病院を出た。何より、彼は本当に気持ちが落ちついたのを、それも本来なら反対の結果になるのが当然という気がしそうなものなのに、犯人がスメルジャコフでなく、兄のミーチャであるという事態によって安心したのを、感じていた。なぜそうなったのかを、そのときの彼は分析しようと思わなかったし、自分の感じ方を掘りさげることに嫌悪さえおぼえていた。できるだけ早く、どうにかして何かを忘れたい気持だった。

（同）

（傍線は私・木下による）

どうですか？「何より、彼は本当に気持ちが落ちついたのを、それも本来なら反対の結果になるのが当然という気がしそうなものなのに、犯人がスメルジャコフでなく、兄のミーチャであるという事態によって安心した」です。

しかし、語り手はこうも指摘していました。

さらにもう一つ注目すべきことは、彼がミーチャへの憎悪が日ましに強まるのを感じながら、同時に一方では、自分が兄を憎んでいるのは、

カテリーナの愛の《再発》のためではなく、まさに兄が父を殺したためであることを理解していた点であった。彼はそのことを自分でも感じ、十分意識していた。

（同）

右の文章について、私は以前にこういいました。

「まさに兄が父を殺したためである」というのは、「まさに、自分イワンではなく、兄ミーチャが父を殺したためである」ということです。つまり、イワンは、一方で父を殺したのが自分でなく、ミーチャであることに「安心」していながら、他方では「父を殺したのが、自分であればよかったのに」と考えているんです。兄に手柄を横取りされたとでもいい換えましょうか。

「すべては許される」という思想の現実的帰結からも、そういう思想を抱いている者が自らの男性性を愛する女性に誇るためにも、イワンは「父を殺したのが、自分であればよかったのに」と考えるんです。

「しかも、これでもまだ足りずに、この人は結論として力説したのですが、たとえば現在のわれわれのように、神も不死も信じない個々の人間にとって、自然の道徳律はただちに従来の宗教的なものと正反対に変るべきであり、悪行にもひとしいエゴイズムでさえ人間に許されるべきであるばかりか、むしろそういう立場としては、もっとも合理的な、そしてもっとも高尚とさえ言える必然的な帰結として認められるべきなんだそうです」

……（中略）……

「失礼ですが」思いもかけず、ドミートリイがだしぬけに叫んだ。「聞き違いしたくないものですから。『悪業は許されるべきであるばかりか、あらゆる無神論者の立場からのもっとも必要な、もっとも賢明な出口として認められさえする』こうでしたね？」

「そのとおりです」パイーシイ神父が言った。

「おぼえておきましょう」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

「どうやって避けるんです？　何によって避けるんですか？　兄さんのような思想をいだいていて、そんなことは不可能ですよ」

「これもまたカラマーゾフ流にやるのさ」

「それが《すべては許される》ということですか？　すべては許される、そうですね、そうなんでしょう？」

イワンは眉をひそめ、ふいに何か異様なほど青ざめた。

「ああ、お前はミウーソフがあんなに腹を立てた、昨日の俺の言葉を拾いだしてきたんだな……ドミートリイが無邪気にしゃしゃり出てきて、言い直したあの言葉を？」彼は皮肉な微笑をうかべた。「そう、たぶんな。すでにその言葉が発せられた以上、《すべては許される》のさ。俺も否定はしない。それにミーチェニカの表現もわるくないしな」

（同）

さて、いま表面的事実に頼って、父を殺したのがミーチャだと思っているイワンが、本家たる自分の思想的帰結をミーチャ――イワンは、ミーチャなんかに自分・イワンの思想などが理解できるわけもなく、ただミーチャ自身の都合のいいような低レヴェルの曲解をするのが関の山だと思っています――に横取りされたことに憎しみをおぼえているわけです。いっそのこと自分が父を殺したのであればよかったのに！　また、その方が彼には楽なんですよ。自分が実際に父を殺したのであれば、その事実に依拠しながら、はっきりした――確定的な――判断を自分に下すことができるんです。ところが、現実にはイワンは殺人を犯していません。だから、彼は宙ぶらりんの状態で苦しむことになります。

俺は望んでいた、殺人を望んでいたんだ！　俺が殺人を望んでいたって？　ほんとに望んでいたのだろうか？

（同）

というわけで、ここでちょっと横道に逸れますが、最先端＝亀山郁夫のいう、これは大間違いです。

ゾシマ長老が残した「説教」のテーマは、ひとこと「傲慢を捨てよ」に尽きる。ゾシマは、傲慢が生みだす悲劇を身をもって体験した。決闘のエピソードが示すように、彼自身ジラールの「三角形的欲望」のとりこだったことは疑いようがない。「三角形的欲望」の源にあるものこそ、傲慢である。その彼が、「謎の訪問客」との出会いによって修道院への道を志すとき、もちろんそれは、みずからの「傲慢」を最終的に克服するための第一歩にすぎなかった。ともあれ、この小説での「傲慢」の罪のもっとも恐ろしい体現者とは、ほかでもない、「謎の訪問客」である。

（亀山郁夫「解題」）

（傍線は私・木下による）

いいですか、「この小説での「傲慢」の罪の最も恐ろしい体現者」は「謎の訪問客」（原卓也訳では「神秘な客」）ではなくて、イワン・カラマーゾフですよ。なぜなら、彼は「謎の訪問客」と違って、実際に殺していないからです。殺していれば、その現実に依拠することができるんです。殺していれば、ただその自分の犯した殺人という現実の――自分にはっきり手応えのある――一点にすべてを帰すことができるわけです。それで、その一点の是非だけをはっきり問題にすることができる・しさえすればいいわけです。イワンにはそれができません。彼は殺していません。殺していないから「安心」できそうなものを、彼は「殺していればよかったのに」・「その役（殺人者）は本来自分であるべきだった」と考えてしまうんです。だから、イワンの苦しみは自分が殺した以上に、いっそう高度なものになるんです。しかも、「謎の訪問客」には殺人に自ら納得できる動機がありました。イワンには、そのようなレヴェルでの動機がありません。その点でも、彼の苦しみはいっそう高度なんですよ。

これを引用しておきます。

地獄の物質的な火を云々する人がいるが、わたしはその神秘を究めるつもりないし、また恐ろしくもある。しかし、わたしの考えでは、もし物質的な火だとしたら、実際のところ人々は喜ぶことだろう。なぜなら、物質的な苦痛にまぎれて、たとえ一瞬の間でもいちばん恐ろしい精神的苦痛を忘れられる、と思うからだ。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

べつのいいかたをしますが、「謎の訪問客」の向き合っている現実がひとつだとしたら、イワンの向き合っている現実はふたつ以上あるんです。いや、どうもいいかたがよくありません。どういえばいいのか、いくらか試してみますが、「謎の訪問客」が殺人を犯すとき、彼にとって相手はただひとり、彼が思いを寄せていた女性に限定されていました。彼が彼女以外の人間を殺すことなどありえません。ところが、イワンはそうじゃないんですよ。たしかに、ここで実際に彼が苦しんでいるのはフョードル殺害についてではありますが、彼は本来殺害の対象がフョードルであろうがなかろうがどうでもよかったはずなんです。彼の「すべては許される」という思想が対象にしているのは、具体的な誰彼ではなかったはずなんです。ただ、手近なところにフョードルという恰好の対象（とともに殺人者候補としてのミーチャとスメルジャコフ）があったにすぎず、イワンはおそらくとりあえず試験的に仮想対象としてフョードルを念頭に置いていたにすぎないんです。そうして、その先には対象として誰彼かまわぬ殺人が「すべては許される」という標語のもとに行なわれてしかるべきだったはずなんで

す。彼の思想の帰結としてはそうなんです。

ここで思い出してほしいのが、以前に私のしゃべった、『カラマーゾフの兄弟』における「人類全体に対する愛」と「人間の顔」を持った生身のひとりひとりの人間それぞれとに対する愛」との区別です。この「愛」を「殺意」あるいは「憎しみ」に置き換えてみてほしいんですね。「謎の訪問客」の「殺意」は「人間の顔」を持った生身のただひとりの女性にだけ向けられていました。彼は「人間の顔」に向き合っていたんです。けれども、イワン・カラマーゾフの「殺意」は、ここでも「人間の顔」＝フョードルの顔を回避するんです。イワンは「人間の顔」＝フョードルの顔に向き合うこと、その顔を正視することができません。

ミーチャはそうではありません。

ミーチャは横から見つめ、身じろぎもしなかった。あれほど不快な老人の横顔、たれさがった咽喉仏、甘い期待にやにさがった鉤鼻、唇、これらすべてが部屋の左手からさすランプの斜光で明るく照らしだされた。おそろしい、もの狂おしい憎悪が、突然ミーチャの胸にたぎり返った。『こいつだ、こいつが俺のライバルなんだ、俺を苦しめ、俺の生活を苦しめる男なのだ！』これこそ、四日前にあずまやでアリョーシャと話したとき、「どうしてお父さんを殺すなんてことを、口にできるんです？」というアリョーシャの問いに対して、さながら予感していたかのように答えた、ほかならぬあの突発的な、復讐心にみちた、もの狂おしい憎悪であった。

「でも、わからんよ、わからんさ」あのとき、彼はこう言った。「ひょっとしたら、殺さんかもしれんし、あるいは殺すかもしれない。心配なのは、まさにその瞬間になって、ふいに親父の顔が憎らしくなりそうなことさ。俺はあの咽喉仏や、鼻や、目や、恥知らずな薄笑いが、憎くてならないんだ。個人的な嫌悪を感ずるんだよ。そいつが心配なのさ。どうにも我慢できそうもないからな……」

その個人的な嫌悪がもはや堪えられぬまでにつのった。ミーチャはすでにわれを忘れ、突然ポケットから銅の杵をつかみだした……

（同）

もちろん、イワンにもフョードルの顔への「個人的な嫌悪」がありはしただろうと思います。しかし、そのレヴェルはミーチャと同じではありません。

「お前に一つ告白しなけりゃならないことがあるんだ」イワンが話しはじめた。「俺はね、どうすれば身近な者を愛することができるのか、どうしても理解できなかったんだよ。俺の考えだと、まさに身近な者こそ愛することは不可能なので、愛しうるのは遠い者だけだ。いつか、どこかで《情け深いヨアン》という、さる聖人の話を読んだことがあるんだが、飢えて凍えきった一人の旅人がやってきて暖めてくれと頼んだとき、聖者はその旅人と一つ寝床に寝て抱きしめ、何やら恐ろしい病気に膿みただれて悪臭を放つその口へ息を吹きかけはじめたというんだ。しかし、その聖者は発作的な偽善の感情にかられてそんなことをやったのだ、義務感に命じられた愛情から、みずからに課した宗教的懲罰から、そんなことをやったんだと、俺は確信してるよ。人を愛するためには、相手が姿を隠してくれなきゃだめだ、相手が顔を見せたとたん、愛は消えてしまうのだよ」

「そのことはゾシマ長老も一度ならず話しておられました」アリョーシャが口をはさんだ。「長老もやはり、人間の顔はまだ愛の経験の少ない多くの人々にとって、しばしば愛の妨げになる、と言っておられたものです。でも、やはり人類には多くの愛が、それもキリストの愛にほとんど近いような愛がありますよ。そのことは僕自身よく知っています、兄さん……」

「ところが今のところ俺はまだそんなことは知らないし、理解もできないね。それに数知れぬほど多くの人たちだって俺と同じことさ。ところ

で問題は、人間の悪い性質からそういうことが起るのか、それとも人間の本性がそういうものだから起るのか、という点なんだ。俺に言わせると、人間に対するキリストの愛は、見方によれば、この地上では不可能な奇蹟だよ。なるほど、キリストは神だった。ところが、われわれは神じゃないんだからな」

（同）

イワン・カラマーゾフの「すべては許される」という思想は「人間の顔」を正視しない・できないことによって成り立つ思想なんです。

イワンが最初に獄中のミーチャに面会したときはこうでした。ミーチャのいったことは完全に正しいです。

しかもこの最初の面会のときに彼は《すべては許される》などと主張している手合いには、自分を疑ったり尋問したりする資格はないと語気鋭く言い放って、さっそくイワンを侮辱したものである。

（同）

そのミーチャは後でアリョーシャにこういうんでした。

「イワンも讃歌のことは理解してくれるんだ、わかっているとも。ただ、それには返事をせずに、黙っているだけさ。讃歌なんぞ信じていないんだ」

（同）

むろん、イワンにはミーチャの「讃歌」が恐ろしいほど理解できます。

「ああ、アリョーシャ、俺は神を冒瀆してるわけじゃないんだよ！　やがて天上のもの、地下のものすべてが一つの賞讃の声に融け合い、生あるもの、かつて生をうけたものすべてが『主よ、あなたは正しい。なぜなら、あなたの道は開けたからだ！』と叫ぶとき、この宇宙の感動がどんなものになるはずか、俺にはよくわかる。母親が犬どもにわが子を食い殺させた迫害者と抱き合って、三人が涙とともに声を揃えて『主よ、あなたは正しい』と讃えるとき、もちろん認識の栄光が訪れて、すべてが解明されることだろう」

（同）

さらに、

「俺だって赦したい、抱擁したい……」

（同）

そのうえ、

「さあ、その無頼漢を釈放してやってください……讃歌なんぞうたいはじめて。そうすりゃ気が楽になるからですよ！　酔いどれの悪党が『ワーニカはピーテルに行っちゃった』とわめき立てるのと同じことなんだ。僕は二秒間の喜びのためになら千兆キロの千兆倍だって捧げますよ」

（同）

イワン・カラマーゾフは「讃歌」を理解しています。しかし、「信じていない」んです。

また、これらも引用しておきましょう。

「俺は祝福を受けた正式の婚約者さ。万事はモスクワで、俺の到着後、聖像を前にして晴れがましく、最高の形でとり行われたんだ。将軍夫人

が祝福してくれたうえ、本当の話、カーチャにまでお祝いを言っていたよ。お前はいい人を選んだ、この人ならわたしには何もかも見透しだ、と言ってね。ところが、お前には信じられないだろうが、夫人はイワンを毛ぎらいして、お祝いもしてやらないんだよ」

（同）

「イワンは何て言っとる？　アリョーシャ、お前だけだよ、俺の息子は。俺はイワンがこわい。あっちより、イワンのほうがこわいんだ。こわくないのはお前一人だけだよ……」

（同）

「あら、あのね、アレクセイ・フョードロウィチ、ひょっとすると、ここがいちばん肝心の点かもしれませんわ」ホフラコワ夫人がふいに泣きだして、叫んだ。「神かけて申しますけれど、あたくしリーズは本心からあなたにお任せしていますのよ。ですから、あの子が母親に内緒であなたをおよびしたからといって、そんなこと何でもございません。でも、あなたのお兄さまのイワン・フョードロウィチには、失礼ですけれど、そう気軽に娘を任せるわけにはまいりませんのよ、そりゃ今でもあの方をこの上なく騎士的な青年と見なしておりますけれどね」

（同）

これがイワン・カラマーゾフです。イワンに「人間の顔」を正視しない・できないことを直感的に見抜き、拒否するひとたちが確実にいるんです。

「その人はだれのことも軽蔑しません」アリョーシャはつづけた。「ただ、だれのことも信じていないだけです。しかし、信じないとすると、もちろん、軽蔑しているわけですね」

（同）

それ以前に、アリョーシャはイワンに向って適切な問いを投げかけていました。

「じゃ、粘っこい若葉は、大切な墓は、青い空は、愛する女性はどうなるんです！　どうやって兄さんは生きてゆけるんです？　それらのものをどうやって愛するんですか？」アリョーシャが悲しそうに叫んだ。「心と頭にそんな地獄を抱いて、そんなことができるものでしょうか？」

（同）

ゾシマ長老とイワンとのやりとりはこうでした。

「ですが、この問題が僕の内部で解決することがありうるでしょうか？　肯定的なほうに解決されることが？」なおも説明しがたい微笑をうかべて長老を見つめながら、イワンは異様な質問をつづけた。

「肯定的なほうに解決されぬとしたら、否定的なほうにも決して解決されませぬ。あなたの心のこういう特質はご自分でも承知しておられるはずです。そして、そこにこそあなたの心の苦しみのすべてがあるのです」

（同）

イワン・カラマーゾフは分裂しています。もちろん、それはあらゆる人間が、また『カラマーゾフの兄弟』の作中人物のみなが分裂しているのだといえば、それはそうなんですが、イワンの分裂は他の誰ともレヴェルが異なり、高度に先鋭化されています。だから、語り手はイワンを「部分部分ばらばら」としてしか表現できないんです。イワンは分裂した「部分部分ばらばら」のどれにも真剣なんです。しかし、どれをも信じることができない。

アリョーシャのいう通り、人間は「心と頭にそんな地獄を抱いて」生きていくことはできないし、愛することもできないんです。しかしイワンには生身のひとりひとりの人間それぞれの「人間の顔」に向き合うこと――つまりは愛する

こと、ひいては憎むこと――ができません。だから、彼に接する多くの他人は、その事情を正確に理解するのではないけれども、彼が自分たちの顔を見ていないこと・自分たちの顔を軽蔑していることにたちまち気づき、「毛ぎらい」するんです。

イワンはフョードルの顔を見ようとしません。

先の「それに彼自身も、このときこの瞬間、自分がどうなっているか、絶対に説明できなかったであろう。彼の動作も歩き方も、まるで痙攣を起しているかのようだった」につづくのはこうでした。

それに、口のきき方までそうだった。家に入るなり、広間でフョードルに出会うと、彼はだしぬけに両手をふりまわしながら「僕は二階の自分の部屋へ行くんです。お父さんのところへじゃありませんよ、さよなら」と叫び、父を見ぬようにさえ努めながら、わきを通りすぎた。

（同）

この日の夜と翌朝については、後でこう語られていました。

つまり、何のために俺はあのとき、出発前の最後の夜、フョードルの家で、泥棒のようにこっそり階段に出て行って、階下で父が何をしているか、きき耳をたてたのだろう、なぜそれをあとで思いだしたとき、嫌悪にかられたのだろう、なぜ翌朝、道中であんなに突然、気が滅入り、モスクワに列車が入る頃になって、「俺は卑劣な人間だ！」と自分自身に言ったのだろう、などとたえず自分に問いかけるようになった、とだけ言えば十分だろう。

（同）

右の翌朝――出発――の場面でのイワンの上機嫌が何によっているかというと、彼はフョードルの前に立ちながら、彼の顔を見ないでいることに成功したんですよ。彼はしょっちゅうこれに成功しています。逆に、相手が誰であろうが、彼が相手の「人間の顔」に向き合うことはほとんどないだろうと思います。

それで、私はこうもいいましょう。

イワンがフョードルの遺体（死に顔）を見ていないことも実は重要なのじゃないでしょうか？

あのときイワンは父の死後五日目にやっと戻ってきたので、柩にも間に合わなかった。ちょうど帰郷の前日に葬儀が行われたからだ。イワンが遅れた理由は、こうだった。つまり、アリョーシャが兄のモスクワの住所を知らぬため、電報を打つのにカテリーナの助けをかりたところ、彼女もちゃんとした住所を正確に知らず、イワンがモスクワに上京すればすぐに寄るだろうと当てにして、自分の姉と伯母にあてて電報を打った。ところが彼はモスクワに上京して四日目にやっと寄り、電報を読むと、もちろんすぐさま大急ぎでとんで帰ってきた。

（同）

そう私がわざわざいうのは、イワンがフョードルの顔を見ることをまたもや回避しただろうと疑っているからですね。「モスクワに列車が入る頃になって、「俺は卑劣な人間だ！」と自分自身に言った」イワンが、それから四日間、フョードルの顔を何とか忘れようとしていた・思い出さないようにしていただろう、と思っているんです。それはうまくいったろう、この四日間の彼はおそらく上機嫌でもあったろう、しかも、彼は必ず知らせのあることを承知していただろう、というんです。そうして、わざとその知らせの届くようなところを避けて歩いたろう、というんです。

私がいおうとしているのは、もしイワンが父親の遺体（死に顔）を目にしていたら、彼のその後の二か月はだいぶ違ったものになっていたのじゃないか、ということです。最後の最後までフョードルの顔を見なかったことが、その後の二か月間を相当恐ろしいものに変えてしまったのではないか、ということですね。

ここで――対照的に、という意味を込めて――、ミーチャについての言及をいくらか引用してみます。

あのときは神さまが僕を守ってくださったんです、と後日ミーチャはみずから語った。

（同）

ドミートリイは家にいなかった。家主の家族たち――家具職人の老人と、その老妻、それに息子とは、うさんくさそうなと言える目つきでアリョーシャを眺めた。「これでもう三日も家をあけてらっしゃいますからね、どっかへ出かけたんじゃねえですか」アリョーシャの執拗な問いに老人が答えた。アリョーシャは、老人が与えられた指示どおりに答えているのだとさとった。「グルーシェニカのところじゃないの、でなけりゃまたフォマーのところにでも隠れてるのかな」という彼の質問に（アリョーシャはわざとこんな単刀直入な言い方をしてみたのだが）、家主の家族たちは怯えたように彼を見つめた。『してみると、兄さんを好きなんで、肩をもっているんだな』アリョーシャは思った。『それは結構だ』

（同）

フェーニャもまた、彼の血まみれの両手をびっくりしたように見つめていたものの、やはりふしぎなほど素直に要領よく一つ一つの質問に答えはじめ、《ありのままの事実》を急いで述べてしまおうとするかのようだった。あらゆる細かな事実を彼女は少しずつ、一種の喜びさえおぼえながら語りはじめたが、それとて相手を苦しめるつもりなどまったくなく、心底から精いっぱい彼につくそうとあせっているふうに見えた。

……（中略）……

「旦那さま、何があったんでございます？」フェーニャがまた彼の両手を指さしながら、言った。悲しみに沈む今の彼にいちばん身近な存在であるかのような、同情のこもった口調だった。

（同）

（傍線は私・木下による）

そのミーチャは彼女に後でこういっていました。

「あ、そうそう、フェーニャ」もう座席についてから、彼は叫んだ。「さっきはお前にひどいことをしたけど、どうか赦しておくれ、この卑劣漢を哀れと思って赦してくれ……」

（同）

そうして、また、

「どなたが枕を持ってきてくださったんです？　どなたですか、そんな親切な方は！」まるでたいへんな好意にでも接したかのように、感激にみちた感謝の気持をこめて、彼は泣くような声で叫んだ。

（同）

「こうして二十三年たって、ある朝、もうすっかり白髪になったわたしが診察室に坐っていますと、ふいに溌剌とした青年が入ってきたのです。わたしがどうしても思いだせずにいると、その青年は指を一本立てて、笑いながらこういうじゃありませんか。『ゴット・デア・ファーター、ゴ

ット・デア・ゾーン、ゴット・デア・ハイリゲ・ガイスト！　僕は今この町についたので、くるみ四百グラムのお礼を言いに伺ったのです。だって、あのころはだれも僕に四百グラムのくるみなんて決して買ってくれなかったのに、あなただけはくるみを四百グラムも買ってくだすったんですからね』そのときわたしは、自分の幸福な青年時代と、長靴もはかずに裏庭にいたかわいそうな少年のことを思いだしたのです。わたしは胸がつまる思いで、言いました。『君は感謝の気持の篤い青年だ。だって、あんな幼いころにわたしのあげた四百グラムのくるみを、今までずっとおぼえていてくれるなんて』わたしは青年を抱擁して、祝福しました。そして、私は泣きだしました。青年は笑っていましたけれど、やはり泣いていたのです……なぜなら、ロシア人は泣くべきところで、笑うことが非常に多いからです。でも、この人は泣いていました。わたしにはそれがわかったんです。それが今や、悲しいことだ！」

「今だって泣いていますよ、ドイツ人の先生、今も泣いているんです、あなたは神さまのような人だ！」突然ミーチャが自席から叫んだ。

（同）

ミーチャにはいつも必ず彼にとっての味方――それがある瞬間だけにせよ――が現れます。そうして、彼は必ずそのことに気づき、彼らに感謝するんですね。彼は生身のひとりひとりの人間それぞれの「人間の顔」に向き合うことができるんです。それがフョードルを相手にすると、憎悪になってしまうとしても。そこで、語り手はミーチャの内心と言動とを一致しているものとして語ることができるんです。

そうしてミーチャは「讃歌」にまでまっしぐらに突き進みます。

自己の運命にとって宿命的とも言えるこの女性に対して、これほどの愛が、これほど新しい、いまだかつて経験したことのない感情が、胸の奥から湧き起ったことは、これまでに一度としてなかった。それは自分自身でさえ思いがけぬ感情であり、彼女の前で消えてしまいたいほどの、祈りに近いやさしい感情だった。「そうだ、消えてしまうのだ！」突然、何かヒステリックな感情の発作にかられて、彼は口走った。

（同）

（傍線は私・木下による）

監獄でアリョーシャと話したときは、こうもいっていました。

「ああ、人間は祈りの中で溶けてしまうがいい！」

（同）

彼の見た夢ではこうでした。夢ではあるけれど、彼がこの夢の通りの人間であることが読者にはわかります。

「いや、そのことじゃないんだ」ミーチャはそれでもまだ納得できぬかのようだ。「教えてくれよ。なぜ焼けだされた母親たちがああして立っているんだい。なぜあの人たちは貧乏なんだ。なぜ童（わらし）はあんなにかわいそうなんだ。なぜこんな裸の曠野があるんだ。どうしてあの女たちは抱き合って接吻を交わさないんだ。なぜ喜びの歌をうたわないんだ。なぜ不幸な災難のために、あんなにどすぐろくなってしまったんだ。なぜ童に乳をやらないんだ？」

そして彼は、たしかにこれは気違いじみた、わけのわからぬきき方にはちがいないが、自分はぜひともこういうきき方をしたい、ぜひこうきかねばならないのだと、ひそかに感じている。さらにまた、いまだかつてなかったようなある種の感動が心に湧き起り、泣きたくなるのを感ずる。もう二度と童が泣いたりせぬよう、乳房のしなびた真っ黒けな童の母親が泣かなくてもすむよう、今この瞬間からもはやだれの目にもまっ

たく涙なぞ見られぬようにするため、今すぐ、何が何でも、カラマーゾフ流の強引さで、あとに延ばしたりすることなく今すぐに、みんなのために何かしてやりたくてならない。

（同）

これらはそのまま読者に伝わります。ドミートリイ・カラマーゾフはこういうふうに表現しうる人物なんです。彼は開かれた人物であって、イワンのように閉鎖的で分裂した人物ではないんです。語り手がドミートリイを表現するためには、彼の周りのたくさんの人物たちをどんどん出してきて、彼と対話させることができるんです。ドミートリイは彼の周りのすべてのひとたちと「つながって」いるんです。しかも――強引ないいかたをしますが――、その「つながり」のなかへと、彼は自分自身を投げ出し、自分がそこに「消え」たり、「溶け」たりしてかまわないと思っているんです。それも、「カラマーゾフ流」にです。それに対して、イワンをドミートリイと同じように――同じレヴェルで――語ることはできません。イワンのために他の登場人物たちをどんどん出してくることなんかできません。

イワンには、彼にとっての味方が現れることがありません。彼の前には誰もいません。彼は誰とも「つながって」いません。彼には誰かとの「つながり」のなかへと自分自身を投げ出し、自分がそこに「消え」たり、「溶け」たりすることなんかまっぴらごめんです（とはいえ、彼は自分自身を誰かとの「つながり」のなかへと投げ出すことの意味が恐ろしいほどわかってもいます）。彼は、他人がどんなことになろうが、自分があくまで自分であること・自分がすべてを見届けることに固執します。それも、「カラマーゾフ流」にです。束の間、アリョーシャやゾシマ長老が浮かび上がってはきますが、その他に彼の前に「人間の顔」を持った生身の人間の現れることがありません。「孤独」と「離反」のなかに彼はいます。そこで、彼の前に現れるのが、人間ではなくて「悪魔」（他人ではなくて、自分自身）なんですね。そういうわけで、「悪魔」（他人でなくて、自分自身）でないと、イワンを表現できないんです。イワンは誰にも感謝しません。彼は最初から味方を拒絶し、感謝を嘲笑しているんです。そんな人物を表現することがどれだけ難しいかを想像してください。

分裂しているイワン・カラマーゾフは、その分裂した自分自身の「部分部分」どうしで対話せざるをえません。彼には自分以外の誰彼へ向けて――くだらないいいかたをしますが――本心を語ることすらできません。それができるためには、彼が自分自身であるレヴェル――「部分部分ばらばら」以上のレヴェル、せめてもうすこし他者へ向けて提出しうる程度にはまとまったレヴェル――の結論を持っていなくてはならないんです。私がいまいいたいのは、イワンの分裂した部分部分どうしの対話からは絶対に結論なんかが出るわけがなく（彼は絶対に結論なんかが出てこないからくりのなかに閉じこめられています）、外に向けて自分自身を語ることなどできないということなんです。イワンには絶対に「この二か月の間ずっと、犯人は自分以外の誰でもないと思いつめていた」なんてふうに自分を「まとめる」ことができません。「悪魔」が出てくるのは、イワン自身の必然であり、また彼を語る語り手の語りかたの――作品のつくり・構造上の――必然でもありました。

とはいえ、ミーチャを表現することが語り手にとって実に簡単なことだった、などということをいうつもりではないんです。私がここで問題にしているのは、イワンを表現することとの比較としてなのだ、とお断わりしておきます。

ちょっと思い出したので、トーマス・マンを引用してみましょう。

『さまよえるオランダ人』第二幕で、オランダ人はゼンタとの美しい二重唱で次のように歌います。

暗い炎がこの胸に燃えているのを、私は感じる。
不幸な身の私は、この炎を恋と呼んでよいのだろうか。

いや、いや、これは救いを求める憧憬なのだ。
ああ、このように愛らしい天使によって、
救いが私に与えられるとよいが！

この詩句はいかにも歌うことができる詩句ではあります。しかし、これほど複雑な思考の産物、心的にこれほどこみ入ったものが歌に歌われたこと、あるいは歌の言葉として指定されたことはかつて一度もありませんでした。呪われた男は、一目見てこの娘を愛します。しかし彼は、自分の愛は本来彼女に対するものではなく、救いに対するもの、救済に対するものだ、とわが身に言って聞かせるのです。とはいえ、一方では、彼の目の前にいる娘は、彼にとってやはり救いの可能性の化身にほかならないのですから、彼は宗教的な救済への憧憬から区別することはできないし、また区別したくもありません。なぜなら、彼の希望はここに彼女という姿をとっており、それが別の姿をとって現われることを、彼はもはや望むことができない。つまり、彼は救いということにおいてこの娘を愛している、ということになります。何と交錯した二重性でしょう。一つの感情の複雑な深淵が何と鋭く観察されていることでしょう。これは分析であります。

（トーマス・マン『リヒァルト・ヴァーグナーの苦悩と偉大』
青木順三訳　岩波文庫）
（傍線は私・木下による）

どうですか？　傍線部を私はイワン・カラマーゾフに当てはめてみたいんです。「これほど複雑な思考の産物、心的にこれほどこみ入ったもの」＝イワン・カラマーゾフが小説に現れたことは――ドストエフスキー自身の作品を除けば（しかし、私の頭にエミリ・ブロンテの『嵐が丘』がよぎりもしますが）――「かつて一度も」なかったのじゃないでしょうか？　イワン・カラマーゾフを表現すること――そのためにはかつてない表現方法が必要でした。ドストエフスキーは「人間」というものへの認識を、その認識のありかたを恐ろしいやりかたで切り開いてしまった作家だと私は思います。その切り開きかたを私は問題にしているわけです。

さて、「彼（イワン）の前には誰もいません。束の間、アリョーシャやゾシマ長老が浮かび上がってはきますが、その他に彼の前に「人間の顔」を持った生身の人間の現れることがありません」といったばかりの私ですが、むろん、私はわざとカテリーナ・イワーノヴナに触れなかったんです。といって、イワンにとってのカテリーナがどれほどの存在であるかということが、私にわかっているのでもありません。しかし、私は次の文章を問題にしたいんです。

もっとも、この当時彼は直接的な関係のまったくない、さる事情にすっかり気をとられていた。モスクワから帰って最初の数日のうちに、彼はカテリーナに対する炎のような狂おしい情熱に、もはや抜き差しならぬ勢いでのめりこんでしまったのだ。その後、全生涯に影響を与えたイワンのこの新しい情熱に関して語り起すには、ここはその場所ではない。それだけで、すでにほかの物語なり、別の長編なりの構想に十分使えるはずであるが、その長編にそのうち取りかかるのかどうか、わたしにもわかっていないのである。しかし、やはり黙っているわけにもいかないので、ここでは、すでに書いたように、あの夜イワンがアリョーシャといっしょにカテリーナのところから帰る途中、「俺は彼女に関心がないのさ」と言ったとき、あの瞬間ひどい嘘をついたのだ、ということだけ記しておこう。たしかにときには殺しかねないほど憎くなることも事実ではあったが、彼は狂おしいくらい彼女を愛していた。これには数多くの理由が重なっている。つまり、ミーチャの事件でショックを受けた彼女は、ふたたび戻ってきたイワンに、まるで救世主でも迎えたようにとびついた。彼女は感情を傷つけられ、侮辱され、卑しめられていた。ところがそこへ、以前から彼女を深く愛していた男が（そう、彼女にはそれ

がわかりすぎるくらい、よくわかっていた)、そして、その知性に対しても情操に対しても日頃から彼女が心からの敬意を払っていた男が、ふたたび現われたのである。

(ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫)

(傍線は私・木下による)

この文章でだけは、語り手はイワンを総括しているんですね。ここでだけは「部分部分ばらばら」にしないで確定的なこととして語るんです。何だか強引に語って、そういうことなんだよ、と「まとめて」しまうわけです。言及しておかなくてはならない事情なんだけど、ここは簡単に「まとめて」おくよ、と彼はいうんです。これは、本来やってはならないことであるはずです。やってはならないことだと語り手自身が承知しているからこそ、傍線部の断わりを挿まざるをえないんですよ。

なぜか？　もしこの事情までを詳細に語っていたら、「部分部分ばらばら」というやりかたでこれまで語ってきたイワンのある部分が薄められてしまい、読者の忍耐の限界をも超えて、作品が複雑になってしまうからです。また、おそらくは、やはり語り手がこの作品の主人公をアリョーシャだとしたいからでもあるでしょう。つまり、アリョーシャから離れないようにしながらイワンを語ることだけが語り手にとって重要だということでしょう。

しかし、どうですか？　この文章の不自然さ――もちろん語り手の意図したことです――からいっても、イワンの「部分部分ばらばら」が逆に際立ってこないでしょうか？

語り手は、「モスクワから帰って最初の数日のうちに、彼はカテリーナに対する炎のような狂おしい情熱に、もはや抜き差しならぬ勢いでのめりこんでしまった」という確定的な表現を、イワンについての自分のこれまでの語り――「部分部分ばらばら」の集積――としては「例外」扱いしているわけです。もし語り手が「その後、全生涯に影響を与えたイワンのこの新しい情熱」について彼のいうべつの長編を完成させたとすれば、そのときもイワンのカテリーナに対する「炎のような狂おしい情熱」は『カラマーゾフの兄弟』におけるように不確定的な表現をされているはずです。

また、逆に、この「例外」のやりかたで「部分部分ばらばら」なイワンを表現すると、どうなるかといえば、「この二か月の間ずっと、犯人は自分以外の誰でもないとイワンが思いつめていた」になりますが、語り手は絶対にそんなことをしません。そんな「まとめ」は語り手が表現したいと思っているイワンを損ないます。イワンを損なうだけでなく、せっかく彼に「あなたじゃない」といったアリョーシャをも損なうことになるでしょう。「あなたじゃない」がいったいどのようなものに対して発せられたことばなのか、ということですね。「あなたじゃない」がひたと見つめ、対決しようとしていたものが、どんなに途方もない・複雑きわまりない・恐ろしい・醜い・深い・大きなもの――というか、それは静止しているもの・「まとめ」の可能なものではなくて、いつまでもぐるぐる回りつづける「運動」なんですが――だったのか。その複雑さ・恐ろしさ・醜さ・深さ、大きさの度合いが大きければ大きいほど「あなたじゃない」も大きくなるんです。むろん、イワンを救おうとしているアリョーシャからすれば、現実に生身の人間としての彼が現実に生身の人間としてのイワンにさしのべる手は「この二か月の間ずっと、犯人は自分以外の誰でもないとイワンが思いつめていた」ということを切り口として出すしかないんです。で、これはイワンの「まとめる」ことのできない、不確定的に示される複雑さに対して非常に単純で簡潔で直截で確定的なものでなければなりませんでした。「あなたじゃない」に一切のあいまいさはありません。また、それによって「あなたじゃない」を突きつけられるイワンの「まとめる」ことのできない、不確定的に示される複雑さがここでさらにくっきりと読者の前に現われるはずでもあります。私もまたここでぐるぐると同じことの周りを回っていますが、「あなたじゃない」は決定的反応をイワンから引き出します。これは、同時に、読者からも決定的反応を引き出すでしょう。アリョーシャの「あなたじゃない」なしにイワンを表現することはできないんです。逆に、「あなたじゃない」なしにアリョーシャを表現することもできません。アリョーシャとイワンと読者との三者がここでひとつの運動に巻き込まれるこ

とになるんです。これが語り手の意図したことです。

というわけで、先の「例外」を除くと、イワン・カラマーゾフは「部分部分はらばら」に、彼の内心に生じた小さな――断片的な――「部分」を積み重ねていき（ということは、それらをなんとか「まとめ」ようとする読者――読者はどうしても「まとめ」ようとします――に対しては非常に不確定的なものとして表現されることになります）、そこに、たとえばアリョーシャやミーチャやスメルジャコフや「悪魔」をぶつけることによって確定的に生じる――断片的な――反応を積み重ねていくことで表現されるんです。

『カラマーゾフの兄弟』は、そういうつくりの作品なんです。

いいですか、私はこれまでずっとこの作品のつくり・構造についてしゃべっているんです。私がこの作品の内容についてしゃべっていると思っていましたか？もちろん、私はわざとそういうんですが、作品のつくり・構造についてしゃべることが作品の内容についてしゃべることになってしまう、作品の内容についてしゃべることが作品のつくり・構造についてしゃべることになってしまう――『カラマーゾフの兄弟』はそういう作品なんです。というか、こういうものこそが「作品」なんですよ。「作家の『なにを描くか』と『どのように描くか』とのせめぎ合い・たたかいの軌跡こそが作品」だと私はもう口が酸っぱくなるほどいってきました（だからこそ、ロシア語をまったく解さない私にこの一連の文章が書けるわけです）。そうして、このように作品を読むことのできない者に翻訳などできるわけがないというんです。

繰り返します。アリョーシャの「あなたじゃない」に一切のあいまいさはありません。作品のつくり・構造がそこにあいまいさを許しません。

兄弟同士の信頼関係のなかで、あたりまえの「事実」をめぐってのどこか思わせぶりな言い方は、かなり違和感を与え、端的にいって、居心地がわるい。ここには、父を殺したのは「あなたかもしれない」「あなたである」と言っているのと同じぐらいの意味が、その曖昧さのなかに隠されているということだ。

（亀山郁夫「解題」）

アリョーシャの「あなたじゃない」という言葉は、イワンは法的な意味において裁かれることはない、だから、そう苦しまないでほしい、という意味にとらえることができるように思えます。

（亀山郁夫「新訳『カラマーゾフの兄弟』を読む」　ＮＨＫ出版）

最先端＝亀山郁夫の面目躍如です。誰かこの「最先端」を止めろよ、この「最先端」を何とかしろよ、と私は思いますが、どうも大多数のひとは逆のことをしているようです。

そんなふうにしか作品を読み取ることのできない最先端＝亀山郁夫の翻訳でも『カラマーゾフの兄弟』の本質が損なわれることがないだの、彼の誤訳が単に部分的・表層的な問題（あるいは部分的な解釈の違い）でしかないだの、自分にはロシア語がわからないから誤訳を云々する資格がないだのと考えるひとは、もう「文学」に手をつけたり、論じたりするのを一切やめろ、と私はいいます。なぜなら、これは構造的・深層的な問題だからです。『カラマーゾフの兄弟』のつくり・構造と内容とがばらばらだとでもいうんですか？「文学」を何だと思っているのか？

……小説作品というのは「なにが描かれているか」より「どのように描かれているか」が大事だということです。これを説明するのは厄介で、これが厄介だということがそもそも問題なんですが、最大の障害は――私はだいぶ手加減していいますけれど――「どのように描かれているか」を通して「なにが描かれているか」を読まなくてはならないのに、「なにが」だけしか読まない・読めないひとの多すぎることです。その「なにが」を支えているのが「どのように」だというのに。

（「わからないときにすぐにわかろうとしないで、わからないという場所に……」
（〈『カンバセイション・ピース』（保坂和志　新潮文庫）〉解説）

最先端＝亀山郁夫の翻訳が一見『カラマーゾフの兄弟』らしく思えるのは、彼が単に目の前にある原典のテキストの一文一文をその場しのぎに、ある程度にはなんとか追えているから――彼に一文一文のつながりや構造の意味がわからないままでも、とにかく目の前にあるロシア語を日本語に置き換える作業だけはしているから、なんとか格好がついてしまっている、ただそれだけのことです。一文一文をそれぞれ検討すれば間違いではないかもしれないけれど（しかし、膨大な誤訳がすでに専門家たちによって指摘されています）、文脈上・構造上では明らかに誤っているというわけです。私がずっと問題にしているのは、最先端＝亀山郁夫の個々の表面的な誤訳だの改行だのなんかじゃありませんよ。また、私は原卓也の訳が完璧だなんていってもいません。原訳にも誤りはあるだろうといっています（先の専門家たちにもそれは指摘されています）し、さらによい訳を願うともいっているんです。それよりも、最先端＝亀山郁夫がひどすぎるというんです。私が問題にしているのは、最先端＝亀山郁夫のあまりの読解力のなさです。あまりに低レヴェルであるどころか、レヴェル云々以前の、いいかげんのでたらめだらけだというんです。『カラマーゾフの兄弟』の全体をこうまで読み取れていないひとにこの作品を訳せるわけがないといっているんですよ。いつまでたっても、これのわからないひとがいる。私が問題にしているのは、翻訳が原作の構造的な意味を汲み取ってなされているかどうかということです。極論すると、原作の構造的な意味の汲み取りさえ正確にできていれば、翻訳はもうそれだけでいいんです。表面的な個々の誤訳なんかいいんですよ（ない方がいいのはもちろんですけれどね。しかし、原作の構造的な意味の汲み取りが正確にできていればいるほど、表面的な誤訳も減るだろうと私は思います）。いいですか、原作の構造的な意味を汲み取らずに、その一文一文を追いかけたって無駄だというんです。原作の一文が長文であるなら、それは原作が自ら構造的に要請した長文であるはずだから、基本的には、それを細切れに訳しては――いくら日本語として読みやすくなろうが――駄目なんですよ。ごく普通の日本語としてどんなに読みづらかろうが、構造をそのまま訳すことが第一です。構造をそのまま訳すことができるためには、原作をきちんと読み取ることが不可欠です。最先端＝亀山郁夫はもうそのことだけでひどすぎるんです。原作の構造的な意味を解さず（また解そうともせず）に、原卓也訳と亀山郁夫訳のそれぞれの表面的な誤訳なんかを採りあげて「どっちもどっち」なんていうレヴェルの考察をいくらやったって無駄です。最先端＝亀山郁夫の場合では、彼の訳した一文一文が作品の構造的な意味を理解せずになされたもの（だから、それらはべつに『カラマーゾフの兄弟』の一文一文でなくてもかまわないもの・『カラマーゾフの兄弟』の構造・文脈を離れて、『カラマーゾフの兄弟』とは無関係に、単にそこに書かれているロシア語の一文一文にすぎないものをばらばらに日本語にしただけ）であって、その一文一文は作品としての『カラマーゾフの兄弟』を構築している、それぞれに必然性のある、揺るがせない一文一文、相互につながって全体を支えている一文一文ではありえない、といっているんです。最先端＝亀山郁夫の提出した「結果」としての訳なんかどうだっていいんです。だいたいが、私はそれを読んでもいない。私は、最先端＝亀山郁夫の訳出の「過程」＝読み取りが問題だといっているんです。「作家の「なにを描くか」と「どのように描くか」とのせめぎ合い・たたかいの軌跡こそが作品」であるからには、でたらめだらけ・低レヴェルの読み取りしかできていない最先端＝亀山郁夫には翻訳ができませんし、すでに提出されている訳を翻訳と呼ぶことはできません。少なくとも原卓也にはこの作品における「作家の「なにを描くか」と「どのように描くか」とのせめぎ合い・たたかいの軌跡」が正しく理解できています。それで、なおいいますが、私のここまで延々とつづいている一連の文章を読んで、「たしかに「あなたじゃない」の亀山解釈はおかしいなあ、たしかにジューチカ＝ペレズヴォンのはずなのに亀山解釈はめちゃくちゃだなあ、たしかに「大審問官」の亀山解釈は的はずれもいいところだなあ、しかも、それらはみな構造的につながってもいるじゃないか」と認めつつ、「だからといって、亀山先生の訳が素晴らしいことに変わりはない」なんてことを考えているひとは最悪です。

もう根本的に間違っている。作品の「なにが」が「どのように」に支えられていることがわかっていない。そんなひとの読書こそ「最先端＝亀山郁夫的読書」だというんです。そんなひとはもう「文学」から足を洗え、そんなひとには「文学」の一切がわからない、と私はいいます。また、私がこうまで最先端＝亀山郁夫を批判する理由が『カラマーゾフの兄弟』への敬意だということがわからないひとも、さようなら。そういうわけで、最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』は『カラマーゾフの兄弟』ではありません。だから、亀山郁夫への批判という意味を持たせずに、亀山訳を引いて『カラマーゾフの兄弟』について語る（「表面的にはこれでも間違いじゃないよね」などと考える）ということをするひとがいるとすれば、そのひとはもうそれだけで駄目ですね。

これも引用しておきましょう。

哲学においては、論拠がちがう同じ主張なんてものはそもそも存在しない。

（永井均『〈子ども〉のための哲学』　講談社現代新書）

しかし、手綱を緩めずに先へ進みましょう。

イワンはスメルジャコフとの三度めの対面で、フョードルを殺したのがミーチャではなく、スメルジャコフであることを知ります。

「実行した？　じゃ、ほんとにお前が殺したのか？」イワンはぞっとした。脳の中で何かが動揺したかのようで、全身がぞくぞくと小刻みにふるえだした。今度はスメルジャコフのほうがびっくりして相手を見つめた。どうやら、イワンの恐怖の真剣さにやっとショックを受けたようだった。

「それじゃ、本当に何もご存じなかったので？」イワンの目を見つめて、ゆがんだ薄笑いをうかべながら、彼は信じかねるようにねちっこい口調で言った。

イワンはなおも相手を眺めていた。舌がしびれてしまったかのようだった。

ああ、ワーニカはピーテルに行っちゃった、
わたしは彼を待ったりしない！

突然、頭の中であの歌の文句がひびいた。

「おい、お前が夢じゃないかと、俺は心配なんだ。俺の前にこうして坐っているお前は、幻じゃないのか？」彼はたどたどしく言った。

「わたしたち二人のほか、ここには幻なんぞいやしませんよ。それともう一人、第三の存在とね。疑いもなく、それは今ここにいます。その第三の存在はわたしたち二人の間にいますよ」

「だれだ、それは？　だれがいるんだ？　何者だ、第三の存在とは？」あたりを眺めまわし、その何者かを探して急いで隅々を見わたしながら、イワンは怯えきって叫んだ。

「第三の存在とは、神ですよ。神さまです。神さまが今わたしたちのそばにいるんです。ただ、探してもだめですよ、見つかりゃしません」

「お前が殺したなんて、嘘だ！」イワンは気違いのようにわめいた。「お前は気が狂ったのか、でなけりゃこの前みたいに、俺をからかってやがるんだ！」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

もちろん、イワンの想起しているのは例の「悪魔」です。イワンは「悪魔」が自分の幻覚だと承知しています。だから、いま目の前にいるスメルジャコフも自分の幻覚ではないのか、と疑うわけです。ところが、偶然にも、スメルジャコフが――いいですか、イワンとスメルジャコフとはそれぞれにべつのことを考えているんですよ。スメルジャコフはイワンの「悪魔」なんか知りません。彼には彼のこの二か月があり、その間に生じた変化があるんです。それで――「第

三の存在」などといいだすんですね。とたんに、やっぱり「悪魔」は実在するんだ、あれは自分の幻覚なんかじゃなかったんだとイワンは思い、怯えるんです。アリョーシャとの会話と同じことです。

「夜中に、あいつが来ていたとき、お前もいたんだな……白状しろ……あいつを見たんだろ、見たな?」

（同）

イワンは「悪魔」が自分の幻覚であるという認識と、実在するものだという認識との間を「行ったり来たり」します。これはちょうど、フョードルを殺したのが自分ではないという認識と、自分だという認識とのひっきりなしの往復に重なりもします。

「ほんとに、ほんとに今までご存じなかったんですか?」スメルジャコフがもう一度たずねた。

「ああ、知らなかった。ドミートリイだとばかり思っていたんだ。兄さん! 兄さん! ああ!」彼はだしぬけに両手で頭をかかえた。「おい、お前一人で殺したのか? 兄の手を借りずにか、それとも兄といっしょか?」

「あなたといっしょにやっただけです。あなたといっしょに殺したんですよ。ドミートリイさまは本当に無実なんです」

「わかった、わかった……俺のことはあとだ。どうしてこんなに震えるんだろう……言葉が出てきやしない」

「あのころはいつも大胆で、『すべては許される』なんて言ってらしたのに、今になってそんなに怯えるなんて!」いぶかしげにスメルジャコフが言った。

（同）

いいですか、スメルジャコフでさえ、このイワンをいぶかしく思ったんですよ。それほどにイワンは怯えきっていたんです。

「さあ話せ、話してくれ!」

彼は冷静に戻ったかのようだった。今からスメルジャコフがすべてを話すだろうと、確信しきって待ち受けていた。

「どんなふうにやってのけたかってことをですか?」スメルジャコフが溜息をついた。「ごく自然な方法でやってのけたんですよ。あなたの例の言葉がきっかけで……」

「俺の言葉はあとにしろ」イワンはふたたびさえぎったが、もはや先ほどのようにどなったりせず、しっかりと言葉を発音し、まったく自分を抑えたかのようだった。

（同）

イワンはそれでもまだ殺人犯がドミートリイであることに希望をつなごうとしています。

「待てよ……こんがらがってきたぞ。とつまり、やはり殺したのはドミートリイで、お前は金を取っただけなのか?」

（同）

しかし、もはやスメルジャコフもいいたいことをいいます。

「いいえ、あの方は殺しちゃいません。そりゃ、今でもわたしは、あの方が犯人だと、あなたに言うこともできるわけです……でもいまさらあなたに嘘をつく気はないんですよ、なぜって……なぜって、もし本当にあなたが、お見受けしたとおり、いまだに何一つわかっていらっしゃらずに、ご自分の明白な罪をわたしにかぶせようと演技していらっしゃるわけではないとしても、やはりあなたはすべてに対して罪があるんです

からね。だって、あなたは殺人のことも知っていらしたし、わたしに殺人を託して、ご自分はすべてを承知のうえでお発ちになったんですから。だからこそ、あの晩わたしは、この場合、殺人事件の主犯はもっぱらあなたで、わたしはたとえ直接に手を下したにせよ、主犯ではないってことを、面と向ってあなたに証明しようとしたんです。あなたは法律上も殺人犯人にほかならないんですよ！」

「なぜ、なぜ俺が殺人犯なんだ？　ああ！」イワンはついに堪えきれなくなり、自分のことは話の終りにまわそうと言ったことも忘れた。

（同）

「それじゃ、俺がそんなことを望んでいたというのか、望んでいたと？」

イワンはまたしても歯ぎしりした。

（同）

イワンはある意味、「真実」に恐ろしいほど接近していました。しかし、それでもまだ彼は「真実」を直視できません。このときでもイワンはやはり彼とスメルジャコフとの関係――これまで通りの上下関係――においてしゃべっているにすぎません。彼はスメルジャコフを「人間と見なさず、どうせ蠅くらいにしか見ていない」んですよ。

「おい、お前は不幸な、卑しむべき人間だな！　俺がいまだにまだお前を殺さずにきたのは、明日の法廷で答えさせるためにとっておくんだってことが、お前にはわからないのか。神さまが見ていらっしゃる」イワンは片手を上にあげた。「ことによると、俺にも罪があるかもしれないし、ことによると俺は本当に、親父が……死んでくれることを、ひそかに望んでいたかもしれない。しかし、誓って言うが、俺にはお前が考えているほどの罪はないし、ことによると、全然お前をそそのかしたことにならぬかもしれないんだぞ！　そう、そうだとも、俺はそそのかしたりしなかった！　しかし、いずれにせよ、俺は明日、法廷で自分のことを証言する。決心したんだ！　何もかも話すんだ、何もかもな。しかし、お前を連れて出廷するからな！　法廷でお前が俺に関して何を言おうと、どんなことを証言しようと、俺は甘んじて受けるし、お前を恐れたりしない。こっちこそ、何もかも裏付けてやるよ！　しかし、お前も法廷で自白しなけりゃいかんぞ！　必ずそうしなけりゃいけない。いっしょに行くんだ！　そうするからな！」

イワンは荘重に力強くこう言い放った。光りかがやくその眼差しだけからでも、きっとそうなることは明らかだった。

（同）

（傍線は私・木下による）

「「神さまが見ていらっしゃる」イワンは片手を上にあげた」ですね。しかし、彼のいう「神さま」はついさっきスメルジャコフの口にした「神さま」であって、イワンの考えている「神」ではありません。スメルジャコフが相手だからこそできた言明です。

ところで、この同じ夜に片手を上にあげた人物がもうひとりいました。

「アリョーシャ、神さまの前に立ったつもりで、掛値なしに本当のことを言ってくれ。お前は俺が殺したと信じているのか、それとも信じていないのか？　お前は、お前自身は、そう信じているのか、どうなんだ？　本当のことを言ってくれ、嘘をつかずに！」彼は狂おしく叫んだ。

アリョーシャは全身を揺すぶられたような気がした。心の中を何か鋭いものが通りすぎたみたいで、彼にはその気配さえきこえた。

「いい加減にしてくださいよ、何を言うんです……」途方にくれたように彼はつぶやきかけた。

「本当のことを言ってくれ、隠さずにな。嘘をつくなよ！」ミーチャがくりかえした。

「兄さんが人殺しだなんて、ただの一瞬も信じたことはありません」突然アリョーシャの胸からふるえ声がほとばしりでて、彼はさながら自分のことばの証人に神を招くかのように、右手をあげた。とたんにミーチャの顔全体を幸福の色にかがやかした。

「ありがとう！」気絶のあと息を吹き返すときのように、彼は長く語尾をひいて言った。「お前は今、俺を生き返らせてくれたよ……本当の話、今までお前にきくのがこわかったんだ。なにしろ相手がお前だからな！さ、もう行くがいい、行きなさい！　お前は俺に明日のための力をつけてくれたよ、お前に神の祝福があるように祈ってるぜ！　それじゃ、行きなさい、イワンを愛してやってくれ！」最後の言葉はミーチャの口からほとばしりでた。

（同）

アリョーシャのあげた「右手」とイワンのあげた「片手」との違いを考えてみてくれませんか？　また、ミーチャとイワンとの違いについても考えてほしいんです。どうでしょう、このときにもミーチャは「イワンを愛してやってくれ！」といっていたじゃないですか？　ミーチャには誰彼にそういう気遣いをする懐の深さ――彼にはいろんな誰彼の「人間の顔」が見えていて、いつもその「人間の顔」に直進していくし、また返答を求めるんですね――があるんです。イワンにはけっしていえないことばです。

ともあれ、イワンはスメルジャコフのいる小屋を出ます。

吹雪は相変らずつづいていた。最初の五、六歩を彼はさっそうと歩いたが、ふいにその足がふらつきはじめたかのようだった。『これは肉体的なものだろう』苦笑して、彼は思った。さながら喜びに似た気持が今や彼の心に湧いた。彼は自己の内部に限りない意志の堅固さを感じた。最近あんなにひどく自分を苦しめていた迷いも、いよいよこれで終りなのだ！決意はできたし、『もう変ることはない』――幸福な気持で彼は思った。

（同）

（傍線は私・木下による）

悲しいことに、イワンのこの「幸福な気持」というのがまたしても彼の「部分部分ばらばら」の一部にすぎないと私は思っているんですよ。

スメルジャコフとの二度めの対面の終わりはこうでした。このときの方がまだイワンにとってよかったと私は思っているんです。

イワンは怒りに全身をふるわせながら、立ちあがり、外套を着ると、それ以上スメルジャコフに返事をせず、見ようともしないで、足早に小屋を出た。すがすがしい夜気が気分をさわやかにしてくれた。空に月が明るくかがやいていた。さまざまな思いと感覚の恐ろしい悪夢が、心の中でたぎり返っていた。『今すぐスメルジャコフを訴えに行こうか？　しかし、何と言って訴えよう。あいつはとにかく無実なんだからな。あべこべに、あいつが俺を訴えることになるだろう。実際、何のためにあのときチェルマーシニャへ行ったりなんかしたんだ？　なぜ、何のために？』イワンは自分に問いかけた。『そう、もちろん、俺は何事か期待していたんだ。あいつの言うとおりだ……』と、これでも百遍目にもなるのだが、またしても、あの最後の夜、階段の上から父の様子にきき耳をたてたことが思い起された。だが今はそれを思いだすなり、ひどい苦痛をおぼえたため、突き刺されたようにその場に立ちすくんだほどだった。『そうだ、俺はあのときあの事態を期待していたんだ、たしかにそうだ！　俺は望んでいた、殺人を望んでいたんだ！　俺が殺人を望んでいたって？　ほんとに望んでいたのだろうか？　……スメルジャコフのやつを殺さなけりゃいけない！　もし今スメルジャコフを殺す勇気もないんなら、これから生きゆく値打ちもないんだ！』イワンはそのとき、自分の家へ寄らずに、まっすぐカテリーナのところへ行き、その姿で彼女

をびっくりさせた。まるで狂人のようだったのである。彼はスメルジャコフとの話を、細かい点にいたるまで残らず伝えた。どんなに彼女が説得しても、イワンは気を鎮めることができず、のべつ部屋の中を歩きまわって、きれぎれに異様なことを口走っていた。やっと腰をおろしたものの、テーブルに肘をつき、両手で頭を支えて、奇妙な警句めいた言葉をつぶやいた。

「殺したのがドミートリイではなく、スメルジャコフだとすると、もちろんそのときは僕も共犯だ。なぜって僕はたきつけたんだからね。僕がたきつけたのかどうか、まだわからんな。しかし、殺したのがドミートリイでなく、あいつだとしたら、もちろん僕も人殺しなんだ」

（同）

（傍線は私・木下による）

右の引用部分について、私は以前にこういいました。

いいですか、「あいつはとにかく無実なんだからな」なんていうのはイワンのごまかしですよ。そうして、先にもいいましたが、「殺したのがドミートリイではなく、スメルジャコフだとすると」という条件づけは、まだイワンが自分を正視していないということを示します。しかし、それよりも、彼がそう考えながらも、「狂人のよう」になってしまったことの方に注目してください。この動揺がイワンです。イワン・カラマーゾフなんです。

……（中略）……

イワンはまたしても、ただ表面的事実に頼っただけですよ。またしても自分を正視するのを避けた・ごまかしたんです。しかし、彼の内心はこの間もずっと自分が人殺しだと知っていたんですよ。だから、ついにそれが身体の変調として現われてきたんです。とはいえ、語り手はここでイワンが表面的事実に頼っていることそのままに自身も表面的事実を語りつづけるんです。

それでも、まだこのスメルジャコフとの二度めの対面の後の方が、三度めよりもイワンにとってよかった、まだ彼が「真実」に向き合おうとしていただろうと私は思うわけです。

三度めの対面の後のイワンの「幸福な気持」も、実はやはりスメルジャコフこそが犯人だったという表面的事実に頼った結果にすぎないだろうと私は思うんです。表面的事実として、単にミーチャからスメルジャコフへと犯人が移動したにすぎません。いまだに彼は「真実」に、フョードルの「人間の顔」に、あるいはミーチャの、スメルジャコフの「人間の顔」に、また、ありとあらゆる「人間の顔」に向き合うことをしていません。イワンはただ表面的事実の処理を行なっただけです。そう私には思えてならないんですね。

引用を繰り返しますが、

「ことによると、俺にも罪があるかもしれないし、ことによると俺は本当に、親父が……死んでくれることを、ひそかに望んでいたかもしれない。しかし、誓って言うが、俺にはお前が考えているほどの罪はないし、ことによると、全然お前をそそのかしたことにならぬかもしれないんだぞ！　そう、そうだとも、俺はそそのかしたりしなかった！　しかし、いずれにせよ、俺は明日、法廷で自分のことを証言する。決心したんだ！　何もかも話すんだ、何もかもな」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

――やれやれ。イワンがここでいっている「罪」が何であるかといえば、最先端＝亀山郁夫のいう通りの「罪」ですね。つまり、法的にどうか――他人の目から見てどうか――ということでしかありません。しかし、もちろん読者はここでイワンの認識が甘すぎること、彼がこの期に及んでまだこんなことをい

うのか、と首を振るのでなければなりません。間違っても、この二か月間のイワンが狂気に陥るほど苦しんできたのが、法的にどうかなどという視点での「罪」だなんて考えてはなりません。このイワンの台詞は、単純に相手がスメルジャコフだから口にされたものであって、しかも法廷で云々できる「罪」を問題にしているだけです。表面的事実に沿ったことを口にしているだけ、彼がまだこの程度の（甘い）認識にすがろうとしていたことの表現にすぎません。これを、「何だ、やっぱりイワンは自分の行為が法に触れるかどうかを気にかけていたんじゃないか」なんて考えたひとがいるなら、そのひとも「最先端」ですよ。

イワンはまだ「真実」を回避しつづけます。しかし、「真実」の方で彼を追い立てます。イワンはそれに耐え切ることができません。これを表現するのに、語り手は彼を「部分部分ばらばら」にするんです。

イワンの「幸福な気持」とミーチャのこれと比べてみてください。

「なぜあのとき、あんな瞬間に、俺が《童（わらし）》の夢を見たんだ？『なぜ童はみじめなんだ？』これはあの瞬間、俺にとって予言だったんだよ！俺は《童》のために行くのさ。なぜって、われわれはみんな、すべての人に対して罪があるんだからな。すべての《童》に対してな。なぜって、小さい子供もあれば、大きな子供もいるからさ。人間はみな、《童》なんだよ。俺はみんなの代りに行くんだ。だって、だれかがみんなの代りに行かなけりゃならないじゃないか。俺は親父を殺しやしないけど、それでも俺は行かねばならないんだ。引き受けるとも！」

（同）

（傍線は私・木下による）

もう私は後でいおうとしていたことをいってしまっているだろうと思いますが、ここはとぼけて、まだしゃべりつづけます。

イワンの「幸福な気持」は、まだしばらくの間持続します。

『明日に向けてこれほど固い決心ができていなかったとしたら』ふいに快感をおぼえて彼は思った。『あの百姓を助けるのにまる一時間も費やしたりせず、そのまま素通りして、あいつが凍死しようと唾でも吐きすてるだけだったにちがいない……それにしても、これほど自分を観察することができるとはな！』その瞬間、いっそう強い快感とともに彼は思った。『ところがあの連中は、俺が気違いになりかけていると、決めてかかったんだからな！』

（同）

イワンはアリョーシャにこう問いかけたばかりでした。

「おい、アレクセイ、人間がどんなふうに発狂してゆくか、知ってるか？」まったく突然にイワンが、もはやすっかり苛立たしさの消えた低い声でたずねた。その声には思いがけなく、きわめて素朴な好奇心がひびいていた。

「いいえ、知りません。狂気にもいろいろな種類がたくさんあると思うけど」

「じゃ、自分が発狂してゆくのを、観察できると思うか？」

（同）

彼の「幸福な気持」は唐突に失われます。

わが家に帰りつくと、彼は突然、唐突な疑問をいだいて立ちどまった。『今すぐ、これから検事のところへ行って、すべてを申し立てる必要はないだろうか？』彼はふたたびわが家の方に向きを変えて、この疑問を

解決した。『明日、全部ひとまとめにしよう！』彼は心につぶやいた。と、奇妙なことに、ほとんどすべての喜びが、自分に対する満足が、一瞬のうちに消え去った。部屋に足を踏み入れたとき、ふいに何か氷のようなものが心に触れた。それは、まさしくこの部屋に現に存在し、また以前にも存在した、何かやりきれないほどうとましいものの思い出であり、もっと正確に言えば、警告であった。

（同）

（傍線は私・木下による）

翌日の法廷ではイッポリート検事にこういわれましたね。

「最後に、イワン・カラマーゾフ氏は昨夜これほど重大な情報を真犯人から得たのに、落ち着きはらっていたのです。なぜ、すぐにそれを届けないのでしょうか？　なぜ朝まで延ばしていたのでしょう？」

（同）

しかし、検事のことはどうでもよくて、そんなことより、これを思い出しますね。

　倦むことなく実行するがよい、夜、眠りに入ろうとして、『やるべきことを果していなかった』と思い出したなら、すぐに起きて実行せよ。

（同）

ゾシマ長老のそのことばにつづくのはこうでした。

　もし周囲の人々が敵意を持ち冷淡で、お前の言葉をきこうとしなかったら、彼らの前にひれ伏して、赦しを乞うがよい。なぜなら実際のところ、お前の言葉をきこうとしないのは、お前にも罪があるからである。相手がすっかり怒って話ができぬ場合でも、決して望みを棄てず、おのれを低くして黙々と仕えるがよい。もしすべての人に見棄てられ、むりやり追い払われたなら、一人きりになったあと、大地にひれ伏し、大地に接吻して、お前の涙で大地を濡らすがよい。そうすれば、たとえ孤独に追いこまれたお前をだれ一人見も聞きもしなくとも、大地はお前の涙から実りを生んでくれるであろう。たとえこの地上のあらゆる人が邪道に落ち、信仰を持つ者がお前だけになるといった事態が生じても、最後まで信ずるがよい。そのときでも、ただ一人残ったお前が、犠牲を捧げ、神をたたえるのだ。かりにそのような者が二人出会えば、それが全世界であり、生ある愛の世界なのだから、感動して抱擁し合い、主をたたえるがよい。たとえそれが二人であっても、主の真理は充たされたからだ。

　もし自分が罪を犯し、おのれの罪業や、ふと思いがけず犯した罪のことで死ぬまで苦しむようであれば、他の人のために喜ぶがよい。正しい人のために喜び、たとえお前が罪を犯したにせよ、その人が代りに行いを正しくし、罪を犯さずにいてくれたことを喜ぶがよい。

（同）

どうでしょう？　それらはイワンに最もできないことじゃないでしょうか？

　いや、いってしまいましょう。イワン・カラマーゾフに欠けているもの、それさえあれば彼が救われるはずのもの――それはこれなんです。

「お母さん、僕の血潮である大事なお母さん、本当に人間はだれでも、あらゆる人あらゆるものに対して、すべての人の前に罪があるんです。人はそれを知らないだけですよ、知りさえすれば、すぐにも楽園が生まれるにちがいないんです！」ああ、はたしてこれが誤りであろうか、わたしは泣きながら思った。ことによると本当に、わたしはすべての人に対して、世界じゅうのだれよりも罪深く、いちばんわるい人間かもしれない！

（同）

（傍線は私・木下による）

わが友よ、神に楽しさを乞うがよい。幼な子のように、空の小鳥のように、心を明るく持つことだ。そうすれば、仕事にはげむ心を他人の罪が乱すこともあるまい。他人の罪が仕事を邪魔し、その完成をさまたげるなどと案ずることはない。「罪の力は強い、不信心は強力だ、猥雑な環境の力は恐ろしい。それなのにわれわれは一人ぼっちで無力なので、猥雑な環境がわれわれの邪魔をし、善行をまっとうさせてくれない」などと言ってはならない。子らよ、こんな憂鬱は避けるがよい！　この場合、救いは一つである。自己を抑えて、人々のいっさいの罪の責任者と見なすことだ。友よ、実際もそのとおりなのであり、誠実にすべての人すべてのものに対する責任者と自己を見なすやいなや、とたんに本当にそのとおりであり、自分がすべてのものに対して罪ある身であることに気づくであろう。

（同）

（傍線は私・木下による）

何のために大地を抱きしめたのか、彼にはわからなかったし、なぜこんなに抑えきれぬほど大地に、大地全体に接吻したくなったのか、自分でも理解できなかったが、彼は泣きながら、嗚咽しながら、涙をふり注ぎながら、大地に接吻し、大地を愛することを、永遠に愛することを狂ったように誓いつづけた。『汝らの喜びの涙を大地にふり注ぎ、汝のその涙を愛せよ……』心の中でこんな言葉がひびいた。何を思って、彼は泣いたのだろう？　そう、彼は歓喜のあまり、無窮の空からかがやくこれらの星を思ってさえ泣いたのであり、《その狂態を恥じなかった》のである。さながら、これらすべての数知れぬ神の世界から投じられた糸が、一度に彼の魂に集まったかのようであり、彼の魂全体が《ほかの世界に接触して》、ふるえていたのだった。彼はすべてに対してあらゆる人を赦したいと思い、みずからも赦しを乞いたかった。ああ、だがそれは自分のためにではなく、あらゆる人、すべてのもの、いっさいのことに対して赦しを乞うたのだ。『僕のためには、ほかの人が赦しを乞うてくれる』ふたたび魂に声がひびいた。

（同）

（傍線は私・木下による）

もう一度先ほどのミーチャ。

「なぜあのとき、あんな瞬間に、俺が《童（わらし）》の夢を見たんだ？『なぜ童はみじめなんだ？』これはあの瞬間、俺にとって予言だったんだよ！　俺は《童》のために行くのさ。なぜって、われわれはみんな、すべての人に対して罪があるんだからな。すべての《童》に対してな。なぜって、小さい子供もあれば、大きな子供もいるからさ。人間はみな、《童》なんだよ。俺はみんなの代りに行くんだ。だって、だれかがみんなの代りに行かなけりゃならないじゃないか。俺は親父を殺しやしないけど、それでも俺は行かねばならないんだ。引き受けるとも！」

（同）

（傍線は私・木下による）

イワンにはこの覚悟がありません。彼はミーチャの「讃歌」――他の誰かとの「つながり」のなかへと自分自身を投げ出し、自分がそこに「消え」たり、「溶け」たりすること、ですね――を頭では理解することができますが、心で感じること・信じることができないんです。いや、彼の「部分」はミーチャの「讃歌」に圧倒的な共感を覚えているはずです。このことの、底の底まで考え抜いている自分をさしおいて、愚かなミーチャなんぞが「讃歌」に酔いしれやがって、と彼は思っているに違いありません。「讃歌」を本当に歌うべきなのはミーチャで

はなく、この俺・イワンなのだ、と思ってもいるでしょう（同様に、彼は彼の「すべては許される」をろくに理解もせずに殺人を決行したスメルジャコフに憤ってもいたでしょう）。しかし、彼のべつの「部分」はそんな共感に大笑いし、嘲っているんです。おやおや、君は本気で馬鹿みたいに「讃歌」なんぞ歌うのかい？――そんなふうに、彼の「部分部分」が互いに争います。

イワンに欠けているのは、彼が「すべての人に対して罪がある」という自覚です。しかも、この自覚は必ず「僕のためには、ほかの人が赦しを乞うてくれる」がセットになっていなければなりません。これこそが――「謙遜な勇気」（キルケゴール）を持って――個々の「人間の顔」に向き合うことです。しかし、イワンは個々の「人間の顔」に向き合うことなしに「人類全体」の幸福などを考えつづけたあげく、フョードル殺害の後でもそれにしがみつこうとしたために自滅することになるんです。

イワンが自滅する・狂気に陥っていく――分裂してはいるけれど、結局ひとりの人間であって、一個の身体でしかないイワンに生じたこと。そのことで、ちょっとわかりやすい例を提示してみます。これは十数年前の――ほぼ一年間の――私自身の実際の話ですけれど、ある日、右耳の上部の毛髪がごっそりきれいに・つるつるになくなっていたんですね。そのしばらく前から洗髪していると、かなりの抜け毛のあることは認識していました。しかし、そんなことになっているとは思わなかった。もうそこからはどんどん毛が抜けていきました。頭にちょっとさわるだけで、抜け毛が手のひらいっぱいになるという毎日。風呂に入るたびに排水口の蓋から山盛りの毛髪を掬い上げなければならない毎日。結局、頭髪のほとんどが抜けてしまいました。円形脱毛症が群発したというわけです。医者にはストレスが原因だといわれました。私にはそんなストレスの自覚がありませんでしたし、周囲にもそういいつづけました。しかし、実のところ、もしかすると、と思い当たるふしがないでもありませんでした。しかし、たとえ、それがまさに当のストレスであったにせよ、そんなつまらない――私にはそう思われました――もののためにこれほどの脱毛が起こるなどということは信じられませんでした。

それで、私の思ったのはこういうことです。いくら自分が心でそのストレス（とおぼしきもの）に対して平気だ・大丈夫だ・どうってことないと考えているにせよ、身体の方でその心についてこれないことがあるのだ。人間にとって身体とはそのようなものなのだ。身体の方が心より正直なのだ。だから、逆に身体から心を推測・判断する方が、私自身の直面している現実の問題を正確に認識することになるのではないか？

これをそのままイワン・カラマーゾフに適用することができると私は考えます。この原理で、イワンは狂気に陥っていくんです。

しかも、イワン自身が、自分のこの「部分部分ばらばら」のからくりを承知してもいたでしょう。だから、なお始末が悪いんです。

「ついでに言うと、僕は君の言葉をきいて、いささかおどろいているんだ。だってさ、この前しきりに言い張っていたみたいに、僕を単なる君の幻想と見なしたりせず、少しずつ本当に僕を実在の何物かと受けとりはじめたみたいじゃないか」

（同）

「僕は君の幻覚でこそあるけれど、ちょうど悪夢の中のように、君がこれまで頭に思いうかべたこともないような、独創的なことを話しているだろう。だから、こうなるともう僕は君の考えを蒸し返しているわけじゃない。にもかかわらず、僕は君の悪夢でしかないし、それ以上の何物でもないんだからね」

「嘘をつけ。お前の目的は、ほかでもない、お前が一個の独立した存在で、俺の夢ではないってことを、俺に信じこませることじゃないか。だから今だってお前はわざと、自分が夢だってことを強調しているんだ」

（同）

（傍線は私・木下による）

「お前は夢だ、だから実在していないんだ！」

「そうむきになって僕を否定するところを見ると」ジェントルマンは笑いだした。「君はやっぱり僕の存在を信じていると思うよ」

「全然！　百分の一も信じていないさ！」

「でも、千分の一くらいは信じているね。そのごくわずかの分量が、ことによるといちばん強力かもしれないよ。信じてるって白状したまえよ、まあ一万分の一くらいは……」

「一瞬たりとも信ずるもんか！」イワンは憤然として叫んだ。「もっとも、お前の存在を信じたい気はするがね」ふいに奇妙な口調で彼は言い添えた。

「ほう！　それでも、やっと白状したね！　しかし、僕は親切だから、ここでも助けてあげよう。いいかい、僕が君の尻尾をつかまえたんで、君が僕をつかまえたわけじゃないんだよ！　僕はね、君がすでに忘れていた今の話をわざとしてあげたのさ、君が決定的に僕の存在を信じなくなるようにね」

「嘘をつけ！　お前が現われた目的は、お前が存在することを俺に信じこませるためじゃないか」

「まさしくそうさ、しかし、動揺だの、不安だの、信と不信との戦いだの、そういったものは時によると、君のような人間にとっては、いっそ首をくくるほうがましだと思うくらいの苦しみになるからね。僕はね、君が少しは僕の存在を信じていることを承知していたから、今の話をして、決定的に不信を植えつけようとしたんだよ。僕は君に信と不信の間を行ったり来たりさせる。そこに僕の目的もあるんだからね。新しい方法じゃないか。現に君はまったく、すぐ面と向って僕に、僕が夢じゃなく本当に存在するんだと強調しはじめるんだからね。僕にはわかってるよ。それでこそ僕は目的を達するんだからね」

（同）

（傍線は私・木下による）

どうですか？「僕は君に信と不信の間を行ったり来たりさせる」――イワンはこのからくりを自分ですっかり承知しています。しかし、これはいくら承知していようが、自力で脱出するのは不可能に近いからくりなんですよ。

「ですが、この問題が僕の内部で解決することがありうるでしょうか？　肯定的なほうに解決されることが？」なおも説明しがたい微笑をうかべて長老を見つめながら、イワンは異様な質問をつづけた。

「肯定的なほうに解決されぬとしたら、否定的なほうにも決して解決されませぬ。あなたの心のこういう特質はご自分でも承知しておられるはずです。そして、そこにこそあなたの心の苦しみのすべてがあるのです。」

（同）

ゾシマ長老にイワンは真剣に問いました。ゾシマ長老はそのイワンを正確に見通していました。

スメルジャコフがイワンの思想をを正確に――そっくりそのまま、その成立過程をもまるごと含んで、つまりイワンががんじがらめになっているからくりごと――理解していたならば、絶対に殺人を決行することなどできませんでした。なぜなら、イワンの思想は「肯定的なほうに解決されぬとしたら、否定的なほうにも決して解決されない」ものだからです。スメルジャコフはイワンの思想を自分のために利用しただけです。もっとも、それなしに彼には行動することができなかったでしょうけれど。

「すべては許される」というイワンの思想は、彼が「行ったり来たり」する「信と不信」の片側にすぎません。イワンがそのどちらかであるということではあ

りません。その往復の運動こそがイワンなんです。そうである以上、本来イワンには何もできるはずがありませんでした。

イワンは「肯定的なほうに解決されぬとしたら、否定的なほうにも決して解決されない」はずだった自分の思想が、こうまで愚劣な形で現実化してしまったことに動揺してしまうんです。

そういうイワンにさしのべられる手がアリョーシャの「あなたじゃない」なのだ、と私はいいます。これもおさらいですが、私は以前にこういいました。

いくつか例を挙げましたが、「謙遜な勇気」を持てずにいる彼らに手をさしのべつづける・手をさしのべるのをやめない人物たちがいるんですね。つまり、誰かが自分でも醜いと考えているもの（「それこそが私なんだ」）を離さないでいるのに向かって、「それはあなたじゃない」といいつづけ、いうのをやめない人物たちです。この人物たちが、そうやっていられるのはどうしてなのか？　どうしてそこまでできるのか？　――と、あなたが感じただろうと私は信じます。

アリョーシャの「あなたじゃない」も、そのようにさしのべられた手のひとつです。「あなたじゃない」は、イワンの自分自身への「嫉視」・「悪意」の否定です。さらにいえば、実は、イワンだけでなく、この「あなたじゃない」を必要としていない登場人物が『カラマーゾフの兄弟』にいるでしょうか？

アリョーシャは、イワンが自分でも醜いと考えているもの（「それこそが私なんだ」＝「殺したのは私だ」）を離さないでいるのに向かって、「それはあなたじゃない」といいつづけ、いうのをやめないでいるんです。イワンに自分＝アリョーシャとのつながりを信じること、自分＝アリョーシャに対して気持ちを開くことを呼びかけているんです。アリョーシャはイワンの良心の証人になろうというんです。そうしてイワンに「離反」と「孤独」から、こちらに戻って来るように、と訴えているんです。自分自身をも信じないこと――自意識の堂々巡り――から脱却してください、と懇願しているんですよ。「謙遜な勇気」を持ってください、といっているんです。こうして《ただ一人の罪なき人》からアリョーシャを通じてさしのべられている手が、ここで描かれているんです。これが『カラマーゾフの兄弟』で描かれている「罪」と「愛」なんです。

「イワンが自分でも醜いと考えているもの（「それこそが私なんだ」＝「殺したのは私だ」）」については、イワン自身のことばから、これらを引用しましょう。

「ただ、お前はもっぱら俺の醜悪な考えを取りあげるんだ、何よりも、愚劣な考えだけをな。お前は愚かで、卑俗だよ。ひどく愚かだ。だめだ、お前なんぞ面を見るのもいやだよ！　どうすりゃいいんだ、どうすればいいんだろう！」イワンは歯ぎしりをした。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

「お前は俺の本性にひそむいっさいの愚劣なものや、とうの昔に生命を失い、俺の頭の中で粉砕されて、腐肉のように棄て去られたものを、何か新しいものみたいに俺に捧げようとするんだからな！」

（同）

しかし、またべつの側面から私はしゃべってみましょう。「悪魔」はイワンにこういいます。

「しかし、僕の目的は立派なものだよ。僕は君の心にほんのちっぽけな信仰の種子を一粒放りこむ、するとその種子から樫の木が育つんだ。そ

れも並大抵の樫じゃなく、君がその枝にまたがれば、《荒野の神父や汚れなき尼僧たち》の仲間入りをしてくなるような、立派な樫の木がさ。だって君は心ひそかにそれを切実に望んでいるんだし、いずれ蝗を食として、魂を救いに荒野へさすらいに出るだろうからね！」

「それじゃ、お前は俺の魂の救出のために努力してるってのか、悪党め？」

「せめて一度くらい、いいことをしなけりゃならないからね。君は怒ってるのかい、見たところ怒ってるらしいね！」

「道化め！　しかしお前はかつてそういう人たちを、つまり蝗を食とし、十七年も荒野で祈りつづけて、苔の生えたような人たちを誘惑したことがあるだろう？」

「ねえ、君、僕のやってきたことはそれだけだよ。この全世界も、宇宙も忘れて、一人のそういう人物につきまとっているのさ、なぜってダイヤモンドというやつは非常に高価だからね。そういう魂一つだけで、時によると、星座まる一つ分の値打ちがあるものさ。僕らには独特の算術があるからね。勝利こそ貴重なんだ！　なにしろ、そういう連中の中には、君はそんなこと信じないだろうが、ほんとの話、知的発育が君にも劣らぬような人だっているんだからね。とにかく同じ瞬間に信と不信のすごい深淵を見つめることができるわけだから、実際、時によると、あとほんの一押しで、役者のゴロブーノフの台詞のように、その人間が《まっさかさまに》転落するような気がするもあるんだよ」

（同）

さらに、

「ねえ、君、僕はさるきわめて魅力的な、愛すべきロシアの若い貴族を知っているんだよ。若い思想家で、文学と芸術の大の愛好家で、『大審問官』と題する将来性豊かな叙事詩の作者なんだ……僕はその青年のことしか念頭になかったんだよ！」

（同）

「悪魔」はそうやってイワンを「よいしょ」します。イワンをくすぐりつづけます。そうやっておいて、いきなり彼を突き落としもするんです。

「ところで問題は、やがてそういう時期の訪れることがありうるか、どうかだと、わが若き思想家は考えた。もし訪れるなら、すべては解決され、人類は最終的に安定するだろう。しかし、人類の根強い愚かさからみても、おそらくまだ今後千年は安定しないだろうから、現在でもすでにこの真理を認識している人間はだれでも、まったく自分の好きなように、この新しい原理にもとづいて安定することが許される。この意味で彼にとっては《すべては許される》のだ。それだけでなく、かりにそういう時期が永久に訪れぬとしても、やはり神や不死は存在しないのだから、新しい人間は、たとえ世界じゅうでたった一人にせよ、人神になることが許されるし、その新しい地位につけば、もちろん、かつての奴隷人間のあらゆる旧来の道徳的障害を、必要とあらば、心も軽くとび越えることが許されるのだ。神にとって、法律は存在しない！　神の立つところが、すなわち神の席なのである！　俺の立つところが、ただちに第一等の席になるのだ……《すべては許される》、それだけの話だ！　何から何まで結構な話ですな。ただ、ペテンにかける気を起こしたのに、なぜそのうえ、真実の裁可なんぞが必要なんだろう、という気はするけどね？　しかし、現代のロシア人てのは、こうなんだね。裁可がなければペテンをする決心もつかないんだ、それほど真理がお気に召したってわけさ……」

（同）

（傍線は私・木下による）

もっと前に「悪魔」はこうもいっていました。

「お前たちのあの世には、その千兆キロ以外に、どんな苦しみがあるんだい？」なにか異様に張りきって、イワンがさえぎった。

「苦しみだって？　ああ、きかないでほしいな。以前にはいろいろあったんだが、この節はもっぱら精神的なものがはやりだして、《良心の呵責》なんて下らんものになっちまった。これも君らの、《慣習の緩和》とやらのせいで、はやりだしたのさ。これで、だれが得をしたと思う。得をしたのは良心のない連中だけさ。なぜって、良心がまるでなけりゃ、良心の呵責もへちまもないからね。その代り、まだ良心や誠意の残っていたまともな人たちは苦しむようになったわけだよ……これだから、まだ準備もととのわぬ地盤に、それもよその制度をまる写しにした改革を行なうなんて、害をもたらすだけさ！」

（同）

もちろんイワンは当の「《良心の呵責》なんてもの」に苦しみ、「真実の裁可」なんぞ」を必要としているんです。「悪魔」はこうしてイワンを思うがままにいじり、愚弄するわけです。

もちろんイワンは「いずれ蝗を食として、魂を救いに荒野へさすらいに出る」つもりだったんですが、悪魔の手前、それをそのまま認めようとはしません。でも、そのことは是非とも訊ねてみたいわけです。訊ねるけれど、自分の先行者たちを「十七年も荒野で祈りつづけて、苔の生えたような人たち」などと表現する（いったい、そのイワンがいま何歳なんですか？　そのことを思い出してください）。しかし、その「苔の生えたような人たち」こそ悪魔が誘惑したい存在・悪魔が価値を認めた存在だということがわかっている。悪魔にそれほどまでに誘惑される人間こそ高度に信仰している人間なんですね。それで、イワンは自分がそういう「高価」な「ダイヤモンド」でありたいと思っているわけです。

「同じ瞬間に信と不信のすごい深淵を見つめることができる」人間でありたいんです。つまり、そうであるからには、「《まっさかさまに》転落」するすれすれの位置にいたいわけです。それどころか、「《まっさかさまに》転落」することは、彼にとって非常に魅力的なことでもあるでしょう。「《まっさかさまに》転落」できるからには、つまり、それほどの高さにいたというわけです。その高低差こそが彼自身の価値なんです。その高低差が大きければ大きいほど、彼の魂は悪魔にとって「高価」な「ダイヤモンド」であるんです。

これが「若い思想家で、文学と芸術の大の愛好家で、『大審問官』と題する将来性豊かな叙事詩の作者」なんですよ。

「やっとお前も察したな。事実そのとおりさ、実際その一点だけにすべての秘密があるんだよ。だが、はたしてそれが、たとえ彼のように荒野での苦行に一生を台なしにしながら、なお人類への愛を断ち切れなかった男にとってだろうと、苦しみではないだろうか？　人生の終り近くなって彼は、あの偉大な恐ろしい悪魔の忠告だけが、非力な反逆者どもを、《嘲弄されるために作られた実験用の未完成な存在たち》を、いくらかでもまともな秩序に落ちつかせえたにちがいないと、はっきり確信するのだ。そして、こう確信がつくと、死と破滅の恐ろしい聡明な悪魔の指示に従ってすすまねばならぬことが、彼にはわかるし、またそのためには嘘と欺瞞を受け入れ、人々を今度はもはや意識的に死と破滅に導かねばならない。しかもその際、これらの哀れな盲どもがせめて道中だけでも自己を幸福と見なしていられるようにするため、どこへ連れてゆくかをなんとか気づかせぬよう、途中ずっと彼らを欺きつづけねばならないのだ。そして心に留めておいてほしいが、この欺瞞もつまりは、老審問官が一生その理想を熱烈に信じつづけてきたキリストのためになされるのだからな！　これが不幸ではないだろうか？」

（同）

このアリョーシャとの対話はこうつづくんでした。

「兄さんもその老人といっしょなんでしょう、兄さんも?」アリョーシャが悲痛に叫んだ。イワンは笑いだした。

「だって、こんなものはたわごとなんだぜ、アリョーシャ。いまだかつて二行の詩も書いたことのない愚かな学生の愚かな詩にすぎないんだよ。どうしてそうまじめに取るんだい? まさか俺が、キリストの偉業を修正する人々の群れに加わるために、これからまっすぐイエズス会の連中のところへ出かけて行くなんて、考えてるんじゃないだろうな? ええ、冗談じゃないよ、俺に何の関係がある? さっきも言ったじゃないか、俺はせいぜい三十まで生きのびりゃいいんで、そのあとは杯を床にたたきつけるだけさ!」

「じゃ、粘っこい若葉は、大切な墓は、青い空は、愛する女性はどうなるんです! どうやって兄さんは生きてゆけるんです? それらのものをどうやって愛するんですか?」アリョーシャが悲しそうに叫んだ。「心と頭にそんな地獄を抱いて、そんなことができるものでしょうか? いいえ、兄さんはきっとその連中の仲間に入りに行くにきまっている……もしそうじゃなければ、自殺するほかありませんよ、堪えきれずにね!」

「どんなことにも堪えぬける力があるじゃないか!」もはや冷たい嘲笑をうかべながら、イワンが言い放った。

「どんな力です?」

「カラマーゾフの力さ……カラマーゾフ的な低俗の力だよ」

「それは放蕩に身を沈めて、堕落の中で魂を圧殺することですね、そうでしょう、ええ?」

「たぶんね、それも……せいぜい三十までなら、ことによると避けられるかもしれないし、そのあとは……」

「どうやって避けるんです? 何によって避けるんですか? 兄さんのような思想をいだいていて、そんなことは不可能ですよ」

「これもまたカラマーゾフ流にやるのさ」

「それが《すべては許される》ということですか? すべては許される、そうですね、そうなんでしょう?」

(同)

「非力な反逆者ども」・「《嘲弄されるために作られた実験用の未完成な存在たち》」=「人類」を盾に、イワンは「《ただ一人の罪なき人》と、その人の流した血」=キリストを避けます。「人間の顔」を正視しない・できないことによって避けるんです。それは、こういうことでもあります。イワンは、神の前で傲然と頭を上げていようとしているんです。彼は誰にも頭を下げたくありません。彼にはへりくだることができない。「謙遜な勇気」(キルケゴール)がないんです。もう一度いいますが、彼はミーチャの「讃歌」――他の誰かとの「つながり」のなかへと自分自身を投げ出し、自分がそこに「消え」たり、「溶け」たりすること、ですね――を頭では理解することができますが、心で感じること・信じることができないんです。イワンはあくまで傲然と自分自身であろうとします。彼はこの世界のありとあらゆるものを自分で理解したい、この世界の意味を最後まで見届けたいんですね。それを見届けるのは必ず自分でなくてはならないんです。彼は保証をとりつけたい。神にそれを委ねるなんてまっぴらごめんなんです。

「……俺に必要なのは報復だよ、でなかったら俺はわが身を滅ぼしてしまうだろう。その報復もそのうちどこか無限のかなたなどじゃなく、この地上で起ってもらいたいね。俺がこの目で見られるようにな。俺はそれを信じてきたし、この目で見たいのだ。もしその時までに俺が死んでしまうようなら、よみがえらせてほしい。だって、俺のいないところですべてが起るとしたら、あまりにも腹立たしいものな」

(同)

「俺は調和なんぞほしくない。人類への愛情から言っても、まっぴらだね。それより、報復できぬ苦しみと、癒やされぬ憤りとをいだきつづけ

ているほうがいい。たとえ俺が間違っているとしても、報復できぬ苦しみと、癒やされぬ憤りとをいただきつづけているほうが、よっぽどましだよ」

（同）

イワンには、最終的に――それがいつのことなのか、誰にもわかりません――どういう結果になろうが、とにかくいまこの瞬間に生きている人間として、神の前に立ち、自らへりくだり、「人間の顔」を正視し、自身を投げ出すということができないんです。彼はいますぐに「結果」を知りたい。「結果」は保証されなければならないんです。実は、そういう「結果」――それがいつのことなのか、誰にもわかりません――は、とにかくいまこの瞬間に生きている「人間の顔」を持った生身のひとりひとりの人間がそれぞれに自身を投げ出すことの長い長い連鎖・継続・継承によってしかもたらされるはずのないものなんです、たぶん。イワンはしかし、若く性急です。自分が「十七年も荒野で祈りつづけ」るなんてことすら冗談ではないわけです。彼にはまだ「謙遜な勇気」を持つことができません。彼は自分自身をいまあるままに保ちながら、いますぐ「結果」を知りたい。自分を無にしたり、犠牲にしたり、礎石にしたりすることなしに、いますぐ「結果」を知りたい。「結果」を知ってなら、「信仰」もしようというんです。しかし、いまこの瞬間の自分の「信仰」が最終的に無駄になるのだとしたら、「信仰」なんかごめんです。保証が得られないのだったら、自分は好き放題にやるよ、というんです。それが「すべては許される」です。損なことはしないんですね。といいつつ、「結果」は気になるんです。

しかし、私はゾシマ長老のこれを引用しておきます。

もし他人の悪行がもはや制しきれぬほどの悲しみと憤りとでお前の心をかき乱し、悪行で報復したいと思うにいたったら、何よりもその感情を恐れるがよい。そのときは、他人のその悪行をみずからの罪であるとして、ただちにおもむき、わが身に苦悩を求めることだ。苦悩を背負い、それに堪えぬけば、心は鎮まり、自分にも罪のあることがわかるだろう。なぜなら、お前はただ一人の罪なき人間として悪人たちに光を与えることもできたはずなのに、それをしなかったからだ。光を与えてさえいれば、他の人々にもその光で道を照らしてやれたはずだし、悪行をした者もお前の光の下でなら、悪行を働かずにすんだかもしれない。また、光を与えたのに、その光の下でさえ人々が救われないのに気づいたとしても、いっそう心を強固にし、天の光の力を疑ったりしてはならない。かりに今救われぬにしても、のちにはきっと救われると、信ずるがよい。あとになっても救われぬとすれば、その子らが救われるだろう。なぜなら、お前が死んでも、お前の光は死なないからだ。行い正しい人が世を去っても、光はあとに残るのである。人々が救われるのは、常に救い主の死後である。人類は予言者を受け入れず、片端から殺してしまうけれど、人々は殉教者を愛し、迫害された人々を尊敬する。お前は全体のために働き、未来のために実行するのだ。決して褒美を求めてはならない。

（同）

（傍線は私・木下による）

それはともかく、話を戻しますが、レヴェルの差はあれ、イワンと同様のことを考えていた人物がもうひとりいました。フョードル・カラマーゾフです。つまり、フョードルとイワンとに共通しているものが何かというと、ふたりとも「真理」を気にかけてはいながら、自分の生きているこの現世でどうするのが損なのか得なのかを考え、損得を基準にもろもろを選択するということです。フョードルは自分を投げ出さずにいて、「真理」の不備を盾に、いろいろなものを掠め取ってしまおう・ちょろまかせるものはちょろかましてしまおう、と考えています。神があるなら、この自分をこんなふうに好き放題にふるまわせておかないだろう、しかし、いまのところ自分は好き放題だ、だったら、このままやりたい放題でいこう！　悪いのは神やら「真理」やらの怠慢さ！　レヴェ

ルはまったく違いますが、フョードルの考えていることとイワンの考えていることは同根です。

「でも、何のために閉鎖するんです」イワンが言った。

「真理が一日も早くかがやくためにさ、それが理由だよ」

「だって、真理がかがやきはじめたら、お父さんなんぞ、まず最初に財産を没収されて、そのあと……閉鎖でしょうね」

「やれやれ！　だが、たぶんお前の言うとおりだろうな。ああ、俺も騾馬か」

（同）

ともあれ――、

「俺はかねがね、俺みたいな人間のために、そのうちだれか祈ってくれるだろうかと、そればかり考えておったもんだよ。この世の中に、そんな奇特な人がいるもんだろうか？　なあ、お前、こういうことに関しちゃ、俺はひどく愚かでな。お前にゃ信じられないかもしれんけどさ。ひどいもんだよ。しかしな、どんなに愚かだろうと、俺はたえずいつもそのことを考えてるんだよ、もちろん、いつもってわけじゃなく、時々の話だがね。俺が死んでも、悪魔たちが鉤で引き寄せるのを忘れる、というわけにはいかんものだろうか、と思うのさ。それからこう思うんだ。鉤だなんて？　どこからそんなものが悪魔の手に入るんだろう？　材質は何だ？　鉄だろうか？　いったいどこで作るんだろう？　やつらのところにも、工場か何かがあるのかな？　なにしろ修道院の坊主たちは、早い話、地獄に天井があると、どうやら考えているらしいからな。そりゃ俺だって、地獄を信じてもいいけれど、ただ天井だけはぬきにしてもらいたいよ。でないと、せっかくの地獄が何かこう、垢ぬけた文化的な、つまり、ルーテル派式のものになっちまうからな。それに実際のところ、天井があるのとないのとでは大違いだろう？　とにかく、いまいましいことに、問題は実にその点にあるんだからな！　だってさ、もし天井がないんなら、つまり、鉤もないってわけだ。鉤がなけりゃ、いっさいご破算てわけだから、またぞろ信じられなくなってくるからな。だってさ、そうなったら、いったいだれが俺を鉤で引きずっていくんだい。なぜって俺みたいな人間を引きずっていかないとしたら、いったどうなる、この世のどこに真実があるんだい？」

（同）

どうですか？

「俺はかねがね、俺みたいな人間のために、そのうちだれか祈ってくれるだろうかと、そればかり考えておったもんだよ。この世の中に、そんな奇特な人がいるもんだろうか？」

（同）

（傍線は私・木下による）

――ですよ。フョードル自身がそもそも作品の最初の方でこんなことをいっているんですね。しかも、彼が話しているのはアリョーシャです。相手がアリョーシャだからこそフョードルもこういうことがいえるんです（イワンも相手がアリョーシャであれば、普段の自分がけっしていわないことを口にすることができます）。これはフョードルの本音です。こうなると、「あなたじゃない」に絡む要素が『カラマーゾフの兄弟』の全体に隈なく行き渡っていることが、あらためてわかってもらえるのじゃないかと思うんですが、まあ、それはともかく、先ほどいったことをもう一度いうことになりますが、フョードルはやっぱり自分の生――現世――の後にあるもののことを心配しているんですね。「真実」のことを心配しているんです。彼もいますぐ「結果」を知りたいくちなんです。最終的に「真実」が不問に附されるのであれば、この世で得なのは、好き放題に

ふるまうということだと彼は考えているんですね。でも、彼は心配でならないわけです。これは彼にとって非常に重要な、焦眉の問題でもあるんです。もし「神」があるのなら、彼はとんでもない間違った一生を送ってきたことになるんです。「不死」も同様です。「神」も「不死」もないなら、彼のこれまでの生涯は正しい――やり得ということです――んですが、それでも、やはり「真実」がものをいう――やり得なんかとんでもない――ことがなければ、この世のなかはおかしいぞ、間違っているぞと思いもしているんです。

フョードルが「道化」なのは、彼にものを見る目があるからです。つまり、本来自分や他人はどうあるべきかという視点があるということです。彼は自他の偽善やごまかしをはっきり認識します。しかし、どうやらこの世のなかでは正しさなんかどうでもいいらしいことが彼にはわかっています。だから、彼はわざと自分のいやらしさを誰彼に誇張してみせ、不快な思いを味わってもらうんですね。どうだい、これが現実ってものさ！　お高くとまってみせたって駄目さ、何をお上品にふるまっているんだい？　世のなか、どんな愚劣なことでもやったもん勝ちじゃないか！　でも、彼は「真実」を恐れています。

「『ほら、見ろ、お前の聖像だぞ、どうだ、俺はこいつをはずすからな。よく見てろよ、お前はこれを奇蹟の聖像と思いこんでいるらしいが、俺が今お前の目の前でこいつに唾をひっかけてやる、それでも罰なんぞ当りゃせんから！』そのときの彼女の目つきときたら、いや、今にも俺を殺すんじゃないかと思ったくらいさ。だけど彼女は跳ね起きて、両手を打ち合せたあと、いきなり両手で顔を覆って、全身ふるえはじめ、床に倒れるなり……そのまま気絶しちまったんだ……おい、アリョーシャ、アリョーシャ！　どうした、どうしたんだ！」

（同）

また、以下の引用は非常によくフョードルの人間性を表現しています。

「とにかく答えてくれ。神はあるのか、ないのか？　ただ、まじめにだぞ！　俺は今まじめにやりたいんだ」

「ありませんよ、神はありません」

「アリョーシカ、神はあるか？」

「神はあります」

「イワン、不死はあるのか、何かせめてほんの少しでもいいんだが？」

「不死もありません」

「全然か？」

「全然」

「つまり、まったくの無か、それとも何かしらあるのか、なんだ。ことによると、何かしらあるんじゃないかな？　とにかく何もないってわけはあるまい！」

「まったくの無ですよ」

「アリョーシカ、不死はあるのか？」

「あります」

「神も不死もか？」

「神も不死もです。神のうちに不死もまた存するのです」

「ふむ。どうも、イワンのほうが正しそうだな。まったく考えただけでも、やりきれなくなるよ、どれだけ多くの信仰を人間が捧げ、どれだけ多くの力をむなしくこんな空想に費やしてきたことだろう、しかもそれが何千年もの間だからな！　いったいだれが人間をこれほど愚弄しているんだろう？　イワン、最後にぎりぎりの返事をきかせてくれ、神はあるのか、ないのか、これが最後だ！」

「いくら最後でも、やはりありませんよ」

「じゃ、だれが人間を愚弄してるんだい、イワン？」

「悪魔でしょう、きっと」イワンがにやりと笑った。

「じゃ、悪魔はあるんだな？」

「いませんよ、悪魔もいません」

（同）

さて、そのイワンが「悪魔」にこう訊ねるんでした。

「お前だって神を信じていないんだろう？」イワンは憎さげにせせら笑った。

「つまり、どう言えばいいのかな、もし君が真剣に……」

「神はあるのか、ないのか？」また有無を言わせぬしつこさでイワンが叫んだ。

「じゃ、君は真剣なんだね？　ねえ、君、本当に僕は知らないんだよ、いやたいへんなことを言ってしまったな」

「知らなくても、神の姿は見えるんだろ？　いや、お前は一個の独立した存在じゃない、お前は俺なんだ、俺以外の何物でもない！　お前なんぞ屑だよ、俺の幻想だ！」

（同）

まさにイワンの問いは「真剣」です。つまり、先のフョードルの問いこそはまさにイワン自身の問いだったんです。「まったくの無ですよ」だなんて冗談じゃありません。フョードルに対してはそんなふうに茶化しながら答えつつ、実はそれこそイワンの最も知りたいことだったんですよ。この「悪魔」との対話は、イワンが本音をぶちまけるにふさわしい舞台なんです。そう認識したうえで、フョードル、イワン、アリョーシャによる先の対話を考え直してほしいんです。それがどれだけの重量をかけられた描写だったか。

さて、最先端＝亀山郁夫が先のフョードルとイワンとの会話についてどう書いていたでしょう？

これまでのドストエフスキー論は、おおむねこのやりとりに過重な意味を見出し、ここに大きなテーマが提示されていると考えてきた。しかし、ここでのやりとりは、酒のうえでのとるにたらぬ話題にすぎないと考えられる次元の会話であり、それじたいに何の意味もない。アリョーシャが「いる」と答えるのは当然だし、イワンが「いない」と言うのも当然である。

（亀山郁夫「解題」）

全然違います。何が「イワンが「いない」と言うのも当然である」ですか。まったく「超」のつくほどの「最先端」です。もう一度いいましょう。誰かこの「最先端」を止めろよ、この「最先端」を何とかしろよ、と私は思います。こんな「最先端」にイワン・カラマーゾフがわかっていたはずもありません。また、そうなると、イワンとフョードルとの類似が正しく認識できていたはずもありません。最先端＝亀山郁夫にはイワン・カラマーゾフのみならず、フョードル・カラマーゾフがまったくわかっていません。しかも、この場面にはもちろんアリョーシャがいたんです。この場面は、フョードルという人物をよく表現すると同時に、イワンがアリョーシャを意識的に試すということをも表現しているんです。もちろん、です。何だって私はわざわざこういわなくてはならないんでしょう？全部、最先端＝亀山郁夫のあまりの「最先端」ぶりのせいです。

「何でも好きなものから、はじめてください。《反対側》からでもかまいませんよ。だって兄さんは昨日お父さんのところで、神はいないと断言したんですから」アリョーシャは探るように兄を眺めた。

「俺は昨日、親父のところで食事をしながら、そう言ってお前をわざとからかったんだけど、お前の目がきらきら燃えあがったのがわかったよ」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

しかし、私はまだイワンとフョードルとについてしゃべっておくべきだろうと思います。ふたりが同根の考えを持っていたとはいいましたが、補足として、

たしかに同根の考えを持ってはいたにせよ、実はふたりがどう違うのかということをしゃべりたいんです。

私はこういいます。フョードル・カラマーゾフは個々の「人間の顔」に向き合っていました。ただし、ミーチャのような「他の誰かとの「つながり」のなかへと自分自身を投げ出し、自分がそこに「消え」たり、「溶け」たりする」ふうにではないですよ。ここで、いささか的外れな引用をしてみますが、実はこれらは非常に大事なことなんです。

「フォン・ゾーンそっくりだ」だしぬけにフョードルが言った。

「またそんなことばかり言って……どうしてあの男がフォン・ゾーンに似てるというんです？　あなた自身、フォン・ゾーンを見たことがあるんですか？」

「写真は見たよ。目鼻立ちじゃないにせよ、いわく言いがたい点が似てますな。まさに正真正銘フォン・ゾーンの複製だ。こういうことは、顔だちを見ただけでわかるほうでね」

（同）

「だったら、その神父に手紙を書くんですね、神父が取りきめてくれますよ」

「あいつにはそんな才覚はないよ、そこが厄介なところさ。あの神父はものを見る目を持たんのだ。人は実によくて、今すぐ受取りなしに二万ルーブル預けたって平気なくらいだけど、およそ人間離れしていて、ものを見る目がまるでないから、阿呆にだって欺されかねないよ。それでいて、学はあるんだから、おどろくじゃないか」

……（中略）……

「だったら、僕だって何もできやしませんよ。ものを見る目なんぞ、僕にだってありませんからね」

「まあ、待てよ。お前だって役に立つさ、やつの特徴をすっかり教えてやるから、ゴルストキンの。やつとはもう昔から商いをしているからな。いいか、やつの顎ひげを見ていなけりゃならないんだ。あいつは赤茶けた、貧相な細い顎ひげを生やしている。もし、顎ひげをふるわせて、当人がかっかしながら弁じたてるようなら、つまり幸先よしってわけだ。やつの言葉は本当で、取引きを望んでいるのさ。ところが、もし左手で顎ひげを撫でながら、へらへら笑っていたら、ごまかして、一杯食わす肚なんだ。やつの目は絶対に見ちゃいかんよ、目を見たって何一つわかりゃせん、見当もつかんよ、いかさま野郎だからな。顎ひげを見ることだ」

（同）

ゴルストキンには、後でミーチャがひどい目にあっていますよね。

「お前は染物屋じゃないか！」

「とんでもない、わたしはカラマーゾフです、ドミートリイ・カラマーゾフですよ、あなたに相談があるんです……有利な相談が……とても儲かる話ですよ……例のあの森の件で」

百姓はもったいぶって顎ひげを撫でた。

（同）

フョードル・カラマーゾフには、個々の「人間の顔」と向き合う必要がありました。そうでないと、彼は財産を増やすことができないばかりか、生活もしていかれないんです。だから、彼はこれまでも実にたくさんの個々の「人間の顔」と向き合うことでやってきたんです。これは彼の死活問題です。そうやって彼は世のなかを渡ってきたんです。ある意味では、彼は自分が実際に向き合った個々の「人間の顔」だけを大事にしていたのでもあるでしょう。個々の「人間の顔」を自分がどう読み取るかということに彼の注意は集中していたでしょう。個々の「人間の顔」とどう取り引きするかということが、彼の全人生だったでしょう。それが、彼の人生の手触りであり、手応えでもあったでしょう。彼は確実な「人

間の顔」をとらえようとしていたんです。「人間の顔」の見える確実な範囲で行動することにしていたわけです。これをいい換えると、フョードルは「限度」を知っていたということになります。

しかし、イワンはそうではありません。彼は個々の「人間の顔」を見ようともしない。いきなり「人類全体」のことを考えるんです。彼は誰のことも軽蔑しています。彼にはフョードルの感じていた「人生の手触り」だとか「手応え」がありません。そういうものがあるのを承知していても、拒否してしまうんですね。「人間の顔」なんか邪魔なだけです。イワンにとって「人間の顔」とは、愛を妨げるものです。

「人を愛するためには、相手が姿を隠してくれなけりゃだめだ、相手が顔を見せたとたん、愛は消えてしまうのだよ」

（同）

そうして、イワンは個々の「人間の顔」に見向きもせず、一足飛びに「人類全体」のことを考えるんです。フョードルがけっして離れようとしなかった範囲――「人間の顔」が見える確実な範囲＝「限度」――から逸脱します。イワンはフョードルよりもはるかに高度な思考を試みます。私の使ったことばでいえば、フョードルの「やり得」なんかは、イワンにしてみればものすごく「せこい」わけです。なぜなら、フョードルにとっては、「神や不死は存在」する懸念があるために、「やり得」もごく狭い範囲で、掠め取るようにしなくてはならないからです。もし「神や不死が存在」していたら、大変なことになりますからね。それがイワンには非常な醜態にしか思えません。何をびくびくしているんだ？　だから、イワンは「神や不死は存在しない」と宣言するんです。「もし存在していたら、大変」なんてみみっちいことをいわずに、「存在しない」といい切るんです――というのは、もちろん彼の「部分」です。べつの「部分」は「神や不死は存在している」と信じています。しかし、「存在している」なら、どうしてこの世のなかはこんなに愚劣なんだ？　こうして彼は「信と不信の間を行ったり来たり」するんです。こういうイワンをフョードルならどう評価するでしょう？　フョードル自身のことばを用いて、後にイワンがこんなことをいいます。

「イワンには神がない。あいつには思想があるからな。それも俺なんかとは規模が違うやつがさ。それでも黙っているんだ。あいつはフリーメイソンだと思うよ。きいてみたんだけど、何も言いやしない。あいつの知恵の泉の水を飲んでみたかったんだが、何も言わないんだ。たった一度、一言だけ言ってたがね」

「何て言いました？」アリョーシャは急いで水を向けた。

「俺がこう言ってやったのさ。つまり、そうなると、すべてが許されるってわけかって。あいつは眉をひそめて、『うちの親父はだらしない子豚同然だったけど、考え方だけは正しかったよ』と、こうだぜ。これはもうラキーチンより純粋だな」

（同）

右の会話は、ラキーチンの話題から移ってきたもので、ミーチャはこういっていました。

「ところで、俺を苦しめるのは神だよ。それだけが俺を苦しめるんだ。神がなかったらどうだろう？　そんなものは人類の作った人工的な観念だなんていうラキーチンの説が正しかったら、どうなるだろう？　もし神がいなければ、そのときはこの地上の、この宇宙のボスは人間じゃないか。結構なこった！　ただ、神がいないと、どうやって人間は善人になれるんだい？　だれに感謝し、だれに讃歌をうたえばいいんだい？　ラキーチンは笑いやがるんだ。ラキーチンは神がいなくたって人類を愛することはできる、なんて言うんだ。今日だって俺にこう言いやがったぜ。『そんなことより、市民権の拡張のために奔走するほうが利口だぜ、さもなけりゃ、せめて牛肉の値段が上がらないようにでもな。哲学なん

ぞより、そのほうが手っ取り早く簡単に人類に愛情を示せるからね』」

（同）

さて、ラキーチンのことば「人類」にも注目しておいてほしいですね。ともあれ、もうひとつ再引用しますが、

「苦しみだって？　ああ、きかないでほしいな。以前にはいろいろあったんだが、この節はもっぱら精神的なものがはやりだして、《良心の呵責》なんて下らんものになっちまった。これも君らの、《慣習の緩和》とやらのせいで、はやりだしたのさ。これで、だれが得をしたと思う。得をしたのは良心のない連中だけさ。なぜって、良心がまるでなけりゃ、良心の呵責もへちまもないからね。その代り、まだ良心や誠意の残っていたまともな人たちは苦しむようになったわけだよ……これだから、まだ準備もととのわぬ地盤に、それもよその制度をまる写しにした改革を行なうなんて、害をもたらすだけさ！」

（同）

ラキーチンは「得をした」連中のひとりです。彼にはイワンと違って「良心の呵責もへちまもない」んです。

しかし、ミーチャの「これはもうラキーチンより純粋だな」で対比されるべきラキーチンのことばはこちら。

「ところでラキーチンは神さまぎらいだな、大きらいなんだぜ！　これがあいつらみんなの弱い点だよ！　でも、隠してやがるんだ。嘘をついてやがる。芝居してやがるのさ。『どうなんだい、評論の分野でもこれを貫く気かい？』って俺がきいたら、『そりゃ、露骨には出さないさ』なんて言って、笑ってやがるんだ。『ただ、そうなったら、人間はどうなるんだい？　神さまも来世もなけりゃさ？　とすると、今度はすべて許されるんだからな、何をしてもいいってわけか？』と俺はきいてみた。するとあいつは、『君は知らなかったのか？』なんて言って笑うじゃねえか。『利口な人間は何でもできるさ、利口な人間は抜目なく立ちまわるからな。ところが君なんざ、人を殺して、パクられて、牢屋の中で朽ち果てるんだ！』この俺にこんなことを言いやがるんだぜ。まったくの豚野郎さ！」

（同）

さて、それで「うちの親父はだらしない子豚同然だったけど、考え方だけは正しかったよ」というイワンのことばですが、この文脈上、普通に読めば、フョードルには良心があった、つまり、この世のなかはおかしいぞ、間違っているぞ、どうして「真理」が輝かないんだ？　輝くべきなのに！　と考えていた、ということになるでしょう。ラキーチンなんかとは全然違うわけです。「まだ良心や誠意の残っていたまともな人たち」のひとりということです。イワンと同じです。しかし、このスタートの認識は同じでも、フョードルのような「だらしない子豚同然」なんかではない自分＝イワンはもっと高度なことを考えている、ということです。

で、「だらしない子豚」というイワンの用いたことばですが、フョードルの――

「俺にとっちゃな」得意の話題に入ったとたん、一瞬しらふに返ったように、彼はにわかに元気づいた。「俺にとっちゃ……ええ、おい！　お前らはまだ子供だし、小さな子豚も同然だから、わからんだろうが、俺にとって、これまでの生涯に醜い女なんて存在しなかったよ、これが俺の主義なんだ！　お前たちにこれがわかるかい？　わかるはずはないさな。お前らはまだ、血の代りにオッパイが流れてるんだし、殻が取りきれてないんだから！」

（同）

――中の「小さな子豚も同然」を踏まえているでしょう。この会話の場に居合わせて、なおかついまミーチャから話を聞いているアリョーシャにはそれがわかったでしょう。

イワンにしてみれば、「お前たちにこれがわかるかい？　わかるはずはないさな。お前らはまだ、血の代りにオッパイが流れてるんだし、殻が取りきれてないんだから！」なんていわれるのは非常に心外なんですよ。どっちが「子豚同然」なんだか！　と思っているんです。

しかし、イワンは自分が若すぎることを意識もしていました。そうして、それを逆手に取りさえしていました。

「ほかの連中はともかく、俺たち、嘴の黄色い若者は別なんだよ、俺たちは何よりもまず有史以前からの永遠の問題を解決しなければならない、それこそ俺たちが心を砕くべき問題なんだ。今や若いロシア全体が論じているのも、もっぱら有史以前からの永遠の問題だけなんだよ」

（同）

さらに、

「兄さんもその老人といっしょなんでしょう、兄さんも？」アリョーシャが悲痛に叫んだ。イワンは笑いだした。

「だって、こんなものはたわごとなんだぜ、アリョーシャ。いまだかつて二行の詩も書いたことのない愚かな学生の愚かな詩にすぎないんだよ。どうしてそうまじめに取るんだい？　まさか俺が、キリストの偉業を修正する人々の群れに加わるために、これからまっすぐイエズス会の連中のところへ出かけて行くなんて、考えてるんじゃないだろうな？　ええ、冗談じゃないよ、俺に何の関係がある？　さっきも言ったじゃないか、俺はせいぜい三十まで生きのびりゃいいんで、そのあとは杯を床にたたきつけるだけさ！」

「じゃ、粘っこい若葉は、大切な墓は、青い空は、愛する女性はどうなるんです！　どうやって兄さんは生きてゆけるんです？　それらのものをどうやって愛するんですか？」アリョーシャが悲しそうに叫んだ。「心と頭にそんな地獄を抱いて、そんなことができるものでしょうか？　いいえ、兄さんはきっとその連中の仲間に入りに行くにきまっている……もしそうじゃなければ、自殺するほかありませんよ、堪えきれずにね！」

「どんなことにも堪えぬける力があるじゃないか！」もはや冷たい嘲笑をうかべながら、イワンが言い放った。

「どんな力です？」

「カラマーゾフの力さ……カラマーゾフ的な低俗の力だよ」

「それは放蕩に身を沈めて、堕落の中で魂を圧殺することですね、そうでしょう、ええ？」

「たぶんね、それも……せいぜい三十までなら、ことによると避けられるかもしれないし、そのあとは……」

「どうやって避けるんです？　何によって避けるんですか？　兄さんのような思想をいだいていて、そんなことは不可能ですよ」

「これもまたカラマーゾフ流にやるのさ」

「それが《すべては許される》ということですか？　すべては許される、そうですね、そうなんでしょう？」

（同）

イワンの「俺はせいぜい三十まで生きのびりゃいい」は、フョードルのようになりたくないということでもあります。イワンは、自分がいくら「カラマーゾフ流」にやっても、三十を過ぎればフョードルのようになってしまうと考えているでしょう。

まだ「子豚同然」についていいますが、私は、以前に『カラマーゾフの兄弟』ロシア語原典における「人類」・「人類全体」・「全人類」と「人間」・「多くの人た

ち」・「すべての人々」とに当たる語を調べてもらったロシア文学に詳しい友人に、今度も訊いてみたんですが、フョードルの「子豚」もイワンの「子豚」も同じ単語です（複数形・単数形の違いはありますが）。その際、友人は次の箇所についても指摘してくれました。

「あいつが言ったんだ」疑念も許さずに、イワンがきっぱりと言った。
「なんなら教えてやるけど、あいつはその話ばかりしていたよ。『君が善を信じたのは結構なことさ。話を信じてもらえなくたってかまわない、俺は主義のために行くんだから、というわけか。しかし、君だってフョードルと同じような子豚じゃないか、君にとって善が何だというんだ？君の犠牲が何の役にも立たないとしたら、いったい何のためにのこのこ出頭するんだね？　ほかでもない、何のために行くのか、君自身にもわからないからさ！　ああ、何のために行くのか自分にわかるなら、君はどんな値でも払うだろうにね！　まるで君は決心したみたいだな？　まだ決心していないくせに。君は夜どおし坐って、行こうか行くまいかと、迷いつづけることになるだろうよ。でも、とにかく君は行くだろうし、自分が行くってことも知っている。君がどう決心しようと、その決心が君の意志によるものじゃないってことも、自分で承知してるはずだよ。君が行くのは、行かずにいる勇気がないからさ。なぜ勇気が出ないか、これは自分で推察するんだね。これは君に与えられた謎だよ！』」

（同）

ついでにいいますが、これを思い出しませんか？

「彼女は今日は夜どおし聖母マリヤにお祈りすることだろうよ。明日の法廷でどう振舞えばいいか、教えてもらうためにな」突然彼はまた憎しみをこめて語気鋭く言った。
「それは……カテリーナ・イワーノヴナのこと？」
「そうさ。ミーチェニカの救世主になるか、それとも破滅者になるべきか？　そのことをお祈りして、心の闇を照らしてもらおうというわけさ」

（同）

もうひとつ、ついでです。「話を信じてもらえなくたってかまわない、俺は主義のために行くんだから」について。これも再引用です。

倦むことなく実行するがよい。夜、眠りに入ろうとして、『やるべきことを果していなかった』と思いだしたなら、すぐに起きて実行せよ。もし周囲の人々が敵意を持ち冷淡で、お前の言葉をきこうとしなかったら、彼らの前にひれ伏して、赦しを乞うがよい。なぜなら実際のところ、お前の言葉をきこうとしないのは、お前にも罪があるからである。相手がすっかり怒って話ができぬ場合でも、決して望みを棄てず、おのれを低くして黙々と仕えるがよい。もしすべての人に見棄てられ、むりやり追い払われたなら、一人きりになったあと、大地にひれ伏し、大地に接吻して、お前の涙で大地を濡らすがよい。そうすれば、たとえ孤独に追いこまれたお前をだれ一人見も聞きもしなくとも、大地はお前の涙から実りを生んでくれるであろう。たとえこの地上のあらゆる人が邪道に落ち、信仰を持つ者がお前だけになるといった事態が生じても、最後まで信ずるがよい。

（同）

どうですか？　まさにそっくりそのままイワンのためにあるようなことばじゃないでしょうか？　そして、イワンには絶対に受け入れられないことばであるはずです。

おさらいしますよ。

わが家に帰りつくと、彼は突然、唐突な疑問をいだいて立ちどまった。『今すぐ、これから検事のところへ行って、すべてを申し立てる必要はないだろうか?』彼はふたたびわが家の方に向きを変えて、この疑問を解決した。『明日、全部ひとまとめにしよう!』彼は心につぶやいた。と、奇妙なことに、ほとんどすべての喜びが、自分に対する満足が、一瞬のうちに消え去った。

（同）

（傍線は私・木下による）

これに対しての、

倦むことなく実行するがよい。夜、眠りに入ろうとして、『やるべきことを果していなかった』と思いだしたなら、すぐに起きて実行せよ。

（同）

――だったんですし、「話を信じてもらえなくたってかまわない、俺は主義のために行くんだから」に対する、

もし周囲の人々が敵意を持ち冷淡で、お前の言葉をきこうとしなかったら、彼らの前にひれ伏して、赦しを乞うがよい。なぜなら実際のところ、お前の言葉をきこうとしないのは、お前にも罪があるからである。相手がすっかり怒って話ができぬ場合でも、決して望みを棄てず、おのれを低くして黙々と仕えるがよい。もしすべての人に見棄てられ、むりやり追い払われたなら、一人きりになったあと、大地にひれ伏し、大地に接吻して、お前の涙で大地を濡らすがよい。そうすれば、たとえ孤独に追いこまれたお前をだれ一人見も聞きもしなくとも、大地はお前の涙から実りを生んでくれるであろう。たとえこの地上のあらゆる人が邪道に落ち、信仰を持つ者がお前だけになるといった事態が生じても、最後まで信ずるがよい。

（同）

――というわけです。

どうですか？　まるでイワンのために語られたことばみたいじゃないですか？　そうして、イワンにこれらのことばを受け入れることができますか？　もちろん、「話を信じてもらえなくたってかまわない、俺は主義のために行くんだから」なんてつもりじゃ駄目ですよ。イワンには相手に対して「決して望みを棄てず、おのれを低くして黙々と仕える」のでなければならないんです。くどいようですけれど、イワンがアリョーシャの「あなたじゃない」を受け入れるためにも、誰彼に対しての「決して望みを棄てず、おのれを低くして黙々と仕える」ということができなくてはなりませんでした。なぜか？「あなたじゃない」を受け入れるためには、自分が「すべての人に対して罪がある」という自覚がなければなりませんから。しかも、この自覚は必ず「僕のためには、ほかの人が赦しを乞うてくれる」がセットになっていなければなりません。「ほかの人」との「つながり」が絶対に必要ですし、自分がへりくだって、「神の前」で無に等しい存在にならなければなりません。自分の「孤独」と「離反」を放棄しなくてはならないんです。イワンはこれを拒絶するんです。

悩んでいる者には、自分はこういうふうに救ってもらいたいといういろいろの仕方というものがある。もしも彼がそういう仕方で救われるのであれば、無論彼は喜んで救ってもらいたいのである。けれども救済の必要が更に深い意味において真剣に問題になる場合、特により高いものないしは最高のものによる救済が必要とせられるという場合、どのような仕方の救済も絶対に受け入れなければならないとしたら、これは屈辱である。あらゆることを可能ならしめる「救済者」の手のなかでは自己はほとんど無に等しきものとならなければならない、或いはまた単に他

の人間の前に自分の身を屈しなければならないというだけのことにしても、とにかく彼は救助を求める限り彼自身であることを放棄しなければならない。このような屈辱に比すれば、よし彼がいま抱いている苦悩が疑いもなくどのように数多く、そして深刻であり、またいつ果てるとも知れないほどのものであるにしても、それはまだしも彼にとっては耐えられるのであり、したがって自己はもしこのまま彼自身として存在することさえ許されるならばむしろこの苦悩の方を選ぶのである。

（キェルケゴール『死に至る病』　斎藤信治訳　岩波文庫）

さて、「悪魔」がイワンを籠絡しようとするには、イワンの「良心」の傷口に塩を塗りこめ、苦痛をもたらすことが必要でした。「悪魔」が持ち出す論点は必ずそこに触れるものでなくてはなりません。「悪魔」が執拗に攻撃するのは、イワンの弱点に対するものでなくてはなりません。「悪魔」はイワンの「信仰」を逆手に取り、逆説的に彼をやりこめなくてはなりません。「悪魔」からしてみれば、イワンが「信仰」していればいるほど、落としがいがあるんですよ。「信仰」すれすれの「不信」こそ「悪魔」の望むものなんです。それこそが「ダイヤモンド」なんですよ。イワンは神を信じています。しかし、彼は「ダイヤモンド」でもありつづけたいんです。彼が「ダイヤモンド」であることを保証してくれる存在こそが「悪魔」（＝イワン自身）だというわけです。これがイワン・カラマーゾフです。

さて絶望して彼自身であろうと欲するところのかかる苦悩者のうちに、意識がより多く存在すればする程、それだけまた絶望の度も強くなってそれはついに悪魔的なるものにまで至る。悪魔的なるものの根源は普通次のようなものである。絶望して自己自身であろうと欲するところの自己は、いかにしても自分の具体的自己から除き去ることも切り離すこともできない何等かの苦悩のために呻吟する。さて当人はまさにこの苦悩に向って彼の全情熱を注ぎかけるので、それがついには悪魔的な凶暴となるのである。そのときになってよし天に坐す神とすべての天使達とが彼に救いの手を差し延べて彼をそこから救い出そうとしても、彼はもはやそれを断じて受け入れようとはしない、いまとなってはもう遅すぎるのである。以前だったら彼はこの苦悩を脱れるためにはどんなものでも喜んで捧げたであろう、だのにその頃彼は待たされていた、――いまとなってはもう遅いのだ、いまは、いまは、彼はむしろあらゆるものに向って凶暴になりたいのである、彼は全世界から不当な取扱いを受けている人間のままでいたいのだ。だからしていまはかえって彼が自分の苦悩を手もとにもっていて誰もそれを彼から奪い去らないということこそが彼には大切なのである、――それでないと彼が正しいということの証拠もないし、またそのことを自分に納得させることもできない。このことが最後には非常に深く彼の脳裏に刻み込まれるので、彼は全く独自の理由からして永遠の前に不安を抱くことになる、――永遠は彼が他人に対して持っている悪魔的な意味でのかかる無限の優位を彼から切り離し、彼が現にあるがままの彼であって構わないという悪魔的な権利を彼から奪い去るかもしれないのである。彼は彼自身であろうと欲する。彼は自分の具体的自己からの無限の抽象をもって始めた、しかるに今や彼はついにそのような仕方で永遠となることはとうてい不可能であるまでに具体的となった、――にもかかわらず彼は絶望的に彼自身であろうと欲するのである。ああ、何という悪魔的な狂想であろうか！　永遠がもしかしたら彼の悲惨を彼から奪い去ることを思いつくかもしれないということに思い至るとき最も凶暴になるというのは！

（同）

しかし、私はイワンの「うちの親父はだらしない子豚同然だったけど、考え方だけは正しかったよ」についてしゃべっていたんでした。私は「普通に読めば、フョードルには良心があった、つまり、この世のなかはおかしいぞ、間違っているぞ、どうして「真理」が輝かないんだ？　輝くべきなのに！　と考えていた、

ということになるでしょう」といいました。「普通に読めば」です。それで十分だともわかっています。でも、私はそうではなく、イワンのことばをある種の敗北宣言のように読んでしまうんですね。つまり、この世のなかはおかしいぞ、間違っているぞ、どうして「真理」が輝かないんだ？　という同じ認識からスタートしているにもかかわらず、イワンと違って、フョードルが「人間の顔」の見える確実な範囲＝「限度」から逸脱しようとしなかった――「人類」やら「すべてが許される」なんてものに踏み込まなかった――ことについて、その手堅いやりかたについて「正しかった」とイワンがいったように思えてならないんです。イワンが自分の「限度」を超えた思想と、その思想を抱えることの苦しさとを嘆いたように思えてならないんです。

また、彼はいっそのこと自分の抱えている思想はおろか、フョードルのレヴェルでの「真理」の認識さえも手放してしまえるなら、どんなにいいだろうとも考えているんです。「悪魔」がこういいます。

僕はこの世界を歩きまわり、空想する。空想が好きだからね。おまけに、この地上にくると僕は迷信的になるんだよ。まあ、笑わないでくれたまえ。迷信的になるという、まさにその点が僕には気に入っているんだから。僕はここで君たちの習慣をことごとく受け入れる。銭湯へ行くのも好きになったよ。どうだい。商人や坊さんたちといっしょに、蒸風呂に入るのが好きなんだ。僕の夢はね、百キロもある太った商家のおかみさんになりきってしまう、それも二度と元に戻れぬよう決定的になりきって、おかみさんの信ずるすべてを信じきることなのさ。僕の理想は、教会へ行って、純粋な心で蝋燭をあげることだよ。ほんとだよ。そのときこそ、僕の苦悩に限界がくるんだ。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

もうひとつ。

「そりゃ、もちろん、人間たちは苦しんでいるよ、しかし……その代り、とにかく生きているじゃないか、幻想の中でじゃなくて、現実に生きているんだ。なぜなら、苦悩こそ人生にほかならないからね。苦悩がなかったら、たとえどんな喜びがあろうと、すべては一つの無限なお祈りと化してしまうことだろう。それは清らかであるけれど、いささか退屈だよ。それじゃ、この僕はどうだ？　僕だって苦しんでいる、でもやはり僕は生きていない。僕は不定方程式のXにひとしいんだ。初めも終りも失くした人生の幻影みたいなもんでね、ついには自分の名前まで忘れちまったくらいさ。笑っているのかい……いや、君は笑っていない、また怒ってるんだね。君はいつも怒ってばかりいるし、君には知性さえありゃいいらしい。でも、またぞろくりかえして言うけれど、僕は百キロもある商家のおかみさんの魂に宿って、神さまに蝋燭をあげることさえできるなら、そのために、あの星の上の生活や、いっさいの官位や名誉を棄てたっていいんだよ」

（同）

それで、「百キロもある太った商家のおかみさん」についてちょっと。彼女について考えるとき、いつも私はあるべつの作家の作品を思い浮かべてしまうんですが、なぜそうなったのか、両者を結びつける誰かの文章をどこかで読んだことがあるせいなのか、それとも、これから私の引用する箇所についてだけの誰かの文章を読んだときに私が彼女のことを思い出したのか、どうしても思い出せないんですね。いまも、ネット上でいくらか検索してみたんですが、すぐには見つけられませんでした。もっとも、これまでにも誰かしらが必ずどこかで両者を結びつけているはずなんです。また、それをいうなら、私がここまで『カラマーゾフの兄弟』についてしゃべりつづけてきたことも同様なんです。

私はここで引用する作品を十代の終わりに読んだんですが、いまほとんど内容を覚えていません。引用するにあたっても、作品全体を読み返していません。そういうわけで、どういう事情でふたりの人物が左のような会話をすることに

なったのか、わかりません。このことからも、私がやはりいつかどこかで、誰かが書いたこの会話についての文章を読んでいるに違いないと思われます。

「とにかく、ある晩、放送の前に、ぼくは文句を言いだしたことがあるんだ。これからウェーカーといっしょに舞台に出るってときに、シーモアが靴を磨いて行けと言ったんだよ。ぼくは怒っちゃってね。スタジオの観客なんかみんな最低だ、アナウンサーも低能だし、スポンサーも低能だ、だからそんなののために靴を磨くことなんかないって、ぼくはシーモアに言ったんだ。どっちみち、あそこに坐ってるんだから、靴なんかみんなから見えやしないってね。シーモアはとにかく磨いて行けって言うんだな。『太っちょのオバサマ』のために磨いて行けって言うんだよ。彼が何を言っているんだかぼくには分からなかった。けど、いかにもシーモア風の表情を浮べてたもんだからね、ぼくも言われた通りにしたんだよ。彼は『太っちょのオバサマ』が誰だかぼくに言わなかったけど、それからあと放送に出るときには、いつもぼくは『太っちょのオバサマ』のために靴を磨くことにしたんだ――きみといっしょに出演したときもずっとね。憶えてるかな、きみ。磨き忘れたのは、せいぜい二回ぐらいだったと思うな。『太っちょのオバサマ』の姿が、実にくっきりと、ぼくの頭に出来上がってしまったんだ。彼女は一日じゅうヴェランダに坐って、朝から晩まで全開にしたラジオをかけっぱなしにしたまんま、蠅を叩いたりしているんだ。暑さはものすごいだろうし、彼女はたぶん癌にかかっていて、そして――よく分んないな。とにかく、シーモアが、出演するぼくに靴を磨かせたわけが、はっきりしたような気がしたのさ。よく納得がいったんだ」

フラニーは立っていた。いつの間にか顔から両手を放して、受話器を両手で支えている。「シーモアはわたしにも言ったわ」と、彼女は電話に向って言った。「いつだったか、『太っちょのオバサマ』のために面白くやるんだって、そう言ったことがあるわ」彼女は受話器から片手をとると、頭のてっぺんにほんのちょっとだけあてたが、すぐまたもとに返して両手で受話器を支えた。「わたしはまだ彼女がヴェランダにいるとこを想像したことがないけど、でも、とっても――ほら――とっても太い足をして、血管が目立ってて。わたしの彼女は、すさまじい籐椅子に坐ってんの。でも、やっぱし癌があって、そして一日じゅう全開のラジオをかけっぱなし！　わたしのもそうなのよ」

「そうだ、そうだ。よし、きみに聞いてもらいたいことがあるからね。……きみ、聴いてる？」

フラニーは、ひどく緊張した面持で、うなずいた。

「ぼくはね、俳優がどこで芝居しようと、かまわんのだ。夏の巡回劇団でもいいし、ラジオでもいいし、テレビでもいいし、栄養が満ち足りて、最高に陽に焼けて、流行の粋をこらした観客ぞろいのブロードウェイの劇場でもいいよ。しかし、きみにすごい秘密を一つあかしてやろう――きみ、ぼくの言うこと聴いてんのか？　そこにはね、シーモアの『太っちょのオバサマ』でない人間は一人もどこにもおらんのだ。それがきみには分らんのかね？　この秘密がまだきみには分らんのか？　それから――よく聴いてくれよ――この『太っちょのオバサマ』というのは本当は誰なのか、そいつがきみに分らんだろうか？……ああ、きみ、フラニーよ、それはキリストなんだ。キリストその人にほかならないんだよ、きみ」

（J・D・サリンジャー「ゾーイー」　野崎孝訳『フラニーとゾーイー』所収　新潮文庫）

さあ、どうでしょう？「百キロもある太った商家のおかみさん」も「太っちょのオバサマ」も「悪魔」（＝イワン）、ゾーイー、フラニーにとって、「いったいこの自分に何の関わりがある？」という存在、自分から最も遠い存在であるはずです。「百キロもある太った商家のおかみさん」も「太っちょのオバサマ」も彼らにとってある種、侮蔑の対象――自分が最もなりたくない存在――でし

よう。おそらく、彼らの抱えているような悩みを抱くこともない存在、ある意味、彼らより知的にも、自尊心という点でもひどく劣った存在として想像されているでしょう。べつのことばでいうなら、「ダイヤモンド」から最も遠い存在です。だからこそ「悪魔」（＝イワン）は、わざとでもそうなりたい、というわけです。

しかし、サリンジャーによる、ゾーイーとフラニーとの会話は、そういう存在のために、そういう存在のためにこそ自分たちが何かをする、それが大事なんだ、というわけです。そのことによって、「太っちょのオバサマ」の意味は当初の意味から逆転します。それは、そういう認識に立ったゾーイーとフラニーが彼女より下に立つということです。

また、ゾーイーの「スタジオの観客なんかみんな最低だ、アナウンサーも低能だし、スポンサーも低能だ、だからそんなののために靴を磨くことなんかないって、ぼくはシーモアに言ったんだ。どっちみち、あそこに坐ってるんだから、靴なんかみんなから見えやしないってね」は、イワンの「話を信じてもらえなくたってかまわない、俺は主義のために行くんだから」あるいは「あんな百姓どもにほめてなんぞもらいたくないよ！」と呼応してもいるでしょう。

サリンジャーは必ず『カラマーゾフの兄弟』の「百キロもある太った商家のおかみさん」を意識していたでしょうし、彼がもっと後に書いた「シーモア――序章――」のエピグラフにはキルケゴールの『死に至る病』が引かれています（この箇所はまた後で引用します）。

それはさておき、こうして『カラマーゾフの兄弟』から「ゾーイー」へと連想が働いてみると、今度はそこから、これを思い出しますね。ロシアの民衆についてのゾシマ長老のことばです。

> 『お前さんは身分も高いし、金持で、頭もいいし、才能もある。結構なことだ、神さまが祝福してくださいますように。わたしはお前さんを尊敬する、でも、こんなわたしもやはり人間であることを知っているんだ。妬みもせずにお前さんを尊敬することによって、わたしはお前さんに人間的な徳を示しているんだよ』実際にはこんなことは言わぬにしても（なぜなら、まだこんな気のきいたことを言うすべを知らないのだ）、そんなふうに振舞っているのを、わたしはこの目で見たし、経験もしてきた。そして本当の話、わがロシア人は、貧乏で地位が低くなればなるほど、ますますこの美しい真理が顕著になるのだ。
>
> （ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

あるいは、

> 必要なのはごく小さな一粒の種子にすぎない。その種子を民衆の胸に投げこんでやれば、それは死ぬことなく、一生その胸に生きつづけ、心の闇の中に、罪の悪臭のただなかに、明るい一つの点となり、大きな警告としてひそみつづけることだろう。だからあれこれと説き、教えこむ必要はない。民衆はすべてを素朴にわかってくれるのだ。諸師は民衆が理解してくれないとでも思っておられるのか？
>
> （同）

あるいは、

> 「本当にね」わたしは答えた。「何もかもがすばらしく、美しいからね。それというのも、すべてが真実だからだよ。馬を見てごらん、人間のわきに寄り添っているあの大きな動物を。でなければ、考え深げに首をたれて、人間に食を与え、人間のために働いてくれる牛を見てごらん。牛や馬の顔を見てごらん。なんという柔和な表情だろう、自分たちをしばしば無慈悲に鞭打つ人間に対して、なんてなついていることだろう。あの顔にあらわれているおとなしさや信頼や美しさはどうだね。あれたちには何の罪もないのだ、と知るだけで心を打たれるではないか。なぜな

ら、すべてみな完全なのだし、人間以外のあらゆるものが罪汚れを知らぬからだよ。だから、キリストは人間より先に、あれたちといっしょにおられたのだ」

（同）

もうそうなると、当然に、

兄弟たちよ、愛は教師である。だが、それを獲得するすべを知らなければいけない。なぜなら、愛を獲得するのはむずかしく、永年の努力を重ね、永い期間をへたのち、高い値を払って手に入れるものだからだ。必要なのは、偶然のものだけを瞬間的に愛することではなく、永続的に愛することなのである。偶発的に愛するのならば、だれにでもできる、悪人でも愛するだろう。青年だった私の兄は小鳥たちに赦しを乞うたものだ。これは無意味なようでありながら、実は正しい。なぜなら、すべては大洋のようなもので、たえず流れながら触れ合っているのであり、一個所に触れれば、世界の他の端にまでひびくからである。小鳥に赦しを乞うのが無意味であるにせよ、もし人がたとえほんのわずかでも現在の自分より美しくなれば、小鳥たちも、子供も、周囲のあらゆる生き物も、心が軽やかになるにちがいない。もう一度言っておくが、すべては大洋にひとしい。それを知ってこそ、小鳥たちに祈るようになるだろうし、歓喜に包まれたかのごとく、完璧な愛に苦悩しながら、小鳥たちが罪を赦してくれるよう、祈ることができるだろう。たとえ世間の人にはどんなに無意味に見えようと、この歓喜を大切にするがよい。

（同）

というより、もう私はゾシマ長老のことばの全文を引用したいくらいなんですね。

私のいいたいのは、こうです。

ゾーイーの「この『太っちょのオバサマ』というのは本当は誰なのか、そいつがきみに分らんだろうか？……ああ、きみ、フラニーよ、それはキリストなんだ。キリストその人にほかならないんだよ」を、私は『カラマーゾフの兄弟』の読者としてこう読み換えます。「太っちょのオバサマ」にこそキリストはついていてくれるんですよ。このとき、ゾーイーにもフラニーにも確実に「太っちょのオバサマ」の「人間の顔」が見えています。

「『太っちょのオバサマ』の姿が、実にくっきりと、ぼくの頭に出来上がってしまったんだ。彼女は一日じゅうヴェランダに坐って、朝から晩まで全開にしたラジオをかけっぱなしにしたまんま、蠅を叩いたりしているんだ。暑さはものすごいだろうし、彼女はたぶん癌にかかっていて、そして――よく分んないな」

（J・D・サリンジャー「ゾーイー」野崎孝訳　新潮文庫）

「わたしはまだ彼女がヴェランダにいるとこを想像したことがないけど、でも、とっても――ほら――とっても太い足をして、血管が目立ってて。わたしの彼女は、すさまじい籐椅子に坐ってんの。でも、やっぱし癌があって、そして一日じゅう全開のラジオをかけっぱなし！　わたしのもそうなのよ」

（同）

しかも、ふたりはそんな「太っちょのオバサマ」のためになにかをする、それが大事だ、というふうに考えているわけです。

さて、この世界に存在する無数の「太っちょのオバサマ」たちが、イワンには「非力な反逆者ども」・「《嘲弄されるために作られた実験用の未完成な存在たち》」＝「人類」なんてものにされてしまうんです。つまり、イワンには「太っちょの

オバサマ」の「人間の顔」が全然見えていない。それどころか、彼は見ようともしないんです。

しかし、あなたは「太っちょのオバサマ」たちの「人間の顔」を見なくてはなりません。またも引用しますが、その姿勢は、

もし周囲の人々が敵意を持ち冷淡で、お前の言葉をきこうとしなかったら、彼らの前にひれ伏して、赦しを乞うがよい。なぜなら実際のところ、お前の言葉をきこうとしないのは、お前にも罪があるからである。相手がすっかり怒って話ができぬ場合でも、決して望みを棄てず、おのれを低くして黙々と仕えるがよい。もしすべての人に見棄てられ、むりやり追い払われたなら、一人きりになったあと、大地にひれ伏し、大地に接吻して、お前の涙で大地を濡らすがよい。そうすれば、たとえ孤独に追いこまれたお前をだれ一人見も聞きもしなくとも、大地はお前の涙から実りを生んでくれるであろう。たとえこの地上のあらゆる人が邪道に落ち、信仰を持つ者がお前だけになるといった事態が生じても、最後まで信ずるがよい。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

（傍線は私・木下による）

――なんです。なぜなら、あなたには「すべての人に対して罪がある」からです。私はずっと同じことばかり繰り返していますが、どうでしょう？　これで私のいいたいことがわかってもらえたでしょうか？　そして、「すべての人に対して罪がある」という自覚には必ず、「僕のためには、ほかの人が赦しを乞うてくれる」がセットになっていなければなりません。そうでなければ、この自覚は持ちこたえることができないでしょう。ここでは本当に他の誰彼との「つながり」が大切なんです。その「つながり」とは、ゾシマ長老のいう「すべては大洋のようなもので、たえず流れながら触れ合っているのであり、一個所に触れれば、世界の他の端にまでひびくからである」でいわれているような「つながり」です。また、ミーチャの「讃歌」――他の誰かとの「つながり」のなかへと自分自身を投げ出し、自分がそこに「消え」たり、「溶け」たりする――の、その「つながり」でもあります。ところが、イワンには誰に対しても「決して望みを棄てず、おのれを低くして黙々と仕える」ことができません。だから、彼は「孤独」と「離反」とに陥り、「悪魔」（＝自分自身）と対話するんです。

イワン・カラマーゾフはそういう人物です。彼は分裂していて、「信と不信の間を行ったり来たり」します。「信仰」すれすれの「不信」にいます。「不信」も同然の「信仰」にいます。「とにかく同じ瞬間に信と不信のすごい深淵を見つめることができる」人物、悪魔にとっての「ダイヤモンド」です。しかし、彼にはどうしても神の前に自分を投げ出し、へりくだることができません。彼は神の前で頭をさげず、一個の「ダイヤモンド」としてありつづけたいんです。彼は一方で「讃歌」を歌いたい。他方、彼はすべてを見届けたい。神にすべてを委ねるなんてまっぴらです。

そんな人物を表現することがどんなに難しいことであるかを考えてみてください。イワン・カラマーゾフが『カラマーゾフの兄弟』において不確定的な表現ばかりで描かれているのは、そういう事情によるものです。繰り返しますが、作品の構造上でも、イワンのこの不確定的なものに対して加えられる一撃――「あなたじゃない」――は必ず確定的なものでなければなりません。不確定的なものに対する一撃が同じく不確定的なものであってはならないんです。不確定的なものを動揺させるもの、破壊するものは必ず確定的なものでなくてはならないんです。「あなたじゃない」に一切のあいまいさはありません。

「悪魔」はイワンを不確定的なもののなかに隔離します。彼を不確定的なところに留めおこうとするわけです。「悪魔」は「ダイヤモンド」をさらに磨かれたものにしようとするんです。イワンには自分でこのからくりがわかっています。

わかっているということが、まったく始末に負えないわけです。彼は自身「ダイヤモンド」でありたいんです。彼はこの誘惑に勝てません。

さて、私はこれから「今は亡き司祭スヒマ僧ゾシマ長老の生涯より。長老自身の言葉からアレクセイ・カラマーゾフが編纂」についてしゃべるつもりなんですが、その前にちょっとだけ寄り道をして、もう一度、最先端＝亀山郁夫の例の文章に戻ります。

ゾシマ長老が残した「説教」のテーマは、ひとこと「傲慢を捨てよ」に尽きる。ゾシマは、傲慢が生みだす悲劇を身をもって体験した。決闘のエピソードが示すように、彼自身ジラールの「三角形的欲望」のとりこだったことは疑いようがない。「三角形的欲望」の源にあるものこそ、傲慢である。その彼が、「謎の訪問客」との出会いによって修道院への道を志すとき、もちろんそれは、みずからの「傲慢」を最終的に克服するための第一歩にすぎなかった。ともあれ、この小説での「傲慢」の罪のもっとも恐ろしい体現者とは、ほかでもない、「謎の訪問客」である。

（亀山郁夫「解題」）

これは「ゾシマ長老の回想と説教――大成の道」という小見出しを付けられた文章の一部なんですが、この文章、まず出だしからこんなふうです。

人間は大きな罪を経て、はじめてある世界に到達できるというゾシマ長老の考え方は、現代社会においてはとうてい受け入れがたい、ほとんど不可能に近い信念ではないだろうか。とりわけ競争のはげしい現代社会では、人は、少しでも罪を犯したら終わりであり、命とりとなり、脱落を迫られる。

（同）

最先端＝亀山郁夫が「大きな罪」というのは、むろん例の「法的にどうか」という観点からの「罪」――たとえば殺人とか強盗――ですね。そうでなければ、「現代社会では、人は、少しでも罪を犯したら終わりであり、命とりとなり、脱落を迫られ」ることがありません。ということは、つまり、人間は、たとえば殺人を犯すことによって「はじめてある世界に到達できる」、それが「大成の道」だ、ということになります。何ですか、これは？　で、いったい誰の信念なんですって？　誰がそんなことを説いているのか？

最先端＝亀山郁夫はこうつづけます。

ではゾシマの教えに、どのような可能性、現代性があるのだろうか。わたしたちは、小説世界に閉じられたものとして、その教えを受け入れざるをえないのか。

（同）

つまり、現代では「大成」したくても、おいそれと殺人なんかできないなあ、どうしたらいいんだろう？　ということです。

これ以前にべつの箇所で、最先端＝亀山郁夫はこう書いていました。

では、この長老に果たして「偉大な罪人」と呼べるだけの試練はあったのだろうか。長老の残した「談話」は、むしろ長老の経験の欠落を暗示していないか。彼はどのような「穢れ」をまとうことにより、今の聖性の高みに到達することができたのか。

（同）

これが典型的な「最先端＝亀山郁夫的読書」です。すぐに「偉大な罪人」だの「聖性の高み」だの、作品に勝手な余計な意味をもたせて、派手な「まとめ」

をやらかす読書です。そういう読みかただから、ゾシマ長老にも他人にいえない派手な犯罪を期待してしまうんです。ひどすぎる。私は『カラマーゾフの兄弟』を読みながら、「偉大な罪人」だの「聖性の高み」だのを思い浮かべたことなんか一度もありません。いいですか、ゾシマ長老はごくふつうの人間ですよ。彼を妙なふうに特別扱いした読みかたで読んではなりません。ただ作品中に描かれたそのままの人物像を読めばいいだけです。いいですか、作品を自分に合わせちゃ駄目なんですよ。自分を作品に合わせるんです。作品を自分の貧弱な想像力に見合ったものに変えて、ないものねだりの読書なんかしちゃいけません。

しかし、話を戻しましょう。

最先端＝亀山郁夫はこうつづけます。

> ゾシマ長老の教えが現代的な問題を深くはらむとすれば、それは「すべてに対して罪がある」という思想である。長老の教えの核心にあるものこそ、この思想であり、その意味でも「謎の訪問客」は、はかりしれず重要な意味を担うエピソードといえる。
>
> （同）

何が「ゾシマ長老の教えが現代的な問題を深くはらむとすれば」ですか？　最初から「「すべてに対して罪がある」という思想」についてだけをいっていればよかったものを。ともあれ、いま私が指摘したことだけで、最先端＝亀山郁夫の読書が最先端だということがおわかりいただけたと思います。彼の「解題」は「作品を自分の貧弱な想像力に見合ったものに変えて、ないものねだりの読書」をした者のでたらめの集積です。こんな最先端が「翻訳者」だというわけです。

「傲慢を捨てよ」――結構でしょう。それだけをそのまま受け取れば、たしかに間違ってはいません。しかし、最先端＝亀山郁夫にはその「傲慢」の意味がわかっていません。

> 人はだれの審判者にもなりえぬことを、特に心に留めておくがよい。なぜなら当の審判者自身が、自分も目の前に立っている者と同じく罪人であり、目の前に立っている者の罪に対してだれよりも責任があるということを自覚せぬかぎり、この地上には罪人を裁く者はありえないからだ。それを理解したうえでなら、審判者にもなりえよう。一見いかに不条理であろうと、これは真実である。なぜなら、もし自分が正しかったのであれば、目の前に立っている罪人も存在せずにすんだかもしれないからだ。目の前に立って、お前の心証で裁かれる者の罪をわが身に引き受けることができるなら、ただちにそれを引き受け、彼の代りに自分が苦しみ、罪人は咎めずに放してやるがよい。たとえ法がお前を審判者に定めたとしても、自分にできるかぎり、この精神で行うことだ。なぜなら、罪人は立ち去ったのち、みずからお前の裁きよりもずっときびしく自分を裁くにちがいないからである。かりに罪人がお前の接吻にまったく冷淡で、せせら笑いながら立ち去ったとしても、それに心をまどわされてはいけない。これは取りも直さず、まだその罪人の時が訪れていないからであり、やがていずれ訪れるだろう。たとえ訪れなくても、しょせん同じことだ。彼でなければ、他の者が彼の代りにさとり、苦しみ、裁き、みずから自分を責めて、真理は充たされるだろう。このことを信ずるがよい。疑いなく信ずることだ。なぜなら、聖者のいっさいの期待と信頼はまさにその一事にかかっているからである。
>
> 倦むことなく実行するがよい。夜、眠りに入ろうとして、『やるべきことを果していなかった』と思いだしたなら、すぐ起きて実行せよ。もし周囲の人々が敵意を持ち冷淡で、お前の言葉をきこうとしなかったら、彼らの前にひれ伏して、赦しを乞うがよい。なぜなら……
>
> （ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）
>
> （傍線は私・木下による）

もし他人の悪行がもはや制しきれぬほどの悲しみと憤りとでお前の心をかき乱し、悪行で報復したいと思うにいたったら、何よりもその感情を恐れるがよい。そのときは、他人のその悪行をみずからの罪であるとして、ただちにおもむき、わが身に苦悩を求めることだ。苦悩を背負い、それに堪えぬけば、心は鎮まり、自分にも罪のあることがわかるだろう。なぜなら、お前はただ一人の罪なき人間として悪人たちに光を与えることもできたはずなのに、それをしなかったからだ。光を与えてさえいれば、他の人々にもその光で道を照らしてやれたはずだし、悪行をした者もお前の光の下でなら、悪行を働かずにすんだかもしれない。また、光を与えたのに、その光の下でさえ人々が救われないのに気づいたとしても、いっそう心を強固にし、天の光の力を疑ったりしてはならない。かりに今救われぬにしても、のちにはきっと救われると、信ずるがよい。あとになっても救われぬとすれば、その子らが救われるだろう。なぜなら、お前が死んでも、お前の光は死なないからだ。行い正しい人が世を去っても、光はあとに残るのである。人々が救われるのは、常に救い主の死後である。人類は予言者を受け入れず、片端から殺してしまうけれど、人々は殉教者を愛し、迫害された人々を尊敬する。お前は全体のために働き、未来のために実行するのだ。決して褒美を求めてはならない。なぜなら、それでなくてさえお前にはこの地上ですでに褒美が与えられているからだ。行い正しき人のみが獲得しうる、精神的な喜びがそれである。地位高き者をも、力強き者も恐れてはならぬ、だが、賢明で、常に心美しくあらねばならぬ。節度を知り、時期を知ること、それを学ぶがよい。孤独におかれたならば、祈ることだ。大地にひれ伏し、大地に接吻することを愛するがよい。大地に接吻し、倦むことなく貪婪に愛するがよい。あらゆる人々を愛し、あらゆるものを愛し、喜びと熱狂を求めるがよい。喜びの涙で大地を濡らし、自分のその涙を愛することだ。その熱狂を恥じずに、尊ぶがよい。なぜなら、それこそ神の偉大な贈り物であり、多くの者にでなく、選ばれた者にのみ与えられるものだからである。

（同）

（傍線は私・木下による）

わが友よ、神に楽しさを乞うがよい。幼な子のように、空の小鳥のように、心を明るく持つことだ。そうすれば、仕事にはげむ心を他人の罪が乱すこともあるまい。他人の罪が仕事を邪魔し、その完成を妨げるなどと案ずることはない。「罪の力は強い、不信心は強力だ、猥雑な環境の力は恐ろしい。それなのにわれわれは一人ぼっちで無力なので、猥雑な環境がわれわれの邪魔をし、善行をまっとうさせてくれない」なとと言ってはならない。子らよ、こんな憂鬱は避けるがよい！　この場合、救いは一つである。自己を抑えて、人々のいっさいの罪の責任者と見なすことだ。友よ、実際もそのとおりなのであり、誠実にすべての人すべてのものに対する責任者と自己を見なすやいなや、とたんに本当にそのとおりであり、自分がすべてのものに対して罪ある身であることに気づくであろう。ところが、自己の怠惰と無力を他人に転嫁すれば、結局はサタンの傲慢さに加担して、神に不平を言うことになるのだ。

（同）

（傍線は私・木下による）

「傲慢を捨てよ」――結構でしょう。しかし、「傲慢を捨てる」だけでなく、さらにずっとへりくだることをゾシマ長老は説いているんです。いや、もしかしたら、「傲慢を捨てる」ことがそのまま「へりくだる」ことなのかもしれません。つまり、傲慢と謙遜とに中間はないのかもしれません。とはいえ、最先端＝亀山郁夫が「傲慢」の意味をわかっていないと私がいう理由はそれだけではありません。でも、それについてしゃべるのは、もっと後回しにします。

さらに枝分かれした先の隅っこへと寄り道をしますが、私は、先の最先端＝

亀山郁夫の文章中にある「その彼が、「謎の訪問客」との出会いによって修道院への道を志すとき、……」について、以前にこう書いたんでした。

「その彼」というのはゾシマなんですが、彼が修道院への道を踏み出したのは、「謎の訪問客」に出会う以前なんですよ。「謎の訪問客」は、決闘を放棄して、軍籍を離れ、修道僧になろうとしている奇妙な人物ゾシマの評判を聞きつけてやって来たひとたちのひとりなんです。それなのに、なぜ亀山郁夫は「その彼が、「謎の訪問客」との出会いによって修道院への道を志す」なんて書くんでしょうか？　もうこれが理解できない。めちゃくちゃです。あまりに杜撰です。雑に過ぎる。わざとやっているのか？　それとも、彼は本当にこの小説を訳したのか？　でなければ、「解題」を誰かべつの無能な人物に代筆させているのか？　最悪なのが、小説を訳した人物と「解題」を書いた人物とが同一である場合です。最悪なのか？最悪なんだろうなあ。――とまあ、こういうことです。

そうして、その私の文章と、それを引用した木下豊房の文章とを受けた最先端＝亀山郁夫がＮＨＫテキストで自分の誤りをごまかそうとしているだろうと疑ったんでした。最先端＝亀山郁夫はＮＨＫテキストでこう書いていたんですね。

「ああ、これがはたして嘘だというのだろうか？　泣きながらわたしは思った。もしかすると、このわたしこそ、すべての人々に対してほかのだれよりも罪深く、地上のだれにもまして悪い人間なのではないか？」

決闘場に立った彼は、相手に向かって銃を放つことを拒否します。それこそは、ゾシマが修道院にはいる最初のきっかけとなった経験でした。

第六編「ロシアの修道僧」には、この回心のエピソードにつづいて、もう一つの魅力的なエピソード「謎の訪問客」が記されています。長編小説のなかにエピソードが入れ子細工のように挟まれる構造は、ドストエフスキー文学の魅力のひとつですが、この「謎の訪問客」はたんなる余興としての面白さを超えて、『カラマーゾフの兄弟』全体のテーマに迫る強烈な問題性をはらんでいるように私には思えます。

（亀山郁夫「新訳『カラマーゾフの兄弟』を読む」）

（傍線は私・木下による）

さて、そもそも最先端＝亀山郁夫がなぜ「その彼が、「謎の訪問客」との出会いによって修道院への道を志すとき、……」なんてことを書いたのかというと、おそらくこうです。彼は以下の文章を読み誤ったんです。「最先端＝亀山郁夫的読書」です。

「あの晩、真夜中にわたしが二度目に訪ねて行ったのを、おぼえているかい？　そのうえ、おぼえておくように言っただろう？　何のためにわたしが行ったか、わかるかね？　あれは君を殺しに行ったんだよ！」

わたしは思わずぎくりとした。

「あの晩、君のところから闇の中に出て、通りをさまよいながら、わたしは自分自身と戦っていた。そしてふいに、心が堪えていられぬほど、君が憎くなったんだ。『今やあの男だけが俺を束縛している。俺の裁判官なんだ。俺はもう明日の刑罰を避けることができない。だって、あの男が何もかも知っているからな』君が密告するのを恐れたわけじゃなく（そんなことは考えもしなかった）、こう思ったのだ。『もし自首しなければ、どうしてあの男の顔を見られるだろう？』たとえ君が遠く離れたところにいようと、生きているかぎり、しょせん同じことだ。君が生きており、何もかも知っていて、わたしを裁いている、という考えが堪えられないからね。まるで君がすべての原因であり、すべてに罪があるかのように、わたしは君を憎んだ。そこでわたしは君のところへ引き返したんだよ。テーブルの上に短剣があったのを、今でもおぼえているよ。わたしは坐り、君にも坐るように頼んで、まる一分というもの考えつづけた。もし君を殺せば、たとえ以前の犯罪を自白せぬとしても、どのみちその殺人

のために身を滅ぼしたにちがいない。でも、あの瞬間、そんなことは全然考えなかったし、考えたくもなかった。わたしはただ君を憎み、すべての復讐を精いっぱい君にしてやりたかっただけなんだ。だけど、神さまがわたしの心の中の悪魔に打ち克ってくださった。それにしても、いいかい、今までに君はあれほど死に近づいたことはなかったんだよ」

……（中略）……

……だが、わたしは沈黙を守り、間もなくすっかり町を離れて、五カ月後には、これほどはっきり道を示してくれた、目に見えぬ主の御指を祝福しながら、主の思召しによって揺るぎない荘厳なこの道に踏みこむ栄に浴した。しかし、苦しみ多かった神のしもべミハイルのことは、いまだに毎日、お祈りの中で思い起しているのである。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

（傍線は私・木下による）

傍線部「これほどはっきり道を示してくれた、目に見えぬ主の御指を祝福しながら、主の思召しによって揺るぎない荘厳なこの道に踏みこむ栄に浴した」は、ただ単に「それにしても、いいかい、今までに君はあれほど死に近づいたことはなかったんだよ」に対応しているだけのことですよ。ゾシマが修道僧になることはもう確定していました。修道僧になろうとしているゾシマを、殺人者から神が守ったということです。だからこそ、いよいよゾシマは神に感謝しつつ、「これほどはっきり道を示してくれた」というんです。しかし、最先端＝亀山郁夫はこの部分から、「その彼が、「謎の訪問客」との出会いによって修道院への道を志す」なんてことを読み取ってしまうんですね。さらに、自分の誤りを指摘されると、訂正するのでなく、「決闘」を「最初のきっかけになった経験」などといって、糊塗するわけです。

いやはや、こんな「最先端」、こんな低レヴェルの読み取りにいちいち批判の文章を書かなくてはならない――何と、もうじき一年になろうとしているじゃないですか――私自身にもうんざりしてきます。でも、しかたがありません。「最先端＝亀山郁夫的読書」をするひとの数が恐ろしく多いからです。私はドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』を守るために、「最先端＝亀山郁夫的読書」を粉砕しなくてはなりません。いいですか、「最先端＝亀山郁夫的読書」による翻訳者の『カラマーゾフの兄弟』はドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』じゃないんですよ。何度でもいいます。最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』はでたらめだらけの偽物です。

しかし、先へ進みましょう。

「今は亡き司祭スヒマ僧ゾシマ長老の生涯より。長老自身の言葉からアレクセイ・カラマーゾフが編纂」について、私はしゃべろうとしていたんでした。

私はここまで『カラマーゾフの兄弟』におけるイワン・カラマーゾフについての表現がどれだけ語り手にとって困難なものであったかを――寄り道をしつつ、過剰に引用を重ねながら――しゃべってきたわけですが、そこで、イワンの経験することをゾシマ長老のことばに対比させてきました。どうでしょう？まるで誂えたようにそれらは呼応していたんじゃないでしょうか？

それで、私はゾシマ長老のことばを、語り手による地の文章とアリョーシャによる「今は亡き司祭スヒマ僧ゾシマ長老の生涯より。長老自身の言葉から」との別なく引用していました。しかし、実は、両者は区別されなければなりません。

この両者を区別することが、アレクセイ・カラマーゾフという人物への理解を深めることになるでしょう。

おそらく『カラマーゾフの兄弟』の読者のほとんどが、「今は亡き司祭スヒマ僧ゾシマ長老の生涯より。長老自身の言葉からアレクセイ・カラマーゾフが編纂」によってはじめてゾシマ長老という人物に親しみを覚えたはずだと思いま

す。この部分にいたるまでの大方の読者は、語り手が何とか否定しようと試みたにせよ、「長老」を何かいかめしい、特別の権威であって、それが自分たちふつうの人間からかけ離れているものだという印象を持ちつづけていただろう、と思うんです。ところが、ここへ来て、そうではないとわかります。ここまで来ると、ゾシマ長老の声がまったく柔らかく親しみ深いものとして聞こえてくる――そういう経験をしただろうと思うんです。そういう読者が『カラマーゾフの兄弟』を再読すると、ゾシマ長老の声はもはや最初から、その柔らかく親しみ深いものとして聞こえてきます。

それは、逆にいうと、語り手が自身の語りで語ったゾシマ長老の声が、べつの人物（アリョーシャ）による語りで語られたゾシマ長老の声としっかり重なるということでもあります。

ここで断わっておかねばならないが、長老が生涯の最後の日に訪れた客人たちと交わした最後の説話は、ある程度、書きとどめられて残された。長老の死後しばらくして、アレクセイ・フョードロウィチ・カラマーゾフが記念に書きとどめたのである。しかし、それが完全にその時の説話そのままであるか、あるいは彼がそれまでの師との対話からもこの記録に付け加えたのか、わたしには何とも決められない。おまけに、この記録では、まるで長老が友人たちに向って自分の一生を物語の形で述べたかのように、説話が少しの切れ目もなくつづいているのだが、これにつづくいくつかの話から判断すると、疑いもなく、実際はいささか事情が異なっていたようだ。なぜなら、たとえ客人たちが主人の話をほとんどさえぎらなかったとはいえ、この晩の話はみなで交わしたものであり、だれもが会話に口をはさんで、自分も発言し、おそらく自分たちも何かの話を語ったり、披露したにちがいないのだし、そのうえ、この物語がこれほど淀みなく語られることなどありえないからだ。

（同）

今は、説話の細部まですべて述べることをせず、むしろアレクセイ・フョードロウィチ・カラマーゾフの原稿にもとづく長老の物語にだけに限ることを、断わっておきたい。くりかえして言うが、もちろん大部分はアリョーシャがこれまでのいろいろな説話からも選んで、一つにまとめたものであるとはいえ、このほうが簡潔であるし、それにさほど退屈でもないだろう。

（同）

アレクセイ・カラマーゾフの手記はここで終っている。くりかえして言うが、これは完全なものではなく、断片的なものだ。たとえば伝記的資料にしても、長老の青春時代のごく初期を含むにすぎない。また長老の説教や見解から、明らかにさまざまな時期に、いろいろな動機から語られたと見られるものが、一つのまとまったもののように集められている。いずれにせよ、長老が生涯の最後の数時間に語ったことは、正確に指定されておらず、アレクセイ・カラマーゾフが以前の説教から手記に収めた部分と対比すれば、その法話の性格や真髄について概念が得られるというにすぎない。

（同）

こうして、アリョーシャの編纂した文章は小説の語り手が公認したものです。語り手は、この文章が作品の全体を語る自分の意図と齟齬をきたすことがない、あるいは、まさにぴったりのもの・好都合なものである、と判断したということです。それだけでなく、この文章がアリョーシャ自身を如実に表現することにもなる、と考えてもいたでしょう。そうでなければ、ここをアリョーシャに委ねたりはしません。

逆に語り手はアリョーシャ自身を描くのに、このアリョーシャの原稿から引

用しさえしますよね。

何のために大地を抱きしめたのか、彼にはわからなかったし、なぜこんなに抑えきれぬほど大地に、大地全体に接吻したくなったのか、自分でも理解できなかったが、彼は泣きながら、嗚咽しながら、涙をふり注ぎながら、大地に接吻し、大地を愛することを、永遠に愛することを狂ったように誓いつづけた。『汝らの喜びの涙を大地にふり注ぎ、汝のその涙を愛せよ……』心の中でこんな言葉がひびいた。何を思って、彼は泣いたのだろう？　そう、彼は歓喜のあまり、無窮の空からかがやくこれらの星を思ってさえ泣いたのであり、《その狂態を恥じなかった》のである。さながら、これらすべての数知れぬ神の世界から投じられた糸が、一度に彼の魂に集まったかのようであり、彼の魂全体が《ほかの世界に接触して》、ふるえていたのだった。彼はすべてに対してあらゆる人を赦したいと思い、みずからも赦しを乞いたかった。ああ、だがそれは自分のためにではなく、あらゆる人、すべてのもの、いっさいのことに対して赦しを乞うたのだ。『僕のためには、ほかの人が赦しを乞うてくれる』ふたたび魂に声がひびいた。しかし、刻一刻と彼は、この空の円天上のように揺るぎなく確固とした何かが自分の魂の中に下りてくるのを、肌で感ずるくらいありありと感じた。何か一つの思想と言うべきものが、頭の中を支配しつつあった。そしてそれはもはや一生涯、永遠につづくものだった。大地にひれ伏した彼はかよわい青年であったが、立ちあがったときには、一生変らぬ堅固な闘士になっていた。そして彼は突然、この歓喜の瞬間に、それを感じ、自覚したのだった。アリョーシャはその後一生を通じてこの一瞬を決して忘れることができなかった。「だれかがあのとき、僕の魂を訪れたのです」後日、彼は自分の言葉への固い信念をこめて、こう語るのだった……

（同）

注目すべきことは、このときアリョーシャが自分でゾシマ長老のことばそのものを意識していたのではない、ということです。「何のために大地を抱きしめたのか、彼にはわからなかったし、なぜこんなに抑えきれぬほど大地に、大地全体に接吻したくなったのか、自分でも理解できなかった」んですよ。もしかすると、彼の「魂」に「ひびいた声」は、ゾシマ長老の「声」で聞き取れていたのかもしれません。しかし、彼はこのとき、ゾシマ長老を想起しなくても、大地を抱きしめていたんです。あるいは、それほどゾシマ長老の教えが彼の身にしっかりと根づいていたということなのかもしれません。アリョーシャが後になって、そうだ、あれはゾシマ長老のいっていた通りだった、と気づいたのかもしれません。わかりません。ともあれ、語り手は、アリョーシャを描写するのに、実はアリョーシャ自身の文章から引用しているんです。

少し前に私はこういいました。

また、おそらくは、やはり語り手がこの作品の主人公をアリョーシャだとしたいからでもあるでしょう。つまり、アリョーシャから離れないようにしながらイワンを語ることだけが語り手にとって重要だということでしょう。

いま私はもしかすると非常に重要なことに触れているのかもしれないと思いますが、それはさておき、話を戻して――

私は何がいいたいのか？

孤独におかれたならば、祈ることだ。大地にひれ伏し、大地に接吻することを愛するがよい。大地に接吻し、倦むことなく貪婪に愛するがよい。あらゆる人々を愛し、あらゆるものを愛し、喜びと熱狂を求めるがよい。喜びの涙で大地を濡らし、自分のその涙を愛することだ。その熱

狂を恥じずに、尊ぶがよい。なぜなら、それこそ神の偉大な贈り物であり、多くの者にでなく、選ばれた者にのみ与えられるものだからである。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

（傍線は私・木下による）

この地上では多くのものがわれわれから秘め隠されているが、その代りわれわれには、他の世界、天上の至高の世界と生きたつながりを有しているという、神秘的な貴い感情が与えられているし、またわれわれの思考と感情の根はこの世ではなく、他の世界に存するのである。事物の本質はこの地上では理解できないと哲学者が言うのは、このためにほかならない。神は他の世界から種子をとって、この地上に播き、自分の園を作られた。だからこそ、生じうるものはすべて生じたのである。だが、その育てられたものは、もっぱら神秘的な他の世界と接触しているという感情によって生き、溌剌としているのであって、もしその感情が弱まったり消えたりすれば、自己の内部に育てられたものも死んでしまうのだ。そうなれば、人は人生に無関心になり、それを憎むようにさえなるのである。わたしはそう考える。

（同）

（傍線は私・木下による）

青年よ、祈りを忘れてはいけない。祈りをあげるたびに、それが誠実なものでさえあれば、新しい感情がひらめき、その感情にはこれまで知らなかった新しい思想が含まれていて、それが新たにまた激励してくれるだろう。そして、祈りが教育にほかならぬことを理解できるのだ。また、このこともおぼえておくがよい。毎日、できるときでよいから、『主よ、今日御前に召されたすべての人を憐れみたまえ』と、たえず心の内でくりかえすのだ。それというのも、毎時毎分、何千という人がこの地上の生を棄て、その魂が主の御前に召されてゆくのだが、そのうちのきわめて多くの人が、だれにも知られず、悲しみと愁いのうちに一人淋しくこの世に別れてゆくのであり、だれも彼らを憐れむ者はなく、そんな人たちがこの世に生きていたかどうか、それさえまったく知らないからなのだ。と、そのとき、地球の反対の端からお前の祈りが、たとえお前がその人をまったく知らず、先方もお前を知らぬにしても、その人の安らぎをねがって主の御許にのぼってゆくにちがいない。恐れおののきながら主の前に立ったその人の魂にとって、その瞬間、自分のためにも祈ってくれる人がいる、地上にもまだ自分を愛してくれる人間が残されていると感ずることが、どんなに感動的であろうか。そして神もまたお前たち二人を、いっそう慈悲深く眺められることだろう。なぜなら、お前でさえそんなに彼を憐れんでやった以上、お前より慈悲深く愛情豊かな神は、なおさらのことだからだ。そしてお前に免じてその者を赦してくださるにちがいない。

（同）

（傍線は私・木下による）

私は何がいいたいのか？

私がいいたいのは、編纂者アレクセイ・カラマーゾフが、自分の聞き取ったゾシマ長老のことばを、この『カラマーゾフの兄弟』に描かれている一連の出来事を経験した者として記しているということです。それは何を意味しているか？ここに記されているゾシマ長老の教えは、アリョーシャの理解しえた範囲でのものだということです。そこには、彼が漠然としか予感しえないものも含まれるかもしれませんが、とにかく、彼は自分がまったく理解しえなかった教えを書き記すことはできません。文章というのはそういうものです。

それにもかかわらず、ゾシマ長老のしゃべったそのままを書けばいいじゃないか、などと考えるひとがいるなら、大間違いです。そのひとは文章というものがまったくわかっていません。

私はパンフレット『故ゾシマ長老の生涯』の著者ラキーチンにも、アリョーシャが書いたようにはけっして書けやしないし、しかも、同じゾシマ長老のことばがふたりによってまったくべつの位置づけ、意味づけをされている箇所もかなりの数になるだろう、といっているんです。これに同意できないひとがいますか？います。そういうひとの考えが最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』を是とする温床です。つまり、目の前にあるこの作品のロシア語原典の一文一文をそのまま訳していけば、それでこの作品全体の翻訳が完成だと考えるわけです。まったくの誤りです。『カラマーゾフの兄弟』に書かれている原典の文章のいちいちについて、それらが全体のなかでどういう意味を持つものなのか、力点はどこにあるのか、それらはどちらを向いているのか、などなど――全体の構造がどうなっていて、細部がどちらを指向しているのか――を理解しえないひとに作品の翻訳なんかできるわけがないんですよ。たとえば、最先端＝亀山郁夫がアリョーシャに代って、ゾシマ長老のことばを編纂したなら、どんなことになるでしょうか？　アリョーシャの文章すらろくに読み取れないこの最先端なんかの手にかかれば、さぞかし扇情的で軽薄な代物が出来上がることでしょう。このことがわからないひとは、もう「文学」から足を洗え、とまたしても私はいっておきます。

これも再引用します。

> 哲学においては、論拠がちがう同じ主張なんてものはそもそも存在しない。
>
> （永井均『〈子ども〉のための哲学』　講談社現代新書）

それにしても、私は何がいいたいのか？

アリョーシャは、自分の聞き取ったゾシマ長老のことばを自分がどう受け止めたか・どう理解したかのみならず、他の誰彼に対してどう伝えるか、ということを考えなくてはなりませんでした。そのうえで書かれた文章なんです。

いいですか、「たかだか二十歳になるかならずだった」若者の文章なんですよ、これは。しかし、アレクセイ・カラマーゾフは恐ろしく頭がいい。もしかすると、イワンにひけを取らないほど優れた知性の持ち主じゃないでしょうか。彼が、いわば天真爛漫に・無邪気に神を信じているなんて考えてはいけません。それどころか、彼は、兄イワンに何が起こっているのかを正確に見極められるほど「不信」について知っていたんです。いうまでもなく、これはゾシマ長老もです。アリョーシャとゾシマ長老とは、確かに「信仰」のひとではあるでしょうが、「不信」のからくりについても熟知していました。だからこそ、ふたりは力を尽くして「信仰」を誰彼に説く――「あなたじゃない」をいいつづける――んです。このことを認識して読むか読まないかということが『カラマーゾフの兄弟』の読書において、読者の読み取りの重大な分かれめにもなるでしょう。

私はだいぶ以前――およそ十か月前――にこういいました。

> イワンの心中を正確に見通していたアリョーシャは、「謙遜な勇気」を持って、イワンのために、献身的にことばを発したんですよ。アリョーシャの勇気はそういう性質のものです。そうして、これはゾシマ長老にもいえることで、このふたりは、他人の心理を洞察することに長けているんです。犯罪者の心理にまで、その洞察の範囲は及んでいるでしょう。アリョーシャがリーザにいった「僕もそれとまったく同じ夢を見ますよ」もおぼえておいてほしいですね（それを受けてリーザが、彼には何でも話せる、というんでした）。こういうアリョーシャだから、イワンに「あなたじゃない」といってやることができるんです。もしかすると、これを悪用することができるのじゃないか、という疑いも生じるかもしれませんが、おそらく、彼らの洞察力の基盤は「信仰」――あるいは、「善意」でしょうか。あるいは、人間を尊重する心でしょうか――にあります。

「信仰」なしに、この洞察力がどこまで力を発揮するのか、疑問ですね。しかし、亀山郁夫には彼らのすごさがこうした洞察力にあるということがわかっていません。だから、「聖性」だの「聖人」だの「予言」だのということを大げさなやりかたで持ち出さなくてはならなくなるんです。「来るべき聖人」なんてどうでもいいし、そもそもゾシマ長老だってそういう「聖人」なんかじゃありません。

それはともかく、アリョーシャ編纂によるゾシマ長老のことばは、単にゾシマ長老のことばであるだけでなく、アリョーシャの理解の範囲内のものであること、アリョーシャが他の誰彼に伝えたいことでもあることに念を押しておきます。しかも、アリョーシャはそれをいわば自戒の糧ともしなくてはならなかったでしょう。

ここでは、教えを実行しようとする者がすぐにもぶつかるはずのいくつもの障害について先回りがなされ、励ましが与えられます。その励ましは、励まし手自身にも向けられているはずです。

もしかすると、僕たちはわるい人間になるかもしれないし、わるい行いの前で踏みとどまることができないかもしれません。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』 原卓也訳　新潮文庫）

しばらく前とそっくり同じ引用をし、同じ私の意見を繰り返します。

かりに罪人がお前の接吻にまったく冷淡で、せせら笑いながら立ち去ったとしても、それに心をまどわされてはいけない。これは取りも直さず、まだその罪人の時が訪れていないからであり、やがていずれ訪れるだろう。たとえ訪れなくても、しょせん同じことだ。彼でなければ、他の者が彼の代りにさとり、苦しみ、裁き、みずから自分を責めて、真理は充たされるだろう。このことを信ずるがよい。疑いなく信ずることだ。なぜなら、聖者のいっさいの期待と信頼はまさにその一事にかかっているからである。

（同）

また、光を与えたのに、その光の下でさえ人々が救われないのに気づいたとしても、いっそう心を強固にし、天の光の力を疑ったりしてはならない。かりに今救われぬにしても、のちにはきっと救われると、信ずるがよい。あとになっても救われぬとすれば、その子らが救われるだろう。なぜなら、お前が死んでも、お前の光は死なないからだ。行い正しい人が世を去っても、光はあとに残るのである。人々が救われるのは、常に救い主の死後である。人類は予言者を受け入れず、片端から殺してしまうけれど、人々は殉教者を愛し、迫害された人々を尊敬する。お前は全体のために働き、未来のために実行するのだ。決して褒美を求めてはならない。なぜなら、それでなくてさえお前にはこの地上ですでに褒美が与えられているからだ。行い正しき人のみが獲得しうる、精神的な喜びがそれである。地位高き者をも、力強き者も恐れてはならぬ、だが、賢明で、常に心美しくあらねばならぬ。節度を知り、時期を知ること、それを学ぶがよい。孤独におかれたならば、祈ることだ。大地にひれ伏し、大地に接吻することを愛するがよい。大地に接吻し、倦むことなく貪婪に愛するがよい。あらゆる人々を愛し、あらゆるものを愛し、喜びと熱狂を求めるがよい。喜びの涙で大地を濡らし、自分のその涙を愛することだ。その熱狂を恥じずに、尊ぶがよい。なぜなら、それこそ神の偉大な贈り物であり、多くの者にでなく、選ばれた者にのみ与えられるものだからである。

（同）

どうですか？

お前は全体のために働き、未来のために実行するのだ。決して褒美を求めてはならない。

（同）

アリョーシャ（ゾシマ長老）は、いま自分の生きているうちに「結果」が得られるなどと考えるな、といっているんです。自分が「すべてを見届ける」ことなど望むな、といっているんです。どうなるのかもわからない・何の保証もない未来のために、いまの自分がへりくだり、誰彼に奉仕することを説いているんです。前にもいいましたが、これはイワンの考えの対極に当たります。そうして、アリョーシャ（ゾシマ長老）は、自身をも含めてですが、他の誰彼がきっと「いや、自分はすべてを見届けたい」というに違いないことを承知しながら、右のことばを語ったでしょう。多くのひとが「そんなどうなるのかもわからない・何の保証もないものを信じて、この自分の人生を賭けることなどできない」というに違いないことを見越していたでしょう。

それは、まあ、こういう理屈です。

『読者たるわたしが、なぜその男の生涯のさまざまな出来事の詮索に時間を費やさにゃならないんだい？』

（同）

しかし、この賭けを賭け、献身することをアリョーシャ（ゾシマ長老）は説きつづけるんです。右の引用のすぐ前――この小説のエピグラフ――はこうでした。

よくよくあなたがたに言っておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。

（ヨハネによる福音書。第十二章二十四節）

私は何がいいたいのか？

「今は亡き司祭スヒマ僧ゾシマ長老の生涯より。長老自身の言葉からアレクセイ・カラマーゾフが編纂」は、たしかに「長老自身の言葉」なんですが、しかし、アリョーシャが編纂した以上、ある意味、アリョーシャ自身のことばでもあるはずなんです。文章がしっかりとしていて、書き手の「何を描くか」と「どのように描くか」とが緊密に結んでいればいるほど――アリョーシャの文章はそういう文章だと思います――そこには必ず何かしらの偏向があるだろうとも思います。また、ある意味、そういう偏向はなくてはならないものでもあります。編纂者自身の声の聞き取れない長老のことばには、実は何の価値もありません。私はわけのわからないことをいっているでしょうか？　しかし、文章というのは、そういうものなんです。文章というのは、書き手自身を問うものです。文章は書き手を試します。読者にとっては、その書き手が当の文章を書くのに、どれほど真摯になっているか、どれほど苦しんでいるか、どれほどの覚悟があるかを見極めることが大事です。読者はそうして、書き手が信用に値する人間であるかどうかを測るんです。書き手はどうしたって、無色透明でいること・ニュートラルでいることができません。かりにそう見えることがあるとしても、それは単に見かけにすぎません。繰り返しますが、文章というのはそういうものです。

いいですか、私はアリョーシャがゾシマ長老のことばを捏造したとか、そういう類の話をしているのじゃありません。しかし、文章というのは、必ずいまいったような性質を持っているんです。そうして、作品の語り手もそういう文章を公認したんです。いや、語り手は逆にすべてをアリョーシャの文章を核として語ったのかもしれません。

さらにいえば、アリョーシャの文章は、語り手が語ったこの小説内時間の先

――「エピローグ」の後――までを示してもいるでしょう。

神はヨブをふたたび立直らせ、あらためて富を授けるのだ。ふたたび多くの歳月が流れ、彼にはすでに新しい、別の子供たちがいて、彼はその子供たちを愛している。だが、「前の子供たちがいないというのに、前の子供たちを奪われたというのに、どうして新しい子供たちを愛したりできるだろう？　どんなに新しい子供たちがかわいいにせよ、はたして以前のように完全に幸福になれるものだろうか？」という気がしたものだ。だが、それができるのだ、できるのである。古い悲しみは人の世の偉大な神秘によって、しだいに静かな感動の喜びに変ってゆく。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

『カラマーゾフの兄弟』を少なくとも二度読んだ読者は、ここでスネギリョフとイリューシャのことを思い出すはずじゃないでしょうか？

そうして、作品の途中でのアリョーシャはスネギリョフについて、しかし、こういっていたんでした。

「あの人の場合、今やすべてが、この地上のすべてが、イリューシャに集約しているんです。だから、もしイリューシャが死んだら、あの人は悲しみのあまり気が違ってしまうか、でなければ自殺してしまうでしょうよ。今のあの人を見ていると、ほとんどそう確信してもいいくらいですよ！」

（同）

それで、イリューシャが、

「パパ、泣かないでよ……僕が死んだら、ほかのいい子をもらってね……みんなの中から自分でいい子を選んで、イリューシャって名前をつけて、僕の代りにかわいがってね……」

（同）

そうしてスネギリョフが、

「いい子なんか要るもんか！　ほかの子なんか要るもんか！」歯ぎしりしながら、彼は異様なささやき声で言った。「エルサレムよ、もしわたしがあなたを忘れるならば、わが右の手を……」

彼は涙にむせんだように、しまいまで言えず、木のベンチの前に力なくひざまずいた。両の拳で頭をしめつけ、なにかぶざまな声を張りあげて、それでも小屋の中にその声が聞こえぬように必死にこらえながら、泣きだした。コーリャは通りに走りでた。

「さよなら、カラマーゾフさん！　あなたもまた来るでしょう？」彼は怒ったように、語気鋭くアリョーシャに叫んだ。

「晩に必ず来ます」

「エルサレムとかって、何のことですか……あれは何のことです？」

「あれは聖書の言葉で、『エルサレムよ、もしわたしがあなたを忘れるならば』というんです、つまり自分のいちばん大切なものを忘れたり、ほかのものに見変えたりしたら、わたしを罰してください、という意味ですよ……」

（同）

しかし、アリョーシャが後にゾシマ長老のことばを自分で文章にしたとき、「だが、それができるのだ、できるのである。古い悲しみは人の世の偉大な神秘によって、しだいに静かな感動の喜びに変ってゆく」は右の時点での認識とは違うものだったのじゃないでしょうか？　右の時点で、彼はまだ、そんなことができるわけがない、スネギリョフは死んでしまう、と思っていたのじゃないでしょうか？　しかし、その認識が変わった。つまり、「エピローグ」以降のいつ

かの時点で、スネギリョフがイリューシャの死の悲しみを乗り越えて（自殺もせず）、誰か他の子どもを愛するという事実をアリョーシャはこの目で見たのじゃないか、と思うんです。それゆえにこそ、アリョーシャは確信を持って「だが、それができるのだ、できるのである。古い悲しみは人の世の偉大な神秘によって、しだいに静かな感動の喜びに変ってゆく」と書くことができたのじゃないでしょうか？

ともあれ、そういうわけで、『カラマーゾフの兄弟』において、他の登場人物たちに比べると、何となくおとなしく、無口のように――自身のことをあまり語らない――感じられるアリョーシャが、もしかすると私たちの思っていた以上に自らを語っていたかもしれないんです。

さて、アリョーシャの手記は「地獄と地獄の火について。神秘的な考察」で終わっていました。いくつかに分割しますが、全文を引用します。

神父諸師よ、『地獄とは何か？』とわたしは考え、『もはや二度と愛することができぬという苦しみ』であると判断する。かつて、時間によっても空間によっても測りえぬほど限りない昔、ある精神的存在が、地上へ出現したことによって『われ存す、ゆえに愛す』と自分自身に言う能力を与えられた。そしてあるとき、たった一度だけ、実行的な、生ける愛の瞬間が彼に与えられた。地上の生活はそのために与えられたのであり、それとともに時間と期限も与えられた。それなのに、どうだろう、この幸福な存在は限りなく貴いその贈り物をしりぞけ、ありがたいとも思わず、好きにもならずに、嘲笑的に眺めやり、無関心にとどまった。このような者でも、すでにこの地上から去ってしまえば、金持とラザロの寓話に示されているように、アブラハムの懐ろも拝めるし、アブラハムと話もする。天国も観察し、主の御許にのぼることもできる。しかし、愛したことのない自分が主の御許にのぼり、愛を軽んじた自分が、愛を知る人々と接するという、まさにそのことで彼は苦しむのである。なぜなら、このときには開眼して、もはや自分自身にこう言えるからだ。『今こそ思い知った。たとえ愛そうと望んでも、もはやわたしの愛には功績もないし、犠牲もないだろう。地上の生活が終ったからだ。地上にいたときはばかにしていた、精神的な愛を渇望する炎が、今この胸に燃えさかっているというのに、たとえ一滴の生ある水によってでも（つまり、かつての実行的な地上生活の贈り物によってでも）、それを消しとめるためにアブラハムは来てくれない。もはや生活はないのだし、時間も二度と訪れないだろう！　他人のために自分の生命を喜んで捧げたいところなのに、もはやそれもできないのだ。なぜなら、愛の犠牲に捧げることのできたあの生活は、すでに過ぎ去ってしまい、今やあの生活とこの暮しの間には深淵が横たわっているからだ』地獄の物質的な火を云々する人がいるが、わたしはその神秘を究めるつもりもないし、また恐ろしくもある。しかし、わたしの考えでは、もし物質的な火だとしたら、実際のところ人々は喜ぶことだろう。なぜなら、物質的な苦痛にまぎれて、たとえ一瞬の間でもいちばん恐ろしい精神的苦痛を忘れられる、と思うからだ。それに、この精神的苦痛というやつは取り除くこともできない。なぜなら、この苦痛は外的なものではなくて、内部に存するからである。また、かりに取り除くことができたとしても、そのためにいっそう不幸になると思う。なぜなら、たとえ天国にいる行い正しい人々が、彼らの苦しみを見て、赦してくれ、限りない愛情によって招いてくれたとしても、ほかならぬそのことで彼らの苦しみはいっそう増すにちがいないからだ。なぜなら、それに報いうる実行的な、感謝の愛を渇望する炎が彼らの胸にかきたてられても、その愛はもはや不可能だからである。それにしても、臆病な心でわたしは思うのだが、不可能であるというこの自覚こそ、最後には、苦痛の軽減に役立つはずである。なぜなら、返すことはできぬと知りながら、正しい人々の愛を受け入れてこそ、その従順さと謙虚な行為の内に、地上にいたときには軽蔑していたあの実行的な

愛の面影ともいうべきものや、それに似た行為らしきものを、ついに見出すことができるはずだからである……諸兄よ、わたしはこれを明確に言えないのが残念だ。

（同）

これは、人間の地上の生というのが、「たった一度だけ、実行的な、生ける愛の瞬間」として与えられたものだという前提でのことばです。人間の地上の生の前後は、べつの世界にあります。そうして、地上での生において「実行的な、生ける愛の瞬間」を蔑ろにした者がべつの世界に帰った後、どんな苦しみを負うかということを語っています。だから、「実行的な、生ける愛の瞬間」というこのただ一度の機会を生かして、この地上では、できる限り愛せよ、というんです。もちろん、それはこの手記のこれまでの流れからして、自分には「すべての人に対して罪がある」という自覚が必要なんですし、そのためには「人間の顔」にしっかり向き合うことが必要です。誰彼との「つながり」も必要なんです。

しかし、この「実行的な、生ける愛の瞬間」というこのただ一度の機会を生かさず、それどころか、この機会そのものを自らすすんで無にしてしまうひとたちもいるんです。

だが、地上でわれとわが身を滅ぼした者は嘆かわしい。自殺者は嘆かわしい！　これ以上に不幸な者はもはやありえないと思う。彼らのことを神に祈るのは罪悪であると人は言うし、教会も表向きは彼らをしりぞけているかのようであるが、わたしは心ひそかに、彼らのために祈ることも差支えあるまいと思っている。愛に対してキリストもまさか怒りはせぬだろう。このような人々のことを、わたしは一生を通じて心ひそかに祈ってきた。神父諸師よ、わたしはそれを告白する。そして今でも毎日祈っているのだ。

（同）

もちろん、ここでアリョーシャはスメルジャコフのことを想起していたに違いありません。アリョーシャはスメルジャコフのためにも「毎日祈っている」でしょう。

そこでいくらかまた脇へ逸れますが、アリョーシャがフョードルの死後、スメルジャコフについてどう考えていたかというと、こうですね。

もし他人の悪行がもはや制しきれぬほどの悲しみと憤りとでお前の心をかき乱し、悪行で報復したいと思うにいたったら、何よりもその感情を恐れるがよい。そのときは、他人のその悪行をみずからの罪であるとして、ただちにおもむき、わが身に苦悩を求めることだ。苦悩を背負い、それに堪えぬけば、心は鎮まり、自分にも罪のあることがわかるだろう。なぜなら、お前はただ一人の罪なき人間として悪人たちに光を与えることもできたはずなのに、それをしなかったからだ。光を与えてさえいれば、他の人々にもその光で道を照らしてやれたはずだし、悪行をした者もお前の光の下でなら、悪行を働かずにすんだかもしれない。

（同）

フョードル殺害の犯人をスメルジャコフだと主張しつづけていたアリョーシャにとって大事なのは、この事件が「法的にどうか」などということではありませんでした。裁判の場で彼が何よりも気にかけていたのは、ミーチャが有罪になってしまうことだったでしょう。ミーチャは殺していないからです。ミーチャが受刑するのは不当です。

「心構えのできていない兄さんに、そんな大殉教者のような十字架は必要ないんですよ。もし兄さんがお父さんを殺したのだったら、兄さんが自分の十字架を拒否することを僕は残念に思ったでしょう。でも、兄さ

んは無実なんだから、そんな十字架はあまりにも重すぎますよ。兄さんは苦しみによって自分の内部に別の人間を生みだそうとしたんです。僕の考えでは、兄さんがたとえどこへ逃げようと、一生涯その別の人間のことを常におぼえてさえいれば、それで十分なんです。兄さんが大きな十字架の苦しみを引き受けなかったことは、心の内にいっそう大きな義務を感ずるのに役立って、その絶え間ない感覚が今後一生の間、ことによると向うへ行く以上に、自分の復活の助けになるかもしれませんよ」

（同）

他方、スメルジャコフが有罪になれば、それはそれでかまわなかったでしょうが、べつに有罪になる必要もありませんでした。アリョーシャは最初から「法的にどうか」なんていう視点でこの事件を見ていないんです。アリョーシャが問題にしていたのは、事件の関係者各人が「神の前で」どうなのか、ということだけだったと思います。です。むろん、自分の父親を殺した犯人は憎いでしょう。また、兄を無実の罪に陥れた犯人も憎いでしょう。しかし、彼はその感情を恐れたはずです。

――と書いて、ふっと思い出しました。やれやれ、どうしていままでこれを忘れていられたんだろう？

「かりに、今のような時代にさえ社会を守り、当の犯罪者をも更正させて、別の人間に生れ変らせるものが何かしらあるとすれば、それはやはりただ一つ、おのれの良心の自覚の内にあらわれるキリストの掟にほかなりませぬ。キリスト社会、すなわち教会の息子として、おのれの罪を自覚してこそはじめて、その人間は社会そのものに対する、つまり教会に対する罪も自覚するのです。というわけで、現代の犯罪者がおのれの罪を自覚しうるのも、ひとり教会に対してだけであって、決して国家に対してではありませぬ」

（同）

で、そんなふうにゾシマ長老が話す前に、イワンがこういってもいたんです。

「かりにすべてが教会になれば、教会は犯罪者や不従順な人間を破門こそするでしょうが、その場合だって首をはねたりしないはずです」イワンがつづけた。「あなたにひとつうかがいますがね、破門された人間はそうなったらどこへ行けばいいんです？　だって、そうなれば破門された人は、現在のように人間社会からだけではなく、キリストからも離れ去らなければならないんですよ。なにしろその人間は自分の犯罪によって、単に世間に対してだけではなく、キリストの教会に対しても立ち向うことになるんですからね。そりゃもちろん今だって、厳密な意味ではそうですが、やはり公示されてるわけじゃありませんから、現代の犯罪者の良心は実に多くの場合、自分自身と闇取引きをして、『俺は泥棒こそしたが、べつに教会に逆らったわけじゃないし、キリストの敵でもないんだ』なんてことを、現代の犯罪者はほとんど一人残らずが心に言うんです。しかし、教会が国家になり変るようになったら、この地上のすべての教会を否定しないかぎり、こんなことを言うのはむずかしくなるでしょうね。『どいつもこいつも間違ってやがる。みんな本筋からはずれちまったんだ。偽の教会ばかりだ。人殺しで盗人のこの俺さまだけが正しいキリストの教会なんだ』こんなことは容易に言えるわけのものじゃなく、膨大な条件や、そうざらには存在しない環境を必要としますからね」

（同）

やれやれ、イワン。彼はそんなふうにしゃべりながらも、自分ほどの「ダイヤモンド」ならば、「キリストからも離れ去る」ことが可能だと考えていたでしょう。

それとともに、最先端＝亀山郁夫のこれを確認しておきましょう。

アリョーシャの「あなたじゃない」という言葉は、イワンは法的な意味において裁かれることはない、だから、そう苦しまないでほしい、という意味にとらえることができるように思えます。

（亀山郁夫「新訳『カラマーゾフの兄弟』を読む」　ＮＨＫ出版）

どうですか？　最先端＝亀山郁夫の視野がどれだけ狭いか、あらためてわかるのじゃないでしょうか？

しかし、先へ進みましょう。「地獄と地獄の火について。神秘的な考察」は自殺者にまで触れました。おさらいしますが、ここまでで、地上での生において「実行的な、生ける愛の瞬間」を蔑ろにした者がべつの世界に帰った後、どんな苦しみを負うかということが語られ、さらに、地上での「実行的な愛」の機会を自ら潰してしまった者（自殺者）が嘆かれたんでした。そうして、この後に語られるのは、このべつの世界そのものを否定し、無としてしまおうとする――考えられる限り最高度の――傲慢な者たちです。

ああ、地獄に落ちて、すでに反駁の余地ない真理を明白に知り、観察しているにもかかわらず、傲慢な怒り狂った態度をとりつづける者もいる。サタンとその傲慢な精神にすっかり共鳴した恐ろしい人々もいるのだ。こういう人々にとって、地獄はもはや飽くことを知らぬ自発的なものとなり、彼らはすでに自発的な受難者にひとしいのである。なぜなら、彼らは神と人生を呪った結果、われとわが身を呪ったことになるからだ。ちょうど荒野で飢えた者が自分の身体から血をすすりはじめるように、彼らは憎悪にみちた傲慢さを糧にしているのである。それでいて永遠に飽くことを知らず、赦しを拒否し、彼らに呼びかける神を呪う。生ある神を憎悪なしに見ることができず、生の神がいなくなることを、神が自分自身と自己のあらゆる創造物を絶滅することを、彼らは要求する。そして、おのれの怒りの炎で永遠に身を焼き、死と虚無とを渇望しつづけるだろう。しかし、死は得られないだろう。

（同）

（傍線は私・木下による）

私はこう思っています。「地獄と地獄の火について。神秘的な考察」という短い文章が、このアリョーシャの文章のなかで、最も浮いてしまっている・何か付け足しのメモのようだ、と感じる読者は少なくないのじゃないでしょうか。唐突な感じがして、最も意味のわかりかねる文章だ、と。むろん、これはアリョーシャの文章全体とはしっかりつながっていて、これまでは「こうしなさい」というふうに書かれていたものが、今度は、その「こうしなさい」を拒んだ者がどうなるかということを語っているわけです。

しかし、これは唐突で、短くて、メモのようでよかったんです。なぜなら、その具体例がこの小説の後半で詳細に語られることになるからです。

右の記述に際してアリョーシャが想起していたのがイワンだったと私はいいます。アリョーシャはイワンの「地上の生」が終わりかけていると考えていたでしょう。そうして、もしこのままイワンの「地上の生」が終わってしまうなら、イワンは必ず右に描かれている人びとのひとりになっていたでしょう。

私はこれまでもイワンを理解するためにキルケゴールの『死に至る病』を引用してきましたから、ここでもまた引いてみます。これは「第一編　死に至る病とは絶望のことである」の末尾です。そうして、以下の引用の最後の部分が、サリンジャーによる「シーモア―序章―」のエピグラフでもあります。

悪魔的な絶望は絶望が最もその度を強めたところの形態であり、ここでは人間は絶望的に自己自身であろうと欲するのである。この絶望のな

かでは人間はまたストア的な自己自身への溺愛によってないしはまた自己神化によって彼自身であろうと欲するのでもない（自己神化は、無論欺瞞的ではあるにしても、なお或る意味では自己の完全性を目指している）、いな、そこでは彼は自己の存在を憎悪しつつしかも彼自身であろうと欲するのである、惨めなままの自己自身であろうと欲するのである。彼が彼自身であろうと欲するのは単に強情の故にではなく、むしろ挑戦せんがためである。彼は自分の自己をそれを措定した力から強情的に引き離そうと欲するのではなく、むしろ挑戦的にその力に迫り、それに自分を押しつけようと欲するのである。彼は悪意でその力をつかまえておこうと欲するのである。悪意の抗議をなすものがまず何よりも先に自分の抗議に向けられている相手方をつかまえておく必要があることはいうまでもない。彼は全存在に向って反抗することによって、全存在を、全存在の好意を、反駁しうる証拠を握っているつもりでいるのである。絶望者は自己自身その証拠であると考えているのである、彼はその証拠であることを欲する、――それ故に彼は彼自身であろうと欲するのである、すなわち自己の苦悩をもって全存在を拒絶しうるように苦悩をもったままの彼自身であろうと欲するのである。弱さに絶望している者が、永遠が彼にとって慰藉であることなどに耳を傾けようと欲しないように、強情における絶望者もまた永遠の慰藉などには耳を傾けようとは欲しないのであるが、その理由は異なっている、――後者は実に全存在に対する抗議たらんと欲しているのであるから、慰藉などはかえって自己の没落となると考えるのである。比喩的に語るならば、それはいわば或る著作家がうっかりして書き損ないをしたようなものである。この書き損ないは自分が書き損ないであることを意識するにいたるであろう、（もしかしたらこれは本当はいかなる書き損ないでもなしに、遥かに高い意味では本質的に叙述全体の一契機をなるものでもあるかもしれない、）さてこの書き損ないはその著述家に対して反乱を企てようと欲する、著作家に対する憎悪から既に書かれた文字の訂正されることを拒否しつつ、狂気じみた強情さをもって彼は著作家に向ってこう叫ぶのである、――「いや、おれは抹消されることを欲しない、おれはお前を反駁するための証人として、お前がへぼ著作家であることの証人として、ここに立っているのだ。」

（キェルケゴール『死に至る病』斎藤信治訳　岩波文庫）

（傍線は私・木下による）

右のふたつの引用の傍線部分を比較してみてください。これらは相手が高ければ高いほど、大きければ大きいほど、ますます盛んになっていく運動であり、また、まったく終わりのない運動なんですね。

ついでに引用しますが、

罪とは、人間が神の前に絶望して彼自身であろうと欲しないことないしは人間が神の前に絶望して彼自身であろうと欲することである。だがこの定義は、ほかの点ではなるほど優れているかも知れないが、（就中最も重要なことはそれが唯一の聖書的な定義であるという点である、――聖書は罪をいつも不従順として規定している）、それはしかしあまりに精神的でありすぎはしないか？　そういう疑問に対してはまず第一にこう答えらるるべきである、――罪の定義があまりに精神的でありすぎるということはありえない（それが「精神的」すぎて、罪を廃棄すると言うのでもない限り）、なぜというに罪はまさに精神の規定なのである。更になぜそれはあまりに精神的でありすぎるというのであろうか？　この定義が殺人、窃盗、姦淫等について何も語っていないためであるか？　だがこの定義もまたそういうことに触れているのではないか？　それらもまた神に対する我意、神の命令に反抗する不従順にほかならないではないか？　他面、人々が罪ということをいっていつもそういうような罪だけを挙げるときには、すべてそのような事柄に関してはたとい或る程度

まで申分がないとしても（人間的な意味では）、しかも生活の全体が罪――かのよく知られている種類の罪、諸々の輝かしい悪徳――である場合がありうることを実にあっさりと忘却しているのである。

（同）

――そういうことが最先端＝亀山郁夫にはまるっきりわかっていません。彼の考える「罪」がどんなにつまらない、薄っぺらで、ちっぽけなものであるか。

人間がキリスト教に躓くのは、キリスト教があまりに暗く陰鬱であるからだとかないしそれがあまりに厳格であるからだというようなことが今日非常にしばしばいわれている。それで人間がどうしてキリスト教に躓くのであるかというその本来の理由をここで言っておくことは思うにきわめて適切であろう、――その理由というのはキリスト教があまりにも高いからである、キリスト教の量る尺度が人間ではないからである、キリスト教は人間を人間の理解することのできないような並はずれたものにしようとするからである。

（同）

――大審問官！

さて躓きの度は、人が驚嘆への熱情をどれだけ多くもっているかということに依存している。空想も熱情ももたないところのより散文的な人間、したがって本当の意味で驚嘆することのできない人間、もまた躓くことはありうる、けれども彼等はその場合「こういうことは私には理解できない、私はそのことには立入らない」というだけで、それ以上には進まないのである。彼等は懐疑論者である。だが人間が熱情と想像力を多くもっておればおる程、したがって或る意味で（すなわち可能性において）信仰者たらんとする（註！　並はずれたものの前に賛美しつつ謙遜に跪くこと）点に近づいておればおる程、躓きもまたそれだけ熱情的なものとなるのである。最後には結局根扱ぎにし、破壊し、泥の中に踏みつけにでもしなければ満足ができなくなるのである。

（同）

イワンの「熱情と想像力」がどれほどのものであったかを考えてみてください。つまり、これが「信と不信の間を行ったり来たり」すること、「信仰」すれすれの「不信」、「不信」も同然の「信仰」であって、「とにかく同じ瞬間に信と不信のすごい深淵を見つめることができる」ということであり、したがって彼は悪魔にとっての「ダイヤモンド」なんです。

ああ、地獄に落ちて、すでに反駁の余地ない真理を明白に知り、観察しているにもかかわらず、傲慢な怒り狂った態度をとりつづける者もいる。サタンとその傲慢な精神にすっかり共鳴した恐ろしい人々もいるのだ。こういう人々にとって、地獄はもはや飽くことを知らぬ自発的なものとなり、彼らはすでに自発的な受難者にひとしいのである。なぜなら、彼らは神と人生を呪った結果、われとわが身を呪ったことになるからだ。ちょうど荒野で飢えた者が自分の身体から血をすすりはじめるように、彼らは憎悪にみちた傲慢さを糧にしているのである。それでいて永遠に飽くことを知らず、赦しを拒否し、彼らに呼びかける神を呪う。生ある神を憎悪なしに見ることができず、生の神がいなくなることを、神が自分自身と自己のあらゆる創造物を絶滅することを、彼らは要求する。そして、おのれの怒りの炎で永遠に身を焼き、死と虚無とを渇望しつづけるだろう。しかし、死は得られないだろう。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

（傍線は私・木下による）

おそらく、最後には、自分のいろいろな理論武装にもかかわらず、イワンは右

のような状態での反抗に行き着かざるをえないだろう、と私は思うんです。そうして、アリョーシャもそのように認識していただろうと思うんです。

もうひとつ、

悪意の抗議をなすものがまず何よりも先に自分の抗議に向けられている相手方をつかまえておく必要があることはいうまでもない。

（キェルケゴール『死に至る病』　斎藤信治訳　岩波文庫）

この身振りはフョードル・カラマーゾフにもうかがえるものでしょう。

そういうわけで、もう一度私はいいますが、最先端＝亀山郁夫の――

この小説での「傲慢」の罪のもっとも恐ろしい体現者とは、ほかでもない、「謎の訪問客」である。

（亀山郁夫「解題」）

――は大間違いです。この小説での「傲慢」の罪のもっとも恐ろしい体現者とは、ほかでもありません、イワン・カラマーゾフです。これは、この小説のつくり・構造からしてもそうなんです。

さらにいいますが、最先端＝亀山郁夫の――

ゾシマ長老が残した「説教」のテーマは、ひとこと「傲慢を捨てよ」に尽きる。

（同）

――について、それだけをそのまま受け取れば、たしかに間違ってはいないとここまで私はいってきましたが、やはり最先端＝亀山郁夫には『カラマーゾフの兄弟』における「傲慢」の意味がまるっきりわかっていない！　とはっきりいいましょう。したがって、最先端＝亀山郁夫による「ゾシマ長老が残した「説教」のテーマは、ひとこと「傲慢を捨てよ」に尽きる」は大間違いです。

なぜか？

「解題」において、最先端＝亀山郁夫が「地獄と地獄の火について。神秘的な考察」の最後の部分を自ら引用しつつ、その前後で何と書いているか？

もう一つの「傲慢」は、ゾシマの談話の最後に現れる。おそらくはフェラポント神父に対する根本的な批判にねざした、ゾシマ長老による裁きである。

「ああ、地獄にあって、争う余地のない知識と、反駁しがたい真実を目にしながら、なおも、傲慢で凶暴な態度をとりつづけるものがいる。悪魔や、その傲慢な精神に全面的に与している、恐ろしい連中もいる。彼らにとって地獄とは、自発的に求められた、つねに飽くことをしらないものだということだ。彼らはいわば、自発的な受難者たちなのだ。というのも、彼らは神と生命を呪うことによって、われとわが身を呪ったのだから。荒野で飢えたものが、自分の体から自分の血をすすりはじめるのと同じように、彼らは、憎しみに満ちた傲慢さを糧に生きているのだ。それでいて彼らは、永遠に満たされることを知らず、許しをしりぞけ、彼らに呼びかける神を乗ろう。彼らは生きた神を憎しみなしで見ることができず、彼らはまた生きた神がなくなることを、あるいは神がみずからを、さらにはみずからのすべての創造物を破壊することを、求めてやまない……そして彼らは、自分の怒りの火のなかで永遠に焼かれながら、死と虚無を渇望しつづける。だが、死は得られない……」（第2部464ページ）

熟読玩味していただこう。この最後の一節が、フェラポント神父の長

寿に対するアイロニーを含んでいるかもしれないという思いは、不当だろうか。傲慢を捨てる道は、ほかでもない、自然にみずからの肉体をさらすということではないだろうか。あるいは、自分の腐臭をも平然と受け入れるという姿勢ではないだろうか。

（同）

フェラポント神父！　ええっ！　フェラポント神父！

いったいどうしたらこんな素っ頓狂な読みができるんですか？　何が「熟読玩味していただこう」ですか？「熟読玩味」しなくてはならないのは誰なのか？　いったい誰が「腐臭」の話なんかしているのか？　フェラポント神父！　開いた口がふさがりません。というか、こちらの頭がおかしくなりそうです。気が遠くなります。こんな読みしかできない「最先端」――私がどういったって、わかるはずもない――をわざわざ批判しなくてはならないのは本当に苦痛です。

いいですか、最先端＝亀山郁夫のいう「傲慢」なんてのは、こんな程度の理解――こんな素っ頓狂――でしかないんですよ。最先端＝亀山郁夫の「最先端」な頭のなかでは、フェラポント神父――あまりに馬鹿ばかしくて、私はいまフェラポント神父についてしゃべる気にもなりません――が「傲慢」の象徴か何かになっているんでしょう。しかも、最先端＝亀山郁夫は、ゾシマ長老ないしこの文章の書き手であるアリョーシャが、フェラポント神父へのあてこすりみたいなことをやっているといっているんです。これが最先端＝亀山郁夫の小ささ・せこさ・薄っぺらさ・貧しさですよ。

繰り返します。「「傲慢を捨てよ」――結構でしょう」――そう私はいってきましたが、駄目ですね。なぜなら、最先端＝亀山郁夫には『カラマーゾフの兄弟』における「傲慢」の意味がまるでわかっていないから。一見間違いでなさそうだった最先端＝亀山郁夫の「ゾシマ長老が残した「説教」のテーマは、ひとこと「傲慢を捨てよ」に尽きる」はでたらめです。〇点。『カラマーゾフの兄弟』における「傲慢」の意味をこんなとんちんかんなふうにしか理解できない人間が何をいっても無駄です。

哲学においては、論拠がちがう同じ主張なんてものはそもそも存在しない。

（永井均『〈子ども〉のための哲学』講談社現代新書）

「傲慢を捨てよ」――これは、もし、最先端＝亀山郁夫でなく、私がいうなら正しいんですよ。なぜなら、私と最先端＝亀山郁夫とでは『カラマーゾフの兄弟』における「傲慢」の理解が違うからです。

どうですか、まだわからないでしょうか？　まさにこのことが最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』が偽物だということなんです。

最先端＝亀山郁夫を擁護するひとたちは、いまのフェラポント神父云々については、どう考えているんでしょうか？「いや、さすがにフェラポント神父はおかしいよ」と思うならば、最先端＝亀山郁夫訳を全否定するはずなんですけれどね。なぜなら、これは構造的・深層的な問題だからです。構造的・深層的にこれほど素っ頓狂な読みしかできない翻訳者を認めることなんかが、どうして彼らにはできるんでしょうか？　できるとすれば、「文学」を読む力がないからですよ。そんなひとはもう「文学」から足を洗え、と私はまたいいます。

こんな「最先端」が『カラマーゾフの兄弟』の翻訳者でいいんですか？

（二〇〇九年六月二十二日）

「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」その一四

一連の記述をつづけて、そろそろ本当に一年が過ぎようとしています。私が最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』における「あなたじゃない」解釈に仰天したのが、昨二〇〇八年七月初旬でした（「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」その一 ―― の公開が七月十三日）。私の原稿も（同年六月の一文を含めて）文庫本の字詰めにして七六〇ページを超え、原稿用紙にして一三〇〇枚を超えてしまいました。いま、あらためてプリントアウトしてみましたが、あまりの厚み（二五五枚 ―― 三十七字×二十八行×二段。字間を狭くしているので、一行の文字数はほぼ三十七字という具合です）にぎょっとしています。呆れるばかりです。もっとも、私のここまでのやりかたは、引用を惜しまないどころか、過剰にも ―― しかも、同一の引用をいったい何度繰り返していることか ―― していますし、また、一度しゃべった私自身の主張をいちいち新たな原稿に取り込んで、いわば増殖させる形で膨らませるというものなので、当然分量も嵩むわけです。過剰な引用については、私は読者に文章を遡る手間をかけたくないという気持ちがあるんです。たとえば、引用に番号をつけて、後は番号のみを記載するとか、註をまとめて後回しにするとか、そういうことをしたくない。読者にいつも手間を取らせないと同時に、もうすぐにでも読者の頭に引用箇所を響かせるようにしたい、しかも、できるだけ長い引用 ―― 中心だけでなく、その前後を含めて ―― を、という気持ちがあるんです。できるだけ私の頭にあるような形を読者の頭に再現することを望むわけです。こんなことは、おそらく学術論文では許されないでしょうが、私は敢えてやっているんです。これはネットだからできることです。というわけで、この全体の膨らみ具合は私の意図したものです。私自身の最初の読み取りを増殖する形でのしゃべりも意図したものです。

それでも、ここまで私の記述が膨れ上がってしまったことに危惧を抱きもします。こんなことになっては、もはや新しい読者が期待できないかもしれないと思うんですね。それにまた、前回の原稿の公開までの長いブランクもよくないですね。なぜなら、この最先端＝亀山郁夫批判は常に誰彼の目のつくところで頻繁に更新されねばならないからです。とはいえ、そんな時間も力量も私にはありません。成り行きまかせです。しかし、私が毎日原稿を公開していったとしても、以前からの読者以外には、もうこの最先端＝亀山郁夫批判の存在を知ってもらうことすらできないでしょう。というのも、すでに「YAHOO!」の《ブログ検索》で、私の文章は、キーワードとしての「亀山郁夫」でも「カラマーゾフ」でもヒットしなくなりましたから。以前はそうではなかったんですけれどね。「Google」の《ブログ検索》ではもうだいぶ前からヒットしません。やれやれ、です。

もともとが私の読書量なんか大したことはないんですが、特にこの一年はほとんど本を読んでいません。たぶん昨年五月に『人間を撮る』（池谷薫　平凡社）を読み終えてからは、先月に『さまざまな生の断片』（ジャック・ロッシ　外川継男訳　成文社）を読み終えるまで、『カラマーゾフの兄弟』（原卓也訳）以外に一冊の本も読み通していません。

ここしばらくでも書店員としての私には、「手書きＰＯＰ」のことで取材させてほしいとか、今年上半期に出版された本からお薦めの本を紹介してほしいとか、いくつかの出版社から声がかかりもしましたけれど、断わっています。書店をめぐる状況は相変らず ―― 私がこの「連絡船」で批判した通り ―― なわけです。そうだ、ひとつ思い出しましたが、去年、一件だけ取材に応じたことがありました。私の方で逆にその取材者に会いたかったので ―― そのひとの著作がとても面白かったので（ということは、私はこの一年の間に、右の他にもう一冊 ――『週末陶芸のすすめ』（林寧彦　文春文庫ＰＬＵＳ）は読んでいたんですね） ―― 引き受けたんです。その掲載誌が送られてきたんですが、そこでのべつの特集記事のなかで最先端＝亀山郁夫がアンケートに答えていましたっけ。つまり、一冊の雑誌のなかで私と最先端＝亀山郁夫とが並んでいたんですね。笑っちゃいました。

それはともかく、この一年のほぼ毎日――まるっきり休んだのはほんの数日――を、私はこの最先端＝亀山郁夫批判に費やしてきたんですね。それで、私はいいたいんですが、誰かにある作品の読書を薦めるならば、これくらいのことをする覚悟を持て、というんです。特に「手書きＰＯＰ」なんかを書き、引きも切らない出版社のアンケートなんかに答える書店員にいいたい。妥協するな、ってことです。

おさらいですが、これを引用しておきます。

ベストセラー『白い犬とワルツを』の仕掛け人といわれていて、現在一枚のＰＯＰも書いていない私、木下和郎個人から、現在ＰＯＰを書いている書店員に提言します。

書店員が自分の読書の感動を「みんな」に伝えるためにＰＯＰを書く――といいますが、現在のその読みかたには最初から「みんな」が入り込みすぎているのではないか？　あなた自身の孤独な読書はどこにあるのか？　そもそもあるのか？　なければならない――ということでの提言です。

①「多読」・「速読」・「新刊チェック」の読書をきっぱりやめる。特に、今後三年間は日本人作家の新作を読まない。いまの自分には手に負えないほどの本だけを読む。「みんな」の読んでいる本を読まない。

②出版社がもちこむ新刊のゲラを読まない。もし読んでしまったなら、はっきり自分の意見を告げる。出版社とあなたとは対等です。絶対に卑下した・自信のない回答はしない。駄作は徹底的に駄作といいましょう。

③十年後にもひとに薦められる本や、十歳年長のひとにも薦められる本にしかＰＯＰを書かない。「今年のベスト」なんていう視点は軽蔑（そういう出版社のお手軽なアンケートは拒絶）してください。常にあなたの「オールタイムベスト」です。

④いまの売れすじや「みんな」を離れて、読者が自分ひとりかもしれないという本にこそＰＯＰを書く。偏向と、それにともなう孤独を恐れないでください。新しさや大きい部数でしかものを測れないひとたちを軽蔑してください。「みんな」が動きだしたら、何かが間違っています。「手書きＰＯＰからベストセラー」は矛盾です。あなたがＰＯＰで訴えるのは「みんな」ではないごく僅かなひとたちにです。そしてそれも、なにより、あなたが行動しなければ死んでしまうだろう本のためにそうするんです。

あなたの根底に核として、まず、そういうＰＯＰが想像されなければなりません。

「それじゃ、ＰＯＰなんて一枚も書けないよ」というひとは、安心してください、もう全然書かなくていいんですから。

（「しゅっぱんフォーラム」二〇〇七年五月号　トーハン）

で、以前にもこれの後につづけた引用を再び。

……わたしは一度「しばらく真面目になってみてはいかがでしょう」と提案した、真理は、苦い真理ですら、間接的にではあるが長い間には、真理の犠牲において共同体に奉仕しようとする思想よりも、共同体にとって役立つのであって、真理を否定する思想は実際には真の共同体の根柢を内側からこの上なく無気味に崩壊させるのだから、共同体の危機を深く憂慮する思想家は、共同体ではなく、真理を目標とした方がよいのではなかろうかということを、しばらく真面目に考えてみようと言ったのである。しかし、わたしは生涯においてこれほど完全になんの反響もなく黙殺された言葉を言ったことがない。

（トーマス・マン『ファウストゥス博士』　円子修平訳　新潮社）

同じことを最先端＝亀山郁夫の擁護者たちにもいいたい。あなたがたは、「あ

なたじゃない」の最先端＝亀山郁夫解釈をどう考えているのか？「大審問官」におけるキリスト僭称者説をどう考えているのか？　コーリャのことばをいい換えたアリョーシャをどう考えているのか？　ジューチカとペレズヴォンのことをどう考えているのか？「地獄と地獄の火について。神秘的な考察」についてのフェラポント神父云々をどう考えているのか？　私と同じ労力を費やして答えてみればいい。自分の読みをさらけ出して主張してみればいい。これは面子の問題なんかじゃない。あなたがたが『カラマーゾフの兄弟』をどれだけ大事にしていて、これにどれだけ奉仕するかということなんです。

（二〇〇九年七月二日）

（追記　なぜかこの稿だけは久しぶりに「YAHOO!」の《ブログ検索》に引っかかるようになりました。即日ではなかったですが。もうこのことを考えるのはやめることにします。とにかく、私はやれることをやるだけです。）

「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」その一五

これを引用しておきます。

それは扨置き、『森と湖のまつり』を「ドストエフスキー的」と呼んだ山本ほかの面面は、「ドストエフスキー的」という表象によって、たとえば次ぎのようなことをでも空想しているのであろうか。

――作中の人物および事件は、日本人読者一般にとって非現実的違和感を伴っていなければならない。作中の人物連は、為体が知れないような・秘密がたくさんあるようなふうでなければならず、作中の事件も、また同断でなければならず、作は、全体として訳がわからないようなふうでなければならない。作中の人物連は、しばしば主体的必然性も客観的現実性もとぼしいような言動（宗教論・哲学論・人生論・社会論・宇宙論のようないかがわしい長広舌、その他）に赴かねばならず、時としては入り乱れてどたばたを演じなければならず、だが、そのうちの一人くらいは、様子ありげな「無言の行者」でなければならない。ある種の「革命」か「犯罪」かが、目論まれていなければならず、また途方もなく長い（ラスコーリニコフの母のそれのような）手紙が、出現しなければならない。一、二の主要人物は、性的に旺盛かつ放埒でなければならず、あるいはたまたま恐ろしく鮮明な（何かの象徴的意義があるような）夢を見なければならない。……

もしそうなら、そういう「ドストエフスキー的」は、ドストエフスキーの文学にたいする浅薄低級な無理解を指示するであろう。しかも、そういう「ドストエフスキー的」な「（似非）作家」だの「（似非）作品」だのは、ちょいちょい実在するのである。そのような「ドストエフスキー的」を、私は、必ずしもただちに全面的に『森と湖のまつり』に当て嵌めるのではない。しかし、そうせられても仕方がないような節節が『森

と湖のまつり』の随所に少なからず現存する、ということも、私は承認する。なにしろ、ドストエフスキーの文学（作品世界）と『森と湖のまつり』との間に、私は、本質的・実体的関係の存在をほとんどまったく見出さない。

（大西巨人「内在批評と外在批評との統合」
『大西巨人文選2　途上』　みすず書房　所収）

『森と湖のまつり』（武田泰淳）を私は読んでいませんが、右の文章で大西巨人が何をいいたいかはわかります。

たしかに、ドストエフスキーの読者に右のような「ドストエフスキー的」を求めるひとはかなりの数になるでしょう。そのひとたちの読みかたは、ラスコーリニコフやスヴィドリガイロフ、またスタヴローギンやイワン・カラマーゾフに無意味で過剰な期待をします。何といえばいいか、つまり、「悪のヒーロー」への期待ですね。その期待が彼ら読者の読解を妨げます。その読書は、彼らの実人生においての悪用につながるでしょう。最先端＝亀山郁夫の読書もこの流れのうちにありますね。それが彼の小ささ・せこさ・薄っぺらさ・貧しさです。

（二〇〇九年九月四日）

亀山郁夫氏に呼びかける

私の恐れていたことが着々と進行中のようですね。あなたはとうとう『悪霊』の翻訳にかかっているらしい。ついさっきネットでこの情報を読んで、声をあげてしまいました。最悪です。いったいどこまでドストエフスキーの作品を愚弄したら気がすむのか？

亀山さん、あなたは『カラマーゾフの兄弟』をまったく読めていないまま、でたらめないいかげんな仕事をしました。懲りずに『罪と罰』まで手をつけてしまった。森井友人氏の「『罪と罰』ノート」批判――私は読んで、あなたが『カラマーゾフの兄弟』において、アリョーシャの「あなたじゃない」前後の時系列をまったく把握していなかったことを確信しましたよ――は読んだんでしょう？　うろたえたでしょう？　そのまま『悪霊』ですか？　やめなさい。あなたには無理だから。あなたにとってドストエフスキーは商売道具でしかないんだ。ドストエフスキーと読者を馬鹿にするのはもういいかげんにしなさい。もう目を覚ましなさい。あなたのすべきことは謝罪と撤退だけです。それはご自分でわかっているのじゃないですか？　私にこういわれて逆に闘志が湧きましたか？　今回のニュースでは、私にもかなり――これまでで最高のものが――湧いているんですけれどね。悪いことはいいません。もうやめなさい。あなたには無理なんだから。無理だと、わかっているでしょう？

もう私はあなたを批判――批判の対象はあなただけじゃないですが――することにうんざりしているんですよ。しかし、『悪霊』まで実際に出版されたら、私はこの先何年もあなたを批判することに時間と労力を割かなければならなくなります。そうしたくありません。『悪霊』翻訳は中止してください。

そうして、できるだけ早く謝罪と撤退をしてください。

（二〇〇九年九月三十日）

村上春樹と『カラマーゾフの兄弟』

『1Q84』についての村上春樹へのインタヴュー。

(http://mainichi.jp/enta/art/news/20090930dde018040006000c.html)

最も偉大な作家として敬意を払ってきたドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』も引用されている。「『カラマーゾフの兄弟』は好きで、5回は読んでいますが、読むたびに印象が変わるので面白い。亀山郁夫さんの新しい訳でも読みましたが、従来の訳とは全然雰囲気が違って楽しかったです」

(毎日新聞　二〇〇九年九月三十日　東京夕刊)

やれやれ。それで、村上春樹はたぶんアリョーシャによるコーリャのことばの言い換えを最先端＝亀山郁夫がごまかしたことなんかにまったく気づいてもいないんですね。また、おそらく、アリョーシャの「あなたじゃない」は「あなたが死ぬまで」だったんだ！　と納得しちゃったんでしょうね。はいはい、わかりました。その程度か。「『カラマーゾフの兄弟』は好きで、5回は読んでいますが」ですか。そんなもんですか。やれやれ。本当にがっかりだ。もっと読み込んでいるひとが『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』の作者だと思っていたんですがねえ。

(二〇〇九年十月二日)

「連絡船」の一読者へのメール

＊＊＊さま

私はあなたが亀山問題を理解していないと思います。

おそらく、あなたは単にこれが亀山郁夫個人の問題だと考えているのじゃないでしょうか。私が彼を直接説得し、彼が非を認めさえすればいい、と。そのためには、私と彼とが対話できるような関係に立たなければならない。それなのに、私は彼に直接呼びかけずに、不特定多数の前に彼の非をぶちまけて、彼の失墜を扇動している。それは正しくないやりかただ。そんなふうにすれば、亀山郁夫はなおのこと自分の非を認めることをせず、さらにも誤りつづける。ほぼこういうことをあなたは考えているのじゃないでしょうか。

また、あなたは私と亀山郁夫とで、私が圧倒的優勢であるかのようにも誤解していると思います。たしかに、きちんと読むひとが読めば、私の優勢ということは明らかかもしれません。しかし、現実としてどうかといえば、亀山郁夫はとうとう『悪霊』の翻訳にまで手をつけているわけです。

私がこの一連の記述を通して批判しているのは、

一　亀山郁夫自身
二　亀山郁夫と仕事をした編集者たち
三　その編集者たちを抱える出版社・放送局
四　書評、インタヴュー等で亀山郁夫を称揚するひとたち
五　そうした書評、インタヴューを載せる出版社、放送局、新聞社等
六　亀山郁夫の仕事の実質も知らずに安易に対談する作家、タレント等
七　亀山郁夫を批判できずにいるロシア文学界の面々
八　上記のことをまったく理解せぬまま、亀山郁夫をありがたがる一般読者たち
九　その他

です。

私がこの批判を通じて守ろうとしているのは、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』という作品です。

木下豊房氏が最初に「検証」を公開したとき、その副題は「新訳はスタンダードたりうるか」でした。その意味は、今後日本の読者が『カラマーゾフの兄弟』という作品について語る場合に、それが亀山訳であってよいのか、ということです。

よくありません。なぜなら、亀山訳は実は『カラマーゾフの兄弟』ではないからです。

もし、このまま亀山訳が日本における『カラマーゾフの兄弟』のスタンダードになってしまえば、どういうことになるか？

あなたが今後誰かに『カラマーゾフの兄弟』の話をしようとして、相手が亀山訳しか読んでいなかったとしたら、どういうことになりますか？

アリョーシャによるコーリャのことばのいい換えをでたらめに訳したものの読者に、あなたはどう話さなくてはならないんですか？

もし、こんなことは些細な問題で、亀山訳も認められていいということになったら、今後、翻訳作品のレヴェルはどういうことになるんですか？　これほどまでにひどいものがまかり通ることになれば、翻訳作品のレヴェルは急降下するでしょう。亀山訳は絶対に否定されなくてはなりません。

亀山郁夫が私の批判を理解することはありません。読んではいるでしょうが。理解することができるくらいなら、最初からあんな仕事はしなかったでしょうし、いまも同じ調子で仕事のできるはずがありません。彼は「裸の王様」にすぎないんですが、しかし、周囲がでたらめなので、「王様」でありつづけているんです。

それに対抗するために、どうしたらよいか。批判しかありません。批判は絶対に必要なものです。それは公になされるべきものです。批判のない社会というのは、最悪の社会です。

ある作品をよいと推奨するときも、批判精神は絶対に必要です。誰かがある作品を褒めるなら、そのひとは、絶対に、「こんなものはクズだ」という他の作品を知っていなければなりません。それなしには、どんな作品を褒めることもできません。

もし、この問題が公に問われることがなければ、そんな社会は――以前にも書きましたが――いずれ、また戦争へとなだれこんでいくでしょう。この問題はそれほど重要なんです。妥協など一切許されません。

私はあなたにピーター・パンプキンヘッド（ＸＴＣ）について書きました。また、「The tank man」の紹介もしました。（『神聖喜劇』の）東堂太郎を引き合いに出しもしました。「吊るされる」のは私かもしれません。それでも、私はこれをやりつづけなくてはなりません。なぜなら、（少数を除いて）他に誰もこれをしていないから。とにかく、いうべきことは絶対にいわなくてはなりません。

亀山郁夫個人が今後どうなろうが、どうでもいいんです。そんなことより、『カラマーゾフの兄弟』ができるだけ正確な形で、日本の読者に伝わることの方が大事です。もし、ここで譲ってしまえば、恐ろしいことが起きます。日本の翻訳文化は崩壊します。翻訳文化だけではありません。出版文化も崩壊します。ということは、やがて文学も崩壊します。文学が崩壊したら、どうなるか。ひとの血が流れます。私は冗談をいっているのではありません。

この問題に関してはいずれ「連絡船」でもあらためて書こうと思っています。

木下和郎

（二〇〇九年十月十六日）

「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、少しずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く。」その一六

1

六月にかなり長い文章（その一三）を公開してから――ときおりの短い文章は書きましたが――、だいぶ空白の時間をつくってしまいました。なぜこんなことになったかを含めて、いろいろなことを書いてみようと思います。

この後につづくいくつかの文章のある程度までは、すでに書きあげていたものですが、私はそれらをまとめてどう切り出してよいのか、わからなかったんです。それぞれがばらばらにとりとめのないものとしてしか自分に感じられなかった。

私はこれまで通りに『カラマーゾフの兄弟』についての自分の読み取りを書き、並行して、この一連の文章を書きつづけて一年が経過したということでの感想のようなものをも書いていました。後者についていえば、一年が経過という文章にあれこれ思い悩んでいて、さらに一年の三分の一が過ぎてしまったことになります。そうして、前者については、どうも「これまで通りに」というのとは、やはり違って、私は困惑し、自信を失い、途方に暮れていた感じだったんですね。このことはまた後でしゃべります。

その間にも、ネット上では、無知のために最先端＝亀山郁夫をありがたがる一般読者の文章が増えつづけていました。佐藤優があいかわらず――『功利主義者の読書術』（新潮社）や『ぼくらの頭脳の鍛え方　必読の教養書４００冊』（立花隆との共著　文春新書）において――でたらめな嘘を振りまいて、最先端＝亀山郁夫を称揚しているのは想定内のことでしたが、村上春樹はとうとう最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』を肯定してしまう発言をし、高村薫は最先端＝亀山郁夫と公開対談をし、豊崎由美はあいかわらず『カラマーゾフの兄弟』を紹介するのに最先端＝亀山郁夫訳を採用しつづけ、書店員の画期的な地域共同企画として注目を浴びている福岡の「ブックオカ」は二年連続で最先端＝亀山郁夫講演を催しました。むろん、彼ら――佐藤優を除いて――にはそれぞれ「悪気はなかった」んでしょう。そうでしょうとも。

その一方で、この八月に、木下豊房のサイトでは、森井友人による最先端＝亀山郁夫の『『罪と罰』ノート』（平凡社新書）批判（http://www.ne.jp/asahi/dost/jds/dost133.htm）が公開されました。森井友人の指摘とそのやりかたには本当に敬服します。当の『罪と罰』を訳出中だった最先端＝亀山郁夫が作品をどれだけ読み取れていないかということが見事に指摘され、彼の仕事のでたらめぶりが明白になりました。私は森井友人の文章を読んで、以前に私の指摘した、フョードル殺害後のイワンの二か月間の時系列を最先端＝亀山郁夫が理解していないのではないか、という疑いが正しかったことを確信しました。つまり、最先端＝亀山郁夫は『カラマーゾフの兄弟』でも『罪と罰』でも、ろくに作品内の事実を――時系列すら――把握していないまま翻訳をしていたということですね。だから、何度もいっているように、彼は作品全体を支える文章ではなく、単に目の前にある一文一文だけを――作品の文脈とは関係なく――個別に翻訳していたわけです。しかも、それぞれに稚拙に、さらにはまったくの誤訳を連ねていた。この最先端には、小さな文脈すら読み取ることができていないんです。作品の全体が読み取れないのも当然です。

また、新たにブログ「横板に雨垂れ」（http://yokoita.blog58.fc2.com/）でも佐藤優・亀山郁夫批判が書かれました。さらに、萩原俊治のブログ「こころなきみにも」（http://d.hatena.ne.jp/yumetiyo/）でも亀山批判が書き進められています。

それにしても、森井友人の文章を読んですら、平気で最先端＝亀山郁夫を称揚するひとがいるのは、どういうことなのか？　しかも、書き手は昨日今日ドストエフスキーを読みはじめたというひとじゃありません。

新訳『罪と罰』は、森井氏が指摘したように、訳出においていくつかの問題箇所はあるのでしょうが、全体的には、訳文は、すらすら読みやすい訳になっている印象があります。

（二〇〇九年十月二十六日）

（自分は新訳『罪と罰』はまだ全部は読み通していませんが、老婆殺害の場面をはじめ、亀山氏の日本語訳の持ち味やセンス（良き日本語感覚）が、このたびも発揮されていて、訳文自体に関しては、全般的に、新たな名訳だと自分は感じています）

（「ドストエフ好きーのページ」内「事項・テーマ別ボード」）

（傍点は私・木下による）

私は気が遠くなります。「森井氏が指摘したように、訳出においていくつかの問題点があるのでしょうが」って、それがわかっていながら、提出された翻訳を「全体的には」肯定する、なんてことは不可能です。それに、いいですか、「森井氏が指摘した」のは「いくつかの問題点」なんてものではなくて、「いくつもの重大な問題点」ですよ。しかも、この書き手は、森井友人の指摘があらさがしにならないことを祈るなんてことまで書いていたんです（現在その文は削除されています。また、私はもうひとつの削除のことはいいません）。つまり、この彼もまた、作品を構造的に読み取ることができないまま多くの読書を重ねてきた、哀れで低級な読者のひとりなんですね。彼の読書では、彼の人生は左右されません。もし、彼がそんなことはない、というなら、余計に悲惨です。なぜこんなひとが「ドストエフ好きー」なんかでありうるのか？　私に最も理解できないのは、彼に最先端＝亀山郁夫の読み取りと仕事のしかたと、その結果としての翻訳とを切り離して考えることができるということです。信じられない。そうしてまた、彼のいう最先端＝亀山郁夫の「良き日本語感覚」には大笑いです。実情は、「このたびも」最先端＝亀山郁夫は「愚劣な日本語感覚」を発揮して、「新たなまがいもの」を商売道具にしたんですよ。Ｓｅｉｇｏさん、いまのような読書をしていては、この先あなたは一歩も進めませんよ。

私が危惧しているのは、彼以外にも多くのひとが偽物の『カラマーゾフの兄弟』をつかまされて、しかも感動し、最先端＝亀山郁夫に対する批判のあることも承知しつつ、そんなものは「コアなドストエフスキー・ファン」が騒ぎ立てているだけだ、と無知ゆえに納得してしまうことです。

2

ここで飛び入りの原稿を挿みます。この数日、「連絡船」の以前の記事「些細なことながら、このようなニュアンスの違いの積み重ねによって読者は、すこしずつ、しかし確実に原典から遠ざけられて行く」（その一〇）（ブログ「連絡船」では、二〇〇九年二月三日付け http://d.hatena.ne.jp/kinoshitakazuo/comment?date=20090203#c1100931 62）のコメント欄でおもしろいことがあったので、こちらに転載しておきます。

なお、転載にあたって、行頭の一字下げをし、誤字を訂正しました。

まず、「かめ」という名前でこういう書き込みがありました。

かめ　二〇〇九／一〇／二八／〇〇：〇九

あなたの文章は読むに堪えない。人の文章の誤読ばかりだ。

それと、あなた、文学のぶの字もわかっちゃない。

ひどすぎますぜ。

私はひとこと、こう返事をしました。

木下和郎　二〇〇九／一〇／二八／〇一：五〇

そうでしょうとも。

翌日、

かめ　二〇〇九／一〇／二八／二〇：三六

沼野さんの文章がかわいそう。あなたのような、おつむの少々弱い方に、勝手にねじくれた言い直しをされて。文章とはまずは素直に読むものです。特にあなたのような少々おつむのお弱い方は。

あなたのような方が仮に翻訳をなすったら、あなたの絶大なるひとりよがりによって、全てに渡っておかしなものとなっちゃいますでしょう。決して、あなた、翻訳などなさらないように。

そして、上で、あなた「そうでしょうとも。」とご自分のことをよく分かってなさる。

ということは、こういった下らぬブログ、即刻おやめあそばされよ。無駄。

最後に、あなたの文章は長い。おつむのお弱いひとほど、内容もないのに長くなる。

そこで、私はこう書きました。

木下和郎　二〇〇九／一〇／二九／〇一：一七

かめさま。

二夜連続で新潟（西）からのコメントありがとうございます。昨日は真面目に応対せず、失礼しました。

さて、沼野さんのことですが、いくらなんでも彼を知的に――この場合は文学を読み取る力の程度と考えてもらえばいいです――最先端＝亀山郁夫と同レヴェルだなんていったら、かわいそうじゃないですか。そりゃ、あんまりですよね。だから、その点では彼を救いました。私が沼野さんを批判するのは、彼が最先端＝亀山郁夫のこれ以上ないくらい低レヴェルで愚劣な読み取りと、それに基づくでたらめだらけ、最低の翻訳の実質を知りつつ、それを認めずに、嘘をついて称揚してしまっているということなんです。これ、わかります？　倫理的問題なんです。まさか沼野さんに最先端＝亀山郁夫の翻訳が見抜けないわけはないでしょう？　もし、見抜けていないなら、倫理問題は免除されますが、今度は知的に問題があることになってしまうんです。誰だって最先端＝亀山郁夫と一緒にされたくはないですよね。

かめさん、あなたは最先端＝亀山郁夫による翻訳の実際を知らないから、私の文章がおかしいなどというんです。

私はこれまでずいぶん長い文章を書いてきましたが、ここで短く説明してみましょう。どうやらあなたは「文学」がわかっていらっしゃるようなので、当然『カラマーゾフの兄弟』をお読みでしょう。

アリョーシャの「あなたじゃない」は最先端＝亀山郁夫の読み取りでは「あなただ」ということらしいですよ。「アリョーシャの「あなたじゃない」という言葉は、イワンは法的な意味において裁かれることはない、だから、そう苦しまないでほしい、という意味にとらえることができるように思えます。」だそうです。馬鹿じゃないですか？

また、「エピローグ」では、アリョーシャがコーリャのことば「全人類のために死ねればと思います」をいい換えて、こういいますよね。「ことによると、さっきコーリャが叫んだみたいに『僕はすべての人々のために苦しみたい』と言う人たちを、意地わるく嘲笑うようになるかもしれない」。そのアリョーシャのことばを最先端＝亀山郁夫が何と訳しているか。「さっき、コーリャ君は、『人類全体のために死ねたら』と叫びましたが」ですよ。ドストエフスキーの原文を無視です。おそらく知的レヴェルの非常に低い最先端＝亀山郁夫は、アリョーシャがいい換えているということすら理解できていなかったろうと私は思います。彼は単純にアリョーシャのせりふが間違っていると思っちゃったんですよ。何だよ、コーリャは『人類全体のために死ねたら』といったじゃないか、アリョーシャ、何を間違えてるんだよ、というような具合ですね。これが何を意味するか。最先端＝亀山郁夫はアリョーシャ、ゾシマ長老、キリストなどがこの作品全体でどんな位置づけにあるか、どういう重量を置かれ

ているか、その他がまるっきりわかっていない、ということなんですよ。こんなでたらめなひとがこの作品を翻訳しちゃいけないのは、わかりますよね？

それから、最先端＝亀山郁夫によれば、ペレズヴォンという犬は実はジューチカじゃないそうです。大笑いです。こんな馬鹿な読み取りを、文学のわかるかめさんが即座に馬鹿と思わないわけがないですよね。で、この最先端はどうやら『悪霊』の翻訳にも手をつけているらしいです。あなたが最先端＝亀山郁夫による翻訳の実質を知ったら、何としても『悪霊』はやめろ、と思うと信じます。

というわけで、「文学のぶの字もわかっちゃいない」だの「ひどすぎますぜ」だの「おつむの弱い」だの「翻訳などなさらないように」だの「絶大なひとりよがり」だのは、文学のわかるあなたから、この私にでなく、まさにその全部のあてはまる最先端＝亀山郁夫にいってあげたらいいと思います。

また、私の文章はたぶん「文学」のわかるひとにしか読めないんじゃないでしょうか？　私の文章の長いのは内容がぎっしりで、しかも懇切丁寧だからですね。

http://www.kinoshitakazuo.com/kameyama.pdf

内容ぎっしり、懇切丁寧な私の文章をどうか読んでみてください。「文学」のわかるひとには必ずわかる文章です。「文学」のわかるひとなら、私の「文体」もわかると思うなあ。

あ、最先端＝亀山郁夫も長い文章を読む――たとえばドストエフスキーの長編小説とか――のが苦手のようです。書くのも苦手なんじゃないかなあ。

それから、もしまだ何かコメントを書かれるなら、私の内容ぎっしり、懇切丁寧な文章のどこがどのように問題なのかを具体的に書くようにしてくださいね。今回のでいえば、あなたは最先端＝亀山郁夫へのあなたの評価をまったく具体的に書いていない。よろしくお願いします。

今日は真面目にお答えしました。それでは。

そうすると、

かめ　二〇〇九／一〇／二九／二一：二七

「二夜連続で新潟（西）からのコメントありがとうございます。」

まず、この一文であなたの人間性のくだらなさがさらによくわかりましたよ。

沼野さんの文章、もちろんあなたのようなひとが読めばそう読めるでしょう。

しかし、それは、非常に偏った読みかたにほかならない。そんなものを断定口調で書くものではない。

わたしが、『カラマ』を読んでいるとの前提で書かれているが、わたしはそれを読んだことがない。あなたの、またもやの、ひとりよがり。

あなたの文章は魅力がない、即刻ブログをやめることを提案してわたしからのさいごのコメントとしたい。

それに対して私は、

木下和郎　二〇〇九／一〇／三〇／〇二：二二

かめさま。

まず最初にこれは謝ります。私はあなたが最先端＝亀山郁夫本人なんじゃないのか、とちょっと想像してみたんですね。「かめ」という名前だ

し。だから、なぜ新潟から？　と思ったわけです。新潟に出張し、投宿先からコメントを書き込みしているんじゃないのか、と思いました。だから、これは、あなたに謝らなくてはなりません。最先端＝亀山郁夫が書いているのなら、突っついてみようかな、なんて考えてしまったんです。でも、そうではなかった。

あなたは『カラマーゾフの兄弟』を読まれていないんですね。ならば、沼野さんの文章がいかにおかしいかが読み取れないのも仕方ありません。絶対に動かせないのは、最先端＝亀山郁夫がひどすぎるという事実です。『カラマーゾフの兄弟』を読んでいるひとになら、最先端＝亀山郁夫がいかにひどいかがわかるんですが、このひどさのわからないひとには、沼野さんの文章をそのまま素直に読んだら、それは最先端＝亀山郁夫がいかに素晴らしいか、と読まざるをえません。まさにその点こそ、私が沼野さんを批判する理由です。最先端＝亀山郁夫がひどすぎるという事実を知っているひとは、沼野さんが嘘をついているとしか読めないんです。そうでなければ、沼野さんが最先端＝亀山郁夫並みの知性しか持っていない、と。『カラマーゾフの兄弟』を読んでいないひとにこのことのわかりようがありません。

さて、文学がわかるけれども、『カラマーゾフの兄弟』を読んだことはないというひとは、もちろんたくさんいるでしょう。でも、もし文学がわかるなら、私の文章を読んで、これは亀山郁夫にとんでもない問題があるに違いないと感じることができるはずです。そうでなければ、木下和郎がこれほどまで沼野さんの文章を素直に読まないわけはないだろう、と。木下和郎がこれほどまでに沼野さんの文章を素直に読まない理由が亀山郁夫にあるのかもしれない、とそう思うはずです。でも、あなたには、どうやらそれもないようです。最先端＝亀山郁夫のことを何も知らずに、ただ沼野さんの文章だけを問題にしているんですね。文学のわかるひとなら、亀山郁夫の実際を自分で確かめてから、私にコメントしてくると思いますよ。それなのに、「しかし、それは、非常に偏った読みかたにほかならない。そんなものを断定口調で書くものではない。」なんていうあなたには文学的想像力というものが欠けているんじゃないですか？　そういう検証を怠ったあなたこそ私について「断定口調で書くものではない」でしょう。ご自分の矛盾がわかっていますか？　どんなに尊敬するひとの文章でも、文学のわかるひとならば、まずは疑ってかからなくてはなりません。その疑いを圧倒的に否定してくれる文章こそ素晴らしい文章なんです。

まあ、それでもあなたのようにいきなり私にむかって、「文学のぶの字もわかっちゃいない」なんて、根拠の説明もなく書き込みするようなひと――『カラマーゾフの兄弟』も読まずによくもこんなことができましたね――には、もう応対したくもありませんから――だから最初に「そうでしょうとも」と書きました――、本当に「さいご」にしてもらってよかったとも思います。いいですか、私は最初から頭ごなしに最先端＝亀山郁夫を馬鹿になんかしていませんでした。長い、内容ぎっしりで、懇切丁寧な文章を通じて、最先端＝亀山郁夫を礼儀正しく馬鹿にしたんです。それが、あなたにはわかっていない。最先端＝亀山郁夫のひどさもわからずに、まして『カラマーゾフの兄弟』も読んだことのないようなひとに、私の文章の理解ができるはずもありません。なぜ『カラマーゾフの兄弟』も読まず、亀山郁夫の仕事を確かめもせず、あなたのように無礼な書きかたができるのか、わかりません。つまり、これも「あなたの人間性のくだらなさ」ですよね。あなたが『カラマーゾフの兄弟』を読んだことがあって、しかも、亀山郁夫の仕事に感動しているというなら、まだしも。

というわけで、私はブログをやめませんし、最先端＝亀山郁夫を批判

しつづけます。あしからず。あなたのように文学のわからないひとは私の考えている読者じゃありません。もし、私を批判したいのなら、私が最先端＝亀山郁夫を批判しているのと同じくらいの労力と時間を費やして私を批判してください。そのときにはきちんと応対しましょう。

さようなら。もう返信は結構ですからね。

以上です。

（二〇〇九年十月三十一日）

追記（二〇〇九年十一月十一日）

かめ　二〇〇九／一一／一〇／二三：二四

つまり、私が「かめ」という匿名を使ったことなどから、亀山郁夫とはやとちりされ、「二夜連続で新潟（西）からのコメントありがとうございます。」と、私が開示を想定してもいない情報を敢えて公けにされた、というわけですな。ずいぶんと情けない話ですね。

しかし、これ、よしんば私が亀山郁夫本人に間違いがないとしても、どうにも思慮の足りない貴方の行為ということになる。

他の文面にも、その貴方の思慮の無さ、浅はかさがぷんぷんと臭うのです。臭い立つのです。とてもじゃないが、信用がならない。

頭の悪さから来る（のであろう）、ひとりよがりばかり。

私は、これまでの経過を全てコピーさせていただきました。情けないブログということで、いつか、どこかで、発表する機会があるのかもしれぬ……。

（貴方のやったことは、「最低限の道徳」ともいわれる法には抵触しないであろう、が、あきらかに、いわゆる道徳に悖る行為であろう。情けない人間だね、きみは）

3

これまでに私は何度も、自分の最先端＝亀山郁夫批判にうんざりしていると書いてきました。でも、この批判はつづけなきゃいけない、とこれも同じく繰り返し書きました。しかし、私は停滞してしまいました。その理由のいくつかを書いてみます。

まず、私が批判をつづけている間にも、最先端＝亀山郁夫が愚劣な活動を進めている――あろうことか『悪霊』の翻訳まで開始している――こと。そうして、最先端＝亀山郁夫の読者が――無知ゆえに――まだまだ増えつつあること。また、先に挙げた村上春樹ら――ドストエフスキーをよく読み込んでいるはずであるのに、最先端＝亀山郁夫を称揚してしまうのは、実はそもそもよく読み込んでなどいなかったのか、嘘をついている（控えめにいって、正視していない）のかのどちらかとしか考えられない――の発言のあること。それらのいちいちに私は怒りとやりきれなさとを溜め込むことになりました。正直、これが結構しんどいんですね。まったく、きりがないんです。もっとも、村上春樹が最先端＝亀山郁夫訳を否定しさえすれば、最先端＝亀山郁夫批判にとって大きい前進になるなどと考えていた私が甘かったんですね。

村上春樹についてもう少しいえば、あれだけの――つまり、私は彼の翻訳を素晴らしいと思っているわけです――翻訳をしているひとに最先端＝亀山郁夫の実質がわからないはずはありません。逆に、わからないであれだけの翻訳をするということはありえません。だから、実は、村上春樹はインタヴューではやんわりと皮肉をいったのだ、と私は考えないでもないんです。しかし、彼ほどに自分の発言の影響力を承知しているはずのひとが、そのような曖昧ないいかたをしてはなりません。彼は、最先端＝亀山郁夫よりも、『カラマーゾフの兄弟』

という原作（とその読者）を大切にすべきでした。この点でも、彼には本当にがっかりしました。いや、もしかすると、皮肉でも何でもなく、彼は最先端＝亀山郁夫の仕事を賞讃したのかもしれません。そうだとすれば、いまや村上春樹には重大な何かが欠け落ちてしまっているのじゃないでしょうか？　それはどうあれ、私は彼に対する大きい失望を繰り返しておきます。最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』についての村上春樹の発言は、はっきり誤りです。

「でも僕が本当に怖いと思うのは、青木のような人間の言いぶんを無批判に受け入れて、そのまま信じてしまう連中です。自分では何も生み出さず、何も理解していないくせに、口当たりのよい、受け入れやすい他人の意見に踊らされて集団で行動する連中です。彼らは自分が何か間違ったことをしているんじゃないかなんて、これっぽっちも、ちらっとでも考えたりはしないんです。自分が誰かを無意味に、決定的に傷つけているかもしれないなんていうことに思い当たりもしないような連中です。彼らはそういう自分たちの行動がどんな結果をもたらそうと、何の責任も取りやしないんです。本当に怖いのはそういう連中です」

（村上春樹「沈黙」『レキシントンの幽霊』所収　文春文庫）

私は「誰の前にひれ伏すべきか？」（「大審問官」）と並んで、この村上春樹の文章が現在の「最先端＝亀山郁夫問題」をよく表現していると思っていたんですけれど、いま、右の「青木」を「最先端＝亀山郁夫」に読み換えてみてください。「誰か」を『カラマーゾフの兄弟』という作品だと、あるいは最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』の読者だと読み換えてみてください。いまや村上春樹は「青木のような人間の言いぶんを無批判に受け入れて、そのまま信じてしまう連中」のひとりじゃないでしょうか？　いやはや、「本当に怖い」です。

これもまたいっておきますが、たとえ最先端＝亀山郁夫訳であろうとも、それでドストエフスキーを読むきっかけになれば、いいじゃないか？　などという考えは絶対に駄目です。また、これだけ最先端＝亀山郁夫訳が読まれて、その多数の読者たちが感動し、満足しているのなら、それでいいじゃないか？　などという考えも絶対に駄目です。みんながいいといっているんだから、それでいいじゃないか？　――絶対に駄目です。

また、こういうことも考えます。作家、翻訳者、編集者、書評家、研究者らは、それぞれがもっと孤立すべきで、各人がもっと重い責任を持つべきじゃないでしょうか？　彼らの誰かが駄目な仕事をしたなら、べつの誰かがそれをきちんと指摘すべきです。ところが、彼らは自分たちの責任を読者に押しつけているように思われてなりません。多数の読者が喜ぶ、本が売れる、それならそれでいいじゃないか？　というふうに。そのくせ、彼らは多数の読者を自分たちの権威や情報や宣伝によって操作しているつもりもあるんじゃないでしょうか？

右のことは、最先端＝亀山郁夫問題をももちろん含んで、書店に勤める私には以前からずっと気になっていたことです。いや、書店に勤める前からですね。しかし、書店に勤めていっそう、そうして、『白い犬とワルツを』の件以降さらに意識が強まったでしょう。私が自分の勤める書店でＰＯＰを書くのをやめてしまい、引きこもって個人でこの「連絡船」を始めたのも、その意識のせいですね。

さて、先月私はあるテレヴィ番組の取材を受けました。この十年間の「ベストセラー」をいろんな切り口で採りあげるという企画です。書店員の手書きＰＯＰから生まれた「ベストセラー」ということで『白い犬とワルツを』が扱われるわけです。私はここしばらくそういった取材を基本的には断わってきていましたが、新潮社がこの九月にあの作品を絶版にするつもりだった（これは土壇場で回避されました）のを知っていたので、愛着のある作品のために何かしておこうと思ったんです。絶版の件がなければ、受けなかった。それでも、私は番組制作側に、自分が「ベストセラー」というものに否定的であること、『白い犬とワルツを』の総部数（一八八万部）をよくないと思っていることを理解してほしいといい、さらに条件をつけました。最先端＝亀山郁夫訳『カラマー

ゾフの兄弟』も採りあげるのか、と訊ね、まず最先端＝亀山郁夫自身への取材のないことを確認、さらに（数日かかって）、光文社編集部への取材のないことをも確認しました。もし、そのどちらかでもがあったら、私は取材を受けない、なぜなら「あんなでたらめなものと一緒に並びたくないから」と告げたんです。ただ、それでも「新訳ブーム」という切り口からは、最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』の書名だけは挙げざるをえないので、それは了承してほしいといわれました。

それにしても、収録で――小一時間ほどカメラの前でしゃべったんですが――、私は「ベストセラー」を否定し、出版社や書店や読者を批判し、「本屋大賞」をも否定しましたから、実際に番組で使えそうな発言はほとんどないだろうと思います。ただ、「昔話」として、自分がかつて村上春樹の作品にどんなＰＯＰを書いていたかをしゃべったのが、村上讃美として扱われなければいいな、とも思います。

それはともかく、私が停滞してしまった理由の二つめ。これもまた「怒り」についての話です。私のなかで「怒り」というものがいまどんな大きさになっているか、どんな位置にあるか、というようなことです。

私は「その一一」で、自分が喧嘩を止めさせた話と客を怒鳴りつけた話とを書きました。あれからどうも自分のなかで怒鳴ることが解禁されたとでもいう感じがして、困惑しています。私はあれ以降、実際に何度もひとを怒鳴りつけ、詰問しつづけています。相手は私の勤める書店で万引きをした者たちです。揉みあいになることもあります。大暴れする身体の大きい十代をふたりがかりで押さえつけながら怒鳴りもしました（このとき周りのひとたちが何をしていたか、後できかされたんですが、何人かは「写メ」していたそうです）。以前の私にはこういうことはできませんでした。それがなぜかいまはできている。万引きの発見についても同様の変化があります。つまり、以前の私なら、防犯カメラのモニターで万引きを目撃しても、「たしかにいま自分はそれを見た。見たが、それは本当だろうか？　見間違いではないだろうか？」というような躊躇の一過程があり、それを引きずったまま動いていたのに、いまではそんな思考・感情の手続きを全然踏まずに、もう先に身体が動いているという具合です。瞬時に怒りが沸騰する感じなんですね。おそらくこれによっても、発見数が激増してきました。月を追うごとに逮捕数も上がっています。「おそらくこれによっても」というのは、私の勤める書店での万引き件数が現実に増えてきているのか、ずっと変わらぬペースなのか、ひょっとしたら減っているのか、確認のしようがないからで、確かなことは、発見する私の目が肥えて・鋭くなってきているということです。いまや、私は毎日万引きを見つけるためだけに出社しているような感じなんです。毎日、です。仕事になりません。くたくたです。万引きする者、しようとする者の数がどれだけ多いか、これはふつうのひとには到底わかってもらえないでしょう。彼らは十代から六十代――この六十代（まるで鋭敏な兵士のごとく、周囲の一瞬の隙をついて二度も大量に万引きした）は所持金三十円でした――まで男女問わずです。うんざりするとともに、私は困惑しています。私は彼らに「絶対許さないからな」といい、これは、いえばいうほど私自身を痛めつけている感じなんですね。「お前、そんな偉そうなことをいえた柄か？」という自分の声が常にします。これらのすべてがまた正直、しんどい。

私は最先端＝亀山郁夫問題に対する自分の怒りと万引き犯たちへの怒りとを明確に区別できていないと思います。最先端＝亀山郁夫問題への怒りについては、これまでの人生で最大のもの――というか、これまでの私はほとんど怒らない人間でした――です。しかも、それがここまで持続している。この怒りなしに、私が万引き犯たちへのいまの怒りを持ちえただろうか、と思いもします。この怒りと私は憎悪と、あるいは軽蔑の区別もついていません。私は自分のこうした感情を恐れます。私のなかのこうした感情の増殖に怯えてもいます。私は狂っているのじゃないでしょうか？　狂っていますね。

これを書いているいま――休日です。万引きを見つけなくてもいい一日です――私はとても穏やかな気持ちでいました。前夜には先の「かめ」氏の新たな書き込みに怒りに満ちた対応なんかしていたんですが、今日は穏やかでした。ぐっすり眠りもしました。そうして、『ガープの世界』（ジョン・アーヴィング

筒井正明訳　サンリオ文庫・新潮文庫）での「ベンセンヘイパーの世界」や「ひきがえるの習性」などを思い出していました（私はこの翻訳に不満はありますが、未読の方はどうぞ読んでみてください）。それで、ついさっき、「こころなきみにも」の最新記事を読んだところです。

「きょうは犬の日で紅茶をサービスしまーす。紅茶の日でもあるし」
「犬の日？」
「11月1日は、ワンワンワンってことでみたい」
「ほー、知らなかったなぁ」
「でも11月11日のほうが、ワンワンワンワンって多くていい気もするが・・・」
「そういえば、なんでしょうね？」
「？」
「？」
「あ！　ほえすぎると、うるさいからかも？」
「えー」

『Fonte』（元『不登校新聞』）No.277(2009/11/1)
（「こころなきみにも」十一月十一日　http://dhatena.ne.jp/yumetiyo/20091111）

私は「ほえすぎ」ていました。私は狂っていました。

私が停滞してしまった理由の三つめ。

私は自分の『カラマーゾフの兄弟』の読み取りを公開しつつ最先端＝亀山郁夫の読み取りを批判していたわけですけれど、最初のうちは、まず最先端＝亀山郁夫の読み取りを採りあげ、それについてあれこれしゃべっていたんですが、これが難しくなりました。最先端＝亀山郁夫の読み取りがあまりに馬鹿馬鹿しいので、いつからか、自分の読み取りの方を優先するようになっていました。これでは直接の批判にならないのではないか？　と私は考え込んでしまったんです。しかし、やはりそんなことはないんですね。こう考えるまでに時間がかかってしまったんです。

私が停滞してしまった理由の四つめは、この後、べつの文章で書きます。

いまの私はこう考えています。とにかく私は自分の読みをどんどん語っていきさえすればいい。いささか遠回りになろうとも、それは最先端＝亀山郁夫批判として有効だ。私はもうこの問題に関する新情報をいちいちチェックするよりも、私の文章に対するちゃちゃなんかに対応するよりも、とにかく『カラマーゾフの兄弟』という作品に潜り込むことだけに専念すればいい、と。

（二〇〇九年十一月十一日）

（追記）右の「ちゃちゃ」というのは萩原氏のことを指しているのではありません。先の「かめ」氏や村上春樹ファンとおぼしき読者からのコメントを、私は思い浮かべているのです。

4

このところ、私が十月に書いた「村上春樹と『カラマーゾフの兄弟』」という記事へのアクセス――キーワード「村上春樹」「カラマーゾフの兄弟」の組み合わせで検索サイトから――が多いので、コメント欄に追加の文章を書きました。次の通りです。

一　私はもう二十年ちかく村上さんの作品を読んできた読者です。ある時期まで、村上さんは、私にとって、新作が出たなら読むことにしている少数の作家

のひとりでした。このブログのべつの場所にも書いていますが、『カラマーゾフの兄弟』――私は初読からこの二十五年以上の間に何度も読み返してきました――についても、村上さんの小説を通してあれこれ考えたりもしていました。まず、そのことを理解してほしいんです。村上作品を知らずにいて、単に上のインタヴューだけを問題にしているのではありません。村上作品を読みつづけてきた読者だから、彼にがっかりしたといっているんです。

二　翻訳者としての村上さんを私は高く評価しています。

三　『カラマーゾフの兄弟』の亀山郁夫訳は本当にひどいです。この事実は動かせません。これについてはもう一年半ほど、私は大量の批判文章を書きつづけています。亀山訳『カラマーゾフの兄弟』はドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』ではありません。亀山は原作のすじすら理解できず、登場人物それぞれの個性はもちろん、彼らの関係すらわかっていないまま、でたらめな訳をしています。『カラマーゾフの兄弟』を亀山訳以外で読み、感動したことのある方になら、私の批判文章は納得しうるものであると考えています。「自己陶酔」（コメント欄では、あるひとから私の文章がこう評されました）なんかじゃなく。

四　翻訳者として優れている村上さんには、実は亀山訳の実質がわかっているはずです。あるいは、村上さんのこれまでの『カラマーゾフの兄弟』読解が、私の考えていたよりもかなり低いレヴェルだったか。どちらかです。

五　亀山以外の訳で『カラマーゾフの兄弟』を読んだことのないひと、また、私の延々つづいている批判文章の全体を読んでいないひとは、このコメント欄に書き込む資格がありません。

六　また、書き込む資格があるひとも、私が問題にしていることについて、あなた自身がどう考えているのかを必ず書いてください。単に村上さんが間違うわけがないなどというコメント、「まずは村上ありき」というコメントではなく、あなた自身がどう考えるかです。これもべつのところで書きましたが、あなたが村上ファンであっても（いや、あればあるほど）、常にあなたは村上作品を疑いながら読まなくてはなりません。あなたの疑いにもかかわらず、それを村上さんが粉砕してくれたなら、そのときこそその作品は素晴らしいんです。

というわけで、私はこう考えています。村上さんも誤ります。誤った村上さんのせいで亀山訳を読みはじめてしまうひとの増えることを、私は危惧しているんです。

私は村上春樹さんご本人にも、はっきりとした回答がいただきたいと思っています。上のインタヴューでは彼の真意がまだつかみかねますから。

村上さんと並んで柴田元幸さん（私はこのひとの翻訳も素晴らしいと思っています）も同じです。

（二〇〇九年十一月十六日）

5

（1）

たまたま最近になって、これを読みました。中央公論新社のホームページです。

中公文庫『文学的パリガイド』お詫びと訂正

中公文庫『文学的パリガイド』（二〇〇九年七月二十五日刊行）のなかで、以下の誤りがありました。
読者の皆様にご迷惑をおかけしましたことを謹んでお詫びし、訂正致します。

二〇〇九年八月十一日

中央公論新社

p.39、後ろから3行目
（誤）ロン＝ポワンから西側は……　↓（正）ロン＝ポワンから東側は……

p.72、6行目
（誤）サン＝ミシェル大通りの西の地域……　↓（正）サン＝ミシェル大通りの東の地域……

p.72、7行目
（誤）サン＝ミシェル大通りの東側の六区は……　↓（正）サン＝ミシェル大通りの西側の六区は……

p.100、後ろから4行目
（誤）イノサン広場から西に……　↓（正）イノサン広場から東に……

（http://www.chuko.co.jp/news/70900.html）

この『文学的パリガイド』の著者は誰か？　右の記事には著者名がありません。そこで、私はべつの図書検索サイト（e-hon）で調べてみました。著者は鹿島茂です。ところが、同じ画面に当の中公文庫と並んで、もう一点、その親本が表示されていたんですね。「出版社名　日本放送出版協会」（ＮＨＫ）、「出版年月　二〇〇四年七月」。

つまり、おそらくこの本はまるまる五年間誤ったままだったということです。日本放送出版協会の編集者は出版時に当該箇所をチェックしていなかったし、以後も誤りに気づかなかった。さらに、中央公論新社の編集者もチェックなどせず、親本の原稿をそのまま文庫として流したわけです。著者についてはいうまでもありません。

たぶん、文庫化を機に、親本よりも広範な読者がついたために、そのうちの誰かからの指摘があって、初めてこの誤りに気づいたということでしょう。

（2）

大西巨人の作品から引用。

その夜そのあとの雑談の中で、また義人は、「各人の弱みや卑劣さをたがいに薄ぎたなくいたわり合って衆を恃むような消極的連帯」ではなく、「ひとりですっと立ってゆ」く各人の積極的連帯が出来上がらなければならない、とも語っていた。

（大西巨人「雪の日」『五里霧』講談社学芸文庫　所収）

もちろん、すぐに同じ作者のこれが想起されなければなりません。

――イプセン作戯曲『民衆の敵』最終第五幕の幕切れで、主人公の医師ストックマンは、「独り立つ者、最も強し。」と断言する。レーニンは、その『民衆の敵』あるいはイプセン作劇詩『ブラント』の「一切か無か。」というような考え方に、語の悪しき意味における『ニイチェ主義』を看取し、そういうイプセンを否定的に批判した。レーニンなりブレヒトなりの尊重・主唱したのが「〈連帯〉の重要性」であることは、疑いない。

伊藤弁辯士も、「〈連帯〉の重要性」を十二分に認識・尊重する。ただ、彼の確信において、〈連帯〉とは、断じて〈恃衆（衆を恃むこと）または恃勢（勢を恃むこと）〉ではない。彼の確信において、「正しくても、一人では行かない（行き得ない）」者たちが手を握り合うのは、真の〈連帯〉ではないところの「衆ないし勢を恃むこと」でしかなく、真の〈連帯〉とは、「正しいなら、一人でも行く」者たちが手を握り合うことであり、

それこそが、人間の（長い目で見た）当為にほかならず、「〈連帯〉とは、ただちに〈恃衆〉または〈恃勢〉を指示する」とする近視眼的な行き方は、すなわちスターリン主義ないし似非マルクス（共産）主義であり、とどのつまり本源的・典型的な絶対主義ないしファシズムと択ぶ所がない。

（大西巨人『深淵』光文社文庫）

私がこれから批判するのは、「各人の弱みや卑劣さをたがいに薄ぎたなくいたわり合って衆を恃むような消極的連帯」と「「正しくても、一人では行かない（行き得ない）」者たちが手を握り合う」ことについてです。これは「ベストセラー」批判であり、「世のなかの圧倒的大多数の＝ふつうのひとたちの読書」批判でもあるはずです。当然にこれは最先端＝亀山郁夫批判の一環でもあるわけです。

（3）

おさらいします。

私がこの一連の記述を通して批判しているのは――

一　亀山郁夫自身
二　亀山郁夫と仕事をした編集者たち
三　その編集者たちを抱える出版社・放送局
四　書評、インタヴュー等で亀山郁夫を称揚するひとたち
五　そうした書評、インタヴューを載せる出版社、放送局、新聞社等
六　亀山郁夫の仕事の実質も知らずに安易に対談する作家、タレント等
七　亀山郁夫を批判できずにいるロシア文学界の面々
八　上記のことをまったく理解せぬまま、亀山郁夫をありがたがる一般読者たち
九　その他

――でした。

本題に移る前に、私はちょっと寄り道しますが、この一連の記述を読んでいるひとのなかに、やがてこの世のなかの何かを批判する発言を――たとえばネット上で――継続的に行なうことになるひとがいるかもしれません。そのひとは私のいまの停滞ぶり、迷い、逡巡など――「ひとりですっと立ってゆ」くことができず、周囲を見回して、誰かの助けを見つけようとしている様子、誰かの罵詈雑言に過剰な反応をしてしまっている様子など――をよく見ておいた方がいいですよ。きっと参考になるでしょう。あなたは私の方法の拙さとか、気の弱さとか、むら気とか、甘えとか、妥協とか、怠惰とか、何でもいいですから学びとってください。そう断わった上で――、私はやはり「のんびりだらだら」行くことにしますけれど。

さて、私はまたしてもこれまでの発言の繰り返し、これまで通りのことをいう羽目になっています。というか、それだけなんですよ、私のここまでやってきたことは。私はいま延々「もぐら叩き」――あのゲームセンターの（いまもまだあるんでしょうけれど）――をやっているんですね。一時は、この一連の文章の読者（コメントを書いてくれた）の助言――「亀山郁夫現象」ともいうべきものへの批判が多くの読者にとって一種のゴシップ（亀山郁夫対批判者）として括られて（しまうことによって）、それで終わりということになりかねず、本来の批判が損なわれる可能性がある――もあって、最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』そのものだけをやはり問題にすべきで、社会的現象面における周辺のあれこれは放っておくべきだとも考えたんですが、どうやらそうもいかないようなんです。最先端＝亀山郁夫を称揚する発言がいろんなところで後を絶たないからですね。誤訳問題はあるらしいけれど、読みやすいのは間違いない（から最先端＝亀山郁夫訳を読むぞ）なんていう読者も増えつづけています

し、そんなひとたちがこの先『カラマーゾフの兄弟』の読者の大多数を占めるなんてことがありうるわけです。また、彼らを先導する役を――この問題の本質もわからずに――何の気なしに請け負ってしまう作家、評論家なども増えつづけている。うんざりしますが、そういうひとたち――ふつうのひとたちとその先導者たち――とその増加こそがそもそも最も批判すべきことなんです。そんな状況だから、私はいうべきことをいわなくてはなりません。というか、私はいわざるをえないんです。私には他に選択肢がありません。なぜかはわかりません。ともあれ、私はこれをいわないでいる自分を想像することができません。で、いわざるをえない者だけがいえばいいと思うんです。「正しいなら、一人でも行く」ということです。私は『神聖喜劇』（大西巨人）の東堂太郎や「The Tank man」（天安門事件当時、戦車の縦列を止めようとした一市民。その映像はこちら＝ http://www.youtube.com/watch?v=mQqDqOx3KY&feature=fvst）などを思い浮かべますが、自分を彼らのように立派な人間だなんて思っていません。ただ、私が共感するのは、彼らが「せざるをえなかったことをした」というその一点に尽きます。私のいまやっていることがつまらないゴシップとして受け止められるしかないのだとしても、しかたがありません。この批判は絶対につづけられなければならないし、最先端＝亀山郁夫のせいで――彼が撤退すれば、その他大勢も静かになるでしょう――、私はつづけざるをえないんです。

私はどういう解決を望んでいるのか？　私は、最先端＝亀山郁夫が世のなかで「ああ、あの誤読・誤訳のひとね」といわれることを望んでいます。または、「ああ、誤読・誤訳をしたけれど、それを自ら認めて世間に謝罪し、これまでの訳書や著作をみな絶版・回収し、『悪霊』の翻訳も止めて、一から出直したひとね」といわれることを。

ところが、現時点で最先端＝亀山郁夫は『悪霊』の翻訳を着々と進めていて、なんと光文社の「小説宝石」での「短期集中連載」なんてことを始めてしまいました。光文社古典新訳文庫での刊行は今年二〇一〇年末のようです。何の反省もない。最先端だからしかたがないんですが、あらためて「本当に最先端だなあ」と思います。

（4）

私の停滞のせいで、もうすでに古い話題としか受け止めてもらえないかもしれないんですが、しばらく前からネット上では話題になっていた――「アニリール・セルカン経歴詐称、業績捏造の追求 blog」（http://blog.goo.ne.jp/11jigen/e/51dea8f84d63def58016b9eba89a44c3）――ことなんですが、とうとう朝日新聞がこういう記事を出しましたね。これは、ネットの力が朝日新聞を動かしたということですよね。引用します。

東大トルコ人助教の経歴「宇宙飛行士候補でない」　トルコ政府

「トルコ人初の宇宙飛行士候補」を名乗って講演や執筆活動をしている東京大大学院工学系研究科のアニリール・セルカン助教（36）が、飛行士候補の根拠として示していた公文書についてトルコ政府は13日、政府発行の文書ではなく内容も事実に合わないとの見解を示した。朝日新聞の問い合わせに文書で回答した。

アニリール助教は東大博士課程を修了、日本の宇宙航空研究開発機構研究員を経て、05年に東大助手（現助教）に就いた。01年に米航空宇宙局（ＮＡＳＡ）で宇宙飛行士の訓練を修了したなどと称して各地で講演、科学技術振興機構が運営する日本科学未来館の映像監修もした。

しかし、宇宙飛行士候補である証明として東大に提出したトルコ運輸省の文書について、トルコ大使館は「運輸省が発行したものでない。署名も本物でない」と否定した。

助教をＮＡＳＡの研究事業に招いたとされた米大学教授やＮＡＳＡも、同様に提出された手紙や訓練証明書について「自分の署名ではない」「文書の書式が違う」と発行を否定している。

助教をめぐっては、03年度の業績として宇宙機構に申告した論文一覧11本のうち4本の存在が確認できず、宇宙機構が該当部分を報告書から

削除した。東京大も経歴や業績の調査を進めている。

アニリール助教は朝日新聞の10月末の取材に対して「トルコ空軍とNASAの合意に基づいて宇宙飛行士の訓練を受けた。軍事的なことなのでこれ以上は話せない」と話していた。

おわび

8月29日付土曜別刷り「be」の「フロントランナー」の記事で、アニリール・セルカン東大助教について、「トルコ人初の宇宙飛行士候補」とある2カ所は誤りでした。該当部分を削除します。読者のみなさまに誤った情報をお伝えしたことをおわびします。

（朝日新聞　二〇〇九年十一月十四日）

というわけで、アニリール・セルカンの経歴詐称問題――セルカン本人というより、彼の本を出している版元や彼を持ち上げていたメディア、またその読者など――などについて職場の同僚と話していて、私が最先端＝亀山郁夫問題――こちらは「経歴詐称」などというはっきりした、誰の目にも明らかな非を持ち出せない事例ではあるけれど、「彼の本を出している版元や彼を持ち上げていたメディア、またその読者など」などについてはセルカン問題と同様の現象がある――について触れると、同僚――彼は私の最先端＝亀山郁夫批判を耳にたこができるほどきかされていますが、『カラマーゾフの兄弟』はおろか、ドストエフスキー作品のどれひとつとして読んだことがありません――が、こういいました。

「あのひとたち（ネット上で最先端＝亀山郁夫批判をしているひとたち）はやりかたが下手なんだと思うんですよ」

その「あのひとたち」のなかに――まさかこの――私もいることを彼は知りません。

「どういうこと？」

「もっとわかりやすくやればいいんですよ。亀山の訳文を引いて、正しい訳と並べるんですよ。そうしたら、亀山のおかしいことは俺にもわかります」

「……」

これが、ふつうのひとたちの考えることなんですね。木下豊房らの「検証」サイト（http://www.ne.jp/asahi/dost/jds/dost125.htm）を読むつもりにもならない。「横板に雨垂れ」（http://yokoita.blog58.fc2.com/）も「こころなきみにも」（http://d.hatena.ne.jp/yumetiyo/）も知らない。最先端＝亀山郁夫について知ろうとも思わない。

だから、最先端＝亀山郁夫批判は難しいんですよ。

（5）

最先端＝亀山郁夫批判の難しさというのは、こういうことです。まず、『カラマーゾフの兄弟』という小説（最先端＝亀山郁夫訳以外。なぜなら最先端＝亀山郁夫訳は偽物だから）を読んだことのあるひとが非常に少ない。しかも、そのひとたちの大半は、ただ最初のページから最後のページまでをめくっただけなんですよ（さぞかし大きな達成感があったことでしょう。それで満足なんですよ）。そんな彼らでも、いくらかは作品の強烈さに打たれはしているんでしょうが、しっかり細部までを読み取ることをせずに、なんとなく「打たれた」気になったにすぎません。なんとなく「感動」してしまったんですよ。いやあ、「大審問官」はすごかったなあ、あれは実に深遠な思想だなあ、いまの自分には歯が立たないよ、いつかああいうことまで理解できるようになればいいなあ、とかなんとかかんとか。でも、私は高邁な文学作品に接してみたよ、すごいな、私、とかなんとかかんとか。つまり、このひとたちは「作品に自分を合わせた」のでなく、「作品を自分に合わせた」わけです。

いや、それでも彼らは『カラマーゾフの兄弟』（最先端＝亀山郁夫訳以外）を読んだんです。そうして、感動さえ覚えたわけです。そういうことは大切なんで

すよ。『カラマーゾフの兄弟』の読書に限らず、読者というものは絶対に、常に「背伸び」しなければいけません。でも、そこで終わりにしちゃいけないんです。「背伸び」して読書したひとは、さらに、なぜ自分が「打たれた」のか、なぜ自分がその作品に「深遠さ」を感じたのか、延々と考えつづけなければなりません。たとえば二十五年くらい時間をかけて。二十五年間、ずっとそのことだけを考えろ、なんていっているんじゃありませんよ。しかし、意識のどこかにその作品に関するアンテナみたいなものができていて、何か――それはあなたの人生に起こった何かかもしれませんし、べつの作品の読書であるかもしれません――があるたびにそれがぴくりと震える、というような経験を重ねた方がいいんです。いったい、なぜいまこのこと――あなたの人生に起こった何か――でそのアンテナが震えたのか、そこから考える……、考えて、いつか昔に読んだ作品のどこかが思い出され、その作品についての理解が深まる……というような経験を重ねることです。そういうことの多い作品こそ、あなたにとって大切な作品であるはずです（もちろん、反対に、同じ経験が、あなたのかつて読んだ作品のどれほど無価値であったかをも教えてくれます。これも大事なこと）。

と、そういってしまうと、たとえ原卓也訳であろうと、昨日今日『カラマーゾフの兄弟』（最先端＝亀山郁夫訳以外）を読み終えたばかりの若いひとには、私がここでずっと書きつづけていることが理解できないということになるかもしれません。それはしかたがない。年齢を重ねなければわからないことだってあるんです（でも、年齢だけを重ねたって、最先端＝亀山郁夫のように、これ以上ないというほど見事な理解にしか到達しない例もあるんですが）。しかし、そういう若いひとたちにとって、私の文章が「刺」や「引っかかり」にでもなれればいいな、と私は思います。私にしたところでたかだか四十七歳です。これからまだまだ『カラマーゾフの兄弟』（最先端＝亀山郁夫訳以外）についての理解が深まるはず。

「なんかそういう言い方って、経験とか四十四歳っていう年齢とか、こっちにないことを盾に取ってるみたいで、ズルイよね」

と、僕を見ながら言った。

「経験や年齢を盾に取ったつもりはないけど、俺のしゃべる言葉や考えることに経験や年齢がくっついているのはしょうがないことで、経験や年齢がそれなりにある人間が全然ない人間みたいにしゃべったら、それはそれでかえってフェアじゃないよな」

（保坂和志『もうひとつの季節』　中公文庫）

話が逸れましたが、つまり、最先端＝亀山郁夫批判を理解できるほど『カラマーゾフの兄弟』（最先端＝亀山郁夫訳以外）を読み込んでいるひとの絶対数があまりにも少ないわけです。

そうして、読んでいないひとを含めて、ふつうのひとたちには『カラマーゾフの兄弟』（最先端＝亀山郁夫訳も含んで）とかドストエフスキーとかが「名作」や「文豪」や「古典」とかいうレッテルで、高邁な何か、身につけておいた方がよい教養的な何かとして括られて、それで終わりです。そのレッテルをうまく利用し、「読みやすい訳」だの「古典を現代によみがえらせた」だのといいかげんな宣伝の助けを借り、自らもそれに乗っかって、ふつうのひとたちをいいように騙しているのが最先端＝亀山郁夫です。ふつうのひとたちには騙されているということがわかりません。それどころか、最先端＝亀山郁夫のことばにうっとりしてしまうんですね。「亀山先生って、ドストエフスキー研究の第一人者なんでしょう？　ＮＨＫがそういっていたもの」、「東京外国語大学の学長さんなんでしょう？」、「村上春樹さんも褒めていたもの」とかなんとかかんとか。

とはいえ、実は、最先端＝亀山郁夫にも自分が多数のひとたちを騙しているなんていう自覚はありません。最先端だからです。これほどまでに最先端だと、自分自身の本当のレヴェルを自覚する能力すらありません。彼には、自分の素晴らしい仕事が多くのひとたちを感動させているとしか理解できないんですね。

「おれって、ドストエフスキー研究の第一人者なんだよね？　ＮＨＫがそういっていたものなあ」、「いやあ、おれ、東京外国語大学の学長さんなんだなあ」、「村上春樹さんもおれを褒めていたものなあ」というふうに、どこまでも最先端な

受け取りしかできないんです。彼の実際は、どこに出しても恥ずかしい仕事（低レヴェルの・いいかげんな・無能な・無知の・でたらめだらけの）しかしていない最先端なんですが、そのことを自分でまるっきりわかっていません。あまりにも最先端すぎるために、実は責任云々を自覚できないというのが本当のところです。最先端だからしかたがないんです。

（6）

こう考えてくると、そんな哀れな最先端よりもずっと罪深いひとたちがいることがわかりますよね。つまり、たとえば、ＮＨＫであり、東京外国語大学であり、村上春樹です。その他にもたくさんなんですが、きりがない。

で、ＮＨＫ。そのなかに、もうずっとしきりに私のブログをチェックしつづけているひと――ひとりだか複数だかわかりません――がいるんですけれど、あなた（がた）は私の文章をどう思っているんですか？　最先端＝亀山郁夫の暴走を止める気にならないんですか？　あなた（がた）も最先端なんですか？　それとも、単に卑劣なんですか？　あるいは、会社の方針と自分の本心との間で葛藤しているひと（たち）なんですか？　何とかしたらいいんじゃないですか？　あんな最先端をゲストにしたら――私は観ていませんが、「爆笑問題のニッポンの教養」（二〇〇九年十一月十七日放映）――、「爆笑問題」が恥をかくんじゃないんですか？　いや、ＮＨＫにとっても、これ以上ないというほどの恥でしょう。そうして、「爆笑問題」にも大きい責任はあるはずで、（「爆笑問題」の）太田光はカート・ヴォネガットの『タイタンの妖女』――私の生涯の読書におけるベストいくつかに入るはずの――をこの数年にあれだけ評価し、広めたのだから、同じ口で最先端なんかを相手になんかしちゃ駄目なんですよ。そんなことをすれば、ヴォネガットに傷がつくでしょうに。太田光はもうだいぶ以前に――ということは最先端＝亀山郁夫訳以外で――『カラマーゾフの兄弟』を読んでいるはずです。なぜかというと、彼の愛読するヴォネガットが『スローターハウス5』でこう書いているからなんですね。

あるときローズウォーターがビリーにおもしろいことをいった。ＳＦではないが、これも本の話である。人生について知るべきことは、すべてフョードル・ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』の中にある、と彼はいうのだった。そしてこうつけ加えた、「だけどもう、それだけじゃ足りないんだ」

（カート・ヴォネガット『スローターハウス5』　伊藤典夫訳　早川文庫）

太田光は最先端＝亀山郁夫訳での『カラマーゾフの兄弟』を読んだのか？　読んでいないのじゃないのか？　読んだとしても、番組収録に間に合わせるために、急いで読んだのじゃないか？　最先端＝亀山郁夫を「歓迎」するために（前提で）読んだのじゃないのか？

というか、問題はべつのところにあります。この番組「爆笑問題のニッポンの教養」は毎週放送です。三十分の番組。私は以前からいっていますが、テレヴィにせよ、新聞・雑誌にせよ、「書評欄」（に限らないでしょうが）というのは、いつも決まった放映時間・文字数で、とにかく締め切りに合わせて必ず穴埋めしていかなければならない、というやりかたでは駄目なんです。よいものがなければ、穴を開ければいいんです。「今回は該当作なし」ということでいいじゃないですか？　また、反対によいものがあれば、普段の数倍・数十倍・数百倍・数千倍もの放映時間や文字数を充てるべきなんです。そうしない・そうできないことがテレヴィ・新聞・雑誌などの大きな欠陥だと思うんです。

それはともかく、いまのやりかたでは、太田光がゲストの実質などをいちいち検証なんかできるはずがありません。番組スタッフが呼んだゲストということで、実質がどれほど最先端であっても「歓迎」せざるをえません。しかし、本来、太田光は必ず検証すべきです。結局、彼の番組だから。もちろん、その番組スタッフだって同じことです。彼らは最先端＝亀山郁夫の仕事を読みもせずに出

演依頼をしたんじゃないですか？　と思ったら、違うようですね。番組ディレクターは最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』を読んだらしいです。

今回の取材を始めるにあたって、まず、ドストエフスキーを再読しました。大学時代に『罪と罰』をどうにかこうにか読み終え、『カラマーゾフの兄弟』に至っては、序盤の修道院での家族の会食シーンあたりで頓挫してしまった不肖の身としては、少々不安を感じながら、ページを開いてみると・・・

番組のなかで太田さんも話していましたが、「何これ、サスペンス！？」と思うほど、めくるめくような世界が広がっていたのです。

まさに亀山先生が仰るところの〝大地〟を、私はドストエフスキーの文章と、その余白から、その行間から感じました。

どこに話が展開していくのかわからなくなるような長い長い登場人物たちのエピソードも、だんだん、「もっと、もっともっと私を揺さぶって！もっと！」と思えるほど。

それはまるでロシアの大地のうねり・・・、ときに激しく、ときに厳しく、ときに寛容に、読者を運んでいくドストエフスキーのその筆致に、私はすっかり心を奪われてしまったのでした。

もちろん、読んだことのない方には上記の文章もさっぱり意味がわからないかと思いますが、そんな方には、ドストエフスキーのこの一言を・・・。

「小説をお読みになれば、おのずからわかることですよ」と――。

『カラマーゾフの兄弟』序文より

（「爆笑問題のニッポンの教養」ディレクター観戦後記）
（http://www.nhk.or.jp/bakumon/previous/20091117.html）

やれやれ。この程度の読み取りしかできないひとがＮＨＫの番組ディレクターであるわけです。彼はいったいいつ最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』を読んだのか？　最先端＝亀山郁夫への出演依頼をし、承諾を得た後に読んだのか（きっと大急ぎで）？　しかも、彼にすれば、自分がゲストとして選んだ最先端＝亀山郁夫が素晴らしいひとでないと困るわけです。これ、もし彼が出演依頼をする前にきちんと読んだのなら（出演依頼の後でも）、大馬鹿ですよ。そうだとすれば、彼には文章を読む力がないし、「文学」もわからないということになります。まあ、でもとにかく最先端＝亀山郁夫先生の偉業を伝えることが彼の仕事なわけです。それもしかたがない。毎週毎週「誰かいないかな？」とやらざるをえないんですから。その際、彼らが頼りにするのが「世のなかの評判」なんですね。ところが、その「世のなかの評判」とやらをつくり、支えつづけているのは誰なのか？　やれやれ――やれやれ――です。何なんだ、いったい？　これでは、誰が責任を取るのか？　ＮＨＫの誰かはこういうんじゃないんですか？「だって、ロシア文学会の面々が亀山の仕事を保証してくれているじゃないですか！」、「だって、世のなかの大勢のひとたちが光文社古典新訳文庫で『カラマーゾフの兄弟』を買って、読んでいるじゃないですか！」――やれやれ。そういうものだ。

「じゃ、誰だ、誰なんだ、結局のところ、最先端＝亀山郁夫の仕事が素晴らしいなんていっているのは？」

そうして、みんながこういうんです。

「私じゃない！」

「《私じゃない！》私じゃないとは、どういうことだ？」

もちろん、ここで絶対に《私じゃない》ということのできないひとたちはいるんですよ――沼野充義とか佐藤優なんかです。しかし、いまここで私が批判するのは沼野充義とか佐藤優なんかでなく、ＮＨＫをはじめとするメディア――テレヴィだとかラジオだとか新聞だとか雑誌だとか――のひとたちです。

彼らにはまだまだ大きい影響力があります。そうであるからには、彼らには大きい責任があるはずです。そうして、彼らは恥知らずなほど無責任だと私はいいます。その彼らの無責任ぶりをよく知っていて、それに乗っかっているのが、沼野充義とか佐藤優なんかです。メディアがきちんと責任を果していたならば、沼野充義とか佐藤優なんかもこうまででたらめを振りまくことなどできなかったでしょう。

ここに「各人の弱みや卑劣さをたがいに薄ぎたなくいたわり合って衆を恃むような消極的連帯」の恐ろしい広がりがあります。この後で引用しますが、私も「ある空漠たる恐怖に捕えられ」ます。

（7）

しかし、その「引用」――「ある空漠たる恐怖に捕えられ」――の前に佐藤優。彼の最近の発言（二〇〇九年十月刊）から。

亀山郁夫氏の訳は、従来の訳に較べ、格段と正確でかつ読みやすい。実は神を信じていないドストエフスキーの本心が透けて見える。ドストエフスキーの小説が流行するような社会は「病んでいる」と評者は考える。

（「佐藤優選・書斎の本棚から百冊」立花隆・佐藤優『ぼくらの頭脳の鍛え方』文春新書）

以前にも同じ文春新書（二〇〇八年四月刊）でこういっていました。

佐藤　そして、今回、実に見事な形で戻ってこられた。『カラマーゾフの兄弟』の新訳（光文社古典新訳文庫）は実にすばらしい。もともと亀山先生の翻訳は、ドストエフスキー以外についても正確で読みやすいという定評があります。ただし、ドストエフスキーの作品、特に『カラマーゾフの兄弟』については、他の翻訳とは違った「重圧感」が訳者にとってあるのです。ロシア文学者やロシア思想史専門家には意地悪な人が多いですから。「新訳をつくるとは、大先輩の翻訳にインネンをつけるのか」という無言の圧力があるのに加え、重箱の隅をつっつくような解釈の違いをあげつらって、「亀山の誤訳を見つけた」と騒ぐような輩がロシア屋には多いですから。陰険な人が多いので、ドストエフスキーの翻訳などすると、意地悪と嫉妬が混ざった攻撃をされる。一般の読者からは見えにくいのですが、こうした古典の改訳は、狭いロシア文学村の掟に照らして見ると、結構勇気がいることなのです。

（亀山郁夫＋佐藤優『ロシア　闇と魂の国家』文春新書）

さらに、

佐藤　亀山訳は、読書界で、「読みやすい」ということばかりが評価されているようですが、語法や文法上も実に丁寧で正確なのです。これまでの有名な先行訳のおかしい部分はきちんと訳し直している。ぼくは、ロシア文学者の世界は、どうも家父長的体質が強くて好きになれない。

亀山さんのドストエフスキー読みも面白い。『ドストエフスキー――謎と力』（文春新書）も、大胆な解釈に目を奪われがちですが、その底には徹底した実証性が常にある。

「ドストエフスキーはこうも読めればこうも読める」と複数の読み方を提示する人はけっこういますが、「亀山ドストエフスキー論」の面白さは「自分はこの読み方を採用する」というインテリ（知識人）としての「命がけの飛躍」をしているところ。「決断」と言ってもいい。この「決断」こそが「物語」をつくるという意味で、今の日本の社会と国家にいちばん欠けているところです。

（同）

大笑いです。「インテリ（知識人）としての「命がけの飛躍」」がジューチカとペレズヴォンが同一の犬でない、なんてものなんですか？

それはともかく、右の佐藤発言については、木下豊房がこう書いていました。

「『カラマーゾフの兄弟』の原文は、破壊的な文体で書かれており」などと、亀山氏はわけのわからないことをいっているが、ご本人の「訳文」こそ、原文を破壊しているのではないか。佐藤優のような、ご追従の人物が現れて、いわく、「亀山訳は、読書界で、「読みやすい」ということばかりが評価されているようですが、語法や文法上も実に丁寧で正確なのです。これまでの有名な先行訳のおかしい部分はきちんと訳し直している」（文春新書『ロシア　闇と魂の国家』38頁）などと、ロシア語を知らない読者を欺くことをいうので、マスコミもたぶらかされているのである。

（「―亀山問題の現在―」（http://www.ne.jp/asahi/dost/jds/dost128.htm）

さて、いま、ちょっと計算をしてみたんですが、ここまで私は最先端＝亀山郁夫批判として、文庫本の字詰めに換算して約八三〇ページ、四〇〇字詰め原稿用紙にして約一三六〇枚分の文章を書いてきたわけです。一年半かけて。それも懇切丁寧な文章です。これまでのところだけでも、最先端＝亀山郁夫の最先端ぶりは明らかだと思います。最先端＝亀山郁夫は最先端であるがために、あまりにもひどい仕事をしました。というより、ひどい仕事しかできないんですよ、最先端だから。だから、こんな最先端に仕事をさせたひとたち、それに追随するひとたちを私は罪深いというんです。というわけで、最先端＝亀山郁夫のひどさはもはや動かせません。これは事実です。反論のあるひとは、どうぞ指摘してきてください。ただし、そのひとは私の文章の全体を読むこと、また、私の『カラマーゾフの兄弟』読解の誤りを指摘するだけでなく、それがどう最先端＝亀山郁夫が最先端でないということになるのか、私の費やしてきた時間と労力に見合うだけの文章ではっきり示してください。手を抜いたものは一切受けつけませんよ。

繰り返しますが、最先端＝亀山郁夫の仕事のひどいことは事実です。もう、これは絶対に動かせません。そうして、最先端＝亀山郁夫の仕事がひどいという事実がある以上、佐藤優のいっていることはでたらめだらけということになります。佐藤優――このひとは全然信用ならない。しかし、佐藤優は最先端＝亀山郁夫の訳が「従来の訳に較べ、格段と正確でかつ読みやすい」わけがないということを承知しているでしょう。腹のなかでは、「ひどいもんだな、この最先端」と思っていますね。これは沼野充義と同じです。しかし、佐藤優は沼野充義のようにやけくそになったり、びくついたりしないんです。佐藤優は平然と居直ります。それどころか、すすんで最先端＝亀山郁夫を悪用しさえします。

以前に私は最先端＝亀山郁夫と佐藤優の対談の一部を「ものすごく読解力のない呆れた二人組による力みかえった傑作対談」として引用しましたね。

亀山　とすると、つまり、フロマートカ的に解釈すると、キリストは、大審問官の前で自己批判するために降り立ったという理屈になりますね。ドストエフスキーの思想上の真意は、イワンにあった、ということになる。ある意味で、革命肯定の思想です。

佐藤　その通りです。フロマートカは、基本的に革命を肯定的にとらえています。

亀山　そういう文脈で、「大審問官」を読み替えることもできるわけか。たとえば、イワンは、最後にわざわざキリストが大審問官にキスする場面を描いている。前日に、「大審問官」は、百人の異端派を火あぶりにしているわけですよ。その「大審問官」にキリストがキスをするというのは、どういう意味でしょうか。ギリシャ語（コイネー）で言われる「祝福」、あれは、神への賛美や信仰の共有をひとつの絶対的な前提、他人、

他者に対して神の恵みをとりなすことを意味するわけですよね。大審問官よ、やめなさい、いずれ神の罰が下ります、という警告でないことは確かです。勝手にどうぞ、私は知りませんよ、ともとれないでしょう。むろん、キリストが自分の無力さの自覚を大審問官に告白しているわけでもない。無神論者のイワンからとらえると、その行為はどうなるのか。ほかでもない、現実に対する肯定であり、許しを意味せざるをえなくなるわけです。許す、ということは、仕方ないという認識につながっています。「仕方がない」は、消極的な肯定をおのずから意味することになる。興味深いのは、「大審問官」の物語詩を語り終えたイワンに、アリョーシャが何も言わずにキスすることです。イワンが「いまのキス、さっきの盗作じゃないか！」と叫ぶように、明らかにアリョーシャのキスは、キリストの大審問官へのキスを反復しています。「大審問官」の作者は、イワンです。ですから、キリストのキスは、イワンの世界観の反映としてあるはずです。逆にアリョーシャのイワンへのキスの場面は、おそらくドストエフスキーの……

このキスについて、以前から自分なりの解釈をもっていて、ドストエフスキーが果たせなかった『カラマーゾフの兄弟』続編でも、このモチーフは何らかの形で反復されただろうと想像しています。つまり、アリョーシャは、皇帝暗殺をほのめかすコーリャ・クラソートキンに対して、同じキスを反復するのではないかと空想しているんですよ。

佐藤　ここでの「キス」は、理論から実践への質的な転換を表すのではないでしょうか。「おしゃべりはいらない」と口を封じ、あとは行動のみあるという。受肉を象徴的に示しているのだと思います。

亀山　つまり、励ましのキスということですよね。

（亀山郁夫＋佐藤優『ロシア　闇と魂の国家』　文春新書）

一方の最先端＝亀山郁夫の発言はというと、最先端ぶりが見事に発揮されていますが、このとき他方、実は、佐藤優は、自身では「大審問官」の本質をきちんと読み解いていたにもかかわらず、わざわざそうでないことをしゃべっていたんじゃないでしょうか？　だから、これは「ものすごく読解力のない呆れた二人組による力みかえった傑作対談」なんかではなくて、「ものすごく読解力のない呆れた」相手を利用して――力みかえらせまでして――ドストエフスキーを故意に歪曲して読者に伝えようとした佐藤優の策略だったのじゃありませんか？　最先端＝亀山郁夫の方はまったくそんなことには気づきもしていません。最先端だからです。自分がどれほど馬鹿にされ、そそのかされ、いいように利用されているかもわかっていません。最先端だからです。

さて、先に触れた『ぼくらの頭脳の鍛え方』ですが、これの第三章というのが「ニセものに騙されないために」というとっても愉快な章題で、次のようなやりとりがあるんですね。

ニセ科学に抗して

立花　今のお話をうかがって、ホロコースト否定論ができあがった経緯を思い出しました。リストに挙げた『なぜ人はニセ科学を信じるのか＝歪曲をたくらむ人々』（マイクル・シャーマー著／ハヤカワ文庫ＮＦ／立花164）が、そのあたりを詳しく論じています。

佐藤　いい本ですね。

立花　要するにホロコーストを進めるときの、上司の指示の出し方が「うまくやれ」なんです。それを現場が忖度して、ホロコーストを実行する。そうすると、ホロコーストがいかに行われたのかについて証拠を探そうとしても、きちんとした命令があるわけではないから、あちこちの証拠が抜けている。その抜けている部分の証拠だけをつないで論を立てると、ホロコーストはなかった、という証明が可能になってしまう。

佐藤「うまくやれ」という言葉の中に、ものすごい暴力性があるんですよ。立花さんが科学的なテーマでいろんな発言をされていることは非常に重

要なことだと思うんです。というのは、ニセ科学の破壊力は現在、かつてないほど大きくなっているからです。私はニセ科学の問題を理解するときに非常に参考になるのは、ユルゲン・ハーバーマスの『晩期資本主義における正統化の諸問題』（岩波現代選書）だと思います。もうタイトルを聞くだけで読みたくなくなるような本ですが（笑）、ここでハーバーマスが言っていることは極めて平易なことなんです。何でこんなに科学技術が進んで識字率が高くなっているのにみんなつまんないことを信じちゃうの？　それを一言で言うと、順応の気構えというものがあるからだと。現代人は、ある情報について、一つ一つ検証していけば、全部検証する基礎的な学力、別の言い方をすれば、論理関連を追う能力はある。しかし、検証すべき情報が厖大であると、一つ一つ自分で検証していたのでは疲れてしまうでしょう。そうなると、とりあえず識者が言っていることは事実として受け止める。自分自身はひっかかって理解できなくても、誰かが説得してくれるだろう、という気構えができるんです。この順応の気構えによって受動的になってしまう。だから、テレビを観ると順応の気構えがついてくる（笑）。ワイドショーの有識者のコメンテーターが説明してくれることはとりあえず確かだろうと受け入れる。これが怖いんです。そして、順応の気構えとテクネー（技術）が結びつくと、もっとひどい世の中になる。

　私がこの出版不況の中で、今、一番危惧を抱いているのは血液型占い本の流行です。血液型占いが爆発的ミリオンセラーを記録するなんて、あってはならない話なんです。血液型と性格を結びつける議論がウソであるということは、これはほぼ論証されています。それにもかかわらず、定期的に血液型占いの本が出てくるんですね。しかも今、アメリカ、中国、韓国でも出版されているんです。しかし、ヨーロッパには出てこない。やはりヨーロッパは血液型と性格を結びつけると、すぐナチズムとイコールだと見なされるから。

（立花隆・佐藤優『ぼくらの頭脳の鍛え方』　文春新書）

　ということは、「識者」が「ニセ科学」を正しいといえば、現代人は「順応の気構え」ができているから、「ニセ科学」を信じてしまうということですよね。だから、その「識者」がどういう「識者」であるかということが問題になるはずですね。

　つまり、これ、もちろん佐藤優は自分のことをしゃべっているんですよね？　先の彼の発言をここでちょっといい換えてみましょうか？

《何でこんなに科学技術が進んで識字率が高くなっているのにみんな、最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』なんていう、いいかげんでたらめな「ニセ翻訳」が「読みやすい」なんてつまんないことを信じちゃうの？　それを一言で言うと、順応の気構えというものがあるからだと。現代人は、ある情報について、一つ一つ検証していけば、全部検証する基礎的な学力、別の言い方をすれば、論理関連を追う能力はある。しかし、検証すべき情報が厖大であると、一つ一つ自分で検証していたのでは疲れてしまうでしょう。そうなると、とりあえずこの私（＝佐藤優）や沼野充義や村上春樹などの識者が言っていることは事実として受け止める。自分自身はひっかかって理解できなくても、誰かが説得してくれるだろう、という気構えができるんです。この順応の気構えによって受動的になってしまう。これが怖いんです。そして、順応の気構えとテクネー（技術）が結びつくと、もっとひどい世の中になる。というわけで、私（＝佐藤優）はいよいよテクネーを磨くことに励んで、もっともっとひどい世のなかをつくっていきますよ。》

　やれやれ。

　それでも、私は佐藤優の引いたハーバーマスの理屈に刺激されてこういいましょう。

たぶん、ふつうのひとたちは、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』なんかどうでもいいんですよ。翻訳を含めてその実物に当たる気持ちなんか全然ないんです。それよりも、彼らが欲しているのは、「古典名作」というブランドとしての『カラマーゾフの兄弟』であり、「世界の文豪」としての「ドストエフスキー」でしかなく、自分の代わりに読んでくれる「識者」の「解説」だけをありがたがって聞いていれば、それで『カラマーゾフの兄弟』を読んだつもりになれるし、「ドストエフスキー」を知ったつもりになれるんです。それだけで満足なんですよ。その「識者」がどんな最先端でもかまわないんです。「ドストエフスキー研究の権威」なんていうレッテルをＮＨＫなんかの大きいメディアが保証してくれていれば。つまり、ふつうのひとたちは、その実質がどうであろうが、ただもうそう呼ばれているものに対しての「順応の気構え」ができているわけです。佐藤優はそこにつけ込みます。彼の見下すふつうのひとたちには「地上のパン」だけが大切です。だから、ふつうのひとたちは、自分は今後も『カラマーゾフの兄弟』を読まないだろうけれども、「ドストエフスキー研究の権威」の話を聞くことはやぶさかじゃないよ、ということなんですね。何だか高尚なものに触れたなあ、という錯覚だけで十分なんですよ。「ああ、亀山郁夫先生がまたしてもテレヴィでお話しになっている！」なんてふうに感激してしまう。こんなことだから、佐藤優がいいたい放題できるんです。そうして大きいメディア――信念や検証能力の欠如した――がその彼を重用するんですね。やれやれ。騙されるひとたちのどれだけ多いことか。こういうひとたちが増殖し、真面目な読者がついつい彼らに影響を受けてしまうんです。それを私は危惧します。

しかし、私は佐藤優を買い被りすぎたかもしれません。

というのも、右の文章を書いた後、私は自分の勤める書店で先月（二〇一〇年一月）刊の朝日文庫『ナショナリズムという迷宮』（佐藤優・魚住昭）をちょっと読んでみたんですね。扉にはこうありました。

本書は二〇〇六年十二月、朝日新聞社より刊行されたものに加筆・修正したものです。

本文中の肩書、名称等は、原則として刊行当時のままです。

（佐藤優・魚住昭『ナショナリズムという迷宮』　朝日文庫）

それから目次となり、いよいよ本文が始まります。まずは、佐藤優による「まえがき」なんですね。その最初の二行（これだけで一段落の全体です。この後、一行開けて次の段落（六行）――ちょうどこれで最初の一ページになります――が来るので、この段落は非常に目立ちます）を引用します。私はこれを読んで目が点になりましたよ。

私には人生の転換点で決定的な影響を与えた人が数人いる。そのうちの一人が魚住昭さんだ。

（同）

？？？？　これは、本当に書いてあるままに読めばいいんですか？　これは私の引用入力ミスなんかじゃありません。本当にそう書かれているんです。いや、佐藤優ほどの人物なら、右に書かれているそのままのことをいうのかもしれない、と真面目に思いましたよ。でも、つづく文章を読んでいると、そうではないことがわかります。たとえば、こういう文章があります。

私は魚住さんの手法に、かつてロシアで私が深く影響を受けた二人と共通の要素を感じたので、この人と話を続けると私の中にあるナショナリズム、国家に対する混沌とした知識を整理することができると感じ、できるだけ頻繁に飲みに行くようにした。魚住さんとの出会いがなければ、私は書斎に引きこもり、社会に再び出て行くという選択をしなかったと思う。従って、本を書くことも、論考を発表することもなかったと思う。

（同）

「私には人生の転換点で決定的な影響を与えた人が数人いる」じゃなくて、「私には人生の転換点で決定的な影響を与えてくれた人が数人いる」とか「私には人生の転換点で決定的な影響を受けた人が数人いる」というふうに書くべき内容の文章じゃないですか。

やれやれ、です。

こんな文章を許した編集者の程度も知れますね。

私はつまらない揚げ足取りをやっているんでしょうか？　それにしても、この本の実質的な最初の一文なんですよ。親本刊行から約三年間、文庫化に至っても、この文章は放置されたままのようです。誰も何もいわなかったんでしょうね。つまり、これを読んで、何もいわないような読者しか、佐藤優にはついていないんです。それはそうでしょう。最初からこんな文を読まされて、「？？？？」と思ったまともな読者は不愉快になって、もう本を閉じてしまうでしょうから。

（8）

さて、「ある空漠たる恐怖に捕えられ」――です。

私はここで大西巨人の『神聖喜劇』から長い引用をします。その前にちょっとだけ説明（そしてまた引用）しておきますが、この作品の主人公＝語り手である東堂太郎は、軍隊の初年兵教育のはじめに経験したある出来事において上級者に「なぜお前はこれをしなかったのか」と問われ、「知らなかったからだ」と答えるんですが、上級者はその返事を認めないんです。下級者は上級者に対して、「知らなかった」とか「教えられていない」などと返答してはならない。下級者のすべき返答は、ただ「忘れました」だけだ。責任は上級者でなく、下級者にある。なぜ「忘れました」と返事しないのか、というわけです。

……私が「忘れました」を言いさえすれば、これはまずそれで済むにちがいなかろう。これもまた、ここでの、現にあり、将来にも予想せられる、数数の愚劣、非合理の一つに過ぎない事柄ではないか。これに限ってこだわらねばならぬ、なんの理由が、どんな必要が私にあろうか。一匹の犬、犬になれ、この虚無主義者め。それでここは無事に済む。無事に。……だが、違う、これは無条件に不条理ではないか。……虚無主義者に、犬に、条理と不条理の区別があろうか。バカげた、無意味なもがきを止めて、一声吠えろ。それがいい。――私は、「忘れました」と口に出すのを私自身に許すことができなかった。顔中の皮膚が白壁色に乾上がるような気持ちで、しかし私は相手の目元をまっすぐに見つめ、一語一語を、明瞭に落着いて、発音した。

「東堂は、それを、知らないのであります。東堂たちは、そのことを、まだ教えられていません。」

（――それが当日私が思ったより以上の事故であり、そのような言明は現場の誰しもの想像を超えていたろうことを、のちのち私は知ったのであるが、その朝も）、言い終わった私は、私の躰が俎板に載ったと感じた。四人の偽証者を、私は必ずしも憎みもさげすみもしなかった。午前半ばの光の中で進行しているこの些事が、あるいは私の人生の一つの象徴なのではあるまいか。

（大西巨人『神聖喜劇』光文社文庫）

そうして、右を踏まえて次の文章を読んでみてください。

――私は、「法律ヲ知ラザルヲ以テ罪ヲ犯ス意ナシト為スコトヲ得ズ。」という『刑法』条項との関連において、「知りません」禁止、「忘れました」

強制という不文律の成立事情を推理し、私なりの一定結論を出した。それとともに私は、もう一つ別の推論をも行なっていた。この推論の基礎に私が置いたのは、これも刑法学上の「責任阻却」という考え方であった。というよりも、この場合には、主として「責任阻却」という術語のみを私が利用したのである。――「責任阻却」とは、違法行為者も特定事由の下では（その責任が阻却せられて）刑法的非難を加えられることがない、「責任なければ刑罰なし」というような意味である。……あの不文法または慣習法を支えているのは、下級者にたいして上級者の責任は必ず常に阻却せられていなければならない、という論理ではないのか。……もしも上級者が下級者の「知りません」を容認するならば、下級者にたいする上級者の知らしめなかった責任がそこに姿を現わすであろう。しかし、「忘れました」は、ひとえに下級者の非、下級者の責任であって、そこには下級者にたいする上級者の責任（上級者の非）は出て来ないのである。言い換えれば、それは、上級者は下級者の責任をほしいままに追求することができる。しかし下級者は上級者の責任を微塵も問うことができない、というような思想であろう。……この（下級者にたいする）上級者責任阻却あるいは上級者無責任という思想の端的・惰性的な日常化が、「知りません」禁止、「忘れました」強制の慣習ではあるまいか。

　このように私は私の推理もしくは想像を進めたのであった。――もとより各級軍人の責任は、たとえば『軍隊内務書』ないし『戦陣訓』においても力説強調せられてはいる。それは、あるいは「職務ノ存スル所責任自ラ之ニ伴フ。各官宜シク其ノ職責ノ存スル所ニ鑑ミ全力ヲ傾注シテ之ガ遂行ニ勉ムベシ。」のごときであり、あるいは「任務は神聖なり。責任は極めて重し。一業一務忽（ゆるが）せにせず、心魂を傾注して一切の手段を尽くし、之が達成に遺憾なきを期すべし。」のごときである。とはいえ、この責任とは、詮ずるところ、上から下にたいして追及せられるそれのみを内容としているのであって、上が下に負う（下から上にたいして問われる）それを決して意味しないのであろう。……しかし下級者Zの上級者Yも、そのまた上級者Xにとっては下級者である。Zにたいしてその責任は阻却せられていても、そのYはXによってほしいままに責任を追求せられねばならない（このXは、Zの「忘れました」についても、そのZにしっかり覚え込ませなかったYの責任を追求するであろう）。そしてXとそのまた上級者Wとの関係も、同断なのである。かくて下級者にたいして上級者の責任が必ず常に阻却せられるべきことを根本性格とするこの長大な角錐状階級系統（Wからさらに上へむかってV、U、T、S、R、Q、P、……）の絶頂には、「朕は汝等軍人の大元帥なるぞ」の唯一者天皇が、見出される。

　ここに考え至って、私は、ある空漠たる恐怖に捕えられたのであった（芥川龍之介の「理想的兵卒は苟くも上官の命令には絶対服従しなければならぬ。絶対に服従することは絶対に責任を負はぬことである。即ち理想的兵卒はまづ無責任を好まなければならぬ。」〔『侏儒の言葉』〕という「警句」なんかは、やはり気楽な才走りでなければならない。）――この最上級者天皇には、下級者だけが存在して、上級者は全然存在しないから、その責任は、必ず常に完全無際限に阻却せられている。この頭首天皇は、絶対無責任である。軍事の一切は、この絶対無責任者、何者にも責任を負うことがなく何者からも責任を追求せられることがない一人物に発する。しかも下級者にたいして各級軍人のすべてが責任を阻却せられている。……かくて最下級者Zにとっては、その直接上級者Yが、絶対無責任者天皇同然の存在であり、その間接上級者Rならびに間接上級者Q、P、O、N、M、L、……が、絶対無責任者天皇同然の存在でなければならない。なるほど最上級者および各上級者は全下級者の責任をほしいままに追求し得るにしても、さりながら上級者の絶対無責任（に起源スル軍事百般）にたいして下級者が語の真意における責任を主体的に自覚し遂行することは、本来的・本質的には不可能事ないし不必要事であろう。……このことは、同時に次ぎのようなことをも意味する。上からの命令どおりに事柄が行なわれて、それにもかかわらず否定的な結果が出

現する、というごとき場合に、その責任の客観的所在は、主体的責任の自覚不可能ないし不必要なZからYへ、おなじくYからXへ、おなじくYからWへ、おなじくWからVへ、……と順送りに遡ってたずね求められるよりほかはなく、その上へ上への追跡があげくの果てに行き当たるのは、またしても天皇なのである。しかるにその統帥大権者が、完全無際限に責任を阻却せられている以上、ここで責任は、最終的に雲散霧消し、その所在は永遠に突き止められることがない（あるいはその元来の不存在が、突き止められる）。……それならば、「世世天皇の統率し給ふ所にぞある」「わが国の軍隊」とは、累々たる無責任の体系、厖大な責任不存在の機構ということになろう。

（同）

（9）

私はいっておきますが、テレヴィだとかラジオだとか新聞だとか雑誌だとか、そんなものをあんまり無条件に――「権威」として――ありがたがるのはもうやめましょうよ。これを私がいいます。まさかこの人生で自分がテレヴィだとかラジオだとか新聞だとか雑誌だとかに出るだなんてことがあると思いもしないでいて、あるときから――そうしていまでも散発的に――取材依頼を受ける羽目になってしまった私がいいます。そんなのはどうってことないんですよ。朝日新聞の「ひと」欄に載ることがすごいことですか？　いいえ。新聞のテレヴィ番組欄に自分の名前が載っているのを見るのがいい気分ですか？　いいえ。読売新聞の一面に自分の名前を見るのがいい気分ですか？　いいえ。毎日新聞の読書欄に自分の名前が出るのはどうですか？　いいえ。日本経済新聞は？　いいえ。雑誌「ダ・ヴィンチ」で自分が「伝説」呼ばわりされるのがいい気分ですか？　いいえ。「週刊文春」は？　いいえ。ＮＨＫ、ＴＢＳ、フジテレビ、テレビ朝日、テレビ東京などなどは？　いいえ。テレヴィやラジオの生放送のスタジオの雰囲気って、さぞかし素敵なんじゃないだろうか？　いいえ。その他いろいろ。いいえ。いいえ。いいえ。

いいですか？　私は自慢しているのじゃなくて、それらがどうってことない、といっているんです。いいですか？　あなたがテレヴィだの雑誌だの新聞だのの取材を受けたって、あなたはただいつも考えていることをいうことしかできないし、それが当然だし、また、そうすべきなんですよ。よそ行きの身なりをする必要なんか全然ありません。というか、あなたはそれら媒体に合わせてはなりません。

私はあなたに私の「権威」を自慢しているのじゃなくて、あなたが「権威」と受け取りかねないものを全然「権威」じゃない、といっているんです。

しかし、この点、最先端＝亀山郁夫はそれを「権威」だとしか考えることができないし、しかも、それを真に受けること・それに乗っかることしかできないんです。そうして、彼は、メディアに露出すればするほど、自分の最先端ぶりをさらすことになるんです。対して、私はむしろ、メディアからの取材の経験を重ねるごとに自分の「責任」の方を考え込むようになったと思います。私は「権威」なんかになっちゃいけないと考えたでしょう。このことを理解してもらうのは、もしかすると、ふつうのひとたちにはとんでもなく難しいことなんでしょうか？　たいていのひとには私が自分の「権威」を誇り、「自慢」しているとしか受け止めてもらえないんでしょうか？

私は、自分が以前ドストエフスキーの『おかしな人間の夢』を紹介したときに、カート・ヴォネガットの『ホーカス・ポーカス』（浅倉久志訳　早川文庫）から長々と引用したことを思い出します。この小説のなかに「トラルファマドールの長老の議定書」という（小説内）小説が出てきて、語り手がそれを読むというくだり。

それは何兆光年もの長さを持つ、知的エネルギー線の物語だった。彼らは、寿命の限られた自己増殖力のある生物を、全宇宙にばらまきたがっていた。そこで、そのうちの何本か、つまり、題名にある長老たちが、

トラルファマドールという惑星のそばで交錯して会議をひらいた。なぜ長老たちが生物を蔓延させることを名案と思ったのか、作者は説明していない。むりもないと思う。わたしだって、それを支持する強力な理由は思いつけない。わたしから見ると、あらゆる居住可能惑星に生物を居住させたがるのは、あらゆる人間に水虫をうつしたがるのとおなじである。

その会議で、長老たちの意見は一致した。宇宙空間の膨大な距離を生物が旅する上でのただ1つの実用的な方法は、極微で耐久力のある植物や動物が、彼らの惑星にはねかえった流星にヒッチハイクすることだ。

しかし、そんな旅をして生き残れるほど強靭な細菌は、まだどこにも進化していなかった。当時の細菌の生活はのんきなものだった。坊っちゃん育ちの集まりだった。化学的にいえば、彼らが伝染したどんな生き物も、チキン・スープのように安全だったのだ。

この会議がおこなわれた時期、すでに地球には人間がいたが、彼らは細菌がその中で泳ぎたわむれるほっかほかのスープにすぎなかった。しかし、人間は超特大の脳を持ち、中の何人かは話をすることができた。読み書きさえできるものがいた！　そこで長老たちは人間に狙いを定め、彼らの脳が細菌のための恐怖の生存テストを発明できるかどうかを検討した。

長老たちは人間の中に、宇宙規模の化学的邪悪さの可能性を見いだした。そして、人間は長老たちを失望させなかった。

（カート・ヴォネガット『ホーカス・ポーカス』　浅倉久志訳　早川文庫）

というのは、その細菌を強靭にするために、化学的邪悪さの極みといえるスープ――「恐怖の生存テスト」――で育てるということなんですね。スープが邪悪であればあるほど、そこで生きなくてはならない細菌も強靭になっていきます。これ、理屈としては、「悪魔」がイワンを「ダイヤモンド」として磨くのと同じです。

そうして、長老たちの策略によって、地球の人間たちはどんどん邪悪になっていきます。

そこで、地球の人間は、宇宙の創造者であるお方からじきじきに店をぶんどれという指図を受けたとかんちがいした。しかし、人間たちのもたもたしたやりかたを見て、長老たちはじれったくなり、彼らの頭の中に、自分たちこそ宇宙へばらまかれる予定の生物であるという考えを吹きこんだ。

ちなみに、長老たちは、会合点のすぐそばにあるトラルファマドール星のヒューマノイドたちを感化するのを、とっくにあきらめていた。トラルファマドール星人にはユーモアの感覚があったので、自分たちが頭のおかしいでかぶつとはいわないまでも、ずいぶん大きなハンデを背負ったでかぶつであることを知っていた。長老たちが何キロボルトかのプライドで彼らの脳みそを元気づけようとしても、それにはひっかからなかった。彼らが宇宙の栄光であり、くらべるもののない壮大な規模でほかの惑星に植民する運命をになっているという考えが頭に浮かぶと、みんなで大笑いした。

（同）

さて、

しかし、地球の人びとはユーモアがないために、その発想をすんなり受けいれてしまった。

長老たちから見ると、地球の人びとは、どれほどばかばかしい話でも、自分たちへのお世辞がはいっていればうのみにする傾向があるように思

えた。その点をたしかめるため、長老たちはある実験をした。この全宇宙が、彼らそっくりなある大きな雄の動物によって創造されたというアイデアを、地球人の頭に吹きこんだのだ。

ここの人びとは、この作り話にコロリとだまされた！

長老たちが地球人に目をつけたもう1つの理由は、彼らが自分と異なった外見を持ち、異なったしゃべりかたをする地球人を恐れ、憎むことだった。彼らは、いわゆる〝下等動物〟の生活だけでなく、おたがいの生活をも地獄に変えていた。

長老たちは、最大の王座にすわった創造主が、われわれ同様、よそものを嫌っているから、あらゆる手段を使ってよそものを絶滅すればそのお方のお気にいりになれる、とわれわれに思いこませた。

この考えは地球で大ヒットした。

それからほどなく、われわれは宇宙最強の猛毒を作りだし、地球の大気や水や表土を悪臭でみたしはじめた。この作家が匿名なのが残念だが、原文を引用すると――

「何億兆もの細菌が、このマスタードの辛さに閉口して、死んだり、増殖できなくなったりした」

しかし、地球のほとんどすべての生物が死に絶えても、少数の細菌だけは生き残り、むしろ隆盛をきわめた。そして、ほかのあらゆる生物が姿を消して、この惑星が月とおなじく不毛の地になったとき、その細菌たちは文字どおり破壊不能の胞子として冬眠状態にはいり、まぐれ当たりでつぎの流星が衝突してくるまでの期間を待ちつづけることになった。かくして、ついに宇宙旅行はまさしく実行可能になったのである。

（同）

まあ、何もかも「やれやれ」です。

（10）

さて、「順応の気構え」のできたふつうのひとたちにとっては、この最先端＝亀山郁夫問題が単に「表面的な（つまり、些細な）誤訳」問題としか受け止められていないんですね。彼らは、個々の誤訳さえ正されれば、それでいいというくらいにしか思っていないんです。誤訳の箇所だけ示してもらえば、「読みやすい訳」の方がいいから、というわけです（しかし、最先端＝亀山郁夫の訳文を「読みやすい」なんて思ってしまうひとは、そもそも日本語感覚がおかしいんですけれどね。でも、こういうひとたちが大多数なんでしょう。だから、最先端なんかに騙される）。

この「読みやすい」というのが曲者なんです。「誤りが多数あろうとも、読みやすければそれでよい」というひとたちは、結局のところ、「作品に自分を合わせる」のでなく、「作品を自分に合わせる」ということしかできないわけです。つまり、「作品」というものがそもそもどういうものなのかということがわからないんです。また、「読みやすい」ということが本来どういうことなのかということもわからない。反対に、これがわかるひとには、「こころなきみにも」（http://d.hatena.ne.jp/yumetiyo/）で萩原俊治が繰り返し――幾重にも――指摘していること、つまり、原文の段落を勝手に分割して改行を施した最先端＝亀山郁夫の行為がどれほどひどいことかがわかるはずです。

最先端＝亀山郁夫訳を「読みやすい」といってしまえるひとたちには、そもそも文章というものがどういうものであるかがわかっていないんです。読み書きの苦手なひとたちです。

（11）

またも、おさらいです。

この一連の文章の最初で、私は光文社文芸編集部編集長駒井稔を「大馬鹿者」といい、こう書いたんでした。

それとも、彼はこう考えているんでしょうか？

読者なんてどうせ馬鹿だから、誤訳だらけの新訳であろうが、彼らが喜んでいるんなら、それでいいんだよ。そもそも、彼らが喜んでいるというのが、彼らの馬鹿さ加減を大いに明かしているじゃないか。だから、こんなときに大真面目に正しさを振りかざして抗議してくる輩こそ、野暮なんだよ。もともと商売にもならない「古典」なんかにいまこれだけ光が当たってきているのは、誤訳だらけとはいえ、うち（＝光文社）の商売のおかげじゃないか。正しさなんかにこだわっていた日には、いつまでたっても「古典」なんかに陽は当たらないんだよ。これまでの正しい訳が望んでも得られなかったヒットがこうして実現しているじゃないか。肝心なのは、「新しさ」ということ、その売り込みのしかたなんだよ。これまでの翻訳は、正しさに拘泥していたからこそ、（誤解にすぎないにせよ）古くさくて読みにくいということで、読者に敬遠されていたんだよ。新訳は、実際には読みにくさが倍増しているかもしれないけれど、新しくて読みやすいという評判が立ちさえすれば、どうせきちんと本なんか読めない馬鹿な読者連中は、その評判だけで「なるほど読みやすい」と信じ込んでしまうんだよ。まったく、評判だけで十分なんだよ、あいつらに喜んでもらうためには。実質なんかどうでもいいんだよ。ああ、もちろん、正しい訳の方が実は読みやすいはずだし、翻訳の質も高いだろうけれど、商売にはならないんだね。商売になるっていうのは、馬鹿を喜ばす・馬鹿に自分が喜んでいるって思わせることなんだよ。つまり、これが読者に合わせた翻訳っていうことさ。

これは、あまりにひどい想像でしょうか？

（二〇〇八年六月十九日）

いやいや、この通りでしたとも。右の文章を書いて、ほぼ一年半がたちましたけれど、まったくこの通りでした。「あまりにひどい想像でしょうか？」なんて遠慮していた自分が馬鹿に思えます。

その私は、もっと以前に、こうも書いていたんでした。

……小説作品というのは「なにが描かれているか」より「どのように描かれているか」が大事だということです。これを説明するのは厄介で、これが厄介だということがそもそも問題なんですが、最大の障害は――私はだいぶ手加減していいますけれど――「どのように描かれているか」を通して「なにが描かれているか」を読まなくてはならないのに、「なにが」だけしか読まない・読めないひとの多すぎることです。その「なにが」を支えているのが「どのように」だというのに。そういう読者にだけ照準を合わせて「なにが」だけを提示しているにすぎない自称「作品」がどれだけ売れているかを考えるとくらくらします。私が疑うのは、単に「なにが」だけしか提示していないものを読むときに、多くの読者が勝手に作家の非力を、いかにもありがちなイメージで――すぐにわかる、わかって安心できる、すでに自分のなかにある安手なあれ・それを当てはめながら――補ってやっているのではないか、最近の傾向でいえば、読んで泣こうとして、泣く方向にねじまげて読むから、だめなものでも泣かずにはいないということがあるのではないか、ということですね。しかし、ちゃんとした作品、「どのように」のきちんとできている作品はもっと自立したものであるはずです。泣くことが目的の読者のごまかしに手伝ってもらう必要など全然ありません。

しっかりした「どのように」がともなってはじめて可能になる「なにが」

の表現ということを考えてほしいんです。つまり、読者がいまだ知らないなにか、名前をつけようと考えたこともないなにか、自分のすでにもっている（そしてすぐに取り出せる）どの観念にも落とし込むことのできないなにか、それが、作品の「どのように」に支えられてのみ、その作品一回きりの「なにが」として立ち上がってくるということがあるはずなんです。そういうことの実現こそがほんものの作家の仕事じゃないでしょうか？　そして、そういう作品を読むことこそがほんとうの読書なのでは？

（「わからないときにすぐにわかろうとしないで、わからないという場所に……」〈『カンバセイション・ピース』（保坂和志　新潮文庫）〉解説）

つまり、「ふつうのひとたち」＝「『どのように描かれているか』を通して『なにが描かれているか』を読まなくてはならないのに、『なにが』だけしか読まない・読めないひと」たちということになりますね。世のなかに「ベストセラー」というものを成立させてしまうひとたちです。

いいですか？　世のなかの「ベストセラー」というものも、「権威」をありがたがるひとたち――自分の読む本を自分で選ぶことのできないひとたち――がつくりあげています。そのひとたちにはとてつもない「永遠の悩み」があるんですよ。これです。

その悩みとは《誰の前にひれ伏すべきか？》ということにほかならない。自由の身でありつづけることになった人間にとって、ひれ伏すべき対象を一刻も早く探しだすことくらい、絶え間ない厄介な苦労はないからな。しかも人間は、もはや議論の余地なく無条件に、すべての人間がいっせいにひれ伏すことに同意するような、そんな相手にひれ伏すことを求めている。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

そうして、「権威」をありがたがるひとたち――自分の読む本を自分ひとりで選ぶことのできないひとたち――に向かって、「権威」とされているテレヴィだのラジオだの新聞だの雑誌だののマスメディアのひとたちがこうしゃべります。彼らは次の引用における「天上のパンのために地上のパンを黙殺することのできない何百万、何百億という人間たち」の味方だと主張するんです。

お前は彼らに天上のパンを約束した。だが、もう一度くりかえしておくが、かよわい、永遠に汚れた、永遠に卑しい人間種族の目から見て、天上のパンを地上のパンと比較できるだろうか？　かりに天上のパンのために何千、何万の人間がお前のあとに従うとしても、天上のパンのために地上のパンを黙殺することのできない何百万、何百億という人間たちは、いったいどうなる？　それとも、お前にとって大切なのは、わずか何万人の偉大な力強い人間たちで、残りのかよわい、しかしお前を愛している何百万の、いや、海岸の砂粒のように数知れない人間たちは、偉大な力強い人たちの材料として役立てば、それでいいと言うのか？　いや、われわれにとっては、かよわい人間も大切なのだ。

（同）

世のなかの「ベストセラー」について考えるとき、結局必ず右の視点をはずすことはできないんですね。

また、これも引いておきましょう。

ここで私が、「成功」についてなら経験で、ささやかな経験で物が言えると言い添えても、少々自惚れているなどと思わないでいただきたい！　私は成功を、数ある人生体験のひとつと見ている、そして、成功は成功した者をかなり曖昧な形で性格づけることも知っている。ありていに定

義すると、成功とは、この男は馬鹿者たちさえ味方にしたかったのだ、ということを意味している……

（トーマス・マン『非政治的人間の考察』　森川俊夫訳　新潮社）

私は以前に「ベストセラー」というのは「蔑称」だといいました。つまり、「ベストセラー」をつくりあげているのは「《誰の前にひれ伏すべきか?》」に頭を悩ますひとたち、「天上のパンのために地上のパンを黙殺することのできない何百万、何百億という人間たち」であり、「馬鹿者たち」だということです。そうして、このことに触れるのをためらうひとたちがいます。「それをいっちゃ、おしまいよ」というひとたちですね。「それをいえば、この私が他人を見下す傲慢な人間ということになってしまう」と恐れるひとたちもいるでしょうし、また、その構造の上で商売をしているひとたち ―― たとえば、出版社社員とか書店員（私だ！）ですね。やれやれ。

（12）

ここで、この問題のまたべつの側面。

「権威」とされているテレヴィだのラジオだの新聞だの雑誌だののマスメディアにはまだまだ大きい影響力があるにせよ、実は、その力は確実に低下してきてもいます。インターネットが登場したからです。

松沢呉一 ―― この一連の記述のなかでも登場してもらった ―― が新著『クズが世界を豊かにする』で、こう書いています。

なにも誰もがここまでやらなきゃいけないわけじゃないですが、インターネットの登場で「少数派は意見を言う場がない」なんて不平は、もう成立しない社会になってきていることだけは間違いない。「お前が自分で書けばいいじゃん。投稿すればいいじゃん。誰もとめないよ」で終わっちゃう。でも、インターネットを前にしながら、その発想の転換がまだできていない人が多いんだと思えます。

今まではメディアというものを一部の人たちが独占していたために、不平を言うことができました。文句だけ言っていればよかったんだから、楽な社会だったんですよ。これからは、「何もしない自分」が問われるんですから、厳しい社会がまっていますよ。ワクワクします（笑）。

（松沢呉一『クズが世界を豊かにする』　ポット出版）

マスメディアに抗して、「正しいなら、一人でも行く」というひとたちが新しいメディアをつくりだしていきつつあるということです。もちろん、インターネットというメディアがありながらも、せっかくのその場ですら「各人の弱みや卑劣さをたがいに薄ぎたなくいたわり合って衆を恃むような消極的連帯」をしか望まないひとたちが圧倒的多数であることに変わりはないんですが、それでも発言したいひとはそうすることができるんですし、それをきちんと受け止めてくれるひとも必ずいます。そのとき、しかし、実際に発言する ―― 私の考えているレヴェルの発言ということですが ―― ひとたちは、おそらく「そうせざるをえない」んだと私は思うんです。

（13）

昨年十二月に放映されたテレヴィ・ドキュメンタリー「ベストセラー解剖学〜「1Q84」とベストセラーの変遷〜」（wowow）の最後は、番組内でそれまでに発言していた十数名に対する「あなたにとってベストセラーとは?」への各人の回答でした。

高頭佐和子（ＮＰＯ本屋大賞実行委員会理事）
書店にとっては、ベストセラーは、やっぱり売り場を活性化する力……

鶴巻謙介（サンクチュアリ出版代表）
当然、出版社にとっても憧れ……

清田義昭（出版ニュース社代表）
時代を映す鏡だと……

横里隆（月刊書評誌「ダ・ヴィンチ」編集長）
この本だけは読んでおかないとまずいだろう、というものだけがベストセラーになると思うんですよね。

後藤裕二（新潮新書編集長）
どういう形にせよ、考えるきっかけをくれる本……

山田真哉（公認会計士）
単にたくさん消費された本ていう……

石黒謙吾（著述家・編集者）
結果がよければすべてよし、っていうひとにとっては最高の商品だと思う。

木下和郎（書店員）＝私
ベストセラーは、ない方がいいものなんですけれどね……

岩本暢人（集英社翻訳書籍編集部）
普段、本買わないひとが買ってくんないと、ベストセラー、絶対できませんから。

湊かなえ（小説家）
その時代の流れに乗ったものだと思います。

大森望（評論家）
宝くじ、そんな感じですよね。

瀧川修（集英社文庫編集部編集長）
ずうっと売れつづけるとか読まれつづけるっていう方がベストセラーと呼ぶにふさわしいんじゃないかな。

堀口智絵（スターツ出版編集部）
作りたいですよね。難しいですけれども。

鈴木力（新潮社村上春樹編集担当）
ベストセラーを作ることはできない。ただベストセラーは生まれていく。

さて、放映に先立つ九月に、この番組制作会社から取材を申し込まれたとき、私はてっきりベストセラー礼讃の番組だろうと思っていたんですが、違いました。番組は、あくまで社会現象としてのベストセラーというものを扱っていて、しかもその疑わしさ・いかがわしさまでを表現していました。もちろん、もっともっといろんなことに踏み込む余地はあっただろうとは思いますけれども。

取材後、私はこう書いたんでした。

さて、先月私はあるテレヴィ番組の取材を受けました。この十年間の「ベストセラー」をいろんな切り口で採りあげるという企画です。書店

員の手書きＰＯＰから生まれた「ベストセラー」ということで『白い犬とワルツを』が扱われるわけです。私はここしばらくそういった取材を基本的には断わってきていましたが、新潮社がこの九月にあの作品を絶版にするつもりだった（これは土壇場で回避されました）のを知っていたので、愛着のある作品のために何かしておこうと思ったんです。絶版の件がなければ、受けなかった。それでも、私は番組制作側に、自分が「ベストセラー」というものに否定的であること、『白い犬とワルツを』の総部数（一八八万部）をよくないと思っていることを理解してほしいといい、さらに条件をつけました。最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』も採りあげるのか、と訊ね、まず最先端＝亀山郁夫自身への取材のないことを確認、さらに（数日かかって）、光文社編集部への取材のないことをも確認しました。もし、そのどちらかでもがあったら、私は取材を受けない、なぜなら「あんなでたらめなものと一緒に並びたくないから」と告げたんです。ただ、それでも「新訳ブーム」という切り口からは、最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』の書名だけは挙げざるをえないので、それは了承してほしいといわれました。

（二〇〇九年十一月十一日）

ところが、驚いたことに、この番組は最先端＝亀山郁夫の「誤訳問題」を採り上げたんですね（この部分のいわば章題は「新訳古典の功罪」）。「書名だけは挙げざるをえない」どころではなく、むしろ逆に斬り込んだといえるのかもしれません。

ここでいっておきますが、番組制作スタッフは私に取材を申し込んだ時点で「誤訳問題」を知らなかったんですよ。ということは、彼らに「誤訳問題」の存在を教えたのは私ということになるようです。そうして、彼らは私への取材の後に「誤訳問題」を扱うことにしたようなんですね。私の後に取材した面々にこの「誤訳問題」をどう思うかと訊いていたらしい。それならば、再度私のところに来てもよかったのじゃないか――『白い犬とワルツを』よりもこちらの方を私は思いっきりしゃべったはずなんです――、と私は思うんですが、そういうことにはなりませんでした。

ともあれ、いわゆるマスメディアで、最先端＝亀山郁夫の「誤訳問題」が取り上げられたのは「週刊新潮」以来なんじゃないでしょうか。この点について私はこの番組を評価します。しかし、……。

番組のナレーションを引用します。ここでの「旧訳」は原卓也訳です。

新しく翻訳され直すことで、突然ベストセラーとなった古典もある。新訳『カラマーゾフの兄弟』は、今年五巻合わせて百万部以上売れた。読みづらかった古典が、ゼロ年代のいまだから、ゼロ年代の日本語でよみがえった。

たとえば……

旧訳版での一節――「ドミートリイが哄笑した」は、新訳版では「ドミートリーはからからと笑った」。「そりゃ文学的な剽窃ってもんだよ、アリョーシャ」は「それは盗作だよ、アリョーシャ」という具合に。

もっとも、新訳はあまりにも原作から離れ過ぎているのではないか、という批判もある。つまり、「誤訳」ではないか、と。

やれやれ、またこれだ。最先端＝亀山郁夫の「誤訳問題」がまたしてもこういう表面的・表層的なレヴェルでしか理解されていません。もっとも「文学的な剽窃」と原卓也が訳したものを「盗作」としか訳さなかった最先端＝亀山郁夫は誤っているんじゃないでしょうかね？「文学的な」に当たる語が原文にはあるんじゃないんですか？　あります（これはだいぶ以前に、例のロシア文学に詳しい友人に訊ねたことがあります）。そんなものは「ゼロ年代の読者」には不要だというんでしょうか？　日本語として「文学的な剽窃」と「盗作」は同じものではありません。

最先端＝亀山郁夫の「誤訳問題」というのは、この番組スタッフの考えてい

るようなレヴェルのものじゃないんですよ。そんな「表面的・表層的な誤訳」なんかじゃない。「表面的・表層的な誤訳」は「深層的・構造的に作品読解がまったくできていないこと」から生じている表面的・表層的な結果にすぎません。この問題を理解するためには「結果」でなく「原因」の方を見なければならないんですよ。そういうことが彼らにはまったくわかっていません。

そんなことで番組を作ってしまうから、番組視聴者はこの「誤訳問題」を理解することができません。それどころか、新訳に軍配を上げてしまうことになりかねません。

つづいて番組は、この問題に関して三名の発言を紹介します。

横里隆（月刊書評誌「ダ・ヴィンチ」編集長）

すごく苦かった薬をですね、もう青汁みたいなものだったのを、少し飲みやすくしてくれたっていう――。『カラマーゾフの兄弟』を読もう、って思うひとたちの数は多くないんですけど、でも、それをかき集めたら、これだけいるっていう――のがあのヒットだったと思うんですよね。

大森望（評論家）

ま、もちろん誤訳云々の問題はあるんですけど、百人翻訳者がいれば、百通りの翻訳ができるので、好きな翻訳を読めばいいわけですよ。だから、昔の翻訳がいいと思うひとは昔の翻訳を読めばいいわけだから、べつに文句をいう必要はないと思うんですよね。

石黒謙吾（著述家・編集者）

本気のものは、読むのはしんどい。だから新訳みたいなふうに出されたりすると、「あ、私でも手が届くかな」という感じが出るんだと思うんです。正統的なるものを、少しライトにしてくれると、欲求を満たすんだと思いますよ。

右のうち、横里隆と石黒謙吾の発言について、私は「まあ、こんなものは放っておけ」と思います。「はいはい」って感じです。「いつまでも無責任に他人事のように適当なコメントをしゃべっていろ」と思います。こういうものわかりのいいひとたちがこんなことをいいつづけるのがいまの出版業界の主流なんですね。絶望的状況です。まあ、「放っておけ」です。

それよりも、私が怒りを覚えたのは大森望の発言です。

大森望は、この番組では「評論家」という肩書きですが、彼は実は「翻訳家」でもあります。私はかつて彼の訳したコニー・ウィリスの三作『ドゥームズデイ・ブック』、『航路』、『リメイク』を読みました。特に『ドゥームズデイ・ブック』を読んだことは忘れられません。あれほど楽しい読書もなかったようにすら思っています。その翻訳者がこれほどまでに無責任なコメントを口にするとは！

もう一度引用。

> ま、もちろん誤訳云々の問題はあるんですけど、百人翻訳者がいれば、百通りの翻訳ができるので、好きな翻訳を読めばいいわけですよ。だから、昔の翻訳がいいと思うひとは昔の翻訳を読めばいいわけだから、べつに文句をいう必要はないと思うんですよね。

想像ですが、「ま、もちろん誤訳云々の問題はあるんですけど」という大森望は、おそらく木下豊房のサイトを知っているでしょう。なぜ私がそう思うかというと、だいぶ昔のことになりますが、私が自分の勤める書店のホームページ内掲示板に書いた『航路』（大森望訳）の短い感想を、彼が自分のホームページに引用していたことがあったからです。当時私は彼がそんなところ――一書店の細々とした掲示板――までチェックしていることに驚いたんですね。彼はまめにネットの情報を読み込んでいるひとです。だから、彼が「誤訳云々の問題はある」というからには、少なくとも木下豊房らの批判は読んでいるはずだ、と私は思

っています。

にもかかわらず、大森望には「誤訳云々の問題」の本質がまったくわかっていません。つまり、彼もまたこの問題が「表面的・表層的な誤訳」でしかないと思っているわけです。

いいですか？　最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』は、「百人翻訳者がいれば、百通りの翻訳ができる」なんていう大森望の認識のレヴェルをはるかに超える――彼の想定外の――駄翻訳なんですよ。翻訳につきものの――大森望がよく知っているであろう――「誤訳」と最先端＝亀山郁夫の「誤訳」とはけっして同列に考えることはできません。なぜかというと、最先端＝亀山郁夫には全然『カラマーゾフの兄弟』が読めていないからですよ。というか、最先端＝亀山郁夫には『カラマーゾフの兄弟』だけでなく、あらゆる文学作品を読む能力がないんです。めちゃくちゃなんですよ。また、これはいわゆる「専門家」による「作品解釈」の問題でもありません。最先端＝亀山郁夫の読み取りはふつうの「作品解釈」以前の低レヴェルでしかない。中学生だって最先端＝亀山郁夫よりはるかに高レヴェルの読書ができますね。それほどの最先端に翻訳などできるわけがないんです。しかし、まさかここまでひどい翻訳があるだなんてことを大森望はきっと理解していません。理解していたなら、「好きな翻訳を読めばいいわけですよ。だから、昔の翻訳がいいと思うひとは昔の翻訳を読めばいいわけだから、べつに文句をいう必要はないと思うんですよね」なんていう無責任きわまりない発言のできるわけがない。

それに、大森望は「昔の翻訳がいいと思うひとは昔の翻訳を読めばいいわけだから、べつに文句をいう必要はない」というとき、原作者と作品とその読者とのことをまるっきり思いやっていません。最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』がドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』の偽物であり、これが現在の・将来の読者にとってどれだけの害をもたらすことになるかを理解していません。というか、大森望には『カラマーゾフの兄弟』なんかそもそもどうだっていいんですよ。全然関心なんかありません。だから、いいかげんな認識のまま、「世のなかそんなもん」みたいな斜に構えた発言をするんです。

それにしても、大森望の最悪な点はこの問題に取り合わないということに尽きます。これが最もいけない。なぜなら、彼は問題を放棄してしまうので、もはや肯定も否定もできないし、そのどちらかの撤回もできないからです。

これをまた引用しておきます。

> 躓きの最低の（人間的にいえば、最も無邪気な）形態は、キリストに関する全問題を未決定なままに残しておいてこう判断するものである、――「私はこの点に関してあえていかなる判断をも下さない、私は信仰もしないが、判断を下すこともしない。」これが躓きの一形態であることを大抵の人は看過している。
>
> （キェルケゴール『死に至る病』　斎藤信治訳　岩波文庫）

大森望はそういうふつうのひとたちの「先導者」の役割を担っているはずです。自分の発言の影響力とか責任とかいうことをもっと考えなくてはならないひとのはずです。村上春樹、柴田元幸同様。

というわけで、「ベストセラー解剖学～「1Q84」とベストセラーの変遷～」は最先端＝亀山郁夫の「誤訳問題」をまったく理解していませんでした。ちょっと触れてみて、三名のいいかげんな発言でまとめて終わりでした。

（14）

朝日新聞（二〇一〇年一月三十一日）の「本の舞台裏」という記事にこうありました。

名著の新訳はプロに

ヘーゲルの『精神現象学』（長谷川宏訳）、ドストエフスキーの『罪と罰』（亀山郁夫訳）など、ここ10年ほど古典名著の新訳出版が活況を呈している。そんな中、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（中山元訳）も今月、日経ＢＰ社から新訳が出た。

同社は08年にミルトン・フリードマンの『資本主義と自由』（村井章子訳）の新訳を皮切りに「日経ＢＰクラシックス」シリーズをスタートさせ、本書で7タイトル目。ユニークなのはいずれも「20世紀の古典」と位置づけ、訳者に学者以外の「プロの翻訳家」を起用している点だ。

「世界的な名著、翻訳が難解なために多くの人に読み継がれない。これをなんとかしたい。グローバリズムの時代、資本主義を再考するのに最適な本を新訳で出すことに意味があると思いました」と、同社の編集委員、黒沢正俊さん（56）。

学術系名著が一般読者に敬遠される原因は訳者にあるとも。「学者の翻訳は学問的な正確さを期すが、日本語としてはいかがか。今日の翻訳技術は格段に進歩しています」

そこで、ベテラン翻訳家の山岡洋一さんらをアドバイザーに迎え、シリーズの訳者を厳選。専門領域にも詳しく、複数言語に通じ、なによりも日本語として伝わる翻訳ができる在野の実力者を選んだという。

本書の訳者、中山元さんはカント、ニーチェ、ルソーらの名著を近年立て続けに新訳している。黒沢さんは「中山さんは全共闘世代の翻訳家で思想家。本書への思いは深く、原著の注も重視し、訳者注にも力を注ぎました。ぜひ岩波文庫などと比べてほしい。読みやすさには自信がある」と話している。

（衣田彰）

また、これだ。私は以前こう書きました。

つい先日も読売新聞が「魅了する格調・名調子　海外文学　旧訳本相次ぎ刊行」と題する記事（二〇〇九年一月十四日　山内則史）において、書き出しの「『カラマーゾフの兄弟』で火がついた海外文学の新訳ブーム」から亀山郁夫訳をヨイショしているんですね。記者の山内則史は自分の書いていることの意味がわかっているのか？　彼は亀山訳を読んだのか？　また、あの「解題」を読んだのか？　読んだうえで共感しつつ記事を書いたのか？　疑いを抱きつつ、それを脇へ置いて書いたのか？　いずれにせよ、ひどいです。

（二〇〇九年一月三十日）

こうやって新聞記事の枕に最先端＝亀山郁夫の名を書くことの責任を衣田彰も理解していません。最先端＝亀山郁夫のでたらめ・いいかげん・めちゃくちゃ・素っ頓狂・無能・無理解・無責任・最低なことをよく知っている私には、彼の文章は滑稽で愚劣きわまりない悲惨なものとしてしか読めません。こんなふうです。

《ヘーゲルの『精神現象学』（長谷川宏訳）、ドストエフスキーの『罪と罰』（でたらめ・低レヴェル・いいかげん・めちゃくちゃな最先端＝亀山郁夫訳）など、ここ10年ほど古典名著の新訳出版が、でたらめ・いいかげん・めちゃくちゃ・素っ頓狂・無能・無理解・無責任・最低なものを含むどころか、そうしたものを先頭・代表格にまでして、いかがわしい活況を呈している。そんな中、マックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』（中山元訳）も今月、日経ＢＰ社から新訳が出た。》

いかがですか？

長谷川宏訳『精神現象学』や中山元訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』の実質を私は知りませんが、もしそれらがきちんとした翻訳なの

だとすれば、最先端＝亀山郁夫なんかと一緒に並べられてはいい迷惑でしょう。そのことを衣田彰はわかっていません。それとも、衣田彰もまた、「古典名著の新訳出版が活況を呈している」という「事実」・「現象」だけを扱った――なるほど間違いではないかもしれません――ということですか？　その実質の意味を問わずに？　そんなことで記事を書いていいんですか？　なぜなら、衣田彰のこの記事の読者は長谷川宏や中山元の仕事に対すると同じように最先端＝亀山郁夫の訳業に好感を持つことになるでしょうから。衣田彰は自分の文章にどう責任を取るつもりなのか？　責任など感じていないのじゃないのか？

それに、編集者である黒沢正俊。「学者の翻訳は学問的な正確さを期すが、日本語としてはいかがか。今日の翻訳技術は格段に進歩しています」という、ふつうの読者がここしばらくもううんざりするほど聞かされてきたこの決まり文句はどうにかならないんですかね？　こうやって一般論として翻訳を語るとき、それが大方正しいとしても、最先端＝亀山郁夫の仕事のように、でたらめ・いいかげん・めちゃくちゃ・素っ頓狂・無能・無理解・無責任・最低のものが、ちゃっかりそこに入り込み、大きな顔をしていることを考えれば、もっと慎重なものいいをしなくてはならないでしょう。また、黒沢正俊は必ず最先端＝亀山郁夫の実質を知っておくべきです。そうでないと、自分までとんでもない翻訳を出版することになりかねません。その恐ろしさをよく知っておくべきなんです。そのうえで、こういうべきなんです。「学者の翻訳は学問的な正確さを期すが、日本語としてはいかがか。今日の翻訳技術は格段に進歩しています。ただし、粗悪な類似品にはご注意ください。たとえば、光文社古典新訳文庫『カラマーゾフの兄弟』なんかと一緒にしないでください。あんなでたらめなものとは違いますから。この点、私どもの出版する新訳の品質は保証いたします」とかなんとか。

もう一度衣田彰に戻りますが、彼は黒沢正俊の発言がたしかにその通りであったにせよ、それを安易にまとめて記事にしてしまうこと――ということは、取材のしかたにも結ぶはず――の恐ろしさをよく知らねばなりません。彼も最先端＝亀山郁夫の実質を知っておかねばなりません。もし、知れば、右のような記事は怖くて書けないはずです。そうして、知らずに書くのは無責任です。その無責任が後々どんな結果をもたらすかを彼はよく想像できなければなりません。

私は繰り返します。

「じゃ、誰だ、誰なんだ、結局のところ、最先端＝亀山郁夫の仕事が素晴らしいなんていっているのは？」

そうして、みんながこういうんです。

「私じゃない！」

「《私じゃない！》私じゃないとは、どういうことだ？」

（15）

雑誌「文学界」（文藝春秋）二月号での「新春特別対談」は、題して「カタストロフィ後の文学――世界と対峙する長篇小説」。対談したのは高村薫と最先端＝亀山郁夫。このふたりが対談したのは二度め（最初が毎日新聞社主催で二〇〇九年七月。この二度めが同年十一月）。

私は高村薫の作品を――『レディ・ジョーカー』の最初の数十ページを除いて――ひとつも読んだことがありません。彼女の作家としての実質を私は知りません。しかし、一書店員として、彼女が世のなかの読者にとってどんな位置にいるか――ある程度「硬派」の読者に受け入れられ、彼女の社会的発言も重んじられている・社会的信用を得ている――ということは何となく知っているとも思います。そうして、私は、その位置にいる彼女が、でたらめ・いいかげん・めちゃくちゃ・素っ頓狂・無能・無理解・無責任・最低の最先端＝亀山郁夫な

どと対談――二度までも！――したことを嘆きます。これは高村薫の恥になるでしょう。

反対に、得をしたのは最先端＝亀山郁夫です。この対談の全体を読んで私の感じたのは、世のなかで信頼に足る作家として評価されている高村薫と、その高村薫の威を借りて、コバンザメのように彼女に貼りついて、自分のでたらめ・いいかげん・めちゃくちゃ・素っ頓狂・無能・無理解・無責任・最低ぶりをごまかし、正当化しようとしている凡庸以下どころか最低の大学教授（！）との噛み合わないやりとり――ですね。しかし、おそらくふつうの読者にはそれがわかりません。というわけで、まあ、高村薫を高く評価する読者、あるいは、彼女の世評の高さを知るひとの多くは最先端＝亀山郁夫に好感を持ってしまったでしょう。繰り返しますが、この対談は高村薫の恥であり、罪でもあります。

高村　もともと先生はなぜ、そのアヴァンギャルドに惹かれたんでしょうか？

亀山　大学ではドストエフスキーを四年間読み、『悪霊』について拙い論文を書きました。しかし、いわゆる連合赤軍事件と比較される革命結社内部の内ゲバ抗争といったテーマにはまったく関心がわかず、ひたすらスタヴローギンに惹かれていました。人の死を冷然と認め、なおかつ、他者に対する死の願望を自分の手を下すことなく実現していく彼の奇怪さです。そのスタヴローギンが自分のどこかにもいる、という何かしら直観めいたものがあって、そのなかでドストエフスキーにおける「悪の系譜」といったタイトルの卒論を書いていたわけです。しかし結果的には、スタヴローギンと同期する経験だけが残って、経験そのものを客観的に意味づける批評的な文章は一行たりともかけませんでした。完全に劣等生でしたし、文学者として全然才能が欠けているのかもしれない、と思いつめ、しばらく劣等感に苦しみました。

（「文学界」二〇〇九年二月号）

学生時代に「しばらく劣等感に苦し」んだ最先端＝亀山郁夫は、「しばらく」だけじゃなくて、ずっとその「劣等感」を大事にしなくてはならなかったんですよ。そして、もちろん、このいまもそれに苦しんでいなくてはなりません。最先端＝亀山郁夫はいまも「完全な劣等生」のままであり、「文学者として全然才能が欠けて」います。

「いわゆる連合赤軍事件と比較される革命結社内部の内ゲバ抗争といったテーマ」などを通じて作品を読むことができなかったこと――これは最先端＝亀山郁夫が「批評的な文章」を書けなかったことと何の関係もありません。おそらく、当時の彼の周囲にそのテーマで論文を書いた優秀な（と最先端＝亀山郁夫には思えた）学生がいて、担当教授がそちらを評価し、最先端＝亀山郁夫を評価しなかったということなんでしょう。最先端＝亀山郁夫はそういう観点で論文を書けなかった自分ということを口にしているわけです。しかし、最先端＝亀山郁夫はもうそこで大きな勘違いをしています。彼が評価されなかったのは、彼の読解能力があまりにも低レヴェルだったことに尽きるはずだからです。それを棚に上げて、自分には「スタヴローギンと同期する経験だけが残って」なんて理屈でごまかし、自分を正視しようとしていないんですね。そうとしか思えません。

また、スタヴローギンについて「人の死を冷然と認め、なおかつ、他者に対する死の願望を自分の手を下すことなく実現していく彼の奇怪さ」といいますが、スタヴローギンはそういう人物ですか？　私は違うと思いますよ。しかし、私がその理由を説明するのは、いずれべつの機会、べつの場所で、です。

ともあれ、私がここで問題にするのは、最先端＝亀山郁夫の読書の、ある傾向――つまり「亀山郁夫的読書」――についてです。「スタヴローギンと同期する経験だけが残って」――ここに問題があります。スタヴローギンがスタヴローギンたりうるのは、『悪霊』という作品の全体があってこそなんです。『悪霊』という作品があり、そこにステパン氏やシャートフやキリーロフやピョートル

らがいる――その全体が動的に表現されてこそ、スタヴローギンはスタヴローギンたりうるんです。作品全体を考えずにスタヴローギンだけを――いわば「悪のヒーロー」として――採り上げる読書は小さい・せこい・貧しい・薄っぺらな読書ですよ。だいぶ前にもいいましたが、亀山郁夫の読書はドストエフスキーが非常に動的に描いた作品を、そのまま動的にとらえることができていないんです。なんだか平べったい止まったものとしてしか読めていないんです。それは真のスタヴローギンを損なう読書だ、と私はいいます。「人の死を冷然と認め、なおかつ、他者に対する死の願望を自分の手を下すことなく実現していく彼の奇怪さ」ですって？　最先端＝亀山郁夫にはスタヴローギンの苦悩がまったくわかっていません。

右の発言と重なることを、最先端＝亀山郁夫はべつの場所で次のように語っています。

> 私は大学の卒業論文で『悪霊』を取り上げましたが、そこでは「使嗾（そそのかすこと）」というテーマを追究しました。大学時代の私は本当に世間知らずで、世の中の仕組みやお金のことなど何もわからない、子どものようなものでした。本を読み、ただただ主人公に同化することだけが、自分にとっての文学だった。文学とは、テクストを読むことだけでなく、それをしっかりと受け止め、言語化する営みであることを知らなかったのです。
>
> 自分にとって大学四年間のドストエフスキー体験は、作品全体を経験し、同化することでした。しかし、三島由紀夫の『仮面の告白』やいろいろな研究論文を読み、「自ら書くことのだいじさ」を《発見》したのは、ようやく大学四年生になってからです。文学においては、読むことによる経験はどうでもよくて、まず言語化することが肝要である、うまく言語化できる人が優れた文学者、とされると、そのときは考えたわけです。
>
> 経験の深さこそ文学であると思っていた私にとっては、その発見は大きなショックでした。自分には書くべき批評的なタームも、道具もない。私はけっきょく、原始人のようにドストエフスキーの洞穴の中に身を潜めているに過ぎないと思ったのです。
>
> しかし、振り子はまた元に振れることになります。幸いなことに、一九八四年のあの体験によって、文学はやはり「頭ではなく、ハートなんだ」という発見に、もういちど連れ戻された。身を焼き尽さんばかりの恐怖感、自分で自分を疑いだすという崩壊感覚……、そこからが、私の第二の文学人生の始まりでした。
>
> 今では、自信をもって、こう言うことができます。恐らくどんな作家も芸術家も、経験することの深みを持っていなければ、絶対に伸びることはない。どれほど優れたレトリックがあっても、読者はすぐに底の浅さをかぎつけてしまう。経験の重さ、深さに見合う言葉の力を持つことができた瞬間に、はじめて作家になるのだ、と。当時はそれが漠然としたかたちでわかったのです。そして「わかった」ことの自分なりの最初の試みが、先ほど申し上げた『ドストエフスキー　父殺しの文学』になります。
>
> （亀山郁夫「ドストエフスキー『罪と罰』の謎」『カフェ古典新訳文庫Vol.1』所収　光文社古典新訳文庫）

で、その最先端＝亀山郁夫はその後、『カラマーゾフの兄弟』を翻訳したわけですが、そこに至っても、アリョーシャの「あなたじゃない」が「イワンは法的な意味において裁かれることはない、だから、そう苦しまないでほしい、という意味にとらえることができるように思えます」だの、ペレズヴォンはジューチカとはべつの犬だだの、「地獄と地獄の火について。神秘的な考察」がフェラポント神父の傲慢さへの非難だのとしか読めていないんですよ。何が「今では、自信をもって、こう言うことができます」ですか。

右の最先端＝亀山郁夫の発言の何が誤りであるか、先と重なりますが、いっておきます。

まず、「本を読み、ただただ主人公に同化することだけが、自分にとっての文学」というのがそもそもの誤り。私はもう何度もいっていますが、読者は「作品に自分を合わせる」ことが大事です。「作品に」ですよ。「主人公に」じゃありません。最先端＝亀山郁夫流の「主人公に同化すること」は、実は「作品を自分に合わせる」ことに結びます。彼がスタヴローギンに惹かれたのなら、「どのように」スタヴローギンが描かれているからなのか、をじっくりと考えなければならなかったんです。また、おそらく最先端＝亀山郁夫の「主人公に同化する」というのは、たとえばスタヴローギンの誤った読み取りを根拠として、自分の誤った行為――何か卑劣な行為――を正当化するということでもあるのじゃないですか？それは、スタヴローギンの誤用・濫用・悪用・乱用であるはずです。

次に、「文学とは、テクストを読むことだけでなく、それをしっかりと受け止め、言語化する営みである」ですが、それはすぐ後でこういい換えられていますね。「文学においては、読むことによる経験はどうでもよくて、まず言語化することが肝要である、うまく言語化できる人が優れた文学者、とされる」。このいい換えられた方が本音でしょう。ひどいものです。「読むことによる経験」が「どうでもいい」わけはないんです。「読むことによる経験」はとても大事です。「読むことによる経験」が「どうでもいい」ということになるのは、その読書が「亀山郁夫的読書」である場合だけです。このことを、いまだに最先端＝亀山郁夫は理解していません。彼の「ただただ主人公に同化することだけが、自分にとっての文学だった」という、その「同化」ですが、一般的な読書でいえば、それは間違いではないでしょう。そういう読書を私は認めます。しかし、その「同化」がどういう「同化」であるかが問題なんです。つまり、そのときでも、読者のその「同化」は彼が作品に奉仕する＝作品に自分を合わせる形での「同化」でなければなりません。絶対に作品を自分に合わせるような読書であってはならないんです。だから、私は最先端＝亀山郁夫の「同化」だけが間違った「同化」なのだといいましょう。最先端＝亀山郁夫的「同化」は誤りです。つまり、それが「最先端＝亀山郁夫的読書」であるわけです。

また、「まず言語化することが肝要である、うまく言語化できる人が優れた文学者、とされる」の「とされる」がいかにも最先端らしい表現です。結局、学生時代からいまに至るまで、最先端＝亀山郁夫は他人からの評価にしか頭が働かないんですね。彼は長年、どうしたら他人から高く評価されるか――どうしたら褒められ、テレヴィなどに出演でき、尊敬され、金儲けができるか――ということしか考えてこなかったんでしょう。だから、現在も高村薫などにコバンザメ的に擦り寄ることが大事なんです。そのとき、ドストエフスキーなんかただの商売道具です。

ここで、またべつの作家のことばを引用しておきます。

今日は芥川賞・直木賞発表の日だ。新聞・テレビは芥川賞と直木賞しか文学賞がないかのような騒ぎ方をするが、それはいいとしよう。芥川賞と直木賞すら騒がれなくなってしまったら文学業界はいよいよ苦しい。それに芥川賞・直木賞はたぶん（現存する）一番古い文学賞だから、それなりの敬意は払われてもいい。私だって高校生ぐらいのときは芥川賞と直木賞しか知らなかった。そして、「小説家になって芥川賞とる」なんて、単純なことを考えたものだ。

文学に関係のない人間がそう考えるのは問題ない、というか仕方ない。しかし文学の周辺で仕事をしている人たちが、「新人作家は芥川賞を目指して書く」というような言い方をするのはやめてほしい。私も新人の頃はインタビューのときに、「保坂さんも芥川賞を目指して書いていらっしゃるんですか？」と訊かれたり、受賞したらしたで、「芥川賞をとったら、もう目標がなくなってしまったんじゃないですか？」と訊かれたりしたものだ。質問者があまりに罪のない表情をしているから、いちいち「そうじゃない」とは言わなかったが、本当はそうじゃない。「××××を目指す」「目標は△△△△」という発想は、大学受験や高校受験の発想なのだ。

受験はそれをクリアすることが目標となり、しかも高校も大学もよっぽど怠けなければ卒業までスルスルいく。だから高校も大学も入学試験を突破することが最大の関門となるのだが、小説は全然そういう風ではない。芥川賞と直木賞は賞の性格か違うから話を前者に絞るが、芥川賞をとっても、次の小説がダメならそっぽを向かれる。賞の効用が少しはあるから、二、三作は辛抱してもらえるとしても、それ以上はつづかない。――というこの説明はわかりやすいが、肝心なのはそういうことではない。この説明で、評価が外からなされていることに気づいただろうか。

小説を書くことにおいて何より大事なのは、自分がどこまで納得できるか？　自分のイメージをどこまで達成できたか？　なのだ。新人が最初からそんな確固たるイメージなり基準なりを持つことは難しいと思うだろうが、キャリアとともにイメージや基準が変わるとしても、こういうものがない人に小説は書けない。小説家は七〇歳になっても書きつづけなければならない。三〇歳でデビューしたら四〇年以上、四〇歳でデビューしたって三〇年以上ある。外からの評価でふらふらしていたら、そんな長い年月書きつづけられない。

（保坂和志　日本経済新聞夕刊「プロムナード」　二〇一〇年一月十四日）

これが「作品に奉仕する」小説家のことばです。最先端＝亀山郁夫は保坂和志の爪の垢を煎じて飲んだらいいと思います。

亀山　ですから、高村さんの『晴子情歌』にかなり敏感に反応できたのもわけがあるんです。春子と彰之の母子関係に、何かいわく言いがたいエロティシズムを感じました。でもどうしてあそこまで高村さんに書けるのか、ほんとうに不思議な気もしました。

高村　ドストエフスキーがどうだったかは分かりませんが、少なくとも私自身は「欠如」の人間です。自分自身は何も持っていないんですよ。性格程度のものはもちろんありますけれど、それでも核と言えるほどのものではない。

亀山　なるほど。もし核があったとしたら、数十ページで終わる短篇しか書けないかもしれませんね。『太陽を曳く馬』の最後に、エディプス・コンプレックスの話が出てきますが、それがまさに巨大な物語として小説全体を貫いているのを感じます。福沢榮にしてもそうでしょう。作家というのは、ひょっとすると、大いなる空なる母なんでしょうか？

高村　自分では、本当に欠如だと思います。物書きとしてはそれでいいと思うんですが、人間としてこんなに空っぽでいいのかと思うぐらい空っぽです。言葉を探すというのは、一時的に言葉で自分を埋める行為でして、そうやって生きてきたし、これからも生きていくだろうとは思うんですが、自分自身は空っぽだという自覚があるものですから、こうやっていくら人間の物語を書いても、これは自分の血肉ではないという空虚感はいつもあります。小説家は人間のことを書くと言いながら、人間である自分自身とは永遠に別のところにいる。その空虚感を引き受ける者かもしれませんね。

亀山　でも、読者は自分自身の経験と物語とを照らし合わせながら読んでいきますよね。ですから、小説そのものが何か器になっていて、巫女的に高村さんが引き寄せているということもあるのでしょうね。

たしかに、小説的な想像力の在り方というのは、少なからず、外部を吸引する欠如といった形を前提としているのかもしれません。ドストエフスキーも、つねに同時代人の中からモデルを探しだしていました。『罪と罰』の主人公もそうですし、『白痴』もそうです。『悪霊』は、セルゲイ・ネチャーエフ、バクーニン。しかし、彼の小説世界そのものを成り立たせている一元的かつ根源的なエネルギーとは何か、と問われたら、そこは、欠如ではなく、幼児体験だと答えざるをえないところがあるんですね。

高村　そうしますと、スタヴローギンはドストエフスキーのどういうところから出てきたんですか？

亀山　自分の魂からつかみ出した、と彼は言っていますね。

高村　欠如ではない、何かの行き着いた形ですか。

亀山　根本的には幼児体験の反映だと思うし、その延長上にある癲癇も重要なファクターだと思います。そういえば、末永和哉も癲癇の病を病んでいますね。で、さらにそこにプラスされる何かがあるんだと思います。僕は作家自身が、現実に、何がしかの「踏み越え」を経験していると思います。つまり具体的な犯罪をです。一線を超える経験です。でなくてはとうてい書けません。そこで体験された一種の被害妄想に近い恐怖、それがスタヴローギンの根源的な部分を形づくっているような気がします。スタヴローギンはドストエフスキー自身ですし、最後の被害妄想に近い恐怖というのが、まさに彼の幼児体験そのものなんですね。今、ふと感じたのですが、世界を見つめるスタヴローギンの眼差しと、『太陽を曳く馬』の彰之の生き方には、どこか通低するものがあると思います。

（「文学界」二〇〇九年二月号）

ほら、「でも、読者は自分自身の経験と物語とを照らし合わせながら読んでいきますよね」ですって。来た、来た。

どうですか？　これほどまでに噛み合わない対談があるでしょうか？　一方の高村薫は作家（実作者）としての自分が「欠如」、「空っぽ」であり、自作の登場人物は作家自身とは関係がない、登場人物は創造されたものだ、といっているんです。他方、最先端＝亀山郁夫は、それを聞きながら、その意味をまったく理解せず、作品の登場人物があくまで作家自身の体験からしか出てこないとしかいっていないんです。これ、彼お得意の、でたらめな「自伝層」のことですよね。

僕は作家自身が、現実に、何がしかの「踏み越え」を経験していると思います。つまり具体的な犯罪をです。一線を超える経験です。でなくてはとうてい書けません。

（同）

ほらほら、これを思い出しますね。

では、この長老に果たして「偉大な罪人」と呼べるだけの試練はあったのだろうか。長老の残した「談話」は、むしろ長老の経験の欠落を暗示してはないいか。彼はどのような「穢れ」をまとうことにより、今の聖性の高みに到達することができたのか。

（亀山郁夫「解題」）

人間は大きな罪を経て、はじめてある世界に到達できるというゾシマ長老の考え方は、現代社会においてはとうてい受け入れがたい、ほとんど不可能に近い信念ではないだろうか。とりわけ競争のはげしい現代社会では、人は、少しでも罪を犯したら終わりであり、命とりとなり、脱落を迫られる。

（同）

そんな読みかたしかできない最先端につきあわされた高村薫の困惑はいかばかりだったでしょう。最先端＝亀山郁夫は、高村薫も「現実に、何がしかの「踏み越え」を経験している」というんですか？「つまり具体的な犯罪」、「一線を超える経験」を？　やれやれ。

高村　七月にお目にかかったときに、何に驚いたかといって、ドストエフスキーはもともと悪文で、どのようにも翻訳できるのだ、とお聞きしたことです。

亀山　ものすごく気分屋なんですね。癲癇症状の末期と分かるような文体が時々現れる。一文の中で同じ副詞を何度も用いる。全然筆が走っていないのがわかるんです。これはこれで一つの現実だと諦めをつけ、確信犯的に悪文を書き連ねているところがあるように思います。たとえ

ば、『カラマーゾフの兄弟』がそうですが、しかし書き終えた後で手直しというものをまったくしようとしていない。

ですから、米川正夫さんは見事な日本語にしたと思うし、原卓也先生は、逆にギスギスしたところを正直に訳している。私は、一応日本語として読みやすいスタイルをめざしました。理由はあります。私が中学二年のときに読んだ『罪と罰』で残ったものは何かといえば、文体ではなく経験そのものだったんですね。ですから、とにもかくにも読者にドストエフスキーを経験させよう、と考えました。難しい文体だろうが、いわゆる翻訳調だろうが、意識的につくられた文体だろうが、滑らかな文体だろうが、どうでもいい。見えてくるものは見えてくるだろうと思ったのです。

しかし、他方、僕自身、フォルマリズムの理論をずっと研究してきましたから、読みやすいスタイルの翻訳というのには少なからず抵抗があった。芸術の受容においては、そのプロセスが長引けば、長引くほど、困難であればあるほど、経験の密度が高まる、というのがフォルマリズムの理論です。詩的言語と呼ばれるものがその代表ですが、要するにツルツル読めてしまうようなものはダメだと言っているわけです。それをまさに裏切るような形で『カラマーゾフの兄弟』を訳したことで少し罪の意識はあるんです。自分のこれまでの研究に対する裏切りだという意識ですね（笑）。

高村　でも、読者が自由にドストエフスキーの訳を選べる日本は、贅沢ですよ。私が十代のころには米川さんの訳しかなかったので、私のドストエフスキーは米川さんのドストエフスキーということになりますけれども、今年初めて亀山先生のドストエフスキーを読ませていただいて、あらためて文体が小説体験そのものだということを痛感しました。私は昔から、文体こそが世界という読者だったようです。

（「文学界」二〇〇九年二月号）

さて、

高村　七月にお目にかかったときに、何に驚いたかといって、ドストエフスキーはもともと悪文で、どのようにも翻訳できるのだ、とお聞きしたことです。

（同）

まず、やれやれと思うのは、最先端＝亀山郁夫がまたしても「ドストエフスキーはもともと悪文で、どのようにも翻訳できるのだ」なんてことをしゃべっていたということについてです。また、高村薫も高村薫で、そんなことをまともに聞いていたのか？　と呆れます。そんなことがありうるなんて聞かされて、小説家――当然小説を実際に書いているひとですよね――としておかしいと思わなかったんですか？　まあ、だから「驚いた」ということなんでしょうが。それにしても無邪気すぎる。

で、おそらく最先端＝亀山郁夫はあわてて過去の自分の発言を取り繕うわけです。

亀山　ものすごく気分屋なんですね。癲癇症状の末期と分かるような文体が時々現れる。一文の中で同じ副詞を何度も用いる。全然筆が走っていないのがわかるんです。これはこれで一つの現実だと諦めをつけ、確信犯的に悪文を書き連ねているところがあるように思います。たとえば、『カラマーゾフの兄弟』がそうですが、しかし書き終えた後で手直しというものをまったくしようとしていない。

（同）

これは本当ですか？　本当なら、最先端＝亀山郁夫は『カラマーゾフの兄弟』のどの箇所とどの箇所と……がそうなのか、挙げてみるがいい。し

かも、いちいちについてどうして「癲癇症状の末期と分かる」・「全然筆が走っていないのがわかる」のかも述べるがいい。高村薫も「ほう、それはたとえばどこですか？」と訊いてみればよかったのに。

ところで、奇妙なことに、最先端＝亀山郁夫は、ドストエフスキーが「一文の中で同じ副詞を何度も用いる」ことについて「解題」ではこう書いていました。

物語の進行とともに、イワンの「そそのかし」に秘められるなぞめいた欲望が徐々に姿を現していく。ここで一つ、印象的な場面を紹介しておこう。二日目の夜、料理屋「都」でアリョーシャに「大審問官」の物語詩をきかせたあと、イワンは家の表でスメルジャコフに出会い、「明日の朝の出発」を告げた。家の広間で、迎えに出た父親をふりきるようにして二階の自室にこもった彼は、真夜中に階下の父親の様子を盗み聞きする。そこに、次のような説明が記される。「この『行為』を、彼はその後一生をとおして『けがらわしい』行為とよび、生涯をとおして一人ひそかに、心の奥で、自分の全人生でもっとも卑劣な行為とみなしつづけた」

同義的な副詞句が繰り返される同義反復的（トートロジカル）な文章だが、勢いはすばらしい。

（「解題」）

まさか最先端＝亀山郁夫は、自ら「勢いはすばらしい」と評しているこの文章が「癲癇症状の末期と分かる」・「全然筆が走っていないのがわかる」文章だっていうんじゃないですよね。

それに、

ですから、米川正夫さんは見事な日本語にしたと思うし、原卓也先生は、逆にギスギスしたところを正直に訳している。

（「文学界」二〇〇九年二月号）

これも私にはわかりません。米川正夫訳を私は読んでいませんが、原卓也の訳文についていえば、それのどこが「ギスギス」しているのか、さっぱりわかりません。最先端＝亀山郁夫は原卓也の訳文のどこか「ギスギス」しているのか、挙げてみるがいい。私には最先端＝亀山郁夫が自分の新訳を正当化するために過去の訳者たちの仕事を慇懃無礼に貶めているとしか思えません。

私は、一応日本語として読みやすいスタイルをめざしました。理由はあります。私が中学二年のときに読んだ『罪と罰』で残ったものは何かといえば、文体ではなく経験そのものだったんですね。ですから、とにもかくにも読者にドストエフスキーを経験させよう、と考えました。難しい文体だろうが、いわゆる翻訳調だろうが、意識的につくられた文体だろうが、滑らかな文体だろうが、どうでもいい。見えてくるものは見えてくるだろうと思ったのです。

（同）

最先端＝亀山郁夫の手にかかっては、読者には何も――他の翻訳者たちの仕事からは見えてくるものが見えてくるかもしれませんけれども――見えません。「私が中学二年のときに読んだ『罪と罰』で残ったものは何かといえば、文体ではなく経験そのものだったんですね。ですから……」って、もう最悪ですね。いいですか、もうここまで私は口が酸っぱくなるくらい繰り返しているんですけれど、作品というものは「文体」がすべてですよ。つまり、読者にとっては、そこに「何が描かれているか」よりも「どう描かれているか」がすべて――「どう描かれているか」によって「何が描かれているか」が生きてくる――なのだし、作者にとっては「何を描くか」よりも「どう描くか」がすべてなんですよ。それが「文体」です。「文体」とは「語り口調」――それは「文体」によって生じる表面的な結果にすぎません――なんかじゃないんです。このことを理解できないひとに文学のわかるはずがない。だから、このことをわかっているはず

の高村薫のこの発言を私はいったいどう理解したらいいんですかね？

今年初めて亀山先生のドストエフスキーを読ませていただいて、あらためて文体が小説体験そのものだということを痛感しました。私は昔から、文体こそが世界という読者だったようです。

（同）

――最低ですね。もっとも、彼女が「昔から、文体こそが世界という読者だったようです」ということで、最先端＝亀山郁夫の文体をひどいものだと認識したことを皮肉まじりにいったのなら、それは正しいんですけれど。しかし、そうじゃないんでしょう。高村薫、ひどいものだなあ。彼女の実作はともあれ、読書は最低ですね。いや、こんな読書のひとにどれだけの実作ができるんでしょうかねえ？　高村薫さん、反論があるなら、受けますよ。あなたがいまの発言を皮肉まじりにしたというのなら、全面的に謝りもしますよ。

亀山　それは根本的には、詩的言語を目指すか、日常言語を目指すか、という作者の選択なんですね。小説であっても詩的言語を志向するということは大いにあり得ます。高村さんの小説を読むと、本来ならば日常言語をめざすべきところが、それとは裏腹に、どこか詩的言語を志向しているところが見受けられるようです。

高村　そんなふうに指摘していただいたのは初めてです。でも、そうなのかもしれません。極端なことを言えば、私にとって小説はストーリーではない。文体でつくられる空間の手触りで、人間や社会や時代を表現できると考えている部分があるような気がします。なぜそうなのかは自分でも分からないのですが。でも、最初にすべての人の道が、散文か、詩的な言語かの二つに分かれてゆくんでしょうか。何が読者を分けるのでしょう。

亀山　自分が理想とするもののつくり方の問題なのでしょうね。『カラマーゾフの兄弟』の訳文のモデルに『照柿』のスタイルを採用できないかな、と考えたこともありますが、この濃密さでは、読者はついてこられないと感じました。

高村　ふつうの人は自分の理想を考えて小説を読むわけではないですけど。それでも小説に接する最初の一ページのところで、言語野が強く反応するか、聴覚野が強く反応するか、といった違いが出てくるのかもしれません。

亀山　あとは読み手の読解力という問題もあるでしょうね。つまり、総じて日本人の読解力は、崖から転げ落ちるように落ちていますよね。詩的言語を受け入れるには、それこそ強い精神的エネルギーが必要ですが、日本人はそのエネルギーが著しく退化していますからね。私は、根本的なところで、教養教育の一環として詩の教育を積極的に行わなくてはダメだと思っています。異質なもの同士がぶつかって火花を散らす想像力の世界に遊ぶ喜びを教えていかないと。

高村　やはりそこが問題ですね。

（同）

もう、やれやれ、なんですが、「『カラマーゾフの兄弟』の訳文のモデルに『照柿』のスタイルを採用できないかな、と考えたこともありますが、この濃密さでは、読者はついてこられないと感じました」などと話す最先端＝亀山郁夫は、訳文の「スタイル」＝「文体」が翻訳者である自分の自由がきくものだ、何とでも変えられる、と思っていたんですね。私はいいますが、まず最先端＝亀山郁夫ほどにも文章力のないひとにそんな「自由」はありません。そんなことより、翻訳者は原作に奉仕しなければならないひとなんですよ。真摯な翻訳者であるなら、原作が要請する「文体」でしか訳しようのあるはずがない。それを勝手にいじることができると考えた時点で、最先端＝亀山郁夫の最先端ぶりが見事に発揮されたわけです。最悪です。こんな最先端に翻訳なんかさせちゃ駄目なんだよ、と私は思います。

さて、右のつづきはこうでした。

亀山　でも、もう、とても大事なことを忘れてしまう人がどんどん増えて、圧倒的な数になりつつあるんですよ。古い世代が若い世代の人たちに不満をこぼすことはできないはずです。だって、インターネットを作りあげたのは、私たちの世代ですから。映像に一方的に負けていてはいけない。活字を通してのみ経験できる、果てしなく素晴らしい想像力の世界があることを教えなくてはならない。そう、子どもたちに童話を聞かせなくてはならない、と思うんです。活字文化の将来を思うと、すごく暗澹とした気持ちにはなります。でも、そこで諦めちゃいけないですね。

（同）

あのさあ――もう私は我慢の限界です――、亀山郁夫さんよ、誰も、お前みたいな最先端＝馬鹿＝低能にそんなことをいわれたくないんだよ！　お前こそ、「活字文化の将来」をめちゃくちゃにしている張本人じゃないか！　偉そうなことをいうんじゃないよ！「活字を通してのみ経験できる、果てしなく素晴らしい想像力の世界があること」を誰よりもわかっていないのはお前だろうが！「活字文化の将来を思うと、すごく暗澹とした気持ち」になるって？　いい加減にしろ！　お前は笑っているだけだろうが！　そうして、「そこで諦めちゃいけない」のは、この俺だよ！　何でこの俺がこんなことに巻き込まれなきゃならないんだよ！　お前のせいじゃないか！　好きでやってるとでも思うのか！　冗談じゃない！

――ごくごく控えめに、私の怒りのほんのわずか一部だけを――敢えて乱暴ないいかたをしてみるなら――破裂させてみましたが、それはさておき、もう一度高村薫です。

極端なことを言えば、私にとって小説はストーリーではない。文体でつくられる空間の手触りで、人間や社会や時代を表現できると考えている部分があるような気がします。なぜそうなのかは自分でも分からないのですが。

（同）

右の発言は正しく、高村薫が実作者としてちゃんとした姿勢でいることがわかります。なのに、なぜ彼女は同じ口でこんなことがいえたのでしょうか？

今年初めて亀山先生のドストエフスキーを読ませていただいて、あらためて文体が小説体験そのものだということを痛感しました。私は昔から、文体こそが世界という読者だったようです。

（同）

繰り返しますが、最悪です。繰り返しますが、彼女が最先端＝亀山郁夫に対する皮肉をいっているのなら、いいんですよ。でも、そうではない。「文体こそが世界という読者」が最先端＝亀山郁夫のでたらめをなぜ見抜くことができないのか？　私には、それがまったくわからないんです。

もう少し、つづけましょう。これもまた再引用ですが、

七月にお目にかかったときに、何に驚いたかといって、ドストエフスキーはもともと悪文で、どのようにも翻訳できるのだ、とお聞きしたことです。

（同）

なぜ高村薫は「驚いた」ままにしておいたんでしょうか？　なぜ「どのよう

にも翻訳できる」「悪文」によって書かれた小説などがありうると思ったんでしょうか？　なぜ「文体」について意識的な実作者が、そんなことはありえない、と思わなかったんでしょう？

また、最先端＝亀山郁夫の

私は、一応日本語として読みやすいスタイルをめざしました。理由はあります。私が中学二年のときに読んだ『罪と罰』で残ったものは何かといえば、文体ではなく経験そのものだったんですね。ですから、とにもかくにも読者にドストエフスキーを経験させよう、と考えました。難しい文体だろうが、いわゆる翻訳調だろうが、意識的につくられた文体だろうが、滑らかな文体だろうが、どうでもいい。見えてくるものは見えてくるだろうと思ったのです。

しかし、他方、僕自身、フォルマリズムの理論をずっと研究してきましたから、読みやすいスタイルの翻訳というのには少なからず抵抗がありました。芸術の受容においては、そのプロセスが長引けば、長引くほど、困難であればあるほど、経験の密度が高まる、というのがフォルマリズムの理論です。詩的言語と呼ばれるものがその代表ですが、要するにツルツル読めてしまうようなものはダメだと言っているわけです。それをまさに裏切るような形で『カラマーゾフの兄弟』を訳したことで少し罪の意識はあるんです。自分のこれまでの研究に対する裏切りだという意識ですね（笑）。

（同）

だの、

『カラマーゾフの兄弟』の訳文のモデルに『照柿』のスタイルを採用できないかな、と考えたこともありますが、この濃密さでは、読者はついてこられないと感じました。

（同）

――を聞いて、おかしいとか「なぜだ」とか思わなかったんでしょうか？

なぜ、高村薫は最先端＝亀山郁夫に対して、「あなたのおっしゃる「文体」は、私の考えている「文体」とは全然違うんですけれど、いったい、あなたには文学作品における「文体」というものがわかっているんですか？」といわなかったんでしょうか？　相手が「ドストエフスキー研究の権威」、「いまや押しも押されもせぬ亀山郁夫大先生だから」ですか？

ここで、べつの本から引用してみましょう。

藤原　生き延びるための情報収集をきちんとするために、これとこれとこれは絶対にしてください、ということは。

高村　まず、人の話をうのみにしない。人の話というのは、政治家、企業、メディアなどですが、うのみにしない。

それから、日々生きているなかで、直感的になんか変だと思うこと、違和感を覚えることについて、「なぜだ」と自問すること。どんなことでもいいんです。「なぜだ」も、いろんな「なぜだ」があって、人によって違うはずですが、違っていい。ともかく毎日のなかで、自分自身の体感や実感を信じて、「なぜだ」と問う。

（高村薫・藤原健『作家と新聞記者の対話　２００６―２００９』毎日新聞社）

また、

高村　ネットの時代には情報発信者はますます匿名化します。それだけに、どういう記事か、だけではなく、誰の記事か、誰が書いたのか、という情報は重要です。私たちは、あふれる情報の中からどれが信頼でき

るのかを判断しなければならない。その時の手掛かりの一つは主語、つまり「誰が」発信している情報なのかという点にあります。あの記者が書いた記事なら、あの論説委員が書いた社説なら信頼できるな、と。顔の見えない意見、情報は信頼されません。

（同）

さらにまた、

高村　自分の言葉、他人の言葉、世界の言葉を聞き、自分なりの世界像の中で自分を位置づける、という志を持ってほしい。言葉の体系から世界をとらえるということを拒否していたら、人類は滅んでしまう。それくらいの危機感が私にはあります。

（同）

そして、そして、

高村　先ほど生存戦略といいましたが、それは「だまされない」という意味も含みます。為政者にだまされない。詐欺師にだまされない。怪しいと見抜くには、相手の言っていることを自分の世界像の中に置いてみることです。その時に「おかしい」と思えばだまされない。人間、生きていくには「見抜く」ということが大事。

（同）

そうして、もう一度、これ。

でも、読者が自由にドストエフスキーの訳を選べる日本は、贅沢ですよ。私が十代のころには米川さんの訳しかなかったので、私のドストエフスキーは米川さんのドストエフスキーということになりますけれども、今年初めて亀山先生のドストエフスキーを読ませていただいて、あらためて文体が小説体験そのものだということを痛感しました。私は昔から、文体こそが世界という読者だったようです。

（「文学界」二〇〇九年二月号）

何ですか、これは？

高村薫さん、よく検討してみてください。そうして、あなたのすべきことは、まず毎日新聞紙上で最先端＝亀山郁夫批判をすることです。毎日新聞でそれをすることには非常に大きな意味があります。そうしてまた、「文学界」（文藝春秋）でも同じことをすべきです。そうすれば、同誌に連載されている佐藤優のこれ以上のでたらめを阻止することもできるでしょう。それができるほど、あなたは信頼されている小説家ではないでしょうか？

（16）

高村薫が感染し、村上春樹も、柴田元幸も、ロシア文学の学者たちも、さらには、出版社や新聞社やテレヴィ局などのマスメディアや、それからまた多くの読者や、もちろんこの私も感染している「ペスト」について――翻訳に不満がないわけではないですが――、再読するよい機会じゃないでしょうか？

「君は人間を銃殺するところを見たことはないだろうね？　いや、ないにきまっている。こいつは一般に招待に基づいて行われるし、見物はあらかじめ選んであるのだ。その結果として、君たちの知識は版画や書物の域にとどまるということになる。目隠し、処刑柱、それから遠くに幾人かの兵隊……。ところが、どうして、そんなもんじゃない！　君は知ってるかい――銃殺班は、それどころか、処刑者から一メートル五〇の

ところに並ぶんだぜ。処刑者が二歩前に出たら、銃口が胸にぶつかってくるくらいなんだぜ。そんな近距離から、銃手たちは心臓部めがけて射撃を集中するので、それがみんないっしょになって、しかも大きな弾丸（たま）だし、それこそ握り拳がはいるぐらいの穴がそこにできるんだぜ。まったく、君はそんなことを知りゃしない。そういう細かい点は誰も話そうとしないことだからだ。人々の安眠というやつは、ペスト患者にとっての生命以上に神聖なものなのだ。善良な人々の眠りを妨げてはならない。そんなことはよっぽど悪趣味でなければならないし、趣味のよさというものは物事を強調しないことにある――みんな誰でもそれを心得ているのだ。しかし僕は、そのとき以来、よく眠れたことがない。悪趣味だろうが、なんだろうが、いやな後味が口に残っていて、僕はいつまでも強調することをやめなかった。つまりそれを考えることをやめなかったのだ。

「そのとき僕は、その長い年月の間――しかも全精神をあげてまさにペストそのものと闘っていると信じていた間にも、少なくとも自分は、ついにペスト患者でなくなったことはなかったのだ、ということを悟った。僕は、自分が何千という人間の死に間接的に同意していたということ、不可避的にそういう死を引起すものであった行為や原理を善と認めることによって、その死を挑発さえもしていたということを知った。

……（中略）……

「それ以来、僕の考えは変らなかった。それからずいぶん長い間、僕は恥ずかしく思っていたものだ。たといきわめて間接的であったにしろ、また善意の意図からにせよ、今度は自分が殺害者の側にまわっていたということが、死ぬほど恥ずかしかった。時がたつにつれて、僕は単純にそう気がついたのだが、ほかの連中よりりっぱな人々でさえ、こんにちでは人を殺したり、あるいは殺させておいたりしないではいられないし、それというのが、そいつは彼らの生きている論理のなかに含まれることだからで、われわれは人を死なせる恐れなしにはこの世で身ぶり一つもなしえないのだ。まったく、僕は恥ずかしく思いつづけていたし、僕ははっきりそれを知った――われわれはみんなペストの中にいるのだ、と。

……（中略）……

「誰でもめいめい自分のうちにペストをもっているんだ。なぜかといえば、誰一人、まったくこの世に誰一人、その病毒を免れているものはないからだ。そうして、ひっきりなしに自分で警戒していなければ、ちょっとうっかりした瞬間に、ほかのものの顔に息を吹きかけて、病毒をくっつけちまうようなことになる。自然なものというのは、病菌なのだ。そのほかのもの――健康とか無傷とか、なんなら清浄といってもいいが、そういうものは意志の結果であり、しかもその意志は決してゆるめてはならないのだ。りっぱな人間、つまりほとんど誰にも病毒を感染させない人間とは、できるだけ気をゆるめない人間のことだ。しかも、そのためには、それこそよっぽどの意志と緊張をもって、決して気をゆるめないようにしていなければならんのだ。実際、リウー、ずいぶん疲れることだよ、ペスト患者であるということは。しかし、ペスト患者になるまいとすることは、まだもっと疲れることだ。つまりそのためなんだ、誰も彼も疲れた様子をしているのは。なにしろ、こんにちでは誰も彼も多少ペスト患者になっているのだから。しかしまたそのために、ペスト患者でなくなろうと欲する若干の人々は、死以外にはもう何ものも解放してくれないような極度の疲労を味わうのだ」

（カミュ『ペスト』宮崎嶺雄訳　新潮文庫）

まったく、何という疲労でしょう。「りっぱな人間」なんかとんでもないというこの私は、いったいどうしたらいいんでしょう？

（二〇一〇年三月十八日）

（17）

いやー、今日やっと買ったんだー。出たのは知ってたんだけどさー、「現代思想」四月号増刊「総特集＝ドストエフスキー」。亀山郁夫＋望月哲男の責任編集だよー。

それで、ちょっとだけ読んでみたんだけど、すごいぞー。

どうすごいかっていうと、そうだなー、じゃあ、ここでみんなにきくよ。

この日本語どうよ？

「あなたの前には、ほとんど越えがたい深い淵が立ちはだかっている」

もちろん、誰が書いたか、みんなにはわかるよね？　こんな日本語書くやつはひとりしかいないもんねー。

これさー、年末に文庫になるらしいけど、どう直ってるか、見ものだよね？　直さなかったら恥ずかしいし、直したって、もう他にもこんなのがたくさんあるんで、どうせ恥ずかしいから、いっそ出版を取り止めたらいいとあたしなんかは思うんだけれど、お金やうその名声のほしいひとは、そうもいかないんじゃないかなー？　わかんないけどね。

とりあえず、これだけいってみたかったんで、もっと詳しいことはこの後でかくよー。

（二〇一〇年三月二十日）

（18）

さて、「現代思想」四月号増刊「総特集＝ドストエフスキー」（青土社）のすごいところをちょっとだけ――しかし、長くなりそうな予感がして嫌なんですが――解説しますか。

目玉はやっぱり**最先端＝東京外国語大学学長＝亀山郁夫大先生**による、「チーホンの庵室で」（『悪霊』）の翻訳でしょう。いわゆる「スタヴローギンの告白」のところですね。でも、この翻訳、そんなに長いものじゃないですが、私は全部なんか読んじゃいません。なぜかというと、読めたものじゃないから。こんなものを律儀に全部読んでたら、こちらの頭がおかしくなってしまいます。それほどすごい。何といっても、**「あなたの前には、ほとんど越えがたい深い淵が立ちはだかっている」**――ですから。いったい、他の誰にこんな日本語が書けるでしょうか？　これが目に入ったときの私の頭のなかは、佐藤優の「私には人生の転換点で決定的な影響を与えた人が数人いる」を読んだときなんかの比ではなく、何かもう叫びだしたくなるような馬鹿ばかしさでいっぱいになりましたよ。いや、もうすでに私は口にしていましたけれど、あらためて断言します。**亀山郁夫こそは真の最先端＝馬鹿＝低能です**。これほどまでの馬鹿＝低能がほんとにいるんだなあ、って感心しちゃったくらいにすごいです。いや、参りました。私は、この馬鹿＝低能につき合って、そろそろ三年めが視野に入ってきているんですよ。これは何なんですかね？　やれやれ、やれやれ、です。念を押しておきますが、好きでやっているんじゃないんですよ。こっちは非常に迷惑しているんです。しかたなく、やっている。やらざるをえないから、やっているんです。

というわけで、チーホンがスタヴローギンの文書を読み終わったところ。

「この文書にいくつか直しを入れてはまずいでしょうか？」

「どうしてです？　ぼくは真剣に書いたつもりなんですがね」とスタヴローギンは答えた。

「文章を少し」

「前もって言っておくべきでしたが、あなたがどう言おうと、それはむだです。この計画を先延ばしする気はありませんから。思いとどまらせようとしてもだめです」

「あなたはさっき、わたしがこれを読む前にそのことを忘れずにちゃんとおっしゃられてましたよ」

「どっちにしても同じことです、くどいようですが、あなたの反論がどんなに有力なものでも、自分のプランをあきらめる気は毛頭ありませんから。いいですか、ぼくは、へたくそか、へたくそじゃないか――まあ、どうお考えになろうと勝手ですが――、この文章であなたにお願いする気なんてぜんぜんないんです。いますぐぼくに反論してくれとか、説得してくれとかね」耐えきれなくなったのか、彼は急にまた一瞬、さっきの口ぶりにもどって言い添えた。がすぐさま悲しげに自分の言った言葉に対してほほ笑んでみせた。

「あなたに反論したり、ご自分のプランをあきらめるよう説得しようにも、できないでしょう。ここに書かれている思想は、偉大な思想です。キリスト教の思想をこれ以上十全に表現することはできません。懺悔をもってしては、あなたがお考えになった、このような驚くべき偉業の先を行くことはできません、ただもしもです……」

「もしも、何です？」

「もしもこれがほんとうに懺悔であり、ほんとうにキリスト教的な思想であったなら、の話ですよ」

「そこは微妙な気がしますね。どうでもいいってわけにはいかないでしょう？　ぼくは大まじめに書きました」

「あなたはどうも、ご自分の心が望んでいるところより、わざと露悪的に見せようとなさっている……」チーホンの口ぶりはますます大胆さを帯びていった。明らかに、この「文書」が彼に強烈な印象をもたらしたらしかった。

「『見せる』ですって？　――くどいようですが、ぼくは、別に何のふりもしていないし、ことさら『気どって』みせた覚えもありませんよ」

チーホンはすばやく目を伏せた。

「この文書は、致命的に傷ついた心の欲求からじかに生まれてきたものです。――わたしはそう理解しているのですがね」――彼は執拗に、異常なほど熱をこめて話をつづけた。「そう、これはまさしく懺悔ですし、ごく自然な懺悔への欲求です、それにあなたは打ち負かされた。そうして、あなたは大きな道、前人未到の道に踏みこまれたのです。それなのに、あなたはもう、今から、ここに書いてあるものを読む人々をことごとく憎んで、戦いを挑む気でおられるようだ。罪を告白することを恥じないあなたが、どうして懺悔を恥じることがあります？　勝手にわたしを見るがいい、とあなたはおっしゃっている。それじゃ、あなたご自身は、どんなふうにその人たちをごらんになるのです？　あなたの叙述のなかには、ところどころ強い表現が見られます。あなたはまるで、ご自身の心理にほれぼれとなさって、どんなこまかな点もおろそかにしない、それもひとえに、あなたにはない冷徹さで読む人を驚かしてやりたいからです。いったいこれが、裁き手をへとも思わぬ罪人の挑戦でなくしてなんです？」

「いったいどこに挑戦があります？　ぼくは、ぼく個人の判断をいっさい避けたつもりでいますがね」

チーホンは口をつぐんだ。青ざめた顔に赤みがさしたほどだった。

（ドストエフスキー「チーホンの庵室で」　亀山郁夫訳）

ここで、私は江川卓の訳文を持ち出してきて、対照させることもできますが、どうやら、そう簡単なことじゃないようなんです。江川訳が底本としたテキストが「モスクワのロシア中央古文書庫版（一九二二年）とニューヨークの「インター・ランゲイジ・リテラリー・アソシエイツ」版（一九六四年）」であると新潮文庫『悪霊』の解説にあります。対する最先端＝亀山郁夫訳の底本とした

のが、「リュドミラ・サラスキナ編集による『悪霊』の一部」ということで、両者は違うんです。だから、江川訳にある文が最先端＝亀山郁夫訳には存在しない、ということがいくつもあります。この点について、私は、いつものように、ロシア文学に詳しい友人に問い合わせてみましたら、なんと、江川訳が底本としたテキストは、現在の研究の主流ではないらしく、友人がかろうじて当のテキストを（ほとんど偶然のように）所有していたのでなければ、さすがの彼も、原典にありもしない文章を江川卓が捏造していたのかと疑うところだったようです。もっとも、江川卓は、「告白」の部分だけについて、先のテキストを底本としたのであって、それ以外の――そもそも原作者ドストエフスキーが生前に刊行した――本編はべつのもの――「ソ連国立文芸出版所収『ドストエフスキー十巻作品集』（一九五七年）――を扱っています。

ともあれ、私としては最先端＝亀山郁夫の誤訳を問題にするのでなく、「日本語作品」としての表現を問題にするだけの話です。「日本語作品」として最先端＝亀山郁夫訳は失格です。あまりにもひどい。こんな馬鹿＝低能が高村薫を前に『カラマーゾフの兄弟』の訳文のモデルに『照柿』のスタイルを採用できないかな、と考えたこともあります」なんていい気になってしゃべっていたのが、はったり、あるいは単なる軽口にすぎないことがいまの私にはわかります。なぜかというと、最先端＝亀山郁夫程度には、所詮「あなたの前には、ほとんど越えがたい深い淵が立ちはだかっている」しか書けないんですから。

さあ、それじゃ、行きますよ。

「この文書にいくつか直しを入れてはまずいでしょうか？」

「まずいでしょうか？」って何ですか？　江川訳では「この文書にいくつか訂正をほどこすことはできませんかな？」。おそらく、原典は直訳的には「この文書にいくつか直しを入れることができませんか？」なんじゃないですか？　なぜ、それをわざわざ「入れてはまずいでしょうか？」にするのか？　まずいでしょう。意味が違ってしまう。なぜこんな曖昧ないいかたにして訳すのか？　それとも、これが例の「いま、息をしている言葉で、もういちど古典を」（光文社古典新訳文庫）なんですか？　こんなものがそれなんですか？

「どうしてです？　ぼくは真剣に書いたつもりなんですがね」とスタヴローギンは答えた。

ここで考えなくてはいけないことがあります。スタヴローギンは、チーホンの要求をどういうものだと思っていたでしょうか？　いくつかの「内容」――文書中のスタヴローギンの行為――の削除を求めていると思ったんじゃないでしょうか？　それほどまでに過激な「内容」――彼自身の行為――の文書であることを彼自身が承知していたからです。ところが、チーホンは文書の「内容」ではなくて「表現」の訂正を求めていた――「文章を少し」――んです。ここにふたりの思っていることのずれがあります。このことは覚えておいてほしいですね。

ともあれ、スタヴローギンは訂正の必要がないとチーホンに答えるんです。なぜなら、彼は――この後の方まで読めばわかりますが――事実をそのまま表現したつもりでいるからです。誇張もしていないし、逆に、大事なことをごまかして小さなことだったかのようにも表現していない、というつもりなんです。自分は事実を正確に、間違いなく表現したのだ、事実は、まさにこの通りなのだ、だから、訂正など考えられない。そういうわけで、彼はチーホンに「どうしてです？」と訊くんです。そういって、私が右に書いたような、彼自身のつもりを表明することになるんです。つまり、「事実をそのまま表現した・誇張もその逆もない・正確な・間違いのない表現をした」という意味が単語ひとつで口にされているのが、最先端＝亀山郁夫によれば「真剣に」――「ぼくは真剣に書いたつもりなんですがね」――なんですね。この「真剣に」ということばが日本語としてどれほど妥当か、を私は問題にします。「真剣に」表現したのなら、「事実をそのまま表現した・誇張もその逆もない・正確な・間違いのない表現をし

た」ということの説明になりますか？　なりません。いくら「真剣に」書いても、不正確な、間違いのある表現はありうるでしょう。同じようなことばに「一所懸命」があるかと思いますが、いくら「私は一所懸命に書いたのに！」といっても、その文書に間違いはいくらでもありうるでしょう。「一所懸命に」書かなくてはなりませんが、「一所懸命に」書けばいいというものではないんです。「一所懸命」に書いたからといって、それがよい文書であることにはならないんです。そうして、「真剣に」も同様。「真剣に」書いたからといって、それが正しいということにはならないんです。だから、スタヴローギンの返したことばには、彼自身の「真剣」さとはべつの視点の入り込んだ、彼自身の思い込みの少ないことば、より利己的な要素のないことば、彼自身よりも彼の文書の表現の方を優先したことば、そうしてチーホンにもそのことがすぐに理解しうることばが必要なんです。江川訳では「誠実に」となっています。こちらの方が「真剣に」より断然優れています。

　で、いましがた少しいいかけたことのつづきをいえば、この後もスタヴローギンは――最先端＝亀山郁夫訳では――「ぼくは大まじめに書きました」、「ぼくは、ぼく個人の判断をいっさい避けたつもりでいますがね」と、弁明するわけです。右で問題にした箇所を含めれば、「ぼくは真剣に書いたつもりなんですがね」、「ぼくは大まじめに書きました」、「ぼくは、ぼく個人の判断をいっさい避けたつもりでいますがね」。江川訳ではそれぞれ「ぼくは誠実に書きました」「ぼくは誠実に書きました」、「ぼくは主観的な判断はいっさい除いたつもりですが」となっています。この三つのうち、前二者における最先端＝亀山郁夫の「真剣に」、「大まじめに」は、江川卓訳の「誠実に」、「誠実に」にあるように、原典では同一の単語が用いられていたのじゃないですか？　翻訳者は、もし原典のふたつの台詞に同一の単語が用いられているのであれば、どちらの台詞にもぴったりくるような同じ訳語を探すべきですよね。そうしなかった（かもしれない）最先端＝亀山郁夫は、ある台詞には「真剣に」がぴったりくると思い、もうひとつには「大まじめに」がいいと思ったわけです。もちろん、同一だからといって、同一に訳さなければならないということもないですけど。でも、それは、同一に訳したら日本語としておかしい・原典のニュアンスを損なう、という場合じゃないでしょうか？　ここがそれに当たるとは思えません。

「前もって言っておくべきでしたが、あなたがどう言おうと、それはむだです。この計画を先延ばしする気はありませんから。思いとどまらせようとしてもだめです」

「あなたがどう言おうと、それはむだです」。これ、「あなたがどう言おうと、むだです」じゃ駄目なんですか？　「それは」が無駄じゃないですか？　江川訳では、「あなたが何を言われてもむだなのです」。また、私が疑うのは、原典が「あなたがどう」ではなくて、「あなたが何を」だったのではないか？　ということです。原典が「あなたが何を」であるのに、それをわざわざ「あなたがどう」とやるから、どんどん無駄な日本語を使わなくてはならなくなる、ということはないですか？

　それに、「この計画を先延ばしするつもりはありませんから。思いとどまらせようとしてもだめです」は、江川訳では「ぼくは自分のもくろみを延ばすつもりはありません。思いとどまらせようなどとしないでください」。

　私が不思議に思うのは、最先端＝亀山郁夫が、普段は登場人物にさんざん幼稚なことばづかいをさせているのに、ときおり、そのなかに「先延ばし」（あるいは「思いとどまらせ」る）などという、ちょっとべつのニュアンスのことば、その幼稚なことばづかいの人物にはそぐわないことばを混ぜる――だから、それが全体のなかで浮いてしまう――ことなんですね。最先端＝亀山郁夫はどうして「この計画を延ばすつもりはありませんから」とやらなかったんでしょうか？　これが最先端＝亀山郁夫の言語感覚の珍妙さです。ある人物が幼稚な口のききかたをするのだったら（原典だって、おそらく文脈上、していないんですけどね）、それで統一すべきでしょう。その人物がわざと大人ぶったいいかたをする、という場面でない限り。

　私は、最先端＝亀山郁夫によって、登場人物すべての知的レヴェルがぐんと

下げられてしまっている、という印象を持ちます。もうひとつ、最先端＝亀山郁夫訳での「……むだです」、「……だめです」が江川訳では、「むだなのです」、「……しないでください」になっていることにも注意しておきたいですね。両者の訳、あるいは日本語表現力の差は歴然としています。

「あなたはさっき、わたしがこれを読む前にそのことを忘れずにちゃんとおっしゃられてましたよ」

「おっしゃられてましたよ」って何だよ？「おっしゃいましたよ」だろうに。それに、「さっき、わたしがこれを読む前にそのことを忘れずにちゃんと」って、こんなんでいいのか？　さあ、みなさん、これをゆっくり読んでみてください。

「あなたはさっき、
わたしが
これを
読む前に
そのことを
忘れずに
ちゃんと
おっしゃられてましたよ」

どうですか？　何でこんなに間が抜けているのか？　たとえば、「忘れずに」と「ちゃんと」は両方なければいけないのか？　あのさあ、何でこんなに頭の悪そうな口のききかたをチーホンにさせるの？　江川訳では、「あなたはさっき、読む前にもそのことをちゃんと断られたようだったが」。もちろん、こちらではチーホンによる「私がこれを」が省略されています。でも、これで意味はまったく通ります。これも、ゆっくり読んでみてください。

「あなたはさっき、
読む前にも
そのことを
ちゃんと
断られたようだったが」

最先端＝亀山郁夫の訳文は弛緩しきっています。何のメリハリもない。いや、これ、ドストエフスキーが弛緩しきって、何のメリハリもない文章を書いているんだったら、いいんですよ。でも、そうじゃないでしょう。

「どっちにしても同じことです、くどいようですが、あなたの反論がどんなに有力なものでも、自分のプランをあきらめる気は毛頭ありませんから。いいですか、ぼくは、へたくそか、へたくそじゃないか――まあ、どうお考えになろうと勝手ですが――、この文章であなたにお願いする気なんてぜんぜんないんです。いますぐぼくに反論してくれとか、説得してくれとかね」耐えきれなくなったのか、彼は急にまた一瞬、さっきの口ぶりにもどって言い添えた。がすぐさま悲しげに自分の言った言葉に対してほほ笑んでみせた。

「どっちにしても」なんて、やめてくれよ。せめて、「どちらにしても」、「いずれにしても」、「どちらにせよ」、「いずれにせよ」とかにしてほしい。これは誰と誰とがしゃべっているのか？　しかも、どんなふうに・どんな状況でしゃべっているのか？　これは真剣勝負ともいうべき対話なんですよ。それなのに、なぜ最先端＝亀山郁夫はこれほどまでに緊張感ゼロの表現を重ねるのか？　ここ、江川訳では単に「同じことです」。

それと、「自分のプラン」。さっきは「計画」ということばを使っていたでしょうに。なぜ、ここでわざわざ「プラン」といい換えをする必要があるのか？　意味があるのか？　あるなら、いってみるがいい。また、ここでわざわざ「自分の」

ということばを訳す必要があるのか？　同様に、「あなたの反論がどんなに有力なものでも」の「有力なもの」。「有力でも」にならないのか？

さらに、「この文章であなたにお願いする気なんてぜんぜんないんです。いますぐぼくに反論してくれとか、説得してくれとかね」――これだと、「お願い」が唐突すぎて、意味が取りにくいでしょう。読者は「？？？？」となりますって。せめて「この文章で、いますぐぼくに反論や説得をしてほしいなどとお願いする気なんかないんです」ぐらいにはしてほしい。

もうひとつ。「がすぐさま悲しげに自分の言った言葉に対してほほ笑んでみせた」というのは何です？「ほほ笑んでみせた」？「ほほ笑んで」って何です？「みせた」って何です？　そう訳したからには、このときのスタヴローギンの心理を説明してみるがいい。特に、「みせた」に私は強い疑いを持ちます。

江川訳では、「「あなたがどんなに有力な反論を出されても、ぼくは自分の意図をひるがえすつもりはありません。申しあげておきますが、ぼくはこのまずい文章で、いや、うまい文章かもしれない――それはどうなりと考えてください――ぼくはけっしてあなたに早く反駁だの説得だのをはじめてもらおうとしたわけじゃないのです」彼は顔をゆがめて笑いながら、こう結んだ」。もっとも、底本テキストの違いで「顔をゆがめて」は、最先端＝亀山郁夫の底本にはないのかもしれません。それにしても、「ほほ笑んでみせた」はないんじゃないですか？

「あなたに反論したり、ご自分のプランをあきらめるよう説得しようにも、できないでしょう。ここに書かれている思想は、偉大な思想です。キリスト教の思想をこれ以上十全に表現することはできません。懺悔をもってしては、あなたがお考えになった、このような驚くべき偉業の先を行くことはできません、ただもしもです……」

「もしも、何です？」

「もしもこれがほんとうに懺悔であり、ほんとうにキリスト教的な思想であったなら、の話ですよ」

「そこは微妙な気がしますね。どうでもいいってわけにはいかないでしょう？　ぼくは大まじめに書きました」

「あなたに反論したり、ご自分のプランをあきらめるよう説得しようにも、できないでしょう」――これ、せめて「反論したり、計画をあきらめさせようにも、できないでしょう」とかにできなかったんですか？　というより、原典は本当にこういう文なんですか？　江川訳では、「あなたに反論したり、あなたの意図を断念なさるようにとことさら説得したりは、私のすべきことではないでしょう」。全然違うじゃないですか？

「懺悔をもってしては」――これでいいんですか？　チーホンはスタヴローギンの文書を懺悔だと、それも最上級の懺悔（懺悔の延長上にあるものとして）だといっているんですよね。しかも、最先端＝亀山郁夫はこの後「もしもこれがほんとうに懺悔であり」云々と訳しているんですよね。つまり、最先端＝亀山郁夫訳の両者をつなげると、「懺悔をもってしては、このような驚くべき偉業の先を行くことはできません。もしもこれがほんとうに懺悔であるのなら」となるわけです。変じゃないですか？　とんちんかんでしょう？「もってしては」と訳してしまうと、スタヴローギンの文書が「懺悔」を超えた、「懺悔」ではない、べつの何かみたいじゃないですか？　いや、もちろん、べつのものなのではないか、とチーホンは疑っていますよ。でも、それを確かめようとして口にするのが「もしもこれがほんとうに懺悔であり」云々なんですよ。江川訳では、「いかなる悔悟も、あなたの考えられたような驚くべき偉業、〔自分自身に加えようとなさる罰〕以上には達しえないものです、ただもし……」。

次。「もしこれがほんとうに懺悔であり、ほんとうにキリスト教的な思想であったなら、の話ですよ」。これ、「の話ですよ」がなぜ必要なのか、私にはまったくわかりません。こういう余計なことばが、ただでさえ弛緩している最先端＝亀山郁夫の訳文をさらにも失速させるでしょう。意図はわかりますよ。意図はわかるけれど、必要がないんです。ものすごく難しいことを原典がまくしたててでもいるならともかく、こんな簡明な箇所で、なぜ最先端＝亀山郁夫は余計な補いをするんでしょうか？　それに「キリスト教的な思想」って、どうして

こんなふうに訳すのか？　なぜ「キリスト教の思想」としないのか？　江川訳では、「もしこれが真に悔悟であり、真にキリスト教の思想であるならばです」。

さらに、「そこは微妙な気がしますね。どうでもいいってわけにはいかないでしょう？　ぼくは大まじめに書きました」。これもどうなんですか？　これでは、スタヴローギンが馬鹿のように思えてきます。

「そこは微妙な気がしますね。どうでもいいってわけにはいかないでしょう？　ぼくは大まじめに書きました」

（亀山郁夫訳）

「それは微妙なところのようですね、どうでもいいというわけにもいかない。ぼくは誠実に書きました」

（江川卓訳）

江川訳の「どうでもいいというわけにもいかない」がスタヴローギン自身の内面の問いと答え――自己完結――である（つまり、スタヴローギンはもちろん自分の文書がキリスト教的であるかどうか＝懺悔であるかどうかを気にしている）のに対して、最先端＝亀山郁夫訳の「どうでもいいってわけにはいかないでしょう？」は、その問いそのものを何か江川訳より軽んじている・あまり重要と思っていないような気がするのと、「いかないでしょう？」ということで、自己完結ではなく、チーホンに答えを投げ出すように思われるということが、引っかかります。しかし、チーホンに問いかけているとして、「どうでもいいというわけにはいきませんよね？」と、もう少し同意を求めるニュアンスが入っていれば、まだ私にはわかるんですよ。ここはやはり、スタヴローギンにとってチーホンの疑問――文書がキリスト教的であるかどうか＝懺悔であるか――がおろそかにできない、重要な観点だということを示しているのじゃないですか？　それなのに、最先端＝亀山郁夫の「どうでもいいってわけにはいかないでしょう？」は、そのことを全然伝えてきません。というか、最先端＝亀山郁夫には、スタヴローギンにとってチーホンの疑問がおろそかにできない、重要な観点だということがまったくわかっていないのではないか？　まったくわからないので、いいかげんに訳語を当てたのではないか？　しかも、最先端＝亀山郁夫が「どうでもいいってわけにはいかないでしょう？」につづけるのが「ぼくは大まじめに書きました」なんですよ。「大まじめに」ねえ？　どういう日本語感覚なんですかね？　さっきもいいましたが、この「大まじめに」は、原典では、先の「真剣に」と同一の単語なのではないかという疑いがあるわけです。最先端＝亀山郁夫にとって、「真剣に」と「大まじめに」は同じなのかもしれません。それにしても、「大まじめに」なんて表現をされると、スタヴローギンがどんどん軽薄になっていくような気がするんです。どうでしょう？　私のいいたいことがわかってもらえたでしょうか？

「あなたはどうも、ご自分の心が望んでいるところより、わざと露悪的に見せようとなさっている……」チーホンの口ぶりはますます大胆さを帯びていった。明らかに、この「文書」が彼に強烈な印象をもたらしたらしかった。

「『見せる』ですって？　――くどいようですが、ぼくは、別に何のふりもしていないし、ことさら『気どって』みせた覚えもありませんよ」

チーホンはすばやく目を伏せた。

「あなたはどうも、ご自分の心が望んでいるところより、わざと露悪的に見せようとなさっている……」。この「ところより」って何です？　「わざと露悪的」って、何ですか？　わざとじゃない「露悪的」があるんですか？　そういう二重の表現をドストエフスキーが原典に書いていたんですか？　江川訳では、「あなたは、ご自分の心が望む以上に、ご自分のことをわざと露骨に見せようとしておられる」。もし最先端＝亀山郁夫と江川卓の原典が同一なら、前者の「どうも」にも疑問が生じますね。また、「『見せる』ですって？」の「ですって」は不必要でしょう。「『見せる』？」でいいじゃないですか？　しかし、江川訳でも「《見

せる》ですって？」。もしかすると、ふたりとも引用符＝《》の直後に疑問符＝？の来るのを、字面として嫌ったのかもしれません。しかし、私は原卓也訳のこれを思い出しますね――「《あなたじゃない》！　あなたじゃないとは、どういうことだ？」。それはともかく、「『気どって』」というのは、何です？　括弧をつけているのは、その前に出ているチーホンのことばを引用したんですよね？　「『見せる』」同様。だから、「『気どって』」ではなく、「『露悪的に』」じゃないんですか？　あまりにも低レヴェルで、さすが最先端＝馬鹿＝低能＝亀山郁夫です。

「この文書は、致命的に傷ついた心の欲求からじかに生まれてきたものです。――わたしはそう理解しているのですがね」――彼は執拗に、異常なほど熱をこめて話をつづけた。「そう、これはまさしく懺悔ですし、ごく自然な懺悔への欲求です、それにあなたは打ち負かされた。」

「わたしはそう理解しているのですがね」の「ですがね」に首をかしげます。これもまた何か余計な休止のように思えてなりません。とはいえ、これとはまたべつの点から疑問が生じます。江川訳ではこうなっているんです。「この文書は、致命的な傷を受けた心の真の欲求から発したものです。そう理解してよろしいですかな？」。まあ、それもともかく、江川訳ではつづいて、「さよう、これは悔恨であり、あなたを打ちひしいだ自然な心の欲求なのです」とあるんです。ふたりの違いはどうなっているんですか？

「そう、これはまさしく懺悔ですし、ごく自然な懺悔への欲求です、それにあなたは打ち負かされた」

（亀山郁夫訳）

「さよう、これは悔恨であり、あなたを打ちひしいだ自然な心の欲求なのです」

（江川卓訳）

両者のあまりにもの違いには途方に暮れます。ま、ここでも原典が両者で違うのかもしれません。いや、そうかな？　本当にそうなのかな？　そうじゃないんじゃないかな？　私は最先端＝亀山郁夫に原典の文の構造がまったくわかっていなかったのじゃないか、という強い疑いを持ちます。また、最先端＝亀山郁夫がここで二度も用いている――そうして、これ以前にも訳語に当てている――「懺悔」ということば、江川卓は「悔恨」としていて、彼が先に「悔悟」としたのとは異なっています。ここ、原典はどうなっているんでしょう？　そう私が最先端＝亀山郁夫を疑うのは、もうとっくに彼の翻訳を信用できないからですね。

「それなのに、あなたはもう、今から、ここに書いてあるものを読む人々をことごとく憎んで、戦いを挑む気でおられるようだ。」

これはどうですか？　これもゆっくり読んでいただきましょうか？

「それなのに、
あなたはもう、
今から、
ここに書いてあるものを
読む人々を
ことごとく
憎んで、
戦いを挑む気で
おられるようだ。」

江川訳を並べてみましょう。

「ところがあなたは、
いまからもう、
ここに書かれたことを
読むであろうすべての人々を
憎悪し、軽蔑されて、
その人たちに向かって
挑戦状を
叩きつけておられる。」

江川訳にある「軽蔑されて」が最先端＝亀山郁夫訳にはありません。それはいいとして、最先端＝亀山郁夫訳の「ここに書いてあるもの」はどうして「ここに書かれたこと」にならないんでしょうか？　また「書いてあるものを読む人々を」の――「を」の近接による――すわりの悪さは、つづいて「ことごとく」とやってしまうせいですね。「書かれたことを読むすべての人々を」とすれば、よかったんじゃないですか？　誰だ、「音楽のようにリズム重視の訳」（http://www.keiomcc.net/sekigaku-blog/2008/08/post_258.html）なんていっていたのは？　こんなに間の抜けた訳文もないでしょうに。

あのね、これでやっと「現代思想」四月号増刊「総特集＝ドストエフスキー」の一ページ分についてのコメントが終わったところなんですけれど、私はうんざりです。赤鉛筆を持ちながら、このページを読んだだけで、もう誌面が真っ赤です。ひどすぎる。

私が編集者なら、こんな稚拙な原稿は突き返しますよ、「ふざけんな、この馬鹿野郎」といって。青土社の編集者って、それができないほど低レヴェルなのか？　彼もまた村上春樹、柴田元幸、高村薫、豊崎由美、大森望レヴェルでしかないのか？

つづけます。

「勝手にわたしを見るがいい、とあなたはおっしゃっている。それじゃ、
あなたご自身は、どんなふうにその人たちをごらんになるのです？」

「勝手にわたしを見るがいい、とあなたはおっしゃっている」。「おっしゃっている」じゃなくて、「おっしゃる」にできないのか？　「勝手に」って本当にそのことばがあるのか？　江川訳では「自分のことを見るがよい、とあなたは言われるが、あなた自身は、その人たちをどのような目でごらんになるのです？」。

私が最先端＝亀山郁夫の「勝手にわたしを見るがいい」を疑うのは、この訳がおそらく「わたしのことをどうとでも見るがいい」、「好きなようにわたしを判断するがいい」、「わたしのことを何とでも思ってくれ」――「わたしを憎むがいい」に結ぶはずの――という意味を含ませていると思うからです。それは間違いではないか？　単に「わたしを見よ」なのじゃないか？　チーホンは、単に「わたしを見よ」としかいわない（と彼に思われる）スタヴローギンに、「あなたご自身は、どんなふうにその人たちをごらんになるのです？」と問うわけです。そこでの「どんなふうに」こそ、先の「懺悔なのかどうか＝キリスト教の思想なのかどうか」という問いの再現じゃないんですか？　スタヴローギンが謙虚に頭を垂れて「わたしを見よ」というのであれば、彼の文書は懺悔であり、キリスト教の思想なんですよ。チーホンはそこを問うているんです。それなのに、その問いの手前でチーホンが「勝手にわたしを見るがいい」なんていうはずがない。「勝手にわたしを見るがいい」が意味するのは、スタヴローギンの文書が懺悔ではない、キリスト教の思想ではないということだからです。というわけで、そこのところをまったく理解できていない――ということは、単にこの文章はおろか、ドストエフスキーにとってのキリスト教の意味・位置などもまったく理解できていない――ということは、ドストエフスキー研究者として致命的欠陥を抱えた――最先端＝亀山郁夫が「勝手に」を勝手につけ加えている・捏造しているだろう、と私は思います。この点、私はいつもの友人に問い合わせていません。しかし、原典に「勝手に」はありません。もしあったとしたら、

それはドストエフスキーの誤りです。

これがどんなにひどいことか、わかりますか？　これは些細な間違いなんかじゃありませんよ。「勝手にわたしを見るがいい」という、その「勝手に」を翻訳者が勝手につけ加えることによって、読者はもうこの場面を読み解くことができなくなるんです。余計なところをうろうろして、あげく、迷ってしまうことになるんです。読者はスタヴローギンに行き着くことができなくなります。チーホンの問いが曖昧になり、ここでのふたりの対話がぼかされます。ここで問題になっていることが何であるかが、読者にはわからなくなります。読者は最初から、自分で考える材料を奪われることになるんです。こんな翻訳があっていいはずがない。

いいですか、これは翻訳作品につきものの表面的誤訳なんかじゃないんですよ。本質的・構造的誤訳です。翻訳者が最先端＝馬鹿＝低能であるために、読者はとんでもない不幸に遭遇することになるんです。

（二〇一〇年三月三十日）

（19）の1

東京書籍という出版社があります。小学校・中学校・高等学校の教科書を作っている会社です。ホームページ、教科書に関してはこちら（http://ten.tokyo-shoseki.co.jp/kyozai2008/menu.html）。

教科書以外にも本を出しています。「東書アクティブ・キッズ」というシリーズがあって、そのなかに『10代をよりよく生きる読書案内』があるんですね。

10代で是非読んでほしい本102冊を紹介。類書には今まで取り上げられなかった本、最近の話題作、古典的名作など、幅広い視点で読書の感動やおもしろさを伝える。全国学校図書館協議会選定図書。

――ということです。

編著者は――

こやま峰子（こやまみねこ）

詩人、児童文学作家。第28回「日本童謡賞特別賞」受賞。第26回「巌谷小波文芸賞」受賞。第46回「児童文化功労賞」受賞

著書『名作へのパスポート』（金の星社）『地雷のあしあと』（小学館）『いのちのいろえんぴつ』（教育画劇）『心に残る愛唱歌』（東京書籍）他多数。

――ということです。（http://www.tokyo-shoseki.co.jp/books/4487755660/）

さて、『10代をよりよく生きる読書案内』の「海外編」というのが刊行されたんですね。私の勤める書店にも入荷しました。

読書のプロ5人が厳選した、いま10代の子どもたちに読んでほしい海外作品80冊を紹介。「あきらめない」「想いあうこと」「踏み出す勇気」「未来のために」など9つのテーマごとに、古典的名作から最新の話題作を網羅した海外作品読書案内の決定版。

――だそうです（http://www.tokyo-shoseki.co.jp/books/4487755646/）。もしかすると、この本も「全国学校図書館協議会選定図書」になるのかもしれません。なりそうですね。

編著者は、やはりこやま峰子。

私が手にとって、目次にざっと目を通してみると、ありました、ありました、

『カラマーゾフの兄弟』（もちろん最先端＝亀山郁夫訳）が。「また何も知らないで安易に紹介したんだろうな」と思いながら、私が『カラマーゾフの兄弟』の紹介文章（こやま峰子自身が書いています）を読むと――

●清らかな魂の天使はいずこ

一八六〇年代のロシアの地方都市に暮らす父親フョードルは財を築き、美女・グルーシェニカと酒に溺れて暮らしている。長男ドミートリーは父親ゆずりの放蕩者で父親が夢中になっているグルーシェニカに執心し許嫁を放り出してしまう。父親を殺したいほど憎む半面、高潔な精神を持つ。次男イワンは父親と同様に人を蔑視し神を否定し兄ドミートリーの許嫁カテリーナに激しい思慕を抱く。三男アリョーシャは心優しく、愛の教えを説くゾシマ長老を尊敬している。彼は父親をはじめ誰からも愛されているがカラマーゾフの血が流れていることを強く意識している。読者は父親フョードルの殺害犯を捜しつつ、厖大な小説の世界に迷いこむ。カラマーゾフ家の料理人スメルジャコフはフョードルが白痴女に産ませた子で癲癇の病を持つ。まわりから差別されているので父フョードルを憎む気持ちが強い。グルーシェニカはフョードルと組んで悪事を企み、自分に夢中になっている父親と息子を手玉に取る。スメルジャコフはイワンにそそのかされて父親を殺害。判決の前日、彼はイワンを訪ね、結局、父親を殺したのはあなただ、と言い残し自殺する。公判の席で、証人のイワンは「わたしがスメルジャコフをそそのかし殺させた」と叫ぶ。

【メッセージ】

『カラマーゾフの兄弟』は、すべての年代の人々が各々の人生体験で理解し味わえる作品。それが古典といわれる理由でしょう。かなりの長編作品だけれど、カラマーゾフ家の父親の殺害事件をめぐる犯人を探しながら容易に読み進んでいくことができます。私たちはお金を全く無視して生きていくわけにはいきません。上手につきあっていくしか道はないでしょう。カラマーゾフ家の人々は父親の遺産問題から罪深いドラマにはまりこみ、物語は一層混沌としてきます。金銭が人の欲望と複雑に絡んだとき、悲劇が生まれるとドストエフスキーはいいたかったのではないでしょうか。諸悪の根源は金銭にあるので、地獄の深みにはまらず生きていかなければなりません。ゾシマ長老とイワンの間でたたかわされるキリスト教と無神論の対話はこの小説の核であり難解な部分でもありますが読み進んでいくうちにみえてくるものがあります。不朽の名作物語の中で光を探してください。奇蹟と神秘に出会えるかもしれません。

（こやま峰子『10代をよりよく生きる読書案内　海外編』東京書籍）

ああ、これは確実に「全国学校図書館協議会選定図書」になるでしょうね。「全国学校図書館協議会」がどんな組織かは知りませんが、きっとたくさんの本を読んでいる信頼できるひとたちの集まりでしょうから。

ああ、素晴らしいこの世界！

（二〇一〇年四月一日）

（19）の2

東京書籍の『10代をよりよく生きる読書案内　海外編』の編集者と電話で話をしました。先の記事を書いた夜、翌朝、また夜に、と私は東京書籍のホームページ上にある「お問い合わせ」から何度もメールを送信しようとしたのですが、いずれもエラーが出てしまったので、今日はもう電話をしたんです。

担当編集者はやはり『カラマーゾフの兄弟』を読んだことがありませんでした。彼女によれば、こやま峰子は今回の執筆のために（あらためて、かどうかわかりません）『カラマーゾフの兄弟』を読んだそうです。

ともあれ、私は彼女にメールのアドレスをきいて、以下を書き送りました。

東京書籍　＊＊さま

電話でお話ししたように、こやま峰子さんは今回『カラマーゾフの兄弟』を読んでいません。おそらく数十年前に読んだきりで、今回のためには登場人物の名前の確認程度のことしかしていないと思います。ご本人に訊いてください。もし、そんなことはない、ちゃんと読んだという返事があっても、嘘です。ちゃんと読んで今回の原稿を書いたのだとしたら、こやま峰子さんは相当に低レヴェルのひとだと思います。このメールを転送されてもいいです。

＊＊さんご自身がお読みでないことはわかっていました。読んでいたら、この原稿を通すはずがありませんから。

しかし、あなたがこの文章を読んで、それでいいと判断されたことについても大きい疑問を感じます。

＊＊さんの周りの方で、『カラマーゾフの兄弟』を読んだことのある方たちに、こやまさんの文章を読んでもらってください。その方たちの感想を教えてください。職場の方でなくてもかまいません。ご友人でもいいです。

私はこやまさんの文章のうち、どこが誤りであるかを書きません。そちらで検証してください。

また、この本には、こやまさん以外に何人かの方が執筆されていますね。その方たちにも訊いてみてください。彼らにも責任があると思います。彼らが『カラマーゾフの兄弟』を読んだことがあるかどうか。読んでいるにしても、いないにしても、こやまさんの文章（「メッセージ」を含めての内容と文章そのもの）をどう思うか。

＊＊さんの上司の方にもこのメールを見せてください。そうして、出版社としてこれをどう考えるのか、お聞かせください。

それから、『カラマーゾフの兄弟』を誰かに薦める場合に、亀山郁夫訳（光文社）をあげるのは間違いです。私は、もうこのほぼ二年をかけて亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』がいかにひどいかを書きつづけている者です。文庫のページ数に換算すると、すでに一〇〇〇ページほどの分量を書いています。

http://www.kinoshitakazuo.com/

上記ホームページに先行して、ブログも書いています。すでにこういう記事を書きました（http://d.hatena.ne.jp/kinoshitakazuo/20100401＝（1）のこと）。

＊＊さんとのやりとりも書くつもりでいます。

お返事をお待ちします。

木下和郎

（二〇一〇年四月二日）

（19）の3

東京書籍から返信がありました。

木下和郎様

謹啓

この度は、『10代をよりよく生きる読書案内　海外編』をお読みいただき、ありがとうございました。
また、何度かお問合せをいただいたということで、たいへん失礼いたしました。

弊社の一般書お問合せ窓口は下記の通りでございます。

shuppan-j-h@tokyo-shoseki.co.jp

ご質問について申上げます。

本書の目的は、10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼としています。その目的のために、個々の執筆者の視点による80タイトルの「翻訳作品」を紹介いたしました。

木下様のご意見は、作家論や解釈論ともいうべき、深遠な文学的視点からのご質問であるとうけたまわりましたが、本書の姿勢は、作家の姿勢や作品解釈を問うことではけっしてありません。ましてや、文学論争をのぞむものでもありません。

木下様のブログを拝読し、ひとつの精緻な論考としてたいへん参考になりました。
この度の木下様のご意見は、日本で翻訳された古今のドストエフスキー作品に精通されている研究者のご指摘として、真摯に受け止めさせていただきます。
貴重なご指摘をいただき、まことにありがとうございました。

海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願っております。

敬具

二〇一〇年四月六日

****
東京書籍（株）出版事業本部
shuppan-j-h@tokyo-shoseki.co.jp
〒114—8524　東京都北区堀船2—17—1
****

私はまた東京書籍に電話しました（たまたま今日は休みだったんです）。本の編集者＊＊さんの代わりに応対してくれたのは、右のメールの書き手です。
彼によれば――、
1　『カラマーゾフの兄弟』を読んだことのあるスタッフ（複数）がこやま峰子の文章には問題がないと判断した。
2　こやま峰子は『カラマーゾフの兄弟』を以前にも読んでいたが、今回も亀山訳でちゃんと読んだ。
3　どこが誤っているかを私が指摘しないと、答えようがない。

4　指摘するならば、あらためて右記アドレスにメールを送るように。
5　「もう、いいですか？」

（二〇一〇年四月六日）

（19）の4

東京書籍にメールを送りました。

おさらいですが、まず、問題のこやま峰子の文章を再掲しておきます。

●清らかな魂の天使はいずこ

一八六〇年代のロシアの地方都市に暮らす父親フョードルは財を築き、美女・グルーシェニカと酒に溺れて暮らしている。長男ドミートリーは父親ゆずりの放蕩者で父親が夢中になっているグルーシェニカに執心し許嫁を放り出してしまう。父親を殺したいほど憎む半面、高潔な精神を持つ。次男イワンは父親と同様に人を蔑視し神を否定し兄ドミートリーの許嫁カテリーナに激しい思慕を抱く。三男アリョーシャは心優しく、愛の教えを説くゾシマ長老を尊敬している。彼は父親をはじめ誰からも愛されているがカラマーゾフの血が流れていることを強く意識している。読者は父親フョードルの殺害犯を捜しつつ、厖大な小説の世界に迷いこむ。カラマーゾフ家の料理人スメルジャコフはフョードルが白痴女に産ませた子で癲癇の病を持つ。まわりから差別されているので父フョードルを憎む気持ちが強い。グルーシェニカはフョードルと組んで悪事を企み、自分に夢中になっている父親と息子を手玉に取る。スメルジャコフはイワンにそそのかされて父親を殺害。判決の前日、彼はイワンを訪ね、結局、父親を殺したのはあなただ、と言い残し自殺する。公判の席で、証人のイワンは「わたしがスメルジャコフをそそのかし殺させた」と叫ぶ。

［メッセージ］

『カラマーゾフの兄弟』は、すべての年代の人々が各々の人生体験で理解し味わえる作品。それが古典といわれる理由でしょう。かなりの長編作品だけれど、カラマーゾフ家の父親の殺害事件をめぐる犯人を探しながら容易に読み進んでいくことができます。私たちはお金を全く無視して生きていくわけにはいきません。上手につきあっていくしか道はないでしょう。カラマーゾフ家の人々は父親の遺産問題から罪深いドラマにはまりこみ、物語は一層混沌としてきます。金銭が人の欲望と複雑に絡んだとき、悲劇が生まれるとドストエフスキーはいいたかったのではないでしょうか。諸悪の根源は金銭にあるので、地獄の深みにはまらず生きていかなければなりません。ゾシマ長老とイワンの間でたたかわされるキリスト教と無神論の対話はこの小説の核であり難解な部分でもありますが読み進んでいくうちにみえてくるものがあります。不朽の名作物語の中で光を探してください。奇蹟と神秘に出会えるかもしれません。

（こやま峰子『10代をよりよく生きる読書案内　海外編』東京書籍）

さて、以下が東京書籍へのメールです。

「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」おられる東京書籍編集部の方々に申し上げます。私は、先日御社から出版された『10代をよりよく生きる読書案内　海外編』における、こやま峰子大先生の書かれた『カラマーゾフの兄弟』の紹介文章がめちゃくちゃであるとお電話した者です。

直接編集部にお電話したにもかからず、当該文章の誤りの指摘はメ

ールで送れということでしたので、ここにお送りします。ここでわざわざ書くことの時間と労力とをぜひとも考慮していただきたく思います。私にとって、これは非常に苦痛であるとともに、非常に迷惑です。特に電話に出ていただき、応対してくださったウエクサさんには、よく理解していただきたく思います。

当初、私は、こやま峰子大先生の文章がめちゃくちゃであることは、『カラマーゾフの兄弟』の読者には一目瞭然であると思っていました。直接の編集者＊＊さんが『カラマーゾフの兄弟』をお読みでないことを聞き、では、周りにいらっしゃるはずの、お読みの方々に当該文章を読んでいただき、その感想をお聞かせください、とメールしたのでした。私としては、「えっ、何これ？」とか「こんなものを出しちゃったの？」、「まずいだろう、これ？」とかいう反応が即座にあり、編集部で検証がなされるのは当然と思っていたのです。また、内容としての個々の誤りが正されればいいというだけではなく、こやま峰子大先生の文章全体のひどさが問題にされなければならないはず、ということもあって、具体的な誤りを指摘しないでおいたんです。つまり、私の具体的指摘を待つまでもなく、「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」おられる東京書籍編集部の自浄努力があるだろうと思ったんですね。ところが、ウエクサさんによれば、御社のスタッフ（複数）がこやま峰子大先生の文章を妥当だと判断したとのことです。御社には、そんな低レヴェルのスタッフ（複数）しかいないんですか？（しかし、私はウエクサさんのいうのが嘘ではないかと疑ってもいます。いくらなんでも、そんなことはありえないだろう、と）。さらに、ウエクサさんの「誤りを指摘してくれないと、答えようがない」という返事です。呆れました。繰り返しますが、ウエクサさん、本当に苦痛なんですよ。

ともあれ、これから私は――ウエクサさんの要請にしたがって――こやま峰子大先生のめちゃくちゃについて具体的に指摘します。

一八六〇年代のロシアの地方都市に暮らす父親フョードルは財を築き、美女・グルーシェニカと酒に溺れて暮らしている。

さて、これを「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」おられる東京書籍編集部の方々は、どう読むのでしょうか？　これを読んで、「フョードルがグルーシェニカと一緒に暮らしていて、毎日――どころか四六時中――飲んだくれて生活している」と思わないひとがいますか？　事実は、フョードルはグルーシェニカと同棲などしておらず、恋愛の対象にもしてもらえずにいて、たしかに酒は好きで飲んでいるにしても、始終酩酊してなどいません。それどころか、彼はこと金にかけては非常にシビアなので、商売を怠ったりなどは絶対にしません。その辺の抜け目はないんです。

ここで、まさか「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」おられる東京書籍編集部の方々は、右の文について、まさか「フョードルは財を築き、美女・グルーシェニカと酒に溺れて暮らしている」のうちの「溺れて暮らしている」ということばが「美女・グルーシェニカ」と「酒」との両方にかかるもので、文の全体としては、フョードルとグルーシェニカの同棲を意味していない、などといいださないでしょうね？　つまり、間違ってはいないから、このままでいい、などといいださないでしょうね？　もう一度確認しますが、あなたがたは「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が

今後も広く読み継がれていくことを願って」いるんですよね？　まさか、そういうひとたちが、「10代の人たち」に容易に誤解されるかもしれない文を容認などしないですよね？

さらに、「地方都市」ということばですが、これは適当ですか？　どういう根拠で「地方都市」というんですか？　ここでも、繰り返しますが、「10代の人たち」が「地方都市」と聞いて、どういうものを想像するかということを最優先に考えてもらわないと困ります。つまり、私はこの小説の舞台が「地方都市」というほど大きくはないんじゃないか、と疑っているんです。まさか、そういう規模の感覚はひとそれぞれだから、これも間違ってはいない、などといわないでしょうね？「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」いるひとたちなら、「10代の人たち」がどう読むことになるかを最優先にするはずですよね？

そうして、「暮らす父親フョードルは……暮らしている」というこの日本語は、「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」おられる御社編集部の方々には、まったく違和感がないんですか？　ないんでしょう。違和感があったら、そもそも直しを入れているはずだものなあ。

次。

長男ドミートリーは父親ゆずりの放蕩者で父親が夢中になっているグルーシェニカに執心し許嫁を放り出してしまう。父親を殺したいほど憎む半面、高潔な精神を持つ。次男イワンは父親と同様に人を蔑視し神を否定し兄ドミートリーの許嫁カテリーナに激しい思慕を抱く。三男アリョーシャは心優しく、愛の教えを説くゾシマ長老を尊敬している。彼は父親をはじめ誰からも愛されているがカラマーゾフの血が流れていることを強く意識している。

「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」おられる御社編集部の方々には、右の文がすんなり読めますか？「長男ドミートリーは父親ゆずりの放蕩者で父親が夢中になっているグルーシェニカに執心し許嫁を放り出してしまう」ですけれど、どうしてひとつも読点がないんですか？　こやま峰子大先生の文章の読点のなさに独特の味わいやら深みやらがあるからですか？　これ、「10代の人たち」がどう読むと思っているんですか？　さらに、いまの文のつづきが「父親を殺したいほど憎む半面、高潔な精神を持つ」ですが、これを読んで、「父親を殺したいほど憎む半面、高潔な精神を持つ」のが「長男ドミートリー」のことだ、とわかるためにちょっと時間を必要としませんでしたか？　必要としたはずです。これを、「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」おられる御社編集部の方々はどう思うんですか？「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」おられる方々なら、訂正の必要を感じますよね？　それとも、まったく違和感がないのかな？　読みづらいけど、間違ってはいないからいいのかな？　恥ずかしくないですか？

ここでこやま峰子大先生は、なんとか「カラマーゾフの血」が兄弟各人に行き渡っているという事情を説明しようとしています。それはわかります。しかし、だからといって、こういう文章は困ります。「次男イワンは父親と同様に人を蔑視し神を否定し兄ドミートリーの許嫁カテリーナに激しい思慕を抱く」という、この文にも読点なし。しかも、誤りが

あります。「父親と同様に人を蔑視し神を否定し」って、こんなことをいわれたら、イワンが泣きますよ。父親フョードルはべつに――少なくともイワンのようには――人を蔑視していませんし、神を否定などしていません。こやま峰子大先生はでたらめを書いています。フョードルは神を恐れていますよ。彼は死んだらどうなるのか、心配でしかたがないくらいなんです。そうして、イワン自身ですら、神を信じているんです。信じているからこそ、この世の悲惨を盾にして神に反抗するんです。イワンは無神論者ではありません。

それで、イワンが兄の許嫁についてどう思っていたかというと、これは『カラマーゾフの兄弟』では、ほとんど直接・詳細な記述がありません。まあ、これはいいとしましょう、いいだせば、きりがない。

で、「三男アリョーシャは心優しく、愛の教えを説くゾシマ長老を尊敬している」ですが、これは読点からして、「心優しく」はアリョーシャにかかるんでしょうが、ゾシマ長老にかかると読む「10代の人たち」を心配しなくて大丈夫ですか？　ここまでこやま峰子大先生の読点なしの非常に美しい文章を読まされた「10代の人たち」は、逆に緊張してしまうのじゃないでしょうか？　老婆心でいいますが、こやま峰子大先生は「心優しい三男アリョーシャは、愛の教えを説くゾシマ長老を尊敬している」とでも書けばよかったんじゃないですか？

それに、「彼は父親をはじめ誰からも愛されているがカラマーゾフの血が流れていることを強く意識している」というのは、この一文で「10代の人たち」は正しく理解できるんでしょうか？　つまり、もちろんこやま峰子大先生の意図としては、「放蕩者」であること、「人を蔑視し神を否定」することなどが「カラマーゾフの血」のゆえだ、ということを表現したいんでしょうが「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」おられる御社編集部の方々は、ここで唐突に「カラマーゾフの血」なんていわれて、未読の「10代の人たち」にどこまで通じると考えているんでしょうか？　間違ってはいないから、それでいいんですか？「カラマーゾフの血」はたしかに重要だと思いますが、その持ち出しかたがこやま峰子大先生の手にあまるんです。雑で、乱暴すぎる。そこに、すでに書いたような誤りが堂々と含まれてもいる。どうしてこんなことになるか？　こやま峰子大先生に『カラマーゾフの兄弟』が読めていないからです。

次。

> 読者は父親フョードルの殺害犯を捜しつつ、厖大な小説の世界に迷いこむ。カラマーゾフ家の料理人スメルジャコフはフョードルが白痴女に産ませた子で癲癇の病を持つ。まわりから差別されているので父フョードルを憎む気持ちが強い。

ここでの「カラマーゾフ家の料理人スメルジャコフはフョードルが白痴女に産ませた子で癲癇の病を持つ。まわりから差別されているのでフョードルを憎む気持ちが強い」を、いったい、「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」おられる御社編集部の方々は、危険だと思わなかったんでしょうか？　まず「白痴女」。何ですか、これは？　こんな表現がそのまま通るんですか？　あのねえ、右の文章から読み取れるのはこういうことです。「スメルジャコフが父フョードルを憎む気持ちが強いのは、母親が白痴女だからであり、自分が癲癇の病を持っているからであり、そのふたつのことのために自分がまわりから差別されているからだ」（もちろん、ここにフョードル自身の罪を責める気持ちもあるでしょうが、それは置いておきます）。つまり、この文章は、対象読者である「10代の人たち」に、白痴女の息子で、癲癇まで病んでいては、まわりから差別されても当然だよ

ね、と暗黙の了解を求めているんです。ひどいんじゃないですか？　これが小学校・中学校・高等学校の教科書を出版しているひとたちに許容されることなんですか？

また、右の文章を読んで、「あ、それじゃ、スメルジャコフもカラマーゾフの兄弟のひとりなんだ！」と理解できる「10代の人たち」がどれだけいて、しかも、なぜスメルジャコフだけは「料理人」なんだ？　と疑問に思うんでしょうか？

しかし、いっておきますが、『カラマーゾフの兄弟』のどこにもスメルジャコフの父親がフョードルだと断定する記述はありません。しかも、こやま峰子大先生が推す、光文社古典新訳文庫の翻訳者である最先端＝亀山郁夫大先生は、スメルジャコフの父親がグリゴーリーだなどといいはっているくらいなんですけれどね。

どうですか？　これでも、こやま峰子大先生の文章はちょっと問題があるかもしれないが、必ずしも間違ってはいないのだから、いいじゃないか？　ですか？

はい、次。

グルーシェニカはフョードルと組んで悪事を企み、自分に夢中になっている父親と息子を手玉に取る。

私は笑っちゃったんですが、これ、「グルーシェニカはフョードルと組んで悪事を企み、自分に夢中になっているフョードルとドミートリーを手玉に取る」ってことですよね。いいんですか、こんな文で？　わけがわからないでしょうが？『カラマーゾフの兄弟』をまだお読みでないというウエクサさんには意味がわかりましたか？　もっとも、御社のスタッフでは、かりに『カラマーゾフの兄弟』を読んだことのあるひとでも、これはこのことだよ、なんて答えることができないでしょう。ここ、『カラマーゾフの兄弟』を何度も読んでいる私には、こやま峰子大先生が何をいおうとしているか、ものすごく寛大な気持ちになろうとしてなら、わかりますよ。でも、これは『カラマーゾフの兄弟』をまだ読んでいない「10代の人たち」に、これから読んでもらおうという主旨の文なんですよね？　そういう「10代の人たち」にはまったく意味不明な文じゃないですか？　まさか「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」おられる御社編集部の方々は「そんなことはない」などといいだしませんよね？

んで、次。

スメルジャコフはイワンにそそのかされて父親を殺害。判決の前日、彼はイワンを訪ね、結局、父親を殺したのはあなただ、と言い残し自殺する。公判の席で、証人のイワンは「わたしがスメルジャコフをそそのかし殺させた」と叫ぶ。

ひどすぎる。これではまるでスメルジャコフがイワンにそそのかされたためだけでフョードルを殺したかのようじゃないですか。いいのか、そんなことで？　スメルジャコフにはスメルジャコフの意図があったんですよ。彼はイワンを利用しただけです。もちろん、イワンなしに殺人はできなかったでしょうけれど。

それで、「判決の前日、彼はイワンを訪ね、結局、父親を殺したのはあなただ、と言い残し自殺する」ですが、でたらめです。逆ですよ。スメルジャコフがイワンを訪ねたんじゃない。イワンがスメルジャコフを訪ねたんです。おまけに、こやま峰子大先生が今回あらためて読んだという最先端＝亀山郁夫大先生訳でも、当該箇所の章題は「スメルジャコフとの最初の面会」、「二度目のスメルジャコフ訪問」につづく「スメルジ

ャコフとの、三度目の、最後の対面」なんですよ。

ここで、いっておきます。「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」おられる御社編集部は、こやま峰子大先生が今回の執筆のためにあらためて最先端＝亀山郁夫大先生訳『カラマーゾフの兄弟』を読んだかどうか確認するときに、私のクレームについてきちんと説明したんでしょうか？　つまり、「大先生の文章がめちゃくちゃだという読者がいるんですが」といったんでしょうか？　それとも、怖くていえませんでしたか？　まあ、いったんでしょう。そうして、当のこやま峰子大先生は自分の書いた文章を読み返さなかったんでしょうか？　読み返して、間違いがないかどうか確認したんでしょうか？　確認したんでしょう。まさか確認しないほど無責任じゃないですよね？　確認して、なお、「判決の前日、彼はイワンを訪ね、結局、父親を殺したのはあなただ、と言い残し自殺する」の誤りに気づきもしなかったんでしょう。そうでないはずはないですよね、ウエクサさん？　つまり、こやま峰子大先生は、「スメルジャコフとの最初の面会」、「二度目のスメルジャコフ訪問」、「スメルジャコフとの、三度目の、最後の対面」とつづく小説の記述をまるっきり読めていなかったってことなんじゃないんですか？　だから、こやま峰子大先生は数十年前に読んだときのおぼろげな記憶だけをもとに、今回の原稿を書いたっていうんですよ。あらためてちゃんと読んだなんて大嘘だ、って。

また、「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」おられる御社編集部の方々は、いま私が指摘した誤りだけを誤りだと認めることにする、なんて判断をしないでしょうね？　その点だけは「間違ってはいない」ということができないから、訂正もやぶさかじゃない、なんて判断をしたりはしないですよね？　なにしろ、「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」おられる方々なら、こやま峰子大先生のここまでの文章全体が必ず一から書き直さなければならない文章だと判断するはずですものね？

さあ、それから次。

『カラマーゾフの兄弟』は、すべての年代の人々が各々の人生体験で理解し味わえる作品。それが古典といわれる理由でしょう。かなりの長編作品だけれど、カラマーゾフ家の父親の殺害事件をめぐる犯人を探しながら容易に読み進んでいくことができます。

はいはい、もう面倒くさくなってきました（いいですか、ウエクサさん、もううんざりなんですよ。わかっていただけてますか？）。「犯人を探しながら」ですが、さっきは「殺害犯を捜しつつ」と書いていましたよね。「探す」と「捜す」――これは意図的に使い分けているんですか？　そうじゃないですよねえ？

次。

私たちはお金を全く無視して生きていくわけにはいきません。上手につきあっていくしか道はないでしょう。カラマーゾフ家の人々は父親の遺産問題から罪深いドラマにはまりこみ、物語は一層混沌としてきます。金銭が人の欲望と複雑に絡んだとき、悲劇が生まれるとドストエフスキーはいいたかったのではないでしょうか。諸悪の根源は金銭にあるので、地獄の深みにはまらず生きていかなければなりません。

おいおい、いきなり何の話だよ？　馬鹿じゃないの？『カラマーゾフの兄弟』を書きながら、ドストエフスキーがそんなことをいいたかったのかよ？　それとも、これも間違ってはいない、なのかな？　こんな「教訓」を伝えるために、「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」おられる方々は『10代をよりよく生きる読書案内　海外編』を刊行したのかな？　これさあ、「10代の人たち」にも笑われますよ。「諸悪の根源は金銭にあるので」って、ドストエフスキーが泣きますよ。何だよ、「地獄の深みにはまらず生きていかなければなりません」って。これ、こやま峰子大先生の「人生体験」から、こうなったの？　あんまり素晴らしくって、涙が出ちゃうよ。

次。

ゾシマ長老とイワンの間でたたかわされるキリスト教と無神論の対話はこの小説の核であり難解な部分でもありますが読み進んでいくうちにみえてくるものがあります。不朽の名作物語の中で光を探してください。奇蹟と神秘に出会えるかもしれません。

またも読点なし。何でこれを変だと思わないのかねえ？　しかも、これさあ、「大審問官」のことをいっているんじゃないの？　たしかにゾシマ長老とイワンとがしゃべる場面はべつにありますよ。でも、こういう短い作品紹介文で、わざわざ思わせぶりに「この小説の核であり難解な部分でもありますが読み進んでいくうちにみえてくるものがあります」なんて断わるのは、「大審問官」でしょう？　そうして、「大審問官」でイワンと話すのはアリョーシャなんですよ。ゾシマ長老じゃありません。繰り返しますが、だから、こやま峰子大先生が今回あらためて『カラマーゾフの兄弟』をちゃんと読んだなんていうのはでたらめなんですよ。

そもそも、こやま峰子大先生には『カラマーゾフの兄弟』という作品なんかどうでもいいんでしょう。作品への愛もないし、理解もない。そんなひとにこの作品を紹介する――しかも「10代の人たち」に――資格などありません。読者と作品とが不幸になるだけです。

さらに、とってつけたような最後のふたつの文は何なんですかね？「もう説明するのが面倒だからいうけど、とにかくこれは不朽の名作物語なのよ」って、大急ぎでここまでの不備を取り繕っているようなもんですね。で、「奇蹟と神秘に出会えるかもしれません」って、おい、「奇蹟と神秘（と権威）」なしに生きる人間の自由と苦しみの小説なんだよ！　まるっきりでたらめじゃないか！

で、どうせ「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」おられる御社編集部の方々は、「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」おられるにもかかわらず、そういうのは「解釈の問題」だから、こやま峰子大先生がおっしゃる通りでいい、必ずしも間違ってはいないから、それでいい、というんでしょう？

さて、ここまで書いてきて「みえてくるものがあります」。つまり、東京書籍編集部の「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」いる、という主張が嘘っぱちだってことです。あんたらは、全然そんなことを考えちゃいません。自分たちの商売しか考えてないですね。「10代の」読者よりも、こやま峰子大先生とのおつきあいの方が大事だし、会社の面子やら資金やらの方が大事なんですよ。

というわけで、ウエクサさん、もうくたびれました。これだけ罵るのは、本当に疲れることなんですよ。それでも、もうちょっとだけ書いてみます。

御社編集部にいて、『カラマーゾフの兄弟』をすでに読んだことがあり、しかも、こやま峰子大先生の文章を読んで、妥当であるなんてことを口にした複数のスタッフは大馬鹿か腰抜けかのどちらかです。どちらにしても、出版社編集なんて仕事は辞めた方がいい。こやま峰子大先生のいいかげんな仕事を批判できなくて、どうして10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」いるなんて口がきけるでしょうか？　駄目なものは、駄目といいなさいよ。ついでにいえば、同じ『10代をよりよく生きる読書案内　海外編』中の、こやま峰子大先生による『赤毛のアン』の紹介文を読んだ私の周りの者――『赤毛のアン』を読んだことのある者二名、読んだことのない者一名――は失笑していましたよ。私を含めれば、全部で四名ね。

さて、「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」いる志の高い編集部員であれば、私に、「本書の姿勢は、作家の姿勢や作品解釈を問うことではけっしてありません」などとはいいません。いいですか、「作家の姿勢や作品解釈を問わないで」いながら、どうして誰かにその作品を薦めたりできるでしょう？　それでは、あなたがたはどういう基準で今回の推薦図書を選定したんですか？　まさか、それもこやま峰子大先生に丸投げなんじゃないでしょうね？　で、あなたがたは、ただもうこやま峰子大先生のいうがままに働いて、中身をまったく確かめもせず、そのまま印刷に回したんですか？　編集者というより、印刷業者の役に徹したというわけですか？　それでいて、自分たちは「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」いるだなんてよくもいえましたね。

あなたがたは、自分たちが「10代の人たち」にとんでもなくひどいものを送りつけているのかもしれない、紹介した個々の作品をとんでもなく傷つけているのかもしれない、という意識を常に持たなくてはならないんですよ。執筆者がとんでもなくひどいことを書いているかもしれない、と常に恐れなくてはならないんですよ。そうして、もし、これはひどい、と感じたなら、即座に執筆者と討論しなくてはなりません。出版社は、自分のところの出版物の内容に責任を持たなくてはならないんですよ。わかっていますか？　もし執筆者がいいかげんなことを書いたら、それを一般読者に届ける前に止めなくてはなりません。あなたがたがしなくて、誰がするんですか？　あなたがたは出版する以上、執筆者の原稿の内容にも文章にも責任を負わなければなりません。

「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」いる志の高い編集部員は、作品の選定から、執筆者の選定から、原稿の内容から、またその文章から、「10代の人たち」に向けて最良の本をつくろうとしなければなりません。そのとき、必ず、誰かに作品を薦めることの責任の重さを痛感していなければなりません。

誰かにある作品を薦めることの責任について、私はずっと考えつづけています。そうして、御社に限らず、多くの出版社の無節操・無責任なやりかたを、さんざん目にし、批判しつづけているんです。それが、私個人の企て、ブログおよびホームページの「連絡船」です。

たとえば、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』を誰彼に薦め

たい私は、最先端＝亀山郁夫大先生の翻訳や作品論があまりにもでたらめなので、こんなものを読まされる読者が不幸だと思い、また作品も不幸だと思うから、執拗に批判をつづけているんです。誰かに「書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」いるならば、このくらいの努力をしなくてはならないでしょう。いいですか、これは本当に苦痛なんですよ、御社のために書いているこの文章同様。

それを、飛ばし読みしかしていないにもかかわらず、「木下様のブログを拝読し、ひとつの精緻な論考としてたいへん参考になりました。／この度の木下様のご意見は、日本で翻訳された古今のドストエフスキー作品に精通されている研究者のご指摘として、真摯に受け止めさせていただきます」なんていいかげんに片づける厚顔無恥な返事をよこすウエクサさんは最低ですね。何の責任感もない。適当にあしらっておけばいいさ、ってことでしょう？　それで、私が直接電話をすれば、「もう、いいですか？」ですからね。

あなたがたはいったい何を自分たちの責任だと思っているんですか？　こやま峰子大先生に傷がつかないようにすることですか？　あなたがたの出版物や会社に傷がつかないようにすることですか？　そのとき、想定読者たる「10代の人たち」はあなたがたの頭にあるんですか？　ないよねえ？

そうだ、これを訊き忘れていましたが、あなたがたは、もし私が最初からこやま峰子大先生の文章について具体的誤りを指摘したとして、いったいどういうふうに検証するつもりだったんですか？　まさか、こやま峰子大先生に問い合わせるだけなんじゃないですよね？

あなたがたは対象読者である「10代の人たち」に対してあまりにも無責任です。

いや、もう本当に疲れてきた。くたくたです。しかし、もう少し。

この『10代をよりよく生きる読書案内　海外編』の執筆者たち＝岩辺泰吏、児玉ひろ美、小林功、渡部康夫の四名にいいます。あなたがたは、こやま峰子大先生のでたらめを知りながら、この仕事をしたのか？　もし、あなたがたが「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」いるなら、こやま峰子大先生に抗議するか、この仕事を降りるか、どちらかをしたはずだと私は思うんですが、どうでしょう？　つまり、自分はきちんと仕事をしているのに、こやま峰子大先生が編著者では、自分の仕事までがでたらめ・いいかげんとみなされてもしかたがないということになる、ということを考えたのか？　そのとき、「10代の人たち」のことを考えたのか？　ともに考えてなんかないよねえ？

さて、それから。

ウエクサさんのこの文章――

木下様のご意見は、作家論や解釈論ともいうべき、深遠な文学的視点からのご質問であるとうけたまわりましたが、本書の姿勢は、作家の姿勢や作品解釈を問うことではけっしてありません。ましてや、文学論争をのぞむものでもありません。

――ですが、私はものすごく似ている文章を知っているんですよね。

一方、光文社文芸編集部の駒井稔編集長は「『赤と黒』につきましては、読者からの反応はほとんどすべてが好意的ですし、読みやすく瑞々しい新訳でスタンダールの魅力がわかったという喜びの声だけが届いております。当編集部としましては些末な誤訳論争に与する気はまったくありません。もし野崎先生の訳に異論がおありなら、ご自分で新訳をなさったらいかがかというのが、正直な気持ちです」と文書でコメントした。

（産経新聞　二〇〇八年六月八日）

ウエクサさんも、駒井稔のように腐っています。自社の利益と著者・翻訳者の利益とだけを最優先にし、作品と読者とを蔑ろにしているんです。最悪です。

出版社が「本書の姿勢は、作家の姿勢や作品解釈を問うことではけっしてありません。ましてや、文学論争をのぞむものでもありません」なんていっていいはずがない。そんなことをいえば、その意味は、「10代の人たち」に偽物やクズを読ませたっていい、それが偽物だろうとクズだろうと、その判断は自分たちのすることじゃないから、ということになります。最先端＝亀山郁夫大先生の『カラマーゾフの兄弟』こそ偽物でありクズなんですよ。それを推しつつ、また、こやま峰子大先生の紹介文が最悪。しかも、出版社は何の責任も取るつもりがない。ふざけるな、って話です。それでも、「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」いるんだって？　いいかげんにしろよ。

というわけで、もし「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」いる志の高い編集部員がそちらにおられるなら、『10代をよりよく生きる読書案内　海外編』の即刻の回収・絶版をすべきでしょう。

私は誠実に書きました。そうして、誠実なお返事をお待ちします。

木下和郎

こうして、出版業界では、ろくに出版物の検証もしないまま、垂れ流しのようにでたらめを世間にふりまきつづけているわけです。

私は繰り返します。

「じゃ、誰だ、誰なんだ、結局のところ、最先端＝亀山郁夫の仕事が素晴らしいなんていっているのは？」

そうして、みんながこういうんです。

「私じゃない！」

「《私じゃない！》私じゃないとは、どういうことだ？」

（二〇一〇年四月十二日）

（19）の5

東京書籍からメールが来ました。

文中に「四月十三日付のメール」とあるのは、前回の文章（四月十二日）を私が夜中に書き、日付が変わってから送信したためです。

木下和郎様

謹啓
四月十三日付のメールの返信をいただきありがとうございました。
今回の件ではたいへんなお手間をおかけいたしまして、申し訳ございません。
また、弊社のメール文書や電話応対でご不快な思いをもたせてしまいましたことを、お詫び申し上げます。
ご指摘の内容につきましては、数度にわたり著者・編集スタッフで検討いたしております。
現在の経緯につきましてお伝え申し上げたく存じますが、メール等ではなく、直接お会いしてお話しさせていただけましたなら幸いでございます。
日時と場所は、木下さんのご指定にしたがいます。
お忙しい毎日のことと存じますが、どうかお時間をいただけますよう、ご配慮のほどよろしくお願い申し上げます。
敬具

二〇一〇年四月十六日

東京書籍株式会社
出版事業部　第二編集チーム
植草武士

私からの返信。

東京書籍　出版事業部　第二編集チーム　植草武士さま

メールをありがとうございます。

私は直接にお会いしたくありません。まだ勘違いなさっているようですが、これは私個人とあなたがたの問題なのではありません。一般読者とあなたがたとの問題なのです。

あなたがたとのやりとりはすべて公開で、つまり、この「連絡船」上で行なわれるべきです。今回のようなケースで、出版社がどのように対処するのか――最先端＝亀山郁夫の仕事に絡めて――強い関心を持っているのが、きわめて少数とはいえ、「連絡船」の読者です。彼らにすべてを伝えたいと思いますし、もちろん、もっと大きい数の、『10代をよりよく生きる読書案内　海外編』の一般読者たち、それから、たとえば、全国の学校図書館の先生がたにも知ってもらいたいのです。

ですから、私たちの今後のやりとりはすべてメールにてお願いします。そのすべてを私は「連絡船」で公開します。

ところで、あなたがたは「四月十三日付」の私のメールをお読みになりましたが、翌十四日夜における『10代をよりよく生きる読書案内　海外編』の「出版記念会」はいかがだったでしょうか？　これも「ご指摘の内容につきましては、数度にわたり著者・編集スタッフで検討いたしております」のうちの一度なのでしょうか？

誠実なお返事をお待ちします。

木下和郎

さて、四月十四日における『10代をよりよく生きる読書案内　海外編』の「出版記念会」について私が知ったのは、この本の著者のひとり岩辺泰吏のブログ

です。

4月14日（水）晴れ　「出版記念会」

夜は『10代をよりよく生きる読書案内―海外編―』の出版記念会だった。東京書籍から「国内編」に次ぐ2冊目として出した。1年間の企画と議論で出したからけっこうがんばった。海外編なので、自分としては、普段取り上げられないジャンルに目配りするつもりで探した。中でも韓国現代詩の『君がそぼ（原文ママ）にいても　僕は君が恋しい』（リュ・シュファ、蓮池薫訳）は見つけた時は本当にうれしかった。全ての中身はわかるとは言えなかったが、好きな詩がいくつか現れた。とてもすてきな、本の好きな仲間と過ごした時間が充実だった。10代に広がってくれるとうれしい。

（岩辺泰吏「岩辺泰吏の午後の歩き方」
http://ameblo.jp/iwanabe/day-20100414.html）

（二〇一〇年四月十六日）

（19）の6

東京書籍からメールが来ました。

木下和郎様

謹啓

メールのご返信が遅くなりましたこと、お詫び申し上げます。

木下様からご指摘いただきました点につきまして、編集委員会で充分吟味いたしました。

吟味の結果、一部事実誤認があることを確認いたしました。また、文章表現につきましても、ご指摘のように読者対象が中高生であることを考えますと、不十分な点がいくつか見られるとの判断をいたしました。

訂正につきましては、前回の繰返しで恐縮ですが、直接お会いしてお話しさせていただけますことを願っております。

しかし、ご面会がお許しいただけないのであれば、訂正につきましては、弊社の判断ですすめさせていただきます。

どうかお時間をいただけますよう、ご配慮のほど、重ねてお願い申し上げます。

敬具

二〇一〇年四月二十三日

東京書籍株式会社
出版事業部
植草武士

私からの返信。

東京書籍　植草武士さま

メールをありがとうございます。

なぜ私があなたがたに面会しなければならないのか、まったくわかりません。訂正は、あなたがたの判断で進めたらいいじゃないですか？

私としては、訂正されたものがおかしければ、また批判するまでのことです。

それにしても、あなたがたは、私へのメールが公開されることを承知していながら、どうしてこうもことばを惜しむのでしょうか？　いいですか？　あなたがたの回答を不特定多数のひとが読んでいるし、これからも読むことになるんですよ。現時点で、「10代をよりよく生きる読書案内」・「海外編」という単語の組み合わせで検索すると、グーグルでは、私の「連絡船」がトップに表示されるんですが、わかっていますか？　これは御社の信頼問題なんですよ。本当にわかっているんですか？

あなたがたは「編集委員会で充分吟味いたしました」ということの内容と経緯を公開すべきではないですか？

また、私は、『赤毛のアン』の紹介文についても言及しました。あれでは、読者に笑われるだけだということがわからないんですか？　つまり、こやま峰子がこの本の編著者としてまったく不適任だということをいっているんです。作品への愛も、理解もない。おそらく、他の作品の紹介文章もそうなんじゃないですか？　そのことが「編集委員会で充分吟味いたしました」ということに含まれていますか？

そういう反省のないひとたちに「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」いるだなどという資格はありません。というか、あなたがたはこのことを一から考え直す必要があるのじゃないですか？

ここで、また亀山郁夫の仕事について触れますが、私は彼が彼の翻訳作品についてどれほど表面上の訂正を入れようとも否定します。彼には無理だからです。つまり、彼があまりにも無能・無理解・無責任であるからです。私が彼に望むのは、彼のドストエフスキー翻訳および論文の撤回と絶版・回収です。『「10代をよりよく生きる読書案内　海外編』におけるこやま峰子も同じ。

さて、このことはぜひお返事いただきたいのですが、あなたがたがこれから「訂正」をされるとして、すでに配本されたものについては、どうされるのでしょう？　回収についてです。まさか、初版はそのまま回収せず、重版分からの訂正でいいとされるのではないですよね？「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」おられるなら、回収はしますよね？　もし回収がされるなら、書店員である私にはすぐにわかります。

繰り返しますが、不特定多数の読者が、あなたがたの回答に注目しています。

木下和郎

（二〇一〇年四月二十四日）

（19）の7

『10代をよりよく生きる読書案内　海外編』をめぐって東京書籍とやりとりをしているうちに、ほぼふた月が過ぎてしまいました。最後に私からメールを送ってからも、すでにひと月。とはいえ、すでに「やりとり」は途絶えているでしょう。東京書籍からは「回収」についての返事がありません。彼らは「回収」しません。つまり、こやま峰子によるあの数ページの文章が、訂正は必要だけれど「回収」

に値するほどにはひどくはないということなんでしょう。ひどいと思いますけどね。それに、今後訂正がなされるにしても、最先端＝亀山郁夫訳を推すことに変わりはないんでしょう。そういうものだ。

いや、もしかすると、この現在も彼らは「回収」について社内で議論しているのかもしれません。そうだとしても、それは彼らが今回の問題を過小評価していることの証左に他なりません。ま、いまだに議論などしているわけもないでしょう。そういうものだ。

こうしている間にも、こやま峰子のあの馬鹿な文章を読む「10代の人たち」があるでしょう。彼らがどこでそれを読むことになるか？　たとえば学校図書館。回収されない限り、日本全国の中学生・高校生は今後もずっと、学校図書館であの文章を読み、『カラマーゾフの兄弟』についての予断を持つでしょう。「10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼とし」、「海外の翻訳作品および、国内作品が今後も広く読み継がれていくことを願って」いるなどと口にする東京書籍は、もちろんそのことを承知しています。承知して、なお回収はしない。そういうものだ。

さて、日本全国の学校図書館に勤務されている方々に申し上げます。あなたがたの職場の書棚に収まっている『10代をよりよく生きる読書案内　海外編』は、ただちにゴミ箱に捨ててください。絶対に生徒の目に触れさせてはなりません。そうして、東京書籍に抗議の電話をかけてください。気骨のある先生がたに期待します。

もっとも、私はこう思ってもいるんです。『10代をよりよく生きる読書案内』なんていうタイトルの本を真面目に読むような中学生・高校生がもしもいるなら、そんな中学生・高校生は望みなしですね。ろくな大人になりません。そいつらは、ただお勉強として、先生に気に入られるよい子の読書をしたいだけです。そうして、まともな読書のできる中学生・高校生ならば、そもそもタイトルに反発を覚えるでしょうし、一種侮蔑的・反抗的な意図――さて、大人たちは、この自分に何を読めといっているのかな？　ええ？――でしか内容を読むことはないのじゃないでしょうか？　そういう十代の読者こそが私の希望です。

だったら、訂正も回収も必要がないじゃないか？――ですか？

いいや、訂正も回収も必要です。なぜなら――ここで私は「10代の人たち」を離れて一般論を口にします――、どれほど低レヴェルの読書しかできない読者にせよ、彼らにも常に本物の・真性の本が与えられるべきであって、でたらめや偽物やクズが与えられるべきではないんです。どんな読者にも、本物の・真性の本が与えられるべきなんです。

どれほど低レヴェルの読者にも、最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』は与えられるべきではないんです。彼ら自身がどれほど歓迎しようとも、です。最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』が偽物であり、クズだからです。

（二〇一〇年五月二十七日）

（19）の8

昨日の今日ですが、数時間前、私が自分の勤めている書店で二日分――私は昨日休みだったので――の伝票整理をしていましたら、そのなかに、次に引用する一枚の紙が綴じられていました。どうやら、これは昨日届いていたようなんです。昨日、私が出勤して、これに気がついていれば、昨日の私の文章も違ったものになっていたはずです。

書店様各位

書籍回収のお願い

二〇一〇年五月

謹啓　時下益々ご隆盛のこととお慶び申し上げます。平素は弊社刊行物に格別のお引き立てを賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、このたび弊社二〇一〇年三月刊行（三月十八日搬入）の書籍『10代をよりよく生きる読書案内　海外編』（こやま峰子・編著）の記述で不適切な箇所が見つかり、書籍を回収させていただくことになりました。

ご面倒をおかけしますが、ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

書籍名：10代をよりよく生きる読書案内　海外編（こやま峰子　編著）
本体価格：一四〇〇円　版型：四六版並製二七二頁
ISBN：978-4-487-7564-6
搬入日：二〇一〇年三月十八日

つきましては、ご多用の折、大変恐縮ではございますが、販売会社様経由にてご返品くださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

ご購入いただいたお客様からの問い合わせにつきましては、弊社出版事業部にて、ご対応させていただきます。

謹白

〒114―8524　東京都北区船堀二―一七―一
東京書籍株式会社　出版事業本部　出版事業部
TEL　〇三―五三九〇―七五三一
FAX　〇三―五三九〇―七五三八

というわけで、『10代をよりよく生きる読書案内　海外編』は回収になりました。この点に関して、東京書籍の対応は評価できます。もっとも、東京書籍から私に直接の連絡がないので、私のクレームからこの回収が行われるのかどうかはわかりませんが。ともあれ、私のクレームへの対応だと考えることにします。

よくやってくれました。この後も大変だとは思いますが、時間をかけてよい本に作り直されることを期待しています。

（二〇一〇年五月二十八日）

（20）

東京書籍とのやりとりはとんだ寄り道でした。思い出しましたが、私は「現代思想」四月号増刊「総特集＝ドストエフスキー」における最先端＝亀山郁夫訳「チーホンの庵室で」のひどさを指摘していたんでしたっけ。

しかし、もう少しだけ寄り道をしておきましょう。

まずは、NHKによる「ホリデー・インタビュー」（四月二十九日）ですね。この日はたまたま午前七時前にテレヴィをつけたんです。そうしたら、画面に最先端＝亀山郁夫が映っているじゃないですか。うわ、なんという一日の始まりなんだ、と思いましたよ。最悪です。私がテレヴィ画面で最先端＝亀山郁夫を見たのは、これが初めてでした。まあ、そんなことはいいんですが、とにかく、私はこの三十分番組のほんの終わりだけを観たわけです。

心の支え〝ドストエフスキー〟
～ロシア文学者・亀山郁夫さん～

「罪と罰」「カラマーゾフの兄弟」ロシアの文豪・ドストエフスキーの作品が最近新たに出版され、人気です。翻訳にあたった亀山さんは、ロシアの文学・芸術を40年以上にわたって研究、現在は東京外国語大学の学

長も務めています。13歳でドストエフスキーに出会い、60歳になった今でも学ぶことが多いという亀山さん。文学を始めた背景には、「喧嘩の絶えない家庭から目をそむけたい」という複雑な事情がありました。文学を志したきっかけや、私たち現代人はドストエフスキー作品から何を感じ、学び取ればいいのかを聞きました。

今回は、宇都宮放送局が制作しました。

（http://www.nhk.or.jp/a-holiday/bn10/bn0429.html）

私が観た範囲でいえば、最先端＝亀山郁夫は「五十歳を過ぎたら、それまではわからなかったドストエフスキーがわかるようになった」とかなんとか例によって例のごとくしゃべっていましたっけ。六十を過ぎた現在もまったく読めていないお前が何をいってるのか？　で、聞き手の金井直己アナウンサー（たぶん五十代）が「私にも読めますかね？」てなことをいい、「読めますとも」と最先端。やれやれ。金井直己は知っておいた方がいいですね――あなたの方が最先端＝亀山郁夫なんかより断然深くドストエフスキーを読めるんですよ！　むしろ、あなたの方がドストエフスキーについて最先端＝亀山郁夫に講釈を垂れた方がいい！

さて、次。

朝日新聞「ニッポン人脈記」（二〇一〇年五月二十日　夕刊）。

『カラマーゾフの兄弟』『罪と罰』の翻訳を手がける。直訳調を、ひらがなの多い読みやすい表現にしてみせた。

「誤訳だらけだ」との批判に亀山はいう。「細かな文法的なものを超えて、自然に読めるテクストをつくりたかった」

（関根和弘「ロシアへの虹――ニッポン人脈記」朝日新聞）

右の記事を書いた関根和弘に問いたい。最先端＝亀山郁夫が「『カラマーゾフの兄弟』『罪と罰』の翻訳を手がける」ということは事実ですね。しかし、最先端＝亀山郁夫の翻訳が「直訳調を、ひらがなの多い読みやすい表現にしてみせた」とあなたが書いた根拠は何ですか？「直訳調」とは、どの翻訳のどんな部分を指しているんですか？　あなたが「ひらがなの多い読みやすい表現」と書くのは、ひらがなが多いことで読みやすくなったということなのか、ひらがなの多いことも手伝って読みやすい表現が実現したということなのか？　あなたが最先端＝亀山郁夫訳がそれまでの訳よりも「読みやすい」というのは、具体的にどういうことなのか？

さらに問いたい。あなたはいったいどこまで「「誤訳だらけだ」との批判」を知っているのか？　その批判をあなたはどう考えているのか、正当なのか不当なのか？　また、それに対する最先端＝亀山郁夫の「細かな文法的なものを超えて、自然に読めるテクストをつくりたかった」をあなたはどう考えているのか？　いったい、最先端＝亀山郁夫の「細かな文法的なものを超えて」が何を意味するのか、あなたには答えられるのか？　また、「細かな文法的なものを超え」たために訳文がどういうものになってしまっているのか、あなたは答えられるのか？「自然に読めるテクスト」とはどういうものなのか？

はっきりいいますが、あなたにはどれひとつ満足に回答することができません。そういう状態であなたは右の記事を書いたんです。あなたはただただ「亀山郁夫万歳」の記事を書いたんです。「誤訳だらけ」という批判に触れたことも、当の批判を無力化する・その批判の存在に触れることによってかえって亀山訳に箔がつくという意味合いでしたまでのことですね。いったい、あなたにはでたらめな提灯記事を書くことしかできないんですか？　あなたにはあなた自身というものがないのか？

またこれを引用しますか？

七月、舞鶴に着き、汽車で品川に帰ってきた。一四年ぶりの帰郷。多

数の迎えにもかかわらず、日本がこんなに復興している驚きとは別の、大きなショックを受けた。

迎えの人々のなかに、もと一緒に働いた軍医や看護婦もいた。敗戦後すぐ帰国していた、ある軍医はいった。

「湯浅さん、あんたなんで戦犯なんてことに。あの戦争は正しかったなんて、言い張ったんだろう。ごまかしゃいいのに」

「そうじゃないんだ。君とあれやっただろう」

「え、何を？」

彼は戦後一一年にして初めて、湯浅さんに言われて生体解剖を思い出したのだった。過去を見つめてきた湯浅医師と、出迎えた医師との間には大きな隔たりがあった。

（野田正彰『戦争と罪責』岩波書店）

これが現在の朝日新聞です。いつまでも「え、何を？」といっていればいい。もうどうしようもない。

それでも、私は朝日新聞に投稿までしたんですね。「ゼロ年代の50冊」という企画記事で、あろうことか、そこに最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』が選出されていて、明日（二〇一〇年六月十三日）、これについての識者や一般読者の感想などが掲載されるんですが、そこに投稿したんです。

投稿するにあたって、私はこれまでの最先端＝亀山郁夫批判全文（三十五字×二十八行×二段×三四六ページ）のプリントアウトをバインダーに綴じ、表紙に投稿原稿とコメントの紙を貼りつけて、「ゆうパック」（なぜか私は「ペリカン便」だと勘違いしていました）で送ったんですね。送料八百円。

原稿とコメントは次の通り。

原稿――

「ゼロ年代の50冊」における
亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』について

登場する人物たちと彼らの関係、作品内の時系列や基本的諸事実などをまったく理解しないまま、原典のロシア語を、文脈を無視して誤解しつつ、稚拙な日本語に置き換えただけという、前代未聞のでたらめが、亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』だ。亀山の誤訳を、どんな翻訳作品にもつきものの表層的な誤訳として考えてはいけない。読みやすい日本語を心がけたために生じた誤訳などという亀山の弁解にごまかされてはならない。そもそも亀山に原作をまったく読めていないことこそが、夥しい誤訳として現われているのだ。これは深層的・構造的なものだ。どんな読者も亀山より作品を深く理解するだろう。亀山ほど狂った、素っ頓狂な読解はありえない。

なぜこんな翻訳が称揚されるのか？　ロシア文学研究者たちの怠慢。さらにＮＨＫをはじめ、もちろん朝日新聞を含むマスメディアの怠慢。追随する作家・書評家らの怠慢。それを鵜呑みにする読者たちの怠慢のためだ。

コメント――

亀山訳への批判を、私はこのほぼ二年間にわたってネット上で書きつづけています。これは現在も継続中です。分量は、文庫本の字詰めにして一〇〇〇ページを超えています。それほどまでに亀山の翻訳はひどい、それは『カラマーゾフの兄弟』に対する冒瀆です。

「ゼロ年代の50冊」にこの――どこに出しても恥ずかしい――でたらめ訳が取りあげられたことに驚きます。いいですか、亀山は現在進行中の『悪霊』でも「あなたの前には、ほとんど越えがたい深い淵が立ちは

だかっている」なんて訳文を出しているんですよ。亀山は日本語においてすら文章読解力ゼロ、作文能力ゼロ、ドストエフスキーの翻訳など論外です。

御社は最近の「人脈記」においても亀山を登場させ、誤訳問題にも触れていました。しかし、あれでは「誤訳はあるが、亀山は素晴らしい仕事をした」としか読めません。そんな馬鹿な話もありません。御社はこの誤訳問題を正確に認識していません。検証を怠っています。なるほど誤訳問題という現象はある、しかし、それについて自分たちはいかなる判断もしない、などということは許されません。

私は上の原稿の引用掲載を必ずしも望みません。なぜなら、またしても亀山訳が「毀誉褒貶だが、素晴らしい」などまとめられるようなたわけた記事の片棒をかつぎなくないからです。私が御社にこれを送るのは、御社の認識を改めてもらいたいからに他なりません。

どうか、以下の文章をお読みください。『カラマーゾフの兄弟』を亀山訳以外で読んだことのある方なら、必ず私の主張に同意いただけると思います。

（二〇一〇年六月十二日）

（追記）右まで書いて、二〇一〇年六月十三日午前三時前、私は郵便受けまで行ってきましたよ。朝日新聞の朝刊が届いていました。

【カラマーゾフの兄弟】視界開けた、古典は新しい

「知もて解し得」ないロシアの不可知と、生涯をかけて格闘してきた研究者が出したドストエフスキーの新訳が、爆発的なヒットとなって「文学界の事件」となった。亀山郁夫氏の訳したドストエフスキーの最後の大長編にして最高傑作『カラマーゾフの兄弟』は、読みやすくなった訳文で読者を獲得。編集部にも、幅広い年齢層から感想が寄せられた。

〈カラマーゾフの兄弟、読めた！〉と興奮気味に書いてきたのは、東京都の森由美子さん（66）。〈どんどん読めた。待ち時間やバスの中の読書だから「お客さん！　終点、降りてください！」と運転手のいらついた声に驚いたこともあった〉。また千葉県の須田健太さん（18）は〈再読させる強い魅力がある。特に「大審問官」へ至るイワンとアリョーシャの対話が圧巻〉と書いた。

50冊アンケートでも「新訳で読みやすくなり、視界がさあっと開けた」（作家の高山文彦さん）、「古典は永遠で、21世紀でも〝新しい〟ことを教えてくれた」（東京芸大准教授の布施英利さん）と、訳業をたたえる声が集まった。

飛躍的に分かりやすくなった同書には、しかし「誤訳」という批判もつきまとう。読者からの感想にも〈文学作品の翻訳は日本語として条理の立った読みやすいものであると同時に、緻密なものでなければならない〉（京都府の萩原俊治さん・62）といった厳しい指摘があった。

指摘の正否はおくとして、以下のような感想は、本と文化にたずさわるだれにとっても、重いのではないか。〈重厚で難解な印象のロシア文学が、驚くほど明快だった。初めて手にした巨匠の本。これ以後、私は今まで見向きもしなかった本に挑戦しているところだ〉（千葉県の石橋香織さん・39）

（近藤康太郎）

やれやれ、またこれだ。

「「知もて解し得」ないロシアの不可知と、生涯をかけて格闘してきた研究者」って、いったい誰のことなんだ？　もう最初からこれか！

東京都の森由美子さん（66）、千葉県の須田健太さん（18）、千葉県の石橋香織

さん（39）、残念ながら、あなたがたは『カラマーゾフの兄弟』の偽物をつかまされました。ご愁傷様です。

作家の高山文彦さん、東京芸大准教授の布施英利さん、大馬鹿です。金輪際、誰かに読書案内などしないでください。

記事を書いた近藤康太郎は、もう記者を辞めろ！「京都府の萩原俊治さん・62」の「厳しい指摘」を一応引用はしながら、「指摘の正否はおくとして」とは何だ？どんなでたらめ訳でも、読者がこれまで手をつけてこなかったような本を手に取るきっかけになれば、それでいいなどと、卑劣なごまかしをやるようでは、話にならない。お前の責任を痛感しろよ！　何をやっているんだ！

（21）

最先端＝亀山郁夫の仕事がいかにひどいかを知っている者にとって、朝日新聞・近藤康太郎による「【カラマーゾフの兄弟】視界開けた、古典は新しい」（二〇一〇年六月十三日）ほど愚劣で悲惨な記事はありません。記事が誤訳問題にまったく触れないでいたなら、これほど愚劣で悲惨な印象はなかったでしょう。近藤康太郎は、のっけから「「知もて解し得」ないロシアの不可知と、生涯をかけて格闘してきた研究者」などと最先端＝亀山郁夫を絶賛していて、誤訳問題をまともに採り上げる気なんかありはしません。最先端＝亀山郁夫が「「知もて解し得」ないロシアの不可知と、生涯をかけて格闘してきた研究者」ですって？　この冒頭だけで、近藤康太郎が誤訳問題どころか最先端＝亀山郁夫についてもまったく理解のないことが明らかです。もちろん、私の送った「ゆうパック」の文書も読んでいない。そうして、いざ誤訳問題に触れると、「指摘の正否はおくとして」だ。よくもこんなことがいえたものだ。

指摘の正否はおくとして、以下のような感想は、本と文化にたずさわるだれにとっても、重いのではないか。〈重厚で難解な印象のロシア文学が、驚くほど明快だった。初めて手にした巨匠の本。これ以後、私は今まで見向きもしなかった本に挑戦しているところだ〉（千葉県の石橋香織さん・39）

（朝日新聞「【カラマーゾフの兄弟】視界開けた、古典は新しい」）

いいか、近藤康太郎！「重厚で難解な印象のロシア文学が、驚くほど明快だった。初めて手にした巨匠の本。これ以後、私は今まで見向きもしなかった本に挑戦しているところだ」と書いた読者に最先端＝亀山郁夫がどれほどひどいことをしたのか、お前にわかっているのか？　全然わかっていない！　いいか、「本と文化にたずさわるだれにとっても、重い」のは、お前が考えているのとは正反対の意味で「重い」んだよ！　さらにいえば、お前は「本と文化にたずさわるだれ」の内に入らない！

なぜ「指摘の正否はおくとして」なのか？　これを思い出しますね。

本書の目的は、10代の人たちに書物の広大な世界を伝え、読書の楽しさを伝えることを主眼としています。その目的のために、個々の執筆者の視点による80タイトルの「翻訳作品」を紹介いたしました。

木下様のご意見は、作家論や解釈論ともいうべき、深遠な文学的視点からのご質問であるとうけたまわりましたが、本書の姿勢は、作家の姿勢や作品解釈を問うことではけっしてありません。ましてや、文学論争をのぞむものでもありません。

木下様のブログを拝読し、ひとつの精緻な論考としてたいへん参考になりました。

この度の木下様のご意見は、日本で翻訳された古今のドストエフスキー

作品に精通されている研究者のご指摘として、真摯に受け止めさせていただきます。

貴重なご指摘をいただき、まことにありがとうございました。

（東京書籍から私へのメール）

なぜこうもそっくりなのか？　朝日新聞記者も東京書籍編集者も会社員だからですよ。いや、さらにいえば、日本の会社員だからです。

もちろん、もうひとつ。

一方、光文社文芸編集部の駒井稔編集長は「『赤と黒』につきましては、読者からの反応はほとんどすべてが好意的ですし、読みやすく瑞々しい新訳でスタンダールの魅力がわかったという喜びの声だけが届いております。当編集部としましては些末な誤訳論争に与する気はまったくありません。もし野崎先生の訳に異論がおありなら、ご自分で新訳をなさったらいかがかというのが、正直な気持ちです」と文書でコメントした。

（産経新聞　二〇〇八年六月八日）

これが日本のマスメディアの実際です。ひどすぎる。

なぜ朝日新聞は「誤訳問題」を自ら検証しようとしないのか？　怠惰だからです。最先端＝亀山郁夫のでたらめは、過去に『カラマーゾフの兄弟』をきちんと読んだ者には即座にわかる程度のものです。

これを引用しておきます。

私の胸に去来したのは、

「ああ、やっぱりな」

という思いだった。

亀山郁夫という人物のドストエフスキー解釈が世間で話題になりはじめたのはいつごろからだったろうか。

ニュースにとり上げられ、週刊誌の特集記事となり、毎日出版文化賞特別賞を受賞し、書評家に褒めちぎられ、そしてＮＨＫの特集で報じられたあたりで、私はようやく亀山郁夫氏という人の存在に気がついた。

しかし、亀山郁夫氏の〝ぺなぺなと安っぽいフロイト流解釈を土台とした解題〟は私にはとうてい受けれがたいもので、こんなものがドストエフスキーの作品論決定版として認知されていることに遅ればせながらに仰天した覚えがある（過去に日記で書いた覚えがある）。

感じたことを感じたままに言うしかない、という立場だが、ハッキリ言って、亀山郁夫氏のドストエフスキー諸作品解釈は出鱈目だ。

しかし、この「亀山郁夫氏のドストエフスキー諸作品解釈は出鱈目」という理解を、私の弟を除いては、今日まで誰とも共有することができなかった。私にとって、もっとも戦慄すべき事実は、この点にある。

「ウンコはカレーではない」ということを説明するのが、なぜこれほど困難なのか。

念を押すように繰り返すけれど、私は、彼の解釈が間違っていると胸を張って断言できる。なぜ断言できるかというと、それだけくっきりハッキリと、でたらめな解釈だからだ。

どうデタメラかについては、何千語もの言葉や文字を必要とするだろうから、他批判検証サイトにおまかせするけれども、とにかく、ひとめで、パッと、瞬間的に、出鱈目であることはわかる。そういうたぐいのことだ。

毎日出版文化賞特別賞を受賞してようが、ＮＨＫの番組で能書きを垂れようが、間違っているものは間違っている。しかし、周囲の人々とこの理解を共有することができない。

ドストエフスキーの翻訳小説の字面だけを追いかけているのでないなら、作品の文脈や作者が込めた主張、道理や理路というものと亀山氏の解釈がとても相容れるものではないことくらい、私のようなものにでもわかる。

こんな私でもわかるようなことを、書評家や、作家や、出版社や新聞社や国営テレビ局がわからない。

わからないどころか、書評家や、作家や、出版社や新聞社や国営テレビ局までが、やんやともてはやす。

よりにもよって、どうしてこういうものがドストエフスキー解釈の決定版として、定着するにいたってしまったのか。

ウンコをカレーと信じているなら、それもいい。たかがカレーの話だ。食べた私が体調を崩せばそれですむ。

しかし、ドストエフスキーはだめだ。

カレーの味を一生知らなくてもどうってこともないが、ドストエフスキーは違う。

彼の諸作品は、人類全体への偉大な贈り物だ。

カレーと信じてウンコを食ってるではとうていすまされない。

（純の◆姫林檎◆日記　http://www.yuubook.com/junnikki/junnikki_70.html）

「とにかく、ひとめで、パッと、瞬間的に、出鱈目であることはわかる。そういうたぐいのこと」なんですよ。それほど簡単な検証すら朝日新聞は怠っているわけです。

私も唱和しましょう。

「ウンコはカレーではない」ということを説明するのが、なぜこれほど困難なのか。

それとともに、これを。

「なるほど」と、彼はいった。「あなたはそうお思いでしょう、それにはよっぽどの傲慢さが必要だ、と。しかし、僕は必要なだけの傲慢さをもっているにすぎないんですよ、まったく。この先、何が待っているか、こういうすべてのことのあとで何が起るか、僕は知りません。さしあたり、大勢の病人があり、それをなおしてやらねばならないんです。そのあとで、彼らも反省するでしょうし、僕もそうするでしょう。しかし、最も急を要することは、彼らをなおしてやることです。僕は自分としてできるだけ彼らを守ってやる、ただそれだけです」

「何ものに対して守るんです、それは？」

リウーは窓のほうを振返った。遠くに海が、視界を限る線のひときわ濃い暗さによってそれと判じられた。彼はただ疲労だけを感じながら、しかも同時に、この風変りな、しかしまるで兄弟のような気のする人物に、もうちょっと心を打明けてみたいという、突然の、不条理な欲望と戦っていた。

「全然わからない、それは。まったく、僕には全然わからない。僕がこの職業にはいったときは、ただ抽象的にそうしたんです。ある意味からいえば。つまり、その必要があったから、これも世間並みの一つの地位で、若い連中が考えるうちの一つだからというわけです。あるいはまた、それが僕のような労働者の息子には特別困難な道だったからかもしれません。そうして、やがて、死ぬところを見なければならなかった。知っていますか、どうしても死にたがらない人たちのあることを？　聞いたことがありますか――一人の女が死のうとする瞬間に《いや、いや、死ぬのはいや！》と叫ぶ声を？　僕は聞いたんです。そうして、自分はそ

ういうことに慣れっこにはなれないと、そのとき気がついたんです。僕は、そのころ若かったし、自分の嫌悪は世界の秩序そのものに向けられていると思っていました。その後、僕ももっと謙譲な気持になりました。ただしかし、僕は相変らず、死ぬところを見ることには慣れっこになれないんです。僕はそれ以上はなんにも知りません。しかし、結局……」

リウーは口をつぐみ、ふたたび腰を下ろした。彼は口のなかがからからになっているのを感じた。

「結局？」とタルーが静かにいった。

「結局……」と、医師は言葉を続け、そして、なおためらいながら、じいっとタルーの顔を見つめた。「これは、あなたのような人には理解できることではないかと思うのですがね、とにかく、この世の秩序が死の掟に支配されている以上は、おそらく神にとって、人々が自分を信じてくれないほうがいいかもしれないんです。そうして、あらんかぎりの力で、死と戦ったほうがいいんです、神が黙している天上の世界に眼を向けたりしないで」

「なるほど」と、タルーはうなずいた。「いわれる意味はわかります。しかし、あなたの勝利はつねに一時的なものですね。ただそれだけですよ」

リウーは暗い気持になったようであった。

「つねにね、それは知っています。それだからって、戦いをやめる理由にはなりません」

「たしかに、理由にはなりません。しかし、そうなると僕は考えてみたくなるんですがね、このペストがあなたにとってはたしてどういうものになるか」

「ええ、そうです」と、リウーはいった。「際限なく続く敗北です」

（カミュ『ペスト』　宮崎嶺雄訳　新潮文庫）

（二〇一〇年六月十四日）

（22）

私がブログ「連絡船」上に「翻訳の問題――『赤と黒』、『カラマーゾフの兄弟』」という文章を公開したのが二〇〇八年六月十九日でした。で、その次の文章――七月十三日公開――からはもう最先端＝亀山郁夫の翻訳を具体的に批判したんですね。つまり、私が真面目に最先端＝亀山郁夫のひどさを批判してから、もう本当に二年が経過しようとしているわけです。二年！　当初は、まさかこんなことになるとは考えもしていませんでした。私はいま四十七歳と五か月ですから、人生の四・二％以上をこの批判に費やしていることになります。人生の四・二％！　もちろん、そんなものはただの算数にしかすぎませんれどね。しかし、最先端＝亀山郁夫がこれほどまでに最先端でなければ、これほどまでにひどい翻訳と解題等とを公にしていなければ、私はこの四・二％をべつのことに使うことができたんです。この二年間、私は『カラマーゾフの兄弟』のことばかり考えていて、他の読書をほとんどしていません。いや、まったくしていないといった方がいいかもしれません。その代わり、これほどまでに『カラマーゾフの兄弟』のことを考えることもなかったわけです。以前にも書きましたが、ある意味、私は最先端＝亀山郁夫に感謝しなければならないのでもあります。

もう何度も繰り返してきたので、うんざりされる方もあるでしょうが、またいいます。ここまで私が書いてきた最先端＝亀山郁夫批判の文章は、三十五字×二十八行×二段×三五三ページです（単純計算で六九一、八八〇字）。一般的な文庫本の字詰めを三十九字×十七行（六六三字）とすると、一、〇四三ページ。これを四〇〇字詰め原稿用紙の枚数に換算すれば、一、七三〇枚ですよ。因みに、光文社古典新訳文庫の字詰めは、三十八字×十六行（六〇八字）ですから、それの一、一三八ページ分。最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』の第一巻は四四三ページ。第二巻は五〇一ページ。第三巻は五四一ページ。第四巻は七〇〇ページ。第五巻が三六五ページ。総計二、五五〇ページ。その三十二％分を私はこの二年間で書いてきたわけです。さて、最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフ

の兄弟』全五巻を揃えている不幸な・あまりにも悲惨な読者は、あなたの本棚を見てください。ここまでの私の批判文章は、あなたの大事に収蔵しているこの翻訳の第一巻と第二巻とを合わせたより長いです。第二巻と第三巻とを合わせたより長いです。第三巻と第四巻とを合わせたよりは短いですが、第四巻と第五巻とを合わせたよりは長いです。まあ、ほぼ第一巻と第三巻とを合わせたのに等しいくらいの分量ですね。まだまだですか？　いや、真面目に思うんですが、この最先端＝亀山郁夫批判の文章はいずれ、全五巻をも凌駕する分量になるんじゃないでしょうか？　ということは、あと原稿用紙二、一四六枚分書けばいいのか。あはははははは。

（二〇一〇年六月二十二日）

（23）

たまたま読んだ文章ですが、とても興味深い内容だったので、紹介しておきます。杉山茂樹による「W杯日本代表は正々堂々と全敗せよ」（「Ｖｏｉｃｅ」二〇一〇年七月号　ＰＨＰ研究所）

http://zasshi.news.yahoo.co.jp/article?a=20100611-00000001-voice-pol
http://zasshi.news.yahoo.co.jp/article?a=20100611-00000002-voice-pol

◇日本のサッカーのスタンダードが上がらない理由◇

日本代表のサッカーは、10年前に比べればたしかに強くなっているが、これは国内での話である。重要なのは世界のなかで日本のポジションが上がっているかどうかだ。

しかし日本サッカーのスタンダードは決して高いとはいえない。原因の一つは、メディア（記者）にある。日本のメディアが世界を知らなさすぎて、日本人のサッカーを見る目が養われないのだ。

いま日本では、サッカー中継を〝オフチューブ〟という方式で放送するのが一般的である。試合のある国から映像を伝送してもらい、それを日本のスタジオで画面を観ながら、インターネットなどから引っ張り出した資料によって実況・解説する。解説者やアナウンサーなどスタッフを現地に行かせないぶん、費用は安く済む。しかしこれでは、伝える側が本場のサッカーを知らないため、視聴者にも伝わるはずがない。

また日本は、メディアが選手や監督を甘やかしすぎである。たとえば、選手は試合のあと、記者との交流の場「ミックスゾーン」を通ってバスに乗り込む。この場で選手が話をするのは当然のことで、外国では「あなた、ちょっと！」と選手をひっつかまえて厳しい質問を浴びせる。

だが日本人のリポーターは、強引にやると、選手から嫌われるとか、インタビューしてもらえないとか、雑誌の表紙に出てもらえなくなるといった意識がある。概して「お疲れのところ、ありがとうございます」などと、監督や選手をヨイショするだけである。

さらに、日本は世界のサッカーを観る環境がよくない。全世界の試合を観るには、スカイパーフェクＴＶ（スカパー）などの有料放送に加入しなければならない。しかしスカパー加入者は二五〇万人程度しかおらず、そのなかでサッカーの生中継の試合を観ている人は20人に1人いるかどうかだろう。熱烈なサッカーファン以外は、わざわざスカパーに加入してまで観ないし、若い人はそもそもスカパーに入るお金すらない。海外のサッカー中継を安価で放送している中国や香港、ベトナムのほうが、世界のサッカーに触れやすく、急速にサッカーのスタンダードが上がっている。

だから日本では、世界のサッカーに詳しい者とそうでない者の二極化がますます進んでいる。いい例として、たとえば今回、日本代表の第３ＧＫに川口能活が選ばれたが、ＮＨＫや民放テレビしか観ない、ふだんサッカーにあまり接しない視聴者は「この人知ってる。あの川口がまた入ったんだ。がんばって」と歓迎の反応となる。しかしサッカーに詳しい者にとっては、99％試合に出ない第３ＧＫとはいえ、川口は長らく代

表から外れていた選手であり、現在故障中の身で、Jリーグにも出場していない選手。代表選出に疑問をもったにちがいない。

サッカーを見る目を育てなければ、選手や監督に対しても、厳しい声を届けることができない。結果、日本全体のサッカーのスタンダードは上がらない。

（杉山茂樹「W杯日本代表は正々堂々と全敗せよ」）

なんだか既視感がありませんか？

右の文章を少々書き換えてみましょう。

「しかし日本の文学のスタンダードは決して高いとはいえない。原因の一つは、メディア（記者）にある。日本のメディアが世界文学を知らなさすぎて、日本人の文学を見る目が養われないのだ。

いま日本では、世界文学の翻訳を〝古典新訳〟という方式で出版するのが一般的である。しかしこれでは、翻訳者が本場の文学を知らないため、読者にも伝わるはずがない。

また日本は、メディアが翻訳者や編集者を甘やかしすぎである。たとえば、翻訳者は出版のあと、記者との交流の場「グレーゾーン」を通って行く。この場で翻訳者が話をするのは当然のことで、外国では「あなた、ちょっと！」と翻訳者をひっつかまえて厳しい質問を浴びせる。

だが日本人のリポーターは、強引にやると、翻訳者から嫌われるとか、インタビューしてもらえないとか、雑誌の表紙に出てもらえなくなるといった意識がある。概して「お疲れのところ、ありがとうございます」などと、翻訳者や編集者をヨイショするだけである。

だから日本では、文学に詳しい者とそうでない者との二極化がますます進んでいる。いい例として、たとえば最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』が朝日新聞による「ゼロ年代の50冊」の上位に選ばれたが、ＮＨＫや朝日新聞などしか知らない、ふだん文学に接しない読者は「この人知ってる。あの亀山郁夫大先生がまた入ったんだ。がんばって」と歓迎の反応となる。しかし、文学に詳しい者にとって、最先端＝亀山郁夫ほど読解力も文章力もないでたらめな翻訳者もいない。とはいえ、本人はその選出にまったく疑問をもたなかったに違いないが。

文学を読む力を育てなければ、翻訳者や編集者に対しても、厳しい声を届けることができない。結果、日本全体の文学のスタンダードは上がらない。」

（二〇一〇年六月二十四日）

（24）

六月からずっと停滞しているこの最先端＝亀山郁夫批判ですが、いま、昨年に書いた『カラマーゾフの兄弟』についての文章のつづきに手をつけようとしながら、その前に予定外の文章を書きつつあるのに、ここでまたさらに予定外の一文を書かなければならなくなりました。

まず、昨八日に最先端＝亀山郁夫訳『悪霊』の第一巻（全三巻）が光文社古典新訳文庫として発売されたことですね。これ、私の勤める書店への配本数からして、かなりの部数を刷っていますね。古典新訳文庫の他の作品の約五倍程度でしょうか。しかし、まあ、それはいいです。

ここで書かなければならなくなったのは、その前日七日に発売された雑誌「群像」の十月号のことです。「「悪」とドストエフスキー」というタイトルでの対談で、最先端＝亀山郁夫の相手は作家中村文則。つまり、高村薫につづいて、今度は中村文則ということです。

のっけから、こうです。

中村　亀山さんにお会いすると、緊張してしまいます。なぜかというと、

僕にとってドストエフスキーという作家はすごく大きくて、ドストエフスキーが実際に書いた創作ノートなども含め徹底的に研究している方は、ドストエフスキーの半身に感じてしまうんです。

亀山さんの場合、『カラマーゾフの兄弟』と『罪と罰』を翻訳なさっていて、ドストエフスキーが書いた原文にじかに触れて、かつ作品としてつくり上げていく。それを経験し、達成された方は、僕の中ではもう普通の人ではないというか、畏怖を感じます。だから、お会いするとなると、非常に緊張するわけです。

亀山　お会いするのは三度目ですね。

中村　『カラマーゾフの兄弟』は、大学生のときに新潮文庫で読みました。あのときのイメージがとにかく強烈な体験で、自分の中で余りにも大き過ぎるんです。亀山さんの新訳が出たとき、当然興味はあったのですが、最初に読んだときの印象がどうなるのかと、手にとるのがすごく怖かったんです。

でも、そうはいっても気になるので手にとって読んだら、『カラマーゾフの兄弟』にもう一回初めて出会えたような新鮮な感じを受けました。ドストエフスキーと最初に出会ったときに体験する喜びって格別だと思うんです。一気に読んで、それをもう一回体験することができました。きょうは本当にお礼をいおうと思ってきました。

亀山　そういっていただけると、とても嬉しいです。

中村　亀山さんの新訳は読みやすい翻訳といわれているけれども、当然ながら読みやすさだけでなくリズムがあって、リズムから熱が生まれてくる印象がありました。僕はロシア語が全然わからないですが、この熱は恐らくドストエフスキーそのものの熱なのではないかと感じました。本当にすばらしいお仕事です。相当な労力ですよね。そのことが最新刊『ドストエフスキーとの59の旅』にもたくさん書いてありました。すごく興味深かったです。亀山さんのこれまでのドストエフスキー研究の成果も書かれていますし、人生の洞察や知への思いとか、様々に深くて人と文学のかかわりにしみじみ感じ入りました。

亀山　どうしよう。今日は僕のほうが聞きたいことが山ほどあるのに（笑）。

（「「悪」とドストエフスキー」「群像」二〇一〇年十月号）

私はどう反応すればいいんですか？　爆笑すればいいんですか？　じゃあ、爆笑しましょう。

中村　ドストエフスキーはかなり意識的に構成を、数字にもこだわってつくり上げています。僕も色々とやってみたのですが、やはり神秘的なものも加えたいと思いました。

『罪と罰』は本当にしかるべき筋を通って老婆を殺してしまう。最後は神の存在が見え隠れする。僕は信仰を持たないので、神秘的ではあるけれども、同時に違和感も覚えるところです。「運命の書」ということが自分の主観から確信に変わったのが、亀山さんがすでにお書きになった『罪と罰』ノート』の「黙過」の問題を読んだ時です。ラスコーリニコフの犯罪が神の黙過で行われたということから見えてくる「ラザロの復活」の発見がある。『罪と罰』の中で引用されているラザロの復活は結局、自分の奇跡を見せるためのキリストの黙過……。それがこの小説の裏テーマというか、やっぱりこれは間違いなく「運命の書」だと思ったんです。

亀山　「黙過」の問題ですが、『掏摸（スリ）』の木崎は根本的に不作為というか、みずから手を下すことの快感よりも、直接的なものではない、神的な自由というか、神が経験しているある種の絶対的自由というものを人間が人間の身において経験することが最高の快楽だというふうにいっている。それはドストエフスキーがつかみ取った一つの究極の真理であり、そのニヒリズムをどう乗り越えるかが大きな課題になったと思いますね。

（同）

ここも爆笑ですか？　爆笑しましょう。

亀山　経験を積むことだけでいえば、現代はインターネットでほぼすべて経験できてしまう。いま作家はどういう形で経験を書けるのか。経験というと、ドラッグとか、セックスとか、そうなってしまうような気がするんです。それは大きいけれども、そうではなく人間としての生の経験を積んでいってほしい。僕自身、大学時代にドストエフスキーにあれほどかぶれながらも、ドストエフスキーという作家を語れるだけの経験も能力もないとわかって、アヴァンギャルドの研究をはじめました。少くともこの領域は経験が要らないからです（笑）。その後、スターリン時代の文化研究に移った。これも経験が要らないからでした。だって、スターリン時代を経験しろといっても経験のしようがありませんもの（笑）。でも二十年間かけて小さな体験を積み上げていきました。そこで、ようやくドストエフスキーに接近できるような気になったんです。五十代に入ってはじめて……。

中村　僕もまだ、これからいろいろな経験をして、僕なりの『異邦人』『嘔吐』を書いてみたいと思います。

亀山　それにしても、中村さんがここまでドストエフスキーに精通しているとは思いもよりませんでした。作家っていうのは、本当に獰猛で貪欲な生き物だと思います。僕は、泡を食いました（笑）。

（同）

やっぱり爆笑――ですか？　そうですよね。本当は、いま引用したところだけじゃなくて、全編爆笑なんですけれど、興味のある方は、ぜひ「群像」十月号をお読みください。

そういうわけで、私は中村文則という作家がまったく信用できません。哀れにすら思えてきます。これまでも彼の作品を読んだことはないし、これからも読みません。

（二〇一〇年九月九日）

（25）

驚いたんですが、いま「google」で「亀山郁夫」と入力して検索すると、トップに表示されるのはこういうサイト群なんですね。

○亀山郁夫――Wikipedia
○亀山郁夫とは――はてなキーワード
○亀山郁夫の傲慢――こころなきみにも（萩原俊治）
○連絡船――亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』がいかにひどいか（木下和郎）

そうして、「亀山郁夫の画像検索結果」という項目を挟んで、次に来るのが、

○亀山訳「検証」（木下豊房）

笑っちゃいました。

さて、停滞中の「連絡船」ですが、数日中には新しい文章を公開できると思います。あらかじめタイトルを公開しておきますが、「自尊心の病」に憑かれた読者にアリョーシャは見えない」です。

（二〇一〇年十一月一日）

「自尊心の病に憑かれた」読者にアリョーシャは見えない

萩原俊治氏の「こころなきみにも」(http://d.hatena.ne.jp/yumetiyo/)における最先端＝亀山郁夫批判をずっと――何度も、繰り返し――読んでいますが、最近までどうしてもわからないことがありました。

ドストエフスキーの読者には自明の事柄だが、ドストエフスキーの作品のプロット(諸事実の因果関係)には、無数の「穴」が開いている。「穴」とはもちろん比喩的な言い方で、諸事実の因果関係がしかとは確定できないような事態を、私は「穴」と呼ぶ。この穴を読者が埋めてゆくとき、私たちの「正体」(ハナ・アーレントのいう〝who〟)が明らかになる。そしてそれを論文などで世間に発表すれば、論者の正体が暴露される。暴露というと大げさな言い方に聞こえるかもしれないが、誰もが隠しておきたいような自分の恥部まで公衆の面前で明らかになるのだから、それはやはり暴露というしかない。詳しくは「ドストエフスキーの壺の壺(http://d.hatena.ne.jp/yumetiyo/files/%E3%83%89%E3%82%B9%E3%83%88%E3%82%A8%E3%83%95%E3%82%B9%E3%82%AD%E3%83%BC%E3%81%AE%E5%A3%BA%E3%81%AE%E5%A3%BA.pdf)」を見てほしい。

(萩原俊治「プロットの穴と尻の穴」――「こころなきみにも」http://d.hatena.ne.jp/yumetiyo/20100530/1275212943)

萩原氏は、最先端＝亀山郁夫批判の最初から何度も右の主張を繰り返しています。そうして、まず私にわからなかったのは、「ドストエフスキーの作品のプロット(諸事実の因果関係)には、無数の「穴」が開いている」ということでした。私はそういうことを考えたことがありませんでした。なるほど、いわれてみれば、たしかにその通りです。その通りなんですが、私はそのことを意識したことがありませんでした。私がこの四半世紀ほどやってきたことは、そのことを自覚しないまま、その「穴」を自分流に「埋めて」いくことでした。私は単に作品に合わせて自分をチューニングし、作品が私に要請する――と私に思われる――ままに読んできただけです。「ドストエフスキーの作品のプロット(諸事実の因果関係)には、無数の「穴」が開いている」ならば、読者はその「穴」を埋めないでは読めないわけです。そうして、どんなふうに私がそれらの「穴」を「埋めて」きたかということを、私はここまで書きつづけてきたんでした。萩原氏の主張は、私にとって「自明の事柄」ではありませんでした。

さらに私にわからなかったのが、「この穴を読者が埋めてゆくとき、私たちの「正体」(ハナ・アーレントのいう〝who〟)が明らかになる。そしてそれを論文などで世間に発表すれば、論者の正体が暴露される」ということです。私が真っ先に考えたのは、――それならば、この私の正体も暴露されているわけだ――ということですね。とはいえ、私は自分の読みを公開しなくてはなりませんでしたし、おそらく今後もそうでしょう。なぜなら、最先端＝亀山郁夫を批判するためには、批判者が「じゃあ、お前はどう読んでいるんだ?」に答えなくてはならないからです(しかし、この点については後でもう一度触れます)。それに、この批判においては、研究者でもない素人の読者に最先端＝亀山郁夫訳がどう見えるかという視点が重要でもあるはずだからです。つまり、この〝いわゆる「誤訳問題」〟が専門の研究者の内輪揉めなんかでは断じてありえないということを示す必要がありました。この問題が一般の読者にとっても非常に重要であるということ、逆にいえば、一般の読者がドストエフスキー作品を読むのにさして支障のない、専門家レヴェルの高度な問題に過ぎないなどという誤解をされないようにする必要がありました。そのために、私が自分の読みをさらすことによって「隠しておきたいような自分の恥部まで公衆の面前で明らかになる」としても、しかたがありません。

いや、実をいえば、それらのことがなぜ私にわからなかったのかが私にわかっていなかったんです。なぜわからなかったかがわかってみれば、萩原氏の主張は私にとって非常に納得のいくものでした。

私にわからなかったのは、同じ『カラマーゾフの兄弟』という作品を読んでいながら、その作品のプロットの「穴」を「埋めて」いく読者たちの、その「埋め」

かたにどれほど多様な実例がありうるかということだったんです。私は、細かな差異はあるにしても、誰もがほぼ私と同じ読みかたをしているだろうとばかり考えていたんですね。最先端＝亀山郁夫の読みだけが、そこからあまりにもかけ離れ、突出してとんちんかんな読みだから、私が自分の読みを提出すれば、それでこの「連絡船」の読者も同意するだろうくらいにしか考えていなかったわけです。ところが、どうやら実際はそうでもないらしい、いや、全然そうではない、ということを、私はようやく最近になって認識しました。もちろん、最先端＝亀山郁夫の読みが突出してとんちんかんであることは揺るぎもしませんが、それほどまでなくとも、世のなかには私に理解しがたい読みが多数あるのだということです。しかもそれが、真剣な――どうやら研究者を含んで――読者のなかにあるのだ、ということです（最先端＝亀山郁夫が「真剣な研究者」のうちに含まれないことはいうまでもありません）。

おそらく萩原氏は、彼自身の読みの変遷をも踏まえてはいるでしょうが、他人の読みの膨大な実例をこれまでに見てきたからこそ、「この穴を読者が埋めてゆくとき、私たちの「正体」（ハナ・アーレントのいう"who"）が明らかになる。そしてそれを論文などで世間に発表すれば、論者の正体が暴露される」というのだと思います。

萩原氏はさらに「自尊心の病」ということを何度も強調しています。自分の「自尊心の病」に気づいていないひとには『地下室の手記』以降のドストエフスキー作品を理解することができないというんです。

> 「自尊心の病」というのは、私が授業や論文でドストエフスキーの思想を説明するときもう三十年近く使っている言葉で、とても重要な言葉だと思っている。「自尊心の病」とは何か。それは、自分の「自尊心」あるいは「肥大した自尊心」に気づかないということだ。つまり、「自尊心」（エゴイズム）の延長上に「肥大した自尊心」があり、両者は基本的には同じもので、そのような自尊心に憑かれた自分に気づかない者を「自尊心の病に憑かれた者」と私は呼んでいる。このことについては、当ブログの「金啓子様に」で簡単に述べた。しかし、もう少し詳しく説明しておこう。なぜなら、私はドストエフスキーの思想を説明するときだけではなく、亀山郁夫批判を行うときも、この「自尊心の病」という言葉を繰り返し使うことになるからだ。
>
> （萩原俊治「自尊心の病」――「こころなきみにも」http://dhatena.ne.jp/yumetiyo/20100503/1273038835）

そうして、こうつづけます。

> この言葉を思いついたのは、『地下室の手記』を読んでいたときだ。肥大した自尊心に憑かれた『地下室の手記』の主人公は小説の末尾で次のようにいう。
>
> わたし自身のことを言えば、諸君が半分も追いつめて考える勇気のなかったことを、わたしはわたしの人生においてぎりぎりのところまで追いつめて考えただけだ。まあ諸君など、自分を欺きながら、自分の臆病さを良識と取り違え、自分を慰めているだけだ。
>
> じつに傲慢な言い方で腹立たしく思う読者もいるかもしれないが、ここで怒ってはだめで、これは彼の言う通りなのである。つまり、私たちの誰もが自尊心の病に憑かれたエゴイストなのに、そのことにまったく気づいていないか、気づいても気づかないふりをしているだけなのだ。このことを認めないと『地下室の手記』以降のドストエフスキー、それこそ本当のドストエフスキーなのだが、そのドストエフスキーが分からなくなる。つまり、私たちの誰もが自尊心の病に憑かれたエゴイストだということを認めないと、キリスト教においてもっとも重要な「砕かれた心」（パウロ）もルネ・ジラールのいう「模倣の欲望」も分からなくなり、

結局、ドストエフスキーの後期小説群が分からなくなる。これについてはこれまで「わが隣人ドストエフスキー」（『論集・ドストエフスキーと現代』所収）、当ブログの「不正」で紹介した二つの論文、「ドストエフスキーとヴェイユ（http://d.hatena.ne.jp/yumetiyo/files/%E3%83%89%E3%82%B9%E3%83%88%E3%82%A8%E3%83%95%E3%82%B9%E3%82%AD%E3%83%BC%E3%81%A8%E3%83%B4%E3%82%A7%E3%82%A4%E3%83%A6.pdf）」、「ドストエフスキーと二つの不平等（http://d.hatena.ne.jp/yumetiyo/files/%E3%83%89%E3%82%B9%E3%83%88%E3%82%A8%E3%83%95%E3%82%B9%E3%82%AD%E3%83%BC%E3%81%A8%E4%BA%8C%E3%81%A4%E3%81%AE%E4%B8%8D%E5%B9%B3%E7%AD%89.pdf）」などで書いてきたので、詳しくはそちらを見てほしい。

それでは、ドストエフスキーはいつ自分が自尊心の病に憑かれていると気づいたのか。『地下室の手記』の主人公の先に引用した言葉から分かるように、ドストエフスキーが『地下室の手記』を書いていた頃、そのことに気づいていたのは明らかだ。「ドストエフスキーとヴェイユ」で述べたように、『地下室の手記』の主人公の自尊心はリーザという売春婦に会うことによって砕かれる。砕かれて初めて、彼はそれまで自分が自尊心の病に憑かれていたことに気づく。砕かれなければ気づかなかっただろう。

従って、「ドストエフスキーとヴェイユ」で述べたように、『地下室の手記』を執筆していた頃、ドストエフスキーの回心への道も開かれたのだ。なぜ自尊心が砕かれると回心への道が開かれるのか。それは自分を何者かであると思う自尊心がなくなり、自己が無に近づくからだ。それは自分を創造した造物主に一歩近づく、あるいは、その造物主とひとつのものになろうとする運動に他ならない。「ドストエフスキーとヴェイユ」で紹介したように、このような事態をシモーヌ・ヴェイユは「脱創造」という言葉で説明している。

ちなみに、「わが隣人ドストエフスキー」で述べたことだが、ドストエフスキーの回心は一挙に完成したのではなく、遺作となった『カラマーゾフの兄弟』まで少しずつ進展し深まってゆく。言うまでもないことかもしれないが、回心という事態には一挙に完成するものもあれば、ドストエフスキーの回心のように徐々に進行するものもある。これについてはすでにウィリアム・ジェームズの『宗教的経験の諸相』という有名な研究があるので、それを参考にして頂きたい。

（同）

ドストエフスキーが自らの「自尊心の病」に気づき、そのことを自覚的に作品として書き始めたと萩原氏はいい、そのために、それ以降（『地下室の手記』以降）のドストエフスキー作品を読む読者も、作者同様に自らの自尊心の病に気づいていないと、作品を理解できない、というんです。

さて、ここでも私がずっと引っかかっていたのが、私自身が自分の自尊心に気づいている者なのかどうか、ということでした。私が自分を「自尊心の病に憑かれた者」ではないといいきれるのかどうか。

私は結局、私自身が自分の自尊心に気づいている者である、といってもいいんですが、これを積極的にいう気にならないんです。話がややこしくなりますから、あまり説明しませんが、私はもうかなり昔に、そのようなことで自分を問い詰めることを意識的にやめてしまっているんです。自分を試すな、自分を秤にかけるな、ということでずっとやってきたつもりです。自分をむやみに試したり、秤にかけたりすることが、必ず短絡的で極端な結論、馬鹿馬鹿しくうさんくさい結論を出してしまうことを私はよく知っているつもりです。のんびりだらだらが私の信条です。まあ、それはいいでしょう。

そうして、それよりも、ここでも私が知るべきだったのは、先ほどと同様に、自分の自尊心に気づいていないひとたち、「自尊心の病に憑かれた」読者たちの目に『カラマーゾフの兄弟』がどのように見えるのか、その実例だったんですね。もちろん、最先端＝亀山郁夫はその実例に違いありませんが、あくまで極端な、これほどまでの馬鹿もありえないという代物で、そんなものは例外中の例外だと私は思っていました。繰り返しますが、私は、ほとんどの読者が私と同じよ

うに『カラマーゾフの兄弟』を読んでいるだろうとばかり思っていたんですね。ところが、これもまた違いました。いま、そのことを私は――非常な驚きとともに――はっきりと認識しています。

さて、「自尊心の病に憑かれた」読者の目に『カラマーゾフの兄弟』がどのように見えるのか？　結論からいえば、「自尊心の病に憑かれた」読者には、この小説の主人公アリョーシャが見えないんです。

最先端＝亀山郁夫を典型的な例として引いてみます。

ゾシマがアリョーシャにとっての精神的な父親、つまり彼の理想のモデルだったことはいうまでもない。そのゾシマが愛する弟子に俗界に出ていくことを勧める背景には、何か隠された理由があったのではないか――そんな邪推さえ催させるところが、アリョーシャにはある。

端的にいうなら、このまま修道院に住みつづけることでアリョーシャの大成がもたらされる可能性はすくない、そんな読みが長老のなかにあったのではないか。言い換えれば、ゾシマは、その預言者らしい直感によってアリョーシャの限界を見抜いていたとも考えられるのだ。もともとゾシマの人間観には、俗界での厳しい精神的試練を乗りこえることで、はじめて聖性を獲得できるという考え方が横たわっていた。それは、おそらく最晩年のドストエフスキーが到達した世界観、いや、長年にわたって彼が構想を抱きつづけていた『偉大な罪人の生涯』に通じ合う世界観である。さらにいうなら、このままアリョーシャが修道院にとどまれば、並みの修道僧に堕するしかないという真剣な危惧があったのかもしれない。だからこそゾシマは「穢れを知れ」と命じたとも考えられるのである。

ゾシマの不安は、作者自身の不安でもあったからこそ、「第一の小説」における「わたしの主人公」の描き方には、相対的かつ批判的なまなざしが入り込んだ。では、アリョーシャの問題点はどこにあるのか。

（亀山郁夫「解題」）

あるいは、

「第一の小説」におけるアリョーシャは、とりわけミーチャの圧倒的な存在感の前に少しばかりかすんだ観があるが、ドストエフスキーは、「第二の小説」の構想をにらんで、すべての状況に通じながら、けっして表には出ることのない、そして過剰に自らを露出させることのない主人公として、アリョーシャを設定していたことがうかがえる（アリョーシャにとっては、すべてが「第二の小説」にあるのだ）。

（同）

また、

あらためて繰り返すことになるが、「第一の小説」においてアリョーシャは、必ずしも主人公と呼ぶことができるほど活躍しておらず、一種のトリックスター的な役割に甘んじている。その彼が、主人公としての相貌をちらりとかいまみせるのが、ゾシマの遺体から発した腐臭に衝撃を受ける場面である。強い不信におそわれ、およそ想像もつかない失意がアリョーシャをとらえる。あるいはゾシマ長老が懸念していたかもしれない、まさに彼の脆さ、弱さが一瞬、露呈した瞬間でもある。

（同）

さらに、

「地面に倒れたときにはひよわな青年だったが、立ち上がったときには、もう生涯かわらない、確固とした戦士に生まれ変わっていた」（第3部第

7編「アリョーシャ」）「生涯かわらない、確固とした戦士」――。この一行のもつ意味は、はかりしれず大きい。しかもいささか鼻白むような、過剰にメロドラマ的な「語り」であり、語り手の作為を大いに感じさせる部分である。「戦士」とは何か？　それは果たして、ドストエフスキーやゾシマ長老が考える「聖人」と両立するのか？　そして、どのような信念が、彼の内部に最終的に宿ったのか。そもそも、十三年後の現在を描く「第二の小説」を残したまま、「生涯かわらない」などという保証が、はたして可能なのか。

（同）

やれやれ。

いってみたいことはいくつもあるんですが、アリョーシャが見えない読者、「自尊心の病に憑かれた」読者は、たとえばゾシマ長老に過剰な期待を寄せるんです。最先端＝亀山郁夫の繰り返す文句「聖性」などがその典型です。ゾシマに「聖性」があったり、彼が「聖人」であったりするというような読みかたが私には理解できません。ゾシマはごく普通の人間にすぎません。ただ、彼は自分の「自尊心」に気づいている人間なんです。それだけです。また、ゾシマにいわゆる「揺るぎない信仰」があるかのように思うのも間違いだといっておきましょう。つまり、彼が――最先端＝亀山郁夫のいうように――「聖性」を帯びている人物だと考えるひとは、目の前に描かれているゾシマの行動や状態が彼の不断の努力のゆえだということを理解していません。彼だって普通の人間なんですよ。だから、彼には超越的な「予言」の能力もありません。音信不通の息子の法要を願い出た老婆に、息子は生きているとゾシマがいったのは、「予言」なのではなくて、ただの人間的常識判断にすぎません。ゾシマに息子の安否がわかるはずもありません。彼は老婆に、わからないものを死んだと決めつけてはいけないといっただけのことです。実際に老婆の息子は生きていましたが、死んでいたとしても、ゾシマは同じことをいったでしょう。その場合、「予言」ははずれたわけで、ただそれだけです。過去にもはずれた「予言」などはたくさんあったでしょう。この「予言」の場面は、ゾシマの周囲の人びとが彼をどう見ていたかを描いているだけのことで、まさか本人に「予言」の能力があるなどと読むひとがいるだなんて私は考えもしていませんでした。しかし、いるんですね。そういうひとは『カラマーゾフの兄弟』における「信仰」を劇的な意味で誤解しています。「信仰」がなにかとんでもない試練や経験がないと獲得できないものであるかのように、また、ひとたび「信仰」が得られれば、それが永続的なものであるかのように、そうして、超越的な「予言」の能力が備わるかのようにしか理解できないんです。

しかし、それでもなお、ゾシマがミーチャに跪拝したことはどう説明するんだ（という問いすら私には信じがたいんですが）、というひとがあるかもしれません。これも単にゾシマの人間的洞察の結果です。それだけのことです。天からお告げがあったわけじゃありません。ゾシマは超能力者じゃありません。もしゾシマに何か信仰による超越的な能力が備わっているならば、この同じ作品内に「大審問官」のあることは無意味になります。いいですか、ゾシマはただの普通の人間です。最先端＝亀山郁夫が「それは果たして、ドストエフスキーやゾシマ長老が考える「聖人」と両立するのか？」なんていうのは大間違いです。誰がそんな「聖人」のことなんかを考えていたというのか？　あるいは、「聖人」という語の受け取りが間違っていますね。まあ、最先端＝亀山郁夫というひとは、常に実質よりも外部からの評価しか、いわゆる「権威」しか問題にしないひとだから、しかたがないです。つくづくなさけない。ともあれ、最先端＝亀山郁夫がそんなことをいうのも、彼にアリョーシャが見えていないからですよ。

そんなふうだから、アリョーシャが見えない読者、「自尊心の病に憑かれた」読者は、いわゆる「第二の小説」にこれまた過剰な期待をせざるをえないんです。「ドストエフスキーは、「第二の小説」の構想をにらんで、すべての状況に通じながら、けっして表には出ることのない、そして過剰に自らを露出させることのない主人公として、アリョーシャを設定していたことがうかがえる（アリョーシャにとっては、すべてが「第二の小説」にあるのだ）」ということになります。「第一の小説」において、どれほどアリョーシャが活躍していたかというこ

とがまったく見えていないために、彼らはそんなことをいうんです。彼らの目は節穴です。しかし、残念ながら、私がそう指摘しても、そのことが彼らに理解できるはずもないんです。

とはいえ、この私にしても「他の登場人物たちに比べると、何となくおとなしく、無口のように――自身のことをあまり語らない――感じられるアリョーシャ」なんていうことを以前にいいもしていたわけです。しかし、ここでもまた、私は、アリョーシャが見えない読者、「自尊心の病に憑かれた」読者に、まさか本当にアリョーシャが見えていないなどということがありうるとは思いもしていなかったんです。そういう読者を想定していたら、右のようにはいわなかっただろうと思います。

そこで、私がこれからいうのは、アリョーシャがなぜ「他の登場人物たちに比べると、何となくおとなしく、無口のように――自身のことをあまり語らない――感じられる」のか、というその理由です。また、アリョーシャが見えない読者、「自尊心の病に憑かれた」読者にはなぜアリョーシャが見えないのか、というその理由です。しかも、その理由こそが『カラマーゾフの兄弟』という作品の核心でもあると私はいいます。したがって、アリョーシャが見えない読者、「自尊心の病に憑かれた」読者には『カラマーゾフの兄弟』という作品もまた見えていないのだと私はいいます。それゆえ、私と彼らとは、同じ『カラマーゾフの兄弟』を読んでいながら、実はまったくべつの作品を読んでいるということになってしまうんです。私は以前に、私のこの一連の文章をきちんと読んでくれたひとへの批判にはちゃんと答えようといいましたが、撤回します。私は、私の読んでいる『カラマーゾフの兄弟』を読んでいる読者の私への批判には答えることができますが、べつの『カラマーゾフの兄弟』を読んでいるひとには答えようがないんです。いや、答えることができても、それが「自尊心の病に憑かれた」読者にはまったく通じないんです。それほどの差異が、私と「自尊心の病に憑かれた」読者との間には存在します。しばらく前までは到底信じられないことでしたが、いまはたしかにその存在を私は認識しています。そういうわけで、あらかじめ断わっておきますが、ここで私がいくらしゃべろうが、アリョーシャが見えない読者、「自尊心の病に憑かれた」読者は、私がこれから説明することについて、絶対に納得することになりません。怒り狂うだけです。なぜなら、私は彼らにまったく見えていないものについてしゃべるからです。彼らからすると、妄想・幻覚としかいいえないことが私に見えているというしかないからです。つまり、自らが「自尊心の病に憑かれた」読者であるということを認められないひとにはけして見えないことを私はしゃべるのだ、ということです。

重ねていいましょう。私がここまでやってきた最先端＝亀山郁夫批判の中心はアリョーシャの「あなたじゃない」についてでしたが、私は今後も同じ中心の周りをぐるぐる回るだけです。そうして、アリョーシャが見えない読者、「自尊心の病に憑かれた」読者にはけしてアリョーシャの「あなたじゃない」の意味がわかりません。もし、アリョーシャの「あなたじゃない」を考えるときに、ほんのわずかでも「それじゃ、アリョーシャは犯人を誰だというのか？」という問いを持つ読者は「あなたじゃない」を全然理解していません。「あなたじゃない」といったときのアリョーシャは、「父親を殺したのは自分だ」とイワンが思っているから、そういっただけです。イワンが「自分だ」と思うそのことに問題があるんです。そんなふうに思ってはならない、ということだけをアリョーシャは訴えたわけです。したがって、そういう読者は、イワン・カラマーゾフの何が問題なのかも全然理解していないのだ、と私はいいます。そういう読者の読む『カラマーゾフの兄弟』は、私の読んでいる『カラマーゾフの兄弟』ではありません。だから、彼らと私とで議論のできるはずもありません。

とはいえ、私はここまで、その点についてまったく無自覚なまま最先端＝亀山郁夫――もちろん「自尊心の病に憑かれた」――を批判してきたわけですから、同じ観点から、今後もやはりどうしても、アリョーシャが見えない読者、「自尊心の病に憑かれた」読者の読みかたを批判せねばなりません。「自尊心の病に憑かれた」読者は自分の「自尊心の病」に気づかないからしかたがないし、そのことで彼らを責めてもしかたがない――彼らに責任能力がないからしかたがない――んですが、それでも、そんなひとたちが結局のところ、『カラマーゾフの兄弟』をねじまげて読んでしまうのだから、自らの「自尊心の病」に気

づいている読者を守るためにも、また『カラマーゾフの兄弟』という作品を守るためにも、アリョーシャが見えない読者、「自尊心の病に憑かれた」読者を批判せざるをえないんです。ところが、そうやって彼らを批判しながら、私は彼らの反論に答えることができません。彼らには私に見えているものを妄想・幻覚だというしかないし、私にも自分に見えているものを彼らに見せることができないからです。なんという複雑な事情が私を待ち受けていたのか――私は自分で驚いています。

さて、私がここでしゃべるのは、この一連の記述全体（これまでのものはもちろん、これからの分をも含んで）の見取り図とでもいうべきものになります。さっきもいいましたが、私はアリョーシャの「あなたじゃない」から離れるつもりがなく、今後の記述にしても、さして進捗などしません。私は同じことをずっと繰り返すだけです。ともあれ、詳細は、すでに昨年のうちに書き始めていた原稿の、この先公開する――いったいどれくらい先になるのか――長い文章に譲るとして、全体の見取り図をあらかじめ提示しておきましょう。

しかし、その前に私はさっきいいかけたことのつづきをいわなくてはなりません。つまり、最先端＝亀山郁夫を批判する者は自分の『カラマーゾフの兄弟』についての読みを提出しなくてはならない、といったことのつづきです。実をいうと、その私の主張は正しいのだろうか、と私は疑ってもいます。私の最先端＝亀山郁夫批判のやりかたは間違っているのではないか？

モノローグ小説の伏線はある事実と結びつき、その秘められた意味を明らかにするのである。しかし、ポリフォニー小説の伏線は、さまざまな伏線と緩やかに結びつくだけで、いつまでも最終的な意味を獲得しないままになる。ドストエフスキーの小説では、このような例は無数に挙げられる。

その中でも、すでに述べた主人公の真実は代表的なものだ。ある主人公の真実はその主人公が生きているかぎり暫定的なものであり、確定しない。このため、ある主人公の言動がどのような意味をもつのか、読者は最終的に決定することができない。

（萩原俊治「ドストエフスキーの壺の壺」）

右の「主人公の真実」とは、バフチンが「ドストエフスキーの小説に登場してくる主要人物のことを「主人公」と言い、「登場人物」とは言わない」こと、さらに、「バフチンのいう主人公の真実とは、最終的に確定した真実ではなく、主人公によって現在受け入れられている真実に過ぎない」という、同じ萩原氏の文章で述べられていたことを踏まえています。

さて、『カラマーゾフの兄弟』の、そのように「確定しない」主人公の真実を私は確定したものとしてずっとしゃべりつづけてきたのではないでしょうか？つまり、それが私の「穴」埋めですね。私は勝手に「物語」をつくってしまっているのじゃないでしょうか？　私は最先端＝亀山郁夫が勝手につくっている「物語」に対抗して、自分のつくった「物語」を提出しているにすぎないのじゃないでしょうか？

だが、こんな物語は北川にはしゃべれない。あのとき、北川がぼくにはなしてくれたのとは内容がちがうというのではない。内容もちがうだろうが、内容の問題ではない。

いや、それを内容にしてしまったのが、ぼくのウソだった。あのとき、北川がぼくにはなした、そのことがすべてなのに、ぼくは、その内容を物語にした。

（田中小実昌「北川はぼくに」　河出文庫『ポロポロ』所収）

田中小実昌の「北川はぼくに」は、語り手の「ぼく」が、かつて北川という人物が話してくれたことに、いろんな解釈を加え、意味づけをして、これまで

いろんなところでしゃべってきたわけなんですが――もちろん、当人のいないところでです。そのつど、その「物語」は誰彼に面白がられたことでしょう――、それがそもそも北川が「ぼく」に話したことと全然べつのことをしゃべっていたのではないか、「ぼく」は勝手な「物語」をつくってしまっているのではないのか、北川に非常に悪いことをしてしまっているのではないのか――「北川がぼくにはなした、そのことがすべてなのに」――、と疑っているんです。――という私の説明もわかりづらいでしょうから、とにかく「北川はぼくに」を読んでみてください。そういえば、私は小説作品を読むときに――保坂和志を引きもしながら――「読んだことを、まとめようとするな」とかこれまでにいっていませんでしたっけ？　萩原氏はずっと「物語の暴力」ということで、そのように勝手に「物語」をつくってしまうことについて警告しつづけてもいます。これも最初のうちは、私にはよく理解できないことだったんですが、「そうだ、それは「北川はぼくに」や保坂和志じゃないか。萩原氏は私のまったく知らないことを述べているわけではないのだ」と、あるとき不意にわかったんですね。

むろん、どんなひとも自分で「物語」をつくらないでは――プロットの「穴」埋めをしないでは――『カラマーゾフの兄弟』を読むことはできません。しかし、常に作品そのものに立ち戻って、これまでの自分の「物語」を新しく更新するということはできますし、そうでなくてはなりません。

ただ、私には、私が最先端＝亀山郁夫のあまりにもひどすぎる「物語」を批判するときに、私が自分の「物語」を提出することが本当に有効なのかどうかがわからないんです。しかし、最先端＝亀山郁夫のでたらめに騙されている・騙されかかっている読者のなかには、この私の「物語」を必要としているひとがあるのじゃないか、私の「物語」をそのひとたちの読み――つまり、そのひとたちそれぞれの「物語」――に照射することによって、そのひとたちが誤った「物語」から抜け出すことができるのではないか、とは思っているんです。もっとも、私の想定している、そうした読者のうちに、もちろん「自尊心の病」に憑かれた読者は入っていないんですけれど。

そういうわけで、私の最先端＝亀山郁夫批判の「全体の見取り図」です。

ざっと、こんなふうです。

小説『カラマーゾフの兄弟』において描かれているのは、人間が神の存在なしには生きていけないということです。人間は自分たちだけでなどやっていけません。神の存在を認める認めない、あるいは、神の創ったこの世界を認める認めないなどということの決定権など人間にはありません。人間は人間だけの知識や思想だけで自立することができません。人間は必ず人間より以上の大きな存在を必要としています。人間は自分たちなどちっぽけな存在でしかないということを知らなければなりません。人間はとにかく、いまの思い上がり――人間が人間だけの知識や思想だけで自立しようとする――を捨てて、自分より大きな何者か――つまり、それが神ですが――の前にへりくだらなくてはなりません。人間のあるべき姿は、それぞれが自分こそ他の誰よりも罪深い人間だと自覚し、そんな自分のためにも祈ってくれるひとがいると信じている――このとき必ず「謙遜な勇気」が必要になります――姿です。その姿へと向かう登場人物の代表として、ミーチャがいます。反対に、右の考えかたにあくまで逆らって自滅する登場人物としてイワンがいます。このときアリョーシャはそのどちらでもありません。そのアリョーシャがこの小説の主人公です。

私は昨年に書いた長い文章で、イワンとミーチャとがどのように違うか、また、アリョーシャの書いたゾシマ長老のことばとイワンの言動との対比を示して、イワンがどれほど駄目なのかをいいました。

イワンには、最終的に――それがいつのことなのか、誰にもわかりません――どういう結果になろうが、とにかくいまこの瞬間に生きている人間として、神の前に立ち、自らへりくだり、「人間の顔」を正視し、自身を投げ出すということができないんです。彼はいますぐに「結果」を知りたい。「結果」は保証されなければならないんです。実は、そういう

「結果」――それがいつのことなのか、誰にもわかりません――は、とにかくいまこの瞬間に生きている「人間の顔」を持った生身のひとりひとりの人間がそれぞれに自身を投げ出すことの長い長い連鎖・継続・継承によってしかもたらされるはずのないものなんです、たぶん。イワンはしかし、若く性急です。自分が「十七年も荒野で祈りつづけ」るなんてことすら冗談ではないわけです。彼にはまだ「謙遜な勇気」を持つことができません。彼は自分自身をいまあるままに保ちながら、いますぐ「結果」を知りたい。自分を無にしたり、犠牲にしたり、礎石にしたりすることなしに、いますぐ「結果」を知りたい。「結果」を知ってなら、「信仰」もしようというんです。しかし、いまこの瞬間の自分の「信仰」が最終的に無駄になるのだとしたら、「信仰」なんかごめんです。保証が得られないのだったら、自分は好き放題にやるよ、というんです。それが「すべては許される」です。損なことはしないんですね。といいつつ、「結果」は気になるんです。

また、

「非力な反逆者ども」・「《嘲弄されるために作られた実験用の未完成な存在たち》」＝「人類」を盾に、イワンは「《ただ一人の罪なき人》と、その人の流した血」＝キリストを避けます。「人間の顔」を正視しない・できないことによって避けるんです。それは、こういうことでもあります。イワンは、神の前で傲然と頭を上げていようとしているんです。彼は誰にも頭を下げたくありません。彼にはへりくだることができない。「謙遜な勇気」（キルケゴール）がないんです。もう一度いいますが、彼はミーチャの「讃歌」――他の誰かとの「つながり」のなかへと自分自身を投げ出し、自分がそこに「消え」たり、「溶け」たりすること、ですね――を頭では理解することができますが、心で感じること・信じることができないんです。イワンはあくまで傲然と自分自身であろうとします。彼はこの世界のありとあらゆるものを自分で理解したい、この世界の意味を最後まで見届けたいんですね。それを見届けるのは必ず自分でなくてはならないんです。彼は保証をとりつけたい。神にそれを委ねるなんてまっぴらごめんなんです。

それに、

もちろんイワンは「いずれ蝗を食として、魂を救いに荒野へさすらいに出る」つもりだったんですが、悪魔の手前、それをそのまま認めようとはしません。でも、そのことは是非とも訊ねてみたいわけです。訊ねるけれど、自分の先行者たちを「十七年も荒野で祈りつづけて、苔の生えたような人たち」などと表現する（いったい、そのイワンがいま何歳なんですか？　そのことを思い出してください）。しかし、その「苔の生えたような人たち」こそ悪魔が誘惑したい存在・悪魔が価値を認めた存在だということがわかっている。悪魔にそれほどまでに誘惑される人間こそ高度に信仰している人間なんですね。それで、イワンは自分がそういう「高価」な「ダイヤモンド」でありたいと思っているわけです。「同じ瞬間に信と不信のすごい深淵を見つめることができる」人間でありたいんです。つまり、そうであるからには、「《まっさかさまに》転落」するすれすれの位置にいたいわけです。それどころか、「《まっさかさまに》転落」することは、彼にとって非常に魅力的なことでもあるでしょう。「《まっさかさまに》転落」できるからには、つまり、それほどの高さにいたというわけです。その高低差こそが彼自身の価値なんです。その高低差が大きければ大きいほど、彼の魂は悪魔にとって「高価」な「ダイヤモンド」であるんです。

これが「若い思想家で、文学と芸術の大の愛好家で、『大審問官』と題する将来性豊かな叙事詩の作者」なんですよ。

そうして、証人として法廷に立ったイワンを駄目だといったんでした。

もちろん、「話を信じてもらえなくたってかまわない、俺は主義のために行くんだから」なんてつもりじゃ駄目ですよ。イワンには相手に対して「決して望みを棄てず、おのれを低くして黙々と仕える」のでなければならないんです。くどいようですけれど、イワンがアリョーシャの「あなたじゃない」を受け入れるためにも、誰彼に対しての「決して望みを棄てず、おのれを低くして黙々と仕える」ということができなくてはなりませんでした。なぜか？「あなたじゃない」を受け入れるためには、自分が「すべての人に対して罪がある」という自覚がなければなりませんから。しかも、この自覚は必ず「僕のためには、ほかの人が赦しを乞うてくれる」がセットになっていなければなりません。「ほかの人」との「つながり」が絶対に必要ですし、自分がへりくだって、「神の前」で無に等しい存在にならなければなりません。自分の「孤独」と「離反」を放棄しなくてはならないんです。イワンはこれを拒絶するんです。

裁判の前夜、アリョーシャはイワンについてこう考えたんでした。

真実の光の中に立ち上がるか、それとも、自分の信じていないものに仕えた恨みを自分やすべての人に晴らしながら、憎悪の中で滅びるかだ。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

結果は後者でした。もし、イワンが法廷まで行って、自分に罪があると証言したということを、それだけでも立派じゃないか、などというひとがあれば、そのひとにはアリョーシャが見えていません。そのひとは「自尊心の病に憑かれた」読者です。

さて、もっと以前に私はこうもいいました。

あなたは『カラマーゾフの兄弟』を読みながら、登場人物の誰かが――ものすごくおおざっぱにいいますが――、「どうせ自分はこういう人間なんだから」・「どうせあんたたちは私をそんなふうにしか見ていないんだろう？」というふうに考えることによって、自分自身と他人とを傷つける言動をしてしまう、そうしてそれがやがて取り返しのつかないことになっていく、というのをさんざん見てきたのじゃないでしょうか？「どうせ自分はこういう人間なんだから」・「どうせあんたたちは私をそんなふうにしか見ていないんだろう？」――それが、その人物の自分自身に対する「嫉視」であり、「悪意」なんですよ。その人物が――いろんな事情もあるでしょうが――自分でも醜いと考えているもの（「それこそが私なんだ」）を抱え込んで離さないでいること、ですね。この態度が、せっかくさしのべられた《ただ一人の罪なき人》とそれに準ずるひととの手を拒みます。単純にいえば、「どうせ自分はこういう人間なんだから」・「どうせあんたたちは私をそんなふうにしか見ていないんだろう？」というふうに考えるひとが、他人の好意を否定し、極端な場合には、それを踏みにじって自分と他人とをひどく傷つけるということです。こういってしまうと、この世のなかのほとんどの小説がそうだよ、といわれてしまいそうでもありますが、しかし、『カラマーゾフの兄弟』は、おそらく執拗に登場人物たちと《ただ一人の罪なき人》との「応答」を描いて、ものすごく動的な作品として成立していると思うんです。

そうして、

アリョーシャは自身の限界を承知しているでしょうが、それでも《ただ一人の罪なき人》がいる――自分の前に・自分と並んで・自分のなかに――と感じるので、誰かに手をさしのべつづける・手をさしのべるのをやめないでいられるんです。そうして彼には、この世界のどこかに、

たとえ彼がその人をまったく知らず、先方も彼を知らぬにしても、彼のために祈ってくれる・彼を愛してくれるひとがいることを信じているんです。彼はそうしたつながりを信じています。だから、彼も誰かに手をさしのべつづける・手をさしのべるのをやめないでいられるんです。どうでしょう？　これはすごいことじゃないでしょうか？　アリョーシャにはそういう「謙遜な勇気」があると私はいいます。

くどいですが、

アリョーシャは、イワンが自分でも醜いと考えているもの（「それこそが私なんだ」＝「殺したのは私だ」）を離さないでいるのに向かって、「それはあなたじゃない」といいつづけ、いうのをやめないでいるんです。イワンに自分＝アリョーシャとのつながりを信じること、自分＝アリョーシャに対して気持ちを開くことを呼びかけているんです。アリョーシャはイワンの良心の証人になろうというんです。そうしてイワンに「離反」と「孤独」から、こちらに戻って来るように、と訴えているんです。自分自身をも信じないこと――自意識の堂々巡り――から脱却してください、と懇願しているんですよ。「謙遜な勇気」を持ってください、といっているんです。こうして《ただ一人の罪なき人》からアリョーシャを通じてさしのべられている手が、ここで描かれているんです。これが『カラマーゾフの兄弟』で描かれている「罪」と「愛」なんです。

さらにもくどく、

繰り返しますが、そういう「罪」に対して、手をさしのべつづける・手をさしのべるのをやめない人物たちがいるんです。つまり、誰かが自分でも醜いと考えているもの（「それこそが私なんだ」）を離さないでいるのに向かって、「それはあなたじゃない」といいつづけ、いうのをやめない人物たちです。その人物たちは「自分のためにも祈ってくれる人がいる」ということを信じています。そういう人物たちから発せられる「あなたじゃない」は、実は『カラマーゾフの兄弟』の全体に遍在しています。どういう形であれ、「あなたじゃない」の変奏――というか、最終的に「あなたじゃない」として完成されることになるものの変奏――を受け取るべきでない登場人物がこの作品にはいないでしょう。私は以前（「その二」）、アリョーシャの「あなたじゃない」が「第十一編　兄イワン」において「全然脈絡のないものでない、唐突でわけのわからぬものではない」といいましたが、実ははるかにその前から「あなたじゃない」はこの作品のそこかしこに響いていた音だったんですよ。それがイワンに向けたアリョーシャのことばによって最も高度な鋭い形で完成されたんです。というわけで私は、なおさら、アリョーシャの「あなたじゃない」が読み取れない――しかも、それがイワンに図星だとわからない――読みかた（亀山郁夫）がいかにとんちんかんであるか、といいます。ふつうに『カラマーゾフの兄弟』を読んできた読者であれば、「あなたじゃない」が何を意味しているかがわかります。

私は何をいいたいのか？　私のいってきたことが『カラマーゾフの兄弟』の登場人物たちにおける――萩原俊治氏のいう――「自尊心の病」の症状と、それに対するアリョーシャのふるまいだということです。

私がずっと四苦八苦してしゃべってきたこと――右の引用の他にも私はたとえば「からくり」ということばも使ってきました――に、この「自尊心の病」という病名＝視点・論点を照射すれば、一気にいろんなことが整然と見えてくるんじゃないでしょうか？

こうです。

小説『カラマーゾフの兄弟』の全体が描いているのは自らの「自尊心の病」

に苦しむひとびとの群像です。この作品の全体が目指しているのは、彼らがどうにかして自分の「自尊心の病」に気づくことです。自分が他の誰に対しても罪がある、自分こそが最も罪深い人間であると口にするこの作品の何人かの人物たちは、自分の「自尊心の病」に気づいています。「自尊心の病」に気づくとはどういうことか？　自分が無であると知り、そのことを知らなかったこれまでの自分を知ることです。自分の意味や価値を決めるのは自分ではない・自分ではなかったと知ることです。自分が自立して生きている・生きていたのではないことを知り、生かされている・生かされていたことを知ることです。自分の存在が自分のためのものではない・自分のためではなかったことを知ることです。この世界は自分のためにあるのではない・自分のためにあるのではなかったし、世界の意味や価値を決めるのは自分ではない・自分ではなかったと知ることです。自分の見栄や誇りや優越感や劣等感や卑下や恥がまったくの無意味である・無意味であったと知ることです。自分が自分の支配者ではない・支配者ではなかったと知ることです。このことに気づいたひとは、世のなかのひとびとがどんなに――これまでの自分同様――「自尊心の病」に憑かれているのかを知るんです。「自尊心の病」に憑かれたひとびとがそれぞれどんなに苦しみ、また相互に争い、嘘をつき合い、支配したりされたりしているかを知るんです。とはいえ、そのとき、「自尊心の病」に気づいたひとたちは、それに気づいたからといって、その病から完全に治ることはありません。どんな人間も自尊心のなくなることはなく、「自尊心の病」は全快しません。だからこそ、自らの「自尊心の病」に気づいたひとたちは自分の「自尊心の病」を恐れます。その自覚が、「自分が他の誰に対しても罪がある」・「自分こそが最も罪深い人間である」ということです。そうして、それは、かつての自分（「自尊心の病に憑かれた」自分）の考えていたような恥ではありません。もはや彼に恥はありません。彼の意味や価値を決めるのは彼ではないからです。彼は自分の意味や価値を自分自身では無と考え、それをもっと大きい存在――神――に委ねています。そのとき必要なのが「謙遜な勇気」です。そこで、彼が自らの「自尊心の病」を知りながら生きていくためにどうするか？　なるべく自分の「自尊心の病」から距離を置いて生きるんです。それは可能です。というより、それしかありません。その距離は大きければ大きいほどいいんです。この距離を特に大きく保とうとするひとたちが『カラマーゾフの兄弟』に描かれています。そのひとたちは、他人と接するときも、相手の「自尊心の病」から距離を置くようにします。相手の「自尊心の病」を承知しつつ、相手の「自尊心の病」の奥にある本当の相手自身に向き合うんです。相手の「自尊心の病」が仕掛けてくる争い・誘惑に乗らず、相手に支配されたり、相手を支配したりはしないんです。相手の「自尊心の病」の土俵に乗りはしません。そうやって、相手がその「自尊心の病」の奥にある本当の彼自身であれるように手助けするんです。そうやって、「自尊心の病」から離れたところでひとびとを結びつけていくんです。これが『カラマーゾフの兄弟』における「実行的な愛」です。しかし、いったい、他人の「自尊心の病」がどんな様相のもので、それを見抜いたり、見定めたりするなどということは、相手を見下していることになるのじゃないか？　相手の「自尊心の病」の奥にある本当の彼自身などがわかるものか？　そういう問いを、このひとたちは常に必ず抱いています。相手の内面への洞察力が求められますが、そのとき、その根底には、自分が他の誰に対しても罪がある、自分こそが最も罪深い人間であるという自覚が必要ですし、自分のその洞察を確信し、それにもとづいた行為をなすためには必ず「謙遜な勇気」が必要になります。そのとき、彼を支えるのは、自分のためには他の誰かが祈ってくれる、と信じることです。その「他の誰か」の最奥に、あの「ただ一人の罪なき人」＝キリストがいます。

――とまあ、そんなふうに私は考えています。

もうちょっとわかりやすいように、ここで私は「自尊心の病に憑かれた」ひとたちのことを強調してみます。「自尊心の病」の重症・軽症の程度は、彼らがどれほど自己にしがみついているか、どれほど自己にインしているかということでも測れるでしょう。

「インする」――です。これを引用しておきます。

『プレーンソング』のあとすぐに短篇の『夢のあと』を書き、それからすぐにまた構えがすごく緩くてエッセイのような小説を書いたのだが、それは「群像」の藤岡さんから「まだこういうものは載せない方がいい」と言われ（それはその後書き直して『東京画』になった）、そのまた次のも藤岡さんから載せられないと言われた。一つ目はともかく二つ目の方は私は納得できなかったので言い合いになり、

「じゃあ、小島さんに読んでもらって決めることにしてくれ。」

という話になって、小島さんに送られた。いや、自分で送ったのか。九一年の四月のことだ。一週間もしないうちに私のアパートの部屋の留守電に「読んで、いろいろ言いたいことがあるので電話がほしい」というメッセージが入っていた。私はそのメッセージを外で聞き、すぐに公衆電話から電話した。

小島さんはまず、単刀直入に載せない方がいいという意見を言った。それでどこがよくないかという話になったのだが、

「途中からえんえんと三人の会話がつづくよねえ。保坂さんはそこをおもしろいと思って書いたと思うんですけど、作者がねえ、会話にインしているんですよ。

わかりますか？　インするのインです。

インランのイン。インプのイン。インプカンプなんて言い方があって、みだらな女のことを言うときに使いますよ。

サンズイにノのようなチョンを書いて、カタカナのツに似たチョンチョンを書いて、王様の王にも似ている壬申の乱の壬を書く「淫」ですよ。

わからなければあとで辞書を引いてください。」

私はその説明の変なところのしつこさに少し腹が立ちつつも（だいたい公衆電話なので車の音がうるさくて聞き取りづらかった）あまりの小島信夫ぶりに感動した。

ともかく私は小島さんの判断がそうなのだからボツを入れ、アパートに帰るとベッドに体を投げ出して、失恋したときみたいに天井を見上げてため息をついた。で、また二日後には別の小説を書き出した。それが『キャットナップ』だ。

（保坂和志『小説、世界の奏でる音楽』新潮社）

――というわけで「淫する」です。「自尊心の病に憑かれた」ひとたちというのは、自己に淫しているひとたちです。

もちろん『カラマーゾフの兄弟』において、最も自己に淫しているのはイワン・カラマーゾフです。反対に、最も自己に淫していないのがアレクセイ・カラマーゾフだと私はいいます。そうして、最も自己に淫している者に対して、最も自己に淫していない者から発されたことばが「あなたじゃない」なんです。「あなたじゃない」の意味は「自己に淫することなく、あなたの「自尊心の病」のずっと奥にいるはずの本当のあなた＝神の前に立つあなたであってください。そのあなたには、お父さんを殺したのがあなたではないということがわかっているはずです」に他なりません。

しかし、そのことが自己に淫している読者には理解することができません。なぜなら、自己に淫している読者には、自己に淫していない・自己に淫するということを恐れるということが理解できないからです。イワン・カラマーゾフのどこが間違っているのか、イワンこそ、この自分（自己に淫している読者）の代弁者だ、ということしか彼らにはいいようがありません。イワンこそ、神の存在なしにやっていく人間（つまり、自己に淫したままやっていく人間）の可能性を拡張する立派な主張の持ち主ではないか、というわけです。

やれやれ、思い上がるのもいい加減にしたらどうか、と私がいったとしても、彼らにはわかりません。彼らの自尊心はいまだに「砕かれて」いないからです。

もう一度、萩原氏の文章を引用します。

それでは、ドストエフスキーはいつ自分が自尊心の病に憑かれていると気づいたのか。『地下室の手記』の主人公の先に引用した言葉から分かるように、ドストエフスキーが『地下室の手記』を書いていた頃、そのことに気づいていたのは明らかだ。「ドストエフスキーとヴェイユ」で述べたように、『地下室の手記』の主人公の自尊心はリーザという売春婦に会うことによって砕かれる。砕かれて初めて、彼はそれまで自分が自尊心の病に憑かれていたことに気づく。砕かれなければ気づかなかっただろう。

従って、「ドストエフスキーとヴェイユ」で述べたように、『地下室の手記』を執筆していた頃、ドストエフスキーの回心への道も開かれたのだ。なぜ自尊心が砕かれると回心への道が開かれるのか。それは自分を何者かであると思う自尊心がなくなり、自己が無に近づくからだ。それは自分を創造した造物主に一歩近づく、あるいは、その造物主とひとつのものになろうとする運動に他ならない。「ドストエフスキーとヴェイユ」で紹介したように、このような事態をシモーヌ・ヴェイユは「脱創造」という言葉で説明している。

（萩原俊治「自尊心の病」――「こころなきみにも」
http://dhatena.ne.jp/yumetiyo/20100503/1273038835）

さらにべつの引用。これは直接に『カラマーゾフの兄弟』あるいはドストエフスキーに関してのものではありませんが、

恥ずべき過ちを犯したのにも拘わらず、自分がまったく変わっていないと気づくこと、自分が過ちを犯す前と同じ愚か者であると思い知ること、そのような自分は何の意味もない存在であると知ること、そして精神的に死ぬこと、これが回心というものだ。

（萩原俊治「蟻の兵隊」――「こころなきみにも」
http://dhatena.ne.jp/yumetiyo/20100906/1283762054）

そこでの「精神的に死ぬこと」こそが、自らの「自尊心の病」に気づくということであり、『カラマーゾフの兄弟』のエピグラフでいわれている「死」です。

よくよくあなたがたに言っておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。

（ヨハネによる福音書。第十二章二十四節）

私はいいますが、徹底的に自己に淫したイワン・カラマーゾフは、「地に落ちて死なないので、「ただ一粒のまま」なんです。彼は「豊かに実を結ぶ」ことになりません。

すでに昨年に書きましたが、イワンは次のような存在です。

ああ、地獄に落ちて、すでに反駁の余地ない真理を明白に知り、観察しているにもかかわらず、傲慢な怒り狂った態度をとりつづける者もいる。サタンとその傲慢な精神にすっかり共鳴した恐ろしい人々もいるのだ。こういう人々にとって、地獄はもはや飽くことを知らぬ自発的なものとなり、彼らはすでに自発的な受難者にひとしいのである。なぜなら、彼らは神と人生を呪った結果、われとわが身を呪ったことになるからだ。ちょうど荒野で飢えた者が自分の身体から血をすすりはじめるように、彼らは憎悪にみちた傲慢さを糧にしているのである。それでいて永遠に飽くことを知らず、赦しを拒否し、彼らに呼びかける神を呪う。生ある神を憎悪なしに見ることができず、生の神がいなくなることを、神が自分自身と自己のあらゆる創造物を絶滅することを、彼らは要求する。そして、おのれの怒りの炎で永遠に身を焼き、死と虚無とを渇望しつづけるだろう。しかし、死は得られないだろう。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

そのイワンにゾシマ長老がどういうことをいったか？

「本当にあなたは、不死という信仰が人間から枯渇した場合の結果について、そういう信念を持っておられるのですか？」

「ええ、僕はそう主張してきました。不死がなければ、善もないのです」

「もしそう信じておられるのなら、あなたはこの上なく幸せか、さもなければ非常に不幸なお人ですの！」

「なぜ不幸なのです？」イワンが微笑した。

「なぜなら、あなたは十中八、九まで、ご自分の不死も、さらには教会や教会の問題についてご自分の書かれたものさえも、信じておられぬらしいからです」

「ことによると、あなたのおっしゃるとおりかもしれません！　しかし、それでも僕はまるきり冗談を言ったわけでもないのです……」突然イワンは異様な告白をしたが、みるみる赤くなった。

「まるきり冗談を言われたわけでもない、それは本当です。この思想はまだあなたの心の中で解決されておらないので、心を苦しめるのです。しかし、受難者も絶望に苦しむかに見えながら、ときにはその絶望によって憂さを晴らすのを好むものですからの。今のところあなたも、自分の弁証法を自分で信じられず、心に痛みをいだいてひそかにこれを嘲笑しながら、絶望のあまり、雑誌の論文や俗世の議論などで憂さを晴らしておられるのだ……この問題があなたの内部でまだ解決されていないため、そこにあなたの悲しみもあるわけです。なぜなら、それはしつこく解決を要求しますからの……」

「ですが、この問題が僕の内部で解決することがありうるでしょうか？　肯定的なほうに解決されることが？」なおも説明しがたい微笑をうかべて長老を見つめながら、イワンは異様な質問をつづけた。

「肯定的なほうに解決されぬとしたら、否定的なほうにも決して解決されませぬ。あなたの心のこういう特質はご自分でも承知しておられるはずです。そして、そこにこそあなたの心の苦しみのすべてがあるのです。ですが、こういう悩みを苦しむことのできる崇高な心を授けたもうた造物主に感謝なさりませ。「高きを思い、高きを求めよ、われらの住む家は天上にあればこそ」です。ねがわくば、あなたがまだこの地上にいる間に、心の解決を得られますように。そして神があなたの道を祝福なさいますよう！」

（同）

ゾシマ長老がそのようにイワンにいったのは、イワンの「問題」が彼の「自尊心の病」ゆえのものだということがわかっていたからです。つまり、イワンのその問いの立てかたが間違っているんです。

これも『カラマーゾフの兄弟』についてのことばではありませんが、

言うまでもないであろう。ロジオン・ラスコーリニコフとの出会いは、少年時代のもっとも重要な出来事のひとつであった。いや、何歳であろうと、注意深い読者なら、若いラスコーリニコフがその途方もない行為と、そしてまた――もっと痛切に、もっと胸苦しく迫ってくるのだが――彼の混乱を反映する、見た目は仮借なく厳密な論理とによって呼び起こす圧倒的な印象から、逃れることはできないであろう。彼が求め、語り、行い、そして行わなかったことすべてに、私は強い関心を抱いた。しかし、私は彼が好きではなかった。彼の殺人に嫌悪した。この小説は私に、きわめて危険な誘惑のひとつである間違った二者択一に対するたえざる警告を与えてくれたのだった。そして、この警告のとおりだ、と痛感したことが一度ある。政治の領域においてであった。とくに困難な時期で、両方の側から間違った二者択一を迫られ、それを拒否することがほとん

ど不可能に見えたのだった。

（マネス・シュペルバー『すべて過ぎ去りしこと……』
鈴木隆雄・藤井忠訳　水声社）

イワンは「自尊心の病」――自己に淫している――ゆえに「間違った二者択一」にとらわれているんです。ゾシマ長老がいっているのは、イワンの設けた二者択一の否定です。けしてイワンの思想の高さの肯定なんかではありません。ゾシマ長老のことばでむしろ注目すべきなのは、次のことばです。「あなたの心のこういう特質はご自分でも承知しておられるはずです。そして、そこにこそあなたの心の苦しみのすべてがあるのです」――これが「自尊心の病」への指摘です。イワンが自らの「自尊心の病」――かなり重症の――に気づくことができれば、彼はそれだけ深い回心にいたるだろう、ということです。イワンの抱いている思想をそのままもっともっと突き詰めれば、信仰に至るだろう、などということではなく、イワンの当の思想が深い挫折をすればするほど彼が信仰に至るだろう、という意味です。つまり、イワンほど深く自己に淫している者が、その淫していることを悟ったとき、大きい回心に至るだろうということです。『カラマーゾフの兄弟』におけるこの奥行きを読み誤ってはいけません。

しかし、「自尊心の病に憑かれた」読者には、そのことがけしてわかりません。わからないので、アリョーシャが見えません。彼らにはアリョーシャが単純素朴な馬鹿にしか見えません。そうして、こういうんです。

（アリョーシャにとっては、すべてが「第二の小説」にあるのだ）

（亀山郁夫「解題」）

やれやれ。

『カラマーゾフの兄弟』には、自分の「自尊心の病」に気づいていくミーチャと、「自尊心の病」に憑かれたまま――あくまで自己に淫したまま――自滅していくイワンとが描かれています。そうして、主人公アリョーシャは、そのどちらとも異なる位置にいます。この第三の位置がわからないひとに『カラマーゾフの兄弟』はわかりません。つまり、アリョーシャが見えないということです。アリョーシャは、読者の前に僧服姿で登場する、この作品の最初から自分の「自尊心の病」に気づいている人間として描かれています。

おさらいしますよ。

アリョーシャは自らの「自尊心の病」から距離を置いて生きています。彼は他人と接するときも、相手の「自尊心の病」から距離を置くようにします。相手の「自尊心の病」を承知しつつ、相手の「自尊心の病」の奥にある本当の相手自身に向き合うんです。相手の「自尊心の病」が仕掛けてくる争い・誘惑に乗らず、相手に支配されたり、相手を支配したりはしないんです。相手の「自尊心の病」の土俵に乗りはしません。そうやって、相手がその「自尊心の病」の奥にある本当の彼自身であれるように手助けするんです。そうやって、「自尊心の病」から離れたところでひとびとを結びつけていくんです。

さて、自己に淫した読者にはこれがわかりません。私のいう「相手の「自尊心の病」の奥にある本当の相手自身」とはいったい何だ？――そう呆れる他ありません。自己に淫している読者は、自らが自己に淫しているために、アリョーシャにも自己に淫している姿を要求します。要求せざるをえないんです。つまり、アリョーシャに、ミーチャやイワンと同レヴェルに描かれた苦悩や行動や思想などを要求するわけです。それが描かれていない、と自己に淫した読者は主張します。アリョーシャにはミーチャやイワンに比肩する苦悩や行動や思想がない、もし、アリョーシャにミーチャやイワンを理解できるというなら、彼にもその二人に比肩しうる苦悩や行動や思想が描かれていなくてはならない、というわけです。そうでなくては、アリョーシャに確固とした信仰があるなど

信じられない。もうこれが間違いです。ミーチャやイワンの苦悩や行動や思想は自己に淫した者の苦悩や行動や思想だからです。対するアリョーシャの苦悩や行動や思想は、自らの「自尊心の病」に気づいていて、できるだけ自分の「自尊心の病」から距離を置いておくことにした者の苦悩や行動や思想だからです。土俵が違うんです。それなのに、自己に淫した読者には、結局、アリョーシャを、どれだけ自己に淫しているかということでしか測ることができないんです。そうして、その尺度によれば、人間は自己に淫していればいるほど立派なんです。それこそが人間の苦悩や行動や思想だ、というわけです。彼らには自他を測るものさしが他にないんです。

ちょっと前に引用した最先端＝亀山郁夫の文章に、これがありました。

あらためて繰り返すことになるが、「第一の小説」においてアリョーシャは、必ずしも主人公と呼ぶことができるほど活躍しておらず、一種のトリックスター的な役割に甘んじている。その彼が、主人公としての相貌をちらりとかいまみせるのが、ゾシマの遺体から発した腐臭に衝撃を受ける場面である。強い不信におそわれ、およそ想像もつかない失意がアリョーシャをとらえる。あるいはゾシマ長老が懸念していたかもしれない、まさに彼の脆さ、弱さが一瞬、露呈した瞬間でもある。

（亀山郁夫「解題」）

そこでの「強い不信におそわれ、およそ想像もつかない失意がアリョーシャをとらえる」と――自己に淫した最先端＝亀山郁夫の――いうところが、『カラマーゾフの兄弟』において、唯一アリョーシャが自己に淫してしまった場面です。しかし、アリョーシャはグルーシェニカのことばでそのことに気づき、再び自己に淫していない・自己に淫すまいとする自分に戻る――単に戻るというより、これまでより以上に強固な覚悟を持つ（これより前のアリョーシャと後でのアリョーシャについてはまた別の文章で触れましょう）――ことになるんです。つまり、アリョーシャはこの作品の最初に――僧服姿で――登場してからずっと、自己に淫していない・自己に淫すまいとする人間として描かれていて、作品半ばでとうとう自己に淫してしまうんですが、すぐにまた自己に淫していない・淫すまい――それ以前よりいっそう強固に――とする人間になるんです。これに対して、ミーチャは自己に淫した人間であったのが、自己に淫していない・淫すまいとする人間に変化していくのであり、イワンは自己に淫していたのが、ますます強固に淫していくという図になります。これが『カラマーゾフの兄弟』です。

したがって、

アリョーシャはおどろきをこめて永いこと彼女を見つめていた。その顔が明るくかがやきはじめたかのようだった。

「ラキーチン」突然彼がりんとした大声で言った。「僕が神さまに謀叛を起したなんて、からかわないでほしいな。君に恨みをいだきたくはないから、君も好意的になってくれたまえよ。僕は、君なぞ一度も持ったことのないような宝を失ったんだから、君だって今僕を裁いたりできないはずだ」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

――というのは、アリョーシャが自分を取り繕ったりしたのではなく、単に、また自己に淫していない・自己に淫すまいとする自分に戻ったために、そういったにすぎません。そのとき彼には恥などありません。取り繕う必要もまったくないんです。そうした恥や取り繕いが必要な人間は自己に淫している人間だけだからです。

しかし、自己に淫した読者は、ちょうど自己に淫したラキーチン同様に右の場面のアリョーシャについて次のようにしか受け取ることができません。

「君はさっき長老という弾丸をこめてもらったんで、今度はそいつを俺に発射したってわけか、アリョーシャ、君は神の人だよ」憎さげな笑いをうかべて、ラキーチンが言い放った。

（同）

それに対してアリョーシャが何といったか？

「笑わないでくれ、ラキーチン、嘲笑うのはよせよ、故人のことなぞ言わないでほしいね。あの人はこの世のだれよりも偉い人だったんだから！」声に涙を含ませてアリョーシャは叫んだ。「僕は裁き手として君に話をするために立ったわけじゃないんだ。僕自身、裁かれる者の中で最低の人間だもの。この人にくらべたら、僕なぞ何者だろう？　僕がここへ来たのは、堕落してそれでも『かまうもんか、かまうもんか！』と言うためだったんだ。それも僕の浅はかさからだ」

（同）

アリョーシャが「嘲笑うのはよせよ」というのは、そのようにいえば、ラキーチンの「自尊心の病」の奥にいる本当の彼自身にはこの呼びかけが理解できると思っていたからです。しかし、ラキーチンにはそれがわかりませんでした。

さらに、

アリョーシャはまたしてもきこえぬかのようだった。ラキーチンはこらえきれなくなった。

「なんだい、君は罪深い女を更生させたとでも思ってるのか？」彼は意地わるくアリョーシャをせせら笑った。「迷える女を真理の道に向けてやったというわけか？　七匹の悪魔を追いだして、え？　われわれの期待していた奇蹟がやっとここで実現したってわけだ！」

「やめてくれよ、ラキーチン」魂の苦悩をこめてアリョーシャが答えた。「君は今、例の二十五ルーブルのことで俺を《軽蔑》しているんだろ？　真の友人を売ったと言いたいんだな。しかし、君はキリストじゃないし、俺もユダじゃないよ……」

「ああ、ラキーチン、そんなこと僕は忘れてたよ、本当にさ」アリョーシャは叫んだ。「君自身が今思いださせたんだよ……」

だが、ラキーチンはもはや完全に怒っていた。

「君らなんぞ、一人残らずみんな消え失せるといいんだ！」突然、彼はわめいた。「畜生、どうして君なんぞにかかり合ったんだろう！　今後、君のことなんぞ知りたくもないよ。一人で行きな、そっちが君の道だ！」

そして彼は、アリョーシャを闇の中に一人残して、くるりと別の通りに曲った。アリョーシャは町を出て、野原をぬけて修道院に向った。

（同）

自己に淫したラキーチンは、自己に淫することの土俵上でしか自分自身とアリョーシャとを見ることができないんです。自己に淫したラキーチンは自分が軽蔑されているはずだと思い、そのことを気にする――自己に淫しているからこそ自分への他人の評価を気にします――わけですが、自己に淫していない・淫すまいとしているアリョーシャはそんなことを全然問題になんかしていなかったということです。ところが、自己に淫したラキーチンにはそれが理解できません。つまり、ラキーチンがアリョーシャの立場であれば、必ずラキーチン自身を軽蔑するはずだからです。彼は、アリョーシャが自分を軽蔑しているというのなら、理解できるんです。ところが、そうではない。そうして、右の場面を読んで、ラキーチンの小ささを笑うことのできる読者も、もしアリョーシャが自分を取り繕ったなどと思うことがあるとすれば、結局のところ、そのひともラキーチンと同じです。ラキーチンと同じく自己に淫しています。

いまのはほんの一例に過ぎませんが、そうやって、自己に淫している者は、

自己に淫していない・淫すまいとしている者を理解できないために、自己に淫していない・淫すまいとしている者と対立することになります。

自己に淫している者は、同じく自己に淫している者たちとならば、相互に理解可能なんですよ。その理解の上に立って、彼らは互いにどちらが上なのかを競ったり、支配したり、されたりするわけです。ところが、自己に淫していない・淫すまいとしている者は、その彼らの関係を根底から破壊します。なぜなら、自己に淫していない・淫すまいとしている者は自己に淫している者たちに対しても、彼らが自己に淫していないかのように対するからです。彼は彼らの「自尊心の病」の奥にいる本当の彼ら自身に直接呼びかけるからです。そうして、そのまま呼び出されてしまうひとたちがいるんです。これは、これまでずっと維持されてきた、自己に淫した者たちどうしの関係を破壊してしまいます。彼らの秩序を破壊し、彼らの個々をも破壊するでしょう。

それが、ゾシマ長老がアリョーシャにいったことの意味です。

「私はお前のことをこんなふうに考えているのだよ。お前はこの壁の中から出ていっても、俗世間でも修道僧としてありつづけることだろう。大勢の敵を持つことになろうが、ほかならぬ敵たちでさえ、お前を愛することになるだろうよ。人生はお前に数多くの不幸をもたらすけれど、お前はその不幸によって幸福になり、人生を祝福し、ほかの人々にも祝福させるようになるのだ。これが何より大切なことだ、お前はそういう人間なのだ」

（同）

「大勢の敵を持つことになろうが」です。

そうして、アリョーシャ自身もそのことをよく理解しています。つまり、繰り返しますが、自己に淫している者は、自己に淫していない・淫すまいとしている者を理解できないために、自己に淫していない・淫すまいとしている者と対立する――自己に淫していない・淫すまいとしている者は、「大勢の敵を持つ」＝大勢の自己に淫している者たちと対立する――ということです。だから、彼は自己に淫しているイワンにこういうんです。

「兄さん」アリョーシャがふるえる声でまた言いだした。「僕があんなことをいったのは、兄さんが僕の言葉をきっと信じてくれるからです。僕にはそれがわかるんです。あなたじゃない、という今の言葉を、僕は一生をかけて言ったんですよ。いいですか、一生をかけて。兄さんにああ言えと、神さまが僕の心に課したんです。たとえ今の瞬間から、兄さんが永久に僕を憎むようになったとしても……」

（同）

アリョーシャが呼びかけているのは、イワンの「自尊心の病」の奥にいる本当のイワン自身に、です。しかし、アリョーシャには、イワンの「自尊心の病」が必ずそれを妨害するだろうということがわかっています。だから、「たとえ今の瞬間から、兄さんが永久に僕を憎むようになったとしても……」というんです。

いいですか、アリョーシャは何もかもわかったうえで、イワンに「あなたじゃない」といったんです。しかし、そう私が何度繰り返しても、自己に淫した読者には理解することができません。

繰り返しますよ、彼らはこう考えるんです。もし、アリョーシャにミーチャやイワンを理解できるというなら、彼にもその二人に比肩しうる苦悩や行動や思想が描かれていなくてはならない。つまり、自己に淫した読者には、アリョーシャの自己への淫し具合はどんなもんなんだい？　というものさししかないんです。アリョーシャが自己に淫していなければいないほど、彼らはアリョーシャを認めることができないんです。つまり、彼らにはアリョーシャが見えない。ということは、『カラマーゾフの兄弟』が見えないということです。だから、彼らは「第二の小説」に過剰な期待を寄せざるをえません。「第一の小説」でのア

リョーシャがあまりに頼りない、単純な馬鹿 —— 成長過程の —— にしか見えません。そういう自己に淫した読者のまなざしこそ、私はいいますが、「心正しき者の堕落と恥辱を好む」まなざしと変わりません。彼らはアリョーシャに「堕落と恥辱」を要求しているんです。いったい、お前は俺たちに認められる、どんな悪いことをしたんだい？　ということです。「堕落と恥辱」なしに信仰を獲得できるはずがない、信仰を得るためには何か劇的な経験やら覚悟やらがなければならない、とでも考えているんでしょう。その彼らは、他方、イワンが何か思想の階段をそのまま登っていくことによって、ある段に達すれば —— 作品ではそこまでは描かれていないけれど —— それまでの同じ自己に淫したイワンのまま信仰を獲得できるはずだとでも考えているんでしょう。いや、イワンがもし信仰を獲得できるなら、それまでのイワンは徹底的に「砕かれて」いなければなりません。

そうして、自己に淫した読者がゾシマ長老の信仰に何か素直な憧れめいたものを感じるのは、ゾシマ長老が自らの自己に淫した経験を語ったからです。同様の経験を彼らはアリョーシャにも求めます。ところが、それが描かれていない、と彼らは声高にいいます。それゆえ、彼らはアリョーシャを過小評価します。というか、アリョーシャが見えません。

たとえば、いったいアリョーシャのこれまでの人生にどんな「挫折（人生経験・試練・葛藤等々）」があったのか？　とせせら笑うように彼らが問うとき、幾多の「挫折（人生経験・試練・葛藤等々）」をこれまでの人生において乗り越えてきたかもしれない彼ら自身の、そのこれまでの乗り越えかたは、結局、新たな「自尊心の病」によって・新たな自己への淫しかたによって乗り越えてきたというにすぎません。彼らは、これまでの自分を、そのまま維持・強化することによって「挫折（人生経験・試練・葛藤等々）」を乗り越えただけです。その事前事後での自分には強化だけがあり、自分は自分のままです。「自分は正しい」、「自分は間違っていない」、「間違っているのはあいつらだ」、「自分はこの点に関しては誤っていた。自分がこの自分の誤りを認めたことを、あいつらは評価しなければならない」、「自分はあいつらより優れている」、「結局あいつらは……」云々。そう彼らが主張するときの、その「自分」の重さが問題なんです。その「自分」の重さがそれまでと変わらなかったり、あろうことか、さらに重くなっていたりするわけです。つまり、彼らの心は「挫折（人生経験・試練・葛藤等々）」のたびに「砕かれて」いないままだったということです。自分など無価値だということにまったく気づかないままだったということです。

彼らが自他の人生を測る尺度は、あくまで、どれだけ自己に淫したか、です。もちろん、彼らには自己に淫しているなどという自覚なんかありません。自己に淫しているなどといわれると、侮辱としか感じることができません。彼らにとっては、どれだけ自分が必死に生きてきたか、なんです。自分、自分、自分です。そういうひとたちに、「自分が他の誰に対しても罪がある」・「自分こそが最も罪深い人間である」と自覚した人間のことなどわかるはずもない。彼らのものさしに、「自分が他の誰に対しても罪がある」・「自分こそが最も罪深い人間である」と自覚した人間を測る目盛はありません。そうなると、当然に彼らには、自己に淫していない・淫すまいとしている者の存在など信じられません。

かりに、彼らが百歩譲って、彼らのものさしが「どれだけ自己に淫しているか」だということを認めたとしても、彼らはこういわざるをえません。もし、この自分がお前のいうとおりに、自己＝自分に淫しなくなったとしたら、いったい、この自分・この生きて苦しんでいる自分に何の意味があるというのか？　何のためにこの自分は存在し、生きて苦しんでいるのか？　その問いは当然です。そうして、その問いに、『カラマーゾフの兄弟』に即して私が答えますが、そのあなたの人生に意味なんかありません。そもそも「意味」の意味を取り違えています。いいですか？　あなた個人の「自分」はあなた個人のものじゃないってことです。あなたの「自分」はあなた個人の所有物なんかじゃないんです。あなたはあなたの人生を終えることで完結しようと思っている。自分の人生には意味があった・なかったなどを自問自答しながら。ところが、それが間違いなんです。かりにもし、あなたがいまのあなた自身を維持しながら、そのまま完結などしてしまえば、あなたは「ただ一粒のまま」なんです。あなたの人生

はあなたのものではなく、現に生きている・これから生まれる・過去に生きていた誰彼のためのものなんです。そのひとたちのために、あなたはあなたがあなたの所有しているものだと思っているあなた自身を投げ出さなくてはならないんです。あなたがあなたの人生を、あなたの所有のものではない、現に生きている・これから生まれる・過去に生きていた誰彼のためのものだ、と認めて、そのひとたちのために投げ出すことができれば、あなたは「豊かに実を結ぶようになる」でしょう。あなたがあなたの人生に求める「意味」というのは、その「豊かに実を結ぶようになる」かどうかということに求められなくてはなりません。あなたがあなたの所有物ではないとあなたが知ること――それが「一粒の麦」の「死」です。あなたはあなたの「自尊心の病」に気づかなくてはなりません。気づいて、「自分が他の誰に対しても罪がある」・「自分こそが最も罪深い人間である」と自覚しなくてはならないんです。そうして、あなたがあなたの人生を、あなたの所有のものではない、現に生きている・これから生まれる・過去に生きていた誰彼のためのものだ、と認めて、そのひとたちのために投げ出すことに、いまのあなたが考えているような「意味」を要求してはなりません。それが報われるとか報われないとかいうことを決める資格があなたにはないんです。あなたはいまのあなたの考えているような「結果」を知ろうとしてはなりません。あなたが「豊かに実を結ぶようになる」とき、そのあなたの人生は、いまのあなたの抱いている基準からすれば、徒労・無駄骨・無意味でしかないかもしれないんです。あなたには、この世界がどういうものであるか、最後まで見届けたり、決定したりする資格なんかないんです。当然ながら、あなたはイワンの望むような「報復」を望んではなりません。あなたはとにかく、自分を他の誰彼のために投げ出すしかないんです。

――とまあ、そういうことを、私は自己に淫した読者を納得させるためにいうのではなくて、自己に淫していない読者の読みを援護するためにしか、いいえません。というのも、自己に淫した読者には、私のいうことが理解できないからです。

アリョーシャには、私がここでしゃべってきたことのすべてがわかっています。つまり――わざわざこんなふうにいわなければならないことが残念ですが――、アリョーシャは、自己に淫した読者が考えている以上に、自己に淫したひとびとの、その淫しかたに精通しているということです。『カラマーゾフの兄弟』におけるアリョーシャのふるまいのすべてに、私はそれを認めます。アリョーシャは、自己に淫したひとたちに対して、常に適切な働きかけをします。自己に淫していることから発生する彼らの苦しみに対して、適切なやりかたで対応します。それは、目前の自己に淫した彼らから、自己に淫していない彼らを救い出して・引き出してやることです。「自尊心の病」の奥にいる本当の彼ら自身を救い出して・引き出してやるんです。繰り返しますが、アリョーシャはけして、自己に淫した彼らの、自己に淫した主張の土俵に立ちません。もし彼が彼らと同じ土俵に立ってしまえば、彼らの思うつぼなんです。というのも、それが結局「お前と俺とで、どちらが自己に淫しているか、勝負しろ」ということになってしまうからです。自己に淫した読者たちはこれがわからないんです。他の作中人物たちがそれぞれに自分の苦悩をさらけ出しているというのに、アリョーシャだけがそれをしていない。それをしていない以上、アリョーシャに大した中身なんかないのだ、彼はただやみくもに神や善を信じているだけ――「第一の小説」では彼はまだまだ発展途上にあり、すべては「第二の小説」を待たなければならない――のことで、彼にはたとえば、あれほど苦悩しているイワンにあれこれいう資格なんかない、「あなたじゃない」なんていうのは僭越に過ぎるだろう、云々というわけです。つまり、彼らはアリョーシャにイワンやその他の人物との「苦悩勝負」を要求することしかできないんです。ということは「自己への淫し勝負」に他なりません。

アリョーシャがどうやって自己に淫しているひとびとに接するのか？　あたかも彼らが自己に淫していないかのように接します。彼は、彼らから、自己に淫していない彼ら自身を引き出します。彼は、自己に淫して苦しんでいた彼ら

がその苦しみを脱するとき、あたかも最初から自己に淫していなくて、自力で自己に淫していない状態に立てたかのように思わせるんです。

このときは数人の少年がイリューシャのそばに坐っていた。彼らもみな、スムーロフと同様、アリョーシャが中に入ってイリューシャと仲直りさせたことを否定したそうな様子だったが、事実はそのとおりだった。この場合、彼の手際のよさは、《べたべたした愛情》なしに、子供たちを次から次へと、さりげなく、さも偶然をよそおって、イリューシャと和解させたことにあった。それがイリューシャの悩みに大きな安らぎをもたらした。かつての敵だった少年たちみんなの、ほとんどやさしいと言ってもよい友情や同情に接して、彼はすっかり感動した。

（同）

そんなのは子供相手の話じゃないか、と憤慨するひとがあるかもしれません。それじゃ、これはどうですか？

アリョーシャが刑務所の門のベルを鳴らしたときは、もうすっかり遅かった(それに十一月の昼は短いのである)。夕闇さえおりはじめていた。しかしアリョーシャは、自分が何の妨げもなくミーチャのところへ通してもらえることを知っていた。これはみな、この町でも、どこでも同じことだった。もちろん、予審の終った当初は、親戚やその他の人々がミーチャと面会するにも、やはりいくつか必要な手続きが設けられていたのだが、その後、手続きがゆるめられたとまではゆかぬにせよ、少なくともミーチャに面会にくる何人かの者には、ひとりでにある種の例外ができていたのである。ときによると、所定の部屋での未決囚との面会も、ほとんど立会いなしで行われるようにさえなっていた。もっとも、そういう人間はごく少数で、グルーシェニカと、アリョーシャと、それにラキーチンだけだった。しかし、グルーシェニカに対しては、当の郡警察署長ミハイル・マカーロウィチが、非常に好意的だった。モークロエで彼女をどなりつけたことを、この老人はずっと気にしていたのである。その後、本質を知るにおよんで、署長は彼女に対する考え方をすっかり改めた。しかも奇妙なことに、ミーチャの犯行を固く信じてはいたものの、拘置以来しだいに彼に対する見方が和らいできていた。『おそらく善良な心の持主なのだろうが、酒と乱行とで、スウェーデン人みたいに身を持ち崩してしまったんだ』彼の心の中で以前の恐怖は一種の憐れみに変った。また、アリョーシャに関して言うなら、署長はこの青年が大好きで、もうずっと昔からの知人だったし、最近いやに足しげく面会にくるようになったラキーチンは、当人のよび方に従えば《署長令嬢》たちのごく親しい知人の一人で、毎日のように署長の家に入りびたっているのだった。それに彼は、職務に厳格とはいえお人好しの老人である刑務所長の家で、家庭教師もしていたのである。アリョーシャもやはり、刑務所長とは特別な古い知人で、所長は彼を相手に概して《高邁な事柄》を談ずるのを好んでいた。これがたとえばイワンだと、所長自身も、もちろん《自分の頭で到達した》とはいえ、たいそうな哲学者だったにもかかわらず、イワンの見解に一目おく、というより畏怖さえしていた。だが、アリョーシャに対しては、なにか抑えきれぬ共感をいだいていた。ここ一年、老人はちょうど経典外聖書に取りくんでいたので、のべつ自分の感想をこの若い友人に伝えるのだった。前には修道院にアリョーシャを訪ねて、彼や司祭修道士たちと何時間もぶっつづけに語り合ったこともあった。こんなわけで、一口に言うならアリョーシャは、たとえ刑務所の面会時間に遅れても、所長に頼みこみさえすれば、いつも万事うまくゆくのだった。おまけに、刑務所ではいちばん下っ端の門衛にいたるまで、みながアリョーシャと顔馴染みになっていた。看守も、上司の許可さえあれば、もちろん意地わるをしなかった。

（同）

これも、ただのコネの話じゃないか、と一笑に付すひとがあるかもしれません。しかも、これではラキーチンと同等じゃないか、などといいだすことになるかもしれません。しかし、真面目にいいますが、私はこう読み取っているんです。いわゆるコネの話はラキーチンにのみかかるだけで、そのラキーチンにせよ、もしアリョーシャの存在がなければ、こうも自由に刑務所に出入りなどできなかったでしょう。ラキーチンは、郡警察署長と刑務所長とがアリョーシャという例外を設けた、そのおこぼれにあずかっているだけだと思います。アリョーシャという例外を設けたために、いつのまにかラキーチンも自由に出入りできるようになっていたということでしょう。また、グルーシェニカびいきである郡警察署長のミーチャ評も、もちろんグルーシェニカゆえの要素もあるでしょうが、アリョーシャの存在が小さくない理由になっていると思います。また、刑務所長以下、アリョーシャと「顔馴染み」になっている刑務所職員たちみながアリョーシャに好感を持っていただろうということを想像することは容易です。それらは、単にアリョーシャが善良だったからという理由ではかたづけられない何かがあるはずです。

また、これはどうですか？

> 部屋に入るなりアリョーシャは、一時間ちょっと前にマリヤ・コンドラーチエヴナが彼の下宿に駆けつけて、スメルジャコフが自殺したことを報じた、とイワンに告げた。「サモワールを片づけに行ったら、壁の釘にぶらさがっているんです」ということだった。「だれか、しかるべき人に届けましたか？」というアリョーシャの質問に、彼女は、だれにもまだ知らせず、「真っ先にこちらへとんできたんです。途中ずっと走りどおしでした」と答えた。彼女は半狂乱で、木の葉のように全身をふるわせていた、とアリョーシャは伝えた。
>
> （同）

「半狂乱の」マリヤ・コンドラーチエヴナは、なぜスメルジャコフの死を伝えるために「真っ先に」――警察でも、病院でも、グリゴーリイとマルファとのところでもなく、もちろんイワンのところへでもなく――アリョーシャのもとへ「走りどおし」で来たんでしょうか？　ここでも、以前から彼女と彼との間に大事な信頼関係が築かれていたからじゃないですか？　アリョーシャは、スメルジャコフ本人とは接触できなかったかもしれませんが（つまり、スメルジャコフが拒否すれば、というか、彼は必ず拒否したでしょう。アリョーシャは会えもしなかったでしょう）、マリヤ・コンドラーチエヴナとの信頼関係を築くことはできていたのじゃないでしょうか。

まあ、ここでも自己に淫した読者からは、私の「妄想、ここに極まれり」、といわれるに違いありません。しかし、私はいいますが、『カラマーゾフの兄弟』はこのような「穴」埋めをせずに読むことができません。というより、私のやったようなやりかたより他にどのような読みかたがあるのか、とすら私は思います。これは、「書かれていることをそのまま読め」という、以前からの私の主張と何ら矛盾しません。なぜなら、この作品の場合、書かれていないことを読めと、当の作品がその構造・つくりによって私に要請するからです。アリョーシャがスメルジャコフにだけは冷たかった、などという読みかたをするひとがあるのは知っています。私は、それは誤解だと思います。アリョーシャが望んでも、スメルジャコフの方で、アリョーシャを拒否したのだと読む方が自然じゃないでしょうか？　いくらアリョーシャでも、そういうふうに拒まれれば、手の打ちようもありません。しかも、これには時間的制限（フョードルの死後でいえば、およそ二か月）がありました。まだまだ時間があれば、ふたりの関係はまだべつのものになっていたかもしれません。それでも、アリョーシャはマリヤ・コンドラーチエヴナとは親しくなっていた、アリョーシャはスメルジャコフに近づこうとしていた、と読んでいいのじゃないでしょうか？　同時にそれがスメルジャコフ自身――『カラマーゾフの兄弟』において、アリョーシャに内心を吐露することのない人物、頭からアリョーシャを拒否する人物としての――をも示すことになるのじゃありませんか？

その他に、グルーシェニカもカテリーナも、フョードル殺害事件以後、現にこの作品に描かれているような状態でいられたのは、アリョーシャの存在があればこそだと私は読んでいます。アリョーシャがいなければ、彼女らはもっと不安定な、疑心暗鬼にとらわれた日々を送ったはずだと思っているんです。アリョーシャが必ず彼女らの心の支えになっていただろうと思うんです。アリョーシャがいなければ、彼女らは互いにもっと憎み合っていて、それを当然だと思うことができたでしょう。つまり、アリョーシャは彼女らの「自尊心の病」の衝突の緩衝材の役は果たしていただろう、というんです。それは非常に重要な役ではないでしょうか？　それらの詳細はこの後の長い文章に譲りますが、ざっとそんなふうに私は考えているんです。

アリョーシャがこの「第一の小説」において、どれほど活躍していたのかを読み取るためには、この作品の全体が自己に淫したひとびとで埋め尽くされていること、そうして、彼が自己に淫したそれらの人物たちにどのように接していたかを読むしかありません。これができないで『カラマーゾフの兄弟』を読んだことにはなりません。彼が作中でただ一度自ら自己に淫してしまう場面の前と後とでは活躍の強度に差がありますが、それでも、彼は自己に淫していない・自己に淫すまいとする人間として、全編において、自己に淫している人物たちそれぞれに適切なふるまいをしています。読者がそのことを読み取るためには、まず、アリョーシャの前で自己に淫している人物たちのその淫しかたがどのようなものかを読み取ることにかかっています。もし、自己に淫している人物たちのその淫しかたが読み取れなければ、あなたにアリョーシャは見えません。というのも、あなたは、アリョーシャとともに、目の前で自己に淫している人物たちのその淫しかたを見なければならないからです。ところが、自己に淫している読者には、それがまったく見えません。彼らはただひたすら、自己に淫している自分自身の尺度によってしか見ることができないからです。そこで、彼らの目にはアリョーシャのふるまいがちっぽけで頼りないものにしか映りません。

たとえば、こんなふうに。

アリョーシャはしばしば、人の質問に対してオウム返しで答える。その問いとおなじ言葉で機械的に返事をするが、これを、憑依の力ないし、シンクロする一つの資質と見るべきなのか、あるいは逆に、他者にたいする決定的な想像力の欠落と見るべきなのか、判断にとまどうところである。

たとえば、第1章第3編のフョードルとアリョーシャの会話に、次のようなやりとりがある。父親が「おれがただの道化じゃないってことを信じてくれるか？」と聞くと、アリョーシャは「ただの道化じゃないって、信じてます」と答える。

そのあとにも、父の「アリョーシャ、神はいるか」という問いに対して、「神さまはいます」と答える。さらに「神も不死もか？」「神さまも不死もです」など、アリョーシャのオウム返しぶりは、それこそ物語のいたるところに示されるのだ（じっさい、ラキーチンに「オウム返しじゃないか」と言われている。第1部215ページ）。

日本語では訳し分けてあるが、原文で用いられている単語は同じで、そこに、アリョーシャ自身の心理的なニュアンスを伝える言葉は挟みこまれていない。確信している以上はあたりまえという考え方も成りたつが、やはり原文から受ける印象には、彼が抱いている宗教的信念とはまた別の不気味さがある。

ここで少し立ち止まって考えていただきたいのは、この「オウム返し」の資質が、小説全体を、ドミートリーの有罪という取り返しのつかない悲劇に駆り立てる、歯車の役割を果たしていないか、という問題である。

たとえば主人公アリョーシャは、一種のメッセンジャーの役割でさまざまな場所に出没し（その意味でラキーチンと好一対をなしている）、い

ろいろな人々と出会い、多種多様の情報を手に入れることができる立場にある。言ってみれば、あらゆるところで情報をにぎり、加工し、操作できる位置にあるはずだが、彼はけっしてそれをせず、つねにオウム返しに第三者に伝えてしまう（逆にラキーチンは情報を操作するのに長けている）。相手の気持ちをおもんぱかり、情報を取捨選択し、たとえばこれこれの話は伝えない、といった内面での作業をほぼ怠っている。ゾシマ長老ならずとも、はたして最終的にこういう人間にどこまで他人を救えるのか、という根本的な疑いが出されても不思議はないだろう。

第1部第3編、カテリーナ宅での女性のすさまじい「醜態」の内容を、アリョーシャが修道院への帰り道、ミーチャにこまかく伝える場面があるが、そこでのアリョーシャには、もはやミーチャに対し、傷心のカテリーナの人格を守るという気遣いすら感じられない。

鏡のように、オウム返しに受けた言葉をそのまま反射させる――。それこそが、ドストエフスキーが考えるアリョーシャの聖性のあかしなのか、それとも作家は、俗世に出て穢れを知れと命じたゾシマ長老にならい、アリョーシャの危険な資質をそこに見てとったのか。

この、アリョーシャの欠陥めいた部分は、彼が聖なる存在として認められるうえで欠かせない資格と思えるくらい、決定的に彼の性質に属し、同時に危うさを示している。ドストエフスキーのアリョーシャに対するまなざしには、プロットを追うだけでは、あるいは丁寧に均された翻訳では、ほとんど読みとることのできない微妙な部分が隠されていることをつねに念頭に置いていただければ、と思う。

（亀山郁夫「解題」）

最先端＝亀山郁夫のあまりなとんちんかんぶりにはもう驚きませんが――いや、やっぱり驚きますね――、それにしてもひどい。何が「オウム返し」ですか？　それで、アリョーシャには「もはやミーチャに対し、傷心のカテリーナの人格を守るという気遣いすら感じられない」んだそうですよ。そうして、「ドストエフスキーのアリョーシャに対するまなざしには、プロットを追うだけでは、あるいは丁寧に均された翻訳では、ほとんど読みとることのできない微妙な部分が隠されている」んだそうです。「丁寧に均された翻訳」なんかとは程遠く、杜撰のでたらめだらけの最先端＝亀山郁夫訳ならば、読み取れるんですかね？

それはともかく、フョードルやミーチャやカテリーナがどんなふうに自己に淫していて、まさにその淫していることによって苦しんでいることを、読者はアリョーシャとともに見なければなりません。彼らに対するアリョーシャのふるまいはすべて適切です。アリョーシャは自己に淫していない・淫すまいとする人間として適切にふるまったんです。何度でもいいますよ。アリョーシャは、自己に淫した彼らから、自己に淫していない彼らを救い出して・引き出してやろうとするんです。「自尊心の病」の奥にいる本当の彼ら自身を救い出して・引き出してやるんです。アリョーシャはけして、自己に淫した彼らの、自己に淫した主張の土俵に立ちません。そうして、アリョーシャのふるまいが適切であることがわかるためには、アリョーシャの前にいる、自己に淫した人物たちのその淫しかたがわからなければなりません。さらに、アリョーシャが自己に淫していない・淫すまいとする人物であることも理解できなくてはなりません。

もうひとついっておきます。『カラマーゾフの兄弟』を読む自己に淫した読者は、もしかしたら、この作品が問題にしているのが、神はあるのかないのか、不死はあるのかないのか、「神の創った世界」を人間が認めるか認めないか、だと思っているのかもしれません。ところが、この作品が問題にしているのは、そんなことではありません。神はあるし、不死はあるし、人間に「神の創った世界」を認める認めないなんてことを考える資格はありません。『カラマーゾフの兄弟』が問題にしているのは、神があるのかないのか、不死があるのかないのか、「神の創った世界」を人間が認めるか認めないか、などということを考えてしまう人間のありかたです。つまり、人間の自己への淫しかたが問題にされているんです。そこで、『カラマーゾフの兄弟』には、自己に淫していない・淫

すまいとする人物――しかも、健康な若者、しかも、きわめて論理的で知的な若者――が主人公に設定されるんです。この主人公を、基本的には、彼が他の自己に淫した登場人物たちにどのように接するかだけを描くことによって、ドストエフスキーは主人公たらしめようとしているんです。これがどれほど困難なことであるか、ドストエフスキー自身にも最初からわかっていました。

だが、もし、読み終ってもわかってもらえず、わがアレクセイ・フョードロウィチのすぐれた点に同意してもらえないとしたら？　わたしがこんなことを言うのも、悲しいことに、それが予想できるからだ。わたしにとって彼はすぐれた人物であるが、はたして読者にうまくそれを証明できるかどうか、まったく自信がない。要するに、彼はおそらく活動家ではあっても、いっこうにはっきりせぬ、つかみどころのない活動家である、という点が問題なのだ。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

同じ箇所が、萩原俊治氏の試訳では、こうなっています。

ふむ、しかし、読んで頂いても分かってもらえなかったら、わがアレクセイ・フョードロヴィッチが注目に値する人物であるということに賛成して頂けなかったら・・・こんな弱音を吐くのは、悲しいかな、あらかじめそうと予測がつくからだ。私にとって彼が注目に値する人物であることに間違いはない。しかし、諸君に納得してもらえるかどうかということになると、まったく自信がない。というのも、彼は社会活動家なのだが、これがまた、何ともはや、これと明確に説明できないような漠とした社会活動家であるからだ。

（萩原俊治「奇人変人は害になる？」――「こころなきみにも」
http://d.hatena.ne.jp/yumetiyo/20091108/1257673407）

萩原氏は右の「社会活動家」という訳語について、

「実践家」という言葉はあるのだろうか。むろん、「理論家」という言葉はある。しかし、「理論」の反対語である「実践」から派生した「実践家」という言葉を、私はこれまで聞いたことがない。聞いたことのない言葉を使うわけにはゆかない。従って、アレクセイについては「社会活動家」という訳を当てたい。これは私が『カラマーゾフの兄弟』全体を読んだ上での判断だ。

（同）

――と書いています。私は「社会活動家」――「これは私が『カラマーゾフの兄弟』全体を読んだ上での判断だ」に共感します。

さて、自己に淫した読者の読みかたは、まさにドストエフスキーが危惧したとおりの読みかたということになります。しかし、それはドストエフスキーの失敗ではなく、自己に淫した読者の責任です。というのも、自分の「自尊心の病」に気づいている読者ならば、まさにドストエフスキーの描いたとおりに読むことができるからです。

これで私は、八面六臂の活躍しているにもかかわらず、アリョーシャがなぜ「他の登場人物たちに比べると、何となくおとなしく、無口のように――自身のことをあまり語らない――感じられる」のか、というその理由をしゃべったつもりです。また、アリョーシャが見えない読者、「自尊心の病に憑かれた」読者にはなぜアリョーシャが見えないのか、というその理由を。しかも、その理由こそが『カラマーゾフの兄弟』という作品の核心でもあることを。

そういうわけで、ゾシマ長老がアリョーシャに修道院から出て俗世間で生きるようにいうのは、自己に淫した最先端＝亀山郁夫のいうような「危険な資質」

だの「欠陥」のゆえではなく、まして「修道院にとどまれば、並みの修道僧に堕するしかないという真剣な危惧」なんていう馬鹿馬鹿しい理由でもなければ、「俗世に出て穢れを知れ」なんて消極的なものでもなく、まったく正反対の積極的な理由からです。アリョーシャは、修道院に置いておくのはもったいないほどの立派な資質――自己に淫しているひとたちの、自己に淫しているがゆえの苦しみを解いてやり、そういうひとびとを結び合わせる――を備えており、俗世間において「実行的な愛」を行なうのにこそふさわしいとゾシマ長老は考えたんです。

さらにもうひとつ。

「それとそっくり同じことを、と言ってももうだいぶ前の話ですが、ある医者がわたしに語ってくれたものです」長老が言った。「もう年配の、文句なしに頭のいい人でしたがの。あなたと同じくらい率直に話してくれましたよ。もっとも、冗談めかしてはいたものの、悲しい冗談でしたな。その人はこう言うんです。自分は人類を愛してはいるけど、われながら自分に呆れている。それというのも、人類全体を愛するようになればなるほど、個々の人間、つまりひとりひとりの個人に対する愛情が薄れてゆくからだ。空想の中ではよく人類への奉仕という情熱的な計画までたてるようになり、もし突然そういうことが要求されるなら、おそらく本当に人々のために十字架にかけられるにちがいないのだけれど、それにもかかわらず、相手がだれであれ一つ部屋に二日と暮すことができないし、それは経験でよくわかっている。だれかが近くにきただけで、その人の個性がわたしの自尊心を圧迫し、わたしの自由を束縛してしまうのだ。わたしはわずか一昼夜のうちに立派な人を憎むようにさえなりかねない。ある人は食卓でいつまでも食べているからという理由で、別の人は風邪をひいていて、のべつ洟をかむという理由だけで、わたしは憎みかねないのだ。わたしは人がほんのちょっとでも接触するだけで、その人たちの敵になってしまうだろう。その代りいつも、個々の人を憎めば憎むほど、人類全体の対するわたしの愛はますます熱烈になってゆくのだ。と、その人は言うんですな」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

「人を愛するためには、相手が姿を隠してくれなきゃだめだ、相手が顔を見せたとたん、愛は消えてしまうのだよ」

「そのことはゾシマ長老も一度ならず話しておられました」アリョーシャが口をはさんだ。「長老もやはり、人間の顔はまだ愛の経験の少ない多くの人々にとって、しばしば愛の妨げになる、と言っておられたものです」

（同）

右の「長老もやはり、人間の顔はまだ愛の経験の少ない多くの人々にとって、しばしば愛の妨げになる、と言っておられたものです」での「人間の顔」とは何でしょう？　それがなぜ「しばしば愛の妨げになる」んでしょう？　これについては、だいぶ前に私は四苦八苦しながら、いろいろしゃべりましたけれど、ここでも、萩原俊治氏のいう「自尊心の病」を想起してもらえばいいんです。つまり、「自尊心の病」を抱えているひとにとって、他人の「人間の顔」は、これまたその他人の「自尊心の病」の目に見える形に他ならないわけです。自分と他人との「自尊心の病」は互いに争います。だから、「しばしば愛の妨げになる」んです。ここで問題にされているのは「自尊心の病」です。「自尊心の病」が軽症であればあるほど、自己に淫する程度が小さければ小さいほど、人間どうしはより理解し合い、結び合うことができるわけです。これを理解してもらったうえで、次の引用を読んでもらえますか？

「わたしがあの御仁のところへお前を遣わしたのも、アリョーシャ、弟であるお前の顔が助けになればと思ったからなのだ。しかし、すべては神の御心しだい。何もかもがわれわれの運命なのだからの。『一粒の麦が

地に落ちて死ななければ、それはただ一粒の麦のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる』これをよくおぼえておくとよい。アレクセイ、これまでに私は幾度となく心の中で、お前をその顔ゆえに祝福してきたものだ、このことも知っておいてほしい」長老は静かな微笑をうかべて語りつづけた。「わたしはお前のことをこんなふうに考えているのだよ。お前はこの壁の中から出ていっても、俗世間でも修道僧としてありつづけることだろう。大勢の敵を持つことになろうが、ほかならぬ敵たちでさえ、お前を愛することになるだろうよ。人生はお前に数多くの不幸をもたらすけれど、お前はその不幸によって幸福になり、人生を祝福し、ほかの人々にも祝福させるようになるのだ。これが何より大切なことだ。お前はそういう人間なのだ。神父諸師」感動の微笑をうかべながら、長老は客たちに話しかけた。「これまで一度もわたしは、なぜこの青年の顔がわたしの心にそれほどなつかしいものに思われるかを、当人にさえ話したことはないのです。今はじめてお話ししましょう。実はわたしにとって、この青年の顔は注意の喚起か予言にひとしいものだったのです。わたしがまだ子供だった、人生の暁に、兄がいたのですが、その兄はわたしの目の前で、わずか十七歳の若さで死んでしまいました。その後、人生の道を歩みすすむにつれて、しだいにわたしは、この兄こそわたしの運命にとって神の指示か天命のようなものだったのだと、確信するようになったのです。なぜなら、もしわたしの人生にこの兄が現われなかったら、この兄がまったく存在しなかったら、おそらくわたしは決して僧位を受けることも、この尊い道に足を踏み入れることもなかったにちがいないと、思うからです。この最初の出現はまだわたしの少年時代のことでしたけれど、もはや老いの坂も終り近くになって、その再現ともいうべきものが目のあたりに現われたのですよ。ふしぎなことに、神父諸師、アレクセイは顔だちはさほど兄に似ているわけではなく、ほんの少し似通っている程度ですが、精神的には兄とあまりにもそっくりなので、わたしは何度もそれこそ、青年だった兄がわたしの人生の終りにあたって、一種の回想と洞察のためにひそかに訪れてくれたのだと思いこんだりしましての、そんな自分やそんな奇妙な夢想にわれながらおどろいたほどなのです」

（同）

ここで、アリョーシャの顔が「さほど兄に似ているわけではなく、ほんの少し似通っている程度」であること、両者の共通点が実は「精神的には兄とあまりにもそっくり」であること、つまり、両者の「精神的」なものが両者の「顔」に現われていることを思い浮かべてください。両者の「顔」は、自己に淫していない・淫すまいとしている人間の「顔」です。

この「顔」は、ミウーソフにこんなことをいわせる人間のものでしょう。

「ひょっとすると彼は、人口百万の見知らぬ都会の広場にいきなりただひとり、無一文で置き去りにされても、決して飢えや寒さで滅びたり死んだりすることのない、世界でたった一人の人間かもしれないね。なぜって、あの男ならすぐさま食事や落ちつき場所を与えられるだろうし、かりに与えられないとしても、自分からさっさと落ちつき場所を見つけるだろうよ。しかも、彼にとってはそれが何の努力や屈辱にも値しないのだし、落ちつかせてやった相手にとっても少しも重荷にならぬばかりか、むしろ反対に喜びに感じられるかもしれないんだからね」

（同）

ここでも問題は「自尊心の病」です。当人の「自尊心の病」の程度でもあるし、他の人間のそれでもあります。自己に淫していない・淫すまいとするこの作品の主人公は、自己に淫している他の人物たちからも歓迎されるほどの人物なんです。この主人公が自己に淫している他人から敵視されるのは、その他人の自己への淫しかたに特別な接触――その他人の自己への淫しかたを砕こうとする――を試みたときだけです（便利なことに、自己に淫していて、アリョーシャ

に痛いところを突かれた人たちは彼を追い払うのにこういえばいいんです――「神がかり行者」)。

そうして、『カラマーゾフの兄弟』において最も自己に淫した人物が、まさにアリョーシャの「顔」について(それとともに自分自身について)、こういっていました。

「お前ならあいつを追い払えたろうにさ。いや、お前が追い払ったんだ。お前が現われたとたんに、あいつは姿を消したもの。俺はお前の顔が好きだよ、アリョーシャ。俺がお前の顔を好きだってことを、知っていたか? でも、あいつは俺なんだ、アリョーシャ、俺自身なんだよ。俺の卑しい、卑劣な、軽蔑すべきもののすべてなのさ!」

(同)

イワンの「悪魔」は彼の「自尊心の病」の産物です。最大限にまで「自尊心の病」に憑かれたイワン本人が、「悪魔」を「追い払った」のを、アリョーシャの「顔」に帰すわけです。アリョーシャの「顔」こそ自己に淫していない・淫すまいとする人間の顔なんです。

もう一度、ゾシマ長老のことばから。

「わたしはお前のことをこんなふうに考えているのだよ。お前はこの壁の中から出ていっても、俗世間でも修道僧としてありつづけることだろう。大勢の敵を持つことになろうが、ほかならぬ敵たちでさえ、お前を愛することになるだろうよ。人生はお前に数多くの不幸をもたらすけれど、お前はその不幸によって幸福になり、人生を祝福し、ほかの人々にも祝福させるようになるのだ。これが何より大切なことだ。お前はそういう人間なのだ」

(同)

自分の受けたこのことばを、アリョーシャはコーリャに与えますね。

「あのね、コーリャ、それはそうと君はこの人生でとても不幸な人になるでしょうよ」突然どういうわけか、アリョーシャが言った。

「知ってます、知ってますとも。ほんとにあなたは何もかも前もってわかるんですね!」すぐにコーリャが相槌を打った。

「しかし、全体としての人生は、やはり祝福なさいよ」

(同)

その前にどんな会話が交わされていたか?

「ああ、カラマーゾフさん、僕はとても不幸なんです。僕はときおり、みんなが、世界じゅうの人間が僕を笑っているなんて、とんでもないことを想像するんですよ、そうすると、ただもういっさいの秩序をぶちこわしたい気持になるんです」

「そして、まわりの人を苦しめるんですね」アリョーシャが微笑した。

「そして、まわりの人を苦しめるんです、特に母を。カラマーゾフさん、言ってください、今の僕はひどくこっけいですか?」

(同)

この直後のアリョーシャのことばを、私はだいぶ以前、フョードルの死後、イワンが作品に再登場するためにどのような描きかたがされたか、また、「あなたじゃない」がなぜ作品のなかのあの位置にあるのかを説明する文章で引用していました。

「そんなことを考えるのはおやめなさい、全然考えないことです!」ア

リョーシャが叫んだ。「それに、こっけいがどうだと言うんですか？　人間なんて、いったい何度こっけいになったり、こっけいに見えたりするか、わからないんですよ。それなのに、この節では才能を備えたほとんどすべての人が、こっけいな存在になることをひどく恐れて、そのために不幸でいるんです」

（同）

「こっけいを恐れる」のは「自尊心の病」のゆえです。自己に淫している人間は「こっけいを恐れ」ます。そうして、イワンがどれほど「こっけいを恐れ」ているのかということについて、私はさんざんしゃべってきたつもりです。「こっけいを恐れ」る彼は「こっけい」ではなく、「ダイヤモンド」でありたいんです。

まだ引用をつづけます。

「僕はただ、君がそんなに早くそのことを感じはじめたのに、おどろいているんですよ。もっとも、僕はもうだいぶ前から、そういうのが君だけじゃないことに気づいてましたけどね。この節では子供にひとしい人たちまで、その問題で悩みはじめてますよ。ほとんど狂気の沙汰ですね。悪魔がそうした自負心の形をかりて、あらゆる世代に入りこんだんです、まさしく悪魔がね」ひたと見つめていたコーリャがふと思いかけたのとは違って、アリョーシャはまるきり笑いを見せずに付け加えた。「君もみんなと同じですよ」アリョーシャはしめくくった。「つまり、大多数の人と同じなんです。ただ、みんなと同じような人になってはいけませんよ、本当に」

「みんながそういう人間でもですか？」

「ええ、みんながそういう人間でも。君だけはそうじゃない人間になってください。君は事実みんなと同じような人間じゃないんだから。現に君は今、自分のわるい点やこっけいな点さえ、恥ずかしがらずに打ち明けたじゃありませんか。今の世でいったいだれが、そこまで自覚していますか？　だれもいませんよ。それに自己批判の必要さえ見いださぬようになってしまったんです。みなと同じような人間にならないでください。たとえ同じじゃないのが君一人だけになってもかまわない、やはりああいう人間にはならないでください」

（同）

イワンの再登場の前に右の会話のあることには非常に大きな意味があります。自己に淫していない・淫すまいとするアリョーシャが、早くも自己に淫していはするけれど、いまのうちに方向修正を施してやれば、やがて「実行的な愛」をなす人間になるはずのコーリャにそう話したんです。そのアリョーシャがコーリャの内に認めているのは、自分自身です。

また、アリョーシャはリーザとの会話のなかでこんなこともいっていました。

「世間の人たちに関するあなたの言葉には、いくぶんかの真実がありますね」アリョーシャが低い声で言った。

「まあ、そんな考えを持っているの！」リーザが感激して叫んだ。「お坊さんだというのに！　あなたは信じないでしょうけど、あたしとってもあなたを尊敬するわ、アリョーシャ、それはね、あなたが決して嘘をつかないからよ。ああ、あなたにあたしの見たおもしろい夢を話してあげるわ。あたし、時々、悪魔の夢を見るの。なんでも夜中らしいんだけど、あたしは蠟燭をもってお部屋にいるのね。そうすると突然、いたるところに悪魔が出てくるのよ。どこの隅にも、テーブルの下にも。ドアを開けると、ドアの外にもひしめき合っていて、それが部屋に入ってきてあたしを捕まえようと思ってるんだわ。そして、すぐそばまでやってきて、今にも捕まえそうになるの。あたしがいきなり十字を切ると、悪魔たちはみんなこわがって、あとずさるんだけど、すっかり退散せずに、戸口

や隅々に立って、待ち構えてるのよ。ところがあたしは突然、大声で神さまの悪口を言いたくてたまらなくなってきて、悪口をいいはじめると、悪魔たちはふいにまたどっとつめかけて、大喜びしながら、またあたしを捕まえそうになるんだわ。そこでまた突然十字を切ってやると、悪魔たちはみんな退却していくの。すごくおもしろくて、息がつまりそうになるわ」

「僕もよくそれとまったく同じ夢を見ますよ」だしぬけにアリョーシャが言った。

「ほんと？」リーザがおどろいて叫んだ。「ねえ、アリョーシャ、からかわないで。これはひどく重大なことよ。違う二人の人間がまるきり同じ夢を見るなんてことが、ほんとにあるかしら？」

「きっとあるでしょうよ」

「アリョーシャ、はっきり言うけれど、これはひどく重大なことよ」リーザは何かもはや極度の驚きにかられて、言葉をつづけた。「重大なのは夢じゃなくて、あなたがあたしとまったく同じ夢を見ることができたという点なのよ。あなたはあたしに決して嘘をつかないんだから、今も嘘を言ったりしないでね。それ、本当？　からかってるんじゃないの？」

「本当ですとも」

リーザは何事かにひどく心を打たれ、三十秒ほど黙りこんだ。

「アリョーシャ、時々あたしのところに来てね、もっとひんぱんに来て」突然祈るような声で彼女は言った。

（同）

自己に淫していない・淫すまいとするアリョーシャが、自己に淫している人物に対して、彼らが自己に淫しないようにするために接触するとき、そのアリョーシャは、彼らがどのように自己に淫しているかを知っていなくてはなりません。アリョーシャには、彼らの自己に淫した状態がどういうものかわかっていなくてはなりません。先にいったように、ひとは「自尊心の病」から全快することなどありません。多かれ少なかれ、誰もが「自尊心の病」に憑かれています。アリョーシャも例外ではありません。ただ、彼は自分の「自尊心の病」に気がついているんです。そこで、彼は自分の「自尊心の病」に照らして、他の誰彼の「自尊心の病」を推し測ることになります。アリョーシャの自覚では、彼自身相当に深い「自尊心の病」に憑かれています。彼も「カラマーゾフ」だからです。そうして、「カラマーゾフ」であることが、他の誰彼の「自尊心の病」を把握するときにとても役に立つわけです。「カラマーゾフ」とは、「自尊心の病」の最悪のものだからです（と同時に、もし自らの「自尊心の病」に気づいた場合には、「実行的な愛」をなすために最高のものでもあります）。そうして、リーザが祈るような声で「アリョーシャ、時々あたしのところに来てね、もっとひんぱんに来て」というのは、アリョーシャが彼女同様の懐疑――自己に淫しているがゆえの――を抱いているにもかかわらず、自己に淫すまいとしている実例として彼女の前に立っているからです。つまり、この実例が目の前にあるならば、彼女自身も懐疑――自己に淫しているがゆえの――に重量をかけなくていいということになるかもしれないからです。アリョーシャはリーザにとっての希望になります。いいですか、アリョーシャが自らの「自尊心の病」に気づいていなければ、このように他の誰彼の「自尊心の病」に対することはできないんですよ。

そのように、アリョーシャはイワンについても、自己に淫した読者たちが想像するよりはるかに多くのことを理解しています。アリョーシャにはイワンの抱いている認識の正しいことはわかっています。イワンのいう「神の創った世界」の数々の不正はそのまますっかりわかっています。

「ええ、本当のロシア人にとって、神はあるか、不死は存するのかという問題や、あるいは兄さんが今言ったように、反対側から見たそれらの問題は、もちろん、あらゆるものに先立つ第一の問題ですし、またそうでなければいけないんです」

（同）

アリョーシャには、イワンの話す「大審問官」が何を示しているのかがすっかり理解できています。理解できてはいますが、アリョーシャはイワンと違って、そういう思想を理解する自分自身から距離を置こうとします。自分が他の誰に対しても罪がある、自分こそが最も罪深い人間であるという自覚があり、自分に自分や世界の価値や意味を決定する権利などないこと・自分にできるのは、そうやって自分や世界の価値や意味を決定することではなくて、ただひたすら他の誰彼のためにこの自分の身を投げ出すことでしかないと知っているんです。自己に淫した人間的な価値観からは「無意味」・「無駄」・「徒労」かもしれないことが、神の視点からすると「豊かに実を結ぶようになる」ことを知っているんです。

さあ、そろそろいいでしょう。これで、私の「この一連の記述全体（これまでのものはもちろん、これからの分をも含んで）の見取り図」の提示を終わりにしようと思います。

最後に、萩原氏の「ドストエフスキーと二つの不平等」から長い引用をしておきます。

しかし、その後、マルケルと同じようにドストエフスキーは回心する。なぜ、回心したのか。これも既に述べたように、それは自分の存在が無であることに気づき、自分が自分を創り出した神のものであることが明らかになったからだ。私たちは死んだときはもちろん、生きているときも常に、無になって神のもとに還っていかなければならない。これが謙遜というものだった。従って、回心した者にとっては、不完全な私たちが、お互い助け合いながら謙遜のうちに生きなければならないということは明白な真理なのである。このとき回心した者にとっては絶対的平等が実現する。なぜなら、百歳を越えて生きる人も生まれてすぐ死ぬ人も、障害をもって生まれた人も健康な人も、醜い人も美しい人も、赤貧の中で生きた人も安穏な生活を送った人も、頭の良い人も悪い人も、平和の中で生きた人も戦争の中で生きた人も、すべて無に還るという意味で平等なのであるから。

しかし、このような平等観に立つということは、回心していない人々が引き起こす争いに苦しむということに他ならない。なぜなら、回心した者は自分の神中心主義な立場を捨て、特定の誰かの味方になるということができないからだ。たとえば、そのような者は農奴制を容認する圧制者を殺し、農奴制に苦しむ農奴たちを解放することはできない。なぜなら、神の前ではその圧制者も農奴と同じように私たちの隣人であり、農奴と同じように無にすぎないからだ。私たちは隣人を殺すことはできないし、無である私たちに誰かを殺す権利もない。そのような権利を持つのは神だけだ。従って、絶対的平等の立場に立つ者は、暴力革命を否定しなければならない。ということになれば、謙遜を明白な真理とする回心した者こそ、圧制者にとってもっとも都合のよい存在になる。

こうして二つの明白な真理、すなわち、革命と謙遜とが対立する。革命を明白な真理とする者にとって、謙遜を明白な真理とする者とは、打ち倒すべき敵に味方する者に他ならない。一方、謙遜を明白な真理とする者にとって、革命を明白な真理とする者とは、神を恐れぬ人間中心主義に陥った者に他ならない。従って、以上二つの明白な真理を容認する者は、その二つの真理によって実現される二つの平等を同時に実現することができない。そして、いつもこの二つの明白な真理によって引き裂かれてしまう。

このような解決不可能なジレンマに捉えられたのがマルケルであり、ドストエフスキーなのだ。だから、いっそのこと回心しなければよかったのだ。そうすれば、チェルヌイシェフスキーやマルクスのように単純な革命家になって生涯を全うすることができただろう。いや、そんなことはない。マルケルは死の直前回心し、信仰によって安心立命を獲得したではないか、という人がいるかもしれない。しかし、そんなことを言

う人は謙遜という明白な真理を理解していない。謙遜という明白な真理の裡に生きるとは、自分を神に属している無と認めることにすぎない。それは信仰によって自分を守り、安心立命を獲得することではない。また、そんなものは信仰ではなく現実逃避にすぎない。そのようなマルクスに非難されるような現実逃避を信仰と錯覚する者もいるかもしれないが、少なくともマルケルはそのような人物ではない。なぜなら、彼は「流刑中のある政治犯」に会うことによって、いったんは信仰を失ったからだ。マルケルが自分の隣人の不幸を黙って見過ごすことができる者ではないということは明らかだ。このため、彼は病を得、回心したあとも、回心が誰にでもできることではないと知りながら、召使いたちに「誰だってお互いに仕え合わなければならないんだからね」と言うのである。マルケルが二つの真理に引き裂かれたまま生を閉じたことは明らかだ。

この二つの明白な真理に引き裂かれたマルケルの意志はそのままゾシマに伝わり、それがアリョーシャに伝わる。詳しく説明する余裕はないが、『カラマーゾフの兄弟』を素直に読めば、そのことは誰にも分かるはずだ。従って、A・C・スヴォーリンが伝えているように、アリョーシャが『カラマーゾフの兄弟』第二部で、革命家になり、罪を犯し、処刑される、という構想をドストエフスキーが抱いていたとしても不思議ではない。透徹した知性と健全な理性をもったドストエフスキーにおいて、生涯、この二つの明白な真理に引き裂かれた自己は収拾のつかないものであったし、収拾のつくものであってはならなかった。

（萩原俊治「ドストエフスキーと二つの不平等」）

萩原俊治氏の一連の文章がなければ、私は自分のこれまでしゃべってきたことを、自分でここまで明確に認識することができませんでした。萩原氏に感謝します。

（二〇一〇年十一月十四日）

「とつぜん甲高い銃声が聞えてきた」

二〇一二年八月二十五日、私の勤める書店にも最先端＝亀山郁夫著『謎とき『悪霊』』の配本がありました。一冊だけ。ということは、大した刷り部数じゃありません（そのまま絶版となりますように！　いやいや、回収してくれ！）。その一冊を私が買いました。まだぱらぱらとしか読んでいませんが、もちろん最先端＝亀山郁夫は最先端のまま突っ走っています。ぱらぱらとしか読んでいないにもかかわらず、私はすでに突っ込みたいところをどっさり見つけているんですが、まあ、それらはおいおい、のんびりだらだらと詳述することにして、いまは一点だけメモのようにして書いておきたいと思います。

最先端＝亀山郁夫がキリーロフの死の場面を語るところで自分の翻訳（光文社古典新訳文庫）から引用しているわけなんですが、次の通りです。

「キリーロフの肩に触れようとしたその瞬間、相手はすばやく首を傾げ、頭でそのろうそくをピョートルの手から叩きおとした。燭台は音を立てて床に転げおち、ろうそくの火は消えた。その瞬間、ピョートルは左手の小指に怖ろしい痛みを感じた。……やっとのことで指を引きはなした彼は、暗闇のなかを手さぐりしながら一目散に家の外に駆けだした。その彼を追いかけるようにして、怖ろしい叫び声が部屋のなかから聞えてきた。

『いまだ、いまだ、いまだ……』

同じ叫び声が、十回ほどもつづいた。だが、ピョートルはなおも走りつづけ、すでに玄関口に出ようとしたところで、とつぜん甲高い銃声が聞えてきた」

（亀山郁夫『謎とき『悪霊』』　新潮選書）

おいおい！　何だ、この――

「とつぜん、甲高い銃声が聞えてきた」

――っていうのは！　ええ？

「銃声」が「聞えてきた」のかよ！

さすが「あなたの前には、ほとんど越えがたい深い淵が立ちはだかっている」の翻訳者だ！　素晴らしいねえ！

同じ箇所を、同じ省略をしながら、先行訳から引用してみます。

彼がキリーロフに触れるか触れないうちに、相手はふいに頭を沈め、その頭で彼の手から蠟燭を叩き落してしまった。燭台ががらんがらんと音を立てて床にころがり、灯は消えた。その同じ瞬間に、彼は自分の左手の小指にはげしい痛みを感じた。……ようやくのことで彼は指をもぎ放すと、暗闇の中を手で探りながら、後も見ずに外へ駆けだした。その後を追って、怖ろしい叫び声が部屋の中からとんできた。

「いますぐ、いますぐ、いますぐ、いますぐ……」

十度ほども立てつづけだった。しかし彼はいっさんに走りつづけ、もう玄関口まで走り出たとき、ふいに高らかな銃声が聞えた。

（ドストエフスキー『悪霊』　江川卓訳　新潮文庫）

（二〇一二年八月二十七日）

「マイ古典をつくろう！」――齋藤孝『古典力』

二〇一二年十月二十日、私の勤める書店に岩波新書の新刊が入荷しました。そのうちの一点が齋藤孝による『古典力』で、書棚をバックに著者の笑顔のカラー写真を使った帯には「マイ古典をつくろう！」とあります。この本はいわゆる「古典」といわれる名作の読書ガイドという体裁をとっています。ぱらぱらとページをめくっていると、こういう文章がありました。

カラマーゾフの兄弟　ドストエフスキー

これぞ最高峰の総合小説。これを読まずして文学を、いや人間を語るなかれ。この最高に面白くて深い傑作を読破するのが最もコストパフォーマンスもいい。「カラマーゾフ家の好色な父をだれが殺したのか」という推理サスペンス的興味で読者を引っ張りつつ、深い問いの森へと読者を誘いこむ。

人間の生とは何か、欲望とどう向き合うか、神はいるのか、傷ついた魂は癒されるか、父と子とは、人間の真心・良心とは、希望はどこにあるのか。答えは一つではない。気質も立場も価値観も異なる登場人物たちが、猛烈な勢いでぶつかり合い、対話しまくる。一人ひとりが「過剰な人間」であり、それが総当り戦で激突し合う。

放出されている総エネルギー量において、古今随一だ。それぞれが心の地下室を持ち、その地下室のエネルギーが、人との出会いで噴出する（『地下室の手記』参照。自意識とは何かがわかる）。バフチンのいう「ポリフォニック（多声的）」で「カーニバル」的な場が生まれる。自意識を持ち、自分の世界観を持つ者が対話のバトルロワイヤルをくり広げる。読者は過剰な人々の祝祭空間にまきこまれ、人間の深みにはまる。読書はもはや体験となる。

主人公は新たなキリストの可能性を秘める青年アリョーシャ。好色で恥知らずの父フョードル（最低でサイコー）、荒々しく情熱的な長兄ドミー

トリィ、無神論者で革命を企てる次兄イワン。まったく異なる三人だが、三男アリョーシャには心を開く。カラマーゾフとは黒く塗られた欲望だ（江川卓『謎とき『カラマーゾフの兄弟』』参照）。女好きと強欲と神がかり。これがカラマーゾフだ。

ドミートリィは、情欲にまみれ屈辱的な状態で頭からまっさかさまに堕落することこそ本望だ、「俺はカラマーゾフだからさ」という。アリョーシャもまた、「僕だってカラマーゾフですからね」という。読後、私たちは自分の中のカラマーゾフ的な要素を見ることになる。あるいはその要素の欠乏を残念に思うかもしれない。

カラマーゾフに火を点ける女、グルーシェニカの魅力はすさまじい。父も息子もやられる。「あれは虎だわ！」とカテリーナが叫ぶ場面は必見。二人の対決場面を大阪のおばちゃん数百人と音読したが異常に盛り上がった。二等大尉と息子のイリューシャは切ない。金を踏みつける場面は最高。「お前のもたらした自由は人間には重荷だった」とイエス（の生まれ変わり）に問う大審問官の章は不滅。絶望したアリョーシャが大地から立ち上がる場面には震えた。希望あふれるラスト。名場面は数知れないが、これがメインメッセージだ。

「人生の意味より、人生そのものを愛せ！」

（齋藤孝『古典力』　岩波新書）

この本の第三章「マイ古典にしたい名著五〇選」の筆頭が『カラマーゾフの兄弟』です。ちなみに巻末の「本書で取り上げられた作品ならびに索引」――（すでに品切れになっている書物も入っている。複数の文庫に入っている作品が多数あるが、網羅していない）という注のついた――にあるのは最先端＝亀山郁夫訳の光文社古典新訳文庫のみ。

「この最高に面白くて深い傑作を読破するのが最もコストパフォーマンスもいい。」という文はぜひ齋藤孝自身に「声に出して」読んでほしいと思いました。

それにしても「コストパフォーマンス」ねえ。

そこから、もっと前の方のページを見てみると、ありました、ありました。

新訳による再発見

現在日本では古典新訳ブームが起こっている。現代の感覚に合った訳で古典を読みやすく、という傾向は、時代が古典を求めていることの表れだ。

日々情報にあふれかえり、速い速度で過ぎ去る日常の中で、「もっとたしかなものに触れて落ちつきたい」、「自分の拠りどころとなるものに出会いたい」という思いが、多くの人の胸に湧いているのだろう。その湧きあがる、不安とあこがれの入りまじった思いを受け止めてくれるのが、古典だ。

二〇〇六年から新訳として出版された亀山郁夫訳の『カラマーゾフの兄弟』が百万部を超えるベストセラーとなったことに、私は大きな希望を感じた。すでに優れた訳が複数ある状況で、世界最高の小説とされる長大な作品がミリオンセラーになるとは、ドストエフスキーも驚くであろう奇跡だ。長年の研究に基づいた優れた新訳によって古典に現代の息吹が吹き込まれる。古典は何度もよみがえるのだ。

訳を複数読み比べることで、古典の姿がより明確になる。「この訳が自分にはぴったりだ」と思える訳に出会えた時の喜びは大きい。読み比べができる、充実した出版文化の現状に感謝しつつ、古典の不滅の生命力に改めて驚嘆する。

古典は、読者が一人で静かに向き合うことの多い相手ではあるが、研究者による手引きがある方がより理解に至りやすい。研究が進むと、古典に新たな解釈が加わり、その古典の評価も変化する。百年以上高く評価されずに埋もれていた本が名著として見直され、古典の仲間入りをしていくケースは稀ではない。

古典に対して予備知識を持たずに、まっさらな状態で出会うのも、もちろん意味はある。先入見を持たずに古典の原文そのものから受ける印象を素直に積み重ねていくことで、「自分の読み」を深めていくやり方もある。

しかし、実際には古典の名著の中には難解なものや現代的な解釈が必要なものが多いので、手引きとなる解説は基本的に有益だ。偏りを避けたい場合は、立場を異にする複数の解説を参考にすればいい。解説によっておよその内容理解を進めておいた上で、古典そのものの「味読（みどく）」、文字通り味わいつつ読む段階に入るとストレスが少ない。

（同）

最先端＝亀山郁夫の仕事が「長年の研究に基づいた優れた新訳」だそうです。そうして、「「この訳が自分にはぴったりだ」と思える訳に出会えた時の喜び」があれば、どの翻訳を読んでもいいらしいです。

そこから、今度はまたもうちょっと後ろのページをめくっていると、こうありました。

正しいテキストを選ぶ

古い書物に書かれた事柄の良さを自分のものとして吸収し、生かすにはどうしたらよいか。

孔子は、基本書を設定し、それを覚えることを奨励した。『書経』とともに孔子門下の教科書的な書とされたのは、『詩経』であった。詩経のうちにある詩三百篇の本質を一言でいえば、「思い 邪（よこしま）なし（純粋）」だと、孔子は語っている。

古典力の重要なポイントは、教科書（基本書）をきちんと選ぶということだ。基本となる本を選びまちがえると、せっかくの努力が無駄になる。大学の講義では、教師が自分の判断で教科書（基本書）を設定して、シラバスで指示することが一般的だ。その選択には責任が伴う。

孔子はブレることなく、『詩経』を基本テキストとした。その確信の強さ、思い入れの強さが、弟子たちの古典力を育てる原動力となっている。

（同）

え？　何ですって？

古典力の重要なポイントは、教科書（基本書）をきちんと選ぶということだ。基本となる本を選びまちがえると、せっかくの努力が無駄になる。大学の講義では、教師が自分の判断で教科書（基本書）を設定して、シラバスで指示することが一般的だ。その選択には責任が伴う。

（同）

では、齋藤孝自身の「責任」はどうなっているのか？　呆れました。それとも、大笑いしたらいいんでしょうか？

私が昨年（二〇一一年）のうちに書いて、いまだ公開していない「新訳『トーニオ・クレーガー』」についての文章に、この齋藤孝も登場していたんですが、そこから一部修正して引用しましょう。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

齋藤孝。彼が今年二〇一一年になってからこの半年で出した本は――「e-hon」(http://www.e-hon.ne.jp/bec/EB/Top) によれば――次の通り。

『言ってはいけない！　上司と部下の禁句』、『自分の心に「奇跡のタネ」をまく人』（訳・責任編集）、『声に出して読みたい日本語　1』（文庫化）、『声に出して読みたい日本語　2』（文庫化）、『からだ上手こころ上手』、『人はなぜ学ばなけ

ればならないのか』、『こうすればもっと学校が楽しくなる』、『すすっと瞑想スイッチ』、『ブレない生き方』、『齋藤孝の親子で読む国語教科書　6年生』、『齋藤孝の親子で読む国語教科書　5年生』、『齋藤孝の親子で読む国語教科書　4年生』、『齋藤孝の親子で読む国語教科書　3年生』、『齋藤孝の親子で読む国語教科書2年生』、『齋藤孝の親子で読む国語教科書　1年生』、『必ず覚える！　1分間アウトプット勉強法』、『日本のもと　学校』、『声に出して読みたい論語』、『どう生きるか、どう死ぬか　「セネカの智慧」』、『図解論語　正直者がバカをみない生き方』、『今、そこにある苦悩からの脱出』、『齋藤体操』、『齋藤孝のざっくり西洋思想』、『ピカピカ論語』、『タイガー・マザー』（訳）、『読書のチカラ』、『論語力』、『ピカピカ俳句』、『「意識の量」を燃やせ』、『かなしみはちからに　心にしみる宮沢賢治のことば』

いいですか、この半年間での刊行数ですよ。こうした異常な出版――出版社がひとりの著者に群がって書かせるし、本人もその気になって書いてしまう――が現にまかり通ってしまうことで、齋藤孝という存在は、いまの日本の出版業界――いや、本をめぐる状況――いや、日本の文化――の衰退を示す大きな徴候のひとつだと思います。

さて、この大馬鹿者＝齋藤孝が右の著作群にある『読書のチカラ』で、どういうことを書いているか？「第3章　私たちに残された叡智について」（！）から引用します。

もう一つ、海外の古典の場合は、翻訳をどう選ぶかも重要だ。

古典はもともとの難解さもさることながら、翻訳の仕方によってもイメージが大きく変わる。翻訳によっては、三〇年以上前の翻訳のままで、言葉遣いが硬く、印字も小さく、書体も古めかしく、一般の人にはとてもとっつきにくいものも少なくない。

その点、たとえば難解なヘーゲルの本でも、前出の長谷川宏さんが訳されたものなら読みやすい。今風の日本語で書かれているからだ。あるいはドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』にしても、近年に亀山郁夫先生が訳されたものは、周知のとおり爆発的なヒットとなった。亀山先生によれば、まさに一気に読めるような文章になることを目指されたそうである。

言い換えるなら、とっつきにくい古典であっても、読みやすい新訳になれば、多くの人が受け入れるということだ。もともと興味はあるのに、なんとなく敷居が高そうで敬遠していたのかもしれない。そんなイメージを払拭する役割を、新訳が果たしているといえるだろう。

そのせいか、最近は「古典新訳ブーム」も起きている。光文社が数年前から刊行し続けている「古典新訳文庫」のシリーズは、その象徴的な存在だ。「新訳」というだけあって、たとえばゴーゴリの『鼻』はほとんど落語家のような口調で訳されている。もともと『鼻』はユーモアを含んだ小説なので、この試みは的外れではない。むしろこういう工夫で一気に笑って読める本に仕上がっているとすれば、大成功といえるだろう。また文学だけでなく、カントやプラトンのような思想家の著作も加えている。最終的には、今の岩波文庫や新潮文庫に匹敵するラインナップになるかもしれない。

（齋藤孝『読書のチカラ』　大和書房）

何度でもいいますよ、原卓也訳の『カラマーゾフの兄弟』は「三〇年以上前の翻訳」ですが、全然古びてなどいません。いまの版は活字も大きくなっています。それにひきかえ、最先端＝亀山郁夫は翻訳もいいかげんのでたらめだらけ、日本語もいいかげんのでたらめだらけで、齋藤孝はこの「いいかげんのでたらめだらけ」こそが「今風の日本語」の特徴だとでも考えているのか？　私がしばらく前に引いた最先端＝亀山郁夫の日本語――「淵が立ちはだかっている」だの「おっしゃられてました」だの「わざと露悪的に」だの――を、齋藤孝さん、あんたは「声に出して読」んでみろよ！

齋藤孝さん、次のふたつの文章を「声に出して読」んでみなさいよ。

「ぼくが知っているのはひとつ」と、アリョーシャは、あいかわらずほとんどささやくような声で言った。「父を殺したのは、あなたじゃないってことだけです」

「『あなたじゃない』だと！　あなたじゃないとは、どういうことだ？」イワンは、呆然としてたずねた。

「父を殺したのは、あなたじゃない、あなたじゃない！」アリョーシャはきっぱりした口調で繰り返した。三十秒ほど沈黙がつづいた。

「おれじゃないことぐらい、自分でもわかってるさ、何を寝ぼけたこと言ってる？」青ざめた顔にゆがんだ笑みを浮かべて、イワンは言った。彼は食い入るようにアリョーシャの顔を見つめた。二人は、ふたたび街灯の下に立っていた。

「いいえ、イワン、あなたはなんどか、自分が犯人だと言い聞かせてきたはずです」

「いつ、おれがそんなことを言った？……おれはモスクワにいたんだぞ……いつ、言ったんだ？」イワンは、すっかり途方にくれて口ごもった。

「恐ろしかったこの二ヶ月間、あなたは一人になると、自分になんどもそう言い聞かせてきました」あいかわらず低い声で、一語一語区切りながら、アリョーシャはつづけた。とはいえその口ぶりには、もうわれを忘れ、自分の意思というより、何か逆らうに逆らえない命令にしたがっているかのような趣きが感じられた。

「あなたは、自分を責め、自分でも認めていました。犯人は自分以外のだれでもない、ってね。でも殺したのはあなたじゃない。あなたはまちがっている、犯人はあなたじゃない、いいですね、あなたじゃないんです！　ぼくが神さまに遣わされたのは、それをあなたに告げるためなんです」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』亀山郁夫訳　光文社文庫）

「僕が知っているのは一つだけです」なおもほとんどささやくように、アリョーシャは言った。

「お父さんを殺したのは、あなたじゃありません」

「《あなたじゃない》！　あなたじゃないとは、どういうことだ？」イワンは愕然とした。

「あなたがお父さんを殺したんじゃない、あなたじゃありません！」アリョーシャがしっかりした口調でくりかえした。

三十秒ほど沈黙がつづいた。

「俺じゃないことくらい、自分でも知っているさ、うわごとでも言ってるのか？」青ざめた、ゆがんだ笑いをうかべて、イワンが言い放った。アリョーシャに視線が釘づけになったかのようだった。二人ともまた街燈のそばに立っていた。

「この恐ろしい二カ月の間、一人きりになると、兄さんは何度も自分自身にそう言ったはずです」相変らず低い、はっきりした口調で、アリョーシャはつづけた。だが彼はもはや、さながら自分の意志ではなく、何かさからうことのできぬ命令に従うかのように、われを忘れて話していた。「兄さんは自分自身を責めて、犯人は自分以外のだれでもないと心の中で認めてきたんです。でも、殺したのは兄さんじゃない。兄さんは思い違いをしています。犯人はあなたじゃない。いいですね、あなたじゃありません！　僕は兄さんにこのことを言うために、神さまに遣わされてきたんです」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

齋藤孝さん、右のいずれをあなたは「声に出して読みたい日本語」だと思いましたか？　まさか最先端＝亀山郁夫訳の方じゃないですよねえ？　右の場面がどんなに切迫したものであるかを、もちろんあなたはご存知のはずだ。ご存知でいながら、最先端＝亀山郁夫の緊張感のない日本語の方を選ぶわけもないで

すよねえ？　なぜあなたが右の場面についてご存知だと私が思うかといえば、私は読んでいないけれど、あなたは『ドストエフスキーの人間力』（新潮文庫）の著者でもあるものなあ。で、この文庫の紹介文によると「若き日よりその作品群を愛読、耽溺してきた著者ならではの洞察に満ちた人間論」だそうで？　でも、あれ？　この文庫の巻末で解説を書いているのは誰？　あれ？　亀山郁夫？　あれ？

齋藤孝さん、もちろんあなたは最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』を読んだでしょう。それで、第五巻にある最先端＝亀山郁夫の「解題」も読んだでしょう。その他にも最先端＝亀山郁夫の少なからぬ著作をも読んでいるでしょう。さて、もしあなたがドストエフスキーについて「若き日よりその作品群を愛読、耽溺してきた」ひとなのであれば、いったいどういうわけで最先端＝亀山郁夫の仕事を否定せずにいられるのか、私には理解不能です。否定しないどころか、積極的に肯定までし、加えて自分の著作の「解説」までさせてしまうとは、どういうことなのか？　それとも、あなたがドストエフスキーについて「若き日よりその作品群を愛読、耽溺してきた」のに間違いはないけれど、全然読めていなかった――あなたの「読書力」では読めなかった――ということでしょうか？　もし、そうでないのだとしたら、あなたは卑劣であり、卑怯だ。つまり、あなたは大馬鹿でなければ、卑怯だ。そのどちらかでしかありえない。

齋藤孝さん、あなたに「私たちに残された叡智について」なんかを語る資格なんかありません。「私たちに残された叡智」を解体し、いいかげんのでたらめだらけに変造し、偽物の「叡智」を騙る最先端＝亀山郁夫を、あなたは肯定し、「私たち」に薦めているわけです。ひどものだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（二〇一二年十月二十三日）

この三年半ほどの間に書いた文章の公開を始めます

この次に公開する文章（昨二〇一三年十一月記）の冒頭はこうです。

二〇一〇年十一月の『「自尊心の病に憑かれた」読者にアリョーシャは見えない』から、まるまる三年間も私はこの最先端＝亀山郁夫批判の文章をほとんど公開してきませんでしたが、公開しないだけで書きつづけてはいました。

そういうわけで、しばらくの間ネット上に――文庫本の字詰めで換算しておよそ六〇〇ページ分の――文章を連投することになります。

この三年半の間に私の考えていたことは、あらゆる読書――どんな読書であろうが――に「勇気や信念」が必要である、ということでした。いまだに増えている最先端＝亀山郁夫信者――いろいろ批判はあるみたいだけど、読みやすいから最先端＝亀山郁夫訳がおすすめ、とか、最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』第五巻の「解題」は素晴らしい、とかいっているひとたち――のすべての読書に「勇気や信念」がまったく欠けている、と私はいいます。そういうひとたちには「読書」というものが何であるのか、まるっきりわかっていません。読者である自分の「自由」とか「人間」というものがわかっていません。それぱかりか、自分の「読書」を他人に伝えるということの意味もわかっていません。このひとたちは「自由」や「人間」を他人に売り渡してしまっているんですが、いま、私がいきなりこんなふうにいっても――いや、どんなふうにいっても――通じないでしょう。「自由」やら「人間」やらはどうでもいいから、「パン」をくれ、ということですね。

それにしても、何だって私はいつまでもそんなひとたちのことを考えているんでしょう？　私がそんなひとたちのことをいつから考えているかというと、この最先端＝亀山郁夫批判を始めるずっと前からです。

しかし、まあ、それはいいです。

さて、ここでメモのようにして、いくつか引用をしてみます。

いいかえると、なるほど知識人が民族存亡の危機に瀕した共同体を支援することには、測り知れない価値があるにしても、知識人が生存のための集団闘争に忠誠をつくすことは、批判的感覚の麻痺や、知識人の使命の矮小化につながりかねないので避けるべきなのだ。知識人にとってなすべきことは、生存の問題を超えて、政治的解放の可能性を問うことであり、指導層に批判をつきつけることであり、代替的可能性を示唆することである――たとえ、この代替的可能性が、いつも、まぢかにひかえた戦いには無関係なものとして周辺化されたり一蹴されるとしても。

（エドワード・W・サイード『知識人とは何か』大橋洋一訳　平凡社ライブラリー）

ある民族が土地を失ったとか、弾圧されたとか、虐殺されたとか、権利や政治的生存を認められなかったと主張しても、同時に、ファノンがアルジェリア戦争でおこなったことをしないかぎり、つまり自分の民族をおそった惨事を、他の民族がこうむった同じような苦難とむすびつけないかぎり不十分である。これは、特定の苦難の歴史的特殊性を捨象することとはちがう。そうではなくて、ある場所で学ばれた抑圧についての教訓が、べつの場所や時代において忘れられたり無視されたりするのをくいとめるということである。そしてまた、自分の民族が舐めた辛酸を、それも自分自身が舐めていたかもしれない辛酸を表象（レプリゼント）しているからといって、自分の民族が、いま同様の犯罪行為を他の民族に対しておこない犠牲者をだしていることについて、いっさい沈黙してよいということにはならない。

（同）

たしかに知識人にとっては、これ以上、人から嫌われる行為はあるまい。だが、たとえそうであるとしても、知識人は、集団的愚行が大手をふってまかりとおるときには、断固これに反対の声をあげるべきであって、それにともなう犠牲を恐れてはいけないのである。

（同）

いま、自分でもどうして右の引用をしたのか、はっきりとはわかっていません。しかし、これらは必ず私の最先端＝亀山郁夫批判に関係しているはずなんです。

次の引用なら、わかりやすいと思います。

私見によれば、知識人の思考習慣のなかでももっとも非難すべきは、見ざる聞かざる的な態度に逃げこむことである。たしかに、いかに風あたりが強くても、断固として筋をとおす立場というのは、それが正しいとわかっていても、なかなか真似のできないことであり、逃げたい気持ちはわかる。あなたは、あまり政治的に思われたくないかもしれない。論争好きに思われたらこまるかもしれない。欲しいのは、上司あるいは権威的人物からのお墨つきである。そのためにもあなたは、バランスのとれた考えかたの持ち主で、冷静で客観的、なおかつ穏健であるという評判を維持していたいかもしれない。あなたが望むのは、意見を打診されたり諮問されたりする立場となり、理事会や高名な委員会の一員となること、そして、責任ある主流の内部にとどまりつづけることである。そうすれば、いつの日か、名誉職にありつけ、大きな賞をもらい、さらには大使の職まで手に入れることができるかもしれない。

知識人にとって、このような思考習慣はきわめつけの堕落である。情熱的な知識人の生活が変質をこうむり、骨抜きにされ、最後には抹殺されてしまうときがあるとすれば、それは、こうした思考習慣が内面化さ

れたときである。個人的なことをいうと、現代世界の諸問題のなかでももっともやっかいな問題のひとつであるパレスチナ問題において、わたしはこうした思考習慣にはいやというほどお目にかかっている。というのも、現代史における最大の不正のひとつについて語ることに対する恐怖が蔓延しているため、本来なら真実を知り、また真実に奉仕する立場にある多くの人びとが発言を自主規制したり、みてみぬふりや、沈黙にはしるからである。

（同）

（二〇一四年四月二十一日）

「勇気や信念」としか、いまのところいいえないもの

（この章は昨二〇一三年十一月十三日に書き上げていたものです）

二〇一〇年十一月の『「自尊心の病に憑かれた」読者にアリョーシャは見えない』から、まるまる三年間も私はこの最先端＝亀山郁夫批判の文章をほとんど公開してきませんでしたが、公開しないだけで書きつづけてはいました。一日たりとこの問題について考えない日はありませんでした。いくつかの文章はとっくに出来上がっていて、単純にそのまま公開すればよかったのかもしれません。しかし、何か引っ掛かりのようなものがあって、そうしなかったんですね。くだらない引っ掛かりなのかもしれませんが、ともあれ、私には引っ掛かったわけです。

『「自尊心の病に憑かれた」読者にアリョーシャは見えない』を公開した後、翌二〇一一年は夏ごろまで、私は平野卿子による新訳『トーニオ・クレーガー』（河出文庫）批判の文章を書いていました。この翻訳には最先端＝亀山郁夫の翻訳と同じ問題があると思ったからです。そうして、秋からは『なぜあるひとたちの目には最先端＝亀山郁夫批判が醜悪に見えるのか？』を書いていて、途中で投げ出し、自分でも納得のいかないまま翌二〇一二年夏に無理やりこれを結びにしたんですね。この二〇一二年の上半期には『さあ、東大・沼野教授と新しい「読み」の冒険に出かけよう！』も書いていて、これも中途で私自身がうんざりして、やはり夏にこれを結びにしました。そうして、その間にも『翻訳の品格』（藤井一行・中島章利）を著者のひとりである中島さんから贈っていただいたので、それについて書こうとしていました。ところが、この本のある箇所について疑問が生じ、それについてあれこれ書こうとしているうちにどんどん時間がたってしまったんですね。

右の「ある箇所」については今年（二〇一三年二月）に萩原俊治氏が指摘されています。

もうひとつの同意できない箇所を挙げると、これは誤訳そのものに関わる箇所だ。藤井氏が『カラマーゾフの兄弟』の「長老ゾシマの死の場面」の訳を誤訳であると述べているところだ。

（萩原俊治「『翻訳の品格』」――「こころなきみにも」http://dhatena.ne.jp/yumetiyo/20130211/1360578857）

この箇所ではロシア語 земля（大地・床）に対する訳語が問題にされています。これについて、私は昨二〇一二年、藤井一行氏にメールで問い合わせたのでした（藤井一行氏からの回答はありませんでしたが、回答のないことについては、私に納得できる正当な理由が中島章利氏から伝えられました）。私の問い合わせを必要な部分だけ（不必要な部分は省いて）引用してみます。

藤井一行さま

お訊ねしたいのは、『翻訳の品格』52ページからの「長老ゾシマの死の場面」についてです（藤井さんは米川訳を中心に論じられていますが、ここで私は原卓也訳の読者としてお訊ねします）。

だが、長老は苦しみながら、なおも微笑をうかべて一同をながめやり、静かに肘掛椅子から床にすべりおりて、ひざまずいたあと、大地にひれ伏し、両手をひろげ喜ばしい歓喜に包まれたかのように大地に接吻し、祈りながら（みずから教えたとおりに）、静かに嬉しげに息を引きとったのだった。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』 原卓也訳 新潮文庫）

右の「床」、「大地」について藤井さんは疑問を呈していらっしゃいます。

まず、米川訳の傍線部分の「土」、「大地」という訳語に注目されたい。

私はこの部分を読んでいて、情景をイメージできなかった。床とは地面そのものなのか？ 長老は室内にいるのではなかったか？ それなのになぜ「土」に顔をすりつけたり、「大地」に接吻したりになるのか？ そもそも冒頭には、「床へすべり落ちて」とあるではないか。「床へすべり落ち」た長老がどうして「土」や「大地」に口づけすることになるのだろうか？ そこの「床」は木でなくて土で被われているのだろうか？ 文学作品ではそうした細部がとても気になる。その場面を仮に映画化するとしたら、「床」はどんなセットになるのだろうか？ あるドストエーフスキー研究者は、一種の比喩ではないかと私に語った。気にしだすときりがない。私はその疑問にこだわってみた。

問題は「土」や「大地」と訳されたロシア語 земля（ゼムリャー）の語義である。

……（中略）……

земля にはもちろん「大地」「地面」という語義はある。だがその他に、この場面にそぐうようなほかの語義はないのか？

私は露々辞典をいくつか繙いてみた。そして大発見をした。〈床（ゆか）〉という語義が見つかったのだ。

（藤井一行『翻訳の品格』 著者自家出版会）

つまり、藤井さんは、先の原卓也訳についていえば、

だが、長老は苦しみながら、なおも微笑をうかべて一同をながめやり、静かに肘掛椅子から床にすべりおりて、ひざまずいたあと、床にひれ伏し、両手をひろげ喜ばしい歓喜に包まれたかのように床に接吻し、祈りながら（みずから教えたとおりに）、静かに嬉しげに息を引きとったのだった。

――となるべきだ、とおっしゃっているのだと思います。

しかし、ここはやはり「床」ではなく「大地」という訳語でなければならないのではないでしょうか？

もしすべての人に見棄てられ、むりやり追い払われたなら、一人きりになったあと、大地にひれ伏し、大地に接吻して、お前の涙で大地を濡らすがよい。そうすれば、たとえ孤独に追いこまれたお前をだれ一人見も聞きもしなくとも、大地はお前の涙から実りを生んでくれるであろう。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

孤独におかれたならば、祈ることだ。大地にひれ伏し、大地に接吻し、倦むことなく貪婪に愛するがよい。喜びの涙で大地を濡らし、自分のその涙を愛することだ。その熱狂を恥じずに、尊ぶがよい。なぜなら、それこそ神の偉大なる贈り物であり、多くの者にではなく、選ばれた者にのみ与えられるものだからである。

（同）

右の「大地」が原文ではおそらくземля なのでしょう。

また、こちらはもっと後のアリョーシャの描写です。

何のために大地を抱きしめたのか、彼にはわからなかったし、なぜこんなに抑えきれぬほど大地に、大地全体に接吻したくなったのか、自分でも理解できなかったが、彼は泣きながら、涙をふり注ぎながら、大地に接吻し、大地を愛することを、永遠に愛することを狂ったように誓いつづけた。

（同）

ここでも「大地」は земля のはずです。引用した三つの文章とも、земля を「床」と訳すことはできません。そうして、長老の死の場面における земля も、それらと同一の訳語が使われていなくてはならないのではないでしょうか？

とはいえ、それでも気になるのが、すでにこの作品の最初の方――「場違いな会合」――で、これも長老の庵室において、原卓也訳ではこうなっています。

長老はドミートリイの方に歩きだし、すぐそばまで行きつくなり、その前にひざまずいた。アリョーシャは衰弱で倒れたのだと思いかけたが、それは違った。ひざまずいたあと、長老はドミートリイの足もとにはっきりした、意識的な気跪拝をし、額を地面に触れさえした。

（同）

さらにその前には、

ゾシマ長老は見習い僧一人と、アリョーシャとを従えて出てきた。司祭修道士は立ちあがり、指が地に触れるほど深いおじぎをしたあと、祝福を受けて、長老の手に接吻した。二人に祝福を与えると、長老はやはりそれぞれに対して、指を地に触れさせて深いおじぎを返し、自分のための祝福も一人ひとりに求めた。

（同）

――とあります。ここでも「地」、「地面」は земля なのだと思うのですが。

『カラマーゾフの兄弟』において「大地」という言葉の意味は非常に重要なので、ドストエフスキーがこの語に、ロシア人読者相手にさえ「床」という意味で読ませるということがどれだけありうるだろうか、と私は思ってしまうのです。自分の無知を承知でいいますが、長老の庵室のつくりに「土」の部分がなかったのかどうか、あるいは、日本人に「土」、「大地」と「床」との違和感が大きすぎるのか、ということを考えてしまいます。この点に関して藤井さんはどう思われますか？

私は藤井氏に右のメールを送るとともに、いつもの――ロシア語を解する――友人にも問い合わせてみました。いつもながら彼に感謝します。彼の回答はこうです。ゾシマ長老の庵室は「土間」なのだろう。自分はずっと「土間」だと思って読んできた。たしかに『カラマーゾフの兄弟』に「土間」なのか「床張り」なのかという言及はない。しかし、――

・作中数個所にあるゾシマの庵室のどの場面でもずっと〝пол（床）〟という語は用いられておらず、問題の臨終の場面になって初めてこの語が登場するも、後続の「腐臭」ではまた姿を消し、「ガリラヤのカナ」で一個所出てくるのみ（隣の部屋の床の上で［на полу］若者らしい深い眠りについているポルフィーリイ……）。

・その代りに〝земля（土、大地）〟という語が繰り返し用いられている。その殆どが「深々とお辞儀をする」、「叩頭する」などの慣用句的な用例ではあるが、これにゾシマの　教えの文脈が加わることにより、自ずと「剥き出しの地面（＝土間）」がイメージされるようになっている。

・「ゾシマの庵室よりはゆったりとしていて過ごし易いものの、極めて質素な造り」とされている修道院長の住居の描写に〝паже полы были некрашеные（板張りの床にさえ何も塗られていなかった）〟とあり、極めて間接的ながら、読者の脳裡に『するとゾシマの庵室の床はきっと板張りですらなく、剥き出しの地面（＝土間）なのだな』という思いが浮かぶような描き方がなされている。

――ということでした。

さて、萩原俊治氏はземля に「床」という意味があるのはもちろんだ、といい、こうつづけます。

従って、藤井氏が言うように、米川訳や原訳で「土」とか「大地」と訳されている「земля」の意味が「床」であることは明らかだ。ここまでは藤井氏に私も同意する。しかし、ドストエフスキーは、なぜ「床（пол）」という言葉を使い続けることをせず、「床（пол）」を「земля（土、大地）」に言い換えたのか。文章に凝って同じ言葉を使うことを避けたのか。ドストエフスキーはまずそういう小細工をしない作家だ。従って、そこには明らかにある意図があったと見るべきだろう。

たとえば、このゾシマの死のあと、アリョーシャの回心の場面が描かれる。そこでアリョーシャは「земля（土、大地）」を抱きしめ接吻する。その行為によってアリョーシャは自分をこの世界に送り出してくれた神に感謝している。なぜ「земля（土、大地）」を抱きしめ接吻するのか。それは神の造った「земля（土、大地）」が自分を育ててくれたからだ。「земля（土、大地）」を抱きしめ接吻することによってアリョーシャは、神に感謝しているのである。このとき神の被造物であるアリョーシャは造物主と一体となり回心し、これ以降、彼の信仰は揺るぎのないものになる。

ゾシマの死の場面は明らかにこのアリョーシャの回心の場面の予告になっている。アリョーシャはゾシマが教えてくれたように振る舞ったのだ。従って、ここは藤井氏のように、「земля（土、大地）」を「床（пол）」と訳してはいけない。ゾシマの祈りの対象は「床」ではなく、その先にある「大地」だ。われわれが家の中で祈るとき、天井を突き抜けた

先にある天に向かって祈りを捧げるように、ゾシマは「床」の先にある「大地」に向かって祈りを捧げているのである。ここを「床」と訳すと、作者がこの場面にこめた意味が失われてしまう。

ちなみにAndrew. R. MacAndrewの英訳では「земля（土、大地）」は「ground」と訳されている。「ground」にはロシア語の「земля」と同様、「地表」という意味と同時に「床」という意味もあるので、「ground」という訳語を選んだのだろう。

（萩原俊治「『翻訳の品格』」――「こころなきみにも」http://d.hatena.ne.jp/yumetiyo/20130211/1360578857）

そうして、萩原氏に――彼が『翻訳の品格』についての文章を公開した直後に――このことを問い合わせてみましたが、「土間」の可能性については不明（不明なものを回答することはできない）ということでした。萩原氏の回答にも感謝します。

――というのが、『翻訳の品格』についての文章を私が書き上げられなかったことの大きい理由の第一だったんですが、その他の理由について書くのはもうやめにします。というか、それらが何だったかをもう覚えていません。

ここで、書きあげられなかった文章をいくらか修正しながら引用します。次の通りです。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

いや、以前にくらべると、この一連の文章に手をつけないでいる日がかなり増えましたね。そうすると、ものすごく楽ちんなんですよ。もっとも、残念ながら、この問題について考えない日は一日もありませんでしたけれど。しかし、考えない日はなくとも、書かないでいることは、怠らず書きつづけることと明らかに決定的に違います。そうでなければ、私が楽ちんなどと感じるはずもありません。この次と、そのまた次とに公開する文章（『なぜあるひとたちの目には最先端＝亀山郁夫批判が醜悪に見えるのか?』と『さあ、東大・沼野教授と新しい「読み」の冒険に出かけよう!』のこと）を読んでもらえば、この事情のいくぶんかは理解してもらえると思います。いや、私が何をいいたいかというと、そのふたつの未公開の文章を書いてから、ようやく私はこの文章をどうやって始めればいいのかがわかった、それまではわからなかったのだと、ある程度の言い訳をしたいということです。

いや、本当にわかったのか？　わかっていないのじゃないか？

いま私にわかっているのは、たとえば最先端＝亀山郁夫の翻訳に対する批判を読んで、それが正しいかどうかを理解するためには「勇気や信念」――いまのところ、私にはこういう曖昧な表現しかできません――が必要だということです。それはつまり、「勇気や信念」を欠いた視点の陥りがちな理解のしかたをいうなら、たとえば、問題を翻訳者Aと批判者Bとの対決ととらえて、両者の利害を考慮し、最終的に馬鹿げた「Win Win」（いわゆる「自己啓発」本のお得意のやりくち）に落とし込むやりかたです。最先端＝亀山郁夫問題に関する限り、そのような「Win Win」などありえません。最先端＝亀山郁夫を批判する者のひとりとして、私はこの問題を私自身と最先端＝亀山郁夫との対決だなどと考えたことはありません。私は単純に「正しさ」を問題にしているだけです。最先端＝亀山郁夫による翻訳はでたらめだから、回収・絶版すべきだといっているだけです。でたらめだけれども、他方では素晴らしいといっているひとたちもいるからいいじゃないか、などということで妥協するというような問題じゃないんです。最先端＝亀山郁夫の翻訳を素晴らしいといっているひとたち――たくさんいます――そんなひとたちは正しくないというだけでなく、間違っているのだし、さらにいえば、悪いことをしているんです。それはもう確実に「悪」をなしています。最先端＝亀山郁夫の翻訳そのものが「悪」であるのはいうまでもありません。そこで、私が批判しているのは、最先端＝亀山郁夫の翻訳の「悪」と、それを素晴らしいということ・いうひとたちの「悪」との双方ということ

になります。のん気なひとは「大げさな」といって笑うでしょうが、笑っている場合ではないんです。私はいいますが、いまここで文学の片隅でただの一スキャンダルが持ち上がっている程度の認識しか持てないでいるひとは、いつか本当に大変なこと――自分の生死のかかった――が起こったとき、それがまさかこの最先端＝亀山郁夫問題を軽視したためにそうなったのだなどと、絶対に気づきもしないでしょう。この最先端＝亀山郁夫問題をきちんと検討していれば、そのような不幸が避けられるかもしれないんです。

そのことを知らないひとたちがあまりにも多すぎる。この問題について「大げさな」といって笑うひとたちについて理解するために、私がどれほどの時間を必要としたことか。そうして、私がようやく気づいたのは、読書する――いかなる読書であろうとも――ためには「勇気や信念」が必要なのであり、その「勇気や信念」を欠いたまま読書するひとがいかにたくさんいるか、ということでした。いいですか、これはごく普通に、単純に、誰もが読書するという、その読書に「勇気や信念」が必要なのだと私はいっているのであって、「勇気や信念」を必要とするような読書が特別なものなのではない、ということです。そうして、「勇気や信念」を欠いたひとが読めば、最先端＝亀山郁夫の翻訳もまともなものだということになってしまうんですね。べつのいいかたをしましょうか？多くの読者には、自分の読解に「勇気や信念」が必要なのだということなど思いもよらず、しかも、自分の読解の表明に「他者に対する責任」が生じるだなどとまったくわからないのだ、ということです。

最先端＝亀山郁夫批判をちらりと見て、「どっちもどっち」だとか、批判者に品性がないなどと感想を持つ読者は、どのみち『カラマーゾフの兄弟』やドストエフスキーなんかどうでもいいという読者なんですよ。そのひとたちには、たとえばペレズヴォンがジューチカと同一の犬であるのかなんて知ったことじゃないわけです。そうしてまた、両者が同一の犬であると読み取るためにも実は「勇気や信念」が必要であるということがわからないんです。同じことが『悪霊』におけるマトリョーシャ＝マゾヒスト説にも当てはまります。最先端＝亀山郁夫によるマゾヒスト説に可能性を感じるような読者には「勇気や信念」が決定的に欠けています。こういうひとたちは、そのまんまで今後いくらどんな数の読書をしたって無駄です。まあ、このひとたちは、いわば「おしゃれ」のために読書しているだけなんですね。「文学」といわれているものを身にまとっている彼らの「私」が大事なのであって、「文学」を大事にしているわけでは全然ないんです。この「おしゃれ読み」のひとがいるとは前々から認識していましたが、まさかここまで深く冒されているひとがここまでたくさんいるとは思ってもみませんでした。でも、現実だからしかたがありません。そして、こういうひとたちが「人間」を確実に駄目にしていくんです。そうして、こういうひとたちは自分たちがこのように批判されると――私には理解しがたい思考経路を経て――、そんなむずかしいことはわからない、自分には「教養」がない、きちんと教えてもらわないと右も左もわからない、などといいだすわけです。さらには、最先端＝亀山郁夫もきっと自分たちと同じような「弱者」なのだから、やはり同様に罵倒の対象にされるようなことがあってはかわいそうだ、などといいだすわけです。つまり、彼らは最先端＝亀山郁夫批判を読んでいて、まるで自分たちまでもが罵倒されているような感じがするんですね。ここでも自分たちと最先端＝亀山郁夫とを区別するために、彼らには本当は「勇気や信念」が必要なんですが、それがありません。困ったことです。「真実」がどうかということより、彼らの「私」が傷つけられないようにすることの方が大事なんですよ。そうして、この点にこそ最先端＝亀山郁夫の仕事はつけこんで――世間的に――、成功していくわけです。

――というわけで、こんな馬鹿なことから自分の身を守るために「勇気や信念」が必要なんです。

この「勇気や信念」は、実はこの世のなかのありとあらゆることに必要なものです。どんなことも、「勇気や信念」をもって対さなければならないんです。しかし、では、この私がこの世のなかのありとあらゆることに「勇気や信念」をもって対処しているかというと、全然そんなことはありません。のんびりだらだらしている怠惰な私にそんなことはできません。ただ、私は『カラマーゾ

フの兄弟』について、あるいはドストエフスキーについて、あるいは「文学」についてだけにはどうしても許せないことがあるので、延々とこの一連の文章を書いているんです。それでも、あるときこのブログ「連絡船」に――この一連の文章とは離れたところで――書いたんですが、こうは思っています。

もちろん最先端＝亀山郁夫批判は反戦争であり、反原発でもあるわけです。つまり、最先端＝亀山郁夫を批判することが、結局のところ、反戦争・反原発の運動をすることと同義だということです。

（二〇一二年三月九日　http://d.hatena.ne.jp/kinoshitakazuo/20120309）

そうすると、私のところに「非国民」だの「国賊」だのという匿名のメールが送られてくるわけですが、まあ、それはいいです。

（――以上、加筆しつつの引用終わりです。）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

この後、私は右に絡めて、昨二〇一二年九月に出版された『構造災』（松本三和夫　岩波新書）から長々と引用しているんですが、あまりに長すぎるので、多くをカットします。ほんの一部だけ引用します。――と思ったんですが、やはり、そのまま当初の引用をそのままに残しましょう。次の通りです。

以上のように、この本でいう構造災とは、つぎの五つの特性が状況に応じて複合的に関与する、科学技術と社会との境界で発生する複合境界災害である。

（1）先例が間違っているときに先例を踏襲して問題を温存してしまう。
（2）系の複雑性と相互依存性が問題を増幅する。
（3）小集団の非公式の規範が公式の規範を長期にわたって空洞化する。
（4）問題への対応においてその場かぎりの想定による対症療法が増殖する。
（5）責任の所在を不明瞭にする秘密主義が、セクターを問わず連鎖する。

「よい人」の担う構造災

ところで、この定義は、構造災は構造災を担う「よくない人」によってもたらされる、ということをかならずしも含まない。それどころか、構造災の担い手は「よい人」であることの方が多いと考えられる。

なぜなら、先例が間違っているときに先例を踏襲してしまったり、問題を増幅したり、公式の規範を長期にわたって空洞化したり、その場かぎりの想定をもとにした対症療法が増殖したり、責任の所在を不明瞭にしているにもかかわらず、構造災ともいえる状態が久しく続いているとすれば、それは、「よくない人」が多くの人の意思に反してそうなっているというよりは、どちらかというと「よい人」が多くの人の総意を体現しているとみるほうが無理がないからだ。

たとえば、先例が間違っているときに先例を踏襲して問題を温存してしまうのは、それが特定の範囲の人にとって局所的に心地よい状態であるからだとみるほうが説明に無理がない。

はたして、前記のスペースシャトル・チャレンジャー号爆発において、一〇年近くに及ぶ「逸脱の常態化」によってＮＡＳＡの部局と契約業者とのあいだに工業基準に違反した部品の品質検査を見逃す関係が形成されてきた事実は、見逃すという行為が両者の個別利害にかなう状態であったことを示唆する。

別の角度からいいかえると、最初は工業基準に違反した部品の品質検査を見逃す人が逸脱者であったはずだ。それが、工業基準に違反していることを指摘する人が逆に逸脱者になってゆくということにほかならな

い。

このように、構造災が特定の業界や組織にとって局所的に心地よい状態だというときの「心地よい」には、すくなくともふたつの意味が存在する。ひとつは、規則や倫理からの逸脱行為が特定の業界や組織全体の利害にかなっており、結果として当該業界や組織の構成員をそれなりにうるおす効果をもつ。

いまひとつは、そのような逸脱行為を規則や倫理に違反していて問題であると指摘する人がいても、たとえば「空気を読める」かどうか等々といった別だてのカテゴリーのもとでそうした指摘が読み換えられ、特定の業界や組織全体の逸脱という事実のもたらす鋭い緊張関係が緩和される。

このように実利と心の緊張緩和の両面において「心地よい状態」が局所的に成立した暁には、たとえ間違っていても、あるいは間違っていればいるほど、先例は当該業界や組織の内部で忠実に踏襲される可能性が高い。そして、その状況で先例を忠実に踏襲する、または率先して踏襲するリーダーは、どちらかというと、当該業界や組織全体に貢献する功労者、すなわち「よい人」と認知されるはずである。

他方、そうした局所的に「心地よい」均衡状態は、逸脱のもたらす過誤や間違った先例のもたらす問題を消滅させることはない。その結果、そのようにしてセクターを問わず複数の業界や組織において事実上の逸脱行為が重なる場合、社会全体の公益を不断に損ない続ける。そして、どこかで秩序の著しく失われた状態があらわれることになる。

（松本三和夫『構造災』岩波新書）

さらに引用をつづけます。

学セクターと自己運動する制度

このメカニズムの及ぶ範囲は、官セクターにかぎらない。学セクターにおいても、想定できる。

たとえば、序章でふれたＳＰＥＥＤＩの不具合に原子力工学者が向き合うとすると、大きくふたつの立場が想定できる。ひとつは、技術が人びとに貢献するまでを見届けることが技術の専門家の目標だという立場である。いまひとつは、技術の専門家はＳＰＥＥＤＩのシミュレーション精度の向上や適用限界の指摘のような、技術の信頼性の基礎づけをきちんと行うべきとする立場である。

前者の立場に立つなら、技術の専門家の仕事は人工物をつくりだすことではおわらない。つくりだした人工物が社会に導入され、普及し、思いがけない不具合を生むことまでを含む過程全体にかかわる。

たとえば、申し分ない性能のＳＰＥＥＤＩをつくったとしても、適用制度の不具合により人びとの「避難」にさきだって「予測」が提供できないという不利益が発生したのなら、そのような適用の不具合を生んだ制度の責任を公にし、運用の不具合を是正する手当てを抜きにしてさきにすすむことは専門家として許されない。

他方、後者の立場に立つなら、たとえば初期値に実測データを用いないままシミュレーションの結果を「予測」の名のもとに公にするのに慎重になるはずだ。

前者をクライアント志向、後者を学術志向とかりに呼ぶと、クライアント志向と学術志向が互いに緊張をはらみつつ、ともに必要とされるのが技術の営みだ。クライアント志向にこたえる場合、技術の職能団体、学術志向にこたえる場合、学術団体の様相を呈する。日本原子力学会の定款には、「原子力の平和利用に関する学術および技術の進歩」といった玉虫色の目的が掲げられる。

その内実は、職能団体と学術団体の両面の適切なバランスによって決まる。ところが、国策との過度な抱きあわせによりいったん適切なバランスが崩れると、一般に学会は業界団体としてもっぱら資金配分に与る機関と化すことが多い。

その種の業界団体に、公共性の高い社会的機能を期待することは困難だ。自己運動する制度のメカニズムに照らすかぎり、制度としての学会の存続をはかる業界団体としての機能が「賞賛」の的になる一方で、職能団体としても学術団体としても社会的機能を発揮しないという可能性もゼロではないからである。

他人事ではない。文系の学会にも、あるいは学会の連合体としての日本学術会議にも、相似の可能性は存在する。たとえば、当該問題のほんとうの専門家とは思えない人によって占められる委員会が福島原発事故に象徴される科学技術と社会の複合境界災害について、第三者が検証しようのない、つまり学術的根拠の不明瞭な評価や声明をあと知恵的に開陳し続けるなら、その可能性は現実になりかねない。

自己運動する制度のメカニズムの前記の見本例が示すとおり、これは担い手が「よい人」であることとじゅうぶんに両立する。

（同）

そのままこうつづきます。

専門知の信頼性を見極めるには

問われているのは、専門知をめぐるつぎのような問題だ。いっぽうで、市井の日常生活を送る民セクターの非専門家のくらしは専門家の仕事に信をおき、そのような専門家の専門知に依存することなしにはとうてい成り立ちえなくなっている。他方で、構造災にかかわるなんらかの理由で専門知の品質が市井の日常生活を送る民セクターの非専門家のくらしに不都合をもたらす程度に劣化したとしても、その事実は非専門家の眼にふれることはほとんどない。

けれども、その瞬間、専門知はそれ以上に発展する芽がつまれ、あたかも発展しているようにみせることに資源が費やされはじめる。つまり、専門知は非専門家にとって信頼できる場合もあるし、かならずしも信頼できない場合もある。では、どのような場合に信頼でき、どのような場合にかならずしも信頼できないのだろうか。

この問いに対し、信頼できる場合とそうでない場合を非専門家が判別する基準は見いだされていない。構造災についての叙述と筆者の経験則をふまえていえそうなことは、つぎの一点だ。

専門知とは、特定の事柄についてみかけと中味（原文ママ）の区別の可能にするはらたきをもつ知のあり方のひとつにほかならない。そして、受忍限度ぎりぎりのところでなされる専門知への苦情申し立てをめぐり、みかけと中身（原文ママ）を区別するはたらきが専門知にも適用されるような自己点検回路が開かれている場合、信頼できることが多い。はじめからその回路が閉ざされている場合、そうでないことが多い。

いいかえると、専門知はあらかじめ結果が定まっていない事柄を探求する知的営みの所産である。それに対し、あらかじめ落としどころとなる結果が定まっていて、その結果を正当化するためになされる営みは、それらしい装いを備えていても、専門知とはおよそ無縁の代物である。

（同）

右の引用を通じて私が何をいいたいか――私が右の何を何に読み換えているか――、もちろんわかっていただけると思います。

とはいえ、私はいまだにこの『構造災』の全体を読んではいません。そうして、もしかすると、私はこの本全体の主張とは（おそらく）べつのこと、つまり、最先端＝亀山郁夫のやっていることの擁護の責任を、彼の擁護者個々人に帰すことを考えているのかもしれません。わかりません。ともあれ、この後のいくつかの文章に書きますが、私には沼野充義や辻原登や松岡正剛や野崎歓など――このひとたちが私の直近の標的です――を許すことはけしてできません。私にはとにかく、彼らの非常識・不誠実・悪、あるいは、彼らの「自尊心の病」を批判することしかできません。いまからいいますが、沼野充義、辻原登、松

岡正剛、野崎歓――このひとたちは最低です。こんなひとたちをありがたがっている読者たちも最低です。

さて、この文章の表題にもした「勇気や信念」という言葉ですが、これはジム・キャリー主演、フランク・ダラボン監督の『マジェスティック』という映画の日本語字幕「勇気と信念（信念と、信念を持つための勇気）」からの引用の変形なんですね。「勇気や信念」の「や」なんですが、いまのところ、私にとっては「と」ではありません。「勇気と信念」というのではない、ということです。つまり、「勇気」や「信念」や、その他あれこれ、ということでの「や」なんですね。これがまだ私には不確定なんです。私には、私が何を考えてこれを表現しようとしているのか、自分でも明確な言葉が確定しないままだ、ということです。（かなり後の公開になりますが、いずれ私の新訳『トーニオ・クレーガー』批判文章において、この「と」と「や」についてを私が問題にしているのを、あなたはご覧になるでしょう）。

繰り返します。ジューチカとペレズヴォンとが同一の犬ではないかもしれないと考える読者には「勇気や信念」が欠けています。マトリョーシャがマゾヒストであるかもしれないと考える読者には「勇気や信念」が欠けています。そんなひとの読書は実は読書ではありません。そんなふうに読むことが読書の可能性を広げるのだなどと考えてはいけません。読者にそんな自由などありません。

だいぶ以前に私はこう書きました。

> いいですか。あるひとつの作品について、よく「読者の数だけその作品の読み取りがある」だとか「読者の数だけ誤読がある」だとかいいますが、亀山郁夫はその「読者」に含むことすらできません。
>
> いいですか。あらゆる読者には「想像力」というものがあって、ある作品を読むときにその「想像力」は「自由」に駆使されるべきであって、読者は「ひとそれぞれ」にどんなふうにも作品を読むことができる――だから、「あなたも自由に想像の翼をはばたかせてごらんなさい」――というようなことをいうひとがいますよね。それはそれで正しいと私は認めます。私もそれを奨励します。ただし、私はいいますが、その場合でも、読者に――亀山郁夫が行使しようとしているような――無際限な「自由」なんかありはしません。
>
> なぜか？
>
> 作者の――互いに拘束しあう――「何を描くか」と「どのように描くか」とのせめぎ合い・拮抗の軌跡としての「作品」が、そこに読者を巻き込むからです。先に引用した私自身の文章を敷衍しますが、読者もその作者の「何を描くか」と「どのように描くか」とのせめぎ合い・拮抗の軌跡に「拘束」されます。作品においての「何が描かれているか」と「どのように描かれているか」とがせめぎ合い、拮抗していればいるほど、読者によるその読みかたはますます作品に「拘束」されます。しかし、読み進めながら読者はこの拘束のなかですんなり小さくまとめればいいというのでもない。彼は自分の読んでいくなにかしらを、この拘束を脅かすほどに内部から大きく発展させていきます。敢然として拘束に拮抗させていく。そのせめぎ合い・たたかいの軌跡こそが読書なんです。それこそが、読者がどれだけ作品に書かれていることを「真に受ける」ことができるか、ということでもあります。
>
> 亀山郁夫の読書はその「拘束」から遥かに逸脱しています。いい換えれば、でたらめ・屁理屈・わがまま・負け惜しみです。亀山郁夫にしてみれば、自分の「自由」を強調したいところでしょうが、そんな「自由」なんかはありはしないんです。
>
> 私はこの「連絡船」の読者――いくらかでも「背伸びをする」つもりのあるひとたち、いまの自分には容易に理解できない作品・手強いと感

じる作品に手を伸ばすつもりのあるひとたち、いつかは自分にもその作品を読みこなせるようになるのではないか・その作品と自分とにはきっとなにかしらの大事なつながりがあるのではないか、と思っているひとたち――にこういいましょう。

小説作品を読むときに、あなたはただそこに書いてあることをそのまま読んでください。そこに何か難解なことが書かれているはずだなどと思わないようにしてください。「ああ、何だ、そうか」というほどの単純なことが書かれていると思って読んでください。一見難しそうに見えたが、実はこんな簡単なこと・当たり前・常識的なことが書いてあるだけなのか、というふうに読んでください。また、同じことですが、文中のある一語にむやみやたらと大げさな意味を持たせないようにしてください。その一語およびそれに絡んだ表現が作品の全体に頻出するようなら、もちろんこれは大事なことですが、そういう頻出は意識せずとも、自然にあなたを先へと導いているはずでもあります。一語に引っかかるよりも、前後の文脈の方を大事にしてください。そういう読書において、実は複雑で実り豊かなのは、「ああ、何だ、そうか」の組み合わせ、絡まり具合、その緊張なんです。逆に、そういうふうに読めば、あなたが引っかかったその一語の意味が明瞭になるでしょう。アフォリズムなどというものに期待するのはやめましょう。ある一文だけを警句的な意味で採りあげ、それだけで完結させてしまうことですね。一文一文に何かが表現されていると考えるより、そういう文章の連なり・塊の方に表現されているものを読んでください。作品というのは静止したものではなくて、常に動いているんです。動きを読んでください。

ざっと、そんなふうに読むことが小説を読むときの基本だと、おおざっぱながら私はいいましょう。しかし、それらの「ああ、何だ、そうか」というのも、実は危険なことで、それらをあなたは自分のすでに持っている何かの観念に落としこむのでなく、できるだけ作中に書かれているそのままの表現でそのまま保持するのがいいです。作品に書かれていることをあなたはできるだけ「まとめ」ようとしないでください。つまり、あなたがある作品について何かいおうとして、思い浮かべるのが、あなた自身の「まとめ」であるよりは、あなたの読んでいる当の文章そのままであるようにしてください。あなたの頭のなかが作品の引用だらけ――というか作品全文――になるように読んでください。それをそのまま何年も時間をかけて熟成させていってほしいんです。あなたの読んだものが素晴らしい作品であるならば、それはあなたに大きな実りをもたらすでしょう。

また、こういうふうにも思ってください。作者は可能な限り簡単に・明瞭に・わかりやすく書いています。結果として、いかに晦渋な・難解な・とっつきにくい表現になってしまっているとしても、そうなんです。作者は自分の書いたものをそのまま読んでほしいと思っています。作者は、読者が誤解をしないような書きかたを必ずします。誤解されてしまっては困るからです。妙な解釈をされてはかなわないと思っているからです。どうかそんなふうに思ってください。

私は最先端＝亀山郁夫の読書を否定して、彼の考えているような「自由」などないのだ、といい、彼の読書を「でたらめ・屁理屈・わがまま・負け惜しみ」だといいました。それをいまべつのことばでいい換えれば、最先端＝亀山郁夫の読書には「勇気や信念」が決定的に欠けている、ということになります。

――というように、私がこのほぼ沈黙していた三年間に考えていたことも、実はとっくの昔に私の書いていたことです。私がこの後公開する『なぜあるひとたちの目には最先端＝亀山郁夫批判が醜悪に見えるのか？』という文章が、実はずっと昔に書いた『「連絡船」の一読者へのメール』の焼き直しに過ぎなかったように。べつのいいかたをすると、こうです。私がこのほぼ沈黙していた三年間に考えていたことは、この私自身がとっくの昔に考えていたことだった。

私がこのほぼ沈黙していた三年間に考えていたことは、この私自身がとっくの昔にたどり着いていた結論にもう一度たどり着くことに過ぎなかった（やあ、これが人生だ！）。であるなら、それは徒労だったか？　徒労ともいえるし、そうでもないともいえます。私の考えがより深化したか？　そうともいえるし、そうでもないともいえます。私はこの三年間、以前に私に疑問のメールを送ってきた読者にもう一度同じ回答をし（公開はこれからですが）、それがどうしてそうなってしまったのかを考えつづけてきたのかもしれません。その読者に対する私の態度はより硬化したのかもしれませんし、そうでないのかもしれません。その読者のようなひとはこの世のなかに実にたくさんいます。というより、この世のなかの大多数のひとはこの読者のようなひとなのです。このひとたちが変わらなければ、この世のなかは変わりません。そうして、私がいま考えているのは、その大多数の読者が変わるためには、より少数の読者が強固になることなんでしょう。最先端＝亀山郁夫的読書の完全否定をする読者の「勇気や信念」をより強固にすること、ですかね。そうしなければ、大多数の読者の変わりようもありません。この世のなかを自分の「私」が無傷であればそれでいい、と思っているひとたちが変わるためには、自分の「私」などどうでもいいと思っている少数のひとたちが踏んばりつづけることが必要なんです。どんなに嫌われようとも。

いやいや、話がずれました。

私が考えているのは、こうです。

ジューチカとペレズヴォンとが同一の犬でない、だの、マトリョーシャがマゾヒストであった、などということに可能性を見いだす読者は、私にいわせれば「勇気や信念」を欠いているんですが、そのひとたちの心情はわからないではないです。そこで、トーマス・マンの『魔の山』から引用しますよ。もちろん、この話し手セテムブリーニは、そのひとたちの心情を非難しているわけですけれど。

「まあ、おき――きください。あなたがおっしゃろうとしていることは、私にはわかっておりますから。あなたはおっしゃりたいんでしょう、あなたのいまのお考えはそれほどふかい考えでおっしゃったのではないこと、あなたが代弁なさった考えは、そのままあなたのお考えというのではなくて、いわば空中にただよっているいくつもの可能な考え方の一つをとらえて、その考え方をかるい気持ちで実験してみようとなされたんだと。あなたのご年齢にありがちなことです、男性としての決断を欠き、しばらくさまざまな考え方を実験してみたいという年齢には。実験採択（placet experiri）」とセテムブリーニは、プラケット（placet）のケをイタリア語ふうに柔らかくチェと発音していった。「結構な言葉です。」

（トーマス・マン『魔の山』関泰祐・望月市恵訳　岩波文庫）

いいですか？「あなたのいまのお考えはそれほどふかい考えでおっしゃったのではないこと、あなたが代弁なさった考えは、そのままあなたのお考えというのではなくて、いわば空中にただよっているいくつもの可能な考え方の一つをとらえて、その考え方をかるい気持ちで実験してみようとなされたんだ」という、この「実験採択」というのが「勇気や信念」を欠いた行為なんですよ。

いいですか？　ジューチカとペレズヴォンとが同一の犬でないという記述がないから、これはべつの犬だという可能性があるわけで、そういうことを考えてもいいじゃないか？　考えればいいじゃないですか。しかし、そこから、「そういう見方もありうる」だの「同一の犬ではない」なんて結論に達したり、そのことを他人に表明することは、あなたの決定的な「勇気や信念」の欠如を意味するんですよ。マトリョーシャ＝マゾヒスト説も同断。

私がそんなふうにいうと、それについて私が「公平」を欠いていると非難するひとがいるかもしれません。いや、いるでしょう。しかし、そういうひとは、そう非難した時点で自分の「勇気や信念」の欠如を表明していることになるんです。

本当はもっといろんな言い訳を連ねようと思っていたんですが、自分でもうんざりしてきました。

さて、ここから私がどうするかというと、とっくに書き終えている『なぜあるひとたちの目には最先端＝亀山郁夫批判が醜悪に見えるのか?』や『さあ、東大・沼野教授と新しい「読み」の冒険に出かけよう!』をこれにつづけて公開するのではなくて、それらの後に書きはじめたいくつかの文章を仕上げ、こちらを先に公開しようと思います。平野卿子による新訳『トーニオ・クレーガー』（河出文庫）批判の文章もまだ修正しなくてはなりません。そうして、その後でようやく『「自尊心の病に憑かれた」読者にアリョーシャは見えない』のつづきにかかるわけです。先は長いです。

（二〇一三年十一月十三日）

最先端＝亀山郁夫の『これからどうする』

（この章は昨二〇一三年十一月十八日に書き上げていたものです）

岩波書店刊『これからどうする』（二〇一三年六月刊）収録の最先端＝亀山郁夫のあまりに稚拙で愚劣な文章と、現ロシア文学会会長＝沼野充義のあまりに狡猾な文章を批判します。ふたりの文章はこの本の「文化・芸術のゆくえ」という章にあります。しかも、その筆頭とその次という、素晴らしい組み合わせでもあります。

まずは最先端＝亀山郁夫から。

いくつかに分割してはいますが、全文を引用しています。抜粋じゃありません。なぜこんなことを断わるかといえば、ふつうの読者にはこの全文がまったく全文であるとは信じられないほどひどいつくりになっているからです。文章のまともな読み手なら必ず「何じゃ、こりゃ?」、「ひどいね、これ」というようなレヴェルの文章を批判しなければならない——私はいつまでこんなことをつづけなきゃならないんでしょうか?——のはものすごく苦痛でしたが、何とか我慢してやり通してみました。以下に私が解説するのは、まったく意味不明な文章ですが、それゆえにこそ書き手の本音があからさまになってもいる、興味深い見本のような文章だともいえるでしょう。つまり、これこそ最先端＝亀山郁夫だ! といえるような文章です。ふつう、これこそこのひとの文章だ! というと最上の賞賛になるかと思われますが、この場合がまったく逆であることはいうまでもありません。

私は提案しますが、日本全国の高校の国語の先生たちは、この文章を生徒たちに読ませ、この文章で意味のわからないところを指摘させ、それがどうしてなのか、何が欠けているのか、どうなればいいのかを発表させ、これが本来どのような文章であるはずだったかの意味の通る全体像が浮かび上がったところで、この書き手の人物像を作文させたら、「文は人なり」という面で、非常によ

い作文の授業になると思います。

とはいえ、こういうことも考えさせられます。『これからどうする』というテーマで「文化・芸術のゆくえ」について書けといわれた場合、もうその瞬間に書き手の誰もが思い浮かべるある形があるでしょう。つまり、結論として「文化・芸術」はこれこれこういうふうに未来に伝えられなくてはならない、というのも、「文化・芸術」というのにはこれこれこういうふうに「人間」にとって意味のあるものだからである、それなのに現状では「文化・芸術」の受容はこれこれのように危機的状況に陥っている、云々。これ以外のことを思いつく書き手のことをまず想像することはできません。そこで、書き手に問われるのは、同じそのことを「どのように」書くか、ということになってしまうだろう、と私には思われます。つまり、書き手の誰もが当たり前のことをわざわざ書かなくてはならないわけです。はっきり、非常につまらないことになってしまうでしょう。それでも、当たり前のことを、読者の想定を超えて強固なことば――読者が自分のこれまでの認識を恥じるほどに――で書ききるひとはいるでしょう。しかし、そこまでじゃないでしょうか？　こういうのが、『これからどうする』というテーマで「文化・芸術のゆくえ」について書くということのつまらなさです。

まあ、それはいいでしょう。ともあれ、この本に最先端＝亀山郁夫の文章が収められていて、しかも最先端＝亀山郁夫らしく自身の「小さい・せこい・貧しい・薄っぺらな」本質を、これでもかというくらい表現してくれているので、私としては、あーあ、本当にうれしい限りです。

では、行きますよ。

ロシアのある作家が、こう書いている。

人間は、次の三つのカテゴリーに分けられる。すなわち、

一、『カラマーゾフの兄弟』（以下『カラ兄』）をすでに読んでいる人間

二、これから読もうとしている人間

三、未来永劫、手にとろうとしない人間

人間のタイポロジーをここまで単純化できる作家は、むろん『カラ兄』に深く心酔した経験をもつ人間である。数千頁におよぶ膨大な小説を読みあげたという自信と満足は、何ものにもかえがたく、伝説上、五〇回読んだとされる哲学者ヴィトゲンシュタインもその一人だったにちがいない。音楽との類推でいうなら、ベートーヴェンの「第九」にとことん酔うことのできた人間が感じる自信と満足もこれに近い。ことによると、その自信と満足こそが、「教養」を、「共有」に値する知の体系へと押し上げている力そのものなのではないだろうか。

（亀山郁夫「教養知の再生のために」『これからどうする』岩波書店　所収）

最初に「カテゴリー」ということばを用いたのなら、次に「タイポロジー」などといわず、たとえば「人間をここまで単純にカテゴライズできる作家」とした方がスマートじゃないか、とか、この短い文章で『カラマーゾフの兄弟』をわざわざ『カラ兄』などと省略する必要がなぜあるのか（文字数制限があるのなら、他にいくらでも削るべき無駄なことばや文があるだろう）・（いや、いいかげんのでたらめだらけの自分の翻訳が、ともあれ結果的に、流行語としての『カラ兄』を生み出したことの自慢をしたいんだろう、つまり『カラ兄』とは米川正夫訳でもなく、原卓也訳でもなく、最先端＝亀山郁夫訳の『カラマーゾフの兄弟』のみを指し示しているのだ！）、とか、『カラマーゾフの兄弟』の分量を「数千頁」というのは大げさすぎないか（当の最先端＝亀山郁夫訳ですら二〇〇〇ページちょっとですし、原卓也訳は二〇〇〇ページに満たないわけですし、私の持っているドイツ語訳ペーパーバック――私が読んでいるなどと思ってはいけません――はほとんど一〇〇〇ページちょうどくらいです。「数千頁」なんてことをいうなら、せめて五、六〇〇〇ページはほしいじゃないですか）なんてことを私はいいたいのではありません。

人間のタイポロジーをここまで単純化できる作家は、むろん『カラ兄』に深く心酔した経験をもつ人間である。数千頁におよぶ膨大な小説を読みあげたという自信と満足は、何ものにもかえがたく、伝説上、五〇回読んだとされる哲学者ヴィトゲンシュタインもその一人だったにちがいない。音楽との類推でいうなら、ベートーヴェンの「第九」にとことん酔うことのできた人間が感じる自信と満足もこれに近い。

（同）

哲学者ヴィトゲンシュタインが「その一人だった」というのは、『カラ兄』に深く心酔した経験をもつ人間」だったということですね。そうして、ここでヴィトゲンシュタインの名前が出るのは、彼が「数千頁におよぶ膨大な小説」を「伝説上、五〇回読んだとされ」るからですね。ここが問題です。ここで最先端＝亀山郁夫は『カラマーゾフの兄弟』に「心酔」する読者が「心酔」するその理由を「数千頁におよぶ膨大な小説を読みあげたという自信と満足」に帰しているんです。ベートーヴェンの「第九」が引き合いに出されますが、おそらくここでも最先端＝亀山郁夫はこの曲に「とことん酔うことのできた人間が感じる自信と満足」の理由を、この曲がいわゆる「大曲」であるからだといっているわけです。そうして「ことによると、その自信と満足こそが、「教養」を、「共有」に値する知の体系へと押し上げている力そのものなのではないだろうか。」とつなげるんです。これは何でしょうか？

あのね、——

人間は、次の三つのカテゴリーに分けられる。すなわち、

一、『カラマーゾフの兄弟』（以下『カラ兄』）をすでに読んでいる人間

二、これから読もうとしている人間

三、未来永劫、手にとろうとしない人間

（同）

——と書いたひとがいるのなら、そのひとはもちろん体験としての『カラマーゾフの兄弟』読書についていっているんでしょうが、その体験に「数千頁におよぶ膨大な小説を読みあげたという自信と満足」なんてものは一ミリも含まれていません。また、ある作品の読書体験が、読者を読む以前の自分に戻れないほど変えてしまうというくらいの一般的なことをいっているのでもなく、読書体験による読者の変化が『カラマーゾフの兄弟』という作品では非常に特別なのだというんです。他の読書体験ではいざ知らず、『カラマーゾフの兄弟』体験では、読者の個人的な何かが変化するというより、人間的な何かが変化する、読者は人間としてべつの存在に変化しているというほどのことをいっているんです。しかし、断わっておきますが、『カラマーゾフの兄弟』を読んだからといって、その誰にでもにそういう変化が起こるわけではありません。いくらこの作品を最後のページまで読み通そうが、この作品に共鳴できる人間とそうでない人間、この作品と共振できる人間とそうでない人間がいます。それゆえにこそ、カテゴリーのふたつめに「これから読もうとしている人間」があるんです。「これから読もうとしている人間」というのは、「さあ、これから世界文学の最高傑作といわれている『カラマーゾフの兄弟』を読むぞ」などと思っている人間のことではありません。そうではなくて、『カラマーゾフの兄弟』を読めば、必ず作品に共感できる人間、必ず作品と共振できる人間のことをいっているんです。そうして、「未来永劫、手にとろうとしない人間」というのは、むろん、未来永劫、『カラマーゾフの兄弟』に共鳴もできなければ、これと共振もできない人間のことです。つまり、「未来永劫、手にとろうとしない人間」のうちに、『カラーゾフの兄弟』を最後のページまで読み通した人間は含まれますし、さらに、この作品を日本語に翻訳した人間ですら含まれます。当然ながら、最先端＝亀山郁夫が含まれるのは「未来永劫、手にとろうとしない人間」のカテゴリーです。アリョーシャの「あなたじゃない」が「イワンは法的な意味において裁かれることはない、だから、そう苦しまないでほしい、という意味にとらえることができるように思えます」だの、ペレズヴォンはジューチカとはべつの犬だだの、「地獄と地獄の火につい

て。神秘的な考察」がフェラポント神父の傲慢さへの非難だの、その他たくさん、としか読めていない人間は『カラマーゾフの兄弟』を「未来永劫、手にとろうとしない人間」です。まあ、この三つのカテゴリーを並べたひとは、まさか『カラマーゾフの兄弟』を最後のページまで読み終えた読者に最先端＝亀山郁夫のようにとんちんかんな人間が混じっているだなんて想像もつかなかったでしょうけれど。

まったく、何が「数千頁におよぶ膨大な小説を読みあげたという自信と満足は、何ものにもかえがたく」ですか！　そんなふうにいう最先端＝亀山郁夫にかかると、まるでヴィトゲンシュタインが『カラマーゾフの兄弟』の読書回数の世界記録にでも挑戦していたみたいです。

もうひとつ、またべつの視点からいいます。『カラマーゾフの兄弟』を読み終えたひとたち（ここでは単に作品の最後のページまで読み終えたひとたちを含みます）は、いったい自分が「数千頁におよぶ膨大な小説を読みあげた」などと思うんでしょうか？　むしろ、あっという間に読み終えてしまったので、長さなんかまったく気にならなかったのじゃないでしょうか？　これが、トルストイの『アンナ・カレーニナ』や『戦争と平和』、トーマス・マンの『ブデンブローク家の人々』や『魔の山』でなら「長さ」を実感しもするでしょう。しかし、『カラマーゾフの兄弟』でそれはないんじゃないですか？　それに、ものすごく長い作品を読み切ったという達成感なんてものが「自信と満足」に結びつくのは、ほとんど読書経験のない初心者――中学生とか高校生とか――だけじゃないでしょうか？

さて、それはともかく、これをおぼえておきましょう。

> ことによると、その自信と満足こそが、「教養」を、「共有」に値する知の体系へと押し上げている力そのものなのではないだろうか。
>
> （同）

最先端＝亀山郁夫は「教養」を、「共有」に値する知の体系へと押し上げている」というんですが、そうすると、彼のいう「教養」というのは「「共有」に値する知の体系」とはべつのものであって、しかも下位にあるわけですね。おぼえておきましょう。

さて、次。

> 今から約三年前（ということは、東日本大震災の前のことである）、日本とポルトガルの修好一五〇周年を祝う記念式典に招かれた私は、急ごしらえのスピーチでこんな話をしたことがある。『カラ兄』は、「ロシアの『カンディード』を書く」という作家の強い意思のもとに書かれた小説であり、他方、『カンディード』は、フランスの哲学者ヴォルテールが、一七五五年のリスボン大震災の衝撃のもとに書きあげた小説である、よってドストエフスキーとポルトガルとの間には浅からぬ縁がある。一種の三段論法だった。そしてスピーチの終わりは、ドストエフスキーが小説のなかで言及している「リスボンワイン」を私もぜひ一度味わってみたい、という言葉で締めくくった。今にして思うに、式典の趣旨を弁えない、相当に場違いなスピーチだった。ところが、思いがけずそれが、ポルトガル大使のお気に召すところとなって、以来、大使との間に信頼関係が生まれ、三年後、ポルトガルのカモンイス院（日本の国際交流基金に相当する機関）と東京外国語大学との一種の学術的な「ビジネス」へと発展した……。
>
> （同）

何ですか、この「一種の三段論法だった」っていうのは？　これ、まったくなくてもかまわない文ですよね？　そうして、あえて生かす意味もまったくありませんよね？　同じ字数のべつの文で置き換えるとしたら、こうですか？「うひひひひひひひ」。これ、右の文章のいろんなところに挿入したらいいと思

います。やってみましょう。

今から約三年前（ということは、東日本大震災の前のことである）、日本とポルトガルの修好一五〇周年を祝う記念式典に招かれた私（うひひひひひひひ）は、急ごしらえのスピーチでこんな話をしたことがある。『カラ兄』は、「ロシアの『カンディード』を書く」という作家の強い意思のもとに書かれた小説であり、他方、『カンディード』は、フランスの哲学者ヴォルテールが、一七五五年のリスボン大震災の衝撃のもとに書きあげた小説である、よってドストエフスキーとポルトガルとの間には浅からぬ縁がある。うひひひひひひひひ。そしてスピーチの終わりは、ドストエフスキーが小説のなかで言及している「リスボンワイン」を私もぜひ一度味わってみたい（うひひひひひひひ）、という言葉で締めくくった。今にして思うに、式典の趣旨を弁えない、相当に場違いなスピーチだった。ところが、思いがけずそれが、ポルトガル大使のお気に召すところとなって（うひひひひひひひ）、以来、大使との間に信頼関係が生まれ（うひひひひひひひ）、三年後、ポルトガルのカモンイス院（日本の国際交流基金に相当する機関）と東京外国語大学との一種の学術的な「ビジネス」へと発展した……（うひひひひひひひ）。

最先端＝亀山郁夫は、ここで自慢たらたらに「商売」の話をしているわけですね。しかし、これ、常識的に考えて、最先端＝亀山郁夫が「日本とポルトガルの修好一五〇周年を祝う記念式典に招かれた」というのは、彼が東京外国語大学の学長だったからでしょう？　そうして、ポルトガル大使にしてみれば、最先端＝亀山郁夫がどんな馬鹿なスピーチをしようが、おだてあげ、自国の若者の留学事情をよいものにしようと考えているはずですよね。

さあ、それで、最先端＝亀山郁夫がこの後どうつづけたか？

教養知には、どうやら、秘密結社めいた同志愛を育む独特の力が備わっているらしく、とくに文学や音楽をめぐる話題は、虚学どころか、現実的なビジネスを側面から援護射撃する実学的な側面もある。しかし、一概に教養知といっても、グローバル化時代の凄まじいテンポ感のなかで、その概念自体、著しい変容にさらされていることは火を見るよりも明らかである。他方、そうした状況も顧みず、一部の有識者からは、教養が大切、教養の復権をといったお題目が、百年一日のごとく唱えられている。

（亀山郁夫「教養知の再生のために」
『これからどうする』岩波書店　所収）

右の文章を読んで、意味がわかりましたか？　私にはわかりませんでした。まず「教養知」って何だ？　同じ文章のなかに出てくる「教養」と何が違うのか？　しかし、この後の文章をも読んで、いくらかは理解したところでは、こういうことらしいです。たぶん、「教養知」というのは「教養」を構成する「素材（「教養」を得るために読むべき「作品」）」のようです。たとえば、『カラマーゾフの兄弟』という作品が「教養」を構成する素材（「作品」）のひとつだということなんでしょう。（しかし、後でも書きますが、実は私が最先端＝亀山郁夫の発言で「教養知」ということばに触れたのはこれが初めてではなかったんですね）。

教養知には、どうやら、秘密結社めいた同志愛を育む独特の力が備わっているらしく、とくに文学や音楽をめぐる話題は、虚学どころか、現実的なビジネスを側面から援護射撃する実学的な側面もある。

（同）

さて、この文章の頭からここまでを考えてみると、どうやら、こういうことのようです。

「あ、あんた、『カラマーゾフの兄弟』を読んだことあるのか？　俺もだよ。あ

れ、スゴいよな。あれのスゴさを、あんたも俺も知っているってことだ。そんな俺たちってスゴいよな。読んでない馬鹿とは違う人種ってことだ。俺たち特別。俺たちエリート」という「秘密結社めいた同志愛を育む独特の力が備わっている」ということのようです。もちろん、ここで最先端＝亀山郁夫がいうのは、『カラマーゾフの兄弟』という「「数千頁におよぶ膨大な小説を読みあげたという自信と満足」にもとづいた同志愛であって、作品の内容を正しく理解したというのとはべつの次元の話なんですね。それでも、そんな馬鹿どうしのやりとりでの「現実的なビジネスを側面から援護射撃する実学的な側面」がクローズアップされるわけです。「現実的なビジネスを側面から援護射撃する実学的な側面」って、何ですかね？　というか、ここで最先端＝亀山郁夫のいっているのは「現実的なビジネス」に結びつかない文学研究というのが「実学」ではなくて「虚学」だということですね。「虚学」って何だ？「実学」の対極にあるものとして最先端＝亀山郁夫がいっているのはわかりますが、察するに「商売」にならない、金にならない学問ってことですかね。

さらに、

> しかし、一概に教養知といっても、グローバル化時代の凄まじいテンポ感のなかで、その概念自体、著しい変容にさらされていることは火を見るよりも明らかである。
>
> （同）

これはどういう意味なんでしょうか？「テンポ感」って何だ？　などと突っ込みを入れてもしかたありません。「グローバル化時代の凄まじいテンポ感のなか」では、『カラマーゾフの兄弟』の価値も「著しく」上下する、ってことでしょうか。今日は『カラマーゾフの兄弟』が「教養知」として持ち上げられたかと思うと、明日には急降下する、とか、そういうことをいっているんですかね？　どうでしょう？　そんなことが「火を見るよりも明らか」なんですか？　ここ、最先端＝亀山郁夫はもっと字数を使って説明したらよかったんじゃないですか？「一種の三段論法」がどうたらいうことを自慢たらたらで書く余裕があるのならば？　こちらにはさっぱり意味がわかりませんよ。

> 他方、そうした状況も顧みず、一部の有識者からは、教養が大切、教養の復権をといったお題目が、百年一日のごとく唱えられている。
>
> （同）

たぶん最先端＝亀山郁夫にとっては、「教養が大切、教養の復権をといったお題目」を唱えている「一部の有識者」が「グローバル化時代の凄まじいテンポ感のなかで、その概念自体、著しい変容にさらされている」はずの「教養知」を、あたかも不変であるかのごとくに唱えるのがおかしいと思われるのでしょう。『カラマーゾフの兄弟』でいえば、この作品が現在「教養知」として認められるのは、「グローバル化時代の凄まじいテンポ感のなかで」の偶然であって、『カラマーゾフの兄弟』は普遍的な「教養知」ではありえない、といっているんでしょう。たまたま現在の日本で、いいかげんのでたらめだらけとはいえ、自分の訳した『カラマーゾフの兄弟』がヒットしただけであって、このヒットゆえに『カラマーゾフの兄弟』に、たまたまの「教養知」としての価値が生じたのであって、そうでなければ、『カラマーゾフの兄弟』についての研究とか翻訳なんてものには普遍的価値なんかありゃしない、というわけなんでしょう。それらは「虚学」だ、といいたいんでしょう。「教養が大切、教養の復権をといったお題目」を唱えている「一部の有識者」が「虚学」の学者たちだということでしょう。

いやあ、最先端＝亀山郁夫はこの数年間、まったく変わっていませんね。一貫しています。これを思い出しましたよ。（そして、ここですでに「教養知」ということばが登場していました）。

> 先ほどの「教養知」と最先端的研究という、この一つの実例というのを、

自分に照らして提示したいと思うわけです。そこまで君はナルシストかとのそしりを恐れつつも、自分なりにひとつ言いたいことがあるんですね。私がドストエフスキー研究に入り込んだのは、この過去五、六年です。結局、ドストエフスキーの研究は、私の研究は今最先端だと自分なりに自負しているんですね、少なくとも日本においては。問題は、なぜそう自負できるか、という点にあります。私は、ロシア・アヴァンギャルド研究の後に八年間ほどスターリン文化研究に励みましたが、そのスターリン文化研究の構造をそのままドストエフスキー研究に持ち込んでみたわけです。そこでどういう発見があったかというと、例えば一〇代の後半、終わりから、大学時代から営々とドストエフスキー研究を積み重ねた人たちは、五〇代の後半になったら新鮮な想像力も何もすべて失っているんですね。ほとんどドストエフスキーのテクストになまで感動するということはない。テクストの細部から何か新しい真実を見出していくということがほとんどできなくなっていて、目新しい視点、発想はほとんどゼロなんです。

（学術研究推進部会「議事録」）

最先端＝亀山郁夫、懲りない男です。

では、次。

教養が教養であるには、何より、それを共有することの価値が認識されなくてはならない。かりに、教養知のシンボルの一つとされるシェークスピアを読んだ経験があるとして、その話に何ら人間的なぬくもりが感じられなければ、およそ人を惹きつける何か足りえないし、同志愛や援護射撃なども期待できないだろう。「共有」の観点から見るなら、むしろ、英語の翻訳も出ている東野圭吾や伊坂幸太郎の読者であることのほうがはるかに有益だと思う。

（亀山郁夫「教養知の再生のために」『これからどうする』岩波書店　所収）

意味がわかりましたか？　やはり私にはわかりません。しかし、頑張って意味を汲み取ってみましょう。

教養が教養であるには、何より、それを共有することの価値が認識されなくてはならない。

（同）

ええと、この文章では、もともとこう書かれていたんですよね。

ことによると、その自信と満足こそが、「教養」を、「共有」に値する知の体系へと押し上げている力そのものなのではないだろうか。

（同）

右の文について「おぼえておきましょう」と私は書きましたよね。「教養」が「共有に値する知の体系」の下位にあるのだと、最先端＝亀山郁夫はいっていたんですよ。ところが、「共有に値する知の体系」の下位にある、とした「教養」について、最先端＝亀山郁夫は今度は「教養が教養であるには、何より、それを共有することの価値が認識されなくてはならない」といいだしました。何ですか、こりゃ？「共有に値する知の体系」の下位にある「教養」も「教養」であるには「何より、それを共有することの価値が認識されなくてはならない」って、これは「教養」に対するいじめですか？

かりに、教養知のシンボルの一つとされるシェークスピアを読んだ経験があるとして、その話に何ら人間的なぬくもりが感じられなければ、およそ人を惹きつける何か足りえないし、同志愛や援護射撃なども期待

できないだろう。「共有」の観点から見るなら、むしろ、英語の翻訳も出ている東野圭吾や伊坂幸太郎の読者であることのほうがはるかに有益だと思う。

（同）

どうして「シェークスピア」にしたんですかね？　なぜ「ドストエフスキー」じゃないのか？　こういうところが最先端＝亀山郁夫の間抜けなところです。それはそれとして、ここで最先端＝亀山郁夫のいっているのは、おそらく、「教養が大切、教養の復権をといったお題目」を「百年一日のごとく唱え」ている「一部の有識者」なんかが「教養知」のひとつとして「シェークスピア」を連呼している、という図なんですね。それに対して、いまの読者が「シェークスピアを読んだ経験があるとして、その話に何ら人間的なぬくもりが感じられなければ、およそ人を惹きつける何か足りえないし、同志愛や援護射撃なども期待できない」というのは、つまり、ビジネスにならない、お金にならない、ということですね。ということは、「シェークスピア」の研究も翻訳も「虚学」だということなんです。ここで、いまの読者に「シェークスピア」の読書で「何ら人間的なぬくもりが感じられな」かったとして、逆にそれこそが「人間的に」問題なのだ、という視点が最先端＝亀山郁夫にはまるっきりありません。

そうして、

「共有」の観点から見るなら、むしろ、英語の翻訳も出ている東野圭吾や伊坂幸太郎の読者であることのほうがはるかに有益だと思う。

（同）

――と最先端＝亀山郁夫がいうとき、「英語の翻訳も出ている東野圭吾や伊坂幸太郎」は、最先端＝亀山郁夫にとって、およそ「教養」とはまったく縁のない、「教養」の対極にある作品の書き手としての恰好の実例なんです。そうして、英語作品の読者を相手にビジネスをするなら、「英語の翻訳も出ている東野圭吾や井坂幸太郎」を読んでおいた方が話題にもできるし、仲良くなれるし、ってことは金になるってことだぜ、といっているわけです。

つづけて最先端＝亀山郁夫の文章はこうなります。

話は変わるが、今や、グローバル・ビジネスの関心は、アジア、アフリカである。近い将来、とくに東南アジア、インド地域への関心が、ユーロ諸国をはるかに上回る時代が来る（いや、現に来ている）。また、いわゆるＢＲＩＣＳの一角を占めるブラジルやロシア、南アフリカといった地域も、私たちの将来を左右する一大市場となるにちがいない。面白いことに、それと並行して、私たちの心のなかにひそかに進行しつつある現象がある。それが、一種の西欧蔑視である。かりに、蔑視の目が、それぞれの地域の文学や文化にまで及ぶとしたら、何とも由々しい話ではないか。教養知もまた市場原理と無縁ならず、ということの証となるからである。他方、ＢＲＩＣＳはともかくも、アジアの他の周辺地域の文化伝統を掘り起こし、それを教養知のレベルにまで引き上げるとなると、それこそ世紀単位の時間が必要になる。要するに、教養知の領域に、一種のエアポケットが生まれようとしているのだ。

（同）

ここでも商売の話です。西欧以外の地域がいま大きい市場になりつつあるが「それと並行して、私たちの心のなかにひそかに進行しつつある現象がある。それが、一種の西欧蔑視である」と最先端＝亀山郁夫はいうんですね。さっきの「火を見るよりも明らか」と同様、ここももっと具体的な説明が必要じゃないでしょうか？　私には何のことだかわかりません。この出来損ないの文章から察すると、「グローバル・ビジネスの関心」が西欧以外の地域に向かうのと「並行して」「西欧蔑視」が進行しつつあるんですから、やっぱりこれは金の話ですか？「金

の切れ目は縁の切れ目」ってことで、西欧相手の商売より西欧以外の地域を相手にした商売の方が儲かるから、もう西欧なんか蔑んでいいよ、という現象が進行しているってことですか？「かりに、蔑視の目が、それぞれの地域の文学や文化にまで及ぶとしたら」とつづけるからには、そもそもその「蔑視」は「それぞれの地域の文学や文化」以外のものに向けられているわけですよね。

それにしても、

かりに、蔑視の目が、それぞれの地域の文学や文化にまで及ぶとしたら、何とも由々しい話ではないか。教養知もまた市場原理と無縁ならず、ということの証となるからである。

（同）

え？

かりに、蔑視の目が、それぞれの地域の文学や文化にまで及ぶとしたら、何とも由々しい話ではないか。教養知もまた市場原理と無縁ならず、ということの証となるからである。

（同）

え？

かりに、蔑視の目が、それぞれの地域の文学や文化にまで及ぶとしたら、何とも由々しい話ではないか。教養知もまた市場原理と無縁ならず、ということの証となるからである。

（同）

は？

ここまで読んできたのは「教養知もまた市場原理と無縁ならず」を「由々しい」と考えているひとの文章だったんですか？　全然そんなふうには読めませんでしたが？

しかし、驚くのはまだ早いです。最先端＝亀山郁夫がこの後どうつづけてこの文章全体を結んでいるか？

問題は、私たち文学者が、いま欧米中心型の教養知の再生のために何ができるか、ということである。再生のための努力を怠れば、私たち団塊の世代とともに、古典同様、教養知そのものもいずれ滅びゆく運命にある。教養は、とりもなおさず世代間戦争であり、おのれの陣地を守るには、それなりの手立てが不可欠である。『カラ兄』は、幸い、マスメディアの圧倒的な力でつかのまの蘇りを遂げたが、かといって、今後、ドストエフスキーの小説が永続的に読まれる保証はどこにもない。欧米中心型などという形容詞は取り去り、教養知そのもののサバイバルのために、それを担う私たちの闘争心が試されている。若い世代には、若い世代なりのソフィスティケートされた知的戦略があり、彼らが『カラ兄』に挑戦するのは、まさに戦略の一環である。そんなしたたかな相手との闘いで、少なくとも、『カラ兄』を、「未来永劫、金輪際手にとろうとしない」世代に勝ち目はなく、教養の再生を語る資格もないということだけは肝に銘じておきたい。

（同）

さて、

問題は、私たち文学者が、いま欧米中心型の教養知の再生のために何ができるか、ということである。再生のための努力を怠れば、私たち団

塊の世代とともに、古典同様、教養知そのものもいずれ滅びゆく運命にある。

（同）

何ですか、こりゃ？　何でいきなりこんな話になるの？　意味がわかりませんが、解読してみましょう。「私たち文学者」というのはどうやら「文学者」全体ではなくて「団塊の世代」の「文学者」に限られているんですね。それで、「欧米中心型」（さっきまでは「西欧」といっていたじゃないですか?）の「教養知」がいま「再生」を必要としているらしいんですが、ということは、いま「欧米中心型」の「教養知」は死んでいるんですか？　でも、どうやら「私たち団塊の世代」にはまだ生きていて、この世代が死ねば、「欧米中心型」の「教養知」も死ぬんですね。いやいや、生きているのか、死んでいるのか、はっきりしなさいよ。まあ、おそらく「欧米中心型」の「教養知」は、「私たち団塊の世代」には生きているけれど、それより下の世代では死んでいるってことなんでしょう。それにしても、「古典同様、教養知そのものも」というからには、「古典」と「教養知」とはべつのものなんですね。ドストエフスキーやシェークスピアは「古典」じゃないらしい。

教養は、とりもなおさず世代間戦争であり、おのれの陣地を守るには、それなりの手立てが不可欠である。『カラ兄』は、幸い、マスメディアの圧倒的な力でつかのまの蘇りを遂げたが、かといって、今後、ドストエフスキーの小説が永続的に読まれる保証はどこにもない。

（同）

何をいっているか、さっぱりわからないです。「教養は、とりもなおさず世代間戦争であり、おのれの陣地を守るには、それなりの手立てが不可欠」っていいますが、もし「私たち団塊の世代」に『カラマーゾフの兄弟』が「教養知」として生きているとしてですよ、それを自分たちより下の世代に「再生」させようとすることをかりに「世代間戦争」と無理やり呼ぶとして、どうして「おのれの陣地を守る」って表現になるんですか？　もし『カラマーゾフの兄弟』を「教養知」として下の世代に「再生」させることを願うなら、それだけを願えばいいんです。「おのれの陣地」なんかどうだっていい。ここでは「相手の陣地」のために献身すべきでしょう。なぜなら『カラマーゾフの兄弟』は必ず「相手の陣地」にも大きい恵みをもたらす作品だからです。これではまるで『カラマーゾフの兄弟』が「私たち団塊の世代」の占有物でもあるかのようじゃないですか。そんなことではなく、誰もが『カラマーゾフの兄弟』という作品に奉仕しなくてはならないのじゃないですか？　なのに、最先端＝亀山郁夫にかかると、そんな視点はまったくどこにもありません。いったい、『カラマーゾフの兄弟』という作品のために働くときに、なぜ最先端＝亀山郁夫の「おのれ」なんかがべったり貼りついてなくちゃならないんですか？　私はいいますが、最先端＝亀山郁夫はそのように、必ず自分が貼りつかないと我慢ができないんです。自分、自分、自分、です。このひとには下の世代の「教養知」なんかどうだっていいんです。ただ、もし下の世代が『カラマーゾフの兄弟』を読むのなら、そこに「最先端＝亀山郁夫」という印がべったりついていないと気がすまないんです。だから、それが「おのれの陣地を守る」という表現になってしまっているんでしょう。そうして、「私たち（団塊の世代の）文学者」というのは、だから、最先端＝亀山郁夫自身（とその周辺一部）のみを意味してもいるでしょう。

で、「『カラ兄』は、幸い、マスメディアの圧倒的な力でつかのまの蘇りを遂げた」というんですが、最先端＝亀山郁夫訳での『カラマーゾフの兄弟』が大きい話題になって売れたことが「つかのまの蘇り」なんですよね。つまり、最先端＝亀山郁夫の新訳が出るまで『カラマーゾフの兄弟』は死んでいたわけですよね。でたらめです。書店員の私がいうのだから、間違いないですが、原卓也訳『カラマーゾフの兄弟』の読者は常にいたし、現に増えつつもあります。おまけに最先端＝亀山郁夫の翻訳はいいかげんのでたらめだらけで、とても『カラマーゾフの兄弟』と呼べないほどの代物です。それで、何ですか？「かといって、今後、

ドストエフスキーの小説が永続的に読まれる保証はどこにもない」ですって？実際は、最先端＝亀山郁夫こそ、いいかげんのでたらめだらけの翻訳および解説なんかを出すから、ドストエフスキーの評判が損なわれているんじゃないですか？

欧米中心型などという形容詞は取り去り、教養知そのもののサバイバルのために、それを担う私たちの闘争心が試されている。若い世代には、若い世代なりのソフィスティケートされた知的戦略があり、彼らが『カラ兄』に挑戦するのは、まさに戦略の一環である。そんなしたたかな相手との闘いで、少なくとも、『カラ兄』を、「未来永劫、金輪際手にとろうとしない」世代に勝ち目はなく、教養の再生を語る資格もないということだけは肝に銘じておきたい。

（同）

もう読んでいて頭がおかしくなりそうです。「欧米中心型などという形容詞は取り去り」って、じゃあ、最初っからそうすべき問題を扱っている文章じゃないの？　馬鹿なの？　馬鹿ですが。「教養知そのもののサバイバルのために、それを担う私たちの闘争心が試されている」って、最先端＝亀山郁夫には「教養知そのもの」が大事なのか、それとも「私たち」が大事なのか？　そりゃ、「私たち」でしょうねえ！　最先端＝亀山郁夫は最初っから「教養知」が大事なんて露ほども思っていなかったでしょうに！

何なんですか、「若い世代なりのソフィスティケートされた知的戦略」って？意味がわかりません。ここでふつうの読者なら意味がわからないはずだということをわからずにいられる神経がわかりません。何が「そんなしたたかな相手」なんでしょう？　どう「したたか」なんですか？　まったく意味不明です。

少なくとも、『カラ兄』を、「未来永劫、金輪際手にとろうとしない」世代に勝ち目はなく、教養の再生を語る資格もないということだけは肝に銘じておきたい。

（同）

さっぱりわかりません。「『カラ兄』を、「未来永劫、金輪際手にとろうとしない」「世代」など現在のところ存在しません。それに、「勝ち目」って何ですか？何の「勝ち目」ですか？　それに、「教養の再生」って、ついさっきまで「教養知の再生」といっていたんじゃないですかね！　いやはや、「教養の再生を語る資格もない」のは、当の最先端＝亀山郁夫自身でしょうに！　加えて、どうするんですか？　ついさっきまで「一概に教養知といっても、グローバル化時代の凄まじいテンポ感のなかで、その概念自体、著しい変容にさらされていることは火を見るよりも明らかである」といっていたのは、最先端＝亀山郁夫自身なんですよ！

もう一度整理しますよ。

まず最先端＝亀山郁夫は、『カラマーゾフの兄弟』を例に挙げつつ、「数千頁におよぶ膨大な小説を読みあげたという自信と満足」（そんな中学生程度の自信と満足でいいわけです）についていい、さらに、「教養」というものが「共有」に値する知の体系」とはべつのところにあり、しかも下位にある、といいました。

次に、『カラマーゾフの兄弟』という「数千頁におよぶ膨大な小説を読みあげたという自信と満足」を「共有」する者たちの「秘密結社めいた同志愛を育む力」が金儲けにつながる、といいました。しかし、『カラマーゾフの兄弟』を読む価値も「グローバル化時代の凄まじいテンポ感のなか」では、いつどう下落するかもわからない。下落したら読む意味もないのに、そういうことを考えずに「百年一日のごとく」に地道な研究をしている馬鹿な学者どもがいる。また、「共有」に値する知の体系」の下位にある「教養」も「教養」であるためには「共有するための価値が認識され」なくてはならないんだそうです。で、価値の下落した『カラマーゾフの兄弟』を読むくらいなら、「英語の翻訳も出ている東野圭吾や伊坂幸太郎の読者であることのほうがはるかに」金儲けにつながる。金儲けにつな

がる学問が「実学」であり、そうでないものは「虚学」だ、といっています。

そうして、金儲けをしたいひとびとのターゲットが「西欧」を離れつつあり、それとともに「西欧蔑視」が生じている現在にあって、最先端＝亀山郁夫は突然「教養知もまた市場原理と無縁ならず」を「由々しい」といいだしたわけです。ここまでの流れからすると、絶対にいうはずもないことをいいだしたんです。

そうして、突然この文章全体が「私たち団塊の世代」を主体に書かれていたことが明らかになります。さらにその「私たち団塊の世代」の意味が実は最先端＝亀山郁夫自身（とその周辺一部）のみであることもわかってきます。最先端＝亀山郁夫訳のヒットによって、『カラマーゾフの兄弟』は「つかのまの蘇りを遂げた」らしいです。それまでは死んでいたらしい。嘘です。そんなことはありません。最先端＝亀山郁夫はあくまで自分の功績を主張したいらしいです。若い世代の心配よりも、自分の翻訳が売れつづけるかどうかの心配しかしていません。

最先端＝亀山郁夫のいう「教養の再生」とは、金儲けできるかどうかという視点からのものです。そうして、自分の翻訳が売れつづけるかどうか、というただその一点だけをいっています。

まったく、『これからどうする』という本のなかで、若い世代のことをひとつも思いやらず――むしろ敵対するものとしてとらえ――自分のいんちき翻訳と論文とによる金儲けのことだけを考えているという、こちらの開いた口がふさがらない文章なんです、これは。

（二〇一三年十一月十八日）

卑怯者＝沼野充義の『これからどうする』

（この章は昨二〇一三年十一月二十八日に書き上げていたものです）

では、次、沼野充義の文章――「未来の世界文学の場を創る」。もちろん、こちらもいくつかに分割はしていますが、全文を引用しています。

「これからどうする」と問われても、正直なところ、何もどうにもならないのではないか、という無力感をぬぐい去ることができない。第一線の若手として頑張ってきたつもりが、気がつけばいつの間にか、還暦もそう先のことではなくなり、たいていの座で年長者の部類に入り、なにかにつけ乾杯の音頭を取れなどと言われる年齢にさしかかってしまった。それなのに、いまだに自分のことと自分の周囲の小さな世界のことで手一杯、学生や同僚たちとの日常的な人間関係さえうまく調整できず、家庭でも息子がドラムばかりたたいていてろくに授業に出ないので心配したり、今晩のカレーは美味しく作れたと喜んだり、まあそういう次元に生きている人間なので、日本全体に関わる社会問題や、まして地球環境について何か偉そうなことを言うべき柄ではとうていなさそうだ。

（沼野充義「未来の世界文学の場を創る」
『これからどうする』岩波書店　所収）

さすがに最先端＝亀山郁夫と違って、沼野充義には作文能力があります。ふつうに読めます。巧みに書き出しました。といっても、ここで私のいうのは、いわゆる作文能力についてのことに過ぎません。どうでもいいことをどうでもいい程度にすらすら書いて、作文能力のないひとを感心させる類の、あるいは、学校で先生に褒められる程度の、どうでもいい文章の作文能力です。そういう作文能力だったら、私にもあります。そんな作文なんてお茶の子さいさいです。いくらだってできます。やりませんけれどね。やりたくもないし。しかし、本

当に素晴らしい文章というのは、そういうものでは全然ないんです。ついでにいえば、最先端＝亀山郁夫にはこの程度の作文能力すらないんです。

とはいえ、この第一段落は非常に重要です。単に上手な作文というだけではありません。非常に狡猾なアリバイづくりが最初から周到に実行されているんです。流し読みするのでなく、よく記憶しておいてください。

冒頭の――

「これからどうする」と問われても、正直なところ、何もどうにもならないのではないか、という無力感をぬぐい去ることができない。

（同）

――から、

……（中略）……まあそういう次元に生きている人間なので、日本全体に関わる社会問題や、まして地球環境について何か偉そうなことを言うべき柄ではとうていなさそうだ。

（同）

――まで、とにかく自分を小さな人間、小さくて「よい人間」、平凡で非力な人間に見せようとしています。自分が何かしたって、この世のなか何も変わらない、というように。しかし、沼野充義は現役で仕事をしており、しかも、そのなかでも「年長者の部類」に入っているわけです。私が具体的に補足をすれば、沼野充義は東京大学の教授であり、日本ロシア文学会会長であり、海外文学と日本文学とに精通し、ふたつの仲介者として、また、村上春樹や大江健三郎と親交のある者としてマスメディアに頻繁に登場する人物なんです。その沼野充義が、こうしてお気楽に自分の非力や小ささを、読者の誰もが安易に共感できるような調子でいろいろ並べている文章なんです、これは。

さあ、それで、この後どうつづけたか？

しかし、年相応の責任というものもあるだろう。権威的にふるまうことを嫌う我々の世代は、あまりにも物わかりのいい優しい親であったがために、しっかり建っていた家を崩れさせてしまったのかもしれない。そうだとしたら、子どもたちのためにも未来の故郷をきちんと見つける手助けをしなければならないのではないか。そんなことを思うようになった決定的なきっかけは、やはり、二〇一一年の大震災だった。今から考えると、起こったこと以上に怖いのは、「あれほど」のことが起こった後では人は前と同じではいられないだろう、と当初抱いた期待が見事に裏切られたという事態ではないか。復興支援のお金はきちんと使われず、地球の環境と未来の幸福のことを考えて原発を廃止しようという決断ものらりくらりと回避されつつあるうえに、「あれほど」の大事故を起こしながらこれまで原発を推進してきた頭のいい人びとのうち、誰一人として頭を丸めることも、自分の全財産をなげうって被災者のために余生を捧げようと決心することもなかった。

（同）

お気楽な感じで「しかし、年相応の責任というものもあるだろう」と書きました。先の段落で自分を小さな人間、小さくて「よい人間」、平凡で非力な人間に見せようとしたおかげで、こうした、まるで他人事のような「年相応の責任というものもあるだろう」も読者にすんなり受け入れられそうです。

さらに、「権威的にふるまうことを嫌う我々の世代は、あまりにも物わかりのいい優しい親であったがために、しっかり建っていた家を崩れさせてしまったのかもしれない」と来るわけです。「権威的にふるまうことを嫌う我々の世代」です。ここまで自分自身のことを語ってきた沼野充義は、ここで「我々の世代」

といいだすことで、大量の共犯者をつくり上げます。つまり、これはひとり沼野充義の問題ではなく、彼の「世代」の問題なのだというわけです。それゆえ、沼野充義が「年相応の責任もあるだろう」などと書いたのは、自分の責任ではなく、「世代」の責任であって、曖昧で、実体のないものです。沼野充義自身に何ら具体的な反省もないし、後悔もないし、実のところ責任など「ないとはいえないだろう」と思うだけで、「ある」とは思えていないんです。そうして、「しっかり建っていた家を崩れさせてしまったのかもしれない」ですよ。現状認識すらしっかりしていないんです。つづくのが「そうだとしたら」ですからね。それに、私は思うんですが、「そうだとしたら」でなくても、ひとは「子どもたちのためにも未来の故郷をきちんと見つける手助けをしなければならない」のじゃないでしょうか？

さらにこの後が最悪です。

> そんなことを思うようになった決定的なきっかけは、やはり、二〇一一年の大震災だった。今から考えると、起こったこと以上に怖いのは、「あれほど」のことが起こった後では人は前と同じではいられないだろう、と当初抱いた期待が見事に裏切られたという事態ではないか。復興支援のお金はきちんと使われず、地球の環境と未来の幸福のことを考えて原発を廃止しようという決断ものらりくらりと回避されつつあるうえに、「あれほど」の大事故を起こしながらこれまで原発を推進してきた頭のいい人びとのうち、誰一人として頭を丸めることも、自分の全財産をなげうって被災者のために余生を捧げようと決心することもなかった。
>
> （同）

この段落のみならず、この文章全体で私が最も驚いたのは、沼野充義が自分自身と「これまで原発を推進してきた頭のいい人びと」とをまったく切り離していること・切り離して平気でいることでした。自分と「これまで原発を推進してきた頭のいい人びと」とが、まるでまったくべつの存在でもあるかのようです。どうしてこんなことがいえるのか？

沼野充義は「これまで原発を推進してきた頭のいい人びと」の「責任」を問うているわけです。「これまで原発を推進してきた頭のいい人びと」には重大な「責任」があると。そうして、「これまで原発を推進してきた頭のいい人びとのうち、誰一人として頭を丸めることも、自分の全財産をなげうって被災者のために余生を捧げようと決心することもなかった」ことを非難しているんですよね。

私は沼野充義に訊いてみたい。もし、沼野充義のいう「あれほど」のことが起こった後で、「これまで原発を推進してきた頭のいい人びと」が、次のように弁明したら、沼野充義はどう感じるのか？

> 「これからどうする」と問われても、正直なところ、何もどうにもならないのではないか、という無力感をぬぐい去ることができない。第一線の若手として頑張ってきたつもりが、気がつけばいつの間にか、還暦もそう先のことではなくなり、たいていの座で年長者の部類に入り、なにかにつけ乾杯の音頭を取れなどと言われる年齢にさしかかってしまった。それなのに、いまだに自分のことと自分の周囲の小さな世界のことで手一杯、学生や同僚たちとの日常的な人間関係さえうまく調整できず、家庭でも息子がドラムばかりたたいていてろくに授業に出ないので心配したり、今晩のカレーは美味しく作れたと喜んだり、まあそういう次元に生きている人間なので、日本全体に関わる社会問題や、まして地球環境について何か偉そうなことを言うべき柄ではとうていなさそうだ。
>
> （同）

あのね、「これまで原発を推進してきた頭のいい人びと」もおそらくずっと「第一線の若手として頑張ってきたつもり」だったんですよ。そうして、実は最初

から常に「日本全体に関わる社会問題や、まして地球環境について」考えていなければならない「人びと」だったんです。でも、それをしなかった。それぞれが「日本全体に関わる社会問題や、まして地球環境について何か偉そうなことを言うべき柄ではとうていなさそうだ」と思っていたんじゃないんですか？しかたないよねえ。だって、みんな「いまだに自分のことと自分の周囲の小さな世界のことで手一杯、学生や同僚たちとの日常的な人間関係さえうまく調整できず、家庭でも息子がドラムばかりたたいていてろくに授業に出ないので心配したり、今晩のカレーは美味しく作れたと喜んだり、まあそういう次元に生きている人間」なんだものなあ。で、おそらく「権威的にふるまうことを嫌う我々の世代」でもあるんじゃないのかなあ？

沼野充義はどう答えるでしょうか？

こうでしょう（たぶん、顔を真っ赤にしながら）。そんなことじゃない、仕事についての、人間としての「責任」の話なんだよ！「いまだに自分のことと自分の周囲の小さな世界のことで手一杯、学生や同僚たちとの日常的な人間関係さえうまく調整できず、家庭でも息子がドラムばかりたたいていてろくに授業に出ないので心配したり、今晩のカレーは美味しく作れたと喜んだり」なんてことは、この「責任」には関係ないんだよ！

そうすると、ここまで沼野充義のいってきたことはどうなるんでしょう？　沼野充義自身の、彼自身がとぼけて「年相応の責任というものもあるだろう」なんていって、彼に「責任」なんてものがないかのようにいってきたのは、彼の仕事についての、人間としての「責任」とは関係ないわけです。つまり、沼野充義にも「責任」はあるし、それはこれまでもずっと自覚していなければならなかったものなんです。

それとも、自分は例外だけど、やらかしちゃった他人を責めることはできる、ってことですか？　これは十分ありうるでしょう。というか、そもそもそういう文章なんじゃないですか？　沼野充義ってひとはそういうひとじゃないんですか？

「これからどうする」と問われても、正直なところ、何もどうにもならないのではないか、という無力感をぬぐい去ることができない。第一線の若手として頑張ってきたつもりが、気がつけばいつの間にか、還暦もそう先のことではなくなり、たいていの座で年長者の部類に入り、なにかにつけ乾杯の音頭を取れなどと言われる年齢にさしかかってしまった。それなのに、いまだに自分のことと自分の周囲の小さな世界のことで手一杯、学生や同僚たちとの日常的な人間関係さえうまく調整できず、家庭でも息子がドラムばかりたたいていてろくに授業に出ないので心配したり、今晩のカレーは美味しく作れたと喜んだり、まあそういう次元に生きている人間なので、日本全体に関わる社会問題や、まして地球環境について何か偉そうなことを言うべき柄ではとうていなさそうだ。

（同）

もうひとついえば、沼野充義の「これまで原発を推進してきた頭のいい人びと」ね。「頭のいい人びと」――こういういいかたをすることで、沼野充義はまるで自分が「頭のいい人」ではないかのように、そうして「頭のいい人びと」からものすごく遠くにいるかのように書くわけです。

というわけで、沼野充義のこの文章の第一段落は無効だってことです。こんなものは何の言い訳にもなりません。ただのアリバイづくりです。

いや、それよりも私がここでいちばん驚いたのは、沼野充義が「これまで原発を推進してきた頭のいい人びと」で構成される、いわゆる「原子力ムラ」というものと彼の周辺の「ロシア文学」に関わる集団（出版社や新聞社なども含めて）に相似性を感じないでいられることなんですね。「あれほど」のことが起こった後で」私は「原子力ムラ」についてあれこれの記述を読みながら、沼野充義を筆頭とする「ロシア文学」周辺の集団とそっくりだなあ、と思っていたものです。自分たちさえよければ、国民（読者）なんかどうだっていいという集団ですね。

集団のなかに、「いや、これは間違っているんじゃないか?」という声があったとしても、封殺です。いいかげんのでたらめだらけとはいえ、かなり売れて、話題にもなった最先端＝亀山郁夫の仕事を、いまさら否定するわけにはいかないぞ。ここで誰かが告発なんぞしようものなら、この世界でやっていけないようにしてやるぞ、みたいな、ね。

そういうわけで、沼野充義が「権威的にふるまうことを嫌う我々の世代」と書いたのはちょっとしたトリックです。沼野充義はここで「権威的にふるまう」ことと「結果的に権威的にふるまっているのに等しい」ことを切り離しているんです。巧みに「あまりにも物わかりのいい優しい親であったがために、しっかり建っていた家を崩れさせてしまったのかもしれない」といいました。沼野充義は「あまりにも物わかりのいい優しい親であったがために」最先端＝亀山郁夫の仕事を否定できなかった。それどころか称揚までしてしまった。新聞や雑誌やテレヴィなどが最先端＝亀山郁夫訳というのはいったいどうなんだと、それを誰に訊いたらいいんだとなったときに必ず行き着くのが沼野充義です。世界的に見て、村上春樹の評判ってどうなんだ、といったときに行き着く先がやはり沼野充義であるように。それに、これは想像の域を出ませんが、光文社が「古典新訳文庫」で『カラマーゾフの兄弟』を出すと決めて、では誰を翻訳者にしたらいいのかと迷ったときに、実は沼野充義にお伺いを立てていたのかもしれません。ともあれ、沼野充義はいろんなところで最先端＝亀山郁夫の仕事を称揚しまくりました。沼野充義がそうやって称揚することで最先端＝亀山郁夫のいいかげんのでたらめだらけの仕事が世のなかに氾濫することになってしまった。そのとき、沼野充義は、自分ではおとなしいつもりでも、実際には「権威」だったんですよ。もちろん、沼野充義はそれを知っていました。この文章の最初の段落もここへの狡猾な布石でした。逃げ道を確保しておいたわけです。自分が非力で、大それた責任を負うだなんてとんでもないというポーズですよね。

沼野充義はこういうことすべてを承知しています。すべてを承知しながら、自ら黙るし、誰かの声も封殺します。どうやって、それをうまくやるかというと、自分が何も知らなかった・見なかったことにするわけです。事実上の「権威」がこういうことをする。

さて、「これまで原発を推進してきた頭のいい人びと」の仕事と沼野充義の仕事＝「文学」とは全然異なる（「文学」が破綻しても死者は出ない）ので、両者を同じレヴェルで比較することはできない（「責任」の重みが全然違う）のではないか、なんてことを考えるひとがいるかもしれません。まさに沼野充義がそのひとりで、この後でそれをさらに強調する（ということは、さらに沼野充義の「責任」を軽くする）文章を連ねるんですね。「文学」というものを、実に頼りない、衰えたものであるかのように語って、読者の哀れを誘おうとするわけです。この文章の最初の段落でやったことを「文学」についてやればいいわけです。全部他人事です。沼野充義の自己申告では、彼自身の「責任」はどこにもありゃしません。

そうして、こう書きます。

> こういう事態を前にして、宗教や哲学とは違う持ち場を守ってきた文学にも出番もあるのではないだろうか。全体として形勢が文学にとってあまり芳しくないことは、私自身、よく承知している。そもそも二〇世紀の後半から、文学はもう死んだとか、文学はもはや現代社会には無用の長物ではないか、といった懐疑的な声がさまざまな立場からしばしば聞かれるようになってきた。その理由や背景はいくつもある。まず、第二次世界大戦、特にホロコーストや原爆がもたらした精神的荒廃の結果、人類はもはや文学の美しい世界には遊べなくなったのではないか、という絶望的な考え方。
>
> さらに、文学そのものの発展の行き詰まりという内的な問題もあった。二〇世紀に入ってから欧米の文学は、未来主義、シュルレアリズム、そしてジョイスの小説に見られるような過激な言語実験などの前衛的な試みを経て、ついにこれ以上先には行けない、という袋小路にはまりこん

でしまったのではないか。残された可能性は、面白く消費される娯楽的な読み物だけである。

また二〇世紀後半には、科学技術の飛躍的な向上により、映画、テレビから、さらにはコンピュータ・インターネット関連の電子的メディアが誰も想像できないような勢いで発展し、活字文化を圧倒するほどになった。こういった状況の中で、はたして文学は、いや、そもそも書物は、いまのままの形で、これから先、二一世紀を生き延びられるのだろうか？

（同）

ある種の読者は右の文章を読んでコロリと騙されるでしょう。何かためになることを読んだ気がするかもしれません。まあ、そんなひとはもうどうしようもないんです。

それはともかく、ここで沼野充義は「第二次世界大戦、特にホロコーストや原爆がもたらした精神的荒廃の結果、人類はもはや文学の美しい世界には遊べなくなったのではないか、という絶望的な考え方」なんて、すらすらと知ったようなことを書いていますが、ついさっきまでは現在の自分について「そんなことを思うようになった決定的なきっかけは、やはり、二〇一一年の大震災だった。今から考えると、起こったこと以上に怖いのは、「あれほど」のことが起こった後では人は前と同じではいられないだろう、と当初抱いた期待が見事に裏切られたという事態ではないか」なんて書いていたんですよ。おかしくないですか？これがおかしいという理由をいま私は明確に説明することができませんが、もののすごい違和感があって、それはたぶん「人類はもはや文学の美しい世界には遊べなくなったのではないか、という絶望的な考え方」という沼野充義のまとめかたにも起因しています。「第二次世界大戦、特にホロコーストや原爆がもたらした精神的荒廃の結果、人類はもはや文学の美しい世界には遊べなくなったのではないか、という絶望的な考え方」というのは、いろんな意味に解釈できるでしょうが、そのひとつとして、たぶん、こういうふうにいい換えることができるのじゃないでしょうか？「第二次大戦、特にホロコーストや原爆がもたらした精神的荒廃の結果、人類はもはや人類を信じることができなくなった・人類をよきものとして信じることができなくなったので、もはや人類をよきものとして肯定することを前提に書かれてきた文学の美しい世界には遊べなくなったのではないか、という絶望的な考え方」。そう書く沼野充義が二〇一一年の大震災の後で、とりあえずは「今から考えると、起こったこと以上に怖いのは、「あれほど」のことが起こった後では人は前と同じではいられないだろう」と書いたんです。沼野充義がそう思ったということは、彼が「第二次大戦、特にホロコーストや原爆」から半世紀以上を経た現在の日本においても「人類をよきものとして信じ」ていることの証拠じゃないですか？　そうして、「人類はもはや文学の美しい世界には遊べなくなったのではないか、という絶望的な考え方」の「絶望的な考え方」というのは、沼野充義が「人類はもはや文学の美しい世界には遊べなくなったのではないか」という「考え方」を「絶望的」だと考えているということですよね。「人類をよきものとして信じ」ていて、「人類はもはや文学の美しい世界には遊べなくなったのではないか」という「考え方」を「絶望的」だと考えている沼野充義は、自らに照らして「そもそも二〇世紀の後半から、文学はもう死んだとか、文学はもはや現代社会には無用の長物ではないか、といった懐疑的な声がさまざまな立場からしばしば聞かれるようになってきた」なんてことをそのまますらすらと書いていいんでしょうか？　沼野充義にそうすることへの大きい引っかかりがあるはずじゃないでしょうか？　何なら、徹底的に反論すべきなのでは？　でも、沼野充義はそんなことはしません。彼は、平気ですらすらとこの「絶望的な考え方」の存在を既定の事実として、単にそういう「考え方」があることを認識していて、それを単に「知識」として披露したまでのことです。これが「これまで原発を推進してきた頭のいい人びと」のやってきて、いまなおやりつづけていることと、どこが違うんですか？「原発は危険だ」という「考え方」を単に「知識」のレヴェルで、つまり頭のなかで処理・整理することはしても、「こんな危険なものに手をつけてはいけない」とか「自分は何と恐ろしいものを推進しようとしているのか？」に結びつけることをしないのが「これまで原発を推進してきた頭のいい人びと」でしょう。だから、沼

野充義が「起こったこと以上に怖いのは、「あれほど」のことが起こった後では人は前と同じではいられないだろう、と当初抱いた期待が見事に裏切られたという事態ではないか」なんていって、自分と「これまで原発を推進してきた頭のいい人びと」とを区別しようとしている・見せようとしているのは詐欺です。「これまで原発を推進してきた頭のいい人びと（のひとり）」と沼野充義は等号で結ばれます。ということは、沼野充義の「そんなことを思うようになった決定的なきっかけは、やはり、二〇一一年の大震災だった。今から考えると、起こったこと以上に怖いのは、「あれほど」のことが起こった後では人は前と同じではいられないだろう、と当初抱いた期待が見事に裏切られたという事態ではないか」というのは大嘘で、読者を騙すために自らのアリバイをつくっただけです。沼野充義にとっては、頭のなかで処理・整理するだけの「人類はもはや文学の美しい世界には遊べなくなったのではないか」という「考え方」の方が勝っていて、「今から考えると、起こったこと以上に怖いのは、「あれほど」のことが起こった後では人は前と同じではいられないだろう」など本当はどうでもいいんです。この点ですよ、私がずっと――前章で書きました――「勇気や信念」ということで考えていたのは。「勇気や信念」のあるひとならば、絶対に沼野充義＝「これまで原発を推進してきた頭のいい人びと（のひとり）」のようには考えません。

それとはべつに「第二次世界大戦、特にホロコーストや原爆がもたらした精神的荒廃の結果、人類はもはや文学の美しい世界には遊べなくなったのではないか、という絶望的な考え方」そのものについていえば、もちろん私はカート・ヴォネガットのこれをも思い浮かべています。

あるときローズウォーターがビリーにおもしろいことをいった。ＳＦではないが、これも本の話である。人生について知るべきことは、すべてフョードル・ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』の中にある、と彼はいうのだった。そしてこうつけ加えた、「だけどもう、それだけじゃ足りないんだ」

（カート・ヴォネガット『スローターハウス５』　伊藤典夫訳　早川文庫）

さて、私は何を話していたんでしたか？　ああ、沼野充義でしたね。私は沼野充義のお気楽な文章に憤りを感じます。この文章のどこにも本当の沼野充義はいないんです。あるのは、責任逃れの煙幕だけです。いや、どこにも本当の沼野充義のいないことが、まさに本当の沼野充義なんです。

さて、後で公開する『さあ、東大・沼野教授と新しい「読み」の冒険に出かけよう！』でも引用していますが、――

「傍観者」という性質は、学術一般の性質に見られるのです。「傍観者」が「客観性」のフリをしていると言ってもよいかもしれません。

（安富歩『原発危機と「東大話法」』　明石書店）

――です。まさに沼野充義です。

そうして、沼野充義はこう結びます。ただの「作文」です。全部他人事です。

しかし、考えてみると、「文学の危機」をめぐるこの種の言説はいまに始まったことではない。文学とは常に「～のおかげで」盛んになるものではなく、「～にもかかわらず」生き延びていくジャンルではないだろうか。優れた文学は歴史的に見れば、「反動」の陣営に与（くみ）するよりは権力に抵抗する側に立ち、人間の自由のために貢献してきたし、若者の「文学離れ」を嘆く識者の声が高まる一方で、実際に人々が読むフィクションの量は決して減っていない。文学の形は今後変わっていくに違いないが、人間はいまの形の生物として存在し続ける限り、自分の観察や、感覚や、欲望や、志向を言語によって表現し、伝達することは止めないだろう。その際、「詩」と「物語」という二つのジャンルは始原的であると同時に、

最高度の世界認識と自己表現の形態なのである。

大学の文学部という、いつ消滅するかも分からない組織に身を置く人間としては、小手先の制度改革で「集客」の努力をするよりは、狭い縄張り意識を捨てて、若者たちにもっと根本的に文学そのものの力を感受してもらえるような場を創出することが必要なのではないかと思う。いささか空想的な提案だとは思いつつ、あえて言うが、シェイクスピアやドストエフスキーやフォークナーや大江健三郎を読むことが、宇宙の起源を探ることと同じくらい面白く、原子炉の設計よりも遥かに大事であると思えるような充実した文学体験が可能な場を、社会の中にきちんと作っていかなければならない。それは国文学とか、英文学といった枠を越えた、未来の世界文学の場になるべきだろう。政治家の中に若いころそういった体験をした人が一人でも増えれば、世の中は少しだけでもよくなる。私にいまできるのは、未来の世界文学への道案内役の一人として、その「少しだけ」が実現することに――これまた、ほんの少しだけ――貢献することでしかない。

（同）

この文章での「～にもかかわらず」というのは、トーマス・マンの「～にもかかわらず」＝「trozdem」からの引用でしょうか？「優れた文学は歴史的に見れば、「反動」の陣営に与（くみ）するよりは権力に抵抗する側に立ち」は、村上春樹の「壁と卵」からの引用でしょうか？　まあ、そんなことはどうでもいいです。

優れた文学は歴史的に見れば、「反動」の陣営に与（くみ）するよりは権力に抵抗する側に立ち、人間の自由のために貢献してきたし、若者の「文学離れ」を嘆く識者の声が高まる一方で、実際に人々が読むフィクションの量は決して減っていない。

（同）

――と沼野充義は書きますが、「人間の自由のために貢献してきた」のは「優れた文学」ですよね。この「優れた文学」と現在「実際に人々が読むフィクション」とは等号で結ぶわけにはいきませんよね。それに、さっきは「残された可能性は、面白く消費される娯楽的な読み物だけである」と書いていたのじゃないですか？　どういうことでしょう？　こういうことですか？　「人間の自由のために貢献してきた」「優れた文学」としての『カラマーゾフの兄弟』を「若者たちにもっと根本的に文学そのものの力を感受してもらえるよう」読まれるようにするためには、「面白く消費される娯楽的な読み物」として、いいかげんのでたらめだらけの『カラマーゾフの兄弟』が翻訳される必要がある。そうなんですか？　そんな翻訳が「もっと根本的に文学そのものの力を感受してもらえるような場を創出」することになるんですか？　違いますよね？　なぜって、沼野充義自身がこの後で「大江健三郎」の名前を挙げているからです。日本人がもし「大江健三郎」を読むなら、翻訳に頼らず、日本語で読みます。「大江健三郎」を「若者たちにもっと根本的に文学そのものの力を感受してもらえるよう」読まれるようにするということを、もし本当に沼野充義が考えているなら、『カラマーゾフの兄弟』だって、「面白く消費される娯楽的な読み物」として、いいかげんのでたらめだらけに翻訳されては駄目ですよね。「大江健三郎」を「面白く消費される娯楽的な読み物」として読むことができるとは思えませんから。

それじゃ、なぜ沼野充義は最先端＝亀山郁夫の仕事をいいかげんのでたらめだらけのものと知りつつ称揚しつづけているのか？　沼野充義＝「これまで原発を推進してきた頭のいい人びと（のひとり）」だからです。

シェイクスピアやドストエフスキーやフォークナーや大江健三郎を読むことが、宇宙の起源を探ることと同じくらい面白く、原子炉の設計よりも遥かに大事であると思えるような充実した文学体験が可能な場を、社会の中にきちんと作っていかなければならない。

（同）

ここでも沼野充義は「これまで原発を推進してきた頭のいい人びと」のことを読者に意識させます。そうする沼野充義がまるで「これまで原発を推進してきた頭のいい人びと（のひとり）」ではないかのようです。まるで違う。きれいごとをいって、自分のアリバイをつくっているだけです。

沼野充義が、いいかげんのでたらめだらけの最先端＝亀山郁夫の仕事を称揚するのは、「原子力ムラ」のいわゆる「御用学者たち」がずっと「原発は安全です」と嘘をつきつづけてきた・いまもつきつづけているのとまるっきり同じです。「最先端＝亀山郁夫のこの誤訳（と、そこに至る重大な誤読）は安全圏内です」ですか？「直ちに人体に影響はありません」ですか？　よくもまあ、これほど厚顔無恥でいられるものだ。

沼野充義は自分がいま「「反動」の陣営に与（くみ）」していることを、なぜ認められないんでしょう？　というか、本当は認めているんですが、認めていることを知らなかったことにするわけです。「あえて言うが、シェイクスピアやドストエフスキーやフォークナーや大江健三郎を読むことが、宇宙の起源を探ることと同じくらい面白く、原子炉の設計よりも遥かに大事であると思えるような充実した文学体験が可能な場を、社会の中にきちんと作っていかなければならない」と書く人物が、いいかげんのでたらめだらけの最先端＝亀山郁夫訳・ドストエフスキーを宣伝するという、この嘘つき・卑怯・卑劣・不誠実・腐敗。これこそが必ずいつか最悪の「「あれほど」のこと」を引き起こすんですよ。そうして、それを「「あれほど」のこと」と思い返せる人間が、そのときまだひとりでも生存しているかどうかも疑わしい、と私は思いますけれどね。

というように、沼野充義というひとには、前章で私の書いた「信念や勇気」といったものがまったく欠如しているわけです。

復興支援のお金はきちんと使われず、地球の環境と未来の幸福のことを考えて原発を廃止しようという決断ものらりくらりと回避されつつあるうえに、「あれほど」の大事故を起こしながらこれまで原発を推進してきた頭のいい人びとのうち、誰一人として頭を丸めることも、自分の全財産をなげうって被災者のために余生を捧げようと決心することもなかった。

（同）

沼野充義こそ、最先端＝亀山郁夫の仕事に対する批判を「のらりくらりと回避」して、「「あれほど」の」大誤訳を称揚しつつ、「頭を丸めることも、自分の全財産をなげうって被災者のために余生を捧げようと決心することも」しない、嘘つき・卑怯・卑劣・不誠実・腐敗の張本人なんですよ。

沼野充義は「頭を丸め」、「自分の全財産をなげうって」、いいかげんのでたらめだらけの最先端＝亀山郁夫の仕事による被害者（ドストエフスキーを含む）のために「余生を捧げようと決心」すべきです。つまり、それが、もし沼野充義が本当に「原発」に反対しているのなら、「原発」を無くすためにやるべきことです。最先端＝亀山郁夫問題をうやむやにする「文学」研究者に「反原発」を口にする資格はありません。「反原発」というのは、そういうことです。「これまで原発を推進してきた頭のいい人びと」がそうやっていられた環境のありかた、そういう環境を可能にする社会の構造――これをおかしいということこそが「反原発」です。直接に原発に反対することだけを「反原発」というのではありません。沼野充義のように一見「反原発」であるかのようにふるまい、直接自分に責任のある「ロシア文学」周辺の事情を肯定するのは矛盾なんです。「ロシア文学」周辺の事情と「これまで原発を推進してきた頭のいい人びと」がそうやっていられた環境のありかた、そういう環境を可能にする社会の構造とは等号で結ぶことができますから。「文学」に携わる者がこういうことをやってはいけません。というか、こういうことをやっている者が「文学」なんかに携わることがおかしいんです。

（二〇一三年十一月二十八日）

最先端＝亀山郁夫の「使命」とやら

（この章のほとんどは昨二〇一三年六月までに書き上がっていて、放ったまま、ほぼ一年が過ぎ、このひと月くらいでいくらかの加筆をして、切り上げました）

今年（二〇一三年）四月の産経新聞から、文章の全体を引用。

亀山郁夫（名古屋外国語大学長）　苦行の先の歓びのために

私には使命がある、と、いつからか思いこむようになった。70歳までにドストエフスキーの5大長編をすべて翻訳する。残された時間は、6年。残された作品は、『白痴』と『未成年』。４００字詰め原稿用紙に換算して、約5千枚。単純計算で、1日3枚。体調さえ崩さなければ、けっして不可能な分量ではないと思う。

翻訳という作業は、九割九分が苦行で、歓（よろこび）（原文ママ）びは、一分にも満たない。老い先長くもないのに、なぜ、こんな割にあわない苦行を引き受けるのか。そんな不条理感につきまとわれることもある。しかし一分にも満たない歓びが、どうやら何にも代えがたい意味を持っていたらしい。月並みな比喩だが、アルピニストが山頂を目指すように、マラソン選手がゴールを目指すように、私もまたひたすら達成感を求めて翻訳を続けてきた。

広々とした白い余白のある会話の頁（ページ）がうれしかった。頭の中がにわかにクリアになり、マラソン選手が経験するランニングハイの訪れを受けることもしばしばあった。

逆に苦手なのは、登場人物の外見描写、そして何より、果てしなくつづく地の文。途中、長い地の文を放りだし、次の会話の部分を先に訳すといったこともまれではなかった。

それにしても、人生というのは不思議である。50代半ばまで、翻訳など自分にはまるで無縁の仕事だと思っていた。「君子、危うきに近寄らず」という表題のエッセーまで書いたこともあった。「危うき」とは、むろん、翻訳のことを言っている。

翻訳とは、ある意味で他人の話をどこまでも冷静に聴きとる作業を意味するので、翻訳者には心理カウンセラーにも似た我慢強さが要求される。また、ある一定量の原文を瞬時に頭にたたきこめる記憶力も欠かせない。ところが、私は、人並みの忍耐力どころか、ロシア人から「鶏の記憶」と悪口をたたかれるほど記憶力も劣っているので、翻訳者としてだれよりも不向きだと認識していた。それが、あるとき一変した。それまで約束していた何冊かの本をすべてペンディングとしたうえで、『カラマーゾフの兄弟』の翻訳に全力で取りかかったのだ。文字通り、「君子、豹変（ひょうへん）す」のたとえを実行したわけである。

翻訳がはじまると同時に、生活習慣も大きく変化した。午後7時過ぎに帰宅し、軽い夕食をとってから9時過ぎに横になる（基本的に、睡魔とはいっさい戦わない）。そして12時か、遅くとも1時には起きだし、朝の5時半まで翻訳に集中する。明け方また2時間ほど眠り、8時過ぎに起きて、そのまま出勤する。こんな不規則な日課をほぼ2年半くり返した。印象深いのは、深夜、目が覚めてからの約30分。この気分がさらに1時間も続いたら生きてはいけない、と思えるほど重い闇が襲ってくる。しかし、やがてそれも、霧が晴れるように溶けだし、そのたびごとに、何かしら生命そのものの甦（よみがえ）りに立ち会うような不思議な瞬間を味わうことができた。ことによると、この歓びを経験するために、毎夜、翻訳という苦行に耐えていたのかもしれない、と今にして思う。

（産経ニュース　二〇一三年四月七日
http://sankei.jp.msn.com/life/news/130407/bks1304070839001-n1.htm）

ここでいわれている「ドストエフスキーの5大長編」とは、「『白痴』と『未成年』」とを除くと、すでに最先端＝亀山郁夫の訳した順に記せば『カラマーゾフ

の兄弟』、『罪と罰』、『悪霊』ですね。

さてと、

それにしても、人生というのは不思議である。50代半ばまで、翻訳など自分にはまるで無縁の仕事だと思っていた。「君子、危うきに近寄らず」という表題のエッセーまで書いたこともあった。「危うき」とは、むろん、翻訳のことを言っている。

翻訳とは、ある意味で他人の話をどこまでも冷静に聴きとる作業を意味するので、翻訳者には心理カウンセラーにも似た我慢強さが要求される。また、ある一定量の原文を瞬時に頭にたたきこめる記憶力も欠かせない。ところが、私は、人並みの忍耐力どころか、ロシア人から「鶏の記憶」と悪口をたたかれるほど記憶力も劣っているので、翻訳者としてだれよりも不向きだと認識していた。それが、あるとき一変した。それまで約束していた何冊かの本をすべてペンディングとしたうえで、『カラマーゾフの兄弟』の翻訳に全力で取りかかったのだ。文字通り、「君子、豹変（ひょうへん）す」のたとえを実行したわけである。

（同）

右の「それが、あるとき一変した」というのは、「あるとき」突然彼の忍耐力と記憶力が向上したというのではないんですよね。「人並みの忍耐力どころか、ロシア人から「鶏の記憶」と悪口をたたかれるほど記憶力も劣っている」にもかかわらず、「自分が翻訳者としてだれよりも不向きだと認識する」のをやめちゃった。で、「『カラマーゾフの兄弟』の翻訳に全力で取りかかっ」ちゃった。でも、忍耐力も記憶力も劣っているままだから、『カラマーゾフの兄弟』全体の文脈、登場人物の作品全体における関係、時系列なんかもめちゃくちゃな読み取りのままで仕事しちゃった。結局、作品全体を見渡すことのできないまま、目の前にあるロシア語原文のひとつひとつをやっつけのいいかげんで――直近の文脈すらもわからないまま――日本語に置き換えただけで、つまり、それらひとつひとつに込められた作品全体との関係のわかりもしないまま「新訳でござい」とやっちゃった。まあ、本人はそれでもおそらくへとへとになったんでしょう。その間に勝手に自慰的「ランニングハイの訪れ」なんかも経験してたんですね。

いや、それよりも「翻訳とは、ある意味で他人の話をどこまでも冷静に聴きとる作業を意味するので、翻訳者には心理カウンセラーにも似た我慢強さが要求される」と、この最先端が口にできるということに私は驚きます。誰の話も早とちりし、自分自身の妄想に置き換えてしまい、勝手にその他人が自分に憑依したなんて思い込んでしまう、この最先端＝亀山郁夫がこんなことをいうんですね。

私には使命がある、と、いつからか思いこむようになった。70歳までにドストエフスキーの5大長編をすべて翻訳する。残された時間は、6年。残された作品は、『白痴』と『未成年』。４００字詰め原稿用紙に換算して、約5千枚。単純計算で、1日3枚。体調さえ崩さなければ、けっして不可能な分量ではないと思う。

（同）

さて、私は最先端＝亀山郁夫にいいますが、あなたの「使命」は全然べつのところにあります。あなたの「使命」は、あなたの無能をあなたが自覚すること、そうしてそれにもとづいての謝罪、さらには、これまでのドストエフスキー作品翻訳、また、それについての全著作の絶版、回収です。他に何があるでしょうか？

次は今年（二〇一三年）二月のある記事から。これには適宜突っ込みを入れながらの引用をします。

亀山郁夫氏訳の「カラマーゾフの兄弟」が古典としては珍しくベスト

セラーになり、年初からは同名のテレビドラマが放映中。日本におけるカラマーゾフおよびドストエフスキー・ブームはロシアからみても興味深いものだ。「ロシア」と同意語とさえ比せられる「ドストエフスキー」の影響は文学だけにとどまらない。さまざまな国民が、ドストエフスキー文学の登場人物の中に自分の心理、情感、魂を見いだす。ドストエフスキーの小説群は人間性の研究なのだ。

「カラマーゾフの兄弟」を翻訳し、最新のドストエフスキー・ブームの立役者となった亀山郁夫・東京外国語大学学長に聞いた。

日本でのカラマーゾフ（ドストエフスキー）ブームをどう感じていますか。

驚くべきことですし、素晴らしいことです。現代の日本を代表する作家の多くが、確実にドストエフスキーを意識して小説を書いています。村上春樹、辻原登、高村薫、平野啓一郎、鹿島田真紀、中村文則といった作家たちです。

ドストエフスキーの文学が提出する問題、罪とは何か、罰とは何か、あるいは、マゾヒズムの本質、自己犠牲、黙過といった問題が現代の日本人にとって痛切な響きを帯びつつあるように思えます。3・11以降、日本人の心のなかに広がる一種の終末観もドストエフスキー文学への関心の広がりに拍車をかけているのかもしれません。

（「ロシアNOW」 二〇一三年二月十三日
http://roshianow.jp/arts/2013/02/13/41339.html）

「現代の日本を代表する作家」としての「村上春樹、辻原登、高村薫、平野啓一郎、鹿島田真紀、中村文則」のうち、すでに私は村上春樹への失望を書きましたし、最先端＝亀山郁夫と対談まで行なって、この愚かな相手の実質をまったく見抜くことのできなかった高村薫と中村文則のふたりについて批判もしました。次。

「カラマーゾフの兄弟」を翻訳してどういう反応がありましたか。

翻訳に対して、一部から厳しい批判を受けたのは事実です。修正すべき箇所をすべて修正しました。

（同）

ほほう。では、これまでのすべての修正箇所を公開してくださいよ。その際、なぜ自ら「修正すべき」だと判断したのかも明らかにし、さらに、そもそもなぜ自分が間違ったのか、その理由をも詳述するのを忘れないように。

それに「一部から」って何ですか？　それもはっきりと答えてください。「一部」の偏執的な輩たち、ってことですか？　「一部」という表現をすることで、あなたは「大多数」に目配せしていますよね？

それに、この記事の記者にもいいたいんですが、あなたはこんなに簡単にこの部分を終わらせていいとでも思っているの？　一応「一部」の「厳しい批判」については触れておきましたよ、ということですか？　いま私があなたに訊いているのは、この記事では、馬鹿が馬鹿にインタビューしているのか、卑怯者が馬鹿にインタビューしているのか、ということです。

日本ではなぜロシア文学が根強い人気を保ち続けていますか。

日本の文化にないものが、ロシアの文化にあり、ロシアの文化にないものが日本文化にある。限りない繊細さを志向する日本文化と、激情的な精神のダイナミズムを体現するロシア文化です。

ドストエフスキー文学の読者は、それらの二つの要素が融合した世界を経験できるのです。ロシア文学の魅力は「ケノーシス」、自己犠牲のテーマです。これこそが、ロシア精神の根源に息づいている最高の価値だと信じています。全体的な力の憧れは、個人の生のはかなさの感覚を裏返したものといえるでしょう。

チュッチェフの詩が思い浮かびます。「ロシアは知恵ではわからない」。言い換えれば、ロシア文学は、精神的ボルテージとインスピレーションの高揚の中でのみ理解できるということだと思います。辻原、村上以外に三島由紀夫、大江健三郎も『カラマーゾフの兄弟』を高いインスピレーションで経験してきた作家といえるでしょう。正に日本文学のエッセンスを体現する作家たちです。

翻訳で難しかったこと、苦労したことは何ですか。

いかに現代人向けの読み物とするかということです。これだけ長い小説に目を向けさせるためには、スピード感あふれる翻訳が大切だと考えました。

私の翻訳者としてのモットーは、映画を見るような感覚でドストエフスキーを読むことができる翻訳をするということです。最後まで読み通してもらうための工夫をすべて試みました。

（同）

最先端＝亀山郁夫さん、いったい、あなたの翻訳のどこに「スピード感」があるんですか？　いったい次の翻訳文のどちらに「スピード感」がありますか？　この箇所では文章上の「スピード感」のみならず、その内容上の「スピード感」でもあなたの見当違いに劣っていますが？

「ぼくが知っているのはひとつ」と、アリョーシャは、あいかわらずほとんどささやくような声で言った。「父を殺したのは、あなたじゃないってことだけです」

「『あなたじゃない』だと！　あなたじゃないとは、どういうことだ？」イワンは、呆然としてたずねた。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　亀山郁夫訳　光文社文庫）

「僕が知っているのは一つだけです」なおもほとんどささやくように、アリョーシャは言った。

「お父さんを殺したのは、あなたじゃありません」

「《あなたじゃない》！　あなたじゃないとは、どういうことだ？」イワンは愕然とした。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

さらに、「私の翻訳者としてのモットーは、映画を見るような感覚でドストエフスキーを読むことができる翻訳をするということです」ですが、そんなことをしてはいけないんですよ。それでいいのは、ドストエフスキーがそういう書きかたをしている場合だけです。翻訳者は読者に合わせて翻訳するのでなく、あくまで原作に合わせて翻訳しなければなりません。ついでに私は読者にもいっておきますが、読者も自分向けの翻訳などを求めてはなりません。読者が翻訳に合わせなければなりません。

翻訳前と翻訳後で何か変わったことはありますか。

『カラマーゾフの兄弟』の翻訳をすることは、ロシア文学を志したものにとっての究極の夢といってよいでしょう。自分なりに全力を尽くしてその義務を果たしました。

東京外国語大学のロシア語学科に入ってくる学生の中にも、すでに『カラマーゾフの兄弟』を読んだ学生が少なくありません。

しかし、ドストエフスキー・ブーム、いや『カラマーゾフの兄弟』ブームが真の実りを結ぶのは、これからと考えています。

例えば、1月から『カラマーゾフの兄弟』がテレビドラマ化されていますが、この番組を企画したディレクターも、この小説の素晴らしさに接した女性でした。

実は、ロシア料理の有名レストランもすさまじい人気なのです。予約をとらなければ、とうてい入れません。

現在私は、北海道大学の望月哲男教授、東京大学の沼野充義教授らとともに、新たに日本ドストエフスキー学会を立ち上げるべく準備を行っているところです。

（「ロシア NOW」 二〇一三年二月十三日
http://roshianow.jp/arts/2013/02/13/41339.html）

まず、「『カラマーゾフの兄弟』の翻訳をすることは、ロシア文学を志したものにとっての究極の夢といってよいでしょう。自分なりに全力を尽くしてその義務を果たしました」ですが、最先端＝亀山郁夫はここで自分が「究極の夢」をかなえた当人であることの宣言でもしているのでしょう。ああ、日本のロシア文学界において、ついに王冠を戴いた私！　ということでしょうか？　それなのに、彼はなぜ自分が「その義務を果たしました」などというんでしょうか？「究極の夢」をなぜ「義務」とつなげるのか？　興味深いところです。ともあれ、その翻訳の実質はお粗末極まりなく、いいかげんのでたらめだらけで、とても『カラマーゾフの兄弟』だとは認められないほどひどい代物なわけです。それなのにこの翻訳は出版され、大いに話題になりました。これほどひどいものが現代日本に堂々とまかり通ることが――最先端＝亀山郁夫お得意のことばにすると――「黙過」ということなのでしょうか？

亀山：そして、ドストエフスキー文学の中の最大のテーマというのは、「黙過」っていうテーマだと思っているんですね。黙過っていうのは、要するに黙って見過ごすこと。誰がどこで何が行われようと、例えばそこでいじめがあろうと、誰かがそこで殺されようとしようが、どんなにかわいそうな人がいても、黙って見過ごしてしまうという。それを黙って見過ごすならばいいけれども、他人の死を願望するというね、そこまで踏み込んだ黙過ってあると思うんですよ。

（「ドストエフスキーより愛をこめて」
――ＮＨＫ「爆笑問題のニッポンの教養」
http://www.nhk.or.jp/bakumon/previous/20091117.html）

先の、最先端＝亀山郁夫の翻訳に対して「厳しい批判」をした「一部」のひとたちというのは、最先端＝亀山郁夫の罪を「黙過」しなかったひとたちなんじゃないですかね？　そうして、世のなかの大部分（「一部」以外）のひとたちは最先端＝亀山郁夫の罪を「黙過」しているということじゃないでしょうか？

ここで、いまの「黙過」を頭に置きながら、最先端＝亀山郁夫がドストエフスキー作品における「罪」についてどういうことをいっていたか、おさらいしておきましょう。

アリョーシャの「あなたじゃない」という言葉は、イワンは法的な意味において裁かれることはない、だから、そう苦しまないでほしい、という意味にとらえることができるように思えます。

（亀山郁夫「新訳『カラマーゾフの兄弟』を読む」 ＮＨＫ出版）

アリョーシャの「あなたじゃない」について、最先端＝亀山郁夫ほどとんちんかんな読み取りをしたひともかつてないだろうと思いますが、べつのところで彼はこんなふうに「罪」について書いていたんでした。

人間は大きな罪を経て、はじめてある世界に到達できるというゾシマ長老の考え方は、現代社会においてはとうてい受け入れがたい、ほとんど不可能に近い信念ではないだろうか。とりわけ競争のはげしい現代社会では、人は、少しでも罪を犯したら終わりであり、命とりとなり、脱落を迫られる。

（亀山郁夫「解題」）

ゾシマ長老がなぜ、こともあろうに「人間は大きな罪を経て、はじめてある世界に到達できる」なんて考えていたといい出せるのか、私は最先端＝亀山郁

夫の思考回路を疑いますが、実はこの点にこそ、彼の本質が隠されているのじゃないでしょうか？　ああ、悪いことをしたい、露見すれば法的に裁かれるような犯罪を犯してみたい、それこそが「ある世界に到達」できる方法であるのだから。というより、「ある世界に到達」できるというのは結局自動的にそうなるわけだから、自分としてはまず何といっても犯罪を犯してみたい。犯してみたくてしようがない。楽しいぞ、楽しいぞ、楽しいぞ。でも、「とりわけ競争のはげしい現代社会では、人は、少しでも罪を犯したら終わりであり、命とりとなり、脱落を迫られる」からなあ。できないなあ。私が最先端＝亀山郁夫を「小さい・せこい・貧しい・薄っぺらい」と評する所以です。

そうして、さらに恥の上塗り、それを相手にする小説家・辻原登との傑作対談。

亀山　『カラマーゾフの兄弟』のゾシマ長老は、一定程度の悪を経験した上で、ひとは初めて浄化されると語っている。『悪霊』には、スタヴローギンという、悪の根源を体現したような人物が出てくる。ドストエフスキー自身も、深く自らの罪を自覚しながら生きた作家だと思うんですね。罪の自覚というのは、ある意味で才能です。

辻原　ドストエフスキーに限らず、人間の悪の部分、特に男の悪の部分というのは暴力性と結びついていて、これが人物を造っていくと思う。男の自己表現のある部分は暴力と切り離せない。それは原始時代からずっとそうで、十九世紀のドストエフスキー、トルストイ、バルザックなどは男の暴力性を、正面から描いている。残念ながら日本の近代小説は、漱石から始まって、そこを除外しながら現代人を描いてきたように思います。そうした男の暴力性について書いたのは、武田泰淳くらいしか思い浮かばない。

亀山　他方、ドストエフスキーは、ライプニッツの予定調和論、ヴォルテールの『カンディード』に語らせると、「この世界においては、あらゆる物事がみな最善の状態である」というオプティミズムの世界観と闘い続けてきた。闘い続けてきたということは、彼の中に、それに対抗するニヒリズムがあったんです。もっとも、ドストエフスキーの場合は、このオプティミズムが、ニヒリズムと地下水脈で繋がっているわけです。たとえば、『悪霊』に登場するキリーロフがそうですし、スタヴローギンなどは、美と醜、善と悪の基準を失った完全な相対論者です。その点で、ドストエフスキーは分裂していたのだと思うわけです。すべての二元論を帳消しにしてしまうような、何か超越的に上から見下ろすような、世界が点景としか見えないような絶対的な高みに立つ一方で、ものすごく生々しいレベルで罪の感覚を持っている。

人間は罪を犯さないことには、どんな喜びもどんな生命も経験できない――それは、『死の家の記録』以降のドストエフスキーがつねに意識していたある究極の発見だったと思うんです。そういったものを経験し尽くした後でなければ、聖性は手に入らない。そういう世界観を持っていたという意味で、ドストエフスキーは徹底した快楽主義者でもあったわけですね。その中で生れてきた思想が、今言った親鸞的な、悪人なおもて往生す、によく似てくる。『冬の旅』にも、それが根本に据えられているので、ドストエフスキーのにおいがぷんぷんと漂ってくるわけです。

ところが、現代の日本に生きる緒方は、ラスコーリニコフ、イワン・カラマーゾフなどと違い、宗教的な意味での救済や、聖性への道を全て断たれている。死刑制度のある・なしが、決定的な意味を帯びてきます。

辻原　はい。

（辻原登・亀山郁夫「対談「主人公」の運命と自由」「すばる」二〇一三年三月号　集英社）

ああ馬鹿馬鹿しい。

こんな最先端＝亀山郁夫とこうやって平気でしゃべっていられる辻原登も最低ですね。中村文則や高村薫などと並んで、こんなひとが小説家なわけです。

さて、辻原登というと、以前にこういう文章を書いていました。

本はやはり本屋に行って買うが、最近少し合点がゆかないことがある。ひとつは「本屋大賞」なるもの。どういう基準かは存ぜぬが、本屋・書店員が本を選んで顕彰する。ふたつは、新聞などの出版広告に書店員が登場して「おすすめ！」と宣伝に一役買う。三つ、店内のあちこちで手製のポップスタンドがキノコのように立ててある。その文章はたいていひどい悪文。確信を持って言うが、書店員がスーパーの店員より本をたくさん読んでいるわけではない。いつ頃からこんな珍妙な光景が現出するようになったのか。

（辻原登「半歩遅れの読書術」　日本経済新聞　二〇〇六年五月七日）

「いつ頃からこんな珍妙な光景が現出するようになったのか」といえば、二〇〇一年の夏以降じゃないですかね。書店員としての私にはよくわかります。最低の辻原登ですが、右の文章にだけは、私は完全に同意します。とはいえ、「確信を持って言」いますが、最先端＝亀山郁夫と対談するだけでなく、最先端＝亀山郁夫の珍妙な発言にまったく異議をはさまずにいられるような「馬鹿」だか「卑怯者」だかの辻原登にそんなことをいう資格はないですね。辻原登が「スーパーの店員より本をたくさん読んでいるわけではない」ってことです。「スーパーの店員」に失礼でもあります。また、「たくさん読」めばいいってことでもないです。辻原登程度の読書なら、どんなに「たくさん読」んだって無駄なだけですね。もし辻原登がちゃんとした読書をしているのなら、最先端＝亀山郁夫と対談などしないし、対談しても、きちんと最先端＝亀山郁夫の妙ちきりんなところを指摘して、批判したはずです。それができない。ひどいものです。

話がそれますが、これも引用しておきましょう。辻原登にはいう資格のなかったことを、資格のある保坂和志がしゃべっています。

――保坂さんは月にどれぐらい、本を読まれていますか？

保坂和志氏：今はほとんど読んでいないですね。通して読むのなんて、月に2冊とかそんなものです。だいたい読みかけてやめちゃうので。

――本を買われるときは、普通に書店へ出向くのでしょうか？

保坂和志氏：今、ほとんどAmazonですよ。配送料もタダだしね。リアルな書店に行くと、くだらない本がいっぱい並んでいるでしょう。頭にきてね（笑）。何を買いに来たか忘れちゃうんですよ。なんでこんなものが置いてあるんだよって。今、書店員が「この本」ってお薦めするでしょう。書店員がそういうことをするようになったのは、ここ10年ちょっとのことです。それまではね、評論家、次に編集者、それで書店員が薦めた。だんだんハードルが低くなっているわけ。なぜ今、書店員のお薦めが中心になったかと言うと、少し前に「カリスマ書店員」がいたからなんですよ。

――カリスマ書店員とはどういう方ですか？

保坂和志氏：＊＊＊にある＊＊＊って書店の木下和郎さんという人ね。その人が薦めてポップを建（原文ママ）てた『白い犬とワルツを』（新潮社）が、大ベストセラーになって、それで書店員という存在がクローズアップされた。その木下さんが2個目に薦めたのが、僕の『プレーンソング』だった。でも、ブレークしなかった（笑）。

――その木下さんという人が、今は普通に見かける「書店員のお勧め」のポップの先駆けだったんですか？

保坂和志氏：あの人がいなかったら、今のようにはならなかった。本のよしあしがわかる人が、書店員にも編集者にも実際に何人かいたけど、今は、本を知らない書店員であっても薦めている。そんなのに全く価値はないんだよ。書店では、ばかみたいに売れる作家がいると、ほかの作家を追い出すんですよ。いい作品が出たとしてもね。それは新しい小説家が出るためには弊害になると思います。

（BOOKSCAN × 著者インタビュー

http://www.bookscan.co.jp/interview2/084/3/#body)

私は完全に同意します。このブログ「連絡船」は、そもそも最初にこの問題を扱っていたんでした。

――と、だいぶ話がそれました。

本題に戻りますよ。

聞き捨てならないのは、

現在私は、北海道大学の望月哲男教授、東京大学の沼野充義教授らとともに、新たに日本ドストエフスキー学会を立ち上げるべく準備を行っているところです。

（同）

――ですね。「日本ドストエフスキー学会」とやらが、最先端＝亀山郁夫によるいいかげんのでたらめだらけの翻訳による「人気」やら「ブーム」やらの上に発足することの意味を、沼野充義と望月哲男とは考えた方がいいと思いますが、このふたりのうち、沼野充義はもちろん何もかも承知の上です。確信犯＝沼野充義はともあれ、望月哲男の方はまだここで引き返すことも可能なのじゃなかろうか、と私は思いますが、どうでしょう？　やっぱりどうしようもないんでしょうか？　望月哲男もまた、私が「こんな大人にはなりたくない」という人間なんでしょうか？

次――もういいかげん、うんざりしてきました。

これからロシア長編文学（ドストエフスキー、トルストイ）を読んでみようと思っている若い人へのアドバイスをいただけますか。

ロシアの歴史をしっかり学び直してほしい。幸薄いロシア民衆の傍らで、若い知識人がいかに引き裂かれ、苦しんだかを知ってほしい。

（同）

同じ質問に私が回答すると、こうなります。

これからロシア長編文学（ドストエフスキー、トルストイ）を読んでみようと思っている若い人へのアドバイスをいただけますか。

絶対に最先端＝亀山郁夫訳では読まないこと。また「ウンコはカレーではない」といいきる「勇気や信念」をもって読書をすること。

いや、本当にうんざりしてきたので、後はテキトーに引用して切り上げることにします。

文学を中心に現在のロシアの状況をどう感じていますか。

おそらく世界の文学の中で、今、日本で最も人気の高いのがロシア文学だと思います。10年前と比較して驚くべき事態です。ワシーリー・グロスマンの『人生と運命』の翻訳（斉藤鉱一訳）が出版され、日本翻訳文化賞を受賞しました。

また、最近の日本で話題になった作家は、ボリス・アクーニン、リュドミラ・ウリツカヤ、ウラジーミル・ソローキンです。ウリツカヤの短編集『女が嘘をつくとき』とソローキンの『青脂』の翻訳は特に高い評価を受けました。

他方、ロシアの美術、映画などは最近、あまり話題になりません。ロシア・アバンギャルド、ソッツアートに対する関心は、総じて低下しています。

日本におけるロシア文学者、ロシア語学習者の現状はどうなっています

か。

日本におけるロシア文学研究のレベルは極めて高いと認識しています。しかし、若い研究者は、ほとんど大学での職を得ることができず、苦境を強いられています。

大学で、ロシア語を学ぶ学生が少ないのが原因です。グローバル化の流れのなかで、受験生の関心がますます英語に向かっており、英語以外の言語は人気がありません。

ところが、07年以降、徐々に人気回復が進んでいることも事実であり、転機の兆候がうかがわれます。ロシア文学ブームの到来と軌を一にしているといってよいと思います。

いかにしてロシア語熱を盛り上げるかはほとんど政治、外交レベルに託されています。日露間の領土問題が、互いのぎりぎりの歩み寄りのなかで解決され、両国間で平和条約が締結されるならば、日本人のロシア語熱、投資熱は飛躍的に拡大することでしょう。

（同）

最先端＝亀山郁夫みたいなのが牽引しているような日本のロシア文学界のこの腐りようはどうしようもありません。

（二〇一三年六月三日・二〇一四年四月いくらか加筆）

「名訳」だそうです。松岡正剛の読解力では。

（この章は昨二〇一三年十二月七日に書き上げていたものです）

私は以前にこう書きました。

あなたの周りに亀山訳『カラマーゾフの兄弟』を読んだというひとがいたとしますね。そのひとが読んだものは、実は『カラマーゾフの兄弟』ではないのだと私はいいます。

そのひとが、原卓也訳では読むのを挫折した経験があって、それに比べて亀山訳が読みやすかったなどといっているとしたら、そのひとの日本語力を疑ってかまいません。

そのひとが亀山訳しか読んでおらず、しかも彼の「解題」にも助けられたというのなら、あなたは、もうただそのひとの不幸を憐れんでください。

そのひとが原卓也訳を読んでいて、しかも亀山郁夫による「解題」を読んで、理解が深まったなどといっているようなら、もうあなたはそのひとを見捨ててください。原卓也訳をふつうに読んで感動したひとであるなら、亀山郁夫の「解題」に必ず仰天するはずです。

松岡正剛が原卓也訳を読んでいるかどうか知りません。彼が以前に読んだのは米川正夫訳です。私は米川訳を読んでいませんが、最先端＝亀山郁夫訳を視野に入れるなら、右の私の文章は、「原卓也」を「米川正夫」に置き換えてもいっこうにかまいません。なぜこんなことがいえるかというと、最先端＝亀山郁夫訳のような異常な翻訳（突出したひどさ・いいかげんさ・でたらめさ等々）を他に考えることができないからです。そうして、私はこういうことをあなたに告げようと思います。あなたは松岡正剛を見捨ててください。米川正夫訳をふつうに読んで感動したひとであるなら、亀山郁夫の「解題」に必ず仰天する

はずです。

亀山郁夫訳の『カラマーゾフの兄弟』は凄い

《脅されても読むべき神と人をめぐる大作》

ふつう、誰かに脅されて本を読むことはないが、ぼくは高校の親友から脅されて読んだ本があった。「おまえ、大審問官も知らないのか。カラマーゾフだよ」「知らない」「だったら読むまでは、おまえとはつきあえないな」

ドストエフスキーは『罪と罰』しか読んでいなかった。けれども大好きな親友だったので、脅迫まがいではあっても読まないわけにはいかない。かくて数カ月、うんうん唸りながら「大審問官って何なのか」と思いつつ大作を読んだ。脳天を割られるほど驚嘆した。

この大作は、カラマーゾフ家の父と3人の息子たちの極限的な葛藤劇だ。父親フョードルは旧ロシアを代表する地主で、好色で老獪で強欲、そのくせヴォルテール流の啓蒙思想にかぶれ、横柄な無神論を信条にしている。この強靭な父のもと物語が分岐する。

長男ドミートリーは軍隊帰りで、巨大なものなら何でも呑みこみたいという独特の無神論者。人使いも金遣いも荒いのだが、なぜか無垢な女性にはめっぽう弱い。

次男イワンは神秘など認めない知性派で、その獰猛な理性は、ドストエフスキーが入念にヨーロッパ知性に対抗してつくりあげたスラブ的理性を代表する。『罪と罰』のラスコーリニコフや『悪霊』のスタヴローギンに通じる。

三男アリョーシャは敬虔な修道僧で、未来を抱擁したいと願う純真派。少女リーザが憧れる。『白痴』のムイシュキンに通ずる「無力・無垢」の象徴的人格である。

この異様なカラマーゾフ家に悲劇がおこる。父親フョードルが殺されるのだ。なぜ殺されたのか、だれが殺したのか、わからない。こうして物語は未曾有のサスペンスに満ちたまま劇的に進行するのだが、途中、イワンが書いた恐るべき戯曲《大審問官》をアリョーシャに読み聞かせる場面が挿入される。親友がぼくに「大審問官も知らないのか」と詰ったのはこれだ。神は正しいのか、人を赦す力などもっているのか、キリストは何をしたのかという究極の問いが込められていた。

感銘したなんてものじゃない。やはり脅されても読むべき本だった。最近は亀山郁夫の名訳でどきどきしながら読めるし、ぼくはまだ見ていないのだが、舞台を日本に移したテレビドラマも始まった。

（「亀山郁夫訳の『カラマーゾフの兄弟』は凄い」
http://www.iza.ne.jp/news/newsarticle/books/breview/629568/）

さて、「数カ月、うんうん唸りながら「大審問官って何なのか」と思いつつ大作を読んだ。脳天を割られるほど驚嘆した」というのは、高校生当時の松岡正剛ですよね。いったい、このひとはその後『カラマーゾフの兄弟』を読み返したことがあるんでしょうか？　ないんじゃないでしょうか、ごく最近に最先端＝亀山郁夫訳を手に取るまでは。そうして、その最近の読書でも、高校生当時の読書をそのまま反芻した――高校生当時の感想を思い出すためにだけに駆け足で読んだ――に過ぎず、現在の自分の年齢相応な読書をせず、新たな何も読み取らなかったのじゃないですか。それに、私はいいますが、高校生が『カラマーゾフの兄弟』をどんなふうに読むのか、私にはわかります。そうして、それでは全然足りないんですよ。現役高校生ですでにこの作品を読んで感動しているひとには申し訳ないけれど、そのひとは、この先ずっと繰り返し読みつつ年を取っていってください。十年後か、二十年後か、三十年後には、ここで私のいっていることがわかるだろうと思います。そういうわけで、松岡正剛は『カラマーゾフの兄弟』を誰彼に薦めるに足る読書をしていません。「感銘したなんてものじゃない」なんていってますが、このひとには「大審問官」の意味がわかっていないと思いますよ。こういうひとはもう黙ったらいい。それに、「イワンが書いた恐るべき戯曲《大審問官》をアリョーシャに読み聞かせる場面」って、

イワンは「大審問官」の原稿の紙束でも手にしながら、「読み聞かせ」たんですか？

「兄さんが叙事詩を書いたんですか？」

「いや、書いたわけじゃないよ」イワンは笑いだした。「それに俺は生れてこの方、一度だって二行の詩さえ作ったことはないからな。でも、この叙事詩は頭の中で考えついて、おぼえてしまったんだ。熱心に考えたもんさ。お前が最初の読者、つまり聞き手になるわけだ。実際、作者としてはたとえたった一人の聞き手でも、失う法はないものな」イワンは苦笑した。「話そうか、どうしようか？」

「大いに聞きたいですね」アリョーシャが言った。

「俺の叙事詩は『大審問官』という表題でね。下らぬ作品だけど、お前にはぜひきかせたいんだよ」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

最先端＝亀山郁夫訳を「どきどきしながら読める」「名訳」だといい切ってしまった松岡正剛、さらに、最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』全五巻を一冊ずつ紹介していきます。恥の上塗り。

□□□

【ＫＥＹ　ＢＯＯＫ】「カラマーゾフの兄弟（1）」（ドストエフスキー著／光文社古典新訳文庫、７６０円）

作品は4部とエピローグで構成されているのだが、冒頭から物語の前兆的な重圧がのしかかる。事件もおこる。それが主要にはたった3日間の出来事なのだ。第1巻では、父親と3兄弟が抱えるカラマーゾフ家の宿命的な難題が何なのかが饒舌と暗示の中で次々に提示されていくところが読みどころ。下男スメルジャコフをはじめとする脇役も怪しい。

□□□

【ＫＥＹ　ＢＯＯＫ】「カラマーゾフの兄弟（2）」（ドストエフスキー著／光文社古典新訳文庫、８２０円）

家族にひそむ葛藤から脱出するべく、一家揃って長老ゾシマを訪ねるのだが、国家と信仰の矛盾と乖離の謎にぶつかり、神の存在をめぐる不安が迫ってきてこの壁をまともに受けたアリョーシャの煩悶を中心に物語が進む。そこへイワンから「大審問官」の話がもたらされ、物語そのものが名状しがたい複雑な煩悶に突入していく。

□□□

【ＫＥＹ　ＢＯＯＫ】「カラマーゾフの兄弟（3）」（ドストエフスキー著／光文社古典新訳文庫、８８０円）

ついに父親が殺され、長老ゾシマも死ぬ。裁判も始まる。しかし、事件の背後の意味が明かされない。作者も読み手もこのあたりから必死だ。イワンの精神は錯乱の直前に達する。これはドストエフスキーの最後の作品なのだ。実は作者の父親も殺されていた。ここにはドストエフスキーの生涯のすべてが投入されていたわけだ。

□□□

【ＫＥＹ　ＢＯＯＫ】「カラマーゾフの兄弟（4）」（ドストエフスキー著／光文社古典新訳文庫、１０８０円）

スメルジャコフが自殺した。ドミートリーが父殺しの犯人にされ、流刑の判定が下るのだが、真相はわからない。ドストエフスキーの流刑体験がここにほとばしる。物語は大団円に向かっているようでいて、複合的な奈落を巻き込んで、いっそう深みに降りていくようにも読める。脇役を含めたすべての登場人物がことごとく自分の分身にも見えてくる。

□□□

【ＫＥＹ　ＢＯＯＫ】「カラマーゾフの兄弟（5）」（ドストエフスキー著／光文社古典新訳文庫、６６０円）

第5巻ではエピローグと亀山郁夫の懇切な解説が読める。『カラマーゾフ』についてはこれまでさんざん議論が出尽くしたようだし、ミハエル・バフチンのポリフォニックな読み方など絶品に思われていたのだが、亀

山の解読を読むとさらに多読の可能性があることを知らされる。すでに読んだことのある読者は、この第5巻だけでも目を通すといい。

（「亀山郁夫訳の『カラマーゾフの兄弟』は凄い」
http://www.iza.ne.jp/news/newsarticle/books/breview/629568/）

ひどいね、こりゃ。まずいっておくと、松岡正剛の「『カラマーゾフ』についてはこれまでさんざん議論が出尽くしたようだし、ミハエル・バフチンのポリフォニックな読み方など絶品に思われていた」というのは彼自身にとってそうだということなんですよね？　これがわからない。一般的にはこうだ、なのか、松岡正剛自身にはこうだ、なのか、ということです。この区別をきちんとつけてもらわないと困ります。まあ、いいでしょう。私はこれを後者と受け取ります。というわけで、松岡正剛には「ミハエル・バフチンのポリフォニックな読み方など絶品に思われていた」らしいですが、ろくに『カラマーゾフの兄弟』も理解せずに、どうしてバフチンの「ポリフォニックな読み方」がこのひとには「絶品」でありえたのか？　そのうえ、「亀山の解読を読むとさらに多読の可能性があることを知らされる」って、何だ、こりゃ？　最先端＝亀山郁夫がバフチンをまったく理解していないことは明白なんですが、松岡正剛にはこんなことすらわかりません。つまり、松岡正剛にはバフチンの「ポリフォニックな読み方」が理解できていないということでもあります。それを「絶品」だなんて、どの口がいうのか？　松岡正剛、でたらめばかりです。ここまで私は「馬鹿なのか、卑怯者なのか」という基準でいろいろしゃべってきましたが、松岡正剛ははっきり「馬鹿」です。松岡正剛にはアリョーシャの「あなたじゃない」がまるっきり理解できていません。「すでに読んだことのある読者は、この第5巻だけでも目を通すといい」って、もう笑うしかありません。私のこの最先端＝亀山郁夫批判の根拠がほぼこの「第5巻」の「懇切な解説」なんですから。松岡正剛は、私のここまでの批判全文を熟読したらいいと思います。

そんな松岡正剛ですが、「松岡正剛の千夜千冊」（http://1000ya.isis.ne.jp/）のひとですよね。私はちらっとしか読んだことがありませんが。そうして、Wikipedia によれば、

二〇〇〇年（平成十二年）二月から書評サイト「千夜千冊」の執筆を開始。同じ著者の本は二冊以上取り上げない、同じジャンルは続けない、最新の書物も取り上げる、などのルールを自らに課し、時に自身のエピソードやリアルタイムな出来事も織り交ぜた文体は、話題を呼んだ。第一夜は中谷宇吉郎『雪』。二〇〇四年（平成十六年）七月に良寛『良寛全集』で〝一〇〇〇夜〟を達成した。

（http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%BE%E5%B2%A1%E6%AD%A3%E5%89%9B）

さらに、私の印象に残っているのは「松丸本舗」で、

二〇〇九年（平成二十一年）十月には、丸善丸の内本店に、松岡正剛プロデュースによる松丸本舗をオープン。ショップ・イン・ショップという形態、松岡をはじめとする著名人の書斎を再現した本棚など、その斬新な店舗づくりが話題を呼んだ（実験店舗としての三年間の役割を終え、松丸本舗は二〇一二年の九月末をもって閉店。その詳細は、『松岡正剛の書棚：松丸本舗の挑戦』（中央公論新社）、『松丸本舗主義：奇蹟の本屋、三年間の挑戦。』（青幻舎）で明かされている）。二〇一一年（平成二十三年）には、イシス編集学校の有志とともに体系化した知のカテゴリーである「目次録」を公開し、それをもとに新たなコンセプトによる書籍探索エンジン「システム目次録」を開発。書物という情報単位から意味をとり出し、システムに応用した、連想検索の仕組みを研究し続けている。

（同）

やれやれ。「松丸本舗」って、こんな「馬鹿」がやっていたものだったのか。「丸善丸の内本店」のおめでたさが悲しいですね。

いいですか。私はこのブログ「連絡船」で、とっくに警告していました。

現在、ネット上で非常に多くの書評・感想の類が書かれているはずですが、しかし、私が検索してみると、私の考える「多数のひとには知られていない・知られていても読まれてはいない、というもののうちに（ある）、しかし「よい」という作品」も「多くの読書家にとってあまりにも基本的であるはずの作品」も意外にヒットしないんです。検索のしかたが下手なのかもしれませんが、私程度のやりかたで簡単に見つけられないのは、やはり問題じゃないでしょうか？

それらがかろうじて扱われていたとしても、教科書的な、なにかの引き写しのようなものでしかなかったり、書き手本人だけ・小さい仲間うちだけに通じるような書きかたでしかなかったり、あるいは、あまりにも読者としての自分を卑下しているせいなのか、頼りない・自信のない表現だけでしかなかったり、逆に書き手のあまりにも頭のよすぎるためか、単に自明の情報・知識のひとつとしてしか問題にしない――書き手の情報の処理のしかたが「うまく」て、彼の頭のよさをひけらかす結果にしかならない（これが非常に問題で、こういうタイプのひとは何も伝えないんです。敢えて愚鈍を選択しなくてはならない、愚鈍を恐れちゃいけないんですよ。それにもかかわらず、そのこのタイプのひとの頭のよさそうなものいいに感心してわかったつもりになる読み手もかなりの数になるでしょう）――書きかたであったりするために、まともにこれからその作品に触れようとするひとには非常に不親切な記述ばかりだと感じるんですね。

右の文章のうち、

逆に書き手のあまりにも頭のよすぎるためか、単に自明の情報・知識のひとつとしてしか問題にしない――書き手の情報の処理のしかたが「うまく」て、彼の頭のよさをひけらかす結果にしかならない（これが非常に問題で、こういうタイプのひとは何も伝えないんです。敢えて愚鈍を選択しなくてはならない、愚鈍を恐れちゃいけないんですよ。それにもかかわらず、そのこのタイプのひとの頭のよさそうなものいいに感心してわかったつもりになる読み手もかなりの数になるでしょう）――書きかたであったりするために、まともにこれからその作品に触れようとするひとには非常に不親切な記述ばかりだと感じるんですね。

――の「あまりにも頭のよすぎる」「書き手」のひとりが松岡正剛です。まさか疑問に思ったりしないと思いますが、私は右の文章で「あまりにも頭のよすぎる」を皮肉ってそう書いたわけで、これは、一見頭のよさそうに見えつつ、実は単にある種の「情報処理」にだけ長けているというに過ぎない、そういうひとのことをいっていて、つまり、それは「馬鹿」に等しいです。そうして、現在の私はその「あまりにも頭のよすぎる」「書き手」が、なぜそうなのか――右の文章を書いたときには、はっきりわかってはいませんでした――をここではっきりということができます。「あまりにも頭のよすぎる」「書き手」には「勇気や信念」が決定的に欠けているんです。

松岡正剛ってひとは単に上っ面の知識を豊富に収集し、上っ面で「情報処理」しているだけです。個々の知識を自分自身の「人間」に照らして評価せず、それらを単に一見頭のよい上っ面の小細工で振り回して見せ、ものを考えないひとびとを「すごいね、すごいね」と感心させる類の、くだらないことの名人であるだけです。このひとには「人間」としての「勇気や信念」など馬鹿馬鹿しいでしょう。もし彼に「人間」としての「勇気や信念」があるなら、一五〇〇冊以上（いや、もっとですか？）の書評などできませんから。

こんなひとのくだらない「読書量」なんかに騙されちゃいけません。多読や速読なんかには何の意味もない。無駄、無駄、無駄です。この世のなかからこんな松岡正剛的読書が消え失せますように。私は心から祈ります。

（二〇一三年十二月七日）

卑怯者＝野崎歓の醜悪

先の松岡正剛が「馬鹿」であるなら、こちらの野崎歓は「卑怯者」で、その文章は醜悪の極みです。信じられないくらいです。もちろん、この野崎歓はあの野崎歓――例の『赤と黒』の翻訳者です。

光文社古典新訳文庫から野崎歓訳で『赤と黒』の新訳が出た（上巻二〇〇七年九月、下巻同年十二月刊）。結論を先に述べると、前代未聞の欠陥翻訳で、日本におけるスタンダール受容史・研究史に載せることも憚られる駄本である。仏文学関係の出版物でこれほど誤訳の多い翻訳を見たことがない。訳し忘れ、改行の無視、原文にない改行、簡単な名詞の誤りといった、不注意による単純ミスから、単語・成句の意味の誤解、時制の理解不足によるものまで誤訳の種類も多種多様であり、まるで誤訳博覧会である。それだけではない。訳文の日本語も、漢字の間違い、成句的表現の誤り、慣用から外れた不自然な語法等様々な誤りが無数にある。フランス語学習者には仏文和訳の、日本語学習者には日本語作文の間違い集として使えよう。しかし、不思議なことに野崎訳を批判する声がどこからも聞こえてこない。駄本の批判もスタンダール研究者の責務の一つと考えここで俎上に載せる次第である。

（下川茂「『赤と黒』新訳について」「会報」第十八号
http://www.geocities.jp/info_sjes/newpage3.html）

この野崎歓が最先端＝亀山郁夫の『偏愛記　ドストエフスキーをめぐる旅』（新潮文庫　二〇一三年五月刊）の「解説」を書いたんですね。素晴らしい人選です。野崎歓、まさにうってつけです。

で、この『偏愛記　ドストエフスキーをめぐる旅』というのは、『ドストエフスキーとの59の旅』（日本経済新聞出版社　二〇一〇年）の文庫化なんですね。これを思い出します。中村文則と最先端＝亀山郁夫との対談です。

中村　亀山さんの新訳は読みやすい翻訳といわれているけれども、当然ながら読みやすさだけでなくリズムがあって、リズムから熱が生まれてくる印象がありました。僕はロシア語が全然わからないですが、この熱は恐らくドストエフスキーそのものの熱なのではないかと感じました。本当にすばらしいお仕事です。相当な労力ですよね。そのことが最新刊『ドストエフスキーとの59の旅』にもたくさん書いてありました。すごく興味深かったです。亀山さんのこれまでのドストエフスキー研究の成果も書かれていますし、人生の洞察や知への思いとか、様々に深くて人と文学のかかわりにしみじみ感じ入りました。

亀山　どうしよう。今日は僕のほうが聞きたいことが山ほどあるのに（笑）。

（「「悪」とドストエフスキー」「群像」二〇一〇年十月号）

中村文則、このひとは全然駄目です。こういうドストエフスキー好きは相当数います。私には、ドストエフスキー好きを名乗るひとがなぜ最先端＝亀山郁夫のでたらめにすぐ反応できないのかが不思議でしょうがありません。「馬鹿」なのか、「卑怯者」なのか？　ともあれ、「勇気や信念」が決定的に欠けていることは確かで、マス・メディアに顔を出す人間がこんな体たらくではいけません。あ、いい忘れていましたが、私はこの『偏愛記　ドストエフスキーをめぐる旅』＝『ドストエフスキーとの59の旅』の最先端＝亀山郁夫の文章なんか読んでいません。私はただ野崎歓の文章を批判するためだけにこの文庫を購入したんです。

さて、では野崎歓の文章です（もういいかげんうんざりしてきたので、全文の引用はしません）。

文学の翻訳とは、外国語で書かれた作品を自国語で読めるようにするというだけの作業ではない。ときにそれは時空の隔たりを超えて、原著にみずみずしい生命を吹き込み、若さを取り戻させる手段ともなる。亀山さんが『カラマーゾフの兄弟』を皮切りに推し進めているドストエフスキー新訳の仕事は、まさしくそうした、蘇りの術の実践そのものである。

（野崎歓「解説」　亀山郁夫『偏愛記』新潮文庫）

野崎歓は「文学の翻訳とは、外国語で書かれた作品を自国語で読めるようにするというだけの作業ではない。ときにそれは時空の隔たりを超えて、原著にみずみずしい生命を吹き込み、若さを取り戻させる手段ともなる」を自分自身の翻訳についても語っているんでしょうか？　当然そうですよね。でも、「ときにそれは原著にみずみずしい生命を吹き込み、若さを取り戻させる手段ともなる」だから、そういう類の翻訳もあって、自分のはそうではないのかな？　私が思うのは、こういうことを書くのなら、自分の翻訳がそうであるのかないのか、自分の翻訳にもそういうことがままある、あるいは、そういう翻訳が自分にもできたらいいな、などを書くか、あるいは、読み手にそれらの問いをまったく起こさせないだけの書きかたをするか、でなくてはならないのじゃないかということです。かりにここで、自分の翻訳も「原著にみずみずしい生命を吹き込み、若さを取り戻させる手段」である（なにせ「古典新訳文庫」の翻訳者だから）ということにすると、面白いのは、「亀山さんが『カラマーゾフの兄弟』を皮切りに推し進めているドストエフスキー新訳の仕事は、まさしくそうした、蘇りの術の実践そのものである」というのが、いかにいいかげんのでたらめだらけであるかの証言ともなるわけです。つまり、俺たち、いいかげんのでたらめだらけの翻訳をしてるけど、これって「時空の隔たりを超えて、原著にみずみずしい生命を吹き込み、若さを取り戻させる手段」だよね？　ってことです。

まあ、そんなことはどうでもいいです。

次。

古典としてあがめられながら遠ざけられがちだった作品が、亀山さん

の日本語によって新たな表情を帯び、そのいきいきした魅力が百万人を超える読者たちを引きつけた。十九世紀ロシアの小説が、二十一世紀日本の現在を生きるわれわれにとってアクチュアルな意義をもつことが俄然、明確になったのだ。高野史緒の『カラマーゾフの妹』や、伊藤計劃・円城塔の『屍者の帝国』といった話題作が登場し、さらには『カラマーゾフの兄弟』がテレビドラマ化されるなど、亀山訳からの刺激をきっかけとして新たな創作が続々と企てられている。一個人の訳業がこれほどめざましい反響を引き起こした例は、近年ほかにないだろう。

（同）

野崎歓、いいましたよ、「古典としてあがめられながら遠ざけられがちだった作品が、亀山さんの日本語によって新たな表情を帯び、そのいきいきした魅力が」って。「亀山さんの日本語」っていうのがどういうものか、ちゃんと理解しているのか？　もうこれだけで野崎歓の日本語のセンスがいかにひどいものかがわかります。というより、野崎歓にはここで自分が口にしている日本語表現のことなんか、全然興味がないんでしょう。野崎歓にとってそんなことより重要なのは理由より結果です。理由は結果からの後付けです。つまり「百万人を超える読者たちを引きつけた」ということが最も重要で、「百万人を超える読者たちを引きつけた」からには「亀山さんの日本語」に「魅力」があったからに違いないというわけです。こうやって、「売れた」ことを逆手にとって、どんなでたらめも正当化できるという論法を野崎歓は用いているんです。いいですか、「売れた」からといって、その作品が「よい」ということにはなりません。むしろふつうは「悪い」ものこそが「売れ」るんです。ということは、世のなかの本の購買者たちの大部分の読書が「悪い」ということを私はいっています。こういうことをいうと、すぐに怒るひとたちがいるのは承知していますが、事実だからしかたがないです（私は書店員ですが、それが事実であることを知っていて、なおかつ、それを口にします）。それよりも、野崎歓のこのレトリックが嘘の上に成り立っていることに触れておきましょう。野崎歓、「百万人を超える読者たちを引きつけた」って、でたらめを書いちゃいけません。あのね、最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』を仰々しく飾る「百万」っていう宣伝フレーズは、全五巻の総刷り部数が「百万」を超えたということなんですよ。もし野崎歓のいう通り「百万人を超える読者たちを引きつけた」なら、この本の総刷り部数は五百万部を超えていなくてはなりません。それくらい確認してからこの文章を書いたらよかったんじゃないですか？

「十九世紀ロシアの小説が、二十一世紀日本の現在を生きるわれわれにとってアクチュアルな意義をもつことが俄然、明確になったのだ」って、最先端＝亀山郁夫のいいかげんのでたらめだらけの翻訳を待つまでもなく、新潮文庫の『カラマーゾフの兄弟』（原卓也訳）は十分に売れていましたよ。最先端＝亀山郁夫訳はちょうどその流れにうまく乗っかっただけのことです。でも、野崎歓には最先端＝亀山郁夫訳が突然奇跡を起こしたというストーリーを事実だというふうにすればするほど好都合なんですよ。「高野史緒の『カラマーゾフの妹』や、伊藤計劃・円城塔の『屍者の帝国』といった話題作が登場し、さらには『カラマーゾフの兄弟』がテレビドラマ化されるなど、亀山訳からの刺激をきっかけとして新たな創作が続々と企てられている」という事実を並べ、自分自身のそれらへの評価を口にせず、「一個人の訳業がこれほどめざましい反響を引き起こした例は、近年ほかにないだろう」というんです。「一個人の訳業がこれほどめざましい反響を引き起こした例は、近年ほかにないだろう」と読者に思ってもらえばいいわけです。野崎歓は、一見事実だと思えてしまうことだけを口にしているわけです。その内実に触れる気はさらさらありません。

あのね、いっておきますよ。最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』はいいかげんのでたらめだらけの訳で、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』とは似て非なるもの、はっきりいえば偽物なんです。ところが、卑怯者＝沼野充義を（おそらく）頂点に、これが「本物」として喧伝されてしまったんです。それゆえ、「一個人の訳業がこれほどめざましい反響を引き起こした例は、近年ほかにないだろう」なんてことは、とんでもない罪悪なんですよ。いまだに、「批判はあるけれど、亀山訳とか亀山解説は素晴らしい」なんてことをいう呆れた

ひとが後を絶ちません。惨憺たる有様です。

そうして、野崎歓、こう書きます。

亀山さんのドストエフスキー翻訳、および研究の際立った特徴は、アカデミックな冷静さをほとんどかなぐり捨てるような勢いで、作家の核心に踏み込むと同時に、そこに自分自身の人生の謎を解く鍵を探り当てようとするところにある。その果敢な探求において、テクストと現実、実作と研究のあいだは壁で隔てておかなければならないといった小心な発想はあっさりと廃棄されてしまうのだ。もちろん、それぞれの訳書に付された解説・注釈や、重量級の著作の数々は、時代背景に周到に留意し、先行する研究を十分に踏まえたうえで書きあげられた、堂々たる専門的成果であるに違いない。だが同時に、それがいわゆる作家研究の狭苦しい領域におさまらない、過剰なほどの熱量をたたえた「作品」になっていることは明らかだろう。だからこそ、亀山さんのドストエフスキー学は門外漢のあいだにもこれほど支持を広げていったのである。大学かいわいでは文学研究衰退を嘆く声ばかり聞こえる中、亀山さんは閉塞を突き抜けるあまりに鮮やかな例を示してくれたのだ。

同時にそれは、研究者自身のよって立つ足場を揺るがしかねない危険な道でもある。本書を夢中で読みながら、よほどの知力と体力を備えた者でないかぎり、こんな冒険の日々を生き抜くことはできないと思わされる。しかも、こうしてぎりぎりの地点で対峙するのでないかぎり、ドストエフスキーについて実のある議論などありえないだろうとも思えてくる。小説家は、自らの「根源」をひたすら隠すかに見えて、それを作中に描き込まずにはいない。解釈者、翻訳者にとっては、それが魅力的な罠となる。彼は「いわく言いがたい悪」の予感におののき、かつ励まされつつ、どこまでも深入りしていくほかはない。

しかも真のドストエフスキーに出会ったと思えたそのとき、作家の顔は亀山さん自身の顔に入れ替わっていた――そんな奇怪なドラマもまた、本書のはしばしに垣間見ることができる。心優しい亀山さんが〈何十年も前に殺した人間の血を口にする〉などというおぞましい夢を見るにいたるまで、ドストエフスキーの暗黒は深く研究者を侵し続けた。とはいえ、亀山さんの議論の中核的な概念のひとつである「刺嗾」の語は、まさに作家と研究者のあいだにはたらく力関係そのものを指し示してもいるのではないか。つまりドストエフスキーが亀山さんを唆すと同時に、亀山さんもドストエフスキーを唆す。そうやって両者はたえず立場を入れ替えながら、果てることのないバトルを繰り広げているのだ。亀山さんの数々の著作は、その現場からのなまなましい報告にほかならない。

（同）

あのさあ、「亀山さんのドストエフスキー翻訳、および研究の際立った特徴は、アカデミックな冷静さをほとんどかなぐり捨てるような勢いで、作家の核心に踏み込むと同時に、そこに自分自身の人生の謎を解く鍵を探り当てようとするところにある」って何だ？　最先端＝亀山郁夫の「ドストエフスキー翻訳、および研究」は「アカデミックな冷静さをほとんどかなぐり捨てるような勢い」ではあるけれど、「勢い」があるだけで、「アカデミックな冷静さ」を保ってはいるってことですか？　もう一度お訊ねしますが、「アカデミックな冷静さ」は保たれていると思っていいのかな、野崎歓さん？　それよりも、最先端＝亀山郁夫には最初からほんのわずかでも「アカデミックな冷静さ」なんてものはないだろうと私は思いますが、次に行きましょう。「作家の核心に踏み込むと同時に、そこに自分自身の人生の謎を解く鍵を探り当てようとするところ」って何だ？　最先端＝亀山郁夫のでたらめだらけの「小さい・せこい・貧しい・薄っぺらな」読解のどこが「作家の核心に踏み込」んでいるんですかね？　野崎歓さん、そう書いたからには、詳細に説明してみなさいよ！　何が「その果敢な探求」ですかね？　これって、最先端＝亀山郁夫のでたらめぶりをどうにか糊塗して何とか無理やり褒めようとすると、そんなふうにいうしかないってことですよね？

「テクストと現実、実作と研究のあいだは壁で隔てておかなければならないといった小心な発想」って、もう笑いが止まらないよ！　自分で何をいっているのか、わかっていますか、野崎歓さん？「もちろん、それぞれの訳書に付された解説・注釈や、重量級の著作の数々は、時代背景に周到に留意し、先行する研究を十分に踏まえたうえで書きあげられた、堂々たる専門的成果であるに違いない」の「違いない」って何だ？「違いない」って書けば、実際はそうでなくても、自分には責任が生じないものなあ。そういうアリバイづくりだよねえ？　でも、実際には最先端＝亀山郁夫の仕事が「時代背景に周到に留意し、先行する研究を十分に踏まえたうえで書きあげられた、堂々たる専門的成果で」ないことをあなたは承知していますよね。それなのに、よくもこんなことがいえたものだ！「それがいわゆる作家研究の狭苦しい領域におさまらない」って、あんたは「研究」と称して、どんなでたらめもやっていいと、そういっているんだな？　あんたもそうやっているのかな？　最先端＝亀山郁夫の「過剰なほどの熱量」！　いいかげんにしろよ！「だからこそ、亀山さんのドストエフスキー学は門外漢のあいだにもこれほど支持を広げていったのである。大学かいわいでは文学研究衰退を嘆く声ばかり聞こえる中、亀山さんは閉塞を突き抜けるあまりに鮮やかな例を示してくれたのだ」って、本気でそういっているのか？　売れりゃ、それでいい、どんなでたらめでも、売れりゃ、それでいいってことでしょうが？　正直にいえよ！　どうせ読者なんて馬鹿だから、翻訳なんかいいかげんでいいんだと、そういえよ！　それなのに、「同時にそれは、研究者自身のよって立つ足場を揺るがしかねない危険な道でもある」って、何をびくびくしているのかな？　あんたもやったらいいだろうに！　最低だぞ、野崎歓！　醜悪！　醜悪！　醜悪！　あんたのような人間に私はなりたくない！

野崎歓はここで、もうやけのやんぱちだ。沼野充義にそっくりです。ここで、沼野充義の文章をまた引用することも無駄じゃないです。

もちろん、これまで何度も日本語に翻訳されてきた。翻訳の巨人、米川正夫による初めての完訳（現在では岩波文庫に収録）以来、最近の原卓也訳（新潮文庫）、江川卓訳（集英社、現在絶版）にいたるまで、少なくとも歴代八名の名だたるロシア文学者たちが次々に邦訳を手がけてきたのだ。しかし柴田元幸も言うように、「翻訳には賞味期限がある」。時代とともに日本語は変わり、訳文に対する読者の要求も変わってくる。また研究や批評の積み重ねの結果、テキストの読みが深まり、それを反映した新しい解釈が翻訳に求められるという事情もある。今回の亀山氏による新訳はそういった現代的な必要に応える画期的なものだ。訳文は驚くほど読みやすくなり、まるで現代日本の小説を読んでいるようだが、その一方で、作品の構造全体に対する訳者の目配りが随所に生きていて、まるで古ぼけた昔の映画がニュープリントで鮮明に蘇ったような印象を受ける。

ただし、読みやすければいい、というものではない。また従来の訳がそれほど読みにくかったわけでもなく、私は以前の訳を四種類ほど引っ張り出して比べてみたが、先人たちの訳業の立派さに改めて感嘆した。問題は、ドストエフスキーの小説は様々な声が競い合う壮大な悲喜劇であり、妙な口癖が入り乱れた言語のカーニバルのような異様さがはたして翻訳で伝えられるかということだ。少なくともそういった側面は、あまりに滑らかなリズムの新訳からは伝わってこない。ちょうど英語圏でも長年読み継がれてきたガーネット訳（日本の米川訳に相当）に代わって、ペヴィア＝ヴォロホンスキーによる新しい訳が出て話題になっているのだが、英訳では日本の一歩先を行き、原文の特性を活かそうという新たな段階に入っているようだ。

もっとも、私は亀山訳を批判したいのではない。そもそも、読みやすい口語体が平板になりがちなのは、現代の日本語じたいが抱える貧しさの問題でもあるだろう。ともあれ、現代人が楽に読み通せる訳を作り、ドストエフスキーの途方もない世界への導き手になった亀山氏の功績は巨大である。新訳のおかげで、いまやこの十九世紀ロシアの予言者は、九・

一一以後の世界の「現代作家」として新たな生を享けつつある。文学作品とは、ある言語の土壌で一度限り起こった事件だ。翻訳とはそれを別の言語の土壌でもう一度甦らせるという、もともと不可能に近い作業にほかならない。しかし、ドストエフスキー本人にも対抗できるような個性を持った稀有のカリスマ的ロシア文学者、亀山郁夫はその離れ業を可能にしてしまった。これは確かに信じがたい事件である。

（毎日新聞　二〇〇七年七月二十九日　東京朝刊）

右の文章を引用しながら、私は以前にあれこれ書きましたっけ。それで、当時は書かなかったことで、いまこの文章を読み返しながら、あらためて気づいたことを書いておきます。

沼野充義の「新訳のおかげで、いまやこの十九世紀ロシアの予言者は、九・一一以後の世界の「現代作家」として新たな生を享けつつある」ですが、その「九・一一」について、これを思い出してもらいましょう。

そんなことを思うようになった決定的なきっかけは、やはり、二〇一一年の大震災だった。今から考えると、起こったこと以上に怖いのは、「あれほど」のことが起こった後では人は前と同じではいられないだろう、と当初抱いた期待が見事に裏切られたという事態ではないか。復興支援のお金はきちんと使われず、地球の環境と未来の幸福のことを考えて原発を廃止しようという決断ものらりくらりと回避されつつあるうえに、「あれほど」の大事故を起こしながらこれまで原発を推進してきた頭のいい人びとのうち、誰一人として頭を丸めることも、自分の全財産をなげうって被災者のために余生を捧げようと決心することもなかった。

（沼野充義「未来の世界文学の場を創る」
『これからどうする』岩波書店　所収）

「二〇一一年の大震災」＝「三・一一」ですね。それと、二〇〇一年の「九・一一」です。沼野充義の口にする「三・一一」については、少し前の文章で批判しましたが、それと同じことが彼の「九・一一」にもいえます。つまり、「三・一一」も「九・一一」も沼野充義にとってはただただ自分が何かしらのアリバイをつくるための方便としての単語に過ぎないんですよ。便利な単語としてしか沼野充義には考えられていません。その単語さえ口にしておけば、馬鹿な読者がコロリと引っかかってしまうような、そういうもったいぶった単語です。

もし沼野充義が「九・一一」や「三・一一」を真剣に考えているなら、絶対に最先端＝亀山郁夫を称揚することなどできません。そうして、沼野充義が最先端＝亀山郁夫を称揚しつづけるからには、彼は必ず次の、そしてそのまた次の、さらにその次の「九・一一」や「三・一一」を待望する卑怯者だということになります。

野崎歓も同断。

（二〇一四年四月十五日）

さあ、東大・沼野教授と新しい「読み」の冒険に出かけよう！

（この章は一昨年、二〇一二年九月三十日に書き上げていたものです）

間違っていると知っていても、間違ったことをやってのける、人間のその能力にも私は驚いています。

（スーザン・ソンタグから大江健三郎への書簡　木幡和枝訳　大江健三郎『暴力に逆らって書く』所収　朝日文庫）

このことは、専門家はわかっているはずです。いわないだけなのです。

（小出裕章『騙されたあなたにも責任がある』幻冬舎）

「傍観者」という性質は、学術一般の性質に見られるのです。「傍観者」が「客観性」のフリをしていると言ってもよいかもしれません。

（安富歩『原発危機と「東大話法」』明石書店）

章題の「さあ、東大・沼野教授と新しい「読み」の冒険に出かけよう！」というのは、沼野充義編著による『世界は文学でできている』――「対話で学ぶ〈世界文学〉連続講義」――の帯にある文句です。その「〈世界文学〉連続講義」で沼野充義が対話したのが、リービ英雄、平野啓一郎、ロバート・キャンベル、飯野友幸につづいて、最先端＝亀山郁夫です。ちなみに、現在の日本ロシア文学会（http://yaar.jpn.org/）の会長がこの沼野充義です。

そうして、私は「間違っていると知っていても、間違ったことをやってのける沼野充義のその能力」についてしゃべるわけです。

あらかじめ断わっておきますが、最先端＝亀山郁夫には「間違っていると知っていても、間違ったことをやってのける」能力などありません。自分が間違っていると知る能力すらないからです。しかし、沼野充義は違います。沼野充義は最先端＝亀山郁夫の仕事がどれだけひどいかを知りながら、それを隠蔽するばかりでなく、称揚までしてまわっているんです。

最先端＝亀山郁夫の仕事について沼野充義の知っていることは次の通りです。

最先端＝亀山郁夫の仕事には膨大な誤訳がある。最先端＝亀山郁夫の仕事になぜそれほどまでに誤訳があるのか？　最先端＝亀山郁夫にロシア語がわからないからであり、日本語もわからないからであり、そもそも読書ということができない――私の言葉でいえば、亀山郁夫的読書しかできない――からである。つまり、ロシア語原典であれ、日本語先行訳であれ、最先端＝亀山郁夫にはドストエフスキーの作品を読み解く力がない＝とんちんかんにしか読み取れないということだ。そうして、そのような最先端＝亀山郁夫の仕事はドストエフスキー自身とその作品とに対する冒瀆であり、日本人読者に対する侮蔑である。「文学」に対する侮蔑であり、「人間」に対する侮蔑である。

沼野充義は以上を知っています。

しかし、沼野充義はそれを知らないでいることにしたいと思っており、なんとか「間違っていると知っていても、間違ったことをやってのける能力」で乗り切ろうとしているんです。こんな大人にはなりたくない――と来年には五十歳になる私はいいます。

さて、沼野充義と最先端＝亀山郁夫との対談につけられたタイトルは「現代日本に甦るドストエフスキー――神なき時代の文学者たちへ」です。

沼野　タイトルに「現代日本」を入れていますが、考えてみれば「現代日本」はいわずもがなの話であって、ドストエフスキーに限らず、どん

な外国文学のことをわれわれが論ずるにしても、それは結局現代の日本に生きる日本人の立場からのものであるのは、当たり前のことでしょう。きょうの話も、そういったことを意識しようとしまいと、ドストエフスキーについていま日本で語る以上は、われわれはこの作家を現代日本の文脈の中で理解せざるをえない。そこから離れた抽象的な「文学研究的」アプローチなどというものは、いささか怪しげなものです。

（沼野充義『世界は文学でできている』光文社）

沼野充義は何をいっているのか？　沼野充義は何を警戒しているのか？　何を排除しようとしているのか？　沼野充義が「いささか怪しげなもの」と呼ぶ「現代日本の文脈から離れた抽象的な「文学研究」アプローチなどというもの」とは何なのか？　これを思い出しますね。

結局、ドストエフスキーの研究は、私の研究は今最先端だと自分なりに自負しているんですね、少なくとも日本においては。問題は、なぜそう自負できるか、という点にあります。私は、ロシア・アヴァンギャルド研究の後に八年間ほどスターリン文化研究に励みましたが、そのスターリン文化研究の構造をそのままドストエフスキー研究に持ち込んでみたわけです。そこでどういう発見があったかというと、例えば一〇代の後半、終わりから、大学時代から営々とドストエフスキー研究を積み重ねた人たちは、五〇代の後半になったら新鮮な想像力も何もすべて失っているんですね。ほとんどドストエフスキーのテクストになまで感動するということはない。テクストの細部から何か新しい真実を見出していくということがほとんどできなくなっていて、目新しい視点、発想はほとんどゼロなんです。

（亀山郁夫の発言　学術研究推進部会「議事録」）

沼野充義は何を思い浮かべながら、先の発言をしたか、具体的にいってみたらいいと思います。

沼野　ロシア文学にはトルストイやドストエフスキー以外にもさまざまな文豪がいます。しかし、現代的な重要性という点では、ドストエフスキーにとどめを刺す。いまの日本社会にもドストエフスキー的なものが、いたるところに潜んでいるという感じがします。それを私なりに整理して、三つの次元で考えてみたいと思います。

一つ目は、なんと言っても、ドストエフスキーがいまだに広く読まれていることです。亀山さんが『カラマーゾフの兄弟』の新訳を出したのは二〇〇六年から二〇〇七年にかけてのことですが、皆さんもよくご存知のとおり、この翻訳は古典的な外国文学作品の翻訳としては異例の、五巻を合わせてですが百万部を超えるベストセラーになり、ドストエフスキーは一種の社会的ブームになりました。

この新訳のおかげでドストエフスキーだけでなく、このところちょっと敬遠されがちだったロシア文学全般に対する関心が高まり、その後、他のロシア文学作品の新訳も次々に出た。ですから亀山さんの翻訳は、ドストエフスキーを筆頭とするロシア文学の魅力再発見の機運を作り出したわけで、その功績は測り知れないほど大きかった。それから、私は別に光文社の宣伝をするように頼まれているわけではありませんけれども、こういう新訳を世に送りだした光文社の「古典新訳文庫」という企画が、たいへん重要な役割を日本の読書界のために果たしていることは間違いありません。

（沼野充義『世界は文学でできている』光文社）

ここで、沼野充義が「間違っていると知っていても、間違ったことをやってのける能力」を駆使する理由が明確に語られています。沼野充義には「五巻を合わせてですが百万部を超えるベストセラー」なんてものがうれしいんです。「一種の社会的ブーム」もうれしい。「この新訳のおかげで」「ロシア文学全般に対す

る関心が高まり」「他のロシア文学作品の新訳も次々に出た」ということがうれしい。そうして、「こういう新訳を世に送りだした光文社の「古典新訳文庫」という企画が、たいへん重要な役割を日本の読書界のために果たしている」というわけです。「日本の読書界」を「日本ロシア文学会」に読み換えてみるのも一興じゃないでしょうか。ところが、その新訳『カラマーゾフの兄弟』がとんでもないいいかげんのでたらめ訳なんですね。沼野充義はそのことをもちろんはっきり承知しています。しかし、もし沼野充義が自分のはっきり承知していることをそのまま口にしてしまうと、この新訳のおかげで作り出されたらしい「ドストエフスキーを筆頭とするロシア文学の魅力再発見の機運」そのものが、にわかに悪臭を放ち始めることになるんです。「古典新訳文庫」についても同断。そういうわけで、沼野充義は新訳『カラマーゾフの兄弟』について自分の知っていることを知らなかったことにせざるをえないんです。自分の「間違っていると知っていても、間違ったことをやってのける能力」を駆使せざるをえない。こんな大人にはなりたくない――と来年には五十歳になる私はいいます。

> **沼野**　ただし、ドストエフスキーの魅力がここでいきなり発見されたわけではなくて、やはり強調しておきたいのですが、日本では亀山訳以前にドストエフスキー翻訳の長い歴史があり、多くのロシア文学者たちの努力の積み重ねが今日につながっているんです。ドストエフスキーに関しては、亀山訳以外の翻訳がいまでもたくさんあって、私たちの師匠の世代の原卓也や江川卓などの訳などにはいまでもそれぞれ多くの愛読者がいます。ですから、日本にはもともとそういった広範な読者によるドストエフスキー体験の分厚い土台があって、その上に新しい訳業が出てきたということでしょう。
>
> （同）

ここで沼野充義は最先端＝亀山郁夫の「ベストセラー」に注釈を入れました。「日本では亀山訳以前にドストエフスキー翻訳の長い歴史があり、多くのロシア文学者たちの努力の積み重ねが今日につながっている」のだそうです。沼野充義の口にした「今日」にはもちろん最先端＝亀山郁夫の仕事が含まれているでしょうが、これが嘘ですね。最先端＝亀山郁夫の仕事は「多くのロシア文学者たちの努力の積み重ね」を継承するものではなく、反対に台無しにするもの・水泡に帰せしめるものだからです。もちろん、沼野充義は自分が嘘をついていることを知っています。沼野充義は最先端＝亀山郁夫の翻訳と先行訳との「質」の違いについて知っているにもかかわらず、そのことをいいません。沼野充義がここでやっているのは、まず、「私たちの師匠の世代の原卓也や江川卓などの訳」と最先端＝亀山郁夫訳とを同等に並べてみせるということです。次に、沼野充義のやっていることは、それぞれの翻訳の「質」に触れないまま、この「質」の問題を「愛読者」の問題にすり替えることです。つまり、過去にも『カラマーゾフの兄弟』はたくさんの翻訳があり、それぞれに愛読者もついている。それは「ひとそれぞれ」の「趣味」だとか「嗜好」だとか「思い入れ」の問題だよね、といいたいんでしょう。そうして、最先端＝亀山郁夫訳にも同様の「愛読者」がついているんだ、といいたいんでしょう。翻訳の「質」ということにまったく触れずにすませ、しかも最先端＝亀山郁夫を称揚するためにはこういうしかないですよね。こういうレトリックを用いることで、沼野充義はまるで自分が嘘をついていないかのようにしゃべることができるわけです。表面的には嘘をつかずにいながら、核心においては大きな嘘をつくことが、これで可能になるわけです。沼野充義の「間違っていると知っていても、間違ったことをやってのける能力」はそんなふうに駆使されます。こんな大人にはなりたくない――と来年には五十歳になる私はいいます。

> **沼野**　二つ目は、現代社会では、ドストエフスキー的現象とでも呼ぶべきものがいたるところに見られるということです。これは日本に限らず、世界的な現象と言ってもいいかもしれません。ドストエフスキーがいまだに「現代的」な作家と呼ばれるのは、何と言っても、彼が現代のさまざまな深刻な問題を先取りした形で取り上げた、いや単に先取りするだ

けではなくて、深く本質的な形でそれをとらえきっていたからでしょう。だから彼の文学は、時代を超えていまも変わらず「最先端」と感じさせる鋭さと重さがある。

（同）

出ましたね、「最先端」。沼野充義はどうしてわざわざこの言葉を使い、しかも括弧づきにまでしたのか？　私は吹き出しましたけれど。

沼野　何を念頭に置いているかと言えば、ドストエフスキーの小説には、「殺人」「テロリズム」「幼児虐待」といった、現代的で陰惨な社会的問題が強烈な形で出てくるということです。こういう問題を投げかけた文学が他にないわけではありませんが、ドストエフスキーのすごさは、通俗的で時局的な事件、それこそ新聞の三面記事になるような犯罪を取り上げながら、その生々しさを描き出すと同時に、そこにその場限りではない深みというか、表面からは見えない現象の本質的な中身といいますか、それを常に導き出してくるところにある。

いずれにしても、ドストエフスキーが百数十年前に小説で描き出した陰惨で深刻な問題は、実はいまの日本社会が抱えている問題と全面的に共通していると言っても過言ではありません。「殺人」「テロリズム」「幼児虐待」と言いましたが、どれも現代社会を蝕む深刻な問題です。しかもドストエフスキーはそういった事態の根源に、「神なき時代にはすべてが許されるのか」という根本的な疑問を置いた。いよいよ「神なき」時代に突入しつつある現代人にとって、だからこそ、彼の問いかけは重く響く。ドストエフスキー的な問いかけは、現代の世界のいたるところに潜んでいます。

（同）

沼野充義はそうやって、ずっと最先端＝亀山郁夫の主張していること――そうとは断わらずに――をまず口にしておいて、自らもその通りに考えていると表明するわけです。

それにしても、「殺人」、「テロリズム」、「幼児虐待」と扇情的なお題を並べたくなる気持ちはわからないではないですが、こういう括りかたを私はよくないと思います。いま、このことを私はうまくいうことができませんが、とにかくこの扇情的な括りかたが実に安易であり、陳腐であり、不誠実であり、無責任であり、自らの覚悟のないものなのだとだけいっておきましょう。私には沼野充義がここで扇情的に括ったもの――「殺人」、「テロリズム」、「幼児虐待」――を、彼（と最先端＝亀山郁夫と）が実はドストエフスキーの「読書市場」のために歓迎しているのではないか、とすら思われてならないんです。また、「しかもドストエフスキーはそういった事態の根源に、「神なき時代にはすべてが許されるのか」という根本的な疑問を置いた」についても同断です。そうして、私がここで胡散臭く感じているものこそが最先端＝亀山郁夫の仕事の本質なんです。

沼野　じつは私は二〇〇九年末に、機会があってアメリカのイェール大学で特別講演をしたのですが、そのときのタイトルは「ハルキvs.カラマーゾフ」というものでした。どうしてこの二つを並べたかというと、現代の日本でもっとも重要な作家、もっとも人気のある作家の両極じゃないか、と思ったからで、新訳で読まれつづけているドストエフスキーは現役の日本語作家だと考えてもいいくらいでしょう。村上春樹の人気については、言うまでもありません。彼の最新作『１Ｑ８４』は第三部まであわせると、売り上げは三百万部にものぼると聞きます。部数だけでなく、第一部と第二部に関しては売れたスピードも記録的な速さだったそうで、いまや日本の読書市場は村上春樹に席巻されていますから、社会のいたるところにハルキ的なものが感じられて当然でしょう。

しかし、じつは『１Ｑ８４』の直前に、『カラマーゾフの兄弟』が亀山訳で時ならぬベストセラーになった。これは私に言わせれば、村上春樹の本が売れたことよりはるかに大きな事件でした。

（同）

大きく出ましたね。「新訳で読まれつづけているドストエフスキーは現役の日本語作家だと考えてもいいくらいでしょう」――沼野充義はここでさりげなくいま日本で読まれているドストエフスキーと最先端＝亀山郁夫訳とを等号で結びましたよ。つまり、最先端＝亀山郁夫の日本語を「現役の日本人作家」の日本語だと評価したわけです。そうして、最先端＝亀山郁夫の仕事を村上春樹と結びつけることによって、沼野充義はいよいよ最先端＝亀山郁夫の仕事の実質を隠蔽する、いや、それどころか称揚までする――「間違っていると知っていても、間違ったことをやってのける能力」を存分に発揮する――わけです。

しかし、どうしてどうして新潮文庫の原卓也訳だってどんどん読まれているんですよ。書店員である私にはその実感があります。実際はどうなんでしょう？　たとえば、この二〇一二年四月における『カラマーゾフの兄弟』の売れ部数を原卓也訳と最先端＝亀山郁夫訳とで比較すれば、原卓也訳の方が上回っている――つまり、最先端＝亀山郁夫訳のヒットはある限られた期間だけのものにすぎなかった――のじゃないか、と私は思うんですが……。一時のベストセラーなんかよりも地味なロングセラーの方が断然大切です。

それにまた、こうもいっておきます。私は、沼野充義がここでよしとしているミリオンセラーなどというもの――また「読書市場」などというもの――をどれだけ馬鹿馬鹿しいと考えているかを、この「連絡船」でもずうっといいつづけてきました。沼野充義はここまでのところ、売れさえすればそれでいいという基準でしかしゃべっていないのじゃないでしょうか？　こんな大人にはなりたくない――と来年には五十歳になる私はいいます。

沼野　亀山さんには、ドストエフスキーの話を始めるといくらでも話すことがあるはずですが、きょうは他の場所であまり話していないことにむしろ焦点を当てていただきたいとお願いしてあります。というのも、亀山さんはもともとロシア・アヴァンギャルドという文学と芸術の総合的な前衛運動の研究からスタートしていて、じつはその分野での記念碑的な業績をたくさんお持ちの研究者で、私に言わせるとそちらの業績のほうが大きいのではないか。しかし、最近は「ドストエフスキーの亀山」という面があまりに脚光を浴びている反面、ロシア・アヴァンギャルドに関する業績が一般にはあまり知られていないのではないでしょうか。そこで、ロシア・アヴァンギャルドからドストエフスキーにいたる、長いロシア研究者としての道のりについて語っていただきたいと思った次第です。これは誰よりもおそらく私自身が一番聞いてみたい話なんですね。それでは亀山さん、よろしくお願いします。（拍手）

（同）

そうして、最先端＝亀山郁夫登場。例によって例のごとくの話を始めるわけですが、途中から引用すれば、

亀山　いずれにしても、『罪と罰』を原書で読んで以降、ドストエフスキーを言語で読むという作業をはじめるわけです。まず、『白痴』をロシア語と日本語交互に交えながら読むことになります。卒業論文は『悪霊』論です。タイトルは「悪の系譜について」というものでした。ゼミの指導教官であった原卓也先生から、おほめの言葉をいただけるものと期待していたのですが、評価はとても厳しいものでした。文章が生硬である。誤字脱字が目立つということで、内容にまで踏み込んだ批評をいただくことはできませんでした。

私は自分なりにドストエフスキーを経験しつくした上でその論文を書きあげたと自負していましたから、そんな評価が下されようとは考えもしなかったのですが、そういうほとんど妄想に近い自己評価の一方で、冷徹な日本語の使い手である原先生が言うのだから自分は本当にだめなのかもしれないと真剣に悩みはじめました。誇大妄想と自信喪失の間ですっかり混乱していたと思います。

（同）

「間違っていると知っていても、間違ったことをやってのける能力」を縦横に駆使する沼野充義と違って、こちら「間違っていると知る能力すらない」最先端＝亀山郁夫は実に正直に話をしています。

自らもこれまでに多数の学生たちの論文を指導してきたはずであるにもかかわらず、最先端＝亀山郁夫は六十歳を過ぎてなお、かつての自分の卒業論文が「冷徹な日本語の使い手である」原卓也によって評価されなかったことの理由を「文章が生硬である。誤字脱字が目立つ」という点に帰してしまえるんです。「内容にまで踏み込んだ批評をいただくこと」ができなかったことの意味をいまだに理解できないわけです。私はその最先端＝亀山郁夫の論文を読んでなんかいませんよ。でも、現在の最先端＝亀山郁夫の読解能力からすれば、それがどんなものだったか、いや、どんなにひどいものだったか、容易に想像がつきます。

そうして、原卓也を形容するのに「冷徹な日本語の使い手である」というのは、もちろん最先端＝亀山郁夫自身が「冷徹な日本語の使い手」ではないことを意味していますが、ここにはちょっとした打算があって、最先端＝亀山郁夫は会場の聴衆と、この本の読者ともを自身と同レヴェルだといっているわけです。つまり、みなさんだって、『カラマーゾフの兄弟』を読むのなら、あんな「冷徹な日本語の使い手」の翻訳じゃなくて、むしろその「冷徹な日本語の使い手」に一蹴されるくらいの私の翻訳を読みますよねえ。みなさん、私の翻訳を「読みやすい」といってくださるわけですものねえ。いやはや、「冷徹な日本語の使い手」の翻訳なんか、みなさん、ものすごく読みづらいですよねえ。やっぱり、翻訳は「いま、息をしている言葉で」のものじゃなくてはねえ。

さて、先に進みましょう。

亀山　先ほどのマヤコフスキーは、小説家ではなく詩人でしたが、たとえば『カラマーゾフの兄弟』を翻訳しているとき、キリスト教という信仰を持たずしてこの小説をどこまで深く味わうことができるのか、信じない者には読めないのではないかという疑問に悩まされました。しかし、ないものねだりはできないもので、実際はそんなに悩む必要はなくて、現に周りにいる多くの人たちが、キリスト教信仰とはまったく関係のない場で、自分なりに『カラマーゾフの兄弟』を読み、その世界と裸で向き合っている、しかも大きな喜びをそこから得ているという現実をもっと素直に受け入れるべきだと思うようになりました。

私自身は、神を信じてはおりません。そして、ドストエフスキーが自らをそう呼んだ不信と懐疑の読者として、ドストエフスキーの文学を味わい、読む姿勢をずっと貫きつづけているつもりでいます。キリスト教という一つの大きな世界観をもってドストエフスキーを読もうとする人の目から見ると、受け入れがたいものだということはあるでしょう。

私がいまこんなことを言うのは、加賀乙彦さんの存在が念頭にあるからです。数年前に加賀さんと対談したときに、加賀さんは、『罪と罰』の中心的なテーマとして、ラスコーリニコフがソーニャのアパートを訪ね、「ラザロの復活」の話をする第四部第四章を持ちだしたわけです。ボリュームの側面から言っても、小説のど真ん中にこのエピソードを据えたことにすべてを解くカギがあると主張しておられました。

つまり、この死者が甦るというモチーフにラスコーリニコフ自身を重ねてみると、『罪と罰』は、いったん死者となった青年がもう一度甦るという構図になる。

この筋立ては、信じる者の立場から言うと、まさによくできた物語ということになるのでしょう。加賀さんにしてみれば、彼は後半生で一人の信仰者として小説を書きつづけている作家ですから、そういう『罪と罰』の読解は必然的な意味をおびてきますが、私のように信じない者の立場から言うと、この復活のエピソードの挿入は、当時の帝政権力の動向を意識した作者の二枚舌なのではないか、と思えてしまうのです。悲しいことですが。

（同）

自分が「間違っていると知る能力すらない」最先端＝亀山郁夫の右の発言の実質は、先の「ゼミの指導教官であった原卓也先生」が「加賀乙彦さん」に代わっただけですね。実に最先端＝亀山郁夫らしい発言です。

ところで、最先端＝亀山郁夫がここで「加賀乙彦さん」の名前を持ち出したのには、姑息な理由があります。「加賀乙彦さん」という名前が――「原卓也先生」同様に――最先端＝亀山郁夫にとって、さらにこの公開対談を観客にとっての「権威」なんですね。最先端＝亀山郁夫は、その「権威」と自分との対立を口にすることによって、自分の「権威」を観客にアピールしたいんです。

そうして、この場合の「権威」というのは、常に最先端＝亀山郁夫の考えている路線上での「権威」だということに注意しておきたいものです。つまり、最先端＝亀山郁夫が自身のセールス・プロモーション路線上で「公認」する「権威」です。この路線上にない「権威」は「公認」されません。「ゼミの指導教官であった原卓也先生」は先行訳『カラマーゾフの兄弟』の翻訳者でもあり、最先端＝亀山郁夫の経歴から消すことができません。「加賀乙彦さん」は、最先端＝亀山郁夫の考えている路線上で対談もしていますから、これも「公認」せざるをえません。ただ、おそらく最先端＝亀山郁夫は「加賀乙彦さん」からもひたすら「おほめの言葉をいただけるものと期待していた」のだと思います。一部であれ、批判が加えられるとは思ってもいなかったでしょう。しかし、とにかく批判は加えられてしまったので、これは消すことができません。だから、この対談の席でもそのことには触れるんです。触れたうえで、「でもねえ、あのひとはキリスト教徒で、私は神を信じていないから」と問題をごまかすわけです。

しかし、繰り返しますが、最先端＝亀山郁夫は自ら「公認」しない「権威」にはけっして触れません。私が何をいいたいのかというと、こうです。最先端＝亀山郁夫はここで「木下豊房」と「萩原俊治」の名前を出すべきだったのじゃないか？　最先端＝亀山郁夫はかつて、せっかくその二人が彼と「公開討論」をしたいと申し出てくれたことがあったにもかかわらず、逃げ出していました。

実は萩原氏と私は三月十五日付で、日本ロシア文学会の理事、各種委員の役員六十名に宛てて、今年秋の全国大会で、亀山氏の仕事をめぐる公開討論会を企画するように申しいれた。しかし五月末の理事会で、この要請は却下された。議事録の公開を要求したが、無回答のままである。

（木下豊房「亀山問題の現在」http://www.ne.jp/asahi/dost/jds/dost128.htm）

その二人がネット上でずっと自分を批判しつづけていることを、最先端＝亀山郁夫は口にすべきだったのじゃないか？　もちろん、最先端＝亀山郁夫にそんなことはできません。また、もし最先端＝亀山郁夫がそんなことをしていたら、さすがの沼野充義も助けを出すことができません。最先端＝亀山郁夫にとって「権威」とはテレビやラジオや雑誌上――それも、あくまで自分が望んだ路線でのものに限り、不意打ちのように「誤訳問題」を扱ったものではありません――で公開されるような類のものです。ネット上でだけ展開されているようなものは「権威」ではないんですね。いま最先端＝亀山郁夫が「加賀乙彦さん」の名前を持ち出したのは、そうすることで公平を装いながら自分のネット上での評判を黙殺することが可能になるからです。

それはさておき、「私自身は、神を信じてはおりません。そして、ドストエフスキーが自らをそう呼んだ不信と懐疑の読者として、ドストエフスキーの文学を味わい、読む姿勢をずっと貫きつづけているつもりでいます」というのはひどい。「ドストエフスキーが自らをそう呼んだ不信と懐疑」と最先端＝亀山郁夫自身の「不信と懐疑」とを同一のものなどとどうしていいうるのか？　両者はまったくべつのものです。最先端＝亀山郁夫にはドストエフスキーの「不信と懐疑」がどこへ向おうとしていたか、どれほど苦しいものであったか、がまったく理解できていません。だから、最先端＝亀山郁夫にはアリョーシャが見えないんです。そんなひとが『カラマーゾフの兄弟』を訳してはいけないんです。これについて私はずっと書きつづけてきました。

さらに、「キリスト教信仰とはまったく関係のない場で、自分なりに『カラマ

ーゾフの兄弟』を読み、その世界と裸で向き合っている、しかも大きな喜びをそこから得ているという現実」と「信仰者」としての「加賀乙彦さん」を対立させるのもおかしいと私は思います。最先端＝亀山郁夫はそういう対立の構図を作り出すことによって「加賀乙彦さん」の自分への批判を封じ込めているでしょう。「信仰者」でなくても「加賀乙彦さん」の主張は十分に理解できるものです。

そうして、沼野充義がこれに乗っかります。

沼野　それはさておき、亀山さんが取り上げた『罪と罰』で「ラザロの復活」が読まれる場面に、話題を戻しましょうか。

これはとても大事な、『罪と罰』を読んだ人なら誰でも覚えているに違いない場面ですが、そこに亀山さんは、権力を意識したドストエフスキーによる一種のカムフラージュを読み取ろうとしています。これはかなり大胆な推測であって、そう読める可能性があるかもしれませんけれども、そういう読みをするのはドストエフスキーに対する冒瀆であると感じる愛読者も多いのではないでしょうか。端的に言ってしまえば、もしそうだとすれば、作家が権力の目を気にして、小説の中で一種の偽装工作をしたということになるからですね。私は個人的にはそういう推測は「あり」だと思いますが、そんなふうには考えたくない、そんなことを考えること自体作家に対する侮辱ではないか、と思う愛読者たちの心情も理解できます。いまそのことはあえて置いておきましょう。

（沼野充義『世界は文学でできている』光文社）

さらには、次のような補足も。

沼野　まあ、この「続編」構想問題はさておくとして、亀山さんが自説として展開しているドストエフスキー「二枚舌」説の議論は、大いに傾聴すべきものだと思います。先ほど出た「ラザロの復活」の読みもその一例と言えるのですが、ドストエフスキーが「二枚舌」であったなどという主張は、いろいろと差しさわりがある、というか、要するに、ドストエフスキーを尊敬している人たちの気持ちを逆なでするようなところがあるわけですよ。しかし、私自身はドストエフスキーは常人をはるかに超えた恐るべき天才だったと思いますが、権力や金や女性といったさまざまな誘惑に無縁であった人ではけっしてなかったとも思うので、彼が百パーセント清廉潔白な聖人だったなどとは思いません。「二枚舌」的なことは、彼にも当然あったでしょう。

ただし、「二枚舌」という言葉は人聞きが悪いというか、感じがよくないのですね。それで私なりにこの問題についてもう少し慎重な言い方をすれば、ドストエフスキーという人には、皇帝を中心とした権力に惹かれ、忠誠を示す志向性を一方で持ちながら、その反面、皇帝を暗殺しようとする革命家たちの暗く危険な心情も――けっして明言したわけじゃありませんけれども――理解していた。そういう二重性があったということじゃないでしょうか。

……（中略）……

ラジンスキーの仮説は小説家的な空想力のなせる業で、ちょっと無理がありそうですが、いずれにせよ、皇帝権力側から見た場合、ドストエフスキーはシベリア流刑以後、「改心」して保守派の論客になったとはいえ、どこか信用しきれない危ないものを抱えた要注意人物でありつづけたのではないでしょうか。いくら彼が表面的には民族主義者であり従順な皇帝の臣民であるようにふるまっていても、権力者の側からすれば、やはり「この男は危ない、信用できない」という疑いが払拭できなかったのではないか。そして、ドストエフスキーの側も、自分が権力側に百パーセント信用されていないということはうすうす感じていたのではないか。と、まあ、私自身、そんなことを考えていましたから、私にとって亀山さんの「二枚舌」説は驚くべきものではなく、基本的には支持で

きるものです。

（同）

もちろん、この公開対談のはじめから沼野充義は何かを恐れているわけです。恐れているから、なんとかそれを封じ込めようとします。ここでもその工作を行なっているんですね。最先端＝亀山郁夫の愚かしい読み取りを正当化すると同時に、その愚かしい読み取りへの批判を矮小化し、封じ込めるわけです。どうやって、そうするか？　笑っちゃいますが、「愛読者」、あるいは「ドストエフスキーを尊敬している人たち」という括りを設けることによって！　つまり、沼野充義はまたしても翻訳の「質」に触れずに、それを「愛読者」、あるいは「ドストエフスキーを尊敬している人たち」の読みかた、「ひとぞれぞれ」の「趣味」だとか「嗜好」だとか「思い入れ」の問題にすり替えるんです。

では、沼野充義はすでに自ら知っているはずのこのことについてどう考えているのか答えてみるがいい。最先端＝亀山郁夫のいうドストエフスキーにおける「二枚舌」（左の文章での「イソップ言語」――なぜ「イソップ言語」なのかということについても、左の出典元に書かれています）について。

なるほど、亀山のいう「そういう、ごくあたりまえに思えるような研究」、すなわち、ドストエフスキーの小説におけるイソップ言語の研究はこれまで行われてこなかった。しかし、繰り返すが、それはドストエフスキーがイソップ言語を使って作品を書いていないからにすぎない。もしドストエフスキーがイソップ言語を使ってロシア帝国やロシア正教会の批判をしていたとすれば、ソ連の研究者たちはソ連への忠誠を示すために、サルトィコーフ＝シチェドリーンだけではなく、ここぞとばかりにドストエフスキーをも「先進的な作家」として礼賛していただろう。しかし、そんな風にはならなかった。ソ連でドストエフスキーは危険な作家というレッテルを貼られたままだった。当たり前の話だが、ロシア語を母語とするソ連のドストエフスキー研究者は、日本人の亀山など足もとにも及ばないほどロシア語ができる。また彼らの目は節穴ではない。

（萩原俊治「亀山郁夫とイソップ言語」――「こころなきみにも」http://dhatena.ne.jp/yumetiyo/20100612/1276307504）

さらに、

繰り返すが、亀山が言うようにドストエフスキーの作品に「反体制的な言説が、作品の内部に」織り込まれているとすれば、ソ連の研究者たちはドストエフスキーを「先進的な作家」として賛美しただろう。また、ドストエフスキーの同時代人たちもドストエフスキーを保守反動と呼んだりはしなかっただろう。

私がドストエフスキーの読者に言いたいのは、どうか、こんな、少し考えれば誰にでも分かるような亀山の嘘に欺されないでほしいということだ。

（同）

もちろん、沼野充義はきわめて常識的に「ドストエフスキーの作品に「反体制的な言説が、作品の内部に」織り込まれているとすれば、ソ連の研究者たちはドストエフスキーを「先進的な作家」として賛美しただろう」ということを知っているはずです。なぜそれをいわないのか？　それをいわないで、沼野充義は何といったのか？

沼野　私は個人的にはそういう推測は「あり」だと思いますが、そんなふうには考えたくない、そんなことを考えること自体作家に対する侮辱ではないか、と思う愛読者たちの心情も理解できます。いまそのことはあえて置いておきましょう。

（沼野充義『世界は文学でできている』光文社）

沼野　そして、ドストエフスキーの側も、自分が権力側に百パーセント信用されていないということはうすうす感じていたのではないか。と、まあ、私自身、そんなことを考えていましたから、私にとって亀山さんの「二枚舌」説は驚くべきものではなく、基本的には支持できるものです。

（同）

沼野充義はこんなに簡単に最先端＝亀山郁夫の説を「支持」なんかしてはいけないんです。沼野充義の「私自身、そんなことを考えていましたから」の「そんなこと」程度が最先端＝亀山郁夫の「二枚舌」説にどこまで関われるものなのか？　それが問題なんです。いいですか、あるひとが他人の説を「支持」するというなら、彼がその他人の説にどこまで深入りしていけるかが問題になります。かりにその説に対してどこかから批判が加えられたとして、彼がその他人の代わりに、その説の一定の深部についてまでであれば、答えうるというのでなければなりません。そういう覚悟が沼野充義にあるのか？　ないと思いますよ。ほんの入口やきっかけ程度にしか同意できない説などを「支持」などできないし、また、「支持」しているなどと口にしてはなりません。そうして、沼野充義はこの最先端＝亀山郁夫の「二枚舌」説を検討しだせば、たちまち萩原俊治の指摘したことに突き当たらざるをえないことを自分で承知しているでしょう。

いやいや、沼野充義は「支持する」と口にしたのではありません。「基本的には支持できるもの」といったのでした。何ですか、この「基本的には支持できるもの」というのは？　これは、誰が「支持」するというんでしょう？　なぜ沼野充義は「私は支持します」といわなかったんでしょう？　沼野充義は「支持」するんですか、しないんですか？　何ですか、この「基本的には」というのは？　どういうつもりで沼野充義はこんなことをいうのか？

つまり、沼野充義には自分でひとつも責任を負うつもりがないんです。最先端＝亀山郁夫の「二枚舌」説なんかに関わりたくないんです。できれば、知らなかったことにしたい。そういうわけで、沼野充義は「間違っていると知っていても、間違ったことをやってのける能力」を発揮します。いったい何のために？「ドストエフスキーを筆頭とするロシア文学の魅力再発見の機運」の広告塔である最先端＝亀山郁夫を損なわないために、です。沼野充義はもうひたすら、どうしたら自分が責任を負わなくてすむか、ということでしかしゃべっていません。こんな大人にはなりたくない――と来年には五十歳になる私はいいます。

ここで、最近に私が読んだ本からこの沼野充義にぴったりな引用をしてみます。

東大の人が得意とするのは、ある問題について書かれたものを大量に読み、それを幾つかのグループに分けて「○○論者」として分類し、その意見をまとめてしまうことです。そして、それぞれの「代表的論者」を二、三とりあげて、主張を整理します。そして自分の意見はというと、そのどれにも属さないものなので、全体を相対化するものだ、というスタンスを取ります。そうすると、どれかに属する人は、その外側に立って「冷静に観察」している人よりもレベルが低いことになります。これが傍観者的態度です。

じつを言うと、これこそが現代のアカデミズムにおいて正統的とされる論文の書き方、というものであって、普通の人はそう簡単に、こういうものは書けません。ですから、普通の人がこういう正統的手法で論文を書こうとすると、途中で挫折したような、中途半端な情けないものができ上がります。

ところが、東大の人は、さすがに頭がよく回転するので、こういうことがうまいのです。ですから、東大ではこういう論文やレポートが、次々と生産されています。私が東大に赴任して驚いたのは、こういう手際のよいものがどんどん出てくることでした。

もちろん、東大以外にも、こういうものをうまく書く人はたくさんいます。ですから、学術関係のもので、こういう論文や著作を私はたくさん読んだように思います。そして、こういうことがうまくできているものは、その手際のよさに感心するのですが、結局のところどれも、つまらなかったのです。

（安富歩『原発危機と「東大話法」』明石書店）

そうして、こうつづきます。

なぜつまらなかったのか。それは、この学術論文の正統的書き方というものが、「客観性」を志向するフリをしつつも、結局のところは事態を「傍観」することになっていたからだ、と思います。

このやり方の本質的問題は、「問題が事前に切り取られる」という点にあります。しかし議論というものの大切な点は、「問題の切り取り方を変更する」こと、より正確には、「自分の物の見方を変える」ことにあります。物の見方を変えることが、学習の本質であり、自分なりの新しい見方に到達することが、創造性の本質です。

ところが、事前に設定された地平に沿って「意見」を求め、それを集計して全体像を描き出し、分類して代表的見解を取り出す、という整理の方法をすると、地平そのものが内在的に変化することはなくなります。こうして、何らの学習も創造も生じなくなり、読んでもつまらないものができ上がります。それゆえ、頭のよい人ほど、つまらない論文を書く、ということになるのです。

そしてこれは、単に「つまらない」ということでは済みません。なぜなら、これが「学術的」で「客観的」な方法だ、ということになると、こういうつまらないものを書ける「傍観者」こそが「専門家」であって、それができない者は「素人」ということになり、後者が発言する資格を奪われるのです。これは第1章で見た大橋教授が小出氏に対して使った手口ですが、明らかに、強い破壊性のある「暴力」です。

「傍観者」という性質は、学術一般の性質に見られるのです。「傍観者」が「客観性」のフリをしていると言ってもよいかもしれません。それは、東京大学に限られることではないのですが、自他共に認める「学問の中心」において、それは最高度に発揮され、最高度に害悪を流しているのです。

（同）

沼野充義の発言が「「客観性」のフリ」をした「傍観者」の発言だと私はいいます。沼野充義の発言のうちのどこに沼野充義はいるのか？　沼野充義の発言のうちに、必ず沼野充義はいなくてはならないんです。しかし、いない。いないふりをする。こういうことを沼野充義は聴衆の前でするし、その記録であるこの本の読者の前でもするわけです。沼野充義は絶対に責任を負おうとしません。自分は目の前にある情報を整理してみせただけだ、というわけです。自分の流している「害悪」などまるでないかのように。

しかし、一方で、この聴衆とこの本の読者とが当の「害悪」を喜んで受け入れるし、これからもずっとそうだということを、沼野充義は承知しています。彼らの喜びようを前にして、沼野充義はいまさら「真実」を口にできないと感じているかもしれない。彼らがこのようにも喜んでくれるからには、「真実」を口にしないこと――嘘をつき通すこと――が自分の責務だとも感じているかもしれません。いやいや、彼らの喜びようを前にして、沼野充義はいまやほとんど完全に自分の責任を忘れ去ることに成功しているかもしれません。彼らの喜びようを前にして、もしかすると最先端＝亀山郁夫の仕事が本当に立派なものであるかのように錯覚しているのかもしれません。自分が嘘をついているということすら忘れてしまっているのかもしれません。自分が「間違っていると知っていても、間違ったことをやってのける能力」を駆使しているという自覚すらとっくにないのかもしれません。ということは、自分の嘘に騙されたひとたちの騙されっぷりに、今度は自分がうかうかと騙されたとでもいうようにして、

自分の責任をまったく感じないでいられるようになったのかもしれない、ということです。自分の責任を、自分に騙された読者たちのせいにして気楽になっているということでしょうか。ともあれ、実際には、沼野充義はこれからも「ドストエフスキーを筆頭とするロシア文学の魅力再発見の機運」に乗っかった「読者市場」を維持するために、「害悪」によって読者を喜ばせつづけるでしょう。

ここで私が考えるのは、もし新訳『カラマーゾフの兄弟』が最先端＝亀山郁夫による――いいかげんのでたらめだらけの――ものでなく、きちんとしたまっとうなものであったなら、沼野充義はこんなふうに「間違っていると知っていても、間違ったことをやってのける能力」を駆使する必要もなかったかもしれない、ということです。そうであればよかったのに、と沼野充義自身が思っているでしょう。しかし、たとえそうであっても、沼野充義はやはり「客観性のフリ」をした「傍観者」でありつづけるのじゃないでしょうか？　沼野充義にとっては、新訳がいいかげんのでたらめだらけであろうが、きちんとしたまっとうなものであろうが、どちらでもいいのじゃないでしょうか？　売れさえすれば大歓迎なのじゃないでしょうか？　こんな大人にはなりたくない――と来年には五十歳になる私はいいます。

この「亀山郁夫現象」といわれるもののなかでいちばん性質の悪いのが、沼野充義のような「専門家」です。

なぜ一般の読者が最先端＝亀山郁夫の仕事に騙されるのか？　その読者に読書の力がない――いくつもの批判を知りつつ、いまだに最先端＝亀山郁夫を称揚する一般読者たちに向けて私はもう何かを主張したいとも思いません（私が何かを訴えたいのはべつのひとたちにです）――からでもありますが、新聞やテレビや雑誌などのマスコミが最先端＝亀山郁夫を称揚しているからです。マスコミが余計なことをしなければ、最先端＝亀山郁夫の流した「害悪」も最小限で食い止められたでしょう。そのマスコミが最先端＝亀山郁夫を称揚しつづけるのはなぜか？　「専門家」たちが真実をいわないからです。「専門家」たちの沈黙と、そうして嘘がマスコミの動きを止めないんです。もちろん、敢然と最先端＝亀山郁夫批判をしつづけている「専門家」たちは少数ながらいます。しかし、マスコミは、彼らにとってより「権威」のある――以前からコネクションのある――「専門家」たちに従おうとしているんでしょう。自分で考えてみれば、すぐにわかることをわかろうとせず、そうするんですね。つまり、マスコミは自らの仕事の責任を右の「専門家」たちに帰すんです。「だって、一部の「専門家」たちは批判しているかもしれないけれど、おおかたの「専門家」たちが亀山先生を褒めているじゃないか＝批判していないじゃないか」というわけです。また、同時にこうもいうことになります。「だって、これだけたくさんの読者が亀山先生の翻訳を褒めているじゃないか」。この醜さはどうですか？　最先端＝亀山郁夫の翻訳を褒めてしまったたくさんの読者というのは、実は騙されてしまっているという自覚のない被害者たちなんですけどね。マスコミは、自らその被害拡大に加担している――つまり「加害者」である――にもかかわらず、その責任を「専門家」たちと「読者」たち、すなわち、「加害者」たちと「被害者」たちとに押しつけるわけです。

ともあれ、最も罪の重いのは、真実を口にしない「専門家」たちです。「専門家」であるにもかかわらず、彼らは自分がこの問題に関係がないと思っているでしょう。いろいろな言い訳があるでしょう。自分はドストエフスキーの専門家ではないから。自分はドストエフスキーの専門家ではあるけれど、最先端＝亀山郁夫の扱っているテーマの専門家ではないから。他人の仕事の批判をしている時間などないから。……等々。

そうして――まだましな例では――、もし自分が最先端＝亀山郁夫を批判することがあるとしても、それは自分の専門の範囲内でしかしない＝それ以上のことをすれば、それは最先端＝亀山郁夫への「人格攻撃」になるから。この言い分はわからなくはない――こういうひとが百人出てくれればよいと思います――ですが、私がこういうひとたちにいいたいのは、それではこの問題全体

を矮小化をすることになるだろうということです。私はあなたがたにいいます。この最先端＝亀山郁夫現象は、もはやあなたがたがいま上品に――あるいは下品にならずに――自分の批判の範囲内に留まっていてよいほど小さな問題ではないのです。あなたがたは、――いまのあなたがたの認識では――自分の手が汚れてしまうというほどのところへまで深入りしなくてはならないのじゃないですか？　最先端＝亀山郁夫の誤りをあなたがただけがわかっていても駄目なんです。あなたがたはそれを他のひとたちに伝えなくてはなりません。伝えているよ、自分の専門の範囲内で。いいえ、いまや、それだけでは足りないんです。「読者」たちのことをあなたがたは本気で心配していますか？　ことに、若い「読者」たちのことを。最先端＝亀山郁夫の仕事が彼らにとってのスタンダードになってしまって、それでもあなたがたは平気なんですか？　あなたがたはもっと踏み込まなくてはならないのじゃないですか？　そのことによって自分の手が汚れてしまう――とあなたがたが感じる――ことになろうとも。あなたがたがそうしていれば、素人の私なんかがここまであれこれしゃべらなくてもよかったんですけれどね。自分は「専門」の「範囲内」で手を汚さずにいて、私のおしゃべりを「人格攻撃」呼ばわりしますか？　なぜ素人の私がここまでしゃべらなくてはならなかったんですか？　素人の私がどれだけこのことにうんざりしているか、あなたがたにはわかりもしない。このいまに至っても、まだ私たち――あなたがたの「範囲内」なんかでは収まらない現状を直視している――の批判を「人格攻撃」呼ばわりできるあなたがたの神経を私は疑います。いや、この「人格攻撃」ということばが曲者で、あなたがたはこれを隠れ蓑にしさえすればいいわけなんですよね。そうすれば、誰からも嫌われない。波風も立たない。「読者」のことなんかどうでもいい。

さて、「専門家」たちのなかで最も性質（たち）の悪いのが沼野充義です。なぜなら、沼野充義は「専門家」であり、なおかつ、一般読者に――ということは、一般読者たち向けの本の出版社の編集者たちにも、ということはマスコミにも――名の知られた人物だからです。さらに、日本ロシア文学会の会長だからです。

しかし、もういいかげん、このおしゃべりにもうんざりしてきました。予定より短く切り上げることにしましょう。

沼野　ところが、私が見ていて思うのは、『カラマーゾフの兄弟』が非常に売れて社会現象となって以来、亀山さんの存在そのものが、いまの日本の読書界の中で非常に重要な位置を占めることになった。その結果、自然と現代の作家たちとのつきあいが増え、対談や批評の場にもしばしば引っ張り出されるようになった。このところ、加賀さんや高村薫さんと対談をしたりとか、村上春樹について本格的な評論を書いたり、大江さんの書評をしたりとか、目覚しい勢いで活躍されています。面白いのはどんな日本文学作家を論じても、やっぱりすべて『カラマーゾフの兄弟』を訳し、ドストエフスキーにとり憑かれた人間の立場からの読みになっていることですね。その意味では、亀山さんは日本文学の風景の中に『カラマーゾフの兄弟』を引き入れたという功績があると言ってもいい。どうでしょう、そんなふうに現代の日本作家と接してみて、ドストエフスキーとの関わりにおいて何か共通するものがありましたか？

（沼野充義『世界は文学でできている』光文社）

これはだいぶ以前にも書いたことですが、それとまったく同じで、右の発言でも沼野充義は「やけくそ」です。こんな大人にはなりたくない――と来年には五十歳になる私はいいます。

さて、ここからは「おまけ」です。

問題　次の三つの引用を読んで、私がなぜそれらを引用したのか、考えよ。

引用その一。

ロシア文学・音楽と密接な関わり　『カラマーゾフ』は「第九」を意識
亀山郁夫・東京外語大学長に聞く

ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』の新訳などで高い評価を受ける亀山郁夫・東京外国語大学長（ロシア文学）が新著『チャイコフスキーがなぜか好き　熱狂とノスタルジーのロシア音楽』（ＰＨＰ新書）を刊行した。ロシアにおける文学と音楽の関わりについて、亀山さんに聞いた。【梅津時比古】

「ドストエフスキーはベートーベンの『第九』を意識して『カラマーゾフの兄弟』を書いたと信じています」と、著書にも書かれていない新説をまず語ってくれた。「第九」は言うまでもなく、シラーの詩をテキストにした「歓喜の歌」を終楽章に持つ交響曲である。

「『カラマーゾフの兄弟』では頻繁にシラーの詩が引用され、全体に音楽的感興に満ちています。ドストエフスキーは若い頃にシラーの理想主義から強い影響を受け、フーリエ主義（ユートピアを求める社会主義）にも近づきますが、シベリア流刑で理想と民衆の現実との乖離（かいり）を知る体験を経て、理想主義から離れます。しかし『カラマーゾフ』で再びシラーに戻り、異端も何もかも取り込んで、現実と理想との融合を図ろうとしている。『カラマーゾフ』はユートピア的な社会主義へのシンパシーを表すと同時に、キリスト教の礼賛でもある二重構造になっています」

空虚５度の和音で始まる「第九」の神秘的な冒頭は、小説ではどこにあたるのだろうか。

（毎日新聞　二〇一二年四月十二日　東京夕刊）

引用その二。

最後に、亀山先生はこう語ってくれた。「人間の体験や心情、内面的なものを深く詳細に表現できるのは、やはり言語によってです。そして、映画や演劇など様々な芸術表現がありますが、文学というのは何よりもダイレクト、かつ強いインパクトを私たちに与えてくれるものです。一方で、音楽というのは非言語的なものですが、これは文学や言語をさらに豊かにしてくれるものではないかと私は考えています。『カラマーゾフの兄弟』のラストシーンを訳しているとき、なぜか体中をベートーベンの『交響曲第９番』が流れ、私は何とも言えない高揚感に包まれたのです。音楽のような非言語的なものというのは、言葉に広がりを持たせてくれます。言語と非言語が共に積み重なり、何か素晴らしいものを生み出すのです。言語的感性を磨きたければ、非言語的なものにも触れること。これは、英語を学ぶうえでも大切なことなのではないか、そんなふうに私は考えています」

（「『自分には必要ない』と扉を閉ざさないで。世界はきっと、喜びに満ちている。」http://www.eiken.or.jp/eikentimes/lounge/201201.html）

引用その三。

亀山『カラマーゾフの兄弟』のフィナーレは、希望の提示ではありません。「カラマーゾフ、万歳！」は、一瞬の興奮であり、酔いであり、永遠と運命の圧倒的な力の前でのつかのまの酔歌です。それでいいのだと思います。カタルシスでよいのです。フィクションそのものに、人間の情動を根源的に揺り動かす何かがあれば、それ自体が希望です。生命の蠢きを瞬間的に可能にする何かの力があれば、上っ面な希望は要らない。文学の使命はもはやそんなところにはないと思うんですよ。

（沼野充義『世界は文学でできている』　光文社）

ああ、馬鹿馬鹿しい。

（二〇一二年八月十四日）

（追記）

「立場」が人間よりも上にあるような社会なので、「立場」を守るということが何よりも優先され、「立場」を守るためには何をしても許されます。

その代表的な例が、福島第一原子力発電所の事故でした。

事故直後からテレビや新聞などには連日のように「専門家」が登場しましたが、その多くは、私たち国民の疑問や不安を払拭するようなことは言ってくれませんでした。

なかには、まったく根拠のない「安全性」ばかりを繰り返し述べたあげく、そのウソが露呈してしまって「御用学者」と攻撃をされてしまった方たちもいました。

なぜ専門家を名乗る方たちがこんな体たらくになってしまったのかというと、すべては「立場」を守るためです。

学問の世界はみなさんが思っている以上に、はるかに複雑に「絆」が張り巡らされています。たとえ本当のことでも、そのなかで生きている人たちにとって、自分ともちつもたれつで生きている方たちの「立場」を危うくするような発言をしたら、自分の「立場」も危うくなります。そこで、みんな「立場」を守るとしたら、当たり障りのない発言でごまかすか、適当にウソをつくしかないのです。

そうして編み出されたものが、私が「東大話法」と呼ぶ独特の話法です。彼らはこの話法をつかって、ウソをつき、責任の所在を曖昧にし、国民をケムにまいてきました。

（安富歩『もう「東大話法」にはだまされない』（講談社＋α新書）

――というわけで、もうやけのやんぱちのようにして最先端＝亀山郁夫の仕事の実質をごまかし、正反対の評価を公言する卑怯者＝沼野充義の新たな文章をここに掲げておきます。沼野充義がどのように「ウソをついている」のかは、どうぞみなさんでお考えください（そのウソの見分けかたについて私はもう十分しゃべったと思います。引用した安富歩の文章は、いっそう説得力があります。そうして、沼野充義に新しいウソの手法はありません）。というわけで、読んでいただければわかりますが、もちろん「ウソ」だらけです。沼野充義にとっては、ドストエフスキーよりも、その作品の読者よりも、最先端＝亀山郁夫を守ることの方が大事なんです。「文学」（＝）「人間」よりも、自身の「立場」を守ることの方が大事なんです。よくもまあ、こんなことができるものだ！

人間としての当人不在という文章を書くひとのすべてを卑怯者と呼ぶべきです。そういうひとたちが、普通の意味でどんなに「いいひと」であるかは関係ありません。おそらく、沼野充義というひとも普通の意味ではきっと「いいひと」なんでしょう。

「専門家」が他の「専門家」を批判するとしたら、それはそれは膨大な労力を必要とするのかもしれません。自身の研究をそっちのけにしなくてはならないほどのことなのかもしれません。そうして、たとえば「ロシア文学」に関係する「専門家」たちには、それぞれ多様に細分化された「専門」の範囲というものがあって、自分の専門範囲はトルストイに限られる、だとか、ドストエフスキーだけれど、「ドストエフスキーの○○について」に限られる、とか、あるんでしょう。しかし、そうだからといって、ここまで愚劣な現象となってしまった最先端＝亀山郁夫の仕事を批判しなくていい・批判する資格がないなどといってしまっていいわけがありません。「専門家」としてロシア文学に携わる誰もに、最先端＝亀山郁夫の暴走を止める義務があるだろうと私は思います（このひとたちでなくて、他の誰がするのか？）。なのに、ほんの数名を除けば、彼らは「たとえ本当のことでも、そのなかで生きている人たちにとって、自分ともちつもたれつで生きている方たちの「立場」を危うくするような発言をしたら、自分の「立場」も危うく」

なることを恐れて、口をつぐんでいるわけです。そんなひとたちが「文学」（＝「人間」の仕事をしているんだなどとよくもいえたものです。そういうわけで、沼野充義を会長とするような日本ロシア文学会というのは卑怯者の集まりだということです。いや、こんなひとたちでは、そもそもドストエフスキーの作品が読めないわけです。せめて、自分は卑怯者だという自覚には苦しんでいてほしいですね。しかし、その自覚に陶酔せずに。

沼野充義を筆頭とする「専門家」たちの大きな誤算は、まさかここまで最先端＝亀山郁夫がその最先端ぶりを発揮するなどと思いもしなかったことなんでしょう。しかし、たしかに最先端＝亀山郁夫はその最先端を突っ走りました。その姿を見送りながら、沼野充義たちは唖然としつつ、「賽は投げられた」とか「毒食わば皿まで」などという心地で、その最先端を応援しつづけなければならないわけです。こんな大人にはなりたくない――と来年には五十歳になる私はいいます。私だっていろんなウソをつきつづける卑怯者に違いありませんが、このことだけには絶対妥協できません。

お待たせしました。それでは、「ウソつき」の卑怯者――沼野充義の恥知らずの文章をいよいよ読んでいただきましょう。

今週の本棚：沼野充義・評　『謎とき「悪霊」』＝亀山郁夫・著

◇原作と張り合う「偶像破壊」的な集大成

『謎とき「悪霊」』は、『カラマーゾフの兄弟』の新訳によって「古典新訳ブーム」に火を付けた亀山郁夫氏による、本格的な『悪霊』論である。ドストエフスキーのこの長篇については、本書と並行して、注目すべき仕事が二つ同氏によって行われていることにも言及しておく必要があるだろう。一つは、『悪霊』そのものの新訳（光文社古典新訳文庫、二〇一〇－一一年）で、今年の二月に刊行されたその「別巻」には、「スタヴローギンの告白」と一般に呼ばれる章の三種類の異稿の翻訳が収められ、詳細に比較対照されている。

さらに今年の四月にはロシアを代表する文学研究者の一人で、とりわけ『悪霊』研究の第一人者として知られるリュドミラ・サラスキナと亀山氏の対話と質疑応答をまとめた『ドストエフスキー「悪霊」の衝撃』（光文社新書）という本も刊行されている。日本のドストエフスキー読みが、本場ロシアの第一線の研究者とこれほどがっぷり四つに組み合ったのも、これがおそらく初めてではないか。

今回出版された『謎とき「悪霊」』は、この小説に関する亀山氏の精力的な仕事の集大成といった性格を持つ。ただし、作家の伝記、時代背景から、小説の細部の分析、そしてテキストの表層の下に隠された謎に至るまで、あらゆる面を丹念に検討して、総合的にまとめた本としてはまったく新しい著作である。しかも、一冊の書物として、何よりも面白い。亀山氏の研究の特色は、文献の博捜、執拗とも言えるほど細部にこだわったテキストの読みと、慎重な研究者がその前で立ち止まるような一線を踏み越える偶像破壊的なヴィジョンの結びつきであって、この『悪霊』論もその結果、原作そのものに張り合えるくらい魅力的な、独自の価値を持つ著作になっている。

『悪霊』は、当時のロシアの革命家グループの中で起こった「リンチ殺人事件」をモデルにした作品であり、日本の連合赤軍事件をはるか百年前に先取りした予言的小説として有名だが、それ以外にもリベラリスト、人神主義者、民族主義者などの様々な声がにぎやかに議論を闘わせる。そして小説は登場人物たちの夥しい死によって彩られながらも、秘められた性的欲望や陰惨なユーモアといった要素にも事欠かず、そのあまりに雑多な要素を取り込んだ構造を見ると果たして成功作なのか疑わしくなるほどだが、それだけに多くの起伏とそこに秘められた謎に満ちている。最大の謎はおそらくスタヴローギンというカリスマ的人物と、彼が犯した少女陵辱についての「告白」をどう読むかということだが、亀山

氏はその謎に徹底的に分け入り、少女が犯される場面に秘められたマゾヒスティックな性的欲望の問題を大胆にえぐり出した。

日本における「ドストエフスキー読み」の伝統は長くて深い。亀山氏の『謎とき』に直接先行するものとしては、江川卓による『謎とき「罪と罰」』『謎とき「白痴」』『謎とき「カラマーゾフの兄弟」』という三冊（いずれも新潮選書）があった。江川卓こそは、形而上学ないし人生論のどんよりとしたぬかるみから、小説テキストとしてのドストエフスキーの豊かさと面白さを救い出した功績者であった。それを受け継ぐ亀山郁夫は、先行者に比べると自分の思い入れを好んで語る点がより「ロマンチスト」だが、その分読者を引き込むヴィジョンの強さでは勝っているとも言える。ドストエフスキーはこうして生き続ける。古い謎が解かれるとともに、新しい謎を生みだしながら。

（毎日新聞　二〇一二年九月十六日　東京朝刊
http://mainichi.jp/feature/news/20120916ddm015070005000c.html
http://mainichi.jp/feature/news/20120916ddm015070005000c2.html）

（二〇一二年九月三十日）

なぜあるひとたちの目には最先端＝亀山郁夫批判が醜悪に見えるのか？
――再び「連絡船」の一読者へのメール

（この章は一昨年、二〇一二年八月十四日に書き上げていたものです）

あなたが「民主主義者であることと知識人であること」の複雑さと責任の大きさとを過小評価しているはずはありません。では文化の問題、具体的に文学の問題に関しても民主主義者であろうと思われますか。思っていらっしゃらないのではと推察します。私たちの敵――真剣な文学の敵――のなかには、搾取的な消費文化を忌み嫌う私たちのような人間を「エリート主義者」と決めつけ、「民主主義者」の呼称は自分たちのものだと主張している人びとがいます。そこで私たちのなかで、政治的システムとしての民主主義への賛意と、文化のシステムへの疑念とは、どうしたら和解させられるのでしょう。手ごわい問題がまだまだあります……

（スーザン・ソンタグから大江健三郎への書簡　木幡和枝訳
大江健三郎『暴力に逆らって書く』所収　朝日文庫）

だいぶ以前に「「連絡船」の一読者へのメール」という文章を書きました。再び同じ読者へのメール――実際には送付しない――を公開します。ここで書くことは、この「亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』がいかにひどいか」でも、おそらく繰り返し――徒労だろうと思いますが――書かなくてはならなくなるはずのことであり、また、すでに書きあがっていたにもかかわらず書き直さなくてはならなくなった次の原稿（新訳『トーニオ・クレーガー』についての）への橋渡しになるはずでもあり、こういう形で公開します。

＊＊＊さま

実のところ、私がここで書くことは、前回の「「連絡船」の一読者へのメール」の繰り返しでしかありません。つまり、前回の文章――のみならず、この亀山郁夫批判の全体も――をどうやらあなたがまったく理解なさらなかったようなので、もう少しわかりやすく書き直してみようというのです。私はべつにあなたに怒りを覚えたり、憎んだりしているわけではありません。あなたの書かれた文章を読んで、ちょっと驚きはしましたが、それだけです。なるほど、あなたがあのように書かれたのも無理はありません。どうか、私がこういうふうに書くことを怒らないでください。しかし、この文章はあなたに手厳しいものになるでしょう。もしかすると、あなたはただ憤激するだけになるかもしれません。でも、しかたがないのです。

私は、私の亀山郁夫批判が、あるひとたち――結局のところ、あなたもそのひとりなのです――の目にどんなふうに見えるかということをずっと承知しています。私の批判が亀山郁夫に対して「暴力的」であり、彼の「人格を踏みにじる行為」であり、実は批判などではなく「誹謗中傷」に過ぎない――そのように非常に醜悪に見えるのだろうと思います。そんなふうにしか見えないひとたちの大勢いることを私は理解しています。その大勢のなかに当の亀山郁夫も混じっていることでしょう。たしかに私は亀山郁夫の名前を「最先端」という冠づきで書きますし、「馬鹿」だの「低能」（これまで私はずっと「低脳」と書いてきましたが、すべて訂正します）だのと呼んでいます。そうして、亀山郁夫の、『カラマーゾフの兄弟』と直接に関係がない（としかそのひとたちには思えない）発言などにまで罵詈雑言を吐くわけです。さらに、「馬鹿＝低能」ゆえに亀山郁夫が私の書くことを理解することは絶対にない、というようなことを書きもしています。

私のやっていることについて、私個人が亀山郁夫個人に対決を挑んでいるかのように考えるひとたちがいるのを、私は承知しています。私が私個人の正しさを主張し、亀山郁夫を打ち倒そうとしており、それがなかなかかなわないので、いよいよ誹謗中傷めいたことを執拗につづけている、云々。

私の批判が亀山郁夫に対して「暴力的」であり、「人格を踏みにじる行為」であり、実は批判などではなく「誹謗中傷」に過ぎない、と考えるひとたちは、私の問題にするこの「亀山郁夫現象」の意味、またその大きさや危険性などがまったくわかっていないひとたちなのです。また、原作の『カラマーゾフの兄弟』の素晴らしさがわかっていない――きちんと読めていない――ひとたち、「文学」がこの世界でどんなに重要な意味を持っているかがわかっていないひとたち、読書する力のないひとたち、単に読書するというだけでも大きな志や信念が必要とされることがわかっていないひとたち、何かを表現するということがどういうことなのかもわからず、わかる力をも持っていないひとたち、自分で考えるということのできないひとたちに他なりません。このひとたちは、自分で考えることができないから、他人の考えに頼るけれども、その他人の考えすら理解することができないために右往左往します。このひとたちが安心できるのは、自分たちのレヴェルに合わせてくれる他人だけです。自分たちを針の山に連れ出すような他人に向き合うことができません。このひとたちの読書はこうです。「私はこの作品をよいと思った。でも、この作品をよいと思わないひともいるだろう。そういうひとたちの感想もアリなのだ。なぜなら、作品をよいと思うのは、あくまで私の主観だからだ。ひとの数だけ主観はある。だから、私は他のひとたちの読書を否定しようとは思わないし、そんなひとたちを説得しようとも思わない」。そうして、誰かに自分の大事に思うその作品をめちゃめちゃにけなされ、お前のような読書をしていては駄目だ、と批判されたときに、そのひとたちがどうするかというと、「私は私、あなたはあなた。私がよいと思っていることに、なぜあなたが踏み込んで来るのか？　そんなことはよしてほしい」と答えます。なぜそのひとたちは批判――もっとも、それは正しい批判に限ります、的外れな批判には答えようもありません――そのものを拒否するだけで終わりにして、自分が大事に思ったその作品を批判に答えることで守ってやらないんで

しょう？　なぜかというと、そのひとたちがその作品をよいと思ったとしても、そのよいと思ったことに自信がないからです。あるいは、そのひとたちがその作品をよいと思ったとしても、実は単に「好き」だというに過ぎないからです。そのひとたちは、作品それ自体に「よい・悪い」があるのだとは思っていません。「よい・悪い」はあくまで自分の価値観・主観であるとしか思いません。そのひとたちは、作品に「よい・悪い」があるのではなく、あくまで、そのひとたちとそのひとたちに対立するひとがいるという、そんな人間関係――あなたはご自身の個人的体験から、一方的にご自身が執拗に非難されつづけることの悲惨を私にいい、亀山郁夫の心情を理解せよという――しかないんです。すべてはそういうレヴェルの人間関係でしかなく、みんなが互いに干渉せずにうまくやればいい、ということです。自分の読書のことで誰彼を批判するなんてとんでもない、ということです。自分には自分の読書があり、他人には他人の読書があり、そのままバラバラでいればいい、ということです。ということは、「亀山郁夫の翻訳や作品解釈に問題のあることはわかった。しかし、それならば、亀山郁夫がそれらの問題を改めればいいことじゃないか？　亀山郁夫だって一所懸命に仕事をしたのだ。何も全否定することはないじゃないか？　亀山郁夫にも守られるべき人格はあるはずじゃないか？　亀山郁夫にもよいところはあるのじゃないか？」云々ということです。そのひとたちには、亀山郁夫の仕事を全否定してまで『カラマーゾフの兄弟』を守らなくてはならないなどという発想が全然ありません。もちろん、亀山郁夫の人格は守られなくてはなりません。――と私がいうのは、私に亀山郁夫の人格を否定しているという自覚がないからです。何をいっているのか？　とあなたには思われるでしょうが、そうなんです。「馬鹿＝低能」呼ばわりしても、私は亀山郁夫の人格を否定してはいない、といいます。

さて、右のようなひとたちのことを、あるいは、こういってもいいでしょう。修練を積んでいないひとたち、未熟なひとたち、初心者たち……。――と、こういうだけで、あなたは私のこのいいかたを傲慢だといって、非難するかもしれません。

ちょっと、これを引用します。

「そんな簡単なことではないんだよな」と私は言った。「絵でも音楽でも、すべての人が共通に感動するものなんてないだろ？『ここに窓がある』とか『いま音が鳴っている』みたいな物理的な次元だったらすべての人に共通にわかるけど、絵や音楽による感動はそういうものではない。だけど、いい音楽とダメな音楽という違いは厳然とあって、それは受け手の側の主観の問題だけでは片づけられない」

ゆかりはちょっと警戒したような顔で頷いた。というか、言いたいことがあるみたいだったけれど、「聞いている」という意味でいちおう頷いた。

「それと同じことで、家にたいする記憶とか思いとか、そういうことが前提となって、それを基盤にして生まれてくる独特な感受性が醸成されている人にだけ見える現象っていうのも、全然ありえないわけじゃないんじゃないか――ていうこと」

「え、――でもそれって、やっぱり主観っていうか、一人の人の心の中でしか起こらないことなんじゃないの？」

「だから、そんな単純なことじゃないんだよ」

と言ったところで、台所からジョジョが「アーン」とも「オーン」とも聞こえるカン高い声で鳴いて私を呼んだので立ち上がると、私の動きに「待った」をかけるようなタイミングで、ゆかりが、

「でも、いい音楽とダメな音楽なんて、そんなこと誰も決められないんじゃないの？」と言った。

「おれも十九の頃はそういう言い方をする人のことを嫌いだったよ」

と言って、私はジョジョが待っている台所へ歩いていき、ゆかりも、それからゆかりにつられてミケも、私のうしろからぞろぞろついてきた。

……（中略）……

「さっきの叔父ちゃんの言い方って、ズルいんじゃないですか？」
と、ゆかりが言い出した。
「『おれも十九の頃はそういう言い方をする人が嫌いだった』っていうやつか？」
ゆかりがずうっと言いたそうにしていたので、私もそれを忘れていなかった。
「うん、だって、そういう言い方されたら、十九から先のことを経験していないあたしは何も言えなくなっちゃうじゃないですか」
「だから、そういうつもりで言ったんだよ」と、私は言った。
「『黙ってろ』っていうことですか？」
「『いまの自分が感じていることや考えていることがすべてではない』っていうことだよ」
「同じじゃないですか」
「そんなことはないさ」私は言った。
……（中略）……
「十年後二十年後に自分がどういう風に変わっているのかという具体的なことはわからないけど、そのときもいまと少しも変わっていないとは、ゆかり自身だって思ってないだろ？」
と言った。
「でも変わっていないかも知れないでしょ？」
こういうバカバカしい反論は苛々するが、我慢して言った。
「さっきおれが『いい音楽とダメな音楽』って言ったときに、ゆかりが『違う』と思ったのは、いい悪いっていう評価がゆかりの中ではまだ、学校の教師の権限の行使ぐらいにしか思えていないからなんだよ」
「だって、いいとか悪いとかなんて、誰かが決めなかったら、そんなものどこにもないんじゃないですか？」
「それがあるんだよ」私は言った。
「だって、一人の人にはいい音楽だけどもう一人の人にはダメとか、そういうことしか言えないはずじゃないですか」
私は理恵に替わってほしくなっていた。理恵と私が同じことを言うはずはないが、いまここにいる自分ばかりが大事だと思う気持ちを強引にどこかに連れていこうとする力では理恵の方が私よりずっと上だ。もっとも理恵とゆかりはそういうやりとりをもうさんざんやっているはずで、一面的な論理の使い方を覚えた十代の精神というのは結局言葉だけでは変えられないということなんだろうと思いながら言った。
「実際に自分の目で確かめられないところにも世界があるっていうことを、ゆかりは実感できないだろ」
「それとこれとは関係ないんじゃないですか？」
「関係あるんだよ。
実感する？」

（保坂和志『カンバセイション・ピース』新潮文庫）

あなたも右のゆかりと同じ――あなたはゆかりよりもひと回りほど年長ですが――です。「いまここにいる自分ばかりが大事だと思う気持ち」に憑かれたひとです。私はといえば、すでに右の「私」よりも年を取ってしまっています。そうして――あなたのおっしゃるように――私はもうほとんどこの私がどんなことになろうが放っておけ、という気持ちです（あなたはこれをよくないことだとおっしゃる）。しかし、あなたの考えているのとは違って、この私というのは、私のためにあるわけではないんです。これは、私が私を大事にしないということではないんです。私に私がないということでもありません。私が私について無責任だということでも、もちろんありません。何度でもいいますが、私はこの最先端＝亀山郁夫批判を好きでやっているのではないんです。私は私がこれにどれだけうんざりしているか、何度も書いてきました（それを信じてもらえないのでしょうか？）。ですから、もちろんこれは、私のなかにある「欲求」なんかのためでもありません。私は自分を偉く見せようとしているのではありません。そんなことに私の関心はありません。そんなことはどうでもいいんです。私は、

しかたなく、他にどうしようもなくやっているんです。やらざるをえないんです。いいですか、私が執拗につづけているこの亀山郁夫批判は、私が自分のために――私の自尊心の満足のために――やっているのじゃないんです。そうして、これはまた、やらなくてはならないことなんです。私はこれをやめるわけにはいかないんです。どうしてこれがあなたにわからないのでしょうか？

ここから亀山郁夫にいつもの冠をつけることにします。

これをいうのはつらいけれども、いいましょう。現在のあなたには、私の書いている最先端＝亀山郁夫批判にあれこれいう力なんかないんです。あなたはまったく勘違いしています。最先端＝亀山郁夫が『カラマーゾフの兄弟』にどれだけひどいこと、危険なことをしているか、その読者にどれだけひどいこと、危険なことをしているか、あなたはまったく理解していません。しかし、これは、修練を積んでいないひとたち、未熟なひとたち、初心者たちに恥ずかしいことではありません。しかたのないことなんです。――というと、さらにあなたは怒るかもしれません。しかし、私はあなたを上から押さえつけよう、あなたの意見を無理やりねじ伏せようとしているのではないんです。とはいえ、あなたにどう思えようと、これはどうしようもありません。

いいですか、いまの『カンバセイション・ピース』の話でいえば、あなたと私との主観がどうであろうが、それとはべつに「いい音楽とダメな音楽という違いは厳然と」あるんです。そうして、私はそのことを知っています。あなたはまだ知らないんです。

右の「いい音楽とダメな音楽」というのを、「いい作品とダメな作品」というふうにいい換えることにします。「音楽」に限らずに「芸術作品」全般というふうに考えてもいいんですが、いまここでは、「文学作品」ということで考えることにします。「芸術作品」とか「文学作品」などの定義を私はしませんが、こう考えてください。それを損なうことが、「人間」を損なうことになるものなのだ、と。人間はそれを必ず守らなくてはなりません。それは人間が「人間」であるからこそ生まれたものであり、「人間」の証であり、それなくして人間は「人間」でいられない。もちろん、それなくしては、あなたも「人間」でいられません。あなたも、あなたの周囲のすべてのひとも、あなたの次の世代、またその次の世代のひとたちも、です。しかし、当然のことながら、これもあなたには理解することができません。

ずっと長いこと、私が周囲の誰彼からうんざりするほど聞かされつづけていることばが「ひとぞれぞれ」という返事なんですね。これとセットになっているのが「あなたは自分の価値観をひとに押しつけ過ぎる」ということばです。しかし、私は私の価値観＝主観をそのひとたちに訴えているのではなくて、その主観とはべつに「作品」の「よい・悪い」が存在するのだといっているだけなんですが、そのひとたちにはどうしてもそのことがわかりません。わかろうという気すらありません。あなたはこの「連絡船」の初期からの読者でもありますから、私が作品の「よい・悪い」と「好き・嫌い」をごっちゃにしてはいけない、と口を酸っぱくしていいつづけているのをご存知のはずです（この稿を書くために、あの頃の文章――「航行記（1）・（2）」――を斜めに読み直してみると、われながら驚くほどいまと同じです。まるで当時からこの亀山郁夫批判をしていたかのようです）。ともあれ、「ひとそれぞれ」という返答を受けるたびに私は毎回小さくないダメージを受けています（ダメージを受けるということは、私の馬鹿馬鹿しい自尊心がダメージを受けているということです。しかし、そんなことはどうでもいいんです）。で、私にそう返答するひとたちは、自分の主観の砦のなかに閉じこもるわけです。あなたも同じです。

いい作品とダメな作品という違いは、あなたや私の主観にかかわらず、厳然としてあります。そうして、私は「作品」というのが、作家の「なにを描くか」と「どのように描くか」とのせめぎ合い・たたかいの軌跡だ、と、これも口を酸っぱ

くしていいつづけてきています。作家の「なにを描くか」と「どのように描くか」とのせめぎ合い・たたかいの軌跡でないものを「作品」などと呼んではなりません。

さて、あなたがた「ひとそれぞれ」のひとたち、自分の主観の砦を大事にするひとたちは、ここまでを読んですら怒りと不快に包まれることになります。自分たちが馬鹿にされているように感じ、私を傲慢だと感じるわけです。そんなふうにあなたがたが感じるのは、あなたがたの読書が甘っちょろく、薄っぺらいからです。あなたがたが自分のために読書しているからです。あなたがたが読書しながら、その読書している自分というものを大事にしすぎているからです。自分が当の作品をきちんと読めているかどうか、いつも自信を持てないからです。あなたがたの読書が「好きだ」、「気に入った」などであり、そのとき必ず「自分が」となるような読書だからです。あなたがたの「自分」なんかどうだっていいんです。それがわからないから、私のことばに怒りと不快とを感じるんです。いいですか、読書するときに、あなたがたのちっぽけな「自分」なんかどうでもいいんです。べつのいいかたをすれば、あなたがたの「自分」がちっぽけにしか思えない――しかも、そんなことすら気に留まらない――ような読書をしなくてはならないんです。そういう作品をどんどん読むべきなんです。「自分にはこの作品を理解できていないかもしれない」なんて不安すら忘れさせるような圧倒的な作品こそを読むべきなんです。そういう読書経験がないから、いつまでたっても、自分可愛さで、読者の主観とはべつのところでいい作品とダメな作品という違いが厳然としてあることを認められないんです。いいですか、読者としての「自分」のことなんか放ってしまえばいいんです。読者は作品に奉仕しなくてはならないんです。そして、いいですか、読者が奉仕すべきものだけを「作品」だと私はいうので、世のなかで「作品」という名目で流通しているもののすべてについていっているのではありません。つまり、いい作品とダメな作品ということでいえば、読者が奉仕すべきなのは「いい作品」にだけだということです。そうして、「ダメな作品」は実は「作品」ですらありません。

さて、あなたは私について「人を踏みにじるのはいけない、人に悪意をぶつけてはいけない、それをわかっている人」であり、「人の悲しみや思い込みによる呪縛やその害悪を憎み、それをなくそうと心を砕いている人」だと評価しつつ、その私がなぜ「「特定の条件下では人を罵り悪意をぶつけることが許される」と考えるのか」と問うておられます。つまり、この最先端＝亀山郁夫批判を咎めておられる。私の答えはこうです。非常に簡単です。最先端＝亀山郁夫の仕事が「人を踏みにじる」ものであり、「人に悪意をぶつける」ものであり、「人の悲しみや思い込みによる呪縛」をもたらすものであり、「害悪」なのです。私のやっていることは、最先端＝亀山郁夫を罵るためのものなんかじゃありません。そうではなくて、あなたのいわれる「人」――私の右に述べた「人間」――を守るためのものです。そうして、私は最先端＝亀山郁夫に「悪意」など持ちません。私信でも書いたと思いますが、私には最先端＝亀山郁夫なんかどうだっていいんです。私は彼が消えてなくなればいいと思っています。しかし、これは最先端＝亀山郁夫の、いまの位置からの撤退――謝罪および一連の仕事の撤回、著作の絶版・回収等――を望んでいるだけのことです。その先の最先端＝亀山郁夫の具体的な人生のことなど知りません。私が自分の勤める書店での万引犯に望むこと――謝れ、これまでに盗んだものの料金を払え、もう二度と店に来るな――と同じです。ただし、万引犯と最先端＝亀山郁夫とで異なるのは、万引犯が自分のしたことを理解している――謝罪の意図があるかないかにかかわらず、たしかに自分の行為を理解している――のに対して、最先端＝亀山郁夫には自分が何をしたのかがまるで理解できないでいるということです。今後も理解できないでしょう。最先端＝亀山郁夫を説得しようとしても無駄なのです。ついでに、万引犯の話もしますが、私は万引犯と関わり合うたびに自分がひどく傷つくのを自覚しています。捕まえて「どうだ、ざまあみろ」などと得意がったりなどまったくできません。万引犯を捕まえて問いつめていくほどに、自分にそんな偉そうなことをいえるはずもないという意識がどんどん強くなっていくんです。この苦痛をあなたに理解することができますか？　できません。

おそらくあなたは私のいう、最先端＝亀山郁夫の仕事が「人を踏みにじる」ものであり、「人に悪意をぶつける」ものであり、「人の悲しみや思い込みによる呪縛」をもたらすものであり、「害悪」なのだ、ということが理解できないだろうと思います。たかが『カラマーゾフの兄弟』を誤訳だらけに翻訳しただけで、なぜその翻訳者の仕事が「人を踏みにじる」ものであり、「人に悪意をぶつける」ものであり、「人の悲しみや思い込みによる呪縛」をもたらすものであり、「害悪」ということになるのか？　何だ、それは？　いったい何をいっているのか？——というふうだと思います。だから、私の批判が最先端＝亀山郁夫を「罵り悪意をぶつける」ものにしか見えないのです。

あなたには、ある作品を読んで、こういう作品は世のなかのすべての作家がどんなに力を尽くしても書きえないものだ、世界じゅうの十年、二十年単位、いや五十年、百年単位で考えても、こういう作品はそうそう生まれえないものだ、いや、こういう作品の生まれたのはまさに奇跡だ、とあなたが絶対的確信をもっていいうるような作品を読んだことがないのです。そうして、そのとき、そのあなたの確信が、あなたの主観なんかによるものじゃないということまでがあなたにわかっている——そういう経験がないんです。だから、私の批判が最先端＝亀山郁夫を「罵り悪意をぶつける」ものにしか見えません。

この世界のなかで「文学」がどのようなものであるのか？　それをあなたはまだ知りません。「文学」は「娯楽」でもなければ「教養」でも「知識」でもありません。あなたの「自分」＝「私」を高める「手段」でもありません。「文学」は、あなたの「自分」＝「私」の外にあるものではなく、あなたが「他者」とか「モノ」などというように客観的に見ることができるようなものなどではないのです。「文学」とは、「人間」であり、「あなた」なのです。

しかし、私がこういっても、あなたにはわかりません。

さて、ここで引用します。

音楽は耳の勉強だ。だからききかたがわるければだめ。三味線はツボあたりがわるければ、いい音が出ない。あのながい棹だ、ツボがどこというところがない。

ピアノは誰がひいてもそこの音は一応出る。三味線はそういかない。耳にはずれがあるものは、いい音をさがせない。耳がわるいひとはまちがっても、それがいい音だと思っている。いい音がどうして出るかの研究がないとそれだけの音しか出ない。

いい耳になる勉強は、いい音をきくしかない。いいものをきくといいなと、その音に心がむくが、いまの人はまちがいなくひいたかどうかばかりみて、音色や気持のことはあまり思わない。

（高橋竹山『津軽三味線ひとり旅』　中公文庫）

音色のことをかんがえれば三味線は今日一曲覚えて、明日別な曲をというふうにはやれないはずだ。耳について神経のない人はなんでもすぐ変った曲を覚えたがる。一ヵ月に二曲も三曲も覚えたといって自慢している人もいるが、それは数を覚えただけだ。そんなもの舞台でやったってだれもきく人がない。

一つの曲をじっくりやって新しい曲になかなかすすまない人もある。しかし結局上達するのはその人のほうが早いし、なによりも人がきく。人がきける仕事をするもんだ。

（同）

何年やったって、完璧にやれるということはない。やれることを一生懸命やって、やれないことはやれないとはっきり自覚すればいいんだ。やれないといったところで罰金とられるわけでない。やれる人にやってもらえばいい。ところがなにもやれないくせに、はっきりやれないと

いうのが好きでない人がいる。そういうのに限って自分の仕事でも無責任きわまる、勉強もしない、それほど自分をみる眼がないんだ。

自分はやれないと思えばこそ、勉強するもんだ。恥ずかしいといいながら、あまり本気で勉強もしない。

（同）

右三つの高橋竹山のことばを、あなたと最先端＝亀山郁夫とに捧げます。あなたも最先端＝亀山郁夫も「まちがいなくひいたかどうかばかりみて、音色や気持のことはあまり思わない」ひとだと思います。最先端＝亀山郁夫は「まちがいなくひいたかどうかばかり」みつつ、「まちがい」しかひけないひとだと私は思っています。真面目にいいますが、最先端＝亀山郁夫というひとは、本当に「まちがい」しかできないか？「まちがい」を気にするからです。あなたも同じです。最先端＝亀山郁夫にもあなたにも「いい悪いっていう評価が……学校の教師の権限の行使ぐらいにしか思えていない」のです。

あなたのお書きになった「相手には相手の真実があり正義があり、その正義が、「相手の正義と自分の正義と相容れない」状況は当たり前に生じる。違うだけ――相手と自分が大切にしているものが、大切なものの優先順位が違うだけ」というのは、まったく間違いです。「人を踏みにじるのはいけない、人に悪意をぶつけてはいけない、それをわかっている人」であり、「人の悲しみや思い込みによる呪縛やその害悪を憎み、それをなくそうと心を砕いている人」が、「人を踏みにじる」ことを自分の「真実」と「正義」とし、「人に悪意をぶつける」ことを自分の「真実」と「正義」とし、「人の悲しみや思い込みによる呪縛」をもたらすことを自分の「真実」と「正義」だとする相手を前にしたとき、どうすればいいとあなたは考えているのでしょうか？　そのときでも、あなたは両者の対立を「どっちもどっち」という相対的視点でしか考えないのでしょうか？　これを「大切なものの優先順位が違うだけ」などとしか考えないのでしょうか？　しかし、しかたがありません。あなたのようなひとは実にたくさんいるでしょう。さらに「正しいことは尊重されるべきだ。それはそうだ。ではなぜその正しいことは尊重されていないのか――相手が間違っていることに気づかない愚かな人間だからだ――本気でそう思うの？　私にはそんな状況が「有り得ない」と思うから、その考え自体に驚愕する」とあなたの書かれたのに私は「驚愕する」――というより「やれやれ」と思う、「ああ、やっぱりそうか」と思う――のです。

また、あなたの「肥大した自尊心がどういうものかを理解しつつ、自分がどうなのかを検討し、自分はとり憑かれていないと結論を出し公言しているものの、他人からみればとり憑かれていると見える人がいます。なぜなのだろう、とずっと疑問だった」が私を批判していることはわからなくはないですが、あなたは、私が以前に引用した萩原俊治氏の文章をまったく理解していません。これです。

しかし、その後、マルケルと同じようにドストエフスキーは回心する。なぜ、回心したのか。これも既に述べたように、それは自分の存在が無であることに気づき、自分が自分を創り出した神のものであることが明らかになったからだ。私たちは死んだときはもちろん、生きているときも常に、無になって神のもとに還っていかなければならない。これが謙遜というものだった。従って、回心した者にとっては、不完全な私たちが、お互い助け合いながら謙遜のうちに生きなければならないということは明白な真理なのである。このとき回心した者にとっては絶対的平等が実現する。なぜなら、百歳を越えて生きる人も生まれてすぐ死ぬ人も、障害をもって生まれた人も健康な人も、醜い人も美しい人も、赤貧の中で生きた人も安穏な生活を送った人も、頭の良い人も悪い人も、平和の中で生きた人も戦争の中で生きた人も、すべて無に還るという意味で平等なのであるから。

しかし、このような平等観に立つということは、回心していない人々が引き起こす争いに苦しむということに他ならない。なぜなら、回心し

た者は自分の神中心主義な立場を捨て、特定の誰かの味方になるということができないからだ。たとえば、そのような者は農奴制を容認する圧制者を殺し、農奴制に苦しむ農奴たちを解放することはできない。なぜなら、神の前ではその圧制者も農奴と同じように私たちの隣人であり、農奴と同じように無にすぎないからだ。私たちは隣人を殺すことはできないし、無である私たちに誰かを殺す権利もない。そのような権利を持つのは神だけだ。従って、絶対的平等の立場に立つ者は、暴力革命を否定しなければならない。ということになれば、謙遜を明白な真理とする回心した者こそ、圧制者にとってもっとも都合のよい存在になる。

こうして二つの明白な真理、すなわち、革命と謙遜とが対立する。革命を明白な真理とする者にとって、謙遜を明白な真理とする者とは、打ち倒すべき敵に味方する者に他ならない。一方、謙遜を明白な真理とする者にとって、革命を明白な真理とする者とは、神を恐れぬ人間中心主義に陥った者に他ならない。従って、以上二つの明白な真理を容認する者は、その二つの真理によって実現される二つの平等を同時に実現することができない。そして、いつもこの二つの明白な真理によって引き裂かれてしまう。

このような解決不可能なジレンマに捉えられたのがマルケルであり、ドストエフスキーなのだ。

（萩原俊治「ドストエフスキーと二つの不平等」）

そうしてまた、私は『カラマーゾフの兄弟』から引用しましょう。

「アリョーシャ、あなたは将来あたしの言いなりになってくださる？このことも前もって決めておく必要があるの」

「喜んで、リーズ、必ずそうしますよ、ただいちばん大切な問題は別ですけどね。いちばん大切な問題に関しては、もしあなたが同意なさらなくとも、僕は義務の命ずるとおりに行います」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

さらに、これも引用します。

エーガーステッターの意思はゆるぎのないもので不屈だった。教会に迫害を加え教義を破壊するナチ政権のために戦うことなど、彼には考えられないことだった。このような状況下であっても、数百万人ものほかのカトリック教徒が、民族のために義務を果たすことが可能だと思っていることをこの弁護士が指摘すると、エーガーステッターは簡潔に答えた。〈彼らには神の恩寵がないのです。〉弁護士はまた、教書のかたちにせよ説教によるにせよ、カトリック教徒に戦争を支持するなとか兵役を拒否せよとか呼びかけた司教がほかにいたかどうかを考えてみるように彼に強く求めた。エーガーステッターはほかの例は思い当たらないことを認めたが、同時に彼は、これは彼らもまた〈恩寵にあずかっていない〉ことを示す事実以外の何物でもないとつけ加えた。そこで弁護士は、〈シーザーのものはシーザーへ〉という聖書の戒告を引き合いに出し、エーガーステッターが何をよりどころとして、神学上の判断を下す責任をもつ牧師や司教よりもより〈カトリック的な〉境地に達したのかとたずねた。エーガーステッターは、個人の良心によってのみ得られる道徳的判断を下したのだと答えた。対話の最後に、弁護士が家族に対するエーガーステッターの責任に言及すると、彼はこの良心はもっとも切実な個人的問題にも優先すべきものであると答えた。

（ジョージ・クライン「父なし子」小野克彦訳　紀伊國屋書店『ピエタ』所収）

エーガーステッターは処刑されました。

さらにこれも引用しましょう。あなたもお読みになった『神聖喜劇』（大西巨人）

からです。

……こういうことに私が血眼になっても、それにどんな意味があるのか、あり得るのか。相手が「チチョウ」と読め、と命じるのなら、また上官上級者にはいつでも敬称を付けよ、と求めるのなら、そのとおりに私がしたら、よいではないか（……そうすることが私にできさえしたら……）。要するにあれもこれも蝸角の争いではないのか。本来は味方でなければならぬ（？）わが同年兵たちも、私がしつこく粘って事を長びかせるのに、往生して、嫌気が差しているにちがいなかろう。……私はこんな所でこんなことを言ったり行なったりするのにふさわしい人種ではなく、そういう言行を好き好む人間でもない。……「チチョウ」か「シチョウ」か、敬称付きか敬称なしか、それがどっちに転んでも、広大な客観的現実は右にも左にもかたぶきはしないであろうに。また私が向こうに転んでも、誰も私を責めはしないであろうに。……

（大西巨人『神聖喜劇』光文社文庫）

あなたの「正しいことは尊重されるべきだ。それはそうだ。ではなぜその正しいことは尊重されていないのか――相手が間違っていることに気づかない愚かな人間だからだ――本気でそう思うの？」とか、あなたの引用する「あなたには問題がある。そのことは職場の人たちも知っているし、奥さんも知っているし、義理のお母さんも知っている。そしてご近所の人たちも知っている。問題は、君自身が知らないということだ」（『箱――GETTING OUT OF THE BOX』）は、右の『神聖喜劇』における主人公東堂太郎の葛藤にどう答えるのでしょうか？もちろん、「問題」のあるひとがいて、そのことを「職場の人たち」も「奥さん」も「義理のお母さん」も「近所の人たち」も知っていて、たしかにその通りだというケースは私にもわかります。そういうひとはたしかにいます。でも、私は自分がそうだとは思いません。私のケースでは「職場の人たち」も「奥さん」も「義理のお母さん」も「近所の人たち」も間違っているのです。「一緒にするな」と私はいうわけです。これがあなたにはわかりません。そこで、あなたの「もう少し突き詰めると、気がついていないのではなく「これは、あれとは、違う」という考え方があることがわかった。「あれと一緒にするな」と。私からすると「それ」と「あれ」と何が違うのか、そこを区別するのは何なのかと、更に考えた。傍目に見て同じようなものを区別するものは何か」ですが、どうしてそんなこともわからずに『カラマーゾフの兄弟』におけるアリョーシャの「あなたじゃない」の意味がわかるでしょうか？　あなたには全然わかっていません。あなたには『カラマーゾフの兄弟』がまったく読めていません。そのあなたが私の最先端＝亀山郁夫批判を悪しざまにいうわけです。しかし、無理もありません――そのことも私にはわかります。

――大西さんが話されたことに関連して、もう一つ重要なことがあると思います。それは、何というか、「口先だけなら何とでもいえる」とも言えるし、「似て非なるものの区別がどの程度できるかが批評だ」とも言える問題です。

（大西巨人　聞き手・鎌田哲哉『未完結の問い』作品社）

「「これは、あれとは、違う」という考え方があることがわかった」とか「傍目に見て同じようなものを区別するものは何か」と、いまさらに――いや、本当にあなたはこれまでの人生でこのことを考えてみたことがなかったのか？――書くあなたが、読書においても実人生においても自分の「主観の砦」に立てこもるひとだということが私にはよくわかります。――と、私はいま「読書においても実人生においても」と書くことによって、あなたの「人格」を否定したことになるでしょうか？　もちろん、あなたはそう思うに違いありません。しかし、そうではないのです。いまのあなたには詭弁としか思われないでしょうが、そうではないのです。私のいうことが詭弁としか思われないあなたに問題があるのです。そうして、もしあなたが私を追い払おうと思うなら、あなたは私にこういえばいいのです――「この神がかり行者め！」。

やや話がそれますが、右の事情がまさに『カラマーゾフの兄弟』読解ということで私の書くことの今後の重要な主題になります。あなたの「もう少し突き詰めると、気がついていないのではなく「これは、あれとは、違う」という考え方があることがわかった」とか、「相手には相手の真実があり正義があり、その正義が、「相手の正義と自分の正義と相容れない」状況は当たり前に生じる。違うだけ――相手と自分が大切にしているものが、大切なものの優先順位が違うだけ」という態度がどれだけあなた自身の「自尊心の病」ゆえのものであるのか、どれだけアリョーシャがそれに抗していたか、ということで書くことになります。

「読書」というものは、あなたがいま考えておられるものとは違うのです。「文学」というものは、あなたがいま考えておられるものとは違うのです。「世界」というものは、あなたがいま考えておられるものとは違うのです。「人間」というものは、あなたがいま考えておられるものとは違うのです。「あなた」というものは、あなたがいま考えておられるものとは違うのです。しかし、いまのあなたにはわかりません。

だいぶ以前に私はこう書きましたね。覚えていらっしゃいますか？

そんなふうにしか作品を読み取ることのできない最先端＝亀山郁夫の翻訳でも『カラマーゾフの兄弟』の本質が損なわれることがないだの、彼の誤訳が単に部分的・表層的な問題（あるいは部分的な解釈の違い）でしかないだの、自分にはロシア語がわからないから誤訳を云々する資格がないだのと考えるひとは、もう「文学」に手をつけたり、論じたりするのを一切やめろ、と私はいいます。なぜなら、これは構造的・深層的な問題だからです。『カラマーゾフの兄弟』のつくり・構造と内容とがばらばらだとでもいうんですか？「文学」を何だと思っているのか？

……小説作品というのは「なにが描かれているか」より「どのように描かれているか」が大事だということです。これを説明するのは厄介で、これが厄介だということがそもそも問題なんですが、最大の障害は――私はだいぶ手加減していいますけれど――「どのように描かれているか」を通して「なにが描かれているか」を読まなくてはならないのに、「なにが」だけしか読まない・読めないひとの多すぎることです。その「なにが」を支えているのが「どのように」だというのに。

（「わからないときにすぐにわかろうとしないで、わからないという場所に……」〈『カンバセイション・ピース』（保坂和志　新潮文庫）〉解説）

最先端＝亀山郁夫の翻訳が一見『カラマーゾフの兄弟』らしく思えるのは、彼が単に目の前にある原典のテキストの一文一文をその場しのぎに、ある程度にはなんとか追えているから――彼に一文一文のつながりや構造の意味がわからないままでも、とにかく目の前にあるロシア語を日本語に置き換える作業だけはしているから、なんとか格好がついてしまっている、ただそれだけのことです。一文一文をそれぞれ検討すれば間違いではないかもしれないけれど（しかし、膨大な誤訳がすでに専門家たちによって指摘されています）、文脈上・構造上では明らかに誤っているというわけです。私がずっと問題にしているのは、最先端＝亀山郁夫の個々の表面的な誤訳だの改行だのなんかじゃありませんよ。また、私は原卓也の訳が完璧だなんていってもいません。原訳にも誤りはあるだろうといっています（先の専門家たちにもそれは指摘されています）し、さらによい訳を願うともいっているんです。それよりも、最先端＝亀山郁夫がひどすぎるというんです。私が問題にしているのは、最先端＝亀山郁夫のあまりの読解力のなさです。あまりに低レヴェルであるどころか、レヴェル云々以前の、いいかげんのでたらめだらけだというん

です。『カラマーゾフの兄弟』の全体をこうまで読み取れていないひとにこの作品を訳せるわけがないといっているんですよ。いつまでたっても、これのわからないひとがいる。私が問題にしているのは、翻訳が原作の構造的な意味を汲み取ってなされているかどうかということです。極論すると、原作の構造的な意味の汲み取りさえ正確にできていれば、翻訳はもうそれだけでいいんです。表面的な個々の誤訳なんかいいんですよ（ない方がいいのはもちろんですけれどね。しかし、原作の構造的な意味の汲み取りが正確にできていればいるほど、表面的な誤訳も減るだろうと私は思います）。いいですか、原作の構造的な意味を汲み取らずに、その一文一文を追いかけたって無駄だというんです。原作の一文が長文であるなら、それは原作が自ら構造的に要請した長文であるはずだから、基本的には、それを細切れに訳しては――いくら日本語として読みやすくなろうが――駄目なんですよ。ごく普通の日本語としてどんなに読みづらかろうが、構造をそのまま訳すことが第一です。構造をそのまま訳すことができるためには、原作をきちんと読み取ることが不可欠です。最先端＝亀山郁夫はもうそのことだけでひどすぎるんです。原作の構造的な意味を解さず（また解そうともせず）に、原卓也訳と亀山郁夫訳のそれぞれの表面的な誤訳なんかを採りあげて「どっちもどっち」なんていうレヴェルの考察をいくらやったって無駄です。最先端＝亀山郁夫の場合では、彼の訳した一文一文が作品の構造的な意味を理解せずになされたもの（だから、それらはべつに『カラマーゾフの兄弟』の一文一文でなくてもかまわないもの・『カラマーゾフの兄弟』の構造・文脈を離れて、『カラマーゾフの兄弟』とは無関係に、単にそこに書かれているロシア語の一文一文にすぎないものをばらばらに日本語にしただけ）であって、その一文一文は作品としての『カラマーゾフの兄弟』を構築している、それぞれに必然性のある、揺るがせない一文一文、相互につながって全体を支えている一文一文ではありえない、といっているんです。最先端＝亀山郁夫の提出した「結果」としての訳なんかどうだっていいんです。だいたいが、私はそれを読んでもいない。私は、最先端＝亀山郁夫の訳出の「過程」＝読み取りが問題だといっているんです。「作家の「なにを描くか」と「どのように描くか」とのせめぎ合い・たたかいの軌跡こそが作品」であるからには、でたらめだらけ・低レヴェルの読み取りしかできていない最先端＝亀山郁夫には翻訳ができませんし、すでに提出されている訳を翻訳と呼ぶことはできません。少なくとも原卓也にはこの作品における「作家の「なにを描くか」と「どのように描くか」とのせめぎ合い・たたかいの軌跡」が正しく理解できています。それで、なおいいますが、私のここまで延々とつづいている一連の文章を読んで、「たしかに「あなたじゃない」の亀山解釈はおかしいなあ、たしかにジューチカ＝ペレズヴォンのはずなのに亀山解釈はめちゃくちゃだなあ、たしかに「大審問官」の亀山解釈は的はずれもいいところだなあ、しかも、それらはみな構造的につながってもいるじゃないか」と認めつつ、「だからといって、亀山先生の訳が素晴らしいことに変わりはない」なんてことを考えているひとは最悪です。もう根本的に間違っている。作品の「なにが」が「どのように」に支えられていることがわかっていない。そんなひとの読書こそ「最先端＝亀山郁夫的読書」だというんです。そんなひとはもう「文学」から足を洗え、そんなひとには「文学」の一切がわからない、と私はいいます。また、私がこうまで最先端＝亀山郁夫を批判する理由が『カラマーゾフの兄弟』への敬意だということがわからないひとも、さようなら。そういうわけで、最先端＝亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』は『カラマーゾフの兄弟』ではありません。だから、亀山郁夫への批判という意味を持たせずに、亀山訳を引いて『カラマーゾフの兄弟』について語る（「表面的にはこれでも間違いじゃないよね」などと考える）ということをするひとがいるとすれば、そのひとはもうそれだけで駄目ですね。

私のやっているこの最先端＝亀山郁夫批判が「暴力的」であり、「人格を踏み

にじる行為」であり、実は批判などではなく「誹謗中傷」に過ぎない、というように考えているあなたのようなひとたちには、右の私の文章が私個人の強い自尊心の表明――「俺のいうことをきけ！　俺は正しいのだから！」――だとしか読めないのでしょう。何度でもいいますが、私にはこの私なんかどうでもいいんです。私はこの私の正しさを主張したいのではないんです。私は私の外にある正しさに従っているだけです。ところが、あなたがたはそうは読みません。「相手には相手の真実があり正義があり、その正義が、「相手の正義と自分の正義と相容れない」状況は当たり前に生じる。違うだけ――相手と自分が大切にしているものが、大切なものの優先順位が違うだけ」――というふうに、問題を最先端＝亀山郁夫と私とのそれぞれの個人的な自尊心の問題にすり替えてしまうのです。そのすり替えの上に立って、自分たちの「ひとそれぞれ」の「読書」を検討することすらせず、さらにはあなたのように、まるでこの私の身を案じるかのような口調で私を諫めにかかるひとがいるわけです。違うんですよ、私は私のためにこの批判をつづけているのではないんです。逆にいえば、あなたがたこそが自分たちの自尊心――「主観の砦」――を守るために、私の批判を正視できないのです。

この「最先端＝亀山郁夫現象」批判を正視するためには勇気が必要なのです。目先の安心にしか心が向かない――単に目の前の争いが嫌い・「批判」というだけで嫌いだ・自分で考えるということができない――ひとには正視できません。それゆえ、「最先端＝亀山郁夫現象」がどれだけ危険なものであるか、あなたがたにはわかりもしません。いつの日か、あなたがたの周囲がどれほど悲惨なことになってしまっても、まさかそれがこの「最先端＝亀山郁夫現象」をかつてあなたがたが放置したためだなんてことには思いも及ばないでいられるのです。

覚えておられるでしょうか？　私はこれもだいぶ以前に引用しました。

Books are burning

In the main square, and I saw there
The fire eating the text
Books are burning
In the still air
And you know where they burn books
People are next

(Andy Partridge (XTC)《Books Are Burning》)

書物が焼かれる＝ドストエフスキーが歪曲される――のならば、次に焼かれるのはあなたがたです。

誰が書物を焼くのか？　誰が「人を踏みにじる」のか？　誰が「人に悪意をぶつける」のか？　誰が「人の悲しみや思い込みによる呪縛」をもたらすのか？　誰が「害悪」なのか？

前回の「「連絡船」の一読者へのメール」で書いたように、私がこの一連の記述を通して批判しているのは、

一　亀山郁夫自身
二　亀山郁夫と仕事をした編集者たち
三　その編集者たちを抱える出版社・放送局
四　書評、インタヴュー等で亀山郁夫を称揚するひとたち
五　そうした書評、インタヴューを載せる出版社、放送局、新聞社等
六　亀山郁夫の仕事の実質も知らずに安易に対談する作家、タレント等
七　亀山郁夫を批判できずにいるロシア文学界の面々
八　上記のことをまったく理解せぬまま、亀山郁夫をありがたがる一般読者たち
九　その他

――でした。

私は最先端＝亀山郁夫よりもはるかに罪の重いのが「二」から「七」のひとたちだと思っています。それで、「二」から「七」のひとたちを批判するためにどうしたらよいか？「一」を批判することしかありません。つまり、最先端＝亀山郁夫を批判することです。最先端＝亀山郁夫の仕事がどれほどひどいものであるのか、どれほど低レヴェルのものであるのか、どれほど「素っ頓狂」なものであるのか、どれほど狂っているものであるのか、どれほど滑稽なものであるのか、どれほど悲惨なものであるのか、どれほど罪深いものであるのか、どれほど無能な人間の仕事であるのか、を訴えることしかありません。

「二」から「七」のひとたちと比較するなら、最先端＝亀山郁夫の罪など大したことはありません。最先端＝亀山郁夫は単に無能であるだけです。もし、最先端＝亀山郁夫が無能でないのならば、当然、彼の罪はそれだけ重くなる理屈です。最先端＝亀山郁夫のように無能でないはずの「二」から「七」のひとたちは、少なくとも自らの過ちを認める能力があります。しかし、仮に「二」から「七」のひとたちが過ちを認めたとしても、最先端＝亀山郁夫にはその正しさを理解することができません。いきなり梯子を外されたようにしか思うことができないでしょう。自分の仕事が純粋にそれ自体でこれまで「評価」されてきたとしか彼には理解できないのです。もちろん、そうではありません。彼の「評価」は、「二」から「七」のひとたちが持ち上げようとしたために持ち上がったにすぎません。そのことが彼には到底理解できないでしょう。あなたには、最先端＝亀山郁夫にこの理屈が理解できると思われるのでしょう？　しかし、まさにあなたがこの問題の大きさを理解できないように、彼にも理解することはできないのです。もし彼に理解できていたなら、『カラマーゾフの兄弟』につづいて『罪と罰』、『悪霊』などへと手を出すことなどできませんから。

以上はほぼ昨年のうちに書きあげていた文章ですが、今年もすでに七か月が過ぎようとしています。私はさらに何をいえばいいでしょうか？　あなたはこの問題を当事者としてでなく、離れた――安全な――場所から公平に眺めることができるとお考えです。そうして、問題を最先端＝亀山郁夫とその反対者――両者の自尊心の衝突――という構図にすり替えてしまっているのです。ここであなた自身の読書――そしてあなたの「人間」――が問われているなどとは思いもよりません。読書するにも勇気や信念は必要なのです。

これもだいぶ以前に引用しました。

「ウンコはカレーではない」ということを説明するのが、なぜこれほど困難なのか。

（純の◆姫林檎◆日記　http://www.yutbook.com/junnikki/junnikki_70.html）

もう一度、あなたの「正しいことは尊重されるべきだ。それはそうだ。ではなぜその正しいことは尊重されていないのか――相手が間違っていることに気づかない愚かな人間だからだ――本気でそう思うの？」と「相手には相手の真実があり正義があり、その正義が、「相手の正義と自分の正義と相容れない」状況は当たり前に生じる。違うだけ――相手と自分が大切にしているものが、大切なものの優先順位が違うだけ」ですが、あなたのそんな相対化にはあなた自身の勇気や信念が欠けているのです。誰かが「ウンコ」を「カレー」だと主張したら、まさかそのひとが「カレー」と「ウンコ」を間違うほど愚かなわけがないと考える公平な――というか、公平が何かもわからず、ただ一見公平らしく振舞いたい――あなたはもちろんその「ウンコ」を食べるのでしょう。そうして、他のたくさんのひとたちが同じ「ウンコ」をとてもおいしそうに食べる様子を見ながら、やっぱり「カレー」っておいしいよね、と思うのでしょう。今後「ウンコ」が「カレー」として流通することを肯定するのでしょう。私はあなたを

含めてたくさんのひとたちが「ウンコ」を「カレー」だと思って食べている悲惨な状況を目の当たりにしているのです。それは「ウンコ」なんだ、食べるんじゃない、と訴えているのです。しかし、あなたのいいかたを借りれば、私の「職場の人たち」も「奥さん」も「義理のお母さん」も「近所の人たち」も「ウンコ」を頬張りながら、「このカレー、ほんとにおいしいね！」とうなずきあうわけです。私だけが「ウンコ」を食べません。私だけが変人ということです。どうして私だけは「ウンコ」と「カレー」の区別がつくのか、とあなたがたは問うのです。私には、どうしてあなたがたにその区別がつかないのかがわかりません。私のだらだらとやたらに長い批判文などを読まなくても、最先端＝亀山郁夫自身による「解題」に目を通しさえすれば、それでもう十分なはずだからです。「ウンコはカレーではない」ということを説明するのが、なぜこれほど困難なのか」というのは、そういうことです。これはそういう問題なんです。「大切なものの優先順位が違うだけ」などという問題ではないのです。あなたがたは最先端＝亀山郁夫のしたことを見くびっているのです。いや、私はどうしてあなたがたにその区別がつかないのか、よくわかっています。あなたがたに勇気や信念が欠けているからなのです。

もうひとつ引用。ジム・キャリー主演の映画の終盤から。

I never been a man of great conviction. I never saw the percentage in it. And quite frankly ... I suppose ... I lacked courage.

（『マジェスティック』　フランク・ダラボン監督）

――と、ここまで書いて、なおしばらく時間を置いて、ようやく私は、私のこの文章の主題が勇気や信念についてだったことを自覚しました。「勇気や信念」の「や」ですが、ここで私が「や」を用いるのは、「勇気や信念やその他なにがしか」としか、今のところ考えられないからです。もしかしたら、「勇気や信念」だけで十分なのかもしれません。繰り返しますが、「勇気や信念」なしに読書することはできません。「勇気や信念」なしに自分の読んだものの「よい・悪い」を判断することはできず、そもそも当の書物が「作品」たりえているのかを判断することはできません。

あなたの「もう少し突き詰めると、気がついていないのではなく「これは、あれとは、違う」という考え方があることがわかった」とか、「相手には相手の真実があり正義があり、その正義が、「相手の正義と自分の正義と相容れない」状況は当たり前に生じる。違うだけ――相手と自分が大切にしているものが、大切なものの優先順位が違うだけ」という態度がどれだけ卑怯・無責任であるかを私は主題にしていたのです。そのようなあなたがそのままの態度でいくらどのような作品を読もうとも、あなたにはまるで何も理解できません。あなたのような読書――読書とはいえませんが――は作者と作品とを馬鹿にしているのです。ということは、つまり、あなたが「人間」を馬鹿にしているということに他なりません。そんな読書はまったくの無駄であり、害悪ですらあります。あなたは自分の「私」――「読書する私」――が大事なだけです。しかし、読書はその「私」のためにするものではないのです。あなたの「私」は「作品」に奉仕しなければならないのです。あなたは読書があなたを救済したり癒したりするものだと思っている。しかし、あなたが間違っているのは、その「救済」やら「癒し」があなたがいま考えているものとはまったくべつのものだということです。あなたは砕かれねばなりません。誰にでも「読書」はできる。それはそうです。しかし、「読書」とは、いまあなたが考えているものとはまるでべつのものなのです。ということは、あなたの生きかた、また、生きるうえでの認識がまるで間違っているということをも意味します。もっとも、あなたのように生きているひとがこの世のほとんど全部のひとたちなのです。そうして、『カラマーゾフの兄弟』はその事実に抗した作品なのです。そうして、『カラマーゾフの兄弟』を読みながら、イワンの追い求めるもののみに注目し、アリョーシャの仕事を軽視しかできないような読者が最低の読者ですが、アリョーシャに「感情移入」しつつ、もの足りなさを感じてしまうような読者も同断です。私がいまいおうと

しているのは、アリョーシャには「勇気や信念」がある、ということです。その「勇気や信念」に気がつくためには、読者にもまた「勇気や信念」が必要だということです。アリョーシャは明瞭です。曖昧なところなどありません。さらに私はいいますが、ドストエフスキー自身が読者に「勇気や信念」を要請しているのです。「勇気や信念」なしに、単に「頭がよい」とか「読書家」などと周りから評価されているに過ぎないような、そんな低レヴェルの読者は『カラマーゾフの兄弟』の読者として失格です。もちろん最先端＝亀山郁夫も失格ですし、最先端＝亀山郁夫を評価するあらゆるひとたちも失格なのです。

とはいえ、私自身、自分の「勇気や信念」ということばに驚いているんです。まさか自分が「勇気や信念」などということばを口にしうる人間であるなどと、これまで考えてみたこともありませんでしたし、現にそれが自分にそぐわないことばだということをよく知っています。それなのに、こんなことになってしまいました。しかし、私はあなたがたに欠けているものを探し当てようとして、どうしても「勇気や信念」に突き当たってしまうのです。

私はべつにあなた自身を咎めているのではありません。あなたのような無数の読者の読みかたを批判しているだけです。そうして、そのようなひとたち――おそらくは現在における「ベストセラー」をつくりあげるひとたち――が大量に存在するのもしかたがないと思っているのです。あなたのようなひとたちがそのままであってもしかたがありません。しかし、だからといって、あなたがたにこの最先端＝亀山郁夫批判を非難する資格などまるでないのです。あなたがたが、あなたがたのつまらない「私」に気づかなければ、この最先端＝亀山郁夫批判はずっと醜いままでありつづけるでしょう。

（二〇一二年八月十四日）

【悲報！】亀山郁夫作の小説『新カラマーゾフの兄弟』

「いいかい、見習い僧君、この地上にはばかなことが、あまりにも必要なんだよ。ばかなことの上にこの世界は成り立っているんだし、ばかなことがなかったら、ひょっとすると、この世界ではまるきり何事も起らなかったかもしれないんだぜ」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

最先端＝亀山郁夫の読解力、文章力について私はこれまでさんざん書いてきました。その最先端＝亀山郁夫が小説を書く！――らしいです。原作『カラマーゾフの兄弟』すらろくに読み取れてもいない人間がいったい何を書くっていうんですかね？　あんまり馬鹿馬鹿しくって笑っちゃいますよ。それに、これは書かせた編集者がいるってことです。その編集者には、もちろん私のいう「勇気や信念」がまるっきり欠如しているわけです。

なぜそんなひとが編集者でいられるのか？
あるいは、いまやそんなひとこそが編集者なのか？

ロシア文学者で名古屋外国語大学長の亀山郁夫さん（65）が、初の小説「新カラマーゾフの兄弟」を執筆している。ドストエフスキーの代表作「カラマーゾフの兄弟」に基づいた大作で、第1部が7日発売の「文藝」（河出書房新社）に掲載される。

「カラマーゾフの兄弟」は父親殺しがテーマだ。ドストエフスキーは「父親殺害事件を描く第1の小説」と「事件から13年後の末弟アリョーシャを描く第2の小説」を構想したが、書いたのは「第1の小説」だけで、事件の真相も十分に説き明かさなかった。

亀山さんの「新カラマーゾフ」は、一九九五年の日本を舞台とする「黒

木家の兄弟」と、ドストエフスキーを意識してきた自身の半生を投影した「Kの手記」の、二つの小説を交互につなぐ形で進む。

「黒木家の兄弟」では、事件の真相と兄弟のその後を描く。「第2の小説」の内容を推察する専門家らの見解をふまえ構想。舞台は、亀山さんが育った栃木県や東京、山中湖、現在の仕事場がある名古屋だ。経済が落ち込み、阪神大震災やオウム事件が起きた95年当時の日本の世相を、帝政末期のロシアに重ねた。

亀山さんはロシア文学研究の第一人者だ。スターリン時代の芸術家を研究した「磔（はりつけ）のロシア」で大佛次郎賞、新訳「カラマーゾフの兄弟」でプーシキン賞を受賞。だが、高校時代からの愛読書「カラマーゾフの兄弟」は、大学時代に「ある痛烈な事件」を経験以来、50代まで再読しなかった。

亀山さんは、「今回の作品は、ドストエフスキーと向き合うことを避けてきた半生を振り返る自伝的小説でもある」と語る。「謎解きを期待する人は『黒木家』だけの拾い読みで結構ですが、私としては、『手記』を書かないとこの小説を書く意味がなかった」

第1部は四〇〇字原稿用紙六〇〇枚分。原作と同じ全4部構成で、来春に完結する予定だ。（佐藤雄二）

朝日新聞二〇一四年七月五日

(http://digital.asahi.com/articles/ASG737WZ2G73OIPE03W.html?_requestu
rl=articles%2FASG737WZ2G73OIPE03W.htmlamp;iref=comkiji_txt_end_s_kjid_
ASG737WZ2G73OIPE03W)

（二〇一四年七月六日）

「自尊心の病」に憑かれた辻原登にアリョーシャは見えない

二〇一七年二月、『辻原登の「カラマーゾフ」新論　ドストエフスキー連続講義』が出た。発行は亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』の光文社。本の帯には「小説家だからこそ見抜ける〝不朽の名作〟の真実！　文学講義の名手が贈る4つのレクチャー」とある。「Lecture 1」と「Lecture 2」が二〇一三年秋の朝日カルチャーセンターでの講義、「Lecture 3」が二〇一五年二月の亀山郁夫との対談、「Lecture 4」はおそらく書き下ろしだろう。

フョードル・カラマーゾフ殺害の容疑でミーチャが拘束される場面について、辻原はこんなふうに言う。

突然、建物の外で馬の蹄の音が聞こえます。カーニバルの背景にあった幕が突如開いたかのように、警官隊が銃を構えて待っている。

（辻原登『辻原登の「カラマーゾフ」新論』光文社）

実際の『カラマーゾフの兄弟』はそんなふうに書かれていない。

「君が好きだ、君だけを愛してるよ、シベリヤに行っても愛しつづけるよ……」

「どうしてシベリヤへ行くの？　でも、いいわ、あなたが望むなら、シベリヤへでもどこへでも、どうせ同じですもの……二人で働きましょうね……シベリヤは雪ね……あたし雪野原に橇をとばすのが大好き……鈴を鳴らして……あら、きこえる、鈴が鳴っているわ……どこで鈴が鳴ってるのかしら？　だれか来たのね……ほら、鳴りやんだもの」

彼女はけだるそうに目を閉じ、ふいに一分ほど眠りにおちたようだった。本当にどこか遠くで鈴の音がしていたが、突然鳴りやんだ。ミーチャは彼女の胸に頭をもたせかけた。鈴が鳴りやんだのに彼は気づかなか

ったが、歌声まで突然とだえ、歌声や酒宴の騒ぎに代ってふいに死のような静寂が家じゅうを支配したことにも気づかなかった。グルーシェニカが目を開けた。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』　原卓也訳　新潮文庫）

これが辻原の「突然、建物の外で馬の蹄の音が聞こえます」だ。実際には、聞こえていた鈴の音が鳴りやんだだけだ。そしてこの後にも「警官隊が銃を構えて待っている」などという描写はないし、そもそも銃を構えた警官隊など出てはこない。

辻原登によれば、アリョーシャが「あなたじゃない」と言った相手はミーチャだということだ。亀山郁夫との対談でそう言っている。辻原は間違っている。

辻原　もう一つ、お聞きしたいことがあります。アリョーシャがドミートリーに「お父さんを殺したのは、あなたではありません」と言うシーンがあります。それは、「あなたではなくて、イワンです」ということを言っているのではないし、スメルジャコフだと特定しているわけでもない。ひょっとしたら、アリョーシャは自分の中にも、「私も殺したんだ」という無意識の思いがあって、バフチン風に言うと、それがポリフォニーになって響き合っているとも考えられる。

亀山　なるほど、面白いですね。そういう問題があることに今、初めて気づきました。これまで、このセリフを何度も考えながら、一度としてそういう問題の設定を立ててみたことはありません。思うに、アリョーシャが、人間の原罪というものを、どのくらい深く自覚しているかということに通じる問題ですが、私の考えでは、「あなたじゃない」と言うことは、「あなたです」と言っているのと同じです。ずっとそう言い続けてきました。

辻原　でも、もう一つひっくり返すと。

亀山　「あなたじゃない」と言っていると同時に、「私もです」とも言っている、そう辻原さんはお考えになるわけですね。そこはすごく大事なことかもしれません。さっきも少し触れましたが、アリョーシャにおける父殺しの共犯性という問題は、なかなかリアルな感覚としてはとらえにくい側面があることは確かです。本当にアリョーシャは難しいです。

（辻原登『辻原登の「カラマーゾフ」新論』　光文社）

もちろん、右の辻原の発言は「ドミートリー」と「イワン」とが逆になっている。そもそも辻原が間違えているのかもしれないが、そのまま出版してしまう出版社も出版社だ。

「Lecture 1」で、辻原はこう言う。「僕は自分の作品を読むときも他の作品を読むときも一回黙読した上で、声に出して読むことにしています」。そうして亀山郁夫訳『カラマーゾフの兄弟』から引用する――ということは、この講義でも音読をしている――のだが、自分でおかしいと思わなかったのだろうか。

彼女（ソフィア――編集部注）が死んだとき、アレクセイはまだ数え四歳でしかなかったが、不思議なことに彼はその後、一生、むろん夢をとおして母親の顔を覚えていたという話をわたしは知っている。

（『カラマーゾフの兄弟』（亀山郁夫訳、光文社古典新訳文庫、二〇〇六年）より以下の引用はすべて同書）

辻原はどう音読したのか。音読はしたが、意味を汲まずにしたのか。辻原の音読はそれでいいのか。「小説家」辻原登はこういう文章を平気で読めるのか。同じ箇所を原卓也訳で引いてみる。

彼女が死んだとき、幼いアレクセイは数えで四つだった。実にふしぎな

ことではあるが、彼がそのあと一生、もちろん、夢の中のようにぼんやりとにせよ、母親をおぼえていたのを、わたしは知っている。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

亀山訳のこの箇所はすでに二〇〇九年五月に木下豊房によって誤訳を指摘されている。

まず「むろん夢をとおして母親の顔を覚えていた」という表現が文脈を踏まえていない不自然な日本語であり、様態を示す「～のように」（kak）を訳しきれていない明らかな誤訳。文脈は「数えの四歳ではあったが、母親の顔を覚えていた。むろん夢の中でのように」である。

（http://www.ne.jp/asahi/dost/jds/dost130.htm）

また、辻原によれば、アリョーシャが「家庭争議をなんとか解決しようというので、僧院のゾシマ長老に仲裁をしてもらおうとみんなを修道院に集めて、親族会議を行う」らしい。辻原は間違っている。実際は、この会合はフョードルが言い出し、ミウーソフが乗り気になって決まったものだ。アリョーシャはこの会合の開かれることに困惑している。

さらに、辻原によれば、「ドミートリーは二十八歳、イワンは二十四歳、僧院に入っているアリョーシャは二十歳」なのだが、スメルジャコフはさらに年下らしい。フョードルとスメルジャーシチャヤとのエピソードを彼はこう語る。「ここに、フョードル・カラマーゾフが登場します。彼は先妻が逃げていったでしょう。後妻が入ったけれど、彼女もすぐに死んでしまう。それで、悪い仲間たちと遊び呆けているわけです」。そんなときにスメルジャーシチャヤが妊娠したと辻原は言う。先に辻原が自ら引用した箇所によれば、アリョーシャは母親が死んだときに「数え四つ」だったのだから、スメルジャコフは十六、七歳ということか。辻原は間違っている。実際はこうだ。原卓也訳から引くが、先妻が死んで、「フョードルは四歳になるドミートリイを追い払うと、そのあとすぐ二度目の結婚をした」のだが、スメルジャーシチャヤとのエピソードは「まさに、彼が最初の妻アデライーダの訃報をペテルブルグから受け、帽子に喪章のまま飲んだくれたり、乱行の限りをつくしたりしていた、ちょうどそのころ」のことだ。スメルジャコフは「せいぜい二十四かそこらの、まだ若い男」とあるが、おそらく生まれはイワンよりも早いだろう。辻原がまさかスメルジャコフを十六、七歳と読んでいたとは思わないが、しかし、どうやらイワンよりも年下だと思い込んだまま『カラマーゾフの兄弟』を読み、現在も間違えたままでいるらしい。右の引用箇所ばかりでなく、「Lecture 2」でもこう言っているからだ。

イワンが聞いたのは、二人が言ったよく似たセリフです。アリョーシャが言った「父を殺したのは、あなたじゃない！」と、もう一人の弟であるスメルジャコフが言った「殺したのは、あなたじゃありません」と。

（同）

「Lecture 2」のタイトルは「『カラマーゾフの兄弟』を深める」だ。そこで辻原は「探偵小説という枠組み」から『カラマーゾフの兄弟』を読む、と言う。フョードルが殺され、「ドミートリー、イワン、スメルジャコフという残った三人のうち、犯人がいったい誰なのかということが、この小説を引っ張っていく探偵小説的な大枠の一つになっている。その大枠の中で、ドストエフスキー独特の世界観が語られたり、ドストエフスキー的ないろんな人物が登場して、おかしな対話を繰り広げたり、どんちゃん騒ぎをしたりしながら、物語が進んで行きます」。こうした読みかたをすると、「大審問官」は次のようになる。

この場面は、ドストエフスキーの世界観の一つを披露しているように見えるのですが、どうもたいした話ではないと僕は思うんです。いろいろな哲学者や批評家たちが、この大審問官の話というのを大袈裟に論じていますが、実はそんなに深い話ではないし、福音書を深く読んだ方がよほどいいと思うのです。これは、イワンという人間を無神論者にして

おいて、永遠だとか神が存在しないのであれば、人間は何をしても許されるじゃないかという考えを導くための、仕掛けの一つにすぎないのですから。

（同）

辻原はまたこうも言う。

僕は高校生の頃に『カラマーゾフの兄弟』を読んだとき、「大審問官」と「ゾシマ長老」のエピソードにほとんど感銘を受けなかった。キリスト教もロシア正教も知らないのですから。ドストエフスキーはこの話を、アリョーシャという人物をいずれテロリスト、革命家にするための伏線として書いているのでしょう。熱心で純真な宗教青年が、宗教者から冷徹なテロリストに変貌していく、彼はその姿を書きたかったのではないでしょうか。

ゾシマ長老のエピソードですが、若い時に人を殺そうとしていたり、彼のお兄さんがまさに聖人のようで、生きていること自体が人類に申し訳ないことだと思っているような人間です。それはそれで面白いのですが、『カラマーゾフの兄弟』のメインストリームからいくと、やはりこれも、十三年後の物語を書くために置かれた布石の一つのような気がします。

（同）

ゾシマが「若い時に人を殺そうとしていた」というのは何のことなのか。決闘のことを指しているのか。

ともあれ、辻原の読みにかかると、あくまでも「メインストリーム」は殺人事件の犯人探しになる。それ以外のことになると、こういう扱いになる。

そういういくつかの伏線があった上で、それとは別に、本筋とは異なるもう一つの物語、イリューシャという少年をめぐる物語が語られます。イリューシャは周りの子供たちから孤立している子供で、たった一人で六人の子供を相手に石を投げ合って喧嘩したりするんですが、実は、彼の父親は、ドミートリーに町中で髭を摑まれて徹底的にこづきまわされたという、ひどい侮辱を受けたことがあるのです。それを見ていたイリューシャは、「パパを許して、許して」と言って、泣きながらドミートリーに頼むという、そういう経験のある少年なんです。この少年たちと、ドミートリーではなく、その弟のアリョーシャの交流についての物語が、この小説のもう一つのストーリーとしてあります。

これは『カラマーゾフの兄弟』の中で、アリョーシャをめぐる非常にいい話の一つとされていますが、実はこの小説のメインストリームとはまったく関係がありません。多くの人が今まで、これをアリョーシャという二十歳の誠実な青年の物語として、それなりの読み方をしてきたのですが、みんなアリョーシャを過大評価しすぎているきらいがあると思います。そうではなくこの物語も、実はこの後に展開される物語の伏線なのです。ドストエフスキーはそれを書かないまま死んでしまったわけですが、もし続編が書かれていたら、アリョーシャが成長していって、この少年たちも成長していって、というふうに進んでいたはずです。この小説は「わたし」という人物が、十三年前にこういう事件があったと語るところから始まったわけですが、それでは、その十三年後の語り手の「わたし」にとっての「今」に何が起こっているのか、そのことが語られないまま終わっているわけです。これはその語られなかった物語の伏線だったはずです。

（辻原登『辻原登の「カラマーゾフ」新論』光文社）

さらに、

というわけで、今われわれが実際に読める『カラマーゾフの兄弟』の

中で、アリョーシャと子供たちの話はいい話には違いないんですが、この小説のメインではありません。しかし、僕はこの手のいわゆるいい話はあまり信用しない。子供たちの話なら、ディケンズの『デイヴィッド・コパフィールド』をお勧めします。

（同）

犬のジューチカのエピソードについてはこう言う。

そこにコーリャ・クラソートキンというちょっと生意気な、この時はまだ十五、六歳ですが、後にアリョーシャと一緒にテロリストの中心人物になっていくはず（？）の人物が現れます。普段の彼はイリューシャをいじめているんです。ところがイリューシャがこういう状況になったときに、コーリャは非常に優しい崇高な面も持っていて、イリューシャの大きな苦しみはこのジューチカだとわかって、必死になってその犬を捜す。みんなは死んだと思っていたのに、捜し当て、誰にも言わずに自分の家で黙って保護して、芸を仕込みます。イリューシャがもう危ないというときになって、彼はジューチカを連れてくる。もう遅い。しかし、イリューシャは狂喜して、「ジューチカだあ！」と、そう言って死んでいきます。

（同）

コーリャは犬を連れてきた時点でまだ十三歳だ。辻原は間違っている。そして辻原は、「イリューシャの大きな苦しみはこのジューチカだとわかって」いたにもかかわらず、「捜し当て、誰にも言わずに自分の家で黙って保護して、芸を仕込」み、その間ずっとイリューシャを苦しむまま放置していたコーリャを評して「非常に優しい崇高な面も持ってい」ると言う。そのことを咎めるアリョーシャのことなど辻原にはまるで理解できないのだろう。イリューシャの苦しみも辻原には「メインストリーム」からはずれた、ただの「いい話」でしかなく、それは「どうでもいい話」ということだ。そうでなければ、「イリューシャは狂喜して、「ジューチカだあ！」と、そう言って死んでいきます」などと言わない。

さて、辻原による「メインストリーム」の読みだが、彼はこんなことを言う。

それはさておいて、この裁判が進んでいるという前提の下で、イワンとカテリーナの間では、ミーチャをアメリカに逃がそうという逃亡計画が練られます。そのための金も用意する。イワンもカテリーナも、単純に愛し合った男女というわけではなくて、時々ひどい喧嘩をする。しかし、結局、イワンとカテリーナがミーチャの逃亡計画を考えるのは、一つは二人がミーチャを真犯人に仕立てあげたいと思っているからです。カテリーナとイワンは、裁判の時に、一番重要なことを証言しません。

（同）

単純な疑問だが、なぜイワンとカテリーナがわざわざミーチャを真犯人に仕立てあげようとするのか。すでにミーチャは犯人として捕まっていて、裁判も迫っている。そのままにしておけば有罪になるのではないか。しかも「逃亡計画」はミーチャが有罪になってから実行される予定のものだ。わざわざミーチャを真犯人に仕立てあげるというからには、ミーチャが真犯人ではないと二人が認識しているということか。しかし、二人はミーチャが真犯人でないことはもちろん、別に真犯人がいるということすら知らないでいるのだ。イワンの方については、私はもうすでにかなり詳細に書いているので、ここでは繰り返さない。カテリーナに関して書いておくと、真犯人云々について彼女は何も知らないも同然だ。

さらに、辻原はイワンの二回目のスメルジャコフ訪問の後についてもこう言う。

イワンは、その後、カテリーナのところへ行きます。そしてカテリーナとミーチャの父親殺しについて話していても、スメルジャコフに「あ

なたがぼくをそそのかしたのではないか」と言われているので、カテリーナに対して「真犯人はミーチャじゃない」と言わざるを得ない。そうすると、カテリーナは「そんなことはない、フョードルを殺したのはミーチャだ」とはっきり言います。その時に、先ほどイワンがアリョーシャに言った文書を持ち出すのです。イワンはアリョーシャに、ミーチャが父親を殺した証拠になるものを持っていると言ったのですが、確かにカテリーナが持ち出した手紙があるにはある。しかし、それは実は、ミーチャが酔っぱらってべろんべろんになっているときに「おれが父親を殺してやる！」と言って書きなぐった手紙なんです。つまり、それを持ち出してきて、二人でミーチャを真犯人にしてしまおうと共謀したということです。

（同）

辻原はそう言うが、実際は次のようなものだ。

イワンはそのとき、自分の家へ寄らずに、まっすぐカテリーナのところへ行き、その姿で彼女をびっくりさせた。まるで狂人のようだったのである。彼はスメルジャコフとの話を、細かい点にいたるまで残らず伝えた。どんなに彼女が説得しても、イワンは気を鎮めることができず、のべつ部屋の中を歩きまわって、きれぎれに異様なことを口走っていた。やっと腰をおろしたものの、テーブルに肘をつき、両手で頭を支えて、奇妙な警句じみた言葉をつぶやいた。

「殺したのがドミートリイではなく、スメルジャコフだとすると、もちろんそのときは僕も共犯だ。なぜって僕はたきつけたんだからね。僕がたきつけたのかどうか、まだわからんな。しかし、殺したのがドミートリイではなく、あいつだとしたら、もちろん僕も人殺しなんだ」

これをきくと、カテリーナは黙って席を立ち、自分の書き物机のところに行って、その上にあった手文庫を開け、何やら紙片を取りだして、それをイワンの前に置いた。この紙片こそ、のちにイワンがアリョーシャに、父を殺したのは兄のドミートリイだという《数学のようにはっきりした証拠》として語った、ほかならぬあの文書であった。

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

辻原の言ったことをもう一度引用する。

そうすると、カテリーナは「そんなことはない、フョードルを殺したのはミーチャだ」とはっきり言います。その時に、先ほどイワンがアリョーシャに言った文書を持ち出すのです。

（辻原登『辻原登の「カラマーゾフ」新論』光文社）

辻原の頭の中には、ありもしない場面が存在している。

カテリーナがイワンにこの文書を見せるのは、イワンが「まるで狂人のようだった」からだ。「どんなに彼女が説得しても」、イワンの「気を鎮めることができ」なかったからだ。彼女が裁判でこの文書を持ち出すのも、証言するイワンの症状が悪化したからだ。彼女は何も知らないのだ。彼女はミーチャが犯人であるとは信じられない。彼女はイワンがミーチャを庇おうとしているのだと思っている。真犯人がスメルジャコフなのかもしれないが、イワンからスメルジャコフとの話を伝えられても、彼女には理解できていない。イワンすらこの時点ではスメルジャコフが真犯人であることを知らないのだ。

彼女が「裁判の時に、一番重要なことを証言しません」と断言する辻原は、いったい何を「一番重要なこと」だと考えるのか。彼女がミーチャを真犯人に仕立てあげようとたくらむことなど一切ない。

また原作から引用するが、イワンは「公判の十日ほど前にミーチャを訪ね、脱走の計画を、それも明らかにだいぶ前から考えぬいた計画を提案したのだった」。さらに、裁判の前夜のことをカテリーナがアリョーシャにこう話している。

「あの方がもうだいぶ前にこの脱走計画の全貌をあたくしに教えてくださいましたのよ。実は、あの方はもう下工作に入っておられたんです……あなたにもある程度のことはもうお話ししましたけれど……（中略）……もしかしたら明日、イワン・フョードロウィチが何事かあったときの用心に、公判の前夜にあたくしに預けてくださった、詳細にわたる計画の全貌をお目にかけますわ……あれは、おぼえてらっしゃるかしら、ちょうどあのときですわ、ほら、あたくしたちが喧嘩していたところへ、あなたがいらしたことがあったでしょう。あの方が階段をおりかけていたのに、あたくしがあなたの姿を見てよび戻したことがありましたわね、おぼえてらして？　あのときあたくしたち、何が原因で喧嘩したか、おわかりになる？」

「いいえ、わかりません」アリョーシャは言った。

「もちろん、あの方はあのときあなたには隠したんですわ。まさしくこの脱走計画が原因でしたのよ。あの三日前にあの方が要点を全部あたくしに打ち明けてくださったんですけど、その間に喧嘩がはじまって、それ以来三日間ずっと喧嘩しつづけていたんです。喧嘩などしたのも、もし有罪になったらドミートリイ・フョードロウィチをあの売女といっしょに国外へ逃がそうと、あの方が言ったので、あたくしが突然かっとなったからですわ。……（中略）……その三日後、あなたがいらしたあの晩、あの方は密封した封筒を持ってらして、もし自分の身に何か起ったら、すぐ開封するようにと、おっしゃいました。そう、ご病気を予感してらしたのね！　あの方は、封筒の中に詳細な脱走計画が入っているから、もし自分が死ぬとか、重病になるとかした場合には、あたくし一人でミーチャを救出するようにと、打ち明けたんですの」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

カテリーナがこの話をしているのは裁判から五日目で、彼女が「逃亡計画」の要点をイワンから知らされたのは裁判の四日前だ。彼女の言う「もうだいぶ前」がどの時点のことなのかはわからないが、計画はすべてイワンひとりが立てたものだ。

辻原はこうも言う。

しかし、これは探偵小説としておかしい。つまり、イワンがこの文書、ミーチャが父親を殺すと書いた手紙を、カテリーナに見せられるのは、二回目のスメルジャコフ訪問の時ですから、事件から十九日目です。ところが、イワンは三回目のスメルジャコフ訪問に向かう直前にアリョーシャに会っているわけでしょう。この日は事件から二カ月たっている。二カ月たってからアリョーシャに「父親を殺したのは間違いなくミーチャだよ。確かな手紙を持っているんだ」とイワンは言う。事件から十九日目にはイワンはもうその手紙のことを知っていたのに、それをアリョーシャに言ったのがその四十一日後になってからだったということです。これはちょっとおかしいですね。一カ月以上もイワンは黙ったままだったということになる。

これは小説を展開していく上でどうしても必要だからそうしたのでしょうが、ドストエフスキーという作家はそういうことになると、いつもかなり無理なことをやります。『罪と罰』でもそうですが、ストーリーを展開するために、必要なら非常に不自然な状況でも平気で作ってしまう。こういう乱暴なところが、厳密に小説を読む、コンラッドやナボコフ、チェーホフたちにとっては我慢がならない。

（同）

「一カ月以上もイワンは黙ったままだった」というのが、「探偵小説としておかしい」のかどうか私にはわからない。「黙ったまま」でなかった場合、イワンはどうするべきなのか。手紙を届け出るのか。そもそも手紙を持っていたカテリーナはどうなのか。彼女は裁判でのぎりぎりのときまでそれをしなかった。―

―と書いて、わかった。辻原は、《ミーチャを真犯人に仕立てあげようとしている二人》がなぜその有力な証拠としての手紙を届け出ないでいるのか、わからなかったのではないのか。しかも、作者ドストエフスキーが、裁判前日のこの場面になって初めて唐突に手紙の存在を明らかにしたわけで、これに納得がいかないのではないか。実際には、イワンもカテリーナもミーチャを真犯人に仕立てあげようなどとは思ってもいないのだから、「黙ったまま」なのもおかしくない。おかしいのは、二人がミーチャを真犯人に仕立てあげようとしているという辻原の思い込みの方だ。

しかし、それとは別に問い直すが、辻原はこれが「探偵小説として」でなければおかしくないと考えているのか。もしそうならば、『カラマーゾフの兄弟』を「探偵小説として」読むことが間違いなのではないのか。イワンがそのように黙っていたことにまったく不思議はない。彼がそのような人間だからだ。ここまで彼はそのようなことをする人間だと描かれてきたはずだ。

辻原がイワンをまったく理解できていないことは、次の引用を読んでもわかる。

> イワンが聞いたのは、二人が言ったよく似たセリフです。アリョーシャが言った「父を殺したのは、あなたじゃない！」と、もう一人の弟であるスメルジャコフが言った「殺したのは、あなたじゃありません」と。しかし、この二つ、言葉面はほとんど同じですが、中身はまったく違うんです。単純に言えば、アリョーシャはイワンのことを思って、しかも殺してないことを祈って、「殺したのは、あなたじゃない！」と言っている。対してスメルジャコフの「殺したのは、あなたじゃありません」は、ここをドストエフスキーはおそらくゴシックか何かで書いていて、翻訳でも傍点をつけているものがありますが、（たとえば中央公論社の世界の文学第17、18、池田健太郎訳『カラマゾフの兄弟』一九六六年では、「あなたが殺したんじゃない」と訳されている――編集部注）、この「殺したのは、あなたじゃありません」は実は「あなたが殺したんだ」と、まるで反対のことを言っているのと同じです。手をくだしたのは確かに私だ、しかし本当の犯人はあなただ、と。バフチンが言ったのは、この二つの同じ言葉が、実はまるで違う声を持つ、そういう多声的な物語になっているということです。それがドストエフスキーのすごいところで、それに比べるとトルストイやフローベールは単声的だと言うのですが、僕はそんなことはないと思う。僕は同意できません。
>
> こういうところで、山城むつみさんの『ドストエフスキー』を読むと、納得します。彼は「あなたじゃない」というところについて詳しく論じていて、それが彼のドストエフスキー論の白眉の一つになっています。山城さんはロシア語がよくできますが、彼によると、「ラズノグラーシエ」と「ニーソグラーシエ」とがあって、「ラズノグラーシエ」は日本語で言えば「異和」になるそうですが、アリョーシャがイワンに言う「あなたじゃない」の場合は「ラズノグラーシエ」なんですね。つまり、この言葉は一つのことを言っているわけではなく、「あなたじゃない」とか「あなたかもしれない」とか「でも、あなたじゃないといいな」とか、反発をはじめとするいろんな異なった思いが、複雑微妙にこもっている。それに対して、スメルジャコフの「あなたじゃありません」は「ニーソグラーシエ」、こちらは単純に「不同意」ということで、実は「あなたじゃない」ではなくて「あなただ」とはっきり言っている。こういう言葉の裏に隠れた大きな違いがわかるのが、山城さんの「ドストエフスキー論」の秀れたところだと思います。
>
> （同）

翻訳の傍点について、辻原はスメルジャコフの台詞だけを問題にしているが、アリョーシャの方にもつけてあるはずだ。おそらく池田訳にもつけてあるだろうし、他の訳でもそうだろう。つけていないのは光文社の亀山訳だけではないのか。編集部注には、自社の翻訳のみ傍点をつけていないことを記すべきだっ

たのではないか。その方が早いし、わかりやすいだろう。

辻原がアリョーシャの「あなたじゃない」を「「あなたじゃない」とか「あなたかもしれない」とか「でも、あなたじゃないといいな」とか、反発をはじめとするいろんな異なった思いが、複雑微妙にこもっている」と読むのなら、それは間違っている。もし山城むつみが辻原の読み取ったように書いているのなら、それも間違いだ。「あなたかもしれない」とか「でも、あなたじゃないといいな」などの意味がアリョーシャの「あなたじゃない」には一切ない。辻原の「イワンのことを思って、しかも殺していないことを祈って」は間違いだ。

ここで、もう一度引用しよう。「Lecture 3」にある、アリョーシャの「あなたじゃない」についての辻原・亀山対談だ。

辻原　ひょっとしたら、アリョーシャは自分の中にも、「私も殺したんだ」という無意識の思いがあって、バフチン風に言うと、それがポリフォニーになって響き合っているとも考えられる。

亀山　なるほど、面白いですね。そういう問題があることに今、初めて気づきました。これまで、このセリフを何度も考えながら、一度としてそういう問題の設定を立ててみたことはありません。思うに、アリョーシャが、人間の原罪というものを、どのくらい深く自覚しているかということに通じる問題ですが、私の考えでは、「あなたじゃない」と言うことは、「あなたです」と言っているのと同じです。ずっとそう言い続けてきました。

辻原　でも、もう一つひっくり返すと。

亀山　「あなたじゃない」と言っていると同時に、「私もです」とも言っている、そう辻原さんはお考えになるわけですね。そこはすごく大事なことかもしれません。さっきも少し触れましたが、アリョーシャにおける父殺しの共犯性という問題は、なかなかリアルな感覚としてはとらえにくい側面があることは確かです。本当にアリョーシャは難しいです。

（同）

アリョーシャの「あなたじゃない」をこれほどまでの見当違いにしか読み取れない読者は、アリョーシャを、そうしてまたイワンをも読み取れていないことを自ら明らかにする。このこともすでに私はかなり詳細に書いてきたから、この場で繰り返しはしない。

イワン・カラマーゾフのためにひとつだけ書いておく。フョードルが殺されてから、「真犯人」に関して、イワンはひたすらそれが誰なのかを問いつづけた。彼にとっては、それが誰なのかだけが問題なのであって、誰が法的・世間的に有罪になるかではない。辻原は、イワンがスメルジャコフを真犯人だと知っていて、それを隠すためにミーチャを「真犯人に仕立てあげよう」とするのだと読んだのだろうが、イワンはそんな人間ではない。

辻原は『カラマーゾフの兄弟』の語り手「わたし」を問題にしながら、次のように言う。

ところが、尋問が終わって陪審員が別室に行き、協議して出てくると「有罪」と言うわけです。しかし、作者はどういう議論を経て有罪になったのかについて、ここでは一切触れていません。これは「わたし」に肉体の限界があることに、作者が忠実だったからでしょうか。おそらくそうではありませんね。たぶん、書くのが大変だからです。ここはただ、読者、あるいは傍聴人に、ドミートリーは無罪になったらいいなと思わせておいて、「有罪」と不意打ちを食らわせる。これが目的です。「ドミートリーが有罪？　実行犯はスメルジャコフで、そそのかしたのはイワンじゃなかったのか」と思う、その「落差」に期待したというわけでしょう。確かにこの「落差」に、小説を読む面白さの一つがあることは間違いないわけですから。

この場合、陪審員たちがどういう議論をするのかというのが読者の一番知りたいところですね。ところが作者は、語り手を設定して、どこに

でも出入り自由の権限を与えていたはずなのに、別室には行かせないで、ただ「有罪」ということにしている。ドストエフスキーは急いでいます。陪審員の議論が書かれなかったら、この場面は、単に読者を面白がらせ、驚かせるだけの作品にすぎなくなる。多くの登場人物がこれだけ議論をしている小説で、陪審員が議論するところは一切記録されていないなんてことがあるでしょうか。そういう意味で、これは不思議な小説です。

小説は楽しむために読むものです。楽しむなら、上等な楽しみ方をしたい。たとえ醜い世界を描いたものであっても、上等に作られているものを読みたい。作品としてきちんと地面に立ち、梁や柱もしっかりしていて、エクステリアやインテリアが見事に調和しながら積み重ねられていく、そういう建物のような小説が好きだし、それを外から見たいとも思うし、中に入りたいとも思う。小説も建築ですから、ベースは柱と梁です。そこにさまざまなモチーフ、さまざまなテーマを織り込んで、外観、内観を作り、そこに入っていくのが読者です。小説の作品世界をそうしてぐるぐる回る、すると音楽が流れ始め、時間が流れ始める。『カラマーゾフの兄弟』とはそういう小説です。

（同）

「多くの登場人物がこれだけ議論をしている小説で、陪審員が議論するところは一切記録されていないなんてことがあるでしょうか」と問う辻原は、自分のその読みかたが間違っているとは思わない。思わないどころか「たぶん、書くのが大変だからです」とドストエフスキーの都合にして平気でいる。ここまで引用してきたように、辻原は「考えを導くための仕掛けの一つ」、「布石の一つ」、「語られなかった物語の伏線」、「本筋とは異なる」、「メインではありません」、「これは探偵小説としておかしい」、「かなり無理なことをやります」などと言って、『カラマーゾフの兄弟』のいくつもの部分を切り捨てている。なぜ辻原はそれらすべて拾い上げることのできる読みかたを探そうとしないのか。読書というのは、ありのままの作品を読むことだ。読者は作品に自分を合わせていかなくてはならない。自分に作品を合わせるのではない。

『カラマーゾフの兄弟』のすべては主人公アリョーシャ・カラマーゾフを描くためにあるだろう。すべての登場人物の経験がアリョーシャに結ぶ。イワンの「悪魔」を見ていなくても、アリョーシャはイワンの経験を知る。ミーチャの「童の夢」を見ていなくても、アリョーシャはミーチャの経験を知る。語り手「わたし」が何を語って、何を語らないかの基準は、それがアリョーシャと結ぶかどうかだ。陪審員の議論がないのは、それがアリョーシャに結ばないからだ。『カラマーゾフの兄弟』の全体がアリョーシャの経験だ。しかし、もちろん語り手はやみくもにアリョーシャを語るのではない。

「俺はお前を苦しめているかな、アリョーシャ、なんだか気分が悪いみたいだな。なんなら、やめようか」

「かまいません、僕も苦しみたいんですから」

（ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』原卓也訳　新潮文庫）

アリョーシャはまた、コーリャの「全人類のために死ねれば」という言葉を言い換えて「僕はすべての人々のために苦しみたい」と言う。そのように、すべての人々のために苦しむ人間としてのアリョーシャが『カラマーゾフの兄弟』という作品だ。そのアリョーシャが――ということはすべての登場人物が、彼らのすべての苦しみが――次の言葉に結ぶ。

よくよくあなたがたに言っておく。一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる。

（ヨハネによる福音書。第十二章二十四節）

「Lecture 3」での辻原との対談で、亀山郁夫はこんなふうに言っている。

福音書では、この一粒の麦が、ゴルゴタの丘で犠牲となったイエス・キリストを示すわけですが、それは、そのまま、ドストエフスキーが想定していた続編でのアレクセイ・カラマーゾフの運命を暗示しているのかどうか。第一部を読む限り、この「一粒の麦」は、十三年前に死んだイリューシャを暗示すると言えなくもありません。イリューシャの死によって「十二人くらい」の子供たちの間にあらためて心の絆が生まれ、「カラマーゾフ万歳！」へと繋がるわけですし、イリューシャとアリョーシャという名前そのものが、ドストエフスキーの頭のなかで一つの分身関係をなしていた。

（辻原登『辻原登の「カラマーゾフ」新論』光文社）

亀山も辻原も自分にわからないところはすぐに、書かれなかった小説の第二部のせいにする。これが間違っている。

『カラマーゾフの兄弟』で語られていることのすべては「一粒の麦」が死ぬかどうかだ。その「死」は生物学上の死ではない。その「死」は人間が自分の「自尊心の病」（萩原俊治氏）に気づくことだ。イワンにはついに訪れることのない「死」だ。

こういうことが辻原にはまったく理解できない。なぜなら、辻原が自尊心に憑かれた人間、自己に淫した人間だからだ。だから、辻原にはアリョーシャが見えない。『カラマーゾフの兄弟』が欠陥だらけの作品にしか読めない。辻原に『カラマーゾフの兄弟』は無理だったのだ。

アリョーシャが見えない読者のことを私はすでに詳細に書いている。これ以上は繰り返さない。

『辻原登の「カラマーゾフ」新論』は読むに値しない。それ以前に出版の価値もない。辻原には、アリョーシャが見えない以前に、そもそも読書するということがわかっていない。ましてそれを人前で話すということもわかっていない。こういう「小説家」が書評などを書いたり、文学賞の選考委員を務めていたりする。辻原に褒められた作家たちはひたすら困惑すべきだろう。

そして、この本の編集者だ。彼は自分が何をしたのかわかっているだろうか。

（二〇一七年三月八日）